現代日本文學全集
LXI

杉浦非水装幀

新興藝術派文學集

改造社版

十一谷（左上）川端（右下）池谷（右上）中河（中央）龍膽寺（左下）諸氏の近影

「新興藝術派文學集」目次

序

私達は今から六七年も前に「文藝時代」といふ雜誌を出してゐたことがある。川端康成氏も中河與一氏も十一谷義三郎氏もそのときの同人である。十一谷氏の作品は文章の屈折がその當時よりも細かくなり、川端氏は太くなり、中河氏は重厚になつた。作家はただひと口でその作家の特長を人人に云はしめるやうでなければ不幸になる、とさうフランスのポール・ヴァレリーといふ優れた文學者は云つてゐる。この言葉は眞理そのもののやうなもので、川端氏も中河氏も十一谷氏も、特長をただ一口で人人に云はしめない樣樣な藝術上の特質を澤山に持つてゐる作家であるから、不幸はかなり長い間續いて來た。しかも、それが一度雲を破れば、作家は複雜なほど光り出して來るのだから此の三人の作家はこれからもますます强い光芒を放つて進んでいくにちがひない。

それにひきかへて池谷信三郎氏と龍膽寺雄氏とはひと口で二人の作家の特長を人人に云はしめる作家である。それ故、此の二人の作家は若くして他の同時代の作家達よりも幸福で、幾分特長を出し過ぎた傾きさへあつたが太く强く光つてゐた。しかし、幸福とか不幸とかいふものは本人自身にとつてのことで、それらそれぞれの不幸と幸福とはわれわれ讀者には關係はないのだから、それは作家自身に責任を負はしめることとして、一口でわれわれに云はしめる池谷氏の特長は、モダンな樣式であり、龍膽寺氏の特長はモダンな女性を描くことである。

そこへいくと中河氏や川端氏や十一谷氏の特長は池谷氏のやうにモダンな樣式でもなければモダンな女性を描くことでもない。どちらかといふと此の三人の作家は日本の傳統を生かすことに努力して來た作家であつて、反モダン派ともいへばいへる。傳統を生かすといふことは傳統を古さのままに保存するといふ意味ではなく傳統を新しさの中へ流し込んで更に新しい傳統を造る第一の基礎の役目をすることであり、傳統に反してモダンな生活を描き樣式を造るといふことは、傳統と鬪ひながらも更に次の時代へ延びる傳統のための養分となることであるから、この二つの文學の傾向はどちらをどちらとすることも出來ないのである。

しかし、これらの五氏のそれぞれの役目と義務は五氏の含有してゐる優れた素質から見て、いままでの所果されてゐる部分の方が少い。まだ最も重大な精神の方向を五氏のうちの何人も決定させてはゐないのであるが、ここに集められてゐる作はそれぞれ五作家の代表作とも云はれるべきものであつて、これまでの各作家の作風を知るためには一番便利なものであると同時に、それぞれの作家の出世作となつたものばかりである。

從つて、われわれ讀者はこれらの諸作を熟讀することによつて、それぞれ五作家の現實に對する考察の仕方と思想への暗示を受けることは明らかであり、自らやがて進展する各作家の精神の方向と、それらの代表する新しい時代の動向とを共に感じる上に於ては、此の集は他のいかなる集よりも多くの希望をわれわれに與へてくれるに十分である。

昭和六年四月

横光利一

唐人お吉

時の敗者唐人お吉

時の敗者唐人お吉（續篇）

十一谷義三郎

竹の筒、振てみたれば蛙一のなゐ

お前は蛙だ。僕の蛙だ。

たゞそれだけだ

昭和六年春

十一歳　生越二郎

唐人お吉

――らしやめん創生記――

――これ人倫部に入るべきか、畜類部に入るべきか、決しがたき動物の名なり。（嘉永　治年間錄）安政四丁巳四月の條に『亞人下田着留中閨娼風說』の條あり、「亞人下田に滯留中、ハルリス儀、當五月より同所坂屋町きちと申娘子一ケ年給金百二十兩の仕切にて當金二十五兩にて召抱へ、柿崎村へきち休憩所出來罷在、每夜玉泉寺へ通ひ候由、ヒウスケン儀はふじ九十兩、是又每夜玉泉寺へ通ひ候由。――中略――未だラシヤメンの名無きが如きも、日米始めて通商條約を結びしは安政元年三月にして、國人皆外人を鬼畜視する際なるに、きち、ふじの二少女が、夜々玉泉寺へ通勤せる勇氣に驚く。

――石井研堂氏著「增訂明治事物起源」八〇四頁

――武州橫濱にて西洋人の妾となる女を異名して「らしやめん」と云ふ。哆囉を俗に羅紗と云ふ。之を織るに綿羊毛を用う。綿羊は俗に、らしやめんと云ふ。洋人犬を常に上し又已が閨房中にも臥せしむ。國人謨て洋夷は犬及び綿羊を犯すと思ひ、その犬羊と同じく處女の夷妾となるを卑しめ、雜夫假名を付て羅紗めんと云ひ初しが遂に通稱の如くになる。此名目後人思ひ誤らんことを思ひて序に爰に筆す。

――喜田川守貞著「類聚近世風俗志」下卷一六六頁

序（原本）

昭和三年某日、ある舊家に四五代前から溜つてゐた紙屑が、車にひと山、僕の手許へ持ち込まれた。蝕んだ簞笥に三杯、ほかに、大型な木箱に一杯あり、本を置いてる部屋の空地を占領してしまつた。いまだに、ひまが無くて、そのまゝ殆ど手もつけずに置いてあるが、抽斗の隙間に喰み出してる部分から推すと、中味は、鼠臭い文字通りの文反古、乃至、帖簿の類で、それも、江戸の中期以後から、明治の三十年代に亙るものらしい。

元來古いもの弄りなど、餘り好きでない自分で、そんな趣味から此の紙屑を買ひとつた譯では決してなく、たゞ、こんな、忘れられた屑の中にこそ、その時々の生活や、時代精神や、またそこに虐げられ、甘やかされた個人の姿などが、生々しく潛んでゐると信じたからだ。經濟史や文明史や社會思想史など、學者の抽象癖に殺された記述に手頼るよりも、直接に、端的に、かうした過去の心臟に觸れる方が、遙に有意義だと氣附いたからだ。

そんな死物を見て、それが一體何になると、反問されさうだが、現代は、過去の蔕なくして、空中に開いた花でなく、未來は現代の種に依つて、初めてある特定の姿を持つことを、常識的に考へても、これは問題ではない。現代へのペネトレーションを深め、そこに、ありのまゝの姿と、その未來への動きを把握し、さうして、またそこに、正しい理想を體得して、それに礎を與へようとするためには、かゝる過去への骨の折れる努力も辭してはならぬと、考へられる。

此處には、古い時代の出入帳や、田畑帳や、諸屆の寫しや、世相の手控へや、それから、代々新知識だつた各當主が受け取つた手紙類などが、數多くある筈だ。封建制度の匂ひも、自由民權時代のひゞきも、またその後に成長した社會の呼吸も、みんな、この紙屑に、何かの痕跡を留めてゐるのだ。

曾て、稅關の古文書の中から、彼の傑作の動機と構想を摑んだ作家があつた。そんな眞似は、到底及びもつかないことだが、自

分は現代社會を見る努力の一過程として、この紙屑を消化してしまふつもりで、買ひとつた。いかにもそれは、田舍漢式な廻りくどさを持つが、それを僕自身、どうすることも出來ない。たゞ鈍い足を無理に推し進めるだけだ。

それに、一方から考へれば、つまり社會の歩みから見ると、これは、ほんの一歩前の社會相に觸れる努力に過ぎぬ。それに依つて、自分の現代意識を、一層鋭く磨くことが出來たらと、ひそかに願つてゐる。

何かで讀んだことがあるが、セント・ヘレナ時代のナポレオンの臺所帖が、何處かに保存されてゐるさうだが、もしそれを見たら、恐らく當時の彼の生活の陰影を、可なりハッキリと摑むことが出來るであらう。

同樣に、そんな特殊な場合でなくとも、もし現代の各階級の「紙屑」を寄せ蒐めて、比較點檢したら、そこに、現代社會への、より正しい理解と批判が生れるであらう。

またそんな眼から見れば、あらゆる個人の(自分も籠めて)惱みや、悅びや、憤りや、その他凡てが、姿を變へて顯れるに相違ない。

唐人お吉一篇は、かうした僕の氣持から生れた。お吉關係の「紙屑」は、その過半を、下田に隱棲せられる村松春水翁の限り無き好意に仰ぎ、之を補ふに、僕の座右の文反古や寫本の類、それに乏しい教養と空想と、稚い洞察眼をもつてした。

——終りに、此の本の爲に、稀覯の史料と、お吉の實傳を快く惠投せられた春水翁、また、史實の探索に、校正に、その他本書上梓のいつさいにわたつて、絕大の援助を吝まれなかつた横濱の畏友細郷重三氏に、萬斛の謝意を捧げる。

十一谷義三郎

一　唯一つある家

潮の狂ふ灘を右と左に控へた「追分け」——豪快な渡り鳥が、通詞と女と墓地を求めて、毎日夥しく寄つて來て、二世紀半ほど賑かに生きて來た港町。

別に物資の集散地などと云ふそれ自身の繁榮理由を持つわけでなく、たゞもう、受け身の、字義通りお天氣次第な繁昌を幸運につゞけ、そこに自然と生れる神秘主義的な迷信と、また幾らかの悪德とに、すつかり無神經になつてしまつてる町。

町でいちばんの商品——女——とその市場や、いや、細かい町の心理の照り翳りは、多分唐人お吉が語ることにしておいて、ほんのうは水の二、三滴を拾つてみても生娘の破瓜をおほつぴらに商賣にしてゐる老人が、金を溜めてゐたり、涙壺を大小いく通りか支度して、他人の葬式に出かけ、金次第で泣き分けをする悲しい女商人が、立派に暮してゐたり、かと思ふと「あぼてえけ・ふあるまげんと」、横文字の看板を見世に据ゑた蘭薬屋が、新式過ぎて寂しいハイカラを誇つてゐたりする——妙な町。

町のすぐ前の、古風な波除堤の松の間を、毎日、潮に洗はれた大きな朝日がのぼる。うしろは、低い山波で、それを噴み出た若い女體の乳房の形をした小山か、月にいつぺんづつ滿月を吐く。白絹の帶のやうな三間道路が、その太陽と月の光に染まりながら、この小さな港町を「都大路」式に、格子に刻んでゐる。

もし、手持無沙汰な獨善家が、町の生活に背中向けるなら、晩鐘も、暮雪も、晴嵐も、「八景」は、馬鹿らしいほど手近に整つてをる——

さうして、そんな、美景と明るい空とに圍まれて、八百軒ばかりの家が長方形に蹲り、持前のピクチャレスクな生活を、呼吸してゐるが——それが、どの家もみんな、この戸外の朗かさに無關心で、むしろ白眼視すると云つた風な、或は變に憚へた相貌を呈してゐる。まるで、かぶと蟲みたいな、脊の低い土藏造り、もしくは、苫や魚鱗に萎びた草家ばかりで、あの破瓜師も、涙賣りも、後家の內職の達磨宿も、料亭も、船宿も、そのほか、農工商いつさいの生活が、この二いろの、先祖累代の「墓」で營まれ　太陽や風や月が、身軽に沁み透るやうな、すつきりとした家は、一世紀に一度も來ぬ海嘯のあとの、假小屋にしか見ることが出來ない。それさへぢきにまた、執拗に、石と土に鎧はれ、もしくは厚ぼつたい藁屑に蔽はれて、その子へ、またその子へ……

「江戸」の沁みた小粋な女主人が、こんな海港町へ懐郷病をひきおこして、山駕籠に揺られて戻つて來、町外れの丘寄りに、「新歸朝者」らしく、誇らしい「寮」を建てて住んだ。

何かきりぎりすでも這ひさうな華奢な出格子と二階の欄干、青桐の葉の落ちて來る舟板塀、その面に、好來客專用の切り戸、表の入口の土間の、ちりめん磨きをかけた沓脱、その奥に天窓の懸け障子の明るい勝手、そちこちに晒し竹、胡麻竹——

これはむろん、この海港では驚嘆すべきニュー・スタイルで、八百軒にたつた一軒の家で、さうして彼女も——たつた一人の女だつた。

明治は、そこにありながら、まだ神秘で、あの「花旗國」へ漂うていつた播磨の舟乘りが、硝子の大姿見の魔術に眞蒼になつて立ち畏縮んだ時分のこと——

女主人は、封地の關係から、選まれて江戸の伯爵級の大旗本の屋敷へいき、そこで、ほとんど四分の一世紀以上を、「おろかな」出世に過した。彼女のその半生を、ほんのカード式に纏算めてみると——

初め彼女は、お屋敷の、もの〳〵しい鈴の口の奥（大旗本の二重じまりになつた奥と表の境）うちで、令嬢の「御相手」をしながら、[illegible]式な教養と、くだけた市井の遊藝とをみつちり習得した。

やがてその令嬢が結婚して、屋敷に新しい主人が出來、同時に彼女も、白髪の冷たい老主人に從つて下屋敷に移り、其處で、その死期を前にした彼のために、ほんのしばらく、ベッドを暖めた。むろんこれは、彼女にとつて、最初で、また最後の、經驗だつた。

老人の死後は、永らく、實に半生の大部分を、彼女の「名[illegible]」と共に送りながら、新主人のために、家政婦兼話相手となつて暮した。

つまりこの女主人は、あの——女ニ相ナシ——といふ、極度に非現代式な女性觀を、まつたく文字通りに裏書して、魂の底まで沒表情な半生を送つたのだが、そんな生活への反抗が、ちりめん皺と一緒に、ひとりでに果敢ないホーム・シックのかたちをとつて目醒めて來て、たうとうまた海港へ戻つて來たのだ。

身寄りは殆ど無くて、お[illegible]のかすれた舊[illegible]娘仲間が、船宿の帳場や草屋根の下などにそちこちくすぶつてはゐたが、それらも最初のうちは、何かしら彼女の「出世」に氣壓されて近寄つて來ない。時たま名主とか菩提寺の和尚が訪ねて來るくらゐで、また隣に[illegible]から海港の御用所へ來た江戸侍が、[illegible]を持つて來ると云つた風で、その[illegible]の[illegible]掃け口に乏しく、江戸への[illegible]に[illegible]したり、短冊を汚したり、[illegible]巻や、時に[illegible]の[illegible]つたりして、そ

の、たつた一軒の家で、「出世」の豫想外な寂しさを味つてゐた。

だがこのまゝでは、結局、四分の一世紀餘りの時間と、可成りな退職手當と、それに出世を持ちにして、寂し死に死んでしまふのがお終ひで、そこで、ふと好い思案を考へつき、それが、考へれば考へるほど、唯一つのものに思へて來て、もう何もかもなく實行にかゝつた。

子供――女――を培ふしごと。

必ずしもそれは「教育」を意味しない。また正しい善良な後繼者を殘さうとする地道な企てでもない。彼女は、彼女が一生かゝつてとり逃したあれを、そこに幾倍にもしてとり戻さうとかゝつたのだから。

永い禁慾生活の根強い反動――内輪に上品に氾濫した艶な陽氣さ――が、彼女の皺んだ眼ぶちにこぼれ出して、彼女は、その「人形」漁りに夢中になつてゐた。

――お吉が、こんな「をばさま」の手に拾ひあげられた。

をばさまのこの「家」から、町を直角線に抜けて、海港の一方を抱した小丘に登らうとする坂下町の端に、萎びた草屋根に一八花の生えた船大工の家がある。屋根のへいまに苔が垂れ、柱が鈍く歪み、壁緣の土はぼろ／＼だし、擦れ切れた疊に古莫蓙か入りまじり、まるで、死にかゝつた中風患者のやうな住居で、その狹い、闇い家のうちに、若い夫婦と、彼等の赤ん坊とが、腐つた緣さきの、黄菜畑の眩しさに眼を細めて、蠢いてをつた。

曾て若い一人の船大工が、一人の船大工の娘と、このぼろ／＼な爐邊に結婚式をあげ、鈍く、だるい生活を續きつゞけ、どぶろくを少し許り過量に呑んで、姉娘とお吉とを産み、何の夢も見ずに、襤褸のやうに一生を終つていつた――さうしてその姉娘が、今また此處に一人の若い船大工を迎へて、彼の得る銀三匁（約五錢）の日當で生活し、赤ん坊をこしらへ、結局、異人式な

――在世中ソノ兩親ノ生活ヲ忠實ニ踏ミ行ヒタル二人コヽニ眠ル――

とそんな墓碑銘へと毎日を引き摺つてをつた。

若い亭主は、終日船造り場へいき歸ると青海波頭單位の安道具の夜なべで、精も根もつかひ果し、女房は、家うちのいつさいの仕事のほかに、季節によつて、青海苔を繕へ、あさくさ海苔を賣の子へ、それ、天日に乾して、賣り出たり、結局二人とも疲れるだけ疲れ、兩親のした通りに、やつぱりどぶろくを少し許り過量に呑んで、さうして行燈の油皿の僅かな始まると、やつとその日一日中での彩めて、團時にまた最後の、貫笑みをとりとす――

もう傳統的な「暮し」の重たさが苦になつて、激情の泉に蓋をしてしまひ、家うちでも、また外に向つても、反感や發憤の動くふ隙も無く、從つて、ほんの限られた周圍からも、先代通りに、たかゞ、好人物扱ひにされるか、むしろ、默殺されることが多かつた。

お芥子の伸びたのを無理に抑へた幼いお吉が、こんな芽の無い生活の下積みになつて、もし機會が、氣紛れな手を彼女へ伸ばさなかつたら――いや、それはそれでまたよかつたかも知れない。

姉の夜なべの沁みたもぢりの半纏か、半分に長たれて、お吉の肌を蔽らてゐた。義兄の眼のめくらの股引が千裂られて、彼女の胸を包んでをつた。それらと共に、勤勞が、當然彼女の手足と背中へ纏ひついた。海苔掻き、草拔り、ムツキの濯ぎ洗濯、どぶろくの使ひ、それに、赤ん坊の躾が、始終彼女の背の柔かな背中をれしみ

しと厭してゐた。もし姉が寝つくやうな「天災」が來ると、この小さなお吉が、たちまち大人になつて、乾草を煎じたり、食器を洗つたり、麥粥のうは水を赤ん坊の口へ哺ませたり、そんな役目を、もうひとかど勤めおほせた。

此處では、子供らしい罪も、またそれへの罰も、むしろ贅澤だつた。怒鳴り、叩き、縛るなどと云ふ暇も、必要も出來てこなかつた。傳統的な勤勞と、傳統的な貧しさが、いつまでも瓦斯のやうに家うちに溜り、それをお吉も一緒になつて、無意識に、無抵抗に、默々と、呼吸して生きてゐたのだ。だからお吉は却つて――却つて、懼れも、うしろめたさも、僻みも、いつさい知らないで、ほどの好い天眞さをそのまゝ伸びてゐた!

彼女は彼女の勤勞の合ひ間に、貝殻に赤い絲屑を通して、赤ん坊の腰へ、守り袋に吊下げた。蘿蔔の花に反古を被せ、草の莖の帶を結んで、大事に胸に抱きしめた。さうして、表の軒下で、または裏の背戸口で、無心に空を見上げて、背中を搖りながら、透きとほるやうな聲で子守歌をうたつた――

隣りも船大工、その隣りも船大工。大工町と名のついた漁港の勞働者街の、低い草家が坂を下へつゞいてゐて、夜になると、夜なべの鉋と槌の音が、丘の松風を縫うて、すい・すい・とんと聽えて來る。赤ん坊の寢つきがわるい時には、姉のふところから、お吉がぢきにひつしよつて、表の刎ね橡へ出、巧者な節廻しで、高らかにうたふのだが、それが風の都合で、この勞働者街に沁みわたり、時折り遠くの戸障子が明いて、鬚の刷毛先を散らした首が覗き、夜なべの音がちよいと亂れ、またすい・すい・とんと急がしくつゞいてゆく。

さうして偶然こんな場合に、家の前を通りかかつた男は、思はず微笑を浮べてお吉に近づいて來、その垢も何も月に洗はれた小さな顏を覗きこんで、ふいと彼女の美相にうたれ、それから、別に惡怯ぢもしずに、眸を見開いて、こちらへ微笑み返す素直さに、一層ひきこまれて、背中の赤ん坊にまで愛撫を投げて、あゝあゝあの娘は! と、何となく快いあと味を、ぢつと嚙みしめながら、別れて行く。

上り框に點火つてゐる煤れた行燈のあかりをうけて、土間の鉋屑の中に蹲つてる義兄が、お吉の唄に、ぼんやりと考へこむ。

――五兩! 五兩と云ふ大金が、お吉を女街に渡したらはひつて來る。見どころがあるから氣張るとあの男は云つた。手許に置いても先の長い話だとあの男は薦めた。苦界どころか、あの兒の出世だと請けあつた。何を馬鹿な! と俺は撥ねつけた……何を馬鹿な……五兩!……あゝかゝあのやつ! せめて髮でも結つたらどうだ。せめて帶でも締めたらどうだ! なんだ、俺の股引を刺してゐるのか!……何を馬鹿な! なにをばかなと、おれは、はねつけた――

すい・すい・とん……

――八年四兩、と機屋の織物工場の人買ひは云つた。四兩! だが俺はことわつた……これが女郎と云ふぢやなし、年期さへ濟めば、立派に働きのある娘にして返しますよと彼奴は云つた。馬鹿な! その時は、蠶糸稼で骨と皮だと俺が云ひ返してやつた……四兩! と指を四本俺の鼻のさきへ揃へたつけ……これが女郎といふぢやなし……いけねえ、だれが義妹を金でなんぞ!……四兩……いけねえ……ほう、あんなところに月が! 壁がいつのまに落ちたんだ!?――

すい・すい・すい……

女主人のあの氣紛れな思案は、名主などの口

を通してちきにぱつと噂になり、あちらこちらから興行家が顔を出して、それ／＼人形の候補者に精一杯花を飾つて持ち込んだが、どれも彼女の氣に入らず、結局、出入りの大工が、ひとこと、ふと、お吉の評判をし、それがきつかけになつて、すら／＼とことは片づいた。

女主人は、神信心にかこつけて、三四度、あの細大工町へ足を運んだ。髪は喪扮りの毛巻き茶筌――クエスチオン・マークを右へ倒して叩きをかけたやうな恰好の、あの喪髪！――帯は平たい手套のやうな前結びにして、婢をつれ、いかにもお高く、そのくせ、こんな彼女に特有な、處女みたいな含羞をほのめかせて、古びた草家の多い「勞働者街」へ入つていき、丘に近いお吉の家の前を通り過ぎながら、それとなくその「貧乏女生活」を觀察した。

いちど、皆が留守で、お吉がひとり刎ね緣に坐つて、背中の赤ん坊へ獨り言を云ひながら、草花のあねさまを作つてゐたが、そこへそつと、穢れのうつらぬほどに寄つていき

「姐やは、唄が上手だね。うたつてごらん。」

と低聲で云つた。

お吉が、垢ずんだ顔をあをむけて、名主さまの奥さまよりまばゆいをばさまを、しばらくまじまじと見上げた。それから急に、無邪氣な敬儀心をおとして、誰かの「お通り」の時のやうに、地べたへ膝まづかうとし、赤ん坊の重味によろけて、やつとそのまゝぴよこりとお辭儀をした。

そしてまた顔をあげて、ちつと笑ひながら、をばさまを見凝めた。

をばさまは上機嫌で

「唄をうたつてごらん。」と小聲でまた繰返した。

すぐにお吉が、好きな得意な子守唄を、赤ん坊を揺り／＼うたひ始めた。眸をまつすぐに、嵐氣の明るいなか空に据ゑて、もう傍いをばさまも何もなく

――オ江戸チャチンチン縮緬ツダチ……

をばさまは、少し頬を紅らめて幾度も點頭き、さうしてお吉の掌へ、紙包みを落して引き揚げた。あとで、お吉が、その包みの中から、まはりに花びらのついた長方形の銀片をとり出し、それを草の葉で吊して、赤ん坊の眼の先へ振つて見せ

「ほら、赤市（赤ん坊の名）、綺麗ねえ。ほら、何だろ、これは？ 貝より、よつぽど綺麗ねえ。」と話しかけたのだが……二十五錢銀貨は――「錢」ではなかつた。

その後二三日、例の出入りの大工が、使にたつて雙方の間を往來し、その結果、をばさまが、ふだんのまゝのお吉を、[illegible]、肖像畫の[illegible]てみて、細かい「下見」を完全に終つた。

をばさまは、彼女を、湯殿へ一緒につれてはひり、眉の剃りあとを眺めながら、身の丈まですつかり洗つてみた。さうして、一人の女が、こんな子供でさへ、身に持ち得る垢の分量に、頭痛がするほどびつくりし、それから、やつと動悸を抑へて、この驚くべき[illegible]ひをおとしたお吉を、改めてちつと見なほした。

江戸のお屋敷の[illegible]の目の中で、そこに使はれる娘の目利きを、二十年餘り、自分の仕事の一つにして來た彼女で――平べつたい爪も、いかつた肩と指も、[illegible]した背ゲキも、太い短い髪の毛も、ぼこ／＼と擴がつた舌も、そのほか、ちよいと見てすぐ眼につくキズはもちろん、どんな生れつきの弱點が、どんな細かい技巧と用心とに隠されてゐようとも、それを見逃す彼女ではなかつた。それはもう、あの馬市の買ひ上手が、馬の性行と病癖とを、たちどころに看破する、あんな辛辣な眼を、始終若い娘たちに注ぎつけて來た彼女だから。

そんなをばさまが、いま、可憐な分別と、女の子らしい飾り心とから、旅袋の痛さをぢつと耐へて眼を伏せてるお吉の、からだぢうを弄り廻したのだ。

「少し痩せてるやうだが……あゝこゝは、暮しの所爲ぢやない！」

お吉の片ツ方の、肉の薄い耳たぶを、華奢な指の端でつまんで、滿足らしく微笑みながら、さう彼女が、お肚で呟いた。

事實、それが、この「人形」に發見された、ほとんどたつた一つの缺點で、ほかには、髮にも何處にも、影ほどのクセも無かつたし、足の裏にも、土踏まずの凹みが、ちやんとなだらかに附いてをつた。

からして、見違へるやうに綺麗になつたお吉を、をばさまは、お屋敷時代の名殘りの白絹の襦袢に包んで、柔かな夜着の中へ入れた。頭の方のしるしに、緋ちりめんを匂ひ袋の形に縫ひつけた敷蒲團――紅絹とツムギのふんはりとした、いくらお吉が悶掻いてみても、汗ばかり滲んで來て、いつからぴたりと感觸の來ぬ、美しい寢床へ――

お吉はすつかり上氣せて、眼をぱち〳〵させてゐた。飾絲のたらりと垂れた枕に、樂々と片頰を載せて

「お母さまは？ お父さまは？……」とそんなことを、それからそれへ、をばさまが、隣りの床から問ひかけた。

そしてをばさまは、いつの間にか、彼女の「思案」を好い心持に追ひながら、眠りに陷ちていつた。

をばさまの質問が、だん〳〵うつゝになり、口の中で消え、遂に靜かな寢息の音ばかりに變つてしまふと、そのあひだぢう、床ん中で、何かしら懸命な氣配りを、小さな頭で凝らしてゐたお吉が、生れて初めての惡性な疲勞にどつと包まれ、あとは何もかもいつさい夢中で、たゞ眠りに眠りつゞけたが……

しばらくすると、その彼女の、幼い首が、兩手が、兩足が、全身が、みんな反射的に、その場違ひな寢床を排斥し始め、天鵞絨の枕は外れ、紅絹裏の夜着はめくれ、下のツムギは皺だち、さうして袂の大きな白絹の寢卷を半分脫けかゝつた彼女が、そのまゝ、たうとう疊の上へ轉げ出て、其處で、やつと、ほんたうの安靜を得たらしく、スヤ〳〵と寢息の音をひゞかせた。

夜なかに、をばさまが、ふと彼女の寢言に眼を醒まし、急いで起きあがつて、この小さな叛逆者を、辛と胸にひきずつて、もとの寢床へつれ戾した。

そしてウト〳〵すると

「むウうゝ……」と微かに呻き聲が起り、ぱつと冴えて

「痛いよ、痛いよ、引張ッちあ！……ね、ね、唄を……」と何か次第に低く、と思ふ間に、ぢきにまた、全然無意識な反射運動が催して來て、彼女の上半身が、ぐい〳〵と乘り出してゆくのだつた。

「どうおしだ、えッ？」とをばさまが、もう一遍床を整へ、彼女の紅い汗ばんだ寢顏を、優しく覗きこんで訊ねた。

お吉は、それに、うつすらと笑ひ、そのまゝ寢入つた。

それが、しばらくたつと、またそれで……

をばさまは、床の上へ起き直つて、溜息をついた。

「この兒はまあ、どこか惡いのかねえ!?」

こんな夜更けの苦勞の味を「出世」と釣り換へにして、いままで來たをばさまで、初めは、あんまりなお吉の「無作法」に茫と呆れ、それから變に珍らしくなり、お終ひにはつい可愛くさへ

なつて、世話のついでに、無心な口もとに見惚れたり、桃色の掌を弄つてみたり、だん／＼引き込まれて、重い彼女を靜に膝へ載せて、二人つきりの、その、有明のともつた部屋を、そつと見廻したりした。

だが、それもいつとき、彼女はせい／＼息を切り、生あくびを嚙み殺し、へと／＼に參つてしまひ、幾度目かを最後にして、たうとう夜明けまでひと息に眠つてしまつた。

そこでお吉のからだが、むろんまた床を脫けて出、白縮の寢卷をさん／＼揉みしだいて、片身をぴたりと疊にくつつけ、まるで自家の、古茣蓙と木綿と帆の切れつ端の、あの寢心地の好い寢床にをさまつた氣持で、朝まで、靜かに寢つゞけたのだつた……

一下見が濟んだあと、女主人が、さわやかな石燈の傍に坐つて、薄茶の匂ひを嗅ぎながら、彼女の思案をまとめた。

お吉のあの薄い耳たぶを差引いても、あれほど筋の好い美相は、ちよいと珍らしい。それに第一、貧しい女親が、萎びた手を差し出して、こちらの寵愛を牽制する心配がない。それからあの、漁夫婦、あの好人物らしい扶養者らもよい。いつも、物欲しさうな顏をしずに、たまたま與へると、しみ／＼物よろこびをする、忠實な牝犬のやうな二人……また依怙地に毛を逆だてたり、謙遜しながら貪つたり、うるさく寄つて來る親類の無いのも、何よりだ――

そして、彼女は、まるで、いつぱし眼ハシの利く淑女が、氣紛れに、孤兒院などへ出かけていき、理想的な彼女の「人形」や、彼女の「奴隷」を掘りだした時の、あんな風な誇らしい悅びをよろこんだ……

かうしてお吉が、海港で、唯一つある家「へ、ふいと向上した。

まつたく水の逆つた生活が、お吉の前にあつた。

彼女の髮や額が、何かしら意氣込んだをばさまの指先で、毎朝、涼しく、美しく扮られた。しつとりと疊まで垂れる廣袖が、絶えず彼女の足もとに纏れかゝつた。彼女の紅いろの細かい爪先が、をばさまの暖かい掌の上で、屢々きびしく垢の檢閲を受けた。さうしてそんな美粧が、彼女のこれまでのあの勤勞のいつさいを封じてしまつた。

瞼の少し皺んだ しかし まだ張りのあるをばさまの眼が、しよつちう若々と彼女の顏を覗きこんで「をばさまの好い兒におなり！」と命令した。

「をばさまの好い兒」は、始めの音の聽える緣物を持つて、この商場を抱へ込んだ牢屋の中に、温和に、品よく、默つてゐればならぬ。戶外は、賤しい、怖い、惡い、人々の街だから――もう子守唄はいけない。子守は、ねんねこを被たオケラだ――水仕事や、走り使や、身の廻りのことは、みんな「好い兒」のすることではない。それは、腰のしこつた下婢の仕事だなどと……

それから、毎日、彼女は、をばさまに連れられて、お湯へはひつた。あの薄暗い軒端の暖簾の間から、湯煙が往來へ洩れてゐる、あんな、彼女の見馴れたのではなく、井戶がちやんと閉つたいつかのお湯殿で、――そん中で、そこらから、ひり／＼と、をばさまの思ふ存分になり、もう頰ッぺたの皮も擦ち切れるほどに擦つて、やつとあがるとまた、もの／＼しい鏡や高價の櫛筥が彼女の細い膝をキシませるべく、待ち構へてをつた。

そのお作りが濟むと、ひとしきり、笑つてみせたり、立つてみせたり、あちら向いてみせたり、などとをばさまの少し浮きたつた 好のひ

るがへるまゝに、顏や姿をつくつてみせねばならぬ。
　寢床は、例の絹夜具の中へ一緒に潛つて、息の生暖かい、腰の冷たいをばさまに、ひつたりと抱かれて寢た……
　移つた最初の四五日は、かうした疲れと、おどろきと、子供らしい氣配りとで、好い工合に悄れて、彼女は、たゞをばさまの手に素直に繰られて過した。そのうちに然し、四邊への意識が少し冴えて來、と共に、何かしら幼い生活感が催して、たとへば、青桐の上の夕明りの空や、勝手もとの朝のひゞきや、また、をばさまの手が彼女を離れた瞬間ふいと沁みて來る孤獨、そう云つたものが、あの一八花の生えた草家のまぼろしを呼んで、聲帶や脣に殘つてる惰性が、子守唄の影を追ひ〳〵細かく震へだす。
「あゝオケラだ！ ねんねこを被たオケラさ！」
とをばさまの口吻を眞似て、眉の無い額をさも仰山に顰めたが、すぐその底から、赤ん坊の甥の泣き聲が、遠々しく聽えて來、脣に、背中に、忍びやかな旋律が滲み、ふとまた、その「罪」に氣づき、眼ぶちを紅くしながら、をばさまを偸み見るのだつた。
　彼女が顏を洗つたり、襁褓を濯いだりした家の前の流れの音が、雨聲のやうに、耳の邊りにたち罩めることもあつた。すい・すい・とん、と、夜なべのひゞきが、何處やら手近を掠めて去くこともあつた。
　それらが、彼女の精一杯な自制に、だん〳〵執拗く絡んで來、音の無い笛のやうな溜息と一緒に、小さな疑問が、怯々と彼女の眸の先へ芽を出すのだつた。
「みんな賤しい人かしら？ 赤ん坊も賤しい人かしら？ まあ赤ん坊が怖いんでせうか？……」
　だが彼女は、何かしら慌て、兩手に抱へた絲鞠へ急いで耳を押しつけて、中の蛤の微かな聲へと氣を外らした……
「おきち、おきち、」とをばさまの呼びつゞけるのが、ひゞかないで、疊の表に、時折り、小猫を呼ぶやうな音がした。すつかり夜伽のつもりのをばさまが、たわいなく眠り、お吉が、紅絹裏の蔭に、澄んだ眸の先へ指尖を縺れ合せて、ひとりゐた。銀砂子の散つたむさし野唐紙や、漆の好い簞笥などの面を、お吉の赤い子供帶が、ふらふらと音もなく過ぎて、表の出窓へ消えてゆくことがあつた。また庭の南天の葉が、彼女の細い銀磨きの髪飾りの上に、ちつといつまでもそよいでゐたりした。
　うつすらと透きとほる彼女の瞼の肉に、ときどき、青貝のやうな煌きが宿り、それを、熱心な美容師のをばさまが、汗と一緒にして、さつさと仙女香で塗り隱した。
　おどろくべき愼ましさで、いままであの「夜の無作法」を制して來たお吉であつた。それが、當然また始まつた。
「お吉はをばさまの好い兒だよ。いゝかえ、お吉。」と、をばさまが、寢床の上で、有明行燈に品格を整へて「好い兒」の倫理と法律を說いた。
「をばさま、此處へも、明日から、帶をして寢ませう。」と、お吉が、自分の兩脚を叩いて、雄々しい笑顏をあげた。
「まあ、この兒は！」と云つたきり、をばさまは、お吉の胴を抱き締めて、好い兒〳〵と眠りに陷ちた。
　だが、明日の晩も、その次の晩も、お吉の亂れ方は、一層劇しく、病的に募つていつた。その都度、をばさまは、胸をつかれ、裳を蹴られ、びつくりして起き上り、また「好い兒」を繰り返して、寢るのだつたが、ある夜半、お吉が床の中で絕え入るやうに身を悶掻き、例の如く跳ね起きて調べると、いつの間に、どうしたのか、お吉の足首に、赤い絲の輪が、二重に嵌つ

て、ひしと内に食ひ入り、兩脚の自由を、惨めに抑へてをつた。

「お吉や、お吉や……とをばさまは、彼女の汗ばんだ髪やそこらを撫でながら、たゞわけもなく呼びつゞけたのだつた――

小さな魂が、こんな風に消化不良をわづらつて、瞳子が寂しく據まり、頰も熱ばみ、何處となく全身に疲勞のあとがにじんでゐたが、をばさまの眼は、絶えずまるで、生れて初めて、天職を見つけたかのやうに、晴れ〴〵とこのお吉へ輝き、髪に紅味の突つた脣は、また根氣よく彼女へ「好い兒」達の謳符をつゞけ、それから、その指尖は、ちやうど花作りが花弄りをやめぬやうにせつせとお吉の上に動いてゐた。

――あのよくある消息箋のついた、いつも、二三行で濟むことに、卷紙の一尋半は潰す美文章家、あんな憐れな、寂しい、有閑なをばさまで、彼女はあつた――

間もなく、然し、お吉の弱り方が、愈々はつきりと表へ顯れ、さすがのをばさまも、お吉の手應への稀薄さに氣づいて、急にうろたへ始め、居間の隣へ、何の美しい寝床をとつて、彼女を無理にそん中へ押し入れ、さうして枕許につきつきりで、車前草の實と、萬金丹と、それから齒ごたへの無い樺底羅、眞白な、子守唄叢集の、市松人形などを與へた

「どうだえ。お吉？」と、何度も、何度も、彼女は、彼女の顏を覗き込んで、小さないゝいてふの鬢や耳たぶを、愛撫しながら訊くのであつた。

「起きませう、をばさま。」

「いゝえ、でもおまへ、頰がこんなに！……ほら、こゝもこんなに――」

「でも、どこもわるくは無いんですもの。」

「いけないよ。好い兒は、そんな無理は……ああ、をばさまが、三味線を彈いてみよう。」

で、をばさまは、三味線をちんまりと抱へて、例の横クエスチオン・マークの耳垂を、捻り捻り、低聲に艶を浮せて、爪彈きするのだつたが、それが、偶然にも、お吉のいつとう好い催眠劑となり、そこで、翌日も、またその翌日もと、つづけられた。

そのうちに、お吉の、ちぐはぐな天上の亢奮が、やうや〳〵鎮まつて、何か正體の知れぬ諦めと、朧氣な希望とが入り混つて彼女のうちに起り、さうして彼女は、をばさまの、その、態の照り返しを湛へた脣の、すぼんだり伸びたりする工合を、床ん中で、そつと口眞似したりするほど、活氣をとり戻してをつた。

やがて、床が揚ばれ、をばさまの好い兒らしい修學が始まつた。讀み、書き、三味線はむろん、その他、をばさまの身についた諸藝な澤山の初學階梯――

ふた月ほどのうちに、お吉は、すつかりイタについて、をばさまを悅ばせた。もう彼女の足は、そら〴〵しく疊を反撥しなくなつた。彼女は、その上に、指尖を揃へて、折紙のやうな禮儀を示すことが出來た。また、彼女は、姉を敬稱なしに幾度でもコキ使ふと云ふ可なり困難なシゴトを覺えた。

そこで、初めて、この「青桐の植わつた半屋」の、つや〳〵とした沓脫に、緋ぢりめん緒の黒塗りのぽつくりが、時折り、くつきりとした影を印し、お吉が、小さな紋羅の日傘の下に、をばさまに手をひかれて、わざと、人影の尠い方へ散歩に――

海の男等の死骸や、難船を引き受けて、腹を切つた侍などで賑はつてる寺が、この小さな港町の背中に、それ〴〵がつちりとした構へを持つて、數多く竝んでゐる。をばさまは、その一軒の方丈でお茶を吞み、お吉は、そんな墓の間の草花を摘んで、獨り言を云つたりして居つ

て來る。

家の前を三四町ゆくと、町の北から波除堤內に流れ込んでる河はゞ四十間ばかりの渡船で、それを渡つて黑い岩山の下を少しゆくと、島の青々と散つたこの港の小灣が展け、そこに、しばしば難破船の破體や、浮き荷、沈み荷、などの露骨な奪ひ合ひの起る砂濱がある。その砂を踏んで、をばさまが、まぶしさうに歌などを考へ、お吉が、船と、船大工と、船大工町の一八花の生えた草家を……いや、彼女は、貝殼を見凝めて、盛んにお喋りをする——

兎も角、「賤しい」街は、當分禁斷のお吉だつた——彼女には、「「五錢生活の垢」をすつかり落して、「好い兒」になる義務があつたから……

三　黑船神經・屯田女隊

「花旗國」の「ヘロリ大將」が神奈川沖へ來た年の暮——

白髮少しばかり、脂肪は可なり殖えたをばさまと、新麗の子のぱらと根に見える、あの一八五〇年代の高島田を持つたお吉とが、いつまでも唯一軒の、あの青桐の家にあつた。

お吉は、もうをばさまから、享けられるだけの教養を享けてしまつた。大きな假名文の「むかし、をとこ」の物語、れんれんゝれつれと折り返しのついた戀慕流し、それから甘い美粧術と氣取つた女禮、お上品な Tea-ceremony. そのほか、をばさまのお屋敷時代のストックは、いつさい、新鮮な吸取紙みたいに吸收してしまつた。

それにまた、彼女は、そんな風に、をばさまを消化すと同時に、をばさまのあの目鑑き通りに、もしくは彼女の入念な「培ひ方」の結果、美しく花開いてゐた。

時代的に、テンポ不足で、少しグロテスクでさへあるが、一八五〇年代の、美人市場の最高標準は

——色白キ中ニ光アツテ中肉ニシテ肌理濃カナリ〇面ノソナヘ少シ方長ニテ髮ノ生際綺麗ニ尺長ク光アツテ黑シ〇眉は三日月ナガク髮ノ生際トノ間マタ眼トノ間セマラズ〇眼細長ク魚尾下ラズ釣ラズ烏睛大ニシテ中ニ光アツテギラツカズ〇鼻梁サシ通リムツクリト高ク孔小サク圓ク向ヨリ見レバ孔見エズ〇口小サク脣イタツテ紅ク紅粉ヲサシタルガゴトシ齒大小ナク白ク光アリ、耳大ニシテ圓クシカモ厚ク肉アツテツネヅネ薄紅色ヲ含ムナリ……

たゞお吉の耳は、をばさまの下見時代の缺點を持ちつゞけ、肉の薄く開いたあの不幸な開花耳で、それから、脣をチラ〳〵洩れる齒列びが、淡い親しみを呼ぶほど亂れ、それが缺點と云へば云へたが、ほかはこの標準に當て嵌つた。

殊に、薄臘のやうな微かな弛みを細く橫に曳いた瞼の間に、大々と澄んでる黑眼は、何か清冽な魂の芽のやうで、非花旗國式ではあつても、必ずしも一時代のものではなかつた。

で、その全國的に、黑船神經のたつた年の暮——

此の海港にもヘロリ再渡來の不安な豫感が漲り、それが土着の海港人や出入りの船乘りたちの胸に、たとへばあの地球壞滅の風說が惹き起したやうに、神經病的な反作用を起して、海港のひとかどの船宿や料理屋はもちろん、貧しい寡婦の內職の注摩宿、席料二貫八毛也にさへ、この年の潮に狗の皮の三味線が亂調子にひびいてをつた。

例のかぶと蟲みたいな家ん中で、影に怯えてゐたひと組が、そんな雰圍氣につゝ突かれ、何とかしら心細い情緒意識を起し、町の名主や、年寄まで擔ぎだして、ある料理屋の二階で、盛ん

な遊藝會を催した。それが、名主を通じて、やつと、偉いをばさまを動かし、その結果、ふいと、一人形が街の人々の前に、彼女の歴史的なデビウを持つた。

あの家からは、始終、稽古三味線のひゞきが流れだしてゐたんだし、また時折り、それがやむと、お吉の姿が、好い兒らしく、街へ、現れて來て、船大工町の方へ水々しく過ぎたんだし、從つて、彼女の生地の好さや、またをばさまの手の彼女への細かい動きは、もうみんなが十分に承知してゐたが、それにしても、このヘロリ遊藝會のお吉はおどろきだつた。

第一に彼女を包んだ飾り――

もし率直に算術的な比喩でいふなら、たとへば、彼女の髪飾りは、この港町の助役六人(年寄六人衆)の年俸合計を遙かに超えてゐたらうし、彼女の帶は足輕五人を優に一年間、養ふことが出來たであらう。またもしそれらに、その裾の花やかな晴着やその他を合せたら、西の遠州灘から東の相模灘を乘り切つて江戸へゆくあの壯快な帆ばたきを持つ廻船が、たちどころに出現しさうに見えた。ヘロリ大將のまぼろしに、一時的にもせよ耽溺主義に陥ちてゐたみんなも、この黄金が鳴るやうな、飛び離れた濫費振りに膽をうたれたのだつた。

それから、ほんのツマのつもりだつた彼女のあけがらす――

その幕は、曾てあの勞働者街へ流れた子守唄が、年と共に淸純に伸びたものだつたが、それが、旅人通有のあの見聞自慢を封じるに十分なほどの美聲で、ちやうど廻船問屋へ來てゐた他國の手代や、また、千石積んだ渡り鳥の船頭らが、「あゝあの明烏」と、その時うけた感銘を、家への買物と一緒に、潮の向うへ運んでいつた。

かうして彼女は、むろんその夜の番組全部を浚つてしまつたのだが、時が時だけに、みんなの歡呼は狂風のやうで、――當然、それが、をばさまへひゞいていつた。

黒船神經にのつたをばさまの好い兒のデビウ！

をばさまは、もう、訪客の尠い石臺のそばに、ぢつと屈んで、お吉に見惚れてるだけでは物足りなかつた。藝術家が自分の製作の評判を貪りに、人寄りのする中へ出かけるやうに、彼女も、大急ぎで、縮チリメンのハンテンをこしらへ、婢をつれて、あの青竹の先に木綿の小旗がひら／＼出てる、垢まみれの――錢湯へいつた。

さうして、案の定、彼女は、そこの脱衣場で、ながしで、またざくろ風呂に浸りながら、みんなのお吉への讚辭を貪ることが出來た。

で彼女は、それから當分每日さゝ、[illegible]式な頑さを變に崩して、[illegible]ひで、序に、その流し場で、少し恐縮してる常連の「海港紳者」を捕へて、京白粉の品評をやつたり、江戸の水、丁字香、伽羅油そのほかの褒貶など、精々若々しいゴシピングをゆつくりと樂しんで歸つて來る。始終こま／＼美文を江戸へ書き、お吉の爲に、江戸のア・ラ・モオドの美粧法への知識を磨いてゐた彼女であつた……

をばさまの、お上品に限られた交際圏が、こんなことから、急速に、ずうつと陽氣な方へ擴がり、つまり錢湯の常連、紳者が、いつの間にか、そのまゝをばさまの方の定連となり、また女を呼んで、それがしばしばあの舟板塀の好來客(エルカム・ゲスト)木戸を潜つて、飛び石を飛んで姿を現すやうになり、そのうちに、またをばさまが氣紛れで、彼女らへ三味線の稽古をつけたりし始めた――

をばさまの好客來！

このお客さんらは、此處特有の六錢二厘五毛

の地獄と似たりで、たゞ彼女等はみんな自分の家を持ち、それが二種類に分れ、甲種は世帯人で、乙種は――令嬢だつた。

乙種は、別に外交辭令でなく、文字通りに、中産階級以上の令孃で、此のお天氣繁昌の港町では、未婚の處女を、「藝者」させることは、兩親の愛兒教育の原則で、つまり藝者は、令孃達の、女大學で、女今川だつた。さうしてそのツトメは、甲種の一本暮しと一緒で……甲種を見よう。

都市計畫式なあの三間道路が、土と石を鎧うた土藏家と、藁と石を具足にした藁家の家波を、幾ツかの長方形に分けてゐるが、そのどれか濱寄りの一ツをとりあげて、その家と家の間に、地圖以下の隙間を見つけて、這入つてゆく。左右は壁の代りに脊の高さほど積みあげた、じめじめと青んだ石材。そこを抜けると、人は多分其處に、雜草に圍まれた共同井戸の歪んだ撥釣瓶を發見し、さうしてその廻りに不規則な距離に、朽ちた、小作人の住みさうな藁小屋――石と土で作つた壁格子の太い、豚小屋か物置のやうな平屋――それに向う家の黒い下見板を張つた背中――も少し細かく見れば、そちこち日溜りに海苔やもろ鯵が干してあり、地上に大根が數へるほど屑を出し、そして家の附け根を赤黒い蟹が走つてるのが眼に寫る。やがてその鬱陶しい平屋の間半の戸障子が明き、若い化粧した女が姿を現す。眞赤な前掛、眞赤な襷、素木に眞田緒のすがつた下駄をつゝかけた足の踵が、皮膚が硬まり、細黒く皮裂れてゐる。それがちよいと空を仰いで、雲の動きを考へ「ああ西風だ。」と多分氣がついて、相模灘を乘つ切つて來る菱垣船の威勢の好い動搖みを感じ、急にいそがしく先刻の露路を表へ出てゆく――そのあとのしんとした中へ、片方の藁小屋の縁先から、やつぱり若い女が、萎びた藺草履の上へ降り立ち、海苔やもろ鯵の簀の子を片づけ、それから、大根を一本引つこ抜いて井戸端へやつて來てごし〱と洗ふ。さらしの綿服、おなじく幅の廣い前掛、前掛の紐が質實に帶の代理をつとめてゐる。やがて大根をぶら提げて、彼女がその小屋の投網などを片寄せた表膝手へ消え込む。そして暫くすると、小屋の中から、客を呼ぶ清搔きめいた、三味線の音が、しやん〱と聽えて來る……

なほ退屈しずに彼女等の生活を追ふなら、人は、あの赤前垂に赤襷の女が、すでに二階の櫺子の短い、下の間口の鰐口に薄暗く開いた船宿へゆき、其處で、もう實に節儉な、實に忠實な、同時にしんみりと陽氣な、そんな、家庭をその一室に作り出してるのを見る。彼女はふんどしを濯ぐであらう。彼女は米を磨ぐであらう。むしろ彼女は唄ふであらう。始終また彼女は、媚びと微笑を忘れないであらう……かうして彼女は、「彼」の滯在中、船御番所や問屋の用事を濟ませて別れてゆく最後の瞬間まで、極めて短い期間だが、この理想的な家庭を營みつゞけるのだ。彼が去ると、むろん彼女は第二の彼を迎へ、そこにまたあのつゝましい善良な營みを繰り返し、彼も亦十分に滿足して、少し許り彼女への回想を持つて去り、更に彼女は第三の――兎も角、彼女は、かうした此町特有の美德をつぎ〱につなぎ合せて生活してゐるのだ。いや、よく見ると、彼女にも、もつと花やかな、紅燈的な二面がある、それはあの藁小屋の女だが――彼女が赤襷で出かけなかつたのは、「彼女の船」が入港らなんだからで、その代り人は、その夜、彼女がほとんど奇蹟的に盛裝して、銀簪、口紅、水色鹿の子の襟など、ひとかどの「町藝者」になつて、あの穢苦しい藁小屋を出、濱港で第一流の料理屋へ這入つていくのを見たであらう……

屯田兵式な、こんな彼女らが、毎日轉寢の間、三味線を抱へて、「唯一つある家」の好來客門を潜つた。

さうしてその文札などの澄んだ場違ひな座敷で、上機嫌なをばさまの稽古をうけるのだが、をばさまは、何度も目を濡し、頬を染め、喘ぎ、そこでお吉が始終、代りに唄つたり語つたりし、みんなもその方が樂で、お終ひにはお吉を犠牲にしてしまひ、をばさまはたゞ傍にゐて、あゝ彼女は唇が薄いとか、あゝ彼女の鼻は曲つてる、あゝあの眼は……などと何時の目鑑きを、つまり、逆にお吉の夥しい美點をほく〳〵と數へ、そしてお吉の聲に聽き惚れてをつた。

稽古が濟むと、ひまな屯田女隊が居殘り、をばさまを取り卷いて、稍々上品な雜談をやる。そこへ、お吉が、時によつて茶をたて、みんな恐縮して、口べりの青い泡を手の甲でこすりながら、折々、喫び合ふのだつた。

「お吉さんみたいな人が出られるとねエ……」

「なにを……」とをばさまを盗み見て「でもほんとに何でもお出來だからねエ。」

「いまだにお客に云はれるのさ、あんな明烏を語つて見ろつて。」

「ほんたうさ。お吉さんが出られたら、どんなにか肩身が廣いだろ。」

「あゝ。それこそ箔がつくよ。」

「なんの……黒船がつきはしませんか。」

さう嬉しさうに口を挾んで、をばさまが、も一度、お吉へ眼を細めるのだつた。

だが、こんなことを考へるのは、あながちに彼女らだけではなかつた。お吉が、時々、をばさまからの姉や甥への贈り物を持つて、わざと一人で、あの義兄の草家へゆく途中、ほんの七八町だが、その道筋で、左右の二階から、見世うちから、また行きずりに、何度彼女は聲をかけられるか知れない。

「お吉さん、お吉さん、ちよいと寄つて、唄を聽かせて下さいな。」

お吉はその都度彼女の[illegible]な[illegible]をそちらへ微笑んで、そのまゝ行き過ぎる。いちど、細帯のお神が飛んで出て、彼女を捕へて無理につれ込まうとした。

「えゝ、をばさまに訊いてから。」とお吉はお神をまともに無邪氣に見て答へた。

「をばさまには、あたしがお斷りするから、ね、後生だから、是非一度お吉さんの唄が聽きたいと云ふお客さまがあるんだから。ちよいと寄つて、ほんのちよいとで好いのよ……」

「えゝ、でもをばさまに訊いてから。」とお吉は動かずに繰り返した。

「そんな……ねえ、ねえ、悪いことも何にもありはしないんだから。」とお神は彼女の手をそつと引張つた。

お吉は不思議さうにお神を見詰めた。

纖細できりつと輪郭をつけたやうな顔——どこにひととこる[illegible]けた所がなく、もし意志と感情を宿したらそのまゝ[illegible]な表情となつて動かにすつと現れる、——それにもう幾分肉感的な彼女にさへ離れた彼女で、その彼女の顔をまともに感應けて、お神は思はずとらへてゐた手を放し、さうして何のこだはりもなく、また微笑んで離れてゆくお吉の眼のすらりと伸びた後姿を見送りながら呟いたのだつた。

「惜しいほど、出來のいゝ、兒だねエ……」

「をばさま、どうして街のみんなはあんなにあたしを呼ぶんでせう？」と、外から歸ると、彼女は熱心にをばさまに訊くのだつた。

「それは、お前、それは……」と綺麗な花作りが、答に窮して、お行儀に、眼を濡した。

——ともかく、をばさまは、可憐な屯田女隊を迎へて、毎日、内輪に囁いてゐたが、町家の低い屋根の上には、[illegible]の[illegible]が、日毎に

さゝつて高く見え、ヘロリは、すでに、また神奈川へ現れてをつた。

三 O-HA-YO！

微風の動くまつぴるま、鳥影も、葉影も、屯田女隊はむろん、何もかも閉め出した茶室に、朱塗りの行燈がともり、をばさまが、お吉をお客にして、茶の湯ごつこを始めてゐた——

をばさまが、茶碗をお吉に薦めて手をつかへて

「どうぞ、」と口の中で云ふ。

をばさまは、何か視線が抜けてゆくあとを見凝めるやうな眼をしてゐる。

お吉が、静かに茶菓子鉢をその茶碗の傍へ向け、やつぱり手をつかへて

「どうぞ、」と小聲で繰り返す。

お吉は、雨戸の向うの青桐の葉ゆらぎを感じるやうな表情をしてゐる。

「いえ、どうぞ、」とをばさまが、身振りだけで——

「どうぞ、」とも一度お吉が低聲で云ふ。

「どうぞ、」とをばさまは、初めて聴えるほどの聲を出す。

「ではいたゞきます。」

そしてお吉が右手の指先を茶碗にかけた時、それまで隅にちゞこまつてゐた婢が

「呀ッ」と叫んで首をあげた。

遠くに唐人笛と太鼓の音が聴える。

をばさまはちらつと頰を慄はせてお吉を見る。

お吉は式通りにいたゞいた茶碗を胸もとに下ろし、右手を持ち直して茶碗を廻し、そしても一度式通りに……

笛と太鼓に歩調の揃うた革沓の跫音が混り、それが壓倒的に押し寄せて來る。

「あれ、あれ、」と婢が、瞳を見開いて低く叫び、無意識に、お吉の方へ腰を浮かせる。

お吉は、茶碗を拭うてをばさまの傍へ戻し、微かな溜息をつく。

をばさまは、茫と血の氣を失つて、表のひゞきに聴き入つてゐる。

「まあ、をばさま！」

をばさまの帯の間から、懐劍を收めた緞子の袋が食み出してゐるのだ。

「いゝよ、いゝよ。なんの恐いことが……」とをばさまは、うはの空で、云ひつゞける。

騒ぎがだん／＼家の前に來、しばあらく、みんなの心臓を叩くだけ叩き、みんなの血色を奪へるだけ奪ひ、そのまゝ渡船場の方へ遠退いてゆく。警備役人のだらう、草鞋や草履の音がつづいて聴えて、やがてそれも消え、あとはしいんとたつた行燈のともし火で——

いつの間にか、お吉の片袖が、ぴたりとをばさまの背を蔽ひ指半月の窶れたをばさまの指が、宙に、わけもなく浮いてゐる。

「あゝ、」と戰慄の解けた溜息がみんなの口から流れ出す。

をばさまの瞳孔のうつろに擴がつた眼が、ふと、そこに、型通りに置かれた茶碗の上に落ち、微笑が乾いた脣に漂ひ、亂れた聲が洩れて來る。

「こんな、こんな時には、お茶を點てて、落ちつくんだよ、いゝかえ、いゝかえ、お吉……

——戸外は、ぱつと晴れた外氣で、いまをばさまらを脅かした魔が、白々とした三間道路を、渡船場へかゝつてゆく。

羅紗の筒袖に金の環、肩に金の房の垂れたイホレット」、冠には雪白の飾り毛、腰に六挺仕掛けの「ヒストウル」、——片手に拔刀を持つた差頭役が、それぞれ二三十人の「銅筒組」の脇に添ひ、先頭に「旗持副官」が、紺地に花菜と

「赤白の縞」の花旗を掲げてすゝみ、その次に太鼓方、笛組、全部で三百人餘り――
渡船場には、三四十人から七八十人乗りの白塗りの「脚船」が六七艘、各七八人の唐人水夫を乗せて待つてゐる。綺羅びやかな此の怪物共が、整然とそれらに分乗し、忽ちに向ひ岸へ渡り、また隊伍を整へて、火山岩の肌の黒い武山の裾を濱傳ひに、隣り村の休憩所の玉泉寺へゆく。

間口が九町で奥入りが十九町の、松に蔽はれた島の散つた海面に、石火矢を二段に備へた「フレガット」軍船、「チャン」塗り木造の火輪船、それに帆前船、すべて七艘が、多彩な柱印や船印を掲げて此の海港を壓してゐる。

一　斗ヨキセン赤筋船　ほゝはたん
　あめりか中海岸總水師頭かもどうる・へろり（旗艦）　フレガット
一　黒船　みすしつぴい　フレガット
一　軍船　ふはんてりや　コルヘツト
一　軍船白筋　れきしたん　コルヘツト
一　黒船　しつふれい　コルヘツト
一　キイロ船　そうたんぼん　コルヘツト
一　黒船　ませどにや　フレガット

それらが、いま海岸に現れた「美百鬼」の姿を認めると、いつせいに硝煙を吐き、そのひゞきが、海港の町家の壁にとゞろき、をばさまらを初め、肩をすぼめて、闇くこもつてる人々の懐えた神經を、いやが上にも鞭打する。

さてこの行列の後には、役人、通詞、それにあの「中世紀の黒太子時代以後あちらではもう骨董になつてる」具足などをつけた、あの、江戸の下谷の武具店で、一遍に高値に飛びあがつたのを買つて來て身拵へしてる警護の武士、また、今が流行の角兵衛獅子風のかるさんを穿いたものなどが從つてゐる。多分彼等は、去年のあの、久里濱一件を思ひ出す、あの時ヘロリが國書を納れて來た金の總金物つきのタガヤサンの箱からは、國書のほかに、隅に横文字を書き入れた白旗が二流れ出て來たのだ！　降參する場合はこれを振れと！

で、これらの國粹黨が、眼の先の夷人船を見て眼を瞋らして考へる。あの艫に塗つたチャンが、天日にとろけかゝる時分を待つて、一氣に燒打ちすれば好い。あの船の乗組員をみんな陸へ誘引きあげて、石火矢を使はせずに一騎打ちに討ちとると好い……

だが異人隊は、そんな彼等を無視して、思ひのまゝに海港町を威嚇しておいて、彼等の休息所へ行進する……

この示威運動後、しばらく、町は、ちゞかみ（虎列剌）や、あかはら（赤痢）や、厄病（腸窒扶斯）に蝕まれてゆくやうに、陰險な恐怖に喘いでゐた――

船問屋を除けては、どの家も戸を閉め、まるで死の家のやうで、商ばなしや呼び聲、三味線などはむろん聽えず、祭壇に燈の滴が搖れ、みんなひそ〳〵と背を屈め、時々、戸の節穴に這ひ寄つて表の氣配をうかゞひ、それから密と土間に降りて、忍び足で隣りへ、向ひ家へ、お互ひの社交心を滿足させに出かけてゆく。さうしてそこで聽いた噂に、一層恐怖心と反感とを高め、それをぢつと持つてることが苦痛で、また他の家へ打ち明けにいき、結局、家から家へ、だん〳〵誇張した戰慄が傳はり、町全體が一刻一刻、恐怖の深みへ陷ちてゆく。

噂は南桐の家へも當然ひゞいて來た。

――あの毎晩、びいどろの提灯をもつた異人の泊り寺の庫裡で、彼等は折々、こつそりと人間の魂を吸ひとる仕事をしてゐるのだ。

びいどろの壺から紫色の焔が立ち昇り、そのそばに、メリヤスの筒袖を捲りあげた異人が

二人。二人ともその腕に、赤と青で女と男の刺青をしてゐる。一人が、角な銀張りの銅の板を持ち、それを獸の皮でごし〳〵と擦つては、その紫の焔で焙る。もう一人は、ぎやまんの德利を持ち、その水をとき〴〵その銀の板へ注ぎかける。そのうちに、銀板の表へ、人間の顏がもうろうと現れて來、それが例の焔に燒かれて、だん〳〵はつきりとした人像になる――寫眞鏡と云ふもので……異人は始終この器械を持つてあがつて來、處女と見ると、きつと引つ摑まへて寫すのだ。

異人は、何處で聽いたのか、處女と人の女房との違ひをよく知つてゐる。

――異人は蛇を捕つて食べる。ついこの間、三人連れの異人が、山へ登つていつた。一人は腰帶に籠を提げ、一人は唐人笛を持ち、一人は何か皮袋を持つてゐた。それが山ん中で蛇の穴を探し出し、その廻りに立ち、唐人笛で蛇を誘き出し、その出て來たやつに、皮袋の男が白い粉をふりかける。蛇はぢきにくる〳〵と輪になつて靜まり、それを籠に入れて船へ持つて歸つて――喰べるのだ。

――異人は大抵、腰に六挺仕掛けのヒストウルと股引の縫目に時計、それから上衣の縫目に、柄が伸び縮みして、小刀にも、鎌にもなる庖丁を持つてゐる。

――この間、亭主が戸を閉め忘れて出かけたある家へ、ぐでん〳〵になつて異人が四五人で押し込み、西洋草履のまゝ座敷へあがり、そこら中痰を吐き散らし、それから「SAKI（酒）！ SAKI！」と怒鳴りながら、戸棚や押入れを引掻き廻し、結局、酢德利一本見つけて、牡丹（釦）を二三個遺留して引揚げた。

隣りへ遁げた家族と、亭主も歸つて來、後始末をして、近所の神主を呼んで來て、お秡ひをして貰ひ、牡丹は町會所へ、名主さま連名で屆け出た。いまだに然し、家のうちに四つ足の臭ひが沁みついて拔けない。

――隣りの××村のある寺へも押し込んで。二三日前の夜五つ刻頃で、冠の外牡丹に車印や錨をつけた二三人が、鐵砲に狐を吊したのを擔ぎ、上官に連れられて庫裡へ上つて來た。そして晩酌中の住職の頭を叩き、その銚子を引つ奪つて、本堂へいき、寢そべつたまゝ動かなかつた。役人が通詞をつれて來て、引き取らせようとしたが、どうしても聽かない。たうとう彼等は短筒をひねくつて本堂に立ちはだかり、こちらは庭に御用提灯をならべたまゝで、睨みあつて夜を明した。

――異人が來てから生きものが減る。鷄はもとより、犬や猫が第一、いつの間にか見えなくなつてゐる。おほかた唐人笛に吸ひ寄せられて、結局、異人の胃の腑の肥料になつてしまふのだらう……

こんな噂が、海坊主か雪達磨みたいに肥つてゆき、それがまた陰氣な被害妄想を呼んで――

「ゆうべ夜半に、唐人のバッテイラが劍筒の劍尖を月にキラ〳〵させて、稻生澤川を溯つていつた。」とある漁師が云ふ。また、或る女は、よんどころない用事で夜中に外出し、道の曲り角で、ふいと出逢した例のかるさんを穿いた警備兵を、すつかり唐人と見違へて、絶え入るやうな悲鳴をあげる。

――いまに唐人が劍尖を揃へて、此の町の女狩りを始めるだらう。彼等はたしかに女好きだから。

――いまに彼等は、町中の素人娘を盗つて八ツ裂にして食べるだらう。彼等は猫の生きたまゝ食べたがるんだから……で、夜は實に寂しい、江戸から來た應接掛り、奉行などの泊つてゐる寺々や、御用所、町會所、番小屋なぞを除けては、たゞ船宿や廻船問屋などに、心細い灯が洩れ

る位のもので、却つてそれが、街の闇を深め、その中を、時を定めて異國船で打ち鳴らす點鐘が、憎らしいほどにはつきりと、町の人々の耳朶をうつ。

お吉とをばさまが、毎晩、床をぴたりとくつつけて寢た。あの緞子の袋に納つた懷劍が、いつもをばさまの枕許に置かれてあつた——

ほんの暫くだが、然し、町の人々の頭に、永い印象を殘したこの恐怖時代に、たうとう終りが來た。

「市長」(ペリー遠征記用語。實は下田奉行支配組頭。但し町政の實權は、當時この「市長」が握つてゐた——作者)がこんな風に命令したのだ。

——みんな戸を開けろ。陽氣に！　陽氣に！

さうして「市長」は、多分この命令を徹底さすために、先づ六錢二厘五毛の地獄を公娼にまで高めた。それからあの屯田女隊にも、むろん、その恩惠を均霑させて、彼女らの一人を自分の官舍へ呼び寄せて使ひきりにし、通詞までにも、それ〴〵見習はせた。彼はまた彼女ら三人を、ヘロリ饗應の時の給仕に出し、それから——その選ばれた十幾人は新公娼連と共に、實に、ヘロリ一行の寫眞鏡の前に立たせたのだつた！

「あゝ、あゝ、お吉さん、あたしはもう死ぬのよ。えゝ死ぬのさ。」とその十餘人組の一人が、お吉を訪ねて來て捨鉢に云つた。

「まあどうして？」とお吉が不思議さうに訊ねた。

「でも、異人に寫眞を撮られたんさ。だから精々面白い眼をみなくちや……」

「おや！……」とお吉は眉をしかめ、そして、この一層元氣な彼女を、まじ〳〵と見直したのだつた。

それから給仕に出た三人組の一人は、お吉に、こんな印象を物語つた。

「さうね、異人つて、まあお猿が白痴にかゝつてるやうなものね。眞白で、手の甲にも赤い毛があるし、それに、髮がまき〳〵でね。第一あの眼は、身震ひの出るほど厭あね……でも、それあ身綺麗よ。」——

「市長」のこの「英斷」は、たしかに町を陽氣にした。家數が八百軒餘りしかなく、その一割五分以上は船宿と、女郎屋、兼料理屋が占めて居り、其處に先づ幾らか悲壯ではあつたが、どつと絃歌が揚つたのだから。さうして街々の商店は、皆いつせいに見世を開けた。

異人が通詞を連れて、屢々それらの店へ來、二三割時價より高い買物をしていつた。「酒場」には酔拂ひ唐人の手から、ドル〳〵の雨が降つた。(此の時一弗は當時の二十五錢)

之等異人の、町へ撒き散く金は、日に二十兩を下らなかつた。だから、商人に、彼等が品物を自由に選擇する爲に、見世の疊を土足で汚しても、もう別に大した苦情はなく、一面に十分國粹的であり、もう一面により多く商人だつた彼等は、當然出來るだけ異人に近づくことを望んだ。

ある料理屋では、町の親分が、通りかゝつた異人の水夫等を呼びあげて、盃の應酬をした。子供等は、異人の後について歩き、地べたへ投げられる小錢や干菓子の破片を、爭々として拾ひあげた。ある漁師の女房は、亭主を通じて、こつそり異人の汚れものを濯ぎ、幾層倍かの報酬を得た。またある者は、濱に流れ寄つたギヤマンの徳利を拾ひ集め、それを内密で知人に送つて、隨分割の好い交易をやつた。

小娘が、臨時に、警戒色のお齒黑をつけて、街を歩く。

「O-HAI-YO！」と、異人が、太陽には無頓着に、人の顔を見ると聲をかける。

沖はそろ〳〵黑潮の春濁(濁り)で、初鰹が來、
「陽氣に！　陽氣に！」町はなつた――
　ある午後、お吉は、久し振りに姉に逢ひたくなり、恰度來た藝者にそこまで送られて家を出た。
「もし唐人が來たら、何處でも手近の家へ寄せて貰ふんだよ。歸りは、姉さんに送つてお貰ひ。いゝかい。早くお歸りよ。」
をばさまが、上りばなまで隨いて出てさう云ひ、それから、まだ不安らしく
「いつそ、お前も鐵漿をつけとくとねエ……」と云つて、ふと傍に立つてる藝者の皎齒に氣がつき、笑ひに紛らした。
「……ではお賴みしますよ、おどめさん。」
「えゝ、えゝ、そこまでお預りしますよ。」
でも、さすがに二人は、手を繫いで、小走りに步いた。ほんのり汗の滲む陽氣で――
「ねえ、おどめさん。」とお吉が云つた。
「なんです、お吉さん。」
「唐人にも、女があるんでせうか。」
「まあ、お吉さん、まあ！」とおどめさんがお吉の顏を覗き込んだ。
　その仰山な樣子に、お吉は、思はず眼叩きして、だが、大眞面目で、答へを待つてゐた。
「それはねえ、お吉さん……唐人は化物だけれど、なんぼ化物でも、それあ、有る筈だわねエ……まあ馬鹿らしい！」
「さう、有るのね。どんな風をしてるでせう？」
「おや、そこまでは知りませんよ。でもね、おほかた……よしませうウ。」と云つて、おどめさんは、何か自分の考へにくつ〳〵笑つた。
　お吉は素直にうなづいた。
　ある露路の入口へ來て、おどめさんが、ふいと脣をつきだして
「あアばアよ。」と云つて、笑ひながら
「お吉さん、知つてますか？」と訊いた。
「いゝえ。」とお吉がをかしさうにかぶりを振つた。
「唐人がね、この頃、みんなさう云ふんですつて。では、あばよ。」
　おどめさんは、さう云つたまゝ、ちよいと首をさげて微笑んで、その露路の中へ別れていつた。
「あアばアよ。」とお吉は、無意識に口の中で繰り返し、左右へ會釋したりして、ぢき姉の家へ來た。
　黑船がどうでも、世間がどうでも、それはいつさい不感狀態の、あの兩親以來の家で、姉がひとり、裏の太陽の當つた蔬菜畑に肥料をかけてゐた。お吉は土間をぬけてそちらへ出、腐りかゝつた緣側へ構はず腰をかけて、姉と話した。
「お前まあ、獨りで出步いて好いのかい。」と姉がほとんど呆れて云つた。
「えい。でも、こちらが、どうかと思つて。」
「こちらが、どうなるものかね。それはね、唐人がちよい〳〵勝手に來て、井戶水を飮んでゆくけれど。」
「まあ來るの！　厭だ！」
「それはお前、唐人だつてあんなに大きいんだもの、水を入れなくちやあ、ほゝゝゝ、そして小錢を抛り込んでゆくのよ。それをまた一々お上へ屆けるんだからね。」
「面倒ねえ。捨ててしまへばいゝものを、」
「でもさうしなくちやあ疑ひがかゝるのさ。」
「疑ひつて？」
「つまり唐人と懇意だらうと云ふのさ、それではキリシタンになつてるだらうと……」
「でもむかうから來るのは勝手だわねえ。」
「どう云ふものかね……と姉は、それには興味がなく、また畑へたつた。
「さうね、いけないね、唐人は化物なんだも

の・・・」
　さうお吉が呟いて、何となく振り返り、その煤けきつた座敷越しに表を見た時、彼女の眼に、小さな甥が、歯を喰ひしばり、両手を握り締めて、駈け込んで来る姿が寫つた。
「嘉市、嘉市、」と彼女は立つて、土間を表の戸口まで迎へに出て抱きあげた。彼女の子守唄に眠つたあの嘉市で、それが髪のとんぼが曲り、そちこち草の葉がくつつき、精一杯亢奮してゐる。
「どうしたの？」と彼を下におろして、彼女が訊いた。
「ひとが、ひとが・・・」と彼女の前掛を掴んで引きながら、息を切る。
「え？　ひとが？」
「ひとが死んで・・・うゝん、うごいてる！」
「ど、どこで？」
「あつち、あつち。」と嘉市は、彼女を道まで引つ張つて出、すぐ眼の先の丘を指さした。
「どこよ？」
「そこ。」と云ふなり彼は、彼女をおいて、十間許り先の、丘の肌へ切れ込んだ道の登り口まで駈けていつて振り返り、片手を擧げた。
　彼女は無意識に釣り込まれてそちらへいき、その松や葉櫻の樹立に挟まつた細い道を見上げた。道は七八間のぼつてすぐ奥へ外れて居り、曲り角に列んだ樹の幹の間に蒼い空が覗いてゐる。
「あの上？」
「うゝん、違ふ。あすこを曲つてちよつと奥の笹ん中。」
「どんな人？」
「あのね、あのう・・・知らない。」
「知らない？」
「うん、笹ん中から白い手を出して――来い、来い・・・」
「いやな嘉市！」
　さう彼女が彼を睨まへた時、ふいと嘉市の眼が大きく空に動き
「ほう！」と嘆聲を洩らした。
　いつの間にか、坂道の天邊へ、ひよろ長い唐人の姿が現れ、それがこちらを見下ろして、馬鹿みたいに
「おう、は、いよ！」と叫んで、白い手首を振つた。
　お吉は嘉市の肩を抱き締めて裾をあげ、眸をそちらへ凝注した。
　二挺仕懸けの鐵砲を肩にかけてゐる。白カナキンの股引の膝に、艶紅の際立つた山鳥が吊下り、そのしだり尾の先が沓の上をふら〳〵と動く。羅紗の筒袖、羅紗の頭巾。
　葉櫻と松の影明りの中で、青びいどろのやうな眼が大きく笑ふ。白子のやうな首と手首。猿とおんなじ髪の毛。その赤毛のしよぼ〳〵と生えた白子の指の間に、雉の赤山鳥の翔を一本摘んで、弄くつてゐる。
　それが馬鹿みたいに下りて来て、お吉の前に立つた。
　青い眼が、變な光を湛へて細まり、また開く。片手がお吉の背を撫で、片手の艶紅の翔が、しつこく島田の鬢やしぼりの帶に戯れる。
　お吉は、身動きもしない、眸を彼の眼に据ゑたまゝで立つてゐる。
　青い眼の奥にまぼろしが見える――朱塗りの行燈のあかり――薄茶――緞子の袋に納つた懐劍・・・
　唐人が片手を羅紗の縫目へ突つ込んで、小銭をとり出し、嘉市の足許へ投げる。
　嘉市が急いで四ツん這ひになつてそれを拾はうとする。
「嘉市！」とお吉が初めて、血の迸るやうに叫んだ。

嘉市が吃驚して首をあげる。唐人も不意を打たれて彼女の顔を眺める。然し彼女は、そのまま口を緘んで、また彼を凝視する。

唐人は、少し勝手が違ひ、變に寒さうに、山鳥の羽を振り〳〵行つてしまふ。

お吉は、地べたの小錢を氣にする嘉市の手を、ぐん〳〵引張つて、姉の家へ戻つた。そして入口から

「姉さん。おいとましますよ。早く歸つて著換へをするのよ。髪も洗はなくつちやあ……いいの、一人で大丈夫。さよなら。」

それだけ一息に云つて、あとは歯を食ひしばり、家へ引き返した。

四 風見

ヘロリは、自分がとき〳〵泊つた法華寺へ寢臺とカーテンを、それから、とき〳〵憩んだ禪寺へ、十字架を刻んだ墓一つを、それ〴〵置土産にして、足掛け四ケ月して此の海港を「あばよ」していつた。

「阿墨利加さま〳〵」と、思はず口を辷らして、營業停止を食つたあの正直な江戸の武具店と同じ氣持を經驗した者が、此の海港町の一部にも、むろんあつて、たゞそれが江戸よりも賢明で無口なだけだつた。

だが、何と云つても、ヘロリ大將が鬱陶しい存在だつたのは事實で、從つてあの「陽氣に！陽氣に！」の陽氣さも、彼が去ると共に、神經質がなくなり、急に自然な朗かさをとり戻した。

ある晩、「市長」に招ばれて、お吉は、をばさまと一緒に海港一の料理屋「伊豆よし」へいつた。「市長」はをばさまの江戸のお屋敷へ出入りしてゐた男で、それが、先づお吉の噂を、專屬の屯田藝者から聽き、序にをばさまのことも知つて、ヘロリの荷をおろすと共に、彼女等を迎へたのだ。

疊半疊ほどの白旗に、太く「魁」の一字を描いたのが此の「市長」の旗印で、その旗持や、兜持、槍持などを連れ、むろんあの「黒 太子」止りの鎧をよろひ、此の海港を押し廻つて、ヘロリの連中と、同時に海港人を大いに威壓し、それから、潮時を見て、あの陽氣の號令をかける、そ云つたもう五十がらみの、仕事師で、脂肪の多い丸顔に、厚手の唇が始終あの「日本人微笑」を刻んでゐる。

お吉は、高島田と振袖で、此の「市長」の前に坐つて、例の明烏を語つた。

「うまいもんですな。評判通りだ。」と「市長」がをばさまに云つた。

香りの高い煎茶に始まつて、またその香りの高い煎茶でお終ひになる、山谷、八百善そのままの料理が運ばれた。

お吉は、しなやかな手で箸をとり、教養通りに會席のコースを濟ませた。

「いや、結構でした。また聽かせて貰ひませう。それから、ほかにも、聽きたいと云つてる者があるから、招んだらどうぞ來てやつて下さい。まつたく感心しました。」と、「市長」は、外交辭令でなくさう彼女らに云つた。

笹折りの包みと、使ひ捨ての小田原提灯をさげ、わざと送りを斷つて二人切りで歸る道で、小さなをばさまが

「ほんとに、ほんとに……あゝ！」

と滿足の遣り場に困り、眞闇な空へ呟いたのだつた……

「市長」の宣傳が利いたのであらう、すぐこのあと、お吉は、「市長」と同格の、つまり第二「市長」に招かれた。

第二市長は、「陽氣市長」とは違つて、年も四十そこ〳〵で、いつたいに華奢に若々しく、始終座の仕事に廻つて、それをすら〳〵と運ん

で、別に、仕事をしたと自負するでもなく、つまり「陽氣市長」のやうな氣負ひもなく、その癖、心構へだけは、いつでも出來てるとそ云つた男で、從つて、表面も、すつかり砕け、自分が面白く遊ぶばかりでなく、人を遊ばせることさへ十分に出來た。

お吉が例によつてをばさまに連れられて、伊豆よしの彼の座敷へ通り、小唄三つ四つ、それに評判の新内を語り終ると、彼はその喉と手を口を極めて讃賞し、さて、お吉の三味線をとりあげて、「露は尾花と寢たと云ふ」、ちやうどその年のハシリの小唄を、低聲で手際よく歌つて聽かせたのだつた。

そんな伊達者の半面を持つこの第二市長が、をばさまとお吉とにこんなことを考へさせた。

――おまへ、こんど伊佐さま(第二市長の名)にお眼にかゝつたら、この頃の新しい唄を出來るだけ教へてお貰ひ。

――えゝ、をばさま。それに江戸の女たちの風もね……

それから、引續いて市長等の下役たちから聲がかゝる。料理屋も伊豆よしだけでなく、も少し格の下つた、もしかすると、お吉には緣は無いが、ちやんと第二室的な段取りのついた家なども混つて來る。「陽氣市長」から聽いたから、と云つて迎ひが來れば、そちらへも出かける。一日のうちに二度同じ家の軒をくゞることもある。二軒三軒と廻ることもある。

むろんみんなこちらがお客で、向うは――やつぱりお客だつた!

屋根の上にひよいと千石船の帆柱が見えたりする街筋を、鬱陶しい二階の格子の隙間に紅いもののチラつく船宿の前などを通つて、水あさぎの定紋の入つた帽子を着た小さなをばさまが、盛裝したお吉の先にたつて、時々駕籠で、しばしば然しわざと徒歩で、雪駄をしと／＼と、料理屋へ這入つてゆく。

簀の子の隙間から、格子の間から、見世先から、緣臺から、町の人達の眼が、みんなこの夢幻的な、むしろ狐の嫁入りみたいな二人に吸ひ寄せられたのはもちろんで、人々は、殆ど宗教的に、先づその二市長の女友達へ、今まで以上の敬意を拂ひ、それからお吉を、より以上に讃美した。さうして、當然の結果、ある日、船宿のお神が、「唯一つある家」へ訪ねて來て云つた。

「をばさま、お吉さんをこちらへも貸していただけませんか。さうお上筋ばかりへ、おつとめなさらずに。」

――でも、それでは、わたしが[illegible]

をばさまは、云ふまでもなく、プライドを傷つけられて不滿な面持で答へた。

――いえ、いち／＼をばさまに[illegible]も、こちらできつとお吉さんに間違ひのないやうにいたします。それに、こちらでは、みんなが申してゐるんですよ、お吉さんを[illegible]い仲間の人々に見せたい。あの聲をよく聽かせて威張つてやりたい、とさう……」

「さうですか、そんなことを。さうですか……」

――ではまあ、考へて見ませう。」

然し、をばさまは、もうその瞬間にちやんとお肚を定めてゐたのだ。

――無造作に、お吉は、藝者になつた。

島田の髷の前を高く、うしろへ低く細く結つて、鯔背のハシリになつてると、流行早耳のをばさまが知り、早速それをお吉に試み

――あゝよく似合ふよ。と微笑んで、[illegible]りにも若い、いなせなお吉を扮りあげる。

「第二市長」が、天城を越えて江戸へ、十日ほど留守にし、戻つて來た時に、お吉に與へた土産が、紺の荒い格子を染め出した縮緬の單衣地で

「まあ美しい！」とお吉がうつとりとなるのを、好々と微笑み

「市松染と云ふ、いま江戸で騒いでをる。」と、この通な人形造りが、説明して聴かせる。

それから、徒紅などは時代遅れで、白粉も淡く、どちらかと云へば、つゝましいうちに生地の肉體美を示すのがモダンだと、傍から伊達男が口を添へる。

「陽氣市長」―第二市長―、その他駐剳役人大ぜい、料亭や船宿の主人、町の親分、千石船の船頭など、パトロンはあちらこちらに賑やかで、それが、彼女の髪飾りを考へ、彼女の持物を工夫し、彼女の吾妻下駄を氣にし、つまり彼女の珍しい天稟に、浮いた氣配りを八方から集注して、さうして海港一番の彼女を仕立てあげた。

そこである時、市長と市長とが、黒船の合ひ間に微醉を呼んで、こんな情知りの社會政策を談じ合ふ。

「貴所のお引き立てのきちですが――」と第二市長が口を切る。

「はあ……いや、貴所にも隨分お力添へ下さるさうで、老婆も彼女も悦んで居ります。」

「それに就いてですが、近頃のきちの身裝は、いかゞでせうな。」

「身裝と申されると？」

「どうも、ちと奢つては居りませんかな。われわれの贔屓が少し過ぎたやうに思ふ。」

「あゝそのことですか。と陽氣市長は、上機嫌に微笑んだ。

「たとへば、きちは、頭のものにも、二品三品鼈甲を飾つてをる。襦袢の襟は綸子、帶は唐織か何か、きらびやかな模樣がある樣子、肌のものも、どうやら、友禪などのやうに見受けます……」

「いや、細かいことですな。」

「みんな、これは、先年の御改革の趣旨に悖つてゐるやうですが……」

「いかにも、お言葉の通りです。然し、天保とは時代も違ひ、ことに當所は、いま國際的に重大な立場にある、つまり當所の女は、とりも直さず日本中の女の代表として、碧い眼に寫るわけですからな。それから、きちがあんな風だと、從つて當所の人氣も陰に籠つて畏縮けてばかりはゐまいと思ふのです。」

「では公儀を蔑にしたと云ふ懲罰がきちへ來、ひいては、われ〳〵にも、不行届きの非難が來ると云ふことは？……」

「方便ですよ。方便ですよ。方便を無視しては仕事が出來ない。それに、こんな時代で、みんなが西洋劍筒へ許りひた押しに血眼になつて向つてる時に、そんな細かいことをねちつくりと睨まへて、こちらの足もとを整へると云つた方へが、さうざらに湧いて來るものでは無からうと思ふ。むしろ、われ〳〵が、當所の市長として、その邊まで氣を配つてることは、大いに買つて貰つていゝと思ふのです。」

「よく判りました。いや、わたしも、さうは心得て居りましたが、たゞ萬一、きちに御咎めが來たりしては、と考へたものですから、念の爲に伺つたのです。」

陽氣市長が、例のジャパニイズ・スマイルの動く口に酒を含んで、二三度大きくうなづいた――

こんな風で、お吉は、六錢二厘五毛紛ひの海港藝者とは、もとより格が違ひ、むろん甲乙二種類のあの藤前垂などに用が無く、氣の進まぬ宴會は、をばさまが先に立つて、片ツ端から斷つてしまひ、それがまた却つて人氣を呼んだ。

まあ彼女は、庭鳥のあの風見のやうな[illegible]、風のまに〳〵、身若り、化粧し、唄ふ[illegible]、其處にひとりでに喝采が[illegible]つたのだが、それを、屯田女隊や海港の女連が、始終振り仰い

で、彼女の鶏冠の向いた方へ、爭つて一轉向し、それ〳〵、自分一杯の智慧をはずみ、從つてお吉は、つい知らず識らず、此の海港町へ、艷麗な流行の種を蒔き散らす、先覺者にさへなつてゐたのだつた・・・

お吉おぼえ帖一枚――

八月十五日。ならひ（東風）。朝のうちぬれえんへ雨すこしこぼれいる。

つぎさを手ならしにひく。

島のきかへあはせおろす。

いもくりかき、すゝきけいとう、初しほのさんま、坂下より。

げい者しゆ兄さま、坂下の義兄、えんぎだなといふものゐまにつくる。こんせいさまうしまゆ玉くま手、めさましくをかし。なにがをかしとみな〳〵わらひさわぐ。これは山田や（待合茶屋）のそうつす。

七つごろいづよしより迎ひ。くろ川さま（陽氣市長）いささま、ほか〳〵ことわる。

七つすぎ大あんじやまのうら手に赤い大き月の出。

この月に黒ふねのゐぬがざんねんといささま。あんな青い眼にとおどろけば、いもは十三おけで（缺乏所相場）買ふいつたとくろ川さまにわらはれる。こんやはいもめい月。

いささまのつゆは尾ばな、とほくはなれて（長崎傳來はやり唄）などうたふ。もうぬすまれた、こんど來たらくろ舟へつれてゆき、たうじんのうたをぬすませるといへば、そばから、ついでにきちの聲もきかせてやるがよいなどときみのわるいたはむれ。赤い毛の生えた耳にきかせるこゑはもちませぬとひつし（黒船時代國粹黨慣用副詞）にことわる。

四つまへにおかへり。あとのざしきいつものびやうきたのみもどる。

えんばなへ筵をりひらく。をばさまさけ少々あがる。るすにたんざく四五まい。きいちもよめといはれ、こまる。むしのこゑ、さんばうのすゝき、いまきいたくろ舟、月いろいろ、三味せんよりむつかし。しあんごと、よろこび、かなしみ、なにもこゝろやすくあの月にむすびつけてなど、をばさまに教へられ、そんな氣でお月さまをみれば、たゞまんまるく、あくびばかりをかし。

伊せ二三まいまをしわけに、あとは枕もかいまきも、をばさまのわらひごゑもうつゝに。

簞笥と絹ぶきんで毎日磨きあげてゐるやうな、明るい家うちで、女ばかりの生活に、午前の時とは反比例に、麗やかに美々しく暮されてゆく。

をばさまが、すつかり良妻の光澤を増し、もうあの江戸への美文章病さへ忘れてしまふ。彼女は先づ、毎日、次から次へかゝつて來るお座敷の忙しさをゆつくりと享樂し、それから、もち前の見識を働かせて、その中からほんの二三日、一お吉に價する つまり彼女自身に價する客を撰みあげて、あとはみんな刎ねてしまふ。

彼女は第一市長の女友達で、從つてそんな階級的な標準に當てはめると、大抵の客はレベルをどんと落ちるが、問題は必ずしもそこに無くて、もし彼女の趣味を、彼女と同じたけの熱心さで崇拝する客なら、それで好いので、いちど、宿からの運びが一利益になるお客ですから、どうぞちよいとでも。と口を滑らして、一も二もなく刎ねられ、そこで早速コツを呑みこんで、今度は、客の代理に根かぎり舌を廻して、おべつかと謙遜のストックをありつたけぶちまけ、すつと撰みあげ

られ」た。こんな迎ひの男女が、始終この唯一つある家の表に群まり、お吉を褒めるお喋りが毎日盛んに鉢合せし、そこに妙な競爭心理を煽り、それがまた、をばさまを得意のてつぺんへ引き揚げる。

小紋の小袖を着た小さなをばさまは、表へ出て、そんな彼女の「見識」にこゝろよく疲れ、奥へひつこむと、もうお吉がいつぱいで、まるで端婢のやうに彼女の脚もとに膝まづいて、その細腰に、まばゆい帯を纏はせ、あるひは、塗りの盥のそばにゐざり寄つて、水に解けこんだ彼女の髪の見ごとさに見惚れ、それから屢々また、お吉の前にひろげられた美々しい小間物と呉服の荷を覗きこんで、重たげに首をかしげてる彼女のために、銀と鼈甲と縮と香料その他の買物をきめる。

蓋に金紋のついた團扇型の鏡――骨の細い肉の柔かな手首へ、愚劣な快さのしな／＼と傳はるあの唐金の鏡が、毎日幾度も、華奢な濡れ縁近く、また幽艶な刺繍を包んだ行燈の傍に持ち出され、そこにお吉の、光のある鳥睛と、生々と紅を噴いた脣と、青味の霞んだ生えぎはと、それらがやはらかに動いて始終ひとりでにかもしだす無心な微笑を寫しとる。その鏡が、女大學風な、單なる身嗜み以上に、むしろ魂よりも大事な彼女らで、だから、をばさまは、また、手があくと、紅絹裂れで、毎日その面をこすり、晴れ／″＼と浮いた生活――

内面的にも外面的にも、飾り窓風な、日に日に斬新な、それからそれへ新奇な蠱惑をそなへた、まるで第一等の衣裳屋のモデル・ガールみたいなお吉を作りあげること、それがこの家の生活原則で、これがこの港町の「陽氣」のシンボルで、町の爲政者らさへ暖かい拍手をおくつた――時代だつた。

お吉は、お吉だけにまた多忙で、念の入つた身仕舞や衣裳づけは別として、彼女は彼女の仲間達――あの六錢二厘五毛級の屯田女隊、あの素濡れた鯨帯と一張羅の銘仙の半纏で、繼棹の風呂敷包みを抱へ、寝不足の顔に、さすがに、夜寒の季節らしい氣配を運んで來る――仲間達を、あざましい金精大明神の居間へ通して、三味線を合せ、作り聲の微塵もない冴えた聲で、覺えたての流行唄の封切をする。それから稽古熱心なのが、おさらへを濟ませ、をばさまが座を外すと、あとは、忍び笑ひを伴つた、彼女ら特有の、冗談で、お吉には、始終縦横に、時折何となく微笑み返したりして、ちつと聽き手になつてるのだが、その話が、ケチな一傭武士（近村から海港警備に來た農民兵）から小廻船のかしぎまで、いや、も少し上層の、綸のどてらを着た船頭や、鳥追の陣笠連（當時流行軍帽、羅紗猩々緋の陣羽織黨など、つまり彼女らの肌へ來る男を、みんな裸にして、いつさい平等に、辛辣な、捨鉢な、神經的な、色情批判のメスを當て、それがついみだれて、密とじやれ合ひ、捻り合ひ、じれつた結びの鬢も何も崩れるほどになつて、ふつとお吉の溜息を聽き、急に、細かい、しんみりとした世帶話の本音に落ちてゆく。このお天氣な、變に濕つぽい變り目が來ると、お吉がついと起つて、金精さまの下の袋戸棚をあけ、八方のパトロンから彼女へおくつた贈り物――江戸の唐棧、京の玉川半えり、阿波のちゞみ、當港らしく、あちらこちらの「渡り鳥」が落していつた諸國名物女ものいろ／＼――を、ぱつぱと皆に撒いてしまふ。

そこで彼女らが口を揃へて、いつもの彼女への讚辭をもう一遍また騒々しく繰り返し、習ひたての覺束ない小唄を、上機嫌に首を振り／＼、縺れあつて歸つてゆく。

それから半時ほど、甘いをばさまと差向ひで――仕立てあがりを着て見、締めて見、すら

りと立ち、お澄ましをして見せ、あちら向き……
をばさまのとろけさうな眸へあどけなく笑ひか
け――それが済むと、ちきにまた派手な買ひも
の。

　彼女が帯につく三つ指の尖の、うす紅さした
貝爪――ハシリの流行をすら〳〵と消化し
て、若い人たちを新鮮な魅惑へと誘ふ風姿もの
ごし――同時にあの姿にとり澄ました感じの被
布や文机が、ちつともちぐはぐでなく、つまり
閑でお上品な第一階級人らにも眼を拍たせる
だけの教養――さうして何よりも先づあの、
海鳥と一緒に、波の上で、彼女の墓碑銘となつ
た艶麗な盛帯――

　　おもひだしますお吉のことを
　　いそのちどりのなくねにも
　　　　――伊豆下田港に建る碑銘――

　玉は定まりで新公娼に毛の生えたくらゐだ
が、こんなお吉で、祝儀の花降銀（一十五錢銀
貨）や、時に小判が、紙包みのまゝ無造作に長火
鉢の抽斗に溜り、それが米とか種油とか、一生
計の方へはてんで一顧も與れないで、片ッ端か
らどん〳〵買ひものに消えてゆく。婆は一
ヶ月六毛だし、幕府の御徒士の、お玉落ち給料半
年分受取日の標準な奢りの鰻丼は金一錢

で、一流旗亭の一泊料が二朱五匁八毛也とそん
な世の中に、假に彼女のふだんの買物帖を描い
てみたら

　より絲帯　一本
　　銀三百三十三匁（約三圓七十錢位）
　緋ぢりめん　一反
　　銀二百十七匁五分（約二圓三十錢位）
　紫縮緬半えり　一懸
　　銀二十二匁五分（三十六錢）
　するしやう玉　銀かんざし　一本
　　銀五十匁
　京べに　一茶わん
　　六錢二厘五毛――

「活計」は夙うに問題外で、濫費至上に生き
てゐる彼女――お吉の「つとめ」は、だから、パン
を得るための「労働」ではなく、をばさま初めパ
トロン達の贅澤遊びを「あそぶ」ことで、黒船氣
分の「時代の踊り」を、をどることだつた。

　開港へ来てゐる勅任官の出張費と機密費、
豪奢な船頭や旗客の一綱の財布、それにをばさ
まのあの四分の一世紀間の貯金と退職手當、そ
れらを美貌の肥料にし、あとは彼女の特演を、
そのまゝみんなに見せれば、そこに人氣の温し
ほが待ち構へてをつた。

　日が暮れかゝると、キラ〳〵した灯、町並
にあかしが點火り、丁度の出来たお吉は、何か
浮きたつたをばさまと一緒に、賑かな宮に詣
せて、理窟もたわいもなく、敬虔しい神信心を
済ませ、それから遊びに精を打たせて、闇道に
彼女のあそびへ――

　もう野分で、行や草や、土の軒端に、蜂と虻
鼓と灯が、運動な氣持を漂はせてる街を、彼女
が、何の懐物も、何の草臥れもなく、あの夫つ
きの、ぶだらな大高紋のない常磐下駄――あの世
紀のお洒落を、しなよ〳〵素足に運んで、帰り
あか〳〵としたお座敷へ出かけてゆく。

　彼女は、云つてみれば、心もからだも一枚鑑
札の「踊り子」で、それに威勢い人達のお華がか
りだし、第一料理屋や船宿の氣配りがいきとゞ
き、だからお座敷はどれも綺麗で、豊麗風
な寛ぎと懐しみを保ち、それが崩れて溢れて、
彼女のあの開花耳を火照らすやうなことは、ま
だ無い。まあみんなして、お吉を大事にぎやま
んの器ものに入れて、見惚れてゐるやうなもの
で……どんなに晩くても、四つには、彼女は、
もう家に帰つて、をばさまと、また甘い差向ひ
を楽しんでゐる。もしそれより遅れたら、婢
が、彼女の出先へちやんと迎へに来て待つてる

し、をばさまは、お吉、お吉と、彼女の「人形」を、まぼろしに追うて、居間と表の間を摺り足で動いてるのだつた――

氣紛れな時代と、もつと氣紛れな環境とが、手前勝手な育兒部屋を仕立てて、お吉を彼等の好い工合にこゝまで哺んだ。

だが、より一層氣紛れな手を、その育兒部屋へ伸ばして、いよ／＼彼女をそこからとり出したものは、その冬の「花旗國」のさんふらんせすこの驗潮儀にまでひゞいていつた大震海嘯であつた。

五　ぷうちやん軍船から――

あのヘロリ遊藝會から、まだまる一年にならないが、海港は、もうニッポン第一番の開港場で、猶々それに相應はしい粉飾を帯びてをつた。

町の出入口には黒漆塗りの柵門が出來て、唐人の散歩と、本國の風來國粹家を監視してゐたし、大根畑や草家を拂つた跡には、冠木門のついた薪水糧食の「缺乏所」、それから勸工場も新しく建つて、唐傘や下駄や小提灯などを唐人に賣つてゐた。渡船場の向ひの岩山には、竹の筒に玻璃板を嵌めて沖を見てる見張役がゐたし、海岸には白旗を立てて異國船の送迎に出かける水先案内船が、ちやんと準備されてあつたなど……

然し、ヘロリ大將が去んでから殆ど百日間は、黒船も見えず、また、いつも黒船と同時に、そちこちから顔を見せる「鳥追角兵衞連」も――住民の五分の四は不生産的な武士だ、と、ヘロリの隨行員が、この連中を喝破してゐる――現れて來ず、その間に、お吉とをばさまの、あのアダ花生活が、町の氣持に載つて、あんな風に花咲いてゐたが、そこへ、先づ、ふと魯西亞のツシリウイチ・ぷうちやんがやつて來て、港灣の出口に近い入江に、淺黄に白襷の舟印をひるがへした。

特に「毛深い肌を持つ」唐人五百人ばかり。
大筒二段備へ五十餘挺、三本檣の軍船。

そこで、空砲が、ふたたび町の空を威壓し、四ツ足の皮で作つた大きな沓が、清淨な三間道路を濶歩し、その後を、背の低い [illegible] が、「獵犬の獲物を追ふやうに尾行けて歩く。

當然また、角兵衞傳が、殺氣立つて入り込んで來て、江戸の大官連が着き、騒然とした鬱陶しさが町を包んで、女連中は家うちに姿を隱したり、手廻しよく齒黒をつけたり、兎も角、あのヘロリ神經の疼きを再發して、みんなが、插話的な恐慌を起してをつた。

そこへ、地震と大津波だつた。

安政元年十一月四日午前九時――十二時
晴　凪
乳房山（大あんじ山）――滿月を吐く山に鳥の鳴き聲かから／＼聽え、しんとなつた後を、地響く彈力性を持つ音が、町の背の丘々よりあかり、と思ふ間に、白絹のやうな路面が、そこかしこ、ひゞき破れて泥水を吐く　かぶと蟲の家が齒ぎしりし、草家のハラワタが落ちる沖鳴りがいん／＼とひゞく、寺々の鐘が鳴る。

津波だあ！
潮が、灣の中央島の根を露き出しに殘して、千石船も、木ツ葉舟も一緒に港ぐちへちゞまつていき、たつた一瞬、商網のかつしりとした[illegible]が、今出來た干潟へ横倒しになり、小さな人間が、轉がり出て、その水の退いた海底をいつまんに砂漬へ――
津波だあ！

土藏家から、草家から、寺から、社から、白けた、埃の舞つた、脣の乾いた顏が無數に飛んで出、撚れ〳〵になりながら、ひとこと、物を言ふでなく、丘へ、丘へ――

千石船が、渡船場の向ひを、ふらあと盛りあがつて、畑をのぼる。

兒の泣き聲。

波除堤の附け根から、河を越えて、黒い山が町へ壓しかゝつてゆく。あとから、あとからと……

舳が寺の庇へ突きかける。

藁家が浮いて、屋根の上の人影が小さく、近づき、遠退き、搖れ〳〵流れ、互ひにぶつかつては、すつと影を消す。

一本の帆柱が、土藏家の間を横ざまに四五軒づつ攫き碎いて氾濫する――

形も、色も、影も、ひゞきも、天地萬物のいつさいが、一瞬の間に、日頃の均齊を失ひ、恐しい混亂の渦を捲き起しつゝあるその中を、ふと殺氣を帶んだ喊聲が、何處からともなく震へふるへ揚る。

ヤツケロ! ヤツケロ!……

子を負うた漁師の女房、船宿のお神、屋根に載つたまゝ流れてゆく者さへ、首をあげて、聲を擧つて、さう叫んでる。

いや、こんな二人まで――

若い男が、片手で老婆の背中を抑へ、片手で煉瓦を掴み、二人とも、屋根にしがみついて、波除堤へ流されてゆく。堤の松の枝が、ふいと男の月代の上へ。男は夢中で、それを掴む。

老婆は屋根にくつついて離れない。男のからだが、片手で松に吊下る。老婆の叫び聲。何とも表現の出來ぬあんな眼。だが息子は、松に下つた瞬間、松葉の向うの灣を見て

――ヤツケ……呀ツ!――

老婆は流れてゆく――

既に逃げ了せた者、いま逃げる途中にある者、振り返つて灣を見た者はみんなさう叫ぶのだ。

さすがに武士は口を緘んで、でも、拳は握つてゐる。何をそんなに!?

あゝ淺黄に白襷の舟じるしが! あゝワシリウイチ・ぷうちやんの軍艦!

纜が切れたのだ。帆桁も碎けてゐる。三段が一段になつて、大搖れに搖れながら、大潮に乘つて、三十三間の圖體を、あの入江から中央島へ流れだしたのだ。

ヤツケロ! ヤツケロ!

だが、不思議なことを見る――

屋根の上や、木ツ葉舟や、木の枝などに泊つて、この怪物と擦れ〳〵に流れてゆく日本の、女や男や、子供のからだが、時々、あつと思ふまに、そちらへ乘り移るではないか!

この五百人の、捲き毛の唐人!

ヤツケロ! ヤツケロ!

空は晴れてゐる。雜木の枝がきら〳〵と光りながら搖れてゐる。津波が大氣を動搖させるのか? 地がまだ震へてゐるのだ。

帆柱の家を碎く音。巨濤の寄せて來る無氣味な氣配。またその遠いてゆく時の心細いひゞき。人々の叫び聲。みんなそれらが共に混り、劇しく喘ぐ呼吸づかひと、落葉を踏む跫音とが、手近にはつきりと聽えてゐる。丸まつた背中が、幾つも〳〵丘を登つてゆくのだ――!

くたりと泣き疲れて、魚のやうな眼を見開いてる赤ん坊。その下に、木綿のねんねこを小腋に曳きずりながらのぼる母親、米の包みや水の德利などを提げて、杖をついてゆく心得た亭主。位牌と小間物の包みを一緒に背負つた小娘。季節々々の着物をいつときに重ねて着た分別男、衣の無い坊主。金銀證文の手筐を抱へて、たつた一人で逃げて來た商人。そのほか、

いろんな人々が、蒼く吐息しながら、這ふやうにして上へ……

そのいつち後から、若い娘が、素跣足で、まあ何と云ふ力だ！　足を痛めたらしい老婆を片手で背に負ひ、もう一人、血の氣を失つた質素な老婆の手を引いて、登つてゆくのだ。

髪も亂れ、衣紋もみだれ、重味を踏んまへた素足の膚に、そちらこちら、草の實ほど、血粒が滲んでゐる。それを耐へるのか、時折り、口をきつと緘へ、また、若い劇しい呼吸をつゞけて、足を踏みしめて進んでいく。

「をばさま、」と、娘は快活な聲で、背中へ呼びかける。

「もう、そこですよ。

そして、元氣な笑顔を、片手の老婆へも投げ、ちよいとまた口を緘へて……

をばさまが、しをれた顔を、默つてうなづき、そのまゝうつろな眼を細めて、ぢつと丘の下の凄じい氣配に慄へてゐる

手を曳かれた質素な老婆も、ぢいつと熱い眼をし、娘の笑顔に答へるつもりらしく、時々首を震はせる。

「をばさま、をばさま、と、お吉が――おゝたふとう彼女で彼女はあつた――絶えず、火照つた息の下から、聲をかけ、笑顔を作り、また幾度も、そつと口を緘へて、苦しさを忍び、やつと、丘の背の見晴しへ到着する。

「さあ、をばさま、さあ、をばさんも、來ましたよ。」

さうお吉は、改めて精一杯陽氣に、二老婆へ云つて、甲斐々々しく、二人を、崖の傍の低い松の蔭へ籠もらせ、それから、ひとり、崖ぶちへ起つて出て、町と灣とを見下ろしたのだが――

その、青に薄墨をさした冷たい空の下で、何を彼女は見たであらう……町には船が、灣には屋根が、浮いて居つた。寺と、官舎と、丘沿ひの草家少々、ところどころに、半潰れの土藏と土藏の家――それに、港近く、底が破れて据わつたぶいゝうちやん軍船――

流失皆潰　　八百四十一軒
半潰水入　　三十軒
流失皆潰土藏　　百七十三ケ軒
半潰水入土藏　　十五ケ軒
死者　　九十九人（人別外二十三人、合計百二十二人、一家不殘死絶え六軒、

青樹も、舟板塀も、あの氣の利いた「唯一つある家」など、てんで記憶の破片に過ぎない。

「お吉や、お吉や、」と、をばさまの嗄れた聲が、松の蔭から聴えて來る。

お吉が、睫で涙をはじき、肘をひきながらそちらへ引き返す。そしてその、落葉を敷いた上へ坐つて、をばさまの小さな頭をそつと膝へとつた。

「をばさま、もしかしたら、坂下の嫁の家は殘つてゐますからね。」

「え？　坂下？　お吉さん」と傍に身を屈めてゐた老婆が、彼女へ首を寄せて來て、縋りつくやうな眼で彼女を見る。

「えい、をばさん。よくは見えませんけれど……」

老婆は、節の縮んだ指で、胸を抑へ

「あア、」と肩を落し、ぢきにまた、不安らしく首を振つた。

「お吉、」と、をばさまが、彼女の膝の上から仰ぎ見て

「水がほしい。」

「ほんたうだ、御隠居さん、咽喉が乾きますね、」と老婆も、お吉を見上げて云ふ。

そこでお吉が、またそつと、をばさまの頭の下から、膝を抜き、松の外へ出て、辺りを見廻した。

さつき登つた人々が、その[illegible]に散らばり、[illegible]

を抱へたり、幹に凭りかゝつたり、岩かげに肩まつたりして、みんな、急に陰の深まつた顔をしてゐる。それを彼女は、足を曳きずつて、片ツ端から廻つて歩く。

「やあ、」とみんなが、いつもの通り、彼女を見て微笑む。だが、その態度が、當然、いつもよりも、變に淡々しく、もしくは、野性を持ち、まつたく平生と違ふ。

「水がありましたら、どうぞ分けて下さいな。をばさまにあげたいんですから。」

「あゝをばさま。」とやつとみんなが思ひ出す。

丘下へは、まだ二十分隔に波が來てゐるのだ。

「水は、お吉さん、あれだ。」と、眼の下を指す。

お吉は、それに構はないで、次から次へ頼んであるく。

「お吉さんが水を？」と云つて、眼の隅で彼女を見る者がある。

「あゝその足を！」と彼女の裾に卑劣な同情を表明する者もある。

「水は悪い。」と忠告して、こんなことを聽かせる者がある――

つい一刻も前のこと。ある男が、水を呑みに丘下の寺の墓地へゆくと云つて下りていつた。波の來ぬ墓標の前の、花筒の水を呑まうと云ふのだ。が、實際は、津波のあひ間を、泥溝鼠のやうに、町へいき、そこに殘つてる土藏家へしのび入り、その歸り道を三の汐に浚はれた。水は呑んぢやいけない……

最後にお吉は、さつき登つて來る時に、徳利を提げてゐた夫婦者を、少し離れた樹蔭に見出し、そこへ廻つて頼んだ。

「水？　お吉さん。」と亭主がお吉のほつれ毛の數まで讀み

「水は、ないこともない。が、高いよ。」

「あ、わけて下さる？」

「うん。」

「ではね、」とお吉が懐を探つた。無い、持ちつけの財布が無い。彼女は、髪に手をやつた。無い、髪飾りの一切が無い。

「では、お前、」と女房が、亭主の耳に囁いた。

「ではこれだ、」と亭主が、爪の尖の黒い手を伸ばして、お吉の膝を撮んで曳つ張つた。

「ありがたう。」

偶然、締めてゐた幅の廣い縮緬の前掛が、赤い絎紐を地上に曳いて、驚きと一緒に、亭主の手に殘つた。

お吉は、半分ばかり水の這入つた小茶碗を、大事に兩手の掌に納めて、戻つて來た。

「さあ、をばさま、水が來ましたよ。」

さう云つて、をばさまを抱き起して、その白けた脣へ茶碗をあてがつた。

をばさまの、白く鳥肌の立つた喉が、ごくりと鳴る。

傍の老婆が、松の葉へ眼を上辷らして、屈んでゐたが、べつと白い唾を、外の樹草へ飛ばして、寒さうに口をすぼめる。

「あ、をばさま、をばさんにも少し殘してあげて……」

さう云ひながら、お吉は、をばさまの手から、茶碗をとつた。

「まだ……」と云ひかけて、をばさまが、口を緘ぢる。

お吉は、その底に少し殘つたのを、をばさんに呑ませ、茶碗を戻しに、もう一遍、足を曳きずつて、例の夫婦者のところへ出かけた。

頭の上の松に、夕雲が滲みだし、二度目の嵐を喚り始めた　をばさまは、横になつたきりで、時折り、眼を瞑つて何かもりへ、それから不安らしく、熱つぽい眸で、頭上にあるお吉の顔を追ひ求める。お吉は、老婆の木の蔭を借りて、闇くならぬうちに、その膝の上の、白髪の大分

混つた小さな頭を梳でた。

「鶴は……鶴は、どうしたか、」と老婆は獨り言に彼女の息子の名を呼んで、ちよいとその邊へ出て見、をばさまの鼻水の滲んだ小菊を、無意識に撮みあげて、また捨ててみたり、ふいと切なさうな溜息を洩らしたり、うろ〳〵とそんなことをしては、また、彼女等のま傍へ戻つて脊を屈める。

空明りを湛へた町の廢墟を、獲物漁りの男や、死體探しの遺族や、役人などが點々と動く。焚出しの煙が漂うて、丘を下りる者の氣配がひとしきりつゞく。それがやむと、話聲や、燧石の音が聽え、やがて枯葉の火と、星影がちらちら見えはじめる。

「お吉……」とをばさまが、暗闇を恐れるやうに、時折り呼びかける。お吉は、その度に、頰で、をばさまの涙を拭ふ。

老婆が、やつぱりそこへ顏を覗かせ、手織りの半纏の袖で、涙と鼻とを一緒にこすりながら、癇の籠つた聲で云ふ。

「どうせ、御隱居さん、碌なことはありません、あんな唐人が、こんなに來ては……」

それから、彼女は、また息子を戀ひ、うろうろと離れていく。

丘下に亂れる提灯の灯が澄み、寒さが小袖を沁み透る。をばさまは、苦しさうに、お吉に背負はれて、岩蔭へ小用に立つた。

その戻りに、そちこち地面に流れた蠟燭や枯葉の火を避けて、お吉が、をばさまを引背負つたまゝ崖ぷちへ出たが、恰度その時、波除堤の向うの、彼女がよくをばさまと一緒に散歩に出た砂濱の邊りに、ぷうちやん一行のぎやまんの手行燈が、入り亂れて動いてゐた。

「ねえ、をばさま、」と彼女が云つた。「いつか、坂下から歸つて來て、髮のものも、着物も帶も、みんなとり替へたことがありましたわね……」

「あゝお吉、もう〳〵そんなことは……」と、をばさまは、どこまでも、自分の感慨に惱み、劇しく首を振つた。

お吉は、そのまゝ口を緘へて、松の下へ引き返したが、あの白癩の手首や、お猿の毛や、青びいどろのやうな眼が、ふいと彼女の疲れた寂しさを横切つたのだつた。

彼女は、襦袢の袖を千切つて、兩足の足首を包んだ。さうして、右と左に、二老婆の腹の鳴るのを聽きながら、枯葉の上へ横になつた……

しばらくたつて、ふと彼女が、眼を開けると、松葉の上に提灯の灯が見え、そこに若い船大工の上半身が透いて見えた。彼女は急いで起き直つて、そちらを見、大工町で見覺えのある顏を見出した。

「鶴よ、鶴よ、わしはどんなに……あゝ！」と、老婆がその大工の腹懸へ、飛びついて叫んでゐた。

「うん、うん、」と彼は、その母親の感傷を律儀に受け

「あゝお吉さんに扶けて貰つた、さうか、それは禮を云はないぢあ……」

それから彼は提灯を持つてしやがみ

「お吉さん、ありがたう　お袋の命を扶けて貰つて。」

「いゝえ、夢中でしたことですもの。」と、お吉がちりめんで縛つた足首を氣にしながら答へた。

「いや、放つておかれたら、今ごろは浪に浚はれて、何處へいつとるか、わからん。」

でまた彼は、頭を下げ、それから、をばさまに挨拶したが、ふいと、お吉等の慘めな容子に氣がついたらしく

「あゝこれあ、大變だ。先づ食物と、屋根を持つて來なくちあ。」

さう云つて彼は、何處へ出かけていつたか、ぢきに、荒莚と、焚き出しの餘りであらう握飯

の包みを背負つて歸つて來た。
そこで早速、菰と、松と、岩と、簡粧の小屋懸けか、鶴とお吉の手で爲され、その中で、提灯のあかりの下へ、黒ゴメと澤庵の切れツ端の晩餐か擴げられた。
この日はむろんお晝食ぬきだし、あれだけの疲勞で、みんながつ／＼とその救助小屋の握飯を嚙むのだつたか、をばさまは、お吉の凍えた指頭からひと口喰べると、額を顰めて、力なく、彼女の膝の上で冠頭りを振つた。
坂下の娘のあの家か、其處の鶴の家などと共に、水浸しになつただけで、奇蹟的に殘つてるとか、鶴の口から確かめられ、また娘達が、やはりあの丘にゐることも判つた。
お吉は、全身に震へてるをばさまを、抱きしめて、始終苦々しい呼吸使ひをつゞけながら、小屋の片方に横になつた。
隣りには、老婆と鶴が凝まつて、灯を消して、ゐた。
四日の月はとつくに落ち、お吉が、袖でくゝつた足を踏みしめて、をばさまの小用に出ると、鶴が、小屋の前に提灯を持ち出して蹲つてをつた。鶴は、寒さに、涼しい眼をして、荒菰の切れつぱしを、せつせとお吉の草履に編んでゐたのだ。
翌る日、義兄が、例の相變らずの安生活者然とした顔を、この小屋に現し、それから、をばさまの夜具の菰と、水と、黒ゴメの粥や握飯が、賑やかに運ばれ、始終また、枯葉の火が、小屋の前に燃えた。
日暮れに大震一回、夜に入つて海嘯四回――
その翌る日　をばさまが鶴の背に負さつて先へ、後からお吉が、鶴のをばさんの手を牽いて、町を通り抜けて、あの勞働者街の端の娘の家へ移つた。
をばさまは、小袖のそちこちに朽葉をくつつけたまゝ、小さくちゞかんでゐた。お吉は、袖の輕い片手に、松の家の荒菰を抱へ、鶴のこしらへた草履を穿いて、始終をばさまに幣をかけながら、足を曳いてをつた……
この大震海嘯が「天の叱り」であつたにせよ、また「天の禍」であつたにせよ、たゞ一つのことは眞理だ――平凡な人間か、ふいと英雄になつたり、子供が急に大人になつたり、また老人か子供に返つたり、人が神にも、獸にもなつたり――いや、こんなことは、大正十二年九月

一日後、しばらく、みんなわれ／＼の目に慣れた常識だつた。
われ／＼は此の浦港の場合
あのかぶと蟲の胴體のやうな土藏家が、ところどころに、崩れしよびれて、まるで冬の日をうけて立つてゐる。人々が、あちこちに蔵さらに晒され、町の下湯に集りついた支那官憲らとの奪ひ合ひに眼をいからしてゐる。
その中を、淺黄に白襷の小旗を持つた奉行所官員と、皮箱を下げた唐人など四人が、かな第のやうに見付けて、奉行所へ急つていつた。
みんなは、ひきに、その奪ひ合ひを中止し、彼等へ、とげ／＼しい白眼を送つた。
それからしばらくして、今度は、唐人水夫の一隊が、縄張りのトイタを回つて、擔いで、やはり町を抜けて奉行所へいつた。
みんなは、おろんでた、その新しい聞名と寒さを後にして、彼等の憎悪の眼を向けたが、ふとそのトイタの上に、彼等が商で見知り越しの、女や老人の御風衣を發見して、思はずたじろいだ
奉行所で、このリシリウイチ・ふらちやんの使が、陽氣市長に逢つた時――今度の大震海嘯は實に直撃で、諸く御同情申上げる。就

ては本軍船の軍醫官及看護卒をお貸しするから、自由にお使ひ下さい。尚、海嘯の際、幸に本軍船へ收容することの出來た罹災者の病人を御返送申しあげる——

赤十字社が世界的に出來たのは、幾年か後のことだし、そんな氣持が判る筈がなく、むろん陽氣市長は、頭からこの好意をことわつた。それから、これらの罹災民を訪問して、彼等がぷい、い、うちやん軍船で、「からだ中按摩され」たり、いろいろ好遇されたことを知つて、例のジヤパニイズ・スマイルを浮べて、一流の獨白を洩らしたのだつた。

——おそるべし！　おそるべし！——

ともかく、ヘロリ大將よ、呪はれてあれ！　ワシリウイチ・ぷらちやんよ、呪はれてあれ！

この大震海嘯は、天譴でも天災でもなく、實に「害人禍」だつたが、而も、海港は、日本第イチバンの開港場で、從つてその復興の遲れることは「御外聞ニ相拘」はつたし、また町の回復の「遲速ニ寄リ御國ノ強弱貧富ヲモ見透」される道理であつた。

すきに淺間堤の修覆が始まつた。妙な名前の缺乏所も修理されて、そこの勸工場の商品目に、ちりめんなどの贅澤品も加はることになつた。一方、救助小屋や、救助米や救恤金が、それぞれ取計はれ、また海港人の離散を防ぐ爲に、特別の場合には、（たとへば舟稼業の舟造りなど）無期限無利息の相續借金も許された。それに例の「陽氣市長」の陽氣政策から、も一度あの屯田女隊を聘ぶために、船宿連中が、一軒につき五兩づつお上から借りつ放して、コケラぶきの新築にかゝつた。

船が新しく造られ、家が新しく建ち、從つて職人は皆好景氣で、さうして、あの勞働者街の草家——

曾て「唯一つあつた家」の女主人が、家屋流失慰藉金、花降銀三個をお上から貰つて、いま、このくすぶつた家の爐べりに、煎藥の湯氣を嗅ぎながら、横たはつてゐた。

地震で損ねた腰に、あの松の小屋の冷え込みがこたへ、それに第一、こんな彼女に致命的な氣落が來て、毎日、寢たつきりで、たゞ彼女のお吉の手に「人形」以上の沒表情さで殘つてをつた。

「をばさま、をばさま、」とあの聽き馴れた聲が、毎日、不思議に明るく、活き活きとこの家うちにひゞきわたる。彼女は、もういつぺん、あの幼女時代の勞働着に包まつてゐる。姉のもぢりの半纏、帶代用の前掛、髪も無造作に束ねたままで、時折り、裏の蔬菜畑の實の入つた人參を引つこ拔いて、振つて見せたり、また爐の向ひ側に坐つて、焚火の煙を笑つたりしながら、さう快活に呼びかける。飾り氣の微塵もない顏の膚に、絶えず健康な紅らみが滲み、光のある微笑が、眼元にも、口許にも、あとから、あとから、と詰めてゐる。

をばさまは、その都度、充血した眼を見開いて、そちらへ力なく笑つて、ぢきにまた眼を閉ぢる。さうして、眼を閉ぢたまゝで、ぢつと彼女の氣配を追ひ、いつときも傍から離さない。もしお吉が何かで、姉が代つて、藥茶碗を薦めたり、足を揉んだりすると、實に不機嫌に押し默り、時に露骨な溜息の音をひゞかせたりする。それが、お吉を見ると、忽ちほぐれて、細つた手を伸べて、お吉の綿服の衣紋を、ひとかど襟へてやつたりするのだ。

だから、お吉は、をばさまにつきつきりで、何も、夜半もなく、善い看護婦で、善い母親で、さうしてたしかに善い人形であつた。

だが、何故お吉を、こんなに大事にするのか。

人は、いまやこの海港中にとゞろいてゐる新

生のひびきを、この見窶らしい草家の造りにも聽くことが出來た。板ぶきの、ほんの三間しかない、百姓家式の腰障子があるかと思へば、丸窓があつたりする、何處か、ちぐはぐな建物だが、もう木組も屋根も出來上り、あとは細かい仕事が殘つてるだけで、其處に、日暮れ方から、夜へかけて、鉋や手斧の音が、松風の間に、ひゞいてゐるのだ。さうして、あの好人物の、勤勉な義兄が、彼の青海波鑵單位の夜なべの代りに、すい、すいと板を削り、それから、若い、目の涼しい鶴が、愉快さうに槌の音を立ててゐる。それから、時折り、ふいとお吉の姿が、足音を忍んでそこに現れ、彼等に小聲で挨拶し、出來工合をひと眼で樂しみ、ぢきにまた、をばさまへひき返してゆく。

これが、をばさまとお吉との新居であることは云ふまでもない。二人の船大工の、船おろしの祝儀と貯金、それに好景氣の生んだ夜なべの餘裕を寄せて、出來上りつゝあるのであつた。

「をばさま、もうお勝手を作りましたよ。ほら、あれは、いま、鶴さんが、棚をこしらへてる音ですよ。」

そんなことを、お吉は、をばさまの枕許に坐つていつも說明し、をばさまらしい憂鬱を慰めた。

をばさまは、江戸のお屋敷への、倅の綿々とした手紙を、床ん中から、二三日がかりで、お吉に口述して、飛脚に託させた。それと引き違へに、見舞ひの金と米がついた。

さうして、恰度、あの、港口に据わり切りになつてゐたぷうちやん軍船が、曳き船に曳かれて浦賀港から姿を消した頃、（安政元年十二月二日――伊豆宮島沖沈沒）彼女等は、その、勞働者街の天邊の、船大工達の作つた新居へ移つた。

だが、をばさまの衰弱は、段々加はつていつた。彼女は、濫費至上時代の、あのア、ダ花生活のまぼろしを、絶えず囈言に言ひつゞけ、眼を醒ますと、走血つた眼ぶちを開いて、執拗な、不安な、愛撫をお吉に示すのだつた。

お吉は、彼女の爲に、また三味線と、小間物と、ちりめんの着物を買ひ求めねばならなかつた。そして、その枕許に、入念な化粧をして、例のお澄ましをして見せたり、三味線をとつて、ひとかたり、かたつて聽かせたり、時に、また、初めて、青樓の家へ天上したあの時代のやうに、をばさまの床の中へ這入つて、好い兒らしく抱かれて寢たりせねばならなかつた。

この氣紛れが、朝となく、夜なかとなく、ふと松風の音などに釣られて、をばさまの顔を訪れるのだが、お吉は、その都度、そんな風に素直に好い兒役を勤めるほかに、食事揃へとか、藥鍋の氣配りとか、その他をばさまの世話と、家うちのことを、みんな獨りで濟ませていくのだつた。

で、こんな場違ひの區域で、こんな場違ひの建築師の建てた小さな家から、清婉な三味線のひゞきと、あの船歌になつた音曲とが、ふいと眞夜半に流れて出て、まだ夜更けの小屋などの寒風に搖れてゐる間へ沁みわたつたり、かと思ふと、お吉の姿が、時節を無視した美裝に包まつて、其處にまばゆく燦いてゐたりして、町のみんなを驚嘆させた。

どこまでいつても、彼女らは唯一つある家の女主人と、その人形だつたのだ！

をばさまは、骨と皮になりながら、一ケ月ほど、このやうに、彼女の命懸けの氣紛れを氣紛れて死んだ。

さうして、そこに、最後の勤勞に疲れ切つたお吉が、たつた獨り、あの透きとほるやうな眼ぶちを細くして殘つてゐた……

喪が濟んでしばらく經ち、復興の一陽氣が

盛んに彼女を招き、も一度、彼女は藝者になつた。

「陽氣市長」も「第二市長」も、もとのまゝで、それに、をばさまを亡くした彼女への同情など多少あつて、從つて、彼女の花紙袋（祝儀入れ。この海港のあの節儉ましい屯田女隊特有の持物。彼女等は特有の「身嗜み」を忘れぬ爲に、常にこれを三德と一緒に帶に入れて持つてゐるのだ）は、例に依つて、屯田女隊を壓してゐた。

然し、もうあの、彼女の爲に、客を嚴重に撮みあげた後見がゐないので、そこに當然起るべきことが、しばしば起つて來た。第一、破瓜師がちやんとゐる海港で、彼女が、そんな客に、端然とした態度を見せることは、むしろみんなが不思議に思つた位だつた。

そんな場合が、つぎつぎに重なつて來、その一つ一つの場合の執拗さを、彼女の身についた被布的な氣位で手強く撥ねつけて、夜深く戻つて來る寝床が、あの、たつた獨りの松風の聽えるあたりで――

彼女の眸に、寂しさと、もの倦さが、だんだん影を深め、熱を帶び、溜息がひとりでに洩れ、獨り言さへ、自分で自分の耳に入り、やがて、彼女は、あの津波の晩の、避難所の鶴を思ひ出す。

あの夜更けに、ひとり、默つて寒空の下で、自分の草履をつくつて呉れた男の涼しい眼を思ひ出す。このをばさまの新居を贈つて呉れた涼しい鶴の眼を思ひ出す。家の何處を見ても、あの鶴の眼が宿つてゐる……

ある晩、彼女は、山田屋の裏座敷へ、鶴を呼び出して、一緒に、吞めない酒を吞んだ。

「――かうなると」と鶴が羞かみながら、云ふのだつた。

「おれは思つてゐた……」

「いつまでも、」と幾度か逢つてるうちに、鶴が、また、ぢきに赤くなつた頰を抑へて、生眞面目に云ふのであつた。

「こんな稼業は、して貰ひたくない。」

「さうさ。鶴さん。」と彼女も頰を熱くして答へるのだつた。

「はやくやめてしまひたいと、さう思つてるよ。」

彼女は、大工町の鶴の家へ、あのをばさんがいつも彼女に感謝してる家へ、鶴の着物などを、せつせと贈りとゞけた。鶴は、律儀で、彼女の家へ、義兄達を憚つてあまり來なかつたが、彼女は、彼の眸と勤勉と忠實を信じることが出來た。また彼女は、眼の前にゐぬ彼を、すつかり見透すことが出來た。鶴もそれは同じで、さうして、そんな幸福が、二人の上に續き、いつの間にか、海港の一隅の寺に、コン四郎氏（Consul）が來て、そこの山門に、十六間の旗竿の先に、花旗を毎日飜へしてをつた。

六　種播くコン四郎氏・らしやめん

――合衆國プレシデント、吾れに、能く兩國人民の間に存する懇情を守らんが爲め、力を盡す事を命ぜり
プレシデント、吾れをして、時々新なる處置を施し、兩國人民の交際彌厚くして、互の好情を固守せしむる事を命ぜり
吾れ前條の願意を遂げずして止まざる事を得ず　日本帝國の政府に正實の懇心を表するは、我が焦思の願なり
吾れ貴君に願ふ。我が官職に應ずべき作法を以て、吾を保護せん爲め公に示諭し給はん事を――

コン四郎氏は、軍艦に乘つてこの海港へ來ると同時に、こんな手紙を、帝國日本の外國事務宰相閣下へ送つて、新任の意味と決心を

先づ表明した。
それから、彼は、自分の威厳を日本人に示す爲に、長さ六尺五寸もある長大な駕籠を特別に註文して、それに乘つて奉行所へ往來し、また、駿馬にキン〱した鞍を置いて、背中一杯、刺青のある馬丁を先に驅けさせて、遠出に出かけた。
また彼は、ドルラルの日貨換算率を協定する會議で、奉行等の提議に癇癪を起して、傍にあつた煙草盆の火入れをとつて襖に投げつけ、この上は戰爭だと豪語して、宿所の寺へ引き上げたりする。
そんなコン四郎氏が、誰そや行燈の頭を大きくしたやうな箱を、寺の庭に据ゑて、ろびんそん・くるうそうみたいに鳩を飼つてゐた。
時々食慾が減り、睡眠不足に惱むもう五十を越えた彼であつた。
彼が、ふいと、「市長」等に、小間使を抱へたいと申し込んだ。そして、彼の通譯の若いヒュウ助君が、こちらの通詞へ耳打ちをした名前が、お吉だつた。
「陽氣市長」は、この時分、もうゐなかつたが、「第二市長」はゐた。それにこの時の「第一市長」は「陽氣市長」以上に直截な仕事師で、その上また、女による懷柔策、つまり待合政策は、その頃の、こんな連中の常識でもあつたなほ惡いことは、あんなお吉で、序に、外交談判の手先に使ふことも出來る筈であつた。
そこで、「第一市長」が、早速名主と一緒に、お吉を呼びだして、命令を下した。
——花旗國領事館へ御奉公申しつける。ありがたく心得ろ。御手當は莫大だ。支度金二十五兩をすぐに下されるぞ——
——おことわり申しあげます——とお吉が、ぢきに答へた。
——お上の仰せだぞ。それを背いては爲にならぬぞ。
——いやでございます。
——亂心したな。名主預け申しつける。
「市長」らがコン四郎氏に云つた。
——あれは、どうも、遺憾ですが、よくないやうです。どうぞ、ほかのにお定め下さい。
——いや、わかりました。支度金まで、お渡しした筈ですが。まさか今度は、江戸の「Tycoon」(大君——將軍)に伺はれるわけでは無いでせうな。いや、それなら、何度もこれまでに舐めさゝれた經驗でした。兎も角、あとは[illegible]に依つて……
——あゝ、先づお待ち下さい。何とか致します。
——いつそ、お吉を切つて、首にして持つていつたらどうだ——と「市長」等の會合で、ある者が云つた。
——いや、少々考へがありますからお委せ願ひたい——と、「第二市長」がとめた。
「第二市長」が、苦勞人な烱眼を放つて、鶴を呼び出した。
——お前は出世をしたいだろ。お前を御用船大工の頭にしてやらう。名の外に姓をやらう。就ては、お吉を諭めて唐人へやつてくれ、それが、忠義で出世だ。
——恐れ入りました。
鶴が、正直にお吉を訪ねて云つた。
——お吉、おれを出世させてくれ。おれは苗字が欲しくなつた。どうぞ、唐人へいつてくれ。
——それは、お前、ほんたうに、さうお云ひ

かえ。ほんとだね。出世とわたしを釣り替へにする氣だね。好いよ、出世してお呉れ……この素ッ町人！

「第二市長」が、ある晩、伊豆よしでお吉を呼んで云つた。

——お前の氣性を見込んで、こんなに手をついて賴む。唐人へいつて呉れ。でなければ二三人切腹せねばならぬ。國の爲に、いつて唐人の機嫌をとつてくれ。斷ることは誰にも出來る。そこを辛抱していつてくれ。王昭君や常盤御前の氣持は、お前も知つてゐよう。何卒いつて、唐人を宥めてくれ。いまは日本の大事な時だから。それに、お前の鶴の出世にもなることだ——

「人形」のお吉が泣き伏した。

しばらくして、コン四郎氏のあの「領事の權勢を日本人に示す爲の」駕籠が、四人の陸尺に擔がれて、警護侍や、仲間や、手がはり等を連れて、この港町の南の端の勞働者街の天邊から、悠々と街を縱に通り拔けて、花旗の飜つてる寺へ——日本ダイ一番の領事館——へ向ふ姿が、町の人々の膽を奪つた。

その簾の巻き上つた中に、脇息に輕く片肘を載せて、伊勢物語へ眼を落してるお吉の被布姿が、ぴたりとをさまつてをつたのだ。

「お吉さんが唐人へ通ふよ。」

「唐人お吉が通る。」

そんな評判が、ぱつと立ち、毎日、日暮方になると、お吉を見る人々が、路の兩側に犇いた。

「唐人お吉！　唐人お吉！」と人々は、啖を吐くやうに、彼女を呼んだ。

あの「唐人禍」のあつた町で、呪詛の形容詞は「唐人」で澤山だつた。

餘りに騷ぎがひどくなり、お吉はコン四郎氏に賴んで、駕籠はよして、徒歩で通つた。

だが、人々は、彼女の顏を見ると、やつぱり唐人お吉と、聲をかけた。

錢湯へ出かけるとそれ、買物に出かけるとそれ、至るところ、彼女の眸に寫る人間が、みんな、彼女にその嘲笑と白眼を浴せる。それから露骨な漫罵を加へるものさへ出來て來る。

彼女は酒に親しんだ。彼女は紛々とその酒氣を散しながらコン四郎氏のところへ行つた。

だがコン四郎氏が云ふのだつた。

——そんなに酒を呑んだ日は來なくてよろしい。

それからまたコン四郎氏が云ふのだつた。

——花旗國船が入港つた時は絕對に來てはいけないよ、オキチサン！

松やアヲ木の大木のある寺。山門の右側の椿に竿頭高く花旗が飜つてゐる。左側に例ノろびんそん・くるうそう鳩小屋。その向うに佛手柑、向ひはコン四郎さんの給仕の日本少年等のゐる小舍、その裏に馬丁の藁屋がある。お吉は、この藁屋で一憩みして身仕舞をする。其處の小娘が、その間に本堂へ、コン四郎氏の都合を訊きにゆく。よければ、「あがる」。炊事部屋、供部屋などのある庫裡を右に見て、本堂の階段を上ると、左側の襖の奥の十二疊敷が、コン四郎氏の部屋だ。細い白い蠟燭がともつて、コン四郎氏は大抵、葉煙草を吸つてゐる。

眞白な髮と鬚髯。薄曇りのした茶色の眼。子供つぽい口許。中脊の小緊りにしまつたお爺さん。日本語はオキチサンだけ。

「オキチさん。此のお爺さん、あなた、風呂屋で、見初めた。はアはツはア。」と通譯のヒュウ助君が、日本語で云ふ。

お爺さんはお吉の姿を見ると早速立ち上つ

て、兩手を伸ばす。お吉は、ふいと身震ひをする。それからみんなの事を思ひ出す。

唐人お吉！ 唐人お吉！……

「あゝコン四郎さん、」とふと口に出かゝり、自分ながら吃驚する。

コン四郎氏が溜らなく憎くなることがある。また變にさうでないこともある。

彼女は、ふいとあの「をばさま」を想ひ出す。「をばさま、をばさま。」と呼んでゐたあの味が、身内のそこゝに疼き出す……

朝早く、彼女はまたあの馬丁部屋へ歸り、身扮ひして戻つて來る。それが、コン四郎氏が病氣の場合は、幾日でもつききりで介抱する。床の傍の腰掛に、緞子の帶をキチンとしめたまゝで坐つて、曾て厭な顔をしない。

コン四郎氏は、何よりも牛の乳を呑みたがつた。それを彼女が知つて、そつと人に頼んで搾つて貰ひ、切り子の筒盃に少し許り、臭いのを我慢しながら持つていつたが、その時のコン四郎氏の悦びはまるで子供だつた。

だが、結局、彼女は、朝の明るい光を浴びながら町を抜けて戻つて來ねばならぬ。あの歎のやうな嘲罵を滿身に浴びて……

それに、いつか、屯田女隊の一人が、彼女を掴へて訊いたことがある。

「姐さん、唐人は、何するときにあれだと云ふが、どう？」

だが、その時、彼女は、どうしたのか、變に助かつたやうな氣持に、カラ〳〵と笑つて云つたのだつた。

「唐人だつて人間さ！」

さうして此の偉大な眞理を發見したのは、彼女が——このをばさまの人形が——この老コン四郎氏の人形が——この時代の人形が……たつた一人あるきりだつた。

「予は、日本に在住すべく、文明國から派遣された最初の代表者だ。予は、日本の新しい秩序の初めだ。余は、日本のエポック・メイカーだ。余は、おゝ日本よ！ 余は……」と、老コン四郎氏は、あの鼠の荒れる禪寺の、燈心草の疊の上を、皮沓のまゝで、行つたり來たりしながら、ゲンコの甲を額に當てて獨語する。

どつちの手の指にも、曾て、浮いた指輪の味を知らずに、硬く皺んでる彼だ。

彼は、七日め毎に、きつと、安息日を守つて、どんなに海港の奉行が掛け合つても、その日には、まるで死灰のやうにコン四郎翁に頷つて、てんで振り向きもしない。さうして、頻に若い大中音で、切支丹のお祈りをやるのだが、彼のここ余は、余は、と、氣負つた獨白は、まあそのお祈りを丸めて、ぽん〳〵にして、始終、口に銜へてるやうなものだつた。

身長は、五呎五吋弱、體重は、百五十ポンド餘。髪も口髭も、白髪みたいに白んでるが、腰は輕敏に伸びて、どんな仕草にも、ぢゝむさいところが無い。彼は、肺活量の大きい鋭利堅人だ。彼の赤血球は、にうよるくの煤煙を、活潑に消化して、出來上つたものだ。

日本へ來る前の六年間を、彼は、WESTWARD HO！と花旗を靡した商船や軍艦の上で暮した。彼は、、い、い、えげれすの都の衢を唄つた。彼は、天竺の罌粟畑の中を歩いた。彼は、また、マニラの竹小屋の間にも住んだ。絹と茶と陶器を積んで、唐のかんとんから、さんふらんせすこへ戻つたこともある。日本渡來の直前には、しやむろの、白絹の日傘の下で、星章の封印のある國書を捧げてゐた彼だ。

彼のテノオルには、新興國民のカンが震へてゐる。彼の擧措動作には、甦つた民族の生氣が、火むらを立ててゐる。

海豹と海獺の皮を、年に三十二萬枚、帆船に積んで、東洋の市場へ押し出した民族――ハワイの白檀を、金袋へ食つてしまつた貪食民族――太平洋の鯨を、片ッ端から還銀して、一年に、千三百萬ドルラルを積みあげた若い勤勞國民――その若さ故に、隨分、無鐵砲で、侵略的で、遠慮知らずの、やんきいず……そんな祖國の、觸角の一本になつて、白頭を高らかに擧げて、いまや、日本のこの、最初の開港場へ來てゐる彼だ。

いや、それに彼には、また、あの、二世紀前の、處女地開拓者としての淸敎徒の血が、沸々とたぎつてをつた。

折り〳〵、彼は、火の消えた葉莨を、口の隅で、もぐ〳〵と廻しながら、彼の「使命」を考へる。

――あゝ、予は、如何にして、この日本を、ドルラル化すべきか!?

――あゝ、予は如何にして、この日本を、十字架へ解放すべきか!?

まつたく性質の違つたこんな二つの命題を、彼は、いかにも單利明式に、何の矛盾もなく、一緒くたに、威勢よく考へ込むのだ。

だが、どうにも、まだるつこい「日本」が、彼の前にあつた。それは、まるで、象形文字みたいに幼稚で、迷宮のやうな執拗い困惑を感じさせる。

ケンプフエルや、モンタヌスや、ヘロリその他の先輩から彼が得た知識に依ると、キリストを文字通りに踏み躙つたり、罪人を釜茹でにしたり、ハラキリ自殺の習慣を持つたりする奇怪な未開人種で、それは、むろん、豫期して來たが、さて實地に當つてみると、もつと不可解で、もつと癪に觸る國民だつた。

彼等は、刺のやうに昂然と迫つて來る。かと思ふと、僅か、四呎に三呎半ぐらゐな Kago ん中に、足も脊骨も無い軟體動物みたいに、樂々と安坐して往來する。

みんなモンゴル式な顏をしてゐて、その弱點を緩和するつもりらしく、いつぱし入念な工夫が、彼等の頭髮に凝らされてゐるのだが、あの丁髷は、あの大髻は、何と突飛で有閑な hair-dressing ではないか!

彼等は、しば〳〵、兩手で、鄭重に白紙を擴げて、顏の下半部を蔽ひ、鼻汁の排泄をやる國民だ。

彼等の刀劍には、馬來土人のそれと、そつくりの亂れ燒が見られる。しかも、彼等は、羅典民族を壓倒する程の禮儀好きだ。

實際、彼等の態度は、あんまり拵へ過ぎて、何處に心臟があるのか、見當がつかない。あんまり慇懃で、實に皮肉だ。たとへば、時々彼の事務室へ來る奉行所の上役連だが、みんな酒好きで、シェリー酒を除けたほかは、三鞭でも、キスキーでも、火酒でも、どれも生のまゝで盛んにコップを干す。さうして、當然彼等のオリーヴ色の皮膚に、アルコホルの反應がハッキリと現れるのだが、しかも、彼等は、決して、その緻密な禮儀を崩さない。それはもう、人情が、心臟を脱け出して、彼等の折り目正しいスカートの間へ住み替へしてるやうな彼等だ。

それから、彼等は、事を定める前に、恐ろしく長い思案を持つ。いや、彼が、あの、馬を買つた一件が、いつさいを物語つてゐる。

ある日、彼は、御用所で、狐と綽名のついた奉行の DEWA-NO-KAMI-SAME に逢つた(中村出羽守――安政三年下田奉行、短小狐の如し、剛硬犯すべからず、と當時の人物評に見える――作者附記)

彼は綿の厚い日本綿のクションを置いた支那[illegible]に掛けてゐた。隣りのヒュウ[illegible]も、卓の向うの、ふおつくす氏及びその部下の、第一市

長々も、天鵞絨張りの腰掛に坐つてゐた。少し離れた日本机に、書き役二人――ところで、日本の阿蘭陀通詞君は、いつものやうに、臺の側の燈心草の敷物の上に、ぢかに、蟇みたいにつく這つて、兢々と汗冷を額に浮べてをつた、

この通詞君は、他の總ての通詞君と同樣に、前世紀の死語か、でなければ、ひどくブッキッシュな、また、とても下等な單語を、恐る〳〵、兎の糞みたいに、吐き出すのが彼の役目だ。(阿蘭陀の甲比丹の奉つた國書に、一世界は愈、自由平和にて…とあつたそのふれいへいどが判らないで「大千世界彌益々我儘に成行候形勢に有之」と譯して、後代へ話柄を殘したそんな程度の通詞の一人だ――作者)

手間のかゝる用談が濟んで、日本の小姓が、足を揃つて茶を運んで來、それを啜りながら、ふと漫談式に、彼が、馬のことを云ひだした。

「馬を飼ひたいと思ふのですが、戸外運動のために。」

さう云つて、何氣なく、通詞君へ視線を移すと、彼は、相變らず、一個の奴隷が、國家の重大事件を取り次ぐと云つた風に、臺の根もとに兩手をついて、見窶らしく、頬を震はせてをつた。

「通詞君にも、腰掛を與へて下さい。」と突然、彼は、あのテノオルで叫んだ。

ふおつくす氏は、ちよいと眉を動かして、鋼鐵のやうに笑つて答へた。

「彼奴は、微祿者でござる。」

通詞君が、とても哀れに狼狽へて、やつとヒュウ助君に、それを傳へ終はると、そのまゝ、床に、鼻を擦りつけた。その樣子が、一層彼を刺激し、そこで、彼はぴいんと響く調子で、云つたのだつた。

「こんな差別待遇は、文明國には見られん。是非、彼にも、われ〳〵同樣に、腰掛を與へて下さい。」

だが、ふおつくす氏は、やつぱり、ちよいと眉を動かしたきりで、數字を讀むやうに繰り返した。

「彼は輕輩でござる。彼は身分の低き者でござる。此の席に控へるさへ、彼の名譽でござる。」

それを、いち〳〵、通詞君が、喘ぎながら、通詞るのだ。

彼は、拔けあがつた額の、白髮の根まで紅くして叫んだ。

「いやしくも、予は、Government of the people, by the people, and for the people から、(と、リンカーンの先輩らしく)選まれて、貴國へ參つた者だ。予は、花旗國の代表者として、こんな不愉快な形式を伴ふ外交談判を潔しとしない。もしどうでも、通詞君をあんな風に、犬扱ひにされるなら、これで、御免を蒙るよりほかありません。」

通詞君が、極度に困惑して、手の指まで、蒼黃いろくなつたのは云ふまでもないが、道の、ふおつくす氏も、第一市長も、この彼の亢奮を不思議さうに眺めながら、例に依つて、兎に角、黑船のまぼろしに慄へ、結局、腰掛が一つ運び出されて、問題の彼が、汗を拭き〳〵水平線へ浮びあがつた。

そこで、ふおつくす氏が、もう、また、あの特徵のある微笑を、淺黑い顏に湛へて、云つた。

「馬でしたね?」

彼も、からつとして答へるのだつた。

「さうです。どうも、戸外運動をしないと、あんな事ん中にばかりゐると、目方が毎日減つていくやうです。」

「いや、承知しました。何とか、取り計らひませう。」

「どうぞ、よろしく。」

で、その日は別れた。だが、例によつて、日本官吏の思案は、實に長く、おほかた、また、江戸の「Heco」へ、あの予は、夷敵が、予の漂流民を送つて、予の領土に來るよりも、むしろ、予の臣民の捨てられんことを望む！」と曾て彼の先輩に公言したあんな君主へ、天城越しに、馬買ひの指令を仰いでゐるのだらうと、ヒュウ助君と話してると、しばあらく經つて、その馬が、三匹、通詞君に連れられて、コン四郎館へ屆いた。

一匹は仔馬。一匹は老馬。もう一匹は、營養不良の病ひ馬。

それらが、みんな、蹄鐵でなしに、草鞋を穿いて、温和しやかに、境内の日溜りに竝んだ。

さうして、通詞君が、ふおつくす氏の代理として、背中を丸くして、實に慇懃を極めた挨拶を述べ、それに附け加へて、親愛なるふおつくす氏の、行き屆いた好意を説明して聽かせた。

「貴官は、老體であらせられます。もし、じやじや馬に乘られて、間違ひでもあつては、貴官を派遣せられた花旗國に對して、まことに申し譯のない次第です。そこで、出羽守サメは、御覽の通りの馬を選まれるために、想像以上の苦心をなさいました。どうぞ、出羽守サメの御高配を、お汲みとり下さいますやうに……」

むろん彼は、深甚な感謝と共に、三匹の中から仔馬を選んで、享け收めた。そして、暫く日を隔いて、改めて、悍馬一匹と、馬具ひと揃への購入方を、ふおつくす氏に依頼した。

そこでまた、隨分日數が經つて、こんどは、鼻腔の大きい黑鹿毛が、齒をむき出して、彼の馬小屋へ來た。

「おゝ自由よ。」と、彼は、その牝馬を、卽興的にさう呼びかけ、それから、その亞細亞式にづんぐりと据わつた首を撫でながら、滿足氣に呟いたのだつた。

「これなら、二十哩は樂だ。」(當時、外人の遊步區域は、海港を中心にして、十四哩以内に規定されてをつた)

兎に角、馬の一件は、からして終つたが、ただ最後に、御用所から、勘定書が廻つて來、そこに現れた數字が、彼を眩惑させた。

肝心の馬が、十九兩で、一ケ月の飼養料が一兩三分。さうして、附屬の馬具は、實に三十兩だつたのだ！

彼の博大な常識と、めりけん式にすばしこい算勘術をもつてしても、日本の物價の標準は、まつたく見當がつかない。

彼は、彼の菜園と花壇を作るために、百五十坪餘りの土地を借りた。その借地料が、一年にたつた二ドルラル(一兩二分)だ。彼は、日本人を五人使つてゐる。給仕が二人に、別當、馬丁、雜役夫が各一人づつで、住居と食事は、それぞれ自分持ちだが、それで、彼等の一年の給料合計が、百三十二ドルラルに過ぎない。別に彼は、支那人のコックや洗濯夫などを四人置いてゐるが、この方は、寢床と食事をこちらで持つてやつた上に、日本人のそれの約六倍を支拂つてゐるのだ。

彼が、このコン四郎館に這入つてから、半年目に、食料品や九州炭や、その他の買物の請求書が、一綴ぢになつて御用所から來た。そのシメ額を見ると、「二百八萬七千九文」と、驚くべき數字で、米貨にすると、僅に五百ドルラルに足りなかつた。

つまり、此處では、一ケ月百七十ドルラル弱で、文明國最初の代表者――花旗國のコンシュル・ゼネラールの生活が、堂々とたつていくわけだつた。

從つて、もし、こんな標準から、この太陽の根の人間と、土地とを、ドルラルに換算するなら、それは、あのナポレオンからとつた實、

流れのフロリダの如く、あゝ何と安價な買物ではないか！
　ときどき、彼は、自分の書いた大判洋紙のレポオトを眺めながら、まるでもう「日本」をポケットへ抛り込んだやうな氣になつて、そんな風に考へる。
　だが、この樂天的な胸算用は、彼の活潑な頭が、ちよいと浮氣をしただけのことで、その證據に　彼のレポオトそれ自身は、隨分鬱陶しい日本でいつぱいだつたのだ。
　第一、この人民は、人口にも產業にも、「統計」を持つてゐない。それから、もちろん新聞紙も無いし、輿論も無い。日本官吏のある者は、十字架を否定するやうに、輿論を否定した。またある者は、「山羊がまつたく存在せぬのと同樣に、そんなものは、日本には見られない。」と說明した。
　農民は　ひどく幼稚な耕作法を、默々と固執してる宿命論者だ。商人も、工業家も、いつさい「報告書」を作製しない。それに、サムライと云ふ不可解極まる階級が、その生產層の重石になつて、社會の流通を窒息させてしまつてゐる・・・
　何處へ、いつたい、氣孔を穿けたら好いのか？
何處を、いつたい、彼の、換銀王のこぶしで、叩いたら好いのか？　先づ、祝砲の說明から、先づ、國際禮儀のABCからいち／＼仕込んでかからねばならぬ厄介な、太陽の根！
　彼は、丸い腮をあげて、古びた草屋根の冠さつたコン四郎館の、格子天井を睨まへる。銀紋の散つた襖紙が、急ごしらへの洋室氣取りに、その面を蔽うてゐる。腮に、白髮が芽を出して、ずんずん伸びていくやうな氣がする――トプシ・ターヴィ日本だ。
　あの海港町の、邊鄙な賑やかさからさへも、半道ばかり、隔離病舍みたいにはなれたコン四郎館――譃つきの（談判を長びかすために）日本官吏の言葉によると、江戸へ陸、山越しに五日路ださうだし、ほんこんへは九日。さうしてさんふらんせすこは、にう・よるくは、日本の漂流民が、うやうやしく、お上へ申したてたごとく、「足のうら」の國の、飾り釦で――とにかく、文明も、人種も、社會も、何もかも、いつさいが、とほ／＼しい漁村の丘の背の、花旗の下に、この老いた唐人は、朝から晩まで、につぽんマ＝ヤの熱氣をたてながら暮してをつた。
　彼は、松の一寸板で、寢棺のやうな浴槽を作らせた。彼の部屋の紙の戸の外の、細長いヴェランダをちよいとゆくと、朽葉のつもつた、茶會場みたいな、こほろぎの聲のする木小屋が出張つてをる。それが彼の浴室で、每朝、彼は、太陽と一緒に支那絹の寢卷のまゝ、そこへ飛び込んで、この湯槽の冷水をかぶる。
　頭髮が、額に銀のより線のやうに輝き、背が、白髮ん中に、處女のやうに明紅色を點じ、さうして乾いた手拭でゴシ／＼と擦る膚には、あの若いアメリカの地圖が、薄桃いろに生々と顯れるのだ。
　彼は、老いてはならぬ。彼は、健康であらねばならぬ。彼は、五十三だ。
　彼の鳩小屋には、彩紋のまばゆい首飾りを持つたキジバトが、陽氣な太陽に上氣して、羽搏きしながら群れてゐる。彼の牝鷄は、小さな鷄冠と腮の垂肉を眞紅にして、生みの悦びを叫んでゐる。豚小屋では、舌と齒に好い小豚が、庖丁を待つて蠢いてゐるし、驢のあの「自由」は、黒い鬣を振つて、床の敷藁をしきりに叩く。
　花壇に、しやくなげ、しやくやく、ぼたん――
それに、面積以上の豐かな收穫を持つ蔬菜畑。
　彼は、金頭の杖を振つて、紺の高帽子を冠つ

て、天鵞絨襟のついた羅紗の割羽織を著て、とき〴〵、これ等の彼の所有を見て歩く。まるで、貴族の都市享樂者が、小五月蠅い田畑帖を調べに農園へ歸つたと云つた風な、そんな難かしい顏を扮つて。

彼は、未開國に、たつた一人ゐるコンシュル・ゼネラールだ。一歩、彼の部屋の、唐更紗の帷幕の外へ出たら、たとひ、コン四郎館の閣ひうちでも、それだけの身装と、それだけの威儀を、始終、備へてゐねばならぬ。

時によつて、彼は、そのまゝ、花旗の下の小さい黑い冠木門を潛つて、小刻みに積みあげた石段をくだる。それから二三町、松や檜や藁屋の間を、濱邊へ散歩に下りていくのだが、その藁屋の庇の下に、また、その樹立の隙間に、そんな場合には、きつとあの「踏ん込み」支度をした頰のこけた Yaconins の姿が、獵犬のやうに現れて、こちらを監視する。そして、ある者は、妙な笑ひを浮べて、兩手の掌を揉み、ある者は、眼をとがらして、霧のやうに消える。彼は、むろん、髭を噛んで、胸をつきだして、空を睨めて、彼等を默殺してしまふ。

曾てあのふおつくす氏は、彼の旅愁を慰めるために、日本の官吏を、コン四郎館の一部に同居させようと、例のごとく、深切な提議をした。それを、一も二もなく斷つたら、すぐに、笠を冠つた五十人許りのサムライが、コン四郎館の門前の、そちこちの藁小屋へ詰めかけた。

そこで早速嚴重な抗議を申し込むと、

「貴官を護衞するためで、別に他意はないのです。」と、ふおつくす氏が云つた。

「何のための護衞ですか？」と彼が反問した。

「浪人と云ふ不良青年に對してです。」

「おゝ、あなたの Tycoon は、そんな有力な不良青年を持つのですか？」

ふおつくす氏が、薄手な腮を据ゑて、脣を震はせながら、叫んだ。

「斷じて、そんなことは、ありません。たゞ貴官に、間違ひがあつてはと、それを懼れただけなのです。」

「いや、ありがたう。然し、御心配は御無用です。いやしくも文明國の代表者たる予の五體を護る者は、別にあります。あの護衞隊は、即刻、撤退させていたゞきませう。」

「しかし、萬一の場合、それでは、こちらの責任が濟まぬ。」

「責任!? 予は、地球上で、もつともそれを重んじる國家の代表者だ。予はむしろ、貴國の政府ならびに貴官らが、予の一身に向つて示して下さるだけの責任感を、ヘロリ條約に對して示されんことを切望する。」

「判りました。早速江戸へ通じて、なるべく御希望通りに取り計らひませう。」

「江戸へ？ 江戸へ！ それなら、予が廣東へ出かけて、東洋艦隊に乘つて、ぢかに江戸灣へ引き返す方が、手ッ取り早いではありませんか。」

で、型の通り、彼は、彼の不快なサムライ連を追つ拂ふことが出來た。彼は考へるのだつた。

――予は、まだ、五十人のスパイを、公然と、領事館の前に配置するこんな幼稚な政府を知らない！……

彼の散歩は、いつも颯爽としてゐる。彼は、孤獨や憂鬱やそのほか、漫ろな氣持に甘える散歩を持たない。彼には、默殺したり、觀察したり、自分を印象づけたりする必要が、餘りにも多くあつたから。

彼は、また、羅紗の丸帽子をいたゞき、おなじ丸羽織を著、長沓を穿いて、あの刺青の濃い肌をむき出しにした馬丁を連れ、町へ、遠乘りに出かける。

低い家並の二階から、格子うちから覗いて見える

高さを、綺らびやかなふくりんの鞍に据わつた彼の上半身が、静かに搖れながら通り過ぎる。黒い丸帽子の下に喰みだした白髪、年と共に裂れ目の縮まつた二皮眼、明るい大空に心持紅潮した顔、白狐の毛束を弓なりに懸けたやうな口髭――

彼の自由が驚覺し、馬丁が何か呟く。

彼は手綱を輕く撮んだまゝ、作り物のやうに向うを見てゐる。

嘗て彼の先輩は、大統領から、「伯爵」の肩書を貰つて、支那へ談判にいつた。彼もその「アメリカ伯爵」の如く、端然としてゐるのであつた――

だが、むろん彼は、また、一方で、この未開人種に出來るだけ接近しようと努力した。彼は、「人民」の名に依る政府の代表者だつたから。彼は、散歩の途上で出逢ふ漁夫や百姓やその他、あの役人と、サムライ以外のみなに、精一杯、親しげな片言と微笑を投げた。ところが、彼等は、腰の蝶番ひの實に滑らかに利く良民で、こちらへ、眸を向けるよりも、寧ろ彼等の頭迄しに垢づいた首筋を現して、敬意を示す方が多かつた。それから、ある者は、何か懼へた氣配を殘して、ふいと彼の前から消えたし、ある者は、露骨な音と一緒に、板戸の中へ隠れた。たゞ、彼に近づいて來るのは、小さな慾を持つ子供だけで、それも、彼の足もとから銅錢を拾ひとると、すばやく何處かへ去つてしまふ。さうして、白々とした路が、いつも素氣なく彼の前につゞいてをつた。

こんな「公人の散歩」が濟むと、彼は、日によつて、奉行所を訪問したり、でなければ、彼の、カーテンの外の事務室、つまり、本堂の正面の、須彌壇も燈明も聯も、和尚と一緒に抛り出してしまつたあとへ、なめし皮色の事務机や卓子、それに、がつちりとした椅子などが、いかにも前世紀のフレガット軍艦の艦載品らしく、素朴な光澤を帯んで疊の上に竝んでる薄暗い部屋で――そこへ出て、向うのカーテンから出て來たヒュウ助君と二人きりで、お互の碧眼を暖めあひながら、總領事の事務をとる。

ヘロリが、日本の戸を開いた、と、定説になつてゐるが、それは、むしろ、武人式に打ち破つたと云つた方がよく、その戸を繕つて、そこバネに、彼一流の文明主義の油をさすのが、老コン門郎氏の仕事であつた。だから、貿易も、居留民も、まだこれからで、本國船の入港は、滿月よりずつと稀だし、むろん、軍艦も來ない。請訓のしやうもない。それに、持つて來た國書さへ、日本の執拗い愚さゆゑに、まだこのコン四郎館に置いてあるのだ。

彼は鵞ペンを握つて、彼の手控へや、ヒュウ助君の談判筆記などをもとにして、レポオトを作る。それから、奉行への打合せの手紙を書いたりすると、あとは、コン門郎館の罫紙の問題だけで、それは、大抵、ヒュウ助君の扱ひだし、そこで、また、彼は、彼のカーテンの中へ引き返して、こんどは給仕の竹三少年を呼んで、しばらく、實物教育式な、日本語の練習をやる。

彼は、それに、うつてつけな國民性と生れつきを持つてゐる。彼は、羞んでる給仕の腕を掴んで、その十二疊敷の部屋ん中を、ぐる／＼と廻る。そして、日本市場で買物をするやうに、花瓶や燭臺を指さしたり、また、部屋の間の戸襖とか、奥の六疊の寢室とか、仕切りの襖を叩いたりなどして、いち／＼、給仕について、HANAIKE, FUSUMA などゝ怒鳴つて歩く。部屋が濟むと、そのまゝ給仕を引張つて、明り障子の外の緣側へ出、そこで、手近の樹や石ぼとけなどを怒鳴つてしまひ、それから、最後に、片手を挙げて、鼻のさきに盛り上つた高

見を指さす。

「はか。」と、教師の竹三給仕が叫ぶ。

「ニンーテン」と、彼は、急に聲を落して、そちらを見凝める。

あのヘロリが殘していつた、十字架を刻んだ、水兵の石碑が、そこに、西日に染まつて、雜草の上に見えてをるのだ。

彼は、默々と、肘掛椅子に戻る。彼は、手を振つて給仕を退げる。

「ニンーテン！ ニンーテン！」――

この犧牲の表徴が、傑のにつぽんマニヤを、彼の心頭に燃えあがらせる。その、思念の火照りを眼ぶちに浮べて、彼は、ぢいつと椅子に沈む――

そのうちに、部屋の薄明りが薄れ、遂に、ヒュウ助君が領事旗をおろす氣配がし、太陽のまつたく落ちた侘しさが迫つて來る。彼は、からだを起して、まほかにの卓子に兩肘をかけて、獨りきりの部屋を見廻して、いちんちぢうで初めて、大きな溜息を洩らす。

彼が、公人コン四郎氏から、一個のタウンゼンド・ハリスに還る特りめが來たのだ。

彼は、何よりも、この瞬間を懼れる。この替りめに生きる氣持の隙を[illegible]度する。それは、彼の、サタンの棲家だ。それを退治てしまはねば、彼は、彼の「使命」を果すことが出來ない。

だが、彼の白髮の當然に持つ回想と、それから、しみじみとした距離の感じが、そんな彼には無頓着に、ずんずん彼の頭を占領する。

彼は、緊く噛みしめた口を、いつの間にか、子供のやうに開けて、耳を欹ててゐる。あの岩山に、賑やかな星條旗船の入港つた合圖の狼煙が、いまにも聽えるのではあるまいか！ 匂ひのうつるやうな新聞紙と、舌觸りの好い牛肉と、若々しい掌を持つた「人間」を、みんな山のやうに盛りあげて、揚々と入港する星條旗船！……

「いかん。これはいかん！」と彼は、恰も、日本官吏に向つて談じつけるやうに、白麻の襯衣が倒三角に現れた胸を、ぐつと反らし、それから、白髭を震はして怒鳴る。

「亞深（支那下僕の名）！ ランプ！ 亞・深！」

亞深は、然し、事務室とヒュウ助君の部屋を距いて、つまり、この本堂とは別棟の、青莚を敷いた庫裡にゐるのだ。誰も、返事をしない。

彼も、まるで、ひとりでに聲が發したと云つた風に、その「アメリカ伯爵」式に、胸をつき出したまゝで、頭髮から肩へ、障子の薄ら明りを纏うて、それつきり、ぢつと口を緘む。

鍍金の剝げたぼんぼん置時計、秋の草花を挿り込んだ切り子の花瓶、トメ金のついた皮表紙の聖書、紫ガラスの燭、綺模樣のある煙草罐、そのほか、ふだん彼に親しんでるいつさいのものが、いまや、全然彼の愛撫の外に立つて、仄暗く、彼の孤獨を眺めてゐる。

いや、たつた一つ、ふと、この瞬間に、彼の眸を捉へて、彼の注意を獨占してしまつたものがあつた。それは、季節外れの埃を浴びて、部屋に附屬した板の間に、とぽんと忘れられた、秋のストーヴ！

彼が、軍船から此の寺へ移つた頃は、毎日、寢室に、鷹を描いた紗の日本蚊帳を吊つてゐた。それが要らん風が吹き、彼は、この板の間の壁の一ケ處に、煙突孔を穿つた石を嵌めさせた。

そこから、いま、煙みたいな夕明りが射してゐるのだ。その下の、影の淀みに、煙突のとり付け口や焚き口が凝り凝りと錆びた鐵のこのストーヴが、朦朧と姿を現して、彼に呼びかけるのだ。

彼は、だんだん、また、背中をこごめ、そつと卓子に兩肘をついて、冷たい指さきを縮らせる。

あかあかと焚き火の焰が、その古いストーヴか

ら燃えあがる。つゞいて、榾木のハゼる音が、陽氣に、小刻みに、耳をうつ。と共に、爐邊的な回想の旋律が、一瞬間、鋭い餘韻を殘して彼の眼の前を流れ去る。ちやうど、人が、臨終のひとときに、彼の一生の全體を想ひ出すやうに。ちやうどまた、無數の小さな妖精の列が、てんでに不思議な踊りをおどりながら、ふいと、夢を掠めて通るやうに――

彼は、何の飾りもない皺のよつた、毛のひしやげた兩手の指を、かつきと組み合せて、力無く、瞼を閉ぢる。

彼は、さんでい・ひるや、にう・よるくで、文字通りの肉親團欒を味つた。然し、それは、常に、兩親や、兄や、兄の一族と共にしたそれで、彼自身のファイヤ・サイドは、曾て持つたことが無かつた。彼のミスAが、ミシズBになつた爲だと、そんな評判が立つたり、また、彼の理想のあんまりな高さ故に、そちらへの機會を永遠にとり逃したとさう考へる者もあつた。どちらにせよ、彼が、人生に、一つ大きな忘れ物をしてゐたことは確かだ……

だが、彼は、たちまちに、ぱつと眸を見開いて、その、まぼろしの消えた「秋の古ストーヴ」を睨み据ゑながら呟くのだつた。

「これあいかん。こんなこつちやいかん。」

それから、皮沓で、どしんと疊を踏み鳴らして、例の聲をしぼる。

「亞深! ランプ! ランプ! 亞ア深!」

こんどは、これを取次ぐヒュウ助君の聲が木魂のやうに、向うの部屋に聽え、やがてランプの眞鍮の柄を握つた亞深の、顴骨のとがつた、辮髪を鉢卷にした顔が、カーテンの切れ目に現れる。

「まだ五分ほど早うございますが、點火しませうか?」

「五分?」と、亢奮の餘韻の殘つた聲で叫び、戸棚の上の置き時計を見て、

「あゝ……間違ひ。間違ひ。いつもの時間でよろしい。大事な石油だ。」

で、亞深は、その臺ランプを卓上にそつと置いて、いつてしまふ。

彼は、立ちあがつて、もう一度反抗的に肩をそびやかして、もう灰色になつた部屋ん中を歩き廻る。

五分はぢきに經つて、この、障子とカーテンに挾まつたお寺の本堂の妙な部屋に、臺ランプと燭がともされる――やがて、あゝ、お吉の姿が現れる。

人生に、重大な忘れ物をして來たこんな老コン四郎氏に、氏らしく

――コノ米國人種ノ女ハ、こーかさす人ノヤウナ情ヲ持ツ――

と、そんな「科學的」な發見を、先づ徹底的にさせた唐人お吉か……

お吉は、ほとんど一昔前に、あの坂下の草家から、をばさま、青樹の家へ、「天上の亢奮」を味つた。あれは、善かれ惡かれ、大きな階級的飛躍を意味した。しかし、現在の彼女は、何と云つたら好いか?

彼女が、毎月、奉行所の手を經て受けとる金は、幕府の大奥の一流女官のそれに六倍したし、彼女が駕籠で通つた時、奉行所から差し廻された人數などの格式は、殆ど男爵級の旗本以上に相當してゐた。さうして、彼女の勤めは、あの海港の六錢二厘五毛級の、屯田女隊に勞働としたお抱への、通ひの、らしやめんだ。

現在から三年後には、江戸に集つた各國公使連やその屬官達が、ほとんどみんな、てんでのらしやめん(横濱屯田女郎)を持ち「らしやめん番附」に、「南國人民ノ閒ニ存スル戀情ヲ守」――老コン四郎氏の言葉――つた證跡を

留めてゐるが、お吉の場合は、まつたく違ふ。
　彼女は、たとへば、あのヘロリが、二年前に持つて來て、試驗して見せたテレガラフや小火輪車のやうに、日本に最初の、唯一つの社會的存在で、どの階級にも屬せず、從つて、それだけに寂しい惱みを持つてをつた。
　おゝ、コン四郎氏よ、氏は、この點でも、たしかに、「日本の新秩序の初め」だつた！
　實際、これまで、いつさいの環境を無造作に消化して、それ〴〵の場合に、眩耀しいほど花咲いて來たお吉だつたが、コン四郎館とコン四郎氏とは、さう簡單にはいかなかつた。これまでは、をばさまや、町や、時代の手に依つて、水に投げ込まれると、氷になつて、その都度、周圍の禮讃を獨占した。だが今度は、彼女は、火に拋り込まれて――灰になるかも知れない。
　ひと足、コン四郎館の冠木門を潜ると、彼女は、まるで「犬の毛を逆さに撫でたやうな」惡臭にうたれる。さうして、老コン四郎氏の傍へ寄ると、「蟲が脊骨を下る」やうな、人種的の惡感に震へるのだ。それに、第一、疊の上を沓で歩く生活が、彼女のこれまでのいつさいの生活基準を、根柢からぶつ毀してしまふ。曾て、彼女は、をばさまのあの、ちりめん磨きの沓脱のある家で、折紙のやうな禮儀を學んだ。いまは、彼女は、棒の如く裾寒くあらねばならない。さうして、寢部屋だが、――つまり老コン四郎氏の居間のあのFUSHUMAの奥……彼女がつゝましく坐つて、天と地と人に、花を扮るであらう床の間に、うつしすたんどの手水臺が載つかつてるのは、まあ好いとして、壁に寄せた鐵の柱と木の臺の寢床――それも好いとして、その下に、繧繝緣の疊の上に、綺麗らしく置いてあるあの西洋瀨戸の蓋物――それが、ちやんぶるぽつとの尿瓶とは！　此處は、もと、和尚さまの居間だつた。
　もし、コン四郎氏が、「日本人のアルコホル漬」の積りで、お吉を、阿墨利加へ持つていくなら、たちまちに、天稟を振つて、にう・よるくも、さんふらんせすこも、阿墨利加をみんな、消化して、ある種の華々しい存在となる筈の彼女だが、いまの彼女は、につぽん最初の和洋生活者で、その二つの生活様式が、彼女の内に、無慚に分裂して、彼女の足を拘び、彼女の頭の溜息を絞りとるのだつた。彼女には、あの坂下の、松風のかげに、丸窓を持つ板塀の家が、コン四郎館と共に、常にあつた。をばさまの、ひつしの氣紛れの沁みついた家――鶴の、涼しい眼を宿した家……をばさまには、しばらく前に、みそはぎの水を手向けたし、鶴は、それ以前に、彼女を棄てて「苗字」を貰ひに、江戸へ發つてしまつた――孤獨の凝つた家だ。
　この惱みの上に、ヘロリ以來、「唐人鷗」の海嘯を越えて、ずつと、町の陽氣のシムボルにされ續けて來た彼女で、從つて、彼女は、そんな目標を失つた町の失望と、反感と侮蔑とを、當然、引背負はねばならなかつた。
　海嘯でいつぺん消えてしまつた町は、持前の、先祖累代式な、潛勢力を揮つて、もう港と街道通りに建ち揃ひ、藁の具足も、石と土の鎧も新しく、例の如く、脊低く蹲つてをつた。そのどの一軒からも、いまや、冷たさと憤りが、彼女へ迫つて來るのだ。
　まるで、地獄へ墮ちた亢奮のうちに、彼女は、百五十ポンドのコン四郎氏を包んだ支那絹の寢卷の火照りを感じた。
　「コン四郎は、いま、日本の死命を制してる男だから……」と、さう云つた意味のことを、かうなる前に、海港の第二市長から聞かされ、それに、鶴を失つた諦めと、持前の素直な勤労精神とか

ら、彼女は、初めのうち、文字通り夢中で、この地獄のコン四郎館へ通つた。
　あの、コン四郎氏特製の、壯大な、「アメリカ伯爵」式な乘物を、町の騒ぎの大きさゆゑに、一週間ばかりで廢してからは、コン四郎館詰の「五十人のスパイ」組から來る迎へも、自分から斷つて、獨り町の眼を浴びながら、徒歩で通つた。
　その時分は、老コン四郎氏と、フシユマの内の、紫ガラスの燭の灯ん中へ、二人つきりで籠ると、グロテスクな、まるで、惡夢のやうなテタ・テトで――
　舌ツ足らずな、重みのある聲か、唾の滲んだ唇を洩れて、にぶく彼女の開花耳に震へ
「おんどる・しよるつ――い、い、――つろーわるす――しい、い、い、とつけん……」などと、皺んだ大きな指さきが、自分の胸から下へ、そんな實語經式な、教授を獨白したりする。
　床の側へひきつけた小卓の上の、保命酒の徳利と切り子のグラスを遠えて、火氣のやうな息が、ぽつと彼女の高島田の上へ、吹きつけることがある。
　兩手の掌が、巨大な鳥の足さきみたいに、彼女の肩を掴んで、太い白髭が眼近く來、やがて、くるりとあちら向かせ、彼女の領脚に吸り聲が立ち、それから、彼女のしなやかな指が、燭の傍で、彼の眼と手と髭に、さんざ弄られる……
　完全に沒表情な勤勞意識で、彼女は、いつさいの勤めをつとめる。
　彼女は、シングル・ベッドの、亂れた毛布と白布を整へて、彼の首もとまで着せる。彼女は小卓の上を片づける。彼女は、彼の上襦袢や肌襦袢や首卷や、その他の濯ぎもの、繕ひものなどを、ちゑすとおふづろーわるすからとりだして、彼女の締めた緞子の帶の脇に抱へる。片手に、汚れたグラス二つと保命酒の徳利を載せた木の盆。
　白髮と白髭の間の皮膚が、點々と紅潮した彼の首が、ふいと「アメリカ伯爵」になつて、傲然とうなづく。彼女は、枕もとの燭を消して須彌壇の方へ通じる唐紙を明けて出、闇い板の間を上草履で渡つて、つき當りの唐紙の中へ這入る。
　行燈のともつた日本間。彼女は、汚れものを庫裡への通じ口へ片寄せて置く。彼女は、隅の机の上から記帳と半紙綴ちの覺え帳を持ち出して、仕立屋へ出す縫ひものや仕立直し――頭巾、襦袢、下穿引などを書きとめる……
　やがて、空間を一定の方向へすうと流れて行く物體のやうな、形のきまつた、だが、心の淡い、そんな感じの、彼女の寢姿を、朝まで、この部屋に、われ／＼に見出す――
　やはり、こんな默劇時代の、ある、日の出前のこと。
　彼女は、ふとこのコン四郎館の、本堂の前の庭に、何かしら不安な氣配を感じて眼を醒ました。濕つた跫音が、四五人入りまじつて聽え、話聲が低くし、ちよいとしいんとなつたと思ふと、ふいに、悲調の籠つた牛の啼き聲が、ひところ、餘韻をひいて消えた。それから、急に、何か充ぶつた氣配が、太陽の昇る頃まで、庫裡と庭の間に、つゞいた。
　その朝、歸りがけに、彼女が庭を見ると、片傍の露のキラめいた佛手柑の下に、赤黑いものがいちめんに地べたにこびりつき、そちこちに毛屑が散り、それを馬丁が箒で掃いてゐた。
―やつたあ―と、彼は、刺青の濃い手で斧を打ち下す眞似をした。
　そして、そつと顔を寄せて來て
―大將、食つちやふんだよ―と、本堂を指さしながら、彼女に囁いた。

彼女は、眼ぶちに薄く着味の滲んだ眼を、仰向けて、弱々しく微笑んだ。ろびんそん・くるうそう鳩小屋をたつたキジ鳩が、門わきの椿に縛りつけた高い花旗と共に、空に輝いてをつた――

同じ朝。

冠木門の石段を下りて、彼女は、樹立と、藁家の間を、いつものやうに、まつすぐに向うを見て歸つてゆく。

「やあ、御苦勞。」と樹立の間の藁家から聲がひびく。

例の「スパイ組」の一人だ。そんな風に、皮肉でなしに、彼女へ呼びかける者は、いまの彼女には、この連中位のものだつた。

それから五六間いつた時、ふいと、彼女が顏を震はせた。そこの一軒に、表の刎ね緣にまで、こんな時刻に、人が寄つてゐた。低い讀經の聲が、その闇い家ん中から聽える。死人のあつた家だ。

彼女は、そこに寄つた人々の顏が、いつせいに、こちらへ振り向いたのを感じた。

「ほんとに、葬式も、出せない!」と、いつものやうに、喉のやうな調子が、彼女へ飛んで來た。

彼女は、花旗の下に群れてる藁家に、そんな陰鬱な不平の鬱積してることを知つてゐた。和尚は須彌壇と一緒に隱居所へ移つてゐるんだし、壇家の墓は、コン四郎館の圍ひ內で、唐人の穢れを浴びてをつた。だから、彼等の家には、骨壺が、いつまでも迷つてゐ、土葬の棺桶は、彼等の菜園のひと隅に、始終不安を訴へてゐたのだ。

彼女は、少し眼を俯せ、忙ぎ足に濱へ出た。そこから、町の入口の渡船場までは、あの岩山の下の濱沿ひの小徑で、彼女は、たゞ――青い島の散つた海を見ていけばよかつた。

やがて、彼女は、あのをばさまに手を曳かれて、「賤しい、怖い、惡い」人々の街を避けて、散步に來た思ひ出のある砂濱へ來る。

それから、町の前觸れの、渡船場だ。

で、町――北の端から、南の端の、大工町の天邊にある彼女の丸窓の家まで――白眼の冷々と充滿した街。

その町を、今朝は、いつものやうでなく、彼布の肩をすぼめて、殆とんど小走りに家へ戻つた。さうして、肌のものも何も、身につけたものは、いつさい、抛り出して、とり換へてしまひ、頭も、潰して束ね、それから、もつとコン四郎氏を落すために、錢湯へ出かけようとして、ふいと、二三日前、其處で、屯田繁存が、彼女に笑ひながら言つた言葉を思ひ出した。

「お吉さん。お瘦せなすつたね。」

それは、この海港の凡ての女が、唐人に向つて持つ迷信を、代辯した言葉だつた。

彼女は、勝手もとに立つたまゝ、つゞけざまに、茶碗酒をあふつた。で、ふらふらと、裏口から、隣りの、素枯れた姉の家の土間を表へ出、坂を下へ、湯道具を抱へて、よろめきながら、下りていつた……

この彼女の「墮獄の亢奮」時代には、コン四郎氏は、彼女にとつては、たゞ臭い、眼の窪んだ、どれを見ても一緖の、唐人でしかなかつた。

だが、そんな亢奮のうちにも、彼女は、いつの間にか、無意識に彼女の明鳥のやうに、彼女のえげれす語を呑み込んでしまつた。さうして、それが、次第に、彼女の亢奮を靜もらせ、彼女の唐人意識を解し、そしてまたコン四郎氏のうちに、幾分かの人間を認めさせた。

彼女は、彼の白子のやうな手の指の運動にも、何か「表情」の潛んでることを知つたし、また、彼のどろんと濁つた眼にも、それを感知するこ

とが出來た。隨分ぶつきらぼうな、彼の手足の動きにも、何處かに細かい氣持が籠つてるやうな氣さへするのだつた。

それに、あゝした勤勞癖を持つ彼女で、從つて、この彼への理解は、そのまゝ、むしろ、幾倍かに、彼へひどいていき、その結果が、また、彼女に本魂して、そしてそこに、妙な二人の氣持を釀しだした

人生に、大きな忘れ物をした彼と、「唐人」お吉!

ある夜、彼女は、皮椅子の背に脱ぎかけてある彼の富羽織を始末しようとして、ふと、その牡丹の穴に、桃色の雛菊が挿さつてるのを見た。

それを、そつと撮みあげて、ベッドの老コン四郎氏の眼の先へ持つていくと

「おう!」と上機嫌に微笑み、床ん中から手を出して、それを彼女の指ごと握つて、彼の白髭にこすりつけ

「これは、アメリカでは、獨り者が戀愛に成功した時に、ボタンの穴に插し込む。」と云ひ、さて、一層紅々と笑つて、その、説明の英語を彼女に呑みこまさうと、一語々々始めかけたのだが、どうしたのか、ふいと、花も、彼女の指も、つゝ放して、ぎゆつと髭を噛み、いつもの合圖の右手を大きく振つた。

「去け!」……

彼女は、汚れ物を持つて、紫ガラスの燭を消して、[illegible]かに明けて、[illegible]の夜の闇を透つて、向うの行燈の部屋へ、だが、其處へ這入ると、急に、よろけ、ヰスキーも保命酒も[illegible]に注がれ、そん中へ、グラスが二つ轉がつた――彼女は、醉つ拂つてをつた……

彼女が、あの牛乳を、そつと搾らせて――それは、指の尖へ滴らすと、すうと三日月型に彫れちゞまる、もつとも生の牛乳で、もしかすると、日本最初の、搾乳かも知れない――五勺ほど切り子のいむぶろるに入れてすゝめて、老コン四郎氏を悦ばせたのも、以上のやうな氣持からで、コン四郎氏は、その返禮に、二十個の琥珀の玉を縒り絲で繋いだのを、そつと、彼女の、首にかけた。

だが、老コン四郎氏は、常に、「アメリカ伯爵」だつたし、お吉は、ます／＼酒に親しんだ……

恰度、コン四郎氏が、あの、古ストーヴのまぼろしに、感慨を深めた時分のこと――

海港に、熱病が流行し、そちこちの低い藁家や土藏家が陰慘な呻き聲を吐いてゐた。

家々の一[illegible]が、瀬戸に太陽と風に反抗し、小川は、常に濯ぎ場と食器洗ひ場を兼ねてゐる、そ云つた開港場で、從つて、かうした熱病の場合にも、それ相當の陰氣な治療法が、町の人々によつて實行された

で、此の場合――

紺家の庇の下に、[illegible]の火がチロ／＼と燃え、その煙の流に、[illegible]のところ[illegible]、罹患した患者が、眼と鼻と、背を氣味惡く際立たせて、呻いて居つた。土藏家の鉤口に開いた庇の下には、そんな病人を取巻いて集つた人々の、手から手へ、大きな、くろずんだ、珠數の球が、鈍く動いてゐた―出來たての、白木の棺桶を載せた荷車が、街を通る、喉り泣きの聲が、ひどく、海港の生命の船宿や、料亭の騒ぎさへ、途絶え勝ちに低まり、氣紛れな馬鹿騒ぎは、却つてそれだけ、町に鬱陶しさを加へる。

そ云つた雰圍氣に包まれた街を、お吉の、海港獨歩の綺羅びやかな被布姿が、ふら／＼と、醉歩を踏んで唐人館へ、通つてゆく。

病人は、張り裂けるほど瞼を開いて、彼女へ喘ぎしりする、百萬遍の珠數が、だらりと動きを留め、人々が、いつせいに彼女を睨まへる。

「唐人お吉！」

彼女は、手をだらりと垂れ、脱げかゝる葡萄緒を、踏み締め、濕大なあの烏睛を向うの夕空に注ぎ、きりつと脣を噛みしめて、よろけながら渡船場へ――

そんなある夜。

コン四郎館の灯の無い本堂――

左右に黒く垂れたカーテンの内らのランプの灯が、天井に映り、何本かの太い圓柱の首を、黄いろく半圓筒狀に浮きあがらせてゐる。

多分、コン四郎氏は、譃つきの日本官吏の操縦策でも練つてゐるのであらう。多分、ヒュウ助君は、日本通詞の阿蘭陀文に頭を捻つてゐるのであらう。しばらく、しんと靜まり、やがて、皮沓で、燈心草の敷物を、小刻みに踏む音が、左手のカーテンのうちにし、つゞいて

「オキチサン！」と、例のテノオルが、心持低く亂れた調子でひゞく。

右手の奥の、控室の唐紙が、すうと明き、お吉のあの姿が、行燈の灯を負うて現れる。

と同時に、左手のカーテンの一部が撥ね返り、老コン四郎氏が上半身をつき出す。

「オ・キ・チ・サン。」

「はい。たゞいま。」とお吉が、須彌壇の板敷の途中の闇がりん中から答へる。

「お・い・で・な・さ・い。お・い…．（Come here, my dear.）」

コン四郎氏の右腕が、すつと闇へ伸びて、闇ん中で、掌を上向きに、指さきを捲き返らせる。まるで、犬を呼ぶやうに！――お吉には見えない。

彼女の姿が、事務室を斜にそちらへ、上沓の音を摩つて、近づいていき、ふいと、椅子に躓いて倒れる。

「ばア！」

コン四郎氏の姿が、駈け寄つて、彼女を抱きあげる。

「また醉つてる！　オキチサン！」

「えい、コン四郎さん。」

「いかん！　いかん！　醉つて來ちや！　レディが、そんな、醉拂つて道を歩くなんぞ！　いかん！　いけない。今日は、歸りなさい。お歸り！去ね！」

「はい。コン四郎さん。」

彼女は、立ちあがつて裾を整へ、お辭儀をして、いま出て來た控への間へ、靜かにひき返す。

老コン四郎氏も、俯向き加減に、もとのカーテンへいき、そこに立ち止まつて、そちらを注視する。

お吉は、腰を屈めて、唐紙をあけ、上沓を揃へて脱ぎ、こちらへ膝まづいて、そのまゝすうと唐紙を閉ぢる。

老コン四郎氏が、さつと、カーテンの中へ消える。大跨に歩く跫音…．

さて、もし、われ／＼が、控への間の唐紙を、この瞬間に、開けるなら、われ／＼は、お吉が、心持亂れた足どりで、彼女のあの濯ぎ物や繕ひものなどの覺え帖と硯箱をとりに、部屋の一隅へ動いてゆく姿を、見たであらう。

もしまた、引き返して、カーテンの中を覗くなら、そこに、われ／＼は、寂しい「アメリカ伯母」が、聖書を片手で掴んだまゝ、ランプの傍に立つて、ぼうと天井を仰いでる姿を發見したであらう…

時の敗者 唐人お吉

はじめに（原本序文）

この作は、昭和四年六月二十八日から、おなじ十月五日まで、東京朝日新聞夕刊紙上に連載したもので、作者は、その豫告に於て、こんな風に、その意圖を說明した。

――顏も、聲も、姿も、氣質のいつさいが、あまりにも卓越してゐた爲に、社會と時代の壓力にひしがれて、草の花の消くやうに消えていつた一人の女の半生を展開してみたいと思ひます。十九世紀の後半、安政から明治へ、慌しい時世粧の中を、下田や横濱など、輝かしい街で、時代に反抗しつゞけて、遂に滅んだあの、唐人お吉の後半生を描くつもりです。一片の昔物語が、昔物語に終らなかつたら、作者は大滿足です――

ところが、書き進んで、漸くこの本の卷末に及んだころ、世のお吉熱に煩はされること頻りで、たとへば――

下田の「お吉のツバメ」の春水さんから手紙が來る。高貴の方が下田へみえたが、そのお付きの方々は、みんな、お吉の愛讀者のお吉黨だつた、知己は天下に充ちてゐるから、しつかりしろとある。明治文化研究會からは、お吉講演の命令が來る。もと國際通信員で、亞米利加のアトランティック・マンスリ誌等の寄稿家の、バーシ・ノエル君が、この稿英譯の打合せの手紙を寄來す。芝居の人が來る。映畫の人が來る。出版關係の人々が現れる。もつとも苦笑すべきことには、新橋と下谷の校書が、突如、茅屋の寒夢をおどろかせる。

それから、お吉關係の、新しい史料が、次から次へ、僕の身邊を埋めてゆく――お吉の使つた盃洗――お吉の豬口臺――お吉の大盃――お吉に生き寫しだと云はれた女の幻燈繪――お吉の短冊――露艦ディアナ號のベル……それから、新しく生れた下田土產のお吉人形、エト・セテラ……

いち〳〵迎接に暇が無いほどで、その都度、僕は、歡喜し、憂憤し、焦慮し、鏤骨して、稿を追うたが、ある時、ふとその切り抜きを讀み返して見て、つく〴〵と嘆息したのであつた。

――あゝ、まだ領事館の閉鎖にまでも達しない。この調子で、明治二十三年お吉が五十の春に、お吉ケ淵へ投身するまでを描いていつたら、恐らくは、作者の僕もその間に鬢髮の寂しさを覺えるであらう。

で、僕は、ひと先づこの末日の章を終るを俟つてペンを洗ひ、他は近日、想を改めて、續篇として、東朝紙夕刊にふたゝび連載すべく決意した。

從つてこの書は――時代の指頭に撮まれて、しきりに世を戀ひ、人を懷しむ、孤獨な彼女の姿のみを收めて、世に出ることとなつた。

本の背文字は、僕の魂の恩師、松浦一先生に書いていたゞいた。插繪と裝幀は、お吉を描いては、恐らく斯界の第一人者である木村莊八氏の高配を煩した。併せ記し

て、感謝の微意を捧げる。

昭和五年二月　　著者

薄月の章

一

安政五年のある夕方、柿崎村の亞米利加領事館から、下田道を半分ほど來た砂濱に、男が五六人、ほの暗く、蹄鐵形に立ち並んで、地べたを見おろしてゐた。

みぎはづたひに三四町むかうの、黒船見張番所の紙障子に、油燈の燈がぢいつとしみだして、空とほく薄月――とぼけたほとゝぎす…

「己あまた、くぢらが上陸つたと思つた。」と、ふんどしひとつの漁師が、厚い脣の間でつぶやいた。

「己あ、てつきり、時化の浮き荷が來たときめてゐたんだ。」と、漁師の乙が、傍を向いて、白い唾を吐いた。

「あは、あは、」と、その隣の、シロ眼のチカチカする石運びが、ざんざら笠（すげの苦力笠）の下から、空腹じい笑ひ聲を漏らして「こいつを見ちあ…」と、そのセピヤ色のしわんだ人差指で、忌々しさうに地べたをゆびさしながら、なにかまたせゝら笑つた。

うしろに夏草ひとむら。それを越えて、村と町との往還の上に、四百尺ばかり、岩山が黒く盛りあがつてゐる。その膚を、毎日、汗みづくに削つて、品川の六番お臺場の割栗石にと積みだすのが、日當二百文のこの人足の仕事だ。

と、こんどは、そのまた隣にゐた町の呉服屋の手代が、ぼうと前へこゞみかゝつて、つくづくと嘆聲をあげた。

「まるで、これあ、人魚だ！」

…だが、結局みんな冷々と立つてるきりで、問題の對象物へ手をださうとする者はなかつた。

みんなのそんな態度に釣られて、しばらく、默々と地べたを見つめてゐた若い浪人が、たうとう朴齒を砂にジリ／＼と喰ひこませて、苛立たしさを抑へながら、手代へ呼びかけた。

「町人。」

「へ。」

「これあ、どうした婦人だ？」

「え？…あの、この、此女でございますか？」

「この女子は、この婦人は、いつたい、どうしたと申すのだ？」

浪人のその、かんの震へた眸の尖に、漁師や人足の、冷たい澱み笑ひを宿した顔がチラと動いた。浪人は――伊豆ノ人ハ心ワルシ――と古い文章の破片を想ひだして、もう一ぺん手代を睨まへた。

「へい、へい…これは、あれ、あの、」と、手代が、逃げるやうに、上體をくねらせて、片手を、黒船見張番所の向うの、松や椿の黒ずんだ小高いあたりへ擧げた。

亞米利加領事館の花旗が、そこの天空に、薄月の上に、飜つてをつた。

「彼處のコン四郎さん（Consul）のらしやめんなんで…」

「なに。コン四郎さん!?」

「へい、その、異人の…」

「唐人の妾か！」

浪人は、さう吐きだすやうに、砂の上に立つて、ふいと、みんなに背を向けて、大またに、道の方へ歩きだした。

「ふん。」と、みんなが、いちやうに、鼻を鳴らして、ゆつくりと、その足もとの、ちりめん單衣に包まつた――髪を高島田に結つた――ぶだ

う緒の雪駄を穿いた——さうして、船蟲のはひかゝるのも知らずに、醉氣を吐きながら、砂の上に、死人のやうに眠つてゐる唐人お吉の周りに、腰をおとした。

二

よひ暗の手もと明りの中に、お吉らしい仰臥姿が、かつきりと浮かんでゐた。

髪や眉の生え際には、品のいゝ青味が霞んで、淨らかなまぶたや小鼻や、掌には、ほのかな紅らみがにじんでをつた。皮膚はもとより、衣裳の生地にも、履物のぶだう緒にも、晝間の外光がそのまゝ、いつまでも溜まつてるやうで……

男らが、てんでに、毛のみだらに生えたふくらはぎをふくらませて、その彼女のまはりにしやがんでゐた。

夜の迫つた氣配が、しん/\と彼らにはたらきかけて來て、みんなまるで梅雨時の太陽のやうに、むつと熱ばんだ眼を、だんまりで彼女のそちこちへ凝注してをつた。

何を、どうしようといふのか？——みんなにもわからない。

「まるで……まるで、人魚だ！」と、やがて、手代が、ひた/\と鼻ん先へ寄せてゐる、うす暗い海へ、白い顏を向けて、も一ぺん繰り返した。

すると、漁師の甲が、猪首を反らして、淡い金星を仰いで、遲鈍につぶやいた。

「人魚を食ふと、若うなる！」

「何を！……くらひ醉つた人魚と犬の眞似をするのかい！」と、乙が、そいつを變にまた鈍くあざ笑つて片手をまはして、はだかのどこかかゆいところへ、大きな親指の爪型をぐつときざみつけた。

でまた、誰か、ぽつりと途切れて、みんなの視線が、無意識に反はつしあつて、ジリ/\とお吉へ……

いつたい、何を、どうしようといふのか？ たれも、知らない。

お吉は、酒の香を、そよ風に散らしながら、靜かに眠つてゐた。星くづが見えはじめた。

ざんざら笠の石はこびが、そつと、骨張つた手を伸ばして、緋ちりめんに白絹のかゝつた袷のもとから、好色な船蟲を、一ぴき摘みあげて捨てた。

と、ぢきに、ほかの連中も、ほとんど反射的に手をだして、彼女の腰帯の結びめや、そこいらからそ奴を捜りだして、わきへ追拂つた。

「ねエ番頭さん」と、石はこびが、何か[illegible]すやうなシロ眼を、その、彼女の體のまはりの、船蟲を漁つてる」手代へ向けて——「このつくりぢあ、隨分かゝつてるでせうねえ。」

「え？……あ、それあ、もう、この、このねえさんのことだもの、それに、なんしろ、贅澤なドレフルが、うしろに、光つてますからな。」

「ふうん。」

「この、これにしたつて、」と、砂の上に少し敷俗に亂れてるちりめん單衣の褄を、爪のさきで怖々とつまんで見て

「一兩ぢや、どうして、買へないんですよ。」

「ほゥ、これがな。」と、漁師たちが革を張りつけたやうな手で、彼女の二の腕や肩の、ちりめんの手觸りを、のろ/\と味つた。

「ぢあ、」と、石はこびが、苦力笠の縁を星くづへ擧げて——「こいつ一枚で、米の四俵はたつぷり買へる……」と、さう何やら心細く感歎して、ふいと、また、冷たい眼を、お吉の顏へ落した。

「いや、どうして、今日は、もつといゝものを、領事館へ、と、け……」

さう手代がいひかけた時、ふいと、彼らのう

しろの道の上に、ひづめの音がとまつた。

「船蝨！ 船蝨！」と、石はとびが、あわてて、腹がけから、鼈甲の櫛をとりだして、お吉の鬢へつきさした。

「ふなむし！」と、漁師の乙が、足のウラの下から紋びろうどの紙入をつかみだして、お吉のふところへ押し込んだ。

手代と漁師の甲とが、そつと、お吉の膚の暖かみをはなれ――みんな立ちあがつて、道を見た。

馬上のコン四郎さんが、馬丁に何か告げてゐた――

三

お吉の寝姿の刺戟から、ふとそんな風に釋放されて、ぼかあんと振り仰いだみんなの顔へ、馬の上から、コン四郎さんのあいさつが落ちて來た。

「あアばよ。」

「……!?」

コン四郎は、鶏の眼の霞んだやうな眼を、ちつとこちらへ見ひらいて、太い白い口髭の間で、もぐ／＼と笑つた。まるで、日常茶飯事を、かみつぶしてるといつた工合に……

さらして、銀髪のふさ／＼とはみだした黒頭巾を――（當時亞米利加領事館出入の「仕立や伊之助」が、御用所へ差しだした覺え書を見ると

一 貳匁（二百十三文）づきん直し代
一 參匁（三百二十文）づきんかは代
右 コンシウロ分

などと書いてある）――その黒頭巾を、善い隣人らしく、こちらのみんなに向つて、片手でちよいともち擧げて、そのまゝ、若々しい輕速歩で、黒船番所の燈の入つた高張提燈など見向きもしずに、村の領事館へ――暮色ん中へ消え込んでいつた。

路ばたに居殘つた馬丁が、足もとの暗い夏草へ洟汁を飛ばして大儀さうに法被を脫いで、それを小脇に、みんなのところへ寄つて來た。

コン四郎さんが、アルコホルづけにして、亞米利加へ持つていきさうな、みごとな刺青を、膚いちめんに彫つた、中年前の男で、そのすさまじいくりからもんもんが、ひどい汗脂の臭ひをたててをつた。

石はとびが、それを見て、苦力笠の下へ肩をすぼめて、こそ／＼と立退きはじめた。

澤の漁師二人もろくろ柱みたいに、ぐるりと、あちら向いて、歩きだした。

三人とも、さつきのあの、「ふなむし一件」を、いま、ハッキリと自覺したのだつた。彼らは、おなかん中で、せい／＼ムキになつて、彼らの人種的正義觀を、こんな風に單的に叫んで引き揚げてゆく。

――唐人お吉！ 唐人馬丁！ 蛙になれ！――

ところで、ひとり殘つた手代は、少し離れた砂の上に、膝と片手をついて、へら／＼としやべりつゞけた。

「ねえさん、お吉さん、ねえさん、ま、どうなすつたんです?…ねえさん、もし…困りましたねエ…いや、半助さん、さつきから、どんなに呼んでみても、この體なんで…」

「は、は、番頭さん、それあ駄目だ。こんな、醉拂ひは、もつと親切にしなくちあ…」

「え?」

「ほら、から…」

で、馬丁が、その刺青の藍の濃い片腕を、彼女の首の下にいれて、輕々と抱き起して

「お吉さん、おい。」と、彼女の開花耳へ呼んだ。

お吉は、例の刺青にうなじを載せたまゝ、かすかに眼を開けて、ちきにまた閉ぢた。

「おい、おい、たら…んおきちさん」と、馬丁

が、笑ひながら、も一度彼女の耳もとでさゝやいた。
と、彼女の五體が、一瞬間、爪のさきまで痙攣し、同時に、その濕大なくろめがぱつと開いて、そのまゝ、視線のゆくてを凝視した。
コン四郎が、歸りついて、もう着換へを濟ませたのであらう、丘の亞米利加領事館の花旗が、夕空明りの最後の一抹をかき消すやうに、する／＼と十五間の旗竿の天邊から落ちてゆくところであつた……
まもなく――お吉が、無意識に、馬丁の手を拂ひ退けて、そのくらい砂濱を、ふら／＼とそちらへ歩きはじめた。
馬丁が、彼女の後を追ひながら叫んだ。
「いゝんだよ。今日は。ほら、櫛が落ちた。あ、紙入だ。お待ちつたら！　今日は來なくてい丶つて、コン四郎さんが、さういつたんだ。何を、そんなにつとめるんだ？　お吉さん！……」

四

けつきよく、お吉は、その夜、コン四郎（領事館）を缺勤んで、町へひきかへした。
とつぷりと暮れた下田道――夏草のにほひと潮の香と、それに、コン四郎さんの遠乘りの汗のしんだくりからもんもんが、ふんぷんと、彼女の鼻をついた。
彼女は馬丁の手拭を、吹き流しに、こはれた髮にかけ、その片端を絲切齒でかんで、醉ひざめの變なさびしさをこらへた。彼女は、馬丁の、がつしりとした片腕に抱かれて、あの岩山の裾をまはつて、ひつそりと戸の閉つた異人休憩所を過ぎて、町への渡船場へ來た。
手代が、雪駄をひきずつて、始終手應へのないおしやべりをつゞけながら、二人のあとからついてきた。
四十間ほど、川波を渡る艀の中で、手拭の端をふくんで空の星くづと街の燈を見てゐたお吉が、ふと馬丁にいつた。
「をぢさん、さつきの櫛をください。」
で、それをうけとつて、ちよいと川水に浸して、髮へあてたが、根がぬけてゐて、それに、腕がしな／＼と重くて……
艀には、ぢきについた。
と、お吉が、町の土へ降りたつと、すぐいつた――
「おくつて來てくれますか？」
「え、それあもう、お送りしますが、でも、なにぶんこんなにおそくなつてゐますんで、いえ、明日にでも、きつとお見舞にあがります……それあもう。」
お吉は、弱々しく笑つて、うなづいた。
燈のない舟置場や、暗い草家の間を、すこしゆくと、賑やかな絲竹や、明るい障子窓が、彼女を――らしやめんお吉を、待つてゐるはずだつた。
むろん、手代は、どこかその邊の暗いあたりで、しきりに前垂をもんで、叩頭して、消えていつた。
お吉は、前こゞみに、手拭のツマをかみしめて、その街の燈と闇の間を通りぬけて、渡船場とは　南へ柿崎の、町外れの、松風の聞える濱まで　風醉と、らしやめんの悪寒に、ふるへながら歸つていつた。
馬丁の「半助をぢさん」が、法被を肩に、腹がけと褌だけんなつて――つまり、くりからもんもんを街の燈いつぱいに露呈して、さうして、お吉のあゆみにこまかい氣配りをしつゝ、送つていつた……

――らしやめん心得うつし

ヒトツ、經水相滯リ、姙娠ノ模樣相心得候ハバ、ソノ趣、官吏（こん四郎）通辯官（ひう助）マデ申シ入レ、御訴ヘ申シ上グベク候コト

ヒトツ、官吏通辯官ノ手元ニマカリ在ルウチハ、別シテ禮節ヲ正シ、諸事丁寧ニ取扱ヒ、無益ノ雜言等ツカマツラズ、スベテ事替リ候所業致シ候ハバ、町役人ヲ以テ申シ上グベク候コト

但シ御出張コレアリ候御役人樣並ビニ通詞ノホカ、亞人ノ事情等、他ヘ相咄シ申スマジク候コト

ヒトツ、歸宿ノウチハ、急度相愼ミ、猥ナル儀コレ無キ樣ツカマツルベク候コト

ヒトツ、親ドモソノホカ身寄ノモノ等、官吏所（領事館）ヘマカリ越シ候儀ツカマツルマジク、モシマカリ越サズ候テハ叶ヒガタキ儀コレアリ候ハバ、町役人ヲ以テ、ソノ段申シ上ゲ、御差圖ヲ請ケ申スベク候コト

ヒトツ、病氣ニテマカリ越シガタキ節ハ、ソノ時々御屆ケ申シ上グベク候コト

ヒトツ、支那人並ビニ小間使ヒ諸職人等ニ對シ、雜話ツカマツルマジク候コト

ヒトツ、官吏通辯官等ヨリ貰ヒウケ候諸品、猥ニ他ヘ讓リ候儀ツカマツラズ、モットモ據處ナク讓リ渡シ候節ハ、町役人ヲ以テ、ソノ趣申シタテ、御差圖ヲ請ケ申スベク候コト

ヒトツ、御奉行所ノ儀ハ申スニ及バズ、御役人樣方ノ御噂等、官吏通辯官ニ對シ、一切ツカマツルマジク候コト

ヒトツ、日本通用金銀ノ儀、一分銀ノホカハ、噺等一切ツカマツルマジク候コト

ヒトツ、密賣買ノ儀ハ、前々ヨリ嚴重ニ仰セ渡シコレアリ候ニツキ、官吏通辯官ソノホカヨリ申シカケ候願ヒ、亦他人ヨリ相頼ミ候テモ、嚴敷申シ斷リ、町役人ヲ以テ御訴ヘ申シ上グベク候コト

五

この、もの〳〵しい「らしやめん心得」を、色讀したら、黑船神經のうづいてる時代の姿や、またその、時代の手の動くまゝに、うつたらしい踊りををどつてるお吉の憐ましさが、よくわかる。

お吉が、町の名主や年寄といつしよに、そんな、らしやめんお請の一札を、さしあげまをしてから、今日がちやうど一年めの——五月雨のちよいと途切れた晩だ。ひととほり、街をぬけて、汚水のふくらんだどぶ川の橋板へかゝつた。

溷のそこゝの地獄宿の、よしずや壁櫺子窓の隙間に、行燈の燈がまたゝいて、犬の皮の三味線か、しよぼ〳〵と鳴つてゐた。

あの、お吉がはじめて、街の女らへ傳へた露は尾花と寢たといふ小唄が、ゆがみ鳴りに、ひびいて來た。

それから、だら〳〵坂になつて兩側にコケラ葺や草家の斷續するさみしい舟大工町——そのいつとう端れの、松風の沁みた、小さな板葺家がやつと彼女の——らしやめんお吉の住居だ。

アメリカ總水師頭ヘロリが町を脅かした年の暮——あのサンフランセスコの檢潮儀にまでひびいていつた大津波のすぐあとに、眼の涼しい彼女の鶴松が、隣家の養兒といつしよに、彼女のために建ててくれた家で……素朴な、舟大工らしい、かんなの跡に、もうほつ〳〵寂びがのつ

てをつた。

月はどこにあるのか、窓の半障子ににじんだ燈りが、軒下の、華奢なはね椽のあたりに、ぼうと落ちて、その上に、小型の壺がひとつ、置きつぱなしになつてゐる。

馬丁の半助が、その傍へ、ぺたりと尻をおろして、片手で、その壺を持ちあげて

「やあ、青梅！」と、お吉を見あげて、笑つた。

お吉は、すつかりさめたうす青い顔を、なにか、眉を寄せて

「まあ、お菊さんたら……」と、つぶやいた。

「あは、あは、お吉さんが、こんなに、青梅を……」

お吉は、それには答へないで、戸障子をあけて

「お菊さん、お菊さん、」と、呼んだ。

「はアい、」と、遠くこともつた聲で……

「お菊さん、あ、お湯をつかつてる……」

で、遣るせなささうに、ちよいと溜息をついて

「をぢさん、濟みません、裏の井戸へいつてくださいな。」

「いや、己あ、も、おいとまするよ。大事のお吉さんを、とびけれあ、それで……へで、壺ん中から、一つ摘みだして、口へ持つていきながら)……おゝ酸つぱい！」

「そんなこと！　さ、はやく、裏で、足をお洗ひなさいよ、ねエ半助をぢさん。」

半助が、青梅の唾を、ペッと吐いて、なにか高らかに

「あ、また、をぢさんだ！」と、さう笑つて、尻の刺青をしこらしながら、丘の膚と家の下見板との間を、裏へまはつた。

お吉は、青梅の壺と、半助の法被を、もの憂く抱へて戸障子の中へはひつて、も一度呼んだ。

「お菊さん、お菊さん。お化粧はあとにして、はやく、手ふきでもすゝぎでもくださいな……」

だが、返事ばかりで、そのお菊さんは、なかなか顔を見せなかつた。

半助が、水を浴びる気配がする……

お吉は、軽いめまひを押へながら、片手で、足首の砂を拂つて、中の間へ、とほつた、さうして、もういちど

「まあ、お菊さんたら！」と、つぶやいた。

長火鉢のそばに、燗徳利が、よごれたまゝならび、その邊に、一升徳利さへ轉がつて、何もかも、彼女の出た時のまゝだつた。

彼女は僅かに肩を震はせながら、それを、そつと片わきへよせて……でも、彼らしい素直な調子で

「お菊さん、まだですかッ　はやく――お湯をたらひへとつて下さいな。足を洗ひますから。それから半助さんにいつぱいつけるんですよ……ねエお菊さん。」

「はアい、」と、相變らず鈍重な返事で……

だがそのお菊さんは――あの軒下のどぶ川のあたりから、雇ひいれた小女に過ぎない。こんな、お菊さんでもなければ、だれが唐人お吉へ、下女奉公などしたらう!?

六

お菊さんは、おほかた漁師の娘であらう、足の裏に、土ふまずが無くて、腰が、樹の切株のやうに凝滯つてゐる。お菊さんは、いつもムウと口をつまへて、とき〴〵、こまかい歯列びの間から、ぴつくりするやうな聲をだす。だから、お腹は、好い女で……始終こんな風に考へてゐる。

――施シハ善イコトダ

――コノらしやめんノねえサンノトコロヘ來テアゲタノハ善イコトダ

——善イコトハ好イ氣持ダ

お菊さんは、終日ぢう、そのしこつた、樹の切株のやうな腰で、ゆつくりとこの美德意識を味ひながら、家うちの用をする。

お菊さんは、自分が、八年四兩で、機屋に賣られかけたことや、十年五兩で、女衒に買はれかけたことなどは、全然知らないといつていゝほど忘れてしまつてゐる。

お菊さんは、やつぱり美德意識に陶醉しながら「らしやめんのねえさん」の京白粉や丁字香などをどし〳〵と自分の方へ流用する。絲も、針も、鏡も、疊紙も、敷物も、食べものも……

お吉が、しよつちう氣前よく與へる金品を、それ〳〵みんな、心底からそいつた氣持で受け取るお菊さんで——

お菊さんが、紫しぼりと黑繻子の腹合せになつた帶の結びめを、例の美德ある腰に載つけて、奥の、濡椽ま近く、塗りのたらひや鏡臺などを運んだ。

また、お菊さんが、おなじやうに美德ある腰つきで、膳と德利とを、その部屋の入口の、半助の前へ運んだ。半助も——「唐人馬丁」だつた!

お吉は、品の良い朱塗りの行燈の灯影に、肌を脱いで、髮を洗つた。

半助は、肉の緊つた膝がしらを、きちんとそろへて、そちらを見ながらちよくをなめた。

お化粧をしたお菊さんが、ムウとその傍に坐つてゐた……施シハ善イコトダと、玉蟲いろに紅をむさぼつた脣を、おしゆがめながら——

半助が、好々と醉つてゐた。

とき〳〵彼は、「おまへ」といつたり、またときどき彼は、「お吉ねえさん」と呼びかけた。

——ですがねえ、お吉ねえさん。世間は、廣いんですから……

そんな風にいつて、あめいろの眼で、ぢつとお吉を眺めるのだ。

——さう、をぢさん。世間は、ひろいんですね……

お吉が、なみだかなにか、青貝のすくやうな眼ぶちをして、さう應へた。

それから——「えゝ」といつたり「あゝ」と應じたりしてるうちに、だん〳〵その世間だけが、廣く、はてしなくなつていつて……ふいと、半助が、あめいろの眼をあげて、コン四郎館に殘して來た——馬のことを考へる。

お吉が、そつと立ちあがつて、塗り簞笥の底から、ま新しい、ちりめん單衣をとりだした。

「これを、をぢさん、着てくださいな。」

お吉が、いま着換へに着てるのと對の、はやりの市松染で……三尺帶まで、添へてあつた。

「これを!?……いつ、おまへ、つくつた?」

「去年。でも、手は、まだ、通つてゐない……」

「去年? 去年?……あゝさうだ、もう去年だなあ……いや、ねえさん、ありがたう。」

で、その包みを抱へて、ムウと欠伸をしさうになつてるお菊さんの手から、提燈をうけとつて、庭下駄へ……

しんとなつた中で、お吉は、鏡をのぞいて、覺え帳をくるやうに——洗ひ髮をいぢつてゐた。

そのかたはらで、月も、ほとゝぎすも暗い空へ、お菊さんが、彼女の美德に疲れた欠伸を、ゆる〳〵と吐いた——

七

いつたいどうしてお吉は、あんなふうに放俗

に、らしやめん心得をやぶつて、コン四郎館
道の途中の砂濱にねころがつてゐたのか――
　それは、ひとかど察しのいゝ「半助をぢさん」の、あのいろの眼にも見透せない。だいいち、お吉自身にも、からと、說明がつかない。いつてみればまあ、あの、眠つてゐる子供が、うちらに燃える活力ゆゑに、夢中で夜着を乘りだすといつた工合で……
　お吉は月のみそかがくると、美濃紙を、片手にとりあげて、なにか流行うたでも書くやうに、さら〳〵と、こんな文句を書きながす。

覺

一金　拾　兩

右者玉泉寺滯在の官吏方へ部屋召遣に罷
越候きち給分御下渡被下置候に付則
私共へ御渡被下慥に　奉受取候

月　日　　坂下町　きち媼　もと

町方御會所樣

　つまり――彼女は、米に換算して三十俵(十五石)の、この、もの〳〵しい月手當をうけて、あの素がれた舟大工町(日當百文生活者街)の天邊に、お菊さんと一緒に、[illegible]暮しをくらしてをつた。
　五月雨と、丘の氣配に、板屋根が青黒く苔づいて、その下に骨のほそい、肉のやはらかな彼女が、ちりめんに包まつて、ほの紅い指さきをもみあはせて、日を送つてゐたのだ。
　彼女は、大津波で、草の花の逝くやうに消えてしまつた、小娘時代の家をまぼろしに描いて、その木端にさびた板ぶき家の、そこかしこに手をいれた。入口の、戸障子の中へ、小さな、ちりめん磨きの沓脫ぎを置いてみた。とつつきの部屋と中の間の、農家風な戸棚の板戸を、唐紙に換へてみた。奥には、さらし竹の濡縁をつけたり、丸窓の壁を塗り換へたりなにかして……さうして湯殿を――あゝ、その湯殿だが――
　あの青竹のさきに、小旗をつるして、何か歡迎旗のやうになか空へ差しだした街の湯が、彼女には、地獄だつた。
　裏街に住む破瓜師んとこへ、通つて間もない頃か、變におすましをしながら、お吉の美しい肌を見つめた。中年過ぎの女房連が、持前の苛辣なひとみで、すんなりと伸びた彼女の五體を撫でまはした。またあの、薰々とした地獄宿の定連が、眼の隅で、彼女の肌の毛穴にまで透るほどの、冷たい笑ひをわらつた。みんな、そこに、「コン四郎館の夜の跡」を、ほじくりださうとするのだつた。
　で、彼女は、勝手の奥へ、湯ほどの湯殿を建てまして、五右衞門風呂を据ゑた……
　だが、彼女が、どんなにその家づくりに、沒頭しようとしても、しよせんは、たつた三間きりの家で――
　彼女は、紅絹ぎれで、鏡を磨きながら、一流行をかんがへた。それも、しかしもう、そこらの小抽斗や、袋戸棚や、簞笥に、飽きのくるほど、詰まつてゐた。
　彼女は、丸窓のそばや、朱塗りの行燈のかげで、好きな源氏や伊勢や、またはやりの紋染表紙の合卷を讀んだ――だが、それらは、かへつて、彼女の頰から、血を奪つた。
　彼女は、濡縁にちかく、花梨木の三味線を抱へて、あの、もう傳說になつてゐる唄と節回しをもの狂ほしく松風にひゞかせた――それも、だが、彼女の溜息を、際立たせるだけで……
　それに、お菊さんとの差向ひは、あゝ、それは、もう、いふまでもない――

八

　お吉が、眼をつぶつて、らしやめん支度金(二十五兩)の請取を町方會所へさしだしたのが、

去年の、やはりほとゝぎすの聞える時分——考證的には、安政四巳年五月二十四日だ。

コン四郎さんが、につぽんの舌官らのひねくりまはす骨董的なオランダ俗語にあきれかへりながら、日米通商條約の議定書に調印したのが、西紀千八百五十七年六月の十七日——つまり、おなじ安政四年五月二十六日だ。

彼女は、いつてみれば精巧な秤にとまつた一ぴきの草かげろふだつた。輕い、さゝやかな、彼女の存在が、ある大きなバランスを支配してゐたのだが、憂鬱なことには、彼女には、それがよくのみ込めなかつた。いや、たとひのみこみ得たにしたところで、しよせんは——一ぴきの草かげろふだ！

彼女のらしやめん給分は、あんな風に、幕府の大奥の最高女官のそれに幾倍するほどだつたが、もと／＼活計が苦になる彼女ではなかつた。

彼女には、好い「をばさま」の遺産が、たつぷりあつたし、だいいち、爪紅をさして街へ出れば、町いちばんの彼女で、祝儀の花降銀が、彼女を埋めた。それに、いつとう惡い場合にも、モデリの半纏にくるまつて、波錢單位の勤勞をほがらかに樂しみ得る彼女だつた。

——女ニ相ナシ——と、その頃の高級な、上品な、道德は敎へた。

ゐざり車に身を載せたら、そのまゝ、無機物のやうにゐざりになつてしまふのが、道にかなつた仕方だつた。

お吉は、日暮がくると、美々しく裝うて、蝙蝠のやうに、街の燈影をわたつて、コン四郎館へ通つた。

さうして晝間は、既述のやうに、有閑人らしく氣紛れをしたり、時には、家うちのそこらぢうを、さも世帶人めかしく、絹ぶきんでこすつてみたり、また、疫病除けの、青梅をつけてみたり、などするのだつた。

だが、けつきよく、彼女は——十八だ。

ふさぎの蟲が、ひとりでにはびこつて、晝間は、もう文字通り、白日夢だし、夜は、もつとひどかつた。

……………

……………

その日——

朝からもよほしてゐたのが、四時ごろには、たうとう季節はづれのウソ寒い雨になつた。

お吉は、コメカミに頭痛膏をはつて、半纏をうしろへずらしながら、長火鉢の前にしな／＼と坐つてゐた。

緣さきに、隣の蔬菜畑がすこし見え、そこに、脂肪ぶくれのした姉の背中がこゞんで、晴の脚を鈍感に吸ひながら、茄子をちぎつてをつたが、やがて、ゆつくりと、見返りもしずに、彼女の視野から消えた。

「お前も、もうお暇をもらつたらどうだらうねェ。」

お吉の着古しを下着にして、掌のタコを見ながら、そんなことをよく、まぶしさうにつぶやく姉であつた。

お吉は、ちよいと半纏をひつぱつて

「お菊さん。」と、呼んだ。

お菊さんは、裏で、五右衞門風呂の焚き口の前にしやがんで、口をとがらせてゐた。

「お菊さん：：」

雨の脚が、しと／＼と音を立てはじめた。

彼女は、勝手へたつて、一升德利を抱へて、火鉢の傍へもどつた。

九

お菊さんが、あの彼女の年を、風呂の沸くまで、焚き口に落ちつけて、酒と火を伴侶に、こ

んなことを考へる。
——うちのねえさんほど、ちりめんをたくさんに持つてる女もないもんだ……なんぶちりめん、てうしちりめん、いたじめちりめん、やまゆちりめん……あの戸だなにも、あのたんすにも、あのつゞらにも……いつたいまあ、あんなにたくさんに、どうするつもりだろ……たいていは、唐人のくれたものらしいが、それを、どして、あんなに、仕立てもしずに、ほつておくのかしら……あゝ、そいへば、おなじものが、ずゐぶんある。あのたんすの三ばんめのひきだしにある被布にしてみても、あれは、ねえさんが自分で買つてこしらへたもので、べつに、おなじたんものが、唐人からも、もらつてあるやうだ……ほんとに、妙な、うちのねえさん……
それから、帶や、髮のものや、そのほか、化粧小間物類をも、まるで、自分の財産のやうに、ひとつづつ數へあげて「ほんとに妙なうちのねえさん」とさう、例のムウと笑つては、松葉や楢枝を、焚き口へほり込むのだ——
お菊さんが、そんな風にひと通り財産シラベを終つて、眞紅な根がけをかけた猪首をすゑて、やつと湯殿をひきあげた時分には、雨に誘はれた夕晴が、もう家にこめてゐた。

そのうす暗いなかで、なにを考へるのか、片手をうしろへついて、半纏のすべりおちるまゝに、とき／＼、じれつた結びをたわ／＼と震はせたり、とき／＼また、手片の細い指さきで、びんぼふ徳利の胴をたゝいたりしながら、お吉が、雨の音のしみこむほど、ぢいつと坐つてゐた。
「お湯が、ねえさん、沸きましたよ。」
が、それには答へないで、そのびんぼふ徳利を、つまみあげて
「おかはり、お菊さん。」と、しんみりと笑つた。
「………！」
「いつそ、菰冠りがいゝ。明日にでも、そいつてくださいな。」
「まあ、ねえさん……」
「そしてけふは、これ。」と、その空つぼのを、ぐるつと、お菊さんの膝の前へころがした。
お菊さんは、それを、反射的に、盛りあがつた膝の上へとり上げて、しばあらく、鈍重にお吉を見てをつたが、やがて、ふいと、そいつをぶら下げたまゝ、部屋の隅へいつて、行燈のそばへ、つくばつた。
燈りがついた。お吉は、酒氣のにじんだ眼で、よひ晴を追うてゐた……

……雨戸の外の、暗い、しめやかな氣配の中に、時折り、松をさらはれた雨滴が、パラ／＼と板屋根を打つた。
お吉は、長火鉢のそばの、膳のわきに、少し醉ひ崩れながら、まだ杯をふくんでゐた。
「ねえ、お菊さん。」と、彼女が、なんべんもくり返した——「さつきは、冷酒で、これは熱酒……熱いのと冷たいの……冷たいのと熱い……」
彼女は、うるささうに半纏を脱いで、うしろへ投げた。
お菊さんは膝の上で、汗ばんだ掌の中で、ぐる／＼と徳利をまはしながら、ムウとしてゐたが、それが、ぽつりと口をはさんだ。
「ねえさん、お勤め……」
「え……あゝお勤め！　さう／＼……ほゝ、ほ——」
お吉は、片手を伸ばして、お菊さんの膝の徳利をとつて、茶碗にあけた。で、それを口へ持つていきながら
「お菊さん、何かおうたひ。さ、うたつてごらんなさいな、ねエお菊さん……あ、あれを、あげよう、あん中のを、どれでも。」
と、さつきお菊さんが、財産シラベをした戸

棚を、たわいなく指さした。

「……!?」

「ね、」と、一息に茶碗を飲み干して――「さあ…いつしよに、ぢや、うたひませう。」

で、お菊さんが、猪首を、大眞面目に彼女の方へすゑ、コマカイ歯ならびをのぞかせて、街のはやりうたをうたつた――

　ありがたいぞえ唐人さんは
　　一朱の女郎に二分くれた

「ほゝ、ほゝ…」と、お吉はけいれん的に笑つて、ふら／＼と立ちあがり、戸棚の上段の唐紙をおしあけて

ほうら、これ？ それともこれ？ それともこれ？ でなきあこれ？…」と、その隅に積まれたちりめんを、片ッ端から、お菊さんの眼のさきへほりだして、また、ほゝ、ほゝと笑ひながら、そのまゝその棚に、うつぷせに、かたくよりかゝつた――

＋

おなじ夜の五ッ半ごろ――

まつ暗な舟大工町に、ざわ／＼と、雨をふくんだ風が動いてゐた。

時折り、草家に、ぽつと燈りが漏れて、坂を下る下駄の音が、微行やかにひゞいた――

どぶ川へ、「一朱の女」の顏を見にゆくのだ。

また時折り、火の消えたコケラ家の戸があいて、黒い影があと先に、聲もなく、坂をのぼつていつた――岡のつい向うの濱へ、流れ木を漁りにゆく夫婦だ。

……

お菊さんが、彼女の美徳を、こんな風に勤めてゐた――

彼女は、行燈をまそばにひきつけて、まばゆい幾反ものちりめんを膝の前に並べて、「どれをもらつてアゲタラいゝか、」しきりに迷ひ迷ひながら、とき／＼ふいと

「ねえさん、」と、ひと言、兎の糞みたいに、お吉へ呼びかける。

お吉は、もう半ときあまり、戸棚の前にお菊さんの大きな影法師の中に、忘れられて、倒れてゐるのだ。

お菊さんは、もうお湯にもはひつた、お化粧もすませた、むろんまた、かつをなど、季節のものの並んだ晩餐を、お吉の分まで、十分に、お腹へつめた。さうして、いま、おびたゞしいちりめんを、ゆつくりと、享樂してゐるのだ。

やがて、お菊さんは、とても大きな溜息をついて、「みんなもらつてアゲル」ことにきめる。で、そのちりめんを、兩手で抱へて、自分のけんどんへ運んで、永久に、彼女の財産にしてしまふ。

「ねえさん、お湯。お湯へはひりなさい。」と、それから、彼女は怒つたやうな猪首を、お吉の耳もとへ寄せる。

お吉は、夢中で、でも憫ましげに、カブリを振る。

そこで、彼女が、奥の部屋へいつて、牛部屋へ敷き藁をいれてやるといつた腰つきで、お吉の床をとる――たらりと、飾絲の垂れたびろうどの枕、緋ちりめんをにほひぶくろの形に縫つたツムギの敷蒲團、染麻の輕い夜具など…

それが濟むと、部屋の片隅の、有明行燈に燈をともして――で、お吉の華奢なからだを、疊の上から、ほとんど横抱きに、ムンと抱きあげて、その寢床へ、運んでゆく。

あとは、また、いつまでも長火鉢のそばに坐つて、ちりめんの妄想だ。

お菊さんの美徳は、かうして、一ッはり遅れた漏斗のやうな正確さで、まいにち、遂行されてゆくのだ。それは、まつたく、町全體が、唐人お吉へ示した美徳の、シムボルといつてもよ

かつた。

……

風の音が、ちよいと途切れて、しんとなつたところへ、ふと、足音と人聲がもつれて、家の前にとまつた。

戸をたゝく。

お菊さんが、彼女の秋の晴れ着への、美々しい空想を、殘り惜し氣にうち切つて、そちらへ、だんまりで……

とん、とん、とん――

「もう寢なすつた、ねえさん、おれだ……」

十一

お吉は、飾絲のうつくしい枕にうなじを載せて、醉ひしびれたまゝ眠つてゐた。

このごろは、とくべつに心氣のさわがしい彼女だつた。

すこし詩人ふうに、抽象的にいつてみようなら――

風が、冷々と彼女の神經に吹いて、ぢきに蒸し熱く凪いだ。

太陽が、まばゆく彼女の神經に昇つて、たちまち淡く煙つた。

雛芥子が、紅々と彼女の神經に花さいて、ぢきにまたしぼんだ。

燃えよう、燃えようとする心の火が、さみしく明滅した。

神經だけが先にたつて、思案は、いつも戸惑ひしてをつた。

酒を飲むと、ほの明るく、ほの温かく、なにかしら、ふはりと發揚して「むかし」も「いま」も無くて過ごせた。

そんな彼女で――

彼女がぼうと眼をあけた。

いつもは、黄いろくこそばゆい有明行燈の燈が水いろをしてをつた。その燈影に、こちら向きに、男がすわつてゐた。

男の二の腕の邊から膝へ、その水いろの光が流れて、黒と白の石だたみになつたちりめんが、キラ〳〵と光つてゐる。

「あ、いちまつ……まあ、市松を着てるよ。」と、さう彼女は、ぼんやりと眺めた。

「お吉さん、おい、」と、男の聲が、低くひゞいた。

だが、彼女は、なにやらとほ〴〵しい眼を、ひとところに注いだまゝ

「いちまつ、いちまつ……」

と、くちびるを動かせて、しばあらく、まぼろしと記憶の間をさまようてゐた。

そのうちに、どこからともなく、狂ほしい活氣が、さつと彼女のひとみに宿つて、とたんに

「あ、鶴さんだ、鶴さんだ！」と、叫びながら、床の上へ起きなほつた。

「おい、おい……」

「ねエ鶴さん、」と、彼女が、胸を抑へて、ひたむきにいふのであつた――「おまへ……おまへ、あんまりだよ。」

「おい、お吉さん、おい……」

「……いくら、しがない、舟大工だからつて、それでは、おまへ、あんまり、意氣地が、無さ過ぎるよ……あたしが厭なら、それは、それで、いゝけれど、げんざい、あんな仲だつたんぢやないか……」

「お吉さん、ねえさん、おい……こまつ……こまつたなア。」

「それを、それを……ひとツ！　なんだね、いまごろに……あたしはね、もう、一年まへに、すつぱりと、あきらめてるんだよ。えゝ、すつぱり……さ、歸つておくれ。出ていつておくれ……けがれるよ、そばへ來ちあ……あたしは、あたしは、らしやめんだよ、唐人お吉と人に……」

彼女は、ほつれ毛を、二すぢ三すぢ、キリッと口にかんで、うつろな眼を空にあげたが、そのまゝ男に背を向けて、横倒しに、枕へたふれた。

……「水を、お菊さん、水をくださいな。」と、弱々しい聲で……

男が、そつと立ちあがつて暑苦しさうに、その、ゆうべ、彼女にもらつた市松染のちりめん單衣の袖を、刺青の上へたくしあげて、門口へいつて、さゝやいた。

「おい、かごやさん、折角だが、こんやは、歸つてくれ。コン四郎館の半助だ。酒代もなにも、たつぷりとつけとくがいゝぜ。降るのに、御苦勞だつたなア。」

十二

――ふられたぜ。

――だれがよ？

――唐人の大將だアな。

――へん、唐人がらしやめんにふられたか……

――無理アねえ、唐人はひつこいさうだから。

――なにが！　もう、一年も、くつついてらアな。

――ふん、綿羊も、たまには、すねてみるやつか。

――おほかた、媚薬の間違ひだらうよ……どら。

――そんなことか……よいしよ……また降りだした、いやな陽氣だな。

雨風のあひまを、そんなことをさゝやきあつて、迎ひかごがそのまゝ歸つていつた。

半助は、ちりめん單衣の裾を、くりからもんもんまで、くるりとまくつて、だが、しのび足で、その門口からお吉の枕もとへひき返した。

「太陽はどこにでも」とさみしい哲學を宿した彼の眼が、もの悲しく曇つてゐた。

彼は、手を伸ばして、亂れたかけ蒲團を、そつとお吉の肩へ引きよせて、低い咳をした。どうかして、口をつまへると、もう中年期らしい皺が、頬にほの見える彼で……

お吉は、髮の毛をふくんだまゝまたうとうとと眠つてゐた。

「ねえさん、」と、彼が、聲を殺して、呼びかけた。

一ねえさん……おい、お菊さん。」

お菊さんは、床の向う側に、水をいつぱい注いだ茶碗を前に置いて、お吉のあをざめた顏を、まじまじと見おろしてをつた。

彼女は「らしやめんのねえさん」の、さつきのあの、びつくりするほど激しい氣合にうたれて、すつかり考へこんでるのであつた。

いつたい「鶴さん」とかいふ男と家のらしやめんのねえさんとの間には、どんな關係がひそまつてるのか、そのまた鶴さんが、どうしてさつきはこの唐人馬丁だつたのか――それはいくら考へても、むろん彼女には、わかりつこなかつた。たゞ彼女は、もつとも、あのどぶ川のほとりで、雨をみたり雪をみたり、あの方面のお天氣には、いちばい敏感に育つてゐて、したが.つて、そちらに關することなら、いはゞ一皮の厚い彼女の急所へ、單的にひゞいてゆくのだつた。

彼女は、おなかにもつてる僕の道徳意識か、不思議なほどぐらつくのを、なにかしら不安に眺めてゐたのだ。

一お菊さん。」と、半助が、彼女へ手招ぎして、長火鉢の方へたつた。さうして、いつにもなく、おどおどと寄つて來た彼女の耳へ聲をひそめて訊いた。

「こんなことが、これまでにもありましたかな？」

「いゝえ、いゝえ。」と、さう重大な祕密の片棒

をかついでるやうに、彼女が、唐人馬丁の額とすれ〳〵に、首を振つた。

「ふうん。」と、半助が、そのまゝ長火鉢の前に坐つた。

お菊さんも、魅いられたやうに、彼の眼を見つめながら、ふら〳〵と彼女の腰をおろした。

二人は、てんでに、別ッこの不安を感じながら、しばらく、しんと向ひあつて坐つてゐた。

と、そのうちに、奥の有明行燈がふいとかげつて、お吉の姿が、おほかた厠へでもたつたのであらう、雨戸のそばへ寄つていつたが、それが、ふとこちらを見て

「あ、半助をぢさん……まあ、もう着てくれてるわね。」と、いつて、血の氣の無い額を微笑んだ。

「……あゝ、せつかくもらつたもんだから――」

そいつて半助は、雨ひぢをあげて、眼をおとして、その市松の、ちりめん單衣を、も一度ながめるふりをした……

……

なにも、半助は、いはなかつた。たゞけふも、コン四郎館は、缺勤むがいゝと、それだけで――あの、あの悲しげな眼をして、半ときばかりゐて、雨の中を歸つていつた。

鶴の章

――ほんのおぼえ帖ふうに――

一

鶴は、お吉の、初戀の相手であつた。

二人の仲は、あの、地震と大津波で町が壊滅した日の夜に芽ぐんだ。

安政元年十一月四日の夜――

街には舟が、浮かんでゐた。

港には、家が、浮いてをつた。

星のしみつきさうな晩だ。

町の背の、大安寺山の、とある岩かげに、松の枝に荒拡をつるして、枯葉のチロ〳〵と燃える火を前に、女が三人、うそ寒くこゞもつてゐた。

一人は、つむぎの小袖を着て、ちりめん皺の寄つた、品の良い「をばさま」だ。一人は、手織の綿服に包まつて、皮膚が鳶いろによれた、鶴の母親だ。その小さな二老婆を、両わきに、しつかりと抱き寄せて、身うちの温みで暖めながら、お吉が、みづ〳〵しい頬と、浄らかな眼をして坐つてをつた。

女らの前に枯葉の火の向ふ側に、若い、眼の涼しい、船大工の鶴が、うづくまつて、藁をちぎつて、草履を編んでゐた。

お吉は、時折り、をばさまを背負つて、藪をひきながらをばさまの小用にたつた。その素跣足の、片ッ方が、縮ぢりめんの下着の裾で、結はかてをつた。

鶴が、涼しい眼をあげて、痛々しさうにそれを見送りながら、せつせと草履を編みつゞけるのだつた。

翌る日に、鶴が、まだふるへてる大地を踏んで、黒ゴメの粥とタクアンを、お救ひ小舎から運んで來て、女らをはぐくんだ。

その翌る日――お吉は、鶴の老母の手をひいて、鶴は、をばさまをひつ背負つて、その、豊満な乳房の恰好をした大安寺山を下つた。

――お吉も、鶴も、ふたりともその時もう彼らの身うちに芽ぐんでゐたものに、氣がつかなかつた。

……

翌る月のなかごろ――

荒涼とした町の廢墟から、新生のひゞきが捲き起つてゐた。町は、黒船の玄關で、いつこくも速く、外觀をとゝのへる必要があつたの

だ。
あの舟大工町の天邊でも、鶴が、その、街の陽氣に和するやうに、ほがらかなかんなの音を、松風にひゞかせてをつた。
彼は、自分の乏しい給料や舟おろしの祝儀などの貯へを、すつかり持ちだして、涼しい眼を涼しく見ひらいて、家つくりに沒頭してるのであつた。
さうして出來あがつたのが、お吉とをばさまの新居――げんざいらしやめんのお吉が、お菊さんと暮してるこの家で……
鶴は、煙草も酒もいつさいたしなまぬ、律儀な若者だつた。
……
年があけて、をばさまが亡くなつた。
お吉は、あの透きとほるやうな眼ぶちを紅くして、ときをり喪髪を重たげにかしげて、その年を送つた。
その彼女のそばへ、しじう鶴が訪ねていつて、善い友達らしく、打明け話をひそ〳〵としあつたり、また彼女のかげで、善い兄さんらしく、そつと眉を曇らせたり、時には、また、まるで彼女の弟のやうに途方にくれた。
鶴は、手あしのすらりと伸びた好男子で、むろんまだ――童貞だつた。
……
つぎの年の春――
お吉は、街の招び聲に應へて、もいちど、彼女の貝爪に、爪紅さして、まいにち街へ出た。(彼女は、あの津波の年に、ヘロリが來たすぐあとで、いつぺん、藝者になつて、その時すでに、あけがらすのお吉! 新内お吉! と、街の歡呼を一身にあつめてゐたのだ。)
こんども、もちろん人氣は、以前をしのぐほどで、まるで彼女は、街の夜の、おほらかな太陽だつた。
鶴は、遠くから、まぶしさうにその忙しい、華やかな「夜の太陽」を眺めて、しきりに溜息をついてゐた。その時まで、ほとんど天職といつていゝくらゐ打ち込んでゐた舟大工の仕事に、さもさもあはれを催したといふ風で……
だが、その正直な鶴が、少しばかりの酒に、くわつと火照つた肩を、おづ〳〵とお吉に寄せて、山田屋(料亭)の裏木戸を出たのは、ほんの間もなくの、ある春の夜ふけのことで――ふたりとも、その晩はじめて、「空のはてしない美しさや、一生の長さ」を、しみ〴〵と考へたのだつた。
コン四郎さんが、コン四郎館へ來て、花旗を高くかゝげたのは、この年の夏だ。

二

その年からあくる安政四年へかけて――亞米利加の花旗で騷然としてる町に、お吉は、まつたく、けんらんをきはめた存在だつた。
初戀を得たうつくしさが、彼女のどこへとなく、微妙ににじみわたつて、一層ひと〴〵の心をさわがせた。
濕大な彼女の眼が、濡羽いろの蠱惑にかゞやいてゐた。幽艶な彼女の聲が、神祕な旋律にふるへてゐた。
育ちがよくて、ふとした素振りに、なんともいへぬあどけなさと氣品のほの見える彼女であつたが、それが、その、ものごしのひとつ〳〵に、しなやかなウマ味がのつて、艷麗な面映ゆい女になつてゐた。
彼女は、江戸の流行のハシリを、季節々々に姿態よくこなして、一流の料理屋や船宿の座敷へ出た。
彼女は、いつも新鮮、「街のたゞ一つの飾り窓」だつた――
彼女の若さと美しさには、ためらひや、不安

や、うたがひの影が、みぢんもなかつた。豪奢な衿頭や海苔が、しば〳〵島の財布をはたいて、彼女を仰いでつぶやいた。

「一男ぎらひ?」

彼女は、街のみんなの戀人で、町ぜんたいの誇りだつた。

彼女は、街の夜の華やかな太陽だつた……

内氣な、鈍勉な、舟大工の鶴が、彼女の都合のいゝ時に、そつとあひゞきに出かけていつて、さうして、あとで、ぼんやりと考へ込んだ。

「いつたい己はまあ、こんなにしあはせであつてもいゝのか?」

彼は、小心な花ぬすびとのやうに、町の眼をおそれた。彼は、不幸な律儀者だつた。

さうして、そんな鶴の氣持が、なんとなく、時をりお吉にひゞいてゆき、彼女が、たわいなく眉をよせて

「鶴さん、ねエ鶴さん、おまへ、あのウ……あたしを嫌つておいでではないかえ?」と、口ん中で、訊ねるのであつた。

すると、鶴が、とびあがるほどびつくりして

「どうして! お吉つあん、どうしてそんな、おまへ……己あ、もう、おまへ……もう〳〵、己あ……」と、あとは、感涙さへ浮かべて、きちんと合せた股引の膝を、いつそう堅くして、そこへつき立てた腕を、ぶる〳〵と震はせるのだつた……

それからまた、いつか、やはりふたりが、どこかでしのび逢つた時に、いつものやうに、滿々としたお互の氣持を、ちつと感得しあつてから、しばらく水のせゝらぎのやうな話をはなして、さうして、別れしなに、鶴が、ふいと眼をおとして、せい一ぱいの聲でさゝやいた。

「なアお吉つあん、おまへも、そのうち、藝者は、よすはうが、いゝぜ……己らは、こんな、しがない舟大工だけれど……」

「あ、鶴さん、そいつておくれなのは、ほんたうにうれしいよ。あたしも、そのはうが、どんなにか樂しいだろ……」

さう彼女が、晴れ〳〵と答へた。

鶴は、二十一。お吉は十七の春で——

降つたり照つたり、そんな風に、ふたりの仲が、ふたりらしく、しばらく知れずにつゞき、やがて、うす〳〵うはさになつた——

三

鶴の戀は、深刻が來ても、おど〳〵と控へめがちで、放膽に、あくらめつぽふにお吉へ迫つていくなどといふことはなかつた。だいち、お吉の、あの、松風につゝまれた家の戸を、夜ふけに、ほと〳〵とたゝくにしても、なにかしら、あはれに爪立つて、風にも、星にも、肩をすぼめてるといつたふうで。

……

お吉も、目のまはるほど、華やかなせはしいからだで、そのあひまに、じれたり、當かゐあつたり、ときには、たわいなくふんがいしてみたりはするものの、それも、せはしさに紛れたり、また、しよせんは、好きな鶴で、いつぺん顔さへ見れば、それでをさまつた。

それに、うす〳〵うはさになつてる氣配が、かへつて、好い工合にはたらきかけて——けつきよくふたりの仲は、しぜんと相愛のみちにかなつて、適度に、充ちたりて、あきることはなかつた。

それが、まつたく突拍子もなく、亞米利加が、ふたりの間へ、割りこんで來て、いつさいを奪つてしまつた。

ある日、お吉は、名主の半兵衛に連れられて、木ぐちのまだ新しい奉行所の、お白洲にぬかづいてゐた。

曙氣の絲織——茶緞子の帶——べつに、もの

怖ぢもしず、といつて、みだりがはしくもなく、役人の聲につれて、ふり仰いだ彼女の額へ、ぴしやりと、「日本最初のラシャメンの恩命」がくだつた。

「玉泉寺コン四郎館に滯在まかりあるアメリカ官吏に御奉公まをしつける。ありがたく、おうけ致せ。」

「…………」

「なほ、月お手當は、十兩。そのほか支度金として、二十五兩くだしおかれる。ありがたく心得て、すみやかに、おうけいたせ。」

「…………」

「これ、これ……」と、名主が、そばから、汗になつて、氣をもんだが、お吉は、口を結んで、砂利を見つめたまゝ動かなかつた。

役人が、權柄の鼻を折られて、かん聲を張りあげて

「ありがたく、おうけいたさぬと、ために、あひならんぞ。」と、威嚇した。

でも、お吉は、脣をかんで、默してゐた。

「きち、こゝを、な、なんとこゝろえる！　あの、こゝな……！」

だが、その時、お吉が、髮をふるはせて、やつと、なにやら小聲で答へた。

「これ、もつと、ハッキリとおうけまをしあげるんだわな、これ……なに！」

で、そのうろたへきつてる名主には、一べつもくれないで、生いつぽんの顏を、眞向きに、役人のひとみへあげて、お吉が、血のほとばしるやうに、叫んだ。

「いやでござんす。」

……

むろん、お吉は、例の精神異狀者にきまつて、名主あづけの宣告をうけて、その場をさがつた——

その夜ふけ、鶴が、うはさに、わく〳〵とふるへる足をふみしめて、そつと、かよつて來た。

「己あ、も、どんなにおどろいたか！」と彼が、あへぎ〳〵いふのだつた。

「なにも、鶴さん、」と、彼女が、眉をしかめて、ニガイ冷酒を飲みほして答へるのだつた——「心配して、おくれでないよ。たれが。あんな、おさるのシラコを惡つてるやうな、唐人になぞ……いくら、おカミだつて、ねエ鶴さん。」

で、彼女は、半纏を脱いで、その、あをくふるへてる鶴の背にかけて、微笑んだ。

鶴も、子供のやうに、自由になりながら、眼で、ほゝゑんだ……

四

つぎの夜も、つぎの夜も、鶴は、しのんで逢ひに來た。

ふたりでゐると、うつたうしい心ぼそさがひとりでに消えて、なにかにぎやかな自信がぐんぐん芽をだした——黑ふねと、町いちばんのあけがらすのお吉では、とりあはせが、あんまりとつぴ過ぎてをかしいなどと、せゝらわらつてみたりもした。

だが、ひとりになると、やつぱり、うす氣味のわるい亞米利加で——で、わかれしなには、どちらからともなく、すがりつくやうなさみしい眼差を投げあつて、かたく、かたく、あすの夜を約束しあふのであつた。

その鶴が、ふつと足を絶つて……いちんち、ふつか、みつかと、明けては暮れていつた。

鶴のことだから、おほかた、すい・すい・とんと、夜なべにせきとめられて……と、はじめは、そんなことを、春空の雲のやうに、淡くかんがへた。

ふつかめには、怪我でもしたかと氣になつて、うろ〳〵と、雨戸のそとの風の音に、耳を凝ら

して聴きいつた。
　みつかの晩に、四時ごろまで、むすぼれたり、ほぐれたり、火照つた頬をまくらにおしつけて、眼をあけてゐた。
　よつかいつかと、涼しいえりあしが鶴にやせて……
　でもお吉は――幸福であつた。すくなくとも、このいく日かは、亜米利加も、おカミも、街の燈もなく、たゞひたむきに、鶴を戀うてくらせたから。
　むいかめの眞夜半に、うらの雨戸がほと〳〵と鳴つて、飛びつくやうにそれをあけると、鶴が、髪のハケ先をみだして、ほつそりとしほたれて立つてゐた。
「あゝ鶴さん！　おまへ、まあ……」
　で、あたりをはゞかりながら、男の片腕をひしと、うす衣のわきのしたに抱きしめて、有明行燈のそばへ連れて來たが、首にも、手にも、額にも、なにやら眼に見えぬおもしの垂れてるやうな鶴で……
「鶴さん、おまへ、どこぞわるいのではないかえ？」
「……………」
「えエ鶴さん……」
　だが、彼は、白いほそ面を、風に揺られるやうに横にふつた。
「……どう、おしだらうねエ。」と、その鶴の膝の上の、片手のコブシを、そつと掌へとつてほぐしながら
「まあ、綺麗な手をして……おまへ、このごろ、仕事はやすんでおいでだね。」
　それから、首をかしげて、すつきりとみだれかゝつた男の髪を見あげて
「ま、髪まで結げて……」と、無心にほゝゑんだが、ふと、雨戸の隙間風に不安をさそはれて、やつれた眼を、そのまゝ凝然と男へ見はつた。
「己アな、お吉つあん……」と、鶴が膝を見ながら、やつと口を開いた――「己ア、も、來まいかとおもツたんだ……」
「え!?」
「……江戸へ、江戸へ、たつことに、きまつたんだ。」
　そいつて彼は、はらわたを吐きだすやうに、思案の重い溜息をもらした。

五

「江戸へ、鶴さん！」
「あゝ……」
「江戸へ、おまへ、なんぞ、用でも、できたのかえ？」
「……………」
「さうして、いま、おまへ、あたしに逢はずに、たつてしまふと、おいひのやうだつたけれど……鶴さん、ねエ鶴さん、さ、はやく、そのわけを聴かせておくれ。」
「……しゆつせだ。」
「え？」
「出世だ、お吉つあん……」
「ま、おまへが出世！　まあ、出世！　うれしい！　ほんとに、あたしや……で、それは、いつたいどんな……え？」
「さむらひになるんだ、さうだ……」
「おさむらひに！……あゝ苗字帯刀どめんだね。」
「なんでも、江戸の、お大工頭とやらのしたになると、さういふんだけれど……」
「江戸の、御作事方の、御大工頭の、組下に、あの、おまへが、おなりかえ!!」
「さう、いふ、はなし、だが……」
「さう、いふ、はなし……まアをかしい！　さう、いふ、はなしつて、おまへ、もう、それは、あの、

きまつてゐるのでは、ないのかえ？……」
「……きまつては、ゐるんだ、が……」
「ほゝ……鶴さん、おまへ、あたしに、なにか、遠慮をしておいでだね……どこの國に、いゝえ、亞米利加とやら、畜生の住む國はしらないよ、ほゝ……どこの國に、おまへ、女房に、ほゝ……自分の出世を氣がねする男が……」
「それが、それが、おきち……」
「それは、あたしも、この四五日おまへが顔を見せておくれでないから、どんなにもうさびしかつたろ。でも……ほんとにうれしいよ。あたしもね……」
「それが、お吉つあん、さう……」
「いつぺんは、あたしも、江戸へ出たいと、さうおもつてゐたんだもの。それを、おまへが、そんなに、たいそうな出世をしておくれで……もう、もう、江戸で、ふたりで、暮したら、どんなに、たのしいことだらうねエ……」
「それがな、お吉つあん。ふたりで、ゆくことは、出來ないんだ……」
「え？　あの、あたしが、ついてゐては、いけないとおいひかえ？」
「……………」
「あゝ、あたしは、ほゝ……鶴さん、あたしは、名主さまの、厄介者だつたねエ……」
「……たとひ、それでなくとも――」
「たとひ、さうでなくとも！……あゝ、待つよ、鶴さん、いゝえ、なん年でも、あたしや、この下田で、ぢいつと待つてゐますよ、おまへの出世のためなら……」
「……お吉つあん、だから、己あ、もう來まいと、おもつたんだ……」
「え、え」
「切れてくれ……」
「え！」
「これまでの仲と、あきらめてくれ……」
「え、な、なんと、おいひだ！」
「出世を、出世を……」
「出世！？」
「己あ、小ちやな時分から、刀が、さしてみたかつた……」
「ま、おまへ！……あゝ、あたしを、あたしを、唐人に、くれて、しまつて、それで、その、出世とやらを、しようと、おもつて、おいでなんだね……」
「おカミの、きびしい、おほせだ……きかねば、おまへのからだも、どうなることか……」
「鶴さん！　あたしや、お白洲の砂の上で、あんなに、きつぱりと、おことわりしたんだよ。」
「……知つてる。」
「それを、おまへは……そんな、そんな……もし、あたしを可愛いと、おもつておくれなら、さ、いつしよににげておくれ！」

六

もう黑しほがちかづいて、なまぬるい夜風がうごいてゐた。
有明行燈のほのほをうけたお吉のひとみに、生むくないち念の火がじり〳〵と燃えて、鶴にせまつてゆく。
鶴は、頰を寒さうにふるはせて途方にくれてをるのであつた。
「連れて逃げろたつて、あんなにきびしい見張りんなかを……」
「怖いかえ、え？　鶴さん。」
「……怖かないが、もしひよつと、番所や關門で、つかまつたら……」
「つかまつたら、舌をかんで……あゝ、いつそもう、鶴さん、おまへ、あたしといつしよに、死んでおくれ！」
「そ、そんな、おそろしいことを、お吉つあん……」

「いゝえ、死んでおくれ、死んでおくれ……おまへ、いま、おさむらひになると、おいひぢやないか。」
「な、なにをお吉つあん、そんな死ぬ、死ぬくれえなら……」
「……あたしなんかと、いつしよにはならないと、おいひだろ……」
「……とんでもないことを……」
「では、鶴さん、ねェ鶴さん……えゝ、も、歯がゆいねえ……」
七ツの拍子木が、坂したのどぶ川の邊をとほくかすめ、鶴が、そは〳〵と、三尺帯を締めなほしたりしはじめた。
「歸さないよ、鶴さん！」
「あ、おめえ、そんな聲を……」
「いゝよ、鶴さん、たとひ、知れたつて、ふたりの仲ぢやないか！　からいふうちにも、東がしらんだら、あたしやお太陽さまに、きつぱりとまをしあげるよ――これがあたしの、これがあけがらすのお吉の、亭主でございますつて……だれに、遠慮も、しやしないよ、鶴さん！」
「………」
「鶴さん、おまへも、あの、ヘロリの騒ぎを、おぼえておいでだろ。あの時、街の小使さんが、井山さまの仰せだつて、觸れてあるいたぢやないか――女に、在方へ逃げるか、家のうちに隠れて、出てはならぬと……唐人は、淫亂の畜生だつて、鶴さん！」
「………」
「その、その、畜生に、いくら、お上のおほせだからつて、女房を、自分の女房を、自由にさせてまで鶴さんおまへは、おさむらひの眞似がしてみたいのかえ……」
「………」
「あたしや、これでも、女の、につぽんの女の、はしくれだよ。たとひ、このまゝ、いつしやう、名主あづけで、すごしたからつて、たとひ、牢屋の責苦をうけたからつて、あたしは、あたしは、鶴さん、やつぱり、おまへの、女房でゐたい……」
鶴も、ほろ〳〵、なみだになつた――
「鶴さん、ねェ鶴さん……」
「濟まねエ……」
……
からすのきこえる時分に、鶴の、草履をひきずつた姿が、お吉の家の裏ぐちから、をかの松ん中へ――松ん中から、坂したの大工町へ、たましひも抜けて……

七

お吉が、そんなふうに、鶴さんねェつるさんと、めん〳〵とかきくどいた夜から三日たつた。
お吉は、みか月のやうにほそつてゐた。
どうしたのか、あの晩いらい、ぴたりと男のあしがとまつて、それつきり、こゝろぼそい燈心の火のきえはてたやうに、消息もなにも絶えてしまつたのだ。
その、よつかめのまつくらな夜の五ツごろ――そつとかどぐちへ出たお吉が
「若い衆さん。」と、呼んだ。
「へい、ねえさん、どうぞ。」と、低聲で、ぶら提燈を、彼女の足もとから、路のまん中に、垂れをあげて、しんと待つてゐる迎へかごの方へさしだしたが、彼女は、素足の指さきで、黒塗りののめり下駄をきゆつとふまへたまゝ
「いゝんですか、若い衆さん。」と、なにか投げやりな口吻で訊ねた。
「へ？」
「こんなに、駕籠までいたゞいてさ？」
「え？…あゝ、ねえさんは、もうめしあがつていらつしやるんで？」
「いゝえさ……」

「しッ…おしづかに、おしづかに。」

「ほゝ…あたしやね、若い衆さん、あたしやね…」

「ごもつとも…」

「ほゝ…あたしは、おアヅケの犬ですよ。」で、また、笑ひ聲を高くふるはせて、やつと垂れの中へ——

「さ、かご屋さん、お待ちかねだ、たのむぜ。」

——はあん、ほうと、その垂れ駕籠が、大工町の暗をぬけて、賑やかな船宿まちの三味と太鼓をくゞつて、「伊豆よし」——下田の八百善——の裏ぐちの、寸の伸びた若竹などひつそりと見える切り戸の前にとまつた。

と、その切り戸が、うちらから、音もなく開いて、ぼんぼりを持つた小女が顔をだして、若い衆にひそ〳〵と笑つた。

「ねえさん…お吉ねえさん…お待ちどほさま。」

「……」

「ねえさん…あ、お寝みですか。」

「ま、あたしは、夢を…」と、そんなことをいひながら、すつと垂れの外へ立つて、あたりを見まはして

「おや。」と、つぶやいた。

「へゝ。」と、若い衆がその彼女を見あげて眼で笑ふ。

「まあ、あたしは、伊豆よしさんへ、こちらかららうかゞふのは、はじめてだよ。」

「それあ、ねえさん、今夜アね、へゝ…それに、もし、表から、おはひりんなつてみなせえ、そら、あけがらすのねえさんだ、やれ、新内のお吉さんだと、なんしろねえさん、みんなアかつゐてゐなさいますからねェ…」

「ほゝ、あんなことを…」

「離座敷で、ねえさん、お待ちなすつていらつしやいますよ。」と、ぼんぼりを抱いた小女が、庭下駄を鳴らした。

で、そちらへ、若竹や雪見燈籠などの間を飛石をふんで——

やがて、見おぼえのある影法師のしみついてる障子の前に來た。

「きち、か?」と、その、下田奉行の支配組頭、伊佐新次郎の影法師が、こゝろやすい調子で呼びかけた。

八

そのころの、もくばん青表紙の職員錄——安政武鑑巻之三、御役人衆の部——を繰つてみると「下田御奉行」のくだりに、支配組頭、御役料二百俵、御役金百兩づつとあつて、行書體で、伊佐新次郎とでてゐる。

役がらはむろん奉行のまつぎで内務部長格、その下には、これは武鑑外だがちよいと眼をつぶつて讀んでいたゞくなら——同並、同並出役、同書物役、同下役元締、同並、同下役、同見習、同出役、同心組頭、同心、同假御抱、手付出役、牢屋番同心、足輕、蘭書飜譯方、通詞などと、屬官おほぜい——

そんな連中を踏まへて、一千坪の敷地に平板塀を廻らした役宅に住んでる彼だが、どちらへ向つても、べつに、權柄にかゝつたり、よけいな氣負ひをしたりするやうなことがみぢんもなくて、自分の役めを、草花の太陽時計のやうに、さわやかにつとめてゐた。

——恐れながら御立派な方——と、あのコンシ四郎館のある柿崎村の名主が、日記に書きのこしてゐる。

もうかれこれ五十だが、とてもさうは見えない。まみえや鼻すぢに、たましひのきえ〳〵とした、それでゐて、肩をおとして三味線をかゝへると、うつとりとなるほどの背じめと咽喉を聴かせる——いつてみれば、このごろの若竹の

やうに、まつすぐで、しなやかで、さら〳〵とした、そんな、いつしゆの風ゐんのある人がらで……

それが、五日市の羽織の着ながし、白博多いつぽんどつこの帯――八百善ウツシの茶がかつた燭の火に、ひつそりと、さかづきをふくんで待つてゐたが、ぢきに、お吉を、そばちかく坐らせて

「しばらくであつたな。」と、いとほしむやうに、ほゝゑんだ。

「えい、伊佐さま。」と、ついむかしのあどけない眼をして――「あの時は、天城のさくらを、いたゞきました……」

「おゝ、それ、それ、山駕籠の眺めが、あまりに見ごとであつたから――」

「山ざくらとやら、江戸の藝者たちの、おうはさを、きかせてくだされました。」

「はゝ、はゝ、さうであつた、さうで……」

「きちも、その、山ざくらのやうに、厭味のない、にごりのない、うれしい町藝者たちの、眞似が、してみたうなりました……」

「ほう、けふは、だいぶ……」と、さかづきを干して――「さ、まづ、いつぱい飲むがよい。」

「ねエ伊佐さま。」

「よい、よい……さ、もういつぱい……いつも、きちは、うつく……ほう、きちは、やせたな。苦勞が、あるとみえる。さ、どんな苦勞か、話すがよい。さだめし、うれしい苦勞で、あらうな、はゝ、はゝ。」

「………」

「いや、きち。きちは、よい男を亭主に持つたぞ。」

「……はい。」

「どうぢや。」

「……………」

「鶴とやら……いや、感心なものだ。よく聴きわけて、江戸へたつてくれた。」

「え！」

「また、きちも、よくあきらめて、可愛い男を、手ばなしてくれた。」

「え、え！」

緋ぢりめんと、こはくと、お召の、品よく抜えもんにかさなつてる上へ、彼女が、鶴にやせたうなじを、折れるほどふり仰いで、キリッと唇をむすんで、伊佐をにらまへた――

九

鶴が江戸へたつた！　鶴が江戸へたつた！

と、おなじ言葉が、ひとひらひとひら、ほのほになつて、お吉の頭のシンに燃えあがつた。

裏切つたものへの、にくしみや、うらみや、いきどほりや、さげすみ、裏切られたものの、さみしさやぜつぼう――いや、その、どれでもなかつた。たゞなんと名状しやうもない悪熱が、いつしゆんの間に、髮の毛にまでうづき渡つて、瞳のさきが、茫々とした火焔と泥と氷の世界にとざされてしまつたのであつた……

さうして、そのまゝ永遠ほど時がすぎた。あるひは、またゝくうちだつたかも知れぬ――ふと、涼しいものが、眼から入つて来、そちらへ、つるさん、つるさんと、なにか熱つぽくあくがれゆくうちに、意識の悪霧がすうときれて、そこに、神秀といつた感じの伊佐のひとみが、しめやかに、見ひらかれてをつた。

で、がつくりと手をついて

「伊佐さま。」と、息のしたから、すがりつくやうにいつた。

「おゝ。」

「…鶴さんは、ほんたうに、江戸へ、たちましたので、ございませうなア。」

「おゝ、それか。たしかにたつたぞ。しかも、今朝の、五ツ半…どきであつた。すつかり、

旅裝束でな。わざ〳〵暇ごひにまゐつた。」
「…わざ〳〵お暇ごひに…」
「うむ。」
条三好みの、平打ちのかんざしが、さみしい音をたてて、お吉から抜け落ちた…
伊佐は、しんみりと、そちらへ眼をおとしながら、冷たいさかづきをふくんだ
「伊佐さま」と、やがて、お吉が、しほたれた額をあげて
「鶴さんは…なんと、まをしてをりました…」
「鶴か、鶴は、出世の門出に、いさんでをつたぞ…をとこだ、をとこだ、なアきち…」
「伊佐さま、ねェ伊佐さま…鶴さんは、なんにも、あの…」
「うむ、うむ…だが、きち、鶴は、男ぢや、きちに似合はしい男ぢや。」
「………」
伊佐は、小刀をとりあげて、そのまんじ散らしの鞘を、燭にかざしながら、ふくさで、しづかにふいた。
―伊佐さま」と、もいちど、お吉が、なみだのおくの濕大な鳥睛をあげて、ぢきに、燭の火に堪へぬやうにうな垂れて、からだぢうの戰慄のこもつた聲でいつた。

「…あきらめました」
「む…」
伊佐が、ほつと、その小刀へ、溜息を吐いて、ひとこすり、ふくさをあてかけて、そのまゝ、膝のわきへそつとおいた。
「あきらめました…」と、なみだに亂れて――
「おゝ、あきらめてくれたか！」
「…はい。」
―禮をいふぞ。」
「………」
「鶴も、可愛い鶴も、それでこそ…」
「いゝえ…」と、お吉が、ふいと、齒をくひしばつて、かぶりを振つた。
「きつと、出世…」
「いゝえ、いゝえ…伊佐さま。そんな、出世など、いやで、いやで…きちは、もう、すつぱりと、あき、あきらめました！」

＋

「ほう、こまらせをるな。」と、伊佐がほゝゑんだ。
伊佐の眼には、なにかあの、小娘を、善く、美しく、つちかふといつたあたゝかさがにじんでをつた。

「えい、伊佐さま、きちは…」
「ま、よい。ひとつ、さ、酌でもしてくれぬか。」
で、お吉が、ふと、てうしの冷えきつたのに氣づいて、はぢらひながら
「…ごめんくださいませ。」と、ふらりと立つて、控への間へ――
伊佐は、その、緞子の帶のおもみにたへぬやうなうしろ姿を見おくりながら、白い指を膝のうへに伸ばして、しづかに小うたをたゝきはじめた――
さくらみよとて名をつけてまづ朝ざくら
夕ざくら…
ふと、また彼は、たゝみのうへへ眼をうつして、そこに、燭の火にとりのこされた銀かんざしに、あはく眉をくもらせて
――あはれにうつくしいをんなを、綿羊にくどきおとすのは、手ごはいくろ船のコン四郎をとらへて、ドルラルくわん銀のだんぱんをするより、ちつとばかりむつかしい――と、そんなことを、かんがへるともなしにかんがへて、でまた――たそやあんどがちらりほらりかなし、うたになつた…
お吉が、銚子をなほし、肴をはこんできた。
「きちは、」とその膝へわらひながら――うた

川といふ女のことを知つてゐるかな。」と、たづねた。
「……いゝえ。」
「ゑちぜんの、三國みなとのをんなだが……それが、をとこへふみをやつてな、そのはしに、から書いたさうな。
　傳ハ法ヲヒロメ僧ハ法ヲ賣リ吾レハ五尺ノ
　カラダヲ賣リテ諸人ノ心ヲ樂シマス
　わかるかな、きち。」
「……はい。」
「それから、つぎへ、歌を書いた
　池みづに夜なよな月はうつれども
　みづもにごらずわれもにごらず
　どうだ、わかるかな。」
「……はい。」
「きちにも、そんな歌が、詠めようかな。」
「いゝえ、伊佐さま……」
「む……」
「たとひ、きちに、詠めましても、きちは、そのやうな歌は、詠みませぬ。」
「ほう……」
「きちは、そんな、そのやうな、女郎衆のまねは、いたしませね……」
で、伊佐が、抱きとるやうなわらひをわらふと
「もう、もう、そんなおはなしは伊佐さま……」
と、コメカミをふるはせて、そつぽを向いた。
……………
をんなは、人形を愛することがすきだ。どうじにまた、人形のやうに愛されることもすきだ。ふるい日本では、いつそう、それが眞理であつた。
「ではな、きち、ほう……おこつたかな……おもしろいはなしがあるが、ひとつ、聽いてくれぬか。」
伊佐が、手もちぶさたなさかづきを下におきながら、いゝをぢさまらしく、さういつた。

十一

下田ぶしのハヤシは、いちはやい開化をやつたもので――
さきをとゝし、ヘロリの黒ふねがあらはれたとき、その、赤らしやの大ラッパ隊や小ラッパ隊、唐人ぶえや、太鼓ぐみなどが、街をねりあるいて、おびえにおびえぬいてゐるひと〳〵の神經へ、ものすごい戰慄をつたへたものだが、そのときの洋樂のリズムが、皮肉な心理作用で、しらぬまにもうハヤシにのりうつつてをつた。ちやうど、怪談にをのゝく子供が、ふいと無意識に、うらめしやなどと幽靈の口吻をまねるやうなもので。
　ヤレ千代にち千代よさあはずとも
　さきさへこゝろがかはらなきや
　なんでわたしがかはらうぞ
　日々におもひがますわいなアエ
笛と太鼓と三味線をあしらつたそんなハヤシが、とほく、にぶく風にながれて、ひゞいて來た。
お吉は、かんざしを拾ひあげてわびしく燭の火を摘んだ。
「むかし……ふるい御世のはなしだがな、と、伊佐が、もちまへの、品のいゝ、行書體のやうな調子ではなしだした――
「漢の天子さまのおもひものに、王嬙といふがあつた。容貌なら、こゝろばえなら、ひろい天下をさがしても、ふたりとはないほどの、まぶしいをんなでな、天子さまも、ひととほりならず御意にめして、あさとなく、よるとなく、もうまつりごともみられいで、かはゆがつてをられたのだ。
ところが、その國の北に、黒龍江とまをす大河をへだてて、風のさむい、ばう〳〵とした砂

はらの國があつてな、そこに蕃人どもが住んでをつた…えびすの國ぢや——紫髯綠眼、と書いてあるがな、つまり、赭ひげ青めだまの異人のくに…あ、きち、なにも氣味のわるいことは…はゝ、まあ聽け——

そのえびすの單于が、いま、まをしたうつくしい王嬙のうはさをきゝをつてな、是が非でも妻にもらひうけたい、もし聽かれずば、兵をこぞつて、漢の天下をくつがへすと、かやうになんだいをまをしてまゐつた…なんの、それだけの兵と富とさへあるならば、たかがえびすのくにぢや、まづその蕃使をたゝき斬つて、ぼく水をおしわたり、胡地の草を踏みにじる…はゝ、いや、笑止な、笑止なことには、漢には、さうもまゐらぬかなしい事情があつてな…

いやぢや、うつくしい王嬙を、そんな異人にやることはならぬと、やさしい天子さまが、どれほど家來がいさめても、お聽きいれにならぬ…人情、だが、天下のたいへんには、粹も、無粹も…いつてはをれぬ…

——そのうちに、その、わかいうつくしい王嬙が、けなげにもふんべつしてな、まゐります、どうぞえびすの國へやつてくださいませと、天子さまにとりすがつて、おひまをねがつたさうな…たれが、住みなれた御殿や、美々しい都、だいいち、それほどやさしい男…天子さまをふり捨てて、天涯萬里、さむかぜの砂をふくえびすの國へまゐりたかろ…

それを、王嬙が、その赭ひげの青めだまの異人につれられて、すゝんで、まゐつたのだ…そのとき、年が、おゝ、きち、きちとおないどしではなかつたかな、十七であつた…」

十二

お吉は、伊佐のものがたりのかもしだすまぼろしと現實のアヤに、しだいにひきこまれてちひさく身もだえしたり、うろうろと自分のかげぼふしを見たりなどしながら、耳をすましてゐた。

伊佐がはなしつゞける。

「そのときのわかれは、あはれにかなしいものであつた。みかどは輿にめして、咸陽の北の灞橋——ふるさととほく、さみしい、葉のおちた見かへり柳でもありさうなところだが——そこまでおくつてまゐられて、その、馬にのつて、びはをかゝへて、秋かぜのなかをとぼとぼとえびすの國へひかれてゆく王嬙に、しみじみなごりを惜しみたまうた…

で王嬙は、一歩一歩、天がいと…やがて黑龍江のほとりへたどりついてな、こゝは漢と蕃國のくにざかひときいて、馬をおりてとほくみやこのみかどへ、最後のわかれをまをしあげて、で、で、すきをうかゞつて、その、暗い、さむい、河へ身ををどらした…」

「ま！…」

「蕃卒が、やうやくひきあげたじぶんには、もう、こときれてをつた…そこで、さすがのえびすども、なみだにくれながら、そのなきがらを、ねんごろに河のほとりに葬つた。

えびすの地に生える草は、みわたすかぎり枯れ枯れに黃ばんでゐるのだが、その王嬙の塚ばかりはいつも、みづみづと青草におほはれてゐたといふ…

どうぢや、きち、おもしろいはなしでないか。

「…なんとやら身につまされてかなしうなりました。」

「はゝ、はゝ、王嬙は、きちとおないどしで、きちのやうな、美人であつたな。」

「……」

「かりに、きちが、その王嬙であつたら…」

「あの、わたくしが？」

「うん。」
「きちは、きちも、やつぱり……」
「死ぬか。」
「……はい。」
「ちがふぞ。きち。はゝ……それは、量見のせまい、ありふれたをんなぢや。」
「え、」
「いや、きち、昭君――王嬙のあざ名だが――昭君が、入水したなどとは、じつは、はゝ、うそだ。」
「まア伊佐さま。」と、なみだの眼でほゝゑんだ。
「黒龍江ニ沈ム明妃青塚ノ恨ミなどと、それは、小さな人情にしばられた繪そらごとぢや……なんの、身勝手に死ぬくらゐのとこは、はゝ、女郎でもするわ、なあ、きち。」
「………」
「昭君は、もちつと偉かつたぞ――天下のおんために、みかどのおんために、ようく辛抱してな、その、暗い、さむい黒龍江をわたつてえびすのくにへ入つて、氣味のわるい豬ひげ青めだまの單于の機嫌をとつて、りつぱに世つぎまでまうけたといふぞ……それでこそ、それでこそ、あつぱれをんなだ……きち、さうは思はぬか。」

お吉は、身じろぎもしずにうな垂れてをつた。
「……昭君のけなげさがわかるかな。」
「……はい。」と、袖でなみだをふいた。
「おゝ、わかつてくれたか……たいていは、きちも推量してゐるであらう……いや、くどうはまをさぬ。きちは、につぽんの、昭君になるのぢや。」
お吉は、そのまゝそこへつゝぷして、むせびあげて泣いた。
「……おほかた、百ねん、千ねんの後には伊佐などの枯骨は、墓標もなくて、ちり〳〵と消え失せようが、きちの塚には、みづ〳〵とした青草が……はゝ、泣くな、きち、泣くな……」
しんとしたなかを、下田ぶしのハヤシが――

十三

その夜からいく夜かすぎたある日の――かけあんどんがともつたりともらなんだりしてゐるじこくで……
町を、はしからはしへ、縦につらぬくひとつの道すぢにそうて、町家の軒さきに、くらく人だかりがつゞいて、はた〳〵と、かうもりが、なかぞらにまようてゐた。
しいんとした街に、にんげんの死骸とくわれいな花嫁とをいつときに待つやうな、あやしい吐息の火照り――
――唐人は、いつしゆの祕法で、女身の精氣をすひとるといふ……
うつくしい、かよわいものへ、おもふぞんぶん石を投げうつ快感……
「寄るな 寄るな、えゝい、寄るな！」
昂奮したつきざむらひの、さけびごゑが、高らかにきこえて、大きな「のりもの」が、群衆でせばめられた道はゞいつぱいに、牛のやうに默々と、うごいてきた。
黒うるしを塗つた腰あじろ、飾り房のある窓すだれ、日おほひ、押ぶちなど、みごとに格式のそなはつた壯麗なものだが、長さが六フィート五インチ、素木ひのきのかき棒は、じつに二十二フィートもある、前代みもんの大乘物――すなはち唐人コン四郎が、鳥モ、ヒキのすねをらく〳〵と投げだして、御用所へ開國のだんぱんに通へるやうに、とくべつに註文してつくらせたもので……
肩に輪つなぎを染めだしたかんばんを着た陸尺、まへとうしろにふたりづつ、羽織はかま、大小さしたつきざむらひ一人――
寄るな、えゝい、寄るな！」

無数の顔が、空のうすらあかりにひとみを擴大して、くちびるに白いつばきをためて、ともすれば、その窓すだれのうちらへ、ふら／＼と吸ひ寄せられてゆく。

そこに、死ぬほどの情念をおもひすてたお吉が、うらわかい美肉を、しろ／＼と裾もやうの出たかたびらに包んで、脇息のわきに、端然とすわつてコン四郎館へ、はこばれてゆくのであつた――よろこびも、かなしみも、いつさい幕のやうに無表情で、たゞ、髪かざりの銀と鼈甲と、口紅と、それに、なんとなく手さきにおさへた塗りの女あふぎが、ほの明るさのなかにひかつてをつた……

ほとゝぎすが、さかんになくころで。

お吉はもとより、町のたれひとりとして知つたものは無かつたが、この日から、いく日かした五月二十七日に、下田奉行ふたりの連名で、こんな上申書が幕府へ送られてゐる

亞國官吏等召使ひ候女の儀につき申し上げ候、アメリカ官吏ハルリス、同通辯官ヒウスケン儀、當表に在住まかりあり候については、自然病氣の節、手許において看病等、實意に世話いたし呉候ものこれ無く候ては、差支へあり、右はなにぶん男子にては、行屆き難き筋につき、女両人差出しくれ候様、先達中より度々申し來り候へ共、程よく申し斷り、成るべく取あへざる様致し置き候處、切迫懇願におよび、速かに決答請度段申したて候間、追々申したて候件々も、當時引合中にて、公私混雜いたし候節につき、右等の引合相濟み候後は、勘辨も仕るべき旨斷りに及び候處、殊の外立腹いたし、別紙申し上げ候境外出あるき外二ケ條の儀につき、去る十八日相濟み候書付、翌十九日に至り、通辯官ヒウスケンをもつて、森山多吉郎(通詞)方まで差戻し、右は容易ならざる件々も、今般互に別段誠實の廉にて、それ／＼約諾いたし候儀、然る上は私共においても、同様懇篤を盡し、前書女差出し候儀、許容これあるべきはもちろんの儀と相心得候處、ことわりをうけ候段心得がたし、大體不實の所置これあり候ては、懇切を表にいたし、懇願の次第は、詰り不承知の儀と、相聞え候由をもつて、二ケ條とも破談の趣き、官吏申しきけ候由、ヒウスケン申しきけ候

十四

――らしやめん交渉てんまつ上申書つゞく。

……元來、女さしだし候儀は好ましからぬすぢなるはもちろん、そのうへ下田町には、いまだ晴れて賣女渡世さしゆるし候ものもなく、かた／＼不都合のしだいにつき、このうへとも、しひてことわるべきやと存じ候へども、ほかに至重の事件など、數廉の引合もこれあり、かつはゆく／＼相こばみ候わけにもいたりがたきすぢと存じ候あひだ、彼のこひに應じ、つかはし候つもり評定つかまつりをり候うち、同二十日、官吏不快につき、名代として、ヒウスケン御役所へまかりこし候につき、面會におよび候ところ、こなたより誠實の意をうしなひ、かねて内願いたし候、婦人の一件きゝずみなき故に、前書の書面もさしもどし候儀に候へども、右一條きゝずみこれある上はさしもどし候書面へ、私ども調印いたしつかはし候はゞ、うけとるべく候あひだ、懇願の次第、すみやかに許容うけたくまをしきけ候。

余事とちがひ、病氣にて切迫いたし、ひつしの歎願には候へども、ほかの條約ずみの國々より、この後さし措き候官吏へも相ひゞき、容易ならざるすぢにつき、支配むきへも、あつくかんべん評議つかまつり候ところ、このたび江戸おもてにて、別段おほせふくませられ候とほり誠實をつくし應接し候へども、事情は、内願の婦人一條、相とゝのひ申さず候はでは、誠實の意味、くわんつう仕りかね候おもむきに主張いたし、しな〳〵苦情まをしたて、なにぶんにも右をさしおさへ候ては、境外出あるき等のかども、談判相とのひ候儀まで手もどりに相なり、ほかとりあひまでも、とりまとまる期これなく候につき、そのすぢへまをし諭し、ないじつ船方らの酒の相手にやとはれまかり出候をんた一人前書右病人の名目をもつて、官吏かたへ、さしつかはしまをし候。

右とりはからひ候については、以後、軍艦そのほか渡來のせつ、官吏同等こんぐわんいたし候ては、もてのほかにつき、前書兩人にかぎり候儀のむね、とくとまをし談じ候ところ、彼方にてもおもてだて候ては、官吏役まへにおいて、迷惑におよび候あひだ、極祕のすぢにて、本國船碇泊ちうは、決してよびよせ候儀いたさゞるむね、きつとまをし出候。

渡來の外國人へ、右とりはからひ等、おしうつらざるやうとりしまり、それ〳〵かんべん仕り候、委細の儀は、別紙まをしあげ候件々、書付とりかはせ相すみしだい、私どものうち一人出府つかまつり候つもりにつき、そのせつまをしあげ候やう仕るべく候　以上

安政四年五月二十七日

井上信濃守

中村出羽守

――朱書かきいれ

通辯官へも同樣、女さしだすべく候ところ、右は相應のものこれなく候につき、いまださしつかはしまをさず候。

この日づけの五月二十七日は、日米通商條約の議定書調印の翌日で、おなじ二十日に、ヒウ助さんが、この本文どほり、らしやめんだんぱんに御用所へ來てゐるいきさつをかんがへると――アメリカの花旗と日の丸の下に立つて、どことも知れぬほとゝぎすに、むつと囁きいつてゐるお吉の姿が、まざ〳〵と見えてくる……

花旗の章

――村の領事館散策――

一

コン四郎館は、村のおくの、丘の背にある、禪寺だ。

苔のからびた石だんが、兩わきに、こずゑほのぐらくそびえた二本の榧のあひだを、小きざみに、なかぞらへもりあがつて、そのうへに、靈地の天が、青々とまぶしくかゞやいてゐる――

ちひさな黒ぬりの冠木門……

いく世紀も、いく世紀も、村の死者が、このだん〳〵をのぼつて、門のうちへ……やすらかな淨光のなかへ、消えていつた。

世路や生惑のにほひ、酒のかをりなどで、たましひの濁つたものは、この門をいるべからずと、石の制止ばしらが、風化しながら、門のそばに、うそぶいてゐる――

……………

その門のうちらで――そのこだかい境内で、

いま、ひとつの殺戮が、おこなはれようとしてゐるのだ――

草屋根の本堂のまへの庭に、外光が、さんさんとくだつて、枝をはつた佛手柑の葉が、青金いろに反りかへつてもえてをる。

なんともしれぬ浸透性のあるうめきごゑが、とほぐ〜しい餘韻をひいて、その樹かげから、たちつゞける。

いつぴきのあめ牛が、がんじがらみに脚のつけねをしばられて、大々としめつた眼を、ぢいつとみひらいたまゝ、下顎の白い歯をそらへあげてないてゐるのだ。

いくすぢかの綱が、あと脚からうしろの石ぼとけの胴へ――まへ脚から、佛手柑の幹へ、ぐるぐると巻きついて、わづかに、鼻輪につないだ手綱だけが、なきごゑにつれて、地上にゆるくとぐろをまいたり、ほぐれたりしてゐる。

あをばへ、ぎんばへ、くそばへ――

膚の青黄いろい、べんぱつの支那人よにん裁縫師、料理番、洗濯夫、下男がしら。みんな、こちらでつくつた黒やそらいろの、海氣の支那服を着てゐる。それが――

ひとりは、大河のほとりにたつやうに

ひとりは、アヘンのゆめを追ふやうに

ひとりは、水瓜をかじるやうに

ひとりは、野菜置場を見まはるやうに

要するに、たれもかれも、その、かなしげなあめ牛の眼を見ながら、なにかべつのことを考へてゐるのだ。

「マトンは？」

「ない。」

「ハムも？」

「ない。」

「ビスケットは？」

「ない。とつくにない。」

「サン・ジャシント艦(コン四郎を送つて來た軍艦は……」

「さうよ。いつたい、サン・ジャシントはどうした!?」

「それに、ロシアも、フランスも……」

「オランダも、來ん！」

「來ん！」

「來ん！」

「どしたんだ……」

そんなことを、たれが問ふでもなく、たれが答へるでもなく、低く彼らの言葉で、つぶやきあつて……さて、ひとりが、上着を脱ぎすてて、うへはんぶんはだかになつて、キラ〜と光るまさかりを、ステッキみたいにかゝへて、無造作に牛の前へ寄つていつた。

ほかの連中は、すこしはなれて、立ちはだかつて、やつぱり、べつのことを――日本の干大根の不味さといつたやうなことを――ぼんやりと考へながら、牛を見つめる。

その牛の白い歯が、にぶくそらへ……しみとほるやうな、なきごゑ。

まさかりが、キラリと空を切つて、その眉間へ――一撃、二撃、三……

佛手柑の枝が鳴る、石ぼとけがゆらぐ……血シブキをふるひおとすやうに。

……みんなが、いつしゆんに青ざめた顔を見あつて、こはばつたわらひをわらふ。

まぶしい太陽。

門のわきの、つばきと梅に抱かつた、黒船の帆ばしらのやうな旗竿の天邊に、アメリカ星條旗――

コン四郎さんも、ヒウ助さんも、談判に出かけた留守の間……

二

「さみしい流泊人」と、さう、この牛ころしのあつたじぶんのコン四郎さんを、ハリス傳の

著者が呼んでゐる。

はじめて、フレガット軍艦サン・ジャシント（木造くろふね快速帆船――安政三年七月二十一日下田入港）から、コン四郎館へうつったときおなじ八月の五日に持つてきた食料品が、ほとんど無くなつてしまつて、日本のゐのしゝのハムをつくつたり、鹿や兎、それに金鶏鳥？（ハリス日本日記による）を食つたりして、わづかに肉食の慾をみたしてをつたころのことだ。

アメリカほんごくからの訓令もふつつりと、とだえて、もう一年はんほどになる。いち二ケ月したら、きつとまたくるといつたサン・ジャシント艦も、（支那の鴉片戦争にかまけて）そのまゝいつたきりで、いつからすがたを見せぬ……

コン四郎さんは、素木の、おほきな、たそやあんどんそつくりの鳩小舎をつくらせて、門のわきの領事館旗とはんたいのがはに立てた――はしら八尺、箱のたかさ三尺、巣が十一。

門の袖べいの屋根のうへへつきでたそのたそやあんどんから、まいにち、色輪のまぶしいキジ鳩が、はた／＼と飛びたつて、そらの星條旗のまはりを舞うた。

銀髪におほはれたコン四郎さんが、とき／＼そのあんどんの下にそつと寄つて、びろうどえりのついた割羽織の腰を伸ばして、さかさ三角に白襦袢の見える胸を反らして、ロビンソン・クルウソオのやうな、さみしいひとみを、そらとほくあげるのだ。

四十ポンドからだの肉がおちたといふが、そのやつれた、シラガの芽の出たあごを浮かしてなにかしら、いとけないくちびるを、白ひげのかげに、はんびらきにひらいて、ぼうと、はるかな空へ見いるのだ。

と、その、光の充ちた青空を、三本マストの黒ふねが、いく十もの帆を張つて、星條旗を吹きなびけつゝ、しづ／＼と天くだつてくる……青々としたキャベツ、紅いトマト、新鮮な牛肉とハム、それに、ニュー・ヨオーク・タイムスと、陽氣にひらけたアメリカの男、女、子供らを、もり／＼と満載して！

「おゝ！」と、皮ぐつのつまさきまで、歡喜にふるへて、骨ばつた両手を、胸のまへでひしともみあはせる……そのいつしゆんにすうと、まぼろしが、青空にうすれて消えて、あとにはただ、キジ鳩と領事館旗のあるはてしない日本の空が――

で、また、黙々と白ひげをかんで、そのロビンソン・クルウソオ鳩小舎をはなれて、あの佛手柑と石ぼとけのあたりをすぎて、本堂の側面――自分の部屋の半障子を、下に見ながら、低いがけにのぼる。

そこに、こなひだ、自分で植ゑたしやくなげがピンクいろに花さいて、花のなかに、十字架をきざんだ石塔が――たとへば

じい・だぶりゆう・はりつしゆコ、ニネムル。

合衆國こねちかつと州へぶろん郡生レ、一八五四年五月五日死亡、二十二歳

合衆國ふれがつと、ほゝはたん號ニテ佐務ニ就業中、前檣帆桁ヨリ墜落死亡。彼ノ船友コレヲ建ツ

白い碑面に、そんな文句の讀まれる石塔が四ツ……みんな、ヘロリの時に、こゝへ來た同胞だ――アメン。

三

あらいぺんけいの丸羽織を着てうすいろの平帽子をかむつた通辯のヒウ助君が、散歩からもどつてくる。

ヒウ助君は、いろの白い、大々とした美男の青年――二十六で、くすぐつたいくちひげを生

やしかけてゐる。
まるい肩に、まるいあごをすゑて、おほまたにあゆみながら、その、ちよぼひげのかはゆいくちびるをまるめて、オランダやコロンビヤの戀の小歌を、こごゑにうたふのが、彼の好きなくせだ。

とほいアムステルダムにおふくろが待つてゐると、ときをり下男がしらの亞深の女房に、子供つぽいうちあけ話をやるが、ぢきに、若々とわらつて、そんなおもひにくつたくしない。

パンの小麥粉もバタも、こゝろぼそく減つていつて、「さみしい流泊」のコン四郎さんと、さみしい父子のやうな生活をつゞけてゐるのだが、いつも、につぽん晴れの顔をして……陽氣に、日本娘のはだのやはらかさなどをかんがへて――つまり、彼にとつては、若さがいつさいの太陽であつた。

そのヒウ助君が、どうしたのか、青い眼をうはづらして、頬を眞紅にして、平幘子をわしづかみにつかんで、雲をふむやうに、門内へ駈けこんで來た。

さうして境内を一氣にぬけて、本堂の木のだんだんを、皮ぐつのまゝとびあがつて、燈心草のたゝみをづし〳〵とへこませながら、さけんだ。

「コンスル！　コンスル！　コン……あ、給仕！竹三！　コン、コンスルは？」

前世紀の舶載品らしい、がつしりとした足に彫りのある楕圓卓がもと須彌壇のあつた板の間の前にうすぐらく、あぶらびかりにひかつてゐる。そのかげから、すみ前髪の、短い木綿ばかまをはいた竹三ボーイがあらはれて、なにかただならぬけはひに氣をのまれながら、手ばうきを、左手の、圓柱から圓柱へ高くかけわたした幕仕切りの方へあげた。

で、その前へ近づいて

「コンスル！」と、少し落ちついた聲でこちらへ呼び、「股引の切れ目」から、いろ絲のぬひとりのあるハンカチを引きだして、汗ばんだ額をこすつた。

「コンスル、おやすみ……そんなはずは……コンスル！」

「……おう、」と、聽きなれた次中音が、その部屋のま向うの、がけの窓からひゞいて來た。

「あ、窓だ。」

さう口んなかでさけんで、またひとつとびに本堂を飛びおりて、石ぼとけのわきを、そちらへ、雜草をふみしだいて、のぼつていつた。

そこに、ゆふぐれちかい風にゆらぐ石楠花の花のなかに、おいのりからさめた眼をやはらかに見ひらいて、コン四郎さんが立つてゐた。

「浪人が……さむらひが、コンスル……」

「ロニン？　ヒウ助君、サミュライ？……」

けふ、下田から、あの、相の山の見える道を、散歩しました。いちまいるほどまゐりました。浪人が、さむらひが、ひとり、さきを……雨がはとも畑で、」

「まむ……」

「それが、近づくと、ふりかへつてわらひました。……コンスル、あの例の、日本人微笑です……そして、そして、そのそばをとほりぬけかけて、コンチハ、と、」

「ふん……」

「こんち、こんちは、あいさつしますと、いきなり、トウジン！　マテエ！……」

「おゝ！　トウジン……？」

「待て、といひさま、長い刀をひつこ抜いて、キラ〳〵とふりまはしました。神さま！……で、僕は、僕は、ヒウ助君」

「それで、わたしは、僕は、コンスル、これを、」

そいひながら、ヒウ助君が、丸羽織の下の鞘帶につけた三角がたの革ぶくろをおさへた。

「あゝ、五連發拳銃……」
「これで、」
「撃つたか！」
「はい、コンスル。」
「撃つた！」
コン四郎さんは、骨ばつた手先に觸れる洋紅いろの花を、おもはずひきちぎつて、たなごころでもみつぶしながら、さうさけんだ……

四

コン四郎さんは、その、腰のあたりを撫でてゐる十字架墓の分身のやうに、さむさうに凝立して、「撃つた！」と口んなかでくりかへした。
で、ひとりごとの調子で
「アメリカの、コオルト（當時最新コオルト式連發拳銃）は、世界で、いちばん、たしかだ……」
「ですから、僕は、僕は、コンスル……」
「どんな、風體のものだつた、ヒウ助君？」
「はい、飾り紋を、胸と、背中と、袖につけてをりました……」
「あゝ、では、きよねんの冬の、あの、君がやられた……」
「さうです、コンスル。あのときも、さうでした、でも、人間は、違ひます。」
「ふむ……あのときは、君も、君のコオルトは持つてゐなかつた……」
「さうです……これが、二度目です。」
「で？」
「下駄を、ハキモノを、はいてをりました。あのバザア（下田同心町所在、黒ふねに薪水糧食を補給する缺乏所内にある賣店）で見るやうなのではありません。塗りも、なにもない二枚齒の……」
「としごろは？」
「……若い、僕より若い、かとおもひます、皮膚が、あんないろで、例の、ふんべつくさい、顏をしてはをりましたが……」
「で、ヒウ助君、彈丸は、どこへ……君は、見とゞけて、きたらうね。」
「彈丸は、コンスル、そらへ……」
「外れた？」
「いゝえ、コンスル、はじめから……」
「あゝ神さま！……はじめから君は……」
「はい、コンスル、太陽を、太陽へ……相手は、それで、いつさんに、逃げていきました……僕も……」
で、まるい、白い指で、もういつぺん、一度引金の切れ目から、さつきの、いろ絲のぬひのあるハンカチを、つまみだして、ひたひを撫でながら、ほゝゑんで
「僕も、コオルトを、よく、知つてゐます、コンスル。」
それをきくと、コン四郎さんは、破顏するやうにわらつた。さうして、いきなり、ヒウ助君の、まる／＼とした兩腕を、にぎりしめて、その、ふたかはになつたあごの邊へ、やつれた銀ひげを寄せていつて
「ヒウ助君、ヒウ助君、君は、はつはつはア、君は、君のピストルより、外交のはうを、もつと知つてる、はゝはア。」
──ふたりは、ならんで、墓地をおりた。
コン四郎さんが、快活に、石ころを蹴とばしていつた。
「くはしい報告書をつくつておくんだよ、ヒウ助君。下田奉行にだんじてやるんだ──われわれの散歩をけん制しようとする巧妙な貴下のやりくちに、ちよいと祝砲を進呈しましたつて……ねエ君。」
ヒウ助君は、しやくなげの花で、くちびるをおさへたまゝうなづいた。
ふたりは、ほんたうに、父と子のやうに、なにかじやうたんをいつて、碧眼をあたゝめあひ

ながら、庫裡のうらぐちへ歩いていつた。
まつくろな海氣の服を着て、ひすゐの耳輪を垂らして下男がしら亞深の女房が、やはり黒い牝鷄に、ゑさをやつてゐた。
「まだ、卵は、生まんかね？」と、コン四郎さんが訊いた。
ヒウ助君が、鷄と女房を、いつしよに見て、からりとわらつた……

五

ヒウ助君の出くはした刺客は、例によつて、どこのたれとも知れずじまひで、けつきよく、さみしい異邦人生活に、また一抹のさみしさをくはへたにすぎない。
あの、ちんちくりんの、骨つぽい、きつねのやうな風貌をした下田奉行、中村出羽守が「當方では、まへ〳〵どほり、御番護士を、御手許にさしおくはうが、萬全の策かとかんがへまをす。」と、この機會に、逆襲的にでてきて、それでうやむやにすんでしまつたのだ。
御番護士は、上陸のはじめから五つきほど、コン四郎館内にたむろしてゐた警備ざむらひのことだが、コン四郎さんは、彼らを日本政府のスパイだと、ひどくけぎらひして例の「江戸うかゞひ」の業のにえる交渉を、その五つき間ほどかさねたあげく、つひに撃退してしまつたのであつた。

……

やはりこの「流泊人時代」のひと夜のこと——
庫裡のおくの、青むしろの敷かつた亞深夫婦の部屋——なかほどの小卓の、ひくい眞鍮の燭に、日本らふそくのほのほが、よるふかく搖らいでゐた。
そのあがりに、黄いろくむかひあつて、下男がしらのまるい額と洗濯夫亞仙のしなびた顏——ふたりとも、口のまはりに、旅愁のにじんだ、皺をよせて、それが、にぶくあをむいてわらつたり、ぢつと卓上をにらまへたり、ときをりなにか、こゑをころして叫んでをつた。
どちらも、片腕を卓子にのせて、ひもにとほした青錢を、かるく胸のまへでおさへてゐる。まんなかに、口をうは向きに、青竹の小筒。
亞深が、それをにぎつて、燭ほどの高さにあげて、しばあらく振つて、さかさにパッと卓上へ……と、雨蛙ではなうて、ころ〳〵と骰子つぶがふたつ——
くらい日本らふそくが、もう半ぶんほど、なみだになつてゐる。
ふたりとも、シロ眼を、さみしくひからせて、青錢を、やつたりとつたりしてゆく——どうせ、子供だましみたいな小さな勝負だし、よし、あるつたけはたいてしまつたにしたところで、おたがひに、とほい日本へ、いつしよに來てる仲だもの、と、そんな氣持にアマえながら、いつぱうでは、またひとかど、からだでも張るやうなはげしい氣合ひをふるひ起して、この孤獨地獄をのがれようと、そんなことも、かんがへてゐるのだ……
アナトオル・フランスのものがたる、あの話——
舟が、ひつくりかへつて、舟乘りが、ふたり、くぢらの背に乘つかつた。ひとりが、ポケットから骰子ころをとりだして……で、ふたりが、陸もなにも見えぬそのくぢらの背中で、丁半に、むちうになつてしまつたといふ——にんげんのトバク本能を誇張した、そんな場合に、ちよいと似かよつてはゐるが……亞深も、亞仙も、けつきよく、さみしいのであつた……
部屋の隅の、お粗末な木の寢臺の前に、亞深の女房が、腰をかけて、下バカマかなにか、縫ひさしのを膝に、ゐねむつてゐる。色絲の球が、そのまるまつちい片手から、尾をひいて、ゆか

の青むしろの上へ……おほかた、江南のすもゝか、きぬたの音をでも、ゆめみてゐるのであらう。

「亞深！ 啞浪と、亞茶布はゐるか？ 亞深！」

さう、なにかきほつた聲がひゞいて、本堂へ通じる廊下ぐちの、黒いカアテンが、さつとまくれた。

上着を脱いだヒゥ助君が、どうしたのか、西洋將棋の女王を片手に握りしめたまゝ、おほまたに、はひつて來た。

六

ちやうど、亞深と亞仙とが、竹の小筒をふつて、はかない丁半勝負をつゞけてゐるときに、そのからかみひとへ下の部屋では、裁縫師の啞浪と、料理番の亞茶布とが、ぎやまんの手あんどん――と日本人はよぶのだが――ガラスぶたのあるブリキ箱に、西洋らふそくの燃えさしを立てたカンテラを、ゆかの青むしろのうへにおいて、そこへ腹ばひになつて、神のあはい額を、ひそ〳〵と寄せてゐた。

「おめえのを見せな。」と、亞茶布が拔きあしの調子で、さゝやいた。

「おめえのを、」と、啞浪も、なにか隣室の骰子つぶの音に耳をすませながら――「まあ、見せな。」

「ちえツ……ほらよ。」と、あさぎのだんぶくろのかくしから、黄いろい茶ぶくろに似たのをひきだして、掌に、しつかとにぎりしめて、カンテラの火のまへへさしだしながら

「ないしよだ、みんなにあ。」

「ないしよさ。」と、啞浪も、黒い上衣のうちかくしから、おなじやうなのをとりだして、爪のくろい骨の透いた手にわしづかみにして、そこへ、ならべておいた。

「あけてみな。」

「あけてみな。」

「よ、あけてみなつたら。」

「シッ……亞深と亞仙が――」

「……ごまかすなえ。」

「ふん。」

で、ふと、本能のさきばしつた眸を、カンテラの火で、キラリと見あつたが、その殺氣も、なにか、性根のうす手なせゐか、いつしゆんに消えて、こんどは、ふたりがいつしよに、そろそろと、てんでのその、「阿芙蓉」と赤がみのはりついた木綿ぶくろの口をのぞきこんだ。

「五オンスは、」と、裁縫師が、みる〳〵悦喜に顏をゆがめていふ――「たつぷり……」

で、ふと、亞茶布を眼のすみで見て、ぴたりと口をつまへた。

「六オンスは……」と、料理番は料理番で、おなかでぢつと目方をひいて、むつつりとしてをつた。

だが、ふたりとも、眼がうるんで、鼻いきが荒れて、もうまるで全身の肉のひとつ〳〵が搖るぐほど、滿悦してをるのであつた。

――そのうちに、啞浪が、ふくろの中へおや指とひとさし指をつゝこんで、しばらく爪を鳴らしてゐたが、やがて、まつ黒な粉まつをつまみだすとともに、片手をのばして、カンテラを、自分の鼻のさきへひきよせた。

「よせやい！」と、亞茶布が、瞳孔を見ひらいて、くらがりの中から、啞浪の耳にかみつくやうにさけんだ。

啞浪は、それにはかまはずに、片手のおや指で、カンテラのガラスをおさへて、上へ、上へ、らふそくのほのほのあらはれるまで押しあげ、その黒い粉まつを、ふるへ〳〵、ほのほにあびせかけるなり、鼻を、そちらへ、カンテラの中へつゝこんだ。

「啞浪！」と、料理番が、そのわきばらをつい

て――「おめえ、にほひが、にほひがもし……
だが、さう、ことをかんでさけびながら、料理番の亞茶布も、鼻腔をいつぱいにおつぴろげて、しがみつくやうに、息を吸つてるのだつた……
しろむらさきに、茶ぐろいまじりもののしたけむりが、小さなカンテラのうちらに、ぱつとちのぼつて、ぢきにうすれ、それとともに、あはくくるみのやうなにほひが――
啞浪は、らふそくのほのほが、とき〴〵、鼻の面を撫でかゝるのもかまはずに、眼をほそめて、くちびるをむすんで、まつたくもう、鼻が燒けおち も平氣だといつた風に、ぢいつと、カンテラをかむつてゐた。
でも、その阿芙蓉のふくろだけは、ちあんと、へその下に敷いて……

七

「啞浪、おい。」と、亞茶布が、蛇のやうな眼にしわをよせて、啞浪の肩をつかんだ。
啞浪は、やつとカンテラを靑むしろの上へおろして、辮髮のはしをいぢりながら、じれつたさうに唾をおうてゐた。
その耳へ、ひとことひとこと、針をうゑるやうな調子で、亞茶布が、さゝやいた。
「おめえ、コンスルに知れたら、どうする。たゞぢや、すまねえぜ……あのぐわんこおやぢ……おゝ神さま！ だ。」
「おゝ神……」と、反射的に、ことばをかんで、啞浪が靑くやせた顎を、そちらへしやくつて
「なにを！……おらあ、なにも、なにもおらあ、わるいこたア……なあ亞茶布。」
亞茶布は、冷淡に口をつぐんで阿芙蓉のふくろを、高利貸みたいに、うちぶところへしまひこんだ。
「おめえ、喫らねえか？ ……え？ 喫つてみな……亞茶布。」
「喫られねえ。」
「ふん……やせがまん、か。やせ……あゝ、おらあ、その、がまんが……」
そいつて、啞浪が、彼のふくろをかたく片手に握りしめて、くるりとあをむけに寢がへつて膝をもみあはせた。
「……亞茶布、おらあ、すばらしい煙館を、おもひだすぜ――」と、くらい天井へ、しみつきさうなひとみをみひらいて――「ぎんいろのしゆすのかゝつた、とうしん草の、やはらかい寢どこだ――天井にあ、くさりのついた水いろランプ……あたまを、びろうどの、黑い小褥にうづめて、その、骨も、とろけさうな寢どこに、待つてゐるんだ……
婆さんが、すると銀のはりを、銀の小ばこへつゝこんで、黑いらふのかたまり見たいなやつをつきさして、そいつを、そばの、アルコホル・ランプの火にあぶる……じり〳〵と、あわがたつて、あわが、消えると、ほら、まつくろな、金いろの、やはらかい、かたまりになる……それを、指ではさんで、ばあさんが、小さい丸子にして、きせるにつめて銀の盆へ、あの、落花生油のランプといつしよにのつけて、はこんでくらあ……」
「よせやい。」と、カンテラのらふそくの火を滿面にうけて、あごをぢつとすゐてゐる亞茶布が、ちよいと、はかなさうにわらふ。
「……その、きせるのがん首を、眼のさきで、もいちど、ぢつとその、アマイにほひのするランプであぶつて――だんな、さ、いつぷくつて……」
「ぱ、ぱ、ぱかだなア、こいつ……」
「……そいつを、そいつを、亞茶布……まあいつぺん吸つてみな……どんな、どんな、氣が……もう、それあ、あれだ、たましひも、肉

も、からだぢう……あゝ、もう……」
「よ、よせ、よせやい、啞浪……こゝは、おめえ、こゝは、日本だ……」
「日本た、日本……おらあ、おらあ……」
「……おめえ、それを、そのきせるを……吸つたか？……」
「吸つた、吸つたこたあ、ないが、その、婆さんが、おれの、しんるゐだ……」
「な、なアにを……」
で、ふたりが、その、鴉片への、あくがれともだえに、あつくなつた溜息を、おほきくもらした——とたんに、隣の部屋で、あの、ヒウ助君の、聲が、ぐわんとひゞいたのだつた。
亞茶布が、カンテラをわしづかみにして、ふつと息を、吹きこんだ——まつくらになつた……から、みが、おしひらかれて、亞深と、亞仙と、その頭の上に、大男っヒウ助君の首が、こちらを、じろじろと瞰めた。
すうと、けむりを殘して、消えてるカンテラのそばに、啞浪も、亞茶布も、いちやうに、とぼけた寢顔を、見せてをつた……

八

やがて、亞茶布が、ぬうつと半身をおこして、その、黄いろいあかりを背に、こちらを見てるみんなへ、あアあアと、おほきな欠伸をした。
啞浪は、ぢつとあをむけに寢ころんだまゝ、氣ヲツケの姿勢をつくつて、不安らしく眼をみはつてゐた。
「亞茶布！　啞浪！　あアろう……グッド、あア、バッド、バッド・ボイズ！　ちよいと來てもらはう。」
さう、大きなヒウ助君が、ちよぼひげをするて、その、部屋ざかひのかも居の邊から怒鳴りおろして、ぐるりとくびすをかへし、いまさきまで、下男がしらと洗濯夫が骰子つぶの青筒をふつてゐた圓卓によつて、胸を反らした。
亞茶布が、ちよいと、啞浪の腕をこづいて、とびおきて、そちらへ、こびわらひをしながら、よつていつた。啞浪も、なにかにぶくわらつて、夢遊病者のやうに、そのうしろにしたがつた。
下男がしらと洗濯夫は、てんでに、だんぶくろのかくしん中で、青錢と竹の筒を、またぐらへ押しつけて、隅の寢臺のそばに、ねむい女房といつしよに、肩をすぼめて、立つてゐた。
亞茶布が、べらべらと英語でしやべつた——
「大人、御用で？……御夜食？　ですかな……御夜食にや、と……あゝ、アハビが、六百文ばかり、それに季節の海老が、けふ、村から、とどきやした。亞茶布が、ひとつ腕をふるひやすかな、アハビや、コンヌルの旦那には、ちつと堅い……いや、うまあくコロシて、口んなかで、とろけさうにして……そこは、亞茶布できあ、ねエ秘書官のだんな、それから、海老は、フライだが、フライのあぶらも、バタも、おゝ神さま、もう……あゝ、あれだ、亞茶布が、ひとつ、日本あぶらのフライを——テンプラつて、こちらでいひまさあ、なにね、つい、このごろ、出來た料理ださうで、それを、亞茶布が、ちあんと、もうのみこんで、ねエ大人、いえ、もう、御本公にや、熱心なもんだ、このさき、世界の、どつちのはてへ、お供したつて、亞茶布は、この亞茶布は……へゝ、そこは、だんな……大人、へゝエ、クミシウ(コミッション)は、そのかはり、よろしく……ねエ秘書官のだんな、へへ……どう、ちあ……」
「亞茶布！」
「ヒヤ、サア。」
「そんな、アハビなんざ、地獄へゆけ！」
「へ。」
「海老は、惡魔へ、くれつちまへ！」

「へ……」
「君のクミシウよ、のろはれてあれ！」
「ヘッ！」
「亞茶布！」
「……」
「けふ、唖浪と、ふたりで、日本人の薬見世へおしあがつて、アヘンを、かつぱらつて來たろ。さ、それをだしたまへ！」
「ま、大人！ そんな、この、この亞茶布が、そんな……」
「はやくだせ！」
「な、なにを、だんな。ねエだんな。祕書官のだんな……」
「だせ！ ださぬと……」と、白い、まるい、おほきなコブシをどんと圓卓に載せた。
「おゝ神さま！」と、もいちど、コン四郎さんが、日曜ごとにやる亞米利加監督教會のお祈りの口調を眞似て、黄いろい齒をむきだしながら――「なんですねエ、そんなことを、この亞茶布が……ほら大人。大人は、コンスル閣下の女王を、いけどつて……でせう？ ほら、その、大人のゲンコのあひだから、首をだしてまさあ、はゝ……」
「ちッ……あ、唖浪。あアろう！ さ、君も、だせ！ けふ、コンスルの名で、かつぱらつて來たアヘンのふくろだ！」
唖浪が、だんぶくろから、あの紅がみをはつた阿蓉芙の木綿ぶくろをとりだし、、圓卓のはしにのせて、だんまりで、ヒウ助君の眼を見た。
「あゝアヘン！」と、隅のみんなが、つばをのんで渇望いた眼のたまをぐるつと天井へ回轉させて身ぶるひした……

九

ヒウ助君が、女王のコマをにぎつたゲンコの指さきで、そのふくろをつまみあげて
「これかね、唖浪、君が略奪したアヘンは？」
「略奪……ではありません、大人。」と、唖浪が、うなだれて、小ごゑで答へた。
「ふん、ぢや君は、唖浪、これを……買つてきたといふのか？」
「……いゝえ。」
「ぢや、盗つた？」
「盗つた……いえ、ちがふ、大人。ちがひます！」と、顔をあげた。
青ざめた頬に、らふそくのほのほがにじんで、そこに、思考のこんぐらがつた表情が、せつなさうにたゞようてゐた。
「唖浪、君は、君の縫ひ針のやうに、まつすぐな男だ。さ、いつてみたまへ。」
「……大人。」
「うん……」
唖浪は、感傷的な眼を、らふそくに注いで、なにか、くちごもつた。
「僕は、おぼえてるんだ、いつか、君たちあ――」と、大きな首で、唖浪のセンチメンタルな沈黙を壓しつぶすやうに、みんなを見まはして――「街の水瓜を、水瓜見世を、やつぱりコンスルの名において、食ひ荒したことがあつた……まゐつた、あのときにあ……その、君らの、胃ぶくろへ消えた水瓜のちくしやうが、ケチな開國だんぱんに、いち〳〵、ひつかゝつてくるんだ――コンスルは、帽子んなかへ、くまん蜂をいれてるやうにかんしやくをおこすし、君たちあ君たちで、もう、石ぼとけみたいに、けろりとしてる。仲にたつて、僕あ、ほんとに、さうおもつた――この、どぶ鼠……」
「おゝ神――どぶ、どぶ鼠！」と、亞茶布が、厚手な、ちびるをひるがへした。
「さうだ、亞茶布！ このどぶ鼠！ この、手に負へぬ、悪食漢の、ちやんちやん！」と、

さうおもつたんだ……だが、啞浪、グッド・ボイ、君が、いつたんだつたね――大人、水瓜がたべたくて、たべたくて、しやうがなかつたんですつて……この手が、ひとりでに出て、この口がひとりでにかじつちやひましたつて……グッド、グッド啞浪！　で……？」

すると、啞浪が、やはり達者な英語で、うはごとのやうな告白をこんな風にしやべつた――

「祕書官閣下。けふ、ひるま、下田の街をあるいてをりました。絲を買ひに出たのです。大人の、乘馬股引の、あの邊を、鼠が……鼠が、くひやぶつてゐましたから……」

「へむ……」

「絲屋のとなりに、蒸菓子を賣つてをりました。僕は、領事館の啞浪の名において、それを、求めようとしました。ことわられました。そこで僕は、あらためて、慈悲ぶかいコンスルの、コンスル閣下の名によつて、その、僕のデザアトを買はうとしました。しかし駄目でした。僕は、その見世をサヨナラして、次の見世へゆきました。そこも、ことわられました。そのつぎも、駄目。そのつぎも……どの菓子屋でも、僕が、軒したへ寄つていくと、いきなり、眼をトがらせて、ぴしやりと、例のあいさつをくれました――サヨナラ！……」

「サヨナラ！……ふむ。」

「むろん、僕も、そのサヨナラをつゞけました。さうして、おしまひには、もう、口をきく元氣も、軒のしたへ寄る元氣も、前へすゝむ元氣さへ、なくなつてしまつて、ぼんやりと、往來に、立ちどまりました――

ひよいと、屋根瓦の上に、あのセンゴクブネの帆柱が見えました……晝の月が、はんぶん虧けた月が、でてゐました――あゝ日本だ、日本だと……いや、はやく、領事館へ戻らうとおもつて、ふと氣がつくと、藥鋪のま前に、立つてをるのでした……」

「あゝ、その見世から、こいつを、奪つた？」

「奪つた――んぢや、ないと、おもひます、大人。」

「ふん。で……？」

＋

さみしいみんなが、啞浪の話にひきずられて、火とり蟲のやうにうろ〳〵と卓上の燭をながめる――眞赤なシンがその日本らふそくのほのほのなかにあらはれて黑く灰になつてくづれた。

啞浪は、またゝきもしずに、彼の告白をつゞけてゆく――

「……ちやうど、につぽん倉庫が、うすぐらい口をあけたやうな見世でした――まんなかに、黑うるしに金文字を彫つた、おほきな、藥のおき招牌がすわつてゐます。なま白い額が、そのへんに三つ四つ……さよなら、さよならとしつこく――だんまりで、こちらの、とぼんとした姿を、見つめるのです……たまらなくなつて、眼をあげると、その低い屋根のうへに、鼠のかじつたやうな晝の月と、變にくらい帆ばしら……まつたく、大人、僕は、なんだか、動きがとれなくなつてしまひました。

いつそ、なにか口をきいたら……と、さう思つて、無理にひとあしふたあし、その軒したへ近よると、大人、いまあふいだ片われ月が、その見世のおくに、ぼうと、ともつて……氷のやうな眼をした額が、ひくく月のしたに、こちらを向いて……

それは、大人、まつたく、おそろしいさみしさです。なんといつていゝか、かう、空間が、八方から凍りついて來るやうで――その氣配が、あやしい足音のやうに、からだぢうにとゞろいて、あたまは、じん〳〵鳴る、手足は、爪さき

まで、かたくふるへる、ひと息ひと息に、舌が干からびて

――アヘン、あへん、鴉片がすひたい！

ひつしになつて、さうかんがへたのが、いつか、さけびごゑになつてゐたとみえます。

――アヘン、賣らぬ、ない。サヨナラ。

――ある、きつとある。欲しい！

――無い、賣れぬ！

――ドウゾ賣つてください。金はいくらでも、かまはない。

――無いものは、賣れぬ。わからないチャンだ！

――この金いれのまゝあげる。この海氣のキモノもあげる。このしゆすの帽子も、くつも、みんなあげる。僕、はだかになつてもいゝ、こんなに、こんなに、おじぎをする、どうぞ、どうぞ……

――さよなら、さよなら、死にそこなひ！

――……ヒウ助さんが……あア、秘書官閣下が、あア……なんでも買つて、來いと、さう命令した……

ごめんなさい、大人。大人は、閣下は、全能です――でも、でも無情な日本人は、まをしました。

――トンチキ！　トンチキ、さよなら！

僕は、もういのちがけで、絶叫しました。

――コン四郎さんの命令だ！　賣つてくれ、賣れ！　くれ！……くれぬと、黑ふねが、黑ふねが……黑ふねだ！　黑ふねだ！

ほかに、大人、しやうがなかつたのです――コンスル閣下は、大人、まつたく、帝王です、でも、でも、日本人が怒鳴りかへしました。

――アバヨ、アバヨ、この、くたばりそこなひ！

そこで、おゝ大人、僕はなにがなんだか、わからぬ力にぐん／＼押されて、黑ふねだ、黑ふねだと、その見世へとびあがつて、そこらの藥だんすやなにかを、ひつかきはしました。さうして、その、あふようのふくろを……大人、日本人は、殘酷な、うそツキです！……」

啞浪は、頰をうす紅く染めて、そんな風に彼の告白をむすんで、持ちまへの、はかないわらひをわらつた。

ほつと、みんなが、溜息をついた。

ヒウ助君は、若い眉をむつかしく寄せて、持てあまし氣味に、彼のまるい肩をゆすつた。

「ヒウ助君！　亞茶布を、ひつぱつて來たまへ！」

そんな聲が、高らかに、あの黑いカアテンの向うにひゞいて、いつの間に來てゐたのか、コン四郎さんが、そのまゝ、もいちど、ひきかへしてゆくはぐつの音が、しんと、みんなの胸にしみた……

十一

ヒウ助君が、だんまりで、亞茶布のそばへたつていつて、ぐいと腕をとつた。そして振りかへつて胸をふくらませて、しかつぺらしく、彼の判決文を、諳誦しはじめた――

「啞浪、君は、けふ絲を買ひに出て、絲を買つた。絲屋のとなりに菓子屋があつた。君は、菓子を食ひたくなつた。そこで、買つて歸らうとしたが、ことわられた。君はコンスルと僕の名を利用した。それでも、君は、ことわられた。君は、べつの見世へいつて、そこでも、ことわられた。いたるところでことわられた。いたるところで、君は、コンスルと僕の名を、勝手に流用した――君の罪のナムバ・ワン！」

みんなは、いまさき、ふいとちん入してきたコン四郎さんの聲の餘ゐんが、うそさむく作用へて、しよんぼりとうな垂れてゐた。

「――で、啞浪、君は、夢中で……いや、こんなあ

いまいな副詞は要らん――とにかく君は、薬屋のまへまであるいていつた。その見世さきで、君は、日本人の不賣同盟に對して、あア……懐郷病の發作をひきおこした。君は、アヘンをのまうとあせつた。君は、もいちど、僕らの名を利用した。やはりことわられた。そこで君は、この亞茶布と……」

亞茶布か、つかまれてる腕の痛さに、額をしかめて、おゝ神さまと、鼠の荒れてる天井をあふいだ。

「あゝ、啞浪、この亞茶布も、君と共犯だつたはずだね？」

「さうです、大人……」と、うつかりいつて、額をあげて、その亞茶布の、眼のすみの、シロジロと光るのを感じて

「あゝ大人、いゝえ僕は、ぼかあ、たとひ、たれと、こゝのみんなと、いつしよでも、たつたひとりぼつち、ひとりぼつちだつたのです……」

「ふん。まあいゝ。そこで、啞浪、君は、その薬見世へ、侵入した。これが、君の罪の、ナムバ・ツウ！……さうして、君は、日本人を押しのけて、薬だんすから、このアヘンを、强奪した。ナムバ・スリイ！

僕は、あア、本官は、以上の三ケ條を總括して、あア、亞米利加コンシウル・ゼネラル館所屬裁縫師啞浪に、「ふれんち刑」を課するを至當とかんがへる。」

で、ヒウ助君は、ちよぼひげを動けて、いちおう、みんなの、とぼけた書髮を、見まはした。

それから、ふいとまたゝだけて

――……つまり、啞浪、あたりまへなら、僕たちは、いつか、僕たちの支那や亞米利加へひきあげてゆくときに、君だけを、この日本に、捨ててゆくのだ――だが、啞浪、君は、懐郷病者だ。君は、あア、詩人だ、つまり、あア、心神もう弱者だ。したがつて、僕は、コンスルの代理として、三ドルラル、すなはち、君の今月の月給から、その五分の一を、罰俸としてさし引からとおもふ……わかつたかね、グッド、グッド啞浪！」

おほかた涙になつてしまつたらふそくの火が、おほきくゆらいだ。啞浪は、いつそう青ざめて、力なくうなづいた。

隅の亞深も亞仙も、またぐらの青錢を、ぎゆつとにぎりしめて、あくびとためいきをかみころした。

「おやすみ、マダム亞深！」

ヒウ助君は、しりごみする亞茶布をひつぱつて、黒いカアテンの外へ出た。

内玄關を兼ねた、本堂へのみじかいわたり廊下――

いつぱうの雨戸の裂け目に、月を浴びた日本墓地が、荒れ果てて……

「亞茶布、おとなしく來たまへ、そんなに……はゝ、さすがの君も、亞茶布、このごろは、めつきりやせたね……」

十二

本堂の一方を、ほそながくふすまで仕切つたコン四郎さんの部屋――

ふとい圓柱にとりつけた小さな燈架や卓上の燭に、らふそくの火ふたつ三つ……

障子のあひだの小壁に世界地圖――その前に、かさをかむつた、火のともらぬランプ、かあはく影法師をおとしてゐる。

もうとつくに石油が無くなつてしまつて、いつまたともるか、あての無い――そこ、さみしいこのごろを象徵したランプであつた……

ぼつぼつ、いつものおぼえ帖をつけて、からかみの向うの寢室へはひる時間だが、コン四郎さんは古風な暗色の寛衣を着て、かしの木のひぢかけイスのひとつにうづまつて、わびしい

ひとみを、そのランプのある小卓へそゝいでゐた。

ランプのしたに、たなごころのぬく味のしみついた亞米利加プロテスタント監督教會の祈禱書——そのうへに、ぢつとしつぽを浮かして、やせたあぶら蟲がいつぴき……

さいしよ、この玉泉寺へ上陸つたじぶんは、あぶら蟲には、氣ちがひのやうに、いきりたつたコン四郎さんだつた——

サン・ジャシント軍艦に群れてゐたおびたゞしいこの蟲が、いつの間にか、卓子の裂け目や、イスのクションの馬のしつぽのあひだなどに、無數の卵をうみつけてをつて、そいつが、こゝへうつるとともに、いつせいに孵化して、うごきまはつた。さうして、たちまちに成熟したのが、ぼんぼん時計のおもりのつるさがつた柱にのぼつて産卵する。」ジョウヂ・ウォシントンの肖像の胴を遊歩しながら脱ぷんする。さびた鐵ストウヴの邊には、モップのやうにむらがつて、たま〳〵日本通詞の森山や、支配組頭の伊佐などがくると、こつそりと、その、折り目正しいスカアトのあひだへしのびこんで、生殖作用をやる。

ゆかは、疊の早島おもてで、それを、皮ぐつのまゝ踏んづけるから、ぢきに、ケバだつて、穴があいて、でこぼこになつて、彼らのいちばん都合のいゝ隱れ場になる。追へば日本の御番護士みたいに、いつぺんにその邊へ影を沒するし、追はねば、まるで亞米利加軍艦の陽氣水兵だ。

で、開國だんぱんのあひ間に、コン四郎さんが、白髮を搖つてさきにたち、コン四郎館員總出で、部屋んなかを、こどんだり、走つたり、四つばひになつたりしてその始末にいけない數千びき（この數、ハリスのおぼえ帖による）を、ひとまづみなごろしにした。さうして、その後にかへつたのをころし〳〵して來て、このごろでは、ほとんど、めづらしくなつた。

かんがへてみれば、サン・ジャシント軍艦で、いつしよに渡來した同志の子孫で——どこからともなく、あらはれて、「孤獨な流泊」の瞑想をひよいとよこぎるときなど、むしろとぼしいパンくづをわけて、いとほしむ氣持さへおきてくるのだ……

コン四郎さんは、自分のまへの圓卓の、縞模様を焼きつけたヴアヂニヤたばこのカンも、キングのあぶなくなつてる西洋將棋盤も——どちらも、いまの彼には、たつたひとつの救難浮嚢だが——すつかり忘れてしまつて、その、火の消えたランプの下の、祈禱書にとまつてるペットを、いつしんにながめてゐる。

時計の「鳴り物うづまき」（この時計を修繕した下田の時計師のことば）が、にぶらく十字をうつ。

「はひつていゝですか、コンスル。」

ヒウ助君の聲が、ふすまの外にひゞいて、瞑想を、さらつてしまつた。

「おはひり。」と、機械的にこたへて、堅い木彫りのイスのひぢかけをつかんで、坐り直しながら、口のなかでつぶやいた。

「あぶらむし……亞茶布……みじめな、やくざな、あぶ茶布！……」

十三

ひぽぽたますを壓縮したといつたふうな亞茶布が、ヒウ助君につかれて、よろ〳〵とはひつて來て、圓卓の數歩さきで、黃いろい歯をだして、泣くやうにわらつた。

コン四郎さんは、しばらくぢつと、それを見すゑてゐたが、やがて、おも〳〵しく口をひらいた。

「亞茶布、なにか、をかしいかね。」

「あゝ大人……」と、肩をすくめて、もいちど、そんな笑ひをわらふ。

あの、變にさきくゞりをした「東洋下民のわらひ」で、ちよいとスキを見せると、ぢきに、「おひやらかし」になつたり、「せゝらわらひ」になつたりするのだ。

コン四郎さんは、うはぐつが疊へめりこむほど、兩脚をふんばつて、その、わらひをにらまへた。

白頭が、法官のカヅラのやうにかゞやいて、強い鼻りやうが、ごまかしや感情を粉みぢんにするといつたふうに、眞向きにすわつて、一瞬間まへとは、見ちがへるやうなコン四郎さんだつた。

「亞茶布、おまへは、支那へ歸りたくはないかな。」

「あゝコンスル閣下……」と、亞茶布が、不安なまへぶれに、頰をふるはせる。

「支那へ歸れば……支那は、おまへの、天國だ。」

「いゝえ、コンスル閣下。わたしは、わたくしは……天國は、いつも、全能なる閣下とともにあると……」

「ナンセンス！……亞茶布、おぼえておくがいい、おまへが、おまへの支那の土をふむのと同時に、おまへの眼の前に、墓穴がすゑられるのだ……」

「おゝ天……！」

「その手はうしろへまはる。そのべんばつは前へひつぱられる。菜ツ切り庖丁がひらめいて、その首が、墓穴んなかへ……亞茶布！　おまへの支那の法律は、さうであつたな。」

亞茶布が、疊へひざまづいて、背中をまるくして、叩頭した。

コン四郎さんは、鐵のやうな言葉をあびせかけてゆく——

「その神聖な法律を守るために、おまへの皇帝は嘗て、無法なイギリスと、國があぶなくなるほどの戰ひをたゝかはれた。それが遠因になつて、いま、この現在までも、おまへの廣東は、フランスとイギリスの砲火につゝまれてゐるのだ……亞茶布、おまへは、それほどの國禁を犯して、わらつてゐる男だ、罰は、もとより、覺悟のうへであらう……こゝは、日本の、アメリカ總領事館だが、正道は、萬國に通じる。わかつたか。」

亞茶布は、しわの切れこんだ額にあぶら汗をうかべて、まうしろにそびえてるヒウ助君の脚をあふぎ見た。

ヒウ助君は、むつと口をむすんで、卓上の西洋將棋を見てをつた。

時計の「車獨樂」の回轉する音が、無氣味に耳を刺す。

「亞茶布、夜があけたら、おまへは、日本のらう屋へゆけ。あの、ふといべんけい格子の中で、畜生のやうに暮すがいゝ。」

亞茶布が、ぼろ〳〵と涙をこぼしながら、胸をかきむしつてアヘンのふくろをとりだして、分厚なくちびるをうごかした——めぐみぶかい、正しい、偉大な、などと、コンスル閣下にかむせるおびたゞしい形容詞を、ひつしにならべたててゐるのだつたが、聲が、出なかつた。

コン四郎さんは、だまつて、片手をあげて、入口のふすまを指さした。

ヒウ助君の大きな掌が、ぢきに亞茶布の肩をつかんで惹き起して憲兵のやうに、部屋のそとへつれて出ていつた。

「プリズン！　プリズン！」と、コン四郎さんは、ひぢかけイスに胸を張つて、それを目送してゐたが、する〳〵と、白いふすまが、彼らの姿をへだててしまふと、急に立ちあがつて、そのあとを追ふやうに、二三歩、そちらへ……だが、そ

こで、ぢつと踏みとまつて、寛衣のだんだらひもをつかんで、あてもなくふりかへつた。
つめたく光つてる世界地圖の面に、いつまでも、ともらぬランプの影法師……

十四

もうひとむかしあまりまへになるが、亞美利加のカレブ・カッシングといふ男が、條約締結の使命をおびて、支那へいつたとき、もつていつた國書のなかに、こんな文句があつた。
——太陽東海ニ昇レバ、支那ノ大山巨江ヲ照シ、ソノ貴邦ニ沒スルヤ、我ガ亞米利加ノ廣野ニ昇リテ、ソノ大河ト高岳トヲ照ス。カクノゴトキ二大國ノ政府ハ、相互ニ平和ヲ保持スル必要アリ、相敬シテ、賢明ナル行動ヲトルハ理ノ當然ナリ。神意モマタカクアラム。故ニ余ハ聰明ニシテ學識ニ富メル一米人かれぶ、かつしんぐ伯爵ヲ陛下ノ許ニ遣ハシテ、マヅ陛下ノ健康ヲ問ハシム。伯爵ハ貿易ニ關スル條約ヲ締結スベキ權能ヲ付與セラレ居レリ……
この「アメリカ伯爵」は、マサチューセッツ選出の一下院議員であつた。
東海の君主國を、うまくあやつらうとした前世紀の外交術が、行間に、間のびのしたをどりをどつてゐる。
コン四郎さんも、とき〴〵、この手をつかつた。
なんしろ、コンスルも、コンスル・ゼネラールも、かいもく見當のつかぬ日本で、たとへば、去年（安政三年）の九月一日に、オランダ軍船メチュス號が、下田へ入港した時、すぐその翌る日に、奉行らが、船長のファビウスをつかまへて、外交の初學かいてい式な、こんな會話を交換してゐるのだ。
「當所奉行、井上信濃守ニ候。國王ニモツ、ガナキヤ？」
「ハジメテ拜顔ツカマツリ、アリガタク存ジ奉リ候。國王ニモ無事ニ御座候。」
「承レバ遠洋ニテ難風ニ逢ハレ候トコロ、無事入津、大慶ニ存ジ候。」
「アリガタク存ジ奉リ候。」
公方サマニモ、マス〳〵御機嫌ヨクイラセラレ候ヤ？」
「忝ナク存ジ候。
御機嫌ヨク在ラセラレ候。」
以上のあいさつが、まづすんで奉行の一人がそつと、コン四郎さんの身分や資格を尋ねてゐる。
「官吏ノ役前ハ、諸港ニオイテ、如何ヤウノ所務イタシ候ヤ？」
「こんしゆるハ、條約ニモトヅキ、雙方不都合ナク取リ扱ヒ、スナハチ本國政府ノ別府ニテ、ソノ所ノ奉行ハ、スナハチソノ府ノ別府ニコレアリ、自國ノ船々渡來ノ節ハ、本國ノ法則ニ取リ計ラヒ候役ニコレアリ候。」
「こんしゆる身分取リ扱ヒブリ、如何ニ候ヤ？」
「士官ノ上等ニ取リ扱ヒ候——」
「諸國ニテこんしゆる差置候國々ノ取リ扱ヒブリハ如何ニ候ヤ？」
「おらんだ國ニテモ、外國ノタメ、港ヲ開キ候。こんしゆるハ、士官ノ上等ニ取リ扱ヒ候ヘドモ、御當所こんしゆるハ、ぜねらあるノコト故、こもどおる同樣ノ身柄ニ候。一通リノこんしゆるハ私同等ニコレアリ候。
——こんしゆる・ぜねらある一ケ國ニ一人限リ差シ置キ、ソノ餘差シ置キ候こんしゆるハ、ぜねらあるノ官コレナク候。
「外國こんしゆる館ハ、ソノ國政府ヨリ取

リ建テ、相渡シ候フリアヒ等モコレアルモノニ候ヤ、又ハ人數ノ多少、アルヒハ好ミニヨツテ、廣狹ノ差別コレアリ候ヤ？」

「住居ノ廣狹ハ、當人勝手ニイタシ候　おらんだ國ニテハ、自國ノ入費ヲモツテ補理マヲシ候。モツトモ、差シ置キ候國ニテ取リ建テ相渡シ候時ハ、本國ヘ對シ國辱ニモ相成リ候間、手厚ク取リ建テ、相渡候コトニ御座候」——

——コン四郎さんは、この前の月の五日に、すでにもう、村の領事館へはひつてゐたのだ。

つまり、かうした無智な日本で——それを相手に、だんぱんを運ぶためには、ときに、黒ふねで脅したり、ときにまた、「アメリカ伯爵」の鬼面をかむつたりする必要があつた。

さうして、領事館の支那人や日本人を、ひきしめていくうへにも、むろんまた、そんなポオズが、とられねばならなかつた。

こゝろの皮の厚い亞茶布を、いつぺんにふるへあがらせた今夜のコン四郎さんが、それだ——

十五

サン・ジャシント軍艦で、いつしよに渡來したものといへば、あぶら蟲にまで、感涙をもよほしさうなこのごろ——おなじ館員の一人を、日本のらら屋へおくりこむのは、おのれの影法師を、おのれの手で消してゆくやうな、いらだたしさと味氣なさをおぼえる。

コン四郎さんは、「アメリカ伯爵」の苦しさを、いまさらのやうに反噬しながら、部屋のなかを動きまはつた。

かん〳〵と鉦をたゝく音が、にぶい挽歌の聲につれて、をか下からひゞいてくる。そこのうす暗い草家で、けふの日暮すぎに、この寺の和尚が亡くなつたと、ヒウ助君がいつた……

いつか、散歩の歸り道で、死者のあつた家のそばをとほつたことがある——四五人の男女が、夕陽を浴びて、小さな蔬菜畑の隅に立つてゐた。鍬がくろ土に喰ひこむ音がした。素木の棺桶が、ねぎの植わつた畝に載つてゐた。……そつと立ちどまつて、高帽子を脱いだが、みんな、こちらへ背を向けて、項垂れたまゝで……

もどつて來て、馬丁の半助に、彼らの墓地を尋ねたら、むろんこの領事館の裏にあるのがそれだと答へた——そいへば、あの無數の石塔がどれもこれも、枯れて干からびた花束を抱へて、雜草のなかに風化してゐるのだ……

かん〳〵と鉦の音が冴える。

亞茶布を連れていつたヒウ助君が、昂奮してはひつて來て、あらつぽくふすまを閉めた。さうして、その把手を抑へたまゝで、ふすまの向うへ怒鳴つた——

「駄目だ！　いつぺんいつたら……」

「神さま、佛さま……」と、ふすまの外で、亞茶布や亞深らの聲が、號泣するやうにきこえた。

それから、くち〴〵に、例の形容詞をならべて、ふすまを撫でる音が、いつまでもつゞく。

ヒウ助君は、兩脚をふんばつておほきな背中をこちらへ向けたまゝ、ふすまをにらまへて怒號する

「駄目だ、亞茶布！　コンスルの命令だ！　亞深、君まで……！　はやく亞茶布をつれていきたまへ！……寢ちまへ、亞仙！」

コン四郎さんは、とき〴〵、そちらを盜み見ながら、額を抑へてしばらく、圓卓と穴の無い笠ランプの間を、いつたり來たりしてゐたが、やがて、低くふるへを帶んだ聲で

「ヒウ助君」と、呼んだ——「ゆるしてやりたまへ……ゆるして、あア……」

ヒウ助君が、紅潮した顏をふり向けて、まじまじと、それを見おろした。

コン四郎さんは、眼を伏せて、額へゲンコをあてながら、ひとり言のやうにいふ。

「ゆるすと……いひたまへ……そのかはり、今月は、給料半減……月いつぱい禁足……」

「でも、コンスル……」

「まあ、いゝ……ゆるすんだ。」と、「西の内」を張つた格子天井を仰ぐ。

「……では、亜茶布、君の慈悲ぶかいコンスル閣下の命令だ――君を、日本のプリズンへ送ることは取り消す……」

「おゝ……」と、いらうつな、形容詞の反復。

「サイレンス！……そのかはり、今月は罰俸、給料の二分の一。月末まで、禁足！」

で、ふすまを開いて、乗りだして

「済んだ！　みんな、ひきとり給へ！」

みんなのあし音が、畳の上を、かたまつて、庫裡の方へ、くらくさびしく遠のいてゆく。

鉦と、御詠歌が、風にのつて、高く低く……

コン四郎は、事務机から、「御用帳」をとりあげて、そのペエヂに顔を埋めて

「ヒウ助君、もう、タヽミをとりかへる時期だ（領事館の畳は、だいたい五ケ月めごとにとりかへたといふ）。それから、カナリヤの箱を催促してくれたまへ……けふの一件を片づけること、それから……あの、あア、小間使のこと……」

そこで、ぴたりと、帳面を閉ぢて、ヒウ助君に、わたしながら

「おやすみ……」

「コンスル、」

「……………」

「けふ、おもしろい話を聴きました……こゝの村で、髪の毛の赤い子供が、二三人、うまれたさうです。をとゞし……ペリーの来た翌る年で……たいてい、死んだ――ころしちやつたらしいです……」

十六

コン四郎さんも、散歩のときに見て知つてゐるが、領事館の黒船番所から、みぎはづたひにすこし東へ、人家を出はなれると、小さな流れの澪へそゝぐところに石垣をたゝんだ「異人洗たく場」の跡がある。大津波に形がくづれたまま、のりや貝がらがくつついて今はもう、さゞなみの音が、しんと耳を洗ふばかりのところだが、ペロリの来たときには、陽気水兵らが、ここにならんで、刺青のある腕をまくつて、行進曲や小うたを高らかにうたひながら、しよるつやなにかをすゝいだものだ。

星條旗だましひのはつらつとしたその時の風景は、空想してみても、胸が軽くなるが、おなじ水兵らが、をかのつばきや蜜柑の木かげ、または濱大根の畑んなかなどへ、日本娘をひきずりこんで、その結果が、星條旗艦が、火輪をまはして帆を張つて、揚々とたつてしまつたあと、いく月かして、ひとつの肉塊となつて残つたといふことは――實にうつたうしいことだ

それに、その肉塊の生命が、ぢきに絶たれて、やはり、どこかこの村の、大根畑の隅かつばきの根もとなどへ埋められたとかんがへると……

「なにかの間違ひだ、ヒウ助君」と、コン四郎さんは、悪霊をふるひおとすやうに、頭をふつた。

「でも、コンスル、ペリーの水兵らは、陽気なメリケンだつたと……

「あのかねの音を聴きたまへ、ほら……

……どうも、陰気な楽器ですな……あゝ歌つてる……」

「一ばん歌だ、ヒウ助君……あした、昼間にいつてくれたまへ、この領事館の居士和尚の名をさんだつたね。」

「はい……」
「寢よう、西洋將棋もやめだ。」
「保命酒をあかつちや……？ 血色がおわるいやうですが。」
「さう……ぢや、君もやりたまへ。」
で、もいちど、大きなため息といつしよに、ひぢかけイスに、腰をおろした。
ヒウ助君が、庫裡へでかけていつて、べにがらいろの、五葉松を彫りつけた角德利と、グラスふたつを、兩手の指の間にぶらさげて快活な足どりでもどつて來た。
「みんな寢た？」
「いえ……だいぶしよ氣てゐましたから――」
「ふん……」
コン四郎さんは、沈んだ眼をして、めづらしく、いく杯もかさねた。
ヒウ助君は、ペリーの水兵のにぎやかさを、つまり、日本娘とのあひびきを、浮き〳〵と空想して陽氣のやり場にこまつて、手をもんだり、ほゝゑんだりしてゐた。
そのうちに、ふとコン四郎さんが、グラスを、とんと置いて
「あしたね、ヒウ助君、日本の床屋を呼んでくれたまへ。」と、いつた。
「床屋？……あの丁まげや大たぶさをつくる？」
「さう、ひげを、このひげを、おとさうと思ふ……」
そいつて、コン四郎さんは、その太い口ひげをおさへて、處女のやうなはにかみを、眼ぶちにたゝへてわらつた。
「ひげを？ コンスル……」
「若きときは、だ、若くあれ……だ……」
「はあ。」
「老いては……いや、老ゆるとも、だ、なほ若くあれ、だ。」
「はあ」
「かくて、世は、めでたし……かね、ヒウ助君。」
ヒウ助君が、まるい首を反らしてわらつた。そして、その笑ひごゑのあひだで、途切れ〳〵にいつた。
「ふらあ！ コンスル！……日本の、ムスメは、ひげを、好かない、さうです。」
コン四郎さんは、そのまゝふら〳〵と立ちあがつて、イスにつかまつたり、火の無いランプの卓子へ骨ばつた手をついたりしながら、寢室のからかみの方へ、ぢゝむさく、よろけていつた。

焚身の章

一

あけがらすのお吉が、あの壯麗な「のりもの」に乘せられて、町の群衆のいきどほりと冷笑と、あやしい昂奮をあとに、さみしいこんなコン四郎さんのところへはこばれて來たのは、この夜からいく夜もたゝぬ五月雨あがりのたそがれどきであつた。

――あめりか異人、柿崎村玉泉寺ニ滯在、異人カタへ、下田町坂下町ヨリきちトマヲス女、ソノトキハジメテ異人女房ニマカリコシ候コト――

そんな風に、奉行所のあつた中村（地名）の名主清左衞門が、ほんの走りがきで、彼の日記に書きとめてゐる。まつたくそれは、おなじ日記に、「天氣ヨロシク御座候」とか、「七ツ時ヨリ雨天ニ相成候」などとあるのと同樣の、ひややかないつぺんの記錄に過ぎないが、このうちの、「異人女房」といふ一語は、當時の世相をのぞくひと〴〵の胸に、はてしれぬ戰りつをつたへるであらう。

それは、いつさいのろひと侮べつに價する言葉であつた――寄生の結婚と呼んでもいゝ、死へとつぐ花嫁といつてもいゝ……

「のりもの」は、濱の黒船番所の手前から、をかにむかつて、草家と立樹のあひだを、領事館のうらぐちへのぼつて、その板閣ひのなかの、半助馬丁の家のまへにとまつた。

陸尺が、うづくまつて、ひき戸をあけて、雪駄をそろへた。

「さ、おきち……どの、」と、つきざむらひが、小ごゑでうながした――お吉は、將軍にぢかに拜謁し得る布衣の格式をあたへられてゐたのだ。

「のりもの」をでると、そのまゝすんなりと立ちどまつて、塗りの女あふぎをひらいて、ほの青い頬に風をおくつた。長いたもとが、よひやみにうかんでる紫陽花を撫でる。しなびたわらびさしのうへの、雨あがりの空に、星くづが白けてゐる……

いまさらもう、くやしさも、かなしさも、さみしさも無かつた――まるでそれは、水死人が、肉體の最後の惱みをなやみをはつて、浮草の花のなかにうかみあがつた一瞬に、たましひの夢をゆめみるやうな、そんな、うつゝともない心地だつた。

……まつぴるま、石爐をきつた、瀟洒な茶室に、朱塗りのあんどんがともつてゐた。彼女がお客になつて、をばさまが、お茶をたててゐた。唐人笛と太鼓の音がとゞろいて、ヘロリの示威行列がとほる。まぶしい太陽の下を、大きな花旗がゆく。さん／＼とかゞやいた劍筒のあひだに、金色の肩飾が搖れる……彼女は、島田の根に、なつかしい鹿の子をかけてゐた……をばさまの胸に、懷劍をさめた緞子のふくろが……

また――彼女は、緋ぢりめんのたもとをひきちぎつて、片足のあし首をしばつて、すはだしで、大あんじ山のがけつぷちに立つてゐた。町は、つぶれて流れて、荒涼とした四日の月が、その廢墟のうへにかゝつてゐた。家も肉親も、いつさいを奪はれたひと／＼が、ヤッツケロ！ヤッツケロ！と、くち／＼に叫んでゐる。灣のなかほどに、帆柱の折れたロシアのぷうちやん軍船（ディアナ號）の、はんぶんかたむいた大きな黑い影……濱邊に、その唐人水夫が、陸あげした大砲をかこんで、なにか、ぎやまんの手行燈を振つてゐる。ヤッツケロ！ヤッツケロ！と、そのはうへ、にくしみに燃えた人々の叫びが、かれ／＼の聲をしぼつて……彼女は、をばさまを、しつかりと背負つてゐた。をばさまの涙が、彼女の頬へ、つめたくにじむ……

「さ、まづ、このうちで、しばらく休まれるがよい。」

さういふつきざむらひの聲が、耳もとで、きこえた。

お吉は、素直にうなづいて、その、行燈のうすぐらくともつた草ぶきの馬丁小舍へはひつた。

二

お吉はその馬丁小舍のすゝけた行燈の灯かげに、しつとりとかたびらの裾模樣をひいて、やつぱりたましひのまぼろしを追ひつゞけるやうに坐つてゐた。

髮のうすい半助の女房が、機轉をきかせて、ところ／＼塗りのはげおちた鏡臺を、手ぬぐひ浴衣の袖でこすつて、彼女のまへへ持ちだしたが、彼女はよわ／＼しくほゝゑんで、かぶりをふつた。

もう汗も凍つてしまつた。なみだも、とつくにかれてをつた。化粧くづれなどといふことは、ほんたうに世にあるときのはなしだ……

小舍のうら手の、おらんだいも畑のあたり

で、みだらな支那豚が夕暗によだれを垂らしながら、鼻をならしてる音が、妙にせまつてくる。と、それにつれて、土間のむかうで、コン四郎さんの南部の鹿毛が、關節のふといまへ脚をあげて、つゞけざまに床をたゝく。

くらいその馬の腰のあたりから、寢藁をかゝへた半助が、肩のくりからもんもんを乘りだして、そつとお吉をながめて、かんごゑをしぼつて、馬にアタツた。

「待つてゐろい！　畜生！　いま、くれてやらあ！……」

で、またごそ〲と、馬の腹の下へ、褌ひとつの裸身をかくした。

正面の、高い、竹櫺子を打つた窓がくらくなつた。お吉は、まつたく死の花嫁のやうにぢつと默つてゐる。女房が、くるしくなつて、なにかひとりごとをいひながら、かどぐちへ出ていつた。

……ふと、雪駄の音が、小舍の前にとまつて、話しごゑがきこえる。

「和僻(日本語譯)もなにもいらぬと、コンシウロがまをすのだ。」

「さうですか、でも、困りはしませんかな、こちらが？」

「いや、コンシウロも、ちかごろは、だいぶ日本語がうまくなつた。それに……ほかのこととちがつて、これはお互に、邪魔だつたり迷惑だたつり、だらうて、はゝは……では、拙者は、これでひきとる。……」

お吉は、その聲にさそはれて、無意識に、ふところの紋びろうどの紙入をひきだして、金のコハゼを外して、その朱塗の羽二重にはさまつた小鏡を、ふるへ〲のぞきこんだ。

「おきち・どの……まゐらう。」と、つきざむらひが、ぶら提燈をぶら〲させながら呼んだ。

お吉は鏡のなかの、口紅のこはばつた顏を、まつたく路傍の人のやうに見捨ててそちらへしづかに起つて出た。

さうしてふた足みあし、庫裡の方へあゆみかけると、まへにたつたつきざむらひが、ひよいと足をとめて、提燈をあげて、二三間さきの板べいをにらまへた。

みし〲と、そのへいが鳴つてゐる。ひとびとのひしめきあふ氣配がひどく――村の者らが、執拗にそこのふし穴にたかつて、最初の晩の「異人女房」を、見ようとあらそつてゐるのだ。

「ふん！」と、ぶら提燈をおろして、ふりかへつて――「はゝ、あんなところで、涼んでゐる、馬鹿が、はゝ……氣をおつけなされ、このへんにはフラツコの破片が、ずゐぶん散つてゐる……」

三

つぎざむらひの差しだすぶら提燈の火に、しとしとと裾のおぼろ染を浮きたゝせて、庫裡の横を、本堂のまへ庭へまはる。

ひろい夜空の下に、牛の血のこびりついた佛手柑か、ずゝぐろく枝を張つてゐて、その血シブキがウン氣にとろけだすにほひか、バタやアドがくさるかをりか、とにかくいつしゆの人種的惡臭が、なまぬるい夜氣のなかにたゞようてゐた。

紫髯綠眼のえびすの住む、ばう〲とした砂はらの國へ、いつ歩一天かいと……

あの晩、伊佐から聽いた昭君のものがたりのなかのそんな言葉が、ゆるらく頭のなかをながれる――髮がおもい、帶がおもい、肉體それじしんがおもい……

庫裡のくりやぐちの敷居のうへに、洗たくだの亞仙と裁縫師の亞浪とがならんで、膝小僧をかゝへて、あごを浮かして、さみしい星を見るやうに、こちらをあふいでをつた。

そのまへを過ぎて、すこしゆくと、あの庫裡と本堂とのわたり廊下に、ふみ段をとりつけた内玄關だ。

そこに、本堂の方から、ほの黄いろく、はだからふそくのあかりがにじみだして、やがて、割羽織を着たおほきなヒウ助君の、手燭を、花束のやうにかゝげた姿があらはれて

「御苦勞サン、御苦勞サン、コンバンハ、」と、お吉へ、いんぎんなお辭儀をくりかへした。

それから、この妙な「待女郎役」ふたり――ヒウ助君は、手燭をツラアカリみたいに、お吉の顏のまそばへつきだして、見かへり見かへり先にたつた。つきざむらひは、大刀をさげて、沒表情にあとにしたがつた――その二人のあひだにはさまつて、皮のうはぐつを踏みしめながら、本堂正面のたゝみのうへをわたつて、コン四郎さんの部屋へはひつた。

乳いろの西洋らふそくが、高くひくくあかあかと、ともつて、替へたての涼しい青だたみのうへに、沓のあとが、うす黒く散つてゐた。

飾りぶさの垂れた黑塗りの鳥籠のなかから、あかるさに昂奮したカナリヤのこゑがひゞく。

卓上の花瓶にまつ紅とまつ白のひなげし――その花束のかげから、白髭をそりおとしたばかりの(コノソリ代、九十六文ナリ)コン四郎さんが、ほんのりと顏を染めて、みんなへほゝゑみかける。やはり割羽織を着て、水いろの紗の團扇のくみ紐を、いぢつてゐた。

つきざむらひが、その前へすゝんで、切口上でいつた。

「コンシウロどの、先刻通詞がまをしあげました御小間使のキチを召し連れました。」

「コンスル、さつきおはなしのオ・キ・チ・サンを連れて來ました。」と、ヒウ助君がわきから說明した。

「あゝオ・キ・チ・サン、」と、立ちあがつて、ちらと彼女を見て、なにかこみあげるやうな調子で「ごくろ……ありがと、わたくし、としよりです、ありがと、ありがと。」と、つきざむらひの大刀を提げた右の手首を、握手するやうにつかんで振つた。

……………

待女郎役は、ふたりとも、彼と彼女をのこして、早々にひきとつてしまつた――

四

あきらめも覺悟も、もうとつくについてはゐたが、いざさうしてふたりきりになると、季節とは反對に、地獄のやうな長い夜であつた。

彼女がこれまで、時と環境のうしほに乘つて、天分をふるつてつかんできたもののいつさいが――つまり彼女自身が、このひと夜さにほろびおちてしまふといふ、そんな殘酷な惱みを、刻一刻と夜どほしかけてなやまねばならなかつたのだ――

彼女は、コン四郎さんの手のうごくまゝに、そのまそばのキョクロクの、馬のしつぽのつまつたクションに、消えいるやうに腰をおろした。

水いろにかすんだおほきな眼が、ぢきに、ちかぢかとせまつて來て、香ひ水のかをりと、氣味のわるい體臭が、いりみだれて小鼻をつく。

「かはいゝオ・キ・チ・サン……」と、耳のそばで、しわがれた聲がして、彼女の片手の指さきが、白くしわんだつめたいふたつの掌のあひだにしつかりとおさへられた。

聲もふるへてゐた。その掌もふるへてゐた。彼女にはよくわからなかつたが、それは、あたまの銀髮と、胸の情熱とが、しつくりと一致しないで、いら〳〵してる調子だつた。

「はい。」と、彼女はつゝましい笑顏をあげて、

おもはず眼を反むけた。
柱や卓上にしろ〳〵と立つたらふそくの火が、うそ寒い霧をくゞるやうな、感觸をつたへる・・・
こんな場合に、たゞもうわく〳〵と上氣して、息をつまらせたり、なんの見さかひも無く氣をうしなつて、男の腕にかゝへられたりするほど初心な彼女では、むろんなかつた。
といつてまた、放膽に男の眼を見て、いちはやくしなだれかゝつたり、かとおもふと、急に伏し眼になつて、くすぐるやうなはにかみをつくるコケッチッシュな彼女でもなかつた・・・
コン四郎さんは貝爪のうつくしい彼女の指さきに、ぢつとくちづけして、それから、その、爪紅と青味のすきとほる頬とを見くらべて、しばらく考へてゐたがふいと
「サケ、オ・キ・チ・サン、日本のサケ！」
とさういつて、背をこゞめてちよこ〳〵と部屋の隅の小卓へたつていつて、保命酒とグラスを用意した盆を持つてもどつて來た。
さうして、彼女を膝へひきよせて、その眼ぶちにほの紅らみのにじむまで飮ませ、自分も醉つた。
・・・彼の口邊のシラガの根がいくども、いくども、彼女のえりくびと頰を刺した――
・・・・・・
・・・・・・
彼は、陽氣な、子供つぽい足どりで、お吉の、小さい女あふぎを片手に開いて、はしらの燭を消してまはつた。彼女も、すこしもつれる足をふみしめて、ねり絲のまぶしい帶をふら〳〵と搖りながら、コン四郎さんの水いろ紗の團扇をあげて、卓上の燭をあふいだ。
もの狂ほしいカナリヤが、はたと靜もつて、唐紙のあいた寢室の小燭の火に、かりがねを描いた蚊帳が、ほんのりと白く、なかの寢臺を透かして・・・
彼女は、片手を、長い袖ごと、コン四郎さんの腕にかゝへられながら、凝然とそれを見つめて、立ちすくんだ――

五

その夜のしら〳〵あけ――
ゆうべは氣がつかなかつたが、庫裡のうらてに、ひくくたちまようた靄のなかに、雛芥子が、夢のやうにさきみだれてゐる。そのへりを、たましひも肉體も、昏くもだえつくしたお吉が、裾をほら〳〵と、馬丁小舍へ退つていつた。
彼女の紋の、まるに三ツかたばみをきざんだ銀かんざしや、金卷繪に青貝の散つた櫛や、鼈甲の髮道具を、懷紙にくるんで、胸におさへて・・・
ひと夜さ、まんじりともしなかつた眼が、[illegible]さむく血ばしつてゐた。
女には、いちばい慇懃なコン四郎さんが（――グリッフィス著、ハリス傳による――）支那絹の寢着のまゝ內玄關までついて來て、ベッドのぬく味の殘つた手で、彼女の片手をむねにとつて
「こんばん、また・・・オ・キ・チ・サン、」と、そつと、あひゞきの約束でもするやうにさゝやいたが、それもうつゝに、わかれて來た彼女であつた――
足もとの、あはいもやとひなげしの花のあひだに、そのをとこの寢顔がうかぶ・・・それは、がつしりとした骨ぐみのうへへ、ぢかに皮をかむせたやうな顔だつた。情念の火が、ふつと消えはてて、ふんべつを追ふ意志のみが、ひややかな線をきざんでる顔だつた。うすくしまつたくちびるに、つめたい濕ひがにじんでゐた、あたまの白い髮の毛が、あぶら汗にしほたれてゐた・・・それが、唐人タバコと四ツ足と、酒くさい

寢息をもらしながら、その彼女の足もとの、芥子畑にうかんでゐるのだ。

彼女は、きりつとくちびるをむすんで、つぶれた髮をふるはせた。

——彼女のいつさいをうばつた、彼女・いつさいを穢した、にくい、くやしい、をとこの顏だ……だが、もう、なにもかもすんでしまつた。たとひ、彼女が、その身そのまゝ、その芥子畑にとびこんで、ころげまはつて、その花びらと土へ、彼女の五體をこすりつけようとも、いつたんうけた移り香は、もう永遠に消すことが出來ないのだ……

彼女は、とぼ／＼と馬丁小舍へかへつて、そこの女房の、不精ぐもりのした鏡のまへに、絶望的なひとみをすゑた——髮をいぢる氣も、衣紋をつくろふ氣もしない、たゞぢつと、さうやつて、塗りのはげおちた鏡臺にむかつて、自分といふものの崩壞するけはひを見つめて、たましひの地團太をふんでるだけで……

……

やがて、あの、黑塗り腰あじろの、うつくしい窓すだれのかゝつた、長大な「のりもの」が、輪つなぎのかんばんを着た四人の陸尺にかつがれて、不可抗的な運命のやうに、小舍のまへにあらはれて、あの大小さしたつきざむらひのにぶい聲が、彼女の頭のシンへとゞろいた——

「おきちどの。お送りいたさう……」

領事館を出はなれると、たちまち、村の人々のあし音が、騷然と「のりもの」をめがけて、せまつて來た……

六

村をはなれて、岩山したの下田道にかゝると、村のひとたちの、みだらな昂奮に燃えた吐息のけはひも、やうやく途絶えて、らふそくの火のやうな刺戟をはらんだ朝日のひかりが、簾のあひだから、ほの青い手首や頰のはだへ、ぢつと沁みこんできた。

彼女は、ふところ、髮のものをくるんだ懷紙を膝へひろげて、青貝のつめたくひかる櫛をつまんだが、そのまゝ、ほろ／＼と涙をこぼして、脇息につゝぷした……

やがて、その「のりもの」ごと、渡船に乘せられて、川波のうへをわたつて、町へはひる。

町ではまた、もうひと／＼が、てんでの朝の勤務をうつちやつて、路の雨かはに、歯を見せて、もみあつてをつた。

みんなのまぶしい戀人の殘骸が、唐人館からもどつて來たのだ！

街の夜の太陽が、ゆうべかぎり永遠に、日蝕したのだ！

つきざむらひの聲が、高らかにひゞく。

「寄るな、寄るな！　えゝい、退け！」

……

初めの一夜が、そんなふうにすんだ——

ふた夜み夜と、それからまいにち——お吉は、死ぬほどなやましい化粧をして、その「のりもの」に乘せられて、村の領事館へはこばれていつた。

路傍の看衆が、日いちにちとふえていつて、それが、かうもりの羽ばたきを聽きながら、あるひはまた、黄いろい朝日を浴びながら、くちぐちに、のゝしりさわいだ。

——お吉が唐人館へゆく。

——お吉が異人の女房になつた。

——唐人お吉だ。

——唐人お吉だ。

いつぺん見た者も、にどさんどと、みんなあきずに路ばたにあつまつて、のろひを投げるところよさに、たましひをシビレさせた。まだ見ぬものは、むろ／＼、その、怪奇と悲壯をきはめたうつくしさへの豫感にふるへて、足をそちら

ゝをどらせた。
それには、うつてつけの一のりもの一であつた――
それは、とつぴな壯麗さと格式をそなへて、路いつぱいに、ゆるらく動いていつた。
それは陰性の巨大な生物のやうに、默々とみんなの感情に壓しかゝつてきた。
それは、あたかも、「コノ人ヲ見ヨ！」と、ふてぶてしく叫ぶらしい相貌をしてをつた。
それは――お吉の濟物をはいで町ぢうひきまはすより、もつと深酷な昂奮を、ひと／＼の神經につたへた。
もと／＼コン四郎さんが、自用に創案したもので、それを、もちまへの「をんなおもひ」から、彼女のおくり迎へにつかはせたのだが……

………

………

第四夜、第五夜と、うつたうしい狂躁をわきたゝせながら、不死身なその「一のりもの」が、町と村とを往復した。
「こんばん、また……かはいゝオ・キ・チ・サン。」
と、コン四郎さんは、まいあさ、わかれしなにお吉の、かなしげにひろごつた眸をのぞいて、そんなあいさつを、さゝやくのだつた……

七

そのたうざは、まつたくもう、生き身死に身のけぢめもつかぬ彼女であつた。
まいにちまい夜、彼女の胸は、あやしい激動にふるへつゞけた。彼女の眸は、絶えずうちらへのみ見ひらいて、いよ／＼最後の滅びをなやむ、自分の姿を見つめてをつた。
雲も雨も、町も領事館も、身邊のいつさいが、まるでうつゝで……
で、かよひ／＼して第十夜――ころのこと――よひにでた風が、ふけるとともに、ざわ／＼と、野わきかなんぞのやうに、領事館の草屋根の軒場をめぐつてさみしいひと／＼の夢を、いつそうさみしくかきみだした。
まぶたが、どうしてもあはなくて、ぢつとしてゐると、白紗の蚊帳にゑがいたかりがねが、そとのわびしい小燭の火に、そのまゝとほ／＼しくたつてしまひさうな晩であつた。
彼女は、そつとベッドをおりて、その蚊帳の秋草をくゞつて、化粧だんすのまへに立つた。
隣室の時計が一時をうつ。
「……九ツはん。」と、ちかごろおぼえた「時の讀みかた」を、ぼんやりとあたまのなかでかぞへて、たんすにはまつたびいどろの化粧鏡をのぞきこむ――と、そこに、深夜の風の音の底に、口紅まで生氣の消え失せた顔が、そらおそろしいほどハッキリと寫つて、なにかしらたましひの分裂した眼で、またゝきもしずに彼女を見かへした。
彼女は、眞紅なうき世ぶくろをくゝりつけた二つの腕を、無意識にあげて、ほつれ毛をかきあげた。
「オ・キ・チ・サン、ねむらない、えゝ？」
ふと、コン四郎さんのねばりのある日本語が、ベッドから、彼女の指の貝爪のさきにまで、とどろいた。
「は、はい……髮を、あの……」
「おゝ神……あゝ、かみ……はゝ……ねむりなさい。」
「はい。」
「あかりを消して……」
「はい。」
で、彼女が、その、くもりガラスの笠をきた小燭へ、こゞみかゝつて、やるせなげな頰を、らふそくのほのほへ寄せていつた――その瞬間だつた、部屋のそとの、まうへの崖の、亞米利加畑のあたりに、雜草をふみしだくけはひが……

彼女は、長じゆばんの袖で、銀いろの燭の柄をにぎつたまゝ、ひとみを浮かして、ぢつと耳をそばだてた。

たしかに人……しかも、風の荒びにのつて、かるい足音とともに、庭へおり立つたのが、どうやら、この部屋の雨戸の外へ、にじりよつてくるらしい……

彼女は、あへぎながら、青くこはばつた顏を、蚊帳のなかへふりむけた、と、そのひとみのさきを、黑繪のかりがねが、すうとむかうへはねあがつて、がつしりとしたコン四郎さんの寢着姿が、彼女のまん前に、音もなくそびえ立つた。——

さうして、片手は、そつと彼女の撫で肩を抱きよせ、片手は、自分のうしろへまはして、連發短銃をにぎりしめて、するどい眼を、そのあやしい雨戸へそゝいだ——

おほきな、ゆつくりとした、胸の鼓動のひゞきが、支那絹と緋ぢりめんを透して、ぢかに、彼女のはだへひゞいて來た。

八

いまごろ、風にまぎれて、唐人館へしのび寄るものは、ぬすつとか、スパイか、でなければ、攘夷の血の若い尊攘浪人しかない。ぬすつとならば、さしづめハヤリの「ものはづけ」に、とつぴな題目を提供するばかりで——お吉以後の官命ラシャメンでさへ、もらひものに、いちいち次のやうな繁文縟禮をかさねてゐる世の中であつた——

覺

一　フラソコ　三本

一　廣口小ビン　一個

右ハ玉泉寺滯在ノ通辯官ヨリ召使女まつへ被遣候ニ付、ソノ段御用所へ御訴ヘ被下候トコロ伺ヒ濟ミ相成候マデ、御預カリ被仰付、タシカニ奉預リ候

依テ御請書差上申候　以上

殿小路町　利兵衞　名主

町方御會所樣

ぬすつとでなくて、コン四郎さんが彼の「奉使日本日記」で獨斷してるスパイとすれば——しかし、スパイが、いくら風の夜ふけとはいへ、刀のぼうしさきをひらめかして、雨戸へこんなに露骨な殺氣をひゞかせることがあらうか……

……

ざわ〳〵と、うらの苦竹のやぶが鳴る。

お吉はコン四郎さんのわきのしたから、息ぐるしい昂奮のうづいた顏をふり仰向けて、たましひが明滅するやうに、瞳をうごかした。

頑丈な顎が、そのうへで、がくんとひとつうなづいて日常茶飯事をわらつてるといつたやうな微笑のかげがたゞよふ……

と、やがて、もんだいの雨戸が、ぎいつと腰をうかしてそのまゝ、窓下の暗へすつとしづみ、ぢきに、ひとふき、風の音とともに、くろ〳〵とふくめんした風來國粹家が、淺黄の家の紋どころのある片袖を、敷居のうちらへかけると見るまに、上體をそのうへへ浮きあがらせ、片手の白刃を疊について、風のいぢつてる紗蚊帳を、きつとにらまへた。

コン四郎さんが、化粧だんすのかげから、上ぐつのまゝ、おほまたにふたあしみあしそちらへ。

——「ストップ！　らうにん！」

はつとして、ふり向く鼻のさきへ、する〳〵と、紅い扱帶を引いて、兩手をうしろへ、すんなりとえりあしをのばした、お吉の花車な立ち姿が、いつぱいに立ちふさがつた。

「む……」と、浪人が、彼女のいつぽまへで、はげしい殺氣を投げる。

「ディインヂャ！　ディインヂャ！　オ・キ・チ」

と、コン四郎さんの、はじめて狂ひのきた聲が、

いつぽうしろにきこえる。

なにが彼女にやどつたのか、しろ〴〵とした素足をふまへて、きりつとくちびるをかんで、血ばしつた眼で浪人の氣合ひを壓しながら、彼女はうごかなかつた。

「除け、をんな！　除け！」

浪人は、ひくくうなつて、その彼女の、艷やかにみだれた島田のうへに、キラ〴〵と光つてゐる連發短銃へ、ちらと眸をあげ、なにか、自信のある苦笑をうかべたが、そのまゝ、音もなく、うしろの風と暗へ、姿を消した。

……あし音が、まぼろしのやうに、土と草をふんで．とほのいてゆく――

「オ・キ・チ・サン！　かはいゝ、かはいゝオ・キ・チ・サン！」

はゞのある、おほきな胸が、せまつた動悸のひゞきをつたへながら　彼女を、しつかりと抱きしめた。

彼女は、口をむすんで、眼を閉ぢて――閉ぢたまぶたのあひだにわけのわからぬ涙をにじませてをつた……

九

――人ハ自分ノミニ生クルモノニアラズ――

と、おもひ知つたわけではないが、いままで、その風自分の身ひとつにこもつてゐた眸が、その風の騷ぐ第十夜ごろの出來ごとから、やうやく外へそれていつて、コン四郎さんや領事館や、身邊の生活のうごきが、おぼろげに見えはじめた。

自分を捨てて江戸へたつて、それつきり、爪のかげほどの消息もない男――鶴への、情念のつむじ風も、うすらぐともなくうすらいで、新しい生活の薄明が、心のどこかにさしてきた――

彼女は、あの仰々しい「のりもの」を、自分からことわつた。さうして雨の日も、かつばのちりめん紐を腰にむすんで垂れて、蛇の目をはんびらきに、街の眼をよけながら、かよひつめた。

彼女は、コン四郎さんが、燃えおちようとする燭の火に、おぼえ帖（奉使日本日記）をひらいて

――あゝサン・ジャシント軍船はどこへいつた……いつまで、余にこんなわびしい孤獨を味はせるのか！……

などとそんなことを書きこんでるそばで、紋染紙を張つた針箱をあけて、彼の胴着の貝牡丹の穴をつくろつた。

彼女は、ほの〴〵と日の出の芥子畑へ出て、きり花をあつめて、居間のキリコの花瓶へさして、それからカナリヤの世話をしたりして、町へ歸つてきた。

あるとき、コン四郎さんが、ゐろりのそばにあるやうに、むつまじく、彼女のほゝをのぞいて

――江戸は、大きな町か――といふ意味のことを訊いた。

「存じません、きちは。」と、彼女が、うつむいたまゝ、溜息をついた。

「えゝ、オ・キ・チ・サン？」

「きちは、知りませぬ、そんなこと……」と、顏をあげて、ほゝをふるはせた。

八百八町も、花ノオ江戸も、いまさらおもひかへすと、彼女の鶴を飮んでしまつた口惜しい町で．大きくも小さくもなくいつそをとゞしのあの大震災に、消えてなくなつてゐたはうが、どんなにかよかつたのだ。

だが、コン四郎さんに、そんな彼女の思案のアヤが、わかろうはずもなかつた。彼は、いつか、おなじやうな問ひを、日本官吏にむかつてしたときのことを思ひだした。

「江戸の人口は？」と、その時、彼は尋ねた。
「江戸のごとき大都府は、」と、役人がばう〳〵ばく〳〵とした表情をして答へた――「諸國諸人の出いりはげしく、たうてい人別帳をつくることもおぼつかなく……」
で、「かはいゝオ・キ・チ・サン」もその天下の祕密をまもつて、うそをつくのかと、額をくもらせて
「知らない、知らない……」と、彼女の、ほそい縫針をつまんだ爪さきをぢつとさみしげにながめて、ひとりごとのやうにつぶやいた。
お吉にも、コン四郎さんのこの氣持は、むろんわからなかつた……
ときをり、性質はちがつても、さうしたこまかい氣持のハザマが、ふいと、ふたりの差向ひにおちて來た。
コン四郎さんは、そのたびに、じれつたいつばと感情とを、ごくりと飲みこんだ。
お吉は、絲にひかれるやうに、彼女のつとめをつとめていつた――さうして、その老いた彼の身邊に、なにかしらたちこめてゐるさびしさを、少しづつ感得しはじめた……お吉も、さびしい境涯にあつたことは、くりかへすまでもない――

＋

どれほど女おもひでも、しよせんは胸ぐるしい時代の怪物だし、まして三十六も年上のコン四郎さんに、お吉が、けむりほどの愛慾をでも、もよほすはずはなかつたが、かなしい事には、彼女は、をんならしいをんなであつた――そんなふうにコン四郎館參殿をつゞけてゆくうちに、その細かい、しなやかな感受性が、なによりもまづ反射的にはたらいて、をとこの生活の明暗を、消化するともなしに、消化していつたのだ。
このころのコン四郎さんを例の「おぼえ帖」によつて、文字どほり抄譯してみると――

――西紀一八五七年六月二十三日、火曜日
（安政四年閏五月一日）
……日本へ渡來して以來、もう十ケ月以上になるが、いまだに一通の手紙さへ本國から來ない……小麥粉も、パンも、バタも、ラアドも、鹽脂肉も、ハムも、オリーヴ油も、實に、この一ケ月以上といふもの、西洋糧食のいつさいが、きれてしまつた。それに、この三ケ月、なにもかも不獵で（――下男がしらの亞深がしよつちう鐵砲をかついで裏山へはひつてゆくのを見かけたと、村の年寄が作者に話した――）、余はたゞ、米と、魚と、貧弱きはまる家禽を食つて生きてゐるのだ。
健康もみじめで、食慾がなく、まるで、「雜役の副領事を、余のからだからゑぐり去られた」かに見えるほど、やせほそつてゐる。
どこへ、おゝどこへ、いつたいアームストロング提督（――サン・ジャシント軍艦のりくみ――）はいつた。

――西紀一八五七年七月四日、土曜日
（安政四年閏五月十二日）
けふほど悲慘な、不幸な日はなかつた。健康もわるく、食物はなにもなくて、あるものはたゞうつ積した沈滯ばかり。
この祝日（――十三州獨立宣言記念日――）のために、日本人に、二十一發の祝砲をうたせる。費用當方もち……ドル弱（――この祝砲はお吉の通ひ路に壓しかゝつたあの岩山のうへの、異船遠見番所から、海港ぢうにとゞろいた――）戀しいニュウ・ヨオクよ！友だちのあひだにまじつて、けふのひと日を過せたら、どんなにいゝか！
もう、もう、アームストロング提督に逢ふ

希望も、いつさい斷念だ。したがつて、いく本かの手紙も、日本人の手によつて、函館までとゞけさせるやう骨を折つた。ライス氏(――函館駐さつ米國貿易事務官――)が、しかるべく發送してくれるであろ。手紙みなかんたん、嚴封――日本人が、きつと開封するにちがひないから。こゝから函館までは、陸路六百マイル弱だが、日本人は、手紙一通をそこまで運ぶのに、三十五日たつぷりかけてしまふのだ。

……

にんげんの日記ほど正直で、また身勝手なウソの多いものはない。このひとかど眞情のあふれた「奉使日本日記」を見ても、――かはいゝオ・キ・チ・サン」は、彼女のぬれそぼれたかつぱのちりめんひもを腰にむすんで垂れて、蛇の目に顔をかくしたまゝ、コン四郎さんの事務机の、インキつぼのなかに、わすれられてゐるのだ――この日記の、どのペエヂをひらいて見ても、なみだにつま紅のしめつた貝爪の、ほのかな影さへさゝないのだ……

おごそかな「らしやめん交渉てんまつ上申書」にも、「かなたにても、おもてだて候ては、官吏役まへにおいて、迷惑におよび候あひだ、極秘のすぢにて……」とあつた――

十一

その「おぼえ帖」の、みじめな亞米利加獨立祭からひと月あまり、紫花の實の黑むらさきに色づくころ――

馬丁小舍の、月の出のおそい窓で、コン四郎さんの都合を待つてゐるあひだに、お吉が茶金石のまへかんざしや塗りの女あふぎをいぢりながら、ひそ／＼と半助の耳へさゝやいた。

「をぢさん、おねがひ……」

「なんだ。」

「後生だから、あのウ、牛の乳を工面しておくれ。」

「ほ、牛の……お吉さん？」

「えい。」

「牡丹(牛肉)は、おまへカサの藥だ……」

「ま、をぢさん。」

「牡丹の露は……お吉さん、あんたムシでもおこしなすつたか？」

「いゝえ、をぢさん。コン四郎さんにあげまをしたい……」

「はあてね……」

「このごろは、あんなにやせておいでで、それは、もう、水のちぶふ所望にちがひないのだけれど……」

「ふん。」

「けさも、牛の乳を飲んで、こんなに肥つた夢を見たつて……まるで子供のやうなことをいひなすつた。」

「へえ、そんな……しかしお吉さん、あれあ、屋根の下ぢや、たうてい飲めないシロモンだが。だいいち、臭くて、きたなくて……」

「だらうと、おもつてはゐるけれど……あんなに、ねエ、と、口のなかでいつて、うなだれた。

「……唐人だなア。」

「……」

「いゝよ、お吉さん。村のたれかに、そつと賴んでみようよ。」

「ないしよで、ね、後生だから。」

「どうせ、おほつぴらにあいへない……」

「濟みません……」

「なんの……しかし、」と、指を折つて月をかぞへて――「薄いよ、いまどきのは。季節ぢやないから……」と、ほゝゑんだ。

お吉は、そつと紅くなりながら

「うすくとも……」と、女あふぎで、頰をあふいだ。

やがて——その、無花果のくらい窓へ、白服を着たおほきなヒウ助君の半身があらはれて
「こんばんは、オ・キ・チ・サン。コンシウロが待つてゐます。」と、聲をかけた。
お吉は、ぢきに小舍のかどぐちへ出て、あたかもまん〲とした月の出しほの空へ、ほつそりと、溜息を漏らして‥‥默々と、通辯官のあとを、內玄關のはうへあゆんだ。
——えりシメをむすんだり、いろ〱と身ごしらへをする素振などに、どうやらあの年まで、ひとりもので來たらしいわびしさのにじんでるコン四郎さんを、まぼろしにゑがいて——ひと皮ひと皮と、その生活へ喰ひいつてゆくこのごろの自分を、いら〱ともてあましながら‥‥

十二

それからふた夜み夜と、熱ごこちのコン四郎さんに疲れて、頰をほそらしながらかよつたが、そのゆふかた——
馬丁小舍の窓あかりに、鏡をのぞいて、みちみち凪になぶられてきたほつれ毛を撫でてゐると、ふと、その櫺子のまそとの、無花果の葉かげに、絲瓜の水でもいれてありさうな青竹の筒が、ほそなはに結はかれてつるさがつてるのが眼にとまつた。
半助は留守で、女房が、そつとそちらを指さして、眉をひそめて
「あれを、おあげまをすんだと、いつてをりました。」と、さゝやいた——「‥‥どうか馬込（村の名）のお百姓が、やつとあれだけ、しぼつてくれたさうで‥‥—
さう聞くと、急になにか、惡鬼を封じこめてでもあるやうな、ちりけもとのさむい竹筒であつた。
彼女は、だまつて花降銀を紙にひねつて、女房のたなごころへ押しこんで、そのひとみを避けつゝ
「ありがと、ほんたうに、をばさん。」と、口のなかで、こゑをふるはせた。
で、とつぷりと暮れてから、そちらへ、無花果のしたへ出て、女房が窓ぎはへ寄せたあんどんのあかりを、見えますからと、ことわりながら、おろ〱とほそなはをほどいて、ふところ紙を持ちそへて、月の上らぬ星空さへ、うしろめたさうに、本堂へいつた——
‥‥‥
切り子のコップにほんの四勺ほど、指につくと、白々と三日月なりにちゞまるのを、彼女が、頰をそむけながら、寢臺のそばへ、はこんでゆくと、それは、ほとんど、おとぎばなしだつたが——
コン四郎さんが、病氣も白髮も、いつさい夢中で跳び起きて、手をもむ、足ををどらせる、まるでもう、大きい花旗ぶねが、にぎやかに入港したやうな騷ぎで——はては、ほろ〱となみだをこぼして、彼女のつぶれるほど、くちづけの雨をふらせた‥‥
「あゝオ・キ・チ・サン！ かはいゝオ・キ・チ・サン！ オ・キ・チ‥‥オ・キ・チ！」と、その狂ほしい感激が、ひといきごとに、若い彼女の神經へひゞきわたつて、たうとう彼女も、彼の膝へ、顏をうづめて、肩をふるはせて、泣いてしまつた‥‥
‥‥‥
‥‥‥
そのあくる日の七ツはんごろ、坂下の、あのお吉の住居へ、奉行所の下役の齊藤が、血ばしつた眼をして、はひつて來て、づか〱と、奥の彼女のそばへとほつて
「お吉！ 狂つたか！」と、怒鳴つた。
お吉は、湯あがりのけだる〱火照つたからだを、市松のちりめんひとへにつゝんで、じれつ

たむすびの髮を亂れたまゝ、身じまひもわすれて、けふもつりしのぶに迫つてくる夕ぞらのいろを、ぼんやりとながめてゐた。

それが、しづかに片手をついて、ふりかへつて、そこに立ちはだかつた鼻のげびた見しりごしの顏をふりあふいで

「おや、」と、ほゝゑんだ。

いち年季、一兩二分で、あのどぶ川へんのをんなをかゝへてゐる齋藤のだんなであつた……

十三

ゆうべは、コン四郎さんの、昇天するやうなよろこびに、心そこ打たれて、おもはずひと夜さしんみりおくつたが、さてどぶ川のうへの、松の下の板葺家にかへると、晝のひかりは、なにかしら行方不明のこゝちで——

そこへ、ゆふだち雲かなんぞのやうに、奉行所の齋藤源之丞が、のつと踏んごんで來て——狂うたか！——と、ひとこと、ぴり／＼と神經にひゞきわたることばを浴せかけたのだ。

お吉は、その、肩をあげて迫つてくる相手へ、團扇の風をおくりながら、湯あがりの眼ぶちを生々と張つて

「齋藤さま、いくらおもてから見とほしの、唐人お吉のあばら家だからつて、ひとことおこゑをかけてくだされば、お迎へに出ますよ。」と、いつた。

「お吉、てまへ、官吏（コン四郎）に牛の乳を飮ませをつたな。」

「はい、おあげまをしました。それが、どうぞいたし……」

「馬鹿め！　狂氣のさたぢや。」

「おや、あの乳に、毒でも……」

「ちがふわ！」

「ま、よかつた……」

「馬鹿！　なぜ、いちおう、われらにことわつていたさぬ!?」

「……」

「てまへの勝手ゆゑに、われらの迷惑は、ひととほりでないぞ。けふも、官吏が御用所へ來をつて、いまさきまで、その牛の乳の嚴談ぢや。日本では、さやうな四ツ足の乳などしぼらぬといへば、げんに證據がある、ゆうべ飮んだとまをしをる。强ひてことわれば、くろ船ぢや。おかげで、江戸うかゞひの、はては、面倒な、畜生の乳シボリを村かたへまをしつけることに相なる形勢ぢや。だん／＼官吏に問ひたゞすと、お吉、みんな、てまへの、馬鹿な、心中だてからでないか！　あけがらすの、なんのと、ちつとは、人に知られたてまへも、このごろは、狂ひが來たか……！」

お吉は、うちはをばたりと放りだして、じれつた結びの髮を、たわ／＼と撫りながら、溜息のやうにいつた。

「くるひもしませうさ……白癡の甚介ぢやあるまいし、馬鹿らしい……」

「なに！」

「齋藤さま、どうせ、きちは、馬鹿で、氣ちがひでござんす。えい、きちは、人の嫌がる亞米利加に、あなたの、心中だてとやらをいたしました。それが、それが、わるいので……」と、齒をくひしばつた。

「な、なにを、ふらちな！　お吉！　てまへ、おカミへ、タテをつく氣か！」

「いゝえ、齋藤さま……でも、きちは、きちは、このごろ、ほゝゝ、たてひき、とやらの眞似ごとを、おぼえました……」

「な、なにがたてひき！　馬鹿！　不所存もの！」

さう我武者羅にさけんで、そばの大刀をひき寄せて、じり／＼と、にじりよつてくる齋藤の、ひなびた鼻の、鼻いきから、つんと顏をそむけて、軒ばのなかぞらにつるさがつたつりしのぶ

へ、じれつたいひとみをあげながら、癇のふるへた聲で勝手もとへ――
「お菊さん、齋藤のだんなに、お煮花を濃くして、あげてくださいな！……お菊さん！……ほゝゝ、まだお茶も、あげないんだよ。」

十四

お菊さんが、シブ茶をはこんできて。齋藤のそばへつきだして
「お茶を、あがりなさい。」と、「例のひとまはり調子のおくれた聲でいつた。
　さうして、そのまゝまた、だんまりで、たつてゆくうしろ姿へ、お吉が、中ツぱらなこゑをしぼつて
「お菊さん、そろ〳〵參殿るこくげんですよ、いつもの香をふすべて、衣裳をかけといてくださいな、汗クサイと、ほゝ……」と、月代までイキリたつた齋藤をちらと見て――「唐人のだんなに、きらアれるのさ……それから、いつそ、もう、髪結のおかのさんは、どうしたらうねエ、こんな髪ぢや、こんな、髪を、かはいゝ、ほゝ、かはいゝをとこに、見せられるものかね……」
　お菊さんは、うもれ木のやうな沒表情な顔をふり向けて、それを聞きをはると、あゝ、美德ある腰に、帶のむらさき鹿の子をちら〳〵搖りながら、勝手もとへひつこんでしまつた。
　齋藤が、シブ茶ちやわんをとんとおいて、ふいと、骨に沁みるやうな冷笑をうかべて
「あきれはてた氣ちがひぢや……」と、つぶやいた。
　お吉は、えりあしを伸ばして、まぼろしに落ちてくる雨に頬をうたせるといつたふうに、眼をつぶつた。
「……しかし、お吉、濟むまいぞ、それでは。だいいち、莫大なお手當をくだしおかれるカミへ對してまた、ふたつには……」
「おや、齋藤さま、きちは、お手當が欲しうて、御奉公は、いたしませぬ。」
「む、」
「馬鹿の、氣ちがひのと……たれが好きこのんで……いゝえ、そんな、馬鹿や氣ちがひには、たれが、たれが、したんでございますえ。」
「なんといふ!?」
「むかうへあがれば、根かぎり唐人の機嫌をとれつて、あれほど、いつておきながら、ちつとばかり、つとめれば、またそれがわるいとつて、殺風景な、長いものまで、ひねくりまはして……」
「むウ……」
「いつそ、もう、御奉公は、この場かぎり、ねがひさげにしませうよ。」
「な、な、なにを馬鹿な……」
「いゝえねエ、あけがらすのお吉の、はかない三味線が、あのとほり、梅雨にカビたまゝで、泣いてますのさ。」
「……よ、よいわ、とにかく……」
　勝手もとから、お菊さんの、不死身なほど無神經なこゑがひゞいてきた。
「ねえさん、おかのさんが來ましたよ。」
　お吉は、煙草盆の抽斗から、小つぶをとりだして、紙にくるみながら
「お菊さん、これをあげて、歸つてもらつてくださいな。けふは、このまゝ……」と、うつたうしさうに、ほつれ毛を撫であげた。
「お吉、これ、じこくぢや、もう、」と、齋藤が、急に、とまどひしだして、腰をうかして、戸ぐちのはうをふりかへり
「これア、をんな、はやくこれへまゐれ。さ、お吉、まアさ、よい、よい、よいわ。このたびのことは……な、拙者が……ひぞるな、ひぞるな……あゝ、もし、おそなはるやうなら、かごを差しまはさう……な、よいか。とにかく、拙者はこれで、」と、立ちあがつて、いきかけたが、

もらいつぺん、お吉の、なみだがほをそむけた耳もとへ、こゞんで、ひどくあわてた調子で、くどくどとさゝやいた。

「官吏には、なにごとも……よいか、それ、ないしよぢや。カミへは、この齋藤が……」

「存じません。ほれた、ほれたをとこに、なんの隱しだてなど……」

「はゝ、いぢめるな。」

……

いつときばかりして、お吉を乘せた四ツ手駕籠が、暗い下田みちの、浪の音と風の聲をわけながら、コン四郎館へ走つていつた――

末日の章

一

ほがらかな太陽から生れでたお吉といつてもいゝし、また、そのほがらかな太陽を、生みあるく彼女と呼んでもいゝ――そんな過去を持つ彼女が、急にわびしいうすらあかりの世界へ落ちて、はかない氣持の照り降りを追うて、うごいてゆくのだが――

あの風來國粹家が斬りこんできたとき、ふいと芽をだしたこゝろが、牛の乳から伸びていつて、おぼろげながら、彼女は、忍從のうつくしさを、あぢはひはじめた。

町のひと〴〵の爪はじきが、あらはに、するどく迫つてくればくるほど、さうしたうつくしさをあふぐこゝろが、をんならしく、つのつてゆく。

それは、まつたく、素肌のまゝ、からたちの茂みへもぐりこむのといつしよで――彼女はそのトゲの苛責に齒をくひしばりながら、ほのかな香氣をもつ、白いからたち花に、見とれるのだつた。

くりかへしていへば、はじめはなにかしら、理窟で、自分の氣持をコロしてかよつた。なかごろは、意地になつた――むろん、そこには、優美も、詩も、なかつた。いや、こんな言葉が、きのふのフランス文學式で、いけなければ、つまり彼女には、生活のプリンシプルが、かいもく無かつたのだ。

だが、いまは、すこしちがつてきた。どうやら、殉教者めいたこゝちさへ、身うちのどこかにうごめいてゐるのであつた。

……

牛の乳は、彼女が、七夕の青ささをくゞつて、コン四郎館へゆくじぶんから、まいにち、二勺四勺と、近くの村々からとゞくことになつた。

一　壹貫五百拾貳文　牛乳壹合壹勺分　大澤村へ拂
一　四貫貳百に拾文　同四合八勺分　馬込村へ拂
一　壹貫六拾八文　同壹合貳勺分　青市村へ拂

これは、町の名主の半兵衞が、ある半月分のお下金を、村々へ支拂つたときに差しだした覺え書の一部分だが、おそらくは、日本で食用牛乳(藥用以外に)をしぼつたはじめで、その値段も、村によつてまち〳〵だが、だいたい、このごろの錢相場から見て、一合が、白米一斗餘にあたることが知れる。

でも、いくら非常識にたかくても、いまのコン四郎さんにとつては、それは、べつに問題ではなかつた。もう、そろ〳〵秋づいて、ミルクのにほひや香ざはりが、はらわたのシンにまで沁みとほる。またその、ほのじろい湯氣が、彼の、ひもじい、さみしい、頬にもつれかゝつて、その、「流泊人」のひとみを火照らせる。彼の戀しいニユウ・ヨオクが、彼のあくがれるいつさいが、その瞬間の刺戟に應じて、ほとん

ど病的な明確さで、彼の眼のまへにあらはれるのだ……したがつて、このミルクは、たんに彼のかつゑきつた味覺を、よろこばせただけではなかつた。

たうぜん、彼の彼女に對する氣持も、いよいよ深まつていつて、廣帶やら、ちりめんやら、髪飾りなど、おびたゞしい季節の贈り物が、いちいち、をんなおもひのまごころをこめて、ふるへる手からふるへる手へと、なされていつたのであつた……

ときをり、お吉は、彼のベッドのそばに、そつと立つて、そのまうへの小壁にかゝつてる小額をあふいで、ぢつと、眼に見えぬ風のけはひを追ふやうな表情をうかべた――それは、ひとりのアメリカをんなの、肖像畫だつた。

二

その婦人像は、黒つぽい服を着て、白いレースの衿飾りをつけてゐた。暗色の束髪に、やはりレースのかむりものを載つけて、すんなりとひぢかけイスの腕へ伸びた手の手首に、袖くちが、骨のない扇のやうなひだをきざんで――ほかにはべつにこれといつて浮いた花々しさはないが、額にも姿にも、生活の善良しさが、すつきりと見えてをつた。

はじめは、そんな、異人女房など、うす氣味のわるいばかりで「そのころの常識――たとへばペロリの時からはやりはじめた「ものはづけ」にも

ほんたうらしいうそは――
　アメリカ女の墓參
馬鹿らしいものは――
　アメリカ女に強淫された浦賀の與力
たれも手をださぬものは――
　アメリカ女

などなどと、さん〴〵で、したがつて、お吉も、彼女を、なにか強らしい、野馬のやうなものにきめてゐたのだが、それが、いつからともなく、ふつと見ちがへだして、つまり、その大年増らしいをんな繪が、お吉の、こまかいをんなごころのニュアンスへ、しみついてきたのだ。

氣にすれば、どうやら氣になつて、あの、かりがねを薄墨でかいた紗蚊帳んなかで、コン四郎さんのパイプの紅い吸ひ口をつまんで(――コンニチ玉泉寺ノ寶物トシテ遺ル。まにらアタリノ土人ノモノニヤ、輕イ土ノぱいぷ。黒ヌリ、吸ヒ口ノミ紅シ――)、ヴアヂニヤ煙草をつめて、おもひざし、といふほどなれ〳〵しくなく、むしろ、あのなみだで、をとこの足を洗ひ、髪の毛で、それを拭うたといふパリサイのをんなのやうなつゝましさで、彼の手へそのパイプをわたしたりするときなど、燭の火に、白紗の目をとほして、そのをんな繪が、こちらの、頭んなかをのぞきこんでるやうな、あやしい氣持がして……

また――あけがたの、半障子のあかりに、眠りのうすく過ぎたかほを反向けて、化粧だんすの鏡のまへに立つてるとき、などにも、やはり、それが、そつと、こちらの衿もとを、見てゐるやうな氣がするのであつた。

いつそ、ぶつつけに訊けば、と、さうおもつてみたり、でも、なにかしら、いま〳〵しく、またうしろめたくもかんがへられて――で、だまつて、ときをり、ちら〳〵と、そちら一瞥を見かへすと、次第に、そのをんなが、じれつたく、いらだたしく、こびりついてきて、まるでもう、白晝に、夜の足音を聽いてるやうなこゝちがしてくる……

……あぶらでりほど照つたり、しく〳〵ほど降つたり、秋ぐちの雜なお天氣がつゞいて、そのあひだ、彼女は、そんな、人に觸れぬ思慮

らしい氣持をこらへて、コン四郎館づとめを勤めたが、けつく、そのはうが、さうしたあやしい迷ひに浸るはうが、むしろ彼女には、幸福だつたかもしれぬ。ちやうど、季節の脚が、そんなふうに、たゞさへ息ぐるしく、からだにこたへるときだし、町のひと〴〵の、無智な、冷酷な視線が、それと共に、彼女のびんのほつれ毛にまで、凍りついてくるときだつたから――

三

霧のふかく降りた安息日の朝――歸りしなにひきとめられて、ふたりきりで、しばらく、うらの圃ひらちをあるいた。

こんなことは、はじめてだつたが、今夜は、七日めごとの神聖なやすみで、逢はれないからと、そんないろが、べつにわるどめするでもなく、をとこのどこかにほの見えて、ついほだされるともなく、そちらへいつしよに、ついて出たのであつた。

季節と共にしんらつに迫つてくるさみしさを、バクチにまぎらして夜をふかした支那人らの、庫裡の中窓が、まだしんと閉つてゐた。板がこひの外にも、村のひと〴〵ののぞきに來さうな氣配はなかつた。

をとこは、町の仕立屋伊之助で、このほどつくろひなほした眞黒なふだん着をきて、日の出まへの、おとろへた顔をして、もうすつかり枯れてゐる罌子の畝のまはりを、霧を吸ひながら、とまりがちにあゆんだ。

彼女は、らんたつ島のお召に、ひつかけ結びにしたどんすの帶を、裾にさはるほど垂らして(――コンナオ吉ノ容姿ヲ目撃シタ老婆ガ今日ナホ玉泉寺ノ近クニ殘存シテヰル――)、ひかれるまゝに、をとこのそばに寄り添うてあるいた。

とき〴〵、をとこが、青みわたつたひとみに、ちら〳〵あやしいひかりを躍らせて、うす桃いろの彼女の開化耳へ、めまひの來さうなことをさゝやいた。

――もしもわたしが、せめてもう十年若かつたら、たとひ地獄へおちようとも、オ・キ・チ・サンを抱きしめて……抱きしめてくろ船に乘つて、ニュウ・ヨオクへ歸つて、いつまでも、いつまでも、いつしよに暮すのだ……ひらけた、進んだ、人間の住む街を、うつくしいほろ馬車で、ふたりきりの遊樂をたのしんだりして……母も、あのベッドのうへの、帯布のなかから、まい夜さ、わたしの眠りを護つてゐる母の、たましひも、きつと、よろこびの涙をながして、ふたりの、幸福なベッドへ、ほゝゑみつゞけることであろ……

そんなことを、もつとたくさん、搖りかごをのぞくやうに、あるひは、乳にあまえるやうに、彼女にこゞみかゝつて、さゝやくのだつた――彼が、老いた咽喉にからむのか、ひくい咳をまじへながら……

もし、この朝のコン四郎さんを、はなれてながめるなら、つくろひものの黒服のえりもとに、おとろへた白髮がしめつぽく垂れかゝつて、うすくしらけたくちびるに、ねつとりと、反射的な唾がにじんで、それが、骨ばつた、血の冷えた掌に、お吉の手をひしとつかんで、花も葉もない、霧のまよふけし畑のあぜを、さうらうとうごきあるくのだが――まつたく、それは、あの、沙漠にかくれ住む聖者か、俗世のかたみの黄金のさかづきを、胸に抱きしめて、妄想にふけつてゐるさまに、はうふつとしてをつた。

……彼は、けふいちにちは、毎週、公務をいつさいよして、コン四郎館にこもつて、高らかに、主のいのりを祈つておくる習慣だつた――

霧がきれて、すぐそこの、をかつゞきの望遠臺に、――コン四郎館ノ庭カラ岸傳ヒニ二十間

バカリ、黒船見張番所ノマウヘノ斷崖ニ、箱段ヲ組ミ、異船入港ノ狼煙ガアガルト、ひら助君ガ、コヽヘアガツテ遠見ヲツトメル――）きらきらと太陽の光がおちて來た。それをあふぐと、彼は、急に力なく彼女の手をはなして、さみしさうに白髪を搖つて、まへ庭のはうへ歩きはじめた。

で、そのあとに、うなだれて、あの佛手柑のそばまでついていつたが、そこでわかれて、その、ふいと足をはやめて本堂へあがつてゆく、をとこのうしろ姿を見送つて、いまさき聽いたをんな繪のことを、やつぱり、やつぱり……と口のなかでつぶやきながら、ぼんやりと立つてゐた。

空が、ぱつとあかるくなつて、ふと、われにかへつて、見あげると、あたまのうへに、まだ青い佛手柑の實がなつてゐる。

――いつそ、人間を、をんなを、よしてしまつて、佛手柑になりたい……

そんなことを、彼女は、はげしい自己嫌惡におそはれて、しみ〳〵とかんがへた――

四

霧のきれゆく、佛手柑の木かげでわかれてから、をとこは、その日いちんち、本堂の紙障子のうちにこもつて、いつものやうに、切支丹の本をたからかに讀みあげて、いらだたしさやさみしさや、もろ〳〵の妄想とたゝかひつゝすごしたであらう――お吉は、そのまゝ坂下へひきとつて、まる窓のかげに肩をおとして、爪びきをしたり、秋のはへを追つたりなどしてその安息日をおくつた。

あくる日――つまりキリスト紀元一八五七年九月の、ある風のさわぐ月曜日。

お晝すぎに、町いちばんの呉服見世（立野や）から、をとこの贈りものの艶麗な晴れ衣と、唐織らしいまぶしい廣帶とがとゞいた。

かうした、をとこの深なさけを、鼠に食はれてしまへと、けふのいままで、見向きもしずに來た彼女だが、それが、ふら〳〵とぐらつきだして――で、なにか内氣にあへぎながら、包がみをといて、膝にひろげて、うつとりと首をかしげた。

氣のとほくなるやうな中がたちりめんの下着に、上着は、黒地にあらいねずみの棒じま。絹の重みが、しつとりと彼女の膝とゆびさきにからみつく。

「ひどく凝つた紋で、へい。」と、手代が、くすぐつたさうに、彼女の頰をあふいだ。

鷲と、矢と、橄欖と、Epluribus unum（多モッテ一ヲ爲ス）と、亞米利加の紋どころが、金絲で、その上着の背に、縫ひつけてあつた！　コノ女ヲ見ヨト……

「いつそ、氣がかはつて……」

「へ!?」

「ま、いやだ、番頭さん、そんな顏を……ほゝほ。」

「へ、い、亞米利加の、心イキで……まつたく、しんせつな、いや、おそれいりました。へゝゝ。」

「あいさ、いつぱい買ひませうよ。ねエ番頭さん。」と、ヒステリックなこゑで……

「いえ、どうして、それでは、かへつて……しかし、ねえさん、さつきのあれは、お驚きでございましたか？」

「さつきのあれつて？」

ほら、さつきのドゥンでさあ。」

「おや、鳴りましたかえ？」

「これは、これあ、おどろいた。つい半刻ときまへのことでございますよ。武山――下田みなにのしかゝつたあの岩やま――）の遠見御番所の青銅砲が……まつたくあれが鳴ると、から、ぞオとして……いゝえ、その、氣が、氣が、小

さいんでございますねエ。」
「おや、くろ船が、はひりましたかえ？」
「へい、それが、どうやら五里ほど沖あひに、見えたさうで…なあに、おほかた、海坊主でございませうよ…なんしろ、やつはり、氣味がわるい、わるいで、遠見のお役人には、ぢきに、なんでも黒ふねに見えるんだらうと…へい。」
「ほゝ、あんなことを…いつそ、この唐人お吉を、あの、遠眼鏡のおかゝりにしておくれだと…ねエ番頭さん。」と、いつそうカンのふるへたこゑで。
「ご、ごじやうだん…ありがと、ありがたうございました、ごめんくださいまし。」
……
そのゆふかた、お吉は、いつもより早めに、コン四郎館へいつた——ひるまもらつたその、亞米利加の紋どころのある衣裳にきらびやかな帶をしめて、をとこへのプレゼントに、絹ばり塗り骨の、うつくしい飾り燈籠をさげて、下田みちの秋くさを、なにかしらそは〱と踏みしだきながら…

五

お吉が、をとこの好きさうな飾り燈籠の、紅いくみひもをさげて、馬丁小舍の中窓のそとへ、しのび寄つたじぶんには、もう、秋やけのしたあたりに、さむい夕靄がおりてゐた。
「をぢさん…をばさん…らふそくがあつたら、くださいな。」
さう彼女は、なにかおくしたこゑで、そつ、ほつとあかりのにじんだ小障子へ呼びかけた。
「おい」と、半助がたつて來て、ふしぎさうに、彼女をながめて
「なんだな、ねえさん。そんなとこで。」
「えい、けふは、あんまり、をかしな晩だから…」
で、西洋らふそくの燃えさしをともしたのを、窓ごしにうけとつて、燈籠にいれて、紅くなりながら、片袖へかざして見せて
「をぢさん、亞米利加のもんつき…とんだキじるしだ。」と、はす葉にりきんでわらつた。
さうして、窓につかまつて、夢ごこちに見とれてる半助に、そのまゝ背をむけて、すゝきやけいとうなどのある小みちを、内玄關のはうへほら〱まはつていつた…
いつもは、半助の小舍へ寄つて、をとこの都合を待ちあはせることになつてゐたが、けふは、それもしなかつた。をとこの生活や、氣持が、もうすつかり、爪のあかまで、しみこめてゐる館がして…で、うつくしい燈籠の燈をいたはりながら、本堂をわたつて、彼の部屋へ、そつとこゑもかけずにはひつていつたのだが、その瞬間だつた——どオんと、空砲のひゞきが、黑ふねの、すさまじい入港のあいさつが、まぢかな海上にとゞろいて、なにもかも、いつさいが、おしまひになつてしまつた——
イスをはなれて、ふたあしみあし、こちらへ、ひたむきな情念にふるへる手をもみあはせながら、近づいてきたをとこが、ふいと眼のまへに凝立して、ひとみを空へそらせて、かたく、かたく、なにかへ、合掌した。
ヒウ助君の姿が、魔風のやうに、彼女のたもとをかすめて、部屋のそとへ消える。
燈籠のくみひもが、彼女の手をぬけ落ちた。
——絹紙の火が消えた——こゝろの火も消えた…
支那人らのさけび聲が、さえた夜氣のなかに、亂舞する——
「船がはひつた！」
「亞米利加が來た！」
「黑ふねだ！」
「帆まへ軍船だ！」

「ハムだ！」
「煙草だ！」
「パンだ！」
「おゝ神！」
「神さま！」
をとこが——コン四郎さんが——亞米利加のコンシウル・ゼネラールが——アメリカ伯爵が——部屋の出口を指さしつゝ、彼の日本語を、咽喉から千裂つて、彼女へ投げつけた——
「歸れ、オ・キ・チ・サン！　歸る、歸れ！　歸れ！　はやく、はやく、オ・キ・チ…くろ船が…よくない、はやく、オ・キ・チ！」
「はい…はい…」
お吉は、眞さをになつて、をとこの、その、氣ちがひのやうに、わめいてゐる顏をあふぎみた。さうして、足もとの、燈籠をひろひあげて、お辭儀をして、部屋のそとへ——くらい本堂をぬけて、いま來たばかりの道を、さがつていつた…

六

日まはりが、太陽にむかふやうに、をとこの熱にはぐくまれて、ついさうした氣にもなつたのだが、あの霧のなかで、しみ〴〵と、をとこの口から聽いたはなし——
…ひらけた、進んだ、人間の住むニュウ・ヨオクの街を、うつくしい幌馬車に乗つて、をとことふたりきりの遊樂をたのしむのだ…と、そんなことを、あはく幻想しながら、わざ〳〵亞米利加のもんつきを着かざつて、けふも、村の領事館へをとこに逢ひにいつた…
——ほかに、あゝ、ほかに、彼女の生きる道が、あつたであらうか!?——
それが、くろ船の入港とともに、をとこのたましひが、そちらへのみ、じつに露骨に狂躁して、もう自分など、どうでもよく、けつきよく、背中の、金絲のもんどころが、そのまゝ、さらし者の烙印になつてしまつた。
亞米利加は卑怯だ！…日本も、卑怯だ！…世界中、みんな卑怯だ！…町も、村も、人間も、なにもかも、もういつぺん、三年まへの、あの大津波に、のまれて、つぶれて、ほろんでしまへ！
…火の消えた飾り燈籠の紐ひもを片手の掌にまきつけて、くらい風のうごく下田みちを、とぼ〳〵あるいてゐると、ひよいと、ぶら提燈の火が、顏いつぱいに來て
「をんな？…あゝ、お吉…」と、聞きなれた通詞のこゑがひゞいた。
「どら…ほう、妙なものをさげてゐるな。」と、奉行所の下役が、その通詞の肩のわきから、顏をつきだした。
あかりも、その顏も、うつたうしくて、袖びやうぶをしながら、とほりぬけようとすると、ひとりがたもとをひいて
「待て、待て。」と、いつた。
「燈籠ぢや。」と、わきのが、しつこいひとみを向けて…
「いかにも…異人勸工場の品かな。」
「らしいが…これ、官吏からのもらひものなら、おとゞけは、濟んだであらうな。」
「…はい、いゝえ。」
「まだか！　勝手なふるまひは、法度ぢや。」
「…だれが、こんな」と、その、きり〳〵と紅ひものまきついた手首を、ふるはせて——
「…もらひものでは、ござんせぬ…」
「ほ、では、これを、提燈がはりにさげて、かよふのぢや、いや、風流で、はゝ、おもしろいぞ…それ、美女美男燈籠にうつすらみかな、と、はゝ、いや、通詞どの、ホテレスでは、なんとまをすかな？」
「また、はじまつたわ。われらは、オランダ——

エゲレス併呑は、すなはち、アメリカ併呑でな、それは、このお吉が……」と、彼女のたもとをひつぱつて、なにか、みの蟲でも、そこにないてゐさうな、ゴマカシの表情をうかべた。

「はゝ、いや、お吉、くろ船が去んだら、コンシウロに、訊いておいてくれ、よいか、いまの——美女美男、燈籠にうつす、うらみかな——ぢや、それをアメリカ併呑では……」

「ときに、お吉、コンシウロは、なにをいたしてをつた？」

「……存じませぬ。」

「知らぬ？　知らぬことはあるまい。」

「………」

「どうぢや？」

「おほかた……切支丹のおいのりでも……ほほ。」

「なるほど…彼は、やかましい背天主教人ぢや。まつたく、あれには、こまりいることが、さい〳〵でな。」

「しかし、まゐらうか。」

「まゐらう。」

「あゝ、と、彼女が、その見張番所の方へいきかゝるふたりのうしろ姿へ、青ざめた顔をあげて——

—くろ船は、くろ船は……？」と、なにか、たづねかけたが、そのまゝ氣持も、言葉も、咽喉につまつて——で、そつと、片手のひもを解いて、秋くさのなかへ、燈籠を捨てて、また、とぼとぼと街の燈の方へあるきはじめた。

——くろ船は、いま、港外の神子元島あたりにかゝつてゐるらしく、濁のそちこちに、あわたゞしいかゞり火がうごき、道の、ゆくてにも、うしろにも、人の氣がたつてゐたが、彼女のひとみには、なにもうつらず、たゞ、頭のシンに、蟲の音がこほりついてゐた。

七

その夜はひと夜さ、あんどんのかげで、びんぼふ徳利をかゝへて、着かへもしずに、そのまま、なやましいうたゝ寝にあかした。

あくる日は、太陽の黄いろい空から、ときをり、つめたい雨がさアとおちてきて、亞米利加のまぼろしが、ひとみのさきを、くらく動いた……で、房楊枝からぢきに、いちんち、また、酒にひたつて、うつら〳〵と三日めになつた——

その日——空は、青ぶだうのはだのやうに、ひかつてゐた。

帆まへ軍船ポオツマスから上陸つた陽氣水兵らが、てんでに亞米利加晴れの顔をして、皮ぐつの足を擧げて、街をあるきまはつた。

あるものは、ほゝづき提燈をぶらさげて、口笛を吹きつゝ——あるものは、たうもろこしのパイプをくはへて、通りの女下駄をステッキのさきにとほして、肩にかついで——またあるものは、街の子どもらのあしもとへ、ビスケットを散きちらしたりしながら——みんなほがらかに行進するのだ

くらい見世ぐらやわら家の軒さきに、キラキラと銀のドッラルの雨がふる。

「サケ！　サケ！　ふらあ！」

「ムスメ！　につぽんムスメ！」

「オウハヨオ！」

船宿のほそい櫺子窓から、晝あそびの下田ぶしが——あのヘロリ以來、亞米利加の軍樂調ののりうつつたハヤシが、笛と太鼓三味線にあはせて、もの狂ほしいあいさつを投げる——

ヤレ、傳馬をこいで八帆捲いて
帆あしそろへてゆくときは
下田を戀しとおもひだして
泣きやがれ泣きやがれ

どぶ川の、せう〳〵とした達磨やどの、うつたうしい戸障子のうちからも、濁つた水調子が

ながれだす——
　ありがたいぞえ
　唐人さんは
　一朱の女郎に
　二分くれた
見世さきにかたまつて、洋銀への慾と、人種的潔癖とのいたばさみになつてるひと〳〵が、いちやうに、にぶい嘲笑をうかべて、その、陽氣な唐人らの腰つきを、ぢつといつまでも目送する。
　雨戸のかげや、露路のおくに逃げこんで、振袖をかゝへて、おそろしさと珍らしさに息をはずませるムスメ——お固めの衆の、韮山がさやだんぶくろ——異船見物の旅浪人のひとみ——町觸れ役の昂奮した呼びごゑ……
　とにかく、ひさしぶりのアメリカ陽氣に、そんなふうに町がわいてゐたが、お吉はまつたくたつたひとり、三日月のやうにその町の騒ぎから、ひき離れて、われとわがたましひの、醉ひざめのさみしさを、見まもつてをつた。
　三日越し手持ち無さたなお菊さんが、やつと亜米利加もんつきをたゝんで、膝にのせて、あのめまひのしさうな廣帯を、そろ〳〵と、衣桁から手ぐりよせながら、どこへ、それらをしまつたらいゝか、とたづねた。
「どこか、坂下のどぶ川か、濱へでも、流して來てください。異人がひろつて、くろ船に積んで。らんちきさわぎで、持つてくだろ——」
　べつに昂奮もしずに、といつて、冗談でもなく、そんなことを、彼女がいつた。
　……………
　ポオツマス軍艦で、コン四郎さんを迎へる禮砲が、つゞけさまに町を搖るがしてとゞろいた。
　ひとつ、ふたつ……と十三まで、彼女は、その六十八ポンド砲の爆音を、そらおそろしいほどさえかへつたあたまでかぞへた。
　それは、はりつけ柱にしばられて、ひつそぎ竹のきつさきが、自分の肉にとほる音を、ぢつと傍觀してるやうな、救ひのない冷靜さであつた……

八

　いつときほどのち——
　お吉は、水髪をかきあげて、どぶ川のはらへおりていつた——水晶の小つぶをまきつけた手くびから、草ばながひとたば、素足のあしもとへみだれおちて、秋かぜにしろ〳〵と、暮のやうに干いた顔をして……もうさかづきも、苦酸かつた。
　橋のたもとへかゝると、さつきのあの、ありがたいぞえ唐人さんは、と、ひとのこゝろを、さもしく、さきくゞりしたよしこのが、柳のちり葉といつしよに、つめたい開花耳へながれてきた。
　街へ出れば、晝の月ほどのあかりもないこゝろに、ちら〳〵と公憤の火がもえる——ひとを街の太陽とかつぎあげて、淫らないやしい眼をして、足もとにはひつくばつたのはたれだ！　ひとを、流行の風信機と、あふぎたゝへたのはたれだ！　ひとを、町のたつたひとつの飾り窓と、見しらぬ旅のわたり鳥へ、誇りちらしたのはたれだ！　ひとを、ひとを……畜生に、おとしたのは、いつたい、たれだ！……
「おきちだ！」
「あけからすだ！」
「唐人のねえさんだ！」
「ほんに、ま、くろ船にうかれて……」
「まだ髪は、黒えぜ、見や。」
「眼のたまア青くなしか、好かねエ。」
「ハりきつて、やせてらイ。」
「おや、馬鹿らしい……」

「こオ、うたつてやりな……そばに、そばに寝て、か……」

「ちげえねエのオ、かオか。」

で、また、その、ウシ(下田賣女)のゐる、かけあんどんの見すぼらしい櫺子窓から、どぶ川の水へ、せう／＼とおちてくる三味線が、やはりこのごろできた、唐人の荒淫をうたふ「ラシャメンよしこの」のひとつ――

そばに寝てさへ
こちよれよれと
ながい道中は
どうなさる。

お吉は、堂島下駄のふといぶだう緒の、むかう鼻緒を、そこだけほの紅らんだ足の指さきに、きゆつとはさんで、とむらひの被衣を着てゆくやうに、橋むかうの街へあゆんだが、一町も來ぬ十字路で、はたと立ちつくした。

帆まへ軍船からバッテイラであがつてきた、をとこと、艦長と、ヒウ助君と、日本通詞の一行に、ぶつつかつたのだ。

をとこは、高帽子に割羽織、金がしらの杖をついて、胸を張つて、紅々とよろこびにかゞやいて、そばにならんだ艦長の、金々しい肩飾に、肩をすり寄せてあるいてゐた。

艦長は帶劍のつかがしらをにぎつて、鳥の毛の飾りふさのある山がたのかむりものをかむつた首を戀人のさゝめきを聽くやうにかしげて、をとこの顔へ、ほゝゑんでをつた。それが、彼女を見ると、その微笑を濃くして、ぞつと沁みるやうな眼差しを投げて、ぢきに、をとこへふり向いて、なにかいつた。

をとこは、急に、ぐいと、あごをすゑて、氣むつかしいアメリカ伯爵そのまゝの表情をうかべて、彼女を歯牙にもかけなかつた。

「美人つて? フット君。さう、でもない……日本のをんなは、とにかく、コーカサス人種のはだをしてるよ。」

「なるほど、君らしい……髪の飾りは、あれあ純金かね、ハリス君。」

「さうだよ。それについて、例の六・一七の通商條約だが……」

「あゝ、あれあ大成功だ。君はまつたく外交官の使命を、完全にはたした。うらやましい……」

「……あんなかの金銀變換もんだいに、あの、日本のをんなの裝身具につかつてある金が、大いに參考になつてね……」

「察しるよ。君は、尊敬すべきプロテスタントだから……」

彼女には、むろん、よくわからなかつたが、そんなことを話しながら、ヒウ助君まで、借りもののアメリカ晴れの顔をして、みんな、冷々と、御用所のはうへゆきすぎた――

彼女は、野次馬の白眼のまつただ中で、その皮ぐつの遠のいてゆく足音を、ぢつと追ひながら、唇をふりあふいだ――唇は、なみだの奥に、青ぶだうのはだのやうに、つめたくひかつてゐた。

「お吉、」と、耳のはたであたりをはゞかる聲がする――「くろ船が、出ていつてしまふまで、コンシウロへ寄りつくでないぞ、よいか。

お吉は、顔をあをむけたまゝで、その、通詞にいつた――

「たれが、たれが……お墓へ、をばさまのお墓へ、泣きに、泣きに、いきますのさ……」

時の敗者　唐人お吉（續篇）

烏の街

一

　雨のうそ寒い夏がつゞいて、秋は、なほさら、身にしみた――

　その、冷たい、陰慘な、霧をやぶつて、十日にいつぺんほど、町の空に、血いろにあぶらぎつた太陽がのぼるのだが――町ぢや、からすが肥つて、人間は、いちにちいちにちと、死んでゆく……

　海から來た男らを、ひと夜のうちに、泣かせたり笑はせたりする眼のうちの濕みわたつた、肉の若い、こゝ特有の女らも、行燈の火をいぢつたり、淸がきの三味を抱へたりしたまゝで、あれ／＼と胸のとゞろくひまも無く、口紅のあひだから、汚物を吐き、手あしは青みこゞえて、熱もなにも、暴瀉また暴瀉と、はらわたまで吐きくだして、それつきり、つぎ／＼と、死んでゆくのだ。

　しあはせと免れた者も、おほかたは、めまひや、のぼせや、眼疾に苦しんで、うす青い指さきを、コメカミの櫻骨にあてがつて

「江戸ぢや、もう、何萬といふ人が死んだ――」

と、そんならはさを、恐る／＼かんがへこむ。

　で、もちろん、船宿も、料亭もひと口に「千軒の賑はひ」と呼ばれた家々が、みんないつぺんに窒息してしまつた。

　さうして、その、太い問屋格子や、花車な櫺子窓に、まいにち、病犬の肋をなめるやうな、厭あな風ばかりうごいて――そんなかを、ときをり、ふて／＼しくイキんだからすの羽ばたきが、高らかにかすめてとほる……

　安政五年の夏から秋へ――

　そのころ、長崎にゐた「和蘭海軍方第一醫官らあいえる・ほむ・へふあんいてる・ほうるとーが、奉行への上申書に、支那の沿岸に流行つてゐる「これら・あじあていか」と、この時疫を說明してゐる。

…………

　ある日――やつぱり血いろにあぶらぎつた太陽が、町家の空にかゝつてゐた。

　いつもは、跫音のにぎやかな道すぢが、しいんと墓石のやうにほの白んで、そこを、大八車が一臺、四五人の貧しい漁師らに圍まれて、にぶらく左右に搖れながらうごいていつた。

　男らは、みんなやせさらぼうて、骨が不自然なほどごは／＼とした顏に、冷たいあぶら汗をうかべてゐた。

　車のわだちがぎし／＼とキシむ音といつしよに、男らの五體の骨の鳴る音が、陰氣にひゞいた。

　もう、地獄も天國も、哀しみも苦患も、なにがなにやら、いつさいばら／＼としたひとみを、その、赤い太陽にあげて、ひとりがつぶやいた。

「さんま……さんま……秋刀魚だつたら……」

　轅をにぎつた男を除けて、あとのみんなが、ちよいとそちらを見て、白い齒を、ガチ／＼とふるへながらかみあはせた。

　秋刀魚はシュンだが、コロリを懼れて、いまぢや、たべても、漁りてもない。もしこの荷が、秋刀魚だつたら、食つてしまふといふのか、こ

の馬鹿は！

　だが、それつきり、みんなまた黙々と、背を鳴らしながら、その、荒ごもにまいて積みかさねた――彼らの父や、母や、女房や、兄弟を、焼きに、下田富士の方へ、町を出ていつた。

　べつに、珍らしい看ものでもなんでもなかつた。

　たゞ、その、いまきざまれたわだちの跡へ、臭ひを慕うて、しんと降りたつたからすを、畜生、畜生、と、追ひたてながら、月代の若々しい舟大工がひとり、腹がけひとつの、腕を組んで、背中をまるめて、すたすたと、彼らのあとをしばらく――氏神の社の、鳥居のうちへ、ぷいと外れた……

二

　若ものは、しんとした境内を拝殿のまへへ進んで、紅白の鈴の緒をちよいと振つて、ぴよこりとお辞儀をした。

「へい、大工町の留……親爺とおふくろを頼んます。」

　わに口(拝殿の鈴)が、もうろうと鳴つた。

「えゝ、神さま、」と、低い聲で、彼は、シトミ戸の中へ、話しかける――「留が、未熟な藝當を、けふも、御覧にいれやす、へい、そのかはり、こなひだうからの頼みだ、親爺とおふくろを、お頼んまをします、へい……」

　ばおん、ばおん、ばおん。

　若ものは、へい、へい、と、腰をかゞめて、そこをはなれて、苦竹の竹やぶの、青けむりのかゝつた、神輿庫の踏段を、ふるへながら、二三だん……とびらがあいて、はだざむいうす暗に、金の鳳凰が、一天四海に、つばさをひろげた――天下ニ道アラバ、スナハチ見ルと、古いいひつたへのまゝの姿で――その神輿の、しおのわきへ、つくばつた。

　で、そこの黒ぬりの大きなサンバウのうへに、金の歯をむきだしたお神楽の獅子頭を、そつと腹がけの胸に抱いて、そのまゝもいちど、拝殿のまへへもどつた。

　しいんとした黒松の葉のあひだに、脈あな血いろの太陽が、けむつてゐた。

　ばおん、ばおん……

「留は、神さま、なんしろツブの素人なもんで、へい……お慣りなすつちあいけませんぜ、へい、へい、そのかはり、コロリの親爺とおふくろを、どうぞ、おたのまをしますよ。」

　で、その獅子頭を、右手でぐつとさしあげて、ほの青い眼ぶちに紅らみのにじんだ顔を、悪熱のうづいた空へふりあをのけて、しばらくしやんと立つてゐたが、そのうちに――[illegible]にでもうたれたか、それとも、悪寒におそはれたか、ぶるぶるツとみぶるひすると見るまに、獅子を首に、ぱつと両脚をひらいた……

　もちろん、瓔珞の[illegible]子もない、[illegible]もなければ鈴子もない、横笛も、シメ太鼓も、人の氣も、いつさいなくて、たゞしんしんとした社殿のまへの砂利のうへを、獅子は、舟大工の留にあつて、右へ左へ――ばあくばくと、邪氣をはらんだ日輪へ、金の牙をムキながら、猛り、むせび、あらび、狂ふのだ。

　――神樂所をしつらへて神をいさめ、この禍ひを攘ふとか、または、妖氣を攘ふためとて鎮守の祠の神輿獅子頭を街頭にわたし　などなどと、當時の見聞録にのこつてはゐるが、留の氣持は、そんな神いさめでも、悪魔ッ拂ひでも、むろんない……ブコツな、下手くそな、藝業を、必死につとめて、神さまに見てもらつて、それで、両親の命を、とりとめようといふ、かんたんな思案だつた。

　ばおん、ばおん……

「へい、神さま、これから、いつもの、大ぎり

でさあ。」

さう彼は、青ざめたひたひに汗をうかべて、シトミ戸のうちらへもういつぺん、ぴよこりとお辭儀をした。さうして、ぢきに、兩手と頭を砂利にくつつけて、お獅子をかむつた兩足を、そろ、そろと空へ――むづかしいが、いち念ひつしの逆立ちだ。

獅子は、つひに、があッと口をあけひろげて、天上の太陽をにらまへた。

「わら、わらつて、おくんなせえ、神、神さまア。そのかはり、親爺と、おふ、おふくろを、おたのん……」

と、その、彼の聲に應じて、ふいと、かんだかな笑ひごゑが、黒松の幹のうしろにふるへて、犬がらすが三羽――白ちりめんの、肩と腰にばあと羽をひろげた半纏を着た、お吉が出て來た。

水かみに、横ぐし、單衣のちりめんの裾が、すきとほるやうな素足にもつれて。あぶない堂島下駄のまへつぼを、きゆつと踏みしめながら

ひと口茄子に
口紅のついたを
どこへやら
忘れてきた

と、土手ぶしの、そんな調子で……

三

情念の火が、ともれば、死ぬほど、苦しく、消えれば、消えるでまた、死ぬほどわびしい――ふたつのなやみを、たどりたどつて、ともかくも、けふまで、來たお吉であつた。

それが、あたかも、古風な觀念小說のからくりみたいに、ほの暗い黒松の木かげからふいとそんな風にたちあらはれると、いままで、逆立ちした若ものの足のてつぺんで、空の日輪へイキミかへつてゐたお獅子が、どうしたのか、ぱくんと腮をかんで、うなじを垂れて、そのまゝへたへたと地べたへ、うづくまつてしまつた。

「ま！」

「あちッ……ちツ、こ、こいつアいけねエ……」

「ま、にいさん、どう……!?」

「こ、ころ……いけねエ、しまつた！　神……」

「ころ……ま！」

「ころ、コロリだア！……畜生！」

「あ、……」

「神、神さあま！……そ、すんナあねエ……だから、だから、慣つちやいけませんて、初手から、あんなに……」

もうお獅子もなにも、とほくへ、蹴とばしてしまつて、はられたをしぼりながら、拜殿のシトミ戸のなかから、應神天皇へ、しきりに口說きつゞけるのだが、神の奇蹟は、それにはかまはないで、ずん〳〵、この、信心ぶかい、親おもひの若ものの五體に、あらはれてゆく。

……髮はとけてさんばらに――砂利に食ひいつた手あしのつめも、またゝくうちに、むらさきいろに死んでゐた。

ひたひにも小鼻にも、暗い青みがやどつて、そのうはつらを、氣味のわるい汗のすぢが、たらたらと尾をひいて……

「……留の、さかだちを、わらつて、おくん、なせエと、あれほど……神さま！」

もがきながら、うつたへる言葉も、たちまち血へドにふさがれて、ひい〳〵と、うめきごゑさへ、とぎれ、とぎれていつて、たゞ、折れこごまつた腹のあたりが、にぶうく、ふくらんだりちゞんだり――もう、銀蠅が、そのへんに、まようてをつた。

と、それまで、そゝくれ髮を、ふたすぢみすぢ、青春のみなぎつたくちびるにふくんで、おいつと立つてゐたお吉の手から、このとき、衝の、ちりめんの、犬がらすが三羽、つばさをひろげて、紅絹をひるがへして……ふはりと、若

ものゝうへにおちた。
「にいさん……」
「うゝ……」
「しつかり、おしな。」
「……いけねエ、もう……」
「ほゝ、しつこしのない……さ。」
で、その、手あしをかたくちゞめたのを、半纏のうへから、しつかりと抱きしめて、銀蠅のくる、臭い、青つめたい頬へ、頬をよせて
「かへりましよ。」
「うゝ……」
「かへるんだよ。」
「うゝ……たれだ?」
「たれつて……ほゝ、おき……あたし、さ。」
「……たれだ?」
「おまへ、眼を……あゝ、眼は、そんなに、あいてるくせに……」
「うゝ……見えねエ。」
「ま!」
「……たれ? たれだ?」
「おきち……たうじん、ほゝゝ。」
「……お、き、ち……おきち……唐人……あ、あ。」
さう叫ぶとともに、若ものは、からすの半纏と死の重みとをいつしよにひきずつて、よろよろと五六尺、「四ツ足のにほひのする」彼女の胸からのがれて、それつきり、そこの地べたへ、うつぷせに、のびてしまつた……
「死んぢやつた、死ん……」
神さまに背をむけて、その若ものの、たましひの行方を追ふやうに、街の空をあふぐと、腐つた西瓜みたいな太陽の熱氣が、じり〳〵と、醉ひざめの頬へおちてきた……

四

それから、ものの一ときもたゝぬ間に、もう、街は、霧か時雨か、つめたい、ほのぐらい煙につゝまれて、そのなかを、生き身死に身のけぢめもつかぬお吉の姿が、あの下田道の方へ、たとへば「黒いともし火」のやうに、消えていつた……
むかしのひとなら、さそくに、「お吉ものぐるひ」と、即興詩に、いゝ、花をやつたであらう——そんな姿で——
片手はふところに、盲ひた心臓をおさへ、片手は、あの、からすの半纏の、えりをつかんで、地べたをうしろへひきずつて……ひとみが、晝の月みたいに、ぢつと、動かなかつた。頬が、青ぶだうのはだのやうに、さみしかつた。
さうして、若いくちびるの、反射的にうごくを聽けば、
「……たそやあんどが、たそやあんどが、ちらり、ほらり……」
と、ほそ〴〵と、夕ざくらのうたで——
それが、波のしら〳〵と寄る柿崎の、黒船見張番所の灯を、うつゝに過ぎて、藁家と松のあひだを、コン四郎館みちへかゝつたとたん——ひゆつと、空をきつて、石ツブテがどこからともなく飛んで來た。
彼女は、ふところの手をだして、コメカミをおさへた。
その指のまたへ、すうつと、血の蝙蝠がつたはる。
ひらとまたひとつ——
こんどは、足くびだ。
それから、肩へ——腰へ——
うす着の、鼠に黒のタテヨコ縞の、紺絲が、さむい霧を吸つて、彼女のはだのまるみの見えるほどしほたれてゐる。
そのうへへ、なにびとも知れず、石を投げるのだ。
いつたい、投げる者と、投げられる彼女のあ

ひだに、どうした諒解があるのか──ひとこと、さけびもせぬ、ひとこと、應へもせぬ、いつさい無言の非難だ。いつさい無言の迫害だ。

さうして、また、まつたく無言の、忍辱だつた。

彼女は、びつこをひきながら、わづかに、くちびるをふるはせた。

それが、やつぱり、あの、夕ざくらのうたで──

「さくら、さくら……さくら見よとて、名をつけて……」

しばらく、そんな風にあゆんで、やうやく、ツブテのやんだところで、彼女は、はじめて、われにかへつたやうに、からすの半纏を、胸に抱きしめて、あゆみをとめて、空をあふいだ。

もう、とつぷりと暮れて、足もとから、もりあがつた石だんのうへの、高い花旗ざをの中途に、西から北へ、はうき星が、長く尾をひいてかゝつてゐた。

頰へ流れた血が、かたまつて、かゆい。

それを、そつと、指さきで撫でながら、うら門へまはつて、とぼ〳〵と、そのうちらの、おらんだいも畑をぬけて、いつもの、内玄關へ…をとこの部屋へ……

……

部屋ぢや、五十四のコン四郎さんが、季節はづれの、赤い組紐の垂れた、黒ぬりの、紗の團扇を、しわんだ兩手のたなごころのなかで、くる〳〵とまはして、子供みたいに小燭の灯を仰いでわらつてゐた──

五

もと〳〵、はじめのそも〳〵から、あの「じやがたら文」にのこつてゐるやうな、死ぬほどの情念のこもつたふたりの仲ではない。「みだれ」のおもしろさ、「わかれ」の味など、いろ〳〵、愛戀のみちをひとすぢに深まりゆく姿は、どのみち、望むべくもないふたりで──

それが、去年安政四年の、冬のはじめから、いつそう、狂ひだして、をとこは、いよ〳〵、時代のはんどるを、にぎつて、めざましく、動きだし、をんなは、その風雲のしたに、をんなごころの、照り降りにのみこもつて、ます〳〵、うつたうしくすさんで來た。

今夜は、さうしたふたりに、最後の破局のせまつた晩だ──

……

……

コン四郎さんは、陽氣だつた。

それは、いつぱい機嫌の陽氣ではない。

ひさしぶりに、健康な、排便が、あつたとか、睡眠に、とろけさうな、子豚の肉を、たつぷり、食つた、などと、いふ、一時できな、家常茶飯事的な、そんな、氣持ちやない。

彼の今夜の上機嫌は、いはゞ、歴史的だつた

彼は、去年の十月のはじめに、日本役人や、あめりか紋つきを着せた領事館員など三百五十人ばかりの行列をそろへて、花旗を押したてて、シタニヲロ、シタニヲロと、天城の雲をふんで、江戸へのぼつた。

彼は、金モールのついた大禮服を着て、金すぢのはひつた青、黄引をはいて、公方さまのまへへすゝんで、國書を捧呈した。

それから外國事務宰相・堀田正睦の邸へ出かけて、大きな肩を揚げて、開國の大演説をやつた。

さうして、通商條約と貿易章程を議定して、この春、おらんだ蒸汽軍艦の觀光丸で、四ヶ月ぶりで、海からもどつた。

もどると、そのまゝ、しばらく發疹チブスで、幕府の要人や、下田の役人たち──あの、

皮をかむつた日本人の微笑の連中を、をかしいほど、あわてさせた。彼が笑つたら日本も笑ふし、彼が、ベソをかいたら、日本もベソをかく。彼が、もし、死んだら、日本も、ほろぶと、いふのだ……

江戸から、公方サマの侍醫——奥御醫師の、おらんだ醫者の、伊東貫齋が、早打ちで天城をくだつて來た。

コン四郎さんの生命が、この、御關白粉の先祖の、三十三の貫齋の、王座と斷頭臺とを決定した——といふ。

さて、三月には、枝にすがつて、相模灘を、江戸へ、さきの、條約の、調印を急きたてに、出かけて、二ケ月ほど、九段坂の、蕃書調所で、むなしく、鰹を食つて、かへつた。

六月初旬——支那にゐた黒ふねの、あの「みすしつひ」、ほかに一さうが、長崎で、コロリの死者を埋めて、下田にあらはれた。それを、彼は、小柴沖にのりいれて、黒煙を吐いて、空砲をはなつて、あめりか吹き流しを、江戸灣頭にひるがへして、調印の催促だ。

おなじ二十日の拂曉に、祝砲がとどろいて——調印が、その黒ふね蒸汽軍艦で、完了した。

いつさいが、済んだ。

——やれ〳〵こんどの調印きいて、うれしい。六月中には、合衆國から二隻の蒸汽が、下田の湊へ、着くとすぐさま、官吏(コン四郎がとび乘り、たび〳〵のつたで勝手は知つたる、江戸の近海、小柴へのりこみ、おどしてゐるうち、オロシャの渡來(十六日下田來)に、時を得たりと官吏がいふには、エゲレス、フランス、支那にうち勝ち、數百の軍船、いきほひ強大、今に渡來し、願書を差しだし、お聞きでなければ、すぐさま戰爭、左樣になつては、御ためにわるい。わつちにまかして調印なさつて、御渡しなされば、わるくはしないと、おどしてすかして、だましに……

などと、例の當時の「ちよぼくれ」にもある——

それから、ついこのあひだ、外國奉行ら(水野永井ら)が、彼のあめりかへゆくことに定まつたし、彼も、近く、みにすとうるに榮進して、江戸へうつることに、なつてゐるのだ。

——以上が、ざつとだが、去年の冬からの、彼の仕事ごよみで、で、この、大ころりの秋の一夜の、彼の陽氣のみなもとだつた……

六

……ほゝも、手も、このごろの季ちがひ陽氣にふとつて、大きな、角細工のフランス牡丹をはまつた胴着の胸が、まろくふくらんで、そんなかおちや、始終、黒ふねのどよめきのやうな、鼓動が、ひゞいてゐた。

それが、頭のどこかに、香水がたかれてるやうなこゝちで

——わたしにあの寢臺にせうか、西洋寢椅子にせうか……やつぱり、こんやはオ・キ・チにせう……

ふらあ、ふらあ、と、帯のまばゆい、爪紅のかはいゝ、いつもの彼女を、青い眼のさきに、らふそくのほのほに、ゑがいてをつた——とところへ、はうき星の、夜空のしたから、風と一緒に、容姿も氣ぐみも、まつたく「黒いともし火」のやうに、彼女がはひつてきた。

で、ほとんど無意識に、椅子をはなれて、らふそくのあかりを吸つた「交趾模樣緞」の敷物のうへをふたあし、みあし、小きざみに

「おゝ、わたしのかはゆい小鳩！ わたしの女王！」

と、例の、お天氣な、あいさつを、うまい煙草

のけむりのやうに吐きながら寄つてゆく——その、でばなへ、あたかも、心臓をくぎづけにするやうな、彼女のわらひごゑが沁みとほつた。

「はア！…オ・キ…血！」

大きなあごを、がくんとかんで立ちどまつて——

「たれ、たれだ!? たれが、した、そのきずは?!」

「………」

「地獄！　おゝ、」

で、はしり寄つて、つめたい秋の霧をすつた彼女の肩を抱きしめて

「オ・キ・チ、オ・キ・チさん！　たれだ!?　え、え？　たれが、こんなに…」

彼女は、からすの半纏を、抱いたまゝ、輪郭の鋭い、をとこの青いひとみに凝注して部屋の入口に、ぢつと立つてゐた。

いまさき、わらつたわらひごゑが、まるで、石の面にほこりがたつて、たちまち消えてしまつたといつたふうで…

——あゝ、なんといふ、なんといふ眼だ！

それは、おろかに花やいだ賣春婦の眼ぢやない。

とほりいつぺんの、をんな心のはかなさを宿した眼でもない。

にくしみと、かなしみと、あざけりと、さみしさと、世の中の苦惱のいつさいが陰々とたちこめた眼だ。

「オ・キ・チ！」

ほつれた髪へ、くちびるをくつつけて、さう呼びたてるをとこの胸を、血の粉のついた、つめたい片手の指さきで、押しもどしながら、眼は、をとこの眼を見つめて、しらんだ、かわいたくちびるを、ぴりぴりとふるはせた。

「たれ？　たれだつて!?」

「……………！」

「おぢいさん。」

「!?」

「びつくり、びつくり、おしで、ないよ。…」

で、さむく、白く、わらつて

「…あんたさ！」

「えゝ！」

「あんただよ！」

「まむ…！」

そこで、彼女は、はじめて、ひとみをそらして、卓上の、眞鍮の、燭の火を見た…

七

ぢいつと見ひらいた彼女のひとみに、らふそくの火がゆらめいて、たましひと亂酒の醉ひざめのせんりつが、彼女のなで肩から、彼のたなごころへ、うづきわたつた。

と、とつぜん

「あはア、はつはつはア…」

と、あたかも、その、彼女のたましひのひびきを、ふみ消すやうにわらつて

——…僕、えゝ？　僕が、そのきずを！　ぼくウ!?」

「イエス、ユウ！」

「馬鹿な！…は、は、はア…オ・キ・チさん、オ・キ・チさん、あなた、さむい。さ、このちりめんの半纏を着て——ストオヴに、火をいれて…さいはひ、御用所から、九州炭が、たくさん來てゐる。煙は、けむるが…この——」

そいつて、片手の、ふとい、しわんだ指を、胸のうへにひらいて

「…この、胸で…その、血も、あらつて、あげよう…」

「……………」

「ね、ね、オ・キ・チ、ディア…」

で、いつもの「をんなおもひのシャツで、そつと、彼女の抱いた半纏に、手をかけると

「うるさい！」

「…………！」
「おはなしつたら！……」
「オ・キ、オ・キ・チ！」
「ほゝ、すんなに、ほゝ、いはなくつたつて、とほからきち、きちがひさ……」
　と、ほのほを出た、らふそくのシンのさきの、眞紅な火を、見つめて、あへぎながら
「…いつそ、コロリで、死んでしまひたい……」
　ひとりごとが、ほそ〳〵と、舌にもつれて、そのまゝ、くらあく滅入りかゝる――それを、おしこらへて、鐵火に
「…間のぬけた、煙くさい、すんな、あめりか火鉢よりあ、おい、おぢいさん、いつぱい……お酒だよ！」
「サケ!?　また、あゝ！」
「なにを、ひとツ、ほゝ、ほゝ、よんべも、をとゝひの晩も、そのまた、まへの晩も、あんなに、だしてくれたくせに……さ、下男がしらを呼びな…呼びな！……
　おや、しわい、しわい、すんな顏を……なんだね、たかが三百(――當時コン四郎館ノおぼえ書ニ、「一貫八百文――上酒六升」ナドノコル――)…お鳥目なら、ほら、」
　と、ほそ腰に、三重ほど、あまつた小柳帶のあひだから、紙いれをつまみだして、をとこの足もとへ、ぽんと投げて
「ほゝ、ごめんなさいよ…みんな、あんたの、お金だつたねエ。」
　で、こゝろもち、びつこを引きながら、をとこのひぢかけイスへ、腰をおろして
「いつぱい、ひつかけれあ、ほら、ばら、ばら、ばらだ、ばらだい……わすれた。」
　と、をとこの、すわつたあごをあふぐ。
　をとこは、兩手を、うしろで組んで、燭の火のまへを、いつたり來たり――ふとい、黑い、十九世紀の首卷をうるささうに、首をふつて、ときをり、手持ぶさたな眼なざしとため息を、彼女に投げてゐた。それが、ふいと、足をとめて、彼女のうへへこゞみかゝつて
「おゝ、ぱらだいす！　樂園!?……えゝ？」と、ほゝゑんだ。
「呼びな…呼びな…亞潔だよ、呼びなつたら！……」
　じれつたなみだか、なんだか、ほろ〳〵と、彼女の頰を、つたうておちた。
「亞潔！　亞潔！」
　をとこが、いくらかはずんだ中高音で、彼女の酒を呼んだ。
　さうして、お[illegible]のと[illegible]でゐるらう、色いとで[illegible]をとつた、小さなハンケチをとりだして、そつ[illegible]、彼女の[illegible]にあてた――
「樂園、樂園、」と、くちびるへ、ツバをにじませながら……

八

　…もうなんどきであらう、たゝみつどきの板の間の、煙突のゆがんだ古[illegible]にあるおろと火がいつて、雨戸をかすめる枯葉の音が澄んでゐた。
　をとこが、その、ほこりつぽい板の間につくばつて、下がへのつまのあひだに、すんなりと美肉ののつた、をんなの足くび(――石ツブテをうけた――)を、さつきの、おらんだいろ絲の絹手巾で、いつしんに結はへてをつた。
　焚きぐちの紅い火を、白髮のみだれた半面にあびて
　――首に眞じゆのくびかざり、腕に金の輪、足にあ、絹の花びら……絹の花びら――
　そんなことを、うるみごゑで、くりかへしながら……
「さ、これでいゝ。」
　で、その、土ふまずのふつくらと彎曲した、

ほの紅い指の、しなよく反つた足を、雨手のてのひらで抱いて、くちづけしながら、とろ〳〵と青いひとみをあげた。

「かはいゝオ・キ・チ。」

「お、ふ、おふざけでないよ。」

いゝいゝふらそこの冷酒を二本、ひとりであけて、ほのぼのと、人間らしいまぶたをあはせてゐた彼女が、椅子のクションに起きなほつて、彼を見おろした。

「ほゝ、ほゝ、床に、膝をついてさ、くろ船の、コン四郎さんが……」

「かはいゝ、かはいゝ……」

「あれさ、みつともない！……」

「……あし、あし、あしにや、絹の、花……花、びら！……おゝ樂園！　あゝ天！……」

「およし！　およしつたら！」

さう叫んで、その白い、なよやかな、素足の、あしのうらで、ひげの芽のざらつくをとこの大きなあごを、踏んづけた。

「犬！　犬だよ、犬だ、犬、犬！」

「おゝ、犬！　は、は、はア……」

と、ぶざまにころげて、起きて、膝まづいて

「ばあく！……はつはつはあ……」

彼女は、みだれ髪を、いくすぢか、口にふくんで、ついと顔を反向けた——きり〳〵と、さつき石をうけたコメカミが痛む……

と、ぢきにその膝へ、まろくしわんだ、なまあたゝかい、をとこの雨手が、ぢつとかゝつて、ひぞつた、その、えりあしを、あふぎ見て——

「オ・キ・チ、ディア……」

「……………」

「オ・キ・チ……」

「なんですよ、あつつくるしいねエ！」

「江戸へゆかう。」

「え!?」

「江戸へ……」

と、青眼を、なかぞらへ——にんまりとわらつて

「……花旗の、かゞやかしい、山のやうな、くろ船で……」

「とんだ、とんだ、道行だねエ……」

「もう、もう、この、下田にも、いよ〳〵、さよならだ……ねエ、オ・キ・チさん、いつしよに、いつしよに……」

「へん、いゝ、いゝ、にら・よるくの、幌馬車（——前篇參照——）の遠出でなくつて……」

「イエス、イエス、江戸は、向島の、花まつりへ、ふたりで……」

「いやだ。」

「オ・キ・チ……江戸には、美々しいキモノが——まぶしい髮飾りが——金が、鼈甲が、絹が……」

彼女は、彼の眼を、眞向に見おろして、もういつぺん、たましひをシゴくやうな、わらひごゑをたてた。

「コン四郎さん、おぢいさん、おい、」

「む……」

「せつかくだけれど、おことわり、まをしますよ。」

で、くるりとまた、そつぽを向いて

「……たれが、ひとッ！　江戸三界まで、犬の眞似をしに……たとひ、たとひ、石ころづめにされたつて、あたしや、下田の、をんなさ……」

さうして、もいちど、向きなほつて、くだんの「絹の花びらを飾つた」かた足を、をとこの、英雄的な、鼻の下へ、伸ばして、さけんだ。

「うはぐつ！」……

九

びろうど衿のついた、ふらんす仕立ての、ふろつく・こおとを着た、大々とふとつたをとこが——領事ふうに、ふくらはぎを、捨て身に伸ばした、をんなの足の爪さきへ、言葉のまゝ

に、皮のうはぐつをさゝげた。
それを、邪けんにつゝかけて、椅子をはなれながら、つめたい眼で、さら〳〵と雨戸にかゝる風の音を追うて
「はんてん！」
をとこは、ストオヴの紅いあかりのこぼれた床のうへに、ふろつくの、縞モヽ引の膝をついて、脂肪のまろんだ手をもみあはせた。
「半纏！」
もういつぺん、くりかへして、彼女は、片手をあげた——よくいふ、あの「ドアを指さす」と……そんな、きつぱりとした調子だつた。
をとこは、唯々として、起きあがつて、「交趾模様織」の敷物のうへの、燭の火のゆらいでる卓子のそばへいつて、そこの椅子から、からすの半纏をとりあげて
「半纏、えゝ？」
で、それを、貴婦人の春の外たうかなんぞのやうに、片腕に、折りかけて、彼女のまへへもどつて、さも〳〵、をんな天下の、律儀な額をした——
「あばよ！」
ぴしやりと、その額へ、そんなあいさつを投げて、をとこの腕の半纏を、ひつこぬくとともに、ぱつと傍へ……その、大がらすが三羽、高くひくく、西洋らふそくのひに、羽をひろげた背中を、をとこに見せて、ふら〳〵と、出入口のフスマの方へ——
「あ、あ、オ・キ・チ！」
で、大またに、そのまへへ、フスマを背に立ちはだかつて
「すと、すとつぷ！」
「おや……」
「どこへ？」
「お退き！」
「どこへ!?」
「ヘン……」
「オ・キ・チ！」
「なんだね、すんな、すんな、顔をして……歸るんだよ、さ、通しとおくれ。」
「歸る!?　ノオ！……街にあ、街にあ、弱い、かよわい、美しい、わかい、婦人に、石を投げる馬鹿が、野獣が……あゝ、この、日本！」
「痛い！　おはなし！　えゝ、この、この、手を……退いとおくれ、通しとおくれ、コン、コン四郎さん！」
「ノオ！」
と、大きな兩手で、彼女の肩を、がつちりと、つかんで、天國も地獄も無く、たゞひたむきに、眼なじりの切れるほど見ひらいたひとみを、おつとのぞきこんで
「……オ・キ・チ〳〵——と、ひくくわらつて——……こゝは、日本ぢやない……」
「……？」
「こゝは、亞美利加の、總領事館だ。わかる？……」
「……それが？……」
「わからない？……」
「——いつたい、どうしたのさ？　じれつたいねエ！」
「こゝは、開けた、進んだ、あめりかだ……」
「ま、馬鹿らしい！……」
「いや、こゝだけぢやない。わたしが、江戸へゆけば、そこにも、あめりかが、出來る……新しい婦人に、いんぎんな、紳士心の……」
「ま、おふ、おふざけ……」
「……だから、オ・キ・チ、オ・キ・チさんは、これから、ずつと、わたくしと——その、あめりかに……」
「なにを！……さ、お退き！　歸るんだよ！お退きつたら！　畜生！　畜生！」
……と、をとこが、彼女の肩をつきもどして、

ふらんすぼたんの胸を、ぐつと反身に、するどく叫んだ。
「お默り！……わたしが、命令する――こゝに居れ！……わたしは、その、日本のあめりかの、公方サマだ！」
お吉は、眞青に凝立して、くちびるをふるはせた――こゑも、わらひも、死んでゐた……
「コンスル！　コンスル！」と、あわたゞしいヒウ助君の呼びごゑが、そのとき、ふいと、ふすまの外から、ひゞいて來た――

十

入口の、ふすまの、內と外で――
「なんだ？」
「コンスル！」
「どうした？」
「おゝ、コンスル、暴徒です！」
「暴徒！……來たか――」
と、耳をすまして
「どこだ？　ヒウ助君。」
「裏門。」
「裏門……人數は？」
「わかりません。」
「どんな連中だ？
「百姓、町人、漁師……」
「浪人？」
「いえ……變裝かも……」
「ふん……」
で、將軍が春風のなかを散歩するといつた足どりで、部屋の隅へいつて、そこの壁に皮帶でつるさがつた、革嚢いりの連發短銃を外して、片手にぶらさげ、片手には、おなじ壁に寄せかけた、竹の石突きのある「劍杖」を持つて、お吉のそばへもどつた。
さうして、彼女の手首を握つて、その、硬ばつた、つめたい、手のひらへ、仕込杖を押しつけて、ひくい、ふとい、聲で
「戰鬪用意！」
あやしい戰慄が、すうと彼女のもゝから足くびへ――さつきの、絹の花びらを飾つた打ち身を刺して……
「復讐だ！　石を投げた者へ！」と、をとこが、耳もとで、冷やかにわらふ。
復讐！　復讐！……あゝ、その、仇は、いつたい、たれだ!?
しらんだくちびるが、ひく〳〵と、けいれんする――それを、見おろして、ゆつくりと
「こゝは、あめりかだ。おまへは、わたしの、あめりかの、所有だ。」
といつて、くるりと背を向けて
「館員は？　ヒウ助君。」
「みんなの部屋に。コンスル。」
「ほう！　で……？」
「で……大丈夫です。」
「ふん。」
「役人が……御番護士が……」
「來た？」
「はい。」
「ひつ縛つた？」
「……らしいです。」
「連行いた？」
「……らしいです、中村の、奉行所の、うらの、あの、牢屋へ――」
「なアんだ……ヒウ助君。」
「おほかた、また、野蠻な、臭い生首を持つて、あやまりにくるんでせう。」
「うん、で……ヒウ助君？」
「ヒヤ・サア。」
「で、どうしたんだ？　はひつて、言明したまへ。」
「でも……」
「いゝんだ。」

「いえ……」

「どうした！」

「あんまり……僕が……」

「飲んでるのか？」

「はい、それに……」

「それに？」

「服裝が、どうも。」

「なにを……と、ふすまを、あけて、そとの暗がりを、ぢつと見て――

「――はア！ 君はあめりか紋付の羽織を着てるね。ほう、ジイパニイズ・ストッキングを穿いて……たしか、去年、江戸で、こしらへた……」

「つい、その、江戸ゆきを、考へてゐましたんで。」

「ふん、まあいゝ、明日のことだ――だが、氣をつけるんだ、なんどき、また、竹やりを持つた、馬鹿が、コレラ退治つて、はゝ、あらはれるかも知れん。」

「はい、コンスル、これ、このとほりです。」

「あゝ、君も。それでいゝ……ほゝ、連發短銃は、黒ふねだ、あは〳〵……」

で、する〳〵と、ふすまを閉めて、ピストルの皮帶を、つかんだ手を、お吉の方へさしだして

「こいつを、もとのところへ――その劍杖も――オ・キ・チ、ディア。」

十一

――街の衆が、たうとう來たんだ。

この一二ヶ月、血いろの太陽に焼けたゞれ、霧とはうき星に凍えてゐた街から、くるべきものが、たうとう來たんだ。

頬の青ざめた、ひとみのひろごつた、死の街の男等が、暗にまぎれて來たんだ。

骨の白い手に、縄だすきをかけて、竹やりをにぎつて、やせさらぼうた肩に、饑ゑと死に、驅りたてられて、この、異人館へ來たんだ。

それは、街へ見ひらいたお吉のひとみに、このあひだぢうから、寫つてゐた――あんまりな凶災につきつめて、おろかにひもじく狂うた街。健康な、おちついたお化粧をわすれて、迷信の、經かたびらを着た街。

ひくくこゞもつたその、街家の軒端に菖蒲なら、すが〳〵しいが、くらい八ツ手の葉がさゝつて――惡魔ッ拂ひの、天狗の羽團扇だといふ。

ちろ〳〵と、軒さきの、霧んなかに焚藁の火が燃えて――きつねとたぬきをオトスといふ。

海鼠壁と伊豆御影石で、小さくよろうた家が、ところ〴〵、木戸をおろして、太陽にも星にも、眼をふさいでゐるのは、すなはち、死の家――、からうじて生きのびたのが、街の背の、庭へのがれて、そこで、[illegible]と杉の葉に固まつて、高價な梅の實をなめながら、ふるへてゐるのだ……

ほの白い、中窓の小障子を[illegible]れば、内らから、さくりと、青ぐろい指の爪さきがあらはれて、ぱり〳〵と紙をやぶつて、桟をつかんで、斷末魔のうめきごゑが、ふむ足のあゆみを、凍らせる。

朝顔のつるの、枯れ〳〵にまとうた連子窓など、まれにひらいてゐる、そこをとほれば「鬼は外！ 鬼は外！」と、かぼそいしわがれた聲とともに、ハラ〳〵と豆つぶてが、彼女の、[illegible]や肩をうつ。

もう、生業もない、生活もない。四月から、あがりはじめた米が、こゝへ來て、とびあがつて、倒るるものは、いつそう倒れてゆく。

時世粧も、陽氣も、なにもかも、ほんたうにもう、窒息してしまつた。

――それは江戸なみに、御施米もあつた。コロリの注意書の、おふれも出た。なんしろ、町は、「海の箱根」で、黒ふねにひらいた飾り窓で、それだけに、おカミの氣くばりも、ゆきとゞいてはゐた。

だが——死者は、よみがへらない。コロリは、破壞の死神だつた……

ひと〴〵は、絕望的な、ひとみをあげた。空も、街も、お互の顏も聲も、人間の世界は、いつさいが、憂鬱にとざされてゐた。いつさいが死の呼吸を、呼吸してをつた。

が、たつたひとつ——たつたひとつ、花やいでゐるものが、その彼らのうへにあつた。

街のはるかな空に、丘の黑い樹立を拔いて、晴れ〴〵と風にをどつてゐる星條旗!

あゝ唐人! あゝ、あめりか!

それは、死の手だ!

それは、邪教の魔法だ!

四年まへに、町をほろぼしたあの大津波——あの、「唐人禍」を忘れたか!

しかも先月の、あの黑ふねが(みすしつぴ)、コロリの死人を、持つて來たと、いふではないか!

あめりかを倒せ!

官吏(コン四郎)を屠れ!

……

……

街を、行燈にたとへるなら、コン四郎さんは、その面に、ぼうと浮かんだ、無氣味な影ぼふしだつた。さうしてお吉は、その、あやしい、忌まはしい、影ぼふしのカケラで……

で、竹やりのまへぶれの、石ツブテを、あんなふうに、うけたのであつた——

十二

——戰闘用意! 戰闘用意!

仕込杖を、彼女の手に押しつけて、をとこは、叫んだ。

それは、あたかも正しい戰をたゝかふ者の、雄叫びであつた。

——復讐だ! 石を投げた者へ!

さう、をとこは、彼女の耳へ、つめたくわらつた。

それは、彼女と街のきづなを、完全に斷ち切る、ひややかな微笑であつた——彼女を街から奪ひとる、むしろ殘虐な、わらひであつた……

だが、さうした氣負ひや、さうした微笑は、みんな、はじめから、譃の皮でじうぶん承知の、無理だつた——

なんの、おろかな、頭であるく日本の暴徒くらゐ、いまさら、戰闘などとさわぐ、をとこぢやない。

去年の冬、江戶で、いよ〳〵「大君」の宮殿へ、國書の捧呈に出かけるだんどりとなつたとき、水戶の、傑の浪人が三人、彼の乘つたござかごを狙擊しようとして、つかまつた。それから、江戶滯在中、ずつと、そんな、あぶない劍氣が、彼の身邊にたちこめてゐた、そんななかを、始終、たつたひとりで、今日は……今日は……と、青い眼をニコつかせながら、街の中の富士山をあふいで、馬をうたせたりした——そんなをとこで、彼はあつた。

いつたいに、この時分、渡來した異人はヘロリやプウチャンをはじめなんのたれと名の殘る連中は、みんな、ひとかどの傑物で、なかでもこのコン四郎さんは一代の男だつた。

それだけに、また、無理もウソも、おらんだいもをかみつぶすやうに、知らん顏で、押しとほしてしまふ。

一度(——穴かしこ!——)キリストの畫像について、奉行の岡田と、こんな對話を交換したことがある——

——この繪は、何の圖にさふらふや?

と岡田が訊いた。

——夜々臥しさふらふ以前に、拜をいたしさふらふ圖にこれありさふらふ。

と彼が答へた。

——何を拜しさふらふにや?

――人道は、天に基きさふらふものにつき、天を拜しさふらふ。

――キリスを拜しさふらふ儀にもこれありさふらふや？

――キリスは人間にてさふらふ。神は天にこれありさふらふ。

――先年南蠻人この國に來り、切支丹宗をひろめさふらふにつき、逐ひはらひさふらふことこれあり、右は、コンシウル・ゼネラールは承知にさふらふや？

――よく存じまかりありさふらふ。

こゝに、幾多の藏書これあり、諸州の風土記、歴史等にて、宗門之書は、いつさいこれなく、今日話し出でさふらふは、御問に答へたるまでにて、「私は、宗門の話は、嫌ひに御座さふらふ」……

一心不退轉のひたむきな、清教徒であつたはずの彼が、時と場合によつては、こんなふうに、キリストもなにも、まつ殺してしまふのだ。

まして、まして、こまかい、をんなの感傷のアヤなど、彼にとつちあ、一個の、おらんだいもにも價しない！

で、黒ふねのゐぬうちは、あたかも、らう屋の、獨房の、床石のすき間に、花ひらいた草花のやうに、いぢつたり、舐めたり、溺愛れて、じやれて……黒ふねが、あらはれると、たちまち、その彼女を、路傍の、雜草の葉のやうに、皮靴のうらで踏んづけて、あめりかあいさつの交換に、をどりまはるのだ……

今夜も、そのでんで――お吉が、急に、彼の「英雄的な舌」のひるがへるまゝに、まるで、公然と、あめりか政府に雇はれた一役員のやうにされてしまつて――で、仕込杖を押しつけられたのだが、だが、いつたい、それで、たれを斬れば、いゝのだ!?

彼女は、無意識に、その劍杖を胸に抱いて、つい眼のさきに、ふすまごしに、ヒウ助君と話してゐるをとこの、大きくそびえ立つた背中を凝視した。

さうして、ぢつと見つめながら、彼女は、自分の心臟の鼓動を聽いた。

もし、どうでも、その劍杖をふるうて、刺すなら、それは、むろん、押し寄せた町の衆ではなうて、その、をとこか、おのれの心臟か、どつちかひとつではないか!……

十三

劍びしか鬼ころし(酒銘)か、あるこほるの、ほの〴〵と夕月夜のこゝちに、あやしい、黒[illegible]の十字路へ來て、ふるへてゐる、その、鼻のさきへ、ゆつくりとふり向いて、をとこが、ピストルの皮帶をぶらさげた手を、無造作につきだしたのだ――

「眞さをだ……ふるへて……ほ、なにを、そんなに？……あゝ、さむい？……えゝ？」

「…………」

で、そばへ來て、肩をかゝへて

「わたしの、おとなしい小鳩！……さ、これを、こんな、あぶない仕込杖は、こつちへ……もう、いゝんだ、おはなし、そんなに、きつく抱かないで……抱くものは、はゝ、ほかに、ある――」

そいつて、そつと、その劍杖をとりあげて、連發拳銃といつしよに、自分で、もとの壁へ持つていつた。

その、うしろ姿へ、うな垂れたまゝで、絶え絶えのこゑをしぼつて

「コン四郎さん……」

「待てよ……」と、壁のまへに立つて、ひとりごと――「彈玉は、たしか、つまつてゐたはずだが……」

「コン四郎さん、どうぞ……」

聽えぬふりで、ピストルを、いそいで、革嚢

からとりだして、のぞいて
「あゝ、……えゝと、兎を、撃つた、あのとき
に二發……それから——」
「どうぞ、ゆるして……」
「……それから、須崎の關門のさきで、あのロ
ウニンの暴漢に、二發——」
「……それからと、それから、」
ひき金に指をかけて、ふりかへつて、大眞面
目に、彼女へ、ねらひをつけた。
「ゆるして、ゆるして、おくん……」
カチリとひき金が鳴る——
「おどろいた、えゝ？　は、はア……」
「いゝえ、いゝえ……コン四郎さん！」
「む……」
「あのさつき來たといふ街の衆を……」
「暴徒？」
「どうぞ、ゆるして、あげて、おくんなさい。」
「なにを？」
と、ピストルをしまつて、壁へかけて、彼女
のそばへ來て
「——オ・キ・チさん、この、コメカミの傷は……
この、足くびの傷は、たれが、たれが……えゝ？」
「はい、でも……」
「でも？」

「あたしは、どうせ……」
「ふん。しかし……」
「もしも、もしも、あの衆が、お仕置にでもな
ると、あたしも、生きちや、をられない……」
「街の、殘酷な、野蠻な、迫害？」
「いゝえ、それは、疾うから……どうせ、こん
な、腐つたからだで……コン四郎さん、この、こ
の、半纏で、けふも、あたしや、コロリの病人
を、抱いてやりました、さむさうで、苦しさう
で、見ちあゐられない……それが、ま、いぢら
しい！　その、もう見えぬ眼を、このあたしの
顏へ寄せて來て、たれだつて——ちつとは、う
れしかつたのでせう、たづねて、ほゝ、ほゝ、お
吉つて、唐人お吉つて、さういふと、いつぺん
に、きらつて、おそれて、にくしんで、この手
を抜けだして……死んぢまつた……」
「あゝ！」
「そんな、そんな、街でも、あたしの生れた、あ
たしを、育ててくれた、街だもの……」
「ふん、とにかく、オ・キ・チさん……」
「その街の衆に、間違ひがあつては、濟まな
い……」
「うん、うん、とにかく、この半纏を脱いで……
ストオヴへ、くべてしまはう。それから、と、

大變だ、消毒しなくちあ、その着物も、なに
も……」
と、眉を寄せて、さつき、その半纏を折りか
けた、自分の腕を見た。
「ゆるしてくださる？　え、コン四郎さん？
で無きあ、あたしは、ほんたうに、死んでしま
ふ……」
「わかつた、そんな、そんなことより……と、
ひとりごとで——「亂暴だ！　實に、亂暴だ……
コレラが來ちあ、あめりかも、僕も……」
で、こゑを張つて
「ヒウ助君！……亞深！……あゝ、動かないで、
ぢつとして、いま、消毒薬がくる、オ・キ・チ……」

十四

それから——
をんなの、消毒だ。
酔つぱらつて、おらんだか、ころんびあの、[illegible]
の小うたを、くちびるのあひだにはさんでる、若
い秘書官——
焼き豚のやうに沒表情な、支那人の下男がし
ら——
コンシウル・ゼネラール、閣下は、きつきり、[illegible]
いくみひもの垂れた、紗の[illegible]の帽をにぎつて、

遠くウイスの、馬の毛のはみだしたクションに、まるいものをのせて、命令する──

──その、缺乏所交易場のまき繪シバチへ、ストオヴの、石炭火をとりたまへ……硫黄と、硝石をくすべるんだ。

──霧吹きと、消毒液はいゝか。

それから、コップに、湯を……それに、ほふまんを十五滴──ゐうだにむを三十滴──薄荷油を三滴、たらして……

──よし！　それでいゝ。

──さ、半纏を脱がしたまへ。

──つぎには、帶だ。

──それから、キモノ。

──かまはん。さつさとはいで！

──半纏は、ストオヴへほりこむんだ──オビとキモノは、硫黄と硝石のけむりへ！

──よし！　霧吹き！……いや、それは、僕がやらう。

コンシウル・ゼネラール閣下は、團扇のひもを手首へとほして消毒液のつまつた香水吹きのふらそこを持つて、ゆつくりと「小間仕」のまへへ歩む──

下男がしらが、そのうしろにかしこまつてモンゴル・タイプの鼻で、こそばゆさをこらへる。

秘書官がそのわきで、チウイン・ガムをしがむやうに陽氣の爆發をかみころす。

閣下は、香水吹きのゴム玉をつまんで、しかつめらしく反りかへつて、命令する──

──顔を、あげる！

──立つて！……立つた！

──兩手を、ひろげて！

──眼を、ふさいで！……眼を、ふさいだ！

いち〳〵、愛玩動物の、手足の骨を、無關心に、折りくだくやうな、そんな口ふん──

閣下の、まるい、大きな、おや指が、ゴム玉のおしりに、くひこんでは、はなれ、くひこんでは、はなれ、そのたびに、香水のビンから、消毒液の霧が、その、緋ぢりめんにおほはれた乳房やなにかへ、飛んでゆく。

──さあ、あつち向いた！……むかう向いた！

で、また、閣下のおや指が、ゴム玉のおしりへ……

支那人の茶いろの眼と、おらんだ青年の、青い眼が、淫蕩な刺激のこもつたらふそくの火に、きゝめきあふ。

閣下のあごが、馬鹿に、大きい。

──よし！……下男がしら！　その、コップの藥！

──さ、おい！　飲んだ……飲み干して……よし！

閣下は、手首の飾り團扇を、ぶら〳〵させながら、「交趾模様」の敷物のうへを、もとの椅子へ、いきかけて、ふいとおもひだして──

──バトラー！……君にも、その、消毒液を、かけてくれ！

……………

「戀愛と消毒」──なんだか、このごろ流行の、小説の題のやうだ、ともなんともおもへないで、やがて、支那人とおらんだ青年とが、いろ〳〵始末をして、蒙古タイプと、馬鹿タイプの、鼻と鼻を、くそ眞面目につきあはせて、いつてしまふ。

……………

……………

「街の衆を！　街の衆を、どうぞコン四郎さん……」

と、いままで、默つて、奴隷になつてゐたをんなが、をとこの胸にすがつて、叫んだ。

「わかつた、わかつた、わたしのさむさうな小鳩！　そんなに、なみだを……えゝ？　藥がしみる？　はつはア……さ、ベッドへ！……戸外はほら、あんなに、暴風だ！」

十五

ながい夜を、そんなふうに、無理どめされて、あけがた――脂肪のかたまりのやうに眠つてゐるをとこのそばを、そつと抜けだして、もどつてゆく……

よひには、ひがし北に見えたはうき星が、西北の空にうすれて、薬草園の花も葉も、うす黒く、風に搖れてゐた。

……あけがらすと、新内節のそれから、うたはれたを、なつかしんで染めてみた、あの半纏の、ちりめんのからすも、ゆうべ、あめりか火鉢の灰になつて、はうき星の空へ飛んでしまつた。

かはりに着ていけと、びろうどえりのついた、羅紗の丸合羽を、をとこがさういつたが、緋ぢりめんに、それを膝までかさねて、横ぐしさしてあるけば――をんなは、とうにすたつてゐるが――とんだアメリカ道中で、地獄へだつて、往けはしない……

やつぱり、着物に帯をしめて、抜けて来た――その、衣紋や袖ぐちから、ぷん／＼と硫黄の香がたつて、頬がさむい、あたまがおもい、胸がくるしい。

いつそコロリで死ねればと、さうおもつてゐる身を、いまさら、なんの、消毒だ！

それに――はだ着だつて、着物だつて、いつぺん、水をくゞれば、手にもとらない。

その手を、そのはだを――人間の、をんなの、肉體を（――水臭い！……）髪の毛まで、薬であらつて、あらひざらして、それから抱いて、ふざけようといふのだ！

からなるときに、あの、伊佐の殿さまから聴いて、しんみりと身につまされた話――

――むかし、漢の王嬙とやら、自分とおないどしの、美しいひとは、水の暗い黒龍江のむから、さむ風の、ばら／＼とした砂はらの國へおくられて、えびすの妻になつて世つぎをまうけて、かなしいつとめを、つとめおほせたといふ。

かんがへてみれば、その昭君は、幸福なひとであつた。

ひげは、文字どほりむらさきでも、眼は、青くとも、そのえびすには、漢の天下と釣りかへに、もつたいないほど打ちこんでくれる眞實心が、あつたではないか！（前篇御覧をこふ）

……無理も、ウソも、相手によつては、戀情うちだ――

あさい眠りにたるんだ肉體が、死ぬほど重い。

神經の眼が、そらおそろしいほどさえかへつて、奥へ、奥へ、眞暗な反省の淵を、凝視する。

さむい！……くるしい！

いつそもうこの硫黄に咽せた生き身このまま、早付木（マッチ）の火をすつて、燃してしまへば――この黄楊のくしも、この深ひも、いつさいすべてが、いつしゆんの火焔になつて消えて、あとには、たゞすが／＼しい白骨だけがのこるであらう。

野ざらし！　野ざらし！

そこには、だいち、なんのたれと、名がない。花もなければ、霧もない。太陽もない、夜もない。街もない、時代もない……すゞしい、涼しい世界だ。

……………

あるこほるの、かわききつたさみしさ！

地獄から、死の街へもどつたをんな！

そんな顔。

そんな眼。

そんな、あゆみ。

……街は、妖しい、はうき星のかんざしをさして、眠つてゐた。

まだ、夜が、明けぬのだ。

明けても、日輪は、のぼらぬのだ……

十六

町のはしの、勞働者街のてつぺんにある、お吉の住居——

まる窓も、板びさしも、いちにち、霧のうすらあかりにとざされた、その、ゆふかた——

下婢のお菊さんが、枕もとにすわつて、なんべんも呼んだ。

「ねえさん、もし…もしえ、ねえさん。」

お菊さんの、チョコレエトいろに、ふしくれだつた手の指が、一年あまり、この、らしやめんのねえさんのそばにゐるうちに、まるで、うすものにくるまつたやうにまるうくなつてゐた。

それを、彼女らしく、にぎりコブシにして、たたみをたゝく。

ぼおん、ぼおん、と街の霧のなかで、鐘が鳴る——

「ま、お菊さん。」

と、飾り絲の垂れた枕を、押しやつて

「曉けたの？」

「いゝえ…」

「まあ…」と、その、鈍重な顏へ、力なく、わらふ。

お菊さんの、腰も、アタマも、この一年あまりの美食で、いつそう鈍く、シコつてゐる。

「あれは、ねえさん、暮れの鐘…」

「あゝ…」

けふは、きのふか、きのふが、けふか——なにが、なんだか、寢てしまつた…さう思つて、枕にかけた手くびを、ながめると、たましひは——

あゝ神さま！——とつくに、燃えからだが、若い、かなしい、ほの紅らみが、もう、指さきの、貝爪のあたりにまで、よみがへつてをつた。

「お菊さん」と、さみしい眼をして——「あの、けさ、着てかへつた着物と帶は？…あの、硫黄くさい？」

「………」

「たしか、掃だめへ、捨ててくださいつて、いつたはず…」

「…いゝえ。」と、不死身な、だん鼻をすゝる。

「え？」

「うらの、柿の木へ…」

「うらの、柿の木へ？…さういつた、あたしが？…よく、おぼえては、ゐないけれど。」

「…いゝえ、ねえさん。」

「あゝ、鳥にくれた！」

「いゝえ、ねえさん、洗つて…」

「ま、洗つて、お菊さん！　着るつもり？」

「…まだ、干かない。」

「さう…所帶もちだねえ。」と、しんみりとなつて、ふつとまた、氷をくだくやうに、わらふ。

「お菊さん、こゝを、から…」

と、いつて、自分の片手の甲の肉を、も一方の、おや指と人差指で、[illegible]につまみあげて

——かうして、ほら、はなして、肉が、かう、もとのやうになるやうだと、まだ、コロリぢや、ないんだつて…」

……と、そのとき、路へ、ひらいた中窓の、障子の外に、低い、ふとい、聲がひゞいた。

「——おきち・どの、まだかな？」

「ま、お菊さん、あれは！」

「ねえさん…」

「たれ！」

「ねえさん、お迎へ…」

「え！」

「お迎への、お乘物…」

「ま、迎へ！　乘物だつて!?…」

ぱつと起きなほつて

「お菊さん！」

「…おさむらひが——」

「いつ、え？　いつ、お菊さん!?　さうして、どこの、どこから…!?

「柿ざき……」
「ま、コン四郎館だ！　コン……けふに、また、かぎつて……お菊さん、ちよいと、その半纏を……」
で、それを、寢卷のうへへ羽織るなり、中の間のむかうの、そのゆふ霧にほのぐらくとざした小障子のそばへ、はしり出た。
さうして、その小障子の骨を、ぴたりと、うちからおさへて
「どな、どなた、さま、ですえ……？」

十七

ま前のその、ゆふ霧をへだてた障子に、どうやら韮山笠らしい影が、聲といつしよに、にじんで來た。
「おきち・どのか？」
「は、はい……」
「もう、まゐられるか？」
「あの、どちらさまでござんす？」
「ほう、これは！……柿崎よりと、先刻まをしいれた――」
「あなたさまは？」
「番士。」
「その、御番士さまが、どうして……？」
「官吏が……いや、おきち・どの、こゝを明けられい。」
大きな、たなごころの影が、鼻のさきへ來た。
「いえ、この、このまゝで……」
「さやうか……」
「……………」
「では……コンシウロがまをす――」
「はい。」
「――當節柄、なんとも、そなたの身邊がこゝろもとない。」
「ま！」
「ついては、こんにち以後、當初のとほり、自分乘物にて、ずゐぶん、いたはつて、送り迎へいたしくれ……」
「あゝ！」
「すなはち、その、乘物をつらせて、拙者が……」
「……とんだ、實意だねえ……」
「え？」
「いえ……」
「おわかりかな？」
「はい……」
「では、もう……ずゐぶん、はゝ、待ちまをした。」
ついと、お吉は、窓をはなれて中の間の、火鉢へ來て、灰に、喜世留で、字を描いた――
「……暗いねえ、お菊さん。」
――あんどんがともる。月も、かりがねも無くて夜がらすの默々と飛ぶ、街外れの夜……
「いつぽん、熱うくして――舌がたゞれるほど。」
「そとの、おさむらひ、ねえさん？」
「いゝえ、あたしさ。」
――その一本が、あとをひいて……
「おきち・どの、まだかな？」
「たゞいま。ほゝ、をんなは、支度に手間がかかつて……」
「さやうか……」
しばらくして
「おきち・どの、おきち・どの。」
「あいよ、いま、爪紅を……眼も、どうやら、紅くなつた……」
また、しばあらく――
「もう、提燈を、ともしましたぞ。」
「ぷツ……さ、お菊さん、もう一本！」
「なんですよ。」
「おきち・どの！」
と、膝をくづして、片手をそちらへ、とろんとした眼をあげる。
「――野暮に、野暮に、いそぎなさんな。」

と、その、ひとみのさきに、窓の小障子が、さつと明いて、刀のツカ頭と、紙ぜよりの韮山笠のうらと、むつとつまへた髭があらはれて

「おきち！」

「ほゝ、ほゝ、いたはつて、おくんなさいよ、だんな。いえさ、その、ほゝ……」

「む……」

「……障子のことさ。」

で、その、いま、指の穴のあいた障子が、ぴしやりとしまつて

「……待つぞ、おきち！　たとひ、夜が、明けようとも、この軒下で――」

――あの、年一兩二分の、賣春婦をかゝへてる、奉行所の下役の、齋藤のだんなの、そのまた下に使はれてゐる男であつた。

男のうしろには、黑うるしを塗つた腰あじろの、長大な乘物が、夜霧に浸つて、路いつぱいに、うづくまつてゐた。

そのすそは、ぼつとうるんだあかりのなかに、輪つなぎのかんばんを着た男らの、とげ／＼しい毛ずねが、ならんでをつた……

十八

ものの二時間あまりして、やうやく、その乘物が、わびしい坂道を、夜霧の街へ下つていつた。

讀者もおぼえてゐられよう――太陽おほびや押ぶち、飾りふさの垂れた窓すだれなど、みごとに格式のそなはつた壯麗なもので、長さが六フィート五インチ、素木ひのきのかき棒は、じつに二十二フィートもある、前代未聞の大乘物――すなはち、コンスル・ゼネラール閣下が、島モ、ヒキのすねを投げだして、開國だんぱんに、御用所へ通つた、あれで……

（――いま、流行の、「かごでゆくのは」、あれはお輕で、お吉ぢやない――）

輪つなぎの、かんばんを着た陸尺、前後にふたりづつ――つきざむらひは、ぶら提燈をぶらさげて、陽氣のわからぬ顔をして、だまりこくつて添いてゆく……

「もしえ、おさむらひさん……」

乘物のなかから、酒にみだれたこゑがひゞく――

「……もし、だんなえ、もし……」

應へはなくて、じり／＼と、霧にしめつた砂をかむ、わらぢの音がつゞく。

「だんな、おさむらひ、御番士さん、おい……ほゝ、怒つたのかねエ。」

「……………」

「おい！」

「む……」

「ちよいと顔をお見せな、こゝまで……」

と、その、すだれのうちの、夢想窓格子を、とん／＼とたゝいて

「以前はね、以前は、しがない、侠者の、あけがらすの、お吉だが、かうして、から乗れあ、おい……公方さまにだつて、ぢき／＼、お目どほりのかなふ、あたしだよ。」

「むう……」

「返事を、おしな。」

「な、な、なにを……おきち・どの。」

「あいさ、その、おきち・どのが、ほゝ、水をいつぱい……」

「水、でござるか……」

「渇きました。」

「でも、もうぢき、街を出れば……」

「街を出れば……あゝ、濱の潮みづをのましよと、おつしやる!?」

「いや、決して……コンシウロも、待つて、ゐらるゝ……」

「なんの、なんの……ほゝ、ほゝ、はゞかりさま……それより、御番士さん、そこに見える角

あんどんは、どうやら、コン四郎館へ出入の、あぼてえけ・ふあるまげんとの、蘭薬見世——そこをたゝいて、いつぱい、そいつておくんなさい……迎へ酒なら、なほいゝのさ。」

——で、その、牛の花嫁のやうに飾りたてた乗物が、もう爪弾きの音もなにも、まつたく死に絶えた街の、夜霧の底に、にぶうく停つて、つきざむらひの、むつとしたうしろ姿が、そのおらんだ薬見世の、さる戸の方へ、寄つていつた。

「頼む。」

「またか、」と、内から疲れたこゑで——「芥子泥なら、賣切れました。」

「コロリぢや、ござらぬ。」

「これは……」と、長くるゝをあげて——「あ、お乗物!?……へい。」

「コン四郎館ぢや。水でも、酒でも、いつぱい……」

で、こゑをおとして——

「例の、おきちが、困らせをる、はゝ、頼むぞ、内聞でな……」

「おきち! あの、唐人……?」

「うん、まるで、きちがひぢや。」

「それは……」

「番頭さん。」と、乗物のなかから、すさんだ口調で——「きちがひ水を、あつうくして、持つといで!」

「へい!?」

「……お代は、また、十と三割がけで、つけといで?」

「へーい。」

ほゝほゝと、笑ひ聲が、しいんとした霧のなかにふるへた……

十九

はじめて、この乗物で、彼女がコン四郎館へ参殿つたときは、金と朱の、をんなあふぎを手に持つて、街の群衆の吐息をあびながら、ほとゝぎすを、うつゝに聴いた。

けふは、はうき星と夜がらす……あの家この家のかけあんどんも秋の夜霧に冷えて、さみしい街であつた——

古唐津焼めいたどんぶりを片手に、彼女が、乗物のあげ戸の下へ、半身をのりだした。

もう、あの、緞簾もかうがいもない。唐織のきらびやかさも、おぼろ染のまばゆさも、魂を消す香料のにほひも、いつさい無くて、髪は、あぶら氣のないのをうしろに束ねたまゝ——服飾も、すがたも、いつそ、山ざくらといはれた、江戸の柳ばしふうを、傳法にくだけて……

「みなさんえ。」と、呼んだ。

さつきから、地べたにしやがんで、ふところを押しころしてゐた陸尺らが、だんまりで、その、提燈の火に浮いて出た彼女の、もつれ髪のすつきりとかゝつた額へ、白い眼を凝注した。

「——さ、これで、いつぱい、飲んでおくんなさい。」

「へい、ねえさん。」と、ぢきに、ひとりが、秋化して、腰をあげかゝるのを

「これ、これ。」と、つきざむらひが、難かしい顏でにらんだ。

「おや、いけないんでありますかえ。」

「いや、なに、おきち・どの、大酒と、寝冷えは、それ、先日の、コロリのおふれにも……な。」

「ほゝ、ほゝ、なにを不景氣な……さ、若い衆さん、あたしが、承知だ、やつとおくれ!」

「へいツ。あり、ありがたう。」

「あゝ、おさかなが、なんにも……」

と、うるんだひとみを、まぼろしの遠く方へ、あげて、ほゝゑんで

「……をとこなら、あれあの、おほぞらの、はう

き星を、このどんぶりで、のんでおしまひ！」

……

……

やがて、乗物が、酔つぱらつてオクビを吐きながら、ふらり〳〵と、その、おらんだ薬見世をはなれていつた。

しばらく——もうぢきにあのコン四郎館道のかゝりの、渡船場らしい、その、川波の音のせまつたところの四ツつじ——

ふつと、棒はなの、小田原提燈のあかりへ、小紋の短い羽織を着た半身が浮かんで、そのうしろの、霧んなかに、黒い影が、五つ六つ、しよんぼりとつゞいた——

「あぶねえ！」

「ほい。」と、よけて、こゑをひそめて——

「——どちらさまで？」

「なにオ。」と、浮かれた足を、ふンまへて、はうき星のオクビを、ぷうとはく。とたんに、長大な乗物が、なだれ気味に、うしろへ搖れて、けつきよく、もういつぺん、地べたへすわつてしまつた。

絶望的に、じれた添きざむらひが、ぶら提燈を振つて叫んだ。

「やらぬか！」

「あ、もし……

「む……名主どのか。」

「これは……」

「らしやめん！」

「おきちで？」

「さやう！」

「御苦労さまで……では、」と、ちよいと、うしろに悄然とならんだ影の列をふりかへつて

「——ひとこと、きちに、申したらございますが、」

「話されい。」

で、窓すだれへ寄り添うて、聲をひそめて——

「おきち、牛兵衛ぢや。ゆうべ、コン四郎館へ押しかけた町のみなが、こなたのおかげで、こと無うさげられた。禮をいひます……」

だが、おきちは、喘息に、ひぢをかけて、なにもしらずに、うと〳〵と、あの、あるこほるの切支たんの——楽園の夢におちてゐた……

二十

牛蠟のらふそくの灯かげに、紋染紙の針ばこをひろげて、大きな、黒い、をとこのくつ足袋へ、ため息をついたり——きら〳〵と朝の太陽のこもつたキリコの花瓶を、両手で抱いて、思案してみたり……

ひところの彼女は、つゝましいハウス・キーパーであつた。かはいゝスキート・ハートであつた。

白敷布のやうに清浄な、ムスメであつた。手袋か、スリッパのやうに忠實な、奴隷であつた。

それが、いまは、さながら、妖婦だ！

毎晩、をとこが待ちくたびれて、あいのりと、あくびとをいつしよに、キリスへさゝげる時分に、やつと彼女は、どろんこに酔つぱらつて、やつて来た。

彼女は、をとこにかじりついて、白髪をひきむしつた。

——口惜しきあ、若くなつてみな！

彼女は、バイブルを、ひきちぎつて、口を拭いた。

彼女は、交趾模様織の敷物のうへに寝そべつて、あらはな乳房を押しつけて、眠つてしまつた。

彼女は、をとこの首にぶらさがつて、ベッドへはこばれた。

彼女は、敷布を、をとこの、青い眼と、大きなあごへ、押しかぶせて、ひつばたいた。

彼女は、泣いた。
彼女は、笑つた。
彼女は、求めた。
彼女は、罵つた。
彼女の、くちびるは紅く、眼はすんでゐた。
彼女は、野ばらであつた。

それが――

いつたん、醉ひがさめると、もういまにも、死がとつつきさうな頬をして、ものもいはずに、ふるへてゐた。

呼んでも、こたへない。

抱いても、應じない。

叱たすれば、ほろ〳〵と涙をながして、膝まづいて、酒をもとめる。

それを、なにかで、ごまかさうとすると、たちまち、じれて、いらつて……

ひとみは、あひくちのやうにさえて、かみしめた、白んだくちびるに、血がにじむ。

まつたく、もう、いら草の花のやうで――すさまじい人格の分裂だ。

……

……

毎日、日のくれがたに、あの長大な乗物が、そんな彼女を乗せて、街へはひるのだが、それが、酒見世はむろんのこと、けふはご服屋、明日は船宿、など〳〵と、隨所に、氣紛れにとまつて、その、すだれの内らから、捨て身な、絶叫が漏れてくる。

――以前は、しがない、藝者の、お吉だが、からお乗物に構へれあ、おい、みんな、聽きな――公方さまにだつて、ぢきに、お目どほりのかなふあたしだよ。

さ、一本、あつらへして、持つて來な。

お代は、十と三わりがけのことさ……

で、彼女は、もとより、陸尺たちも、乗物も、だらしなく醉つぱらつて、その、わびしい、死の街の夜を、オクビを吐きながらよた〳〵と、コン四郎館へ、向ふのであつた……

……

……

一金三拾兩也
右ハ玉泉寺滯在ノ亞米利加官吏部屋召仕ニマカリ越シ候きち儀、此度暇相成候ニ付、右手當トシテ書面ノ金子御下渡相成候ニ付、則チ私共ヘ御渡シ下サレ慥ニ受取申候　以上

こんな、受書を、舟大工の頭りやらの惣五郎（――お吉の請人――）の名で、彼女が町の御會所へ差出したのは、それから、間もなくのことであつた……

一

街の女

はじめに――（作者の言葉）

をとこに別れて、うらぶれて、「街の女」に身をおとしたおきちの姿を、これから幾回かにわたつて、描いてみようと思ふ。

古典的な劇詩なら、座長と、座つき詩人と、道化方とが、幕のまへにあらはれて、頓智ぶつた言葉つきで、前の章とこの章とのつじきあひを、のんびりと、人生哲學などまじへて、しやべりたてるはずだ。

でなければ、おほかた、舞臺の[illegible]、[illegible]ふうに、もしくは、その隅ッこに、無細工なはり紙が、こんなふうにあらはれるであらう。

――このあひだ、三ケ年、相[illegible]をしそろ――

だが、新聞は、舞臺ぢやない。僕は、狂言方ぢやない。

そこで、この一回は、ペンに歌はせて、ツナ

ギの筋をちらちらとおもふ。

………

………

あばよ、オ・キ・チさん！

さよなら、コン四郎さん！

をとこは去つた。

よくいふ――古靴を捨てるやうに。

をんなは殘つた。

まるで――たましひの門出だ。

安政六年の、五月の花が、微風にかゞやいてゐた……

（ちよいと、蟲食ひ本を、太陽にあてよう――）

安政ひつじの年三月五日――北風、晴天、八ツ時ころより南風となる。

今朝アメリカ上荷船出帆。この舟に玉泉寺滯在のア人通辯官乘船いたし候
――（柿崎村會所日記）

安政六年己未五月二十六日、イギリス船品川沖へ着（使節東禪寺に宿す。亞墨利加は、この節麻布善福寺に宿す
――（齋藤月岑――武江年表卷ノ十）

おなじ六月朔日、天氣ノこと。同日五ツ時亞米利加船大船小船二艘、神奈川江戸表へ出帆のこと

玉泉寺住職のこらず取片つけ候こと
――（奉行所所在地、中村名主日記）

………

をとこは、去つた――

支那ぶたを、竹かごにつめて、牛を、あの、領事館の庭の、佛手柑につないで虐殺して――

佛手柑がよく結實つた年だといふ――

手脚を切りはなして、蒸汽船につんで……

だが――をんなを、殘していつた。

町を、殘していつた。

………

をとこの、皮ぐつの足跡に、草の花がひらいて、風に散つた――

一萬六千坪の御奉行所あと。幾千坪かの組屋敷あと。

だいち、缺乏所附屬の勸工場が、消えてしまつた――あの、ちりめんやからかさや、漆器や提燈うちはなど……異人むきに花やかな、あのバザールが、選まれた十二人の貿易の使徒たちといつしよに、横濱村へ、移つてしまつたのだ。

それから、コン四郎館道の、あの黒船見張番所が失くなつた。異人休憩所も失くなつた。

古風な青銅砲と、遠眼鏡を持つ、遠見番所も失くなつた。

黒い柵をめぐらした、五ツの關門も、こはされた。

さうして――下田奉行の、井上と中村は、江戸へかへつて、小[illegible]奉行に[illegible]した。

そのあとへ、韮山の手代と、浦賀の同心があらはれて、小さな肩で風をきる……

世界の下田が、日本の下田に、かへつたのだ。

――大阪の菱垣廻船や、池田伊丹の樽廻船や、赤穗齋田の鹽廻船、それに、日本津々浦々の[illegible]廻船など、海をはるばる來た渡り鳥が、通船證と、女と、酒を求めて群がつた、あの二世紀半の、長い夢に、もういつぺん、町はよみがへつたのだ。

花街に捨てられて、古靴のやうに捨てられて、そんなふうに、よみがへつたのだ。

その、町の、街の底に、やつぱり古ぐつのやうに捨てられたお吉が、かなしいよみがへりのうたを、こんなふうに歌つて、ひとりで暮らしてゐたのだ――

――どうせ正氣で世わたりあできぬ、ままよ劒びし鬼ころし――（お吉自作）

二

十年二十年と連れ添うた女房さへ、いざ死に

わかれると、たちまち、大空の晴れわたるこゝちをおぼえて、ほつとため息をつく男がある。

それを逆に、お吉は、うつたうしいをとこから解放されて、たましひの朝戸出を歌つたのだが……

だが、いつたい、彼女は、これからさき、何によつて、生きていつたらいゝのか？

命も絶えよとうちこんだ戀慕の相手はとうのむかしに、自分を捨てて、町から消えてしまつた。

運命のやうに強い手で、自分をつかんで翻弄した、にくい、口惜しい男も、自分を捨てて、いつてしまつた。

冷々と骨を刺す「町のひとみ」も皮肉な時の作用で、霞んできた。

はかない忍從の夢がやぶれた。

はかない情念の火が消えた。

信仰もない。

信條もない。

生活のよりどころが、なんにもなくて、あるのは、たゞ、芽を吹くやうな肉體と、使つても使ひきれなかつたらしやめん月俸のあまりだけだ。

（――さて、戀も、うらみも、詩も、小說も、金を離れちあ、大向と緣がきれる。いくらお吉だからつて、三文文士の肉と骨とを食つて生きてゐたまぼろしぢあない。もういつぺん、作者は、彼女の財布の重味を、ふたつ三ツ、史料について、しらべておかう――）

彼女の、らしやめん月俸は、十兩であつた。

當時の、錢相場は、大體一兩が銅錢の六貫四百文前後――

さうして、物價は、米が一兩で三俵。被服費、雜費など、机邊にあるコン四郎館の買ひもののおぼえ書を亂摘してみると――

覺

一金貳兩貳朱　御召ちりめん　貳反
（銅錢　十三貫六百文）

右之通御座候

二月二十八日　立野屋源助

上

玉泉寺ニテあさん行（――書添へ――）

覺

一金壹兩貳分　南部ちりめん　壹反
海き　壹丈貳尺
小袖綿　貳枚
羽織　壹尺貳寸

右之通慥ニ奉請取候　以上

十一月十日　立野屋源助

覺

一金壹兩貳朱　廣帶　一本

右之通奉書上候　以上

三月二日　立野屋源助

上　代濟（――書入レ――）

覺（斷片）

一　壹貫八百文　上酒六升

一　四百五拾文　德利六本

覺

一手ぬぐひ　貳筋　須崎町　忠吉
（代銅錢　貳百四拾八文）

一柿三十六　貳丁目　七五郎
（代銅錢　六百文）

一保命酒　六德利　伊勢町　德次郎
（代金　壹分）

一鰹節八本　彌次川町　清五郎
（代銅錢　五百拾貳文）

右之通異人へ賣渡候代錢取調奉書上候

以上　下田町名主　半兵衛

御用所樣

――など〳〵。

（こんな領事館の物價表だけぢや、ぴりつと來ないが、この時分の經濟史料を見渡すと、兎

に角、お吉の毎月の手當は、どうやら相當な會社の重役の月給くらゐには、十分あたつてゐたと考へられる。）
　そこで、お吉は、安政の末年から、萬延、文久と、のんで暮した。
　――ほんたうの、彼女の、「肉體の道」のあゆみが、はじまつた……

三

　暮から春へ、天城が、さむい雪ぐもにとざされた……その文久初年の早春のいち夜――
　人どほりのと絶えた、とある街すぢ。
　貧しい油燈の燈のにじんだ戸障子へ、うしろをふり返りながらそつと身を寄せて
「もしえ。」と、ふるへごゑで呼んだ。
「へーい。」
「お酒を……」
「へーい。」
　で、戸をあけて、芥子頭をつきだした小僧が
「あ、」と、立ちすくんだ。
　軒下の、うすくらがりに、ほつそりと濕たれて……寒いのであらう、こまかい白い歯で、かちかちと笑ひをかんだ。
「小僧、」と、結界をはなれて、亭主が、土間へ――「どちらからで？」
「お晝から……」
「え!?」
　すゝり泣くやうなわらひごゑが、そのまゝ弱々しくうすれて
「あたし……」
「え？」
　と、猪首を伸ばして
「――ま、おまへは、晝まの……」
「……………」
「――お吉さんだ！」
「お酒を！」
「酒を、とゞけるんで？」
「いゝえ……」
「……ふうん。」
　で、そのとんらんな猪首をぢつとするゑて
「お代は？」
「あの……」
「いたゞけるんで？」
「それは、あの……」
「えゝ？」
　答へはなくて、おどおどとうな垂れた。
「いたゞけないんで……！」
「いいえ、あのウ……」
　そいつて、あわてて片手を髪へやつたが、そこにさして出た水晶玉の銀かんざしは、晝ま、もうこの見世で、のんでしまつてあつた！
　亭主のシロ眼が、ぢいつとわらふ――まるで、彼女の素はだをなめるやうにわらふ。
　……霜夜の、街の、さみしさが、身にしみる。
「これで、どうぞ……」
　さう、ひつしのこゑをしぼつて彼女は、その、かぼそい肩をおほうた半纏を脱いで、亭主の鼻のさきへさしだした。
　亭主は、鈍重な両手で、待ちかまへたやうに、その南部ちりめんの、まだいく度も手のとほつてない半纏を、わしづかみにつかんで亂杭歯のあひだで
「これで……？」と、なにか、自分のお腹へ、うなつた。
「それで、あの、足りないんで？……」
「いえ、なに、ま、ま、さア、はひつて、おかけなすつて……小僧と、傍へ、これ、晝まの、それ、あれを、桝へ――桝のまゝ、あげな。」
……
……
　狹くるしい土間の、あがりかまちに腰をおろして、片手は、あんどんの燈へ、ついて、片手は

からの桝をにぎつて、ふら〳〵と、口へ持つて
つたり、おろしたり……イキのいゝ眼のふちが、
ほの〴〵と紅らんで――
「……もう、いつぱい、といひたいが、御亭さん、」
「へい。」
「お錢がないよ。」
「へえ……」
「ほゝ、ほゝ、なにを、すんなに……あゝ、この、より絲の帶かい、御亭？」
「えへゝゝ。」
「いけないよ。これあ……」
「へえ。」
「なんぼうでも、帶は解かない。」
「ごじやうだん。」
「ふんとだよ。」
「いえ、それはもう……」
「ふんと、ともさ。」
と、またしても、空の桝のすみへ口を持つていつて、こんどは、からりと土間へはふりだして
「小僧さん、ちよいと、外を見ておくれ。お墓から大きな犬を二匹つれて來た……」

四

「どうだ、ゐるかえ？」と、彼女が、小僧に訊いた。
「ゐねえや。」
「ゐないことがあるものか。大きな眼で、ようくお見な。」
「あゝ、犬ぢやねえや。」
「ほゝほゝ。」
「笠を被てらあ。」
「さうかい、さうして……？」
「頰かむりもゐらあ。」
「御苦勞よ、ほゝゝ、御亭さん。」
「へえ。」
「お月さまが、恥かしいとつて、犬が、畜生が、笠を被たり、頰かむりをしたり……をかしいねえ。」
「へえん……それが、あの、お墓から？」
「お墓から、ついて來た。」
「はあて……？」
「……をかしなはなしさ、御亭さん。けふの晝ま、ほら、こゝで、かうして、たしか、あの、五十匁（約三分ノ二両）弱の、水晶玉の銀……」
「えへん。」
「ほゝほゝ――銀かんざしをのんでしまつて、あのとほり、このうちは出たが、さあそれからさきが、さつぱりわからない……氣がつくと、お月さまが出てる――枯草んなかで、まつしろなお墓の臺座に、から、もたれて……さむくもない。さみしくもない。
――この手と、このお墓と、どつちが冷たいだろ、どつちが白いだろ。どつちが、生きてゐて、どつちが死んでるだらう……
さら〳〵と、風がアバラを吹きぬけるやうなこゝちで、そんな、をかしなことを考へてるうちに、墓だか、自分だか、自分だか、墓だか、わからなくなつて、ほゝほゝ――
いつたい、これは、たれのお墓だ……？
さゝ、をばさまだ。あたしの、あのをばさまだ！（――[illegible]ニ消シ――）
をばさまが、生きてゐた。をばさまが、死んでゐた。あたしが、をばさまだか、をばさまが、あたしだか……でも、でも、をばさまには、かうやつて、あたしといふものが夢かうつゝの、たよりないこゝちんなかでさへ、お參りして[illegible]――あたしにあ、いつたい、たれが、たれが、あゝ、たれがお參りしてくれるだろ!?
御免なさいよ、御亭さん、あたしや、泣き上戸ぢやないんだけど……なにがなにやら、そんなことを、[illegible]したのさ。
すると、ふつと寒くなつて……

顔をあげると、こちらには、ほら、いまいふ笠を被た犬が——あちらからは、その、頬かむりの畜生が、ちつと、あたしを、ねらつてゐた。
「それ、見ると、ぞつと、身うちがこゞえて……いゝえ、犬がこはいんぢあない。人間が、世の中がなんだか、そらおそろしくなつて、御亭さん……」
「ふうん。」
「それから——人間も、お吉も、犬がタカルやうになつちあ、もうおしまひだと……御亭さん……」
「へえん。」
「御亭さん。」
「むうん。」
「ほゝ。クダにアタツてさ……おい、御亭さん。もういつぱい、お替りなさいよウ。」
「へ。」
「じやうだん。じやうだんだよ。すんなに、眼のいろをかへなくつたつて……どうら、犬をつれて歸るとしよう。」
はひつて來たときとは、まるで女がかはつて、ふら／＼と、ゆきかゝるうしろ姿へ
「あゝお吉つあん。」
「なんだ。」と、とんとこもかぶりに腰をおとして、涙のあとをひいた、とろんとした顔をふり向ける。
「けふは、ちつと、貸しだ。」
「へん。」
「いゝかい。」
「とんだ高いお酒だが、借りておきませうよ。」
「ありがたうござい。」
「おや、お愛嬌が、でたね、ほゝ、あばよ。」
——いつの間にか、雲が出て、おぼろに霞んでゐた。
ちりめんの半纏の醉ひごこちが、ひつかけ結びにしたより絲の帶にまで傳はつて、あだつぽく、その、おぼろ夜の街をもどつてゆく——十間ばかりあとを、眞岡のドテラを着たひよつとこかぶりの犬と、ざんざら笠をかむつたわらぢばきの犬とが、たがひにむツつりと、反ぱつしあひながら、ついていつた……

五

彼女の住居から、ものの三町ばかり坂下のあのどぶ川の土橋——
まだ芽を吹かぬ枝垂やなぎのあひだに、くらいだるま宿の、かけあんどんの燈が、ともつたりともらなんだりして、さむいおぼろ夜にふさはしい、犬の皮の三味線か、とぼ／＼しい音を傳へてをつた。
滑りのあづま下駄をおもむろにつゝかけて、見かへるでもなく、急ぐでもなく、褄をわけて、土橋をむかうへわたりきる、とたんに、その、ふたりの、しつこい彼女の「犬」が、せまい橋のうへに、すれ／＼にあらはれた。
ざんざらがさ（人足笠）も、ひよつとこかむりも、こゝまでは、どうやら、間隔のまゝで來た。
いつぱうが、いそげば、いつぱうも、いそぐ。
いつぱうが、とまれば、いつぱうも、とまる。
道みちの先まはりを警戒しあつたり、暴力的な突進を牽制しあつたり、おたがひに、睨みあつたり、おそれたり、むつつりと押し默つて、こゝまで、彼らの美肉を追うて來た。
その敵同士が、いまや、この、せまい土橋のうへで、肩と肩と、ひぢとひぢと、眼と眼を、すれ／＼に、ならんだのだ。
ペッと、いつぱうが、ドテラの襟をわざと大仰に擦すつて、つばきを吐いた
と、いつぱうが、そいつを反撥して、くちをトガらして、ツンと、かさのしたから、唾汁をとばした。
「同志！」と、立ちどまつて、笠のうちの、白い

い眼を見る。

「同志！」と、あらむがへしに、けんくわしぼりの頬かむりのなかの、血走つた眼を見かへす。

「どこへゆく？」

「おめえは！」

知れたことよ。」

「おいらも、知れたことよ。」と、ゆきかゝる。

「待ちや。」

「どうする。」

「おぬしの肩は、とんだやはらかいの。」

と、ぴか〳〵と、うろくづの光る腕に、ぐつと力をいれる。

その手首を、つかんで、向きなほつて

「ぬしや、とんだ女ずきのする手をしてゐるの。」

ふたりは、いぬの皮の三味線から次第に遠のいてゆく、あづま下駄のあし音を氣にしながら、土橋のうへでにらみあつた。

「そンでもねえがの、」と、ひよつとこかむりが、相手の手をふりはなして——「こなひだ、沖で、くぢらを抱いたら、龍宮まで、道ゆきしようとぬかした。」

「見や。」と、ざんざら笠が、おぼろの空あかりに、マメの、いつぱい出來た、大きな片手のたなごころを、ひろげて——「こねえだ、山で、百貫もんめの石を抱いたら、いつうまでもこのまんまで、はなれとむないとぬかした。」

「はゝ。」

「はゝ。」

「ひとつ、」と漁師が、胸毛を、つきだして——

「——抱いて、もらひてえ。」

「からか。」と、石割り人足が、そのドテラの胸ぐらをつかむ。

「からよ。」と、その相手の首すぢをかゝへこむ。

「はなさねえぞ、同志！」

「やるもんか、同志！」

ふたりは、土橋の、とゞろくほど、もみにもみあつて、結局、ひとかたまりになつて、その、賣春婦のよごれものなどの澱んだ、黒い水のなかへ、どぼんと落ちた……

ざんざらが、水面へ、あらはれてどろ水をぷつと吐いて、土橋のむかうの、あづま下駄に、執着しながら、叫ぶ——

「はなす、はなすもんか、同志！」

それが、ぶく〳〵と沈むと、こんどは、ひよつとこかむりが、あらはれて、ペッ〳〵と黒い水を吐きながら、やつぱり執拗な眼をあげて——

「はなさねえぞオ、同志！」

……

「苦しい！」

「苦しい！」

……

やがて、水面が、淡い月光をたゝへて、しばらく、しんとなる……

六

さわぎをあとに、すがれた街のおぼろ月を負うて、もどつてゆく——

かへつてみたところで、わびしいあんどんが待つてゐるばかりで、こゝろも、身も、貧しい家だ。

でも、いまさき、ちりめんの半纏を代にしてのんだ樽酒が、爪先にまできいて、どうやら——

御神竹が
みごとに伸びて
雪がど〳〵こと
降りつもる
つもる雪に
しば〳〵あさひさす

と、そんな、苦の世界をとぼけたこゝちで

「待つた！」と、うしろに、ど太い聲がする。

かまはずに、ゆきかゝる……

まへにまはつて、のつと立ちはだかる。

——賊者は、北海道の熊が、馬をたふすときの噺を知つてゐられよう。神經のこまかい馬の嗅覺を警戒して、風しもから、しのび寄つて、いきなり、その鼻つらのまへに、ふらあと立つ。馬が仰天して、棒立ちにならうとする、とつさに、その首の骨を、腕でたゝきくだいて、ひつかついで持つてゆく、といふ…

それとこれでは、すつかりイキがちがふが、——どぶのあわの、胸毛にくつついた、びしよぬれの、大きなづうたいが、ゆくてをふさいで

「待ちねえ。」

「あいよ。」と、アッ氣なく應じる。

「聽いてもらひてえ。」

「なんぞ、用かえ?」

「用といふなア…」と、もぢ〳〵と、その、兩側にせまつた、くらい、ゆがんだひさしを見て——

「さわぐでねえ…」

「あいよ。」

「逃げるでねえ…」

「あいよ。」

「…とつて食はうと、いやあしめえし——」

「ほゝほゝ。」

「わざと、おらあ、つかめえも、どうもしねえ。」

「ふン。」

「…いんまのさきよ、そこのどぶへ、いつぴき、たゝきこんだで、この手が、ちいつと汚れた。」

「おや、とんだ、おまへは、情があるねえ、ほゝ。」

「そンでもねえが…」

「さうして、たれを、たゝきこんだ?」

「ふけえきな笠をかむつた男よ。百貫もんめの石ころイちぎつて、モッコにいれて、指ん先でぶらさげて、鼻唄アうたふとぬかす、ちいつと力のある男よ。」

「まあ、それを、おまへが!」

「うん。」

「おまへは、强い男だねエ!」

「そンでもねえが…」と、身ぶるひして——

「——わづか、二もんめ(——約二百五十文——)か三もんめの、シガあねえかせぎして、あんまりきいたふうをいふもんで——おらあ、から見えても、舟もちよ。」

「お船頭衆かえ?」

「さうよ。」

「さうして、問屋さんは、どちらさんですえ?」

「うん、問屋か…なに、問屋は、どこでも…」

「まあ、たいそうな…」

と、相手は、どぶのアカにもつれた小びんから、貧相な木綿のドテラの黑いしつくゐ手ある足もとまで、イヤのい、眼で、ぢつと見て

「…そのお船頭衆が、あたしになんぞ、用でも?」

「用といふなア、ねえさん——わかつてゐらアなあ。」

いゝあつでなくちびるをゆがめて、歯を見せて、その、「女おもひ」の「强い」手が、袖にからみつくやうに、寄つて來た——

七

魚のわたでもくつてゐるのか、にぶくしいいばらぶとりのした醜い指が寄つてくる、それを、ぴたりとまむきな視線でおさへて

「臭いよ、お寄りでない!」

「しッ。」と、あたりへ、氣をくばる。

「ほゝほゝ、ごめんなさいよ…でも、おまへ、いま、りつぱな御船頭衆だと、さうおいひのやうだが、ちいつと、にほひがちがふからさ。」

「むうン…そんでも、ねえはずだ。」

「でも、船頭衆なら、おまへさん、どこにおいたからつて、から、街の女たちが、うつとりとなるやうな、きれいな荒潮を乘つ切つた、風のかをり

が、小びんにする……いつから、ドブさらへの眞似をおしだと、さうおもつたが、無理かえ。」

「無理あねえ……無理あねえがいンまもいうた……」

「聽いた、聽きました、たいそう力んだおはなし――」

「うん……そンでもねえがの。」と、短い首を撫でる。

「しかしね、親方さん。」

「うん、うん。」

「親方さん。」

「なアんだ。」

「あれさ、すんなに、寄つて來なくたつて、ほゝほゝ、月夜だよ……とんだコクのある顏だねえ。」

「むンにや……」

「さうして、おまへさん、このあたしを、なんとか、思つておくれださうだが、いろごとは、ほゝほゝ、古いいひぐさだが、力づくには、まゐりません。」

「そ、そ、それあ……おいらだつて、舟へ歸りあ、もえぎのらしやの帶もある。つむぎのドテラも、こせえてある。なんでもかんでも、舟が沈みあしないかと、心配するほどこせえてあるのよ。それを、かたつぱしから、からだにつけて、まるびたひそつて、髮油塗つて、雪駄はいて、から、しやんと、陸にあがりあ、それほどでもねえが街のをなごが、氣絶するほどタカッて、しがみついて、力アあつても、からだが、だい一つゞかねえのさ。」

「ま、たいそうな……!」

「おらあ、ほんまんとこ、それが氣になつて……」と、さむい洟汁をすゝる。

「およしよ、親方さん。」

「うん、おめえがいふなら、よすとしようか。」

「だいち、無駄だ。」

「それも、さうよ。」

「いえさ、あたしを口說くことを。」

「え?」

「馬鹿らしい、ひとが、あすんでゐれあ、まるで、犬の皮の三味線を、あひかたに使つたやうな御託をならべて!」

「な、な、なにオ!」

「おまへさん、あたしを、なんだとおもふ!?」

「をなごよ、人間よ。」

「ふン。」

「それが、どうした。」

「あたしや、おまへさんみたいな、りつぱなお船頭衆から、びた錢の二十も三十もいたゞいて、波を枕に、泣いたり笑つたりする女ぢやないんだよ。」

「むウ。」

「だいち、あたしや、人間ぢやない!」

「……!?」

「あたしや、畜生さ!」

「……!!」

「この眼をごらんな――靑くはないかい? この手をお見な――シラコのやうで、紅い毛が、生えてはゐないかい?」

「なアにを……どウら――」

「ま、これほどいつても!」

「へつへつへ……」

「おはなし! おはなしつたら! とんちき! 河童! 畜生! はなせ!」

「これさ、これさ、さわぐでねえ、へつへつへ……なアにを、おめえ、こんなに、きれいな、こんなに、うつくしい、をなごのくせエして……」

「畜生! 畜生! 畜生!」

――その、せつぱつまつた、刹那であつた、いつの間にゐたのか、まそばの軒下のくらがりから、ふいと癇だかな女の叫びごゑが、ひゞいた――

「火事だよウ!」

八

けたゝましい、その叫びごゑをきくと、男は、頓狂な眼をむいて、舌を鳴らしながら、坂下の土橋のあたりへ消えていつた。

そこ、こゝの、さる戸や戸障子があいて、おぼろ月のながれた地べたへ、黄いろいあかりがこぼれだす――

あかりの、ひとつ〳〵に、このごろの世間の陽氣に、とみのひろがつた、鬢のしなびた、職人まげの男の首が、むつつりとあらはれる。

こんばんは、こんばんは、と、叫びごゑの主が、お吉のそばから、そちらへもこちらへもお辭儀をして

「……とんだおさわがせ。」

――なんだ、お吉つあんと、おみのか。

――火事はどこだ。

「あい、とんだ違圖、ほゝほゝ。」

――女の火事か！

「もう消えました。」

――どつちへ消えた？

「きり〳〵舞ひして、どぶ川へ。」

――ふけえさな火事だの。

――おらが、消してやればよかつた。

――おらも、さうよ。

――おらもだ、おらもだ。

「はい、みなさまのおかげ……もうおふせり。」

黄いろいあかりが消えて、また、しんとした、ふたりきりのおぼろ夜にかへる――

素足に、眞田緒のすがつたシラ木のふだんばき――くぢら帶――じれつた結びに、びんぼふなお六ぐし――じゆばんのえりは、これだけが、柳ばしふうの、水いろ鹿の子――

――なんしろ、お座敷が、かゝると、着換へをして、たき香をふすべて、その香のけむりのたつ火鉢を、またいで、しやがんで、焚きしめて、それから客のまへへ出かけたといふ、そんな、荒涼としたこゝの藝者のひとりの、おみのさんであつた――

その、世帶じみたり浮はついたりしたおみのさんと、ならんでもどる。

「ひどいぬれ場を見られたねえ。」

「どうなるかとおもつた。」

「なに、どうなるものか。」

「でも、おまへ、あれは、街のみんなが知つてる、鼻ツつまみの、身性のをかアしな男だものを。」

「おや、おや、さうかえ。」

「年ぢう、ひとへもんの染めつかへしの、[illegible]なドテラを着て、すり切れた黒さやの[illegible]帶を横つちよにむすんで、[illegible]な[illegible]はりの[illegible]してる、かとおもふと、このごろ、目の出[illegible]、お[illegible]纏頭[illegible]、おともの裾に、小さくなつて、お[illegible]にすわつてることもある……」

「でも、おみのさん。」

「あいよ。」

「あんな、をとこが、いつそ、[illegible]も知れないねえ。」

「[illegible]ゝ、なにをまた、ねえさん？」

「ほんとにさ……年ぢう[illegible]しえても、隣ざかりの水かのみたいといへば、天[illegible]きれいな[illegible]をすくつて來て、口へいれて[illegible]かも知れない。」

「ほゝ、下[illegible]桶を積みあげな、いふことをきくといへば、[illegible]やボロをして、島へながされるか――下田逸史――、古いもんだ。

「お金は、どうでもいゝのさ。」

「ま、ねえさん。」

「あゝ。」

「おまへ、こんやも、のんで來たね[illegible]

「おみのさん、これだ[illegible]

「まあ、半纏も、かんざしも？」

「みんな、のんぢやつた。」
「あきれたもんだ。」
「久しいもんだ、ほゝほゝ……さうして、おみのさん。」
「なんだ。」
「ひとのことより、おまへ、こんやは、出ないのかえ？」
「あゝ、出ないよ。」
「どうしてさ。」
「この節は、胸くそのわるい客衆ばかりで玉だとつて、祝儀だとつて、花紙ぶくろ――當時下田特有祝儀袋――）にしわがよるほどで……それで、ひとの顏さへ見れば、牛（下田賣春婦）になれといふ……」
「ほゝほゝ。どこども、ふけえきだね。」
「これをおもへば、ねえさん、二三年まへのあのアメリカがゐた時分は、お役人衆やなにかお……」と、いひかけて、氣がついて――「おつと行き過ぎる。こゝだ、こゝだ。」と、お吉の家の、戸障子のまへへ、その、ふいとうなだれた、お吉の袖をひつぱつた……

九

「おみのさん。」と、手さぐりで、奥の間へゆきながら――「鼠にひかれぬやうに、待つてゐておくれな。」
「あいよ。」と、手さぐりで、中の間の火鉢へにじり寄つて――「女がいゝから。」と、わらふ。
しばあらく、暗がりのまゝで……
――あゝ、ねえさんは、泣いてゐる。
そんなことを、いつぱうが考へてると、やがて、火うち石のさむい火が、あんどんにともつて、その灯かげに寄り添うて、浴衣にあはせのふだん着になつた彼女が、捨てばちに膝をくづして、どうやら、まだあの半纏の酒氣のたゞようた眼もとで、につとそちらへほゝゑんだ。
「おみのさん。」
「なんだ。」
「書いてあるよ。」
「なにがさ、ねえさん。」
「戀し、戀しつて……おまへの顏に。」
「おや、馬鹿らしい。」
「ほんのことさ、鏡を見せよう。」
「たんとおなぶり……どうせ、こんなに、をかアしくやつれた顏だものを。」
「ま、おみのさん、おごんな。」
はい、はい。」
「おや、いつそ、づう〳〵しいよ。」
「でも、ねえさん……」
「さうして、おまへ、こなひだ書いてあげたあの文の、返事はあつたのかえ。」
「それが、ねえさん……」と、水いろ鹿の子のえりに、あごをおとす。
「無いのかえ。」
「あゝ……」
「にくいねえ、男は……」と、ぢつとひとみを浮かせて、氣をかへて、陽氣にわらつて立ちあがる。
「……けふは、おもひきり、恨んでやらう、ねエ、おみのさん。」
「あゝ……でも、あんまり、ねえさん……ほゝほゝ、あんな顏をしてさ、大丈夫だよ、おみのさん。へゝな三味線は、ひきあしないよ。」で、まき紙とすゞり箱を持ちだして、ともし火のそばへ、ふたりしてゐざり寄つて、さら〳〵と、達者な、彼女の「三味線をひいた――
……たび〳〵文して申上候へども御かりごとも御[illegible]なしくだされず、さて〳〵御うらみに存上げまゐらせそろ、このほどは外におもしろきこと御ざ候よしさぞ御[illegible]たのしみ、それゆゑこなたことは云々……かねてより御[illegible]やくそくの御こと

もむなしくなり候はんかとそれのみかなしく云々……せめて御かへりごとにても御こし被下候ハバそれを御けんとぞんじたのしみ申上げまゐらせ候……ところあまりとや云々……山々御うらめしくぞんじ上げまゐらせ候――など〳〵、めでたく、かしこ。

それを、はじめから、もういちど、ゆつくりと、おみのさんの耳へ讀みかへして、眼と眼でほゝゑんで、くる〳〵と卷いて、手のひらで、ぽんとたゝく――

「男を見たら……おみのさん。」

「あい……」

「牛（下田賣春婦）では無うて――」

「なんだ。」

「蛇になれ、蛇になれ！」

「ほゝ。」

「ほゝ。」

はゝはとわらつて手紙を、おみのさんの膝へ投げて――

「一封は、持つてつて、しておくれ。おはちは、今朝から、からつぽだ。」

――むろん、もうあの、らしやめん時代の生活に、コブみたいに寄生して、おろかしく花やいでゐたお菊さんも、とつくにゐないし……どうかすると、あれ只の眼など、かはゆくなつたりする、ひとり暮しで……

十

辛氣な、さみしさのたちこめたひとり暮しへ、たそやあんどんぢやないが、ちらりほらりと、街の女が訪ねて來て、戀慕ながしや道念ぶし、めりやす、よしこの、どゝいつなどと、戀の小うたをさらつていつたり――男への文を書かせて、口紅のついたくちびるで、封じめを濕して持つていつたり――またそのくちびるをひるがへして、流行を論じたり、不景氣をなげいたり――海の男等から聞いた江戸のうはさをつたへていつたりするのであつた。

おみのさんもそのひとりで――

寄夫結びにしたくぢら帶のあひだへ、文を大事にしまひながら

「ありがたうよ、ねえさん。」

「あゝ、今夜は、しつかりと抱いて寝な。その一念で、子が出來るとさ。」

「おや、きついもんだ。」

「やける〳〵。」

「いぢめるのウ。」

と、[illegible]かけて、ふいとまた、ゐざり寄つて、こゑをおとして

「ねえさん、こなひだ客衆から聞いたが、江戸ぢや、とんだことだねえ。」

「おや、なにがえ？」

「ほら、あの横濱にゐた、あのアメリカの異人さんのはなし……」

「え？」

「ま、知らないのかえ、なんにも？」

「あゝ、なんにも……」

「ま、あきれた、消息も、無いのかえ!?」

「いゝえ、ちつとも……すんな仲ぢや、ないんだもの。」

「まあ、ほんたうかえ。」

「いやな、おみのさんだ……さうしてどんなはなしさ？」

「あの、異人さんの、若い方が殺され、なすつたとさ。」

「え、ヒウ助さんが！」

「……なんでも、去年の暮のはなし――江戸の、麻布の、古川端とやらを、馬に乗つて通るところを、浪人が、四五人、夕やみに待ちぶせして――」

「ま、ロウニン！」と、思はずアールの音をふる

はせて――「さうして、おみのさん!?」
「――突いたり、斬つたり……」
「連發拳銃は！　連發拳銃は？……」
「え？」
「いえさ、ほゝ、死ん、死んぢまつたの!?」
「えゝ、さうして、どこか廣林寺とやらへ埋めたつて……」
「あゝ！」
「怖いはなし……」
「それから？　おみのさん……」
「え？」
「それから、コン……コン四郞さんは、」と、それだけ口のなかで――「どうなのさ？」
「どうつて、ねえさん。」
「いゝえ、はなしは、それだけかつて、訊いてるのさ。」
「おや、なにをいひおとしたらう。」と、首をかしげて――「あゝさうだ、客衆が、さういつたつけ――エゲレスも、フランスも、異人たちあ、みんな、怖がつて、江戸から、横濱へ逃げていつたつて。」
「それから？」
「それからつて？」
「アメリカは？」と、あるか無いかのこゑでいつて、ともし火へ、顏を反むける。
その耳もとへ、口を寄せて
「アメリカだけは、まだ、江戸にゐるんだとさ。」
「……………」
「ねえさん……おや、おまへ、どうか、おしかえ？」
「ごめんよ。なんだか、急に、さむけがして……」
頰も肩も、こまかくふるへてゐるのであつた……

……………
……………

――おみのさんは、山ほど彼女の思ひを書きつらねた男への手紙を、そつと帶のうへからおさへて、もどつていつた。
お吉は、醉ひざめの、つめたい手足を、床んなかでちゞめて、さむい夢に陷ちた……

十一

――いまのお吉の氣持は、掘つても掘つても憂鬱で、どうにもやりきれない。こゝは、ちよいと、古いロシアの詩人を眞似て、戲詼體ふうにペンを運ばう……

はやくから、ほどのいゝ戀をして
いゝ時分に胤をおとして
それから小肥りに肥つて
活計の胸算用と、浮氣ごころを
そつとおなかにたゝんで
四十にもなつたら、もつと肥つて
それからすつかり、表情を消して
子供のしつけを考へたりして
老いるがまゝに老いてゆく
そんな小市民の女の幸福を
彼女は望みはしない
……………
ふた親に連れられて
うら街の破瓜師を訪ねて
そこで女にしてもらつて
それから一流どこの
旗亭の座敷へ出て
らふそくのシンを摘んだりしながら
眼の隅で、男を見學する――
男がいちばん好きなのは
女にだまされることだ
男がいちばん嫌ひなのは
女が正直であることだ
そんな教養を、行儀作法といつしよに
たつぷりとつんで
さて、ずゐぶんおぼこにはにかんで

花やかな新床の
夢に入る
……
それからさきは、「深窓」に隱れて
脂肪のふえるのを氣にしながら
氣まぐれな神信心をしたりして
おだやかな一生を終る――
町の富有者のお孃さんの
さうした幸福な生涯を
彼女はべつにうらやみもしない
紅い木綿のたすきと前垂をしめて
海の男の眼のまへに立つて
あらくれた愛の取引をきめて
それからまるで貞淑の留守をまもつた
身持のいゝ女房のやうに
いたはつたり、甘えたりしながら
いつしよに船宿へもどつてゆく――
そこに、しばらく、家庭が出来て
女は、陽氣な洗濯うたをうたつたり
情人にひたひをくつつけて
鼻ごゑでものをいつたりするのだ
やがて男が、罵るやうな言葉で
別れを惜みながら海へ出てしまふと
女も、裏通りの自分の家へひきとつて

もろあじの干ものをつくつたり
青い菜ツ葉を摘んだり
かとおもふと小柳の帯をしめて
闇い燭の火の
見知らぬ男へといそぐ――
これが、この町の、おびたゞしい街の女らの
大部分の生活だが
だれも、それを怪しみはしない
ねろん、歎きも恥ぢもしない
たとへば自然の運行を素直にうけて
花が開いたりしぼんだりするやうに
みんな健康で快活で
老いるものは――老いていつた
――なまじつか經濟や宗教や道徳などの
狂信者がゐない時代で
みんなは、助かつた
町も、助かつた――
横濱がひらけて、町の人氣が
どうやらうつろひ氣味でも
たとへば老病にかゝつた人間が
少しづつ死に近づいてゆくやうに
町も、女らも、ながいしきたりに安住して
おろかな亡びの道をたどることができた
ともあれ、この「街の女」らこそ

町の存在理由であつた
……
お吉は、いま、彼女の青春の墳墓に
さむい夢を見ながら
ふとそんなことを感じるのだ――

十二

……ふた月あまりして、洗湯の湯けむりに星のくもつた晩。

街で指折りの料理屋――せま苦しくゆがんだ廊下に、塗り骨の障子がつゞいて、なにやらもつれあつた影ぼふしがうつつてゐたり、思いもよらぬところに、舟ぞこまくらや、まくらびやうぶの、くらく亂れた部屋があつたりする、そんな山田屋の一室――

おほかた舟御番所の同心か、旗山の手代あたりの下役に使はれる男であらう、馬ふんほどの紋のついた羽織を着て、文字どほりあさぎうらのこしらへ――いつからはじまらぬ酒で、障子をにらまへて

「これ、これ。」

「へい。」と、若い者が、廊下から顔をだす。

「まだ來ぬか。」

「もうまゐりませう。」

「かれこれ、一刻半は待つた。」

「おてうしが冷めました。換へてまゐりませう。」

「禁酒ぢや。」

「これは。」

「彼女に飲ませうと思つた。」

「へい……」

「きついものか、はゝはゝ。」

「へい、へい。」

「ゆうべも、一刻の餘、待つた。」

「なにぶん……」

「をとゝひも、待つた。」

「いえ、もう、みなさまが……」

「そのまへの晩、すなはち、はじめて彼女を呼んだ、その時も、ずゐぶん待つた。」

「おそれいります、へい。」

「それが、ちらりと影を見せて、これ、このてうしを、またゝくうちにあけて――四谷アで、はじめて逢うたとき――と、ほがらかなこゑでまをして、ぢきに消えてしまうたわい。」

「…………？」

「すなはち今夜は、その時以來ぢや。」

「えゝ今夜は、たれぞ、ほかの妓を……」

「ならぬ、ならぬ。」

「へい。」

「てまへ、ゆうべも、さやうにまをした。をとゝひも、さやうにまをした。」

「いえ、御立腹では……」

「たいせつな金銀をだして、毎夜々々この、くすぼつたあんどを抱いて、酸づけのあはびを、あごのくたびれるほど、しがんでゐようとて、通うてはまゐらぬ。」

「おそ、おそれ、いります。」

「今夜も、歸るぞ、とめるな、とめるな。」

「いえ、もう、おとめいたしまする。」

「とめるか。」

「たとひ、お腰のものの、サビになりませうとも、この、わたくしめが、いくへにも、いゝやうにいたします。」

「にくいやつめ。」

「はい。」

「そんなら、はたらけ。」

「かしこまりました。」

「よいか、うたなぞは、うたはんでもえゝ。」

「へーい。」

「をどりも、いつから柔弱ぢや。」

「へーい。」

「いや、なに、それ、な、殺伐な當今ぢや、敵と見たら、やみ討でもなんでも、そこは手ッ取り早く……はゝはゝ、早いがえゝ。」

「それは、あなたさまに、おまかせいたしませう。」

むん。のみこんだか。

のみこみました。」

「てうしを換へてまゐれ、あはびも、なか〱食はせるの。」

「はい、はい。」と、汗をふきながら、廊下へ出る。

ひきちがへに、小女が、つぎさをの包みを持つて、部屋の片隅へはひる。それを見るやいなや

「來たか、來たか。」と、もう、とろけだす、男のまへへ、すき髮の、すつきりとしたお吉が、手をついた……

十三

「はい、このぢうは。」

「遠どほしいの。」と、精いつぱいにあはせる。

「ひとつおすごしなされませ。」

「のめぬが、」と、にた〱と眼をほそめて――

「お身、助けてくれようか。」

「おあひをいたしませう。」と、男のさかづきを、惡びれずに、ぐつとのむ。

「南にイ――」と、くちびるをゆがめて――「佳

魚あり、佳魚あり。」と、なにやら、しちむづかしく、とぼけて、寄つてくる。
　その手を、そつと拂つて、顔を反むけて
「おや、野暮に暗い、あんどんだねえ。」と、そちらへ、身をかはす。
「はて、野暮ぢやござらぬ。」
「あれさ……ほゝほゝ、うたひませう。」
「うたは、えゝわさ。」
「では、お酌を。」
「酌も、えゝわさ。はアてまあ……」と、いかにも、あさぎうらしく、からみかゝる、火照つた呼吸の下に、はかなげな眼をして——
「あのウ……」と、髪をふるはせる。
「む、む……」と、耳をこすりつける。
「かわきました。」
「酒か。」
「あい。」
「おのみやれ。」と、四ツんはひに毛ぶかい手を伸ばして、てうしとさかづきをとつて、なみなみとついで、口にふくませる。
「さて、さかづきごとも、すみまをした。」
「あアれさ……とてものことに。」
「まだのむか。」
まだか、まだかと、てうしが空になつた時分に、やうやく人ごこちのついた彼女が、男の手をすりぬけて、いりくちの、暗い塗り骨の障子のきはに、すつと立つ。さうして、その「虚空に身をもんでゐる」獸心のかたまりへ、涼しい眼でほゝゑんで
「すんなことを、なすつちあ、あちらにも、こちらにも、たけのこみたいな角が生えますとさ。」
で、そつと障子をあけて、手をついて
「ごゆるりと。」と、ゆきかゝる。
　それまで、ぼつとなつてゐたのが、あわてて
「待て、待て。」
「はい。」
「お身は、とんだうたぐり深いの。」と、いつかうに通じない——
「……キンチャウも古いで、誓紙をしたゝめまをさう、すなはち、みどもは、韮山どの御馬方足輕假御抱へ、一石一斗と一人扶持を頂戴まかりある——」
　などと、野暮の骨頂の、あやしげな「いゝ、武ざ名乘り」を、あげにかゝるを、敷居ごしに爪紅のなまめいた指をついて
「はい、わたくしは、」
　と、ひきとつて——急に、華車にくだけながら
「なにやらダコの出來た賣春婦では、ありませんのさ、ほゝほゝ。」
「なに、」と、ふくれて——「ひとつきり(——せんかう——には、まだ〳〵、間がある。たいまい二朱の金銀をはずんで、悪しくされては、あはぬ、あはぬ……」と、緊縮政策の韮山ぶりを、ぶつぶつと、とんだところへ持ちだしかゝる。
　そこへ小女が來て、なにやら、耳うちするを、うなづいて
「もしえ、とのさま。」と、そちらへ、しなだれるやうに、ゐずまひをくづしながら——「あたひつこい、このぢうから十日も二十日も、通うて來ては、呼んでゐる無意氣な客衆が待つてゐますとさ。ちいつとの間、もらはれて、おくんなさいよ。」
　で、どうにか、そこをぬけて、ゆがんだ、暗い廊下を、三四間へだたつた、次のお座敷へゆく。
　そこにも、やつぱり、くらい塗りあんどんの火かげに、あはびをしがみながら、獸心の凝つた眼をした男が、待つてゐるのであつた……

十四

　その部屋の客は、ねずみのたびをはいた、くちびるのうすい男であつた。遠國らしい三日月がたの煙草いれをいぢりながら、あんどんのわ

きへ出て來たひら蜘蛛を、まじり／＼眺めてゐたが、お吉を見ると、なにやら、ひとり、しつぽりと浮いて、潮來やら舟うたやらを、鼻のてつぺんでうたふかとおもへば、こんどは、くちびるをひるがへして、泊り／＼の女のうはさを、ならべたてるのであつた——

「おゝしんど」の上方藝者に三両はずんでどうかしたとか——竹にはさんだ草むしろのかげで、百文の女を泣かせたはなし——舟の胴の間で米一升の「びんしよ」の、世迷言にうだつたはなし——室の津や鳥羽あたりの、青梅縞を着た、口紅のぎらつく、なんらかの重たい女らをどうしたとか——白湯文字や、浴衣賣女や、前垂をんなや、はては、白手ぬぐひを吹き流しにした「ひつぱり」のうはさなどと——女あそびの眞髓を、きはめつくしたやうなことをいつて、さて、酒のあぶらの浮いた眼を細めて、みだれかゝる……

男ぎらひと、ぢきに名のたつたお吉を、コロシてみようと、そんなふうにかゝるのだが——それをやんはりと外しながらさかづきをすゝめて、逆にコロシてしまつて

「とんだきいたふうな客衆だ。」

と、わらつて、次のお座敷へゆく。

……

——二階の隅の、裏ばしごのそばの、狭苦しい部屋だ。

月代に、早春の原つぱほど毛の生えた男が、櫺子窓の潮風にあふられるあんどんの火を

「じたばたするねえ。」と、にらまへてをつた。

紺の手ぬぐひを肩にかけて、ドテラの膝をひろげて、いつぱし、道樂ものとか、ならずものとか、いはれて見たいてあひだ。

「犬が川ばたをあるくやうに、どこをぶら／＼してをつた。」

「おゝ怖。」と、障子のわきへ、ずり下るやうに坐つて、わらつて見てゐる。

「のろまな賣春婦が、まはしをとるんぢやあるめえし。」

「ちがひなしさ、ほゝほゝ。」

「こつちへ來ウ。」

「寄つてもいゝかえ。」

「なにを。ちつとは、美しいからつて、面ア縦にして、ほえるなえ。」

「とんだお世辭だ。」

「のみな。」

「のんでもいゝかえ。」

「食べな。」

「食べても、いゝかえ。」

「へん。おつにからむなえ。錢あいつものとほり。」と、大きな縞の財布をふところからひきだして、眼のさきへぶらさげて——「御寶藏やぶりぢあねえ。

「おや、おや。」

「暴風雨の沈み荷や浮き荷（——難船の積荷——）をクスねたんでもねえ。

「わかつたよ。

「おめえの面アはらうとつて、持つて來たのよ。」

「痛いよ。ほゝ……」

「たいてい泣くめえ。」

「ふン。まあおのみ。」

「ツウといやあ、カアよ。おいらア、やにのつまつた煙管みてえに、通らねえ男ぢやねえのさ。」

「さ、御返杯だ。

「ツウといやあ——」と、ぐつとのんで、「——のみこみあ、早えのさ。」

「たれも、ほゝ、」と、さかづきをうけて——「ツウども、なんとも、いやあしませんのさ。」

「なにを。」

「ごめんなさいよ、のめといふから、のんだら、酔ひましたのさ。」

「さゝツ葉に、鈴ウつけたやうに、さわ／＼す

るなえ。」
「ほゝほゝ。」
そこへ、はた／＼とまた、廊下に足おとがして、小女が、彼女を呼びに來た——
このごろ、日の出のお船頭が、燭臺をつらねた下の廣間で、彼女を待ちくたびれて、猛りだしてゐるのであつた……

十五

武ざやら、きいたふうな客やら、きほひはだなどと、そんなふうに、お座敷を、まはるうちに、酒もまはつて、いよ／＼、その、日の出の男のまへへ出た時分には、もう、爪紅の爪さきや、口紅のくちびるに、ひとりでに、小うたの、こぼれるほど、醉うてゐた。
男は、ともしつらねた燭の火に、暗い眼をして、さかづきをふくんでをつた。
いひつたへによると、紅うらの茶羽二重のじゆばんを着てゐたといふ——大柄の肉のしまつた四十男で、赤銅づくり、寸のびの大わき差を、片わきにひきつけて、ときをり、狂暴な視線を、きらり／＼と、一座の人々へ、眞向から、投げてをつた。
——いつともなく、海からあらはれては、街の女らに、氣絶するほど、金銀をまいて、そのまゝまた海へ消えてしまふ、あやしい、日の出のお大盡であつた。
水主か、かん取か、それらしく荒びたのがひとり——その陰に、肩をまろめて、膝小僧をつかんで、あの、どぶ川のおぼろ夜に、女火事をひき起した、「鈍間な一惡」が、ひかへてゐた。
妓は、おみのさんと、ほかにふたりほど——みんな重たげに首をかしげて、太鼓の締緒をいぢつたり、てうしを持てあつかつたり、などしてをつた。
そんなかへ、にぎやかな春ごまのやうに、ついとはひつて
「親方さん、このぢうは、ありがたう。」
で、男が、たちまち、うつてかはつて、上機嫌に、うなづくのを見てから
「みなさんえ、」
と、イキのいゝ眼を下座へうつして、ふつと、その、どぶ川のドテラ男をみとめて
「おや、親方さん。」と、陽氣に呼んだ。
どぶ川が、眼をぱちくりして
「むんにや。」と、いつた。
と、その上座の、荒びたのが、そちらへふりかへつて
「權、」
「へえ。」
「てめえ、いつから、親方になつた。」
「兄貴。」と、おそる／＼耳へ、口を持つていつて——……親方にないしよだ。」
「馬鹿野郎。」
で、日の出へ、眼でわらつて
「親方、權の野郎が、お吉つあんと、とんだなじみださうで、へい。」
よオ／＼と、妓らが、やつと息を吹きかへして、はやしたてる。
「お吉、」と、日の出が、にたりとして——うらやましいの。」
「おや、馬鹿ら……」
と、いひかけて、ずつと、その、どうにも間のぬけたづう體を、まるうくちゞめて、まゐつてゐる權のまへへ寄つていつて、日の出を見かへして
「いゝえ、ちつとも、馬鹿らしく、ありませんのさ。」
「ほう。」
「親方、ねえ親方、」と、權のづんぐりとした手を抑へて、放膽に——「いつそ、洗びざらひ、ここでぶちまけて、聽いていたゞかうよ。」

「むゥん。」

「ねえ……ふたりの仲をさ。」

どつと、皆がわらつた。

「何がをかしいのさ。」と、つゝかゝる調子で叫んで、ほゝほゝと、こゑをふるはせて――「あんた達あ、他人さまの、夫婦ん仲が、をかしいのかえ……そちらがよつぽど、をかしいねえ。」と、權の膝へ、放俗にしなだれる。

「千兩！　千兩！」と、おみのさんが、さけぶ。

「おや、おみのさん！」と、そちらをにらまへて、ふいと、うそぶいて――「七兩二分は密男だし、十兩はラシヤ……」

はゝはゝと、日の出が大腹らしくわらつて

「お吉、だいぶのんだな。」

「なんですえ。」

と、からだを起して、そちらへ寄つて、さかづきを、てうしをとつて

「馬鹿らしい、人でも のんだやうなことを！」

と、なにか口のなかでいひながら、手酌で、ぐつとあふる。

日の出が、ぴりつと眉をうごかしたが、ぢきにまたわらつて、ふところの、正平革の財布をつかんで、彼女の膝のうへへぽんと投げた。

――韮山の藩札やら、三分の刻印をうつたアメリカ銀貨の重味が、ぴりゝと彼女の神經にうづきわたつた……

十六

膝のうへへ飛んで來たその革財布を見向きもしずに、春駒の、たてがみを立てたやうに、ぴいんとうなじを反らして、くちびるをかむ。

あんまりな態度に、荒びたべんけいじまが、そばから口をだして

「親方が下さるとよ。お辭儀をして、いたゞきな。」

「ほゝほゝ。」

「むゥ」

「陽氣になると、變なものが降るねえ。」

「なんだと、」と、片膝を立てにかゝるを眼で抑へて

「花よりあ、ましかえ。」と、日の出が、大きな火はたきのついた煙草いれをだす。

それにはかまはないで、どふ川のドテラを見かへつて

「おまへさん、いたゞいても、いゝかえ。」

「むゥにや。」と、ドテラは、日の出と彼女を、七分三分にながめてもぢ／＼と、しりごみする。

「ヘン、意氣地のない亭主だ。」と、わらつて、その、ふくらんだをどしの革の財布をつまみあげて、たれにともなく――「ちつたア鬣ごとも習つたが、こんなものに化ける手品は、まだ知らない……」

「ねえさん、」と、おみのさんらがはら／＼して、袖をひく、その眞向、眼の下へ、鐵に金象眼の、大きな煙管のがん首が、ぐつと迫つて來た――ふとく、低く、殺氣を帶びた日の出のこゑが、ひびく。

「お吉、頬げたアたゝくひまに、いつぷく吸ひつけろ。」

それを、じろりと見て、つゝいと顔を反向けて

「いろ／＼と、お食ごのみだ。」

ねえさん、ねえさんと、女らがさわぐ。

「さう／＼しいねえ、あんた達あ。」

と、みんなを、見すゑて

「三味線の、あひの手は、忘れても、これだけは、おぼえておき。いゝかい、そうじて、お大盡のお煙草は、かうして、吸ひつけるものさ。」

で、しづかに、その革財布のトメ金をはづして、中から、金五兩の、楮の藩札を一枚ひつこぬいて、あ、と見るまに、それを、燭の火にかざした……

下田賣春婦なら、いち夜に、六七十ぴきは、自

曲になる。衣しやうなら、季節の晴れ衣が三枚出來て、帶まで添うて、釣りが來る――その大金が、いちまつの煙とともに、彼女の指頭の焰になつて、男の煙管のがん首に、燃えあがつた。
男は、眉も煙管も、ぴりゝとふるはせたが、おもひかへして、わざとゆつくりと、その煙草の煙を吸ひこんで、彼女の嚴火な顏いつぱいに、ぷうと吐きかけた。
「おつに、しやら臭え、にほひがするの。」
「あいさ、お金は、とんだ、半可臭いが、から煙になつて見れあ、さうでもありませんのさ。」
「お吉、」と、べんけいじまが、たまりかねて、わめいた――「眼の玉の青い人間の、ゐさアくらつた綿羊のくせエして、生意氣いふなえ。」
「おや、なんだとえ。」
「お吉、と、こんどは、日の出が、冷たくわらつて――「その、財布んなかにあ、てめえの好きな、異人のゐさが……あめりかの、ドルラルとかいふ、三分銀がいれてある。まさか、そいつで、煙草の火を吸ひつけるわけにもいくめえ。持つてかへつて、なめるなり、かみつくなり――ころんだ昔をおもひだして、アメリカ戀しと、泣くがいゝわさ。」
その、厭がらせが、終るか終らぬとつさに、彼女のそばにあつた瀬戸の杯洗が、宙に浮いて、日の出の鼻ツ柱へ、さつと水がとんだ。さうして
「うぬ。」と、わき差をひきよせて、片膝たてる男のまへへ、すらりと立つて
「ラシャメンが、」と、眞さをな笑顏だ――「お札で、煙草を吸ひつけるよりあ、お船頭さんが、水にびくつく方が、よつぽどをかしいぢやないか。」

十七

むろん、その夜は、それつきり、どこのお座敷もことわつて、家へ歸つて、また醉ひつぶれてしまつた。
次の夜も、次の夜も、彼女のお座敷は、みんな、そんな調子で――醉はないうちは、もちまへの勝氣で、つとめてはゐても、どこかあはれに濕たれて、その樣子が、男らの眼には、どうやら手管めいて、おもしろかつた。
それが、いつたん醉ふと、例の、依こまの、ぴんとたてがみをたてたやうで、身分も、金銀も、花車も、實意も、世の中いつさいの男を寄せつけない。
はじめのうちは、それも、女遊びのおもしろさにして、招んでみたり、通うてみたりする男らが、ずゐぶんあつた。それもしかし、彼女の亂酒におそれをなして、いつとはなく遠退いていつて――で彼女の身邊が――間もなくまたさびれはじめた……
格子窓が、女らの紅やあぶらやため息でくもつてゐる、あの、暗い船宿や料理屋の内所で、ときをり、脂ぎう過多な女將たちが、くそ蠅を追ひながら、話しあふのであつた――
――あの妓も、とんだ惜しい妓だ。
――ほんに、顏は、あのとほり上だし……
――足のおや指や、反つてるしさ。
――氣はいゝし、發明だし、それに、うまい盛りたゐな。いつぞ、小じれつてえよ。
――まんざら、はじめての、勤めでもねえのにの。
――また、あの妓の、はじめて出た時分とは、客衆も、世界も、すつかり、かはつた。
――ちつたあ、男も、食べるがいゝのさ。
――それが、當世よ。
――ほんによ、いまどきの妓は、みとむない藝なし猿でも、手をだしたり、足をだしたり、男ゴロシの藝だけは、ちやんと心得てゐるのよ。
――はやい話が、上州博多織や、描きざら

さが、りつぱに流行るやつよ。
——そのことさ。
——あの妓は、あんまり大きなアメリカを、つまみ食ひして、どうか、狂ひでも來たさうな。
——とんだ氣ちがひなすびだ。
——ヘン、日本の男は、小せえ、小せえか。
——をんな五右衞門ぢやあるめえしの。
——商賣だわな、いくら日本の男が、小せえとつて、あんなに、くらひ醉つて、けんたいぶることはねえのさ。
——まつたく、惡い癖よ。
——しよせんは、見ごろしかえ。
——どれほど、はたで、氣をもんでも、どうにもならねえ。
——いつそ、商がゆい。
…………
…………
でも、どうにか、その年の、秋になつた——
酒が無ければ、おど／＼と、男におびえて、青ざめて、もう世の中のさみしさを、一身にあつめたやうな眼をしてをつた。
酒があれば、たちまち、毒草の花のやうに、もの狂ほしく、男をわらつた。
とき／＼、氣まぐれな、あられか時雨ほどある收入は、もとよりのこと、コン四郎さんの遺品の、えぞ錦も、あめりか瀬戸の商ブラシいれも、なにもかも、そんなふうに、世をのゝしるために、男をあざわらふために、酒になつて、消えてしまつた。
——世を捨てたわけでもなく、世に捨てられたわけでもない。なにがなにやら、肉體の道のあゆみが、苦しいのであつた……
秋が來て、癡鈍な街の女等が、みんな肥つてゐるなかに、お吉はひとり、季節の脚に踏みにじられた、さみしい顏をしてをつた——

十八

——物のあはれは秋こそまされ
秋のあはれは夕こそまされ
なけ／＼と我をせめけり秋のかぜ
むかしの人の詩が、ひし／＼と迫つてくる……
ある夕ぐれ——
情人への戀文の代筆の禮にもらつた、鹽づけの秋刀魚をしがんで、茶わんの冷酒をなめてゐると
「頼む。」と、低いこゑがした。
「あい、どなたさま。」
「おきちどのは、こちらか。」
「おきちは、わたくし……さうして、あなたさまは。」
「江戸のもの。」
「あの、江戸から……」と、そこだけ春めいた眼を、あかりの無い緣喜だなへあげる——自墮落な、立膝で、もの臭なカケ茶わんを片手ににぎつたまゝ、起つて出ようともしないで
「——江戸は、どちらから。」
「ちと、內密に御意得たいが……」
「おや、ないしよごとですかえ。」
「されば……」
「ないしよごとなら、またにしておくんなさい。」
「いや、なに、それが……」
「お吉は、藝者でござんす。」
「承知でまゐつた。」
「いきなり藝者の門ぐちへ來て、ないしよごとは、かはいゝが、ほゝほゝ、とほりませんのさ。」
「なるほどの。無意氣な江戸もので、その邊は、わきまへぬであつた、はゝはゝ。」
「たつてとなら、お座敷へ……」
「それがの、」
「いえさ、その お座敷も、その時の 風しだいで……」

「ほう、きびしいの……いや、おきちどの、」

「なんですえ。」

「これは、當地の名主が、案内せうといふをことわつてまゐつた者ぢや。」

「え、あの、お名主さまが……」

「韮山どのお身内の衆も、わざとことわつての……」

「ま、おカミの御用！」

まづ、さやうのもの。

とんと茶わんをおいて、きつとなる――

「その、江戸のおカミから、はる〴〵お越しなされましたは……？」

「さきほどからまをす、ないみつで、逢ひたいのぢや、とほしてくれぬか……秋のたそがれは、はゝ、旅のものには、こたへるぞ。」

「はい……いゝえ、それは、あの、なりませぬ。」

「はての。」

「以前の、吉なれば、ともかく、しがないいまのわたくしに、おカミの御用を承はれようとは、おもひませぬ、それに、」

「む……」

「――それに、お吉も、このごろは、どうやら、人の顔を見るのが、厭になりました。」

「はて、異なことを」

「あいさ、」と、おのれの言葉に、わけもなく、昂奮して――

「――うるさいこたア、まつぴらですよ。」

「あ、お吉、」

「なんですよ。」と、いら〳〵と秋刀魚をちぎつて、はんぶん、口んなかで――「あたもの好きな！　近ごろは、犬も寄りつかねえに……」

それが、きこえたか、きこえぬか、表の中窓の、小障子の外から靜かな調子の、その侍のこゑがひゞく――

「お身は、伊佐どのを覺えてゐぬか――たゞいま、江戸で、アメリカ應接方をつとめらるゝ……」

「え、伊佐の殿さま！」と、おもはず、衣紋に手をやつて、たちかゝつたが、そのまゝまた投げやりに、膝をくづして、とんとそちらへ、片手をついて――それが、どうぞ、しましたかえ。」

十九

どうやら、とつぷりと暮れて、もう酒も無くなつた、カケ茶わんのさみしさが、こほろぎのこゑとともに、身にしみとほる……

「その伊佐どのから、」と、窓のこゑは、さらさらと風趣のある調子で――「ことづけも聞いてまゐつた……」

「あの、おことづけを、伊佐さまから……？」

「さやう。」

「さうして、それは？」

「ともかくも、顔を見せては呉れまいか。」

「おや、すんなことを、伊佐さまか……」

「いや、それは、はゝ、拙者ぢや――この窓の障子ごしでは、なんとやら、とゞかぬ心地がする。」

「だから、さきほどからあたしやあんなに……」

「聽いては、ゐるがの。」

「すんなら……」と、無意識に、カケ茶わんを、くちびるへ持つていつて、酒のきれたに氣がついて、いら〳〵と、たゝみのうへへはふりだす。

その氣配を感じたらしく、物やはらかな口ぶりで――「ま、よい、よい。秋の夜の、紙障子にかくれた女と、かう語りあふも、一興ぢや、はゝはゝ。」

「……」

「いや、お吉どの、返事は、あればしあはせ……無くとも、決して、苦しうないぞ。」

「……は、はい。」

「伊佐どのが、まをされる――先年は、苦勞をかけた……」

「……」

「その後は、無事に、堅固にすごしてゐるか。」
「はい、あの……」
「もし、さみしく思うてでも、ゐはせぬか。」
「は、はい。」と、貧しい、奥州あんどんの光に、眼を反向けて、消え〳〵のこゑで――
「……このとほり、花やいでをりまする。」
「それは、それは……いや、なに、うけたまはつた、さやう、伊佐どのに傳へまをす。」
「はい。」
「それから、お吉どの。」
「……………」
「これは、カミの御用……ではない、まつたく餘事ぢや――江戸土産の、うき世繪とも、おもうて、聽いてもらひたい。」
「……はい。」
「江戸の、麻布の、善福寺の、みにすとうるがの。」
「え？」
「ミニストウル……アメリカぢや。」
「え、え！」
「たしか、當地在住のみぎりは、コンシウロ・ゼネラールであつたな……」
「それが、どうぞ……？」
「ちかごろは、めつきりと、年が寄つての……頰にも、あごにも、ぼう〳〵と無精ひげを生やして――」
「ま、」
「……手足なども、見ちがへるほどに痛々しうやせおとろへて――」
「ま、あの、コン四郎さんが！」
「あの、馬好きが、この節は、どうか、骨が痛むとまをして、馬にも、乘らぬ……」
「馬にも……」
「無理もない、あの、ながいこと子供のやうにした通辯官は、去年の暮に、あゝしたことで、死んでしまうたし、さきごろは、またねんごろな女とわかれて、いまはたつたひとり……この秋風がさぞと、察しらるゝ……なう、お吉どの。」
「は、はい。」
「彼も、やつぱり、人よ。」
「……………」
「お吉どの、」
「……………」
「お吉どの、」
……と、いつの間にか、その、窓のこゑにひきこまれて、片手を胸に、うなだれてゐたのが、その時ふいと、うなじを反らして、泣くやうにわらつて、わらひにむせびながら、いふのであつた――
「なんの、ことかと、おもつたら、毛、毛唐人の、うはさだ、あたしや、をかしくて、をかしくて……」
「あ、これは、」と、彼女の、鎭まるのを待つて、窓のこゑがいつた――
「――失敗うた、間違ひぢや。あやまる、はゝ、あやまる、土産の、だしちがひぢや。おゝそれそれ、お身への土産はからすであつた――
うら枯れて、いよ〳〵紅しからす瓜――」

二十

……からす瓜、からす瓜と、くり返す、低いこゑとともに、なにかへう〳〵とたち去つてゆく氣配がする。
「あ、もし、」と、その男の、こゑの餘韻を抱きしめて、息をはずませる。
「あい、いゝえ……」
「用かな。」
「これは、そら耳――」
と、またゆきかけて、もいちど、もどつて
「――兩三日は、なほ、當地に滯泊いたす。そのうち、風の吹くよひにでも、ひよつと氣が向いたら、この無意氣な江戸ざむらひに、お身の

音じめを聽かせておくりやれ。宿は、名主が知つてゐる……おつと、また、叱られるわ、はゝはゝ、さらばぢや。」
　心にくい、そんな言葉をのこして、こゑの主は、いつてしまつた……
　べつに、名をなのるでもなく、どうやら、それと察しられる用向きを、表だつて迫るでもなく、たゞ、そつと來て、心をのぞいて、また、そつと、いつてしまつた。
　伊佐の下役か、同役か――相當の年配らしいが、どこやらに、わか竹の、さら〳〵とした一種の風ゐんのある――ひよつとしたら、伊佐自身であつたかも知れぬ……
　伊佐ならば、あゝ伊佐ならば、こちらから、ひきとめて、訊きたいことがあつた――
　――むかしは、あけがらすのお吉とうたはれて、なかごろに、唐人お吉とそしられて、いまは、名もない街の女にうらぶれた、このひとりの女の、行くべき道を敎へてください……
　――初戀の、死ぬほどのおもひの火を、大らかな、時代の足にふみ消されて、男ならぬ男に、手袋のやうに自由にされて、それから、いま、青春の貴重の、美しい肉體の重味にあへいでゐる、この女の、進むべき道を敎へてください……
　――黒髪をおとして、爪紅を洗うて、つめたい僧院の靜寂にかくれるのは、あまりにも古くさい道德です。
　――よしやわざくれ、身を捨てて、浮いたり沈んだり……くち紅の、一瞬のつやを追うて、せつなとせつなを、たよりない感覺の絲でつないでは生きてゆく――そんな、おろかしい眞似は、したくありません……
　――ひと思ひに死んで、野ざらしになつてしまへば、この頰の火照りも消えるであらう、この苦しい吐息も絕えるであらう。この誇りも、このいきどほりも、このさみしさも、なにもかも、いつさいが、おしまひになるであらう、さうして、人々は、口をそろへて、はやしたてるであらう――華やかな、一生であつた、美しい最期であつた、まつたく、これは、あつらへ向きの悲劇の最期だ、などと……でも、ほんたうに、それでは、あつらへ向き過ぎます。あまりにも、紋切型過ぎます。
　人生の幕は、そんな簡單至極な俗趣味に、うまくあてはまるやうには、降りてまゐりません……
　黒ふねの影のさした――新しい世紀の夜明けの、うすら明りに、うごめいてゐる、この、いまは名もない一人の女に、光を與へて下さい……
　――兎に角、お吉は、苦しくとも、さみしくとも、これから、まだ長い半生を、生きてゆかねばなりません……
　伊佐ならば、しみ〴〵と、そんなことを聽いてもらひたかつた――伊佐ならば、そんなことが、ぴいんとひゞくであらう……
　……窓の小障子の、おのれの影ぼふしに、しがみついて、ほろ〳〵と、淚をながしながら、そんなことを、彼女はかんがへたのであつた……
　……………
　……………
　それから、二三日、つめたい雨に明けて、雨に暮れた。
　男は、それつきり、影を見せなかつた。彼女も、それつきり、訪ねようともしなかつた――
　そのあひだ、酒にあくがれて、ふたつみつ、見知らぬ客の座敷へは出かけたが、そこで醉うたまぎれに、彼女のくちびるをこぼれだすあのたんかが、相手の男の、呼吸を止めるほど冴えてゐた……

年譜

明治三十年

十月十四日、神戸市元町三丁目に、十一谷春吉三男として生る。近隣は、下級船員、南京妾等の寒居なり。

幼時、母の背に負はれて街上を馳るに、ヒキツケを起すこと屢次。後來小學校の體格檢査に、腦病の痕跡を認むと診斷されし記憶あり。

明治三十五年

神戸市元町五丁目の某私塾に通ひ、二年間にて、尋常小學の課程を略ゝ修了す。

明治三十七年

神戸市立尋常小學校入學。

明治三十九年

兵庫縣立御影師範學校附屬小學校へ轉校。父、肺を患み、一家、兵庫縣武庫郡御影町東明に轉ず。虚弱、讀書癖强し。

明治四十二年

父歿す。世路これより多難。

明治四十三年

兵庫縣立第一神戸中學校入學。東明の酒造家高島氏の家僕となり苦學す。爾後中學卒業までに、高島氏が創設したる村の圖書館の藏書は、和漢洋殆ど無差別無選擇に之を讀破したり。後來頭に殘りしもの、文學では、漱石、木下尙江等、宗教では、日蓮、經濟では、福田德三氏の日本經濟史、マーシャルの原論等なりき。

明治四十四年

家兄出奔。この年、中學の體格檢査に、全級中、最も發育不良兒は余なりき。

明治四十五年（大正元年）

遁生の志を發し、高島氏の一喝に逢ひて志を改む。爾後乞食修業を念として、佛書に親しむ。

大正四年

第一神戸中學校卒業。亡父の關係より、神戸市、燐寸原料染料藥品商河西某家の小僧となる。家庭の事情暗澹を極む。家兄歸る。この小僧時代、力行獨逸語を修む。

大正五年

伊勢神宮皇學館受驗。左肺運動不足の故を以て落第。京都第三高等學校へ入學。同校在學中、恩人高島氏の訃に會ふ。その臨終に侍して、宗教に對する疑惑を深め、遂に志を文學に轉ず。現大阪放送局横山重遠君らと同人雜誌「異端」を出す。

華水島文次郎先生に親侍して、享くる處甚多し。

家兄再び影を沒す。社會の人に非るなり。

大正八年

東京帝國大學英吉利文學科に入學。在學中一身多事。先輩三宅幾三郎君らと同人雜誌「行路」を出して、文壇の末席に入る。二

三の新聞雜誌等に、評論創作を發表す。

大正十一年

帝大卒業。「魂」の恩師 松浦一先生の知遇を辱うす。

東京府立第一中學校内、全國中學校長協會主事となり、傍、同校に英語の教鞭をとる。

大正十二年

短篇集『靜物』上梓。

大正十三年

聘せられて文化學院の英語英文學の主任となる。

雜誌「文學時代」同人となる。

大正十四年

短篇集「青草」上梓。

友人 足立欽一氏經營の 出版書肆 聚芳閣の客員となる。聖書辭典の複刻、異國叢書の刊行等、多少讀書界に貢獻し得たりと信ず。

大正十五年(昭和元年)

三宅幾三郎君と共譯にて、小泉八雲の「東西文學評論」を上梓。

南葵文庫主任 高木文氏著『玉澗牧溪瀟湘八景繪の由來と傳統』を英譯上梓。

「福岡日々新聞」に 長篇『生活の花』を連載。

昭和二年

『生活の花』を上梓。

文學に對する熱意漸く發す。創作に專念す。

昭和三年

『唐人お吉』他數作發表。

愛弟を失ふ。肺患なり。この年、しきりに死を念ふ。

昭和四年

「唐人お吉」上梓。

短篇集『あの道この道』上梓。

唐人お吉續篇『時の敗者』執筆。

昭和五年

結婚。

『時の敗者』上梓。

『續篇時の敗者』執筆上梓。

短篇集『キャベツの倫理』上梓。

短篇集『十一谷義三郎集』上梓。

「福岡日々新聞」に 長篇「太陽よ、隣人よ！」執筆。

昭和六年

三月現在――

『終篇唐人お吉』及び「太陽よ、隣人よ！」續篇執筆。

文學と生活が、漸く一致し來りたるを覺ゆ。

冀くは、覓めずして、一個の存在たらん――文壇的にも、社會的にも。

淺草紅團・伊豆の踊子

川端康成

一盞孤燈寒夜客
数聲鐘隔杏花村

康成書

淺草紅團

——作者イフ。コノ小說ノ進ムニ從ツテ、紅團員ハジメ淺草公園内外ニ巣食フ人達ニ、イカナル迷惑ヲ及ボスヤモ計リ難イ。シカシ、アクマデ小說トシテ、コレヲ許サレヨ。——

ピアノ娘

一

鹿のなめし革に赤銅の金具、瑪瑙の緒締に銀張りの煙管、國府煙草がかわかぬやうに青菜の莖を入れた古風な煙草入を腰にさげ、白股引と黑脚絆と白い手甲、そして濃い盲縞の着物を尻はし折つて、大江戸の繪草紙そのままの鳥刺の姿が、今もこの東京に見られるといふ。いふ人が警視廳の警部だから、まんざら懷古趣味の戯れでもあるまい。

してみれば、私も江戸風ないひまはしを眞似て、この道は——さうだ、これから諸君を紅團員の住家に案内しようとするこの道は、萬治寛文の昔、白革の袴に白鞘の刀、馬まで白いのにまたがつて、馬子に小室節を歌はせながら、吉原通ひをしたといふ、あの馬道と同じ道かどうかを、調べてみるべきかもしれない。

だが、午前三時過ぎ、浮浪人もとつくに寢靜まつた、淺草寺の境内を、私が弓子と歩いてゐたとする。銀杏の落葉が降つて、鷄の聲がしきりに聞える。

「をかしいな。觀音さまに鷄をかつてるかね。」といひながら、私は冷つと足をすくめる。

——着飾つた娘が四人、眞白な顏で立つてゐるのだ。

『淺草つ子になれない人ね。花屋敷のお人形よ。』と、彼女に笑はれる私だ。

それから鳥刺にしても、彼等は夜が白む頃に、長い竿で梢の小鳥をねらふといふ。朝寢坊の私とは縁がない。

吉原も近頃は彼女等の寫眞を高くかかげることさへ禁じたのか、ガラス箱に入れられて、まるで蝶々の標本でも見るやうに、のぞき込まねばならない。

また例へば、タイプライタアとピアノとをかたどつた、あの樂器——私達が、大正琴」といふ名で覺えてゐる樂器も、商賣人の賢さで、今は「昭和琴」と名の變つてゐる世の中だ。大江戸をなつかしがつてゐることはない。私も諸君の前に——大正地震の後の區畫整理で、新しく書き變へられた「昭和の地圖」を擴げよう。

さて、上野の鶯谷から言問橋へアスファルト道を、淺草乘合自動車が通つてゐる。その淺草觀音裏の停留場を北へ入ると、右は馬道町、左は千束町、それを少し行つて、左側に象潟署、右側に富士尋常小學校、そこで淺間神社に突き當つて四辻だ。社の石崖に沿うて進むと公設市場、それから吉原土手の堀割の紙洗橋だが、橋まで行かずに、とある露路を——いやしかし「とある露路」とは、餘りに古臭い小說の書き出しだ。彼等は何も死刑になる程の——それどころか、淺草に巣食ふ人力車夫程の、罪惡も犯してゐないのだから、ゐどころをはつきり書いてもいいのだ。

「旦那、旦那。」と、淺草公園や吉原あたりで呼びかける人力車夫は、

『遊びなれてる旦那とお見受けしやすが、たまには變つたところもいかがです。』

そして話がまとまれば、忽ちゴム足袋を下駄にはき替へ、彼等の目じるしの帽子を車につつ込み、圓タクを呼び止めて、五十錢に値切り、客を連れて行くのだ。彼等は一人一人自分の穴を持つてゐて、仲間にも決して敎へない。ひどいのになると、行きずりの男に姿の世話までする。その女と云ふのは九つと四つと、おまけに前六月の子供があつたり——

だが、「千社札」といふものに興味のある諸君ならば、どこかの寺か社で「くれなゐ座」の納札を見られただらうが、紅團はまた紅座である通りに、たとひ空地にむしろの小屋がけなりとして、華々しく——彼等から思へば華々しく、彼等の一座を打つてみたいといふ、希望を持つ彼等である。そのうちに一人の少女が、仲見世でチヤアルストンを踊りながらゴム・マリを賣つてゐる彼等である。

二

しかし「千社札」にしたつて、彼等のことだ。それを花山帝がおはじめになつたとか、歌川豐國なども書いたとか、そこまで調べて圖案をこらす物好きでもなければ、ほんたうに千社參りを思ひ立つた神信心でもない。ただ少しばかり世間の千社講と變つてゐる證據には、ある日、船の時公——父が大川の船頭だから、皆に「船の時公」と呼ばれてゐる——そのチンピラが私に、

『五重の塔を知つてるだらう。』

『觀音さまのか。』

『うん。五重の塔の上からも下からも三段目の、あのな、仁王門を向いた角に、猿の顏に角の生えた鬼瓦が一つあるんだよ。目玉は金だよ。あの猿の顏にお札をはつてやりたいなあ。』

まあこんな風に——例へば、淺草寺の仁王門の大提燈、三つあるうちの眞中、小舟町の提燈の黑塗りの底だとか、向島牛の御前の庭にはふりだした牛の角だとか、とんでもない失禮千萬なところへ、「くれなゐ座」の納札を、闇にまぎれて張りつけておくのだ。

だから、彼等の紅座そのものも、何も彼等が藝人になりたいといふわけではなく、奇想天外な見世物をだして、とにかく一度は、世間の度膽を拔きたいらしいのだ。

かと思ふ——私は紅座がやる芝居を一篇書くやうに賴まれてゐたのだが、彼等の一人の註文が可憐だ。

——ハンドル（手を握ること）ぢやあつけないや。もうちよつといいことを、皆その同じにね、明公と順々にするやうにこさへて下さいよね。——

かと思ふと——さうだ、それは、私がその明公と六區を歩いてゐた時のことだが。

瓢簞池の岸に人だかりがして、笑つてゐる。小春日和の日ざしが、それらの後姿を溫めてゐる。だが、のぞいて驚いた。そこはちやうど瓢簞の結びにあたつてゐて、池の中に小さい島があり、兩岸から藤棚のある橋がかかつてゐる。その島の立花屋といふおでん屋の前、枝垂柳の下の八つ手の傍に、大きい男が突つ立つて、池の鯉の麩を拾つて食つてゐるのだ。くるぶしの上まで水に入れながら、七尺ばかりの竹で水の上の麩をかき寄せては、仁王立ちのまま、むしやむしや食つてゐるのだ。

『ひでえ氣違ひだな。鯉の上前をはねてやがる。』と、こちら岸ではまた大笑ひだ。十四五切れの麩をむさぼりつくすと、彼は素知らん顏で、おまけにまことに威風堂々と立ち去つてしまつた。

ところが明公は小走りに、昆蟲館の裏で彼を、『ケン、ケン。』と呼び止めると、十錢玉をくれてやつた。そして私に、

『あいつ、この間までここのヅブだつた。』
『ヅブつて？』
『まあ乞食の一種ね。繩張のない、流しの乞食。――それが足を洗つて、この間立派に勞働者に成り上つたて聞いたけど、また舞ひ戻りね。不景氣なこつた。』
『なんだ。氣違ひぢやないのか。』
『氣違ひの眞似でもせずに、池の麩が食べられますか。だけど、ほんたうに氣が違つたのかな。正氣だつたつて、人は人の見てゐるところで、芥箱のものを食べるよ。それに舞ひ戻りぢや、あいつ生意氣つてことになつて、ヅケも分けてもらへないし、ひもじいよ。』
このやうな彼等であつてみれば――私は諸君を彼等紅團員の住居へ、案内してもいいではないか。そこで、「とある露路」とは――けれども、私がそんな「とある露路」へなど迷ひ込んだのは、物好きの探訪ではなく、私には私の祕密の用があつたのだ。そしてその袋露路の裏に、斷髮の美しい娘がピアノを彈いてゐたのは、私の拾ひものであつたのだ。

三

さて、その「とある露路」とは――吉原土手の紙洗橋の四辻までは出ずに、少し手前の横町を左に折れると空地がある。右はフェルトとキルクの草履製造屋、左が水灸屋、その空地の奧に貸家札を見つけたから、私は土管の列と枯草とを踏み越えて、その袋露路へ入り込んだのだつた。もちろん長屋だ。入口の家は兩側とも、下には炭俵がぎつしり積み重ねてあつて、二階が住居らしい。露路に竿竹を渡して、シャツや女のものがつるしてある。
『この門の奧なら、まづ人に知られる氣づかひはない。』
そして、その洗濯物の門をくぐるために、縮めた首を左に向けると――日本堤の消防署の火見櫓が頭だけ見えた。
『あの近くなんだな。』とつぶやきながら、奧へ入つて三軒目――私は眞赤な花束を突きつけられたやうに立ち止まつた。
赤い洋裝の娘が、玄關でピアノを叩いてゐるのだ。布の赤とピアノの黒とから浮き出して、膝から下の素足の白さがみづみづしい。玄關といつても、下駄の長さ程のたたきしかないので、明け放つた門口の外から、彼女の腰の黒いリボンを引つぱれさうだ。飾りはそのリボンだけだが、袖がなく、襟ぐりが廣いから、セミ・イヴニング――といふよりも、舞臺の踊服を家でも着てゐるのか。男風に刈り上げた襟筋の毛の中に、白粉が殘つてゐる。
彼女の方でも、私に驚いて振り向いたところへ、十二三の少女が驅け込んで來た。少女もけげんさうに私を見上げた。私は歩きだした。
その家には、「ピアノ稽古所」と、圓い木の板に緑の字を彫つた看板がかかつてゐる。少女がいつた。
『姉ちやん、カジノ・フォウリイが、また水族館に出るんだつてさ。』
『さう？ 靴下なしで舞臺を歩く――レヴィウのあれにでも雇つてもらはうかな。――それから自轉車どうだつて？』
『借りられたわ。』と、彼女等は二階へ上るらしい。
貸家は一軒おいて隣りだつた。だがそれを見る前に、
『さう、さう。』と、膝を打たうとしたのは――彼女等のことを、私がはつきり思ひ出したのだ。二人とも、どこかで見たと思つたはずだ。
扇子師文阿彌の寶扇堂、そこで田舍の妹に送る扇子を一本買つて、仲見世の雜沓へ、出ようとすると、その角で擦違つた ハアモニカ、マ

ンドリン、銀笛、明笛、ヴァイオリン、木琴、尺八、携琴――その店に坐つて、例の「大正琴」改まつて「昭和琴」で、諸君も活動寫眞でおなじみの流行小唄を、器用にかき鳴らしてゐた娘が、この露路の娘とそつくりなのだ。

それから――秋の末はもう淺草で、暦を立ち賣りする季節だが、今年はゴム・マリの賣子も多い。彼等のマリも賣り方も、皆同じだ。色絲を巻いたやうに青と赤の布で包んで、掌を少しあふれる大きさのマリ、それを紐で中指につるし、つまり、てんてんてんと、空中でマリつきをしてゐると見せかけて賣るのだ。多くは中年の女か少女が、姿の窶れさで賣る。

ところがここに一人、姿の美しさで賣る少女――お河童頭に赤いリボンを垂れ、短いスカアトが開き、口紅の濃い唇でジャズ曲らしい口笛を吹きながら、靴下の下つた足が、ちよつちよこちよつちよこ、チヤアルストンを踊つてゐる。手拍子でマリをついて、タンバリンかカスタネツトのつもりらしい。その少女が、この露路の少女とそつくりなのだ。

私は露路の空家を借りることにきめた。そして宮戸座の前通りを、淺草乘合自動車が「公園裏宮戸座前」と呼ぶ停留場の方へ出ようとすると、後から古自轉車が二つ私を追ひ越した。――その一人の若者があの娘の雙兒のやうにそつくりなのだ。

『おい。あの自轉車の後をつけてくれ。』と、私は呼び止めた圓タクに急ぎ立てたことだ。

隅田公園

四

スペイン風の踊を踊りながら――決してつくりごとではない、私ははつきり見たのだが、その舞臺の踊子の二の腕には、さつき注射したばかりらしい針のあとに、小さい絆創膏がはつてある。午前二時頃の淺草寺の庭では十六七頭の野犬が恐ろしいうなり聲をあげて、一匹の猫を一せいに追つかけて行く。このやうな淺草だからといつて、犯罪のにほひをかぐために――私は古自轉車の後をつけたのではなかつた。

夜一時半過ぎの淺草には、ただの人よりも刑事の方が、多く歩いてゐるかと思はれる程だが、私が探偵や刑事でない以上、ピアノ娘が美しくなければ、そのまま歸つてしまつたのだらう。

ところで、私の自動車は大通りを淺草憲兵分遣隊の前まで行かぬうちに、二挺の古自轉車と並んで走つた。直ぐ言問橋だ。

よいと巻けの女の群が、頬かぶりをして本所から、男のやうに渡つて来る。橋の上に大福餅や支那蕎麦の屋臺店が出てゐる。向う岸に普請前の牛島神社は、トタン屋根と細い木組だけの上屋が、川蒸汽の發動機の音にも、軽々と飛び上りさうに見える。その橋の袂の牛の御前から新小梅町へ折れたところで、自動車を急に止めて運轉手が、

『待つとりますか。』

彼等がお宮の前で千歳飴を買つたのだ。

『なんだ。つけられてゐると知つて、飴を食はさうといふ、しやれかな。』と、私はにが笑ひしながら圓タクを歸して、同じやうに飴屋の店へ入つた。

ピアノ娘と雙兒としか思へない若者は、しかし彼女より二つ三つ下の十六くらゐに見える。鳥打帽をうしろ向けにかぶり、汚れたコオルテンのズボンをはいて、垢だらけの額に――耳だけが貝細工の飾りのやうに綺麗だ。その耳と、私を振り向いて驚いた眼とで、私も頬を赤らめたのか――彼はさつと店を出た。

そして枕橋――サッポロ・ビイル會社の一枕

橋ビアホオル」の大看板を左に見ながら、彼等は隅田公園へ入つた。

　元の枕橋の渡しに鐵橋が出來ようとして、大河の眞中に起重機がすゑられ、その眞向ひに五重の塔が立つてゐる。綠色の屋根は、鉛色の水と町の上に浮ぶと、も早建築物ではなく、綠の植物のなつかしさだ。

　新しい隅田公園は、そこから長命寺まで、現代風にいふならば、商科大學の艇庫に突き當るまで、ボオト・レエスのコオスを河岸に沿うた、アスファルトの散歩道だ。昭和の向島堤だ。

『ようい。』と、明るく若い妻が夫と並んで立ちながら、誰もこの眞直ぐなアスファルト河岸を走つてみたくなるものと見えて、

『どん。』と、フェルト草履の片足を踏んで、夫と驅けだした。それぞれの手に男の子を抱いて――それが紺のズボンも青いリボンも、髮の刈り方まで、そつくり同じの雙兒なのだ。

　その家庭の幸福のうしろで――私の二人は、

『ちえつ。自轉車の空氣が拔けやがれ。』と嘲りながら、自轉車を並べると、耳の美しい彼がポケットからジャズ笛――小さい金の板に笛を並べ、今年の夜店で一時子供の人氣を呼んだ、あのジャズ笛を、ぴゆつと強く吹いて、それを合圖に自轉車競爭だ。

　船の犬が吠え出した。第九墨田丸が第七吾妻丸を引いて上つて行つた。學校のボオトが岸へオオルを休めに來た。髮結の梳手が二人手をエプロンに包んで、そこへ走り寄つた。

　私は二人を見失ふまいと、言問橋の下をくぐつた。そこは空氣が冷たい。しかし浮浪人が寢るのか、「休むところでなし二横になるべからず」などと、白墨で大きく書いてある。

　そして私が再び彼等を見つけたのは、地下鐵食堂の尖塔が紅と青の電燈に呼吸し出し、言問橋の上から舟の夕飯を眺めてゐた時だ。

　そこで私は、紅團員にはじめて聲をかけたのだつた。

五

　昭和三年二月復興局建造の言問橋は、明るく平かに廣々と白い、近代風な甲板のやうだ。また都會の芥に淀んだ大河の上に、新しく健やかな道を描いてゐるかのやうだ。

　しかし、私が再びそれを渡つた時には、もう廣告燈や街の火が黑い水に落ちて、都會の哀愁が流れてゐた。公園工事中の淺草河岸の夕暗に、白い切石が浮び、荷馬の傍で焚火してゐる工夫達が、遠くに見えた。

　橋の欄干から下をのぞくと、滿潮の音がかすかに聞えて、大きいコンクリイトの橋脚につなぎ寄せた、三艘の荷船は夕飯だつた。

　艫の七輪に飯の湯氣が立つてゐる。手拭をかぶつた娘が櫂を抱いて、艀を渡つて來る。舳先には艪を斜めにして、赤い洗濯物が干してある。隣りの船は石油ランプの下で、さんまを燒いてゐる。屋根にはみそこし、桶、バケツなどが亂れてゐる。

　私の外にも、仕事歸りの人々が三人五人のぞいて行くが、船の家族は知らん顏だ。川蒸汽の波に搖れて、葱を洗つてゐた子供がよろめいた時に、私のうしろから、

『時の船ゐない？』

『時い。』

　振り向くと、私の見失つた自轉車の二人だ。

――葱の子供が上を見た。

『時公だな、錨をはふつてやるからな。』

『おうい、あのな、船貸してもいいつて、ちやんがいつてるよ。』と、河から叫んだ。

『貸すと――ほんとかい。』

『惡いことするんでなかつたらだつて。――そ

の代り、うち四人安來節へ行くだけおごれつてよ。』

『分つたよう。大きな聲するない。――ほらら節だ。』

船の屋根にかちんと落ちて――と、三艘の船の顏が、一時に皆出て、橋を見上げた。驚いた。子供だけで七人た

ばらばら千歳飴を投げると、橋の上に人だかりだ。

ピアノ娘にそつくりの若者は、さつきからぼんやり默つてゐたが、そつと人垣のうしろに出た。そこを私はいきなり、

『あんな船借りて何をするんです?』

彼はくつとそつぽを向いた。そして自轉車に片足をかけると、ふいと白々しく私を見て、

『さうね、女でも賣るんでせう。』

『君はね、雙兒を見ると、さつきの隅田公園でのやうに憎らしくなるんぢやないですか。』と、私は急所を突いたつもりだつたが、彼は口笛を吹いた。

『家でピアノを彈いてた人は、君と雙兒だらう。だから――。』

『ああ、あれが氣に入つて、後をつけて來たんですか。』

『いや。――あの傍の貸家を借りようかと思つてね。』

『ふん。幽靈屋敷に泊つてみたいツて?』

『でもいいさ。』

『じれつたいね。ばくちの賭場だよ。うろついたらなぐられますよ。』と、彼は連れに合圖の鋭い口笛を殘して、自轉車に飛び乘つてしまつた。

私と紅團員との第一回の出會ひはこのやうな失敗に終つた。だがこんな風に順序を追つてゐては、諸君を退屈させるばかりだ。早く私と彼等とを話さう。

例へば、この「船の時公」のことも後で分つたのだが、彼は船から淺草觀音境内の淺草寺常小學校に通つてゐる。每日父が船を言問橋に着けてくれるのだ。しかし、大河を仕事場の船が、ちやうど學校の退け時に、そこへ來るものとは限らない。夜まで、たまには翌る朝まで、父の船が迎へに來るまで、彼は淺草で時を過すよりしかたがない。さうして公園の子供となつてしまつたのだ。

それから、私は紅團員の上にまづ諸君の好意を集めたいといふ下心があつてか、彼等の美しい一面ばかりを、少し語り過ぎたやうだ。

ざんぎりお何

六

彼等の美しい一面を語り過ぎたやうだ――と、私はいつた。

だがしかし、ある時弓子は、

『そんなこと――私は美しいにきまつてゐるわ。美しいからこそ、淺草が御飯を食べさせてくれるのだわ。樂器屋さんだつて、木馬小屋だつてさうよ。――それに淺草には、人間の姿のみじめな醜さを賣り物にする物貰ひが、あんまり多いんです。』と、私をからかつて、

『まあ、あんたになんぞ、淺草の醜いどん底は分りつこないわ。』

ここに彼女のいふ「美しさ」は姿の美しさで、私が諸君に語り過ぎたといふ「美しさ」とは、少し違ふのだが――さうだ、もう一つ例をあげてみよう。

十一月の中頃だつた。私はその日の新聞の話をした。

『ざんぎりお何とかいふ女があげられたつて、夕刊に出てたぢやないか。』

『お何? お何ぢや分らない。私だつて、これ、

ざんぎりだわ。ダンパツなんて大嫌ひ、ざんぎりお弓――あら、そんなことうそよ。』と、弓子は瞼の直ぐ下に片ゑくぼを見せて、ついと二三歩先に出た。

『そりや、ピアノの(稽古所)といふ看板を出すくらゐだから、まづ(ざんぎり)だね。』

『でも、ざんぎりは淺草にいろいろゐてよ。』

『なんでも、感化院を逃げ出しにくいやうに、頭をくりくり坊主にされてゐる――。』

『ああ、おしんのことでせう。』

『十何べんか象潟署へ檢擧されて、感化院を七回逃げ出して、十の時から七年間この公園で――。』

『ええ、ゴウカイヤのおしんだわ。』

『ゴウカイヤつていふと?』

『そのおしんみたいなの。――日雇人夫だとか、立ちん坊だとか、拾ひ屋だとか、宿なし相手の、あれね。十四五から下の子供か、四十を越したお婆さんが多いつて話だわ。(妙齢の婦人で野宿してるのは、滅多にないさうよ。ちつと氣のきいた女なら、月六妻でだつて暮せるし――。』

『それ、おしんつていふと、例の(からたちおしん)の、何代目かにあたるのかしら。』

『あら。そんなことどこで覺えてらしたの。』

『不良少女史の英雄だらう。名前くらゐは知つてるさ。――十三四の頃にはやぶさ團といふ不良少女團を組織して、團長となり、二三十人の部下を從へ、深川八幡を根城にして、十六までに百五十人の男と――ざつとこれで、歷史の答案として、どうだ。』

『ですから、夢をみてらつしやるのだわ。おしんにもよりけり――ざんぎりおしんを紹介したげませうか。』

『いやあ、もうざんぎりお弓で澤山だ。』

『あんなこと。――だけど、一度見せたげるわ。朝がいい。明公とでも行つてごらん。浮浪人がむくむく御殿から起きて來る頃にね。おしんでなくつても、ゴウカイヤの一人や二人はきつと見られますわ。』

彼女はその約束を覺えてゐたとみえて、私は間もなく明公に朝霧の公園へ誘ひ出された。

街燈は夜通しともつてゐる。その明りが朝霧の中にまづ目覺めてゆく。

鈴蘭型の裝飾燈が並んだひさご通り、俗に「米久通り」――その通りにある、そして公園でただ一軒の夜明し店の、あづま總本店で牛飯の朝飯を食べてゐるうちに、ラヂオ體操の號令が聞えて來た。

その頃は浮浪人達が活動小屋の繪看板を見る時間であるらしい。たれにも追はれず、たれにも汚ながられず、朝日を浴びて、彼等はしみじみと繪看板を樂しんでゐる。

そして、朝寢坊の淺草では、なぜか、理髮店が一番早起きらしいのだが、それもまだ戸を明けない一軒の店の前――その柱にはめ込んだ鏡に立ちながら、化粧してゐるあでやかな娘があつたのだ。

七

今朝明公の顏は――言問橋で見失つたのは彼であつたが、その時のよごれが洗はれて、オペラの舞臺の少年のやうに白い。その首の滑らかさを隱すのか、指を首筋で組み合せ、兩肘に顏を埋めて、急ぎ足だつた。

その肘に、小學生の草履袋のやうなものがぶら下つてゐる。

『それ、お辨當かい。』

『お化粧道具さ。』

影の柔らかい日射しには、まだ朝霧の匂ひがあつた。店の戸は一つも開いてゐなかつた。

そこは日本館の横から、[illegible]田町[illegible]食堂の[illegible]

場の裏通りを拔けたところ、北仲町、俗にいふたぬき横町——昔は特賣の赤旗が、小店に入り亂れるのだが、朝のアスファルトは模型の街のやうに清潔だ。
その通りにたつた一人、理髪店の柱の鏡に、「お洒落狂女」が立つてゐたのだ。美しいどころか、水を浴びるすごさだ。だが、明公はついと走り寄つて、
『さ、お歸りよ、姉さん。』
秋色島田のやうな異風な髪で、彼女は振り向いた。干菓子の落雁のやうに濃い白粉だ。白梅を刺繍した紅の襟が、變な悲しさだ。明公は彼女の裾の亂れを、じろじろ眺めて、裾をはたいてやりながら、
『ほんたうに、夜が明けてからうちを出たの？ この裾、自分で擴げたのね？ 暗いうちに來たんぢやないでせう。』
彼女は——それが氣ちがひの證據であるかのやうに、默つて歩きだした。
私達は仲店に出た。店々には、ブリキ張りの戸がしまつてゐる。その前にテキヤが蓙の店を擴げてゐる。宿のどてらを着た田舍の客が、一ダアス十錢の鉛筆を買つてゐる。
朝詣りの藝者。登校の學生。乞食。子守。日雇人夫。朝歸りの男。浮浪人。あらゆる種類の人通りに不思議はないとしても、境内の露店に朝の七八時から、浮世知らぬ顏の人だかりの多いのは、全く淺草の不思議さだ。
だが、仁王門の左の小屋に、
——本堂大營修繕寄付受付所
——本堂御屋根用瓦寄進受付所
そんな木札が目立つから、淺草の匂ひには、まだ時間がある。その小屋にもたれて、赤毛布にくるまつた乞食が眠つてゐる。
右手の久米平内の社のうしろでは、浮浪人が二十人ばかり朝飯だ。練塀の木蔭の鍋から、雜炊の湯氣が立つてゐる。日向ぼつこの彼等に、鍋がかりの男が、
『おう。』
『おう。』と、一杯づつ配つてゐるのだ。
觀音堂の横で、竹馬屋が威勢よく青竹を切つてゐる。鳩豆婆さんが、茹豆を朝飯代りにかき込んでゐる。婆さん達は六人、手拭をかぶつて、ブリキ張りの小さい臺を並べてゐる。鳩の群——地面も屋根も空も一ぱいに鳩だらけだ。
征清軍凱旋記念塔の裏の燈籠には、鶏が四五羽とまつてゐる。
鳩の中を拔けて、木立のある廣場へ出ると、あちこちのベンチは浮浪人の朝の集會だ。
そのベンチに新聞を賣り歩く子供、人足を買ひ出しに來てゐる親方——ところどころにものものしい人だかりはあつても、彼等の多くは孤獨の底の風狂人のやうに、うつろな顏で默りこくつてゐるのだ。
そして、公園裏へ出ようとすると、明公が私の袖を引いて、
『ほら。』
そこのベンチに公園の撒水夫が二人休んでゐる。その一人から煙草の吸殼をもらつた男——いや女だ。腰をよたよた振りながら走る姿が——どろどろの木綿縞のどてらを一枚重ね、兵兒帶にゴム足袋であるにもかかはらず、媚らしく女だ。
『分つた？ あれもざんぎりお何の一人。大抵あんなものよ。淺草の底ね。だけどまだ、走るだけ女の冥加さ。浮浪人は決して走りやしないから。——（ざんぎり）にこりたらお歸りなさい。私はこれから、姉を人に渡しておいて、借衣裳屋で着換へをして、ちよいと一仕事だ。』
ざんぎりお何は、向うのベンチの男に、黄色くたるんだ顏を寄せて、拾つた吸殼をやつてゐた。その男の片足は破れ靴、片足は藁草履——。

昆蟲館

八

花屋敷の虎は、牡が牝の腹の上に、片足をでんとのせて眠つてゐる。これはいかにも家庭的だ。だがしかし、花屋敷と昆蟲館――この二つの小屋が、淺草の家族的な遊び場として、諸君にまで知れ渡つてゐるのは、もちろん虎夫婦の寢相のためではない。――メリイ・ゴオ・ラウンドの木馬があるからだ。

『あら、また花火、お孃ちやん。』と、昆蟲館の娘が、木馬にまたがつた「お孃ちやん」を抱きあげるなり、さつと表に飛び出して、

『ほら、ほら、あんなに鳩がびつくりして飛んでるでしよ。』

いひながら娘は、「洋服紳士」の腰に、どんとぶつかつたのだ。

「馬鹿野郎。」

「あら、ごめんなさいまし。」と、ちらちら上眼づかひの頰を赧らめながら、さも白粉がついたかのやうに、男の外套をハンカチで一つ輕くはたくと、もう横を向いて、

『ほう！ お藥師さんの屋根へ一ぱい飛びおりて來たわ。鳩の頭の毛の方が、姉ちやんよりモダアンだわ。』

『ちえつ。なめてやがる。』

男の眼を刺すやうに振り向くと、彼女はついと小屋の内に身を翻した。樂隊がはじまつた。木馬が回りだした。

男は立ち去らずに看板を讀んだ。

――天下ニタツタ獨リシカナイ腹ニ口ノアル男。顏ノ口デハシヤベルダケ、腹カラ食ベテカセイデキル。――

男は中をのぞいた。メリイ・ゴオ・ラウンドの心棒は八面の鏡――その蓮華のやうな鏡の臺が樂隊の席だ。そのぐるりを、「坊ちやん孃ちやん」の木馬と木の自動車が回つてゐる。樂士達の上には、色紙の紅葉が枝を擴げてゐる。白塗りの天井で芭蕉の葉の青紙がふさふさ搖れてゐる。

子守、おかみさん、奧さん、職人、父親――ベンチに坐つたり、壁にもたれたり、皆好人物になり切つた間抜け顏で、回る木馬を眺めてゐる。――ばかりではない。切符賣場の裏には土方、紳士、兵士、店員、それに大學生までが、十人ばかり立つてゐるのだ。

そこでこの男も、「なかなか張つてるわい。」

と、その中へ割り込んだ。

「張られてゐる娘」――黑地に赤の井桁がすりの銘仙、その上に濃い紺の事務服、革帶に大きい革カバンをさげ、向うから回つて來たが、白馬の「孃ちやん」に、

『しめ、しめ、あいつつかまつて來たよ。』

そして、額の短い毛をかきあげると、上眼遣ひに男をにらみながら、口笛を吹くやうに脣を圓めて、フェルト草履の爪先で、「海軍マアチ」の拍子を取り出した。男は瞬きして、

『なめてやがるな。』

彼女が正面へ回つてくると、刈りあげた首筋が鏡に寫る。

この切符賣りの娘は、もちろん諸君御存じの弓子だ。露路裏のピアノ娘だ。

そして、「坊ちやん孃ちやん」のメリイ・ゴオ・ラウンドは、彼女の美しさの素晴らしい飾り臺だ。なぜだつて、衣裳臺の上のマネキン・ガアルのやうに、木馬が回るにつれて、彼女の姿があらゆる角度で、男に眺められるのだ。

二階では、當年六歳の、天才少女姉妹の萬歳がすんで、醫學上の參考にもなれかしと、皆さんの目の前で、腹の口から食べるところを御覽に入れる

のでございますが――。』と、口上いひが舞臺に立つてゐる。

「腹に口のある男」は、北海道の旭川生れ、雪の冬を凌ぐ酒、やがては生のアルコオルを飲んだために、食道狹窄症となり、北海道醫科大學で腹に口をこさへてもらつたといふ。

頭の周りを剃りあげたお河童、ロイド眼鏡、柔道選手のやうなネルの白衣――その白衣をぐつと開いて腹を見せた。

下では、男が腰のあたりに手を隱し、親指でぐいぐい弓子を招いてゐる。鳩を見た「孃ちやん」が木馬から飛び下りて來て、男の前に立つた。

あの露路裏の少女だ。

彼女の持つた赤い紙旗を、男が讀むと、

――コンパン、オトナリの三ガイデ――

お隣りは水族館だ。二階はカジノ・フオウリイ舞踏團のレヴイウだ。

九

「珍なる怪人、腹に口のある男」は白衣の襟をぐつと開いて――だが諸君、このやうにはかなげな見世物小屋が、またとあらうか。舞臺のかぶりつきに、見物のベンチがたつた三列、そのうしろはがらんと板の間だ。

そして、「冬降り」の西日が一ぱい射し込むガラス窓から、木々の梢が見える。遠い田舍の小屋の風景だ。

しかし一層わびしいのは、蟬、甲蟲、蝶、蜂なぞ、ほこりだらけの標本のガラス箱が、「昆蟲館」といふ古い名の申しわけらしく、窓際に並んで、明治か大正の淺草を匂はせてゐることだ。

『ええ、お醫者の作りました腹の口には、殘念ながら齒がございません。それでつまり、鳥のやうな嘴でございますな。』

口上いひの言葉通りに、白衣の男はその嘴に卷きつけた布の紐を解いた。煙草のパイプの形のものを、腹に突きさしてゐるのだ。

そのパイプの口にガラスの漏斗を立てて、牛乳とかみくだいたパンとを流し込んだ。

『このやうな哀れな姿となりましても、やはり酒の味は忘れられぬものと見え、時々は一合ぐらゐひつかけるのでございます。顏の口で味つて腹の口で飲む――飲めば脫線、景氣よくナカへくり込むこともあるのでございます。それ、この通りはにかんでをりますが、とにかくそのやうな愉快も出來る程、ぴんぴん腹の口で暮してをりますのは、まことに驚くべき醫學の進步ではございませんか。』

――拍手し、ともしびうすれて、

朦朧の[illegible]、ゆるむときびしや――

と、下では樂隊の[illegible]で、「坊つちやん孃ちやん」の木馬が止まつた。

男は腹に突きつけられた赤旗の字を讀むと、驚いて弓子を見た。

彼女はうしろを向けて化粧を直してゐる。しかし鏡の中からぢつと彼を見てゐる。

子供が乘り替つて、樂隊がはじまつた。弓子は木馬から木馬へ切符を賣り步きながら、白いエプロンの女給に、

『私今日限り木馬ともお別れよ。』

『おどかしてるわ。』

『目指す敵にめぐり會ひ――といふやうなわけならいいけれど。』

木馬がシイ・ソウ風に搖れて、メリイ・ゴオ・ラウンドが回りだした。

旗の「孃ちやん」は姿を消してしまつた。

しかし旗の約束通りに――その夜男は水族館の三階で二時間も待つてゐた。

さつきから傍におさげの娘がうつ向いて、くすくす笑つてゐるばかりだ。それがまた笑ひな

がら、彼の方へ體を崩して片手を突くなり、

『あんたも、わりとぼんやりね。』

『なに。』と、思はず鋭い聲で、

『へええ。──なんだ、おさげになんぞして來やがつて。からかふにも人を見てからにしろよ。』

『だつて、斷髮なんぞ目に立つてしやうがないわ。でも、あんたその方がいいの？』

『お下げはかつらかい。』

『いつでも脱いであげるわよ。』大きな聲しなくつたつて。土間にデカ（刑事）がゐるし。』

『まあいいさ。御時世の變つた淺草の話でも聞きに、向島あたりへ行かうか。』

『でも。』

『いいところがある？』

『だめよ。私この邊ぢや追はれてゐるの。陸は八方ふさがりなの。』

『陸だつて、大きく出やがる。』

『船ぢやいけない？』

『へえ、さういふ趣向があるのかね。』

『でも少しこはいわ。』

『晝間からさんざん人をなめといて、今更こはいもないだらう。』

『あんたぢやないわ。半分男のつもりで暮して

る私に、男なんかなんともないわ。だけどね、私の姉さんは一人の男を思ひつめて氣がちがつたのよ。その妹としてみると──。』

十

水族館

「淺草は、東京の心臟──。」

「淺草は、人間の市場──。」

添田唖蟬坊さんの言葉である。

「淺草は萬人の淺草である。淺草には、あらゆるものが生のままはふりだされてゐる。人間のいろんな慾望が、裸のままで踊つてゐる。あらゆる階級、人種をごつた混ぜにした大きな流れ。明けても暮れても果しのない、底の知れない流れである。淺草は生きてゐる。──大衆は刻々に歩む。その大衆の淺草は常に一切のものの古い型を溶かしては、新しい型に變へる鑄物場だ。」

そして水族館も、この「鑄物場」で、最も新しい型に今打ち變へられつつあるのだ。

まるで淺草懷古の記念物のやうに、公園第四區に取り殘された昆蟲館と水族館。その水族館の魚が泳ぐ前を通り、龍宮城の模型の横から、カジノ・フォウリイの踊子達が、樂屋入りをするやうになつたのだ。ハリイ歸りの藤田嗣治畫伯が、ハリジャンヌのニキ子夫人を連れて、そのレヴィウを見物にくるのだ。

「和洋ジャズ合奏レヴィウ」といふ亂調子な見世物が、一九二九年型の淺草だとすると、東京にただ一つ舶來・モダアンのレヴィウ專門に旗擧げしたカジノ・フォウリイは、地下鐵食堂の尖塔と共に、一九三〇年型の淺草かもしれない。

エロチシズムと、ナンセンスと、スピイドと、時事漫畫風なユウモアと、ジャズ・ソングと、女の足と──。

しかし三階の客席は、弓子と男との話が人に聞える程の入りではない。

『つまり、なんだな、思ひつめて氣がちがふ程大時代の姉だから、そいつにこりこりして、妹は新時代のズベ（不良少女）になつたつてのかい。』

『私がさう見えて？』

『七面倒臭く氣取るなよ。昔の公園の女はもつと氣が短かつたぜ。』

『でせう。私もさうなりたいの。思ふままに男の人が好きになれて、そして好きになればな

つたやうに出來たら、どんなに世間が樂しいかと思ふわ。あんただつて私をよく見れげわかることだわ。私は女ぢやないの。姉さんを見たんで子供ん時から、決して女にはなるまいと思つたの。そしたらほんたうに、男つていくぢなしね、たれも私を女にはしてくれないの。』

――テナモンヤないかないか、道頓堀よ。
虹の灯のまち、夜あかしすずめ‥‥

と――オオケストラ・ボックスのジャズ・バンドよりも騒がしく、地下室のカジノ・フォウリイ直營食堂から、擴聲蓄音機の「浪花小唄」が響いて來る。

舞臺は「ステツキ・ボオイ」の第四景「新宿驛プラット・フォウム」の場だ。

『おい、ここの女優はたいてい靴下をはいてないんだね。靴下も買へんのか。つまり、靴下をはいてゐるのだけが、惡いことをしてるつてわけか。』

『すぐさう取る――あんた不良少年上りなの？ ここの踊子は十四五の子供よ。一等上が二十だわ。踊りを見るがいいや。墮落した女なら、だれが銘仙かめりんすのよれよれで、汚いおしるこ屋に入るつて。そいからね、靴下をはかないのは、ストツキングレスつて、わざと素足を見せてるのよ。白粉も手足は塗らないの。暑い頃は、蚊の刺したあとが、ぽつぽつ赤く見えてたわ。』

そして弓子は、ふと寒さうに肩をつぼめると、膝から白綸子の襟巻を拾つて、白い頬を埋めながら聲を落した。

『私は男とゐると、自分をいつも計算してゐるのよ。女になりたい心と、女になるのがこはい心とを、はかりの兩方にかけて――そいで氣持ばかりが荒んで、さびしい一方なの。』

『ふん。當節は口説まで、いやに白々しくつて、回りくどいんだな。さつき、舞臺ではいつたぜ。――(私は食物と享樂のある世界へ出て行くんだわ。)とか、(私を唯物的に愛してね。)だとか――。』

十一

一、ジャズ・ダンス「ティティナ」。二、アクロバチック・タンゴ。三、ナンセンス　スケッチ「その子、その子」。四、ダンス「ラ・パロマ」。五、コミック・ソング――と、十一景のヴァラエティが、さうだ、踊子達は舞臺の袖で、乳房を出して衣裳替へする程、あわただしい暗轉だ。

そして、六、ジャズ・ダンス「銀座」だ。

‥‥‥‥‥‥
帯の幅ほどある道を
セエラ・ズボンに引眉毛
イイトン・クロップうれしいね
スネエク・ウッドを振りながら

シルク・ハットを斜めにかぶり、黒ビロウドのチョッキに、赤リボンのネクタイ、白く開いた衿、細身のステッキを小脇に抱へて――もちろん女優の男裝で、足は裸だ。そして、腰までのスカアトに靴下なしの娘達と腕を組み、「當世銀座節」を合唱しながら、銀座散歩の身振りよろしく踊り歩くのだ。

と、闇でたちまち、「深川とかつぽれ」――水淺葱色のハッピ・コオト一枚のいなせな若衆二人の踊につれて、お下げの髪が搖れるのだ。

『ふうん。こいつは舊時代の僕にも分らあ。』と男はじめて舞臺に氣を取られて、

『あの小さい方は、なかなか踊れるぢやないか。』

『踊れるはずだわ。お祖母さんとかが、踊のお師匠さんですつて。』

『龍ちやん。』とか、

『花島あ。』とか、見物のかけ聲が盛んだ。

『えらい人氣だ。龍ちやんてどれだい。』
『梅園龍子つて小さい方よ。だけど、たつた十五と聞いたら、がつかりするでせう。』と、弓子はふと白綸子に頬を落すと、深くうなだれてしまつた。
『かつぽれなんて踊――いけないわ。私みたいに下町で育つた女は、いろいろ小さい時を思ひ出させられるわ。それに下げ髪で踊るの、ずるいわ。男が見るとそそられるし、女が見ると變に悲しくなるし――。』
『それでお前、お下げのかつらをかぶつて來たんかい。』
『お下げが一番、かつらつてことが分らないからよ。そしてね、あんたみたいなんぢやなく、もつとおとなしい人に會ふと、お下げの娘のやうになれるのよ。それはあんたのお好みしだいだけれど、だけど、あんたここのレヴィウを見て、日本館や金龍館を思ひ出さない？　河合澄子が舞臺から名刺を撒いたり、中學生が日本館から珠數つなぎでお上へ曳かれたり――オペラ華やかな頃よ。』
『なに？　人をペラゴロ上りとでも、見くびつてんのか。』と、男は明らかに驚いたやうだ。
『そんなこと、私の知るはずはないわ。やつと小學校へ上つたばかりだつたわ。十年もつと前ね。姉さんの氣がちがつてから五六年――姉さんの戀人は淺草の人だつたの。私その人に會ひたくて、公園にゐるやうなものだわ。』
『ふん。會つたら、姉の敵を打たうつてつもりか。』
『あべこべだわ。可哀想な姉さん。私はきつとその人が好きになつてしまふ。姉さんが氣がちがふ程思ひつめた人を、私も思ひつめて氣がちがひたいのよ。――そりやあね、姉さんのために、ずゐぶん口惜しいと思つたわ。一生女になるものかと思つたわ。だけどよく考へてみると、その前に、子供の私は姉さんの戀を、どんなにうらやんでたかしれやしない。自分を姉さんに見立てて、戀のお稽古をしてたの。だから、いくらひどい目にあはされるにしたつて、私はその人に會ひたいのよ。』
『船はどうなつたんだ、船は？　かかりあひのない姉さんの變な話なんか――。』
『かかりあひがなくもないわ。船でもつと變な話をしてよ。さうね、四五日先だけれど、來週の火曜にね。』と弓子は紙きれを男に渡して、
『この裏の地圖のところへ船を着けとくわ。三時にね。』
そして間もなく男に氣づかれないやうに、彼女は水族館から姿を消してしまつた。

十二

『第九十八凶。ふん。

欲　理　新　絲　亂
閑　愁　足　是　非
只　因　羅　網　裡
相　見　幾　人　悲

觀音のおみくじとはしやれてら。』
その裏に鉛筆で地圖だ。舞臺では「フィナアレ」だ。
――（なんとかかんとか）モダアン・ボオイ
――（なんとかかんとか　モダアン・ガアル
と、歌ひ返しのある「モダン節」を合唱しながら、樂屋總出で踊つてゐる。はねだ。
しかし、弓子はどこにもゐない。見物の出てしまふまで、男は坐つてゐた。
人が少くなると、ここの壁、椅子、床にしみついた匂ひ――乞食の匂ひが漂つて來る。諸君、これは形容ではない。レヴィウ舞踏團旗擧げの頃も、水族館は乞食や浮浪人の客があつたのだ。近代風に化粧した裸體の踊を、乞食や浮浪人が眺めてゐる――この怪奇な風俗畫。

も淺草だ。そこへ學生と、銀座の人々」とが、ぽつりぽつりこぼれて來た。

だが諸君は今でも、埃と垢と汗だらけの顏にマスク、そしてぼろをまとひ、毎夜きまつて、十間の左の樹の蔭に腕組みしながら、しみじみと、ジャズ・ダンスに見とれてゐる――えたいの知れない男を見出すだらう。

表には、踊子の歸りを見ようとする三人、五人が寒々と立つてゐる。みくじを右手につかんだまま、男は舌打して振り返つた。赤旗が立ち並んだ入口に、人魚の浮彫が立ち、人魚の上を石膏の魚が泳いでゐる。

「おれの顏ももう淺草できかないと見える。小娘にべろりとなめられた。地圖までいただいて、念が入り過ぎてら。」

全く――その河岸へ行くに地圖はいらない。弓子の地圖を言葉に直しても、次のやうに簡單だ。――淺草寺の東の出入口、二天門から、二天門通りを、眞直大河へ突きあたれば、それでいいのだ。

電車道を橫切る。河べりは山之宿町、河岸は公園工事中、左に言問橋、直ぐ右に東武鐵道の鐵橋架橋中、岸に二三十艘小船がある、そのうちの紅丸、「紅丸」とは船尾に赤い字――などくどくど書かなくとも、二天門から河岸が見えるのだ。地圖の裏のみくじには、

「待ち人來らず。」

とある。

だから男は、火曜日の約束の三時にわざとおくれて河岸へ來ると――はつと驚いて木蔭へ身をひいた。いかにも船は二三十艘、だが、その一艘の棹に、女の黑絹の靴下が一足長々と干してあるのだ。外の船の洗濯物から際立つて、これは何と大膽な目じるしだ。

男は幾度か血の雨をくぐつた者の感じ早さで、これを危險信號と讀んだ。

「よし。水の上へおびき出さうつてんなら、まあそれもよし。」と、磨きすました顏で笑ひながら、公園工事の埋立地へ、切り石を渡つて行つた。釣鐘帽子の若い男が近づいて、

「旦那、觀音さまのおみくじでいらつしやいやしたか。」

「お前、なんだ。」

「へえ。紅丸でお待ちしとりやす。」

「お前船頭ぢやないな。」と、男は五圓札を出した。金の受け取りやうで、相手の魂膽が知れる。

「少しだが、世話になるしるしだ。」

「ありがたうございますが、船賃は別にいただいとります。――さあ、どうぞ。」と、若者はコンクリイトの岸壁から紅丸へ、細長い板を渡した。

男が渡つた。

そして、男が見たものは――狹苦しい船室の夜具に胸を投げて、弓子はすやすや眠つてゐるのだ。

短い毛が亂れて、彼女の顏を幼く見せてゐる。瞼と唇が浮き上つて、一つ一つの生きもののやうだ。眞赤なスカアトは膝より上だ。靴下もはかない。その素足をぴつたり組み合せて、桃色の貝細工のやうな足の裏を上向けに投げ出してゐる。七輪の炭火が、彼女の寢姿を足の裏の方から、ほの明るく照してゐる。

銀猫梅公

十三

紅丸が山之宿の河岸を離れた頃であらうか。

「例年の社會鍋でございます。貧しい人達に正月のお餅をお惠み下さい。」と、救世軍の女士官の叫びに振り向いた私は、はてとそこに立ち止まつた。雷門巡査派出所の横た、仲見世の入口だ。交番の軒に銀杏、うしろに自働

電話とポストと社會鍋、そして横つ腹に「善の鏡」――鏡と並んで告知板がある。

その黒板にたつた一つの告知を、私は讀んだのだ。

……――花川戸に集まれ。紅座。

私の笑ひ顔が「善の鏡」に寫つてゐる。黒板の縁には、「象潟警察署」、「皆さまの告知板」、「在郷軍人淺草分會」――なぞとペンキで書いてある。

もう私のぐるりを、暦賣りの子供がうるさくかこんでゐる。

「交番の横つ腹で、仲見世の賑ひで――かう大つぴらだと、反つて誰一人怪しまない。相變らず心理の遊戯をやつてるな。」とつぶやきながら、私も花川戸へ行くことにした。

大江戸の助六の名にゆかりある花川戸――諸君、私は紅團員ではないのだが、「花川戸」とは、「地下鐵食堂」といふ意味の、彼等の隱語だ。これは昭和四年の秋建築中に、「花川戸ビルヂング」と名づけられてゐたからだ。

古い十二階の塔は地震で、ぽきりと折れた。地下鐵食堂の階數はその半分の六階だが、高さ四十メエトル、淺草で唯一つエレヴェエタアのある見晴し塔だ。

その見晴し塔からはもちろん――弓子等の紅丸も目の下に見えよう。だが、信號でもない限り、船頭の顏色までは分るまい。といふのは――言問橋の方へ上つて行く紅丸の艫で、船頭の顏はひどく青白んでゐたのだ。男が弓子をおとなしくしたのか。その嫉妬だ。

『お前船頭ぢやないな。』と、男が乘る前にいつた通りに、彼は船頭ではない。川越少年刑務所にも二三度入獄した、典型的な不良少年上りだ。

この梅吉は紅團へ落ち込んだのではなく、紅團に拾はれて長年の惡夢が覺めたのだ。

淺草に巣食ふ罪の少年の見本として、諸君に梅吉の懺悔を紹介しよう。まづ戀愛懺悔だ。

その一――梅吉六歳、四十を過ぎた女のおもちやにされた。

その二――十三歳。學校前の文房具屋の表で遊んでゐる時、一つ上の少女と仲よしになつた。會社員の娘だつた。その少女の家へ誘はれた。誰もゐない留守だつた。二人とも顫へなかつた。それから三四度行つた。うはさが立つて、少女の一家は遠くへ越してしまつた。

その三――十四歳。菓子屋の店先の涼み臺で、小間物屋の娘と知り合ひになつた。二人で上野公園や縁日や小料理屋へ二十ぺん以上行つた。

その四――十五歳。淺草公園の活動寫眞館で、彼の横に娘が二人ゐた。その一人に別の小屋で會つた。そして連れられて行つたのは、嵌めガラス障子の入口が二つある家だつた。

その五――同じ年。もつと大きい家へ行つた。梅吉が寢た振りをしてゐる時、白い手が彼の蟇口から五十錢銀貨を一つ出して、床柱にかけた一輪ざしの花瓶に入れた。女がゐなくなつて、梅吉がその花瓶を調べると、五十錢銀貨で八圓五十錢あつた。それを持つて歸つた。

その六――同じ年。淺草で十七八の娘が十二三の妹をつれて、芝居を見てゐた。傍の梅吉が姉にしてゐることを見て、妹が姉をひつぱり出した。彼は後をつけた。貸本屋の娘だつた。彼は講談本を借りに通つた。姉娘を六七度誘ひ出した。母が娘の外出を止めた。

その七――同じ年。淺草の支那料理屋の女給と四ケ月遊び歩いて、その金を作るために不良の兄分の少年となつた。

その八――同じ年。入谷の二軒の家の一人の娘から、合せて百五十圓ばかりまきあげた。彼女は自ら好んでここへ來たのだ。彼女の父は

競馬師だ。時々大金の入ることを、梅吉は知つてゐたのだ。

十四

梅吉の戀愛懺悔は、十五歳からいよいよ犯罪の色が濃くなる。それをここにあばき立てて、諸君の温かい寝床の夢を破ることはつつしまう。

温かい寝床のある諸君、「かまきり小僧」といへば、浅草のグレ（宿なし少年）仲間の腕ききだつたが、彼は座蒲團を重ねることも、寝蒲團をたたむことも知らなかつたさうだ。たためといはれると、座蒲團も敷蒲團も一しよにぐるぐる圓めてしまふさうだ。そんなものを使つた覺えがないのだ。

しかしかまきり小僧は、八百屋お七のやうな馬鹿ではない。少年の刑法（作者註、現行少年法以前のこと）はちやんと心得てゐる。二十何回警察へ曳かれ、硫黄島にも流されたが、彼は検事の前できつぱりいふのだ。

「十五になるまで、悪いことあやめないよ。」

そして、彼はその約束を守つた。十五の時、島に送られてからは、まじめに働きだした。美しい米粒のやうな貝殻を一袋、浅草で世話になつた保護員のところへ、送つて來たといふことだ。

またこころみに、浅草の幼いグレをつかまへて、

「親はどうしてる。」と聞いてみ給へ。餘りに意外な答へが、諸君を驚かさないとも限らぬ。

「親はまだないよ。」

「まだないつて？」

「ああ、仲間のシン公には、こなひだ父つちやんが出來たけど、おれ小さいから、まだ出來ないんです。」

だが、よしんば、親があり、蒲團の寝床があつたとしたところで、子供の教育や監督は、今日の贅澤であることを、諸君は知らねばならぬ。

浅草の浮浪人が、食物屋の残り物をもらつて生きてゐることを、諸君は知つてゐる。けれども、細民や勞働者が浮浪人のところへ、その貰ひ集め――つまり残り物のまた残り物を、一飯二錢三錢で買ひに來ることを知つてゐるか。

このやうな世の中であつてみれば、警視廳の管下だけに、四萬や五萬の犯罪少年が出來たとて、何の不思議があらう。

彼等のうちに、小僧、店員、見習ひ職人、給仕、幼年工など、奉公人上りがいかに多いか。

例へば、浅草公園に遊ぶ子守娘達の話を、三十分程盗み聞きして見給へ。

「が、そんなら今の日本はなんであるか。今の東京市はなんであるか。今の日本の社會、今の東京市全體は一個の不良老年ではないか。これらの不良老年の中で、浅草公園だけが不良少年なのである。不良でも少年には、希望があり、活氣があり、進歩がある。」と、谷崎潤一郎さんはいふ。

また「朝日新聞」の記事によると、昭和四年の大晦日の夜、十一時五十分から、JOAKが浅草観音の境内にマイクロホンを二つすゑつけ、参詣人の足音、鈴の音、おさい錢の響、柏手の音、百八の鐘、鶏の聲など、除夜の氣分を諸君に放送するさうだ。

私も紅團員をマイクロホンの前に集めておいて、「一九三〇年萬歳」を叫ばせようかと思ふが――それはとにかく、不景氣のどん底の年の大晦日氣分も、やはり「東京の心臓」の浅草が代表するから、この放送があるのだ。

浅草には乞食ばかりの酒場があるさうだ。テエブルの上に裸の女の子をのせ、それをぐるぐる回しながら、乞食の群が酔つ拂ふのだ。

また、駒形橋の近くの家に、「清元のおさら

ひ」なるものがあつたとする。集まる者は怪しげな客引きばかりだ。十六、七の娘が顏を見せる。『よろしく賴みます。』と、三味線もなく酒で終りだ。

雨の夜には、本所あたりの木賃宿から、大きい番傘を持つて、芝居小屋の軒や寺の土塀の浮浪人を、客引きに來る。待合入りする女藝人の後を、不良少年が見え隱れにつけてゆく。

しかし、淺草の恐ろしさは、こんなことや、丑三つ時の奧山なんかにあるのではない。秋から冬ならば、吉原の酉の市とか、觀音の歲の市とか、大晦日——ごつた返す人間の渦卷の中にあるのだ。梅吉はどうしてこの渦卷に卷きこまれ、たうとう「銀猫の梅公」とまで落ちて行つたか。

十五

梅吉は決して父母の話をしない。いづれ、私生兒か、孤兒なのだらう。でなければ、ない方が反つていいやうな親だつたのだらう。

十三の時、下谷龍泉寺町の蝙蝠傘屋へ小僧に行つた。一葉女史が「たけくらべ」に書いてゐる町だ。傘屋のおかみさんは長の病で、寢たつきりだつた。その瘦せて青ざめた姿を見るのが、彼は厭だつた。おまけに七人の子供までが、彼をこき使つた。梅吉はそこを三日で飛び出した。

神田の酒屋へ奉公した。（十四歲で小間物屋の娘を、二番目の戀人にしたことは、前に書いた。）その娘のために金をごまかして、酒屋を追ひ出された。

淺草公園をぶらついてゐると、新聞賣子に話しかけられ、その仲間に入れてもらつた。三月とたたぬうちに、兄分の賣子と血まみれの喧嘩をして、たたき出された。

淺草公園の乞食に拾はれ、駒形河岸の大芥溜——彼等仲間でいふ「吾妻ホテル」に三晩泊つてから、本所、深川を振り出しに、千葉あたりまで浮浪した。

『この半年の乞食がらす程、罪がなくて、樂しかつたなあ、一生に二度とないや。』と、梅吉はいつもいふ。

それからまた淺草に舞ひ戾つた。大道で指輪を賣る印度人の「サクラ（客のふりをして、指輪を買ふ役）になつた。小さい女のやうに愛された。しかし、いよいよの時、

「べらぼうめ。日本人を可愛がるなら、體の色を塗り變へて來やがれ。』と、印度人とも別れてしまつた。

淺草驛にぼんやり坐つてゐると、親切らしい爺さんが、梅吉を連れて歸つた。爺さんは名高い猫取りだつた。間もなく警察にあげられた。そこで梅吉は、同じ猫取り仲間に引き取られた。彼はこの猫取りの見習ひとして、街をうろついた。

猫を見つけると、紐でしばつた雀を投げ出す。雀が羽ばたきする。猫が飛びつく。紐をじりじり引きしぼる。猫がおびき寄せられる。そこをつかまへる早業が、呼吸だ。

捕へた猫は、直ぐたたき殺す。公園の暗がりか、河岸の物蔭で、生皮を剝ぐ。その皮は着物の下にかくして、腰に卷きつけておく。三味線屋へ高く賣れる。

家はなく、行く先々の木賃宿に一人で泊る。この頃、梅吉は淺草の不良少年團に加はつたのだ。數へ年十五だ。

間もなく二人の猫取りは、吉原の日本堤署へ引かれた。しかし子供の梅吉は、大したおとがめがない。

また淺草に現はれたが、當分のうちは警官に見知られてるやうな氣がして、贋孤兒團の物賣り仲間に入つた。孤兒の眞似をして、女房貝を

押賣り歩くうちに、藥の押賣り學生と知り合ひになつた。その方がまうかるらしいので、苦學生の藥賣りに早變りした。懷は溫まるし、この中學生の正製正帽の方が、女を釣るのに、どれだけ便利かしれなかつた。

さうして渾名までが——「猫取り梅公」から、いつの間にか「銀猫梅公」と、位が上つたのだ。

弓子の宣傳員となつた今は、梅吉もまう贋大學生の年頃だが、實は大分正業に近づいて、理髪師の內弟子なのだ。明公の姉だといふ、例の「お洒落狂女」が化粧してゐた、あの理髪店だ。弓子がそこへ入れてやつたのだ。

それには——

「握り。障り。話し。プログラム。落ちますよ。打ち込み。ベビイ。とんだことをしたね。つまづき。送り。お忘れ。ゴウゼエ。まくり。追つかけ。ありがたう。投げタオル。——」など、彼等の昔ながらの「婦女誘惑術」のどれかを、梅吉が一人の娘に用ゐたとしよう。

安來節の玉木座だ。娘は平氣だ。

ところが大切りの「銀座小唄」——和洋ジャズ合奏で、振袖の踊子が八人、

——銀座、銀座、戀し銀座、

と歌ひだすと、娘は脣を嚙んでうつ向いた。

見れば睫が濡れてゐる。

「しめた。なんて初心だ。」と、梅吉はそつと肩を抱かうとしたが——。

十六

娘はぷいと立ち上ると、梅吉を振り返りもせずに、小屋を出てしまつた。

しかし、腕に覺えのある梅吉の計算によると、もう彼女はこつちのものだつた。彼は徽章のあいまいな角帽と袴で、大學生に化けてゐたのだ。

愛人がほしい時には——タイチ島の娘たちは、右の耳に白い花をはさんでゐるとかいふ。淺草では、さうだ、そんなに遠い南洋の島でなくとも、髮に插してゐる造花の薔薇が、娘の脆さを現はしてゐることがある。また、同じ一輪の紅薔薇が、不良少女のしるしであることもある。

もちろん淺草公園でも、いはゆる硬派の一義團時代は過ぎたけれども、もし諸君の子弟が、小生意氣に帽子の形でも崩して歩いてゐたりすると、

『おい、ちよつと。』と呼び止められて、

『お前たれの少年だ。』と、ゆすられないとも限らないのだ。——「少年」とは「子分」といふ意味だ。

ところでこの娘は、薄汚れたメリンスによごれた帶、人絹の銘仙だけが新しく、しかもそれを胸高に締め、擴げて——それから、顏の化粧の濃いのが、反つて妙に悲しく見せる。そのやうに彼女の心理にも隙がある。梅吉はそこをつかめばいいのだ。

だから、彼はポケットから女のハンカチを出すと、娘に追ひついてなれなれしく、

『これ、君が落したんぢやない？』

『まあ、ありがたう。』

『おや、君は今さつき玉木座で、僕の隣りにゐた人ですね。』

娘はハンカチを袂へ丸めこんで、さつさと歩きだした。梅吉は少し驚いたらしかつたが、

『玉木座で君、眼に淚を一ぱいためてゐたね。僕見てたよ。なんか悲しいことがあるんでせう。外へ出て淚を拭く時に、そのハンカチを落したんだね。淚で少し濕つてやしなかつたかな。』

『それであんた、その悲しいことを聞いてやらうつていふ御親切ね。』

『—う。』

『ちよいとあんたの先回りしちやつたわね。』
『おい君。』
『ハンカチを返せでせう？　だけどもらつといてもいいわね。こんなもの、まだ豫備が三四枚ポケットにあるんぢやない？　もつと乘せられがひのある、新手をお出しなさいよ。』
『はははあ、とんだお見それ申しやしたつてやつかね。そいつも面白い。とにかくハンカチは、涙を拭く役には立つさ。』
『ほんたうよ。』と、娘はハンカチを出して、眼をこする振りをしながら、
『あの（銀座小唄）ね、私あれを聞いてると變に涙が出ちやつたのよ。』
『銀座病患者か、お前もね。』
『だつて、玉木座ぢや、安來節だつて、小原節だつて、萬歳だつて、見物はみんなお座敷へ藝者を呼んだつもりで、囃し立てたり、合の手を入れたり——職工や土方の宴會だわ。それがどう？　（銀座、銀座、戀し銀座）つて、ジャズで歌ひ出すと、みんなしいんと鳴りをしづめちやつて、お殿樣の前へ出た乞食みたいに神妙にさ。一たい銀座つてなんなのよ？　あすこの客には銀座になんの用があるの？　銀座を見たこともない人だつて、きつと多いわ。銀座のお孃さんで、淺草を知らない人があるのと同じやうによ。——私むやみにくやしくなつちやつたの。』
『そいつは——お前、主義者かぶれだな。』
『あんたは（銀猫）さんでせう。』
『なるほどね。おれも燒きが回つたか、とんだお見それだつたよ。お前の頭かつらだな。着物も皆借り物か。釣りに來て釣られてやがら。』
『今ね、借り物を皆返しに行くからつき合つてくれる？　かうと分つても、私をほんたうに誘惑してくれる？』
『まづ女であることが確かならね。』
『それをあんたが確かにしてよ。』

十七

玉木座の娘もまた、弓子の假裝だつたのだ。一たい日本人には、假裝の趣味がないのだらうか。鎌倉の海濱ホテルの假裝舞踏會でも、日本人で假裝してゐるのは一人もなかつたと、私は覺えてゐる。

しかし、新しい銀座には、貸衣裳屋、すなはち變裝屋がある——と、私はいつか戯れに書いたことがある。けれども考へてみると、銀座は化粧で澤山だ。變裝を必要とするほど、陰の多い街ではない。變裝はやはり淺草のものらしい。さまで鵜の眼鷹の眼で捜し廻らなくとも、變裝の人間はここでみつかる。

手近なところで、男裝をした浮浪の女はいくらでもゐる。そんなのは笑つてすませる。だが、濃い白粉に日本髪のかつら、赤づくめに女裝した男が男をつれて、觀音裏の暗がり道をちよろちよろ消えて行く——これは奇怪な蜥蜴でも見るやうに寒氣がする。

そんな暗がりでなくてもだ。淺草の盛り場の眞中に、しかもネオン・サインの赤文字の廣告燈まで屋根の上に堂々とかかげて、立派な貸衣裳屋、變裝屋があるのだ。よその貸衣裳屋とちがふところは、この店が芝居や寄席や茶屋へも出入りするので、かつらからピストルまで、一切合切揃つてゐるのだ。

弓子のいふのに、

『私はこのお店のマネキン・ガアルみたいなもの。保證金を納めて、損料を拂つて、こんないい弘目屋つてないわ。そのかはり、[illegible]吉良の屋敷へでも打ち入りする時には、裝束一切揃へてくれるわね。だけど昭和の天野屋利兵衛には、もつぱら[illegible]

――この變裝屋へも、いづれ諸君を案內しよう。この店へ來る人々も、いづれ諸君に紹介しよう。

　しかし、それはとにかくとして、弓子の假裝に釣られた梅吉は、彼女のすすめで、やや正業らしいものについたのだが、その職業を選ぶ場合にも、假裝の魅力が大分働いてゐたやうだ。――彼は第一番にいつた。

『外科の醫者にならなつてもいいや。』

『ああ、手術がしたいのね。やつぱり銀猫さんだわ。猫の皮を剝いた味が忘れられなくて、人間を猫のやうに料理したいんでせう。』

『腹をさつと一文字に切つて、まだ血の溫かい皮をくるくるとはがすなあ、ちよいと味だぜ。――だけどまあ、人間の腹を切るやうになれる見込みがないとすりや、料理屋の板場か、理髮師かね。』

　そして梅吉は床屋へ內弟子に入つたのだつた。

　外科醫、料理人、理髮師――この三つには共通の感覺がある。まづ白く光る金屬の器具だ。とりわけ鋭い刃物だ。

　彼のやうに世の底を浮き沈みして來ながら、「グレ」や「ツブ」まで沈み切れなかつたのは、また淺草の芥箱の「虛無の別天地」に眠り切ることが出來なかつたのは、この「鋭い刃物の匂ひ」への愛着のゆゑだともいへるのだ。この感覺は彼の生活の一脈のさわやかさだつたのだ。

　それから白い手術着だ。近くの料理人や理髮師は、白い仕事着のまま淺草公園へ行く。この眞白な服は人ごみで目立つばかりでない、やはり鋭い刃物のやうに町娘をひきつけるのだ。梅吉はそれを知つてゐたのだ。

　そして理髮師となつたのだが、彼は剃刀で弓子の首を剃りながら、その鋭い刃物のやうな弓子を愛しだした。鋭い刃物の匂ひを弓子から感じた。

　だから彼女から絡まれるままに、彼女と遊人風の男とを乘せて、紅丸の艪をこぎもしてゐるのだ。

　鋭い刃はこぼれやすい。冬曇りの大河の上で、弓子を氣づかひながら、梅吉の頰は青ざめて來たのだが――。

飛行船と十二階

十八

　桃色の貝細工のやうな足の裏が七輪の炭火の明りに染まつて――つまり、男が船室へ入つて來た時、弓子は足をあぶりながら眠つてしまつた姿だつたのだ。

　黒い靴下の干物を危險信號と讀んで乘り込んで來た男は、むしろ氣拔けがした。それに弓子一人だ。

　狹い船室には、何も隱れてゐさうにない。

『やつぱりただの賣りものか。』と、笑つてしまふにはしかし、裸の足が細々と美し過ぎた。少年のやうに淸潔な足であつた。

　男は澁い茶色のもぢり外套に同じ生地の鳥打帽をかぶつてゐた。頭が板屋根につかへた。だが坐らうとはせずに、懷手のまま弓子の足を眺めてゐた。

　船室のほの暗さになれて明るくなつた。弓子の素足は寒げに、ふくらはぎを緊く合せて、小指を重ね、踵の[illegible]が二つ、ぴつたり竝んでゐた。

『なんだ、まるで子供ぢやないか。』と男が思つたほど、その足を眺めながら感じた[illegible]は可憐いのだが、眞白なスリツプがめり上つて、靴下止めが見える、そのあたりにふてぶてしい膨らみがあつた。

　にはか船頭の梅吉が、[illegible]を胴からはづし

て屋根におく音と一緒に、船が一つ大きく搖れた。男は船の腹へよろけかかつた。弓子が頭をあげた。

『あら、ごめんなさい、ほんとに眠つたのかしら。』

彼女は兩足をきゆつと折りすぼめた。そして、短いスカアトをしきりに引つぱつて——膝頭が隱れきらないことを知りながら、わざと引つぱつて見せてゐるのか。

しかも、男から顏を反向けて深くうつ向いてゐるのだ。

『ずゐぶん氣をもんで待つてたわ。日暮になると、河の船がずつと減つちまふの。ゆつくり出來ないでせう。——あ、あんた、その窓をしめて頂戴。うちの船頭はやきもち屋さんさ。』

男は船室の天窓風な出入口の板戸を引いた。ふとひと時暗い密室だ。男は弓子を一抱きにする勢ひで飛びかかつた。そこに彼女はもうゐずに、彼は夜具の上へ倒れた。

『ランプを見つけてるのよ。——でも私、船で待つてるつて約束したけれど、船で起きてるとは約束しなかつたわ。寝ちやつたら惡いかしら。まあそれくらゐ私眠いのよ。昨夜取りこみごとがあつて、寝るどころぢやなかつた。お化粧道具は紛失しちまふし、船に乘る時足を辷らして、靴下を濡らしちやふし——。』

汚い茶ぶ臺の上に石油ランプがともると、彼女は眞白な外套を着て、お嬢さんのやうに兩手をちよこんと揃へてゐるのだ。

『お酒はないわよ。』

『これからどこへゆくんだ。』

『河よ。』

『とにかくだね。おれは謎々は餘り好かんたちだからね、目的をはつきりしてもらはうぢやないか。遊ばせるなら遊ばせると。力が借りたいなら借りたいと。』

『はつきりしてるぢやないの。私があんたを好きになれるかなれないか、試してみたいのだわ。』

『からかひなさんな。』

『なぜさ。あんたはもう私が好きになつてゐる。だから、私があんたを好きになれば、それでいいんぢやない？ あんたが好きになるやうにしてよ。』

『一たいお前はだね、おれに敵意を持つてるのなら、さうと男らしくいつたらどうだね。』

『男ならいふわ。大いに持つてるさ。だけど女だから、やつぱりあんたがこはいのよ。分る？』と、弓子は大きい眼を一ぱいに開いて、男の顏をぢいつと見つめてゐたが、發動機船の近づく音が聞えて來ると、ふいと瞼を落して、肩が微かにふるへだした。

『私はね、ずうつと前から、あんたを知つてたのよ。』

十九

弓子は瞼を落した——とだけでは感じが出ない。彼女の瞬きは音が聞えさうに素早いが、それでゐて睫の動くのがはつきりと見える。眼の開きが大きいからだ。睫が濃いからだ。白膜があをみを帶びてゐるからだ。だから彼女の瞼のあげさげは、感情の扇のやうに相手を扇ぐ。

『私はね、ずつと前からあんたを知つてたのよ。』と、彼女は同じことをくり返した。

男は立ち上つて行つて、いきなり弓子を抱きあげた。彼女は男の膝の上から、素足を七輪の方へ伸した。そして子供のやうに白い外套の裾を直しながら、

『さうよ、こんな風だつたわ。あんたの女の抱き方つて、いつもおんなじね。あんたに思ひ出してもらひたいことがあるのよ。新しく出來た

飛行船か、東京の空を二十四時間ぶつ續けに飛んだ日の晩だつたわ。赤と青と、豆ランプが二つ、飛行船にともつてゐた――地面からは豆ランプくらゐ小さい燈に見えたわね。雨模様の眞暗な空だつたわ。飛行船が大空を渡ると、青い燈が星の落ちるやうにすつと消えちやつて――あつと驚いてゐるうちに、赤い燈も雨雲に隱れちやつたわ。東京の人なら、その燈を覺えてるはずよ。――その晩、コンクリイトの大きい建物の屋上の、そのまた見晴し塔の上で、あんたこんな風に女を抱いてやらなかつた?』
『お前のお芝居上手にもあきれたよ。今度は、おとぎばなしのお姫さまのひとりごとか。』
『おとぎばなしの?――ほんたうね。私はその時、尋常五年でしたもの。塔の下に隱れて、がたがた震へて、あんた達を見てゐた私――それが今からやつて、あんたはその時の女と同じやうに私を抱いてゐる。私にはおとぎばなしのお姫さまみたいな出世ぢやないこと? その點本望だわ。』
『おれがその女をどう扱つたか、お前羨ましがつて見てたさうだから、いつそそいつを思ひ出してもらはうぢやないか。』
『ええ、そしてその通りを私にしてくれるつていふの?――それはね、左の手をおとがひにかけて上向かせて――。』と、弓子はくるつと振り返ると、冷たさ一ぱいの眼で餘計に近くから男を見あげながら、
『まあよしときませう。その女のやうに、私も氣がちがふとつまらないわ。――だけど、コンクリイトの建物を思ひ出してくれて?』
彼等の頭の上で、梅吉の足音が聞える。
荷足船はたいてい、船頭の住居が船首にあるのだが、紅丸は艫にあるのだ。
だから梅吉は、その船室の板屋根を、二足三足行きつ戻りつ、なれない艫を漕いでゐるのだ。――弓子と男は煤けた石油ランプの火影にゐるのだ。
『象潟警察の向ひだわ。分る? 富士尋常小學校だわ。』
『ああ。』と、男は思はず釣り出されたらしい。
『それごらんなさい。おとぎばなしでもなくなつたわね。だけど、あの學校からして、少しお話じみてるわ。鐵筋コンクリイトの三階に新築して、九月一日の朝ただの一度兒童を入れただけで、あの大地震の火事に遭つたのね。でも、淺草の裏で燒け落ちないのは、あの建物しかないから、私達罹災者をあすこに住はせてくれたのだわ――ね、あのさ、おとぎばなしつていへば、學校の屋上から十二階の塔の殘骸を見た時には、あんただつて子供みたいに喜んでたぢやないの。覺えてる? 工兵隊のラッパが、朗らかに聞えて來て――。』
『ふうん、それぢやなにかい、お前がお千代の妹だつていふのかい。』
『いふでかもないわ。いつまで白つぱくれてんのよ。』

二十

古い淺草の目じるし――十二階の塔は、大正十二年の地震で首が折れた。
私はその頃まだ下谷に下宿住ひの學生だつた。昔から淺草好きの私は、十一時五十八分から二時間と經たぬうちに、友だちと二人で、淺草の樣子を見に行つた。
上野の山の人々のはなしでは、
『驚くぢやないか。江ノ島が浮いたり沈んだりしてゐるつて話だ。』
『ほら、あんなに十二階がぽつきり折れちやつてるだらう。見物が大勢登つてたんだから、たまらないや。皆振り飛ばされたさ。今見て來たんだが、瓢箪池にもその死體が、うぼうぼ浮い

てるんだぜ。』

道ばたに卵の箱が澤山置き棄ててあつた。私たちはその生卵を、盜むでもなし、もらふでもなし、むろん買ふでもなし、六七個も飮んだものだ。

淺草寺境内には避難者が溢れてゐたが、吉原の遊女や、淺草の藝者が目立つて、亂れた花畑の色だつた。

今にして思へばだ、尋常五年生だつた弓子も、その中に混つてゐたはずなのだ。

『ほんたうにね。その私がこんなになつちやつて、それをあんたが小說に書いて――へん、不思議な因緣で。』と、彼女は瞼をつぼめて、「あり日」をなつかしむのだ。

『でも、十二階のあつた時分の私つてものは、どこの世界へ、どう消えちやつたのよ？　さう思ふと――いくらお書きになつてもいいわ。そのために公園にゐれなくなつたつて、私はいつかどこかで靜かに、それを讀んで聞かせてやりませう。』

その十二階の塔は――さうだ、私と友だちとが行つた時、ちやうどそのまはりの建物が、燃えてゐる最中だつた。六區の興行物街には、まだ火が回つてゐなかつた。

私たちはいかにものんきとんぼらしく、瓢簞池の石に腰をかけ、足の先をちやぶちやぶ水につけて、ビスケットをかじりながら五六間近くの大火を眺めてゐたものだ。

地震の騷ぎが少し靜まつてから、大きい建築の死骸を、工兵隊が爆破して回つた。十二階もその一つだ。――さて弓子は、船の底でその話をしてゐるのだつた。

『朗らかなラッパが、小學校まで聞えて來たわね。見渡す限り燒土で、トタン屋根のバラックがちらほら建つてゐたけれど、學校の屋上から、公園がまる見えだつたわ。屋上の塔は見物人が一ぱい、一時間も待つてたでせう。と、火藥の爆音で、煉瓦の瀧の崩れるのがちらりと見えて、さうだつたわ、一側だけが細い劍みたいに殘つたと思ふと、第二の爆音で劍も倒れちやつた。その時ね、學校の屋上の人が一せいに(萬歲、萬歲)つて。それからいち時に、どつと笑つたぢやないの？　だつて、劍のやうなのが倒れるが早いか、煉瓦の山へ人が眞黑に驅け上つたでせう。それにはびつくりしたわね。煉瓦山占領。遠くから見てゐて、私達はみんな泣きさうにうれしかつたわ。だけど人間てどうして、塔が倒れると萬歲を叫んだり、焰硝の煙が出てる煉瓦の山へ驅け上つたりするものなの？』

『おとぎばなしでな、人をじらすなあ、子供のすることつた。』

『でもないわ。あんたが人をすばりと切れば――そこが好きになるのと、おんなじつてことなの。』

『なんだと？』

『さうよ、その時分あんたは夜中に、御飯のしやもじで姉さんの頭をつついて、よく起してたぢやないの。私ね、眼が覺める度によ、冷たいコンクリイトの上に寢てるんだつて氣がつくと、どんなにされてもいいから、疊のある家へ買はれたかつた。三方が燒けたトタン一枚のかこひで、屋根が藁筵で――。』

大正大地震

二十一

紅丸が言問橋へ近づいたのであらう。車輪や警笛が、頭の上に聞える。[illegible]やうだ。

弓子は男の膝で艫の動きのままに搖れてゐた。

「私はほんたうに女の子だつたわ。今よりか、

ずつとずつと女だつたわ。あんたなんか覺えてやしないわね。お洗濯にいい秋日和だつた。やつぱりコンクリイトの中庭に——さうよ、あすこはまはりにぐるつと教室が立つてゐて、眞中に桝の底みたいな庭があつたでせう。教室の窓から窓へ細い麻繩を何本も渡して、その中庭にタオルが一ぱい干してあつた。配給品だから、みんな新しくて、おんなじ品だつたわ。タオルには赤い筋が二本づつ通つてゐた。それだけでも涙が出ちやつたのよ。鮮かな赤い線が、庭一ぱいにひらひら動いてゐる——その色よ、女の子らしく胸にしみこんで來たの。だつてあんた、どこもかしこも、燒け崩れた壁土や瓦と、燒け切れた電線と、燒け錆びたトタンと、灰まじりの砂土と——人間が鐵棒で叩き殺されるのを見たつて、道の眞中で嬰兒が産れたつて、馬の死骸と人間の死骸が一しよに大河を流れたつて、三日も食べずにゐたつて、あたりまへのやうな氣がしてゐた時のことですもの。戀だつて、ふだんの戀とはちがふわ。」

だがしかし、昭和五年の春は、東京の華々しい復興祭だ。新しい東京はあの地震が振り出しだ。もちろん淺草も、あれから新しく生れたのだ。

けれども、例へば「淺草寺緣起」の序文にも、淺草寺の權僧正が書いてゐる。

「金龍山淺草寺觀世音は推古帝の三十六年今の隅田川より御出現あり、爾來當山は一千三百餘年の久しきにわたり、皇國希有の靈刹國民信仰の中心として、無上利益の日に日に新たなるものあり、今や一日平均五六萬を下らざる參拜者を有してゐる。されば去る大正十二年の大震火災に際し、業火帝都の大半を灰燼に歸せし時のごとき、十數萬の避難者と共に堂塔伽藍悉く猛火に裹まれ、將に焦熱の苦獄を出現せんとしたが、本尊附陲の妙智力は能く、狂燬の火焰を遮りとどめ、人と寺と二つながらこれを救助された。その靈驗の顯著なる、何人か襟を正して深く尊信歸依の心を起さざる者があらう。爾來内外の信徒競うてその靈驗の跡を尋ね、進んで當山の緣由を知らんとする者頓に多きを加ふるに至つたのは正に當然であらう。」

だから、觀音堂の名高い賽錢箱——縱一丈六尺三寸五分、横一丈四寸六分、高さ二尺三寸、横木十九本、箱の下に穴藏が作つてある賽錢箱には、お寺の報告に從ふと、例へば昭和四年十月一月に一萬六千二百圓投げ込まれたのだ。香華、蠟燭、新香、御くじ枯たその上り高が五六千圓だ。そして昭和三年の夏から工事中の本堂の修繕は、三四年がかりで、見積り經費六十何萬圓——やはり善男善女の喜捨だ。

「地震の時に、十萬人以上助かつたのなら、私もその一人よ、それを頭割りにしたつて——。」と、弓子は私にいつたことがある。

「一人前の命のお助け賃が六圓たわ——でもそんなとんでもない計算どころぢやなかつた。宮城の方で非常警砲が三發鳴る。十二階や花屋敷が燒けて、吉原まで一面火の海、その火が東へ倒れて、夜の二時頃には、淺草寺の小さいお堂もどんどん燃えるし、南も北から川づたひに燒けて來る。私、僧正さまを拜んぢやつたわ。傳法院の庭へ逃げてたの。老僧正は芝生の籐椅子に坐つてらしたけれど、觀音堂が煙に包まれると、すつくと立ち上つて、一心不亂にお經をお讀みになつたのよ。さうすると急に風がないで、觀音堂の煙が晴れたのだつたわ。」

その日、九月一日、弓子の話によると、佛インドの旅から歸つて後、體のよくない老僧正は、朝早く厠へ行く途中で卒倒したのださうだ。

二十二

朝——といつても、午前一時の傳法院だ。老僧正は廁へ行く廊下で、軽い腦貧血を起して倒れた。五時過ぎに昏睡から覺めた。夜明けまで弟子達は、このことを知らなかつた。

その池に大搖れだ。僧正は弟子に負はれて、池のほとりの芝生へ逃げた。

やがて老僧正の病室の次の間まで、本堂書院の縁の下まで、足の踏み場もないほど、罹災者で埋まつた。

一山三十四の支院が燒けても、淺草寺の建物は、一萬五千人を入れた。

六十人餘りの坊さん達は、白衣も、道服も、衣も、皆燒いた。輪袈裟が六七本しか殘らなかつた。よごれた寝衣やゆかたで、避難者の世話をした。

淺草寺病院、淺草寺婦人會館、淺草寺保育園、淺草子供圖書館——淺草寺の六つの社會事業のうち、この四つの建物が淺草寺の境内にあるが、それは地震の時の人助けの氣持が、形を變へて續いたものだ。紅丸の時公が通つてゐる、觀音堂裏の淺草尋常小學校は地震の名殘りだ。

九月四日の朝から、境内の罹災者達に、軍隊が食物の配給をはじめた。

そして、富士尋常小學校が、燒け落ちた壁や、窓ガラスや、黒板や、机なぞをあらまし取り片づけて、野宿や掘立小屋の人々を迎へたのは、九月の八日だつた。一階から三階の教室に、千人近くつめこんだ。兒童の定員が二千名の學校だ。

「私だつて、タオルの赤い色が目にしみたけれど——姉さんは鈴を二つ枕の抽斗に入れて寝るやうな下町娘だつたわ。」と、弓子は男に思ひ出話をするのだ。

『私は地震の娘です。地震の眞中で生れ變つたのよ。水族館でいつたでせう。男になるんだ、そんな女にはなるまいつて。何百人もの人がコンクリイトの上で、體にかけるものもなく、足をぶつつけ合つて寝てゐればね——女の子は女が厭やになるわ。水道も電燈もなかつたわ。蠟燭が一つ一つ消えて、夜中には眞暗闇——乞食と並んで寝てゐたりしたわね。ほんたうよ、あんたあすこに乞食のまじつてゐたのを知つてる？ それが反つて、一等禮儀正しい夫婦だつたわ。夜中に屋上庭園へそつと出て行くの、乞食の夫婦たけだつたぢやない？ それから、あんたに御飯のしやもじで起された姉さんと——。』

『この間から氣ちがひの姉さん、姉さんての、お千代のことかい。』

「ことかい——ですむと思つてると、大きなまちがひよ。だけど、乞食には全く感心しちやつたな。初めの千人がだんだん減つて、取り殘されてゆくさびしさつたら。」

弓子がいふのは——まづ一階の教室から、罹災者達が追ひ出されて行つたのだ。淺草區役所の燒跡の庭に、配給品が積み切れなくなつたからだ。一つの教室の人々をほかの教室へ移して、米俵なぞを運び込んだのだ。それが二室になり三室になり、一階はすつかり配給品の倉庫になつてしまつたのだ。

また、ちやうど一月目の十月一日から、學校の授業が始まることになつたので、三階を兒童達に明け渡さねばならなかつたのだ。

それにはもちろん、罹災民の方でも、知り合の家へ立ち退いたり、故郷へ歸つたり、市外のバラックへ引つ越したり、[illegible]で自分のバラックを建てたりしたからでもあつた。

そして、地震の四十日後には、五六十世帯の二百人ばかりが、二階一室きりとなつたのだ。

『二階だけでも、コンクリイトの床が廣々として、そこへ秋風が吹いて――さうだつたわ。それに、教室の中へまたてんでに小さい巣を作るんですもの。焼跡から錆びたトタンを拾ひ集めて來たり、古筵やぼろ布を見つけたりしては、みんな家族々々で乞食小屋に隠れてしまつたのだわ。それが一層さびしいのにね。なぜあんなにして、隠れて暮すのかしら。だつて、乞食共。姉だけは、親子三人相變らず筵一枚の上にころがつてたぢやないの。私たちだつて、トタンの壁さへこさへなければ、その裾から御飯のしやもじを突き出して、あんたが姉さんを起すこともなかつたのだわ。』

二十三

千住吾妻汽船株式會社――と正式に名乘ればもつともらしいが、向島堤も近代風な隅田公園となつてから、なほさら古風なおもちやじみた乘合船、言問に近づけば、船の中の繪葉書賣りが、さもさも船員面をして、

『ええ、次は言問――言問でございます。皆さまお忘れものがございませんやうに。私はここで失禮させていただきます。』と、乘客にあいさつして上つて行くのものどかだ。のどかだから諸君は、船賃が二錢となつた今も、ポンポンの「一錢蒸汽」と呼んでゐる。

しかしながら、この古蒸汽のお通りは、どうしてなかなか、大河[illegible]の波を立てるのだ。

まして紅丸はほんの艀だ。名のあるのも愛嬌なほどの小舟だが、船の時公に頼まれて、刃物好きの梅吉が船の尻尾に「紅丸」と彫りつけ、自分で朱を入れただけのことだ。

船を借りる時に、船具專門の泥棒がゐるから氣をつけてくれと、時公のおやぢにいはれはしたが、さて船の上を見渡しても、何を盗まれるのやら、さすがの梅吉にも分らないほどの船だ。

だから、その波でぐらりぐらり搖れる度に、弓子は男の膝が感じられて、きゆつと肩をひそめながら、

『おお脚が温まつて氣味が惡い。私は犬や猫を抱くことも大嫌ひだわ。動物のぬくみで、體が温まるとぞつとするな。』と、いきなり男から飛び退いて、ランプの火屋を外した。

『明るくしませうよ。』

『そんなに動物のぬくみが嫌ひなら、あの時もお千代と別々に寢てもらひたかつたな。』

『ええ、さう。』と、彼女はハンカチで火屋を握つて、その中へ白い息をほうほう吹きこみながら、

『私には、おつかさんのお乳をいぢくつて寢た[illegible]りした覺えがないんだ。あの時は[illegible]が一枚きりだつたし――びつくりしたわよ。トタン板の壁の裾から、御飯のしやもじが出て[illegible]て、姉さんの肩や首をこつくんこつくん[illegible]叩いてやしなかつた。[illegible]姉さんはちよつと頭へ手をやつて[illegible]けに寢直ると、[illegible]て、両手で[illegible]その肩をつぼめながら[illegible]泣き[illegible]枕もとの麻裏草履を手に持つて――[illegible]たんとコンクリイトの廊下へ草履を落す音が、五六間先で一つ聞えたわ。眞暗よ。[illegible]がないのよ。――それから姉さんは[illegible]どうしたと思つて？　がたがた[illegible]何か捜してたわ。私のお下げの先が手に觸つたんでせう。その髮の毛を口に押し込んで、ううつと泣いたわよ。』

『いつたい誰のことをいつてんだ。姉のことなら恥かしくないかね。』

『さうよ。だから、ほら、そんなきたない髮の毛なんか、きれいさつぱり切つちやつた。私は姉さんが、ただもう憎かつた。』

『子供のくせに、塔の下に隱れてがちがちふるへてたつて? そいつあ――。』

『ええ、飛行船の來た晩にはね。――だけど面白かない。子供だつた妹があんたを船へくはへこんで、氣のちがつた姉の代りに、戀の思ひ出話をしてくれるなんて。』

『ついでにもう一度、がちがちふるへてもらはうかね。』

『ほんたうに――。』と、弓子は頬を染めてうなだれながら、ぼんやりガラスの火屋を拭いた。

『いろんなことがあつたわ。警視廳診療班のお醫者つたら、毎晩醉つ拂つてたぢやない。それから賑やかな職人の兄弟――夜中に配給品の梅干を盜みに行つたり、誰かの子供が死ぬと、え、一錢でも半紙一枚でもなんて、香典を集めて廻つたり、罹災者の隱し藝大會を開いたり、吉原の納骨堂詣りの會員を募つたり、それが三四人の男と一しよにお隣りの警察へ引かれて行つたと思ふと、賭博現行犯だつたわね。』

二十四

男は腕組みをすると、舟板にもたれかかつてしまつた。

『あんた、私が昔の女の妹だと分ると、その女のやうに、急に私もつまんないと思ひ出したんぢやない?』と、弓子は笑ひながら飛びついて行きさうに、火屋を清めた明るいランプで男をちらちら見た。爪先立ちの及び腰のまま、七輪の火に手をかざしてだ。

『ふん。――とにかくだね、おれがお前をどう思ふか、そいつばかりお前が氣にしてることはおれにも分るさ。』

『と思ふと、ちよつと可愛くもない? 妹は接吻のしかたまでが姉とおんなじつてわけぢやないわ。』

『おれはそんな面倒臭い接吻なんか、大嫌ひだね。』

『私もなの。だけどよ。――あの時、ほんの退屈まぎれの賭けごとに手を入れるんなら、どうして赤木さんを縛らなかつたのかしら。』

『いい子だな。おれの名前まで思ひ出してくれたかい。』

『いい子になつて、なんだつて思ひ出してあげるわ。だけど、あんたも割と間拔けね。惡いことをするには、覺えがいいつてことも大切よ。』と、彼女はゐざり寄つて、

『いい子達の遊び場の木馬館で、たわいなくひつかかつて、大河の中まで來るなんて、どうかしてるわよ。』

『それさ。』と、赤木は子供をあやすやうに笑つた。

『その、おれの間拔け振りが、おれはうれしいんだ。淺草へだつて二年も近寄らないんだぜ。』

『それがまた、どうした風の吹きまはしで――さうだわ、風つてば、あんたは風に吹き飛ばされて來たやうなものだつたわ。姉さんのところへよ。あの晩は市役所や警視廳の自動車が、大河の假橋を渡つて行つたでせう。河の東は水が腰の上までで、建物は一つもなし――東でなくつたつて、あつちこつちの公園の掘立小屋が吹き飛ばされたんですつてね。歩けない風だもの、女の子は地面に這ひつかまつて泣く、そのおさげの髮を雨がたたきつけて、髮は泥まみれ。私達の學校だつて窓ガラスがないから、マッチもすれない暗さを、お下りの蒲團なんか抱へて逃げまはつて、翌る朝になつてみると、あんたが傍にゐたのね。それから、[illegible]ンや、古板や、ぼろ布や――窓へ打ちつけたわね。』

『その陰氣な話はもう切り[illegible]たね――』

『釘を打つ音が――今でも聞えて來る。一生忘れない、なつかしい音だわ。窓のことぢやな

いの。私達が學校をこさへたのよ。明治維新の新政府がまづ手をつけたのは教育であつた。新しいロシアの第一番の仕事も教育であつた。——私、校長先生の演説をちやんと覺えてんのよ。十月一日の授業始めには、二千人のうち、それでも四百人位集まつて來たわ。焼土を踏んでよ。兒童の家で丸焼けにならないのは一軒もなしよ。顔を見合せると、うれしくて泣いちやつたな。私達がこさへた學校だつたわ。ビイル箱の板をはがしたり、組み合せて釘を打つたり——それが机や教壇なの。莚をぶらさげて、教室の仕切りにしてね。上級生は毎日その作業に夢中だつたの。先生は煙臭い壁に、割算の數字を書いていらつしやる。黒板はなかなか作れなかつたのだわ。その前に莚を五六枚敷いて、一組二三十人の子供が坐つてゐる。そんな面白い學校——だけど、みんな勇み立つて、ほんたうだわ、世の中がぶつ壊れたら、もう一度あんなに生き生きするかしら。でもね、學校が始まつてから、姉さんは一層さびしくなつたのよ。讀本を讀む聲や、唱歌や、體操の呼唱が聞えて來ると、二階の窓からその方を見あげて、ぼろぼろ泣いてんのよ。』

『その姉さんについてだね、おれに因縁をつけようつてんなら、早くつけてもらはうぢやないか。』

亞砒酸の接吻

二十五

總桐の簞笥二棹、マンドリン、二尺の鏡臺、縞黒檀張りの茶簞笥、欅の長火鉢、そして白木造りのお宮の横に、お酉さまの熊手に羽子板まで、下町風に飾りつけて、苫屋が内福な家の茶の間に劣らぬ荷船もあるとはいふが——紅丸で弓子は、藁灰の固まつたバケツに、七輪の炭火を移しながら、

『おどかすわね。因縁ですつて？ 地震の時の計算なんか、保險だつて、一割しか拂つてくれやしなかつたわ。それに、姉さんの戀を保險に入れといたつてわけぢやなし。』

『それぢや、お千代も精神病保險にでも入れときやよかつたんだ。そんなものが世界にないところを見ると、他人が氣狂ひになることにまでおれは責任が持てんらしい。捨てられた女が皆氣狂ひになるなら——そんなことあどうでもいいが、おれと別れた時、お千代は氣狂ひでもなかつたやうだ。』

——どこで別れたんだ？ 震災の八日だつたわね。』

『それが惡漢仲間の禮儀作法だ。お千代は震災でおれのことを隱し通した。おれは人の親切を無にすることも、人と心中することも嫌ひだつたからね。』

『聞いといてよかつたわね。』と、弓子は白い外套のポケットから、小さい藥瓶を出すと、藥粒のやうな亞砒酸丸を、ぼろぼろ掌にこぼして、目をうつとり細めながら、

『一粒に〇、〇〇〇五の亞砒酸を含んでるのよ。一瓶五百粒で何人死ねるでせう。この瓶——これで私の快樂なのよ。』

『ふん。』

『あら、こんな時私をあざ笑つてみせるなんて、あんた風俗展覽會のお人形みたいに、大時代だわよ。こんなもので、私が、あんたをおどかしてるとでも思つてるの？ 甘ちやんね。私のおもちやだわよ。ぢやないわ。必要品でもあるけれど。——いつも、私の肌が白く透き通つてゐるやうに、足の裏までつやつや光つてゐるやうに——飲むのだとしてもよ。さつきからあんたの顔を見てゐて、これでいつでも殺せるのだと思ふと、樂しくないこともないわ。憎しみで暗

くなつてる心も、それで明るくなつちやふ。殺したいやうな人でも、好きになつちやふ。——いいえ、あんたに會ふためにわざわざ持つて來たんぢやない。私たいてい公園で御飯を食べるてせう。』

『なんだ、陸ぢや追はれてるなんて、この間大きく出やがつて。』

『ふふふ、陸なら、あんたのいい時に逃げられるぢやないの。昔の赤木さんの子分がつきまとつてもうるさいしね。水の上はこつちの勝手よ。——それで御飯の時に飲むから、肌身離さずなの、公園だと、十錢か二十錢でお腹が一ぱいになるんですもの、うちで御飯をこさへるなんか、淺草では、今や不經濟な因習だわ。』

『ちよつと、それ。』と、赤木は腕組みの手を伸した。

毒藥が男に弓子をまた新しく感じさせた。

——と、彼女は見て取つた。

『私がもし姉さんのやうに、あんたが好きになつたら、これで死ぬつもりだつたのよ。死んぢやつてもいいくらゐ、私はあんたに會つてみたかつたのよ。あんたが私を女にしてくれるならよ。』と、彼女は男の腕を柔かく握つて、彼の掌に亞砒酸丸を六粒落しながら、

『死ぬなんて譃としたつて——死んでもいいわつて、ただいふよりも、毒藥をポケットに入れて、死ぬわつていふ方が、戀の喜びは强かない？——あんたにこれ飲ませちやふから。』

赤木が苦笑ひして、藥を棄てさうにすると、

『いやよ。勿體ないわ。』と、弓子は男の掌に口をつけて丸藥を銜んだが、美しい前齒でぽりぽり嚙みくだきながら、眼一ぱい靑く微笑んで、瞬かずに男を見つめてゐた。——と、いきなり男の首に飛びついた。脣を押し入れるやうに接吻したのだ。

男は毒藥に舌を刺された。

二十六

獲物に一撃ち食はせて飛び退いた豹のやうに、弓子は首をすくめて、赤木を睨んでゐた。濃い睫の柔かい影が、變に不釣合なほどきつい顏だ。

昨夜何かの騷ぎで、化粧道具まで紛失したと、赤木が紅丸へ乘り込んだ時にいつたが、そのためか、白粉氣はなし、美しい肌が寢不足で冴えてゐる。

ボタンをかけてなかつた外套は、男に突き飛ばされたはずみに、片肩が脫げてゐる。

男は續けざまに唾を吐いた。亞砒酸丸は舌を刺すのだ。あわてて湯沸しを引き寄せると、ごくごくうがひをしたが、吐き出すところがない。

水をふくんだ男の頰を見ると、弓子は破れるやうに笑ひ出した。

小粒に揃つた齒を丸藥の汁が黑茶色に染めて、それが干いた脣をたらたら濡らして來るのだ。赤木はふとそこだけを見た。色情だ。そして、ぎよつとした。毒藥だ。

『おい。』と、口をあく拍子に水を膝へ流して、弓子の肩をつかみながら、

『馬鹿、うがひをしろ、うがひを。手前こそ氣ちがひだぞ。』

弓子はつかまれた外套から飛び出しざま、三足四足前へ走つて、ばたりと笑ひ倒れた。股の筋肉が一つ一つ見えるほど、腹を搖ぶるのだ。

亂れた髮をきゆつと振つて、顏を起すと、急に生き生きした眼が、淚できらきら光つてゐるのだ。

『あんたは——あんたは、惡漢の禮儀作法つての、知つてるかもしれないけれど、戀人の禮儀作法はまるで知らないのね。初めて接吻てものして私——相手が唾を吐くやら、うがひをする

やら。』

そして、またくつくつ笑ふのだ。その搖れる體に素肌を感じさせる。

『さんざんね。やつぱり、女にならない方が、よかつたつてわけね。――ああ、をかしい。ああ、をかしい。』

『おい。』と、赤木は女の首を一つかみに起すと、顏を胸へ抱き込みながら、握り拳で頬を突いて、口を開かせた。そして、もう一方の手で自分の長い袢の袖をひつぱり出して、女の舌や歯を拭いてやつた。

弓子は笑ひ涙の上へまた、吐き氣の涙だ。その涙を男の胸へこすりつけながら、

『も、もう、もう、大丈夫。――今の、今のはお芝居よ。すみません。でも、あんなにしなけや、私には接吻なんてもの出來やしないの。』

男のゆるめた腕の中で、弓子の胸が大きく息をしてゐた。濡れた眼が男をまじまじ見上げながら、

『どうしてそんなに、私を見るのよ。――あんたは私を今やつと見てくれたわね。この間の水天宮から、どうしても私を子供扱ひか、賣物扱ひにしかしてくれないんだもの。私口惜しくつて、ずゐぶん大騷ぎしちやつたわ。亜砒酸丸は私の快樂だつていつたの、お分りになつて?』

しかし、弓子はぱちりと一つ瞬くと、耳まで赤く染めて、思ひ出したやうにスカアトを直した。

『おれはな。』と、赤木の聲は急に澄みながらふるへた。

『お千代のことだつて――。』

『いひわけなんかいらないわ。私にいひ分があれば、姉さんのためでなくつて、私自身のだわ。でせう。姉さんの戀を見てゐて、私は女になるものかと思つた。それが不しあはせだつたの。だから、その原因のあんたに會へて、女になれたら、なんにもいふところはないの。』

二人の眼がさぐり合つて、一つにならうとした時、男の腕がぐつと引き寄せて、女の上に顏が落ちかかつて來たが、

『馬鹿!』と弓子は右の掌で男の口を突きのけた。

赤木の唇から齒が、またべつたり毒藥で染まつたではないか。殘りの丸藥を、弓子はさつきから握つてゐたのだ。それが汗で溶けてゐたのだ。

『しつかりおしよ。間抜け野郎。』

赤木はさつと青ざめて、突つ伏した。

姥宮姫宮

二十七

吉原の遊女雲井の碑が、津輕大夫の碑と向ひ合つて、三社の裏に建つてゐる。

いかに女の淺草公園だとて、三十もある石碑のうち、賣女の碑はこれ[illegible]た。つて、その遊女が人丸祠へ獻じたもの[illegible]「保濃保濃登、明倣之浦爾、朝霧爾、島傳伽久禮行、不念遠之所思、」男のやうに勢ひのいい萬葉假名で、人麿の歌を書いた碑文は、遊女の筆だ[illegible]流[illegible]た彼女は、淺草の人丸祠に願かけでもしたとみえる。

すると淺草公園の五十から百近い神佛のうち、前身が賣女なのは、姥宮姫宮一人だ。

「明治の大御代となりて二十四といふ年の六月、市の參事會の指示する所ありて、今は形ばかりなる姥が池うづめぬ。かくては淺茅生の月、昔の影をも止めず、後の世にそのあとの隱れ果てぬらんもあまりにをしければ、石じるしする事とはなりぬ。藤

田鐵三郎建之」

この「石じるし」の教へる「姥が池の舊跡」は、馬道六丁目三番地の人家の眞中で、その姥宮姫宮も、今は千勝神社に七八の神々と雜居だ。

そして、姥が池の縁起も三通り傳はつてゐる。しかし、姫宮が石の枕に寢たといふところは、三つとも同じだ。――だから、コンクリイトの枕に寢て、また舟板の枕に寢るかもしれない弓子のことから、私はこの傳説を思ひ出すのだ。

武藏野の淺茅生の淺茅が原は、月が尾花から出て薄に入る曠野であつた。

「旅行く人の行暮れて、隅田の川に千鳥の鳴く音をかなしみ、宿からんあてもなく歩む程に、茅枯れたる野中の一つ家とて軒くちたるあばら家あり、心猛き姥住ひける。」

婆あに似合はぬ、みめよい娘があつた。

「これを美しうかざりて、道行く人を出で迎へこの家に誘ひて、石の枕をさせて添ひ臥しをなさしめ、小夜更け旅人の熟睡せしところを計りて、豫て上よりつるしある石の小綱を切り落し、共寢しける男の頭をうち碎きて、そみて隱れある死骸にまとへる衣はぎとりて、その死骸は池の中にうち沈むるを常とせり。」

こんな風に九百九十九人の男が殺された。

千人目の旅人は、草刈男の笛を聞いた。

「その笛の音は人の物いふごとく、
　日は暮れて野には臥すとも宿かるな、
　かの淺草の一つ家のうち。」

おかげでその男は、石の枕が怪しいとにらんだ。そつとうかがつてゐると、果して大石が落ちて來たので、生きた空もなく逃げ出して、大きい御堂に走り込んだ。そして、ふとまどろみから目覺めると、そこは觀音堂――あの草刈も觀世音の假りの姿だつたのだ。

「その後、陽明天皇の御宇に、稚兒ありて姥が許に宿りけり。姥稚兒の衣裳を見るに美しき價貴きものと知れば北叟笑みてありける程に、姥が娘、この兒の優にやさしく妙なる姿に心まよひ、稚兒のあとを慕ひ、おなじ衾に忍びてふしけるが、かくとは知らでかの石を落しける。稚兒はもとより觀世音の化身にましませば何處へかうせて、娘のみ一人おしに打たれて死せり。」

娘はかねがねこの惡業の恐ろしさに心責められて、死にたいと思つてゐたのだ。美しい稚兒が、その死に戀の喜びをつけ加へただけだ。

「さすがかかる夜叉ともよぶべき姥も、子ゆゑの愛執には眼くれけん、悲しみのあまりこの池に身をおどらせてうせぬといふ。」

第二の傳説では、貧しい傳夫婦の娘といふことだけのちがひだ。觀世音は姿を現はさないけれども、やはり娘は、罪業消滅のために、自分が旅人を裝つて、石に打たれて死ぬ。それを見て父母も忽ち一本有の佛性に目覺め、墨染の衣を身にまとふのだ。

もし、弓子も紅丸の中に、亞砒酸で死んでゐたとすれば、この二人の娘の氣持に似てゐるといふ人もあらうが――。

二十八

第三の傳説では、人皇三十二代用明天皇の御代のこととなつてゐる。

このあたりはさびしい曠野だつたから、多くの盜賊がここかしこに現はれて、直隔や北國の旅人を惱ました。

一、觀世音これをあはれみ給ひ、[illegible]に命じて老翁と化せしめ、[illegible]を婦化たる手弱女に變せしめ、野中の一つ家に住ひませ、普く旅人を留めしめ、ここにおいて、[illegible]

じと酒を携へ来て婚を求むれば、すなはち應じて一間に盤居といへる石の枕に臥せしめ、盤臓といふ石の釣綱を切つて、忽ち盗賊の頭を微塵とす。かくすること年ありといへども、迷ひ深きは色慾の習ひ、いやが上に来て命を失ふ。」

そして、首領の意麻留を初め、盗賊が一人残らず、色じかけの死刑にあひ、旅人の往き来も平安となつた。

「その頃の里人の口ずさみとて、

日は暮るる野には伏すとも宿からじ、

かの一つ家の姥が庵に。」

その後、姥は池に飛び込むと、倶梨迦羅不動となり、姫は金色まばゆい辨財天女の姿となつた。

さうして、石の枕と姫の鏡は、淺草寺の寶物として、世に傳はつたのだ。

弓子がもし今の世の龍女で、淺草公園の悪者を片つ端から毒殺しようとしてゐるのならば、赤木はさしづめ意麻留の役で、色香に迷つて死の床へ誘ひ込まれたわけだ。

しかし――雷門の交番の横つ腹で、

――花川戸に集まれ。紅座。

と、告知板を讀んだ時には、その日弓子が紅丸に乗つてゐることさへ、私は知らなかつたのだ。

江戸三十三ケ所の札所、その第二番の詠歌にさへ、

「願へただ世の罪ふかき姥が池のうかむ

誓ひや一つ家のうち。」

と歌はれてゐる程、淺草觀音靈驗記の大切な一ペエジだから、諸君に姥宮姫宮の物語をしたのだが、話を前へ戻せば、私は仲見世の入口で、うるさい暦賣りの子供に取りかこまれてゐるところだつたのだ。

私はその子供達の顔をわざと見ずに、廣小路を花川戸の方へ、ぶらぶら歩いて行つた。

淺草郵便局の前で支那娘に行き會つた。二人とも黄色い支那服だ。彼女等を振り返つてゐる私の眼の前へ、いきなり、

「あのいかものがお氣に召して？」と、青い人絹錦紗の羽織がけばけばしい。

『やあ。』

『辻本にあたつてごらんなさい。支那人も、朝鮮人も、白人もあるつてから。』

辻本とは――いづれ諸君に紹介するが、公園の周りにゐる、いかがはしい客引きのうちで、一番利口な、一番奇怪な、そして一番悲しい男のことだ。

「地下鐵の塔へ行くんだらう。」

「あら、御馳走になつていいの？」

「食堂に集まるのかい？」

「誰が。」

「あすこに集まれ、紅座つて――雷門の告知板を見て来たんだらう。何か起つたのかね。」

「なあんだ、それで、塔へ行くかつて、おつしやつたのね。損しちやつた。なんて御親切でせうつて思つたのよ、實は、夕飯を御馳走してくれさうな人を、物色してたところでね。――いたづらだわ、だれかの。告知板なんか見やしなかつたけれど。でも、いらつしやいます？今のじやうだんよ。夕飯の話。お土産を買つて歸るところなの。」と、春子は小さい紙包みを振つて見せて、

「これね――。」

これは――名高い淺草名物だが、小説ではその菓子の名を謎としよう。餘りに解き易い謎ではあるが――。

「これを買ふ――私秘訣を知つてんの。賣場へ新聞を一枚そつと渡すと、面白いでせう、それをね、賣子がすばしつこくヅロオスの中へ隠して、お禮にうんとまけてくれるのよ。』

新『螢の光』

二十九

例へば子供役者の歌三郎と歩いてゐると、弓子はその「倅」の綺麗過ぎる少年よりも、ずつと男に見える。美しい娘が男に見えた時には、鋭い、そしてこぼれ易い刃物のやうな憂鬱を、諸君は彼女のうちに感じはしないか。

吉原堤の火見櫓の見える袋露路で、私が彼女と同じ長屋の家を借りてから間もなくのこと――ふと私の眼に寫つたのだが、弓子は歌三郎に足袋をはかせてゐた。ピアノのある玄關だ。彼女は袖でしきりに涙を拭きながら、しやくりあげながらだ。歌三郎は庇の大きい鳥打帽をかぶり、もぢり外套のポケットに兩手を入れたまま、彼女の前へ足を投げ出してゐるのだ。

もちろん弓子は、この少年に泣かされたのではないらしい。だが、私は見ぬ振りをして、そつと隱れた。

男と見える彼女にとつて、今のことは何を意味するか。とにかく、私は叫ぶやうに思つたのだ。

『さうか。あの女が何をしても、とがめる氣持を起すまい。』

ここでいひ忘れないやうに――歌三郎は弓子の弟ではない。まだ十二三の子供なのだ。

春子が弓子とちがふことは――さうだ、誰かほかの女と春子を並べてみるがいい。彼女はどんな女よりも、どこかがより多く女である。

ほんたうの女には悲劇がない。春子を見てゐると、誰もさう思ふ。春子には悲劇がない、と思はせるかはりに、ほんたうの女には悲劇がない、と思ひこませてしまふ。――少くとも彼女は、そのやうな女である。

『あら、だつてほんたうにヅロオスなのよ。』と、春子は私の爪先を見て歩きながら、

『ほかに隱すところがないんですもの。賣子の洋服――あすこのお店のよ、ポケットを一つもけないの。エプロンだつてさうですわ。でも、新聞が女からこんなに可愛がられることつて、あら――いけませんわね。』

『今日の新聞に何か出てた。』

『今日とは限らないわ。毎日。――あの店の主人が、ね、お妾が八人あるんですつて。晝過ぎにお妾のうちからお店へ來て前の日の賣上を勘定して、銀行へ持つて行かせると、さつさと歸つちやふの。息子さん二人も、面白いと思ふわ、やつぱりおやぢのお妾のうちを泊り歩いてんのよ。お妾は亡くなつたつて話ですけれど、お妾つてものと新聞つてものとどういふ關係があんのか、とにかく主人てのが、賣子に斷然新聞を讀ませないんですつて。――本は皆いけないつて。賣子さんところへ、本を送つて來ると、渡さないで送り返しちやふし。』

『へえ。――そらしかし、ありさうなことだ。』

『私――ほんとのことよ。ですから廣告燈――電氣の字でせう。字がなつかしくつて、賣子はそればつかり、お店から見てんのよ。新聞や本が手に入ると大變――御不淨に一時間も隱れて讀んで、ヅロオスにそつとしまつて――それから夜だつて、監督つたら直ぐ電燈を消すんですけれど、面白いのよ、螢の光、窓の雪つて、歌の文句そつくり。賣子は二階に寢てんの。窓をあけると、ね、夜の電燈の光が入るでせう、そこへみんな頭を集めて――。』

『そりやいい話だ。僕は人に字を讀ませることが商賣だからね。字を讀む文學なんてものは、魅力がなくなるといふ説が盛んなんだが――。』

『――あらだめよ。書いちやためよ。賣子が可哀想よ。この間、十八人ゐるつて聞きましたわ、賣

みものが主人に見つかると、出どころを厳しく詮議されるの。白状しつこないわ。だから、みんなを並ばせといてね。ぴたぴた順々にぐるつて話すわ。——あるでせう、店の前に、車よ、それで、売れ切つて、青い顔で、でも人なつこさうなお爺さんなの、新聞売のその お爺さんね、売子が店の戸をしめる時、売れ残りの夕刊をそつと渡してやるのよ。あら、書かないで下さいましね。さうだわ、お客さんは皆あすこの売場へ、新聞や雑誌を忘れて来るやうにつて書くなら、いいわね。』

三十

浅草、花時、たまだれ、雷、甘納豆、湯の花、里みやけ、残月——私に読むともなくそれを読んだ。御境へでも飾るにふさはしい、色とりどりの日本菓子の名だ。フルウツゼリイ、キャラメル、チュウインガム、チョコレイトなぞと、ガラスの箱の中に並んでゐるのだ。地下鉄食堂の一階の売店だ。

そのお土産売場の左が、料理の見本棚だ。

『何を食べる?』

御飯、パン、コオヒ、紅茶——五銭

レモン・テイ、ソオダ水——七銭

アイスクリイム、ケエキ、パインナップル、果物——十銭

エビ・フライ、ライスカレエ、お子様料理——二十五銭

ビフテキ、カツレツ、コロッケ、ハムサラダ、ロオルキャベツ、ビイフシチュウ——三十銭

ランチ——三十五銭

『まあ高いわ、御料理。——お止しになつてよ。』

右の方に、エレヴェエタアと並んで食券の売場だ。

『食べなければ、塔へ上るの、いけないつてわけないでせう。ほれどらんなさい。ちやんと書いてあるわよ。——地上鉄塔四十メエトル、御自由にお登り下さい。』と、春子は食券売場の娘達を笑はせながら、紙包みを振つてみせて、

『これを食べて、水を飲みませうよ。夕刊なか、エンコ(公園)に幾らでも落ちてるわ。拾つた新聞をヤリカン(十銭)につけてやつたら、こんなにまけてくれたんですもの。』

エレヴェエタアの中は金梨地の蒔絵のやうだ。

『いやだわ。定員十三人だつて、これ。——三年に二百五十圓で、一日いくらにあたりますの? 上へ着くまでに暗算してよ。これを買つたお菓子屋年季奉公ですつて。三年二百五十圓だから、一年が八十三圓三十三錢三厘三毛、一月七圓足らず——あら、もう六階なの?』

エレヴェエタアの前は調理室だ。その横を屋上庭園へ出て、黒と白の化粧煉瓦の市松模様を踏みながら、

『一年三百六十五日とすると、一日が二十三錢足らず。朝の八時から夜の十一時半まであいてるからあの店、十五時間半の労働——暇な時だつてあるでせうけれど、一時間一錢五厘になるか、ならずだわ。賃金として、どうなんですの。いい? 悪い? 私なら厭だな。』と、春子は見晴しの街に眼もくれないのだ。

『何よりも、君の算術が怪しいさ。』

『いつてるわ。食券の売場の前は何か食べずに通れない、分つてるわ、私のはそんな見栄坊な算術ぢやないことよ。エレヴェエタアですうつと上るうちに、一錢五厘までちやんと割算したのよ、私。——あら、お稲荷さま、こんなところに。實稲荷大明神——ですつて、東京まで立てて。』

稲荷堂の鳥居は鐵だ。

眼の前へ高く、鋼鐵の塔をぐうつと振り上げ

る――吾妻橋架橋工事の起重機だ。

『ゴルフ服の派手な靴下みたいなビルヂングでせう、屋根に萬國旗がひらひらして――それから、地下鐵の車掌の服だつて、あんなの東京中の乘物にないわ、活動に出て來る西洋のホテルのボオイのやうに綺麗。――ですからよ、お稻荷さまがあんのは、斷髪に花かんざしつてところ。』

そこから塔へ登る段梯子の横に白い幕――食堂の少女が幕の中に四人隱れて、ハアモニカで「波浮の港」を吹いてゐる。

『音樂家が喜びやしない？　あの菓子屋の新聞と同じでせう。――一時間一錢五厘で、あすこぢや、一年に二度しか外へ出られないんですつてよ。それも、監督が引率して、まるで小學校の遠足だわ。』

コンクリイト

三十一

淺草廣小路の甘栗太郎――燒臼の中に栗まじりの黒い砂が、ぐれりぐれりと波を回してゐる。それをのぞきこんで、いつだつたか、紅團の一人は、いみじくもいつたものだ。

『おい、素的しいフラフラ・ダンス。春野芳子より本場だよ、黒ん坊のでつかい女のさ。』

また、横笛吹きの笛龜は、遊樂館の舞臺で、さんざ惡態をつきながらも、彼の罵るジャズ小唄を吹かなければ、十分に客の手をいただけないのだ。

例へば、諸君は近頃、萬歳を聞いたか。萬歳は元來道化だ。ところが一九二九年では、メリケン渡來の「モダン」といふ、無機道の機關車に、萬歳の藝人達が引きずり回されてゐるので、彼等は二重に悲しい道化だ。

また例へば、帝京座の歌劇を見給へ、光源氏や業平朝臣が、ジャズ・ダンスを踊るのだ。――

朝臣よ、話は別だが、都鳥の向島はコンクリイトの河岸公園となつた。向島名物、長命寺の櫻餅や言問團子を賣る家も、コンクリイト建となつた。

近くに商科大學の艇庫があるが、それは水べりに青い木造――建物で見ると、ボオトは櫻餅よりも遙かに古風なのだ。

しかし朝臣には、コンクリイトの魅力なんか、最早分りやうもあるまい。

「尖端的だわね。」といふ、すさまじい小唄映畫を、松竹蒲田で作るさうな。

「鐵筋コンクリイトだわね。」といふ小唄映畫も、今に出來るだらう。

笑ふ人は、アスファルトやコンクリイトの魅力を知らないのだ。

その魅力についてだ。便所の話は厭だが、これよりいい例はない。

吉原の近くの小さい公園――といふ程のものでなく、貧しい町の子供の遊び場だ。子供が二三人で、その共同便所を掃除してゐた。こんな綺麗な共同便所を、私は見たことがない。

『君達、こんなところを掃除するの？』

子供はけげんさうに私を見る。

『毎日？』

『ええ、時々。』

『どうしてね？　いひつかるか、頼まれるかしたの？』

『いいえ。』と子供達は目顔で呼び合つて、こそこそ立ち去つてしまつた。そこで、公園の子守娘に聞いてみると、

『好きなんでせう、あれが。――自分の家よりもずつとモダンだし、あんな立派な家が使へるの、便所しかないから、いい氣になつて、掃除してるんでせう。』

僞りの意外だ。だが、向うのベンチの子守に

聞いても、答へは同じなのだ。

子供達の家とは較べものにならぬ程、共同便所が立派であるにはちがひない。しかしながら、子供達が共同便所を愛するのは、コンクリイトの魅力ではなからうか。大人は「公徳」といふ名で、それを責めたとしても、子供等は近代風な便器の魅力で、それをやつてゐるのではなからうか。子供達は桃山御殿の茶室よりも、コンクリイトの便所を愛しはしないか。

浅草新八景——といふものを選ぶとすれば、傳法院境内の小堀遠州作の名園、弓子も地震の時に逃げこんだところだが、

「へえ、あれが名園なの？」と、からだ。

してみると、たとひ昭和五年の四月一日から開放するといふ噂があるにしたところで、その庭を数へ落す人はあらうが、コンクリイトの言問橋や隅田公園を誰が忘れよう。鐵筋コンクリイトのビルヂング、地下鐵食堂も、五重の塔より先だ。コンクリイト建に、鐵棒の牢格子のやうな扉の寺——廣小路の突き當りに今普請中の專勝寺は、まことに「モダン」の寺本尊として、浅草観音の客を奪つてしまふかも知れない。

ところで、「時代の最尖端を行く文化の花」と、電車の内にまで廣告してゐる、地下鐵食堂の屋上で、白い裾の下から木綿の靴下をのぞかせながら、女給が隠れて吹くハアモニカ——ハアモニカはもう古めかしく悲しい樂器だ。

そこの水道栓から水を飲んで、御持參の菓子包みを開く弓子は明るいが——。

三十二

飛び降り自殺を防ぐためにか、屋上には圍ひがあつて、その上に金網が張つてある。稲荷の社の前に、椅子が八脚と、足の高い吸殻入が二つ——私はそこで巷の音を聞いてゐる。

交通巡査の笛、新聞賣子の鈴、起重機の鎖の響、川蒸汽の發動機の音、アスファルトを踏む下駄の音、自動車や電車の車輪の響、ここの少女のハアモニカ、電車の鈴、エレヴェエタアの扉の音、自動車のラッパ、遠くの雑音——それらを一つとしてその波にぼんやり耳を浮べてゐると、これも子守歌でないことはない。

川下に四つの橋を並べた大河は冬曇りだ。

だが、じじじ、じじじ、と時々鋭く響く音だけが、私の耳にひつかかる。今下で見て来た、おもちやの音だ。針金の柄をちよつと押すと、圓い金の板がじじじと回りながら、緑や青の火花を散らすのだ。郵便局の前で、乞食の少年が賣つてゐた。三つくらゐの女の子が、彼の足もとのアスファルトに、わあわあ泣き倒れてゐた。泣かせてあるのだ。泣くのは三つ兒の商賣だが、よく泣く子は借り賃も高いのだが、——しかし、少年はさも憎さげに、その女の子の背をぢつと睨んでゐるのだ。こんな凍りつきさうな冷たい眼を、私は見たことがない。

また例へば、諸君が映畫館の繪看板から、ふと反對側に眼を移すと、

——私ほど世にあはれな者は、またとありません。昨年十月亭主に死にわかれ、七十五歳の母おやを養ひ、私は脚氣をわづらひ、三人の子供を育て……。

などと書いた看板を胸にさげた乞食女が、いかにも水ぶくれの足を見せてゐることがあらう。

子供はどこにゐる。三人の子供はてんでに、池の端で木登りをしてゐるのだ。

それを見てはいけない。見られたと知ると、彼等はばらばら木から飛び下りて来て、諸君の前で三人がつかみ合ひをして見せる。そして泣きわめく。喧嘩の眞似は子供の商賣だが、彼等の眼は眞物の喧嘩よりも、憎しみに滿ちてゐる。

そこで私は、明るい春子の眼を思ひ出さう。彼女の茶色の瞳は、ぼやぼや白膜へにじみ出してゐるし、またその白膜は直ぐ赤くなるのだが――。

『ああ、おいしい。食堂の横を上つて來るうちに、水道にもお味がつくのだわ、きつと。』と、彼女は水を飲む鳥のやうに、柔かい咽を伸して舌鼓打ちながら、椅子へ歸つて來た。

なんだか、忽ち田舍娘じみて、プレザン錦紗が體につかない。

『急におとなしく見えるね。』

『ええ、男のお方と會つて、十分ぐらゐたつと、いつもおとなしくなんのよ、私。』

『手だね。』

『誘ひの手？ ちがふことよ。私はうれしがり家で、少うし挨拶のおしやべりが長いんですわ。』

『ほんたうに味のついた水を飲みに行かない？』

『ええ、御馳走さま。』

食堂は二階から五階、それぞれ壁紙の色や裝飾燈までちがへて、近代風に明るい清潔だ。二階と三階は禁酒だ。しかし、私達が入つた、緑色の壁の五階でも、もちろんコオヒは飲めるのだ。

西窓の街の向うに、上野松坂屋の旗が見える。安い女が連れの男に日本酒の酌をしてゐる。その隣りは中學生の一團だ。子供連れの家族が二組、皿程大きいカツレツを並べてゐる。

入口のテエブルには、六つくらゐの女の子が二人、ちよんと椅子にのつかつて、女給にトオスト・パンへバタを塗つてもらつてゐる。パンを食べると、彼女等はエレヴエエタアをベルで呼んで、すましておりて行つた。

私達は微笑んだ。

『えらいわね、小さい女の子二人で。あれこそ、淺草の卵だわ。弓子さん喜びますわ。』

『あの連中が來ないの、どうしたんだらう。上の塔にゐるんぢやないか。』

都鳥

三十三

コオヒ茶碗は、もう空だ。子供が乳房を吸ふやうな工合に、匙を舐めながら、春子はぼんやり南の窓を見下してゐる。

『果物屋の店つて、實に綺麗なもんだね。』

『え。』と、びつくりして、『さうね。――あら、私は屋根を見てたんですの。電車や乘合自動車の屋根よ。ひどいほこり、なんてきたない、あんなに積つてるわ。』

『何を考へてたんだね、君でも？』

『考へてなんかゐないわ。休んでたところなの。』

『男とゐて、十分たつとおとなしくなるが、二十分たつと、その男を忘れてしまふ――さうだらう。』

『私はね、弓子さんみたいに、そんなお裁縫のやうに、ものをいふことは嫌ひですよ。』

『何だい、お裁縫つて？』

『ちくりちくりと針の見える――。弓子さんから見れば、私は可哀想。私から見れば、弓子さんは可哀想。――でせうけれど、私や弓子は嫌ひでございます、よ。』

『うん。』

『お馬鹿さんよ、第一、あの人。――私の算術のあざやかなところは、さつきびつくりなすつたわね。私の算術ぢや、あんな答へは出しやしませんわ。弓子さんみたいにしてるのが、女として徳だつていふね。――私の好きなのは、明公。男の弓子さん。明公つたら、年下のくせに、ずゐぶん私を可愛がらうとしますわ。

私、をかしかつてんのよ、心のうちで。生意氣なところが、なかなかしやれてるわつて。さう分つてるんだけれど、私だらしがないんでせう、いつの間にかほんたうに可愛がられちまつてるの。女にだつて、これでせう。男にはなぶられ通し――。』

『なぶられるつて、どういふ？』

『さういふことよ。どういふことにも、かういふことにも――困つちやつたな。つまりね、私時々思ふことがあるんですわ。私はなんて可哀想な女でせうつて。いいえ、いいの。それはね、男つてなんていいものでせうといふのと、私には同じことなの。』

私は默つて手を出した　彼女はまだ吸つてゐた莨を、

『すみません、』と私の手に渡して、その渡したことに氣がつかないらしく、けろりと、

『さつき私、休んでるといつたでせう。その休んぢまふことなの。男の前へ出ると、私直ぐに休んぢまふのよ。何か考へること、何かすること、一切必要なし――わざと思ふわけでもないんですわ。私だつて、とにかくこれでもよ、女一人で食べて行つてるんですもの、休息を取らなくちや。生活の眠り藥だわ、男つて。――別れることが、朝のお眼覺。一たい、あら、一たいなんて、えらさうなことといつてごめんなさい。でも、戀をしてゐると、夜涙が出るものよ。別れると、朝涙が出るものよ。この朝の涙が出ないやうになれば、まづ女として一人前だわ。――ところが弓子さんときたら、男とチャンチャンバラバラ、ね、觀音劇場の大看板ごらんになつた？（チャンバラ劇とヨラバ斬るぞの幕なし芝居）この文句の通りですわ。まるで睡眠不足。何をどう考へて寢ないのか、分らないわ、私。可哀想に試驗用の動物――人間は幾日間眠らずに生きてゐられますか。』

『弓子には誰もないのかね。』

『あら、厭な方ね、ほんとに。そんなことは、聞きたければ、さつさとお聞きになるものよ。人にさんざいい加減なことをしやべらせといて。』

『君も案外[illegible]だな。』

『さうよ。私はありふれた女だから、お針でも習はうかと思つてんの。――あら、だめよ、そんなの。つんとすましてさ。また二十分もして、弓子には誰もないのかね。そんなの嫌ひさ。』

三十四

ガラス窓へ、また巨きい鋼鐵の腕が流れて來て、その鎖の音を、春子は眼を細めて眺めながら、

『ああ、首釣りがしたい。ぐうつと、あれにつり上げられたら、どんなにいいでせう。私いつも思ふの。綺麗にお化粧して、眞赤に着飾つて、ばたばたとあがきながら、それがいいわ、高くつり上つて、だらりとなつたところを大河へどぶん――。』

『そんなのは君、情婦といふ言葉がはやつた頃の、極彩色だよ。起重機の尖から、海水着一枚で、燕のやうに飛ぶ――君も今の娘なら、スワロオ・ダイブでも習ふんだね。』

『僕らだ。弓子さんにおつしやいな、そんなことは。あの人つたら、嫁入前の箱入娘みたいに、なにをびくびくしてんの？　どうせ花嫁候補者に入れるわけぢやなし。』

『それは知らんがね。とにかく淺草の人間は古いよ。上は香具師から下は浮浪人、乞食に至るまでだね。親分子分、それから仲間うちの義理人情――お江戸のばくち打ちそのままぢやないか。澁谷の道玄坂や新宿の方が、不良少年だつて、淺草より新しいさうだ。淺草のやうに傳統がないからね。そりやあ、淺草の花やかなうはべは、これほど動いてるところつて、日本に

ないかもしれないがね。その底は昆蟲館の標本みたいに——さうだよ、離れ島か、酋長のゐるアフリカの村か、まるで今の世の中とちがつて、古めかしい掟の網が張つてある。』

『どうなすつたのよ。厭だわ、そんな話。學校を失敬して、淺草通ひをして、時々狩り立てられる學生さん——あんなのがいふことよ、そんなの。掟の網つて、あんたそれにひつかかつたことがあんの？ ないでせう。なければいいでせう。ただ物好きに淺草を歩いてらつしやいまし。あんたの笑ふ掟——そのおかげで命をつないでる人の巣なの、淺草は。なかつてごらんなさい、血祭騒ぎや野たれ死が、ほんたうですよ、名物になつちやふわ。私だつて起重機で首釣りすることよ。さうれ、さつきの話、起重機に聞くといいわ。起重機さん、都鳥をどこへ追つたの？ 弓子には男があるか、ないか、都鳥に聞いて來とくれ。』

「なるほど、吾妻橋だからね。吾妻橋は竹町の渡しの跡だからね。竹町の渡しには、業平渡しといふ異名があるんだからね。』

『さう、あすこに都鳥がゐたの？』

『都鳥なんて、隅田川のはただの鷗だよ。嘴と足とが赤いと書いた本もあるが、でたらめらしい。川柳で盛んに冷かしてゐる。』

名所とて鷗も住めば都鳥
橋一つ隔てば鷗都鳥
鳥の名を二つに分ける渡守
チエ殘念な駒形の鷗なり
鷗といふと名所にならぬとこ

だから竹町の渡し、吾妻橋までの「都鳥」が、直ぐ河下の駒形へついと流れると、哀れ鷗だ。

『どうせ業平つて、古今無類のぼろつ買ひなのね。巷々のマドンナよ——なあんて、今なら歌ふわよ。』

「現に帝京座で歌つてるぢやない。』

ところで諸君、私は光源氏と業平朝臣とを、帝京座の舞臺へ出しつぱなしのまま、忘れてゐたやうだ。

さて、この大宮人は、いかにも大宮人の衣裳だが——ただ細身のステッキを携へてゐるのだ。そして腰を振り振り、

おれはプロだよ、菜ッ葉の服よ、
重いハンマア伊達には振らぬ。
…………

「都會交響樂」を歌ひながら、ジャズ・ダンスだ。——と、たちまちステッキを身構へて、劍戟の立回りだ。

また、私が古いといつた尖塔にしても——尖塔の上で四五人の男と、順々に朗らかな接吻をして見せながら、

『淺草の塔の花嫁なの、私。——エッフェル塔の花嫁』つて芝居、どんな風にすんの？』とかうだ。

三十五

舞臺は平安の都の花盛り——だから、いづれは光源氏や業平の頃のみやびやかな女官達で、彼女等はのどかに歌ひ、また舞ふが、その中のお轉婆娘は、突然千年も新しくなり、チャアルストンを踊り過ぎて卒倒する。そして、「左娘」の流行言葉で、戀愛を論じ、社會を論じる——例へば、

『プロレタリアとはなんだ。』

「無産階級の連中が正直に働いてることをいふのだ。』

また、口論つ果に突き合ひをしながら、

「ボクシングです、西洋の喧嘩です。」

ところで諸君、「左娘」とは[illegible]きりんだが、淺草の新しいはやり言葉らしいのだ。「左ぎつちよ」と同じ意味の失敬千萬な異名なのだ。紅團の一人が、

『弓子のやつ、このごろ、左前になつた。』といつたとすれば、彼女が「左傾」した、といふ意味のだしやれなのだ。

—春子はあれで、モダン左褄だ」といつたとすれば、彼女はコロンタイ女史の「赤い恋」かぶれの女だといふ意味のだしやれなのだ。ただ、本場のロシアとちがふところは、日本の「左褄」の本領たがはず、金を取るのだ。

なにしろ、光源氏が懸文の色文を、オペラ風に歌ひながら読む、浅草だ。この大宮人達には、あらゆる時代の日本語をいちどきに使つてみせるのだ。

そして、フォックス・トロットを踊り、座員一同お手々をつないで、ジャズ小唄を歌ひながら、めでたく幕が——「楽屋」なのだ。

地下鉄の塔で、春子が「エッフェル塔の花嫁」を気取るくらゐは朝飯前だ。

ちやうどその時、ジャン・コクトオの「エッフェル塔の花嫁」の舞台に似た書割を、ちやんとカジノ・フォウリイが使つてゐたからだ。

紅團の子供が、どこからかトラックで乗りつけるのも、また驚くことはない、浅草だ。

街はもう歳暮の売出しで、安博覧会のやうに、旗だ、幕だ、絵札だ、提灯だ、楽隊だ、浅草へまでマネキン娘だ。

そのごてごての色の中を、「白熊」といふのだが——の毛皮を七八枚背負つて、ゐたりゐたり泳ぐ朝鮮人の白熊は——五階の窓から、私達の眼も直ぐ拾ひ上げたが、その白が電車道を横切らうとする鼻の先へ、トラックが止まつて、飛び下りたのがお子供二人だ。

『あら、チビだわ。向島のトラックぢやない、ね、言問の? どうしたんでせう?』と、春子は立ち上つた。

女の子は弓子の家のチビだ。

臙脂の外套に、口紅はもちろん、眉まで描いて、オペラの子役風だ。だが、彼女と手を組んで、食堂の入口に立つのも不釣合なくらゐ、男のチビは乞食の子だ。

少女だけ生真面目な顔で入つて来て、春子の耳にささやくのだ。

『あいつはいけないの。ここへ上る途中で、手すりの振釘を一本もう盗んぢやつたの。』

『お前だつていけないよ。毎晩水族館の楽隊のところへつかまつて、足拍子を取つてるつていふぢやないか。』

『あら、よその子だつて、たあんとやつてるわ。』

と、それはけろりとしたものだが、しかも、さも秘密の用らしく、春子の袖を引つ張るのだ。

『なにさ。』

『姉ちやんが、[illegible]に集つてるし、それから——』

『塔に集まるつて、ほんたう?』

少女がうなづくので、私達が屋上へ出ると——さつき女給がハアモニカを吹いてゐた白い壁から、男のチビが飛び出して来た。

『およしつたら、いけないわ。』

少年は笑ひもせずに、今度は稲荷堂の横へもぐり込むのだ。

そして、拾つて来た紙屑を撒けると、[illegible]座の千社札が、中からぱらりと落ちて、半紙一面に弓子の字だ。

彼はそれを振り回しながら、

『それ見ろ、どんなもんだい。』

塔の花嫁

三十六

この男のチビは、女のチビと一しよの時だけ、「紙チビ」と呼ばれてゐる。紙から紅團へ拾はれたからだ。紙は紙でも、芝居の紙だ。芝居小屋の裏に捨てた大道具——その紙を塒とし

てゐたグレだつたのだ。

この頃は香具師のサクラの子役で食つてゐるが、怪しい場所の怪しい隠しもの――例へばスリの財布をかぎ出すことが名人だ。だから今も、稲荷堂の横の植木なんかへ、直ぐに目をつけたのだ。拾つたのは紙屑だが、手習ひのやうに楷正しく弓子のペン字だ。

ぱらりと落ちた、紅座の千社札を――船チビは拾ふなり、マッチで焼いた。

私が半紙をのぞきこむと、

――陽炎は消えて明るく、稲妻は消えて暗し。

『なんて書いてある。』と、船チビだ。

私は受け取つた紙を小聲で讀みながら――そして、私達四人は螺旋の階段を尖塔へ登つて行くのだ。

「霧は朝薄く、夕に深し。
霧は朝深く、夕に薄し。
陽炎は消えて明るく、
稲妻は消えて暗し。
紅葉は緑より染め、
花は實より咲く。
川音は靜かに、夜騒がしく、
海の音は晝騒がしく、夜靜かなり。
木の花は朝に開き、
草の花は夕に開く。」

『なんのこと、一たい？ おみくじの文句？ ちよつと見せて。』と、春子は懐手を出したが、

「ああ、分りました。」

『これが暗號かい。』

「樂書だわよ、ただの――ぢやない、氣取つてんのよ、樂書まで、弓子さんはね。」

『それがどうして、こんなところに捨ててあるんだ。』

「反古の後を、私つけて歩いてやしないわ。――まあ、誰かが弓子さんを口説いたとして頂戴。明日手紙でお返事するわ。その返事をもらふと、この謎々――いくら考へたつて判じられやしない。塔へ登つたお蔭だわ、そいつからかはれてたことがやつと分つたの。しやくにさはつて捨てたんでせう。上に來てる誰かよ。――なあんて、それだとまだ、弓子さんも可愛いわね。明日返事するなんて、あの人に限つていひつこないわ。」

尖塔――教會の屋根の鐘樓のやうな、固いコンクリイトの塔だが、東西南北に四つの見晴し窓、窓の框は金網、壁は柵だけ緑色で、上は海水色、固い天井にガラスの裝飾燈だ。

その東の窓に男が四人顔を寄せてゐて、一せいに險しく振り向いたが、春子達だと分ると、

「船チビ、言問から來たか。」

東の窓は――目の前に神谷酒場。その左下の東武鐵道淺草驛建設場は、板圍ひの空地。大河。吾妻橋――假橋と鐵骨組。架橋工事。東武鐵道鐵橋工事。隅田公園――淺草河岸は工事中。その岸に石工場と小船の群。言問橋。向う岸――サッポロ・ビイル會社。錦絲堀驛。大島ガス・タンク。押上驛。隅田公園、小學校。工場地帶。三圍神社。大倉別邸。荒川放水路。

筑波山は冬曇りにつつまれてゐる。

春子は懐手のまま、窓々をぶらぶら歩いて、東京の屋根を見渡しながら、

「田舎だなあ、東京つて。古下駄の市、その下駄も泥のついた――裏返しに並べたみたいな村だわね。」

「村だつていやがる。えらい。」と、一人の男がいきなり彼女を抱いて接吻した。

第二の男は黙つて彼女に接吻した。

後の二人も順番を待つて、静かに接吻した。

その間、春子は懐の手も出さずに、眼を閉ぢて立つてゐたが、

「淺草の塔の花嫁なの、私。――お前口紅持つ

てないの?」

白いボオト

三十七

口紅はないか——と聞かれた時に、チビは西窓の下に鼻を押しつけてゐた。

彼女の肩に手をかけて、船チビが彼女の唇をねらつてゐるからだ。

その西窓——芥箱が横に倒れたやうな淺草郵便局。雷おこしの大看板の金文字。淺草區役所。傳法院。廣小路——暮の店飾り、その飾りは甲蟲の祭のためかと思ふ程、大通りを這ふ自動車と電車、入營祝ひの幟、突きあたりにコンクリイトの東本願寺、銅の屋根が鈍い夕映だ。廣小路の右側に、仲見世の屋根と、活動街。左に電話局と、大きい湯屋。上野松坂屋上野驛。灰色の上野の森と汽車の白い煙。博物館。帝國大學の安田講堂と大學圖書館。ニコライ堂。靖國神社。新築の國會議事堂。——さうして廣い町波の上に、晴れた朝夕ならば、富士が美しいのだ。

口笛を一つ吹くのと、彼等の接吻は同じらしい。

コオルテンの背廣に朴齒の高下駄、青いセルロイドの日除けを額にかけて、帽子なしの男が四人目の接吻をすませると、

「おい、船チビ、自轉車の與公のことづけは?」

「うん。紅丸を見張つてるけどな、苫の窓をしめちやつて、中でなにしてつか分らん。いい加減に河岸へつけろつて、與公に傳達したよ。」

「それでか、船が言問橋まで下つて來たよ。」と、小型の望遠鏡を片眼にあてたまま、振り返つた男は鳥打帽だが、二重回しの裾から袴が見えて、大學生風だ。

もう一人は角帽だ。それから、下町の若旦那風の男だ。

「だけどおれ、ここで今明公の手紙を拾つたんだよ。」

「手紙?」と、四人が一せいに驚いたところを見ると、彼等が捨てたものではないらしい。

彼等の驚きで、私もまた北窓から振り返つたのだが、その北窓は——この屋上の通風筒と萬國旗。仲見世。今半の金の鯱。仁王門。鳩。五重の塔——一番上の屋根瓦だけが緑だ。落葉盛りの大銀杏。修繕中の觀音堂は、十二月に入ると直ぐ、足場の上にトタン屋根を張り、周りを簾で圍ひはじめたが、諸君も仁王門脇の本堂修繕寄附受附所によ[illegible]り、その上屋の圖では間口二十七間、奥行二十八間半、高さ百二十尺、五間から十間の杉丸太五千本、角材二百五十石、そして波形トタンが四千枚だ。境内の木立の冬枯、吉原。千住ガス・タンク——東京の北の果は、寒い冬曇りだ。

「霞は朝薄く、夕に濃し——何だい、これは。」と、男達は弓子が袂から出した反古紙をのぞき込んで、

「一晴[illegible]としたつて[illegible]前、おれ達がここへ來るつてことを、明公は知らねえんだよ。」

「まだだれか後から、明公に頼まれて[illegible]來るんぢやないか。」

「しい、[illegible]な奴がここへ入り込んで、そいつが捨てたのかもしれんさ。」

「船チビ。」と、コオルテンの男はその紙を裏返して見ながら、

「お前、下の食堂のストオヴで、この紙をあぶつて來な。字が出たら直ぐ歸つて來るんだ。よく、氣をつけろ。」

「旦那、五錢くれ、コオヒ。」と、船チビが私に手を出すと、チビが横から、

「あたい持つてるわ。」

「なあにね。」と、鳥打帽が私にいふのだ。

『ゆうべ、弓子のうちで一騷動持ち上りましてね、僕等今朝になつて知つたんですが、今日はまた危くて淺草にゐられないはずなんです。それにまた赤木つて大變な男と船に乘りやがつたさうで、心配だから見張つてやるんです。あの强がりにはこつそりね——。』

『おい、見ろ。』と、望遠鏡の男が窓から叫んだ。

『今、明公が胸を出して、引きずり込まれた。白い外套の腕が、眞赤だ、血だぞ。』

『おや、水上署ぢやないのか。』

白いモオタア・ボオトが、言問橋の水影を蹴立てて來る。

酸漿市と異人娘

三十八

白いモオタア・ボオトが言問橋の水影を蹴立てて來る。

といふところまで書いて——二月から七月、さうだ、ざつと五月の間、私は「紅團物語」を休んでゐたのだ。

『白い外套の腕が、眞赤だ、血だぞ。』と、地下鐵食堂の尖塔から望遠鏡で見てゐた男が叫んで、白い外套の弓子は、紅丸の苫屋へ引きずり込まれた。——私はそこから續けなければならないのだ。

しかし、その大河は冬曇りの夕暮だつたのだ。しかも冬もまだ一九二九年——街は歲暮の賣出しだつたのだ。

今はもう中元の賣出しだ。

螢賣りと蟲賣り——そんな夏のしらせは、夜の公園で、もうとつくに季節おくれだ。花賣娘の花よりもだ。

あの花——道端に娘が立つて賣る花束の花は、たいてい季節おくれなのだが、諸君は淺草で、あの花を買つてみたことがあるか。あんなに散りやすい花はない。

『私も花束でも賣らうかな、銀座風に。』といふ春子に、

『銀座風の花賣娘はもう出てるがね。常盤座の裏や、公園劇場の裏に。』

『あら、お買ひになつて?』

『阿呆らしい。』

『花ぢやないわよ。——花束に名刺を入れてくれるんですつてさ。ちやんと書いてあんの、いついつか、どこそこで會ひませう。』

『それで散りやすい花を賣る?——どこで會ふんだらう。』

『だから、しつかりおしなさいつていふの。あの花はね、雌蕊の頭から花莖の中へ、爪楊枝が突き刺してあるし。——一目見た時好きになり、二目見た時につこり笑ひ、三度見た時心が踊る。誰もうれしい喜び繪……なあんて、あのガセミツ屋と同じ手かもしれないわよ。いかもの道場の淺草ですもの。サロン名畫なんかいい方なのよ、ガセミツ屋の寫眞。活動女優の海水着だつたり——これなんかまあ、裸體美人にはちがひないけれど、ふるつてるのはね、あはや落花なんとかつて、劍戟映畫の寫眞さ。それから、熱海の海岸で貫一がお宮を蹴つ飛ばしたところ。極彩色でね。靴下をはいただけ、あとは一絲まとはぬ人魚の群——が、女學校の運動會のマス・ゲエムの寫眞。——もつとひどいのは本だわ。よくあるぢやないの、女の雜誌の附錄に、小さい本が挾み込んだの。あれよ。その小さい本の表紙に、白い紙をはりつけて——たつて紙の下から、(編物手藝の栞だとか、諸にも出來る西洋・支那料理だとか、ちやあんと字が透いて見えてんのにね。いんちきの中身を、香三寸としぐさよろしく——ほら、つまり、小說でもそんなの[illegible]りませう。』

『淺草のレヴィウみたいにね。』
『ほう、同じいんちきでもね——生きた娘の裸は、突つついたら赤い血が出ますわよ。』と、蛙のやうに口の中の海酸漿を鳴らすのだ。
七月九日と十日は、淺草觀世音の功德日——諸君のうちに觀音信者があるならば、功德日とは、

一　月一日（百日に相當）
二　月晦日（百日に相當）
三　月四日（九十日に相當）
四　月十八日（五十日に相當）
五　月十八日（百日に相當）
六　月十八日（五十日に相當）
七　月——九日（四萬六千日に相當）
　　　——十日（四萬六千日に相當）
八　月二十四日（四千日に相當）
九　月二十日（六千日に相當）
十　月十九日（一千日に相當）
十一月七日（六千六十日に相當）
十二月十九日（四千六百日に相當）

つまり、例へば私と春子のやうに、七月九日に參詣すると、その一度の參詣で、四萬六千日參詣したのと同じ功德があるといふのだ。そして、これらの功德日を三年三ケ月缺かさず參詣すれば、「諸願成就、病氣平癒、子孫繁昌、六親眷屬成佛」の御利益疑ひなしといふのだ。
かういふ便利な數字をどこから割り出したか、凡夫の知るよしもないが、ただ、知らずにほかの日に參詣する人間は、まことに馬鹿を見るわけで、だから、四萬六千日には、大晦日でさへ夕方に扉のしまる觀音堂が、夜中まで盛裝して客を迎へ入れるのだ。
おまけに酸漿市だ。
綠の酸漿畑を、そのまま逆さに一ぱいぶら下げて——これこそ梅雨晴れの夏ではないか。この日賣る雷除のお札からは、これこそ雷鳴が聞けるのだ。

三十九

南洋人種の行列が、淺草寺の朝の鳩を飛び立たせる。これは觀光團だ。
朝鮮の女が黑い帶で白い袴の腰へ、朝鮮風に子供をしばりつけ、跣足でアスファルトを歩いて行く。ズックの靴は手にぶら下げてるのだ。
一晩に幾人も通る。松竹座前の松淸通りだ。
電燈の消えた松竹座の軒では、支那の子供が四人鬼ごつこをしてゐる。四人とも辮髪だ。猿のやうな聲をあげながら、テケツ前の圍ひの眞鍮の金棒を、猿のやうにくぐつて逃げ廻るのだ。
小屋はもう打ち出しの後だ。淺草裏から吉原あたりのカフェへ、辻占や、豆や、するめを賣り歩く子供だ。そろそろ商賣の時間だ。日本人、朝鮮人、支那人——カフェに一晩四五十人の賣子が來るから、一目で支那人と分らせるために、辮髪が入用だ。
さつと私達を追ひ越して行く白人の娘に、手を上げて春子が呼びかける。
『ワアリヤ。』
——ここで私は、春子に諸君を案内させよう。
といふのは、映畫の「淺草紅團」では、弓子が死んでしまつたことになつてゐるのだ。彼女が紅丸の上で口に銜んだのは、〇・〇〇〇五の亞砒酸丸六粒だつたのだが。
『ワアリヤ。』と、春子が呼びかけた彼女等は、色のある激しい風が吹くやうに、かつかつと蹄の音を立てて、野の子馬のやうに、街を切つて行くのだ。
娘二人が腕を組んで、口笛吹いて、靴下なしで、眞赤な、それも踊の衣裳みたいな薄い布で、下着なしで、帽子なしで——全く皮膚の色のある奴隷は、白い女の肌を見ても見ないと同

じだといはぬばかりに、日本人の色情を小馬鹿にして、

『おい。舶來の不良少女がのさばり出したのか。』

『だか知らないけれど、この頃いやに毛唐がふえたわよ、公園に。いよいよ國際的な暗黒街になるんだらう、なあんて、誰かがいつてたつけ。なあんて、私のでたらめよ。』と、春子はまた波止場の別れのやうに、手を振り上げるのだ。

『ミラア。——ワアリヤ。』

私は驚いた。——春の高い娘がくるつと振り返ると、短いスカアトをちよいとつまみ上げて、小腰をかがめながら、こちらへ投げキッスをしたのだ。

『だから嫌ひさ、毛唐は。』と、ぷいと春子はそつぽを向いた。

『十六よ、あの子。すうつと伸びた脚が、いかにも娘々してて、女が見てもいい氣持なの。そこへ行くと日本の踊子なんて、小娘の腰は水氣がなくて、こちこちしてるばつかりね。姉のミラアは十八ですつて。雷門から電車で歸るところだから、あれはだめさ。別口を辻本に幡んでごらんなさい。十五六の可愛い白人があるつていつてたわ。仲見世を道中させてるんですつてよ、やつぱりレヴィウの踊子と見せかけて。——今のあれはね、二人のほかに十四の妹と、二十一の姉と、四人揃つて萬盛座で踊つてる、ダニレフスキイ姉妹。』

靴下なしのロシア娘の脚は、透き通る白さに、匂ふ油をぬりこめたつやつやしさで、それがアスファルトの夜を叩いて行く時、綠の酸漿と同じやうに、浴衣の裾の素足よりもずつと、まことに夏の色であつた。

舞臺で踊る彼女等の肌は汗でびちやびちやになる。白粉を流す汗が、見物に見えるのだ。

一月も前の六月の初めでさへ、電氣館で踊つた春野芳子は、この汗を氣にしてゐた。出すまいと思へば思ふほど汗が出ると、私にいつてゐた。

ところで、弓子が赤木を紅丸へくはへこんだ頃には、水族館の踊子の足が、寒さで眞赤なビイドロだつた。

その間ざつと七箇月——そこで諸君、淺草の七箇月を寫さうとするのは、昨年のお日さまを追つかけるよりもおぼつかないことを、諸君は知つてくれなければならぬ。

今も、松清町巡査派出所の横で、春子は紙白粉でも出すやうに、例の「淺草紅座」の千社札を、帶の間からひつぱり出して、

『私さやうなら。宿から渡つて來た、左利きの彥に厄介なことを賴まれてます。稍にもないけれど、これも淺草の掟でござんす、なあんて居なほつて、あばよ。』

「宿」とは新宿といふ意味だ。

赤帶會

四十

その交番は、廣小路が松清通りへぶつつかつたところにある。

淺草の本願寺の裏門を出て來て左だ。田原町の停留場の西だ。いふまでもなく、雷門が淺草の東の表大門で、松清通りが西の表大門だが、一年間に淺草へ流れこむ人波がざつと一億人、興行物と、飮食店と、藝者屋へ落ちこむ金が、年にざつと千二百六十萬圓——なんて統計だし、西の入口の煙草屋は、一日の賣上げが二百圓だつたとかいふ。

その煙草がばつたり賣れなくなつた。煙草屋は公園と道を距ててゐる。復興局の道路改正が、その半町を昔話にしてしまつたのだ。煙草を買ひに渡るには廣すぎる。だから、例

へば、ロシア娘が蓮つぽく歩いても、人目にふれない片側が出来たわけだ。

「今夜は青札がいるのかね」と、私が依子の手の千円札を覗き込んだのも、この淋しい側の人通なのだ。

「あら。さういはれれば赤いのばつかりね。青札を使ひ過ぎちやつたわ」私、とても軟派なの、これでみると――」

彼等の千円札は、彼等の罪のないいたづらであり、下町風なしやれなのだ。しかしまた時としては、彼等の名刺となり、身分證明書となり、危險信號ともなるのだ。

掌に隠れてしまふ、厚ぼつたい凧紙に、勘亭流で「淺草紅座」の四字を抜き出し――赤刷りと、青刷りとがあるのだ。電車の信號やなんかの眞似だ。

例へば、依子がよその男をつかまへて、雷門前の明治製菓賣店へ行くとする。入口に青い札を落しておく。通りがかつた仲間がそれを見つけて、男にたかる。

また、彼等はいつ、どんな人間に、どこで、どういふ目にあはされるかも分らない。相手の目を盗んで、汚い支那料理屋の表に赤い札をはりつける、暗い空地へ行く道に赤い札を撒いておく。危險を報せて、助けを求めるのだ。

彼等の一人が行方不明になると、彼等は第一番にヅケヤダイガラにあたつてみる。

「こんな札の落ちてるの、見なかつたか。」といふのは、これらの浮浪人は残飯をもらふお禮として、夜更けや朝早く、飲食店の前を掃き清めるからだ。

「私には赤札は用なしだけれど、昔の赤帯の義理にひつかかつちやつた。繪馬倶樂部のやつらの誰を、彦が教へてくれつていふの。街から乗り込んで来たつて、勝手が分らないでせう。彦とぶらついて一々教へてやるんだけど、面倒臭いな。めじるしに、この赤札を背中に一々はりつけちやはうかな。繪馬のやつら――ほんたうよ、繪馬のヨタ公だつて、赤札つきで生身を賣りたいでせうよ。」

「しかし、君が危い仕事を買つて出ることもないだらう。」

「危い？ 何が危いのよ。――これでも女のはしくれでござんすよ。男に叩かれるほど、みつともなくも、陽氣でもないわよ。」

そして、ふらふら肩を搖ぶつて笑つたが、

「ちよつとごらんなさい、あの二階。」

花模様のジン・ピイスが、衣紋掛で壁にぶら下つてゐる。それから、大きい薔薇のある婦人帽だ。

山交貸館の木店た。それも、洋館にくつついた粗末な日本建の方に居た。

疊の眞中の籐椅子で、下階の女が早くから少女を膝に抱いてゐる。

「シグネ・リンダラとレナ・リンダラ、フィンランドの雙生姉と踊子――帝京座に出てんのよ。」

賣れなくなつた煙草屋の三円映畫だ。衣裳だけが華やかだ。彼等の貧しい商行だ。

四十一

昔の赤い帯――と依子はいつたが、昔と呼ぶほど遠いことではない。

臙脂色の一重帯がえらい勢ひで流行した夏を、諸君はたやすく思ひ出してくれるだらう。女店員や、電話交換手や、夜店歩きの下町娘や――たしか、さういふ彼女等が、とりわけ愛した帯だつたのだ。その臙脂色は不良少女じみた匂ひがした。

その頃、依子は淺草で赤い一重帯をしめてゐたのだ。「赤帯會」といふ少女の團體があつたのだ。

ところが、赤帯は天下の流行だつた。これは娘達に恐るべき魅力だ。だから、赤帯會は淺草ばかりでなしに、東京市内のたいていの盛り場に支部を持つほどだつた。赤い帯をしめる――ただそれだけのために、會員となつた娘も多かつたのだ。いや、赤帯は天下の流行だつた。赤帯は赤帯會の特權ではない。ただその流行が會の名であつたために、娘達が誘ひこまれたのだ。

諸君は諸君の子女のために、なによりも先づ流行を警戒し給へ。

賢い諸君は、赤帯會の娘達を笑ふかもしれないが、淺草公園だけでも、どんなに阿呆らしく娘がだまされ　またどんなにたわいなく賣り飛ばされるかを、諸君は知つてゐるだらうか。

『秋には、もう散り散りだつたんだらう。一重帯をいつまでもしめられやしない。』と、この間私は絹子にいつた。

『ええ、それで困つちやつて、秋から黒帯にしたらどうかなんて。――黒繻子のよ。』

それには、ちやうどその頃淺草に「黒帯會」といふ少年の團體があつたのだ。おまけに、赤帯會と黒帯會との間には、幾組もの戀人があつたのだ。

『でも、いひ出したのが洗髪のお糸でせう。そりやあお糸は、あれさ、この間日本館のエロエロ舞踏團の――新橋や素足で吾妻下駄、つて、氣風もあれのあねご――といつたつて、まだ十八九だつたけれど。まあ黒繻子の帯がおあつらへ向きでせうけれど、誰にも似合ふとは限らないわ。ぶつぶついふ人が出來て――女の團體つて、どこへいつてもだめなもの。私みたいな馬鹿は、女の缺點に生きるのが、結局一等のんきつてことを知つてんの。弓子もお糸も、私を見ならふがいいの。』

――この間お糸に紹介してくれたのはいいが、私と歩くのはヤバイ(危い)からお止しなさいつていふんだ。』

『ほんたうにお止しなさいまし。紅團とはわけがちがつてよ。昔はね、お糸が公園を洗髪で歩くと、血の雨が降るつていつたものよ。しばらく姿を見せないと思つたら、あきれちやつた、デパアトの賣子に化けてたんですつて。懐を温かくして舞ひもどつたのよ。きまつてるわ。さんざ初心な賣子を誘惑して、遣手婆あのやうによ。』

淺草と「百貨店」――この絹子の想像を、諸君は荒唐無稽だと思ふか。

淺草を根城にして、大河一つ渡つた本所の[illegible]小梅に本部を持つ、祕密の會員組織がある。會の名も分つてゐるが、今は書けない。女の會員には百貨店の娘が多いさうだ。何々百貨店の何階の何の賣場とまで、紅團員は私に教へてくれる。その娘を見るつもりで、私は百貨店へ行くことがあるが、彼女等の近くでは、氣の毒で頭をあげて歩くことが出來ない。是は一例だ。しかし、この會はお糸とは關係がない。

この一例なんかを荒唐無稽だと思ふほど、世間知らずの諸君はまさかあるまいが、「淺草の世間學」はもう少し荒唐無稽だ。

例へば、信州の製絲女工と淺草――これには私も膽を冷したのだ。

絲の信州遂に滅びるか。

七月の十三四日頃の新聞で、このやうな大見出しの記事を、諸君は讀んだにちがひない。

下諏訪、岡谷、平野、川岸、湖南、上諏訪、宮川、玉川、永明など、諏訪郡の三百餘の製絲工場が、絲價暴落のため一せいに休業した。その休業は、やがて信州一圓から、山梨、岐阜――國中に擴がらうとしてゐる。

もう十萬近くの女工が失業した。

彼女等はどこへ行くか。
野や山の古里へ歸るだらう。結びついて資本家と戰ふだらう。――しかしそれは、彼女等のすべてではない。
そのすべてではない彼女等を、淺草の怪しげな女街の一隊が迎へに行かうとするらしいのだ。

黴とレヴィウ

四十二

瓢簞池がまつ青だ。淀んだ水の中に、夏は黴のやうに青い藻が繁殖するのだ。
その岸から、ちよつと小暗い木立を上ると廣場だ。夜の二時過ぎだ。
ベンチの前で、二十人ばかり圓くうづくまつてゐる。覗いてみると、小さい蟹だ。絲でしばつた蟹を兩手に持つて、はさみ合ひをさせてゐるのだ。蟹はもう土埃で白くなつてゐる。鋏をだらりと垂れて動かうとしない。白服の巡査もそれを見てゐる。苦笑ひしながら立ち去つて行く。
『おい。』と、アルパカの黒ににせパナマ帽の男が、突つ立つたまま聲をかけた。
『どうだい、仕事にありついたかね。』
『へえい、旦那。芝浦まで出かけてみたが、やつぱりあぶれやしてね。こいつを拾つて來たんでさ。朝になつてごらんなさい、子供が喜びます。』
『ふん。』
圓陣の男達が一せいに見上げたので、突つ立つた男はちよつと得意らしく、肩をばちつかせながら、ロハ臺を見廻りに行つた。全く怪しい刑事は、公園の古顏にちよつと聲をかけてみたくなるかもしれないほどの、今日この頃なのだ。
失禮千萬にも、彼の顏を知らない新入りのオカン(露宿者)が、餘りに多過ぎるのだ。
『蠅や、南京蟲や、病みほうけた猫や、日射病にかかつた馬や、男や女や、目のまはるほどいそがしい酒場や、街の見世物で――夏だ。
夏は一つの曲馬である。さうだ。夏にはありとあらゆることが起る。冬は皆がたいてい屋内で過す。ところが、夏には往來で生活する。』
だから、夏はベンチや軒下が天國の寢臺となる。淺草の夏の大地ほど、澤山の寢臺を揃へたホテルは、日本に二つとあるまい。
『浮浪者を寢臺ではじくことは絶對に出來ない。』と、いはれてゐる。
役所の統計はあてにならないやうだ。彼等は役人の調査なぞがある場合、あらかじめそれをかぎつける。そしてよそへ姿をくらます。だから、このホテルの泊り客が、五百人か、八百人か、誰も數へることが出來ないのだが――それにしても、この夏は餘りに多過ぎるやうだ。
ちやうど瓢簞池の藻のやうに、夏になれば彼等が色に現はれ、また急に繁殖するのはいふまでもないが――それにしても、この夏は餘りに多過ぎるやうだ。
何故かと問ふまでもない。
團十郎の銅像の刀の柄の盗まれたことさへ、新聞記者は不景氣のせゐにしたではないか。
「缺食兒童」だとか、「一家心中」だとか――諸君は變ちきりんな言葉のおなじみになつた。「不景氣」と「エロチシズム」――この二つの言葉ばかりを、新聞記者が書いてゐる一九三〇年だ。
人間の不景氣話では、もう刺戟がない。そこで、
『人泣かせどころか、佛殺しの不景氣。』と、やつたもんだ。淺草觀音の賽錢しらべだ。不景氣のために反つて殖えた――それも人ごころだが、それは去年のことだ。今年はお話にならぬ

減り方だといふ。

「佛樣もさびしい。」といふ見出しで、お盆の贈答品や供物の動かぬことを書くのだ。

淺草にしてもさうだ。歳暮の賣出しと、中元の賣出しをくらべてみ給へ。仲見世商店街は、とにかく大賣出しの門を立て、藍と白の市松模樣の庇を軒に作り、庇に朝顏の花――いや、もしかすると、晝顏か夕顏かもしれない、貧しい造花だが、ラッパ形の花を咲かせてゐる。しかしほかの店通りは、笛や太鼓どころか、店飾りもろくすつぽしないのだ。

五月の三社祭には神馬に跨つてゐた少女が、六月にはもう彼女の體で一家を養ふはめになつたつて、不思議はない。

私が左利きの彦と知り合ひになつたのも、實は不景氣とつながりがあるのだが。

「浴衣を買つてくんないか。」と、ゆすられて――。

四十三

マロニエの青葉薫る、巴里はシャンゼリゼエ界隈のオペラ氣分を漂はせる――ドラマチック・ソフラノ、オデソト・ダルテ、女史[illegible][illegible]

松竹座の看板の文句だ。七月の第一週のレヴィウだ。

第二週は、

――眞珠の裸體美から發散する、滿々たるエロ情緒――ロシア舞踏家、ワレンナ・ラトセンコ女史の一行

萬盛座は、タマアラ、ミイラ、ワアリヤ、ルファ――ダニレフスキイ姉妹のメトロ舞踏團だ。ジプシイ・ダンス、コザック・ダンス、スパニッシュ・ダンス、ジャズ・ダンス、人魚――ロシア娘が甘いなまりの日本語で「神田節」や「當世銀座節」を合唱するのだ。

帝京座の「混成舞踏團」には、シグネ・リンタラとレナ・リンタラ。

――フィンランドの歌姫と踊子。

といふ看板で、母のシグネが「おけさ節」を歌ひ、十ばかりのレナは花冠に日本の振袖、「佐渡おけさ」を踊るのだ。

かと思ふと、黒繻子の服にシルクハット、片手にステッキといふ男裝で、

――私はチャアリイ。チャップリン
　いつも陽氣な道化者
　…………

と歌ひながら、例のチャップリンの家鴨歩きとコザック・ダンスとを、まぜこぜにして踊るのだ。

この少女ほど拍手喝采される藝人は、七月の淺草の演藝館に見當らない。

一たい淺草の大衆は、異國の藝人に親切だ。殊にそれが子供だと、文句なしだ。

レナは後から棧敷へ、彼女の繪葉書を賣りに來る。美しい。私は十年も前の支那少女、林金花を思ひ出す。

諸君、少しの間、私の悲しげな思ひ出を許してくれ給へ。

「林金花が新宿に出てるよ。」

今年の正月の三日だつた。私は新宿の寂れな天幕劇場へわざわざ行つたのである。林金花は出てゐずに、いんちきなレヴィウだつた。――餘談だが、その傍の小屋に、熊娘がかかつてゐた。この春、淺草の仲見世裏に出た、美しい熊娘だ。

ちやうどその熊娘の小屋のあるところ、今半の傍のあすこが昔、曲馬小屋だつたのだ。その曲馬小屋で林金花を見たのだ。

レナと同じやうに十ばかりだつた。不思議な「曲馬運動」をする少女の細い體は、不思議な蟲のやうに美しかつた。高貴で殘酷な蟲であつ

た。彼女もやはり、見物席へ彼女の絵葉書を賣りに來た。

ところが、この間全く思ひがけなく、十年振りで、私は林不花を見たのだ。

「おい、出よう。」なんと醜くなつて――横ぶとりに、ちんちくりん、なんだ、あの卑しい顔の口紅。

左利きの彦はあつけに取られて、私の後姿を振り返つたまま、ついて來ようとしないのだ。

淺草の江川大盛座だ。

また私は、七月の淺草では人並拔けて美しい、ワアリヤ・ダニレフスキイの足から、アンナ・ルボウスキイを思ひ出すのだ。

しかし諸君、思ひ出のついでに、一九二三年の私の文章を讀んでくれるだらうか。

秋雨の神樂坂を、金龍館の歌劇女優の一花形と、その實の母の同じく歌劇女優とが、相合傘で通つた。母が傘を持つてゐた。娘は母を下女のやうに從へて、しかし非常におとなしげに歩いてゐた。

舞臺と多分家とから、燒け出された裏への見える娘の洋裝と母を見て、人は、この娘を憎むよりも、娘を大事がる母に好意を持つやうな、二人の様子であつた。

この娘は――書いても別に迷惑とはなるまい――この頃映畫に返り咲いた、相良愛子のことなのだ。

四十四

七年前の文章の續きだ。途中を省略して――

話は元に返る。秋雨の神樂坂を歌劇女優の相合傘が通つたのは、大地震から十五日ばかり後である

その時、私は四五年前の淺草の冬の小雨を思ひ出した。

日本館か歌劇で榮えて、澤田柳吉までがその舞臺で「月光曲」を奏いた頃のことである。革命に追はれて來たロシア人の一團が出演した。

ガン・スタルスキイ夫人といふのがゐた。鶴見の花月園にゐる舞のニイナ・ハヴロヴァも踊つた。そのなかに、アンナ・ルボウスキイ、ダニエル・ルボウスキイ、イスラエル・ルボウスキイといふ三人姉弟があつた。姉のアンナが十三四、イスラエルが十歳前後であつた。アンナは氣高く美しかつた。

中學生の私は友人Aと、アンナが樂屋口から出るのを待つてゐた。三人ルボウスキイは、ぼろを着たロシア老人がついてゐた。アンナの外套も、よく似合つてゐるが破れてゐる。私はその貧しさに痛く驚いた。

親子四人は、御國座の北にあつた、ロオラスケエトの前にたたずんだ。アンナの首が私の胸のところにあつて、私はアンナの顔を覗いてゐた。

アンナは泥濘で傍の中學生の足を踏んで、眞赤になり、にいつと笑つた。中學生も眞赤になつた。

それから四人は池の端に出て、父のルボウスキイが燒栗を極く少し買つた。御國座の向うのみすぼらしい安宿に入つた。

私達は安宿の二階を見上げて立つてゐたが、

「明日隣りの部屋に泊つてアンナを買ふ。五十圓もあればいいだらう。」と、Aが云つた。

しばらくすると雨になつた。それで、御國

座の軒に雨を避けるつもりで振り返つてみて、驚いた。その壁に身を寄せて、アンナの二階を一心に仰いでゐる人がある。さつき足を踏まれた中學生だつた。

このアンナを長く憶えてゐた。

一時、淺草公園を背景として、藏前の煙草工場の女工とか、活動小屋の女給とか、曲馬娘や玉乘娘とか、卑しい女ばかり出る、長い奇妙な小說を書かうと思つてゐたが、そのなかに、このアンナと、曲藝運動の支那少女林金花を取り入れようと考へてゐた。

もう一人、外國人で悲しかつたのは、今年アメリカから來た、ウォオタア・サアカスの團長である。吾妻座の燒跡に百フィイトの梯子を作つて、その頂上から小さい池に、團長が飛び下りを見せた。

五十フィイトから鷗の姿を眞似て飛ぶ大女があつたが、これは鷗に見えて、美しかつた。

團長は團員と、日本流に云ふなら、水盃をして梯子に登るのださうだ。頂上で星空に祈りを捧げる。それが寒い風の強く渡る空であることが下から知れる。

ぐうと反身になり、頭を先に落す心持で後向けに飛び、空中でゆるゆる體を一廻轉して、池に落ちる時足が下になるやうにする。

この放れ業を演じながら、團長はひどく無愛想であつた。梯子を登る時見物へ笑顏一つ見せもしなければ、水に落ちてからは、二手三手抜手を切つて岸に着くと、後をも見ずに樂屋へ歸つた。そして始終、いかにも自分のやつてゐることに興味のなささうな憂鬱な顏をしてゐた。

この團長を私達は面白く思つた。隣りの十二階の塔の上から團長の飛び下りるのを見たいと思つた。

○

長い奇妙な小說を書かうと思つてゐた。——と、この文章のなかのその小說を、諸君、私は十年たつた今やつと、この通りに書き出したのだ。

四十五

しかし諸君、オペラ花やかな頃の思ひ出を少しばかり語るのに、實をいへば、私は諸君に何の遠慮もいらないのだ。

十年前のオペラ女優が、レヴィウの踊子に返り咲いた、今の淺草ではないか。

そこで、一九三〇年の七月にかへつて——レナ・リンタラなぞの、帝京座、混成舞踏團、だが「ジャズ・かつぽれ」なんかにはびくともしない私も、

『こいつはいくらなんでも混成過ぎる。』と、膽をつぶしたのは、豐年齋女海坊主と松山浪子の混成舞踏「手綱」だ。

例の「和洋ジャズ合奏」——そして、浪子はセイラ服の青い眼の水兵、女海坊主は振袖の日本娘、それが白布の手綱をあやつつて、手ぶり身ぶり、戀人ごつこをするのだが、水兵は西洋の踊を踊りながら、娘は日本の踊を踊りながらだ。

六月の昭和座に天勝一座で踊つてゐた澤モリノまでが、そこへ「混成」して來て、十年前と同じ「子守」や「ジプシイ生活」——顏を動かすと、猿のやうな皺だ。

それにくらべると、音羽座の木村時子は、

『あんなにしやあしやあづうづうしい女つて世の中にあるでせうか。』と、さすがの不良少女もあきれかへるほどの、全くづうづうしい若さなのだ。

日本館はエロニロ舞踏團の第一回公演だ。

——イット・ガアル裸形の大亂舞。

諸君、看板の言葉ですぞ。
東京館の花岡竹夫、藤村梧朗、藤田露子など、白鳥レヴィウ團の外題に、
——[illegible]大行進曲。
——なんでもかんでもグロテスクだよ。
日本館へはまた、白痴の脂肪のやうな河合澄子が歸つて來た。
澤カオルは觀音劇場から淺草劇場へ引越した。田谷力三や神田貞一も、消えたり現はれたりだ。オペラ役者の藏ざらへも、もう澤山ではないか。
電氣館のパラマウント・ショウの第四回と第五回——これは六月のことだが、春野芳子のジャズ・ダンスと南榮子のチャアルストン、これだけがやつと一九三〇年らしい踊なのだ。
しかし、「孤城落月」の女義太夫を追つ拂つた初音館まで、
——超尖端的大演藝大會。
と、看板を塗り替へるのだ。
「なんでもかんでも」が、「ボオドビル」だ。「ヴァラエティ」だ。「レヴィウ」だ。
そして、河合澄子舞踊團の「唐人お吉」と、カジノ・フォウリイの「キッス・ダンス」とが、餘りに「エロ・ダンス」で、その筋のきついお叱りだ。
春子と歩いてゐて、ロシア娘に追ひ越された翌る日に、私は右のやうな淺草のレヴィウを、片つぱしから見て歩いたのだ。
しかし、
——深刻な生活苦から
狂人帝都に氾濫す
各病院とも大入滿員
輕症者は續々退院させ入替ふ
これはレヴィウの看板ではない。新聞の大見出しなのだ。

左利きの彥

四十六

淺草の浮浪者はたいてい少しばかり氣が觸れてゐる。淺草は大きい瘋癲病院だ。しかし、露宿者のすべてが、乞食や浮浪者ではない。いふまでもなく、失業者の群が流れ込んだ、この夏なのだ。もちろん、乞食や浮浪人も殖えはした。
ところが、不景氣で殘飯もすくない。乞食の貰ひも減る。ベンチの數にも限りがある。——しかも、それらにも古くからのきびしい繩張りがある。それを犯せば、淺草を追はれるばかりでなく、命がけのしごとだ。とはいつても、瓢簞池の藻のやうに繁殖した。彼等の「[illegible]時代」だ。
私は聞いたことがある。——ドヤ(木賃宿)からオカン(露宿)へ落ちて來た、日稼人夫なんだらう。なにかうまい仕事にありついたオタンチンで、おきまりのカブトをかぶつて、エンタを吹かして、さてその殘りを花火にはたいてしまつた。公園に歸ると、ぽんぽん花火をあげたのだ。
「考へたもんでさ。やつは[illegible]で[illegible]がきかないもんだから、花火で人氣者にならうつてんでね。夜が明けりや、もとの金魚チャプでさ。」
螢の喧嘩を見てゐたのも、いづれはロハ臺にもありつけない、宿替の連中なんだらう。
見渡すと、ベンチは滿員だ。一間に三人ならべばもう横になれないのだ。
私は暗い木立へそつと歩き出した。コンクリイトの反橋の上で、
『ラッパちやねえのか、そりやお前。ピタニノル(旅に出る)にしたつて、第一ノリヒンは確かか。』
『天性ヒンマガレ(成金になれ)ねえ奴だな。しつかりしねえ、信州にやお前、スメ(娘)が足の

踏みどころもないほど轉がつてんだぜ。それが皆ジュロク臭えし、路頭に迷つてつから、コマス(たぶらかす)のもたわいはねえ。』
『面のハクイ(美しい)ナゴコマシ(色魔)がそんなに揃ふかい。』
『かまはねえ。ヨウラン(洋服)でランパッちやふんだ。(衣裳で體裁を飾ること。)』
『ヨウランは二三十もありやいいか。』
『ガセツウ屋(贋札屋)みていな話だ。チギ百パイ(千圓)、一人あたりな。』
『うつかりベシャルな。(しやべるな。)』
『世直しにしつかりやつつけようぜ。』
私は膽を冷して立ち去つたのだ。
諸君、これは浮浪者ではない。三人の男が女工誘拐團を、失業の信州へ派遣しようといふ密談なのだ。
彼等の夢のやうな儲け話であれば幸だ。しかし、彼等の日頃の遣り口と十萬近い失業女工と――實はありさうなことなのだ。
そこで信州の警官よ。社會運動家を警戒するよりも、彼等を捕縛してくれ給へ。
だが、よく考へるまでもなく、そんなことは私の甘い願ひだ。そんな小細工は彼女等のために、何の役にも立ちはしない。私は默つて手近な公園裏の少女の話をしよう。
『その子はね、ただ痛いつてことしか知らないんでさ。自分のやつてることの、意味つてものが、まるで分らないんだ。』と、左利きの彦が眞面目に笑ひながらだ。
『浴衣を買つてくんないか。』
彦が突然いひ出したので、私はふと厭な顏をしたらしいのだ。
『婦人倶樂部浴衣の(南國の夕)つてやつだ。五本絽の方がいいつていやがつた。』
『いい人にくれるのか。』
『ちえつ。なぐられますよ。あんまり見くびつておくんなさんな。弓子なんか、どんな風にあんたとつき合つてるかしんないが、おれはまだ女にくれる浴衣代を人にゆするほど耄碌はしねえ。』
『だつて女の浴衣ぢやないか。』
『分んねえ人だな。十四の子供にくれるんだよ。おれがじやらだんに、浴衣をやらうかつていつたのを、子供があつさりと眞に受けたから、神さまみてえにこちらを疑はねえから、欺したかねえのさ。そりや相手は賣物ですよ。一週間前に賣り出したつて、賣物にはちげえないさ。だけど、浴衣で女つ子の心を引かうなんて、おれはそんなけちな量見ぢやありませんぜ。玄關口から――もつとも玄關があるやうなしやれた家ぢやねえが、浴衣をはふり込んどいてさつさと歸るつもりだ。』
『なんだつて？ 五本絽の(南國の夕)？』
『ありがたう。おれだつて三圓四十五錢がねえわけぢやない。でもどうせ、ろくな金ぢやない。あんたの金の方がまだましだ。清く出しておくんなさい。その子に會はせまさ。そいつをちよこちよこつと書けや、浴衣の十反や二十反、一晩で買へら。』
つまり、白矢一家の再興のために、新宿から淺つて來た「左利きの彦」――と知らない源氏屋が、その少女の家へ連れ込んだといふのだ。
黄菊、白菊、紅菊を盛り上げた貨物自動車に、私が淺草へ行く道で出會つた日、それはまだ六月のことだつた。
そして彦は三社祭の日に淺草へ來たのだ。
「淺草名物血祭」の三社祭にまぎれて、また物騷な連中が少しは淺草へ舞ひもどつたといふ噂だ。

四十七

彼は角帯をしめ、その上へ[illegible]

のやうな布をぶらさげ、隣りの三疊との間の障子を、硝ガラスに黄色い紙をべつたりはりつけ、その六疊にはたつた一つ小さい古鏡臺——かういふ家の鏡は、どうして破れてるのが多いんだらう。それから衣桁に手拭地の女の浴衣が、四五枚投げかけてある。

　彥はごろりと肘枕で眼をつぶつてゐた。なんといふ靜かだ。そはそはと梯子段を上つたり下りたりする源氏屋が、をかしくてならない。ふいと舞ひ込んだ他人の家といふものは、隱れ家のやうに落ちつける。

　十時半過ぎだ。活動寫眞を見に行つたといふ娘が歸らないのだ。

『歩いて歸るんでせう。女の子の足でぶらぶらだと、ちよいと遠いからね。』

『どつかほつつき歩いてるんだらう。』

『まだほんの子供ですぜ。一人で出たつていひますから、行くところなんぞありやしません。』

『まあ君、落ちついたらどうだ。君がぺてんだつていやしないよ。女がゐなくつたつてさ。』

『へい、私は直ぐこの裏ですがね。そんな、夜歩きするやうな子ぢやありません。二十錢しか持たせてやらないつていひますし。』

『それぢや君とこは、不二家つて喫茶店の近くかね。』

『旦那、このお近くで？』と、じろりと顏を上げた。

『でもないが、あすこの看板娘も古いもんだからな。』

『へい。』

『おみつも子供を產んでからやつれたつて話だが、どうだい。』

『一向そんな方のことは——。』

『お前さん、さつき公園からずゐぶん廻り道しなすつたな。水天の六の前を通つたらう。』

『どこでござんすか。』

『知らんのか。仕立屋一家と張り合つてる、掏摸仲間の親分さ。ラヂオ屋とはしやれた內職をはじめたもんだが、可愛い娘があるらしいね。少し縮れつ毛の、桃割の娘と二人で、おやぢが店先へ出てた。水天の六次つて親分だが、この間出て來たばかりだから、おとなしくしてるんだな。おれは顏だけしか知らないよ。親分と一しよに食ひこんでた小僧に聞いたんだ。公園のヨタ公なんだがね、四五日前電車の中で六次に會つて、歸つてみると、ズボンのポケツトに五十錢が四枚入つてる。相變らず親分の腕は凄えつて、いやに嬉しがつてやがつた。』

『もう歸りさうなものだがな。』と、源氏屋はこそこそ立つて行つた。

　婆さんが二階へ上つて來た。マツチ箱を一つ彥の前へおいた。澁紙色の長い顏の鼻の先に、老眼鏡をひつかけてゐる。彥は寢ころんだままだ。五分ほどして、また上つて來た。青い安ガラスの灰皿と、雜誌を持つて來て、

『ほんたうに御退屈さまです。蜜豆でも食べてるんでせう。子供の本でごらんになれませんけれど。』

『少女倶樂部』だ。正月號から六月號まで、六冊揃つてゐる。

口繪の令孃達の寫眞をばらばら眺めてゐると、隣りの三疊で誰か眼を覺したらしい息の音だ。坐り直つたが、覗くところがない。

娘が下へ歸つて來た。源氏屋が二階へほつとした顏を見せた。

『おい、隣りに誰かゐるぢやないか。』

『なあに、同居人ですよ。女ですよ。下へ下りて貰ふからようござんす。』

『寝てるのを起すのか。』

『そんなことはちつともかまひません。私から話します。』

　そこへ蝶のやうに娘がお茶を持つて來たが、

彦もあつけに取られたほど、その娘が型はづれであつたといふのは、元祿袖の浴衣から脛が出て、水色の兵兒帶、肩までのお下げ、小學校から『唯今』といふいたづらつ子なのだ。

少女倶樂部

四十八

少女はまだ化粧したことがないらしい。二度目に一人で上つて來た時は、もう額を赤らめてゐなかつたが、

「活動面白かつた？ なにを見て來た。」といふ彦に、

『ええ。（腕）つていふの。』と、急に小學校の友だちじみた調子で、立つたまま近づいて來た。

『帝キネだらう。』

『いいえ、マキノ。』

『さうさう、帝キネの（腕）つてのは、まだ封切らないな。——一時間も、もつと待つたんだよ。』

『さう？ 三の輪へ行つてたの。』

『淺草より遠いのか。』

『いいえ、近いわ。——兄さん、これを着てよ。』

と、大きい源氏車のある浴衣を衣桁から下して、彦の足にぽいと投げるのだ。

『ちよつと待つてね。』

『ああ。——（少女倶樂部）を毎月讀んでんのか。』

『ええ、二三年前からずつと取つてるわ。』

『ずゐぶんいい浴衣があるぢやないか。』

『綺麗ですわ。』と、少女は肘枕の彦の肘へ膝をぶつつけるやうに坐るのだ。

「婦人倶樂部浴衣」の柄見本だ。「少女倶樂部」六月號の折込み廣告が、雜誌から長く擴がつてゐるのだ。

『一枚買つてやらうか。』

『さう。』

ぱつと明るんだ額が彦を驚かせた。いきなり買つてもらふことだけを思つた額つきだ。じやうだんだとは考へない。譃だとは考へない。をかしいとは考へない。客と女だとは氣がつかない。

『どれがいいかしら。』と、いきなり一心に柄見本に見入る子供だ。ありがたうとも、すみませんともいはない。

『後でゆつくり見ることにしよう。』

『ええ。——ちよつと待つてね。私お蕎麥屋へ行つてくるわ。』と、小學生が遊び友だちを待たせておくやうに、少女はどたどた梯子段を下りた。

彦の足の踝から先が疊へ出る、子供の敷蒲團だ。

隣りの三疊の女がこそこそ出て行つた。下で蕎麥をすする音が聞えた。

『君も食べるんぢやない？』

『ええ。——お客さまがあると、家中でお蕎麥をおごるのよ。』

『お祝ひかね。』

手術臺の上でのやうに、少女はきよとんと彦を見てゐる。

『小學校をいつ出たんだね。』

『この三月。』

『十五だつて、ほんとか。』

『いいえ、十四。』

そして、明るく上向きに見開いた眼の上へ、兩手で白い紙を擴げながら、爽やかに音讀するのだ。

『…罹病シテモ不注意ノママ經過スルト、身體各部ニ種々ナ故障ヲ生ジ、本人ノ不幸ハモトヨリ、遂ニハ家庭ノ圓滿ヲ亂シ禍ヲ子孫ニ及ボス…。』

『おい。』

『いつまでとつといてもいいのね。』

『ええ?』
『本當に實演しないつて、書いてあるわ。』
『君はずゐぶんむづかしい字が讀めるんだな。』
尋常四年の頃から(少女倶樂部)を見てたんだね。』
『淺草の、子供圖書館へ、今でも、よく――。』と、聲が切れ切れで、額に少し皺をよせるのだが、なんといふあつけらかんな顏つきだ。
彼等は直ぐ標見本縮の前へ立つて行つた。
『どれがいい。』
『さうねえ。――私には分らないわ。お母さんに聞いて來るわ。』
彦も下へ下りて、ちらつと部屋を覗くと、女が三人――さつきの婆さんと、骨張つた三十女と、それから、赤い毛絲のシャツと腰のものだけの若い女だ。若い女の圓い體が美しい。

四十九

これはよけいな話だが、淺草の藏前に私のいとこが一人ある。十四で女學校の一年生だ。彼女の小學校の同級生が二人、「紫團」といふのに入つたさうだ。その一人は名高い喜劇役者の娘だ。
紫團なんて――紅團のしやれではない、ほんたうの話なのだ。十四のいとこは、私が「淺草紅團」といふ小說を書いてゐることも知らないし、淺草紫團といふのが何をしてゐるかも知らないのだ。ただその二人は尋常の頃から、
『男の人と手紙のやりとりをしてんのよ。』
しかし私のいとこは、さきごろ私一人のところへ來て、子供に留守させておくわけにもゆかず、約束のある淺草へ連れて行つたのだが、電氣館の樂屋で、ジャズの踊子と六七人で寫眞をとつたものだ。
『をぢさん、あの寫眞どこかの本に出やしない?』と、少女はそれから私と會ふ度に、そのことばかり心配してゐる。
淺草へ行つたことが、先生に分るといふのだ。彼女の女學校は、觀音さまへお參りするほか、淺草へ行くことを禁じてゐるのださうだ。
私もまた、彼女が淺草公園なんか見たこともない令孃であることを望むものだが、とにかく、十四の少女といへば、私は彼女しか知らない。
そこで、彦のいつたことはもつともだ。
『綺麗かの、綺麗でないかのつて、あんた、まだまるで蟲ですぜ。』
彦は娘を待ちながら、六冊の「少女倶樂部」の口前で「淺草」を知らない令孃[illegible]の寫眞をうんと見たのだ。
『そいつらは綺麗でさ。色氣たつぷりにしなを作つて氣取つてまさ。あんなんおちやありませんよ。――いつたい、淺草邊から吉原界隈にかけて、小娘がませてますがね、そこまでもゆかないんだ。』
何か買つてやらうと、男からいはれたことはまだないのだ。そのことに應じ方を知らないのだ。じやうだんを眞に受けるのでなくて、その二つの區別を考へないのだ。
『お母さんに聞いて來るわ。』と、今自分のしたことを忘れて、いそいそと立つて行く素直さが、左利きの彦を驚かせたのだ。
下の大人達が、それをぺしやんこにしはしないか。
しかし少女は折込み廣告がだらりと食み出した雜誌をぶら下げて、驅け上つて來るなり、
『(南國の夕)つてのが、私にはいいんですつて。』
『どれ。――曼珠沙華の圖案だれ。いやにお孃さん向きだな。』
『姉さんが見立ててくれたの。』
『姉さんて、赤いシャツ着てる人か。』

『ええ、さう。私の兄さんのお嫁さんなの。』
『兄さんは？』
『北海道へ働きに行つてるわ。――それからね、もう一人ゐたでせう、私の實の姉さん。』
『眞岡と五本絽があるらしいが、どつちがいい。』
『眞岡つてどんなの。』
『さあ、まあ手拭地の地のいいやうなもんかね。』
『絽がいいかしら。』と、少女の聲ははじめて、ふとためらひに曇つた。はじめて打算が働いたらしい。
『しかし、ここの家をよく教へといてくれんと分らんぜ。』
『ええ、地圖を書いとくわ。――これいい？』と、さつき讀んだ紙を拾つて、鉛筆を舐めながら、
『ここが龍泉寺の停車場、こつちが淺草、こつちが三の輪、分るわね。』
そして、番地と表札の母の名前を書いた。
母と一しよに見送るのだが、少女は下の部屋の障子から、首だけ突き出して、
『今度いつ來てくれる。明日？ あさつて？』
と、これはどうして一人前だ。

松旭齋天勝

五十

與謝野晶子先生考案の「南國の夕」を、私が左利きの彥にゆすられたのは、その翌る日だ。たしか、入梅の三日目だ。「婦人倶樂部浴衣」の絽は、まだ淺草の吳服屋へ來てゐないとのことだ。
『しやうがねえ、眞岡だが、一反三圓四十五錢と二圓四十錢、一圓ばつちけちしたと思はれたくねえ。もう一枚おごんなさい。』
『(淺草紅團)といふ(文藝春秋浴衣)はどうだね。』
『幾らだ。』
『二圓三十錢だ。』
『一圓のでいいよ。』
『今夜これから持つてつてやるのか。』
『見くびつておくんなさんな。浴衣の一反や二反で。――明日の朝出かけるんだ。郵便配達のやうに投げこんで來るだけさ。二度と行きやしませんよ。』
翌る朝は眞夏の暑さだつた。
少女の家は裏表からりと明け放つて――といつても、表口も裏口も變りがない。玄關がない。表口の直ぐ横がお勝手だ。お勝手から姿さんが手を拭きながら出て來た。下も三疊と六疊だ。向うの六疊で、少女が一人浴衣を縫つてゐた。きちんと坐つた横顏に、南の光だ。おとなしい家庭の午前だ。
『ちよつとあの子を呼んで下さい。』
少女は生眞面目な顏で立つて來た。
『これ――。』と、浴衣の紙包みを突き出すと、彥はこんな喜びの顏を見たことがない。少女の顏中が何かぱつと開いたのだ。
『絽はまだ出來てないさうだから、悪いのをもう一反買つて來た。』
『さう。』とだけで、走りこんで母になにかいふと、紙包みを古簞笥の上において、そのまま彼女は奥の縫物の前へ坐つてしまつた。
『ほんたうにありがたうございます。』と、入れ替りに母が、
『ちよつとお休みになつて、汗を拭いていらつしやいまし。』
『いや、水を一ぱいくれませんか。』
コップの水を渡しながら、
『お前もうそれはお止しよ。』
『ええ。袖を半分つければいいのよ、お母さ

ん。』

『ちよつと涼んでらつしやいまし。』

『いや。さよなら。』

少女が針を休めて、ぢつとこちらを見ながら高い聲だ。

『歸んの？　また二三日のうちにね。』

『およろしいぢやございませんか。』

『いや。』

『さやうですか。――これ。』

母に呼ばれて、少女は立つて來た。おや、眼が濡れてゐる。彥はふいと口を滑らせた。

『活動へでも連れてつてやらうか。』

『さう？　ちよつと待つて。着物を着替へるわ。』ともう帶に手をかけて奧へ行くのだ。

『たわいがねえ。女の子をかどはかすなんて。』と、彥はにやにや笑ひながら、

『一人ぢやだめだよ。誰か誘つて來な。』

『さう？　姉さんでもいい？』と、梯子段の下から二階を呼ぶのだ。

『ねえさあん。』

五十一

1、名曲拔萃・音樂大合奏。2、お伽劇「繪筆の魂」。3、ミュジカル・コミック。4、新封切・大魔術。5、オオシャン・ダンス。6、寸劇――A「旅は道連れ」。B「寢臺車」。7、カアボオイ・ダンス。8、寸劇――C「謔」。D「釣竿ガアル」。9、イギリス薔薇戰爭哀話・魔術化「大砲」。10、新舞踊「五節句」五景――A「お正月」。B「雛節句」。C「端午の節句」。D「七夕」。E「菊の節句」。11、空中大冒險曲技。12、ユウモア新魔術「エヂプトの樂園」。――松旭齋天勝一座のプログラムだ。

六月七日初日の昭和座だ。新築地劇團が五月の末に、「何がわれわれを淺草に進出させたか。」てなことで、「何が彼女をさうさせたか」や「筑波祕譚」を出した、その後だ。

諸君、

――イット

I T

いつと

と、三通りに書いた旗が、七月の風に翻つてゐる。觀音劇場だ。

日本館が「エロエロ舞踏團」とうまい名をつけると、松竹座までが、「ダンセ・エロ」と黑黑々だ。どこもかしこも看板に、「エロ」――しかし、こんな尻切れとんぼの毛唐なまりはまだいいが、近頃淺草の「インチキ・レヴィウ」の看板の文句を採集してみたら、色情狂の手帖――まあ一度諸君も夕方、池の端の小屋の裏通りを歩いてみるといい。この裏通りは晝でもゆすりが出るといふが、「エロの女王達」の樂屋口だ。涼みに出てゐるのだ。そこで諸君は、ダニレフスキイ姉妹が美しいなんていふ私の言葉が、夜の光のまどはしであることを知るだらう。彼女等の足は日本人より黑いのだ。

ところで、「インチキ・レヴィウ」にくらべて、天勝一座のプログラムは、さすがいかにも立派だ。魔術の道具は眩い裝飾だ。若い踊子たちの客への表情が巧みに美しい。だが、そろそろ孫のありさうな天勝が女學生になる。どの窓にも出て威張り過ぎる。松岡へンリイの空中曲技は素晴しい。珍らしや、澤モリノが買はれて踊つた。――しかし、左利きの彥が驚いたのは、舞臺からいろんなものを見物席へ投げるのだ。「繪筆の魂」の畫家に扮した澤モリノが、野球の投手の身ぶりで、餡パンの紙袋を三四十も、棧敷や土間のあちらこちらへ投げる。

「淺草の廣小路の藤屋のパンはおいしい。」といふせりふが、その前にある。パン屋の廣告だ。

魔術の舞臺から、男の助手が天勝の寫眞の

カアドを百枚も飛ばす。鋭い蝶のやうに土間のうしろまで鮮やかに飛ぶのだ。寫眞の横にちやんと化粧品の廣告が刷りこんである。

森永のキャラメルとピイスを投げる。

松岡ヘンリイは林檎を投げる。

その度に見物席がどよめき立つ。家族的だ。子供が多い。

そして、彦の少女は一々椅子の上に立ち上つて、手を振り上げるのだ。だから必ず彼女に向けて投げてくれる。姉の膝は土産物で一ぱいだ。歸り路まで少女ははしやいでゐる。

しかし、彼女等に別れた足で、彦は私のところへやつて來て、

『魔術つてものをはじめて見たが、阿呆のしやれた夢だね。行つてごらんなさい、明日でも。ところがさ、姉がめそめそしやがつて――つまりね、今日は痛かつたとか、痛くなかつたとか、いつてる義理の妹が見ちやゐられない。しかし、おふくろは義理の嫁だから承知しねえ。亭主つてのは、あつしが思ふに、北海道の監獄部屋へでも賣られたんでさ。それでね、あつしに今日どうかしてくれてんでさ。實はもうかういふことになつてしまつたつて歸つていへば、一度さうなつた以上、おふくろも許すだらうつてね。さういふ人情がかつたことは眞平だ。こんなに見損はれたことはねえ。――ところであんたどうです。一つ功徳に買つてやつちや。色白の圓つこい女で、捨てたもんぢやねえ。』

土手のお金

五十二

前科七十何犯――牛込の横寺町、旗本の娘と生れた身が、淺草公園の淡島さまの奥で、のたれ死するまでにだ。

淺草の名物女「土手のお金」といへば、ああ、あれかと、その醉つぱらひ姿を思ひ出す諸君も少くないだらう。――人だかりの眞中へ仰向けにぶつ倒れて、毒々しい啖呵を切つた婆さんだ。

例へば、近頃のレヴィウを見せると、淺草の土地つ子は笑ひながら、

『日露戰爭の頃でせうか、(海女の水潛り)といふ見世物がござんした。あれから見ると、海水着のダンスなんか、お上品なもんでさ。』

大きい水桶であつた。海草を植ゑ、深い底には貝殼が光つてゐた。水中眼鏡に赤い裾よけ一つの海女が、水の中に姿を振りみだして、歌麿描く鮑取りの女よろしく、底の貝殼を拾ふのだ。水中ダンスだ。「人魚のお松」といふ花形まで出來ようといふものだ。

しかし、そんな土地つ子の昔話を聞くまでもない。土手のお金が六十二歳で死んだのは、あの肉襦袢の玉乘娘が淺草に見られなくなつたよりも、もつと後のことなのだ。

明治十七年から建つはずでいつまでも建ちさうにない雷門――この淺草の表門さへ、紙屑問屋のおぎんといふ娘のために焼けた淺草である。昔をいへばきりがない淺草の女だ。

水茶屋の茶汲女のはじまりが二百年前だ。次が楊枝屋の女だ。揚弓屋の矢取女だ。もう明治だ。銘酒屋の元祖だ。そして、新聞縦覧所の女だ。恭會所の女だ。姿とろ屋の女だ。射的屋の女だ。――十二階下の銘酒屋だ。もう大正だ。「大正藝者」だ。大地震だ。十二階の塔といつしよに、いろんな女が消えたのだ。

しかしまた、嘉永年間、輪王寺宮お用人の植木師森田六三郎が宮家から賜はつた庭園――なんていふ、今日の淺草の見世物小屋で一番古い由緒つきの花屋敷、それかあらぬか、今だつてあやつり人形だとか、山雀の曲藝だとか、また人形師の名人安本亀八の菊人形花やかなりし

頭を、微かに思ひ出させる活人形だとか、昔なつかしいものを見せてはゐるが、

――花やしき　納涼　晝夜開園　芝居

ヤマガラ　アヤツリ　レヴイウとダンス。

諸君、「電光ニュウス」なのだ。やはり電光で描いた象と猿とが、これらの文字をひつぱつて、入口の上を歩いてゐるのだ。ネオン・サインで表を飾つた小屋は殖えて行くが、花屋敷の電光ニュウスは、一九三〇年の夏の浅草の「斷然トップを切つた」のだ。

最も古風な花屋敷がこれだ。消えたいろんな女のかはりに、この「電光ニュウス」まがひの女が、浅草に現はれてゐるにちがひない。さういふ女達も、追々と私は諸君の前に拾ひ上げてみよう。

だからといつて、その昔の「不良文士」、蜀山人こと太田南畝なんかの亜流と、私が思はれるならば残念だ。

――銀杏稲荷問於笠森稲荷曰　蓋聞君地有阿仙者　孰與吾家阿藤

蜀山人の「阿仙阿藤優劣辨」だ。

當世は、レヴィウの踊子の評判を立てたりする文士、例へば水族館に出入りする文士のことを、浅草の喫茶店やミルク・ホオルに根を張つてゐた青年達は、この頃「不良文士」と呼びならはしてゐるのだ。

とにかく、笠森お仙と鏡をきそつたお藤は、二代目瀬川路考が市村座でお藤に扮した時の衣裳、濃い茶色が路考茶といふ名で流行した、あのお藤だ。本柳屋仁平治といふ楊枝屋の娘だ。店は觀音堂裏の相生銀杏の下にあつた。呼賣りにも歌はれた。勿論、彼女の錦繪も賣れた。

錦繪が今のブロマイドだが、田原町の紙屑問屋の娘おぎんも、一枚繪に描かれたほどの小町娘だつたのだ。その繪姿を見たのが病みつきで、やがていひなづけの新吉からおぎんを奪つたのが、本所三笠町の井上良太郎といふ、一千石の旗本の次男だ。婚禮の夜に新吉のつけた火が、雷門も焼いたのだ。

それは一八六五年の慶應元年、もう明治が足もとに迫つた世の中だが、紙屑問屋の娘や親にとつては、直參の旗本といふものが、まだ眩しい魅力であつたにちがひない。土手のお金もその旗本の娘だつたのだ。

五十三

お金は十六で川越へ娼婦に賣られた。旗本が明治維新で落ちぶれたのだ。川越を振出しに浮草だ。そして、明治三十年頃、三十一で東京へ舞ひ戻つたのだ。吉原土手の居酒屋だ。酒亂と、前科と――「土手のお金」の名が高くなつた。

しかし、五十に近くなると、彼女はもう街に男の袖を引いて、木賃宿を渡り歩くよりしかたがない。それもやがて六十が近くなつては、物かげで稼がなければならなくなつたのだ。土の上のおきふしだ。「シキ」から「ツトシヤ」へだ。相手がたいてい浮浪者だからだ。六十一で野たれ死したのは、お金のせめてもの死花だつたのだ。死ぬまで女として働いたからだ。ツブやタイガラまで落ちずにすんだからだ。酔つぱらつて喉笛が切れたからだ。

浮浪人のそのまたどん底の浮浪人は――といつても、決して浮浪するわけではなく、さうだ、いはば風化した人間の姿、いや、朝から夜まで同じベンチに坐つてゐる、翌る日もまた坐つてゐる、だから風化するのももつともだが、諸君は明公の言葉を思ひ出してくれるだらうか。

「分つた？　あれもざんぎりお仙の一人、たいていあんなものよ。浅草の底ね。だけどまだ、走るだけ女の冥加さ。浮浪人は決して走りやしないから。」

そしてまた、風化したほどの彼等はしやべらないのだ。盛り場の眞中で言葉なしに暮すのだ。

『レディ・バアドつて、毛唐はいふでせう。』

これもある朝公園で弓子の言葉だ。

『レディ・バアド？』

『てんたう蟲のことよ。女の鳥ですつて。支那名は紅の娘。――女もおてんたうさまの下で、朝化粧するやうになつちや、もうちよいと浮べないわね。』

植込みの圍ひの鎖に腰をかけて、若い女が二人コンパクトで、朝化粧してゐるのだ。帶のうしろが皺になり、夜の土がついてゐる。

共同便所の手洗ひの水道栓にゴム管をつけて、ある食べもの屋が食用の水を汲んでゐる。

野鼠が二三匹、ベンチからぶら下つた露宿者の足の、古いゴム足袋を噛つてゐる。――この鼠は淺草の朝で最も私を驚かせたものだ。昆蟲館の裏で見たのだ。

化粧をすませて、彼女等は歸つて行く。昨夜は「ソトシキ」だつたのだ。

水茶屋、楊枝屋、楊弓屋、新聞縦覧所――この流れの下のもう一つの流れを、諸君は聞いたことがあるにちがひない。けころ、提重、勧進比丘尼、夜鷹、それから今のゴウカイヤだ。宿なしお勝、稲妻のお玉、阿呆のお幸、すが目のお久――その名が活字になつてゐるゴウカイヤも多いが、土手のお金は斷髪のおよしのやうに乞食の子供でもなければ、馬鹿のお清のやうに生れつきの薄のろでもないだけに、侗更女の階段を底まで下りた典型なのだ。

そこで、お金よりも二年も早く稼ぎはじめた龍泉寺の少女はどうなるか。

また諸君は、「弓子の姉のお千代が、おてんたうさまの下で朝化粧する女」であることを知つてゐる。

ドイツ狼犬

五十四

鉛の板をしきつめたやうなアスファルトが、桃色に染つて光つてゐる。と、まだ目覺めない街に散らばつた赤い色が、なんと鮮やかに浮び上つてゐることだ。電車の響のさやけさが、午前五時だ。

言問橋を染めた桃色の朝日の中には、昨晩の尿のあとがだんだら模様だ。しかし隅田公園は大地に描いた設計圖のやうに、裝飾が少く、清潔な日だ。つまり、向島堤と淺草と河岸の二本の直線の眞中を、言問橋が結んでゐるのだ。

隅田川の流れは、日が射せば黄色く、日がかげれば泥色だ。しかし、橋の面には輕い櫛のやうな欄干と、鉛筆のやうな照明の柱のほかに、何の鐵骨構造もないので、一枚の力強い、單純な鐵板の直線の晴々しさだ。筑波の山々や、まして富士まで見える晴れは珍しいが、橋の上に立つと、どこからとなく關東平野の廣々しさが流れてくるのだ。

一五八・五〇メエトルの長さだ。ゆるやかな弧線に膨んでゐるが、隅田川の新しい六大橋のうちで、清洲橋が曲線の美しさとすれば、言問橋は直線の美しさなのだ。清洲は女だ。言問は男だ。

だから夏子は欄干の鐵に頬をぴつたり載せて、

『おお、冷たい。』

彼女はいつも厚化粧して、十六だ。しかし、脣を脣で舐める癖がある。だからよく、濃い口紅を、脣の外へにじませてゐることがある。そこを甘く見て男がひつかかるのだ。

勿論今朝の口紅は昨夜ににじんだままだ

「橋に霧がついてるよ、チビ、遠くを見るとまだ降つてんのが分るわ。』
『さうかい。』
「眠いわね。』
「今夜から縛りつけて寝てくんないかな、千代ちやんの側とお前と、紐かなんかで。』
「頬つぺたに霧がくつついちやつた。』
右頬の白粉が吸ひ取られたやうにむらだ。
「霧だか露だか分んのかい。』
拾ひ臺の箱車が本所から淺草へ、桔梗色の羽織の女を乘せた圓タクが本所から淺草へ、支那そば屋の帰りが淺草から本所へ、青年野球隊が本所から淺草へ、マラソン選手が淺草から本所へ、また拾ひ屋が本所から淺草へ、白い紗のやうに脛がすつかり見える洋服の女が、靴下なしの下駄ばきで淺草から本所へ——女は明るくなつたので恰好が取れないといふ急ぎ足だが、なぜ裸のやうな薄物なのか、全く分らない。そのほかには勞働者が三四人きりで、まだ空自動車も通らない。
「大晦日の夜中はひどい霧だつたわね。霧のお蔭で弓子が命拾ひをしたわね。」
『ようつ。』と、船チビは板草履を兩手に持つて、もう橋の欄干の上に突つ立つてゐた。
そのまま綱渡りのやうなちよこちよこ走りだ。欄干は大人の乳の高さだ。親指と小指を擴げた幅だ。
『ちえつ、馬鹿にするな。』と、夏子は一散に走り出した。
洲崎埋立地の塵芥焼却場の大煙突のてつぺんから、避雷針の白金を盗んだ少年があつたといふ。
淺草の五重の塔の上に少年が巣食つてゐたといふ話もある。
團十郎の刀の柄を盗んだのも少年だつた。
さういふ放れ業はとにかく、例へば瓢箪池の東岸、花屋敷の前の築山の腹を割つて共同便所が出來たが、そのコンクリイトの屋上庭園、そこは涼み臺ともなり、寢臺ともなるのだが、欄干はやはり言問橋と幾らもちがはない幅だ。その欄干の上へ仰向けに眠つてゐる男を、諸君は見かけたことはないか。背が兩方へ食み出して、足を兩側へぶら下げてだ。
言問橋の欄干を歩く子供を、私はもう二三人見てゐるのだ。いつも朝だ。
「あれでやつと眼が覺めたよ。』と、隅田公園への階段を下りると、いきなり橋の下へ走り込んで、腹一ぱいの聲で叫び續けた。
「馬鹿あ。馬鹿あ。馬鹿あ。」
それも鋼鐵のこだまだ。

五十五

——この公園はまだ工事中で、特に芝生は養成中ですから、踏み荒さぬやう御注意下さい。開園時間、午前八時より、午後七時まで。
水戸屋敷跡の入口の立札の前に、お夏は待つてゐた。
橋の下のベンチから、乞食達が頭を上げた。
鋼鐵のこだまで眠りが破れたのだ。
鋼鐵の屋根と、コンクリイトの壁と、河風が吹き通しで、ここは夏向きの寢臺だが——ついこの間の七月の中頃に、乞食共の奇妙な祭のあつたことを、諸君は新聞で見ただらう。
古いバケツを叩きながら、ぼろ布を旗のやうに振りながら、乞食の群が醉つぱらつて、歌つて、踊つたのだ。餘りに貰ひが少い不景氣の世を直さうとする、やけ半分の、彼等の示威であつたといふ。
誰がなんといつたつて僕は、淺草の奥山にうろついてゐる犬が、どのぶちとどの白と夢中で、どの赤がどの黒に瓢箪池のほとりでひぢ鐵をく

つたかと、ちやんと心得てゐるお兄さんだ。』といふ、淺草通の佐藤八郎さんは、「東京獵奇座談會」といふものに出席して、開口一番、

『不良少年も食へなくなりました。』

それかあらぬか、「腕」はすたつて、美しい少女を團長にいただくことが、近頃のはやりであるといふ。

『馬鹿あ。馬鹿あ。』

いかにも銅鐵のこだまを喜ぶ子供のやうにどなつておいて、乞食達が起き上つたのでびつくりしたと見せかけて、船チビは一散に逃げて來た。

水戶屋敷跡は廣々と綠だ。花は夾竹桃がほんの少しだけだ。眞中に日本風な林泉があるが、芝生が眞青な西洋の朝だ。

『ほうら、やつぱり霧だわよ。』

靑の上を白いものが流れてゐる。足を洗はれる爽やかさだ。八時開園だが、子供や犬をつれた近所の人が、眼覺しに步いてゐる。

落葉松にかこはれた半圓の芝生に、娘とドイツ狼犬が坐つてゐた。異國人描く日本のやうに、娘は淸潔に整つた風景に似合はない亂れた姿だ。

犬が飛んで來て、夏子の肩へ足をかけたが、

『テス、テス、さう？ お前が一緖だつたら迎へに來なくともよかつたわね。』と、口のまはりを撫でてやつた。毛が冷たく、夏子の掌に血だ。

『あら。』と、娘を銳く見て、

『千代ちやん、テスがどうかしたの。』

『ええ、喧嘩をしてね。』と、お千代は笑つてゐる。

『よその犬と？』

『乞食みたいな人よ。』

『人間？』

『あら、をかしい。乞食が人間かつて？』

『じやうだんぢやないわよ、千代ちやん。きちがひだつて女だわよ。氣をつけたがいいわ。』と、夏子は千代子を立たせて、じろじろ眺めながら、

『霧で浴衣がこんなに濡れてるわ。昨夜深い霧だつたわね。こんなところで寢てたの？』

『ここぢやない。』

『どこさ。』

お千代は默つて步き出した。

『その乞食みたいなのに、テスが嚙みついたの？』

『おしやれの三吉かい。』と、船チビが口笛の合間にいつた。

『三吉つて、觀音さまの裏の噴水でいつも行水してる？』

『知らないの？ 千代ちやんの後をしつつこくつけて步いてるんだ。昔のお蝶にかんこみたいに、あいつ今にな、お千代三吉、三吉お千代つて淺草中歌つて步くよ。』

白い朝霧が芝生から薄れて行つた。綠は燃えるやうに地面から浮き上つた。

鱗模樣の浴衣に、小意氣な白地の博多の一重帶で、お千代は垢拔けた下町だが、どことなく體に、新しい垢がつきはじめてゐる。浮浪者の土の匂ひだ。夜も晝も見さかひはない。目を離せば、ふらりと公園へ行つてしまふのだ。

『あすこにゐたのよ。』と、アスファルトの河岸へ出ようとするところで、彼女は松並木の蔭のベンチを指さすのだ。

『あすこつて？ ああ、昨夜のこと？ 一人で寢たの？』

『四人で來たわ。その男が三人とも、テスにやられちやつた。』と、お千代はけろりとしたものだ。

五十六

ワシントンのポトマック河、ロンドンのテエ

ムス河、パリイのセエヌ河、ブダペストのダニュウブ河、ミュンヘンのイザア河――世界の都市の河岸公園にくらべても、水の量、眺めの廣さ、それから櫻の並木、風景ではひけを取らないと、復興局や庭園協會が自慢する隅田公園は、五萬六千八百七十二坪、向島側の長さが六百五十間――ちやうどその南の端、東武鐵道の鐵橋の傍から、夏子等は河上を眺めてゐるのだが、言問橋の上は朝の色に霞んで、アスファルトの濕つた光の平面だ。

河、柳の堤、歩道、櫻並木、歩道、櫻並木、車道、櫻並木、歩道、櫻並木――これが平面圖だが、櫻並木は短冊形の芝生の四列縱隊だ。柳の堤も芝生だ。

「磯臭いと思つたら、道理でこんなものがあるわ。」

「なんだい、こんなもの。」

「内務省 向島驗潮舍」といふ字が、船チビには讀めないのだ。

河向うの淺草河岸は、今日は日曜なのだらうか、吾妻橋際から橋場まで白いユニフォウム姿が一ぱい、それぞれネットを張つて、素人野球だ。

船チビは犬と走り出した。うしろから夏子が犬を呼んだ。また、チビが呼んだ。犬が大きい波を描いて、アスファルトを行き歸りしてゐる間に、お千代はベンチの上で居眠りをはじめた。

「新聞、新聞、職業案内つきの評判いかがです。」と、淺草公園のベンチへ、もう新聞賣子が廻つてゐる頃だらう。

白服の巡査が大勢で、露宿者を調べ歩く頃だらう。

小僧が目をこすりながら、連れの男の身元を説明してゐることもある。

「兵隊さんです。」

巡査に搖ぶられても、隣りの男はなかなか起きない。ぼんやり眼を覺すと、

「ちよつと來い。」だ。

男はあわてて、うしろの植込みから陸軍の軍帽と上衣とを拾ひ上げ、奉公袋をぶら下げて、小僧と一緒に交番へ行く。露宿の常連はそんなことを見向きもしない。

朝參りの客をねらつて、兩側の店が眠つてゐる間をぬすんで、仲見世にはもうテキ屋が、朝の一稼ぎのコロビ店を擴げる頃だらう。

地圖、空氣枕、二十日鼠、習字寶典、香水、パイプ、靴下、簪、粘土面型、十二支の腰さげ、半襟、生きた龜の子、二品十五錢屋、子供服、[illegible]かんべら。鑛石、下駄の緒、柚子の實、[illegible]つきの水蓮、リボン、小型水撒き車、花[illegible]、扇、簪、ゴム人形、[illegible]の笛、ハンカチ、佃煮干し、スカアト、指環、まむし黒燒、繃紙、[illegible]算盤つき手帳、古本、鳴く蟲、寒冷え知らず、[illegible]鏡、浮世暦、筆、切花、帽子、[illegible]の小箱、苗木、ズボン吊り、シャツ、下駄、財布、げんのしようこ――これは七月のある朝、私が見た仲見世の露店だ。

言問橋の上にももう、一ぱい五錢、三ばい十錢の冷しコオヒや、靴下止めや、梨や、硝子[illegible]や、五目並べや、詰め將棋や、水瓜の切賣りの店が出はじめるだらう。

しかし、犬だけが朝らしく、夏子も船チビも眠いのだ。

弓子に頼まれて、駒田が彼の叔父の家から運んで來た犬だ。お千代のために弓子がその小犬を訓練したのだ。

駒田といふのは、地下鐵の塔から望遠鏡で紅丸を見てゐた男だが、お春の戀人――それには、お春の身元を洗ひたててみないと分らない。

千葉の船形の宿屋の女中、十五六のお春は、

東京の藝者町の髪結ひが、一生の望みだつたのだ。世話してやらうといふ避暑客があつた。譲ではなかつた。旅費にと預けた金は卷きあげられたが、淺草の髪結ひの梳子に入れてくれた。今の昭和座の横の通り、有竹鳥獸店の近くにあつた髪結ひだ。

しかし、いつのまにか、ゐながらにして、自分が男から男へ賣られてゐようとは田舍娘に分らうはずがない。

玉音の街

五十七

『親切なをばさん。』——よくあるやつだ。

初めての客だといふが、調子のいい話し振りだ。四五人の梳子のうち、お春に特別目をかけてくれる。房州の生れかと聞く。言葉の訛りで分るといふ。

「房州には私、船形つてところへ一夏行つてたことがありますよ。」

「まあ?」

「あら、あの近くなの、春ちやん?——いいえ、私はとてもそんな贅澤な身分ぢやないけれどね、妹の子供が泳ぎに行つてて、まあお守役でね。」

お湯屋で二度も三度も會ふ。色白の肌を褒めそやしながら、黒い首を糠袋で洗つてくれる。その歸りにしるこ屋だ。芝居の切符をそつとくれる。行つてみると、いつのまにかをばさんが隣りへ來て坐る。若い男づれだ。をばさんの二階を借りて、大學へ通つてゐる書生さんだ。

『もつと切符を澤山貰へるといいんだけれどね、私が幾らあんたのひいきだつて、春ちやんばかりにあげるのは、ほかの梳子さんに春ちやんがねたまれることになるわ。だからさ、この次から春ちやんの休みの日に、私んちへ誘ひに來てくれるといいわ。』

「ええ、でも——。」

「いいのよ。あら、いいのよたつて、春ちやん私の家を知らないのね。今日歸りに教へとくわ。寄つてつてもいいでせう。」

その家は駒形だ。

駒形からなぜわざわざ公園の錢湯へ來るか。——お春がそれに氣がつけばよかつたのだ。

お春は茶の間へ引つぱり上げられる。をばさんが大學生の花やかな未來を、彼自身に向つて話して聞かせる。大學生は迷惑さうにはにかんでゐる。しかし、お春は女髪結ひが一生の望みの田舍宿の女中だつたのだ。花やかな夢には誘はれない。さつさと歸つてしまふ。だが次の休みの日には、をばさんを誘ひに行く。

そして、一月ばかり後だ。夜の九時過ぎに、をばさんが腕一ぱいの紙包みを抱へて、髪を結ひに來た。

「私上野の親戚へ行く途中なんだけれど、考へてみると歸りには遲くなると思つて、買物をしたら、大變な嵩なのさ。」

『なんでしたら、置いてらつしやいまし。』

「ありがたう。車賃を倹約させてやると思つてね、後でちよいと一走り、春ちやんにでも、家へ屆けてもらへませんかしら。」

「ようござんすとも。」

翌る朝、をばさんの家の二階で目を覺すと、お春は寢床の中に眞裸だつた。驚いて横に手をやつたが、やつぱり寢た。男はゐない。飛び起きて電燈をつけると、鏡臺の中に白い裸が立つてゐる。掛蒲團を剥つてみたが、[illegible]布もなくなつてゐる。押入をあけると、空だ。彼女の身につけるものは、腰紐一筋も見當らない。彼女はあわてて蒲團にもぐり込んだ。自分の裸に手を觸れるのが恐ろしいやうな恥しさで、彼女は膝を折り縮めながらがたがた顫へた。

泣いてゐるのが、自分で分らなかつた。

しかしぢつとしてゐられない。また起き上つたが、身の置きどころがない。鏡臺の前へ坐つて、鏡の中の裸を見ると、反つてはじめて落ちついた。自分の裸が、なぜか不思議なものに見えた。ふと泣き止んだほどだ。梯子段の下をそうつとうかがつてから、鏡の前でぐるぐる廻りながら、彼女は裸の彼女を眺めた。それからまた、梯子段の下を覗いて、這つて戻ると、彼女は女の奇怪な姿をぢつと鏡に寫して――横倒れに突つ伏すと、彼女は泣くつもりで笑ひ出した。別の女の誕生だ。

さうして五日間眞裸のお春はその二階の寢床にもぐりこんでゐたのだ。

五十八

一、營業時間は日の出より午後十二時限りとす。

二、華客にして酩酊の御方と認むる時は遊技を謝絶す。

三、通行人を猥りに呼び入れざる事。

四、公案風俗を紊さざる事。

五、主人及び雇人の外、銃臺內へ入る事、堅く謝絶する事。

六、其筋の注意有之、招待券及び祝儀等を受けざる事。

勿論、射的屋が銃臺の横に掲げてゐる規則だが――しめ飾りのやうに、正面へつるした紙切りの敷島、その下の二段の境は上が敷島やバット、下が人形や菓子、一間ほどの板の間を距てて銃臺、銃臺にはエナメル塗の玉容れと鐵砲、芝居の舞臺風な幕の壁飾りで、銃臺の横に鏡にかかつてゐて、昔も今も變らぬ店で、銀杏返しの女が、

『いくら時世後れの遊びだつても、今更麻雀倶樂部に變つてしまふわけにもゆきませんわ。あんなものも一時のはやりですわ。こちらはこれでも永い傳統のある商賣ですわ。』

「先づねえさん達の風俗から改めるんですね。桃割を斷髮にでも。」とでもいつてやりたくなるが、しかし、公園劇場や電氣館や淺草劇場の裏、つまり六區第一號と第二號の裏に軒並みの一郭が本場で、次が六區の西側、東京館の裏や、淺草興行組合の横、もう一ところ、これは餘りに侘しく、花屋敷の裏塀に、とにかく今でも四十軒足らず殘つてゐる――その「玉音の街」へ、お春は洋裝の姿を現はしたのだ。をばさんの二階の眞裸の寢床からだ。射的屋が彼女の淺草暮しの振りだしだつたのだ。

それはまだ地廻りの打ち込みがあつた頃だ。射的競技會が盛んだつた頃だ。百回百五十回と打つ客が珍らしくなく、玉の音を聞かないと寢られない人間が多かつたのだ。大川といふ片腕の不自由な男は、園田の店にずぼりこんで動かないものだから、その射的屋の主人が金をくれて旅へ出してやると、上方で立派な役者になるのだと勇んで行つたが、翌る日にはちやんと隣りの店で、ぽんぽんやつてゐた――その頃の射的の腕力のいい側だ。

左利きの彦、洗髮のお糸、それに私、この三人がお春に連れられて、つい先達ての晩、射的屋へ行つたことがあつた。

綺馬倶樂部には藝人の下つぱもゐるから、射的屋へ出入りしてゐるかもしれないといふので、その聞き込みにだ。私にはまた、喜樂亭のねえさんは小說のネタをどつさり持つてゐるから紹介するとのことだ。

喜樂亭は公園劇場の樂屋の前だ。樂屋口に大道具の連中が涼んでゐた。樂屋の窓からも、裸の役者が私達を見てゐるのだ。

お春は鐵砲を持たうともせずに、銀杏返しの女と昔話ばかりしてゐる。

『フランス人形みたいに可愛かつたわ、お春さんのお嫁さん姿が、今でも目に浮ぶやうよ。あの人どうしたのよ。――お春さんが店へ來ると、樂屋の窓に人だかりで、芝居の幕があかないつて、よくいつたわね。洋裝が珍らしかつたわね。』

『十年前とちつとも變らないねえさんの方が珍らしいわ。』

『あんた十年前なんか知りやしないくせに。』

後でお春が話したところによると――喜樂のねえさんは、生れ落ちると直ぐに田舎へ養女にやられた。實父は浪花節語りだつたのだ。この店から公園の寄席へ通つてゐたのだ。彼女が十八の時、實父の所へ遊びに來て、射的屋の手傳ひをしてゐるうちに、そのまま落ちついてしまつたのだ。

それが十二三年前のことだが、今でも彼女は二十二三にしか見えない。その間に店をすつかり自分のものにして、實父には乾物屋を出させてゐる。そして、養父母も田舎から呼び寄せて養つてゐる。

お春の射的屋通ひは、六七年前のことだ。その頃の商賣の十分の一も今はむづかしく、一日四五圓止り[illegible]だといふ。

『春ちやんのままごとの花嫁の時分が、うちの商賣も花だつたわ。』といふのも道理だが、その花の時代だつたからこそ、お春は射的屋で駒田が拾へたのだ。

鏡と裸

五十九

お春を東京へ連れ出したのは、いふまでもなく「避暑地荒し」の不良少年で、髪結ひへ入れてくれたのも、實は贓品を一時安全なところに預けたくらゐのつもりだ。

お春の知らない間に、彼は仲間の一人へ、彼女を手に入れて賣り飛ばす一切の「權利」を、賣り渡してしまつたのだ。それを買つたのが、をばさんの家の二階の男だ。をばさんから見れば、甘い小僧の寺坂だ。

をばさんの家は「素人待合」だ。をばさんは女衒だ。

つまり、寺坂は買つた品物を、をばさんに倉から持ち出してもらはうとしたのだ。をばさんの方からいへば、寺坂達を手先に使つてゐるのだ。たとひあの晩、お春が逃げ出したところで、をばさんは上野の親戚とやらに泊つてゐたのだ。涼しいものだ。

眞裸にするのは、逃がさないためのお得意の手だ。

寺坂がをばさんの二階を借りてゐるなんて、勿論嘘だ。

床の間の盆石と、それから鏡臺と赤い衣桁――寺坂に二階へ誘ひ上げられると直ぐ、お春にもこの[illegible]が分つた。をばさんの荷物の紙を破つてみると、中は古座蒲團三枚だ。

『後になつてどう考へても私には、あの時裸を鏡に寫して見た氣持が分らないのよ。』とお春はいふが、とにかく裸の五日間に、彼女は激しく寺坂を愛し出したのだ。彼を氣ちがひのやうに愛することで、第二の危險をのがれよう――と、まではつきりではないが、實におどおどして、實に棄鉢な度胸が据つて、笑ふやうな美しくなり方が、反つて寺坂をまごつかせた。

賣られるどころか、彼女は別に洋服を[illegible]たのだ。そして寺坂の花嫁として、射的屋[illegible]をはじめたのだ。髪結ひの[illegible]仲間に出[illegible]ても、つんとそつぽを向くだけだ。

寺坂の一派は公園の行き歸りに射的屋に寄るのが、仲間の[illegible]になつてゐた。[illegible]の向ひの「バツト」といふ店が、[illegible]

た。爺さんと息子と、そこへ爺さんの兄が居候してゐて、珍らしく女を使つてゐない店だつた。

敷島三個積――玉四發で落し取り、二十五錢。

敷島三個積――玉四發で落し取り、十八錢。

敷島紙切り――玉三發で落し取り、十八錢。

敷島上猫落し――玉三發で猫を落す度に敷島一個、十八錢。

バット三個積――玉三發で全部落し、朝日一個、七錢。

バット四個積――玉四發で落し取り、十八錢。

上人形落し――玉三發で落し取り、二十錢。

並人形落し――玉五發で落し取り、十錢。

文字合せ玉ころがし。――玉五個十八錢。

今はこの十通りだが、その頃とも變りがないだらう。

しかし、十通りあつても、淺草の常連は昔からバットの三個積ときまつてゐる。敷島の三個積や、敷島紙破りを打つ人を、たまに見かけるくらゐのものだ。

しかも、寺坂のやうな百發百中の名人は、勿論バット三個積専門だが、一回二錢の「玉代」しか拂はない。煙草をくれては商賣にならないから、二錢で遊んでもらふのだ。

だから、「追分」とか、「ワリ」とか、「ヒネリ」とか、「山越し」とか、ただ落し方の技巧を弄ぶだけで、眞劍に打つのが競技會だ。

ところがその頃、このバットの店へ毎日射的に來る、十五六の少年があつた。晝の一時間ばかり遊んで、夜また一時間ばかり遊んで行くのだ。

それがある日、晝から爺さんの兄に鮨や酒を取つてやつて遊んでゐたが、夜が更けても歸らうともしないのだ。

六十

バット三個積の臺のうしろの端に、バットを三個積に立て、その間にマッチ箱を二個挾む。三發の玉でバットを全部落して、マッチだけを殘すのだ。

二番目には、敷島の臺のうしろの隅にバットを二個倒して置く。それを一發で落すのだ。

三番目には、敷島の臺にバットを六個斜め向きに立てる。三發で全部落すのだ。

これはその夜の一番技煙草――バットの爺さんの積んだ煙草が公園中で一番落しにくいといふのと、女氣がないことと、「射的道」の見栄で集まつてゐる常連の遊びだ。一たい射的の競技會といふものは、射的屋を廻つて小遣錢をもらつてゐた男が、一軒の店の主催の名を借りて、合羽橋あたりの貸席に、月一回くらゐ同好者を集めたのだ。しかし、例へばその夜のバットのやうに、店をしまつてから、天狗連中が競技をはじめることもあるのだ。

終つたのが一時近くだ。

『なあんだ、あんちやん、今までぼんやり見てたのか。もう店をしまふから明日またおいでよ。』

『ええ。』と、少年は寂しさうに店の隅で動かないのだ。

それを見たお春は走り寄ると、いきなり少年の肩に手をかけて、

『あんちやん、あたいと一緒に歸らうよ。あたいの家へ遊びに來ない？』

『ええ。』と、大人のやうに美しい洋裝の少女に、突然やさしくされて、少年は頰を染めた。

『ねえ、いいでせう。なんなら泊つたつていい

のよ。』

向島の宿下宿へ歸ると、お春は少年のうしろから柔かく抱くやうに彼女の浴衣を着せてやりながら、少年のズボンをふと押へて、

『あら、あんちやん、ずゐぶんお金持ね。子供があんまり澤山お金ゝ持つてるといけないことよ。あたい達が預つといたげてもいいわ。あんちやん、ずつとここに泊つててもいいのよ。』

『このほかに今朝、射的屋の爺さんに三十圓預けたんだよ。爺さんも子供が澤山金を持つてるといけないつていふんだけれど、皆出すと怪しまれると思つてね。』と、少年がお春に渡した紙入には、二百五十圓ばかりの金だ。

今までにがり切つてゐた寺坂は、あつけにとられてお春の顏を見るばかりだ。

『ほらね。――圖星でせう。』といふお春だ。裸を鏡に寫して一月だ。

『あんちやん、こんな金をどこから持つて來た。なんか惡いこと――。』

『馬鹿ねえ、お巡りさんぢやあるまいし。心配せずに寢ませうよ、あんちやん、晩いわ。』

寢床は一つだ。寺坂は直ぐに眠つた。

少年は叔父の家の金庫から持ち出して來たのだ。その前から毎日二三圓づつごまかしては、淺草へ來てゐたのだ。

なんといふことはない、淺草の不思議な魅力に誘はれてだ。叔父の家は神田の小川町だ。小僧のやうに使はれてゐたのだ。

さういふことを聞き出したお春は、少年の首にそつと手を廻して、頭を指先でぽたぽた叩いてやりながら、

『金庫つて、大きな金庫?』

『店の金庫は小さいんだよ。それに鍵の入つてるところを知つてるんだ。』

『ねえ、あんちやん、スポオツ・シャツに白ズボンきりなんて、恰好が惡いわ。』

『いつもこんななりでお使ひに行くんだよ。』

『ええ、だから、明日あのお金で洋服か着物を買つて上げるからね。』

『洋服がいい。』

『それからね、今日からあんちやんは、あたい達の弟なのよ。どこへいつても、あたい達のことを、兄さん、姉さんつて、いはなくちやだめよ。』

『うん。』

『さう、さう、明日あんちやんの洋服を買ふ時に、あたいも一つ買つてほしいわ。』

お春は少年より一つ年上だ。

六十一

お千代のためにセパアドの小犬を盜んで來た駒田が、六七年前のこの少年なのだ。

初めの金は洋服二着と蓄音機を買つただけだつた。殘りで三人が遊び歩いたのだ。射的屋へ三十圓を取り戻しに行くと、

『直ぐ使つちまつたよ。なあんだ、あんちやんはくれるつていつたぢやないか。』

金がなくなれば、少年は邪魔だ。

『どうにもしかたがない。叔父さんのところへ歸つてもらはう。』

『金がなくなつたらつまらないね。僕もう一ぺん持つて來るよ。』と、しんからこはれた少年の悲しみを見ると、お春が智慧をつけた。その金で彼女を寺坂から買ひ取れといふのだ。

それから赤帶會、黑帶會、紅團――とにかく五六年の間、駒田はお春につきまとつて、淺草を渡つて來たのだが、お春自身にいはせると、彼女はもうからつきし意氣地がなくなつた、だらしがなくなつた。

だが、駒田は今もやつぱり、そこはかとないものの魅力に誘はれて、ぼうつと夢を見てゐる。心に張りのあるいい娘ともう一度添はせてやり

たいと、お伴は思ふのだ。そのことを弓子に頼むのだ。

「私がその娘だつていふの？ またはさういふ娘を私に捜せつていふの？」と、弓子は叩きつけるやうにいつた。

ところで諸君、その弓子だが――このあたりまで書いて來た時に、私は奇怪な姿の弓子に會つたのだ。そこで、この小説も急に航路を變へなければならなくなつたのだ。

小説を船にたとへたが、全く船なのだ。――隅田川汽船株式會社、例の一錢蒸汽の乘合なのだ。

私は濱町河岸から吾妻橋行に乘り込んだのだ。

大島の油賣りの娘が、瞳を上瞼へつり上げて、ぢいつと私を睨むのだ。

あらい紺がすりの腰までの筒袖、紫の前掛、紺の脚絆、ゴム足袋、膝に大きい黒木綿の風呂敷包みの荷物、それに油紙、横に竹の皮張りのまんまるい笠――髪はひつつめだが、額に切つた毛を垂れ、日焼けした顔に薄化粧して、まことに都會じみた田舎の花だ。古ぼけた乘合船に余りに似つかはしい姿だ。裾からメリンスの腰卷が下つてゐる。

その娘のきびしい顔が、ぷつと吹き出して、

「大島の椿油一つ いかがです、奥さんのお土産に。」

弓子なのだ。

「どうも、どつかで見たと思つても、まさかね。」

「毛の艶々と濃くなる、珊瑚の根や、昆布の根、油かすの髪洗粉もございますよ。」

「相變らずお道樂が過ぎる。」

『あんたこそ、どうしてこんな船に乘つてらつしやるの。』

『紅丸から君が白いモオタア・ボオトへさらはれた――あすこの續きを書くんで、大河筋の風景を見て廻つてるんだ。』

「油賣りのことは書かないやうにしませうよ。」

「油賣りに身をやつして――どういふことにしようかな。」

「人を捜してゐる。」

『いつだつて君は人を捜してるんだね。』

「噓よ、そんなこと。――かうでもして稼がないと、なあんて。」

「そんなものまで貸衣裳屋にあるのかね。」

「まさか。――油賣りの娘さんに借りたの。」

「だつて、その娘さんは？」

「今頃は淺草で、萬歳でも聞いてるでせう――でなくつたつて、よく藥屋なんかで、油賣りが油を賣つてるわ。油を賣るつてあのことよ。」

船が吾妻橋に着いて、弓子がまんまる笠をかぶりながら、

「いよいよ私だつてこれが分らないでせう。」

と、立ち上ると、短い紺がすりの裾が搖つてゐるのだ。

伊豆の踊子

1

道がつづら折になつて、いよいよ天城峠に近づいたと思ふ頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追つて來た。

私は二十歳、高等學校の制帽を冠り、紺飛白の着物に袴をはき、學生カバンを肩にかけてゐた。一人伊豆の旅に出てから四日目のことだつた。修善寺温泉に一夜泊り、湯ケ島温泉に二夜泊り、そして朴齒の高下駄で天城を登つて來たのだつた。重なり合つた山々や原生林や深い溪谷の秋に見惚れながらも、私は一つの期待に胸をときめかして道を急いでゐるのだつた。そのうちに、大粒の雨が私を打ち始めた。折れ曲つた急な坂道を驅け登つた。やうやく峠の北口の茶屋に辿りついてほつとすると同時に、私はその入口で立ちすくんでしまつた。餘りに期待がみごとに的中したからである。そこで旅藝人の一行が休んでゐたのだ。

突立つてゐる私を見た踊子が直ぐに自分の座蒲團を外して裏返しに傍へ置いた。

「ええ――。」とだけ云つて、私はその上に腰を下した。坂道を走つた息切れと驚きとで、「ありがたう。」と云ふ言葉が咽にひつかかつて出なかつたのだ。

踊子と眞近に向ひ合つたので、私はあわてて袂から煙草を取出した。踊子がまた連れの女の前の煙草盆を引寄せて私に近くしてくれた。やつぱり私は默つてゐた。

踊子は十七くらゐに見えた。私には分らない古風の不思議な形に大きく髪を結つてゐた。それが卵形の凜々しい顔を非常に小さく見せながらも、美しく調和してゐた。髪を豐かに誇張して描いた、稗史的な娘の繪姿のやうな感じだつた。踊子の連れは四十代の女が一人、若い女が二人、ほかに長岡温泉の宿屋の印半纏を着た二十五六の男がゐた。

私はそれまでにこの踊子たちを二度見てゐるのだつた。最初は私が湯ケ島へ來る途中、修善寺へ行く彼女たちと湯ケ橋の近くで出會つた。その時若い女が三人だつたが、踊子は太鼓を提げてゐた。私は振返り振返り眺めて、旅情が自分の身に附いたと思つた。それから、湯ケ島の二日目の夜、宿屋へ流して來た。踊子が玄關の板敷で踊るのを、私は梯子段の中途に腰を下して一心に見てゐた。――あの日が修善寺で今夜が湯ケ島なら、明日は天城を南に越えて湯ケ野温泉へ行くのだらう。天城七里の山道できつと追ひつけるだらう。さう空想して道を急いだのだつたが、雨宿りの茶屋でぴつたり落合つたものだから、私はどぎまぎしてしまつたのだ。

間もなく、茶店の婆さんが私を別の部屋へ案内してくれた。平常用はないらしく戸障子がなかつた。下を覗くと美しい谷が目の届かないほど深かつた。私は肌に粟粒を拵へ、かちかちと齒を鳴らして身顫ひした。茶を入れに來た婆さんに、寒いと云ふと、

「おや、旦那樣お濡れになつてるぢやございませんか。こちらで暫くおあたりなさいまし、さあ、お召物をお乾かしなさいまし。」と、手を取るやうにして、自分たちの居間へ誘つてくれた。

その部屋は爐が切つてあつて、障子を開ける

と熱い火氣が流れて來た。私は敷居際に立つて躊躇した。水死人のやうに全身蒼ぶくれの爺さんが爐端にあぐらをかいてゐるのだ。瞳まで黄色く腐つたやうな眼を物憂げに私の方へ向けた。身の周りに古手紙や紙袋の山を築いて、その紙屑のなかに埋もれてゐると云つてもよかつた。到底生物と思へない山の怪奇を眺めたまま、私は棒立ちになつてゐた。

「こんなお恥しい姿をお見せいたしまして――。でも、うちのぢぢいでございますから御心配なさいますな。見苦しくても、動けないものでございますから、このまま堪忍してやつて下さいまし。」

さう斷つてから、婆さんが話したところによると、爺さんは長年中風を患つて、全身が不隨になつてしまつてゐるのださうだ。紙の山は、諸國から中風の養生を教へて來た手紙や、諸國から取寄せた中風の藥の袋なのである。爺さんは峠を越える旅人から聞いたり、新聞の廣告を見たりすると、その一つをも洩さずに、全國から中風の療法を聞き、賣藥を求めたさうだ。そして、それらの手紙や紙袋を一つも捨てずに身の周りに置いて眺めながら暮して來たのださうだ。長年の間にそれが古ぼけた反古の山を築いたのださうだ。

私は婆さんに答へる言葉もなく、囲爐裏の上にうつむいてゐた。山を越える自動車が家を搖ぶつた。秋でもこんなに寒い、そして間もなく雪に染まる峠を、何故この爺さんは下りないのだらうと考へてゐた。私の着物から湯氣が立つて、頭が痛む程火が強かつた。婆さんは店に出て旅藝人の女と話してゐた。

「さうかねえ。この前連れてゐた子がもうこんなになつたのかい。いい娘になつて、お前さんも結構だよ。こんなに綺麗になつたかねえ。女の子は早いもんだよ。」

小一時間經つと、旅藝人たちが出立つらしい物音が聞えて來た。私も落着いてゐる場合ではないのだが、胸騷ぎがするばかりで立上る勇氣が出なかつた。旅馴れたと云つても女の足だから、十町や二十町後れたつて一走りに追附けると思ひながら、爐の傍でいらいらしてゐた。しかし、踊子たちが傍にゐなくなると、却つて私の空想は解き放たれたやうに生き生きと踊り始めた。彼等を送り出して來た婆さんに聞いた。

「あの藝人は今夜どこで泊るんでせう。」

「あんな者、どこで泊るやら分るものでございますか、旦那樣。お客があればあり次第、どこにだつて泊るんでございますよ。今夜の宿のあてなんぞございますものか。」

甚だしい輕蔑を含んだ婆さんの言葉が、それならば、踊子を今夜は私の部屋に泊らせるのだと思つた程私を煽り立てた。

雨脚が細くなつて、峰が明るんで來た。もう十分も待てば綺麗に晴れ上ると、しきりに引止められたけれども、ぢつと坐つてゐられなかつた。

「お爺さん、お大事になさいよ。寒くなりますからね。」と、私は心から云つて立上つた。爺さんは黄色い眼を重さうに動かして微かにうなづいた。

「旦那さま、旦那さま。」と叫びながら婆さんが追つかけて來た。

「こんなに戴いては勿體なうございます。申譯ございません。」

そして私のカバンを抱きかかへて渡さうとせずに、幾ら斷つてもその邊まで送ると云つて承知しなかつた。一町ばかりもちよこちよこついて來て、同じことを繰返してゐた。

「勿體なうございます。お粗末いたしました。お顏をよく覺えて居ります。今度お通りの時に

お禮をいたします。この次もきつとお立寄り下さいまし。お忘れはいたしません。」

私は五十錢銀貨を一枚置いただけだつたので、痛く驚いて涙がこぼれさうに感じてゐるのだつたが、踊子に早く追附きたいものだから、婆さんのよろよろした足取りが迷惑でもあつた。たうとう峠のトンネルまで來てしまつた。

「どうも有難う。お爺さんが一人だから歸つて上げて下さい。」と、私が云ふと、婆さんはやつとのことでカバンを離した。

暗いトンネルに入ると、冷たい雫がぽたぽた落ちてゐた。南伊豆への出口が前方に小さく明るんでゐた。

2

トンネルの出口から白塗りの柵に片側を縫はれた棧道が稻妻のやうに流れてゐた。この模型のやうな展望の裾の方に藝人達の姿が見えた。六町と行かないうちに私は彼等の一行に追ひついた。しかし急に歩調を緩めることも出來ないので、私は冷淡な風に女達を追越してしまつた。十間程先に一人歩いてゐた男が私を見ると立止つた。

「お足が早いですね。――いい鹽梅に晴れました。」

私はほつとして男と並んで歩き始めた。男は次々にいろんなことを私に聞いた。二人が話し出したのを見て、うしろから女たちがぱたぱた走り寄つて來た。

男は大きい柳行李を背負つてゐた。四十女は小犬を抱いてゐた。上の娘が風呂敷包み、中の娘が柳行李、それぞれ大きい荷物を持つてゐた。踊子は太鼓とその枠を負うてゐた。四十女もぽつぽつ私に話しかけた。

「高等學校の學生さんよ。」と、上の娘が踊子に囁いた。私が振返ると笑ひながら云つた。

「さうでせう、それくらゐのことは知つてゐます。島へ學生さんが來ますもの。」

一行は大島の波浮の港の人達だつた。春に島を出てから旅を續けてゐるのだが、寒くなるし、冬の用意はして來ないので、下田に十日程ゐて伊東温泉から島へ歸るのだと云つた。大島と聞くと私は一層詩を感じて、また踊子の美しい髮を眺めた。大島のことをいろいろ訊ねた。

「學生さんが澤山泳ぎに來るね。」と、踊子が連れの女に云つた。

「夏でせう。」と、私が振向くと、踊子はどぎまぎして、

「冬でも――。」と、小聲で答へたやうに思はれた。

「冬でも？」

踊子はやはり連れの女を見て笑つた。

「冬でも泳げるんですか。」と、私がもう一度云ふと、踊子は赤くなつて非常に眞面目な顏をしながら輕くうなづいた。

「馬鹿だ。この子は。」と、四十女が笑つた。

湯ケ野までは河津川の溪谷に沿うて三里餘りの下りだつた。峠を越えてからは、山や空の色までが南國らしく感じられた。私と男とは絶えず話し續けて、すつかり親しくなつた。荻乘や梨本なぞの小さい村里を過ぎて、湯ケ野の藁屋根が麓に見えるやうになつた頃、私は下田まで一緒に旅をしたいと思ひ切つて云つた。彼は大變喜んだ。

湯ケ野の木賃宿の前で四十女が、ではお別れ、と云ふ顏をした時に、彼が云つてくれた。

「この方はお連れになりたいとおつしやるんだよ。」

「それは、それは。旅は道連れ、世は情。私たちのやうなつまらない者でも、御退屈しのぎにはなりますよ。まあ上つてお休みなさいまし。」

と、無造作に答へた。娘達は一時に私を見たが、至極なんでもない顔をして、少し羞しさうにしてゐた。

皆と一緒に宿屋の二階へ上つて、荷物を下した。疊や襖も古びて汚かつた。踊子が下から茶を運んで來た。私の前に坐ると、眞紅になりながら手をぶるぶる顫はせるので茶碗が茶托から落ちかかり、落すまいと疊に置く拍子に茶をこぼしてしまつた。餘りにひどいはにかみやうなので、私はあつけにとられた。

「まあ！　厭らしい。この子は色氣づいたんだよ。あれあれあれ――。」と、四十女が呆れ果てたと云ふ風に眉をひそめて手拭を投げた。踊子はそれを拾つて、窮屈さうに疊を拭いた。

この意外な言葉で、私はふと自分を省みた。峠の婆さんに煽り立てられた空想がぽきんと折れるのを感じた。

そのうちに突然四十女が、

「書生さんの紺飛白はほんとにいいわねえ。」と云つて、しげしげ私を眺めた。

「この方の飛白は民次と同じ柄だね。ね、さうだね、同じ柄ぢやないかね。」

傍の女に幾度も駄目を押してから私に云つた。

「國に學校行きの子供を殘してあるんですが、その子を今思ひ出しましてね、その子の飛白と柄が同じなんですもの。この節は紺飛白もお高くてほんとに困つてしまふ。」

「どこの學校です。」

「尋常五年なんです。」

「へえ、尋常五年とはどうも――。」

「甲府の學校へ行つてるんでございますよ。長く大島に居りますけれども、國は甲斐の甲府でございましてね。」

一時間程休んでから、男が私を別の温泉宿へ案内してくれた。それまでは私も藝人達と同じ木賃宿に泊ることとばかり思つてゐたのだつた。私達は街道から石ころ路や石段を一町ばかり下りて、小川のほとりにある共同湯の横の橋を渡つた。橋の向うは温泉宿の庭だつた。

そこの内湯につかつてゐると、後から男が入つて來た。自分が二十四になることや、女房が二度とも流産と早産とで子供を死なせたことなぞを話し出した。彼は長岡温泉の印半纏を着てゐるので長岡の人間だと思つてゐた。また顔付も話振りも相當知識的なところから、物好きか、藝人の娘に惚れたかで、荷物を持つてやりながらついて來てゐるのだと想像した。

湯から上ると私は直ぐに晝飯を食べた。湯ヶ島を朝の八時に出たのだつたが、その時はまだ三時前だつた。

男が歸りがけに、庭から私を見上げて挨拶をした。

「これで柿でもおあがりなさい。二階から失禮。」と云つて、私は金包みを投げた。男は斷つて行き過ぎようとしたが、庭に紙包みが落ちたままなので、引返してそれを拾ふと、

「こんなことをなさつちやいけません。」と、抛り上げた。それが藁屋根の上へ落ちた。私がもう一度投げると、男は持つて歸つた。

夕暮からひどい雨になつた。山々の姿が遠近を失つて白く染まり、前の小川が見る見る黄色く濁つて音を高めた。こんな雨では踊子達が流して來ることもあるまいと思ひながら、私はぢつと坐つてゐられないので二度も三度も湯に入つてみたりしてゐた。部屋は薄暗かつた。隣室との間の襖を四角く切拔いたところに敷居から電燈が下つてゐて、一つの明りが二室兼用になつてゐるのだつた。

とんとんとんとん、激しい雨の音の遠くに太鼓の響きが微かに生れた。私は掻き破るやうに雨戸を明けて體を乘出した。太鼓の音が近づいて來る

やうだ。雨風が私の頭を叩いた。私は眼を閉ぢて耳を澄ましながら、太鼓がどこをどう歩いてここへ來るかを知らうとした。間もなく三味線の音が聞えた。女の長い叫び聲が聞えた。賑やかな笑ひ聲が聞えた。そして藝人達は木賃宿と向ひ合つた料理屋のお座敷に呼ばれてゐるのだと分つた。三四人の女の聲と二三人の男の聲とが聞き分けられた。そこがすめばこちらへ流して來るのだらうと待つてゐた。しかし、その酒宴は陽氣を越えて馬鹿騒ぎになつて行くらしい。女の金切聲が時々稲妻のやうに闇夜に鋭く通つた。私は神經を尖らせて、いつまでも戸を明けたまゝぢつと坐つてゐた。太鼓の音が聞える度に胸がほうと明るんだ。

「ああ、踊子はまだ宴席に坐つてゐるのだ。坐つて太鼓を打つてゐるのだ。」

太鼓が止むとたまらなかつた。雨の音の底に沈み込んでしまつた。

やがて、皆が追つかけつこをしてゐるのか、踊り廻つてゐるのか、亂れた足音が暫く續いた。そして、ぴたと靜まり返つてしまつた。私は眼を光らせた。この靜けさが何であるかを闇を通して見ようとした。踊子の今夜が汚れるのであらうかと悩ましかつた。

雨戸を閉ぢて床に入つても胸が苦しかつた。また湯に入つた。湯を荒々しく掻廻した。雨が上つて、月が出た。雨に洗はれた秋の夜が冴え冴えと明るんだ。跣足で湯殿を抜け出して行つたつて、どうとも出來ないのだと思つた。二時を過ぎてゐた。

3

翌る朝の九時過ぎに、もう男が私の宿に訪ねて來た。起きたばかりの私は彼を誘つて湯に行つた。美しく晴れ渡つた南伊豆の小春日和で、水かさの増した小川が湯殿の下に暖かく日を受けてゐた。自分にも昨夜の悩ましさが夢のやうに感じられるのだつたが、私は男に云つてみた。

「昨夜は大分遅くまで賑やかでしたね。」

「なあに――聞えましたか。」

「聞えましたとも！」

「この土地の人なんですよ。土地の人は馬鹿騒ぎをするばかりで、どうも面白くありません。」

彼が餘りに何げない風なので、私は黙つてしまつた。

「向うのお湯にあいつらが來てゐます。――ほれ、こちらを見つけたと見えて笑つてゐやがる。」

彼に指ざされて、私は川向うの共同湯の方を見た。湯氣の中に七八人の裸體がぼんやり浮んでゐた。

仄暗い湯殿の奥から、突然裸の女が走り出して來たかと思ふと、脱衣場の突鼻に川岸へ飛び下りさうな恰好で立ち、兩手を一ぱいに伸して何か叫んでゐる。手拭もない眞裸だ。それが踊子だつた。若桐のやうに足のよく伸びた白い裸身を眺めて、私は心に清水を感じ、ほうつと深い息を吐いてから、ことこと笑つた。子供なんだ。私達を見つけた喜びで眞裸のまま日の光の中に飛出し、爪先で背一ぱいに伸上る程に子供なんだ。私は朗らかな喜びでことことと笑ひ續けた。頭が拭はれたやうに澄んで來た。微笑がいつまでもとまらなかつた。

踊子の髪が豊過ぎるので、十七八に見えてゐたのだ。その上娘盛りのやうに装はせてあるので、私はとんでもない思ひ違ひをしてゐたのだ。

男と一緒に私の部屋に歸つてゐると、間もなく上の娘が宿の庭へ來て菊畑を見てゐた。踊子が橋を半分程渡つてゐた。四十女が共同湯を出て二人の方を見た。踊子はきゆつと肩を

つぼめながら、叱られるから帰りますと云ふ風に笑つて見せて急ぎ足に引返した。四十女が橋まで来て声を掛けた。

「お遊びにいらつしやいまし。」

「お遊びにいらつしやいまし。」

上の娘も同じことを云つて、女達は帰つて行つた。男はたうとう夕方まで坐り込んでゐた。

夜、紙類を卸して廻る行商人と碁を打つてゐると、宿の庭に突然太鼓の音が聞えた。私は立上らうとした。

「流しが来ました。」

「ううん、つまらない、あんなもの。さ、さ、あなたの手ですよ。私ここへ打ちました。」と、碁盤を突つきながら紙屋は勝負に夢中だつた。私がそはそはしてゐるうちに藝人達はもう帰り路らしく、男が庭から、

「今晩は。」と声を掛けた。

私は廊下に出て手招きした。藝人達は庭で一寸囁き合つてから玄関へ廻つた。男の後から娘が三人順々に、

「今晩は。」と廊下に手を突いて藝者のやうなお辞儀をした。碁盤の上では急に私の負色が見え出した。

「これぢや仕方がありません。投げですよ。」

「そんなことがあるもんですか。私の方が悪いでせう。どつちにしても細いです。」

紙屋は藝人の方を見向きもせずに、碁盤の目を一つ一つ数へてから、益々注意深く打つて行つた。女達は太鼓や三味線を部屋の隅に片づけると、将棋盤の上で五目並べを始めた。そのうちに私は勝つてゐた碁を負けてしまつたのだが、紙屋は、

「いかゞです、もう一石、もう一石願ひませう。」

と、しつつこくせがんだ。しかし私が意味もなく笑つてゐるばかりなので紙屋はあきらめて立上つた。

娘たちが碁盤の近くへ出て来た。

「今夜はまだこれからどこかへ廻るんですか。」

「廻るんですが。」と、男は娘達の方を見た。

「どうしよう。今夜はもう止しにして遊ばせていたゞくか。」

「嬉しいね。嬉しいね。」

「叱られやしませんか。」

「なあに、それに歩いたつてどうせ客がないんです。」

そして五目並べなぞをしながら、十二時過ぎまで遊んで行つた。

踊子が帰つた後は、とても眠れさうもなく頭が冴え冴えしてゐるので、私は廊下に出て呼んでみた。

「紙屋さん、紙屋さん。」

「よう——。」と、六十近い爺さんが部屋から飛び出し、勇み立つて云つた。

「今晩は徹夜ですぞ。打ち明すんですぞ。」

私もまた非常に好戦的な気持だつた。

4

その次の朝八時が湯ケ野出立の約束だつた。私は共同湯の横で買つた鳥打帽を被り、高等学校の制帽をカバンの奥に押し込んでしまつて、街道沿ひの木賃宿へ行つた。二階の戸障子がすつかり明け放たれてゐるので、何の気なしに上つて行くと、藝人達はまだ床の中にゐるのだつた。私は面喰つて廊下に突つ立つてゐた。

私の足もとの寝床で、踊子が真赤になりながら両の掌ではたと顔を抑へてしまつた。彼女は中の娘と一つの床に寝てゐた。昨夜の濃い化粧が残つてゐた。唇と眦の紅が少しにじんでゐた。この情緒的な寝姿が私の胸を染めた。彼女は眩しさうにくるりと寝返りして、掌で顔を隠したまゝ蒲団を辷り出ると、廊下

に坐り、

「昨晩はありがたうございました。」と綺麗なお辭儀をして、立つたままの私をまごつかせた。男は上の娘と同じ床に寢てゐた。それを見るまで私は、二人が夫婦であることをちよつとも知らなかつたのだつた。

「大變すみませんのですよ。今日立つつもりでしたけれど、今晩お座敷がありさうでございますから、私達は一日延してみることにいたしました。どうしても今日お立ちになるなら、また下田でお目にかゝりますわ。私達は甲州屋と云ふ宿屋にきめて居りますから、直ぐお分りになります。」と、四十女が寢床に半ば起上つて云つた。私は突つ放されたやうに感じた。

「明日にしていただけませんか。おふくろが一日延すつて承知しないもんですからね。道連れのある方がよろしいですよ。明日一緒に參りませう。」と、男が云ふと、四十女も附け加へた。

「さうなさいましよ。折角お連れになつていただいて、こんな我儘を申しちやすみませんけれど。明日は槍が降つても立ちます。明後日が旅で死んだ赤坊の四十九日でございましてね、四十九日には心ばかりのことを、下田でしてやりたいと前々から思つて、その日までに下田へ行けるやうに旅を急いだのでございますよ。そんなこと申しちや失禮ですけれど、不思議な御縁ですもの、明後日はちよつと拜んでやつて下さいましな。」

そこで私は出立を延すことにして階下へ下りた。皆が起きて來るのを待ちながら、汚い帳場で宿の者と話してゐると、男が散歩に誘つた。街道を少し南へ行くと綺麗な橋があつた。橋の欄干によりかゝつて、彼はまた身上話を始めた。東京である新派役者の群に暫く加はつてゐたとのことだつた。今でも時々大島の港で芝居をするのださうだ。彼等の荷物の風呂敷から刀の鞘が足のやうに食み出してゐるのだつたが、お座敷でも芝居の眞似をして見せるのだと云つた。柳行李の中はその衣裳や鍋茶碗なぞの世帶道具なのである。

「私は身を誤つた果に落ちぶれてしまひましたが、兄が甲府で立派に家の後目を立ててゐてくれます。だから私はまあ入らない體なんです。」

「私はあなたが長岡溫泉の人だとばかり思つてゐましたよ。」

「さうでしたか。あの上の娘が女房ですよ。あなたより一つ下、十九でしてね。旅の空で二度目の子供を早產しちまつて子供は一週間ほどして息が絶えるし、女房はまだ體がしつかりしないんです。あの婆さんは女房の實のおふくろなんです。踊子は私の實の妹ですが。」

「へえ。十四になる妹があるつて云ふのは——。」

「あいつですよ。妹にだけはこんなことをさせたくないと思ひつめてゐますが、そこにはまたいろんな事情がありましてね。」

それから、自分が榮吉、女房が千代子、妹が薰と云ふなぞと敎へてくれた。もう一人の百合子と云ふ十七の娘だけが大島生れで雇ひだとのことだつた。榮吉はひどく感傷的になつて、泣出しさうな顏をしながら河瀨を見つめてゐた。

引返して來ると、白粉を洗ひ落した踊子が路ばたにうづくまつて犬の頭を撫でてゐた。私は自分の宿に歸らうとして云つた。

「遊びにいらつしやい。」

「ええ。でも一人では——。」

「だから兄さんと。」

「直ぐに行きます。」

間もなく榮吉が私の宿へ來た。

「皆は？」

「女どもはおふくろがやかましいので。」

しかし、二人が暫く五目並べをやつてゐると、女たちが橋を渡つてどんどん二階へ上つて来た。いつものやうに丁寧なお辞儀をして廊下に坐つたままためらつてゐたが、一番に千代子が立上つた。

「これは私の部屋よ。さあどうぞ御遠慮なしにお通り下さい。」

一時間程遊んで芸人達はこの宿の内湯へ行つた。一緒に入らうとしきりに誘はれたが、若い女が三人もゐるので、私は後から行くとごまかしてしまつた。すると、踊子が一人直ぐに上つて来た。

「肩を流してあげますからいらつしやいませ、つて姉さんが。」と、千代子の言葉を伝へた。

湯には行かずに、私は踊子と五目を並べた。彼女は不思議に強かつた。勝継をやると、栄吉や他の女は造作なく負けるのだつた。五目では大抵の人に勝つ私が力一杯だつた。わざと甘い石を打つてやらなくともいいのが私に気持よかつた。二人きりだから、初めのうち彼女は遠くの方から手を伸して石を下してゐたが、だんだん我を忘れて一心に碁盤の上へ覆ひかぶさつて来た。不自然な程美しい黒髪が私の胸に触れさうになつた。突然、ぱつと紅くなつて、

「御免なさい。叱られる。」と、石を投出したまま飛出して行つた。共同湯の前におふくろが立つてゐたのである。千代子と百合子もあわてて湯から上ると、二階へは上つて来ずに逃げて帰つた。

この日も、栄吉は朝から夕方まで私の宿に遊んでゐた。純朴で親切らしい宿のおかみさんが、あんな者に御飯を出すのは勿体ないと云つて、私に忠告した。

夜、私が木賃宿に出向いて行くと、踊子はおふくろに三味線を習つてゐるところだつた。私を見ると止めてしまつたがおふくろの言葉でまた三味線を抱上げた。歌ふ声が少し高くなる度に、おふくろが云つた。

「声を出しちやいけないつて云ふのに。」

栄吉は向ひ側の料理屋の二階座敷に呼ばれて何か唸つてゐるのが、こちらから見えた。

「あれは何です。」

「あれ——謡ですよ。」

「謡は変だな。」

「八百屋だから何をやり出すか分りやしません。」

そこへ、この木賃宿の間を借りて鳥屋をしてゐる四十前後の男が襖を開けて、御馳走をすると娘達を呼んだ。踊子は百合子と一緒に箸を持つて隣りの間へ行き、鳥屋が食べ荒した後の鳥鍋をつついてゐた。こちらの部屋へ一緒に立つて来る途中で、鳥屋が踊子の肩を軽く叩いた。おふくろが恐ろしい顔をした。

「こら、この子に触つておくれでないよ。生娘なんだからね。」

踊子はをぢさんをぢさんと云ひながら、鳥屋に「水戸黄門漫遊記」を読んでくれと頼んだ。しかし鳥屋はすぐに立つて行つた。続きを読んでくれと私に直接云へないので、おふくろから頼んで欲しいやうなことを、踊子がしきりに云つた。私は一つの期待を持つて講談本を取上げた。果して踊子がするすると近寄つて来た。私が読み出すと、彼女は私の肩に触る程に顔を寄せて真剣な表情をしながら、眼をきらきら輝かせて一心に私の額をみつめ、瞬き一つしなかつた。これは彼女が本を読んで貰ふ時の癖らしかつた。さつきも鳥屋と殆ど顔を重ねてゐた。私はそれを見てゐたのだつた。この美しく光る黒瞳がちの大きい眼は踊子の一番美しい持物だつた。二重瞼の線が云ひやうなく綺麗だつ

た。それから彼女は花のやうに笑ふのだつた。花のやうに笑ふと云ふ言葉が彼女にだけほんたうだつた。

間もなく、料理屋の女中が踊子を迎へに来た。踊子は衣裳をつけて私に云つた。

「直ぐ戻つて来ますから、待つてゐて續きを讀んで下さいね。」

それから廊下に出て手を突いた。

「行つて參ります。」

「決して歌ふんぢやないよ。」とおふくろが云ふと、彼女は太鼓を提げて軽くうなづいた。おふくろは私を振向いた。

「今ちやうど聲變りなんですから――。」

踊子は料理屋の二階にきちんと坐つて太鼓を打つてゐた。その後姿が隣座敷のことのやうに見えた。太鼓の音は私の心を晴れやかに踊らせた。

「太鼓が入ると御座敷が浮立ちますね。」と、おふくろも向うを見た。

千代子も百合子も同じ座敷へ行つた。

一時間程すると四人一緒に歸つて来た。

「これだけ――。」と、踊子は握り拳からおふくろの掌へ五十錢銀貨をざらざらと落した。私はまた暫く「水戸黄門漫遊記」を口讀した。

彼等はまた旅で死んだ子供の話をした。水のやうに透通つた赤ん坊が生れたのださうである。泣く力もなかつたが、それでも一週間息があつたさうである。

好奇心もなく、輕蔑も含まない、彼等が旅藝人と云ふ種類の人間であることを忘れてしまつたやうな、私の尋常な好意は、彼等の胸にも沁み込んで行くらしかつた。私はいつの間にか大島の彼等の家へ行くことにきまつてしまつてゐた。

「爺さんのゐる家ならいいね。あすこなら廣いし、爺さんを追出しとけば靜かだから、いつまでゐなさつてもいいし、勉強もお出來なさるし。」

なぞと、彼等同士で話し合つては私に云つた。

「小さい家を二つ持つて居りましてね、山の方の家は明いてゐるやうなものですもの。」

また正月には私が手傳つてやつて、波浮の港で皆が芝居をすることになつてゐた。

彼等の旅心が、最初私が考へてゐる程世智辛いものでなく、野の匂ひを失はないのんきなものであることも、私に分つて来た。親子兄弟であるだけに、それぞれ肉親らしい愛情で繋り合つてゐることも感じられた。雇女の百合子だけは、はにかみ盛りだからでもあるが、いつも私の前でむつつりしてゐた。

夜半を過ぎてから私は木賃宿を出た。娘達が送つて出て、踊子が下駄を直してくれた。踊子は門口から首を出して、明るい南の空を眺めた。

「ああ、お月さま。――明日は下田。嬉しいな。赤ん坊の四十九日をして、おつかさんに櫛を買つて貰つて、それからいろんなことがありますのよ。活動へ連れて行つて下さいましね。」

下田の港は、伊豆相模の温泉場などを流して歩く旅藝人が、旅の空での故郷として懐かしがるやうな空氣の漂つた町なのである。

5

藝人達はそれぞれに天城を越えた時と同じ荷物を持つた。おふくろの腕に小犬が前足を載せて旅馴れた顔をしてゐた。湯ケ野を出外れると、また山に入つた。海の上の朝日が山の腹を温めてゐた。私達は朝日の方を眺めた。河津川の行手に河津の濱が明るく開けてゐた。

「あれが大島なんですね。」

「あんなに大きく見えるんですもの、いらつしやいましね。」と、踊子が云つた。

秋空が晴れ過ぎたためか、日に近い海は春の

やうに霞んでゐた。ここから下田まで五里歩くのだつた。暫くの間海が見え隠れてゐた。千代子はのんびりと歌を歌ひ出した。

途中で、少し險しいが二十町ばかり近い山越えの間道を行くか、樂な本街道を行くか、と云はれた時に、私は勿論近路を選んだ。

落葉で辷りさうな胸先上りの木下路だつた。息が苦しいものだから、却つてやけ半分に私は膝頭を掌で突き伸すやうにして足を早めた。見る見るうちに一行は後れてしまつて、話聲だけが木の中から聞えるやうになつた。踊子が一人裾を高く掲げて、とつとつと私について來るのだつた。一間程うしろを歩いて、その間隔を縮めようとも伸さうともしなかつた。私が振返つて話しかけると、驚いたやうに微笑みながら立止つて返事をする。踊子が話しかけた時に、追ひつかせるつもりで待つてゐると、彼女はやはり足を停めてしまつて、私が歩き出すまで歩かない。路が折れ曲つて一層險しくなるあたりから益々足を急がせると、踊子は相變らず一間うしろを一心に登つて來る。山は靜かだつた。ほかの者達はずつと後れて話聲も聞えなくなつてゐた。

「東京のどこに家があります。」

「いいや、學校の寄宿舍にゐるんです。」

「私も東京は知つてる、お花見時分に踊りに行つて。小さい時でなんにも覺えてゐません。」

それからまた踊子は、

「お父さんありますか。」とか、

「甲府へ行つたことありますか。」とか、ぽつりぽつりいろんなことを聞いた。下田へ着けば活動を見ることや、死んだ赤坊のことなぞを話した。

山の頂上へ出た。踊子は枯草の中の腰掛に太鼓を下すと手巾で汗を拭いた。そして自分の足の埃を拂はうとしたが、ふと私の足もとにしやがんで袴の裾を拂つてくれた。私が急に身を引いたものだから、彼女はこつんと膝を落した。屈んだまま私の身の周りをはたいて廻つてから掲げてゐた裾を下して、大きい息をして立つてゐる私に、

「お掛けなさいまし。」と、云つた。

腰掛の直ぐ横へ小鳥の群が渡つて來た。鳥がとまると、枝の枯葉がかさかさ鳴る程靜かだつた。

「どうしてあんなに早くお歩きになりますの。」

踊子は暑さうだつた。私が指でぺんぺんと太鼓を叩くと小鳥が飛立つた。

「ああ水が飲みたい。」

「見て來ませうね。」

しかし、踊子は間もなく黄ばんだ雜木の間から空しく歸つて來た。

「大島にゐる時は何をしてゐるんです。」

すると踊子は唐突に女の名前を二つ三つあげて、私に見當のつかない話を始めた。大島ではなくて甲府の話らしかつた。尋常二年まで通つた小學校の友達のことらしかつた。それを思ひ出すままに話すのだつた。

十分程待つと若い三人が頂上に辿りついた。おふくろはそれからまた十分後れて着いた。

下りは私と榮吉とがわざと後れてゆつくり話しながら出發した。二町ばかり歩くと下から踊子が走つて來た。

「この下に泉があるんです。大急ぎでいらして下さいつて、飲まずに待つてゐるから。」

水と聞いて私は走つた。木蔭の岩の間から清水が湧いてゐた。泉のぐるりに女達が立つてゐた。

「さあお先きにお飲みなさいまし、手を入れると濁るし、女の後は汚いだらうと思つて――。」

と、おふくろが云つた。

私は冷たい水を手に掬つて飲んだ。女達は

容易にそこを離れなかつた。手拭をしぼつて汗を落したりした。

その山を下りて下田街道に出ると、炭焼の煙が幾つも見えた。路傍の材木に腰を下して休んだ。踊子は道にしやがみながら、桃色の櫛で犬のむく毛を梳いてやつてゐた。

「歯が折れるぢやないか。」と、おふくろがたしなめた。

「いいの。下田で新しいのを買ふもの。」

湯ケ野にゐる時から私は、この前髪に插した櫛を貰つて行くつもりだつたので、犬の毛を梳くのはいけないと思つた。

道の向う側に澤山ある忍竹の束を見て、杖に丁度いいなぞと話しながら、私と榮吉とは一足先に立つた。踊子が走つて追つかけて來た。自分の脊より長い太い竹を持つてゐた。

「どうするんだ。」と、榮吉が聞くと、ちよつとまごつきながら私に竹を突きつけた。

「杖に上げます。一番太いのを拔いて來た。」

「駄目だよ。太いのは盗んだんだと直ぐに分つて、見られると惡いぢやないか。返して來い。」

踊子は竹束のところまで引返すと、また走つて來た。今度は中指ぐらゐの太さの竹を私にくれた。そして、田の畦に背中を打ちつけるやうに倒れかかつて、苦しさうな息をしながら女達を待つてゐた。

私と榮吉とは絶えず五六間先を歩いてゐた。

「それは、拔いて金歯を入れさへすれば何でもないわ。」と、踊子の聲がふと私の耳に入つたので振返つてみると、踊子は千代子と並んで歩き、おふくろと百合子とがそれに少し後れてゐた。私の振返つたのを氣づかないらしく千代子が云つた。

「それはさう。さう知らしてあげたらどう。」

私の噂らしい。千代子が私の歯並びの惡いことを云つたので、踊子が金歯を持出したのだらう。顔の話らしい、それが苦にもならないし、聞耳を立てる氣にもならない程に、私は親しい氣持になつてゐるのだつた。暫く低い聲が續いてから踊子の云ふのが聞えた。

「いい人ね。」

「それはさう。いい人らしい。」

「ほんとにいい人ね。いい人はいいね。」

この物云ひは單純で明けつ放しな響を持つてゐた。感情の傾きをぽいと幼く投出して見せた聲だつた。私自身にも自分をいい人だと素直に感じることが出來た。晴れ晴れと眼を上げて明るい山々を眺めた。瞼の裏が微かに痛んだ。二十歳の私は自分の性質が孤兒根性で歪んでゐると嚴しい反省を重ね、その息苦しい憂鬱に堪へ切れないで伊豆の旅に出て來てゐるのだつた。だから、世間尋常の意味で自分がいい人に見えることは、云ひやうなく有難いのだつた。山々の明るいのは下田の海が近づいたからだつた。私はさつきの竹の杖を振廻しながら秋草の頭を切つた。

途中、ところどころの村の入口に立札があつた。

——物乞ひ旅藝人村に入るべからず。

6

甲州屋と云ふ木賃宿は下田の北口を入ると直ぐだつた。私は藝人達の後から屋根裏のやうな二階へ通つた。天井がなく、街道に向つた窓際に坐ると屋根裏が頭につかへるのだつた。

「肩は痛くないかい。」と、おふくろは踊子に幾度も駄目を押してゐた。

「手は痛くないかい。」

踊子は太鼓を打つ時の美しい手眞似をしてみた。

「痛くない。打てるね、打てるね。」

「まあよかつた。」

私は太鼓を提げてみた。
「おや、重いんだな。」
「それはあなたの思つてるより重いわ。あなたのカバンより重いわ。」と、踊子が笑つた。
芸人達は同じ宿の人々と賑やかに挨拶を交してゐた。やはり芸人や香具師のやうな連中ばかりだつた。下田の港はこんな渡り鳥の巣であるらしかつた。踊子はちよこちよこ部屋へ入つて来た宿の子供に銅貨をやつてゐた。私が甲州屋を出ようとすると、彼女が玄関に先廻りして下駄を揃へてくれながら、
「活動につれて行つて下さいね。」と、またひとり言のやうに呟いた。
無頼漢のやうな男に途中まで路を案内してもらつて、私と栄吉とは前町長が主人だと云ふ宿屋へ行つた。湯に入つて、栄吉と一緒に新しい肴の昼飯を食つた。
「これで明日の法事に花でも買つて供へて下さい。」
さう云つて僅かばかりの包金を栄吉に持たせて帰した。私は明日の朝の船で東京に帰らなければならないのだつた。旅費がもうなくなつてゐるのだつた。学校の都合があると云つたので芸人達も強ひて止めることは出来なかつた。
昼飯から三時間と経たないうちに夕飯をすませて、私は一人下田の北へ橋を渡つた。下田富士に攀ぢ登つて港を眺めた。帰りに甲州屋へ寄つてみると、芸人達は鳥鍋で飯を食つてゐるところだつた。
「一口でも召上つて下さいませんか。女が箸を入れて汚いけれども、笑ひ話の種になりますよ。」と、おふくろは、行李から茶碗と箸を出して、百合子に洗つて来させた。
明日が赤坊の四十九日だから、せめてもう一日だけ出立を延してくれと、またしても皆が云つたが、私は学校を楯に取つて承知しなかつた。おふくろは繰返し繰返し云つた。
「それぢや冬休みには皆で船まで迎へに行きますよ。日を報せて下さいましね。お待ちして居りますよ。宿屋へなんぞいらしちや厭ですよ。船まで迎へに行きますよ。」
部屋に千代子と百合子しかゐなくなつた時活動に誘ふと、千代子は腹を抑へてみせて、
「体が悪いんですもの、あんなに歩くと弱つてしまつて。」と、蒼い顔でぐつたりしてゐた。百合子は硬くなつてうつむいてしまつた。踊子は階下で宿の子供と遊んでゐた。私を見るとおふくろに縋りついて活動に行かせてくれとせがんでゐたが、顔を失つたやうにぼんやり私のところに戻つて下駄を直してくれた。
「何だつて。一人で連れて行つて貰つたらいいぢやないか。」と、栄吉が話し込んだけれど、おふくろが承知しないらしかつた。何故一人ではいけないのか、私は実に不思議だつた。玄関を出ようとすると踊子は犬の頭を撫でてゐた。私が言葉を掛けかねた程によそよそしい風だつた。顔を上げて私を見る気力もなささうだつた。
私は一人で活動に行つた。女弁士が豆洋燈で説明を読んでゐた。直ぐに出て宿へ帰つた。窓敷居に肘を突いて、いつまでも夜の町を眺めてゐた。暗い町だつた。遠くから絶えず微かに太鼓の音が聞えて来るやうな気がした。わけもなく涙がぽたぽた落ちた。

7

出立の朝、七時に飯を食つてゐると、栄吉が道から私を呼んだ。黒紋付の羽織を着込んでゐる。女達の姿が見えない。私は素早く寂しさを感じた。栄吉が部屋へ上つて来て云つた。
「皆もお送りしたいのですが、昨夜晩く寝て、起きられないので失礼させていただきました。

冬はお待ちしてゐるから是非と申して居りました。」

町は秋の朝風が冷たかつた。榮吉は途中で敷島四箱と柿とカオールと云ふ口中清涼劑とを買つてくれた。

「妹の名が薫ですから。」と、微かに笑ひながら云つた。

「船の中で蜜柑はよくありませんが、柿は船醉ひにいいくらゐですから食べられます。」

「これを上げませうか。」

私は鳥打帽を脱いで榮吉の頭に冠せてやつた。そしてカバンの中から學校の制帽を出して皺を伸しながら、二人で笑つた。

乘船場に近づくと、海際にうづくまつてゐる踊子の姿が私の胸に飛込んだ。傍に行くまで彼女はぢつとしてゐた。默つて頭を下げた。昨夜のままの化粧が私を一層感傷的にした。眦の紅が怒つてゐるかのやうに幼い凛々しさを與へてゐた。榮吉が云つた。

「外の者も來るのか。」

踊子は頭を振つた。

「皆まだ寢てゐるのか。」

踊子はうなづいた。

榮吉が船の切符とはしけ券を買ひに行つた間に、私はいろいろ話しかけて見たが、踊子は堀割が海に入るところをぢつと見下したまま一言も云はなかつた。私の言葉が終らない先き終らない先きに、何度となくこくりこくりうなづいて見せるだけだつた。

そこへ、

「お婆さん、この人がいいや。」と、土方風の男が私に近づいて來た。

「學生さん、東京へ行きなさるだね。あんたを見込んで頼むだがね、この婆さんを東京へ連れてつてくんねえか。可哀想な婆さんなんだ。倅が蓮臺寺の銀山に働いてゐたんだがね。今度の流行性感冒て奴で倅も嫁も死んぢまつたんだ。こんな孫が三人も殘つちまつたんだ。どうにもしやうがねえから、わしらが相談して國へ歸してやるところなんだ。國は水戸だがね、婆さん何も分らねえんだから、靈岸島へ着いたら上野の驛へ行く電車に乘せてやつてくんな。面倒だらうがな、わしらが手を合して頼みてえ。まあこの有樣を見てやつてくれりや、可哀想だと思ひなさるだらう。」

ぽかんと立つてゐる婆さんの背には、乳呑兒がくくりつけてあつた。下が三つ上が五つくらゐの二人の女の子が左右の手に捉まつてゐた。汚い風呂敷包みから大きい握飯と梅干とが見えてゐた。五六人の坑夫が婆さんをいたはつてゐた。私は婆さんの世話を快く引受けた。

「頼みましたぞ。」

「有難え。わしらが水戸まで連らにやならねえんだが、さうも出來ないんでな。」なぞと、坑夫達はそれぞれ私に挨拶した。

はしけはひどく搖れた。踊子はやはり脣をきつと閉ぢたまま一方を見つめてゐた。私が繩梯子に捉まらうとして振返つた時、さよならを云はうとしたが、それも止して、もう一ぺんうなづいて見せた。はしけが歸つて行つた。榮吉はさつき私がやつたばかりの鳥打帽をしきりに振つてゐた。ずつと遠ざかつてから踊子が白いものを振り始めた。

汽船が下田の海を出て伊豆半島の南端がうしろに消えて行くまで、私は欄干に凭れて沖の大島を一心に眺めてゐた。踊子に別れたのは遠い昔であるやうな氣持だつた。婆さんはどうしたかと船室を覗いてみると、もう人々が車座に取圍んで、いろいろと慰めてゐるらしかつた。私は安心して、その隣りの船室に入つた。相模灘は波が高かつた。坐つてゐると、時々左右に倒れた。船員が小さい金だらひを配つて廻

つた。私はカバンを枕にして横たはつた。頭が空つぽで、時間と云ふものを感じなかつた。涙がぼろぼろカバンに流れた。頬が冷たいのでカバンを裏返しにした程だつた。私の横に少年が寝てゐた。河津の工場主の息子で入學準備に東京へ行くのだつたから、一高の制帽を冠つてゐる私に好意を感じたらしかつた。少し話してから彼は云つた。

「何か御不幸でもおありになつたのですか。」

「いいえ、今人に別れて來たんです。」

私は非常に素直に云つた。泣いてゐるのを見られても平氣だつた。私は何も考へてゐなかつた。唯清々しい滿足の中に靜かに眠つてゐるやうだつた。

　海はいつの間に暮れたのかも知らずにゐたが、網代や熱海には灯があつた。肌が寒く腹が空いた。少年が竹の皮包みを開いてくれた。私はそれが人の物であることを忘れたかのやうに海苔巻のすしなぞを食つた。そして少年の學生マントの中にもぐり込んだ。私はどんなに親切にされても、それを大變自然に受入れられるやうな美しい空虚な氣持だつた。明日の朝早く婆さんを上野驛へ連れて行つて、水戸まで切符を買つてやるのも、至極あたりまへのことだと思つてゐた。何もかもが一つに融け合つて感じられた。

　船室の洋燈が消えてしまつた。船に積んだ生肴と潮の匂ひが強くなつた。眞暗ななかで少年の體温に温まりながら、私は涙を出委せにしてゐた。頭が澄んだ水になつてしまつてゐて、それがぼろぼろ零れ、その後には何も殘らないやうな甘い快さだつた。

年譜

明治三十二年六月十一日、大阪天滿此花町に生る。原籍。大阪府三島郡豐川村大字宿久庄字東村。

父榮吉。長男。父は醫を業とし、書畫を浪華易堂に學ぶ。

出生の前後、父の居所大阪市内外を轉々せるものの如し。

三歳。父死す。

四歳。母死す。

父の死後、しばらくは母方の實家黒田家の隣りに住みしも、やがて祖父母と共に原籍地へ歸る。

母方の里は淀川べりの水田の村なり。(今は大阪市外となれり。原籍地は農村なり。

姉芳子は別れて、大阪郊外(現今市内 の叔母の家、秋岡家に引取らる。

明治三十九年。八歳。豐川村小學校に入學す。

同年、祖母死す。

二三年後、姉秋岡家にて死す。行年十五歳。

幼時別れて後、秋一度叔母の家に行き、姉も一度故郷に歸りたれども、彼女を記憶せず。

明治四十五年。十四歳。府立茨木中學校に入學す。一里半を徒歩にて通學す。七ケ月の月足らずにて生れ、且父の體質を承けし虚弱の質、この頃より稍面目を改めたり。

はじめは畫家たらんと思ひしも小學上級の頃より雜書を濫讀するに到り、文學者を志望す。

大正三年。十六歳。祖父死す。

祖父の死の前後の寫生風の日記『十六歳の日記』として後年發表す。處女作といふべきか。

やや長ずるまで共にありし肉親は祖父のみ。從つて、祖父の影響を最も多く受けたるものの如し。祖父は醫藥の心得あり、易學に通ず。晩年半盲なり。

祖父死して、全くの獨りとなる。財産は祖父一生に失ひたり。母の實家、黒田家に引取らる。家屋敷を賣る。

十七歳の正月より、中學の寄宿舍に入る。

中學五年の時、石丸梧平氏の「團欒」に一文を掲載され、田舍の小新聞に小說風のもの書きしことあり。

大正六年。中學卒業と同時に上京す。

同年七月、第一高等學校英文科に入學す。

從兄秋岡の紹介にて、南部修太郎氏を知る。

一高在學三年間は、同校の寄宿寮に過す。北歐の作家及び白樺派、新思潮派の作家を耽讀す。

大正九年。東京帝大英文學科に入學す。

翌十年二月、一高以來同級の友人、石濱金作、鈴木彥次郎、酒井眞人の三人に今東光を加へて、同人雜誌「新思潮」を發刊す。

「新思潮」の先輩作家等を知る。

同誌第二號の「招魂祭一景」、菊池寛氏その他に賞讃さる。爾來菊池氏より一方ならぬ厚顧を受く。

菊池氏の紹介にて、横光利一を知る

同年四月、英文學科より國文學科に轉ず。

大正十二年。二十五歳。文藝春秋編輯と

れ、同人に加はる。同人その他多くの文學者を知る。

「會葬の名人」その他、短篇小說及び短文を同誌に發表しはじむ。

「新潮」編輯者水守龜之助氏、「時事新報」文藝欄記者佐佐木茂索氏等の好意にて、創作月評風のものなぞ書きはじむ。

大正十三年。二月、創作「篝火」を「新小說」に發表す。

上京後、淺草區の從兄田中の世話になる。

同年三月、國文學科を卒業す。

同年九月、當時の新進作家二十人ばかり集り、金星堂より「文藝時代」を創刊す。三ケ月間、同誌を編輯す。

大正十四年。「文藝時代」一月二月號に「伊豆の踊子」を發表す。

同年十二月、「白い滿月」を「新小說」に發表す。

大正十五年。六月、處女作集「感情裝飾」を金星堂より出版す。

昭和二年。三月、創作集「伊豆の踊子」を、金星堂より出版す。

同年、長篇小說「海の火祭」を「中外商業新報」に連載す。

同年十二月より翌年五月まで、伊豆熱海町に住む。

學生の頃より、伊豆湯ヶ島溫泉湯本館に滯在すること屢々、伊豆を題材とせる作品多し。

昭和四年、『川端康成集』(「新進小說傑作集」の內)を、平凡社より出版す。

同年十二月より、「淺草紅團」を「東京朝日新聞」夕刊に連載す。

昭和五年。「十三人俱樂部」員、「近代生活」同人、文化學院文學部教師等となる。

同年四月、創作集「僕の標本室」を新潮社より出版す。

同年十月、創作集「花ある寫眞」を新潮社より出版す。

同年十二月、創作集『淺草紅團』を先進社より出版す。

昭和六年。三十三歲。「水晶幻想」を「改造」一月號に發表す。

望郷

池谷信三郎

『望郷』に寄せて

池谷信三郎

『望郷』は、伯林で過した二年ばかりの間の印象を、小説の形で書き集めたもので、私の所謂処女作である。どの行の裏にもあの頃の若さの想ひ出を聯想びしのんでゐて、私にとつてはいつまでも懐しい作品である。今又この全集に採録されて数万の新しい読者に読んで頂けると云ふことは、昔話の聞き手を得たやうな、うれしさである。

望郷

序曲

凡そ人の世のもろもろの出來事を、歡喜も悲哀も戀も嫉みも一樣に、無限の底に熔かし込む、坩堝のやうな大都會の夜であつた。

一日の生活に疲れ切つた伯林の街は、今此の夜更、深い眠りに落ちてゐる。

裏街の辻にしよんぼりと、忘れられたやうに點された街燈の蒼白い光は、この靜かな夜を見守つて、仄かに投げた灯影のもとに、、、、かさこそと淋しげな音を立てて散つて行く菩提樹の枯葉を踏みつけた男は、ふと立ちどまる。

深く立てられた外套の襟の中にそつくりうづめてゐた顏を、心持上げる。自分の鼓動にも怖毛を震ふ寂寞に包まれて、男はおづおづと燈火を見上げた。

異國の空に放浪する、旅の疲れがまざまざと、その男の顏には讀まれるのであつた。そつと吐かれた吐息のかげに、脣のうすら寒さが身裡を走る。癒え難いノスタルヂヤの愁ひに混つて、過ぎて來た此の二年の奇怪な出來事が、彼の頭の中に、丁度影繪を見るやうに浮んでゐた。

彼は頭を振つて、またとぼとぼと歩き出す。長い影法師がゆらゆらと、凸凹の鋪道の上に崩れたと見る間に、黑い後姿はそのまゝ吸はれるやうに、煉瓦塀の暗闇に消えて行つた。

魂の途絶えた夜の街を、冷たい風が一わたり、悲しげな音を立ててさつと吹き去つた。

緩徐調

夜の街

今村惠吉が土鼠のやうに地下鐵道の停車場に下りて來た時、改札口の電氣時計がプリンと動いて、十時半を六分過ぎた所であつた。

默々と動いて行く人の流れにつり込まれて、惠吉は知らず識らず足早に、長い隧道を拔けて行つた。この上にはあの賑やかなフリードリッヒの街路が走つてゐるのだ。

やがて隧道は二股に別れる。そこ迄續いた人の流れは、尾籠な例で失禮だが、丁度ズボンの放屁のやうに右と左へ別れて行つた。惠吉は左の流れに押されて行つた。

兩側の壁はまだ所々出來かゝりで、お酒や香水の廣告が塗り立てのペンキのにほひを漂はせてゐた。戰前から工を起して十數年、やつと出來上つたものなのである。

二人の男が酒を飲んで、いつまで生きるかと云ふ事を語り合つた時、甲は云つた。俺あこの獨逸の國土のどこの隅にでも、一本の佛蘭西の旗が翻つてゐる間は、どんな事があつても死なない。すると乙は笑ひ乍ら云つた。俺あフリードリッヒ街の地下鐵道の工事が出來上つたら、もうこの世に思ひ殘す事もなく、安心して天國へ行けるがね。――惠吉はこんな一口話を思ひ出してゐた。

ライプチーゲル街のプラットフォームに出て來た時、彼はそこにたゞならぬ人の蠢きを見出した。身長の低い彼は、百合の根のやうに幾重にも立塞がつた群集の背後から、脊伸びをしな

からわづかの隙間を見出しては、懸命に覗き込まうとしたのであつた。

『ミーッ、ミーッ！』

おろおろした聲がその人々の輪の心から聞えて來る。

惠吉はやつとあたりの人の話で様子がわかつた。何でも一匹の小猫が、女の人の手提籠の中から飛出して、線路の上に落ちて了つたのらしい。彼はやつと中へわりこんだ。

『ミーッ、ミーッ！』

から叫び續けてゐる女は、服裝は貧しかつたが、眼元の涼しい綺麗な顔をした、まだ年若い娘であつた。キャベツの葉が覗いてゐる籠を腕にかけて、兩手を絞るやうにして、頻りと叫んでゐる。長い睫毛には一ぱい泪が溜つて、電燈の光がキラキラと宿つてゐた。

やつと前に出た惠吉は、暗い線路道を傳つてチョコチョコと歩いて行く小さい黒猫を見た。黒猫は時々娘の方を振返つては、首を傾げるやうに見上げるが、又そのまゝすたすたと隧道の中の暗闇の方へ歩いて行く。身體はもう見えなくなつて、二つの眼だけが時々こつちを向いて異様に光る。

奥の方に何間かの間隔を置いて點された、暗い電燈の下に、二條の線路が冷たく光つてゐた。それは車が來れば一ぱいになつて了ふ、狹い管の隧道であつた。

『ミーッ、ミーッ！』

娘はもうおろおろと泣き出した。

『可哀さうに、撥飛ばされちまふだらう。』

『それより線路にや電氣が通つてゐるからな。』

『黒猫の黒燒だ。』

見物はてんでにこんな勝手な同情と無關心の言葉を言ひ合つてゐた。丁度皆の顔が違ふやうに。

『やつて來た。』

一人が云つた。

隧道のずつと向うの奥から、大蛇の眼玉のやうな二つの黄色い光が見え出した。

『ミーッ!!!』

娘はいきなり帛を裂くやうな悲鳴を上げて倒れかゝつた。

その時である。惠吉は人々が急にざわついたのに氣が付いた。と見ると一人の男が、人々を掻き分けていきなり脱兎の如く線路の上へ飛下りた。

人々の間には恐ろしい恐怖と不安の沈默が、ほんの一瞬間續いた。がそれもほんの束の間であつた。やがてその男が片手に黒猫を摑き、いて、隧道の暗かりから再びプラットホームに飛上つて來た時、人々の間には渦卷のやうな動搖が起つた。

その時もう風を起して闇の中から赤の溜流りの電車が飛出して來たのであつた。

惠吉はその男の顔を一目見た時はつとして立止まつた。それは紛ふかたなき日本人であつたのだ。瘦せぎすな蒼白い顔に、さつと一脈の紅がさして、男らしい濃い眉毛がぴくぴくと動いてゐる。

まるでマリヤ様にでもするやうに、拜むばかりに禮を云つてゐる娘に、それこそ西行のやうに無造作に猫を渡すと、その男は急に苦しげな咳をし始めたのであつた。彼はハンケチを口に當てて、そのまゝ俯向加減に歩き出した。そして一彼の無禮を罵る人々、その勇氣を賞める聲々の間を掻分けるやうにして、その男はすたすたと改札口の方へ歩いて行つた。

時々立止まつては苦しげに咳きこむ男の後姿を見た時、惠吉はやつと自分に歸つたやうな氣がした。そして默つて後を追いて行つた。

『えゝ、どうも有難うございました。お蔭でも

うすつかり。……』
　その男は輕く笑ひ乍ら云つた。
『餘り亢奮したもんですから。』
『でもあなた。少し亂暴だつた。ほんとに。』
　獨逸へ來て日本人の風采の頗る揚らないのに、つくづく愛想をつかしてゐた惠吉も、今自分と向ひ合つて卓子の前に腰掛けてゐる男の、少し瘦せ過ぎてはゐるが、キリッとしたその顏付や、すらりと身長の高い身體を見て、これならばと思ひ乍らさう云つた。
　大理石の丸卓子の上には珈琲の銀の容器が澁い光を放つてゐた。向うの方からダンスの曲が華やかに流れて來た。
『失禮ですが何をおやりで？』
　その男が尋いた。
『え？　私？　まあ、法律に經濟。とかなんとか。ハハヽヽ、まあそんな所です。』
　惠吉はちよつと擽つたいやうな氣がした。
（世を忍ぶ假の名だ。）
　そんな氣がした。そんなものを勉强するのなら、日本にゐて日本の本でやつた方が遙かに氣が利いてゐる。彼が大學へ一年と通はない內に國を飛出して來て了つたわけは、まだ頭の小つぽけに固まらない內に、感受性の銳い內に、ミュッセに云はせると、なんの印も押してない、そしてどんな印でも押され得る、白臘の表面のやうな若い氣持の內に、うんと良い音樂を聞いたり、名畫を見たり、廣い世界を見たり、等々、であつたのだ。
（こんな我儘の云へる事を親父に感謝しなければいけない。）
　どうせ人生は縱にしたらいくら踏張つても六七十年だ。橫にはいくらでも擴がる。藝術の園にどんな綺麗な花が咲いてゐるかも知らないで、目かくしをした馬車馬のやうに、灰色の埃道をとぼとぼと步いて行く。そんな事は考へるだけでも彼には淋し過ぎた。
　ぶらぶらと花を摘み乍ら步いて行く。その爲に目的地に達しない內に日が暮れて了つても構はない、或はその花が譬ひ毒であつても構はない。――それが惠吉の行き方であつた。
『あなたは？』
　生溫くなつた珈琲を飮み干し乍ら、今度は惠吉が尋いた。
『私ですか？　ハハヽヽヽ、まあ當てて御覽なさい。』
『さあ、やつぱり醫學の方ですか？』
『どうしまして、そんな知識階級ぢやないんです。實は、――なんて云ふと少々芝居がかつてゐますが、米國で少し活動を演つてゐました。さうさう、まだ名前も云はなかつた。』
　その男はポケットから紙片とエバーシャープを取出して、何やら書くと、それを今村に渡した。
『名刺を持つてゐませんから、これで失禮。クヽヽリモトと云ひます。番地はこゝですから、どうぞお閑暇の折は是非お立寄り下さい。』
　さう云つて彼は愛嬌よく笑つた。
『伯林には一人も友達がなくつてね、いくら渡り鳥でも、時々淋しくてたまらなくなつて了ひますよ。そんな時は酒だ。放浪者には酒が良い。米國はさう行かないんでね。……でもやつぱり米國の方が良いですな。』
　珈琲店を出た時、栗本はさう云つて、もう暗くなつた街の上に區切られた細長い空を見上げた。そこには星がたつた一つ、夢のやうに瞬いてゐた。栗本の放心の瞳には何かしら語られざる不思議な物語の影がひそんでゐるやうにも見えた。
　栗本は默つて唾を吐いた。
　惠吉はぼんやりと、その日一日の自分を顧みた。

平常のやうに自分の部屋のソファに寢そべつて、ぼんやり天井を眺めてゐた惠吉は、思ひ出したやうに起上つた。

留學生が必ず一遍は取附かれる神經衰弱が丁度やつて來たのか、まあなんと云ふ倦怠だ。彼は忌々しさうに欠伸をした。

戶外には初秋の陽差しが暖かさうに微笑んでゐる。まだ散り初めない菩提樹の青葉が、窓硝子を透して見えた。

誰から返事を書いても不公平になる、と云つた氣持から手も附けずに放つてある手紙が、もうかれこれ五六通も黒の書机の上に積まれてあつた。

赤い布帽を冠つたダンテの像がぢいつと考へ澄ました眼差しで彼の方を見てゐる。

惠吉は帽子を握つた。パイプを突込んだポケットの中の手先に、冷たく鍵が當つた。部屋の戸と、家と、入口の扉と三つ鍵を廻せば、彼はもう誰かの云ふ、「終りのない芝居」の舞臺に立つのだ。獨逸名うてのラインハルトの舞臺だつてとても敵はない大舞臺だ。そこには觀客も、俳優もないのである。

街路に出た惠吉は、思ひ切つて悠然と、大股に歩き出した。ウンテル・デン・リンデンからずうつと續いて末は巴里に通ずると云ふこのカイゼルダムの大通りを、眉間に八の字を寄せて惱ましげに彼は歩いて行つた。

横町を曲つて向うから、大きなビラを擔いだ廣告屋がやつて來た。

「何處へ行く？　珈琲店コルソへ！　甘美い菓子。美人のダンス。」

と書かれてある。

『今日は！』

とその男が彼の顔を見て、笑ひ乍らさう云つた。二三歩行違つた頃、急に後方の方で、『ブーッ！』と云ふ大きな音がしたので、彼は吃驚して振返つた。廣告屋がそこにあつた辻待のタクシーの喇叭を惡戯に鳴らしたのであつた。眼が合つた時、その男は又笑つた。

（人道を歩いてゐるのだ。轢かれる心配はなかつた。）

そこで彼は飛上つて、低く垂れてゐる菩提樹の黄ばんだ病葉を一枚むしり取つた。秋の暗示を彼はその葉の表面に讀んだ。

通りの向うから吹いて來る冷たい風は、彼の額を包んで、そのまゝキリキリッと道路の上の塵埃を捲き上げると、今度はさつと並木の幹に叩きつけた。

地下鐵道のプラットフォームの腰掛に、腰を下して車を待つてゐると、二等の切符を見せびらかすやうにして、華美な風態の女が三人やつて來た。一目見てソレと解る女であつた。

『失禮。』

三人はさう云つて彼の脇へ、丁度三十三間堂の羅漢樣のやうに、さも窮屈さうに並んで腰を下した。

（向うの腰掛が空いてゐるのに。）

惠吉は足の間にステッキを挾んで、默つて下を向いてゐた。

三人の女連れは故意とらしく、キャッキャッと笑つては喋り合つてゐる。

（誰が見るものか。）

惠吉は牡蠣のやうに押默つて、依怙地に猶ほも下を凝視めてゐた。彼の狭い視野の中を、いろいろの人の足だけが通り過ぎた。粹な縞柄のズボンが見える。

（惜しい事にエナメルの靴が埃だらけだ。これから芝居へ行くのなら、辻に立つてゐる靴磨きの小僧に、幾百馬克かの札ビラを切る必要が

ある。）
　そんな事を惠吉は考へてゐた。
　西洋の女は男の靴に惚れるんだよ、男が女の靴下に惚れるやうに、と誰かが云つたのを思ひ出してゐた。
　今度は黒いズボンが一米半ばかりのコンパスで通つた。ステッキが足と前後して勢ひよく動いた。惠吉は少し視界を廣くする氣になつて、徐ろに、伏せた眼を上げた。その男の顔が眼に入る迄には、中々時間がかゝつたやうな氣がした。
（足駄を穿いて傘をさしたら、丁度天頂がその男のもみあげのあたりに屆く位だな。）
　と思つて彼がその男の顔を見上げた時、決鬪の疵痕のある男の眼がギロリとこつちを向いて、「侏儒相場豚奴！」と云つた。眼が云つたのである。
（隣りの女の伴侶だなどと思はれては分が惡い。）
　と悟つて惠吉は立上つた。
（こんな所を日本人にでも見られたら、もうのつぴきならぬ事實として、兎角の噂を立てられるのだ
　惠吉はひやりとした。

「人の口」と云つたものを考へて見た。何でも他人のアラを穿りたがるのが日本人の根性だ。
　彼は時計を出して見る拍子に、ポケットのパイプに手が觸れた。取出して葉卷をさして燐寸を擦つた。「喫煙車は向うに停る。」と書かれた赤札が見えた。
（ハハア、獨逸式だな）
　彼はぶらぶらとそつちの方へ歩きかけた。
　彼は本國を出て以來、煙草は吸はない事を標榜してゐるのである。がその癖、葉卷は時々吸ふ。
『やつぱり吸ふぢやないか。』
　友人がさう反問すると、彼はいつでも、
『白馬非馬。』
　と云つて澄ますのである。尤も彼の眞實の目的は、買ひ立ての琥珀のパイプに早く色を着けたいからなのであつた。もう五分程も黒くなつたと、彼は會ふ人毎に吹聽して歩くのである。
　大きな男はもう十間も向うに行つてゐた。
（一節の竹馬に乘つても敵はない。）
　惠吉はもう一遍感心した。その途端、三人の女連れが又大聲に笑つた。
（又やつてゐるな。見ないと云つたら見るもんか。）

　彼は益々固くなつて行く自分に氣がついた。
『琥珀だわよ。』
　そんな聲が聞えた。
（俺のパイプの事を云つてゐるんだな。）
　惠吉はよく花柳の巷、と云ふのも此國ではちよつと變だが、兎に角さう云つた所へ出入してゐる櫻井と云ふ男の事を考へてゐた。彼は、ダンスを習ひ給へ、何、すぐ覺えるよ、ダンスが出來なくちやね、君、とよく云ふ男である。近頃は君、馬克が高くなつてね、と云つたその男の顔が浮ぶ。下品と云ふ事を眼の敵のやうに考へてゐる彼は、心からその男の事を蔑しんでゐる。道樂話をまるで自慢のやうに、大つぴらに話し廻るその男の心持は、どうしても感心出來たものではない。
　日本に居た時は、珈琲店へさへもろくに行けずに、ピーピーやつてゐたのが、伯林へ來て、少しばかりの馬克の相場に、忽ち成金根性を露骨に曝け出して、足も宙に浮れ廻つてゐる。いやはや、と云つた氣がするのであつた。
　何でもその男は、家庭教師に行つてゐたある金持のお孃さんをたらしこんで、その親元からたんと金を強請つたのだと云ふ事である。彼はその時、同時に四人の女に結婚を申込んだと

も聞いてゐる。

そして兩人は結婚して伯林へやつて來てゐるのだ。お孃さんはもとより嚴格な父親の怒りに觸れて、殆ど勘當されて了つたのださうである。所が金の切れ目が緣の切れ目で、近頃は殆ど雨上りの傘か何かのやうに、出て行けよがしの扱ひで、廢の窒の女の身で、あれぢや眞實に可哀想だよ、とよく惠吉は山田とゐふピアニストの友人からその話を聞かされるのであつた。

そんなわけで、彼は心の底からその男を嫌つてゐた。が、櫻井の話を聞いてゐるのは、彼にとつて面白い事には違ひなかつた。自分の知らない世界の事を、まるで星の世界の出來事でも聞いてゐるやうな氣がして、彼は卑しみ乍らもその男の話に釣込まれて了ふ事が多かつた。

惠吉は葉卷の灰を落した。

いつものやうに押合つて、車に乘らうとした時、先刻の三人がいつの間にか背後に居た。人に押されるやうにして、故意と彼の背後から身體を押しつける。

するとそのうちの一人が、流行の、太い短い柄のついた日傘の先で彼の靴をつツついた。

『あら、どうも失禮。』

『いゝえ。』

惠吉はちよつと帽子へ手をやつた。

（これは紳士の禮だ。いくら相手がプロだつて。）

さう思つてその日傘を見た時、彼は危く噴き出して了ふ所であつた。それはブ・ドッグの握りがついてゐて、象牙の耳が聞き耳を立ててゐる。加之に毛皮の襟卷迄してある。

女は二人腰を掛けて、一人はその前に立つてゐた。惠吉は入口に倚り掛つて、お酒の廣告と、タイプライターの廣告を見てゐた。

（今度馬克が下つたら一臺買ふかな。）

と考へて、いつの間にか自分も悧巧になつたものだと彼は心の中で微苦笑した。

心に少し餘裕が出來たのか、それとも狹い車室の中なので自然と眼に入るのか、横眼の中に、坐つてゐる女の顔が入つて來た。顔と云ふより大きな帽子が眼を惹いたのだ。

黑の麥藁の廣い鍔の上に、淡紅色の天鵞絨の椿の花が、そつと一輪置いてある。その上から黑の紗が、霞のやうにかゝつてゐる。惠吉にはそれが丁度古沼の底に沈んでゐる、椿の花を見るやうな氣がしたのであつた。

前に立つてゐるもう一人の女に話しかけるやうにし乍ら、その女は顔を擡して、チラッと彼の方を盗見した。廣い額が電燈を遮つてはゐたが、美しく化粧したその顔が、につと微笑んでゐるのがわかつた。眞紅に紅を着けた唇が、幽かに戰いてゐる。

（流行賑やかなものだ。）

つくづくと惠吉は考へた。

そこから三つばかりの停車場は高架になつてゐた。電燈がぱつと消えたと思つたら、地下鐵道はぐんぐん上り勾配になつて、車は地の中から出て行つた。

夕方とは云へ、九月の太陽の光が強く眼に滲みた。窓から見える教會の赤煉瓦の塔が、夕陽を受けて眞紅に光つてゐる。ノルレンドルフ廣場の活動小屋の窓硝子が燃えるやうな朱を溶かしてゐた

菩提樹の深まつた濃緑が、こんもり街を色どつて、清々しい氣持を乘せた車は、硝子張りの停車場の中に滑つて行つた。

その時、ふと惠吉の瞳に映つたものは、先刻の女の顔であつた。彼はいきなりコツンと頭を叩かれた。

何と云ふものを彼は見せつけられたのであらうか？

西日さす薄明りに曝されたその女の顔は彼、

はなんと云ふ事なしに、アイゼナハにあるバッハの生家で見て來た顔像を想ひ浮べた。それは石膏で作つたもので、半面は普通の顔で、半面は肉が脱れて内部の髑髏が見えてゐるものであつた。樂聖バッハとその女と、そこにどうした聯想があつたのか彼は知らないが、それ程、その女の顔は彼に髑髏を思はせたのである。

惠吉には、舞ひ狂ふ蝶を見て、やがて朝露の玉をなす、蜘蛛の巣にひつかゝつてゐるその姿を思ひ浮べる程、それ程この人生に對して深い洞察力を持つてゐる自信は毛頭ない。冥土の旅の一里塚などと觸れて歩く程シニカルにも出來てゐない。そんな氣持は出來るだけ押隱さう。そしてそんな風にものを考へた時、必然やつて來る所のあの堪へ難い淋しさに、怖氣をさへ懷いてゐるのであつた。

戀人の甘い抱擁の背後に、骸骨がヴァイオリンを彈いてゐるメルケルと云ふ人の繪などを見ると、たまらなく不愉快をさへ感ずるのであつた。椿姫に出て來る父親の氣持は、たゞ年寄りの冷水以上には同感出來ないものなのであつた。

（薔薇の花はいつ迄も香り高く咲いてゐろ。）

彼のこんな穢れない、坊ちやんらしい、浮はついた感傷氣分は、仲間の誰彼から嘲笑と、或る憐憫をさへ以て見られてゐるのだ、と云ふ事を知つては居るものの、どうしても捨て切られないのは、やつぱり今迄育つて來た周圍の影響で、何も時流に阿諛して深刻がる必要もないと、了ひにはさう考へて、自惚れたり、自ら慰めたりしてゐたのである。がしかしからまざまざと眼の前に突きつけられては流石の今村惠吉、終に象牙の塔をぶち壞さざるを得なくなつたのである。

女は知らぬ顔に、――或ひは知つてゐても、今惠吉が考へてゐるよりも、もつともつと切實に感じてゐても、いや毎朝化粧の鏡に映るその姿を、どう彼女は見てゐるか、惠吉にはよくわかるやうな氣がする、そして苦しいあきらめの修行の後に、その笑顔を知得したのであらうが、その彼女は今、彼の眼の前でチョコレートを齧つたり、白粉に塗りかくされてはゐるものの、それとわかる眼の下の黒い隈のあたりを縮ませて、大仰に笑つたりしてゐるのである。

惠吉はこの女の爲に鏡の存在を呪つてやりたいやうな氣がした。

（厭なこつた。）

彼は堪へられなくなつて、その次の驛で降りて了つた。入口に立つてゐた、氣取つたネクタイをかけた男の、紫色のハンケチから、高い香りの香水が彼のぼんやりした鼻を打つた。

かうやつて會社の事務員か何かのやうに、毎日定つた時刻になると、盛り場に出勤して行く女たちと、それを目あてに夕方になるとぶらぶらと、蝙蝠のやうに出て來る遊治郎とが、同じ車で、毎日何處となく運ばれて行く姿を見守つて、惠吉はほろりとした。

彼は表へ出た時、悲劇は御免だと思つた。どうせ見るならドグラス式の景氣の良いものか、それとも情緒劇にしても、もつと淡い奴に限ると思つた。

（とんだ「涙グミズム」に陷つたものだ。）

彼はふと高等學校の時、岩崎と云ふ男がゐたのを思ひ出した。端艇部の選手などをしてゐて、頑丈な身體にも似ず、馬鹿に感傷的な男で、よく感激ばかりしてゐた所から、彼の仲間で「岩崎の涙グミズム」と言ふ言葉が流行つたものであつた。

惠吉は今その男の事を思ひ出して、角帽を冠つても、まだ涙ぐんでゐるか[illegible]、しらんなどと考へ乍ら、ぶらぶら[illegible]を歩いて行つた。

二階建の家の屋根あたりに漂うてゐた、夕燒

けの名殘りもいつしかに消えて行つて、夕闇が猫の跫音のやうに忍びやかにせまつて來た。
　惠吉はともすれば沈み勝ちな氣を引立たせようとして、明るく照明された飾窓を一つ一つ覗き込み乍ら、忙しげに人の往き來する、夕方の街を、ゆつくりと歩いて行つた。
（日本ならば蝙蝠の低く飛ぶ頃だ。）
　街にはもうずらつと灯が入つてゐた。まだ後光の出ないその燈火の一つ一つが、ぢいつと薄暮の中でものを考へてゐる。
　何かしらに自分の氣を移させて、心の底からこみ上げて來る寂寥を一時でも抑へつけようとする彼の努力は、往き來する一人一人にも鋭い觀察の眼を向けさせたのであつた。
　メフィストのやうな哄笑を殘して行く者。いそいそと家路を急ぐ女事務員。さうかと思ふとチャン・バルヂャンのやうな男がやつて來る。背負袋を背負つて、太い杖を突いてゐる。甚だこの都大路には諧調を失してゐる。
（奴さん方々の家の眞鍮の表札でも剝がして歩いてゐるのだらう。さう云へば背負袋が重さうだ。）
　四角の街路樹のかげに、丸い廣告柱の赤や黄色の貼紙が彼の目を惹いた。伯林そのものの象徴の如くに、それはうす青い街燈の灯影のもとに立つてゐた。
　惠吉にはこのリトファスゾイレ――さう、この廣告柱は呼ばれてゐた。――が伯林の地方色を、如何にもよく出してゐるやうな氣がした。何故ならば、それには歌劇や寄席の廣告と並んで、殺人犯人搜索の廣告が混然と貼られてあつた。――
　このリトファスゾイレの周圍をぐるぐる廻つて、自分の踵に追ひつくと云ふ事、それが「不可能」と云ふ事の諺言になつてゐる。――ナポレオンに見せてやり度い言葉ではないか。――とまれ伯林の人々はこの不可能な企てを無意識に繰返し乍ら、その日一晩の享樂の方面を決めるのであつた。
　久し振りで名優モイッシーが「生ける屍」を演ると云ふので、惠吉は宛のない外出の極りをつける可く、明るく電燈の點された、獨逸劇場の入口を潛つた。
（選りに選つてまあ、なんと云ふ芝居を見たものであらう。）
　益々重く壓しつけられたやうな心を懷いて、先刻も云つた通りに惠吉は、土鼠のやうに地下鐵道の停車場を下りて行つたのであつた。そしてそこで、黑の小猫の紹介で、ジョンニー栗本の知己を得たと云ふ事の運びであつた。
　栗本に別れた惠吉は、伊達の白絹の襟卷を、口の上からかけてくるくると捲きつけると、外套の袖をそのまゝ、兩手をポケットにさしこんで、とぼとぼと歩いて行つた。
　四辻の角に車店を出して、釣魚でもするやうな氣で客を待つてゐる、腸詰屋のお婆さんは、それでも一人立つてゐるお客を捕へて、頻りと喋つてゐた。から、ものが高くちや、やり切れない、もう三日も水ばかりだ、と云つた事をくどくどと話しかけてゐるらしかつた。
　若者――その客はまだ年若い勞働者風の男であつたが、――彼は又そんな事には一切無頓着に、さつさと自分の不滿を拳固に籠めて、宙にふり飛ばしてゐた。
『呪はれたる人生よ！』
　そんな聲がチラッと通りすがりの惠吉の耳に入つた。その男は大分醉つてゐるらしかつた。片手に煙の出た腸詰を握つて、芥子の皿に突つこむと、そのまゝぱくりとやつて、ちよつと

顔を顰めて、ぱつと唾をした。呪はれたる人生を一緒に吐きだすやうな勢ひであつた。

（失戀して家を飛び出した若者かしら。今晩あたり醉に乘じて、戀人の一家を燒拂ひ、燃え狂ふ猛火の中にわが身もろとも、お腹の腸詰も一緒に、焦れ死にでもする氣らしい。

二つの抱き合つた燒死體がまだ煙を立てゝゐる燃えさしの燒跡の煉瓦の下敷になつて發見される。さうすると、……）

惠吉はそんな事を考へ乍ら角を曲つた。人通りの途絶えた夜の街を通して、うすら寒い夜風が吹き去つた。惠吉の空想の小舟は、今度はさつきのお婆さんの影を追うて漂うた。

（ガルニソン教會の大時計が、一時の時を傳へて響く。お婆さんは賣れ殘つた腸詰の數を一通りして、箱車の蓋をする。凸凹の道を横切つて、ガタガタ音を立て乍ら車を押して、そこの角の闇に消えて行く。……

暗い石油ランプの點された、薄汚い小屋の中には、醉ひつぶれた息子が、むしやくしやの頭を机にぶつつけ乍ら、何か一人でぶつぶつ云つてゐる。蒼白い痩せほうけた顔のその妻は、脇の板の腰掛にせつせと針を動かしてゐる。時々そつと夫の方を盗見しては、深い溜息を漏らす。

壞れかゝつた寢臺の上には、横に重なり合つて四つの小さな頭が、ぼろぼろの毛布の中から覗いてゐる。

戸にかけたお婆さんの手は、そのまゝ力なく垂れて了ふ。

『いくら賣れて？』

さう云つて自分の顔をちいつと見上げるあの嫁の悲しい眼付をお婆さんはその時思ひ浮べてゐたのである。そして自分がこのわづかばかりの皺苦茶の馬克の札を渡してやると、深い溜息を吐いてそれでも、

『寒かつたでせう？』

と云つてくれる。

お婆さんは思ひ切つて把手を廻した。……）

惠吉はこの時ふとそこの軒下の石段に、二つの暗い影を見た。惠吉の跫音を聞くと、その二つの姿はあたふたと街を横切つて、向うの横町の闇に消えて行つた。人目を忍ぶ女中の戀か、客を捕まへた夜鷹の影か？

惠吉は又とぼとぼと歩き出す。

場末の薄汚い酒場である。

暗い灯影が黄色い光を隅の卓子に投げてゐる。コップに手をやり乍らちいつと一ところを凝視めて、ぼつりぼつりとフェヂヤが語り出す。

『人間にはたつた三つの道があるんだ。第一は働く事だね。金をしこたま儲けるんだ。さうして俺達が住んでゐるこの世の穢れを益々大きくして行く事だ。そんな事あ俺や厭だ。第一わけがわからない。が兎に角まあ厭なんだ。次に第二の道だね。それはその穢れを追拂つて了ふ事さ。だがそいつあ英雄にならなくちや出來ない藝當だ。所で吾儕もとより英雄に非ずと。さうするとどうしても最後の奴さ。自分を忘れる事さ。酒を飲んで、管を捲いて、唄を歌ふんだ。――そいつを、――そいつを俺あやつて來たわけさ。』

モイッシーの演つたフェヂヤの顔がいつの間にか先刻別れた栗本の顔になつてゐた。あの酒場で合唱するジプシーの「一夜の唄」ギターの音がそのなげやりな放浪的な、暗い哀調を低く響かせて、もう一遍惠吉の頭に甦つて來た。

ソフヰシャーロッテ廣場の燈火が、磨かれたアスファルトの鋪道の上に、長く映つてゐた。自分の部屋の温かい寢床を想ひ乍ら、惠吉は心持足を早めて、街路樹の蔭を踏むやうに、歩いて行つた。

たそがれの唄

今村惠吉の背後で重く鍵の音がして、彼は再び自分の部屋にたつた一人の自分を見出した。そのまゝソファの上に身を投げるやうに仰向けに寢ころがつて、彼は白い天井を見上げた。

重く沈んで行く自分の心を淋しく見守り乍ら、からやつて目を瞑つてゐるうちに、彼の追憶の翼は彼を、マルセイユの港に着いた箱崎丸の船室の中に運んで行つた。

丁度船があの港に着く前の日、シシリー島の沖合を過ぎ行く頃、上陸祝の洋酒を少し飲み過ぎて、夜露の降りた甲板に、ニーナの唄を口吟み乍ら寢そべつてゐた爲か、ひどい熱を出して了つて、マルセイユでは上陸も出來ずに、ロンドン迄廻る事になつた。

あらかたの客はいそいそと上陸り行つて、旅の疲れを今宵一夜の陸の臥床に、のびのびと癒やしてみんな思ひ思ひの都へ汽車を走せて行くのに、病める此身は船室の釣床に身を横たへて、纔尺に足らぬ小窓から、港の燈火を眺め暮す事の侘しさよ！

船は、うすれ日さす異國の港を去つて行く。

葡萄酒の樽を積んだ荷馬車の軋る波止場の上に、ヴァイオリンを弾く物貰ひの奏づる絃の調も、慕ひ寄る夕闇の中に溶けこんで、巖窟王で有名なシャトー・ディーフの岩が、海の中に、魔の影の如くに峙つてゐる。ノートルダムの塔の上にかゝつた夕陽が、赤く朱をとかしてゐた。

船を追うて來た鷗もいつしかに悲しげな啼き音を殘して、故鄕の空をさして飛び歸つて行つた。

一時的の熱と見えて、げつそり下つて、もう大分よくなつた彼は熱疲れの身體を温かくスエーターに包んで甲板のベンチに腰をかけてゐた。

九月の海水浴と云つた工合に、めつきり減つた船客は、お互に何となく親しみを感じ合ふのであつた。ロンドンの夫の許へ行くと云ふ、若い細君が惠吉の傍へ來て坐つた。

「如何？　もうお宜しくつて？　隨分お心細かつたでせうね。」

「えゝ。有難うございます。……」

惠吉は輕く笑つて見せた。

「あなたもお一人で、よく元氣ですね。」

こんな工合に兩人は話し出した。この間貸してやつたロッチの本から話の緒口は解れて、兩人はいろいろと小說の話などに興じ合つた。

「妾、チェイホフの短篇を讀んでゐると、何だか、から美しい、さうねえ、ちよつとシューベルトの音樂でも聞いてゐるやうな氣が致しますわ。」

チェイホフは惠吉も大好きな作家であつた。萬惡の彼尊いその境地を彼は考へてゐた。岸と云つた事を考へてゐた。

「如何です？　レモナードは……おーい、ボーイさん。ぢや二つ。」

惠吉は指を二本突出した。

「行く船を淚なくして眺める事は出來ないとか、シャトーブリアンのものに書いてありましたが、ほんとに、自分が乘つてゐても悲しいものですね。」

「ほんとにさうよ。」

ボーイの差出す傳票に「レモナード二、いまむら」と自署をして、兩人は藁の吸口を廻し乍ら口に當てた。

赤い夕陽の名殘りが、西班牙の山々を照してゐた。あそこらあたりの町の灯影はあのバルセローナの古都かしら。場末の酒場に踊狂ふ、あはれジプシーの唄よ。

ドン・キホーテの事、カルメンの事、兩人はいつ迄も話し合つてゐた。

『サラサーテの哀調だ。』

呟くやうに惠吉は、殘りのレモナードをぐつと飲み乾した。

霧深いビクトリヤドックで、出迎への夫と肩を並べていそいそと小艇に乘りしなに、それでもちよつと振返つて微笑み乍ら會釋した、あの若い奧さんの顏が惠吉の追憶の鏡に映つてゐた。

テームスの流れを越して、霧の中にぼんやりと浮び出たロンドンの町の屋根のつらなり。旅のならはしとは言へ、たとひちよつとの間でも話し合つた女と、あゝやつて分れて行つて、もう多分一生會はないのかも知れないと思つて、惠吉はこの世の中の旅の果敢なさを沁々と覺えた。

すると今度は從妹の照子の姿が丁度色の褪せた刺繡でも見るやうに、仄かにも浮び出した。幼馴染の兩人は、たけくらべのその頃から、何となく從兄妹として以外の心の交渉を持つてゐた。が彼の氣の弱さから、口に出せないでゐるうちに、照子の心は彼の親友である小野に移つて行つた。

それは丁度兩人が高等學校に机を並べてゐた頃であつた。小野の机の上にさしてある、…輪差しのチューリップの花を見ては、それが誰の爲に差された花かと、惠吉は淋しい氣がするのであつた。

いろいろの小挿話を經て、惠吉は果敢なきいゝあきらめの戀の底に遣瀨ない戀心を祕めて照子を小野にゆづつたのである。

兩人の幸福を祈つてやる事があの當時の彼にとつて、唯一の慰めであつた。照子の幸福の爲に自分の戀をいゝにへにすると云ふ所に何かしら偉大な、騎士のやうな誇りを感じたのであつた。が、しかし今考へて見れば、それはまだ彼の戀が足りなかつた證左でもある。

（俺はあの場合、小野を殺す可きであつた。諦められるやうな戀なら、遊戯と同じ事だつたのだ。）

扨て、今村に對する小野の純眞な感謝の念は兩人の親交を益々固いものにした。

その照子が、今、惠吉の眼の前に、仄かにも甦つて來たのである。彼の眼はあやしく曇つて行つた。丁度ピントの外れたオペラグラスのやうに、眼の前の物が暗く霞んで行つた。照子の姿はかき失せて、天井に下つた水晶の電燈が、キラキラと玉をなして輝いた。

急に彼の眼の中は熱くなつて來た。

おゝ、堪へ難き寂寥よ！

その時であつた、惠吉の放心の瞳の中に、丁度波だつた水鏡が、再び靜かになつて行くやうに、はつきりと一人の處女の顏が浮び出したのである。

星なき夜を想はせるその黑髮、健康さうな頰の色、ぱつちりと見ひらいた眼の中には心持碧みがかつた、うるほひを含んだ瞳が、丁度泉の中に落ちた眞珠のやうに光つてゐる。眞白な齒並を見せて微笑む薔薇色の脣、渚に波立つ水泡のやうに、消えては浮ぶゑくぼのかげ。

さうだ！

彼の感情は急にその排口を見出した。

卯女子！　卯女子！　卯女子!!

惠吉は立上つた。そして黑い机の前に坐つた。點された燈火の下に又ダンテの像がぢいつと彼を見下してゐる。大理石の置時計が冷たい夜の空氣を震はせて、チック・タックと時を刻んで行く。

もう三時を廻つてゐた。

紙の音とペンの走る音が、寢靜まつた夜の中に響く。

（まるで新派の臺詞のやうだ。）

惠吉は忌々しさうに破き捨てる。ほんとに云はうと思つてゐる事は、秋の空に吐き出される煙のやうに、あとかたもなくすうつと消えて行つて了ふのであつた。

一時間餘りも經つた頃、彼の前に擴げられたレターペーパーの上には、四角張つた文字で次のやうな事が、五六行にきちんとをさまつて書かれてゐた。

「二十八日のクライスラーの切符が丁度三枚ありますから、若しまだお買ひになつてゐなかつたら、お兄さんを誘つて、御一緒に參りませんか。そのうち又お伺ひします。

卯女子樣　　今村惠吉」

（何と云ふあつけない手紙であらう。それでも卯女子に出すと云ふ事がもう自分の心を話してゐる。）

彼はいきなりペンを把つて、頭に浮んだミュッセの英譯の言葉を書きつけた。

"Do you not know that my nights are spent in tears?"

（君よ知らずや淋しくも、夜を泣きあかす
われあるを。）

彼は追手に追はれる心持で封をした。

「ミス、ウメコ、ヤマダ。アカチエン街六番。

そして彼は玄關の郵便入れの中にそれを投りこんだ。ドサリとあたりの寂寞を破つて響く音を聞いた時、惠吉は深い斷崖の上から石を投げこんだ時のやうな氣がした。そして彼は今その反響にぢいつと耳を傾けてゐるのだ。

（明日の朝早く、まだ自分の寢てゐる間に、ハンを買ひに行く女中のリザが、それをあの角のポストに投げこんで行く。カイゼル髭を生やした大きな男が、革の鞄の中に掻き集めて行く。そこには親の死を知らせる手紙もあらう。密會を約する若人の戀文もあらう。それがみんなあすこの郵便局の机の上にあけられて、荒くれた手で無造作に判を押して行く。區別けに分類される、ズックの袋に詰めこまれる。そして今度は香水をつけた粹な若者が、媾曳の時計を氣にしながら、詰らなさうにあのアカチエン街の四階の梯子段を上つて行く。すると、……）

疲れ切つた惠吉の身體は、洗ひ立ての白の敷布の寢臺の上にやはらかく沈んだ。

大理石の置時計の音がチック・タックと。

それは三日程前の日の事であつた。

今村惠吉は絨氈の敷いてない、うす暗い梯子段をハアハアと息を喘ませ乍ら上つて行つた。

一階毎に表札を讀んで行く。

「ヤンケ、次がヴント、それから、と、……」

彼はもううんざりしたやうに、ちよつと立止まつて深く息を吐いた。

初めのうちは景氣よく二段宛踏んでゐたのが、いつの間にか一段に、それも段々と滯り勝ちであつた。

四階迄やつとの事辿りついた彼は、そこの扉の前にいつものまゝの「ヤマダ」とローマ字で書かれた名刺が、さしこんであるのを見た。呼鈴に手を掛けて鳴らさうとした時、彼は扉の背後の方から幽かに漏れて來るピアノの音を聞いた。

（今日はまあ徒足を踏まないで濟んだ。）

と思つて彼は、まあ、やれやれと云つた氣がしたのであつた。この間買入れたと云つて、まるで戀し合つた戀人と、結婚でもしたかのやうに喜んで彼に聞かせてくれた、戰前のベヒ

シュタイン製の小型のグランドピアノの音色である。
　伯林へ來てゐる多勢の音樂家連が、毎日々々誰かの家に集まつては、皆云ひ合したやうに誇張した言葉を使つて、やれ藝術だとか、氣分だとか云ふ事を駄辯り合つたりし乍ら、不規則な廢頽生活の中に、彼等ボヘミアンでなければ決して享樂出來ない天惠ででもあるかの如くに振舞つてゐる、所謂「ヘルム街の群」――と、彼等はあの巴里のラテン街に住む藝術家の群に自分達を擬してゐるのである。――その仲間からたつた一人離れて、彼山田京輔は、照らうが降らうが、外界の模樣などはてんでわかりさうにもないこの四階の一部屋に閉ぢ籠つて、黑光りするベヒシュタインの前に、ひねもす指を動かしてゐるのである。
　頬に血をのぼせて、音を宙に追ふあの素晴らしい光榮を想ひ浮べて、惠吉は自分のやうなまるで途中で停電したエレベーターのやうに、上へも下へも行きかねる中ぶらりんには到底惠まれない事だ、と云つたやうな羨ましい氣がした。が同時に又云ひやうのない懷かしさを覺えるのであつた。
　或物をしつかりと掴んで勇往邁進して行く人の姿は、想ひ起すだけでも彼の心を晴々とさせた。比較的場末の、しかも四階の梯子段をやつと上り詰めて、留守を喰はされた時のあのがつかりさを思ひ乍らも、彼の足は知らず識らず、このアカチエン街の山田の家に惹きつけられて行くのであつた。
　惠吉は呼鈴に掛けた手をちよつと躊躇つた。氣分を破つて、時ならぬ闖入者の役目を演ずる自分の姿を恐れたのであつた。彼は暫く默つて立つたまゝ漏れて來る幽かな樂の音に耳を傾けてゐた。

へ昔、フランスのさる街に、獨樂を廻すことに世の常ならず巧なる者ありけり。或日もひねもす獨樂を廻して、ひとり興じてありけるに、さる聖者これを見たまひ、汝まことに信心に富めりと見ゆ、來りて神に傳へよ、とのたまひければ、男その氣になり聖者に從ひ、とある僧院に入りけり。
　さる程にいく月かは經ちぬれど、男は修行いとむづかしくのみ覺えて、更に學問のこと進まず、日毎むれ集ふ諸僧たちの興じ合ふなる神學とやらのことも、さながら癡者の寢言の如く、一句だに合點するよしもなかりき。
　聖者は日ごとに熱心に、地上天上のこと、神のこと、攝理のこと、最後の御審判のことを男の耳に入り易きやう、かきくだきて教へたまへども、男はたゞむづかしくのみ覺えて更に甲斐もなし。淋しさ、息ぐるしさに堪へかねて、男は絶えて手にとらざりしかの獨樂を取出し、ありし日を偲びつゝ、落葉散る院の境内なる、おん母マリヤ様の御堂に入り、御姿の前、人なきを幸ひ、獨樂を轉じてわれも心和げ、おん母マリヤ様をも興じ奉らせんと思ひたちけり。
　これより男、日毎の學問修行の席にも出ず、聖なる御堂の内をも顧みず、閑暇あるたびに獨樂を轉じては、おん母マリヤ様と興じけるに、僧たち來り見て、かれ心狂へりと憐み、遂には聖者のお不興蒙りて、あはれ刑せられんとしけるを、その時おん母マリヤ様は絶大の御慈悲もて現はれたまひ、この獨樂廻しの男こそ、こよなく信心あるものぞ、とのたまひけるとか。――これはアナトール・フランスださうだ。本當に人生のこと皆同じ事だ。みな何をしたからとて、同じ獨樂廻しなのだけれど、たゞ要は力が足りなくて獨樂がよく廻らないだけの事だ。
　自分の獨樂がともすると傾き出すのを抑へ

つゝ、惠吉は今、山田京輔の獨樂がおだやかに澄み切つて廻つてゐるのをぢいつと凝視めてゐた。彼は何とも言へない淋しい氣がしだした。

今村惠吉はお茶の卓子に坐つた。

彼の足がこのアカチエン街の山田の家に惹きつけられるのには、もう一つ他の意味があつたのだ。それは山田の妹の卯女子の明るい微笑であつた。

初ひ初ひしい態度の中に、どこかキリッとした強さを見せて、いつも莞爾々々と彼を迎へてくれる。――卯女子！

その卯女子は今、銀の茶沸から惠吉の茶碗に溫かい紅茶を注いでゐる。惠吉はぢいつとその金緣の茶碗の中に湛へられた、紅みがかつた金色の透き通つた液體を見てゐた。角砂糖をのせた銀の匙の柄がさつと曇つて、四角の白いかたまりは、煖爐にのせた雪の兎のやうに溶けて行く。

『これ、如何？……』

さう云つて卯女子はチョコレートのついたタートケーキを切つてくれた。

『わたくしが拵へましたの。』

『さうですか。』

そして惠吉は何かもう一言云ひ足したかつた。所へ山田がナプキンで口の周圍を拭き乍ら言葉を挾んだ。

『お割烹の本と首つ引きなのさ。ウドン粉何瓦なんてんだから心細い。』

『でもおいしいぢやありませんか。』

惠吉は山田の言葉に連れられて輕くさう云へた。

『でもはひどいわ。』

卯女子の聲にはちよつとすねた調子が、何瓦かのコッケットリーを加へて、品のころもをかぶつてゐた。惠吉は心易く口の利けさうな氣がした。

『女學校のお割烹ではこりごりした事があります。いつだつたか親類の別莊へ行つた時、勿論日本の話ですが、何でも從妹連が御馳走をしてくれると云ふんです。その名前が又とてもおそろしいものでね、何て云つたけなあ。……さうさう、ポチロン・アラ・ノーベルヂャンつて云ひました。時の關白太政大臣より凄じいつて笑ひました。所がまあどんなものかと思つてゐたら、南瓜を蒸して中をくりぬいて牛肉のたゝいたのや玉葱や青豆を詰めてあるんです。それに白ソースをかけるんですが、それがまあ驚いた。まるで味も素つけもないんです。僕は一杯食はされたとさう思つたから、こりやまるで位階倒れだ、羊頭をかゝげて狗肉を賣る類だつて、大いに罵つてやりました。さうしたらどうです。鹽を入れるのを忘れたんですつてさ。』

山田の兄妹は大聲に笑ひ出して了つた。

三人は紅茶を啜つた。

『お茶の水をお出になつたんですつてね。』

暫くして惠吉は、お茶で思ひ出したやうにさう尋いた。

『私？ えゝ。』

卯女子はさう答へたが、今村がそんな事を知つてゐると云ふ事と、それぢや兄と自分の事を、そんな事をでも話し合つたのかと思つて、ちよつと嬉しいやうな氣もしたのであつた。

『ぢや、守島照子つて人を知つてゐますか？』

惠吉は續けて尋いた。

『えゝ、存じて居りますわ。わたくしより一級下の方ですの。ちよつと夢二式の綺麗な方だつたわ。評判だつたのですもの。わたくしようく覺えて居りますわ。あなた御存じなの？』

『えゝ、僕の從妹です。』

『あら、さうなの、まあ、守島さんのお從兄さん？』

卯女子はさう云つて、そのおいとこさんと云ふ言葉が自分達女學生の仲間でもう少し「意味深」な事に使はれてゐるのを思ひ出した。そして今自分も無意識乍らいくらかはそんな意味を含めてその言葉を使つた事に氣がついた。

それから兩人は守島照子を話の中心にして、それから周圍の友達の事や何かを、お互に謹み乍らもいろいろと饒舌り合つた。

惠吉は本郷の學校の歸りに、順天堂の脇を抜けて省線――あの時分は院線だつたが――の驛に行く途中、あすこの橋のたもとの古びた校門から吐き出されて來る、若々しい少女たちの群を心に描いてゐた。

卯女子は卯女子で又あの校庭の古い栗の樹蔭に腰を下して、C子やK子等と、今から思へばたわいもない事でもを、新婚旅行の會話のやうに、さも重大な事件か何かの如く、小さい胸を躍らせて語らひあつたあの頃の自分達の姿を顧みた。

『守島さんもうそろそろお嫁にいらつしやるんぢやないの?』

卯女子はぼんやりそんな事を訊いた。

『えゝ、そんな話でしたが。……』

惠吉はふと口を噤んで了つた。

餘り長く居てピアノの邪魔になつてもと思つて、やがて彼は別れを告げた。別れしなに惠吉の外套の釦が一つ切れさうに、二本の絲が一寸位も伸びて、やつとつながつてゐるのを卯女子は目ざとく見付けた。

『まあ、ちよつとお待ち遊ばして。』

彼女は大急ぎで自分の部屋に入ると、やがて針に黑絲を通し乍ら持つて來た。そして着てゐるまゝ縫ひつけてくれた。

『この間も寢間着の釦がとれて了つて、夜中に襟の所がぞくぞくするので仕方なく起出して、獨りで縫つたんですが、さつそく指へ針を通しちまつてね、ラズベリーを壓したやうに眞紅な血の玉が指先に滲み出した時には、實際つくづく旅の身のあはれを感じましたね。(中學に裁縫はなし夜寒かな。」ですか、ハハハハ、、、ハ。』

山田にさう話しかけ乍ら、惠吉は卯女子の眞白な綺麗な指が、器用に針をさして行くのを感心して見てゐた。

めつきり募つたうすら寒さをこの釦一つに堰止めて、惠吉は大股にノルレンドルフの廣場を横ぎつて行つた。ガードの下に籠を並べた可憐な花賣娘の手に持つた、白薔薇の花束にも、夏の終焉のあはれさがあつた。清々しい香りを孕んだ夕べの空氣が、しんみりと彼の想ひを包んで、薄暮の街に溶けこんだ。

夢の中で惠吉は、卯女子に着けて貰つた外套の釦に固く脣を當ててゐた。

卯女子は獨りで編物をしてゐた。幼い時に兩親を失つた彼女は、二十二の此年迄、七つ違ひの兄の京輔を、唯一のたのみとして育つて來たのであつた。他に知邊と云ふものを持たない兩人は、お互がたつた一人の身寄りなのであつた。佛蘭西語の得意な彼女が、かうやつて伯林に來てゐるのも兄と別れる淋しさに堪へかねるからなのであつた。

卯女子は今かうやつて獨りで、部屋に殘つて編物をし乍らも兄の事を考へてゐた。

編物とか刺繍とか佛蘭西語とか日本にゐても大して變らない事の爲に、餘り富裕と云ふ程でもない兄が、かうやつて自分を一緒に連れて來てくれた氣持を考へると、彼女は眼頭の熱くなる程の感謝を覺えずには居られないのであつ

た。從つて一日置きに來てくれる佛蘭西人の先生も驚く位、彼女はよく勉強をした。ついこの間始めたユーゴーの「黄昏の唄」と云ふ詩集ももう八分通りも上げて了つたのであつた。

（それにしても兄さんはどうしたのかしらん。もう夕飯だと云ふのに。）

彼女は時計を見上げた。

（又その枝さんの所がしら。）

卯女子の額にはチラッと暗い陰影がさした。それが丁度夕立の前の雨雲のやうに擴がつて行く。彼女は編物の手を止めて深い溜息をついた。

「ほんとにその枝さんは可哀さうだ。」

と近頃口癖のやうに云ふ兄の言葉をどんなに彼女は淋しく聞いたであらうか。それはその枝さんは可哀さうには違ひなかつた。あんな惡人の夫を持つて、旅の身空に云ひ知れぬ苦勞をしてゐる、と思ふと痛み易い少女心の深い同情の立琴の絃は觸られて幽かにも打震ふのであつたが、又それと同時に名も着けられない淡い嫉み心が彼女の胸の中に、丁度雨夜の墓場の燐のやうに、青白いさびしい焔を立てて燃えるのであつた。

兄の心がその枝の方に移つて行くと云ふ事は、彼女にとつて何かしらん取りかへしのつかない事なのであつた。

卯女子はもう一遍深い溜息をついた。

臆病らしい叩音がして、そこへこの家の、中の娘が入つて來た。彼女と同じ年頃のエンミーと呼ぶのであつた。愛くるしい顔に、淋しい微笑を浮べて、靜かにものをきくこのエンミーが、三つ宛間をあけた三人の姉妹の中で、卯女子は一番好きであつた。

「お手紙。」

さう云つて一封の眞紅な封筒を渡すと、そのまゝエンミーは會釋をして、出て行つて了つた。

机の上からクローバーの彫刻の着いた紙裁刀を取上げて、彼女は窓邊へ歩いて行つた。

（いつの間にか暗くなつてゐたのだ。）

街にはもう灯が入つてゐた。隣りの家の露臺には、風呂草の植木鉢の間に、寄木細工を散らかして、六つ位になるユダヤ人の子が、たつた一人で遊んでゐた。

たそがれの光をかき集めた薄闇の中に、黑い縮れ毛と鳶色の瞳が、ほんのり浮んで、その子供は何かぶつぶつ獨り言を言つてゐる。物心もつかぬあんな子供の時分から、彼等は一人で庭で遊ばなければならない宿命の星を擔つてゐるのだ。それにあの兒はついこの前の月にお母さんを失つたのだ。

孤兒の卯女子はわけてその小兒が可憐しかつた。

（われと來て遊べや親のない雀。）

一茶のこの句を、彼女はするめの如く噛みしめた。

開かれた窓から身體を乘り出すやうにして、卯女子は手紙の封を切つた。そして讀んだ。今村惠吉と云ふ名前の一字一字が彼女に向つて話しかけた。

彼女はぼうつと顔の火照るのを覺えた。何度彼女は讀み返した事であらう。

釣瓶下しの秋の日は、その間にも色着さめて、向ひの街の家並は薄墨色の一筆書きに塗されて行つた。

よく識り合つた人の姿は、夕暮時の遠見にも、それとわかるやうに、彼女は手紙の一字一句をはつきりと、薄闇の光の中に讀み取つた。

自分が外套の釦を縫ひつけた時、兄に話しかけ乍ら、そつと自分の手の上に、顔の上に投げられた、惠吉の私かな眼差しが、その紙の上に優しく瞬いた。

やがて卯女子は、人知れずそつと洩らした溜息を、そのまゝ封筒の中に藏ひ込むやうに疊んで、内懐に納めると、窓を閉めて、スキッチを捻つて、いそいそと卓子の上を整理け始めた。

白いダマスクの卓子掛をぱつと擴げると、急に部屋の中が明るくなつた。

春の水のぬくむが如くに、むすぼれの解けた彼女の頬には穏やかな微笑が浮んでゐた。臺所の方から玉葱をいためるバタのにほひがゆるやかに漏れて來る。

銀の食器がキラキラと電燈の下に輝いた。

溫室咲きのアルプス菫の投入れを置いた、散つた一輪の花片をぢつと彼女は眺めてゐた。

エンミーが燗の上つた馬鈴薯を運んで來た。

『まだお歸りにならないの？』

食卓の上をいろいろになほし乍ら尋いた。

『えゝ、まだなのよ。』

『それぢや、とりはもう少しストーヴの中に入れて置きませう。』

エンミーは又靜かに戸を閉めて出て行つた。

『(君よ知らずや淋しくも、
夜を泣き明すわれあるを。)』

卯女子はそつと口吟んだ。その時玄關で鍵の音がした。

(兄さんが歸つて來たのだ。)

彼女は又いそいそと出て行つた。

京輔は默つて乾酪を切つてゐた。

(兄は口を利くまい。)

さう思つて卯女子は悲しい氣がした。魚の型に作られたチェリーを兄のお皿にしやくつてやつた。そして葡萄の汁の容器を押しやつた。

『あのね、兄さん。二十八日のクライスラーに行かない？ 今村さんが切符を持つてらつしやるんですつて。』

『あゝ。』

さう云つて京輔は微笑んだ。自分の沈默が卯女子の心に暗い陰影を投げてゐる事に氣がついてゐたのであつた。

(惡かつたね。)

彼は心の中で謝罪つた。

卯女子は卯女子でたつた今、その枝を嫉んだ自分の心を恥ぢてゐた。何と云ふ醜い事だらう。

(兄さんは眞實にその枝さんを愛してゐるのだ。)

そして彼女は珈琲入れの上に冠さつてゐる、ルキ王朝時代の宮廷の貴婦人の人形に作られた、保温袋を取りのけた。

京輔は銀の小匙でS字型に珈琲茶碗を攪き廻してゐた。S、S、……

西洋將棋

芳野文雄の部屋で惠吉は平常のやうに駄辯つてゐた。芳野は高等學校時代に一年上級であつたが、その寄寓してゐた家が京橋の惠吉の家の近くにあつたので、よく兩人は一緒に銀ぶらをしたり、宇の丸のてつかをつまんだり、歌舞伎の「玄冶店」を覗いたりした仲なのであつた。芳野の父は大阪に二つも三つもの大きな會社に關係してゐる指折りの金持であつた。

「實際、日本の所謂藝術家なんてものにはろくなのはゐない。あのヘルム街に集まつてゐる長髪族を見るが良い。演奏家でなければ音樂を理解する事が出來ないやうな顏をしてをさまつてゐる。二言目には直感々々つて、まるで打手の小槌のやうに振廻す。

そりや藝術には、ことに音樂には、曲そのものから受ける直感が一番大事だつて事は僕だつて知つてゐる。しかしだね、思想、習慣、感受性と云つたものが全然違つてゐる我々に、さ

う云ふ背景を無視して、直に曲そのものから全部の藝術を味ひとるだけの力が果してあるだらうか。先月號の「音樂」に、日本の音樂家には「入門」がないと書いてあつたけど、そりや眞實だ。彼等みたいにたゞ譜面の通りに彈く事だけの生命ぢや、藝人と云つた方が增しだ。ミケランヂエロの設計に從つて、指圖されるがまゝに、たゞ默々と石を積んで行く一勞働者に過ぎやしない。」

芳野は警句と云つたものを、大本教のお筆先のやうに有難がる男であつた。

「眞實にさうさ。音樂を演奏する事と、理解する事とは全然別だ。ロマン・ローランにしろ、ベルリオズにしろ、決して立派な演奏家ではない。しかも偉大なる音樂家ぢやないか。却つてヘルム街のあゝ云ふ連中が音樂を聞くと、あすこの所はどう彈いたら良いかとか、あすこはもつと弱く彈く所だつたのか、とかさう云つた機械的な技巧ばかりに氣がついて、眞實の音樂の核心に觸れる事は出來ないだらうと思ふ。」

惠吉も芳野の前だと一かどの議論を述べるのであつた。

どう云ふ話の續きであつたか、何でも西洋へ來てゐると、物の考へ方とか見方とかが、どうしても毛唐臭くなつてゐるし、さうかと云つて又日本人の考へも捨て切れず、妙にちぐはぐな變な氣持になつて了つて、純粹な藝術を味ふ事が出來ないから、困るとか、いや、そんな事はない、元來藝術の本質は唯一にして無二なものだから、バタでいためようと、醬油で煮ようとそんな事は構はないとか、……とか、とか、そんな愚にも着かぬ議論を戰はせた後であつた。

「さうさう、さう云や、夢迄が洋の東西を超越してゐる。」

と、さう云つて芳野がいつものやうに茶を入れたのであつた。

「アナ場所イズムか。ハハ、ゝ。」

惠吉も議論に疲れて、吻としてさう云つた。

「この間見た奴は奇拔だつた……」

芳野は燐寸を擦つた。

「何でも銀座通りを飯島の姉さんの方ね、あれと一緒に歩いてゐたんだ。」

『ハハ、惚氣かい？』

「惚氣ぢやないわよ。」

小さんの節金に出て來る女房の聲色を使つて、芳野は先觸れに一しきり笑つてから、

「まあ、聞け。」

と云つた。

「なんでも日暮方であつたらう。兩側の家並にずうつと燈火が點されて、寶石の鎖綸にあるやうな深まつた宵の青空に、星が一つ夢のやうに燦いてゐたのださうである。

富士屋の前あたりの人混みを、芳野はその飯島の姉さんの方と一緒に步いてゐたのだ。

「伯林のフリードリッヒ街もちよつとこんな氣持のする所ですよ。」

とかなんとか、そんな話を彼はしてゐた。するとその飯島の姉さんの言ふのには、

「いくら伯林が良くつても、お壽司はないでせう。さあ、これからカフェ・ライオンであなごの握りを食べませう。」

と云つたと云ふ事である。……

いくら夢とは云へ、惠吉はこゝでちよつと眉毛に唾をつけた。

「すると突然後の方で女の人の聲がしたのだ。兩人が振返つて見ると、一人の西洋の婦人がつかつかとこつちへ寄つて來た。そしてしけしけと飯島のお孃さんの顏を見乍ら云ふ事には、

「あゝ良いお頭髮だこと。だけど惜しい事にたつた一つ足りないものがある。」

兩人はまあ人並に呆氣にとられてゐると、その婦人がいきなり自分のさしてゐた大きな櫛をぬいて飯島のお嬢さんの束髮のうしろへさしたものである。それは餘つ程大きい櫛と見えて、前から見ても黑い髮の上に、丁度露でも置いたやうに、その琥珀の球が光つてゐたと云ふ事である。

『これで良い。よくお似合ひになること。』

と西洋の婦人が言ふ。芳野も成程これは良く似合ふとさう思つて見てゐると、その婦人がいきなり、

『ではそれを差上げます。さやうなら。』

と云つたまゝ、すたすたと二三歩行きかけたが、又戾つて來て云ふのには。……」

「君、何と云つたと思ふ？」

芳野はもうさも可笑しさうに笑ひ出した。惠吉はちよつと首を傾げた。

『さあ？』

『（わたしはカルメンです。）だとさ、ハハ、、ハ。』

『ハハ、、、。』

惠吉も何だか急に可笑しくなつて噴きだして了つた。餘り突飛なオチであつた。

カルメンで折角の藝術論も飛んで了つたので、ちよつと兩人の間に沈默が來た。

惠吉はお得意の琥珀のパイプへ葉卷をさし乍ら、この間地下鐵道の中で會つた女の話でも持ち出さうかと思つたが、「駄目々々、そんな人道主義なんか。」と又頭から皮肉なから竹割りをやられるのに定つてゐると思つたので、そのまゝ默つてゐた。

やがて芳野は机の抽斗から西洋將棋を持ち出して來て、默つて兩人の前に置いた。

『敵打ち。』

さう云つてちよつと腕の時計を見てから、

『來る心算なのかなあ。』

と獨り言のやうにさう言つた。

『をん敵ござんなれ。……』

椅子をぐるりと卓子の向うに廻し乍ら惠吉が云つた。

『一體、富田つて人は何なんだい？』

『よく知らないが、義兄の會社の人だつて。紹介貰つて來て、この間伯林へ着いたから、今日訪ねるつて、端書を寄こしたんだ。商工出の人ださうだ。……おい君、この「僧侶」の頭を見ると、僕はよく神戸の叔父さんの事を想ひ出すよ。若い癖に頭がつるつるに禿げてそれで又その禿頭を心持右に傾げて、前から見ると、ちよつと六時五分前つて恰好なんだ。』

『ハハ、、、。その位聯想が利く所を見ると、君も中々詩人の素質があるね。アンドレイエフは君、蜘蛛の巣を見て、中學時代の幾何の先生を想ひ出したつて云ふぢやないか。――』

惠吉は床に落ちた駒を拾ひ上げ乍ら、さう云つた。

「やあ、これは失敬、君の叔父さんの頭に灰殼を着けて了つた。」

彼はハンケチを取出してそれを拭くと、ハチンと盤の上に乘せてさて聞いた。

『今日來るつて人はブルヂョアなのかい？』

「どうだか。……」

芳野は間違つて置いた「王樣」と「女王」を入れ換へた。

『多分さうぢやないんだらう。』

芳野はちよつと默つて考へをまとめると今度は急に、一氣に、語り出した。

「どうせ僕等には、のんびりやつて來た親の脛齧りの心持しかわからないよ。僕は近頃つくづくさう諦めた。まるで無教育な勞働者の氣持は、案外あつさりしてゐて却つてのんびりと心持良いもんだつて、誰かが云つてゐたが、それだつて僕等にはちよつとわからないし、生じ

つか知識のあるプロレタリヤと來た。困りもんだね。こつちへ來て僕も隨分いろんな日本人と交際つて見たけど、會社や官省から可成りな金を貰つてゐるので、急に大金持にでもなつたやうな心になつて、僕等の眼から見ると可笑しいと思ふやうな贅澤をやつてさ、競馬へ通つたり、踊り場で浮かれたり、馬鹿な所へばかり金を使つてゐるんだ。

尤も日本へ歸つたらもう出來んと思へば仕方がない、ハハハヽヽ。それにしても厭だね。その癖さう云ふ連中に限つて、寄ると觸ると金持を眼の敵のやうに罵つてさ。そんなに嫌ひなら資本家に金を出さして洋行なんかさせて貰はなけりや良いんだ

ラックの靴を穿いたつて、オードコローニュをふりかけたつて、やつぱりどこかこせこせしてゐて僻みが強くて、他人を利用しようとばかりしてゐるんだからね。」

「そんな事云ふと、日本へ歸つて來良に殺されちまふよ。」

「來良かい？ あいつは馬鹿だ。ブルヂョアの息子の癖に、流行にかぶれたんだか、賣名の爲なんだか柄にもない事なんかやつてさ。」

「勞働者の氣持は、勞働者自身ぢやなけりやわからないんだ。勞働運動に眞實の勞働者自身がやれば良いんだ。家へ歸つて、不心得をしました。」と一言あやまれば、明日からでも大島紬の着られる、さう云ふ人々に、働いても、もがいても、どうしやうもない、あの暗いどん底の絶望感がどうしてわかるもんか。

僕は最近「一週間」つて云ふ露西亞の革命小說を讀んだ。その中にマルチイノフつて云ふ共產主義者が出て來るが、それは元來ブルヂョアの息子だつたのだが、勞働者になつてゐるんだ。口では俐巧な事をぬかし、相當皆から尊敬もされてゐる。

或日の事、丁度長いウラルの冬も逝つて、雪解の頃の或夜だつた。彼はもう一人の、これは心からの勞働者と一緒に方々の家々を搜索に出掛ける。

町の遊民共を狩立てて材伐事業に引張り出さうと云ふわけさ。所が或一軒の家へ來た時、そのマルチイノフと云ふ男がどうしても入るのは厭だと云ふのだ。どうか君獨りで入つてくれと賴む。その家には彼の別れた戀人が住んでゐるのだ。

それから後の事、彼と一緒に行つたその心からの勞働者ね、それの述懷に、俺あ、あの日からマルチイノフの偉さうな辯論や饒舌が皆んな空虛な世迷言のやうな氣がしたよ、つて云ふのがある。

眞實にさうかもしれない。來良やさつき云つたやうな貧乏人の癖に勞働者にもなり切れないで、資本家の前に尻尾を振つてゐるやうな連中に何が出來るもんか。利用される眞實の勞働者こそ良い面の皮だ。

僕みたいに、正直にわかりまへんから理窟できませんつて云つてる方が、自惚れもせないけど、はるかに罪がないよ。露西亞みたいになつちやつて、殺されて了つたつて、自分の心持を欺いてゐるよりは、はるかに愉快だ。

僕等が、生じつか獨りよがりな顏をして彼等の氣持を云々するのは、彼等にとつて全く見當違ひの迷惑千萬な事に違ひない。たゞ僕等に殘されてゐる事は、わからない彼等の世界に對して、兎に角尊敬を持つと云ふ事だ。」

「そりや君、不親切だ……」

惠吉は何かしら反對したい氣持であつた。總て何でも徹底した言葉に對する無意識的な反感であつた

「君の所謂彼等」と、同じく君の所謂僕等とは決して別個な世界に生活してゐるのではない

よ。「僕等」の存在が「彼等」のそれの邪魔にならない間はそれで良い。が、遺憾ながらさうでない場合、それは不親切千萬な考へ方だ。それに君、人間には體驗の他に思索と云ふ有難い力のある事を忘れては困る。」

「そりやさうさ。それは僕も認める。だから何も僕は、さう云ふ事の出來る人に毒づいてゐるのではない。たゞさう云ふ思索力の足らない、似而非プロレタリヤに一針を放つただけだよ。僕は賢者は何でも嫌ひだ。」

『さうか、そんなら良いが。』

憲吉は自分の事のやうに安心した。ちよつと沈黙が來た。何かしら言ひ度くなつた。で、

「だけど、そんな氣持で小説書いたとしたら、少くも今の日本の文壇ぢや、とてももてないね。」

「だから僕は君と違つて、小説なんか書かうなんて、そんな不心得は出さないよ。僕がいくら浪漫家だからと云つて、ちやんと實在してゐるものを、たゞわからないからと云つてさ、自分の頭の空想で勝手なものが作れるかい。自分を欺かなけりや流行らないなんて、そんな文學なら、みゝづくに攫はれちまへ！　だ。第一、僕、いやしくも藝術に流行る流行らないなんてそんな字を使つて良いものかしら。半襟や薬鑵帽子ぢやあるまいし。ほんとだよ、君。」

「何も僕が、……」

と、云ひかけたが餘計油を注ぐだけだと思つたので、憲吉はそのまゝ笑つて黙つて了つた。それに文壇意識などと云ふものにこだはつた自分自身の失言に面はゆかつた。

「今日は僕が赤だつたつけね。」

さう云つて彼は、すつかり並べた西洋將棋の盤をグルリと廻した。

獨逸へ來て、馬鈴薯と芳野の藝術論には、流石の憲吉も、うんざりしてゐたのであつた。

女中が叩音をして戸を開けて、どうぞ、と云つた。

富田佐一は古ぼけた雨外套と帽子を、どこへ置いたら良いのかと思つて、ちよつとあたりを見廻した。

彼がこれから借りようと約束した部屋なんかと比べると、お話にもならない程、堂々たる大きな此の部屋に、革のソファにゆつたりと腰を下して、西洋將棋をやつてゐる二人の青年の、きやしやな姿を見た時、富田はなんだか、かあつとして憤ろしい氣持がした。

自分の育つて來た貧しい家庭の事や、今迄のそれは一通りでない生活の苦しさを思ひやつた。からやつて洋行してゐる事だけでもこの上もない成功の一つと考へてゐた。

彼の故郷は静岡在の片田舎であつた。農事の傍ら俵を作つたり、菰を作つたりして、細々と暮しを立ててゐる兩親の所へ、出發の前に暇乞ひに行つた時、老年の眼に一杯涙を湛へて、喜んでくれたあの日の有様が、今でも彼の眼の先に浮ぶのであつた。そしてこの位置を贏ち得る迄には、それこそ並々でない色々の苦労と奔走と、或時には自尊心迄も傷つけて、そしてやつと贏ち得たものなのだ。

それが今この兩人の有様を見るとき、三十歳の代を半分と越さない若さを以て、何の屈託もなささうな顔に、琥珀のパイプから葉巻の煙をゆつたりと喫かしてゐる――

洋行なんか、あたかも學校や結婚と同じく一生の當然な行事の一つと云つた風にとりすまして、親から送つて來る少からざる仕送りで、思ふまゝにキモノのこなしなどもキチンとして、襟なども毎日取換へてゐるらしい様子を見てはむらむらと故知らぬ憤懣が彼の心の中に燃え揚るのであつた。

『初めてお眼にかゝります。今村と申します。どうぞ。』

と云つて、まだ半分程の葉巻をポンと灰皿に落すと、ちよつと椅子から腰を上げて、挨拶をした。

『義兄から手紙で伺ひました。私が芳野です。』

紹介狀を受取つてちよつと眼を通し乍ら富田に席をすゝめてから、芳野が云つた。

『もう止めよう。どうせ君の負けだよ。ハハ、ハ。』

惠吉はさう云つて、こよりを拵へて、琥珀のパイプへ通し始めた。

『どうぞお構ひなく。どうぞ。』

と富田が云ふと芳野は、

『ちよつと御免を蒙つて、一局捻つて了ひますから……』

と富田に斷つて、そして今度は惠吉に向つて、

『君は一體、煙草を吸ふ爲に掃除をするのか、掃除をする爲に吸ふのかわからんな。』

『そんな減らず口を敲かずに、將棋を勝つやうに心掛けろよ。……ホラ、ホラ。』

惠吉は今取つた一騎士を芳野の眼の前に突出した。

『何日お着きになりました？』

盤から眼を離さずに芳野が尋いた。

『私ですか？ まだ一週間程でございますから、さつぱりどうも。へへ、、、。日本で評判程諸式がお安くないやうでございますな。煙草を買ひましても、これなどがさう、一本四錢程にあたりますから。』

（まづい事をつい云つて了つたものだ。）

『そりや物價と云ふより、この四五日馬克が高くなつたもんですからね。……』

芳野は兩人に話しかけるやうに丁寧な言葉になつたり、粗雜になつたりした。

『お蔭で俄棒成金がそろそろ退却したやらですね。淺ましい位だ。あゝ云ふ連中は御免だ。日本ぢや貧乏を賣物にして威張つてゐた連中でせう。それが餘り賣れ行が良くないので、君、急に變節してさ、……おい、ちよつと待て、待つてくれ。』

『（鑄掛松と聞いて使も氣が變りか。』

『氣が變つたわけぢやない。だが默つて女王を取つちまふ奴があるか。』

『いや、君の事ぢやない。似而非プロレタリヤの變節だよ。名譽をぽんと川へ投り込みや良いんだからね。』

『さうか、そんなら良いが。』

少々なつた將棋の駒は、盤の上を寂さうに動いた。惠吉の考へてゐる間暇に、芳野は又一しきり饒舌つた。

『君、知つてゐるだらう？ あの櫻井つて男さ。いつでも白粉なんか振つてゐるあれさ。あんな連中だよ。

伯林で贅澤が出來るとなると、やれ料理はヒラーでなけりやいけないの、アドロンに限るのなんのつて。ハハハ アドロンでナイフを口に持つて行かれちや側にゐて實際冷汗が出ますからね。

高が二三磅の競馬をやつて、すつかり道樂息子か何かになつたつもりでさ。可笑しいね。出來さへすりやブルヂョアの眞似が爲たくて仕方ない連中だ。顏が醜くけりや精神的變態でもかつがなくちや居られないからね。』

『さうさう。野人禮讃ならはずか。無作法を賣物にして、自然に歸れなんて言つてゐる連中だ。蟲狀突起があるから草を食へと云ふやうなもんだ。』

惠吉は妙な合槌を打つた。

女中が紅茶とお菓子を富田の前に置いて、默つて又出て行つた。

富田は西洋將棋を動かしてゐる今村惠吉の白絹のワイシャツに、翡翠のカフス釦が涼しさうに光つてゐるのを見てゐた。
　あつちへ行くと絹が尊いからね、一つ位持つて行けよ、と言はれて普通のワイシャツより二倍も高い絹のを一つ作つて來たのであつた。
『まあ十六圓もしたの？　道子の洋服が一つ作れるわ。』
　と目を丸くして、そして、
『でも、あちらへいらつしやればさう今迄のやうにもしてはゐられませんわね。』
　と皮肉のやうにも、眞面目のやうにもとれる風にさう云つた妻の顏を、富田は思ひ浮べてゐた。
（さうだ、今月少し儉約したら、道子に一つ洋服でも送つてやらうか。）
　そんな事をぼんやりと彼は考へてゐた。上海のデパートメントストーアで見た翡翠の提ものの事なども考へてゐた。
（買はうかな。）
　と思つたのであつたが。
『しかし君、ほんとに考へてゐる人だつてゐるんだらう。……』
　暫くして惠吉は、富田の事を考へて、口を入れた。
『この間Tの「野ざらし」をMか誰かが評して、（勞働者が食ふ爲に自分の妻や子とも別れなけりやならんやうな今の社會に、高が珈琲店の女給と別れるのに……なんて云つてゐたが、あすこ迄氣が付くんぢや、もうほんものだね。僕なんかとてもそこ迄は氣が付かない。尤もMつて人は、きつと三面記事でも讀んだつもりで批評したんだらうがね。』
『病膏肓に入るか。ハハヽヽ。「野ざらし」つて云や、あいつは良かつた。』
『おい、そいつは亂暴だ。空き王手だよ。』
『だつて女王を取られたら、もう負けだ。』
『（ヘボ將棋、王より飛車を可愛がり）つて奴だね。』
『兎に角、こいつは中止と云ふことにして置かう、富田さんが退屈しちまふ、由來西洋將棋と碁と戀愛は非社交的だよ。』
　芳野は殘りの駒をバラバラに崩して了つた。
　そして腕をちよつと捲くつて、時計を見ると考へた。
『どう？　今村！　アドロンで思ひ出したが、今晩一つ富田さんの歡迎を兼ねて、行かないか？　一つ。』
『結構だが、それともエスペラナードはどうだ？　あすこで又亡國的の唄でも聞くか。……』
『富田さんは今晩お閑暇なんでせう？』
　芳野が尋いた。
『えゝ。』
　富田は菓子を撮まうとした手を狼狽ててひつこめた。彼は芳野の眉毛の間に、ちよつと輕蔑と云つた八の字が寄つたやうな氣がした。
　菓子皿の側には銀のフォークが今しがた點された電燈の下にキラキラと光つてゐた。
『それぢや八時にホテルの方にお迎へに行きますから、鬚でも剃つて待つてて下さいませんか。洋服は黑つぽかつたら、なんでも良いんです。どうせ獨逸ですからね。』
　芳野は立上つて、戸口へ夕刊を取りに行つた。
　戸外に出た富田の頭はなんとも云へない氣持で一杯になつてゐた。
　あんな連中と一緒に、エスペラナードとやらへ飯なんか食べに行つて、又餘計な物要りがするのかと思つて、餘つ程、今日はちよつと都合が惡いから、とでも云つて斷らうかと思つたのに、話の樣子ではどうも奢つて貰へさうな氣がして、うつかり「えゝ」と云つて了つた時、彼は自分

てぼうつと耳が赤くなつたのに氣がついた。
乘合自動車の屋根に乘つて、日暮の街を見下してゐると、黒い影が忙しげに追ひ越したり、擦切つたり、立止まつたりしてゐるのであつた。富田の頭とすれずれの街路樹の枯葉が時々彼の帽子の上に、外套の上に、はらはらと散つて來た。

背中合せに腰を掛けた若い男女の兩人連れは、頻りと何か語り合つてゐた。兩人とも、革の紙挾み鞄を抱へてゐた。大方同じ店に通つてゐる人々だらう。

「あの禿頭、あたし大嫌ひ。」

『あれは、もう直き天國だよ。さうすりや、ジードマイヤーが後に入る。從つて僕は會計の方に廻る。そしたら兩人は直ぐ結婚できる。ね？』

「…………」

女は默つて男の膝に乘せた手で男の外套の釦をいぢつてゐた。

『寒かない？』

男は優しく女の毛絲編の襟を立ててやつた。

「あたし、この間から時々「過業」をやつて、もう大分溜つたのよ。今度の日曜にでもどつか行かない？」

『あゝ。』

男は丁度散つて來た病葉を丸め乍ら、何か考へてゐた。

アンハルター停車場の前で降りた富田は、ホテル・アレマニヤの在る通りをぶらぶらと歩いて行つた。

そこの飾窓に映つた、自分の見窄らしい風采を振返つて、膝のぬけたズボンを顧みては、自分と云ふものが、何だか小つぽけな、卑しいものに見えてゐた。

先刻の腹立たしい心持はもう、朝日にあたつた夜露のやうに、あとかたもなく溶けて行つて了つた。なんとも云へない屈辱の念だけが頭一杯に殘つてゐた。

「野ざらし何助」とか云ふ芝居をずうつと前に、それも天にも地にもたつた一遍、先輩に伴れて行かれた時見た事があつたが、あれには確か珈琲店の女給なんか出て來なかつた筈だ。芳野や今村があたかも常識か何かのやうに話し合つてゐた、TとかMとか云ふ人の名は彼にとつて全く未知のものであつた。

今迄小說は愚か、雜誌一つゆつくりと讀む餘裕のなかつた自分の生活を顧みて、富田佐一は沁々と淋しい氣がした。

「一出來さへすりや、…………、ほんとにさうだ。出來さへすりやだ。」

彼は今迄交際つて來た人々のこせこせとした氣持と、今別れて來た二人の暢然とした心持とを比べて見て、少くとも後者の方がはるかに幸福だと思つたりした。

「あんな生活をやつてゐたら、どう見積つたつて、四十や五十磅はかゝるだらう。」

さう考へて、彼は、金を送つてくれる人と、金を送つてやらなければならない人を持つてゐる彼我の相違を考へて見た。

『どんな條件でも構ひません。一つお話しになつて見て頂けませんか。』

道頓堀の柳の見える本社の課長室で、角田に歎願してゐる自分自身の姿が浮ぶ。

『苦學には慣れてゐますから。』

そんな事まで云つたのだ。

道化師

銀鼠の枇杷の若葉を濡らして降る春の小雨のやうに、卯女子の胸の中には或る濕つぽい感情が染みこんで行つた。夕闇の迫る街を見下し乍ら、何度彼女は時計を見た事であらうか。もう

六時を廻つてゐるのに。
その枝さんを誘つて行くから、今村が來たら兩人で先へ行つてゐてくれ、と言ひ殘して切符を二枚置いて、兄が出て行つてから、もうかれこれ二時間も經つ。郊外の牧場から出て來て、辻々を廻つて行くミルクの馬車も、もうとつくに通つて了つた。彼女はぼんやり街行く人を眺めてゐた。
『眠れ吾子、いとほしの吾子。……』
モツアールトの子守唄が靜かな夕方の空氣の中を漏れて來た。何と云ふ綺麗な聲なのだらう。可憐しいエンミーの聲だ。卯女子には何となくこのエンミーが可哀さうでならなかつた。いつでもものを考へてゐるやうな顏に淋しい微笑を浮べて、はらはらとしよつちう何かを氣兼ねしてその日を暮してゐるのだ。
卯女子の所へ教へに來る序に、姉のアンナも妹のルイーゼもみんな佛蘭西語を習つてゐるのに、彼女だけはのけものにされてゐるのであつた。
妹のルイーゼがこの家に不相當な高い月謝を拂つて、有名なヴァイオリンの先生について、殆ど朝から晩までギーギー彈いてゐるのに、彼女は自分の好きな唄も思ふやうに歌へず、一日赤兒のお守りをし乍ら、あゝやつて可憐しい聲で子守唄を歌つては、せめてもの慰めとしてゐるのであつた。
佛蘭西語の先生やヴァイオリンの先生を招んで、時々お茶などをする時があつても、彼女は獨り臺所の手傳ひをしたり、席に着いても皆の使つてゐる佛蘭西語を、獨り淋しさうに、例の微笑で聞いてゐるのだ。
アンナはさも見せびらかすやうに、得意になつて佛蘭西語で何かを喋つてゐる。母親の額には嶮しい八の字が寄つてゐる。『何だね、皆さんの前でそんなに陰氣な顏をして默りこくつて』とその眼が云つてゐる。(何と云ふ無理な事だ!)
卯女子はよく夕方など、お茶のお湯を沸しに臺所へ入つて行くと、薄暗い隅の椅子に腰を下して、しくしくとひとり忍び泣いてゐるエンミーを見掛ける事があつた。お鍋と茶沸をそこへ置いて、手を拭き乍ら彼女はエンミーの所へ寄つて行く。
『エンミー! どうしたの?』
彼女は自分の妹に對するやうに優しく、さう云つて尋くのであつた。エンミーは涙を一杯湛へた瞳を上げて、それでも又例の淋しい微笑を浮べて答へる。
『いゝえ、どうもしないの。癖なのよ。』
そして、
『お手傳ひ致しませうか?』
と云つては瓦斯をつけてくれたり、お湯を汲んでくれたりするのであつた。兩人はこんな事でお互に深い親しみを感じて行つた。
『そんな良い聲で、どうして習はないの?』
よく卯女子は尋く。すると定つてエンミーの顏には云ひ知れぬ悲しみの色が浮ぶ。さうして眼に一杯涙を湛へて急いで部屋を出て行つて了ふのであつた。……
『眠れ吾子、いとほしの吾子。……』
澄み切つた抒情高音の聲が、又卯女子の耳に響いて來た。
(可哀さうなエンミー!)
向うの角を一臺の辻馬車が曲つて來た。それが家の前に止まつた。こつちの窓を見上げ乍ら、黑のソフトを振り振り車を降りて來たのは、顏はさたかにわからないが、確かに勘吉の姿であつた。
卯女子はいそいそと帽子を取つて鏡の前に立つた。白粉のパットで大急ぎで顏を撫で廻す

と、又いそいそと表の戸を開けた。
釦を押すとゴーッと云ふ音がして、自動昇降機が上つて來た。そして兩人の前にガチンと止まつた。
『ローヘングリンの白鳥みたいですね。僕はいつでもそんな氣がします。呼ぶとすぐやつて來る。ねヽ』
惠吉はちよつとローヘングリンのやうな顔をした。卯女子は默つて笑つてゐた。
兩人は戸を開けてその狹い四人乘りのエレベーターの腰掛に腰を下した。前面の鏡に兩人の顔が並んで映つた時、兩人は鏡の中で微笑み合つた。
惠吉に會つた嬉しさに慣れて來ると、又卯女子の頭にはエンミーの可憐しい姿が甦つて來た。
『うちのエンミーと來たらまるであのお伽噺のシンデレラのやうなのよ。』
さう口を開いて、卯女子はいろいろと惠吉に、彼女の事を話してやつた。
『繼子ぢやないんですか？』
惠吉は同情の權化のやうな聲でさう尋いた。卯女子にとつて可哀さうなものは、又彼にとつても可哀さうなものであらねばならぬ、とさう云つた心持が手傳つてゐるのであつた。
『いヽえ、さうぢやないんですつて。それでも幼い時、なんでもマダムの身體の工合が惡くて、他處へ里子にやられてゐたんですつて。』
『それぢや、それで自分からひがんでゐるんぢやないの？』
『いヽえ、そんな事はないわ。――』
卯女子の言葉には自信が籠つてゐた。
『あんな心の素直な女に、ひがみなんて事は出來ないわ、自分でも云つてゐる事よ。皆んなが、エンミーは僻んでゐる、ゐるつて。勝手にさうして了つたんですつて。僻んでゐるつて云はれるのが、一番悲しいつてこの間も泣いてゐたわ。……ほんとに可哀さうよ。』
惠吉は何だか自分が責められてゐるやうな氣がした。「無過失損害賠償責任論」こんなあられもない六つかしい言葉が、どうした機勢かふと彼の頭に浮んで來た。
自分とはまるつきり關係のない或る幾人かの人々が、曾て、エンミーは僻んでゐると云つた、その事がエンミーの纖細な神經に作用して彼女の涙腺を刺戟した。それが又卯女子の心の同情の絃に觸れてゐる。そこへ偶然、深い事情も、エンミー自身の事もよく知らない自分が、ありふれた判斷からつい何の氣なしに月並なその想像を口にする。すると忽ちエンミーの涙に對する全責任が自分の肩に轉がり落ちて來る。どうも分の惡い話ではない。
自動車が人を轢いたと云ふ事實の爲に、その時は丁度自家の風呂場で、「高砂やあ……」などとしばし浮世を忘れてうなつてゐたまるで知らないその持主が、損害賠償の責任を負はされると云ふ、それより餘つ程迷惑な話だと惠吉は考へた。
が、しかし、さうかと云つてあべこべにこれは又卯女子にはまるつきり縁もゆかりもないこの奇妙なる法律思想を以て、彼女に食つてかヽると云ふ事は、同じ意味で彼女にとつて定めし迷惑な話であるのに違ひない。そこで惠吉は、
『ハハハヽヽヽ』
と、あつさりその迷惑を笑ひ飛ばして了つたのである。そして又その笑ひが皮肉笑ひにとられても困ると云ふ用意から、彼は續いて口を開いた。
『ハンスつて云ふんですか？　エンミーの戀人と云ふのは。よく君の所に來てゐるあの身長の高い若者でせう。』
『いヽ、あなたも何だか變だし、卯女子さんも、もの

足りないし、君と呼ぶのが一番良い。稚氣があつて、親しみがあつて、自然で地味で、そんな氣持から近頃惠吉は卯女子の事をさう呼びかけてゐるのであつた。

卯女子は點頭いた。

「大學で時々會ひますよ。どこか品のある氣持の良ささうな人ですね。」

「だつて、何でも以前は立派な家の人だつたんですつて。ワンゼーの湖畔にまるでお城みたいな別莊を持つてゐたんですもの。寫眞を見せてくれましたわ。それが戰爭ですつかり貧乏して了つて、今はあすこの家から學費を出して貰つてるんですつて。」

『さう？』

惠吉は扉を押して卯女子を先に出した。

惠吉は卯女子の外套の襟をなほしてやつた。

卯女子と惠吉の兩人の姿を入口に認めると辻馬車の馭者は暢氣さうに銜へてゐたパイプの灰を無造作に落して、大きな革の手袋をした逞しい腕を伸ばすと、いきなり馬車の扉を開けた。そして柄にない愛嬌笑ひをして云つた。

『さあ、どうぞ。』

元來伯林の辻馬車の馭車は皆んな一様の型を持つてゐる。身長の高い癖にどこかづんぐりした感じのする、赭ら顔の頑丈な面構への中に又どこか人の好ささうな線を持つてゐる。兵隊の拂下げの綠茶がかつた、色の褪せた外套の上にもう一枚ぼろぼろの革の外套を着て、木の底についた途轍もなく大きい靴を穿いてゐる。マドロスパイプの先から紫色の煙を吐いて四辻の並木の下に客を待つてゐる彼等の姿は、何となく懷かしみをさへ與へるのであつた。だからいくら夜更でも安心して乘れるのである。まだ強請られたり、變な所へ引つ張られたりしたと云ふ噂も、つひぞ耳にした事はないのであつた。

『ドロシュケの馭者と、日本のクモスケとは見た所どつちも、ものすごい恰好はしてゐるが、その性情に至つては實に雲泥の相違がある。』

と或る洒落の好きな友人が云つたのを惠吉はふと思ひ出してゐた。

菩提樹の朽葉がヒラヒラと兩人の馬車の中に散つて來た。彼等は今リュッツォ廣場を右へ折れて、川沿ひの街を走つてゐた。對岸の家並の燈火がチラチラと水に碎けて、暗い流れの在所がわかるのであつた。

ポッツダムの大通りの明るい光が行く手の水を横切つて走つてゐた。

『「道化師」つてカルーソー十八番の一つなんですよ。無名の彼が初めてメトロポリタンの舞臺を踏んだ、その出世役なんです。』

そして惠吉は今晩の歌劇の筋を詳しく卯女子に話してやつた。

街の燈火がめまぐるしく走つて行つた。

ふき磨かれたウンテル・デン・リンデンの鋪道の上には、自動車の頭燈が幾條となく、丁度觀艦式の探海燈のやうに交錯してゐた。ボカボカと音を立てて、兩人の馬車は明るい街を走つて行く。

フリードリッヒ街の角のビクトリヤ珈琲店に明るく燈火が點火されて、管絃樂の響が陽氣に漏れて來た。

（いつだつたか、かつぽれを聞かされて、酒代をせびられたつけ。）

惠吉はそんな事を想ひ出してゐた。

黑い人影が右から左へ、左から右へ、光を遮つてしきりなしに動いてゐる。

やがて馬車は止まつた。

晝間のやうに明るく照明された歌劇場の前には、着飾つた男女の群が待ちつ待たれつ逍遙し

てゐた。
幾條となく並んだコリント式の太い圓柱のかげに、寄添ふやうにして、山田京輔とその枝が、もう兩人の來るのを待つてゐた。
街路の外れは橋になつて、向うには王宮とそれから寺院の圓い屋根が、宵闇の空に黒く浮んでゐた。雲を割つた星影が淡い光をその金の十字架に投げかけて、寒さうに瞬いてゐた。
四人は外套や帽子を預けると、人の一ぱいな廊下を、案内人の禿頭を目標に、縫ふやうに從いて行つた。人いきれで、むうつと顔の火照りを覺えるのであつた。
『隨分あつたかいね。戸外と、ちよつと一音階は違ふね。』
山田はよくこんな音樂の術語を應用した。
（音樂を光で表現しようと試みた人さへあるのだから、温度でも現はせない事もあるまい。現に伊太利の民謠などを聞けば葡萄實る南國の空を想つて、何となく温かい氣がするではないか。反對に「雪の馬橇」の曲などを聞くと雪の霏々と降りしきる北露の鉛色の空を想つて、冷たい風がこの身を包むではないか。あんな曲を彈いてよく指が凍えないものだ。）
惠吉はそんな事を考へてゐた。

案内人の禿頭が入口の電燈の下にキラッと光つて、緑色の羅紗を張つた扉の中に消えた。池を走る金魚のやうに、四人はずるずると後に從いて、ボックスに入つて行つた。
流石帝立であつただけにロココ式の金と紅との裝飾が、燦然として燈火の下に輝いてゐた。
惠吉は極めて自然に、卯女子の左の椅子に座を占めた。この間うちからこぢらして了つたにきびの痕が、丁度左の顳顬の上に頑張つてゐるのであつた。彼は思ひ出したやうに觸つて見た。
『シュルススがトニオを演るな。きつと良いよ。僕はレコードで聞いたが。』
山田は番組を擴げ乍らさう云つた。
その枝は頻りに觀劇眼鏡の度を合せてゐた。卯女子は化粧袋の底に縫ひつけられた鏡を見乍ら、そつと顔に粉白粉を振つてゐた。惠吉はまだにきびをいぢつてゐた。
後から後からと流れこんで來る觀客は、それぞれの席へ水のやうに散つて行つて、土間席はもういつぱいになつて了つた。番組をめくる音が方々でした。管絃樂のボックスにも段々樂手が繰り込んで來たらしく、セロやバスのくびが頻りと動いてゐた。調子を合せるいろいろの樂器の音が、奇怪な響を傳へてゐた。それがやがてピタリと止まる。
燈火が暗くなる。
觀客の中に渦を巻いてゐた私語の雜音が急に水を打つたやうに靜まる。すると今迄忘れられてゐた夢のやうに、薔薇、すみれ、雪割草、鈴蘭、そのほか數知れない香水のかぐはしい匂ひが、やはらかく惠吉を包んで漂うて來た。
すぐ眼の下の土間席に坐つてゐる若い女の露はな腕と襟首が、暗がりの中にほんのりと白を溶かした。金剛石の耳飾りがキラキラと露を宿して光る。
管絃樂のボックスの眞中にやゝ高く立つた指揮者のタクト棒がさつと下る。華やかな樂の音がゆるやかに流れて來る。
（幕の割れ目からひよつくりと茶番師のトニオの顔が出た。頬を赤く染めた眞白の顔。やがて彼は幕の外に現はれる。帽子をとつた手を大きく振ると、彼は丁寧にお辭儀をした。彼は帽子を小脇に抱へた。やがて微笑を湛へた彼の口から可愛らしい言葉が漏れて來た。彼は「序詞」を述べてゐるのである。

『この世の中は一つの大きな舞臺なのです。その上に動いてゐる男も女も、結局はみんな役者なのです。……』

トニオはやがて又お辭儀をして引つ込む。幕は引かれた。

或る田舍の路傍である。お祭の日の鐘が朗かに鳴つてゐる。村の娘も若者も各々相應に着飾つて集まつてゐる。陽氣な笑ひ聲、太鼓の音、笛の響。

子供の叫び聲に迎へられて、やがて旅役者の一團が練つて來る。祭を當てこんで此村外れに小屋掛の道化芝居。その觸れこみに廻つてゐるのであつた。

座頭のカニオを先頭に、驢馬に曳かせた車の上に彼の若い妻、ネッダが乘つてゐる。今晩の外題のお披露目をやる。

カニオは小屋の方に去る。

ネッダは、この村の若者で自分の戀人のシルヴィオの事を考へ乍ら、可愛い聲で「小鳥」の唄を歌ふ。ふと見るとそこには傴僂の茶番師のトニオが、自分の唄に聞き惚れ乍ら、こつちを凝視めてゐる。

ネッダは嫌な顏をする。

トニオは前からこの若い可愛らしいネッダに想ひを寄せてゐたのだ。

彼は女に言ひ寄る。ネッダは初めの内は大聲に嘲笑する。が餘りうるさくやつて來て、終ひに手迄出さうとするので、彼女はいきなり鞭でトニオの顏を打つた。トニオは怒つて去る。ネッダは罵る。そこへ彼女の戀人シルヴィオがやつて來る。……」

多勢の村の娘達や若者が、思ひ思ひにかたまつては、何やら陽氣な唄を合唱してゐる。華やかな色が舞臺の上をあちこちと動く。

その枝は下手に並んで合唱してゐる娘の群に眼をやつた。いろんな顏がその枝のオペラグラスの中を右から動へ動いて行つた。彼女は心持身長の低い娘の顏をチラッと見た。と、彼女の瞳はまるで膠でこびりついたやうに、その女の顏の上に釘づけにされて了つた。

その顏、その口、その眼、その笑ひ。さうだ！あの女に違ひない、

ロッテだ！　ロッテだ！

その枝の脣はまるで映畫の中の人物のやうに、言葉なしに叫んだ。

夫が醉ふといつでも彼女に見せびらかす、あの寫眞の女だ。歌劇の女優だと云ふ事は豫て薄々は聞いてゐた。

あのふつくらとした乳のあたりか、雪のやうな襟首、あの輝かしい微笑、赤い脣。この自分の淋しい姿に比べて、何といふ幸福らしい表現なのだらうか。

（あんな女に戀せられてゐる夫だ。ダリヤの園に舞ひ狂ふ蝶が、何で淋しい廢園のコスモス畠に飛んで來るものか。）

いつの間にかその枝の瞳は濕つてゐた。何を彼女は見てゐるのか、それさへもまるでわからなかつた。彼女はぼんやりとオペラグラスを膝の上に落した。管絃樂が夢のやうに彼女の耳の中で渦卷いた。

暫く前にあの女から自分宛にくれた厚い手紙の事を、彼女は想ひ出してゐた。獨逸語の字引を引くのが億劫なのと、又何となく見る氣もしなかつたので、そのまゝ机の抽斗に放りこんであつたのだ。

舞臺の上では、道化師、が筋書どほりに進んで行つた。

（……若い農夫のシルヴィオは、己れの胸の中を唄に歌ふ。そして今晩芝居の開場を合圖に兩人で逃げようと云ふ。

『お前なしの生活は、俺にとつて墓場である。』
女は云ふ。
『それは出來ない事だ。私を忘れてくれ。私は心の中ではあなたを愛してゐる。しかし、——おわかれしなければならない。』
シルヴィオは猶も云ふ。
『それならばなぜお前を戀する事を俺に教へたのか？ なぜ俺に接吻を許したのか？ 最後になつてこの俺に、思ひ切つてくれと云ひたい爲に今迄そんな幸福を俺に與へてゐたのか？』
ネッダはもうその上男の願ひを退ける力を失つた。今迄の長い長い流浪の生活は、もう彼女には堪へられない重荷となつて、そのなよやかな肩の上にのしかゝつてゐたのだ。
兩人のこのぬれ場を見たトニオは女の夫であるカニオに告げに行く。
眼の色を變へてカニオが飛んで來た時、氣配をさとつたシルヴィオは既に塀を乘越えて逃げて行つた。
カニオはその後姿を見る。そしてその後姿におくられた、ネッダの言葉が烙印のやうにカニオの耳に殘つた。
『とこしへにわれはながもの。』
カニオは男の名を云へと云ふ。ネッダは口を開かない。カニオはナイフを拔く。一座のベッペが停める。カニオは獨り殘る。
彼は自分の心から愛する若き妻に一人の戀人のゐる事を知つた。彼は絶望をその兩の腕に絞り出した。
村の人々はもう芝居の開くのを待ちかねて騷いでゐる。この蝕まれたる胸を抱いて、彼はおどけた衣裳を身につけて、おどけた唄を歌ひ、そして笑はなければならないのだ。
『俺は一體人間なのか？』
彼は叫ぶ。いゝや、さうぢやない。私は一箇の「道化師」なのだ。集まれる人々の前に自分の役を演じなければならない。
『笑へ！ 道化師！』
そしてカニオは小屋掛の舞臺の方に走り去つた。
幕が下りる。）
卯女子はその枝が妙にふさいでゐるのに氣がついた。燈火が點くとその枝が狼狽ててハンケチをかくしたのを見た。
『どうかして？ 氣分が惡いの？』
卯女子は優しく尋いた。
『いゝえ。』
『大丈夫？』
今度は山田が尋いた。
『えゝ、なんともないのよ。』
そしてその枝は微笑んだ。しかしそれは慟哭よりも、もつと悲しい笑ひであつた。
山田は默つて了つた。その枝は眼を伏せた。多勢の人が廊下に出て行つた。卯女子はチョコレートを買つて來て皆にすゝめた。
『いかゞ？』
『えゝ、どうも有難う。』
その枝も笑ひ乍ら銀紙を毟つた。
チョコレートの袋が大方空になつた頃、廊下の客も大概席に戻つて來た。
幕が開く。
冷たい風が舞臺の方から漂うて來た。
（村の廣場に設へた道化芝居の舞臺である。多勢の村の人々は熱心に待ち侘びてゐる。やがて劇中劇の幕が開く。
ベッペがハルレキンになつてゐる。ネッダはコロンビーネに扮して、やはり不貞の妻の役を演ずる。兩人は食卓に就いてゐる。ハルレキンは睡眠藥をとり出して、コロンビーネの夫たる、道化師の葡萄酒の杯に入れろとすゝめる。

足音が聞える。

ハルレキンは狼狽てて窓から逃れる。

道化師が入つて來る。

段々演じて行くうちに、彼はもう芝居を演つてゐると云ふ意識を越して、現實の生活の自分の身の上が甦つて來る。

彼は、男の名前を云へと迫る。コロンビーネは斷る。嫉妬に燃えたカニオは叫ぶ。

『俺は役者ではない。人間だ。』

頭ののろい村の人々の中にもやうやくある恐怖に似た疑ひが起つて來た。カニオの顔に刻まれた悲痛な惱み、それは餘りに如實であつたのだ。

彼は再び妻に迫つた。

『名前を云へ！』

ネッダは恐怖の餘り、打ち震へつゝ、なほも斷る。

カニオは矢にはにナイフを拔いてネッダを刺した。劇中の觀客は總立ちになる。

シルヴィオはその群集の中から舞臺に飛上つて、戀人の死骸に縋る。カニオは今や自分の愛する妻の戀人を知つたのだ。血の滴るナイフは再び閃いた。シルヴィオはネッダと重なり合つて打ち倒れる。

驚愕に波立つ見物に向つて、カニオは叫ぶ。

"La commedia e finita!"（『喜劇は終つた！』）

『笑へ！　道化師！』の曲が再びオーケストラによつて奏でられる。かくしてこのオペラの幕は靜かに下りていつた。

その枝は何かしら吻としたやうな氣がした。ネッダが刺された時、悲鳴を上げて波立つた村の娘達の中に、恐怖に震へたロッテの顔が動いてゐた。

（あのロッテの眼の前で、この自分があゝやつて、夫に殺されたならどんなであらう？　嫉妬の餘り殺される程、そんなにも戀される身は、まあなんと幸福なことであらうか！）

腸詰のやうに夜の街に向つて押し出される人々の波にもまれて、四人は冷たい空氣に出た。

皆んなは頻りと今見たばかりの歌劇の話で持ち切つてゐた。もう一遍その場面を頭の中に呼び返すかのやうに。その枝ひとりは氣のない返辭をして、それでも幽かに微笑んでゐた。

四人はやがてその街の端に待つてゐたタクシーに乘つた。

七十片、八十、九十、一馬克、……と段々變つて行くタクシー計量器を凝視め乍ら、その枝はおほむね默つてゐた。

その枝を家に届けると、今度は又同じタクシーで三人は山田の家へ向つた。

『その枝さん、何だか今日は妙にふさいでいらつしやつたわね。』

その枝の後姿が大きな建物の扉の蔭に吸はれた時、卯女子はさう云つた。

タクシーはもう動いてゐた。

『又櫻井君の事でも考へてゐたんだらう。何でも四五日、もう家に歸つて來ないさうだ。』

と山田が口をきいた。

『事によるとあのロッテとか云ふ例の女が今日舞臺にでもゐたんぢやないんでせうか。何でもあすこの女優だつて聞いてました。』

惠吉も自分の知識を披瀝した。

『あらさうなの？』

『えゝ。』

『さうかも知れない。……』

山田は重く口を切つた。

『向うからまゐつてゐるつてんだから始末が惡いね。櫻井の方からあべこべに金を捲き上げ

てゐるつて噂だが。』
『あゝなると一種の技術（クンスト）ですね。』
『とにかくその枝さんは可哀さうだな。……旅の身空でさ。』
（又、兄の口癖が始まつた。）
卯女子は妙にいらだつ自分の心を意識した。
『兄さんはその枝さんに同情ばつかりしてゐるのよ。』
そして彼女はふざけた調子でさう云つたのが、案外眞劍に響いたのに氣がついた。
『誰に同情したつて良いぢやないか。可哀さうな人は可哀さうなんだ。』
兄の言葉も鋭かつた。
『だつて、……』
卯女子は急に悲しくなつて了つた。
『だつて何だ？』
『だつて……だつて奥さんですもの。』
卯女子の聲はもう殆ど泪であつた。
『ふんだ。馬鹿。ハハヽヽ。』
卯女子はまだ兄のこんな笑ひ方を聞いた事がなかつた。彼女はハンケチで鼻をかんだ。そしてその序にちよつと端の所を噛んだ。
『何も俺が、その枝さんを戀してゐるつてわけでもないのに。……』

山田はちよつと黙つた。そして突拍子もない時になつて、獨り言のやうに附け加へた。
『結婚なんて、どうせ人間の作つたものだ。』
三人の間には、まづい沈黙が來た。
暗い夜がタクシーの窓の外を水のやうに流れて行つた。
憲吉は卯女子の瞳の訴へるやうな輝きを見た。
『でも、……』
それはもう、でもといふのもをかしい位、かなり長い沈黙の後で憲吉が云つた。
『でも、それを守つて行くといふ事は、社會人としての、人のつとめではないでせうか？』
『そりや君、法律家の考へさ。……』
山田が向き直つて遮つた。
『結婚は習慣だ。習慣程破り悪いものはない。が、破り悪いからと云つて、あんな醜い夫婦關係を、見て見ぬふりして置く事が、眞の人のつとめなのかしら。僕には法律の事はよくわからないが、近頃の進んだ法律思想はそんな臭いものには蓋をしろ主義な、消極的なもんぢやないと思ふがね。僕はミュッセの言葉で今でも感心してゐるのがあるんだ。』
（文明は自然と背馳して行く。處女は輝かしい太陽の光の下に自由に晒されたり、讃美する代りに、暗い家の中に閉ぢ籠められてゐる。しかし勿論彼女は壁にかけた十字架の下に小鏡を隠してゐる。
夜の静寂の中に鏡に向つて化粧をする。彼女の真の美はさうやつて傷はれて行く。
突然彼女はその家から連れ出される。何にも知らずに、戀も知らずに、それでゐていろいろの事を望み乍ら、夢見乍ら。
一人の老婦人が彼女に或事を教へ、或る猥褻な言葉が彼女の耳に囁かれる。彼女は見知らぬ男の床に投げこまれる。そしてその男は彼女を犯す。そしてそれが結婚と云ふものだ。文明の家庭と云ふものだ。）
『ねえ君、これでも我々は出來上つた秩序なるが故にそれを守つて行かなければいけないのかしら？……え？』
卯女子は心持、頬のほてりに氣がついた。何かしらん聞いてはいけない事をふと立聞きして了つたやうな氣持であつた。男の口からこんな風の言葉を聞いたのは、初めてであつた。
憲吉は暫く黙つて考へてゐた。
やがて憲吉が沈黙を破つた。
『君と僕とは考へ所が違つてゐます。僕は決し

て臭いものに蓋をするやうな姑息な事はしない心算です。どうしたら臭くないやうになるか知らんと考へるんです。君はそこへ行くとたゞ臭いものは見棄てて、他へ去つて了へと云ふんです。その意味で君の考へは却つて消極的ではないでせうか。

　指を怪我したから面倒臭い、腕から切りとつて了へと云ふやうな絶望的な虚無思想は僕はとりません。成程現今の結婚制度は缺陷だらけかも知れません。が、だからと云つてそれをぶち壞して了へと云ふ破壞的な考へに僕は反對なのです。破壞からは何ものも得られません。どうしたらこの出來上つてゐる制度を理想に近付けるかと云ふ事がわれわれの仕事なんです。僕は…………

　惠吉は自分乍ら可笑しい程喋り出した。山田は默つて了つた。こんな時むきになつて我を通す事は彼の弱さが免さなかつた。それにどうも自分の考へてゐた事も何だかぐらつき出して來たやうな氣がした。

（そりや破壞せずにあらゆる世の中の傳統的な舊弊が改まつて行くのなら、それに越した結構な事はない。今村の云つてゐる事は理想としては立派な事かも知れない。が、果して今の世の惡制度にして、革命を必要とせずに改良され得可きものが、どの位あらうかしら。誰だつて好んで手術をしたがる奴もない。）

　山田はそんな事を考へてゐた。

（けれども、今自分にはこの議論を持ち出して、今村を辯駁する程の自信はないのである。何故ならば、そんなら破壞した後はどうする、と反問された場合自分にはそれを說明する用意がないのである。）

　それに山田はもう議論に飽きてゐた。彼は苦笑を漏らした。

『それはまあさうとして、何も僕はその枝さんを戀してゐるつてわけぢやないよ。たゞ同情してゐるつてだけさ。』

　と、山田は一般論を急に以前の話題に引戻した。

『戀の姉妹の中で一番美しいものは同情ですつて。』

　惠吉も輕く笑ひに混ぜて口を噤んだ。卯女子は自分が云ひ出しただけに、これは吻としたのであつた。

　タクシーはその時、山田の家の前に停まつた。兩人の兄妹は下りた。

『ぢや、クライスラーは八時でしたね。十五分ばかり前に切符賣場の所で待つてゐます。』

　山田は下りしなにさう云つた。

『えゝ、それぢや。……おやすみなさい。』

　自動車の扉の閉まる音を聞いた時、卯女子は何となく悲しい氣がした。薄暗い豆洋燈の點いた車内に、硝子を通して今村の顏がこつちを向いて笑つてゐた。彼女は何かしらんにやはらかく抱き締められたやうな氣がした。

（あの微笑が嘗て自分の胸の中に植ゑつけた、愛の種子が今や實を結ばうとしてゐるのだ。）

　丁度その同じ時刻に、一臺の自動車は歌劇場の裏口から、二つの黑い人影を乘せて、角の闇に消えて行つた。

　眞白に塗つた白粉、その中に丁度雪の庭に落ち散つた南天の實のやうな眞紅に紅をつけた薄い唇、白の薄紗に包まれた紅玉石を見るやうに、ほんのりと紅をさした兩の頰、滴るやうな沾ひを持つたその瞳。魚の鱗かと思はれる銀色に輝いた華美なきもの、綠玉を中央に囲つた金剛石をちりばめた細身の指輪、香り高いコテーの香水——それにもかゝはらず樂屋を出るとロッテはいぢらしい可憐な少女であつ

た。
　櫻井の脇に寄り添ふやうにして媚の瞳をうつとりと見上げた。
『どうしたのね？　オッシー！（彼女はさう云つて櫻井の事を呼んでゐた。）今日はいやにめかしてさ。　加之に自動車なんかで迎へに來てさ。』
『そりやロッテ！　俺だつてさういつも不漁ばかりぢややり切れないさ。』
『それぢや又？』
『あゝ。ワルターの所でたんまりあたつたのさ。おい運轉手、エスペラナードだ。』
　そして今度はロッテに、
『行かう、ね？』
『行つても好いけど、……』
　ロッテは何か考へてゐた。
『さういつもあたるつてわけぢやない事よ。ね？　オッシー！　もう好い加減に止めたらどう？　又いつか見たいに二時頃敲き起してポケットをめくり返して見たつてあたしもう知らない事よ。……それに、あたしなんだかあのワルターつて蟲が好かないわ。……』
　ロッテはちよつと睨む眞似をした。やがて今度はしんみりと云ひ足した。
『それに、……ねえ、オッシー！　少しはこれからの事も考へてくれなくつちや。』
『ハハア、もう主婦さん氣取りでゐやがらあ。俺あ愛國者と主婦は大嫌ひだ。緣起でもない。……いつもお前に貢がせて濟まなかつたな。今日は俺が奢るよ、ねえ、ロッテ！』
　櫻井はポケットから弗の札束を取出してパラパラとこばをめくつて見せた。
『紙屑の馬克とは少し違ふんだ。皆んなお前にやつて了ふよ。』
『あたし、そんな事云つてるんぢやないのよ。どうせあたしはあなたの爲に働いてゐるんですもの。それにもう直き役も上りさうだから。『ドン・ファン』のドンナ・エルヴィラを練習しとけつて今日あのおちびさんが云つたわ。だからさうすりやあなた一人位……』
『おい、おい、あなた一人位たなんだい。タイピストの亭主ぢやあるまいし。俺だつて儲け口位持つてらあ。』
『博奕でせう。だからさ、そんな事する位なら、何もしないでぶらぶらしてゐて頂戴つて云ふのよ。ね、オッシー！　そのうちに又ハンブルヒあたりのどこか日本と貿易でもしてゐる商館に入れて貰へるかも知れないから、……でも……』
　ロッテはちよつと言ひ淀んだ。
『でも、一體お約束の方は眞實なの？』
『あゝ、大丈夫だとも、マリヤ樣も御照覽あれだ。ちやんと計畫が進んでゐるんだよ。今日だつてお前、他の男と來てゐたらう？』
『えゝ、來てゐたわ。でもあたし何だか惡い事してゐるやうで氣が咎めてしやうがないのよ。あんなお優しさうな方をね。』
『へン。何云つてるんだい。柄にもない人道心なんか起してよ。人形に同情する莫迦もないもんだ。』
『そんな事云つて、あたしも今に人形にされて了ふんぢやないのかしら。』
『わかつたよ。ロッテ！』
　櫻井はいきなり彼女を抱き締めて、その眞紅な唇に接吻しようとした。
『止して、止して！』
　ロッテは幽かに押しのけた。
　明るい灯が車窓の外を後へ後へと走つて行つた。
『おい、ロッテ！』
　ロッテは默つてゐた。彼女はドンナ・エルヴィラの役の事を考へてゐた。

『おい、ロッテ！　なんだ。ゼラチンぢやあるまいし、そんなにプリプリ怒る奴があるもんか。』

『私、怒つてなんかゐやしないわ。』

『怒つてゐる。』

『怒つてませんたら。』

『怒つてるから怒つてゐると云ふんだ。』

『だから、怒つてゐないから怒つてゐないと云つてるのよ。』

　兩人は噴き出して了つた。

　ロッテは櫻井の胸にしなだれかゝつた。

　ロッテは脣の紅を氣にして自動車の窓硝子でちよつと刷毛を當てた。彼女の額のあたりに、電燈の廣告がグルグルと渦を卷いてゐた。明るいポッツダム廣場の光の中を無數の黑い人影が動くともなく交錯した。

　櫻井はロッテの外套を外してやつた。自分の帽子と一緒に入口の「預り所」に預けて、そこの鏡でちよつとネクタイを直した。

　兩人は肩を並べてエスペラナードの明るいグリルに入つて行つた。

　そこゝの卓子に坐つてゐる皆一組の男女の群は、兩人にたゞ無關心の一瞥を投げたきり、皆自分達だけの事を考へて、自分達だけの事を話し合つてゐた。

　管絃樂の音が遣瀬ない投げやりなジプシーの曲を奏でてゐた。リストの「ハンガリヤン狂想曲」である。

　三鞭酒の音が景氣よく鳴つた。黃金色の液體が切り子硝子の綺麗なコップの中で陽氣に跳上つた。まるで樂の音に合せて、無數のその泡が亂舞してゐるやうに思はれた。

『おい、ロッテ！　今日俺が行つた時、樂屋の中でお前といちやついてゐたあの男は何だい？』

　櫻井はガブッとコップを空けると、とつてつけたやうにさう尋いた。

『男つてだーれ？』

　ロッテが尋き返した。

『とぼけるない。』

『あゝ、あの若い人？』

『さうよ、あの額から粉のふいたやうな、にやけた男よ。』

『あれは次中音の歌ひ手よ。いちやついてゐたつて？　厭な人ね。嫉いてるの？』

『莫迦云へ。自惚れるない。おーい、ボーイさーん。この御婦人に自惚の藥を一つ持つて來てくれ。』

『まあ、大きな聲出してみつともない。』

　ロッテはベルモットの杯を脣に當てたまゝ、横眼にちよつと睨んだ。

『さあ、自惚のお藥と申しますと何が宜しうございますかしら。アブサンでは？　それとも、……』

　心持腰を曲げて覗きこむやうにして愛嬌笑ひのボーイが尋いた。

『そいつあ催淫藥ぢやないか。何でも良い。持て來ーい、持てこーい。』

　左團次の丸橋忠彌をそのまゝ獨語したやうに櫻井が叫んだ。

『あの男はね、……』

　さう云つてロッテは思ひ出したやうに笑ひ出した。

『あの男はそりや失戀の名手なのよ。歌よりその方が本職なの。今日もその話を喋つてゐたの。

　何でも今日劇場へ來る途中の話なんださうですが、地下鐵道の中で、とても美人に會つたんですつて。何とか云つてましたわ、さうさう、クレオパトラが産後の疲れに惱んでゐる顏だつて。

　その女が、まあ思つても御覽、つてあの態

屋さん」つていふのよ。——オッシー、知つてる？獨逸ぢや女に振られる事を「籠を受取る」つて云ふのよ。それだからみんなあの男の事を「籠屋さん」つて呼んでゐるの。——で、あの男がさういふの。まあ思つても御覽、その美人が頻りと自分の方を見ては秋波を送るんですつてさ。

それで「籠屋さん」すつかり有頂天になつて了つて、先づネクタイをなほして、紫色のハンケチをちよつとポケットの先に覗かせて、その女の後に從いて下りたものね。

女は賑やかな街を歩いて行く。時々振返つてニッと笑ふ。

「あすこの角へ行つたら話しかけてやらう。あすこの人混みの所で手を握らう。いや、それよりもあの女が故意とハンケチでも落しさうなものだが。」

なんて、考へてゐたんですつて。すると急にその女がウイッテンベルヒ廣場を廻つて、あすこの暗い脇通りへ外れて行くんですつてさ。さてはと思つて「籠屋さん」獨り悦に入つたまゝもう一遍ネクタイを撮んで、その通りを折れた時、もう一人他の男がやはりそこを曲つたのに氣がついたの。

その男はギョロッと「籠屋さん」を睨んで、すたすたと追ひ越して行く。「籠屋さん」てつきり、こりや不良青年に違ひない。萬一の事あれば騎士これにあり、と急に勇み立つたつていふから可笑しいぢやないの。

所がやがて街路樹の樹蔭の暗がりに來ると、その男と先刻の美人が急に近寄つて、まあ他人前も憚らず猛烈な接吻を始めたんですつて。「籠屋さん」すつかり呆氣に取られて了つて、そのまゝしをしをと引返したつて話なの。

「どうも不良青年らしいことよ。」

「さうかも知れない。」

兩人の戀人がひそひそと耳打ちした、そんな言葉が、引返した「籠屋さん」の耳に入つて來たんですつて。あの人つたら、すつかり悄氣ちやつて、急に地下鐵道の切符が恨めしくなつて了つたのですつてさ。」

ロッテは大聲に笑ひ出して了つた。

醉ひの廻つた櫻井の瞳には、薄い白絹の服の下にふつくらと桃色を暈した彼女の乳があつた。金色のやはらかい産毛の生えた襟脚から兩の腕。彼の耳の中には甘い夢のやうな彼女の言葉の旋律が響いて來た。彼の鼻にはほのかにシクラメンの香りが漂うてゐた。

彼はロッテの家のあの温かい寢室を想つた。青磁色の瀬戸のストーヴ、綠色の鸚鵡、そしてマホガニー等の大きな寢臺。

彼はいきなり立上つた。そしてロッテの[illegible]に手を[illegible]とそのまゝ抱くやうにして入口に出た。

冷たい夜風がさつと[illegible]に觸れた。

お腹の中でハムとチキンが[illegible]つてゐた。ハムとチキンは仲が惡いらしい。

スチームの餘温もさめ切つて了つた冷たい部屋の中で、その枝は枕の布がぐしよ濡れになるまで、泣いて泣いて、泣いて泣いて、泣き明したのであつた。もう一週間も家をあけてゐる夫の事を考へて、そして今日[illegible]で見たロッテの事を考へて。

彼女は心の底から込上げてくる憎惡を夫の上に感じた。どうしてあんな男と手を切れないのかしら？ どうしてこの牢獄のやうな冷たい家を飛出して、輝かしい日の光の下に濶歩出來ないのかしら？ さうだ、何故自分は獨りで生活して行けるものを身に着けて置かなかつたのかしら？ たゞぶらぶらと刺繍だ、お割烹だと暮し明して來た自分の少女時代を顧みて、彼

女は今辛い悔恨の盃を飲むのであつた。

（それでもせめて日本ならば、どうにでもして自分一人位の事はやつて行けさうな氣もする。父の所にさう云つて見ようかしら？　歸りの旅費だけでも送つて貰へば特三等に乘つてでも獨りで歸つて行ける。）

とも彼女は考へて見た。しかしあの日の父の顏を想ふと、

「お前はわしの希望も期待も裏切つてお前の自由に振舞つてくれた。これからもお前の自由にやつてくれ。わしはもう、お前の自由に對するあらゆる權利を、同時にあらゆる義務を、綺麗に放擲するから。」

さう云つてどしどしと部屋を出て行つて了つた、あの時の父親の嚴しい顏を想ひ起すと、とても今更そんな事は云へたわけあひのものではなかつた。

（自分は結局かうやつて、邪魔にされ乍らも、一生をずるずると引摺られて行くのかしら？　何と云ふ悲慘な星を擔つた自分なのであらうか。）

兩側の野山から漂うて來るかぐはしい若草の匂ひを嗅ぎ乍ら、鞭の音に怯え怯えて、灰色の塵埃道をとぼとぼと歩いて行く荷馬車の馬のやうな自分の運命を、彼女はしんみりと考へた。

彼女は起き上つて電燈を點けた。そして机の抽斗からロッテの手紙を取出した。字引を片手にぼつりぼつりと彼女は讀み始めた。所々不明の箇所もあつたが、それでもあらかたの筋合ひはわかつたのであつた。それは、

「初めまして御手紙を差上げるあたくしの圖々しさをどうぞお免しになつて下さいまし。でも神樣がそれを私に命じます。……」

（何が神樣？）

その枝の手は、そしてその手紙は、ぶるぶると寒天のやうに震へた。

「……あたくしは奥樣の事を考へると何と云ふ大それた罪を犯してゐるのか、自分乍ら空恐ろしい氣が致します。あたくしには奥樣のやうなお優しい方を――奥樣はお氣につきませんかも存じませんが、私は何度も何度もよそ乍ら奥樣をお見掛け申して居るのでございますよ。

――その奥樣を、あたくしにどうして苦しめる權利がございませうか？――」

（それぢや自分が櫻井とどつかへ行つた時、脇の方からそつと夫と目配せをし合つたり、微笑み交したりした事があるのかしら？）

「……でも、でも、何といふ宿命なのでせうか。あたくしにはどうしてもナッシーを、サクライさんを思ひ切る事は出來ません。

あたくしは何度この自分の戀を思ひ切る爲に、何處か遠い遠い田舍の町へでも行つて了はうかと思つた事でございませう。それだのに一度あの方の瞳の光にあたると、あたくしの決心は朝日の霜のやうに溶けて行つて了ふのでございます。

あたくしは愛慾の地獄に墜れ狂ふ蟲なのです、奥樣どうぞあたくしを憐んで下さいまし……。」

その枝は自分の憤りが妙に薄らいで行くのに氣がついた。先刻迄は彼女の心の中にチラッと嫉み心が浮んだりしてゐるのであつたが、人に對する憎惡の心がいつの間にかそれを壓しこ了つた。却つてロッテの姿が可憐しくも浮んで來たのである。蜘蛛の巢にかゝらうとしてゐる蝶を見てゐるやうなそんな心持であつた。

「いゝえ、いゝえ、奥樣どうぞあたくしを

お叱り下さいまし。蔑んで下さいまし。あたくしは悪魔なのでございます。あたくしの魂はきつとメフヰストに買はれて了つたのでございますわ。あたくしはどう致したらよろしいのでございませうか？」

その枝は輕い溜息を吐いた。何もかも免してやりたいやうな心持であつた。

（そんなら一體自分はどうしたら良いのか？）

そこで彼女の考へはもう一遍停つて了つた。

（喜劇よ！　早く終つておくれ。）

彼女はいつの間にかソファの上に假睡んでゐた。

とり殘された影法師

フリードリツヒ街の賑やかな大通りをちよつと外れた街角で、一人の辻賣商人が頻りと何か喋つてゐた。たゞ肩から紐で吊した小さな手提鞄の蓋を擴げて、得體の知れない液體を詰めた硝子の小壜を澤山並べてゐた。

彼は又一方の手に何やら數學を一面に書きこんだ丸いボール紙の盤を持つてゐた。彼はしきりと可笑しな事を云つて見物人を笑はせてゐた。

今村惠吉はふとその人の群を見ると何の氣なしに寄つて行つた。そして後方の方から脊伸びをし乍ら覗きこんだ。男は一段と聲を高めて喋り出した。

『さあさあ皆さん、こゝに御紹介致しますのは、最近に發明されました所の、不可思議なる計算器。馬克の相場を豫知すると云ふ奇妙きてれつ魔訶不思議……』

見物の人々の顔には明らかに好奇心の影が浮んだ。人々は熱心に男の指先の動きに目をやつた。去りかけた人達も地を離れた踵をもう一遍下すと、ぐつと踏み止まつて熱心に覗きこんだのであつた。まさか、と云ふ心持と、それでも、と云ふ慾に人々の眼は異樣に輝いた。惠吉もぢいつとその男の顔に興味深い注意を向けた。

その時である。男は急に口を噤んで了つた。そしてそはそはと横眼を使つてゐたが、そのまま狼狽てて、鞄を閉めると、何かもぐもぐ口の中で呟き乍ら、ひよつくりと群集の中に滑りこんで行つて了つた。

「綠服の小父さん」の光つたヘルメットが人々の背後に際立つて高く見えてゐた。

見物は淡い落膽を露骨に顔に浮べてゐた。大喜利を見殘して歸るお客さんのやうな氣持であつた。それでも一人去り二人去り、丁度林檎の皮を剝くやうに、てんでに散つて行つて了つた。

惠吉はふと、散つて行くその人々の群の中に一人の日本人を認めた。

何處かで見たやうな顔だ、と思つた。

相手の男も亦、何處かで見たやうな顔だ、と云ふやうな顔付をして惠吉の方を見てゐた。

惠吉はやつとわかつたやうな氣がした。そこで彼はニコッと笑つた。その人も笑ひ返した。

『やあ、君か？』

向うから先に聲を掛けた。

『あなたでしたか。』

しかし兩方とも名前は思ひ出せなかつた。

『どうです？　珈琲でも交際つて下さい。』

『えゝ。』

こんな工合にして兩人は歩き出した。兩方とも、いゝ、君とあなたで話し合つて行つた。

カフエ・クランツラーの卓子に向ひあつた時、その男はポケットから、ちやんと印刷した伯林の番地入りの名刺をくれたので、惠吉はやつと

その男の名前を思ひ出した。

（さうさう、皆川つて人だつけ。）

その男は皆川猶十郎と云ふ役者のやうな名前を持つてゐた。惠吉がまだ高等學校にゐた時分同じ寮にゐた男であつた。彼よりは二年上級であつた。よく洗面所などで顏を合せるので、會へば必ず挨拶はするが、又決して口は利かないと云ふ程の間柄であつた。

『意外の所で口をきゝましたね。』

その男もさう云つて笑つた。惠吉も名刺へカイゼルダム百十五番と所書きを書き入れて手渡した。

電燈の光の下に皆川の顏は妙に窶れて見えた。惠吉は尋いた。

『失禮ですが、顏色が少しお惡いやうですね。やつぱり食べものが違つた所爲でせうか。』

『いゝえ、いゝえ、これはね、君、云はば僕の道樂で。お腹の病氣なのです。……』

皆川はちよつとお腹の所を敲いてみた。

『チブス、パラチブス、大腸カタル、盲腸炎、それから黄疸……とお腹の病氣は大概もう一通りはやつて見ました。まだコレラだけはやりませんがね。』

惠吉は變な人だな、と思つた。

『癌て奴もまだ遺憾乍ら適齢に達しないので、まあとつて置きにしてあります。』

皆川は澄ましてパイプの先から紫色の煙の輪を吐いた。彼は又言葉を續ける。

『一葉も從つて、一病約七種位の割合で、かなり試みて見ましたが、どうもこれはと思ふのがありませんね。却つて夜店なんかに時々奇抜なのがあるので、この間からかうやつて夜の街をぶらついてゐるのです。今日の奴も確かに薬屋らしかつたが、折角の所で巡査が來たので殘念でした。』

皆川はボーイの置いて行つたパイをほゝばつた。

『所が僕、最近ある信すべき人の口から面白い事を聞いたのです。何でもその人の多年の經驗によると、蚯蚓とトマトを一緒に煮て食べると大概の胃腸病は癒るつて云ふのですがね。僕も一つ試してみる心算でゐますが。』

『だつて獨逸にはゐないでせう。井戸も溝もありませんから。』

惠吉も釣込まれていつの間にか出鱈目になつてゐた。

「どうして、所があべこべに蚯蚓の名產地と來てるのですからね。」

こゝで流石の惠吉も、これは、と思つた。

兩人は珈琲のコップを空けた。

『君は、たしかに獨法でしたね。やつぱり法律の方をおやりですか？』

『えゝ。』

惠吉は說明を加へなかつた。

『法律もやり方に依つちや面白いのだがな。コーラーつて云ふ有名な法律學者はね、君知つてるかも知れないが、沙翁を研究してね、例へば、「ハムレットの遺產問題」とか、「ヴェニスの商人の債權問題」とか書いてゐるが、あんな風に一つやつて見たらどうです。材料は君、いくらだつて有りさうですな。辨天小僧にしろ、河內山にしろ、さては天一坊にしろ、皆裁判所に立たせても面白い人物ぢやありませんか。「江藤新平の忠臣藏觀」なんて良い題だがな。僕だつてこんな會社なんかに行つてなきや早速調べて見たいと思ひますがね。』

「江藤新平と忠臣藏と何か因果律でもあるんですか？」

惠吉は又釣込まれて尋いた。

「有るとも、大有りさ、君。仇討御法度を出したのは實にあの男ですからね。」

兩人はちよつと默つた。するとやがて皆川は

突拍子もない事を尋いた。

「君、尾籠な話をするやうだが、あのインキンてものの起源を知つてますか。」

恵吉は勿論知らなかつた。それよりも皆川の頭の廻轉が餘りに亂暴なので、恵吉はきよとんとしてゐた。皆川は遠慮なく續ける。

「ありや君、随分古いもんですよ。何でもシベリヤで發掘された氷づけのマンモスの身體に發見されたつて云ふのですから、とに角有史以前から、有つたものらしいですな。」

恵吉は困つて了つた。

（一體この男は眞面目なのか、ふざけてゐるのか？）

その所の境界がはつきりとしなかつた。眞面目とするには餘りにその云ふ事が荒唐無稽ではないか。出鱈目とするには餘りにその言葉付が嚴粛である。一眸渺として、空か水かと云ふ男であつた。

恵吉は降參するに若くはないと悟つた。兩人は明るい夜の街に出た。

山田から電話で、卯女子が音樂の講義を聞き度いから、大學の聽講生になる手續をしてくれと云つて來た。恵吉はそれぢや今日大學へ行く時一緒に連れて行つて上げると云つて切つた。

彼は女中にお湯を持つて來て貰つて鏡の前に立つた。顏中石鹸の泡に埋めて、頬邊を膨らませて、親爺が見たら泣くであらうし、戀人が見たら、折角纏まりかけた縁談も破談になるであらう所の、奇妙な顏付をして、ボリボリと安全剃刀を滑らすと、いきなりチクリときた。

灰神樂のお膳を濡ぶきんで拭きとつたやうに地膚の現はれた顳顬の所に、ポツンと紅く血が滲んでゐた。又ついうつかりと、固まりかけのにきびを剝がして了つたのだ。

彼は忌々しさうに舌打ちをして、ざつと他をあてるとそのまゝ顏を流して、タオルでくるくると撫で廻した。そして今度は念入りにタルカン粉を塗りこんで、部屋に戻つて來た。

まだチクリチクリと痛むので、彼はこの間四辻の車店から、七錢ばかりで買つて來た「ファウスト」の端をちよつと破いて、唾をつけるといきなり傷口へ、と云つても、鼠の糞の六分の一もないにきびの痕へ貼りつけた。

と、どうしたわけかふと彼の頭には、丁度西日さす秋の障子に、すいつとうつつた蜻蛉の影のやうに、過ぎ去つた若き日の淡い記憶が、チラッと掠め去つたのである。

（あの當時、俺はひどいにきびに苦しめられたのだ。照子の家に行く度に俺は鏡の前で眞剣に惱んだものだ。鼻を中心として額から頬のあたりにしつつこく頑張つてゐる一群を鏡の中に睨めつけて、俺は何度溜息を吐つた事だらう。

にきびの夢ばかり見る夜が續いたつけ。顏を食はうとするとその表面へもつて行つてぶつぶつとにきびが出來て了つた夢や、何國かの王様がにきびが大の好物で、家來の誰彼のにきびを壓して、それを串にさして、——それはさと芋位の大きさがあつた。——食つてる夢を見たりしたものだ。

滑稽なあんな夢までが俺には悲しかつたのだ。

活動を見てもエス・ハートの大寫しの顏に、にきびが三つあつたのを數へてみたりしただけであつた。

こんな事もあつたつけ。あれは口の惡いSだ。天文臺へ月を見に行つて歸つて來ると直ぐ俺にあてつけに云つたものだ。

「あのな、月の面てまるで[illegible]見たいなもんだ

よ。ハイネに歌はれた月だつて、科學にあつちやおしまひさ。凸凹してゐて、さう……』

そこであいつは俺の顏を指しやがつた。

『それだ、まるで君の顏さ。月にもにきびが出來るんだからね。妙なもんさ。』

皆は笑つた。

『どうせさうだよ。』

俺は先づ氣を惡くして、二階の寢室へ上つて行つた。月がそんなことも知らぬ顏に、寮務室の屋根の上に高く輝いてゐた。俺はなんだか忌々しくなつていきなり窓の框へ乘つて月の方へ向けて小便をひつかけてやつた。

しかしぢいつと見てゐるうちに何とも云へない氣になつて、なんだか極りが惡くなつて了つたつけ。

やつぱり月は月だな、と思つたのだ。

それから俺は寮の食堂で、脂身ばかりの豚の副食物を出されると、いつでも止めて、表のおでん屋で茶めしを食つたものだ。

あんな豚の脂なんか食はされてたまるもんか、と俺は思つたのだ。あの脂がみんな胃の腑の内壁から血管に溶けこんで、そのまゝ地球の弱味を探して噴出す噴火山のやうに、殘らず顏へふき出して了ふのだ、と俺は眞面目に考へた。……〉

惠吉はラードのにきびかと考へて、思はず鏡の中で苦笑した。

惠吉は又考へ續ける。

〈それよりも、あの「コリカ、クリーム」を買ひに行つた時の心持はなんとまあ皮肉なものであつたらうか。俺はあの廣告の所を破いて袂へ入れてぶらりと表へ出て行つた。

表門のすぐ前の藥屋には女の客が二人ばかり買物をしてゐたので、流石に氣が負けて、そのまゝ素通りして了つた。そして赤門の傍へ來た頃、あすこの藥屋に眼がついたのだ。丁度往來には一人も學校の奴も見あたらなかつたし、店の中にも客が居なくて、小僧が退屈さうに新聞を讀んでゐた。

俺は思ひ切つて入つて行つた。

『いらつしやい。』

と、あの小僧が新聞を脇に置いて云つたな。

『何をさし上げます？』

と、もう一人の中僧が尋いた。俺は急に顏の火照りを覺えた。店頭にある鏡付の仁丹の廣告には、眞赤な俺の耳が映つてゐた。

『あのう……』

と、先づ云つて、まあ氣を鎭めろと俺は思つた。それからたもとへ手を突込んで、丸められた先刻の廣告を出して見せた。

『かう云ふのあるかい？』

もうこつちのものだ。不思議なくそ落着きを俺は感じた。しかしやつぱり、

『頼まれたんだが。』

と、あゝ云ふ見え透いた言譯を云つた所を見ると、俺はやつぱり心の中では、狼狽ててゐたのらしいぞ。

やがて中僧が奧から四角の箱に入つたあのクリームを持つて來た。

『お待遠さま。へイ。』

あの男は手渡し乍ら云つた。

『これなら、ようく利きます。』

餘計な事を云ふ奴だ。俺はさう思つた。そして脇にゐる小僧までが妙に笑つてゐるやうな氣がして腹が立つた。

『それから繃帶をくれ。』

『へイ、おいくつ？』

『一つで良いんだ。』

實、愉快に俺は云つてやつた。金を拂つて急いで俺は戸外へ出た。どうして繃帶なんか買つたのか。どう考へても解らなかつた。俺は心安い氣分で大學の側の[illegible]な歩道を歩いて行つた

つけ。
高く上つた太陽がその惠ましい光を存分に投げてゐた。大學の塀の陰影は三尺位に縮まつて、黑々とアスファルトの鋪石の上に殘つてゐた。それが日の上るに連れて段々短くなつて行く、丁度自分のにきびも段々と減つて行くのだ、と俺はさう思つた。
快濶な心持になつて俺は大股にぐんぐんと歩いて行つた。やかましい音響を立てて走つて行く電車の騷音も、美しい旋律を以て俺の耳に響いて來た。
俺は眞實に幸福な氣がした。……）

食堂の方で時計の音がした。惠吉はびつくりして立上つた。うつかりしてはゐられない。彼は紙片を剝がして、もう一遍鏡を見た。血はすつかりとまつてゐた。
（生れては死んで行くにきびの墓場のやうであつた俺の顏も、まあなんと綺麗になつたものだらうか。
今から想へば眞實に他愛もない事だが、あの頃の俺にとつては中々の惱みであつたのだ。――すべて若き日の惱みは、結局煎じつめればこの俺のにきびの惱みと、五十歩百歩のものなのだらう。あれもやつぱり、生活の斷片なのだ。）
氣持良く晴れ渡つた秋の空は、一點の汚れもなく、青く深まつてゐた。惠吉は思ひ切つて、深い息を吸ひこんで、それから唾を吐いた。それが菩提樹の黃色い葉に當つて、やがて長く垂れたかと思つたら、そのまゝすうつと地面へ落ちて行くのを彼は見てゐた。
（惡い癖だ。これはなほさないと國辱になる。）
惠吉はさう思ひ乍ら、言譯らしく、ステッキを二三回勢ひよくふり廻した。

一時間の後、卯女子と惠吉は、ウンテル・デン・リンデンの外れ、歌劇場と向ひ合せの伯林大學の門を潛つてゐた。
暗い古い建物の中の廊下を傳つて、事務室でいろいろ手續を聞いてから、兩人は入口の掲示場の講義表を見た。
フリードレンダーの「ブラームスの民謠」と「獨逸音樂史」を聽く事にして、兩人は丁度お午時だつたのでホールに入つて行つた。
バーの所から二つお皿を持つて行つて、腸詰とチーズとハムを挾んだ小麵麭を二つ宛截せて、惠吉は又卯女子の卓子に戻つて來た。
『一つ食べて見ない？　これも大學生活の一つですよ。』
惠吉はお皿を卯女子の前に押しやつた。卯女子は笑つて受取つた。
『さうさう、飲料だ。ビールは？』
惠吉はもう一遍立上つた。
「いゝえ、私……」
「さう？　それぢやレモナード？』
惠吉は片手に半立入りの黑ビールを、片手にレモナードを持つて又戻つて來た。
隣りの椅子には二十歳位の女の學生が黑パンを齧り乍らビールをがぶがぶ飲んでゐた。
『あれで講義の時間になると、高音で、えーそもそも勞働法はなんて答辯するんですからね。少しは君もしつかりしなくつちや。』
卯女子は笑つてゐた。生のハムが嚙み切れなくて弱つてゐるらしかつた。
『チーズばかりにすれば良かつた。』
惠吉は頻りと同情してゐた。
『いゝえ、良いのよ。』
卯女子はたうとう嚙み切つた。小さな咽喉首がぐびぐびと動いた。彼女は咽せるやうにしてレモナードを飲み干した。
惠吉も笑つて了つた。

『こゝの音樂の講義は面白いですよ。教壇の脇にピアノがあつて、まあ一つの歌の作曲されたいろいろの挿話を話しますね、さうするとすぐ生徒が出て行つてそれを彈いて、歌つて見せるんですよ。

惠吉はこんなに話してやつた。

兩人はやがてホールを出て中庭の方へ歩いて行つた。そこには二抱へもありさうな蒼い苔の着いた山毛欅の大木が茂つてゐた。

『この木、なんて云ふの？』

卯女子が尋いた。

『これが山毛欅の木です。』

『あら、さうなの？』

卯女子は女學校の時、四部の合唱で習つた「流浪の民」を思ひ出してゐた。綺麗な歌、卯女子の大好きな歌であつた。

（山毛欅の森の葉がくれに、
　宴ほがひにぎはしや……）

彼女はさう心の中で唱つてみた。

鬱蒼と茂つた山毛欅の森の夜、焚火を燃して遠く離れ來し故鄕を想ふ彼等ジプシーの夢を想つて、卯女子は自づとわが身を振返つた。

兩人はそこのベンチに腰を下した。木間がくれに斜めにさす陽の光も綠がかつて、清々しい氣持であつた。鐵の柵を越した裏通りのヘーゲル廣場には、その偉大な哲學者の大理石像が、考へ澄ました眼差しをぢいつと街路の上に投げてゐた。北國の秋の暮には珍らしい麗かな小春日和であつた。

向うの方からゆるやかに、何やら二部の調が漏れて來た。男女共學を通り越した戀人共學の兩人連れであらう。

手をつないで足を揃へて歩み去る彼等の姿にも、皆んなはかゝはりのない目で見やつてゐる。そこのベンチ、こゝの芝生に、ノートを擴げるもの、本に讀み耽るもの、各々は皆各自の完成に向つていそしんで行く。

（それが結局は社會自體の向上になるのだ。日本のやうにコセコセと他人の世話ばかり燒いて、アラを搜して小五月蠅く干渉し合ひ、そのうちに肝腎の自分の修養はお留守になるのだ。人の爲、人の爲などと美しい事を云ふ前に、日本人は先づ自己の完成に努めたらどうかしら。蓄電池だつて光を與へる前には先づ充電しなければいけないのだ。）

戀人や夫婦が他人の前だと、それ所か、自分の貞實の親の前でさへ殊更に冷淡にしなければならない日本の事を考へて、惠吉は淋しい氣がした。

卯女子は卯女子で父からやつて一週間に三日、惠吉と一緒にこゝの大學へ通ふ事を考へてゐた。

惠吉は何か喋らなければいけないやうな氣がした。

「あのね、卯女子さん。……」

さう云つて、丁度卯女子の肩に散つて來た山毛欅の朽葉を丸め乍ら、惠吉は口を切つた。

「僕、昨日可笑しな夢を見ましたよ。」

「さう？　お話して頂戴。」

「だつて夢の話なんか、實際主觀的の興味しかないんですから、話したつて詰らないけど。……」

「だつて良いわ。ね？」

「さう？　それぢや。……」

と、云つて惠吉は話して聞かせた。

「さう、どこでせうかね、なんでもタンネンの森がこんもりとした雪の山の一軒家なんです。赤い屋根の、まるでグリムのお伽噺にでも出て來さうな家でした。そこで僕と君とたつた兩人つきりで暮してゐるんです。

君が臺所で何か煮ものをしてゐる。僕が覗くと驚いた。椿の花をぐらぐらと煮てゐるんです。僕がなんぼなんでもそれは、と云ふと君が

怒つたの怒らないのつて、ぷりぷりして出て行つて了ふ。仕方がないから僕は枯枝を拾ひに雪の道を歩いて行く。

晩のご飯になつた時、食卓の上には、前の日、村の獵師が持つて來てくれた白兎が、おいしさうな煙を立ててゐた。僕はやれやれ椿の花を食はずに済んだかと、ほつとしたら目が覺めたんです。』

卯女子も笑ひ出してゐた。そんな夢を見ると云ふ事は、又それを自分に話すと云ふ事は、惠吉がそんな生活を想像したと云ふ事であり、又それを自分に欲してゐると云ふ事である。と彼女は考へてちよつと氣恥しいやうな、又嬉しい氣がした。

『夢つて云ふものは想ふから見るのではなくて、想はれるから見るのだつて考へを昔の人は持つてゐたやうですね。「萬葉」にも、旅に出てちよつともお前の夢を見ない、私の事を想つてくれないのかつて怨みを云ふ歌がある位ですから。この頃ちよつと、青い鳥」、追憶の國」の考へに似かよつてゐますね。』

『さう?』

卯女子は他の事を考へてゐた。

暫く經つて彼女は尋いた。

『あの、貘つて云ふ動物は夢を食べるつてどう云ふわけなんでせう?』

『さあ、僕はまだ見た事もありませんが。』

惠吉は困つて了つた。やがて彼は云つた。

『貘は又貘として、僕は夢の事はかなり調べて見ました。……』

と、さう云つて彼はベルグソンの本で讀んだ夢の話を一應の哲學者らしく話し出した。

『……結局夢つて何だか得體の知れないもんですね。莊子に、男が蝶になつた夢を見て、覺めてから、一體この俺は蝶が夢なのか、それともかうやつて人間になつてゐるのが夢なのかわからないと云つたさうですが、眞實にさう云へば、かうやつて今兩人で話し合つてゐるのも實は夢なので、われわれの眞實の實在は今ハンブルヒの動物園で晝寢をしてゐる豚や木兎かも知れませんね、……何だか少し變だな』

惠吉は調子に乘つて話して行くうちに、段々出鱈目になつて行くのに氣がついて、ちよつと自分乍ら苦笑を漏らして口を噤んだ。

兩人は明るい街に出た。大學の圖書館の大きな建物の角で、車の輪を轢きさうに抱へてやつて來た皆川に出會つた。惠吉は先づ帽を掛けた。

『やあ、どちらへ?』

『ちよつと圖書館に調べものがあつてね。』

皆川は笑ひ乍ら卯女子にお辭儀をした。

『山田卯女子さん。』

惠吉は紹介して、今度は卯女子に、

『皆川さん。先輩です』

卯女子も丁寧にお辭儀をした。

『又例の御研究ですか?』

『例のつて? あゝ。ハハハ、さうかも知れないです。實は鼻の事を少しばかり調べてみようかと思つてね。』

『鼻つて云ひますと?』

『これさ、君。』

皆川は自分の鼻をちよつと撮んで見せた。

『文學に現はれた鼻つて云つた事をね。ゴーゴリ、今昔、末摘む花はもとより、ショー劇に出て來るシーザーの鼻、と云つた手合です。ハハハ。相變らず閑暇でせう。ぢや又いづれ。』

皆川はもう大きい石造の建物の中に吸はれて行つた。

みぞれ降る異國の秋は更けて行く。今日も今日とて戸外には、冷たい氷雨がしとしとと裸身

になつた菩提樹の梢を濡らして降つてゐる。……今頃、日本の秋はあの透き通るやうな青空と、松茸の匂ひと、蟲の鳴き音と、そしてあの田舍家の藁葺屋根のうしろに、紅々と夕陽の下に實つてゐる懷かしい柿の色を想ふではないか。

竹林の秋は毎日灰色の空が續く。

「マントを頭から冠つて寮のホールの火鉢を取圍んでは天丼の天抜きをくれ、なんてあすこの小僧を困らせた昔が懷かしい。」

とMが書いて寄越した。Mは法科を止めて、今は醫科とヴァイオリンを半々にやつてゐる。いろいろの場面が浮ぶ。物置のやうな青木堂の二階が浮ぶ。……惠吉はかうやつて今、霖雨に垂れこめられたカイゼルダムの通りを二重硝子の窓越しに見下し乍ら、追憶の甘い杯に醉ひ伏しては、せめて、このこみ上げて來る云ひ知れぬ旅の孤愁を忘れようとしてゐたのであつた。

夕方から雨は霽つた。惠吉の心にもほんのりと溫かい陽影が射して來た。彼はいそいそとモーニングに着換へて、縞のズボンの折目をキュッとしごいた。

トルコ眞珠のネクタイピンを五六度さしなほしてから、今度は刷子を手にして墺太利製のフェルト帽を克明に拂つた。一たん腕を通した雨外套を脱ぎ棄てて、この間シェンベルヒから出來たての玉羅紗の冬外套に着なほした。慣れない肩には少し重かつたが心持紫がかつたその黑の色は、折り曲げた腕に掛けた籐のステッキの象牙の握りと、ぱつちりとした調和を見せてゐた。富士額をかくしたフェルト帽を心持阿彌陀になほすと、そつと鏡の中で笑つて、さて部屋を出た。

さしも廣いフヰルハモニーの音樂堂も、身動き一つ出來ない程の入りであつた。兩側も通路も凡そ人の立てると云ふ程の所にはぎつしりと詰つてゐた。

聽衆は今ぢいつと演奏舞臺を凝視してゐる。

伴奏の管絃樂の連中がその各々の席に着いた頃、燈火はすつかり點火されて、金色の裝飾からは古びた光を放つてゐた。

リスト、ヨアヒム、ニキシと如何に多くの偉大なる音樂家をあの光は照らした事であらうか。

聽衆のどよめきはピタと止まつた。古沼の底のやうな沈默がこの廣い場内を支配した。影繪の人物のやうに人々は押默つて數百の瞳を輝かしてゐた。

（寫眞で見たよりは、ずうつと老けてゐる。）

と惠吉は思つた。

クライスラーは今、數十人の管絃樂を前に立つたのである。

やがて指揮者のタクト棒が下る。

パイプオルガンの低い音がゆるやかに響き渡る。クライスラーは徐ろにヴァイオリンを頤に當てた。栗色のシュトラスバリュウにやはらかい電燈の光が、秋の夕陽のやうに映えた。と、忽ちみんなの耳にはこの下界の音とも思はれぬ妙なる樂の音が響いて來た。

ヴィバルディーの「司伴曲ハ長調」と云ふ曲。

人々の心にはもうこのホールも人もなかつた。たゞ彼獨りの樂の音だけであつた。庭にあふれる月の光のやうに、それは隈なく人々の心の中に流れて行つた。

灰色がかつた頭を心持向けて、天の一方を見上げるやうに凝視した彼の瞳は、潤ひを帶びて星のやうに輝いてゐた。

（泣いてゐるのではないかしら？）と、惠吉は思つた。何と云ふ氣高い尊い姿なのだらうか。

惠吉の手はその時やはらかい溫氣を感じた。彼はいつの間にか卯女子の手を握つてゐる自分を見出して、はつとした。卯女子も輕く握り返すのであつた。兩人の愛がその一點を通して電流のやうに互に通じ合つてゐるのだ。藝術の懷の中に、二つの魂は暖かく抱かれてゐるのだ。

音樂會は終つた。

人々は暫くぼんやりとしてゐた。丁度何かしら心地よい陶醉から醒めたあとのやうに、皆一樣に沾つた瞳を氣高いクライスラーの姿に捧げてゐた。急に思ひ出したやうに霰のやうな拍手が起つた。

「ウラー！」

と叫ぶものもあつた。無數の足を踏み鳴らす音が遠くの濤聲を聽くやうに響き渡つた。雪崩のやうに人々は舞臺に歩み寄つた。

白薔薇、シクラメン、菊、ダリヤの花輪の中に埋まつてクライスラーは仄かにも微笑を漂はせて、輕く皆に向つて挨拶をした。

一人の男は立上つて、獨逸帝國民が彼クライスラーに捧げる感謝の辭を述べた。電燈は一つ一つ消されて行つた。三十分、一時間、……熱狂した聽衆は今一遍彼の姿を見ようと云ふあえかなる希望に驅られて、容易に立去る氣配も見えなかつた。

芳野文雄もこの日聽きに來てゐた。混み合つた預り所で彼は山田の兄妹と今村に出會つた。芳野を見ると惠吉と山田と同時に聲を掛けた。

『良かつたですね。』

「えゝ。……」

芳野はさう答へると、そのまゝそはそはと輕く會釋した。

『さよなら。』

そして彼は外套の襟を深く立てて、流れて行く人混みの中を縫ふやうにして街路へ出た。澤山の自動車の間を拔けてやつと街角を曲ると、突きあたりの所にポッツダムの廣場の燈火が暗い夜の空を焦してゐた。

（自分乍ら突拍子もない挨拶をしたものだ。何故あゝも素氣なく別れて來て了つたのかしら？　もう少し待つてゐて、せめて地下鐵道の入口迄でも一緒に歩いて來れば良かつたのに。）

彼は會場に向つた街角のカフェ・ファーテル・ランドの入口を潛つた。街路寄りの窓の欄に近い席を見付けて、彼はそこに座を占めた。一千近くの椅子が空いてゐる事はないと云はれる伯林第一の大カフェである。以前はカフェ・ティペラリーと云つたのを、戰爭中にカフェ・祖國と變へられたのだ。

煌々と照された大ホールの中には、幾百とない卓子を圍んで、幾百組とない男女の群が周圍と關係のない談話に耽つてゐる。駈落の相談をしてゐる二人の若い戀人の隣りには、五十の坂を越した老夫婦が低い聲で穩やかな會話を取交してゐる。

會社歸りのタイピストが隣の机でせつせと、想ひのたけをとりとめもなくやつてゐる前の椅子には、獨身者がパイプの掃除に餘念がない。三人ばかりの賣笑婦が、今晩はどこの踊り場に出張しようかしらんと相談してゐる脇の卓子では、修身の先生が學校で調べ殘した答案の餘りをめくつてゐる……等々と云つた工合なのであつた。

そしてその各々は皆自分の世界の中にたてこもつてゐて、決して他人の世界へ首を突込まうとはしないのである。これが大體カフェの雰圍

氣で、つまりは西洋の社會の雰圍氣なのである。從つて芳野はこの自分にかゝはりのない周圍の華やかな渦卷の中に、却つて暢然とした閑天地を見出す事が出來るのであつた。

(靜中の靜は眞靜に非ず。動中に靜を得來りて纔に天地の神諦を識る。)

そんな言葉を思ひ乍ら、彼はぼんやり表の通りを見てゐた。三十人近くもゐる管絃樂が流行の舞踏の曲を奏でてゐる。ジンミーだ。

CAFE VATERLANDと裏返しの金文字を見せた數間四方もあらうかと云ふ一枚硝子を隔てて、表には明るい巷の上を黑い人影が默々と交錯した。その窓硝子に立てかけられた、そこの路傍の寒氣の中に坐つてゐるであらう所の癈兵乞食の松葉杖の頭を彼は妙に痛ましげな氣持で見やつてゐた。その時彼はふとそこの人混みの中に三つの姿を見わけたのであつた。

黑光りに光つた毛皮の外套にくるまつて、小股に歩いて行く卯女子の姿、そして彼女に寄り添ふやうに並んで行く今村の姿、二三歩後を少しおどんで煙草の火を點け乍ら、小走りに走つて行く山田の姿。

カフェの中には幾組かの客が、仕切りなしに出入した。その間をビールのコップを澤山お盆に乘せた給仕が身體を妙に波打たせて、燕のやうに巧みに縫ひ歩く。目まぐるしく方々の椅子から飛んで來る註文の言葉を一々間違ひもなく頭に藏ひこんで行く。

煙草、名所繪葉書、チョコレートなどを賣る娘が呼び聲を掛け乍ら、客の間に愛嬌笑ひを振撒いて行く。管絃樂は又新たな曲を奏し始めた。

(何と諧調を失した暗い自分の心なのだらうか。)

卯女子の黑の毛皮の外套の襟から、チラッと覗いたあの空色の絹の洋服の色合ひ。まぶかに冠つた帽子の下に仄かに光つた二つの瞳。それが芳野の眼からはどうしても離れなかつた。

先刻迄、若い戀人の媾曳の二つの影をうつしてゐた田舍家の白壁に、黃昏の餘光の中にしよんぼりととり殘された門の柳の影法師、そんな氣持がするのであつた。

『とり殘された影法師か。』

さう呟くやうに口に出して見て、芳野はさめかゝつたモッカを、玩具のやうな小さいコップからぐつと飮み乾した。

『ボーイさん。ビール！』

ボーイが二三間向うで點頭いた。更科の女中に劣らない頭の良いそのボーイの頭の中のメモには、ビール一つ、日本人、と書かれたのである。

二つの幻影

街の上に散り敷いては、わけて小雨降る日は侘しくも、旅人の心を涙にまで誘つてゐた菩提樹の朽葉が、石炭の乏しいこの國の寒さの中に、あらかた燃えつくして行つて了つた頃、北國に特有な重苦しい、丁度濡布のやうな雪空に一面鎖された伯林の街の上には、明るいともつかず、暗いともつかぬ、灰色の日が續くのであつた。

人の心も從つて、凍えて行くのではないかと思はれた。酒でも飮んでこの凍え切つた心をとかさなければやり切れない、そんな氣持が人々の頭の中に浮んで來る、それは冬の間の幾日かであつた。

明るい店の飾り、窓に街行く人の心を惹く仔羊皮の毛皮の外套にも、寒い冬の暗示が漂うてゐた。

富田佐一は櫻井に連れられてウヰルメルス

ドルフのとある裏街の小さな酒場に入つて行つた。酒場と云つても勿論、看板も何も出てはゐない普通の家なのである。

扉を開けて入ると、又緑色の重いカーテンが懸つてゐた。それを潜ると、煙草の煙と痺れるやうな肉の匂ひがむうつと額を打つのであつた。

そこの上の所に赤い豆電燈で「トスカ酒場」と書出されてあつた。正面の壁に大きな額がかかつてゐた。女優トスカがスカルピオを刺してゐる所の繪である。スカルピオの顔に刻まれた奇怪な怖れと悩みの陰影が物凄い迄に描き出されてゐた。

「これが、妾のあなたに捧げる接吻なのよ！」

さう下に書かれてあつた。そのトスカ酒場！

そこはもろもろの變態性慾者の群が集まる所なのである。

男裝した女、女裝した男、かげま、女を買ひに來る女、マゾヒスト、サディスト、……さう云つた人々の奇怪なる集會所なのである。

初めての人は必ず顔を反けて了ふであらうと思はれる位、醜惡な空氣がその狹い部屋の中には籠つてゐた。煙草の煙が、ただでさへ赤い提灯に包まれた電燈の光をいよいよ暗くしてゐた。衝立で區切られたそこここの卓子には抱き合つてゐる男同士、女同士。

三人の音樂師が又何となく淫蕩なチャッズをやつてゐる。

踊り狂ふもの、隣りの卓子へ酒をかせぎに行くもの、方々の机を廻つて、怪しげな小夜曲などを奏でては、チップを貰つて歩く佝僂のヴァイオリン彈き、煙草の煙。

富田は呆氣に取られて、ぼかんとして、それでも櫻井に從いて、バーの所の高い腰掛に攀上るやうにして腰を掛けた。兩足が絲瓜のやうにぶら下つて、彼は何だか腰の下が寒い氣持がした。それよりも股の短いのを女達に見られるのが恥しかつた。

『何？』

林檎のやうにと云ひたいが、とてもそんな生やさしくはない、まるでトマトそのままの赤い頬つぺたをした太つた女が、臺の向うに澤山並んだ酒の罎を横眼で睨み乍らさう尋いた。

『シャトルーズが良い。』

富田は何となく落着かないちぐはぐな氣持を追ッ拂ふ心算で呶鳴つた。

『さう？ あんたは？……』

女は今度は櫻井の方を向いて尋いた。

『え？ イロノトコ』

『ハハ、イロヲトコか。……』

と日本語で云つて、櫻井は、

『さうだな、お前の作つた混合酒なんかとてもお口にや適はないと、さ、それぢやチェリーブランでも貰はうかな。』

女は二つの罎を棚から下した。

『この間醉ぱらつた時、名前を尋きやがつたから、俺のイロヲトコつて云ふんだつて云つてやつたら奴まだ本氣にしてやがる。ハハハ……』

櫻井はさう云つて陽氣に笑つた。

女は兩人に酒を注ぐと、今度は自分のコップにその赤い眞紅な液體を滿々と注いだ。そして奇妙な獨樂のやうなものを差出した。櫻井は默つて廻す。

『プーン！』

と暫く廻つてから、段々大きく波打つて、片端が地につくと、グルリッと逆にゆらゆら搖れてをさまつた。

『六つ。惜しいわね。ぢや頂くわ』

女はさう云つてコップを乾した。

この獨樂の上には一から十迄の數字が書いてあつて、もし八、九、十の三つが出れば客はた

だ飮めるのである。それ以下の數の時はお客は女の飮んだ分も拂はなければならないのである。

『チェッ！』

櫻井は舌打ちをして、ガブッと自分のコップを飮み乾すと、默つて前へ差出した。女も默つて笑ひ乍ら、又赤い液體をタラタラと注ぎこんだ。

『又、吸つて來たのか？　え？』

いゝ年をして白粉をこつてりと塗つた後家さんらしい變な女の相手をして、酒を飮んでゐたにやけた男が、部屋の隅のカーテンを開けて出て來た若い女を捕へて尋いてゐた。

カーテンの背後は暗い細い廊下を傳つてどこかに通ずるやうになつてゐた。

『阿片窟があるんだよ。……』

櫻井がそつと富田の耳に私語いた。

『どうだ君、一つ行つて見ないか？』

『いゝや、そいつあ困る。』

流石、富田も頭を搔いた。

『君、こゝに飼はれてゐる女はね、皆んなどつかから誘拐されて來た女なんだ。初め阿片を無理に喫はせると、もう決して逃げないさうだ。

新嘉坡あたりの支那人の娼家がさうだつてね。それに君、あの廊下を入つて行くと、いろんな變な拷問部屋があるんだよ。女が一人づつ附いてゐる。どうだい君、金拂つて一つ毆られて來たら。ハハハ、、。』

さつきのにやけた男はまだ若い女を捕へてからかつてゐた。

『どんな夢を見た？　え？　話せよ。どうせ惚けは覺悟だ。』

『何云つてるんだよ、この人は。吸つてなんか來るもんか。』

その女は大分お酒の方が廻つてゐるらしかつた。

ほんのり上氣した額、潤ひを持つた瞳。亂れ毛を五月蠅さうに後方へ振上げ乍ら、スカートのポケットに兩手を突込んで、外股に開いた兩足の爪先と、踵で、代りばんこに調子を取つてゐた。

『ぢや拷問かい？』

『いゝえ、はゞかり。』

『何だ、便所か。何して來たんだ？』

男は猶しつこくからかつてゐた。

『うるさい人だね。カイゼルだつてなさる事だわよ。ホホホ、、、。』

女はヒステリックな笑ひを殘して、又カーテンの背後の暗がりに消えて了つた。カーテンの綠色が煙草の煙の中に搖れてゐる

後家さんの御機嫌は可成斜めらしかつた。

バーの後方の卓子で西洋將棋をやつてゐた大柄な女がいきなりやつてきて、櫻井の頰に接吻をした。

『やあ、オッシーか？』

と云つた。聲は低音である。この家の主人なのであつた。

『ワルター來たかい？』

櫻井が尋いた。

『おゝ、こゝにゐる。』

そこの卓子で向う向きにトランプをやつてゐた男が振向きもしないで答へた。

『どうだ？　景氣は。』

櫻井が振向いて聲を掛けた。

『駄目だ。Gluecklich in Liebe, ungluecklich in Spiele.（戀に良けりや、賭けは駄目。）つてね。』

牌を敲きつけるやうに置いて、ポケットから馬克の札を良い加減に出して、無造作に相手に渡すと、そのまゝ、ワルターと呼ばれた男は立上つて來た。

色の白い綺麗な顔に、うつとりとした眞青の眼を持つてゐた。がしかし、時々その深まつた瞳の奥をチラッと蛇の舌のやうに、或る不可解なつめたさの陰影がさすのであつた。紅を塗つたかと思はれる、赤い薄い唇のあたりに、輕い微笑を浮べて、その男は手を差出した。縮れ毛を大きく波打たせて櫛目が綺麗に揃つてゐた。紫色の絹ハンケチを捲いた襟首の所に刀の痕だか、黒味がかつたひつつれが生々しい。燐寸を擦つた左手の藥指か一本足りないのを富田は見た。

『おいワルター！　富田さんだ。……』

と紹介して、櫻井は口を切つた。

『この方が今晩、「一夜の寄席」へ行かれ度いつてんだ。何處にある、今夜は？』

『今晩は。富田さん。……』

ワルターは剃り立ての青面に、一ぱいタルカンの白い粉を浮かせた片眼に皺を寄せて、變な笑ひ方をした。

『今夜は、ノイマンとこと、クルツの家にあるかね。』

『何處でも良い。まあ一杯やれよ。』

富田も絲瓜をやつと地面に着けて、三人は卓子を圍んだ。

富田はどうも氣が負けてならなかつた。

櫻井と交際つてゐるのが一番氣が置けなくて、暢氣だつたのでついつい惡いと知りつゝも、彼に引摺られて行く自分を見出すのであつた。が櫻井の顏を見ると、何もかも安心して從いて行けさうな氣もするのであつた。

それに、酒が富田の心を大きくした。三人とも相當に醉ひが廻つてゐた。

便所に立つた富田は、手洗ひの前にある鏡の中に、眞赤な自分の顏を見た。ハンケチを取出す拍子に、ふと堅い封筒が手に觸れた。出しなに受取つてあつた妻からの手紙であつた。彼はネクタイピンで封を切つて讀んで見た。

それには道子が見違へる程大きくなつた事、身體を大切にしてくれろと云つた事か、いつものやうにくだくだと書き連ねてあつて、終りにもつて行つて、云ひ惡いが若し都合ついたら、五圓でも、十圓でも良いから送金を少し増してくれと書添へてあつた。道子の物要りが案外かかるからとも書いてあつた。

富田は手紙を丸めるとそのまゝ床へ捨てて了つた。

卓子に戻つて來た時、櫻井は丁度ワルターに頼んでゐた。

『約束だから今日は一つ、富田君に女を世話しなけりやいけない。どうだ、アンナは？』

『あれなら良いでせう。おとなしいし……』

ワルターが賛成してゐるらしかつた。

『おや、君濟まないが、ちよつと電話で呼んで見てくれんか？』

『えゝ。』

ワルターはもう立つて行つた。ワルターがバーの背後の扉の中に消え去ると櫻井が云つた。

『あいつは有名なゴロですよ。この前、いつだつたかの新聞に出てゐたでせう、ほら、ノールドリングで女の贓品を作つてゐた所を擧げられたつて。あの時の一味なのさ。もう二三度臭い飯を食つてるんですよ。』

富田は何だか恐ろしい氣がした。

『大丈夫ですか？』

『何？　ワルター？　ハハヽヽ、あゝ云ふ連中はね、君、一たん仲間になつて了ふと案外おとなしくて義理堅くて、親切なものさ。』

『僕も仲間なんですか？』

富田は頗る心細い聲を出した。

『いゝや、そりやお勝手ですが。』

兩人はちよつと默つた。

富田は變なにほひが鼻について、それが何處の

にほひだか考へてゐた。
『どんな女です？　アニタつてのは。食ひつきやしませんか？　何だか恐くつてね。』
『ハハハヽヽ。』
櫻井はさう一しきり笑つてからさて云つた。
『そんな了見ぢやとても出世しませんな。女なんて、君、シーソー見たいなもんでさあ。下から出りやつけ上り。だから、こつちから高飛車に呑んでやりや、すぐ下つて了ふんだ。
（女なんてもんはいつでも何かしらに、導かれて、支配されてゐるものが要る。もし彼女が若かつたら戀人に、もし年をとつてゐたら僧侶に。）つてあのシッーペンハウエルが女に就いて云つてますよ。なーんて。これでもKの哲學概論位讀んでまさあね。憚つちん乍ら、濟まねえが、……ハハ。何でも圖々しくやツつけるんですな。それが一番の近道さ、君。』
『まあ、追ひ追ひ、御教示を仰ぎますかな。でも私や何だか女つてものが、てんで解らないんでね。全く謎ですな。』
『ハハハ、初心らしい事を云ふな、君は。女を謎だなんて云つてゐるうちはまだ可愛らしい。
（女に就いて最大の謎は、何故女が謎であるか、と云ふ事だ。）つてあの皮肉屋のショーが云つてるぢやないか。ベルレーンだつて、女を謎にして了つたのは男の罪だつて怒つてまさ。女なんて實際缺點だらけの玩具さ。だつて君、考へても見給へ。若しほんとに女が詩人の賞め讃へるやうな立派なものだつたなら、あの神様がどうして、おめおめとアダムになんか與へて了ふもんですかね。さうでせう？　誰やらの不思議がるのも無理はありませんやね。』
富田は默つてこの該博なる（？）櫻井の婦人論を傾聽してゐた。
ワルターが戻つて來た。
『來る？』
『うん、來る。』
三つのガラスの音がした。傴僂のヴァイオリン彈きがやつて來て、又例の怪しげな小夜曲を彈き出したが、ワルターに睨まれて、あつちへ行つて了つた。
先刻の後家さんの御機嫌は、まだ「ピザの斜塔」の如く斜めであつた。にやけた男は頻りと、その後家さんの、クルリと捲いて小さな輪にして、額の上に垂れてゐる縮れ毛をなほしてやつてゐた。――後家さんはニコッと笑つた。にやけた男は重荷を曳いてやつと坂の上に上り着いた男の如く吻とした。
兩人は立上つた。
兩人は踊つた。
それはフオックス・トロットと云ふよりもオックス・トロットに近かつた、それでも兩人は幸福であつた。各々別な意味で幸福であつた。
やがて表のカーテンの間から可愛い女の顔が出た。もやもやとした煙の中を一通り見廻してから櫻井とワルターを見付けると、その女はニコッと笑つてカーテンを開けた。
割に小柄な、どこか人懐つこい金髪碧眼の娘であつた。鼻がちよつとしやくれて、眼の間が少し開き過ぎてはゐるが、それが却つて愛嬌になつてゐた。
大きなぱつちりとした眼、長い睫毛、まあその邊は申分ない方であつた。上唇と下唇が綺麗なソリを見せて、丁度蘆の湖に映つた富士と倒富士の對稱を示してゐた。――先づ一眼惚れに惚れても不足はない女であつた。
『今日からあなたの奥さんです。どうぞ末永く可愛がつてやつて下さい。アーメン……』
机の上のトランプを聖書代りに、ワルターは牧師の眞似をした。
『さあ、この方がお前の旦那樣だ。』
アニタはいきなり富田の膝に腰かけて、接吻

した。富田は呆氣にとられて苦笑した。
「それそれ、シーソーのこつですよ。」
櫻井が笑ひ乍ら注意した。
南獨逸の山奥の、小村の工場で造られて、花の都で時を告げる鳩時計が、「ぽつ、ぽつ、ぽつ……」と十二鳴つた。
「どーれ、行かうか？」
蓋を開けては、「ぽつ、」と突出す木彫の小鳩を見上げ乍ら櫻井が促した。
あとの三人は默つて、返辭の代りに立上つた。
あらかたの客は、あすこのカーテンの背後の暗い廊下の奥に消えて了つたのだらう。赤い提灯が奇怪な夢の中に光つてゐた。
バーの女は手の甲で欠伸の蓋をしてゐた。對手を捕へそくなつた女が珈琲の代を澁々自分で拂ひ乍ら、笛吹の音樂手を相手に浮世を呪つてゐた。笛吹は自家に待つてゐる若い細君の脣を考へてゐた。
仄暗い星月夜の空の下に四人は吸はれて行つた。櫻井と富田。アニタとワルター。
「フイッ！」
ワルターが手を擧げた。居眠りしてゐたタクシーの運轉手は、はつとして目を覺した。見殘した夢の續きの口惜さを、いきなり唾に吐き出してガタンと扉を押し開けた。
（折角女房とさし向ひで、煙の上つた鴨鍋を、七分三分に食べてゐたのだ。）
流石、人通りも途絶えた裏街の暗い建物の下を、燈火をおとしたそのタクシーは、右へ左へと丁度水すましのやうに曲りくねつて進んで行つた。富田にはもう何處へ行くのやら、東西の見きはめもつかなかつた。
「僕は良いけど、君はまだ初めての人だから、かうやつて所を秘して行くのだよ。」
怪訝さうに窓の硝子越しに、街の角々を見透してゐた富田の耳に櫻井が耳語いた。
車窓の外には、すべての森羅萬象の存在を否定し去る、黒い眞黒な漆の夜が漲つてゐた。夜は偉大なるニヒリストだ。
「大丈夫ですか？」
富田は振返つて尋いた。
「なに、大丈夫さ。中々警察にや知れないやうに、今日は譃の家、明日は何處と、ちやんとやつてゐるんだから、知つてる奴は極く少數さ。盛り場の街に出て椋鳥を引張つてゐる客引と、專門のタクシーマンとそれ位のもんさ。又よしんば手が入つたつて、そこはちやーんと、高い酒の代を取られたから、それ位の[illegible]は何處も心得てゐる。案外客を大切にするもんだよ。それに警察の方にだつてちやんとスパイがやつてあるんだから、……」
櫻井は頼りと說明してやつた。
富田はよくあるフリードリッヒ街あたりのちよつと小暗い横街の角で、「煙草！ 煙草！」とお縫ひのレッテンに急にアクセントを着けて、小聲に呼んでゐるその客引なるものの存在を頭に浮べてゐた。
とある小暗い街角で、タクシーは音もなく停まつた。ワルターに續いて皆んな下りた。やがて閑かな爆音を殘してタクシーが向うの闇に消え去ると、ワルターは注意深くあたりの樣子を窺つた。丁度そこの街角から曲りなりに通つてゐる暗い狹い露路の中に、彼は默つて歩き出した。三人は四間の道を、これも默つて從いて行つた。アニタは早く、富田に纏つてゐた
一軒、二軒、三軒……奇妙な無音の行列は影のやうに動いて行つた。やがて六軒目の家の前でワルターは止まつた。彼はもう一遍あたりの

様子を窺つてから注意深く側戸の電鈴をそつと押した。

徑一寸位に硝子の嵌つた覗き穴が向うにギロりと片眼が光つた。ワルターは默つて指を三本その穴の口の前に突出す。やがて冷たい鍵の音があたりの寂寞を破つて、すうつと音もなく扉が開いた。

三人はワルターに從いて吸はれるやうに内部の闇に入つて行く。門番は懷中電燈でさつと皆の顏を照らした。富田は狼狽てて瞬いた。照り返しの仄暗い光の中に、眇眼の老人がぢいつとこつちを凝視めてゐた。

丸い光の點は廊下の壁を滑つて床の上に落らると、そのまゝ、ゆらゆらと動き出した。皆んなは默つて從いて行く。

暗い中庭を横切つて行つた。星の少い黒い夜の空が建物に區切られて、頭の上に四角に見えてゐた。

裏の家の扉を又開ける。暗い廊下を靜に云はれたともなく皆押し默つて、跫音を忍ばせて曲り乍ら何でも二階程上つて行つた。

門番の老人はそこの家の戸を輕く叩いた。内部から答へた。老人は何か嗄れた小聲で喋つた。戸が音もなく開く。四人は又その中に吸はれて行つた。

酒手を貰つた老人は、今度は懷中電燈も點けずに眞暗な階段を又とぼとぼと下りて行つた。

・

四人が通された部屋の中は、今迄の陰慘な暗さに比べて何と云ふ明るさ、華やかさなのであらう。土鼠が陽の光にあたつたやうに、富田は目が眩むやうな氣がしたのであつた。

三間ぶつ通した廣い部屋の中には煌々と電燈が點火されて、その光の下に輝いてゐるソファと云ひ、絨氈と云ひ、皆極上の品が使つてあつた。紫色の壁には豐艶な肉體の浮き出すやうな、まるで浮彫かと思はれる位の油繪の額が懸つてゐた。

そこに置かれた卓子を取圍んで、もう幾組かの客が集まつてゐた。男の膝に腰かけてゐる女、煙草を吹かしてゐる女、皆んな柘榴のやうに眞紅に塗つた脣を開いて、何か陽氣に喋つてゐた。

四人は程よき隅のソファに座を占めた。もう二人ばかりの女が寄つて來て煙草を強請んだ。三鞭酒をぬく音が景氣よく鳴つた。いろいろな形のコップが滿ちたり空になつたりした。

（こんなに飲んで良いものか？ 何云つてるんだい。考へるなんてことは、この世の中で全く不要なことぢやないか。」

そんな氣持であつた。

忽然としてあたりの電燈が一時にはつと消えた。と、部屋の眞中に丁度四疊半位の場所が、紅い照明燈の下に照らし出された。

タクシドを着た一人の男が皆んなに告げる。

「お集まりの淑女並びに紳士諸君！ こゝに御覽に入れまするは、お馴染みのすゞが[illegible]ッシアンバレー。題しまして「阿片吸飲者の夢」、

その男は丁寧にお辭儀をして引つ込んだ。

部屋の隅の樂屋口の綠色のカーテンがさつと開いた。二人の男が現はれた。青と緑の支那服を着て、兩手を袖の中に組合せたまゝ、皆んなに向つてペコペコと禮拜した。やがて[illegible]な足取りで眞中の紅い光の輪の中に入つて來る。紅服はいよいよ紅く、青服は紫色に[illegible]。兩人はそこで又一しきり奇妙な舞ひを舞ふ。[illegible]終ひに向ひ合つて胡坐をかいた。

一人の子供がこれも支那服を着て、[illegible]のやうなものを兩人の前に置いて、又引つ込んで行く。二人の支那人はそれから出たパイプを貪るやうに吸ふ。やがて彼等は胡坐をかいたま

ま、突つ伏して眠つて了ふ。
照明燈が青く變る。
すると又中間のカーテンがさつと引かれて、今度はうら若い綺麗な少女が、薄紗に身を包んで、玉のやうな素足を小股に刻んで、舞臺の中に走り出た。彼女は足を折り曲げて、薄紗を兩手に撮んで丁寧にお辭儀をした。
拍手の音や、いろいろと聲をかける人もあつた。胸にさした薔薇の花が方々から飛んで來た。少女は一つ一つ取上げては接吻をして、滾れるやうな愛嬌笑ひを振撒いた。
つと少女は立上つた。見る間に彼女の身體は獨樂のやうに廻り始めた。兩の腕が蛇のやうにうねる。
照明燈が消えて、さつとスポヨトライトが彼女の身體だけをくつきりと闇の中に浮き出させる。彼女はベールを一枚脱ぎすてた。二枚、三枚……さうして最後の一枚、――それはサロメと同じ七枚であつたが、――その一枚がクルリと身體を滑り落ちると、そこには月光を浴びた水女神のやうな怪しくも美しい女が微笑んだ。凄艶とでも評しようか。
やがて女の身體は異樣に動き始めた。水に洗はれた人魚の肌を想はせる滑らかな膚の上に、青白い光が映えてゐた。女は奇怪な踊りを舞ひ續ける。
富田の醉眼には青い光を浴びた女の身體が、眞裸體のその膚が、蛇のやうにうねるその腕が、ふくよかなその乳房、腰、腿、足、……光は又紅に變る。紫、綠、赤……煙草の煙、三鞭酒、香水、アニタの腕。
未來派の畫を見るやうな、或は又古倫母のライスカレーを食べた後のやうな、いろいろの印象が渾沌として、生き乍ら酒精に漬かつた富田の腦味噌の中で亂舞した。
富田が又例のタクシーで良い加減方々引廻されて、とある四角で通りかゝつた辻馬車に移された時は、氣儆しの所爲か街の外れの空がぼんやりと白みがかつてゐた。
道路なほしの工夫が、もう薄暗闇の中で默々と働いてゐた。馬の蹄の音が氷りついた鋪道の上に高く響いた。
富田は自分の脇に凭りかゝるやうにしてゐるアニタを見た。蒼白いその額の上には寢不足と、無理酒の醉ひの疲れが痛ましくも讀まれるのであつた。彼女はそれでもにつこりと微笑んだ。その瞳は潤んでゐた。
(泣いてゐるのだ。)
富田には何故かそんな氣がした。
『ねえ、トミタ。……』
突然アニタが口を開いた。
『あたし、なんだか何もかもあなたにお話しして了ひ度いやうな氣がするのよ。そして思ひ切つて泣いてやり度いやうな氣がするの。』
そこで彼女はちよつと口を噤んだ。富田は何だかしんみりとした氣持に落ちて行つた。
『初めて會つたあなただけど、これからずうつと可愛がつて下さるのだわね。だから初めから、いつそ何もかも、すつかり話して了つた方が、あたし、良いと思ふのよ。聞いて下さらない?』
アニタはぢいつと富田の顏を見上げた。
『そりや虛言だとお思ひになればそれ迄だわ。どうせこんな女ですもの。でもまあ、湯上りの寢そべり煙草に、藁紙本の小說でも讀む位の氣で聞くだけは聞いて下さらない? ね? トミタ!』
彼は默つて點頭いた。そして優しくアニタの手を取つてやつた。
『何處から話して良いのやら、……』
と、ちよつと口を切つて、彼女はしんみりと

語り出したのであつた。

黎明の街の靜寂を破つて、馬車を曳く痩馬の背に悲しく鞭の音が響いて行つた。酔醒めの額に心地よく微風が吹いて、馬車は、テイヤガルテンの森の下道を走つて行つた。

リューベックの町外れ、川沿ひの片側街に、一軒の時計屋の店があつた。シュレーダーと書かれた大時計が、その軒邊には懸つてゐた。

『シュレーダーの時計が五時をさす。そろそろ夕餉の支度に取りかゝらう。』

などと近所の主婦さん達の重寶になつてゐるのであつた。

昔ながらのこの古い町の中には、昔ながらの平和な生活が續いてゐた。

時計屋の主人夫婦はもう中年を越した人の好いお揃ひの夫婦であつた。いつもにこにこと働いてゐた。夫は一日中、日當りの良い窓の所に机を寄せて、細い時計の機械を覗いては蟲眼鏡とピンセットを動かしてゐた。主婦さんは又一日中手を濡らして、洗濯ものを裏庭に張つた繩にひつかけてゐた。でなければ大きな樽を膝の上に置いて、馬鈴薯の皮を剝いてゐるのであつた。

彼等は What? と云ふ事を知ればそれでもう滿足してゐた。How? とか、Why? とか云ふ事は、彼等にとつて全く無用の長物なのであつた。

昔からの習慣とか、古い人の言葉とか云ふ事を無條件に尊重し、受け入れて行くのであつた。

百年前の乞食の使つた茶呑茶碗は、昨日作つた金盃よりも彼等にとつて尊いものなのである。

そして何よりも神を畏れた。凡そ、神の御心に反くと思はれるものを、決して彼等は許容する事が出來なかつた。そして何でも、出來上つた範疇の中に、定規の中に、靜かに暮して行く事が、最も神の御心に副ふものと心得てゐた。全て突飛なる事、變つた事、新しいもの、それは、惡魔に淩はれて了へ！　なのであつた。

アニタはかう云ふ兩親の下に育つて來た。

彼女は一人娘であつた。近所の人々に幸福者と云はれる位に彼女は可愛がられて來た。可愛いお人形を買つて貰つて、毎日お茶の時にはチョコレートを食べさせて貰つた。日曜日毎に彼女は綺麗な外出着を着て、手を引かれて、セント・マリヤの教會へ連れて行かれた。

かうやつて彼女はとに角幸福に育つて來た。

そのうちに彼女は町の女學校に入れられた。

冬木立の校庭の路を、暖かい太陽の光をさがして、彼女は友達と手を繋いで散歩した。かうやつて家を離れたこの女學校の寄宿舍生活は、彼女にいろいろの新しい事を教へて行つた。

彼女は小説を讀む事を覺えた。多情多感の處女の胸はもの毎に戰いた。

休暇となつて自家へ歸る度に、彼女は自家の空氣の單調さを感じ出した。彼女は三年の時又自家へ引き取られた。兩親の眼には、學校生活は彼女を彼等の平和な世界から奪つて行くやうな氣がしたのである。

自家に歸つて來た彼女は、もう以前の幸福な彼女ではなかつた。兩親が與へようとする幸福は彼女にとつて無駄であつた。桃の花を蟲が食ひ入るやうに、倦怠が彼女の心を蝕んだ。教會へ行く彼女は手の中にそつと、マノンを忍ばせて行つた。そして歸りにはきつと遠廻りをして、町の圖書館の門を潜るのであつた。渚の砂が海水を吸ふやうに、彼女はあらゆる小説を貪り讀んだ。

寝室のカーテンを透して明方の仄明りのさし込む頃迄も、彼女は暗く包んだ枕もとの夜燈のかげに、何度熱い泪を注いだ事であらうか。枕の布がぐつしよりと濡れて了ふ事もあつたのだ。小説は彼女にとつて、「窓」のやうなものであつた。そこを通して彼女はこの世の中の動きを見守つた。

かうやつて彼女の心は一日々々と自家の空気から遠ざかつて行つた。両親は又淋しい眼でそれを見てゐた。が、さてどうする事も出来なかつた。

或る冬の晩である。ドレスデンの歌劇団が一座を連れてこの町へやつて来た。

そこの泉に水を汲む、主婦さん達の口の端にも、カフェの隅にビールを飲み乍ら、西洋将棋を打つ老人達の間にも、いろいろと噂が上るのであつた。

この前、と云つても、もうかれこれ十六年も前の話ぢやが、あの頃のフォイエルマンは素晴しいもんぢやつたが、もうあれも大分よぼぢやらうな、と云つた工合に。

アニタも友達のガートルードに誘はれて、一晩見に行つた。ガートルードの家に、興行中部屋借りしてゐるその座の一人に切符を貰つたのであつた。その男はルドルフ・ミュツラーと云つた。その日オイゲン・オネギン」のレンスキーを歌つた。

アニタは時々ガートルードの家で一緒にお茶を飲んだりした。

そのうちにどうした事かミュツラーの透き通るやうな次中音の声が、彼女の耳を離れないやうになつて了つた。

「いづちへか、いづちへか、
あはれ消え果てしぞ!
青春の時代。戀の歓喜。……」

黄昏せまる窓邊に凭つて、暮れて行く街の燈火を見てゐると、あの雪の原に星を仰いで歌ふレンスキーの唄が、夢のやうに彼女の耳に響いて来た。

彼女は足繁くガートルードの家に遊びに行くやうになつた。気の利いた男の話振り、その口許、手つきに、ぼんやりと見とれてゐる自分を、よく見出しては、彼女は独りはつと頬を紅める事もあつたのだ。

彼の男の口から漏れて来る、いろいろの世界の事が、彼女の心を丁度磁石のやうに惹きつけて行つた。彼女は自分が小説の女主人公にならうとしてゐる事に気がついた。

星の降る夜道を、川沿ひの並木沿ひに、川風に吹かれて二つの黒い影を、街燈の光がほんのり照す事も度々あつた。

かうやつて一年や、た[illegible]歌劇団の一座が再びドレスデンに向けて出発した汽車の中に、可憐なアニタの姿を見受けたのも、それも運命の遊戯であつた。

両親の驚愕と怒りは云ふ迄もない事であつた。自分の娘が、此の上もなく親の期待に反いた事を為出かして了つたのだ。自分達の今迄の夜毎々々のお祈りも、日曜日を欠かした事のない精進も、決して償ふ事の出来ない大それた事を、自分の娘が為出かして了つたのだ。——彼等は初めて、自分達の老年の行先を見た。

この静かな町の中には、丁度古沼に投げられた石のやうに、アニタの噂が、まるで[illegible]と同じ位の勢を以て語られて行つた。

が、しかし、やがていつの間にかその波紋もをさまつて、又以前の静かな平和の生活がこの古い町の上に拡がつて行つた。

シュレーダーの主人は相変らずピンセットで細い歯車を摘んでゐた。主婦さんは相変らずせつせと馬鈴薯の皮を剥いてゐた。

ただ、その歯車の上に、馬鈴薯の上に、そつ

と吐かれた溜息が、庭石にあたる春の淡雪のやうに消えて行くのを、知る人とてはなかつたのである。

Dresden！

こゝは又何と云ふ目まぐるしい生活なのであらうか。

朝夕通ふ職工の群。工場の汽笛。煤けた街の雑音。――アニタはもう決して、あのリューベックの澄み切つた蒼空を見なかつた。兩人の生活は決して彼女の幻とは合致しなかつた。ルドルフが手眞似混りに話して聞かせた、そんなものでもなかつたのだ。

毎日は洗濯のソーダと、臺所のバタのにほひに暮れて行つた。彼女は歌劇さへ滅多に見る事はなかつた。夫は彼女を劇場で見る事を殊に嫌つた。夫が夜を空ける日がやうやく續いた。着物も脱げない位に醉つて歸る夫の洋服の釦に、鳶色の縮毛がクルクルと捲きつけてあるのを、淋しく凝視め乍ら、アニタの眼のうちはいつの間にか熱くなつて行くのであつた。

ルドルフがリューベックで買つて來た紫紺のネクタイは、いつの間にか捨てられて了つた。

――丁度彼女の運命の先觸であるかのやうに。

そのうちに彼女はいつか肩で息をする身になつた。そしてその頃から夫の態度はますますこじれて行つた。

口を利けば兩人は口論であつた。さうしてたうとう夫は身重の彼女を捨てて、鳶毛の女と手を取つて遠い遠い海のあなたの國へ移つて行つて了つたのである。

それは丁度彼女がリューベックを捨てた時から一廻りした冬の或る日、エルベの面を吹いて來る川風がひやりと身に沁みるやうな寒い日の事であつた。その日は朝から冷たい氷雨がしとしとと冬枯の並木の上に降り注いでゐた。

アニタは身のうちに幽かに動く兒の事を思ひ乍ら、まだ買ひ入れてない石炭の事を考へてゐた。もう燈火を入れても良い頃だとは思つても、さて立つて行くのが億劫であつた。

（夫は今頃あの明るい樂屋で、白粉でも塗つてゐる事だらう。又今晩は晩いのだ。――自分だけなら御夜食を一かたきぬいても良い。）

そして彼女はこの二三日妙に優しくしてくれる夫の事を想つてゐた。

（夫もやつぱりこの兒の事を考へてくれてゐるのかしら？）

さう思つて彼女は脇に置いてあつた編掛けの子供の着物を取り上げた。丸い毛絲の玉が彼女の膝を滑つて、ころころと、絨氈の床の上を轉がつて行くのを、彼女はぼんやりと見送つてゐた。

丁度その時であつた。宿のお婆さんの輕い叩音が聞えて、彼女は重い一封の手紙を渡された。お婆さんは點火器を捻つて又出て行つた。

アニタは急いで封を切つた。

それには獨逸の札で少しばかりと、あとドレスデン銀行宛の小切手が入つてゐて、一通の手紙が添へてあつた。

讀んで行く彼女の瞳を傳はつて止めどもなく流れ落ちる涙の玉は、絨氈の上に音もなく吸はれて行つた。丁度窓の外に降りしきる小雨のやうに冷たい泪の雫。その窓を通して町の灯が二重に潤んだ彼女の瞳にあつた。

アニタは帽子を取つて表へ出た。

彼女は今、何にも考へてはゐなかつた。泪ももう乾きつくしてゐた。彼女はたゞ二三間先きを凝視め乍ら、憑かれた人のやうに、燈火の入つた街を歩いて行つた。人にぶつからないのが不思議な位であつた。行き逢ひなりに皆んな振返つて行つた。

（停車場へ！）

それだけが彼女の頭にはあつた。

人の一杯混み合つてゐるあの大きな停車場の雜沓、しかもいつ出發するともわからない夫をそこに見つける事は、それは太平洋の眞中で釣絲を下すやうなものであつた。
　彼女は長い橋を渡つてゐた。
　彼女の足はもう云ふ事を聞かなかつた。丁度、停まりかけた汽車の中を、逆に歩いて行くやうに、彼女の足は重く澁るのであつた。
　彼女は立止まつた。そして濡れた石の欄干に身をもたらせると、そのまゝ放心の瞳をぢいつと川の面に落した。そこには黒いエルベの流れが、音もなくその行きて歸らざる永劫の動きを續けてゐる。肌寒い川風が蕭々として彼女を包んだ。
　兩岸の灯が水に碎けて黄色い惡魔が踊つてゐた。それが自分を招いてゐるやうにも見えた。そこに立つてゐる橋燈の光の前を過つて、細い絲のやうな雨脚が見えた。
『ルドルフ！　ルドルフ！……』
　深い溜息と共に幽かに彼女の脣を漏れて行く悲しい叫びは、あはれこの冷たい夜の空氣の中にあてもなく溶けて行く。そのまゝ脣は痙攣つたやうに戰いてゐた。
　彼女は又黒い水を見た。彼女は濡れた石の欄干から身體をのめり出すやうにして足を掛けた。
　彼女は鋭い叫び聲と、慌しい人の跫音を聞いた。そして肩の所に力強い握力を感じた。
　彼女の眼の前の欄干も、橋燈も、ぐらぐらとして、あたりは暗い霧の中に消えて行つて了つた。
　氣が付いた時、彼女は町立施療病院の白い寢臺の上に寢かされてゐた。そして間もなく彼女はそこで男の子を生んだ。それはオットーと名付けられて、直ぐ町の育兒院に引取られた。
　夫が殘した百圓足らずの金は、それやこれやいつの間にか飛んで行つて了つた。彼女は家具や身のまはりのものを、洗ひ浚ひ賣り飛ばして、やつと旅費を拵へて、そして伯林へ出て來たのであつた。それは彼女が十九の年であつた。
　彼女が伯林で今のやうな女になつて行つたのも、最も自然な事の運びであつたのだ。
　悲しい追憶に噎び返るやうに、アニタは深い溜息を吐いた。古い苦い杯をもう一遍飲んだのであつた。
　彼女は長いこと默つてゐた。富田も默つてゐた。やがて又アニタは獨り言のやうに囁け始めた。
「オットーがあたしのたつた一つの望み。まあ譬へて見れば、あたしをこの歎き醜い世の中に繋いでゐてくれるたつた一本の銀の絲ですわ。あたし、毎月お金を送つてやるの。」
　そして彼女の顏にはチラッと明るい影がさしたのである。
「でも、もう三つになるのよ。あたしもそろそろ足を洗はなくつちやね。……あたしタイプライターでも習はうかと思つてるのよ。」
　彼女はちよつと口を噤んだ。大きな眼の底を又暗い雲が走つて行つた。富田がぢいつと自分の方を見てゐると悟ると、急にその眼に無限の媚を湛へて、見上げるやうにして囁いた。
「でも、あなただけは別よ。私の戀人なんですもの、ね？　さうでせう？」
　そして彼女は微笑んだ。しかしその微笑は餘計富田の心を暗くした。觸られた古傷の痛みがありありとその中に漂うてゐた。
　馬車はいつの間にかティヤガルテンの森の中をぬけてゐた。もう黎明の光がそこはかとなく

忍び寄つてゐた。一番電車が一人も客を乘せないで向うの角を曲つて行つた。レールの軋音が空の街に妙に甲高く響いて來た。

『今度はいつお會ひするの？ え？ トミタ。』

沈んだ顏をしてゐる富田の樣子にアニタは甘つたれるやうに身を寄せた。富田はやつぱり默つてゐた。

『怒つてるの？ え？』

『怒つてやしないよ。』

『そんなら良いけど。あたし、あなたに捨てられたら、今度は眞實に死んで了つてよ。』

アニタの聲の中には不思議な眞劍さがあつた。

（今日、初めて會つたばかりぢやないか？）

富田はそんな事を考へてゐた。

『あのね、トミタ。今度はオリーも一緒に招んでくれない？』

『何だい？ オリーつて。』

『さうさう、まだご存じなかつたのね。今あたしと一緒に住んでる女なのよ。』

『さうかい。ぢや招んでやらう。』

『えゝ、嬉しいわ。あたしの姉さんみたいなんですもの。……電話知つてゐる？』

『うゝん、知らない。』

『まあ、隨分不親切ね。リュッツォ、六六二八よ。「フロウ・フロウ」つて踊り場にいつでも來てゐるわ。ね？』

アニタはいきなり富田の頰に接吻けた。

馬車はやがて富田の宿の前に止まつた。彼は降りた。馭者に、アニタをもう一度彼女の家迄送り屆けるやうに云ひ付けて、大よその金を渡した。

『もう大丈夫？』

『あゝ。ぢやお就寢。』

『まあ。もう朝よ、お早うだわ。』

アニタは又接吻して馬車に乘つた。

辻馬車が街の角を曲つた時、アニタは聲を掛けた。

『ちよつと、馬車屋さん。ちよつと。』

馭者は『チッ、チッ』と舌打ちして馬の足を緩めた。

『何か用かね？』

振向いて馭者臺の上から訊き返した。

『あのね、あたい、ちよつと用があるから、もうこゝで良いんだよ。さつき貰つたお金を少し返しておくれ。ね？』

『それでも良い。』

馭者は手綱を締めた。革の手袋を脱ぐと外套のポケットから、さつき富田に貰つた金を無造作に引張り出して、そのうちの何がしかをアニタに渡した。

『もう少しおよこしよ、ね？』

『駄目だ。』

『良いぢやないか。吝つたれだね。』

『駄目だよ。』

『ぢや、良いや。』

アニタは受け取つた金を靴下の中に突つこむと、そのまゝスタスタと電車の停留所の方へ歩いて行つた。膝掛を取つた足の下からしんしんと朝の寒氣が沁みて行つた。

長い街の向うから、ゴーゴー云はせて一臺の電車が走つて來た。

重い頭を抱へて富田は大きな梯子段を一段一段と踏みしめて行つた。頭が破れるやうにズキズキと痛んだ。

自分の部屋に入ると、彼は先づ冷たい水を一杯ぐつと飲み乾して、それから上着を脱いだ。その拍子に革の紙入れがポケットからガタリ

と床の上に滑り落ちた。拾ひなりに彼はちよつと開けて見た。この間ハンブルヒの正金銀行で換へて來た磅の殘りが、かれこれ五六枚はあつた筈なのに、それは、もう跡かたもなく消えてゐた。

彼は悪夢から醒めた男のやうに頭を振つた。搔挘るやうにして、カラを外して、ズボンを引つ張つていきなり寢臺の中に潜りこんだ。

仰向けなりに白い天井を見てゐると彼の目の前には怪しい幻影が渦を卷いた。

アニタの顔が三つも四つも彼を見下して訴へてゐる。笑つてゐる。泣いてゐる。と、その顔はいつの間にか、あの阿片吸飲者の夢を踊つた裸體の女の顔に變つてゐた。

蛇のやうにうねる腕が十本にも百本にも見えた。ワルターの顔が時々その間に割込んで來る。……

すると忽ち、それら幻は消え失せて、今度ははつきりと、國に殘して來た妻の顔が浮んで來た。夜の軌道の脇に一つしよんぼりと咲き出た月見草のやうに、それは淋しくも悩ましく、怨むが如くに彼を見下してゐる。さつき破いて捨てた妻の手紙の文句が一字々々ありありと富田の眼の前に現はれて來た。道子の顔が、すると又再びアニタの笑顔が……

二つの幻影！

疲れ切つた身體も、心も、いつの間にか深い眠りに落ちてゐた。

雪

石造りの五階建の家並にかげをチラチラと、懐かしい粉雪が降つてゐた。裸身になつた菩提樹の梢の上に一ぱい積つた雪は、自らの重みに堪へかねてか、時々かそけき音を立てて散つて行く。

遠くバルチック海の方から吹いて來る北風に煽られて、それはまるで小悪魔の亂舞でも見るやうに渦巻いた。そしてそのまゝ横なぐりにかなぐれ飛んで、悪吉の部屋の二枚硝子に吹きつけるのであつた。と、雪を拂つた枯枝の梢は反動で暫く震へてゐる。それがまるで寒氣の爲にガタガタ震へてゐるかのやうにも見えるのである。

（何と云ふ天邪鬼なのだらうか。冬になると物好きに、裸體になつて震へてゐる。白樺組の旋毛曲りの標本を想はせるではないか。）

悪吉はそんな事を考へてゐた。

この間迄ローラースケートで勢ひよくアスファルトの舗道の上を走つて行つた背負鞄姿の小學生も、この頃は頭から足の先迄白の毛絲に包まれて、小橇の綱を引いて行く。小橇の上には、妹でもあらうか、林檎のやうな頬つぺたを毛絲の帽子に覗かせた可愛らしい女の児が乗つてゐる。

（雪、雪。懐かしい雪。炬燵に更けて行く温泉の夜を想ふではないか。）

悪吉は闇の温泉を想つた。赤倉の斜面を想つた。

「さうだ。良い加減學校を切上げて早く出掛けるかな。雪でも止んだら一つウェルトハイムの百貨店にでも行つて、スキーの道具を揃へて來なくちやいけない。」

そんな事を考へてゐた。

彼は高等學校に初めてスキー部の出來た頃から熱心なる一人であつた。[illegible]を油紙に包んで雪の中に埋め乍ら、頻りと工夫を凝らしたものであつた。があらゆる理論大家がさうである如く、彼の技術たるや決して陳列して人前に曝す可き性質の代物ではなかつた。彼は

の理論と實際とは丁度二箇の拋物線の如く、合はんとして永遠に合はないのである。譬へばここにクリスチャニヤと云ふ停止法がある。これは眞直に滑走して來て急に身體の捻りや、重心の轉換を應用して、直角に止まる方法なのである。彼はそれをやる。必ず轉ぶ。本には轉べとは書いてないのである。彼は首を傾げて又やり直す。勿論轉ぶ。そこで彼は考へる。その結論はかうである。

『日本の雪はクリスチャニヤに適せず。』

が、かうやつて雪に責任を轉嫁して了つても矢張り多少良心が咎めると見えて、彼は第二の結論を下す。

『元來、クリスチャニヤは停止法である。轉ばうがどうしようが止まりさへすれば既にその目的の大半を成就したも同斷である。その他の點は實に形式上の些々たる枝葉の問題ではないか。』

そして彼は由來、實地の練習は夢に譲つて、一日宿の炬燵に花骨牌を引き、信州信濃のしん蕎麥に、夜の更けるのも忘れては、たゞあの懐かしいスキー場の氣分に浸つてゐた。

（今度こそは、本場の雪で一つ自信を着けるとしようかな。）

憲吉は早く雪が止めば良い、と思つた。一日でも早く買ひに行かないと良いスキーが皆賣はれて行つて了ひさうな氣がした。

（それにしても退屈な日ではある。）

憲吉は釘からエキサーサイザーを持つて來て、百回程自彊術の眞似をした。が、暫く運動しなかつた腕の筋肉は、もう百回目には半分も伸す力を失つてゐた。

彼は忌々しさうにエキサーサイザーを投げつけて、壁の晴雨計を見た。

（七十五。晴雨常なしか。最も安全な天氣豫報だ。）

憲吉は浮かぬ顔をした。

彼はやがて書机の前に坐つた。ゴツゴツの獨逸文字の厚い本を擴げた。休暇になる迄せめて頑張つて置くかな、そんな氣がした。彼は暫くの間、權利だとか義務だとか云ふ字を割つたり掛けたりしてゐた。

神妙に、嚴肅に。

そのうちに又、さうやつてゐる事が何だか莫迦らしい無意義な事のやうな氣がし出した。かうやつて詰めこんだ知識なんか、三度試驗を引けば皆んな忘れて了ふのだ。徒勞な事だ。パンを銜へて便所に入るやうなものだ。

（いつその事、權利と云ふ字と義務と云ふ字が、獨逸民法の條文の中に何字あるか、閑暇があつたら數へてやらう。ことによつたら博士になれるかも知れない。日本には、法科とは限らないが、醫學博士にしろ文學博士にしろ、その位の事でなつてゐるのが可成り有るやうではないか。）

憲吉は書机の眞正面に掛つてゐる、「モナ・リザ」の額に目をやつた。

（あの唇に祕められた女性の謎を解き得る者は永遠にないのかしら。こんな判じものみたいな繪を毎日見てゐるのは、どうも氣苦しくていけない。何か他の繪と變へてやらうかな。）

ふと目を移した新聞と、卓上暦の日付が違つてゐるのに氣がついて、彼はその暦の紙を三枚挘り取つた。そしてその脇に飾つてあつた小さな七寶燒の香爐の蓋を開けて、抽斗からとり出した鳩居堂の梅ケ香を薫じてみた。この香爐は卯女子が日光から態々持つて來たのを、この間憲吉の誕生日に贈つてくれたのであつた。千鳥の香爐にも代へ難き大事な品なのである。ゆらゆらと靜かな部屋の空氣の中に立上つて行く紫の煙の中に、憲吉は仄かに卯女子の匂ひを嗅ぎわけた。

（一香は空中の養行である。」とメーテルリンクも云つてゐる。われわれはもう少し嗅覺の言葉を[illegible]しても良い。）

彼は立上つて窓邊に歩み寄つた。冷たい硝子に額を當てて、ぼんやりと外の行人を見下してゐた。神經上人ではないが彼もさうやつて街行く人を見るのが好きであつた。

皆んなそれぞれの生活の星を擔つて、それぞれの歩みを續けて行く人達を見てゐると、想像の綵は忽ち彼の頭の中に、美しい物語の光彩を織りなして、彼はそこに云ひ知れぬ喜びと愁ひを探し始める。――それが彼の云はば病氣なのであつた。

彼は一種の夢遊病者である。若しもそんな言葉があるなら、彼は一個の追憶病者である。その舊き心の奥深く秘められた小箱の蓋をそつと開く。と、そこからは懐かしい夢が果しもなく、泉のやうに滾々として湧き出して來る。彼はただ空想の翼に打ち乘つて、追憶の世界を夢のやうに驅け巡るのである。

彼は切羽詰まつた男の如く、壁のギターを外して即興の樂を彈き出した。不調和音が出ようが出まいが彼はデブュッシーの如く澄ましてゐる。

樂人はこれを幻想曲と呼び、詩人はこれを陶醉と稱し、醫者はこれを精神錯亂と名付け、凡人はこれをキ印と云ふ。

そして惠吉は又急に、夢から醒めた男の如くはつとする。そして定つて頭を振る。――これは彼にとつて、現實に還るお呪ひなのである。

そして彼は又机に向ふ。又[illegible]を開けて權利と義務の細部に取りかゝる。そして又倦きる……

かう云ふ複雜なしかも單純な心の經過を經て、今村惠吉は今ぼんやりと隣のソファに腰を下して、部屋の眞中の圓卓子の上に載せてある林檎の肌を凝視め乍ら、食べようか、止さうかと考へてゐたのであつた。

（あの林檎が若し隣家の庭に實つたとする。それが俺の家の庭に落ちて來る。……其の林檎は隣家のものか、それとも俺のものか……面白くないな、他人の神經を實際に病んでも仕方がない。）

その時戸の外に女中の體の重い音がして、戸の下の隙間からスルスルと床を滑る音と共に、二通の手紙が舞込んだ。こつちから呼ばない限り五月蠅いから滅多に部屋に入つてくれるなと彼は云つてあるのだ。

「あ……リザ、リザ！」

立上つて手紙を拾ひ乍ら惠吉は呶鳴つた。戸がいきなり開いて女中のリザが首を出した。まだ十六七のほんの[illegible]した女の子であつた。白のエプロンと帽子をきちんとして、いつでも高い踵の靴を穿いてゐた。

「何か御用でございますか？　今村さん。」

「あゝ。あのね、今晩卵を茹でゝくれないか。それから花キャベツがあつたら食べたいんだが。」

「かしこまりました。お卵は何分茹でます？」

「さう、四分間位。」

（五分間も月並だし、餘り柔かくされても困るし。これからは卵の茹でる時間は覺えて置くものだ。）

惠吉は窓寄りの椅子に身を投げて先づ徐ろに封を切つた。一つはWと云ふ女人からのであつた。それには無智な妻を持つた知識階級の悩みが細々と書かれてあつた。

彼にはあの洗煉された都會人を唯一の看板にしてをさまつてゐるWが、どうして又鳥取の山の中の娘などと結婚したのか、それが解らなかつた。着物のこなしなどもぞろつとして、どう見ても大島紬そのもののやうな感じのするWが、訛混りの[illegible]で、突拍子もない議論

こしかけられて、呆氣に取られてゐる姿が浮ぶではないか。憲吉は思はず微笑んだ。
（これはきつと何か口喧嘩でもして、二三日口を利かないのぢやないのかしら。そして退屈まぎれに他の所になんか手紙を書く氣になつたのだ。二三日すれば又仲の良い夫婦なのだらう。——犬の殘肴なんて誰が食ふものか。）
憲吉はもう一つの封を切つた。それは小野の所からであつた。前からそんな噂は聞いては居たが、いよいよ横濱を立發つたのだ。いつも乍らに照子の事が、その詩人の筆で細々と書いてあつた。
兩人はたうとう婚約したのだ。
そして其の事を一番君に祝福して貰ひたいのだ、と書いてあつた。そして折角婚約した照子と別れて行く小野の氣持が、その別離の情が、しんみりと紙面から匂つて來るのであつた。
「遠く離れて行く波止場の人の群の中に、照子の
（——もう照子と呼んでゐるのか？）——
日傘がくるくると廻つてゐた。照子の持つてゐた綠色のテツプの切れ端はまだ僕の釦に結び着いてゐる。そして僕の瞳をぢいつと見上げたあの瞳の、どんなに淋しさうであつたらう。
夜が來て、眞黑の潮の中に、船のあとの白波が二町も三町も續いてゐる。遠くに星が一つ悲しくこの夜の海を見守つて輝いてゐる。・・・・」
「昨日神戸に着いて、すぐ京都に來た。宿へ着くと、NやKを初めとして京大の連中が十人ばかり來てくれた。その夕べは加茂の河畔にみんなで夕食を共にした。
河原に出張つた桟敷で涼しい風に吹かれてゐると、若い夫婦者が新内を流して通る。
Kが料理の殘肴を紙に包んでやらうと云ふ。皆んなは、そりや可哀さうだ、自尊心を傷つける、と反對した。Kは云つた。
「自尊心なんて余裕のある者達、いや僕達は幸福だ。」
そして彼は紙に包んだ鮎のてり焼を差出した。若い妻は恥かしさうに、手拭で包んだ耳朶の根迄赤く染めて、それでも禮を云つて受取つた。
Kは「濟みません」と云つた。靜に云つたのか知らない。
物語めいた夜と情熱と椰子の木蔭の宵闇に消えて行く迄、Kはぢいつと見守つてゐた。そして彼はいきなり叫んだ。
「世の中にあゝ云ふ風に生きて行ける人間が何人居る！　あの勇者の後姿を見ろ！」
そして彼はひどく興奮してゐた。彼の瞳には涙が一ぱい溜つてゐた。
遠く叡山の上には雨乞ひに上る炬火の行列が蜿蜒として續いてゐた。對岸の街か芝居の書割のやうに並んでゐる。この古都にも當分のお別れだ。
いづれ伯林行きが定つたら[illegible]セイユあたりから電報を打つ。さよなら。」
小野の手紙の終りには一編の詩が書き添へてあつた。

霧笛哀傷歌。

さらば、いとしの君よ、さらば。
今し聞ゆる笛の音ぞ、
錨を捲きてわが船の
出で行く報知。
はて知らぬ、
暗き波路を進み行く。

夕闇は君を包めど、
遠く波止場は離れど、
白波は消えて行けども、
あはれ、あはれ、
たゞわれひとり、
人もなき
とも邊に立ちて、
なれを見守る。

燈火侘しくゆらぐ時、
夜の帳は落されて、
君が姿かき失せぬ。
聲張り上げて幾度か、
呼べど答へぬ夜の海。
ぬぐへども、
ぬぐへど潤むわが瞳。
君を戀ふる子の泪なり。

さらば、いとしの君よ、さらば。
空に輝く星一つ、
侘しきなれを照らす時、
われが捧ぐる夜の祈り、
波路を越して夜を行く。

サンタマリヤ！

そして、これは歌ふやうに作つたのだから、誰か君の知つた音樂家にでも頼んで作曲して貰つて吳れないか、と書き足してあつた。

惠吉は正當にあてられたものゝ快さを覺えた。兩人の幸福をもう一遍心から祝福をしてやりたい氣がした。

彼は立上つて戶外を見た。雪はまだ降つてゐる。口のあたりの窓硝子が、自分の息でぼんやり曇つて行つた。彼は指でそこへ「卯女子」と書いて見た。

（山田君に頼んで作曲して貰はうかな。）

惠吉は退屈の持つて行き場を新聞紙の上に求めた。音樂欄の所に眼をやつた時「日本の」といふ文字が彼の注意を惹いた。そこには日本の某女流聲樂家が、ある會合を開いたと書いてあつて、その批評が載つてゐた。

「……きもゝを着た可愛いゝ人形さんが舞臺に現れた。何處でも買ふのかと思つてゐたら、唱歌を歌ひ出した。しかも獨逸語で……」

と書いてあつた。

「人種學上の興味をそゝる他、何もない。……」

とも書いてあつた。

（よせば良いのに。あれでも歸朝すると中々大變なものなのだらう。無責任な音樂會だからあの位で濟んだのだ。）

惠吉は樂屋の裏を覗いたやうな氣持であつた。

雉の炙り肉と、馬鈴薯と、花キャベツと、それから四分間茹での卵を持つて女中のリザが入つて來た。少し柔か過ぎた。

「夜食でも濟ましたら一つ思ひ切つて山田でも訪ねてみようかな、こんな日は留守を食はされ

る心配もないし、それに喜ばれるものだ。」と、憲吉は考へてゐた。が、さて億劫で出る氣にもなれなかつた。

（誰か來てくれる人はないかしら。それとも、いつそ寢て了はう。）

早寢をすると却つて寢坊をする奇妙な癖を憲吉は持つてゐた。彼が書齋へ入つて行つた時、珍らしく溫かい太陽が明るく街を照してゐた。一面の雪の表面にはキラキラと銀の砂を撒いたやうに光つてゐた。彼はいきなり伸びをしてそれから窓を開けた。冷たい空氣が氣持よく、寢呆けた頭を包んで晴々とした心持になつて行つた。

（今日は一つ大學へ講義を聽きに行くかな。ついでにスキーの道具と「黑い森」の案内記を買つて來よう。）

氷つた雪の上をオーバーシュズがザクザクと音を立てて行つた。電線をはじけた粉雪が、丁度嚔をして吹き飛ばした散藥のやうに、陽の光の中を散つて行つた。

大學で憲吉はハンスに會つた。歸りに一緒にカフェに寄つてお菓子を奢つてやつた。音樂の話が兩人を仲の良い友達にした。兩人はいろいろの事を話し合つた。

ハンスはエンミーの事を委しく話してくれた。

エンミーは幼い時から他の姉妹とは違ふ性を持つてゐた。まだ他の子供はチョコレートと人形の事しか考へてゐない頃から彼女は生活の事などを考へてゐたのだ。さうして大きくなつたら自分は自分で生活して行くのだと思つてゐた。どう云ふわけだかそれは彼女も知らなかつた。たゞそんな氣がしたのであつた。

彼女は歌劇の歌ひ手になる心算で、歌を習つた事もあつた。所がそれは母親の無理解と、それに聲の惡いアンナに對する氣兼ねとで妨げられて了つたのである。その氣兼ねとても母親の險しい眼付がエンミーに懷かせた氣兼ねであつて、アンナは決してそんな醜い心を持つてはゐなかつたのだ。

エンミーは夜皆んなが寢しづまつてから自分の床に潜りこんで、そつと歌を稽古した事もあつたのだ。ハンスにはその樣がこよなくも可憐しかつた。それにエンミーのその氣持は、彼に對するエンミーの信賴の稀薄を示すやうな氣がして、それが彼にはもの足りなかつた。

それはそれとして、今、毎日朝から晩迄、妹のルイーゼがヴァイオリンを勝手に彈いてゐるのを聞いてゐると、あの當時の自分の事が想ひ出されて、いつの間にかエンミーの眼の中は熱くなるのであつた。が、心の美しい彼女はそれを別に羨ましかつたり何かはしなかつた。却つて何かにつけて庇つてやるのであつた。

彼女は至つて無口であつた。口に出していろいろと上手い事は云へなかつた。所が母親は內面はどうでも、丁度沸き立てのお風呂みたいに上つ面だけ溫かさうな口先のおつくりをやらなければ氣に入らないのであつた。

姉妹喧嘩などをしても、彼女は決して告げ口などをしなかつた。云ひつけて來ればその方を良く思ふのが人情である。エンミーはいつでも母親に叱られた。

エンミーは又妹のルイーゼのやうにどこまでも己れを通し切る強い性を持つてゐなかつた。からやつて彼女はどの他の姉妹よりも一番母の事を思ひ乍らも、段々母から遠ざかつて行つた。

それにハンスとの戀仲が一層その感情をまづくしてゐた。年上のアンナがまだ結婚も定

まらないのに、エンミーがハンスと仲よくしてゐるのを見せつけられるのは母親にとつて堪へられない事なのであつた。從つて兩人は普通の話をするにさへおづおづとしてゐるのである。

それ母親が來た、と云つて兩人が手を離した事が何度あつたらう。ましてうつかり兩人が歌を合唱したりした後の母親のあてこすりや皮肉は、とても親の口からとは思へないのである。

母親はそれを皆んなアンナに託して云ふのではあつたが、これとて皆んな側の母親の勝手の推量であつて、アンナは決してそんな醜い心は持つてゐなかつた。却つてエンミーがハンスと仲よくする事を心から喜んでゐた。他の人の幸福を心から祝福してやり度いのが美しい人間の眞實の心ではないか。少くともさうあり度いものではないか。

アンナには却つてさうやつて自分を氣兼ねしていぢけてゐられるのが辛かつた。自分が不本意にもスペードの女王の役目を演じてゐるのではないか、と云ふ意識がアンナを苦しめた。自分に祕さずに兩人が仲よくしてくれたらどんなに嬉しい事であるか、と考へてゐた。——一つの間違つた考への爲にかうやつて多くの清い心が傷けられて行く。

『ほんとにエンミーの生活は踏み躪られた路傍の花の宿命です。』

さう云つてハンスはいたく昂奮してゐた。

惠吉は西洋にもそんな不幸な戀人があるものかと思つた。何と云ふ可憐しい事ではないか。彼はあの「瀨を早み、岩にせかゝる谷川の、われても末に會はんとぞ思ふ。」の歌を飜譯してやつた。そして慰めてやつた。

『もう少しの辛抱ぢやないか。結婚して了へば、そこに兩人つきりの暢然とした幸福が生れて來るではないか。ね?』

ハンスは暫く默つてゐたがやがて又重々しく口を切つた。

『かうやつてたとひ一時たりとも、私の眞の愛の光がさう云ふ黑雲に掩はれてゐると云ふ事は、私にとつて悲しい事です。それにこれからの兩人の生活に一番大事な趣味とか思想とかの一致と云ふ事は、お互の理解に基く事で、それにはどうしても兩人はもう少し自由に話し合ふ機會がなければいけないと思ひます。私達兩人はちよつとの間を見付けては、こそこそと話し合ふのです。その間もエンミーはしよつちうはらはらとしてゐてちよつとした音にも跫音にも氣を配つてゐるのです。從つて私の云ふ事なんかてんで耳には着いてゐないのです。私の淋しさと物足りなさとは、そこにあるのです

私達兩人は芝居はもとより散歩にさへ一緒に出る事は許されません。汚らしい心の人々がそこに勝手な邪推と嫉視を投げつけるのです。……それにエンミーさへもがそんな感情に捲きこまれてゐるのです……』

ハンスの愚癡は纏々として續いた。惠吉はそれ以上慰める言葉もなかつたので默つてゐた。やがて兩人はカフェを出た。別れしなにそれでもハンスは元氣に笑ひ乍ら帽子を振つた。

ウエルトハイムの百貨店でスキーの道具を註文してから、惠吉は雪の街路を歩いて行つた。廣場の腰掛に子供がパンの粉を撒いてゐた。寒雀がチチと鳴き乍らそれを啄んでゐた。

自家へ歸つてもどうせ退屈と取つ組み合はなければいけないのだ。肩の凝らない皆川でも襲つて、又例の高說でも承はらうと思つて、彼はティールブラッツ行きの地下鐵道に乘つた。

もう燈火の入つた北向の部屋のソファに、支

那服を着た一人の男が、黑光のするマドロスパイプから紫色の煙の輪を吹いてゐた。

『やあ。』

惠吉の顏を見るとその男は頓狂な聲を掛けた。そして目で席をすゝめた。

『君、ちよつと見てゐたまへ。歐洲大戰で塹壕戰の退屈紛れに獨逸の兵隊さんが案出した煙の妙技を御覽に入れるから。』

男はいきなり一つの輪を吹いた。ゆらゆらと段々大きくなり乍らその輪が上つて行つた時、今度は少し小さい輪が早い速力で前の輪を追掛けて行つた。と見る間にその輪を潛つて脫けて行つて了つた。大きな輪は風を食らつてゆらゆらと搖れたかと思ふと、そのまゝくづれて了つた。すると支那服はいきなり立上つて鼻ですうつとそれを吸ひ込んだ。

支那服の男は又ソファに戾ると惠吉の顏を見乍ら澄まして、

『ねえ？』

と云つた。

男は勿論皆川梅十郎である。

『御見事ですな。』

惠吉も一通りの御世辭を云つた。

『支那服は御似合ですな。部屋着になさつてるんですか。』

『いゝや、實は今晚二人程支那の留學生がやつて來て、麻雀をやる事になつてるんで。あゝ、丁度良い。二人ぢや詰らないと思つてた所でした。晚飯を交際つて頂いて、一つ仲間になつて下さい。』

『えゝ。』

遠慮は却つてから云ふ人にとつて、無沙汰だと云ふ事を惠吉は心得てゐた。それに麻雀は往き掛けの船の中で英語の本を二册も硏究した程の熱心であつた。スキーと同じく理論だけは一廉のものであつた。

『どうです、林檎でも齧りませんか？』

さう云つて皆川はもう机の上の果實入れから、手頃の林檎を取つてぱくりと嚙みついた。

『ねえ、君。林檎はからやつて齧るに限るね。齒がこの滑つこい皮に當つて、それを貫いて、中の實に至る瞬間に、林檎の眞の味はわが舌端に在り。ナイフで皮を剝き去つて了つては、丁度音樂を蓄音器で聞いたり、名畫を寫眞版で見るやうなものさ。ねえ、さうだらう？』

『さうなると林檎も中々哲學的色彩を帶びて來ますな。』

惠吉もぱくりと嚙みついた。

『お腹の方は如何ですか？　蚯蚓は見つかりましたか？』

『いや、蚯蚓はもう止めました。この間ちよつと人に聞いた話なんですが、何でもボンの大學の教授でもう三十年間も蚯蚓の硏究に沒頭してゐる人がゐるんださうです。その人の說によると、蚯蚓は人類の祖先だつて云ふんです。どう云ふ學術的論據があるのか知りませんが、とに角さう聞いて見ると今更蚯蚓を食ふのも祖先冒瀆の罪を免れませんからな。……』

皆川は又紫の煙を吹き上げた。

『近頃は御題目の力で癒さうと思つてゐます。とに角、君、南無妙法蓮華經は薩羅達磨芬陀利迦修多羅を具有する良藥にして、これを唱へ奉れば如何なる事も叶はざる事なしと云ふのだから有難いぢやありませんか。合掌。』

『何です？　その合掌つて云ふのは。』

『君は日本の新聞を讀まないと見えますね。御題目を唱へ奉つて感極まると自づと口に出る言葉ですよ。いや口には出ないのかも知れませんか、そんな事はどうでも良い、更に感極まると無闇つて奴があります。』

『へえ？』

惠吉はそろそろ[illegible]が[illegible]になつて來た、と思

つた。皆川は立上つて戸棚の鍵を開けて、中からチョコレートのお菓子を持つて來た。

『どうです？ 一つお撮みなさい。あゝやつて鍵をかつて置かなくちやいけないんだからやり切れませんよ。この家の主婦と來たら家賃は貪るし、お菓子は撮むし、ほんとに稀代の惡婆ですな。いつだつたか餘り業腹だから、ヂャムの中に胡椒をふんだんに入れて置いてやつたのさ。そしたら當分舐めないやうになりましたがね、さういつでも胡椒を入れてゐちや、こつちがたまりませんから止めると、又すぐ舐め出すつて云ふんですから始末が惡い。たうとうあんな戸棚を買つて來て鍵を下す事にしたわけさ。』

皆川の言葉遣ひは丁寧なのか粗略なのか、わからなかつた。その時々の氣分で話すのであつた。

やがて皆川が電話で註文した料理が屆いた。女中が白い食卓掛を掛けて、その上に銀の食器とお皿を並べた。この女中は又稀代の惡婆には似もつかぬ、愛嬌のある可愛らしい女中であつた。惠吉は獨逸の習慣に從つて少しばかりの心づけを摑ませてやつた。女中は足を曲げて丁寧にお辭儀をした。

『何ですか？ 君、これは。……』

惠吉はお皿の上に盛られた得體の知れない肉の塊に目をやつた。

『豚ですか、牛肉ですか？』

『それは君、ポークビーフさ。まあやつて見たまへ。』

『え？ ポークビーフ？ そんなものがあるんですか？』

惠吉は狼狽てて聽き返した。

『そんなものはないさ。』

皆川は澄ましてゐる。もうぱくぱくと美味さうに食べてゐる。

『實は僕の義兄で田舍の人だが、引越祝ひの時、近所の洋食屋からいろいろの洋食を誂へて來たものさ。その中に妙なものが一品あつた。皆んながこりやなんですつてと尋くと義兄澄まして云ふ事にや、そりやポークビーフでげすと來たんだね。皆んなが顏を見合せて笑ふと、義兄も少し妙だと思つたのか、何でげす？ と尋く。仕方がないから說明した。義兄さんそりやないでせう。ポークは豚肉でビーフは牛肉ですからね、と云つたのさ。そしたら義兄も笑ひ出して、成程さうでげすか、と云つたものだ。それから得體の知れない料理の事を、ポークビーフつて云ふ事にしてゐるんです。これは君、實は牛の臓腑ですよ。僕の大好物さ。』

流石の惠吉も牛の臓腑には參つて了つた。

惠吉はそのてれかくしに、突拍子もない質問を提出した。

『皆川さんはもう奧さんお有りなんでせう？』

『いゝえ、どう致しまして、實は僕は一生獨身で暮す心算です。』

『え？ ぢや失戀でもなすつたんですか？』

『まあ、失戀と云へば失戀ですが、それに就いては一場の插話があるんです。聞いてくれますか？』

惠吉は又始まつたな、と思つた。

（この男はと角插話と食後菓子の好きな男である。この男は人生をおさしみと心得てゐるのだ、それにはどうしても、わさびが要るのだ。）

『僕には若い時から一つの惡い癖があつてね、……』

皆川はお構ひなしに話し始めた。

『なんと云ふのだらう、やたらに女に惚れて了つて仕方がないんですね。電車の中と云はず、女學校の正門と云はず、僕が一眼惚れに惚れた女は、ドン・ファンではないが、ざつと三千人位はゐたかも知れません。惜むらくはたゞ、かの玄宗の後宮の佳麗三千人、その六宮の粉黛を

して顏色なからしめたと云ふ、一人の楊貴妃が僕にはゐなかつたのですね。
　そんなわけで僕はしよつちう惱ましい日を送つてゐました。或る時は三越のエレベーターから下りしなに、ふと入れ違ひなりに乘つて行つた女の顏が三日も僕の頭を離れなかつたり、從つて無情にもスーッと上つて行つたエレベーターを怨んで見たり、――これではとてもやり切れないと思つたのです。……』
　皆川はマカロニを懸命に肉叉の背中に乘せてゐた。
『所が或る時、偶然の事で、池袋の方に精神療法で惡癖を矯正する療院があると云ふ事を聞きこみましてね、早速出掛けたわけです。所がその何とか云ひましたよ、所謂先生ですね、お話にもならない詰らない宗教論だか人生觀だかを吹き掛けるんです。すつかり愛想をつかして、もう行くまいと決心したその日、僕はその待合室で、途轍もない美人に出會つたのです。
　で翌日も、とに角もう一遍行つて見る事にしました。所が又その女が來てゐるのですね。かうやつて僕はその女の爲めに、毎日定期乘合ひこんで池袋くんだりへ通つたものです。そしてたうとう兩人は戀に落ちて了ひました。猛烈に戀し合つたのです。この女ならたとひどんな惡癖があらうとも、轆轤ッ首であらうが、油を舐めようが、一向かまはないとさへ思つた位です。』
『飛んだ惡癖療院でしたね。』
　惠吉は若干呆れ乍ら口を挾んだ。
『まあ、まあ、もう少し聞き給へ。……』
　さう云つて皆川は鯉の型をしたプヂングを切つてくれた。
『で僕はたうとう結婚を申込んだものと思ひ給へ。所が君、又猛烈な肘鐵を食つて了つたのさ。云ふ事が徹底してるぢやないか。あなたのやうなお金のない人は、戀をするには良いが、結婚には向かないつていふんです。……』
　皆川はいきなり匙で、プヂングの鯉の心臟のあたりをぐさつと突差した。
『で僕もつくづく無常の感に打たれて、それ以來どんな綺麗な女を見ても、皆んな夜叉のやうな氣がし出した。お蔭で氣がのんびりとして、自分らしい生活が送れるやうになつたものでさ。』
　彼は心臟をぱくりと食べた。
『その女とはそれ以來お別れになつたんですか？』
　惠吉は笑ひをこらへて尋いた。
『所がね、君。後で聞いたらその女たるや、惡癖療院の代診だつたのださうだ。つまり僕は代診に瞞されて笑つたわけですね。ハハハハ、。』
『ハハハ、、、。』
　惠吉も思はず吹き出して了つた。
　食事が濟むと皆川は、もう一着の支那服を持つて來て、是非着給へと云つた。米國あたりでも麻雀をやる時は、みんな支那服を着てやる、異國情調を味はなければいけない、さあ着たまへ、と云ふ。惠吉も覺悟して、洋服の上にそのゆつたりとした支那服を引掛けた。
　やがて二人の支那人がやつて來た。宋君と顧君と云ふのである。兩人共伯林の工科大學に學んでゐる秀才で、早稻田の大學に長く居たと云ふので、兩人とも日本語を達者に話した。
　二人の支那服を着た日本人と、二人の洋服を着た支那人はやがて卓を圍んで座に就いた。賽子を二三度振つて、ほんとの座席が定まると、又骰子の御厄介で親――莊家が定る。
『かういふ面倒な手續をする所に、この麻雀の面白味はあるね。運命とか方位とか云ふ事を非常に重く見てゐる。實に易經の思想を理解しなくちや麻雀の眞の妙味は解せないね。』

たんで皆川は獨りで饒舌つてゐる。惠吉は手に時刻を持つてゐた。彼はふと日本にゐた頃、銀座の若竹のぜんざいを七杯賭けて、お腹をこはして了つた事を考へてゐた。

「一吃！」

奇聲を發して、宋君が筒子の五六七と並べて出した。

「僕ん所が碰だがな」

さう云つて惠吉は筒子の六を二つ開いた。

「それぢや君の所へ行く。碰なら碰ともつと早く云はなくちやいけない。遠方の花火ぢやあるまいし。」

皆川はやがて、珍らしくも海底模月の役で上つて了つた。

十二時近く迄續けて、やつと四圈の一勝負が終つた。惠吉は四弗ばかり拂はされて、皆川の家を出た。

街にはもう聖誕祭樹の市が立つてゐた。

家に着いた時、惠吉の腕時計はもう一時を過ぎてゐた。鍵を廻して見たが、どうしても開かない。女中がきつと間違へて、もう歸つて來たものと思ひこんで、内から閂を掛けて了つたのであらう。今更電鈴を鳴らして起すのも可哀さうだしホテルへ泊りに行くのも馬鹿らしいし、どうせ四五時間の事だ。明日午前中寢てゐても良いのだ。そんな氣持で惠吉はたうとう一夜をそこに明かす事に決心した。

彼は梯子段の一番上の所に腰を下して、膝に乘せた兩手の中に顏を埋めて眠らうとした。向ひ合せはブルクマンと云ふ何處かに大きな自動車屋の店を持つた商人の家であつた。こんな恰好して眠りつけない惠吉には、たうとう見切をつけて、冴え切つた瞳を暗闇の中に瞠いてゐた。

暫く經つた。

すると下の方の入口の扉が重く開く音がした。續いてぱつと梯子段の廊下の電燈が點いた。これは入口の釦を押すと、すうつと五階迄の上り道を照らす五箇の電燈が點くので、三分間經つと自づと消える仕懸になつてゐた。

（誰か歸つて來たのかな。大分上手があるわい。）

惠吉はさう思つて、闇に慣れた眼を眩しさうにしばたゝいて、梯子段の下を覗いた。深綠のソフトが見えて、身長の高い男が漫歩蹌踉として上つて來た。惠吉の顏を見るとその若者は、ちよつとてれたやうに帽子を脫つて挨拶をした。

「やあ。…」

そしていきなり惠吉の隣へ腰を下した。體が惠吉よりは二段も下の階段に乘つてゐた。この男は前の家のブルクマンの息子で、惠吉は時々顏を見合つて知つてゐた。

「あなたも閉め出しですか。…」

その若者は煙草に火を點け乍ら尋いた。

「一本？」

「いゝや、有難う。…女中が間違へて閉めたんでせう。」

「さうですか。僕なんて毎日の事ですからもうちやんと覺悟です。ちよつとでも遲くなりさへすりや、あのガリガリ親父が自分で閂を入れちまふんですからね。始末が惡い。」

「ぢや毎晩こゝで明かすんですか？」

「いゝえ、そこはそれ、持つ可きものは妹ですね。皆んなが寢しつまると、そつと開けてくれるのです。ですから結局生じつか早く歸つて來ると云ふ事は、それだけこゝで待つ時間が長くなると云ふ勘定ですからね。さうさう、これ如何です？…」

さう云つてその若者は外套のポケットから袋に入れたチョコレートを取り出した。

「妹の開け賃ですが、ハハハ。」

彼の胸の所には、ゲリュネワルドの自動自轉車の大會で一等を取つたと云ふ、お得意の金賞牌が光つてゐた。

やがてぱつとひとりでに燈火が消えた。若者は舌打ちをした。若者の吸ふ煙草の火が闇の中に光つてゐた。

惠吉はチョコレートの中の胡桃を、そつと噛んだ積りなのが、案外大きな音がしたので少々極りが惡いやうな氣がした。若者は一向お構ひなしに喋り出す。

「今日は自家の店のレックス號の無蓋車で、ワンゼーからポッツダムへかけて、あすこの川沿ひをずつと走らせてやりました。……」

闇の中に煙草の火がずうつと動いた。

「あいつはよく出る車ですよ。今日なんか確かに四十は飛ばしました。耳や頭はすつかり革の帽子で隱してゐるんですが、それでも寒い位で、エルザ孃はもう懲々したつて滾してゐました。あゝ、さうさう、こゝでちよつと、わが親愛なる女友達、露骨に云へば、わが戀人、エルザ孃をあなたに御紹介する光榮を有しますかな。……」

若者はさう云つて、エルザ孃の代りにチョコレートを一つ、惠吉の膝の上に乘せてくれた。

「それから、歸途はゲリュネワルドの森を拔けて走らせました。赤松の間からもう月の影が淡くさしてゐて、から何だか何處を押しても詩でも出て來さうな氣がしましたよ。」

若者はその時出かゝつた詩でも考へてゐるのであらう、暫く默つてゐた。惠吉はそんなものを出されては大變だと思つて、狼狽てて導いた。

「で、それから？」

「えゝ、それから……」

若者は詩を斷念めて、又自動車に乘つた。

「それから、店へ車を返して、兩人でカイザーアレーの氷走場へ行つて、管絃樂に合せてダンス滑りをやつて、それからエルザを家迄送つてやつてから、僕は又例の時間の關係で、今迄飮んでゐたわけなんです。」

惠吉は何だか勝手に喋られて、勝手に惚けられたやうな氣がした。

（俺は中々チョコレート位では買收されんぞ。）

「で、そのエルザ孃と近々結婚されるつてわけなんですね？」

「所がねえ、あなた……」

若者は、針をさゝれたゴム風船のやうに、急に悄氣た聲を出した。

「自家の母親が反對なんです。自分の親だけれど、ほんとによくも揃つた分らず屋でね。エルザの家が餘りよくないのです。それでエルザは銀行へ出てゐるんでせう。それが氣に食はないと云ふのですから仕方がありません。家の沽券に關はるつて云ふのです。沽券なんて、實際、馬鈴薯の皮と一緒に塵芥箱へ捨てて了へば良いもんです。」

煙草の火はさう云ふと共に、クルクルと闇の中に渦を巻いて、いきなり壁にでもぶつかつたものか、ぱつと無數の火花に散つて、そのまゝ消えて行つて了つた。

若者は闇の中で昂奮した。

「相手の御婦人はどうなのです？」

「それがねえ、あなた。」

若者の聲は益々悄氣てゐた。

「お金持の所へ嫁くのは、やつぱり身が負けて厭だつて云ふんです。そんなら、僕は家を飛び出して素寒貧になつて見せる、きつとなつて見せるよ、あゝなるとも、つてさう云つてやつたら、それぢや明日のパンにも困るぢやないの、つて嘆くのですね。僕は又云つた。いゝや、僕

たつて自動車の運轉手位にはなれるって。そしたらエルザの云ふことには、運轉手と結婚するのは、自分は厭だつて。ぢや一體僕はどうしたら良いんでせうか？』
　若者は泣きさうな聲を出した。惠吉も困つて了つた。丁度その時ブルックマンの家の鍵穴からぼんやりと燈火がさした。やがてそれが消えると、鍵の音がして戸がそつと開いた。白い寢間着を着たすらりとした女の子が、顏をちよつと出して小聲で囁いた。
『ハインツ……』
『あゝ。有難うよ。フリードル！』
　若者も小聲に答へて、そつと立上ると默つて惠吉の手を握つて、そのまゝ戸の後へ吸はれて了つた。
　又鍵の音。
　闇。
　惠吉は膝の上のチョコレートの銀紙を剝いだ。それは卯女子の味がした。

眇眼の夜

　都は今、樂器祭の酒の香に醉ひ未だ醒め切れず、暮も押し詰つた二十八日の夜であつた。今宵惠吉は背負袋を背負つて、當然、南國達の旅に上つた。伴侶はもとよりなき、氣紛れものの獨り旅。
　その日は、朝の內、灰色の空を籠めて、白いものがチラチラと降つてゐたのだけれど、午後になるといつの間にか霙と變つて、それも、漫馬の背に鈴の音がして、薄闇の夜の家並に灯りのともる頃となつて、全く止んで了つた。
　白紙の切拔細工のやうな雲の合間に、深まつた宵の空を覗かせて、利鎌もどきの月影さへ見え始めた。
　地下鐵道の停車場を、ポツダム廣場の街上に出て來た惠吉の、薄い防水衣の上着の襟から、しんしんと夜の冷えが沁みわたつて行つた。忙しげに往き來する人々も、毛皮の襟を深く立てて、大股に歩み去る。カフェの燈火の明るい下に、裸身となつた並木の梢が戰いて、青や赤の廣告もなんとなく暮の氣持を漂はせてゐた。
　被蓋をした燈火は仄暗く、六人乘りの汽車の小部屋を照らしてゐた。
　窓際に向ひ合つた新婚の夫婦者。黑繻子の表紙の探偵本に讀み耽つてゐる伊太利人。山高の帽子を冠つて株の夕刊に眼を落す商人。それから今村惠吉。
　蒸氣煖房の熱と、人のいきれと、煙草の煙で、苦しくなつて來た惠吉はアダリンを一粒呑み込んで、そつと廊下に出た。
　汽車は搖れて行く。
　惠吉はやがて、新鮮な外の空氣と、アダリンの效果がそろそろ利き始めたので、又部屋の中へ歸つて來た。
『おゝ、わが寶の君よ！……』
『わが甘き愛の女神よ！……』
　日本語に譯すと甚だ齒の浮くやうなものである。
『チュウーッ。』
『ねえ、あなた、早くライプチヒの伯父さんが死んで、あのピアノが私達のものになると良いわね。……』
（五月蠅い新婚旅行だな。）
　それでも惠吉はいつの間にか、膝掛を冠つて眠て了つた。
　惠吉のスキーの夢を乘せて、闇の中を南へ南へと汽車は進んで行く。
　惠吉をシュワルツワルドの雪の中に取殘し

て、汽車は屋根にその雪の幾寸かを乘せたまゝ、又同じ軌道を、北へ北へと戻つて行つた。

話は伯林に歸る。

その枝は、もう夫は歸らないに違ひない、とさう思つた。

（折角、夫の誕生日の、お菓子迄拵へて待つてゐたのに、夕食にも歸つて來なかつた。もう九時を廻つてゐる。）

彼女は默つて、まだ卓子掛の掛けつぱなしの、その卓子の前に腰を下した。

白い丸いタートケーキの上には銀の玉と、それから、養澤八百屋で買つて來た、先走りの苺が赤く光つてゐた。

（アラ、隨分曲つてゐること。）

彼女は鉢を手許に引寄せて、苺の位置をなほした。そのうちに、どうした事か、銀の玉と、苺の紅がぼうつと二重に、彼女の瞳の中で霞んで行つた。と、彼女の胸はわくわくとして、一雫の涙がぽたりとそのお菓子の上に落ちて行つた。

その枝はやがて立上つた。

そして夫の机の方に歩いて行つた。何の氣なしに抽斗を開けた。そこにはいろいろの變り色の封筒や寫眞が、一ぱい詰つてゐた。それは方々の舞踏會などで、夫の寫した寫眞が多かつた。そしてそのどれにも、夫のすぐ側に、假裝こそしてはゐるものゝそれと解るロッテの笑ひ顏があつた。

そのうちに、一枚の皺苦茶になつた、受取書のやうな紙が、その間に挾まつて出て來た。ふとしたむら氣が彼女の眼をその紙の上に落させた。それは病院の受取書であつた。百二十圓也と云ふ額が、彼女にふと、不審を懷かせたのであつた。

（別に入院もした覺えもなし、そんなに長く、醫者に、夫の通つたと云ふ事も聞かなかつたが。）

彼女は字引を取つて、その病院の名前の下に、細く書かれた文字の一つ一つを引いて見た。

いきなり、眼の前が眞暗闇になつたやうな氣がした。不意に深い谷底に突落されたやうな、そんな氣持であつた。

（さうか、夫は……）

彼女の心の中には、憎惡の想に絡まつて、云ひ知れぬ侮蔑の念が捲き上つた。それは今迄にない感情であつた。彼女は聲高に冷笑つてやり度いやうな氣がした。

机の抽斗を以前のやうになほすと、彼女はそのまゝ寢室に駈け込んで寢間着に着かへて、白い寢具の中に滑り込んだ。

ぼんやりとしたその枝の頭に、客間の方から十二時の時計の音がかすかに聞えて來た。

暫くして、彼女は鍵の音を聞いた。何か二言三言呶鳴つてゐる夫の濁聲を聞いた。

彼女は靜かに眼を瞑つて、壁の方を向いて、身體を海老のやうに丸めて縮こまつてゐた。やがて、寢室の戸の開く音がして、夫の跫音が聞えた。いきなり、肩の所をゆすぶられた。

その枝は牡蠣のやうに默つてゐた。

（ヘン、寢てやがら。……）

着物を脱ぐ音がした、彼女の瞼を通してほんのりとさしてゐた燈火が急に消えた。彼女は酒臭い夫の息を嗅いだ。力強い夫の腕を感じた。

その枝は夢中に抵抗した。さうして寢臺から滑り落ちるとそのまゝ、月の光に仄明るい薄暗を這ふやうにして廊下に出た。

ピチンと背後に閉めた戸の鍵の穴から、やが

て黄色い光の流れが溢れて來た。酒を飲むらしく、コップの音がした。
その枝は青く暗いその廊下に立つてゐた。階下の扉から、しんしんと、夜の冷えが沁みこんで行つた。
彼女は幽靈のやうに力なく蹌踉として廊下の外れの窓の所へ歩いて行つた。
戶外には蒼白い夜があつた。月の光が街一面に溢れて、並木の影がくつきりと、アスファルトの鋪道の上に落ちてゐた。
街も家も木も空氣も、たゞ青かつた。
細いスレート板を組んだ向ひの會社の建物の屋根の甍は、海底に光る水蛇の鱗のやうに、怪しい光澤をこの夜の空に放つてゐた。
陰鬱の夜は今何を考へてゐるのだらう？
寢臺の端を抱いてその枝は、疲れた身體を客間のソファに横たへた。
朝のパンを食べ乍ら雨人は押默つてコーヒーを啜り通してゐた。
眩しい明るい陽の光が、街にも部屋にも充ち滿ちてゐた。このまゝ羽翼が生えて、あの青空に飛んで行き度いやうな朗かな日和であつた。それだのに、雨人の胸には、灰色の鉛のやうな重苦しい沈默が續いてゐた。
その枝は默つて昨日のお菓子を押しやつた。
「贅澤だ。こんなもの買つて來て。」
いきなり夫は投げつけるやうにさう云つた。
「拵へたのよ。」
下を向いたまゝその枝が答へた。
「同じ事だ。……一文も儲けることも知らないで……」
その枝は默つてゐた。
「いつ迄お孃さんの心算でゐるんだ。」
口の周圍を拭いたナフキンを、叩きつけるやうに食卓に落すと、そのまゝふいと櫻井は立上つて、自分の部屋へさつさと入つて行つて了つた。
晝間のうちは暖かさうに、微笑み掛ける太陽のそのあた情に解されて、ついつい薄着になり勝ちな、冬の一日も四時と云ふ聲を聞くと、水銀の柱が目に見えて下つて行くのであつた。
毛絲編の上着を引掛けると、その枝は、夕方配達の手紙を持つて夫の部屋へ入つて行つた。
そこに彼女は、また電燈も點けない暗い部屋の中に、机に突伏して、ぼんやりしてゐる夫の姿を見た。
その枝は靜かに近付いて行つた。足音を聞くと夫は急に身體を起した。そして振返つて彼女の顏を見ると、いつもむつつりとした輕蔑を眉の間の八の字に寄せて默つて手紙を引つたくつた。
「……」
「……」
櫻井はその手紙を、見ないまゝでポケットに突込んだ。
「ちよつと出て來る。」
彼は荒々しく戶を閉めた。その音に思はず目を瞑つた。家の扉の鍵の音を聞いた時、彼女は、もう當分夫は歸つて來ないと思つた。悲しむ心より、どうでも良いわ、と云つた心持であつた。
昨夜の寢不足が利いてか、四時と云ふのに彼女はもう、うつらうつら眼瞼の重くなるのを覺えた。
（いつそ眠つて何もかも、忘却の靄の中に溶かしこんで了はうかしら？）

と彼女は思つた。

(この悲しみを、この人の世全體を。)

そして彼女は寢室に入つて行つた。

絹の寢間着に着換へると、眞赤な革の室内靴を、小さな白い足に突つかけて、その枝は毛髮を解かしにもう一遍、客間の方に戻つて來た。寢室の置電燈より、そこの方が明るいからであつた。

寢そべり臺に腰を下すと、そのまゝ身體をぐるりと捻つて、彼女は壁の鏡に顏を映して見た。毛髮を梳り乍ら、ぼんやりと鏡の中に見入つてゐると、いつの間にか彼女の追憶は、風の中の風船玉のやうに、ふはりふはりと目的もなく漂うて行つた。

彼女がまだ垂髮に結つてゐたあの時代の事。毎年夏になると輕井澤の別莊に、暢氣に遊び暮したあの頃の日の事。

(かうやつて毛髮を解かし乍ら萬年草の花束をさした事もあつたのだ。)

月見草の咲く高原の黃昏、あの淺間の上にたなびく入陽の何と云ふ雲の色合ひ。夜目にもほんのり浮ぶ白樺の幹。――さう云つたいろいろの甘い印象に綰んだ遣瀨ない少女時代の日の追憶に咽び乍ら、その枝の眼の中はいつの間にか熱くなつてゐた。

(若い神戸の叔父さんに連れられて、馬に乘せて貰つたつけ。外人の娘達と、あのテニスコートで小鳥のやうに飛び廻つたつけ。桔梗やをみなへしの咲き亂れた草原の中をかきわけて、淺間薊を摘みに行つた事もあつたつけ。あのお離れの前のお池には、まだ淺間の山影が、相變らず悠々と浮んでゐるのかしら？)

その枝は丁度學校の生徒が、試驗の前に一通りの事を、頭の中で復習して見るやうに、一つ一つ想ひ浮べては、それをもう一遍頭の中に刻み込んで行つた。

(叔父さんの友達が來ると、よく多勢でヴェランダの卓子を取圍んでは、トランプをやつたりお茶を飲んだりしたものだ。草の香りを孕んだ高原の空氣を胸一杯に吸ひこんで、皆の顏にはたゞもう晴々とした元氣な笑ひがあつた。

瀨田さん、……さう云つたつけ、あの面白い人。今はどうしてゐるかしら？)

月の良い夜、皆んなして峠町の方に散歩した、あの時瀨田さんから敎へて貰つた小唄が、ふとその枝の口に上つてゐた。

『梅の咲く頃おこり出す、
肩の痛みを撫で擦り、
役に立つ子と賞められた
昔戀しや懷かしや。――』

歌つて行くうちに、その自分の聲の哀調に引きこまれて、彼女の心は益々悲しくなつて行くばかりであつた。

彼女のこの悲しき追憶の絲は、しかし、その時不意に斷たれて了つた。輕い叩頭と一緒に、戸が開いた。彼女は鏡の中に山田京輔の姿を見た。彼女ははつとして立上つた。こんな姿を見られたのが恥しい氣がした。振返つた時、山田は微笑み乍らお辭儀をした。彼もちよつとてれてゐた。

『これはどうも飛んだ失禮。まだ早いから、……』

『いゝえ、ちつとも、私こそ。』

その枝はにつこり笑つた。

『もうお就寢？』

『えゝ、さう思つて居りましたの。あんまり退屈ですもの。』

『ぢや、又そのうちに、……』

『あら、良いのよ。』

『だつて、……』

『ほんとに良いの。』

『櫻井君は？』

『……わたし、知らないわ。……きつと、……』

その枝は黙つて了つた。そして幽かに微笑んだ。山田は何だか憐れみの心で一杯であつた。

―凡そ世の中で一番美しいもの、それは涙の下に微笑む處女である―

誰かの言葉を山田は思ひ出してゐた。

その枝は着物を着換へに立たうとした。

『どうぞ、そのまゝで。』

山田は坐らせるやうにその枝の肩に手を掛けた。彼女は又腰を下した。

『こゝへお掛けなさい。ね？』

その枝は自分の脇を眼でさした。

『でも、櫻井君が留守ぢや。』

『構はなくつてよ、そんなこと。』

『それでも、……』

『良いのよ。』

その枝の聲は不思議に鋭かつた。山田は彼女の脇に並んで腰を下した。

その枝は黙つてゐた。山田も黙つてゐた。

兩人は暫く黙つてゐた。各々別の事を考へてゐたのだ。

『妾つて。……』

不意にその枝が云つた。

『え？』

『妾つてどうしてこんなに薄倖なんでせうね？』

その聲の中には惻々たる悲嘆の響きが籠つてゐた。

『その枝さん！』

山田は一分程身體を寄せた。

『なあに？』

『ねえ。……』

その枝は答へを待つやうに、心持傾げた顔を山田の方に寄せた。

『ねえ、僕に、何もかも、あなたの、その御心配をね、……』

ぽつりぽつりと山田は口を利いた。

『僕に、話して聞かせて下さらない？　ね？』

その枝は、話さうか、と思つた。

『ね？』

山田の心の中には憐れみの情がしきりと醱酵してゐた。

『僕は、あなたの、あなたを、いくらかでも、そんな苦しみの中から、救つて上げるのは、僕の何だか任務、そんな氣がするのです。だから、……』

山田の手はいつの間にかその枝の肩に廻つてゐた。その枝は、話した方が良い、と思つた。

『妾の不幸はみんな櫻井との結婚から出てゐるのよ。……あの男の眞面目さうな顔付に、言葉遣ひに、妾はずうつと騙され通しに騙されて來たの。あの男は妾に戀を持ちかけたあの當時ですら、他の金持の家に出入りして、そしてそこの娘さんに結婚を申込んでゐたんですつて。……』

彼女は、そして、何もかも山田に話してやつた。

（誰でも良い、聞いてくれる人さへあれば良い。）

彼女の口を漏れる一言に、彼女の怨みは消えて行つた。彼女の瞳を離れる涙の一滴に、彼女の愁ひは溶けて行つた。

その枝はいつの間にか歔欷いてゐた。

歔欷く女の動悸は、固く抱き締めた山田の腕を傳はつて、男の胸に怪しくも響いて行つた。丁度湖の底深く沈んだ沈鐘が人魚の鰭に悲しく鳴り響いて來たかのやうでもあつた。波打つ女の胸に、薄い絹の寝間着を通して、そことわかる、ふくよかな乳房の在所がほんのりとうす桃色に高まつてゐるのを、山田はうつとりと見てゐた。

寝そべり臺の彈條がギーッと鳴つた。

『いゝえいゝえ山田さん。……いゝえ、……』
亂れ毛をかき上げ乍ら、その枝は歔欷いた。
『卑怯ですわ。卑怯ですわ。……他人の悲歎に、つけこむなんて、……あんまり、……あんまり、……』
途方もない激情がその枝の舌を縛つて了つた。彼女は身體を震はせて、激しくしやくり上げた。山田は全く途方にくれて、どぎまぎと立つてゐた。
『歸つて下さい。ほんとに、後生ですから。…』
その枝は突伏したまんま、右手を震はせて戸口を指差した。
山田は帽子を握つた。
慚愧後悔の黒雲が、今にも彼の頭の上にのしかゝつて來さうな氣がした。彼は頭を挫るやうに抱へて暗い梯子段を駈け下りた●

二時を廻ると流石繁華のフリードリッヒ街も、全く人通りが途絶えて、商店の電燈もめつきり暗くなつてゐた。寒い風が街の向うの外れから這ふやうに吹いて來た。
身丈の高い大きな身體の巡査さんはゆつくりと大股に街を下りて行つた。その脇に黒い服を着た柳腰の痩せぎすな女が、高い踵の靴を、冷え切つた鋪道の上に響かせて歩いて行つた。巡査さんの二足を三足に刻んで、チョコチョコと歩いて行つた。
『寒いね、巡査さん。』
『あゝ。』
『まだ歩くのかい？』
『あゝ。この外れへ行つてから、又もう一遍引返して廻りや良いんだよ。』
『大變だね。寒いだらう？』
『あゝ。だけど一時よりや大分樂になつた。』
『そりやさうさ。あんな日が續いちやそれこそ凍えて死んで了ふわね。……それもいつそ良いけど。』
『これからもう暖かくなる一方さ。』
『今年の冬もお終ひか。隨分長かつたね。』
『もう澤山だ……客がなかつたのかい？』
『當り前さ。こんな婆さん誰が買つてなんかくれるもんか。……もう三日も何にも食べやしない。時々アニタの旦那がチョコレートを飲ませてくれるけど。』
『チョコレートか。あいつは温かくて、おいしいな。』
ねえ、巡査さん。又有るつて眞實かい？』
『あゝ。そんな事云つてたよ。氣をつけると良い。誰だつて捕へるたあ限らないからなあ。女に生れてりや俺だつて捕へられる方なんかも知れんもの、な。ハハヽ。……お前無札なんだらう？』
女は默つて唾を吐いた。
女はオリーである。
『巡査さん、おかみさん有るのかい？』
『俺かい？ 有つたけど去年の秋に死んぢやつた。誰か來手がないかな？』
『世話してやらうか？』
『あゝ。』
『あたいぢやどう？ ホホヽヽ。』
女は微笑み乍ら、ガードを潜つて、もう左の露路の暗闇に消えて行つて了つた。

雪解の頃

殘雪を浮べた雪解の水が、猫の跫音のやうに、忍びやかに流れて行つた。永い灰色の睡眠から覺めた野山の上に、春の吐息がそこはかとなく感ぜられた。新鮮な若葉の香りがそこここの白樺の森から漂うて來た。
いつになつたら終るのかと氣遣はれた、陰鬱

な北國の冬も、白駒の隙行く、時の流れに流されて、あの氷室の底のやうな夜の街も、昨日の夢と變つて行つた。人々はもうそろそろ毛皮の外套に入れるナフタリンの用意をし始めたのである。

かうやつて獨逸の山河に春は再び巡つて來た。

その同じ春は、伯林の町の上にも訪れた。菩提樹の若葉は日増しに數を加へた。やがてはこの大きな都を燃ゆる緑の中に包んで了ふのである。そこゝのカフェにもう苺の果酒を飲ませる家も見え出した。

日當りの悪い裏街に、永い間氷りついてゐた最後の雪も、もはや下水に溶けこんで、黒い凸凹の敷石の上に、ほのかに立つ陽炎の蒸れを頰に感じ乍ら、惠吉は今グレディッツ街を左へ折れた。

兩側の家並の間に狭く區切られた、青色の空の帶の中にも、ついこの間迄見られたあの重苦しい鉛色の雪雲は、もう跡かたもなく拭はれて、明るく空氣は深まつてゐた。電氣菓子のやうな、今にも消えさうな白雲が、ふはりふはりと浮いてゐた。

（春だな。）

惠吉は四番目の家の門を潛つて行つた。中庭を拔けた裏の二階を一軒借りて、ジョンニー・栗本が住んでゐる。

『よく來てくれましたね。こんな服装で失禮します。……』

痩せぎすな、色の白い顔に微笑を浮べて人懐つこい眼差しが、そこの肘掛椅子をさした。彼は紫色の室内着を引つ掛けてゐた。襟と袖口の小豆色が、よく釣合つた配合を見せてゐる。

『僕は出不精で、社へ行くほか、滅多に出ませんが、……』

臺所の方から、皿を洗ふ音が漏れて來た。

『サシャ！　出て來ない？　お客樣だよ。』

『ハーイ。』

綺麗な聲が聞えて、お皿を重ねる音がした。

『僕の奥さんを一つ紹介しますかな。ハ、、ハ。』

栗本はさう云つて笑つた。机の上の煙草函を開けて、一本自分で取るとちよつと押しやつて、

『如何？』

と尋いた。

『いゝえ、僕は紙卷はやりません。』

『あゝ、さう？　丁度葉卷をきらせてね。買ひにやりませう？』

『いゝえ、好いです。もともと大して好きぢやないんです。』

『さう？』

栗本は燐寸を擦るとそのまゝ立上つて、食器棚の上にあつた眞鍮の大きな茶湯器を持つて、臺所の方へ入つて行つた。

惠吉は接吻の音を聞いたやうな氣がした。

やがてにこにこし乍ら、栗本は戻つて來た。座に就くと消えた煙草にもう一遍火を點けて云つた

『以前はあれでも露西亞の某將軍の娘さんだつたのです。實は何とか姫つてやつですな。それが今ぢや不肖私のゲイ、、婦――娼婦のことであらう、栗本はさう云つた――です。これも革命の生んだ戯曲的情景の一つですね。戯曲的と云へば、兩人のそもそもの見そめ場が、これで中々芝居がかつてゐましたから。どうです一つ小説でもお作りになつちや。……』

栗本は機嫌よく頻りと英語混りに話し出した。

「僕がまだ伯林へ來ない前、アメリカからやつて來て、ハンブルヒでごろごろしてゐた頃の話です。金もあまりなかつたし、社の方にも話がつかなかつたし、そんなわけで友達の家に厄介になつては、毎日方々のカフエだの、酒場だので日を送つてゐたのです。

尤も一流の所に行けるわけはなし、御承知のサン・パウロ、あすこの船乘町の汚らしい酒場を、こつちの一軒向うの一軒と云つた工合に、夕方になつて波止場の灯がチラチラ水に碎ける頃になると、蝙蝠のやうにぶらついてゐたのです。

これは、實は私は、いつかあの「寶島」を表現派で撮つて見ようと思つてゐたからです。あのアドミラル・ベンボーの酒場の所の、何て云ひますか、そのつまり氣分ですな、そいつをとりに行つたのです。表現派に氣分なんてちよつと變ですが。

私はもともと喜劇役者ですが、いづれは藝術的映畫に入りたい希望は持つてゐます。え、船乘なんて云ふ連中はこつちが汚い風體をして、仲間面してゐると、中々人懷つこいものでしてね、〈おい兄弟！〉なんて盃をさして來たりする事が良くありますよ。それに奴等大概曲りなりにも英語をやるので、その點は便利です。伊太利人もゐれば、印度人もゐる。あらゆる國の奴が集まつてゐます。

私はこんな顏をして、縮れ毛だもんだから、よく伊太利人か西班牙人と間違へられます。いづれも潮焼けの赭ら顏に、刀痕の二つや三つは持つてゐる手合です。切られの與三が集まつたやうなもので、蝙蝠ぢやないですが、鏰の刺青に情婦の頭文字を絡ませてるつて連中です。

航海中の博奕の手違ひから、何人抛り込んだの、とか、あの上海の奇怪な阿片窟の想ひ出話なんかを聞くと、人氣離れて、そりや、薄氣味惡い事もありますよ。……」

栗本は煙草の灰を落した。惠吉は壁にかゝつてゐる、栗本と早川雪洲と並んで撮つた寫眞の額を、ぼんやりと見てゐた。

栗本は話し續ける。

「そんな話は又いづれとして、いよいよその「名漢堡戀掬」つてやつを一段語りますかな。ハハ、、……」

とちよつと笑つて、さて云ふ事には、

「何でも秋の事でしたよ。卓子の上に置いてあつた黑のソフトに、濡れた朽葉が一枚乘つてゐたのを今でも覺えてゐますから。小雨がしとしとと降つてゐました。

私はいつも行くその船乘街の酒場で、何て云つたけな、良い名前だつたのだが、……」

栗本は人差指でトントンと額を叩いた

「さうさう。「水車小屋の小娘」つて云ふ家でした。何とまあ、場所柄にもない優しい名前ではありませんか？……所で、私はそこの窓際の机に腰を掛けて、蒸かし立ての腸詰に、芥子をつけて、チピリチピリとラム酒を舐めてゐたのです

窓と云つた所で、そこは街に向つた地下室ですから、たゞ明り取りに、道路と同じ高さに硝子が張つてあるのです。しかもその前の所が棚になつてゐて、酒の罎だの、ハムだの、腸詰だのが飾つてあるのです。表を通る人がちよつとその罎に隱れて、隣の正門の扉を押して、暗いダラダラの梯子を下りて行かうと云ふ仕組なのですね。從つてその所謂窓からは、街を行く人のぼろ靴や、縞のズボンが硝子の周圍からちよつと見える位なのです。何、事はない、水族館を覗いてゐるやうなものですね。

私は室内の暗さと、煙草の煙に咽せ返つて、ぼんやりとそこの明るみを見てゐました。

積荷を運ぶ大きな荷馬車が恐ろしい音を立てて通つて行くその凸凹の敷石道のすぐ向うは運河になつてゐて、小蒸汽の着く波止場がある。低く垂つた煙突の上部だけが見えてゐました。灰色にけむつた小雨の中に、もう灯がともつて、それが窓硝子の水滴に一つ一つうつつてゐるのです。

その時私の眼に、ふと、そこに立つて、ぢいつと内部を見てゐるらしい一人の人影が映りました。勿論顏は見えません。たゞ辨慶縞のスカートが見えたのです。所々切り裂かれた千切れの端に、雨の雫がぐつしより溜つてゐる。ボロボロのズックの靴の中に、靴下も穿いてゐない眞白な足の一部が見えたのです。

私は何と云ふ事もなく、その女の顏が見たくなつて了つたので、そのまゝ勘定を濟ませると、帽子を摑んで、雨外套の襟を深く立てて梯子段を大股に三つ程に上り切つて、戸外に出ました。……」

惠吉は椅子を少し前にずらせた。

「私が表へ出た時、女はチラッと臆病な目をこつちへ投げたきり、又窓の中を覗いてゐるのです。軒燈の青い光を眞正面に受けたその時の彼女の顏は、今でも私の眼の前に大寫になつて浮び出します。」

栗本はその幻影を追ふやうに、しばらく口を噤んで考へて居た。

「それで？」

惠吉は待ち切れないやうに促した。

「帽子も冠らない金色の捲毛は、いつぱい雫を湛へて後光のやうに、やはらかく彼女の蒼白い小さな顏を包んでゐました。

ハッチリとした眼の中に、青く深まつた瞳の色、眞直に通つた鼻筋、薄い脣。――痛みと疲れが、その痩せた頰の上に、はつきりと讀まれはしたが、爭はれぬ氣品が、顏全體から滲み出してゐるのです。雨に惱める秋海棠なんて云ふ形容詞はとても月並で、この場合には使へないものです。

別に惚れたと云ふわけぢやないのですが、その訴へるやうな瞳に出會つた時、彼女を助けてやる事がこの俺の全生命なのだと、何故かさうはつきりと私は思つたのです。これは別に誇張ではありません。

そこで私は靜かに彼女の背後に近付きました。雨の脚が彼女の白い横顏の所だけ見えてゐました。窓の中には蒸かしたての腸詰から温かさうな煙が上つてゐるのです。後で聞いたのですが、彼女は、懷中にたつた日本のお金にして十錢位のお金を持つてゐたのださうです。それであの腸詰が食べられるかしら？と考へてゐたのです。そして、若し食べられたとしても、後どうしようかと、考へてゐたのださうです。そしてお終ひにはヂャンバルヂャンのやうに、その窓の硝子を割つて、それを摑んで逃げ出さうかとも考へて見たのです。丁度そこへ私が近付いて行つて、彼女の肩に手を掛けたのですね。彼女ははつとして振向きました。

物に怯えるやうな、同時に訴へるやうな淋しい眼差し。私はしんみりとして云ひました。

（こつちへおいで、ね？ 娘さん。）

私は英語で話しかけました。そして私は心からから附け加へました。I know what hunger means. つて。これは何かの映畫の字幕で覺えた言葉なのです。それがその時、ふと私の頭に浮んだものですね。

すると私の樣子や、その言ひ振りが、餘りしんみりとしてゐたものと見えて、その女は恥かしさうに下を向いて、そつと微笑んだのです。さつき私の顏を見上げた時のあの物に怯えた影は、もう綺麗に拭はれてゐました。

私は自分の雨外套を掛けてやつて、彼女の肩

を輕く庇ふやうに抱いて、兩人は並んで歩き出しました。すると女は默つて、寄り添ふやうに從いて來るぢやありませんか。

私だつてさつき云つたやうなわけで、餘り溫かい懷中でもなし、まあ最寄りのピーヤ料理店へ入りました。

何でもいゝから註文しろと云つたら、ソツプがいゝと云ふのです。それから卵入りのソツプをとつてやつて、それに炙肉を誂へたのです。すると彼女はその肉をソツプの中に入れて、私の國ぢやかうしますつて云ふのです。そこで初めて、彼女が露西亞人だつて事がわかつたわけです。初めから獨逸人ぢやないとは知つてゐましたが。

彼女は英語を喋るのです。名前を訊くと、サシャ何とかスカヤとか、何でも長つたらしい名前を云ひましたが、サシャだけで御免を蒙る事にしたのです。……』

（サシャか、成程小說的な名前だな。）

と惠吉は考へた。すると一刻も早くその女の顏が見たいやうな氣がし出した。彼は眼の前にいろいろの顏を繼ぎ合せた。

栗本はお構ひなしに話し續ける。

『サシャは夢中になつて食べましたが、しかし、肉叉やナイフのさばきに、どこか素性を語るものが仄見えるのです。

やがて彼女も滿腹したらしい樣子でした。で私は尋きました。

（お前さん、家はどこ？　僕が送つてつて上げよう。）

すると急に彼女の顏は、云ふに云はれぬ悲痛の色を浮べたのです。

（いゝえ、私には家がございません。）

やがて、やつと聞きとれる位の幽かな聲が吐息のやうに、彼女の薄い唇を漏れて來ました。それが又云ふに云はれぬ悲調を帶びてね。私は吃驚しました。意外だつて云ふより、これは物語になる、とさう云つた心持でした。

（ぢや、僕の所へ來ない？　ね？）

自分乍ら可笑しい位優しい聲で私はさう云ひました。女はしばらく默つてゐました。そして突然、ライプチヒでも伯林でも、どこでも良い、早くこの厭な町から他所へ連れて行つてくれつて云ふのです。彼奴に捕まるとそれこそ大變だとも云ふのです。そして話した所に依ると、何でも彼女は、さつきも御紹介した通り、露西亞のさる將軍の娘だつたのです。所が御承知の通り露西亞はあんな工合でせう、家の者は殺されたり何所かへ逃げたりして了つたのですね。彼女は或る惡者の手に引つかゝつて炭箱の中か何かの中に入れられて、リガからはるばるとこのハンブルヒ迄密航させられて來たのです。そして或る娼家に賣り飛ばされて了つたのですが、どうしてもつとめに出ないので、何でもひどい折檻に會つたものださうです。

その時腕を捲くつて見せてくれましたが、鞭の痕だか何だか紫色の痣になつてるぢやありませんか。其家で隨分辛い苦しい淚の日を送つて來たのですね。そしてたうとう或夜、堪へかねて終にそこを脫け出したわけなのです。それからまる三日三晩と云ふもの、或ひは波止場のかげに雨露をしのいだりして、殆ど飮まず食はずに、目宛もなく彷徨つてゐたのですね。何故、水に飛びこまなかつたか、自分でも不思議な位だつて、今でも話す位です。生死のわからない父母に對するあえかなる憧憬がいつでも彼女を背後から抱締めてくれたのです。

さうやつて私達兩人は、友達から少しばかり金を借りて伯林へやつて來ました。あの當時は隨分兩人で苦しい思ひをしましたよ。あの女の編んだレースの卓子掛を賣りに、ウエルトハイムの百貨店に行つて、恥かしい思ひをさせられ

たり、まあそのうちにやつと社の方とも契約が出來て、今ぢや、まあどうにかかうにかやつてゐるわけなのです。社の方にはあれも一緒に出てゐます。私より給金が多い位ですよ。ハハハヽヽ。……』

栗本はほんとに愉快さうに笑つた。惠吉も釣りこまれて幸福な氣がした。栗本は惰勢で又附加へた。

『しかし、ねえ今村さん。私のたつた一つの誇りは、決して私が恩義を嵩にして彼女に強ひたつて事はないのですよ。兩人はお互に自發的に、……と云ふと可笑しいが、心から戀し合つてゐるのです。それは兩人を見て頂けばわかると思ひます。私は、こんな人間でもやつぱり戀をする事が出來るつて事を知りましたよ。……それにしても、何をしてゐるのかしら？　サシャ！……』

『ハーイ。今すぐよ。』

今度はすぐ次の部屋で返辭がした。

『手傳はうか？』

栗本が尋いた。

『良いのよ、もう出來たわ。』

隣りの部屋の聲が答へた。

『でお兩人は結婚なさつたんですか？』

惠吉は隣りの戸に氣をやり乍ら尋いた。

『結婚？　ハハヽヽ。兩人の間はそんなもので穢す可く、餘りに美しい仲なのです。結婚なんてものは足らない愛情を繋ぎ合せる鎹みたいなものですからね。ハハヽ、こりや飛んだ惚氣になつて了つた。』

そこへ戸が開いてサシャが現はれた。

彼女は茶沸器を卓の眞中に置くと、栗本に紹介されて、惠吉と握手した。水をいぢつてゐた手はまだ冷たい。

愛嬌よく笑つて、食器棚からマイセンの茶碗を三つと、ローゼンタール社製の玉葱模樣のお皿を三枚、それから切子細工の鉢に盛つた林檎とデセールを持つて來た。

『何だ、お化粧してゐたのか？』

『あら、譃よ。ひどいわ。』

サシャは笑ひ乍ら睨む眞似をした。

栗本の話で、惠吉が頭の中に描いてゐた顏よりずうつと生々とした美しい、そしてどこか品のある顏付であつた。綺麗に捲上げた縮れ毛の下に、ヴィナスの生れたと云ふ貝のやうな耳が、ほんのりと、桃色に上氣してゐた。小柄な、内氣な中にもどこかキリッとした性格を現はすその引締つた薄い脣、青く深まつた瞳の何か、紅い焔とも云ひやうのない美しい、調和を見せてゐた。しかし人はその瞳の中にそこはかとなく漂ふ一脈の哀愁を見逃しはしないであらう。――誰でもその瞳の奧に見入つた者は、丁度或る悲しい夢を見た後のやうな、果敢ない氣持に捉へられずにはゐられない。

サシャは眞白の手で、茶沸器から煙の出た紅茶を注いでくれた。

『これも、故鄕を想ひ出すつて云つて、この間買つて來たのです。サシャ！　今兩人の戀物語を話して上げてゐた所なのだよ。』

『ほんとに惡い人。』

サシャは打つ眞似をした。

（故鄕だ。もう一生歸れない故鄕だ。）

惠吉はサシャの爲に悲しんだ。

彼はいろいろと、チャイコフスキーだとかボローディンだとか、或ひはツルゲニェフだとかレルモントフだとか、頭に浮び次第の露西亞の音樂家や文學者の名前を持ち出して話をした。

サシャはプーシキンが大好きだと云つた。あの時代の夢が懷かしいと云つた。もう取返しのつかない、昔だとも云つた。サシャの言葉の影には、教養が匂つてゐた。

『サシャ！　お前の話をお客樣にしてお上げ。

ね？」

と栗本が云つた。

サシャは默つて首を振つた。

憲吉は、是非、と云つた。

栗本は、ねえ、と促した。

彼女は、それではざつと話すわ、と云つた。

茶沸器のお湯がチンチンと沸つてゐる。裏街のこの部屋の中には何の物音も聞えて來ない。

サシャはしんみりと語り出す。

「丁度あの十月革命のあつた時、私はモスカウに居りましたの。

私のお父さんはもう年とつた退職軍人で、W縣に大きな地所を持つて居りましたので、何不自由もなく、モスカウの大きなお邸宅の中に、もう中風で足の利かなくなつた身體を横たへて居りました。お母さんは殆ど毎日のやうにお客を招んで居りました

私の家はネバ川の河畔にありました。それはそれは大きな家で、南向きのヴェランダに出て見ると、遠く川を越して向うに、クレムリンの宮殿の屋根の雪や、寺院の金の十字架が朝日の中に綺麗に光つて見えるのです。

私はまだ十六のほんの小娘でした。女學校へ通つてゐたのです。あの日は丁度自家へ歸つて來てゐて、客間で妹のお友達や、家庭教師などと、ピアノを取りまいて、何かの歌を合唱してゐたのです。

所へ召使のドミトリが狼狽てて飛んで來ました。

(自動車へ、自動車へ、お孃さま。)つて云ふのです、私共はびつくりして顔を見合せました。

遠くクレムリンの方で、わあつ！ と云ふ人の鬨の聲らしい騒音が聞えて來ました。それにまじつてけたゝましい銃聲。私共はすぐそれが何を意味してゐるか、わかりました

で、夢中になつて階下へ駈け下りた時、もう既に遲かつたのです。どやどやと入つて來た汚らしい風體をした、手に手に銃や斧を携へた人達に、私共は捕まつて了ひました。

私は眼の前に、あの家庭教師のペトロウキッチが殺されたのを見ました。あの人は何か一言三言云つたのです。忽ち恐ろしい叫び聲がしました。絨毯の上に眞紅な血潮がさつと迸つて、あの人はもう大の字なりに倒れてゐました。

私は思はず顔をかくして了ひました。

父と母とを乗せた自動車は、頻りと私共の來るのを待つてゐるやうでした。こつちへ手をさし出して叫んでゐる母親の顔を、私はまだはつきりと覺えて居ります。あれが……あれが生き別れか、死に別れになつて了つたのでした。……

サシャはちよつと口を噤んだ。再び見ぬ母親の顔を、ぢいつと幻の中に追ふのであつた。

ハンケチでそつと眼を拭いて、さて又彼女は語り續ける。

「私共はそのまゝ貨物自動車に積込まれました。そこにはもう多勢の人が、皆んな蒼い顔をして震へて居りました。一人だつて外套を着てゐる人なんかは居ないのです。

私は、私の家から銀の燭臺や茶沸器を持出してゐる汚らしい人々の群を見ました。滅茶苦茶に踏み荒された雪の庭を見かへりました。

ヴェランダも、あの懐かしい青いお部屋も、……皆んな、皆んなもう私は一生見る事はないのでせう。今ぢやあの大廣間をいくつかに區切つて、靴屋だの錠前屋などがごちやごちやとして暮してゐるのでせう。あのクレムリンの宮殿の前の大廣場―今は〃ラスナヤプオシヤチ(赤廣場)つて呼ばれてゐるんですつて、あすこには赤い星の徽章をつけた百姓の兵隊さん

が、銃劍つきの鐵砲をかついで歩いてゐるのでせう。

それから、私共は貨物自動車で運ばれました。途中の街の上で見たいろいろの慘劇は、今思つても恐ろしい位です。雪の上に血みどろになつて、捨てられてゐる、いくつの死骸を見た事でせう。その上を又自動車は除けもせずに、どんどん轢いて行つて了ふのです。彈條の惡い車輪がその度に、ガタンと妙な音を立てて揺れるのです。

私共は市役所の廣い部屋に寝かされました。藁の上にごろごろとまるで豚のやうに寝かされたのです。そして幾日かの間、私共はまるであの農奴よりも酷く追ひ使はれました。夜中の冰りつくやうな寒さの中に、私共は軌道の雪拂ひ迄やつたのです。月の光が青白く鐵路の上を照してゐるのを見て、私は何度死を決した事でしたらう。私の手は凍傷で、一面紫色に腫れ上つて了ひました。

妹は二日目の日から見えなくなつて了ひました。誰に聞いても返辭一つしてはくれません。可哀さうな妹よ、今頃は何所の地を流浪してゐるのかしら？ 死んで了つたのかも知れないわ――可愛い、私のたつた一人の妹の上に、マリヤ様の御惠みのあるやうに！……』

サシャは暫く黙つてゐた。惠吉は栗本の瞳が優しく潤つてゐるのを見た。

『或日の事でした。私はたうとう機會を掴みました。私は夜、便所に起きたのです。――失禮なお話で御免遊ばせ――。丁度その時、番兵も便所に入つて居りました。

何と云ふ馬鹿な人なんでせう。拳銃の入つた帯革を、外の段の所に置きつ放しにしてあつたのです。私はその拳銃をそつと抜きとつて走りました。私は窓を内から押し開けて、戸外へ出るとそのまゝ、そこの煉瓦塀と建物の間の狭い所を少し走つて、足がかりのあつた所を攀上ると、一間以上もある塀を飛び越えたのです。

私の身體は雪の上に、どつかと落ちました。上草履はそのまゝ雪の中に填つて了ひました。私は靴下一枚で夢中に走つたのです。』

栗本は燃えさしの燐寸の軸の薬場を探してゐるうちに、折角つけた煙草の火が消えて了つたので又一本擦つた。

サシャの話はお湯の滾りと共に續く。

『夜の靄を通してほんのり雪明りのした中に、私は急に街角の所で、黒い人影に出會ひました。着劍の先端が冷たく夜の中に光つてゐました。その男がチラッとこつちを向いたのです。尖つた頭巾を冠つた下に、ギロリと光つた眼。星の徽章が夜目にも赤く見えました

〈止まれ！ 誰だ？〉

鋭い聲が靜かな街に響きました。私は冰りついたやうに立止まりました。その男は銃劍を身構へて近付いて来るのです。

その時、もう私の拳銃は鳴つてゐました。

私は大きな身體が枯木のやうに、どつと雪の上に倒れ伏したのを見ました。私はもう何だか夢中だつたのです。鋭い叫び聲を上げて、私は駈け出しました。小さい街を右へ左へ、曲りくねつて走りました。

そしてどの位走つたのでせう。もう足が凍えて動かなくなつて了つたのです。ぶくぶくと雪の深みに足が埋まつたと思つたら、私の身體はそのまゝどつかりそこへ倒れて了ひました。塀からさらさらと落ちて來た粉雪が、火照つた頬に冷たく消えて行きました。やがて私は顔を雪に埋めて泣きました。わけもなく、たゞ私は泣いたのです。そのうちに私は氣を失つて了ひました。

氣がついた時、街の外れにはもうほんのりと

朝の暗示が、薄桃色のほの明りを、雪の表に投げてゐました。私は一人の男に介抱されてゐたのです。その人は親切にしてくれました。私はその人の家迄従いて行きました。何よりも赤い焔の燃えてゐるストーヴが戀しかつたのです。私はそこで丁度まる四年、女中の代りに働いて居りました。

そのうちに私はある惡い男に捕まつて了つたのです。その男は、私の兩親を知つてゐると云ふのです。今伯林にゐるから、きつと會はせてやるつて云ふのです。それは私にとつて餘りに大き過ぎる誘惑でした。そこで私は苦もなくその男のうまい口車に乘せられて了つたのです。

私はモスカウから汽車でリガ迄送られて、あすこから他の三人の女と一緒に、石炭箱の中に匿されてハンブルヒに密航させられました。ハンブルヒで私は、サン・パウロのある娼家に賣られて了つたのです。それから、……』

『それからはもうお話したよ。サシャ！』

栗本が遮つた。

『さう？』

サシャはほつと輕い溜息をついた。そして栗本の顏を見上げるやうにして微笑んだ。觸られた古疵が彼女の胸の中に、又柘榴のやうな傷口を開いたのである。

それにつけても彼女の心の中には、夢のやうな過ぎにし日の事どもが、少女時代の樂しかつたさまざまの追憶が、長い行列をして通つて行く。

（永いウラルの冬があけると、雪の下から咲き出でる、あのライラックの花の高い香りが、風に送られて漂うて來る。雪解の道を走つて行く懷かしい馬橇の鈴の音。いつもにこにこしてゐるあの馬番のイワンのお爺さん。父の顏、母の顏、妹の顏。……

ストーヴの火が赤々と燃えてゐる田舍の別莊の大廣間。あすこの白熊の毛皮の上に横になつて、フランス人の家庭教師のイボンヌ孃から、よく話して貰つたプーシキンだのガルシンだのの可憐な童話。……）

さう云つた想ひ出の一つ一つがたつた昨日の日の事のやうにも、又もう決して取り返しの着かない、遠い遠い昔の事のやうにも、彼女には思はれたのであつた。

栗本は茶沸器からお茶を注いでサシャにやつた。彼女はまだ默つて考へてゐた。

『サシャ！ 良いぢやない？ 過ぎ去つた日の事は、もう送葬曲で送り出して了つた筈だね。俺達はこれから生れ出る新しい生の爲めに喜ばうぢやないか、ね？』

栗本は優しくサシャの肩を敲いてやつた。サシャは顏を上げて淋しく微笑んだ。

茶沸器のお湯はチンチンと沸つてゐる。

吉は、何かしら美しい物語でも讀んだ後のやうな心持で兩人の姿を見てゐた。

地下鐵道の乘換場で、惠吉は皆川に出會つた。

『やあ。』

皆川は二三人向うの肩越しに相變らずの聲を掛けた。手に變な形をした紙の包みを持つてゐる。

『もう食事は濟んだのですか？』

皆川が尋いた。

『いゝえ、まだ。』

惠吉は答へた。

（何所で食べようかしら？）

と考へてゐた所であつた。

『ぢや、交際ひませんか？ 僕の行きつけの家で。カフェですが、相當食べられますよ。良いでせう、ね？』

皆川は一人で定めてちよつと腕時計を捲くつて見た。

『えゝ。』

惠吉は、一人で不味さうに豚カツを突つく退屈さを免れたので、早速承知した。

兩人は地下鐵道の停車場を、夕方の街の上に出て來た。灯の入つた街の外れの教會からアベ・マリヤの鐘の音が、薄靄の中に響いて來た。

『ねえ君、あの鐘の音色は、撞く人の氣持一つで悲しくも、又樂しくも響くものでせうな。例へば君、一人娘の晴れの婚禮日に撞き鳴らす鐘の音色と、失戀男の怨みを籠めた鐘の音と、そこに自ら別な響が出ると思ひますが。どうです、君に聞き分けられますか?』

『さあ、ちよつと解りませんな。』

『さうですかね。』

皆川は不審らしくさう云つて何か考へてゐるらしかつた。

『あなたはお解りになりますか?』

惠吉は、從つてさう尋いて見たくなつたのである。

『勿論、解りません。』

皆川の答へは甚だ簡單であつた。

『君は何をおやりでしたつけ?』

突然皆川が尋いた。

『僕ですか? 法律です。』

惠吉は口癖のやうに答へた。

(鐘の音は、聞く方の人の氣持でどうにでも聞えるのだ。あらゆる藝術もさうではないかしら? 茶番を見たつて、そこに人生の悲劇を洞察すれば、諧謔けた道化師の顏も悲しい。反對に悲しい詩の章句を讀んだつて、そこに戀の法悦を覺える多情多感の若人もあらう。)

『法律? さうさうこの間聞いたつけ。で法律の專攻は?』

皆川は、鐘の事はもうすつかり忘れたものの如くに又尋いた。

『別に、これつてないのですが……』

惠吉の答へは勿論曖昧模糊たるものであつた。

『ぢや、君、折角こつちへ來てゐる甲斐がないぢやありませんか?』

皆川の聲の中には何かしら、叱責と云つた響があつた。惠吉は辯解をする必要があるやうな氣がした。

『實は、法律をやつてゐるのは、たゞ生活の手段で、自分の一生の目的としては、文學をやつて見たいと思つてゐます。法學士つて云ふ方が何だかパンにありつける可能性が多いやうな氣がして……』

『そりや君、詰らない考へだ……』

皆川の聲は鋭かつた。

『結局二兎を追ふ事になりはしませんか。それに生活の手段なら近頃、文學でだつて得られませう? 文學と云ふものの價値も、もう少くも知識階級の中には十分認められて來てゐますからね。』

『えゝ、僕もそんな氣がするんです。初めは僕も法律學なるものに相當興味を持てる心算でゐたんです。そしてその閑暇に十分、文學の方もやつて行けさうな氣がしたんです。』

『そりや道樂位になら、釣魚やざる碁の程度でね。ハハ……』

『さうです。所が近頃、自分にはとてもそんな精力のない事に氣がつきました。今あなたの云はれた通り、結局、兩方とも道樂になつて了ひさうな氣がして仕方ないんです。』

『當り前さ、君。そりや早速、どつちとも結着をつけるのですな。』

兩人の眼の前には、カイゼル・ウヰルヘルムの記念教會が、その天への憧憬を象徴すると云ふ、ゴシックの尖塔をニョキッと聳かして

ゐた。

『ねえ、君、早く結着をつけたまへ。』

皆川は何か催促でもするやうにさう云つた。

恵吉はばらばらになつた足並を揃へ乍ら答へた。

『えゝ。それは僕も考へてゐます。所で、僕にはとてもこの上、法律學に深入りする氣持は持てないし、文學にどしどし引摺られて行くんです。それに、これは僕の自惚かも知れませんが、どうも自分の仕事はそつちの方にあるやうな氣がして。』

『そんなら猶更、この際斷然法科を止めるんですな。』

『えゝ。』

『さうしたまへ。』

皆川はもうさう定めてゐるらしかつた。

『所が、……』

恵吉は、中々さう簡單には行かない、と思つた。彼の氣持にはまだこの一所が……が引つかかつてゐた。

『え？』

皆川は、これは又意外らしく訊き返した。

『所が、やつぱり中々さうは行かなくつてね。周圍の人の事も考へなけりやいけませんし。周圍の人は皆んな、僕が法科でも出て、所謂融通の利く無事な世間人になる事を望んでゐるんですから。その期待をむざむざと裏切る事は、義理として人情として、ちよつと氣が負けるんです。』

『そりや、君、一時の外面的な考へさ。……』

皆川の聲には眞劍な或るものがあつた。恵吉は受太刀氣味にたじろいだ。

（こりや好い氣になつては話せない。）

そんな氣が漠然とした。皆川は續いて打ち込んで來た。

『そりや、義理も人情も美しい。美しいが、近頃はそれ以上に、と云ふと語弊があるかも知れないが少くともそれと同等に考へる可きものが發明されて、それが此世の中に流布してゐる。つまり自己と云ふ事ですな。人間はやつぱり自分の個性と云ふ事を、一番考へなけりやいけないやうです。それには今迄の所謂狹義の義理人情を、或る時には氷の如くぶつかく必要もありませう。又それが結局は義理人情に合ふやうにもなつてくるのですからね。

一時的の弱さから、個性を殺して、皆に氣に入るやうに、君が法科なんかやつた所で、どうせその道で傑出する氣遣ひはなし、結局それは皆を僞つてゐる事になりはしませんか？……君の云ふやうなそんな表面的の一時逃れの義理人情は、もう昔の夢で、十二一重と一緒に、とつくの昔に廢つて了つてますよ。ハハ、、、……何でも個性に適つた自己の天分を發揮するんですな。

私の考へぢや、今にもつと世が進んで來ると、この一箇の「自己」と云ふ人間の中にも更に數多の個性が分類する時が來る と思つてゐる位です。現にパデレウスキーですかな、あの有名な波蘭の洋琴家ですね、あの人なんか十本の指が各々異る個性を持つてゐるつて云ふぢやありませんか。』

恵吉には反對する餘地が見付からなかつた。

（理論は理論として世の中はさう理窟通りには行かない。）

これが恵吉のたつた一つの逃れ道であつた。で彼は云つた。

『ですけれど、私にして見りや、兎に角、法科をやると云ふ名目で漸く獨[illegible]出して貰つて、今更、文學に鞍替した[illegible]あつちや何の事はない、親を騙したやうな形になりますからね。』

騙すと云ふ事は、君、初めからさう意識してやる事で、君が法科をやるから洋行させてくれと云つた時、兎に角その心算でゐたんでせう？』
「えゝ、そりやさうです。」
「そんなら騙す事にはなりやしません。人間は君、神と違つて、どうせ先の事はわかりやしない。云つた事がその通りになるか、ならないかはその時の事で、たゞ云つた時、自分がそれを信じて云つたのなら、そしてその信じた事に最善の努力を拂へばそれで良いのです。
結果より動機が大事なのさ。君、日本人は兎角、現に現はれた結果だけを見て物を云ふから、間違ひが起る。ちよつとした例が、お茶に入れて飲む時の色が紅いから、紅茶つて云ふでせう。西洋人はそこへ行くと、入れる前の品物そのものが黑いから Black Tea と云ふ。ね？ それだけ違ふのです。ものの見方が、觀察點が、向うの方が本質的ですな。」
惠吉は何だかこの人の云ふ事を馬鹿にしては濟まないやうな氣がし出した。
「でも、いくら先の事はわからないと云つても、さう矢鱈に目的を變へて行つたら、又世の中の人は、良く氣の變る男だなんて、五月蠅いですからね。」
「そりや、君、世の中の人が云はなくたつていけない事さ。僕の云ふのは矢鱈に目的を變へても良いと云ふのではない。一旦云つた以上は、その實現に向つて全力を擧げて努力する事は絶對に必要だ。君の話に依れば、法律はたゞ生活の手段だつて云ふのでせう。手段なら君、他に良いのが見付かれば、それに變へたつて、そんな大した非難はない筈です。スピノーザが玉磨きをしてゐたつて、靴屋になつたつて、君、彼の哲學自體には何らの交渉もない事ですからね。」
惠吉はもう一遍考へなほして見る必要があるやうな氣がした。彼は何だか困つて了つたやうな氣もした。そしてそのお尻を彼は、もう一遍世の中の奴等に持つて行つた。
「實際世の中の奴等は文學に對する理解がありませんな。文學者と云へば、頭垢だらけの髮の毛を長く伸して、矢鱈に心中するものと、てんから思ひこんでゐるのですから。何か不道徳な場面や惡人を描寫すると、忽ちそれは作者自身の經驗であり、性格であるかのやうに誤り取られて了ふのですからね。さうさう出て來る人物がことごとく修身の先生みたいな人ばかりぢや小說にはなりませんからね。美しい場面、人物をより良く美しくする對照效果の爲に、醜い場面、人物を好んで描く事は、人道主義の小說家でも良くやる手段です。それに、自分等の直接經驗以外の世界に對する盲目さを以て、直ちに、藝術家の想像の能力をさへ否定しようとするのですから、全く以てやり切れません。」
「さうですな。その點、僕も大いに同感しますよ。自分の頭に勝手にでつち上げた小つぽけな概念を以て、直ちに一般を推さうとするのは、實際日本人の惡い癖です。人中に出て初めて自分の癖に氣がつくやうに、かうやつて外國に出てゐるといろいろと日本人の惡い癖が目につきます。僕は自分が日本人であるが故に、餘計厭になります。」
「その癖、そんな人々に限つて、精々巖窟王かルパン位しか讀んでゐないのですから全く以て困つたものです……」
惠吉は獨りで憤慨してゐた。
『でも、そんなのはまだ良い方かも知れませんよ、中には、文學でも神田伯山のものは讀んで見たい、なーんてのがあるんですからね。それで文學罵倒論も凄じい。」
「そりや、結局、貶す方が無智なので、自分の恥にこそなれ、何も文學と云ふものの價値には

影響のない事です。大工の熊さんが、お能なんて屁みたいだ、と云つた所で、お能の値打が八木節以下に下るわけのものでもなし。所謂、群盲象を評するの類で、尻尾を觸つたものは、（象は蛇みたいだ）と云ひ、腹を觸つたものは、（壁みたいだ）と云ひ、肢を觸つたものは（柱みたいだ）と云ふ。目あきから見りや笑止の沙汰ですな。……そりやこの廣い世間の事ですから、文學から講談落語級の娛樂しか汲みとれない人の多勢ゐる事は事實でせう。が、それを以て、直ちに自分の汲みとれない他の效用を否定し去る事は、なんとまあ僭越な話ではありませんか。——望遠鏡はその度に應じて、見える星の數は定つてゐるものです。……

　それに、文學が金に緣がないと云ふ考へはどうですかな？　尤もそれは才能の問題ですが、創作とは限りません、研究にしろ、批評にしろ同じ事です。そこは君もよく考へて見ないといけませんよ。先刻の生活の手段云々の問題に關係して來ますからな。……』

　悄く步いて皆川は又附け加へた。

『人間つてものは、兎角誰でもお湯の中で歌を唱ふと、自分の聲に惚れ惚れとするものですから。……僕なんかもさうだが。』

惠吉には、この人は眞實の事を云つてゐる、とそんな氣がした。

　タウエンチン街の外れを左に曲つた細い通りの又外れの角に、一軒の小さなカフェがあつた。兩人はそこへ入つて行つた。

　酒場の方にゐた女が二人許り、皆川に眼で挨拶をした。給仕がやつて來て、又、黑珈琲か、と尋いた。皆川は苦笑して、さうぢやない、と云つた。兩人は牛の肝臟と野菜サラダを註文した。

『實はね、……』

　やがて皆川は笑ひ乍ら話した。

『每日、僕はこの家へ來て、每日ブラックコーヒーを二杯定つて飮んで歸つて行く。だからいつも獨りで來ると、向うから默つて持つて來るのです。いつだつたか面白かつた。あすこに女がゐるでせう。あれが何かこそこそ話してゐたつけ、やがて僕の所へやつて來て尋いたものです。

（あなたは每日さうやつて、この家へやつて來るが、一體私達兩人の中、どつちに惚れてゐるのです？）と來た。僕は默つて兩人の顏を見て居たが、やがて靜かに云つてやつた。

（俺はブラックコーヒーに惚れてるんだつて。ハハヽヽヽ。』

『ハハヽヽヽ。』

　兩人は美味さうに牛の肝臟を喰べた。

五月の小鈴

　フロウ・フロウの寄席酒場の隅の卓子に先刻から、待ち侘びた顏をもて餘して、眞中と云つてもすぐ鼻先の演技場を詰らなさうに見てゐた。

その男イコール富田。

　今買つたばかりの煙草の箱を、あらかた女達に取られて了つて、最後に殘つた一本を、さも美味さうに吹かしてゐた。

　煙草の煙と、赤や靑の光の中に、女の肌と寶石が、その光の通りの色を反射させてゐた。

　前の空椅子の主にならうと、遠くから、又通りすがりにいろいろの、細眼丸眼の秋波が踊る。アニタの客と、知つてる女はそれでも愛嬌笑ひに煙草一本を稼いで行くことを忘れはしなかつた。

　演技場では娘の拳鬪が行はれてゐた。うら若い少女が猿股一つの猛鬪振りであつた。その

猿股の紐を故意と切らせて、歡樂に荒み切つた頽廢者の群に、とつて置きの注射をするのがヤマだと云ふ、さう云ふ客種なのであつた。

流石見る氣もしなくて、富田はもう三度目の時計を見た。

勝者に客が賭けた懸賞金を高々と讀み上げる。奇怪な音樂がこの閉て切つた小部屋の中に漂つてゐる。

やがて勝負は終る。一旦樂屋に引込んだ彼女等は、手輕の早化粧で再び化けて出る。一人の男が彼女等の寫眞を賣つて歩く。それを買つた客の間に、彼女等は自分達の席と温かいチョコレートの一碗を見出すのであつた。

富田はもう一本煙草が吸ひたかつた。しかし一本吸ふ事は二十本吸ふ事であつた。彼は我慢の代りにもう一遍時計を見た。四度目の時計が三時を指した時、彼は入口のカーテンの所にやつとアニタの笑顔を見た。彼は綻びかけた微笑を西瓜の種子の如くに噛み壓した。

『遲いぢやないか、え？』

『だつて——大急ぎで來たのよ。』

アニタは思ひ出したやうに急しい息を吐いた。

『煙草？』

『ない。』

『ぢや買つてよ。良いでせう？　ね？』

『あゝ。』

兩人は平常のやうに、チョコレートを頬張り乍ら、ドローテエン街を曲つて行つた。二つ程街を過ぎた所に、ホテル・バッセローナと赤い文字を表した、算盤形の軒燈が懸つてゐた。兩人が行きつけの宿であつた。

門を入つて、曲り梯子を三階上ると、その宿がある。兩人は電鈴を押した。

今日は生憎部屋が塞がつてゐる、一つ汚いのなら空いてゐるが、と云ふ言葉であつた。

『そいぢや、ねえ、トミタ！　いつそあたしの家へ來たらどう？……』

アニタが尋いた。

『ね？　汚い所だけど、腸詰位ならあるし、それにお酒はこゝで分けて貰へば良いから。ね？　いらつしやいよう。』

ホテルの部屋代だけでも餘計貰へば、可愛い息子のオットーに玩具位は買つてやれる、とそんな肚であつた。

兩人はチェリー・ブランデーの罎と、燻製の鰻の包みをぶら下げて、又梯子段を下りて行つた。

フリードリッヒ街も外れのガードの下の小暗闇に、一人の年老いた盲目のヴァイオリン彈きか、何かしらうら悲しい曲を奏でてゐた。

お爺さんの白い眼が、薄闇の中に奇妙に光つた。

お爺さんの脇には、大方孫であらうか、七つ位の男の子が帽子を裏返しに持つて、しよんぼりと立つてゐた。別に憐れみを乞ふでもなくかうやつてもう人通りの薄れた街に立ち續けては、習ひすさびの曲を奏でてゐるのだ。

アニタと富田は反對側の人道を、寄り添ふやうにして歩いて行つた。

『トミタ！　少しやつて頂戴な。ね？』

富田は默つて札を二三枚渡してやつた。アニタはそれを手に持つて、道を横切つて行つた。

『フランツ！』

『アニタの姉さん！　有難う。』

男の子は顔馴染と見えて、懐かしげに微笑み乍ら頭を下げた。お爺さんは白い眼を瞬いて、何かもぐもぐ口の中で禮を云つた。

『寒いだらう？　フランツ！』

『あゝ、でも寒いよか、あたいお腹が空いてるんだよ。』
『ぢやそれで何か温かいもんを食べさせてお貰ひ。ね？　フランツ！……お休み！』
『お休み！　アニタの姉さん！』
アニタは又道を横切つて富田と並ぶと、やがて兩人は橋の上に掛つてゐた。下には黒い運河の水の中に、星が二つ三つぢいつと氷りついてゐた。
アニタは、あの白壁に圍まれたドレスデンの孤兒院に、自分の會ひに行くのを、可愛らしい指に數へて待つて居る、息子のオットーの事を考へてゐた。
（早くあんな大きな男の子に成つてくれたら、まあどんなに嬉しい事だらう。遠くから走つて來て、いきなり脊伸びをして、自分のこの頰にチュッと接吻をしてくれる。）
アニタはそつと微笑んだ。
兩人はもう客の閉ねた獨逸劇場の暗がり道について曲つて行つた。ルイゼン街の露路を右に入ると、その外れのちよつと手前にアニタの家は在つた。
大きな扉の中の暗闇に、兩人は吸はれるやうに入つて行つた。アニタは燐寸を擦つて先に立つた。乏しい灯の中に照らし出されたあたりの壁は、黒く煤んで、所々崩れた所も見えてゐた。
燐寸は暗くなつたかと思ふと、そのまゝぼうッと消えて了ふ。兩人の周圍には氣味の惡い鳥羽玉の闇と、夜の冷えと。
アニタは又二本目を擦る。やがて又消える。
三本目。
四本目。
兩人がかれこれ三階程も、曲り梯子を上りつめた頃、二つ向ひ合つた二軒の右側に一ミュッラー一と幽かに讀まれる眞鍮の表札がかゝつてゐた。
『此家よ。』
とアニタが云ひ乍ら鍵をさし込んだ時、四本目の燐寸は幽かな香を立てて消えかゝつた。二三寸の紫色の煙が彼女の顔の所に漂うた。
『熱い！』
アニタがいきなり燃えさしを放る。それは絨氈の敷いてない床の上に落ちて行つた。そしてもう一遍ちよつと燃え上つて、そのまゝ消えて行つて了つた。——カフェで先刻アニタが、他の女から燐寸の軸を四本ばかり、自分の空箱に入れて貰つてゐた、そのわけがわかつたのである。
富田は闇の中で微苦笑した。
戸が開いた。とつつけの廊下に汚い前掛みたいなものを着たオリーが、蠟燭を持つて立つてゐた。片方の手には雑巾をつけた棒を握つてゐる。
『今日はお掃除よ。』
さう云つた聲の中に、富田は不思議な悲しみの調を感じた。
どつちかと云へば身長の高い、工合よく調和のとれた姿。生地乍ら眞白な膚。お化粧も餘りしてゐずに心持老けては見えるが、若い日の美しさが、丁度ずうつと前に振つた香水のやうに、その顔のどこからか、ほのかにも漂うて來るのである。
『以前はハンプルヒの有名な踊り子だつたのよ。オリーが出ると云ふと、アルハンブラの小屋は、前の日から賣切れて了ふつて騷ぎだつたのですつて。』
とアニタからよく聞かされるのであつた。
オリーは自分の淋しい姿が、この兩人の上に暗い陰影を投げ掛けてゐる事に氣がつくと彼女は急に笑顔になつた。
『今日、そりや可笑しかつたのよ。私、聞

暇だつたから、あんたの部屋を掃除して上げたの。……』
『さう？　どうも有難う。オリー！』
アニタは富田の帽子をそこに置いてある刷毛でちよつと擦つて、釘にかけた。
『いゝえ、そんな事は何でもないのよ。……』
オリーは陽氣に喋り出した。
『そしたらね……私、窓硝子を拭いてゐたのよ。窓の框に金盥を置いて、石鹸で拭いてたの。そのうちに、そりや夕方なのよ、どうしたはずみだか、金盥が落ちさうになつたの。私、はつとして抑へたけど中の水が零れて、浮いてゐた石鹸が落ちちやつたの。私がびつくりして下を見たら、まあ、丁度下を通りかゝつた人の頭に、それも御丁寧にツルツルのお禿ちやんなのよ、その禿頭に石鹸がぶつかつて、ツルりと滑つたかと思ふと、そのまゝ生きた鼠のやうにところころと轉がつて木の根の所で止まつたの。あんな藝當しようと思つたつて中々あゝ上手く行かないわ。
私、なんだか氣の毒でもあるしそれに怒られるだらうと思つて一旦狼狽てて引込めた顏を、今度は又そうつと出して見たの。さうしたらまあ、そのお爺さん、薄汚いハンケチで、ツルりと禿頭を撫でると、今度は落ちた石鹸を拾つてそのハンケチに包んでね、そのまゝすたすたと歩いて行つて了つたのよ。私、氣の毒つて云ふより、何だか可笑しくなつて來て、獨りで、大笑ひして了つたのよ。ホヽヽヽ……』
オリーは又一しきり大仰に笑つた。
『さう？　滑稽ね。』
アニタはちよつと默つた。やがて彼女は尋いた。
『オリー！　あんた。今日何か食べた？』
アニタの聲は優しかつた。
『えゝ。』
そしてオリーは眼を伏せた。
『ねえ、オリー！　私の部屋へ來ない？　お掃除のお禮に、今日は御馳走するわ。ね？』
『いゝえ、良いのよ。』
オリーは淋しく微笑んだ。
『ねえ、良いでせう？　トミタ！　ね？』
アニタは富田の方を向いた。
『あゝ、あゝ、來たまへ。うなぎ。』
と云つて紙の包みを差上げた。
富田は、この短い彼女等の會話の中に溢れてゐる、優しい美しい人の心を見てほろりとした。
『これからはきつと、オリーも一緒に招んでやらう。』
オリーは廊下の向うの暗がりに消えて行つた。殘された兩人は蠟燭を持つて右側の部屋に入つた。アニタは蠟燭の火を瓦斯に移した。
青白い仄明りに照し出されたこの小部屋は、部屋と云ふより、長い廊下の一部を、良い加減に區切つて造つたのかと思はれるやうな狹い細長い部屋であつた。
衣裳棚と、洗面器臺と汚い丸卓子が一つ、椅子が二脚、金物の安寢臺——それが彼女の全財産であつた。壁に沿うて置かれたその寢臺が殆ど部屋一杯に見える位、それこそ疊半疊敷ける餘地もないのであつた。
アニタはすぐ着物を脱いで、それを丁寧に刷毛を掛けて、靴下も丁寧に捲いて、帽子にはちやんと買つて來た時の紙袋をかぶせて、それから普段着——と云つた所で一枚しかないのであらうが、それに着換へた。
『私の生命よ。』
着物を衣桁に掛け乍ら、アニタはさう云つて笑つた。そこへオリーが入つて來た。アニタは二つの椅子をすゝめると自分は寢臺を前に引つ張つて、その上に腰を下した。ギーッと厭な

彈條の音がした。
『隨分良い部屋でせう?・・・・』
アニタが笑ひ乍ら訊いた。
『私のお城よ。』
酒精ランプで紅茶を沸かすと、アニタは鰻の皮を剝き始めた。富田はお茶の中へチェリー・ブランデーを注いだ。オリーは鰻を美味さうに澤山食べた。
アニタは腸詰を出して來たが、富田は手を出す氣にはなれなかつた。
(それが彼女等の幾日分の御馳走なのか?)
そして彼は妙に氣が重くなつて行く自分を可笑しく思つた。
オリーはやがて出て行つた。アニタはお酒だけ殘して、急いで卓子の上を片付けた。
富田はしきりと眠かつた。彼は襟を外した。

卯女子は故國の母校から送つて來た作樂會の會報を見てゐた。大分苗字の變つて行くのが、彼女には妙に淋しい氣がした。一級上の組など、もう舊姓何々と附いてゐない人は、指を折る位のものであつた。彼女はこの間、手紙で細々と、姑との仲たがひを書いて寄越した菅諒子と云ふ友達の事を思つてゐた。
それにしても卯女子は、今日こそ思ひ切つて兄に話さうと思ふ事があつたのだ。
『ねえ兄さん。』
『何だい?』
山田は讀みかけの雜誌を置いた。
『ねえ、・・・・』
『あゝ。』
『諒子さんも隨分可哀さうね。』
卯女子の口からは、しかし、こんな事が出て了つた。
『諒子さんて?』
山田は煙草に火を點けた。
『よく先、廣尾の自家へ遊びにいらした方よ。諒子さんて・・・・』
『あゝ、さうさう、あのあれだらう、修身の本へ四葉のクローバーを挾んだつて云つて、老嬢の先生に叱られた?』
『えゝさうよ。あの方よ。お辨當のパンを女中が塵紙で包んだつて云つて、お午の時間に泣き出して了つた方よ。』
『あゝ、知つてる。あの人がどうかしたの?』
『御結婚なすつたのよ。』
『そんなら結構ぢやないか?』
『所が、やつぱりお姑さんとうまく行かないのですつて。』
『さうかい。番組通りなんだね。』
『えゝ、さうなの。しかも典型的なのよ。』
そして卯女子は此の間の手紙をすつかり兄に話してやつた。山田は默つて聞いてゐた。
『ねえ、卯女子・・・・』
やがて山田は口を切つた。
『大概の人は飛び拔けた馬鹿か子供でない限り、皆相當の理性を持つてゐて、それに依つて行動をするものだ。それは少くとも、その時のその人にとつては正しい事なのだ。それに對して好き嫌ひは云へても、善し惡しは中々云へるものではない。
だから各々の人がお互に他人の行動を、もう少し寛し合つて行つたならば、もつともつとこの世の中は住みよくなると思ふよ。
例へて見れば今の嫁姑の關係と云つたものがさ、立場や境遇の殆ど反對の兩極に立つ二つの個性が、各々その好惡の感情から來る善惡の批判を眞向に振り翳すのだから、矛盾と衝突の起るのは仕方がないさ。お互に我を張つて睨み合ふ。それぢやまるで二本の軌道のやうに、何處迄行つたつて會ひつこはない。

姑は親の權利を嵩に着る。そこで若い者から、幸福の邪魔者に見られる。人間は他人に邪魔にされ乍ら生きてゐたつて、何にもなりはしない。

姑はバタ臭いものは大嫌ひだ。嫌ひだけならそれで良いが、直ちにそれを批判する。（近頃の若いものは、やたらに新しがつて、それバタだ、それチーズだつて、脂つこいものばかり食べたがる。日本人は日本人の食べものを食べてゐれば良い。何々さんを見るが良い。あんなに痩せて弱々しい。）などと脂つこいものを食べないで弱々しい人と、脂つこいものを食べて丈夫な人を除いた例を持出して來る。さうして當人の育つて來た明治の初年と、今の若いものの育つた時代と、思想の違ふやうに食物の種類も違つて來てゐる事、從つて體質の變つて來てゐる事を毫も顧みない。――體質、年齢の根本義を沒却して、營養問題を口にしたつて、それは引力を無視して天體の運行を論ずるやうなものさ。』

山田は、諄々と云ふ字が一番當嵌る、そんな口調で說き續けた。

『とかく頑迷固陋な老人は、自分の頭にでつち上げたちつぽけな思想を以て、流れ行く世を律しようとするから、そこに衝突が起る。自分の乘つてゐる小船が周圍の水の流れにつれて動いて行く事を忘れてゐる。（船に刻して刀を求むる。）つて奴さ。こゝの所から刀を落したからと云つて、船緣に記しを付けた所で何にもなりはしない。船ごと動いてゐるんだからね。

思想は眞理とは違ふ。眞理に到達する考へ方の云はゞ道なのだ。人に依つて、時代に依つて移り行くのは決して惡い事ぢやない。

パンテライつて希臘の言葉がある（萬物は流る。と云ふ事だけがたつた一つの不變な眞理なのださうだ。眞實の意味は知らないが、何だかそんな氣がするぢやないか。――「中將湯」の商標のお姬樣だつて、近頃は現代的な顏をしてゐる。……』

山田は、相手が感心して聞いてくれると、止めどなく喋る男であつた。

『もう旅人も通らない古道を通りたがつたり、使へもしないものを、たゞ古くからあると云つて大事にするのは滑稽な事だ　―盲腸を大事にするやうなものだからね。

が、しかしだね、又さうかと云つて、何も古いから何でも價値がないと云ふわけでも勿論ない。古いと云はれて怒るのは、老人の不見識から來ることで、結局古いものは惡い、と云ふ事を自分で承認する事になる。大和の法隆寺は古いつて云つたつて、別に法隆寺が下らないものだと云ふ意味ではない。却つてまるで反對の意味ぢやないか。ねえ、さうだらう？』

『姥捨山つて兄さんみたいな人が考へたのよ、きつと。』

あゝ糞味噌に云はれると、卯女子は、何だか姑の肩が持ちたくなるのであつた。

『何も、僕は老人を排斥しようと云ふ意味ぢやないよ。彼等には又彼等の世界がある。それに對して僕は、何も口出し度くはない。雲龍磨かうと、海鼠腸食べようとそれは勝手さ。僕は、自分がその趣味を解せないからと云つて、別段それを輕蔑したり惡く云つたりする程小心ではない。その代り老人達も、我々若い者の氣持や、やる事をもう少し、大きな、清い心で寬してゐてくれゝばそれで良いのだよ。お婆さんが切り下げにするのが寬されるのなら、若い娘が七三に結ふのを惡く云ふ理窟はない。お爺さんが十德を着て歩くのが惡くないのなら、青年が中外套に赤のネクタイをやつたつて一向差支へないわけぢやないか？

とに角もつとお互の世界を寬し合ふ事だね。

諒子さんが夫にネクタイを編んでゐたら、（この頃の若い者は亭主か何かぢやなければネクタイを編んでやりやしない。鼻の下の長いつたらありやしない。）なんて皮肉を云ふつて書いてあつたね。そんな皮肉の代りに（ほゝゝ、見事に編めたね。）とでも云つて御覽。そりやきつとうまく行くよ。兩人だつて喧嘩をして暮して行くよりは、樂しく仲よく暮す方がはるかに良いのには違ひないからね。――そりや若いものの仲の良いのを見て淋しく思ふ老人の氣持は僕にもわかるがね。さうかと云つて自分達が、兩人つきりの幸福と云つたものを經驗しなかつたからと云つて、若いもののそんな幸福をやつかむ事は隨分と醜惡な話だよ。』

山田はもう一本の煙草に火を點けた。

『自分の知らない事を、人は輕蔑したがるものだつてゲーテの云つてゐる通りだが、眞實に醜い事だ。知らない世界を輕蔑する前にそれを知らないと云ふ自分自身の無智を輕蔑すべきぢやないかね？

だから、みんなが、自分以外の他の世界の事を輕蔑し合つたり貶したりせずに、お互がもう少し尊敬し寛し合つて行つたなら、そして老人は若者の制動機となり、若者は老人の刺戟劑となつて、さうやつて二つの個性が相互に連れ合つて進んで行く、それが一番穩健な社會の進化ぢやないかしら？……こんな事、僕が今更喋々する迄もない、當り前過ぎる位解り切つてる話なんだがね。』

『えゝ、眞實にさうよ。』

卯女子には兄のこの氣持が、今日は何だか殊に嬉しかつた。舌を縛つてゐたむすぼれが解けて行つたやうな氣持がした。

『あのねえ、兄さん。』

『何だい？』

『私、今日は少しお話し度いことがあるのよ。』

『あゝ何？』

『あのね、私ね、……』

卯女子はこゝで云ひそびれて了つたら、又機會を失つて了ふのであらうと思つた。思ひ切つて云つて了はうと思つた。

『あの、私ね、今村さんとね……』

『あゝ。』

『あの、お約束して了ひ度いと思ふのよ。どう？　兄さんは？』

山田は暫く默つてゐた。長くたまつた煙草の灰を、大理石の灰皿の上にぽたんと落してさて云つた。

「今も云つた通り、僕は人の行動に對して、批判したり干渉したりする事は嫌ひだし、それに不必要な事だと思つてゐる。人を信ずる事の出來ない程汚い心は持つてゐない。だからお前にとつて眞實に幸福ならば、僕も喜んで贊成するよ。今村君ならば良いだらう。僕もあの人は大好きだ。」

兩人はそれつ切り默つて了つた。山田は立上つた。

（その枝さん、今何をしてゐるかしら？）

「お茶を入れませう？」

卯女子も立上つた。

「あゝ。」

山田はピアノの前に坐つた。

卯女子は靜かに臺所の方に入つて行つた。お湯を沸し乍ら、卯女子は、悠やかに流れて來るベートーベンの「ワルドシュタイン・ソナタ」を聽いた。

「私、もうぢき今村つて名前になるのよ。」

チンチンと沸るお湯沸しに向つて、卯女子はそつと云ひ聞かせた。

窓の外からチチと啼く雀の鳴き聲が、陽氣な春の唄を傳へて來た。あの唄を聞いてゐると、いぢけた人の心も自らひろがつて行くやうな

氣がするではないか。

　未來派や表現派等の展覽會を見て來た今村惠吉は、そこで面白いと思つて買つた二枚のお皿を大事さうに小脇に抱へて、暖かい陽の溢れた麗かな街の上を歩いて行つた。

（アルキペンコと云ふ人には、机の上の花瓶があんなに歪んで見えるものかしら？　存在してゐる舊藝術を眞實に理解した上で、それに慊らず、進んで新しい美を求めて行く彼等の企てなら、俺も自分の不明を恥ぢて、謹んでその前に跪く。しかしたゞやたらに逃げこんだ避難所なら、狂人病院の落書より罪があるだけ穢はしい。）

　そんな事を彼は考へてゐた。彼はこの間讀んだ法律書の中のイエーリングと云ふ人の言葉を思ひ浮べてゐた。

「羅馬法を通して、羅馬法の上に。」

　彼は「舊藝術」と云ふ字を「羅馬法」の代りに代入して見た。

（さうだ。現代を超越する者は、須らく現代を知らなければならない。）

　彼はMと云ふ友人を想ひ出した。伯林へさう云ふ繪を學びに來てゐるのである。

（あの男なら、そんな上つらな新しがりをやる男ではない。自分の蒙を啓いてくれるに違ひない。いつか會つたら尋いて見るかな。）

　そして惠吉はMが世俗の罵詈を外に、孜々として自分の信念に勉んで行く姿を想つた。

　彼の頭には、あの燕石十種の中に——……歌舞伎役者の似顔を畫くを以て業とす。然れども其技巧ならず、一兩年にして廢止す。云々　とわづか數行にかたづけられて了つた寫樂の似顔畫が、嘲笑ふやうに渦を卷いた。

「五月の小鈴！　五月の小鈴！」

　廣場の泉の廻りに多勢の花賣娘が、兩手に一ぱい抱へた鈴蘭の花を賣つてゐた。清々しい春の香りがやはらかく惠吉を包んだ。彼は一束買つて、その一本を釦の穴にさしこんだ。眞白の可愛い小花が、成る程これは小鈴に似てゐる。

　惠吉は、その花の一面に咲き亂れてゐる野山の景色を想つた。そしてそこに眞實の春がある樣な氣がした。旅の心がふと彼の頭を過ぎ去つた。もうすぐ快走船の季節が來るではないか。

「五月の小鈴！」

（二羽の渡り鳥はどこの森影を流浪ひ行くかしら？　卯女子は足が弱いかしら？）

　そして彼は、卯女子と共にするであらういろいろの旅の事を頭に浮べてゐた。

　ボタンと音がして、赤い眞紅なロートドルンの花片が惠吉の黒のソフトの上に散つて來た。押花にして卯女子の誕生日に贈るレナウの詩集の間に挾んでやらう、そんな事を彼は考へてゐた。

（神樣は澤山の茶碗を拵へる。それから又澤山の蓋を拵へる。神樣は一つの茶碗を選り出す。そして今度は又一つの蓋を選り出してそこに一組のお茶碗が出來上る。——それが夫婦と云ふものだ。

　俺の蓋の卯女子よ！）

『五月の小鈴！　五月の小鈴！』

　花賣娘の可憐な呼び聲が春の微風の中にとけこんだ。

草笛

　昨日惠吉のさして行つた鈴蘭の可憐の花が、黒光するグァンド・ピアノの上にほのかにうつ

つてゐた。布巾をかけてゐた卯女子はそつと脊伸びをして、その香り高い花束の中に顔を埋めて接吻けた。

朗かな朝の光が、黄色いカーテンを透かせて、部屋一面に流れこんでゐた。

窓を開けて卯女子は胸一杯に新鮮な空氣を吸ひ込むと、身體中の血が一時に新しくなつたやうな氣がした。何となく微笑まれる心持であつた。

（今日は良い事がある。きつとある。）

卯女子は太陽を見上げた。

その太陽も、空も、街も、青葉も甍も、みんな微笑んでゐる。初夏の日が微笑んでゐる。

エンミーの輕い叩音が聞えた。

『ビツテ！』

卯女子は振向いた。そして思ひついたやうに塵埃のついた布巾を振つた。

『御電話。』

『どなた？』

卯女子には勿論わかつてゐたのだ。

『ヘール・イマムラ。』

エンミーの答へは卯女子の背中を追つ掛けた。

『お待遠さま。えゝ、……いゝえ私こそ。遲くおなりだつたんでせう。……まあ。……えゝ、……えゝ、……大丈夫だわ。私、ちつとも恐くなくつてよ。……えゝ、……尋いて見るわ。きつと行つてよ。えゝ、……えゝ、それぢや。さやうなら。』

部屋へ戻つて來ると、彼女はいきなり爪先でクルクルと二三回廻つて、そのまゝ寢そべり臺に腰を下すと、兩足を赤ん坊のやうに動かせて、兩手を思ひ切つて高くさし上げた。

『ウフッ！　何してゐるんだい？　自彊術？』

兄の京輔がいつの間にか背後の戸口に立つてゐた。

『まあー!!』

卯女子は耳の根迄赤くして、さし上げた手のやり場に困つたやうに、そのまゝ顔を蔽して了つた。接吻をしてゐる所を見付けられたやうな氣が、彼女の心にだけはしたのであつた。

ポツダムの廣場の角で、惠吉は待つてゐた。忙しげにいろいろの帽子が、右へ左へ往き來した。

（もうそろそろ夏の帽子を買はなくちや。）

惠吉は何の色にしようかと、頻りと考へてゐた。

（あすこに行く若い人の濃緑も良いな。少し氣障かしら？　やつぱり紺か鼠色がおとなしくて良い。）

その時、彼はポツダム街を走つて來た市街自動車の二階に、山田と卯女子の姿を見た。遠くの方からもう微笑み掛けてゐた。兩人の姿は自動車と一緒に電車の向うに隱れたが、追ひ越して出て來た時、もう兩人共梯子を下りてゐた。惠吉は足早やに、そつちの方へ歩いて行つた。

三人はポツダム行きの汽車の中に並んで腰を掛けた。窓の外には―綠の森―の松林が目まぐるしく走つて行つた。斜めの陽差しが林の中に縞目を見せてゐた。

夜になると、そこの森影に、この小徑に、追剝、陰謀、媾曳、殺人と、あらゆる「暗い行爲」の行はれるこの森も、今明るい太陽の下に、隈もなく照らし出されてゐるのであつた。

三人はワンゼーで下りた。

薄緑の若葉の中に、ワンゼーの湖が碧く湛へてゐる。赤い屋根の家がそこここの緑の中に散在してゐた。湖水を見下した丘の中腹に一軒の茶屋がある。三人は珈琲を飲みにそこへ入つ

て行つた。

『まあ綺麗だ事！……』

卯女子は獨りで燥いでゐた。

『此所が良いわ。見晴らしが利いて。』

『珈琲とね、ビール一杯……あゝ、黑だ。』

山田は給仕に云ひ付けてゐた。

『何か食べる？』

『いゝえ、僕は良いです。』

『卯女子は？』

『私も良いわ。』

『眞似しなくつたつて良いよ。』

『まあ、いやな兄さん。』

卯女子は下を向いて、丁度やつて來た白の小犬の頭を撫でてやつた。栗木の大木が鬱蒼と茂つた庭に置かれた卓子であつた。白い花が飲みさしのビールの中にほろほろと散つて來た。

屋内の食堂の方からは華やかな管絃樂が陽氣に響いて來た。多勢の男女が舞踏をやつてゐるらしい氣配であつた。太鼓の音だけが妙に八釜しく聞えて來る。

『あの太鼓はうるさいな。自暴に強く打つぢやないか。……』

（音樂の耳を持つ山田には、すべて調和されない物音はひどく不愉快なのであつた。

『太鼓で思ひ出したが、あのロッシニと云ふ男は隨分皮肉屋らしかつたね。』

『さうですか。』

『或時、彼の所へ一人の太鼓打ちがやつて來て、彼の歌劇の管絃樂に使つてくれと賴んだのだね。すると彼は一册の譜本を渡してね、それをやつて見ろと云つた。太鼓打ちは一生懸命に忠實にやり出したものだ。するとロッシニの先生、ぐうぐうと安樂椅子に腰を掛けて寢て了つたのださうだ。

それでも太鼓打ちは夢中で敲いてゐた。そのうちに何でも六十四小節だか休止符の所があつたんだつて。太鼓打ちはちよつと手を休めて見ると先生ぐうぐう寢てゐるんだらう。その男餘つ程出來た人間と見えて別に腹も立てず、勿論その休止符を飛ばして、次の初まりの所からドンと始めたんだつて。

少しはまあ、腹も立つてゐたんだらう、自暴に大きな音を出したんだね。するとロッシニの先生、むつくりと起き上つて云ふ事には、

（おいおい、君。それぢや休止符の所が拔けてるよ。僕はそこの所が聞きたかつたんだ。）つてさ。ハハ、、、。』

『ハハハ、ロッシニぢやないけど、あの太鼓は何とかなりませんかね。……』

憲吉はガブッと殘りのビールを飲み乾した。

『行きませう。あんまり遲くなるといけませんから。』

見下される鏡のやうな紺碧の面を、白波の線を綺麗に引いて、白帆の快走艇が走つて行つた。

『ぢや、僕は此所から失敬するよ。』

『一緒にお乘りなさいよ。ね、良いでせう？』

『兄さん、良いぢやないの？』

『少し恐いからね。それに今村君の船頭さんぢやね。』

『大丈夫ですよ。』

『まあ、止さう。これから湖畔をちよつと逍遙いて、一足先に歸つてゐる。』

『さう？』

卯女子には兄の氣持がようく解つてゐた。

山田は茶のソフトの形をつけ乍ら、もう栗木の向うの徑に消えて行つて了つた。

『ぢや兩人で行く？』

『えゝ。』

卯女子の聲は小さかつた。

湖畔に突出した棧橋の外れに、いつも借りる

ヨットが繋いであつた。小僧が帆を上げて舵を入れてくれた。

卯女子が先づ乘つた。固く握つた指先きを離すと、鉛を上げてある輕いヨットはグラグラと搖れた。

『十八貫。』

『どうせさうよ。』

惠吉も續いて乘つた。彼は身輕に艫の所に腰を下すと、舵と帆綱を握つた。小僧は綱を解いて舳を沖の方に押しやつた。快走船は悠やかに動き出した。小僧は笑ひ乍ら手を振つて、行つてらつしやいと云つた。

惠吉は帆柱の上の風見の小旗をちよつと見上げた。

もう大分深くなつた頃、惠吉は鉛の錘を下して、ギュッと帆綱を締めた。船脚はグンと増して、快走船は兩人を乘せて、靜かな湖の上を滑るやうに走つて行つた。

沖に出るに從つて、思つたよりもひどい風であつた。船はスイスイと氣持よく出る。卯女子は惠吉の脇に寄り添ふやうに坐つてゐた。

時々さ、と吹いて來る風に、船は今にも倒れさうに傾いで、片一方の舷が水を浴びて、さつとしぶきを上げるのであつた。

『怖い！』

卯女子は夢中になつて惠吉に獅噛みつく。

惠吉は笑ひ乍ら風に舵を向ける。快走船はそのまゝ止まつて、バタバタと垂んだ帆が鳴る。

『駄目だなあ。あれで帆綱を引くと猛烈なんだがなあ。』

『だつて、もし倒れたら大變だわ。』

『大丈夫、こんな風で。』

『さう？』

『やつて見ませうか？』

『いやーよ。』

湖の眞中に浮いた大きなカフェがある。兩人はそこへ舟をつけて、出たての苺に、珈琲を飮んだ。

山田京輔は夕陽さす丘の草の上に坐つて、ぢいつと兩人の快走船の行方を見守つてゐた。彼は眼の中がいつの間にか熱くなつて行くのを覺えた。

やがて彼は青草を挘つた。

草笛の音が、喞々として夕陽に映えた大氣の中に漂うて行つた。その餘韻は嫋々として、怨むが如く、慕ふが如く、或ひは泣くが如く、訴ふるが如く、……

彼の胸はわくわくとせまつて來た。

彼は青草を噛んだ。

（どうした事だらう？）

夕陽と云へば、早や黃昏が、船を包んで迫つて來た。夕靄がもう低く湖の面に下りてゐた。兩人を乘せた快走船は、赤い夕陽を背後に浴びて走つて行つた。夕凪の、風も少く、舟はゆつくりと鏡のやうな水の上を滑つて行く。

『ミ、ミラシドラ、ミラシドラ……』

惠吉はメンデルスゾンの「水行」を口笛吹いた。

『合せない？』

卯女子が訊いた。そして兩人は惠吉の譯したハイネの詩で、二部に唄つた。

「みそらの極み、
幻のごと、
都よ、み塔よ、
黃昏けむる。
潮風濡れて、

浪路は暗し。
寥愁をもちて、
小舟、舟夫は漕ぎゆく。……』
綺麗な唄の調べは、靜かな水の上に響いて行つた。
『卯女子さん。』
惠吉は帆綱を結はへて、卯女子の肩に手を廻した。
『なあに？』
卯女子は寄り添ふやうに身を寄せた。
『あのね、君知つてゐる？　ピエール・ロッチつて云ふ人。その人の小說に「ラマンチオ」つてのがあるの。佛蘭西と西班牙の國境の山間に住むバスクと云ふ民族の話なんですが、その中にね、二人の戀人が暑い夏の日に、川の畔の栗の木の下でね、かうやつて並んで坐つてゐたんですつてさ。』
『え〻。』
『さうすると、ふと女の人の脣を蚊が刺したんですつて、すると、そこの所が丁度木苺の實のやうに赤く腫れ上つたんですつて。それを男が見たんですつて……』
惠吉は急に默つて了つた。

『それから？』
『それだけ。』
『つまらないわ。』
『さう？』
兩人は暫く默つてゐた。やがて惠吉が突然口を切つた。
『あのね、……』
『え〻。』
『あの、良いこと敎へて上げませうか？』
『え〻、なあに？』
卯女子は惠吉の瞳を見上げた。惠吉も亦、卯女子の瞳を見た。兩人はそこに各々の心の反映を見た。
『何よ。』
卯女子はもう一遍尋いた。
『あのね、……』
そして惠吉はいきなり彼女の赤い脣に自分の脣を當てた。卯女子は默つて下を向いて了つた。兩人は暫く默つてゐた。舟はもういつの間にか岸に近付いてゐた。
『怒つてるの？』
『い〻え。』
卯女子の額には明るい微笑が夕陽に映えた。
茜さす湖の面を撫でて、涼しい初夏の風が吹き去つた。夕陽が振返つた水の上に朱を溶かして輝いた。湖水一面にキラキラと赤い光が碎けてゐた。
ガリガリと音を立てて舟は蘆の茂みを掠めて行つた。密漁の男の釣竿が狼狽て水に滑つた。棧橋の上には、もう青燈火が淡い光を水にうつしてゐた。

兩人が又再び、伯林の停車場の人混みにまざつて、會社歸りの人々の群の渦巻く、あの賑やかなポッツダム廣場に出て來た時、街にはもうずらつと灯が入つてゐた。
兩人は狼狽てて、もう戸を閉めようとしてゐるフイッシャーの店に飛びこんだ。いろいろに細工をした金剛石や綠玉石の指輪を入れた硝子の裝飾箱の上に、兩人は揃へて手を出した。
店員の出してくれた鐵の輪を、兩人は左の藥指に嵌めて見た。
『ぢやこれとこれ。』
『へイ、え〻と、三號に六號。承知致しました。お形は？……はい。金は近頃赤味が流行りますが……はい、かしこまりました。失禮でございますが、それぢやお彫り致します文字をちよつとこれへ、へイ。』

店員は紙とエバーシャープを出した。惠吉はちよつと考へた。

『えゝと。』

彼はやがて鉛筆をとつて書きつけた。

5—5—1923. K. U.

『五日にしておきませう。緣起もんだからね？』

卯女子は默つて頷いた。

兩人は手を組んで、夜の街をゆつくりと歩いて行つた。もう戸は閉まつてはゐるが、明るく照明された一軒の洋品店の前で、ちよつと足を止めて、兩人はショーウヰンドを覗きこんだ。

（あの茶の中折を買はうかしら？）

『卯女子さん、どう？　あれ、ほら上から二番目の。

『お帽子？　まあ、あんなのお爺さんみたいだわ。それよりこの方が餘つ程良いわ。私、鐵色つて色、大好きよ。』

惠吉はその飾窓の硝子に、こつちを見て微笑んでゐる一人の女の顏を見た。彼はそうつと横眼で盜み見た。

女は勿論「街の女」であつた。白の毛皮の襟卷をして、眞紅に塗つた脣を輕く動かせて、横眼遣ひにしきりと何かものを云はせてゐるのであつた。

眼が合つた時、女は奇妙な微笑を浮べた。惠吉は何がなしに、はつとした。——彼はその微笑の下に隱れて、女の瞳の中にチラッとさした、男性と云ふものに向けられた、云ひ知れぬ憎惡の陰影を見たやうな氣がした。

『卯女子さん。行きませう。』

態と聲を掛けて、又兩人は歩き出した。

『兄さん、淋しさうですね。』

『えゝ。』

『その枝さんの所へまだ時々行くの？』

『えゝ。あれでも一月程行かなかつたやうでしたわ。でも近頃は又時々行くの。』

『どうする心算なのかしら？』

『知らないわ。』

（俺達兩人は今表門を潛つたのだ。そして青葉のこんもりと茂つた並木路を、手を繋いで歩いてゐるのだ。向うの路の外れの木の間がくれに「結婚」と云ふ立派な建物が兩人の來るのを待ち受けてゐる。）

惠吉は大きな聲で叫んでやりたいやうな氣がした。この幸福を見てくれ、さう云つて往來の誰にも彼にも吹聽して歩きたかつた。

卯女子を送つて別れた惠吉は、一人で靄の下りる夜の街を、自家の方へ歸つて行つた。朧に霞んだ月の在所が、道の外れの屋根にかゝつてゐた。甘い、やる瀨ない、晩春とも初夏ともつく夜であつた。

『月も朧にしらうをの、……』

と、ついうつかりと口に出た自分の聲に氣がついて、惠吉は思はず苦笑した。——それは、「篝火も霞む春の空」をバタでいためてソースをかけた、如何にもそんな氣のする晩であつた。

（こゝは伯林か。）

惠吉の頭の上には、やがて鐵色の中折帽が初夏の微風に吹かれ始めた。

ハンスの友達の間で「ホフマンの夕」と云ふ會を作つてゐる。それはあの奇しき「ホフマン物語」に倣つて、時々集まつては皆が自分や人聞きの失戀話をし合ふのであつた。惠吉はハンスに連れられて行つた。

まだ頬に生々しい決鬪の傷痕を殘した學生や、各々の「倶樂部」の綬を着けた學生が、もう多勢盛んにビールの杯を擧げてゐた。ゲーテのお酒の歌が陽氣に唱はれた。

「エルゴビバームス！」——カチ、カチ、カチン……（コップの音）

「いよう、珍來の客！」

一人の學生がにこにことして手をさし出した。

「日本人の方、ヘール・イマムラ。法科大學生。」

ハンスが皆んなに紹介した。

「よろしく。」

惠吉は、きよとんと挨拶をした。給仕の持つて來たビールの盃を手にすると皆んな立上つて飲み乾した。

「健康を！　ヘール・イマムラ！」

又一しきり低音の渦卷。遠慮は無用の一繩張り酒場なのであつた。惠吉の卓子には二人ばかりの青年が來て、頻りと話しかけた。

「隨分飲みますね。」

惠吉は呆れ乍ら肯いた。

「ビールですか？　ハハ、これは國民的飲料ですからね。お茶の代りですよ。ミュンシェンにでも行つて御覧なさい。とてもこれ所の騒ぎぢやない。千人も入る大ホールに一杯の人が、皆一立入り大コップでガブガブやつてますからね。ビール會社の商標をつけた特別貨車がごろごろしてゐます。

王立、プショール、レーヴェン、シュパルテンなどと云ふ大きな會社が皆んなあすこにあるんですからね。是非一遍はいでなさい。」

續いて惠吉はいろいろとビールの效能書を聞かされた。風邪の藥にもなれば、料理にも使ふ。種類も白、黒、とあつて、マッツェン、ボック、サルバドール等いろいろの上等品がある。

惠吉はビール飲みの記錄を尋いた。何でも、ビスマークの侍醫なにがしと、獨逸の團十郎、ヨセフ・カインツとが或る日の事、ビールの飲みつくらをやつたのだ。カインツは兎に角酒の氣がないと舞臺に立てないといふ男、たうとう見事に勝つて了つた。半立入りのコップ六十八杯と云ふ。

（一立が五合五勺として……一斗九升か、これは驚いた。）

やがて鈴が鳴つた。皆は默つた。一人の幹事らしい男が、會を始めると云つた。

「今晩は思ひがけなく、ハンス君の紹介で、日東の珍客、ヘール・イマムラの御出席を見ました。此際何か一口から一種の失戀話を伺ふ事は、實に錦上花を添へる所以だと信じます。」

「ヒヤ、ヒヤ、……」

惠吉は困つたやうにハンスを見た。ハンスはにやにや笑ひ乍ら澄ましてゐる。幹事はもう惠吉の所へやつて來て、

「どうぞ、何でも……」

と云つた。惠吉は赤く火照つた頬に手をやつて、もぢもぢとした。澤山の瞳が自分を見てゐるのを意識すると、もうどうする事も出來なかつた。が又あたりの打ち解けた學生の氣分が、妙に彼を圖々しくさせた。彼は思ひ切つて立上つた。

拍手の音。

「ぢや昔の話を一つやります。」

「謹聽々々。」

惠吉はふと頭に浮んだ今昔物語の中の話をして聞かせようと思つた。

「えーと、エス・ワール・アイマル——今は昔……」

「お伽噺だ。」

「まあ聞け。」

そんな聲が聞えた。惠吉は落着いて語り出した。

惠吉の演説。

「それはまだ世の中が、デモクラシーだ、ヴィタミンだと云はなかつた、ずうつと昔の話です。

日本の國の都に藤大納言忠家と云ふ人が居りました。この人がまだ殿上人であつた時、一人のそれはそれは好色な女房と戀をして、兩人は、そして媾曳をしてゐたものとお思ひ下さい。

夜は更けて行きました。月は晝よりも明るく、その青白い光は水のやうに庭一面に流れ込んでゐたのです。

二人の戀人は、もうすつかり感傷的な戀の陶醉に醉つて了つて、カーテンを上げて、長押と云ふところの上に上りました。男は扇をかいて、女の身體を引き寄せました。女は髪を振りかけて寄り伏しました。——

その時、實にその戀の最高潮の甘くも、やる瀬なくも、云ひやうのない、その時でした。女は、……』

惠吉はちよつと口籠つた。その氣分を表現する最も適切な言葉を、彼の貧弱な獨逸語の語彙の中に求めたのであつた。縦のものを横にする、飜譯と云ふことの困難を、つくづく彼は感じたのである。

『女は、その時、えゝと、その(いと高く鳴らしてけり)なんですな。』

『え?』

『何!?』

果して二三の質問が出た。彼等は一やうに惠吉の口から、夢幻的な、浪漫的な、哀切極まりなき悲戀の曲を期待してゐたのだ。

「實はその、女がその時、つい、風を起したのです。寂寞を破つたのです。露骨に云へばつまり放屁をしたのですな。』

『え!?』

『え!?』

『ハハハヽヽヽ。』

餘り意外の落に人々はどつと吹き出して了つた。

『で、……』

(落語家は自身笑はない所に、一層效果を強めるものだ。)

『で、女房はもう顔から火の出る思ひで、そのまゝぐたぐたと突伏して了つたのです。そこで大納言はことごとく幻滅の悲哀を感じたのでせうか、(心憂き事にも逢ひぬるかな、世の中に有りても何かせん、出家せばや。)とさう思ひ立つたのです。彼はいきなりカーテンの裾を掻き上げて、拔足をして、廊下を歩み去りました。

(間違ひなく出家しよう。きつとしよう。)と彼は固く信じて歩いて行きました。

一歩、二歩、三歩、……

所がわが高遠なる佛陀の悟道は、竹藪に當る礫の音ならいざ知らず、月夜の放屁位ではとても中々達し得られないものと見えまして、五歩、六歩目で彼はちよつと小首を傾げたものとお思ひ下さい。

(一體過ちしたのは俺ではない。)と彼は考へたのです。(あの女がしたのだ。して見れば何も俺が……)

七歩、八歩……

(さうだ、出家する筋合はないわけだ。)

そこでその男は出家を無期延期として了つたと云ふ事です。……これでお終ひ。』

惠吉は、きよとんとお辭儀をして、又席に着いた。一しきり笑聲が續いた。

『なんと云ふ皮肉な、感傷主義に對する挑戰ではないか？』
一人の青年がことごとく感心して叫んだ。
『さうだ！』
兎に角、惠吉の初舞臺は素晴しい當りであつた。彼は丁度配られた紅茶の中に、白鼠の糞程のサッカリンの錠を一粒抛りこんだ。ぢゆつと音して溶けて行く茶碗の中に見入つてゐた。
『放屁と云へば今でこそ偉く虐待されてゐますが、昔、まだ笛だ、ヴァイオリンだ、と云ふもののなかつた頃は、彼等原始人にとつて、唯一の音樂であつたと云ふ事ですが。……』
惠吉は微笑み乍ら、この獨逸の出鱈目を聞いてゐた。
『その頃には放屁に惚れたと云ふ事もあつたのでせうな。彼女の高音の調べはまあなんと美しいのだらう、などと悩ましげに春の宵の原野を獨り逍遙いた荒男もあつた事でせう。その時分の放屁はきつと香り迄が床しかつたに違ひありません。フリードリッヒ大帝以前には、人はまだ馬鈴薯なんか食べなかつたのですからな。』
こんな調子で失戀話の會はたうとう放屁論に終つて了つた。それ程つかまへ所のない暢氣な會であつた。

ハンスと並んで街路へ出た時、惠吉は考へた。
（まだ獨逸は亡びない。）

どん底

ジョンニー・栗本は何日か伯林のどん底に呻吟する人々の群を見て、何か映畫の暗示を得て置き度いと思つてゐた。それで惠吉の紹介で、櫻井から口を利いて貰つて、ワルターに連れて行つて貰ふ事になつた。
グレナディール街。
伯林名うての犯罪區域。殆ど無警察狀態と云はれてゐる北區の中の、しかも一番悲慘な貧民街である。犯罪率に於て、市俄古に次いで、世界第二の稱あるこの伯林の、その犯罪の大半はそこに巢喰ふ一團の人々の群に依つて行はれると云ふのである。前科者、脱獄囚、無旅券の外國人等はそこに最も安全な隱れ家を見出す。
ワルターはそこに育つた男であつた。
栗本はワルターに金を摑ませて、社から借りて來た薄汚い襤褸服を身に纏つて、そして兩人は灯の入りかけた北區の小暗い街を歩いて行つた。
兩人はいよいよ目差すグレナディール街に出た。石畳の狭い路の敷石は、幾年手を入れないのか、凸凹として、通じの悪い下水の水がじめじめとそこの凹みに溜つてゐた。何の油か、その水の上に玉蟲色に光つてゐた。崩れかゝつたやうな煉瓦の古家の前の段に、素足の男の子が腰掛けてゐた。兩人の姿を見ると、痩せほうけて落ちくぼんだ眼の中に、異様な猜疑深い影を浮べて、チラッとこつちの方を盜み見したが、又安心したやうに眼を外らせた。
『ありや、番人ですよ。』
ワルターが耳語いた。
『何かやつてるんですか？』
『大方紙幣の贋造か、博奕か、でなけりや誘拐つて來た女つ子でも飼つてあるんでせう。』
そこの薄暗い街の上で、五六人の人々が頻りと何か云ひ合つてゐた。一人の男の手にはまだ乾き切らない洗濯物が一ぱい抱へられてゐた。彼はそれを賣つてゐるのだ。他の二三人が素見してゐるらしかつた。
栗本を見るといきなり一人の男の子が、自轉車を持つて脇合ひからやつて來た。
『旦那、買つておくれ。安いんだ。十金貨馬克で良い。』
『五月蠅え！』

ワルターに頭を突かれて、その男の子は、何かぶつぶつ口の中で罵り乍ら、又自轉車を曳いて行つて了つた。

一軒の家へ來るとワルターは、

『ちよつと……』

と云ひ殘して入つて行つた。栗本は心細さうに門口を見てゐた。犬の鳴聲らしい物音がしきりとその中から漏れて來た。それも一匹や二匹ではないやうであつた。

やがてワルターが何か笑ひ乍ら出て來た。所々赤黑く染つた前掛みたいなものを着た、太つた大きな男が戸口迄送つて出て來て、ワルターと握手してゐた。

『此の間の事あ、大丈夫か？』

『うん、引き受けた。』

ワルターが答へてゐる。

『ぢや賴んだぞ。』

『あゝ。』

と首を動かして、ワルターは階段を飛び下りた。

『お待ち遠さま。栗本さん！』

『いゝえ。……何です、あの家は？』

太つた男が引つこんで兩人が又歩き出した時、栗本が尋いた。

『腸詰屋です。わつちが以前居た所ですが、ちよつとした事で檢擧げられましてね。……』

ワルターの額にはチラッと暗い陰影が浮んだ。

『今ぢや犬をやつてるんです。』

栗本は、もう街角の腸詰の立ち食ひは絶對に止めにしようと、思つた。

街の中頃迄歩いた頃、家と家との間の狹い露路に、上に赤く錆びついた亞鉛板等で、やつと雨露を凌いで、そこに黝んだ人々の群がうようよと蠢いてゐた。異樣な眼付が通りがかりの栗本の上に注がれるのであつた。

痩せた女、素足の子供、赤兒の鳴聲、病める老婆の呻き、臭氣、濕氣、――暗い陰慘な泥沼の底のやうな生活がそこにはあつた。

丁度ムリロの繪によくあるやうに、一片のパンの破片を奪りつこして喚いてゐる子供達もあつた。力のない咳をし乍ら、怪しげな手廻しミシンを動かしてゐる女もあつた。襤褸々々の毛布にくるまつて、何かしら得體の知れない麥粉菓子のやうなものを頰張つてゐた一人の、もう明日の命もと氣遣はれる、それ程憔悴し、色褪めた一人の老婆が、ふと跫音を聞くと、震へる手を止めてぢいつと栗本の額を見上げた。血の氣のない脣がわなわなと戰いた。

眼が合つた時、栗本はその老婆の瞳の奧にひそむ、云ひ知れぬ、人の世の限りなき、貧窮の苦悶の陰影を見て取つた。彼の心は重く沈んだ。

『ちよつとそこの家へ寄つて行きませう。』

ワルターに云はれて栗本はたゞ陰影のやうに默つて從いて行つた。

三つ玉の質屋の看板の耳門を入ると、狹くるしい小部屋の中に、身の置場もない程に、いろいろの品が置いてあつた。これが皆んな贓品なのかと思ふと、栗本はそれがこの店に集まつて來る迄のあらゆる光景を想像して奇妙な氣持がした。

ふと氣がつくと、隅の所にごろごろと、二三人の男が寢そべつてゐた。人相の如何にも惡い、陰險な眼付が一やうに光つたが、ワルターに氣がつくと、それでも人間らしい親しみの眼付に變つて行つた。

灰色の不精髯を薄汚く生やして、土耳古帽をちよこんと冠つた、鼻の曲つた、如何にも臑っこい感じのする、一見それとわかるユダヤ人の爺さんが、猫背の身體を大儀さうに搖ぶつて、揉手をし乍ら出て來た。

『やあ、ワルターか、久しく來なんだな。どう

だ？』
『あゝ爺さん暫く。相變らずさ。まだ生きてるよ。』
『ぢやいゝのか？』
『ううん、から駄目さ。……爺さん、これ買つてくれ。』
ワルターは上着のポケットから無造作に、二つの指輪を掴み出した。かなり大きな金剛石がキラキラと薄暗い電燈の下に光つた。
『相變らずの腕だな。から駄目もねえもんだ。』
爺さんは蟲眼鏡で覗いてから、片一方の金の指輪を黒い石に擦つて見て、硝酸をかけて、ちよいと覗いてから、
『うん、大丈夫だ。さうだな、二つでと、……Pに買つてやる。』
『もう少しどうだい？　せめてNぐれえ。ね、良いだらう。』
『莫迦云へ。仲間うちに掛け價があるけえ。』
『ぢや良いや。』
『高えくれえだ。』
爺さんは手提金庫を開けて、良い加減の札束を渡した。ワルターは四五枚抜き取ると、そこにごろごろしてゐる男達の方へ投つてやつた。
『から、煙草でも買へ。』
『いつも濟まねえな。兄貴。』
男達を札をポケットに突つ込んだ。
『たまには眞似事ぐれえして見ろよ。ふんとに。』
爺さんは吐き出すやうにさう云つて父よぼよぼと、吊られた洋服の背後に入つて行つた。
『あの家には、あれで中々伯林一流所の貴金屬商に負けない大物があるんですよ。それで飛びつきり安いと來てゐるんだから、よく伯林の立派な紳士がそうつと買ひにやつて來ます。あすこにごろごろしてるのが番人で、あいつ等がさう云ふお客人はちやんと完全に地下鐵道迄送り迎へするんです。この中では仲間食ひはしない事になつてますから。』
戸外へ出た時、さうワルターが話してくれた。
栗本は栗本で、先刻自分を見上げたあの病める老婆の瞳を想つてゐた。それがまだ自分を凝視めてゐる。
（ある他の人々が眞劍に體驗し、悶える眞實の苦悶を、人間が、この同じ人間が、芝居にする、シュピーレンする。——そんな事が許される事かしら？）
栗本は重く沈んで行く心を懐いて、暗い夜の空を見上げた。流れ星が行く手の空を過つて、その消えたあたりに何所の建物か、黝んだ、悪魔のやうな姿を浮べてゐた。
ワルターの吸ふ煙草の火が薄闇の中に光つてゐた。
栗本は唾を吐いた。
（夏近しと云へ、薄ら寒い夜ではないか？）
山田の家では旅先の恵吉から二通の郵便を受取つた。
一つはワイマールから、もう一つはヤイゼナッハから。
『伯林から梯酒列車で約六時間、ワイマールの町が靜かに新緑の中に眠つてゐます。落ち着いた氣の澄むやうな所です。小雨の中をベルベデールのお城に上りました。途中カルメン女優で有名な栞の生れたと云ふ、さゝやかなカフェが路邊にありました。お城の窓から見下すと、しとしとと降る

小雨に霞んだ栗木の並木路がこんもりと續いてゐます。赤い屋根の家が新緑の中に點々として、まるでハウフの童話にでも出て來さうな氣がします。此町にゲーテが住み、シルレルが住んで、あの偉大な作をものしたのかと思ふと、敬虔な氣持に打たれます。藝術の永遠性と云つたものを沁々と想はせます。

お城の傍のカフェで、噴水を見乍らビールを飲んでゐると、仕事を終へた百姓が、牛を連れて、鼻唄まじりに通り過ぎます。大方ワイマール節でせう。

リストの家で彼の寫眞を買つて、彼に三十年間仕へたと云ふ老婦人に署名をして貰ひました。

ゲーテの家では科學的の研究室の立派さに驚きました。尤も大分後から手を入れたのださうですが。臨終の床がそのまゝ置いてあります。薬の罎が枕頭に侘しげな光を放つて居ます。天井を凝視めた彼の頭に、あの隅の汚點が何と映つた事であらう。そんな事を考へて私は暫くその薄暗い小部屋の中に見入つてゐました。

シルレルの家は、貧しい家の、しかも三階の三間でした。彼の寢室には貧弱なベッドが一つ、卓子が一つ、椅子が一脚、そして壁には有名なギターが懸つてゐるきりです。卓子の上には、書きかけの原稿の脇に干からびた鵞ペンが轉がつてゐました。開かれてゐる本の表紙には『警句．哲學』と讀まれました。

此の貧しき彼の部屋を訪れるもの、獨逸國内はもとより、遠く外國からも、どしどしと毎日この懐かしい空氣に浸つて行くのです。黒いリボンを着けた花環が澤山その寢臺の上に乘せてあります。名もなき少女が、熱い涙を人知れずそつと置かれた白薔薇が、そこのかげに淋しく匂つてゐます。

宿に戻つてゆつくりと旅の疲勞をお湯に流して、暮れて行く街の燈火に見入つた時、私の心は深い藝術的法悦の一境に彷徨してゐました。

卯女子さんによろしく。

ワイマールにて。――憲吉。」

（可愛らしい藝術至上主義者よ！）

山田京輔は微笑まれる心持であつた。もう一つは繪葉書で、それは卯女子宛であつた。

「此の城は『タンホイゼル』で有名なワルトブルヒのお城です。小高い山の梢の上に聳えてゐます。此の城に昔、聖エリザベスと云ふ優しい女王樣がゐて、貧しい人々に惠みをかけてゐたのださうです。するとその王樣と云ふのが惡人で、狩獵が好きで、惠が嫌ひで、女王に向つて、そんな事をしてはいけませんよ、と云つたと云ふ事です。

所がある日の事、偶然、女王樣が微行で、籠にパンや牛乳を入れて山を下られる途中、王樣と出會つて了つたのでした。王樣は、その籠の中はなんだと云ふ。女王樣は困つて了つて、これは貴君に差上げる薔薇の花ですと云ひました。王樣が長い劍の先でその籠の被布を取り拂ふと、これは不思議、パンがいつの間にか白薔薇の花に變つてゐたと云ふ事です。――何と天勝みたいの話ではありませんか。

お城は霧雨の中に淡紫ぼかしに霞んでゐます。白い林檎の花が帽子の上に散つて

来ました。君の見立てた鐵色のソフトの上に、さやうなら。

卯女子樣。　　　　　惠吉。」

『旅も良いねえ。』

「えゝ。』

二人の兄妹は言葉少なに夕食を濟ませた。

「苺の節ですわね。」

『あゝ。今度今村君が歸つて來たら、一緒に何處か郊外へでも食べに行かう。』

山田は新聞を、卯女子は編物を。――そして夜は更けて行つた。

轉石

春と云ふのに寒い日が、それでも時々續いては、何と云ふ陰氣な氣候なのだらう、まるで獨逸そのまゝの姿だ、などと云ふ愚癡をそんな時はよく聞いたのであつたが、その伯林の町の上にも、七月の暦が捲くられると、流石暖かい日が雲の合間を零れる太陽の光と一緒にやつて來た。

都は今、運動の季節に入つたのだ。

今村惠吉は自轉車で毎日カイザーアレーの庭球場へ通つた。カーンと澄み切つた音を立てて、球がラケットを離れる毎に、此の冬中からかけて惠吉の頭に溜つてゐた、都會の憂鬱と云つたものが、一つ宛逃げて行くやうな氣がするのであつた。

（憂鬱の問屋のやうな顏をしてゐても始まらない。あんなものは一切まとめて、ズックの袋に詰め込んで、月影の青く滿ちる夜、桂棹蘭槳空明を撃つて、あのラインの流れに人知れず、そつと捨てて了ふに限る。）

惠吉はさう決心をした。

惠吉がさう決心をした所へ、栗本からの葉書がドアの隙から舞ひ込んだ。

此の間、喜劇を撮影した時、餘り長く水に浸つてゐたので、風邪をひきこんで了つて、それからぶらぶらと床に就いてゐる。他に友達もないので、サシャが出かけて了ふと、毎日淋しくて仕方がない。若し閑暇があつたらやつて來てくれませんか？　ジョンニー・栗本――と書いてあつた。

丁度山田兄妹を誘つてテニスに行かうか、餘り暑いから家に寢ころがつて獨逸の面白俱樂部でも讀まうか、それとも皆川梅十郎を誘つて麻雀でも打牌しようかと迷つてゐた所なので、惠吉は早速曲り柄のステッキを握つた。それはメチュサの首が彫つてあつて、その髮の毛の蛇の一つ一つが、如何にも精緻に出來てゐた。細身の籐で、しかも仕込杖になつてゐる。

或る伊太利の暗殺團の一人が、それで以て獨逸の某高官を刺さうとして捕へられた。その男は死刑になつたが、杖だけは轉々として或る骨董屋の店先から、惠吉の手に渡つたのであつた。惠吉はその話にすつかり魅せられて了つて、主人の云ひなり次第のつけ値で早速買ひ求めて來たのであつた。

スラリと拔くと眞四角の細い刃が秋の水のやうに澄み切つてゐた。鬼氣身に迫ると、惠吉が一人で悦に入る祕藏のステッキなのである。

（昨日買つた麥藁帽子はまだ少し早いかしら？　表へ出たらそれにしよう。）

惠吉はアルミニュームの貨幣を机の上に拋つた。惠吉の頭の上には鐵色のソフトが乘つた。

今日は又珍らしい暑さである。街も、木も、電車も、空も、皆んな乾き切つてゐた。濡れてゐるのは、たゞ、道行く人の額の汗だけであつた。

（白い街。）

如何にもそんな氣がした。頭を垂れた黒犬が、涎の垂れた口から長い舌をぶら下げて、はあはあ云ひ乍ら從いて來た。じつとりと氣持惡い脂汗が、惠吉の富士絹のワイシャツをぴつたりと身體にくつつけて了つた。

栗本の部屋へ入つた時、惠吉は手の脂でよれよれになつたハンケチで、忙しさうに額を拭いた。

『ちよつと失敬します。』

さう云つて惠吉はさつさと上着を脫いで、シャツの所々を撮んで振つた。

栗本は寢臺を窓の所に寄せて、仰向けに寢てゐた。惠吉を見ると身體を起して微笑んだ。

「よく來てくれましたね。」

惠吉は枕頭にぶら下つてゐる溫度表に眼をやつた。赤線の所を細く上下してゐた。

「まあ、そこにでもお掛け下さい。」

椅子を示した栗本の手は、月夜の蟹のやうにげつそりと、痛ましい程に瘦せてゐた。惠吉は四尺程離れて腰を下した。

『かうやつて一日中、中庭を見てゐるのです。「屋根裏の哲學者」ですよ。御覽なさい。あすこに子供が遊んでゐるでせう。あゝやつて、もう一時間も前から、たつた一人で遊んでゐるのです。何かぶつぶつ云ひ乍ら、土を掘つてゐるでせう。面白いぢやありませんか。僕はさつきから、あの子供、何て云つてゐるのか知らんと思つて、いろいろ想像してゐるのですよ。（だあれも遊んでくれないから、僕、庭へ行つて毛蟲を食べてやらう。）なんて云つてるんぢやありませんかしら。ハハヽヽ……』

その笑ひは、しかし、いつの間にか咳に變つてゐた。栗本の頬には、さつと朱がさしてゐた。惠吉は痛ましげに、たゞ見てゐた。栗本はそれでも輕い微笑を浮べて誰に云ふともなく呟いた。

『此の冬をよく保つたものだ。』

兩人は默つてゐた。

惠吉は手の肉刺を挘つてゐた。これが甘納豆だつたら良いがな、榮太樓の甘納豆でも自家へ賴んでやらうかな、などと考へてゐた。

「庭球？」

「えゝ。」

暫く默つてゐた。

「硬球を使つても庭球とは、是如何に？」

「え？」

惠吉はきよとんとして尋き返した。

「易しくても軟球と云ふが如し。」

「あゝ、さうですか。ハハヽヽ……」

惠吉はやつと笑ひ出した。

『それぢや、秋の魚でもサンマとは、是如何に？』

『さあ、英語入りは困りますな。英語の洒落と云へば、此の間米國の友人に珈琲を賴んでやつたら、M・J・Bつて云ふ安物を送つて來てくれましたが、あれは何て意味だか知つてますか？ あゝ、そこにあるその罐です。』

惠吉は取り上げて見た。綠がかつた罐には大きくM・J・Bと書いてあつた。そして下の所に、M・Jブランデンシュタイン會社と書いてあつた。

『あゝ、これは會社の名前ですよ。此處に書いてある。』

「君、さう云つちやつちや洒落にならない。それは、モッカ、ヂャヷ、ブラジルつて云ふ洒落ですよ、きつと。ハハ。……あゝ、解つた。君、秋刀魚は小春日和から來たんですよ。ハハ……』

「ハハヽヽ。」

兩人はちよつと默つた。惠吉は上着を着た。

「ねえ、今村さん。昔の人は偉い理窟かつたんですねえ。素盞嗚命なんて、馬を引き裂いたつて云ふぢやありませんか？」

暫くして 木に竹を繼いだやうに栗本が云つた。惠吉は、あゝやつて默つて天井を見てゐる栗本の頭の中をグルグル走つてゐるいろいろの考へを思つた。

『それとも昔の馬が弱かつたのかも知れませんよ。ハハ。』

『さうですね。相對性原理か。ハハ、、、。……でも強い體質を持つてゐる人は幸福だ。ねえ? 今村さん。』

『さあ?』

惠吉は窓の外に眼をやつた。

開けられたそこの窓からは、何やら唱ふ聲が漏れて來た。

『あゝ又やつて來た。あゝして日に二三人宛はやつて來ます。ヴァイオリン彈き、手廻しオルガン、歌を唱ふ人、いろいろやつて來ます。さうするとこの中庭に向つた方々の窓が開いて、いろんな顏が出るのです。中にはお金を投つてやる人もあります。

御覽なさい。あすこの二階の三番目の窓ね、あすこからよく、それは綺麗な娘の顏が覗くのです。君に見せたい位だ。

此の間などは面白かつたですよ。僕がやつぱりかうやつて見てゐると、その娘さんもいつものやうにあの窓を少し開けてね、編物をしてゐたのです。すると、あの上に窓があるでせう、あれがガラッと開いて、一人の若い青年が顏を出してね、そして口笛で、あのシュウベルトの未完成交響樂の主題を吹いたのです。すると、その今云つた娘さんが急にそはそはとしてね、編物の手を止めて、部屋の奥に眼鏡を掛けて新聞を讀んでゐるらしい母親でせう、それに氣を配り乍らそうつと眞白の手を窓から出したものです。

さうすると、上の男はすぐ細い紐に結びつけた手紙を下す。蜘蛛のやうにそれはスルスルと下りて來る。娘は素敏つこく手紙を解いて、急いで胸かくしに入れて了ひました。紐は又スルスルと上つて行く。上の窓が閉る。娘も何だか暫くもぢもぢしてゐましたが、たうとう終ひに立上つて、奥の方に消えて行つて了ひました。

暫くすると、母親らしいその老婦人が窓の所へやつて來て、窓を見上げて云ひました、ソフィや、降つて來さうだよ、つて。それで僕は初めてその娘の名前を覺えたのです。』

惠吉は栗本の蒲團をなほしてやつた。

『やあ、どうも有難う。……』

栗本はやつぱり窓の外を見てゐた。

『ほら、あの玫瑰の鉢のある窓ね、あれです。夕方になるとあの窓に、眞紅な西日がさすのです。さうすると、もう中庭の底には夕闇が忍び寄る。目蔭に見るうちに下から伸びて來て、あの窓硝子の朱色の光を消して了ふ。すると定つてあの窓が開いて厚いカーテンが絞られて、薄いレースのカーテンに灯がともる。すると又定つて、あの娘のソフィの影法師がうつるのです。窓際で仕事でもするのでせう。そして彼女は又定つて、ファウストの「グレーチヘンの紡車唄」ね。あれを唄ふのです。

わが靜けさは逝き、
わが心いとおもし。
いづこに行くとて、
あはれ、求むるよすがもなし。

君なき所、
そは、われに墓場の如し。
この世皆、
われに無情きかな。

わが傷きし頭は亂れ、

わが憐める心は破る。

わが靜けさは逝き、

わが心いとおもし。

いづこに行くとて、

あはれ、求むるよすがもなし、…‥

靜かな黄昏の空氣を震はせて、あの唄が丁度僕の此の窓邊に漂うて來るのです。僕はぼんやりして聞いてゐる。いつの間にか日本のことを考へてゐる。深川の家の事を考へてゐる。すると妙に僕の靜けさも逝き、僕の心も亦、いと重く沈んで行くのです。

不意に電燈が點く。そしてそこに、今、君の坐つてゐるあたりに、いつの間にかサシャが立つてゐます。

(又あのお孃さんの唄?)さう云つてちよつと睨む眞似をして、(冷えてよ。)と僕を嗜めるのです。そして、あの窓をさつさと閉めて僕の頰に接吻をする。温かい紅茶がはひる。それから兩人はいろんな話をする。

僕は、まあ、今日はいつものヴァイオリン彈きが來て、何と何を彈いたよ、とか、あすこの窓の露臺でいゝ年をした爺さんが、頰つぺたをペリカン鳥のやうに膨らませて髭を剃つてゐたよ、とか、でなければ、明日出たら鰯罐詰を買つて來ておくれ、とか。

サシャは又サシャで、タウエンチンの街上で、不正の兩替屋が多勢捕つて、貨物自動車に積み込まれて行つた、とか、その序に掏摸が一人捕つた、とか、例の古本屋の車店でトルストイの「ポリクシュカ」――これは此の間兩人で見た活動寫眞の小説です。モスカウ藝術座の有名な俳優が出ましたつけ。何でも勞農政府で撮影したんですつて、――その原本があつたから買つて來た、とか、今度社で「テル」を撮るんですつてさ、とか、とか、まあそんな話ですよ。……』

栗本は永い間、口に栓をかはれてゐた人のやうに、一人でペラペラと立て續けに喋つた。

(こんなに喋つて身體に良いのかしら?)

惠吉はさう思つた。が、又考へて見れば、栗本の動かせるのは口と眼とそれだけであつたのだ。

『遲いな。』

栗本は獨言のやうに呟いた。そしてちよつと壁の時計を覗いてから惠吉に云つた。

『君、濟みませんが、ちよつと、燈火を點けてくれませんか? それから序に窓を閉めて、……どうも有難う、又サシャに睨まれますからね。それから、……』

栗本は卓子の上を指さして、

『冷たくつて良かつたら、そこにお午の紅茶の殘りがありますから、飲んで下さい。清潔ですよ、コップはあすこの食器棚の抽斗に入つてゐますから。尤も、もうおつつけサシャが戻りませうが。……』

燈火の點いた部屋の中に、寢臺の白い敷布が妙に痛ましく映つた。食器棚の上の林檎の肌が赤く光つてゐた。

『ねえ、今村さん。かうやつて旅に病てゐると、妙に振返つて見たいやうな氣がするものですよ。そりや病氣ぢやなくたつて、故郷を離れて生活してゐる者には、しよつちう日本の事がちらつくものですが。しかし僕は割合にそんな事のない方だつたのですよ。それがねえやつぱり、……、で先刻もちよつと云ひかけましたが、僕は東京の者です。家はこれでも立派な有産階級なのです。神妙にさへしてゐたら何不自由ない本場の若旦那様で濟してゐられるのですが、どうもね、……いつだつたか、桑港の日本人俱樂部で、ガルスウァジーの「鳩」を演つた事がありましたが、その中で僕の演つたフェランドと

云ふ男の臺詞を、今でも覺えてゐますが、……』

栗本は急に舞臺の聲を出した。

『（……だが、私や轉がるやうに生れてついてるんだ。……「轉つて行く石」のやうなものさ。）つて、……つまり僕はその "Rolling Stone" なのです。……』

栗本はちよつと惠吉の顏を見て、又語り續けた。

『ねえ、今村さん。今日はまあ供養の積りで聞いて下さい。腹膨るゝ心地こそすれ、なんですからね？

そもそも僕が轉がり始めたのは中學を出た時の事ですから、もう一昔前の話ですが、……濟みません、僕に一杯。』

惠吉は冷え切つた紅茶を注いでやつた。惠吉は、こんなに喋らせて良いのかしら、ともう一遍考へた。そして先刻から殆ど一言も口を利かない自分に氣がついた。惠吉に禮を云つて栗本はコップを口に當てた。

『グッ』と妙な音がして、栗本の痩せた咽喉佛が上下した。彼はしんみりと語り出す。

『僕の家は大場の相當大きな問屋です。僕はその三男に生れました。一番上の兄貴は戰爭で死んで、二番目のは、これは又散々道樂をした擧句、流行性感冒で三日寢たきり、剽輕な死に方をして了ひました。で、結局、僕だけが殘されたのです。その時丁度、僕は中學を出たばかりでした。

（庭に井戸があるからだ。）と母親が云ひました。植木屋が二三人來て、土を運んでそれを埋めて了ひました。丁度その晩、僕は親父と喧嘩をして家を飛び出して了つたのです。

こつりこつりと一人で身代を築き上げて來た親父には、金が全部であつたのです。僕の行つてゐた中學校は、比較的富裕な家の息子が多かつたもんですから、從つて親父の目には、見やう見眞似で僕が可成贅澤に見えたのも無理はありません。それに二番目の兄貴が失敗つたのは、母親が甘くて餘りお金を持たせ過ぎたからだと、親父は考へてゐたのです。實際母親はその兄貴を一番可愛がつてゐました。親父はよく言つた。

（あんまり甘くすると人を嘗めていかん。いつだつたか俺が意見をしてゐたら、いきなり俺の敷いてゐた熊の皮を引つ張り取つて、飛び出しやがつてさ、まあどうだい、それを質入れしてからに、その足で遊興に行きくさつたんだ。）

い、はたから見れば滑稽なだけ、それだけ當の本人には腹が立つたのでせう。實際二番目の兄貴は親父を嘗めてゐました。

（親父が小言を云つたら、默つて頭を下げてゐりや、皆んな上を素通りだ。そしてあれの事でも考へてゐるんだよ。）こんな事を言つたのを僕は覺えてゐます。その兄貴は死んで了ひました。

それからとふもの、親父は益々いらいらとして、心が頑固になつて行きました。こせこせとよく小言を云ひました。女中の一人々々にも、臺所の事に迄も口を出しました。僕にはそれが、何だか馬鹿らしいやうに思へて仕方がありませんでした。もつと鷹揚な父親が僕には欲しかつたのです。自分迄がこせついて了ふ事を僕は恐れたのです。

親父は親父で、自分が貧乏に育つて來た苦い經驗から、僕の贅澤の癖をひどく恐れたのですね。僕の前で故意とお金の話をする。物價の高い話をする。今月は幾らかゝつたとか、回數券を使ひ過ぎるとか、よく云ひました。それが又妙に僕の反抗心を唆るのです。

學期の初めになると、定つて書物の事で不服

快な問答が起るのです。去年はこんなにかゝらなかつたとか、俺は本なんか圖書館で讀むとか云つたりしました。僕は、上の學校へ入つてからも、こんな事を繰返すのかと思ふと、もうそれだけで學問なんか止めて了ひたくなつて了ふ事さへありました。かうして親父と僕との間には、段々と大きな溝が出來て行つたのです。僕はよく思ひました。

（詰らない話だ。かうやつてお互に不愉快な感情を増して行く。こつちはまだ若い、親父が死ねばその氣持から解放されるのだ。——これはまあ、大變な僕の考へ違ひであつたのです。僕こそ實に、一生、しかも長い一生の間、その不愉快な氣持に虐まれ續けなければならないのでした。が、それはさうとして、あの當時は僕はがむしやらに、自分に都合の良いやうに考へてゐたものでした。で、僕は思ひました。——こつちには若さの持つ樂しい歡喜があるのだ。向うは死ぬ迄その不愉快さを續けて行かなければならないのだ。親父にはその不愉快さを紛らはす趣味も宗教もないではないか？　帳場に坐つて、一日、そんな事をくよくよと考へ續けてゐるのだ。あゝやつて齷齪働いて皆んなから嫌はれてゐるのだ。）

それでも一日雨などに降り籠められて、自分の部屋でぼんやり考へ事などをしてゐる時、帳場の方から淋しげな父の咳聲が聞えて來ます。さうすると、やつぱり頼りない父の孤獨の姿を想つて、この心の底からなる同情の氣持を感じるのでした。分身の愛は拒めないと、僕はさう云ふ時、沁々思ふのです。そして親父があゝやつて齷齪金を貯めてゐるのも皆んな、自分達後に殘る者達の事を思へばこそなのだと見え透く位に氣がつくのです。

しかし、それも、雨が夕方などに霽つて、僕が氣晴しに散歩にでも出掛けようとすると、親父の聲が鋭くするのです。

（又外か？　良い加減にしとけ。一日家にゐた事なんか有りやしない。）

すると今迄の感情はすうつと僕の頭から消えて行つて、たゞ親父を憎む不愉快な感情が、丁度飲み干した番茶の出がらのやうに、僕の心の奥底に殘るのです。

つまり僕は靜かに考へる時、たまらなく深い愛を親父に感じ乍ら、しかも皮相の感じの爲に、いつも親父を憎み續けて來たのです。皮相の感じ、——それがどんなにか人間の感情生活を支配してゐる事か？　そしてそれがどんなに大きな破綻を、人生の幸福の上に投げかける事か？

で、親父は又、どの老人もさうである如く多くの偉大なる人々の一生を捧げた尊い經驗である書物よりも、自分一個のちつぽけな經驗を無上に尊んだのです。（書物は要するに古人の糟粕。だと云つた、あの支那の輪人の言葉を金科玉條と心得てゐるのです。古い人のたつた一つの誇りである經驗と云ふ事を若い者の讀書の力に踏み躙られて行く事が、一番親父には淋しくも又腹が立つたのです。

そりや世の中にはいろんな技術などのやうに、體驗で行くのが一番早い事もあります。又それでなければ解らない事もあります。が、しかし又思考の世界と云ふものも認めないわけには行きません。誰でしたか名高い刀鍛冶の水加減を知らうと思つて、手を突つ込んでその手を切られて了つた話がありますが、あんな事は數時間でやつても良い事なのぢやありませんかしら？　ハハハ、大分生意氣な理に落ちて來ましたが……』

栗本は暫く默つて天井を見上げてゐた。惠吉は又、通人抱一が[illegible]小刀で切つた[illegible]身を、舌の先で見究めた、あのデリケートな邊[illegible]

を思ひ出して、大いに體驗の效用を力說しようかと思つたが、栗本の眼を見た時、彼の舌は自づと縛られて了つたのであつた。惠吉は枕頭の夜机に、丸い小さな青銅の額縁に入れられた、サシヤの寫眞を見てゐた。

栗本は又話を續ける。

(で、たうとう破裂が來ました。

それは或る日曜日の晩の事でした。僕は晩くなつてから、赤電車に乘つて歸つて來たのです。家は寢靜まつてゐました。僕が着物を着換へて、蒲團に潛り込んだ時、隣りの部屋で寢てゐた親父の呶鳴り聲を聞きました。

(俊三か?――こりや僕の本名です。――こんなに晩く歸つちやいかんぢやないか。女中が起きて待つてゐなけりやならん。)

(女中はもう寢てましたよ。)

僕は答へました。氣を利かせて店の耳門を開けて置いてくれたのです。

(學校がこんなに晩くまであるのか?)

親父が呶鳴りました。

(いゝえ、學校ぢやありません。今日は日曜ですから。)

僕も負けずに云つてやつたので親父は暫く默つてゐましたが、やがて(口應へをしやがる。)と云つてその儘寢て了つたのです。僕は急に腹立たしいやうな、妙に淋しい氣持になつて了ひました。その日遊んで來た友人の家庭の華やかな空氣と比べて、なんと云ふ陰鬱な冷たい自分の家なのだらう。せめて母親でも元氣でゐてくれたなら。身體の弱い母親はいつでも陰氣に口ども餘り利かなかつたのです。

(あの小膽な親父の支配してゐる、こんな小つぽけな王國の中で自分迄小さな型に嵌めこまれて行かなければならないのか。自分は中學を出てゐる。)

と、僕は思つたのです。僕の血の中には、あらゆる息子の持つ親への叛逆心がむらむらと湧き上つたのです。――つまり若かつたのですね。

不眠の夜はほのぼのと明けました。

僕はこつそりと家を出ました。霧のかゝつた深川の街は、薄闇の中に靜かに眠つてゐました。街燈はまだ點いてゐました。工場の煙突が帆柱のやうに並んでゐる中を夢中に僕は歩いて行つたのです。そしていつの間にか、新橋驛の前にゐる自分を見出しました。僕は財布の中の金と賃金表とを照り合せて、殆どありたけの金で行ける所迄の切符を買ひました。それは東海道線に沿うた或る餘り大きくない町でした。前に中學の遠足で四日市へ行つた時一度汽車で通つたきり、夢にも來ようとは思はなかつたその町へ。

そして僕は驛前の床屋へ頼みこんでやつと銀行の仕事を見付けて貰つたのです。それから四年は經ちました。世の中は僕のあの時分考へてゐた程、そんな暢氣なものではなかつたのです。他人は學校の時の友達のやうには行きませんでした。中學校卒業位の資格は、そこに何等の權威をも見出しはしませんでした。

幻は消え去りました。郷愁が毎日僕を苦しめました。そしてたうとう僕は、東京の叔父に手紙を書いたのです。

その當時僕は、實は、或る女と出來てゐたのでした。その町は昔の街道町で、所謂宿場の色街があるのです。その大門の前の所に、「蓬々木亭」つて云ふ洋食屋があります。女はそこの女中だつたのです。女中と云ふより、實はその家の貰ひ子だつたのです。まだあの時は十九でしたが、ちよつと薄皮の剝けた可愛い女でした。

僕は彼女をそんな荒んだ生活の中に置くのが、堪へられなかつたのです。とに角、そこは新地歸りの素見客で夜の十一時の鐘を聞いてからが混み合ふと云ふやうな、そんな家でもあつ

たし、それに、その直ぐ近所の砂糖屋の二階を間借りしてゐる、二三人の農事試驗所の學生が、何でもかでも娘を手に入れようと、しきりと競つてゐると云ふ事も聞いたのです。

　で、僕は彼女をさう云ふ世界から救ひ出してやると云ふ事に、丁度昔の騎士のやうな、誇りを感じたのです。僕はまあなんと云ふ浪漫家だつた事よ！ ですね。が、とに角、僕のその時の熱情が彼女の心を動かしたのでせう、彼女は殆ど家出同樣にして、僕に從いて東京に來る事になりました。後で考へて見れば、彼女は初めて見る東京、その言葉に、より以上惹きつけられてゐたのかも知れません。が、そんな事はどうでも良いとして、兩人は追手に追はれる心持で東京行きの夜汽車に乘りこみました。

　汽車は搖れて行きます。

　年取つて、孤獨に苛まれた父親の顏、病に窶れた母親の面影。言ひ知れぬ懷かしさが、僕の胸をわくわくとさせました。あの淋しい父親に對して、自分はまあなんと云ふ不孝な子であつたらう。僕は眼の中が熱くなるのを覺えました。目の前の事に迷はされて、自分は自分の爲に一心に働いてくれた父親の事を、まあなんと蔑んだ事でしたらう。目に見えない父親の大きい愛が、後悔の熱い涙となつて僕の瞳を曇らせたのです。

　芝浦の瓦斯溜が見え出しました。女にとつては初めて見る大東京なのです。大きな建物の一つ一つがどんな驚異となつて、あの小さい女の心に映つて行つた事でせう。未知の世界に突進して行く、云ひやうのない不安がその小さな胸にいつぱいこみ上げて來て、涙をさへ誘ふらしかつたのです。

　僕は又僕で、久し振りに歸つて來た懷かしい東京の景色を飽く事もなく凝視めてゐました。わづか四年の間に、隨分な變り方をしたものだ。しかしやつぱり東京は、親しい東京だ。自分の搖籃の東京だ。兩手を擴げて「歸れる兒」を迎へて呉れるのだ。惠み多い懷の中に暖かく抱かれて心ゆく迄泣くのだ。そして祝福された兩人の新しい生活は始まるのだ。さう思つて僕は女の方を見たのです。女は眼に一杯涙を湛へて縋るやうにこつちを見上げてゐました。

（家へ着いたら何と云はう？「今戻りました。」と言はうか、皆んなは何て云ふかしら。）

　そして僕はもう一遍心の中で父親に詫びたのでした。……あゝ、あの時のあの殊勝な心持と、そして又僕をその心持に結びつけてくれる彼女の愛とさへあつたなら、今頃僕は無事に木場の帳場に、唐棧柄の結城紬で納まつてゐたのでしたらうに。……」

　栗本は暫く默つた。丁度障子にうつつた影法師を見るやうな心持で、過ぎ去つた過去の自分を凝視した。

「それから簡單に云ひます。……」

やがて靜かに、又附け加へた。

「彼女は追々東京に慣れて來るにつれて、以前の荒み切つた生活に對する憧憬の心が立ち歸つて來たのでした。僕は「ドン・キホーテの夢」を見てゐたのです。

　たうとう彼女は淺草の華やかな幻影に、木場のあの材木臭い陰氣な家を見捨てて了ひました。そして僕と親父との仲も亦、以前の通りの經過を繰返して、僕の第二回目の、そして最後の放浪が始まりました。

　僕は自家に出入してゐた或る藝人の紹介で、やつぱし或る舊派の俳優に弟子入りしました。しかし僕には、あの徳川時代からそのまゝ續いてゐるやうな、彼等仲間の妙な卑屈な根性が、どうしても受け入れられなかつたのです。で、僕はやつと叔父に強請んで米國へ着く迄のお金を出して貰ひました。

そして桑港へ着いた時、僕は文字通りの一文無しでした。で、まあとにかくやつと工面をして、ホリーウッドの雪洲さんの弟子になつたわけです。

それから今は御覧の通り、体くんだ日で麻に着て、夢は横濱と云ひ度いのですが、夢はいつしかサシャの夢、ハハハ、、……飛んだ惚氣になりましたかね。』

栗本は眼を閉ぢた。惠吉は時計を出して見た。パチンと云ふその蓋の音に栗本が尋いた。

『何時？　大分一人で喋つちやつた。』

『さう、もう十時を、ちよつと廻つてゐます。』

（今日は一つブショールブロイの麥酒店で、蹄つきの豚の肢でも齧らうかな？　それとも久しぶりで、カント街の支那料理でもやるか。）

兩人は喋り疲れと、聞き疲れでどつちとも、ほつとしたやうに默つてゐた。

『どうしたんだらうな？』

眼を瞑つて栗本は、ぢいつとサシャの事を考へてゐるらしかつた。

『ぢや僕失禮します。』

惠吉は立上つた。

（支那料理にしよう。）

『まあ良いぢやないですか？　飯でも食つて行くさ、ね？……』

栗本は眼を開けた。

『おつつけ、サシャが戻りませう。』

『いゝえ、又いづれ。大分長尻して了つて。』

『ぢや、又來て下さい。お忙しいですか、近頃？』

『いゝえ、ちつとも。毎日庭球や快走艇で暴れ廻つてるんです。』

『さう？……』

栗本は微笑んだ。そして眼を外らせた。

『テニスは面白いな。』

それは獨言のやうにも、又溜息のやうにも聞けた。

（惡い事を云つた。）

惠吉はさう思つた。

『ぢや、又來ます。』

『えゝ、どうぞ。こゝで失禮します。』

『さよなら。』

惠吉の背後に閉まる戸の音を聞いた時、栗本は何だか一人ぼつち置き去りにされた佗しさを感じた。彼は俊寛僧都のやうに手を差伸ばした。そして彼はその寂寥を、もうすぐにも歸つて來るであらうサシャの胸の中に溶かし込んだ。彼は手を伸ばして枕頭の彼女の寫眞を取つて、接吻をしてから自分の胸に押し當てた。微弱な心臓の鼓動は、寫眞の小函を傳はつて、淋しく彼の手に響いて行つた。

（どうしてこんなに遅いのかしら？）

彼はもう一遍なつた。

ふと彼の心を、丁度あの雲の影が、畫面を掠めて行くやうに、今迄考へても見た事のない、或る不吉な豫感がさつと過つて行つた。

と、暗澹たる黒雲が忽ち彼を包んでもくもくと湧き上つた。彼の眼の前は一面に霞んで、寫眞の額縁も、電燈も、天井も、部屋も、……ぼうつと闇の中に消えて行つて了つた。

彼はその暗闇の中に仄かに動くサシャの姿を見た。他事々々しいサシャの顏を見た。すると今度は、よく社の撮影所へやつて來る若い氣障な紳士の姿を見た。自分で自動車を運轉して來ては、用もないのにぶらぶらそこらをぶらついて、ちよつと美しいと思ふ女優には、變な眼付で御機嫌を取つて行く。そして歸りにはきつと二三人の女優を自分の自動車に乘せて行く。

翌日、彼女等は又きつと新しい首飾とか、新しい指輪とかを光らせて來るのであつた。

（サシャ！　お前は、その戸口の外で、俺の知

らない指輪をそつとはづして匿すのだらう。きつとさうだ。）
栗本は幻影の中のサシャに罵つた。
あの暗い試寫室の中の寢そべり臺、セットに作つたしつくひ塗の大岩窟。ハルツ行きロケーションの夜汽車の中、……それ等の悉くが何かしら不吉な呪はしい存在として、彼の心の中に甦つて來た。
すると今度はあの活潑な撮影監督見習のプルンスキーの笑ひ顏が栗本の眼の前に浮んで來た。——さうだ！　いつだつたかも自分の前でサシャと狎々しく露西亞語で話し合つてゐたではないか。栗本はその丈夫さうな、いつでも、上着を脱いでシャツの袖を二の腕迄捲くし上げて飛び廻つてゐる、若い露西亞人の姿を見た。——あらゆる健康者に對する云ひ知れぬ嫉妬を彼は全身に覺えた。それは丁度醜い女が美人に對して懷く所の或る漠然たる不斷の嫉妬、反感、憧憬、讃美、ひがみ、不機嫌と云つたそんないろいろの氣持の混成酒と同じやうな味がしたのである。
（歸つて來たら、心のゆく迄、罵つて罵つて罵りぬいてやるのだ。）
栗本は青銅の小筐をいきなり夜机の上に投り上げた。それは、しかし、小さなその夜机を滑り越して向う側の床の上に落ちて了つた。硝子の割れる音がした。
鍵の音が廊下の外でした。
栗本は狸寢した。
『只今！』
サシャは帽子を外した。
『まあ、寢てらつしやるの？』
さう獨言のやうに云つて、彼女はそつと栗本の額に唇を當てた。
「おや、お熱があるかしら？」
サシャは今度は手袋を脱いだ掌で栗本の額と比べて見た。
『やつぱり無いわ。』
そして、もう一度唇を當ててから、そうつと跫音に氣をつけて、自分の部屋へ入つて行つた。
細目の横眼にサシャの姿が消えた時、栗本はぶりつとして夜具の襟當で額を拭き取つた。
やがて普段着に着換へてサシャが戻つて來た。
栗本は蒲團をなほしてくれる彼女の氣配を感じた。やがて側の椅子、さつき迄惠吉の坐つてゐた椅子を前にずらす音を聞いた。
栗本は細目に眼を開けた。彼は手に編物の毛絲の縺れを解し乍らそつと自分の方を見てゐるサシャを見た。彼女はにつこと微笑んだ。
『起きてらつしたの？　ジョンニー！』
栗本は默つてゐた。
（自分の綺麗な齒並が見せたいので、そんな微笑んだりするのだ。）
『すぐ、御飯にして？』
『……………』
サシャはもう立上つてゐた。毛絲を丸めると椅子の上に置いて、彼女は臺所の方へ入つて行つた。
パンと腸詰とコールドミート、晩はいつでも火を使はないで濟む冷い御馳走であつた。栗本は默つて食べた。——空腹はやつぱり空腹であつた。
卓子の上は片付けられた。サシャは靜かに寢臺の側に坐つた。
『ジョンニー！』
『……………』
『あのね、今度、あのプルンスキーさんが初めて自分で撮影すんですつて。それでね、私に題、役を讀つてくれつていふのよ。』

栗本はやつぱり默つてゐた。
『ジョンニー！　どう思つて？』
『結構だね。フンだ。』
サシャは暫く栗本の顏を見てゐた。涙が、大粒の涙がいきなり、はらはらと彼女の頬を傳つて流れた。
『ジョンニー！』
彼女の聲はおろおろと途切れた。
『怒つてゐるの？　え？　ジョンニー！　私が遲かつたから？　え？　だつたら、宥して頂戴ね。』
サシャは跪いて栗本の額に接吻しようとした。栗本はいきなり蒲團を頭から冠つて了つた。サシャはそのまゝ突伏して了つた。そしてしくしくとしやくり上げた。幽かな聲が涙の間にぽつりぽつりと彼女の脣を洩れて行つた。
『ねえ、ジョンニー！　どうしたのよう？　え？』
『知らないよ。……』
栗本は蒲團の中から、やがて呶鳴つた。
『どうせ、どうせこんな病人なんかにや用はないんだ。』
これが彼の罵つて、罵つて、罵り拔いてやる、その言葉の全てであつた。
沈默。——やがて彼は蒲團を越して幽かにサシャの涙聲を聞いた。
『そんな風に私の事を思つてらつしたの？……いゝわ。』
栗本は苦しい咳嗽の發作に襲はれた。
『ジョンニー！』
サシャは思ひ返したやうに、栗本の蒲團に手を掛けた。彼は固く顏を隱し乍ら咳入つた。
『ジョンニー！　ジョンニー！……』
彼女は一生懸命であつた。
『ジョンニー！　毒よ。ね？　ジョンニー！』
サシャはやつと蒲團を開けた。彼女は急いで立上つた。そして卓子の上のコップに水を注いで持つて來た。彼女はふと、夜机の向う側の床の上に、キラキラと光つてゐる硝子の破片を見た。歪んだ青銅の額緣から、半分滑り出してゐる自分の寫眞を見た。
『ジョンニー！』
栗本は息もつかずに水を飲み干した。咳は少し納まつた。
サシャは心配さうに栗本の顏を見てゐた。栗本も亦サシャの顏をぢいつと見上げた。兩人は暫くお互の瞳に見入つてゐた。
やがて栗本の眼の中が熱くなつて來たかと思ふ間に、もう大粒の涙が止めどもなく、後から後からと溢れて來た。それは頬の上を冷たく流れて、白い枕布の上に落ちて行つた。
彼は、碧く澄み切つたサシャの瞳の中に、自分自身の醜い姿が映つてゐるのを見た。
『サシャ！』
そしていきなり彼女の頭を抱きしめて自分の胸に押し當てた。お互に探し求めた四つの脣は固く固く、いつ迄も離れなかつた。
窓の外には夢のやうな夏の夜があつた。都の夏を訪れた、夜鶯の啼き聲が、隣りの庭に咲きこぼれた接骨木の紫色の小花の叢から漏れて來た。
チオ、チオ、チオ、
チオチンクス！
サシャは紙の包みを解いた。
『今日ね、ティールツの割引市で、お寢間着買つて來て上げたわ、着換へない？　もう隨分汗臭いでせう？』
『あゝ。有難うよ、サシャ！』
（この暑いのに、態々アレキサンダー廣場迄廻つて來てくれたのか？）
サシャは編物の袖を動かした。男用の襟卷が、もう半分も出來上つてゐた。

（表編み、表編み、表編み、裏編み、裏編み、表編み、四日すかして、表編み、……）

栗本は天井にうつつてゐるいろいろの形をした飾電燈の陰影を見てゐた。

チオ、チオ、チオ

チオチンクス!

『サシャ!』

『なあに?』

『あのね。』

『えゝ。』

『御免よ。』

『……………』

新しい涙が、別の涙が。――サシャはそつとハンケチを取り出した。

クロイツエル・ソナタ

惠吉は、机の上に二三枚の地圖と海水浴案内を擴げて、いろいろと照り合せてゐた。北海へ行からか、バルチック海へ行からかと云ふ事が問題であつた。彼の氣持としては、日露戰爭以來御馴染のバルチック海へ行つて見たいと思つてゐた。北海はそれに何だか鮭や鰈とぶつかりさうな氣がした。

彼はいろいろの地名を繰つては、宿屋の事や、地勢のところを讀んで、そして眼の前へそれぞれそこの景色の素描を描いて見た。

惠吉はその時、戸口の所で何か聲高に話し合つてゐる人聲を聞いた。彼はすぐそれが自家の女中のリザと門番の主婦さんとである事がわかつた。時々、『ブルクマン、』とか、『ハインツ、』とか云ふ言葉が漏れて來る。それが妙に彼の好奇心を唆つた。

いつだつたかの夜、彼が閉め出しを食つた時、戸口の所で話し合つたあの若いお洒落な青年を想ひ出したのである。彼は立つて出て行つた。

『今日は! ドクトル・イマムラ!』

惠吉の顔を見ると太つた身體を大儀さうに曲げて、門番の主婦さんが丁寧にお辭儀をした。彼女はいつもドクトルと呼んだ。

『何か起つたのかい?』

惠吉は尋いた。

『いゝえ、何ね、實は、知つてらつしやいますか? 前の家の息子さん。あの人が親父さんと喧嘩をして、家を飛び出しちやつたんです。』

『え? あのハインツ?』

『えゝ。』

『どうしたんだらう?』

『何でも、よくは知りませんが、こんな舊式な家には一刻も居られない、俺だつて立派に一人で食つて行けるつて大變な鼻息で出て行つたんですつて。……可哀さうに妹さんが一日泣き腫らしてゐます。』

『ぢや、つまり親父さんと意見が合はなかつたんだねえ?』

『えゝ。なんでも、人間の魂をチェリーと間違へられちや困る、錆びついた型になんか押し込まれてたまるもんかいつて、親父さんの禿頭をぴしやりと一つ撲つて、そのまゝ飛び出して行つて了つたんですつて。』

『さうかい。』

（此處でも何かが轉がり出した。）

と惠吉は思つた。

『私や、どうも此の間から變だとは思つてましたが、やつぱり社會主義だつたんですね。どうして近頃の若い人達はあんなもんにとつつかれるんでせうかね?』

門番の主婦さんは心配さうに首を振つた。この分で行つたらこの國は一體どうなる事だらう? そんな風の面持であつた。惠吉は、社會主義は良かつたと思つて、この婆さんが何だか可愛らしい氣がした。

その時、部屋の方から卓上電話の鈴がけたゝましく鳴つた。
『お電話。』
リザが注意した。惠吉は駈けて行つた。
電話は山田からであつた。急用があるから直ぐ來てくれと云ふのである。
（何だらう？）
惠吉は狼狽てて麥藁帽を掴んだ。
彼は早速角の廣場からタクシーに乘つた。
『アカチエン街六番。急いでくれ。』
『かしこまりました。旦那！』
自動車はもう、鏡のやうなビスマーク街の鋪道の上を疾驅して行つた。煙草を喫かし乍ら自動自轉車を走らせると、紫の煙が一直線に地面と並行して靡くと云ふ、それ程平らかな道路であつた。
息もつかずに四階を駈け上つた。
扉を開けた時、惠吉はそこに心配さうな卵女子の瞳に出會つた。通つた部屋の中に、両手に頭を抱へた山田の姿を見た。惠吉には何もかも解つたやうな氣がした。
山田は默つて、机の上に開かれた一枚の手紙用箋を指さした。惠吉は取上げて讀んだ。それは櫻井からの手紙であつた。簡單に次のやうな事が書いてある。
『自分は君の爲に飛んだ（姦婦の夫）になつて了つた。自分は失はれた名譽の爲に、相當の手段をとる心算だ。その妓は離縁する。その手續きと一緒に、君への訴訟を明日あたり領事館に屆ける。證人には宿の主婦が立つてくれる。……』
惠吉は山田を見た。
『一體君は此の際どうする心算？』
彼は尋いた。
『どうするつて……』
山田は顏を上げた。
『實は、先刻又電話が掛つて來て、昨日あんな手紙を出したけれど、あれは激昂してゐたからだ。考へて見れば滿更知らない仲でもない。それにこんな事は世の中に出して餘り名譽な話でもなし、何とかうまい解決が有るかも知れない、とに角、今これから行くつてさう云ふのさ。それで……』
『そりや君、奴あ結局る所、金が欲しいんだ。きつとさうですよ。』
『あゝ、無論さうらしい。』
『で、君はいざつて云ふ場合、その妓さんを引取る丈の心に用意は有るんですか？』
『無論、僕はその氣でゐる。』
『おや、案外解決は早いと僕は思ひますが。』
丁度その時呼鈴が鳴つた。惠吉と山田は思はず眼を合せて口を噤んだ。妙な緊張した空氣が部屋の中を閉した。
櫻井の姿が現はれた。ちよつと見た所、不和しさうな顏に奇妙な笑ひを浮べて、チラツと惠吉の方に眼をやると、丁寧に口を切つた。
『これは、これは、辯護士さん迄お揃ひで。恐れ入りますな。』
さう云つて腰を下すと、頻りと額の汗を拭き取つた。
『暑いですな。』
戸外の暑氣が、彼と一緒にこの部屋の中迄入つて來たかのやうに、惠吉は今更むつとする空氣を感じた。
『山田君、早速用件にとり掛りますが、何ですね、僕の考へはもう大概わかつてゐてくれる事と思ひますが？』
櫻井は厭に落着いてネチネチと切り出した。
『考へと云ふと……』
山田は古いおそなへのやうに固くなつてゐた。

「ハハヽ、さう改まつて尋かれると、ちよつと弱るが、つまりまあ早い話がですね、君がどこかの店で品物を見てゐるとする。そのうちに誤つてそれに傷をつけたと假定しますね。さう、僕は今、誤つて、と云ひましたね。これは僕が君に對して好意を持つてゐる證據ですよ。で、その場合、君はどうします？…買ひとらなけりやなりますまい？　つまり私は、その枝を君に買つて頂きたいのです。』

（何と云ふきたならしい言葉だ！）

惠吉は心で中に、云ひ知れぬ公憤を感じた。

『では、結局、損害賠償を出せつて云ふのですね？』

山田がさう尋いた。おそなへはお湯をかけた位柔らかくなつた。

（姦通の損害賠償か。）

惠吉は法律家らしい微苦笑を感じた。

『一體どの位つて云ふお考へです？』

『一萬圓、鐚一文缺けても、と云ひたい所ですが、ハハハヽヽヽ、そこはお互に旅の身空だ。半分に負けときませう。どうです？』

櫻井は妙な笑ひ方をした。

『櫻井君！』

いきなり惠吉が呶鳴つた。山田に對する同情と云ふより、櫻井のその女性を、卯女子もその一人である所の女なるもの全體を侮辱した考へが、その言葉が、惠吉の心の中に抑へ切れないいヽ、いヽ、いきどほりを燃やさしたのであつた。

『何て事を君は云ふのです。そんな莫迦な…』

「君は何です？…」

櫻井の眼の中にはチラッと險しい光がさしたが、すぐそれは蔑むやうな冷やかな微笑に崩れて行つた。

『かう云ふ事は當局者の間に解決すれば良い問題です。脇から餘計な出しや張りを、…』

『莫迦な。例ひ山田君が承知したつて、僕が人間として反對するよ。』

惠吉の聲は震へてゐた。

「君、君、…」

山田は訴へるやうな眼差しを惠吉に向けて、遮らうとした。

惠吉の頭には、しかしもう、山田と云ふ一個人は無かつた。侮辱されたる女性全體の爲に辯護するのだと云ふ意識でいつぱいであつた。

『櫻井君！　さあ、勝手に訴訟でも何でも起して、取れるもんなら取つて見たら良いでせう。…刑訴問題に損害賠償もないもんだ。』

「君、今村君てば…』

山田は頻りと止めた。

『さあ、早く訴へるなり、何なり…』

『五月蠅い。亞鉛屋根の雨ぢやあるまいし、少し靜かにしたらどうです。…だから、僕もさうするつて初めから云つてるのさ。ぢやさうするかな。さうすりやこつちは金は取れないが、その代り山田君が、…』

「他人の事なんてどうでも良い。君は自分の思ふやうにしたら良いでせう。なんだ、自分が夫としての義務を何一つ履行もしてゐないで、妾てかけと同棲してるつて云ふぢやありませんか？　それで妻にだけ貞操を要求するなんて、そんな蟲の良い權利が何處にある？」

『貴方の御國にちやんと有るから不思議だ。』

『法律上はいざ知らず、そんな事は人間として許されん事だ。』

「法律は人間の作つたもんぢやないのですか？」

『人間が作つたから間違つてゐるんだ。』

「ハハヽヽヽ。ウワッハヽヽヽ。』

櫻井は大聲に笑つた。

「ぢやもう一つ伺ひますが、一體姦通つてもんは人間として許される方の口なんですか？」

「人情はそんな冷たい三段論法で片付けられは

しないぞ。道徳と人情とは必ずしも一致してやしない。姦通が道徳上宥す可からざる罪だつて事位三歳の童子だつて知つてゐる。だからと云つてその事實ばかりを責め立てるのが能ぢやないぞ。その間のあらゆる事情に、温かい眼を向けてやる事こそ眞の人間としての尊い仕事なんだ。そこにヂレンマがある。片手に道徳の鞭を持ち、片手に人情の……』

『あゝあ。……』

櫻井は大きな欠伸をした。

『飛んだ御說教だ。惚氣より退屈だ。』

『所で、法律がどつちを取るか、そこが問題だ。道徳か？　人情か？　理想としてはこの三つが完全に一致して……』

『あゝあゝあ……』

櫻井は大仰に手を伸ばして立上つた。

『解つたよ、解りましたよ。大した三位一體だ。君は中々新しい立派な法律思想を持つていらつしやる。その意氣。その意氣。早く日本へ歸つて改革運動でも起されると良い。人情的落涙的自由法か。ハハ、、ハ、。……ぢや僕はこれでお暇しよう。』

櫻井は帽子を取つた。

『ヘン、利いた風な事ぬかしやがら。昔なら文句はねえ、字の丸の壽司ぢやねえが、重ね置いて眞つ二つつて奴だ。』

から捨臺詞を殘して、彼はいきなり部屋を出て行つた。

『君、君、櫻井君。……おい君。』

山田は狼狽へたやうに、おろおろと後を追つて行つた。

『兎に角、もう一遍來ますよ。あんな小僧つ子がゐると、どうも五月蠅くつてね。……』

戸口の所で櫻井の聲がした。彼はもう梯子段を下りて行つた。

『困るなあ、折角穩便に話をつけようと思つてゐたのに。』

山田は責めるやうにさう云つた。

『だつて君。……』

『そりや、君。僕だつて癪に觸るさ。その枝さんをあんな風に扱はれちやね。そりや君なんかより餘つ程腹が立つたよ。しかし、人間つてもんは立場に依つて、正しいと思つてもさう強く出られない場合もあるからね。僕はその枝さんの事を考へてゐるんだよ。……そりやね、僕だつて實際辛いよ。口惜しいよ。愛する者を金で評價するなんて、こんな大きな屈辱があるもんか。僕は當然喜んで何處へでも行く可き譯だ。しかしだね、僕は又同時にどんな事があつたつて、その枝さんを罪人にしたくはない。そこに大きな僕のヂレンマがあり、惱みがある。僕さへその堪へられない屈辱を堪へさへすりや、その枝さんは無事に濟むのだ。……いゝや、待つてくれ給へ。僕はもつと考へなくちやいけないな。その屈辱に堪へると云ふ事は、同時に僕がその枝さんに對して、より大きな屈辱を與へると云ふ事になるな。……あゝ解らない、解らない。一體僕はどうしたら良いのだ……』

山田は苦しさうに頭を掻挘つた。

『いつか僕が云つた通り、現今の結婚制度の缺陷をまざまざと見せつけられたやうな氣がする。』

兩人は默つて了つた。各々別の考へが兩人の頭の中に渦巻いた。山田はその枝の幸福の事を。惠吉は――彼は現在の法律の缺陷と云つた事を。

（男の爲の法律だ。

眞の愛に根差さない結婚を、たゞ社會の秩序と云ふ便宜的な觀察點からのみ眺めて、それを保護して行かうと云ふ法律は果して妥當であらうか？

貧の爲、金の爲、親の爲、義理の爲、そして熱病的な僞りの愛に誤られ、强ひられて、幾多の多くの不幸な人々が、この不當な、外部的の枷の重みに惱み悶えてゐる事か。

結婚を眞に保護するもの、それは内部に溢れる眞の夫婦愛の力のみだ。夫婦愛。——しかしそれを結婚後のみに期待する時、それは一つの投機だ。)

惠吉の心の中で、常識が叛逆を企てた。

眞赤に泣き腫らした眼を無理に拭き取つて、卯女子が靜かにその部屋の中に入つて來た。そして默つて脇の椅子に腰を下した。

惠吉は卯女子の顏を見た。そしてその愁嘆に滿ちた瞳と合つた時、彼は何だか、今迄男らしい行動として内心誇つてゐた自分の振舞が、どうも正しい處置ではなかつたやうな氣がし出した。彼は、何だか惡い事をしたやうな氣がした。

(自分は、卯女子あるが爲に自分にとつて大事な女性と云ふものの事を考へ乍ら、その肝腎な卯女子の事を忘れてゐたのだ。——卯女子がどんなに兄の事を心配して居る事か?)

山田は靜かに立上つて、默つてピアノの蓋を開けた。

惠吉には何となくそんな氣がした。

(「クロイツェル・ソナタ」でも彈くのかしら?)

日本から友達が送つてくれた松笠風鈴を、開け放たれた窓邊に懸けて、その涼しげな音色に日本の夏を偲ばうと云ふ趣向であつた。がその風鈴の舌は重く垂れて、脂汗がじわりじわりと滲み出るのであつた。

惠吉は持て餘した身體を寢そべり臺に横たへて、プカリプカリと葉卷の煙を吹かしてゐた。灰を落すのも物憂くて、徒らに眼だけが活潑に動く。

卓子の上に、盛られた林檎の肌が赤く光つてゐた。

眼は卓子の脚を滑つて、赤い絨氈を走つて、黑の書机の上に至つて止まつた。そこには卯女子が誕生日に贈つてくれた、スフヰンクスの像が、惠吉を凝視めて動かない。

彼の想ひは忽ち紫の葉卷の煙に包まれて、遠く神祕の國、埃及のナイルの河畔に漂うて行つた。千古の謎をその怪しげな瞳の奥に祕めて、ぢいつと永遠を睜つてゐる、お前、スフヰンクスよ! 一體お前は此の人の世の果敢なさを悲しんでゐるのか、それとも嘲笑つてゐるのか? 悲しげな鈴の音色も絶え絶えに、沙漠の闇に消えて行く駱駝の群にも何かしら探られざる神祕が潛んでゐるやうな氣がするのであつた。……

惠吉は往航の途中に見物したあの奇しきカイロの一夜を想つてゐた。ナイルにうつる星影を想つた。顏を隱した婦人を想つた。……

椰子の樹蔭にかうやつて、惠吉がいつものやうに夢を見てゐる所を、不意に低い低音の聲が彼を現實へと呼び返した。

そこには皆川が帽子も脱らずに、立つてゐた。貸家の札のやうに、いつも心持首を曲げた、漠然たる顏をして立つてゐた。雨の降る日に共同便所に入つて、みつわ行燈を使つたやうな顏だ、とかつて皆川自身が或る人を評した、そんな漠然たる顏をしてゐた。

「やあ。」

「やあ。」

「どうしたんです、この暑いのに?」

「實はね、君。料理店の使用人が同盟罷業をやつてね、何處へ行つても飯が食へないので、君にでも聞いて見ようと思つてやつて來たわけさ。」

「あゝ、さうさう。新聞に出てゐましたつけ。

さうと、・・・』
家で食事をしてゐる惠吉は、初めて今朝、そんな記事の出てゐた事に氣がついた。
『さうですね。別に僕も知りませんが。・・・さう、ユダヤ人のやつてる店なら知つてますが、あすこへ行つたら殊によると食はせてくれるかも知れませんね。』
『そいつは有望だ。濟みませんが、ぢや、そこを教へてくれたまへ。』
『えゝ、御一緒に行きませう。』
惠吉は時計を見た。そして皆川の新調らしい洋服に眼をやつた。心持青みがかつた格子柄の地で、皺もキチンと身に合せて、何處から見ても一厘の隙もない。黒地に紅の條を斜めに走らせた絹のネクタイをキリッと結んで、彼の誕生石と稱するアメチストのピンをその結び目の所に光らせてゐた。エナメルの半靴に塵一つもたかつてゐない。
(資生堂の番頭さんを想はせるではないか。)
『どうしたんです。厭におめかしですね。』
『ハヽ。僕は近頃、形式と云ふものが、如何にこの世の中で幅を利かせてゐるかと云ふ事に、つくづく氣がついてね。實際、宿屋の番頭みたいな手合が多いですな。金箔を見て佛體を見ないつて云ふ奴です。世の中の凡くらと云ふものは、何でも眼に見える所が綺麗だと喜んでゐるんだ。電車に乘つたつてさうでせう? 陽の當つてゐる側の乘客だけは皆ハンカチで口と鼻を掩つてゐる。ね? だから僕もかうやつて外形を飾つてやらないと他人が馬鹿にしてね。・・・所が君、ちよつと失敗した。・・・』
『え?』
『へヘヽヽ。』
皆川は默つて帽子を取つた。惠吉は思はず笑ひ出して了つた。皆川の頭はクリクリの坊主になつてゐた。
『夏向きですね。』
『えゝ。實はね、これに就ては一場の愛國的插話があつてね。』
皆川はこの暑いのに、御苦勞さまにも、又例の插話なるものを、冷藏庫の中から取出した。
『え?』
惠吉にとつては、とに角このうんざりする氣倦さから解放される事だけでも、それは嬉しい清涼水であつた。
『實は昨夜行きつけの床屋へ行つたものと思ひたまへ。どうして特に行きつけと稱するかと云ふと、君、實はそこにとても美人の磨爪術の女がゐるのさ。で昨晩もぶらりと入つて行つた。すると、(お早う、ヨコハマ)と來た。』
『何です、そりや?』
『挨拶さ。お早うはまだ我慢するとして、ヨコハマは言語道斷だ。變な禿頭の爺さんが濟んだので僕は鏡に向つた。それからその床屋と僕との間に會話が始まる。そしてそれが終に僕の心の中に、愛國的熱情を爆發させたのだからまあよく聞いてくれたまへ。
先づ僕からだ、
僕。あんな禿頭、拳で良いだらう?
床屋。所がどうして、毛を探すのが中々骨が折れて、却つて手間が掛ります。
僕。さうかね? その道の苦心は又別だね。
(世の中に澄むと濁るで大違ひ、刷毛に毛はあり、禿に毛は無し。か。——これは和田垣さんの兎糞錄にあつたのです。その時ふと、どうした事か思ひ出したのです。
床屋。え?
僕。いゝや、なんでもない。
床屋。あゝさうですか。時に旦那の頭はとりや大變ですね。まるでベートーベンのやうだ。
僕。(内心喜ぶ。)
床屋。(櫛がその道を見付けられない。)つて頭

だ。實際床屋泣かせですよ。
僕。だからまあざつとやつといてくれたまへ。
床屋。ざつとにも何にも、まるで手が着けられやしません。頭髪と庭園は普段の手入れが肝腎ですよ。
僕。そんな事今更云つたつて仕様がないぢやないか。何とか結着をつけてくれたまへ。急ぐんだから。
床屋。それに、どうも日本人の頭髪は・・・
僕。日本人の頭髪がどうした？
床屋。硬くつていけない。
僕。何？ そんなに面倒ならもう良い。
そこでたうとう爆發したわけです。自分が侮辱されてる分なら、僕も大概我慢しますが、苟も日本人と銘を打たれて公に罵しられたとなると、これは君、事重大だからね。
で僕はいきなり前の棚に乘つてゐた鋏でざくつと自分の頭髪を切つて了つた。が、そこがそれ凡夫の淺間しさ。その鋏の音を聞いた瞬間、これは早まつた、と思つたね。僕は後悔した。僕はその時、あらゆる愛國者が最後の時に當つて感ずるであらう所の複雜な感情を、チラと窺つたのだ。
こゝに一人の青年があると假定する。彼は燃ゆるが如き愛國の熱情に驅られて、硝煙彈雨の中を疾驅してゐる。忽ち一發の外れ彈丸が彼の胸を貫く。彼は誰にも顧みられない叢の中に一人淋しく死んで行かなければならない。その時、斷末魔の彼の頭の中を往來する考へは何であらう？ 若し彼に本國に殘して來た若き最愛の妻があつたとしたら。彼の歸りを待ち侘びる、たつた一人の寄る邊少なき老母があつたとしたら。
僕は、つまりその時の彼の氣持がわかつたやうな氣がした。
で、そんなわけで、とに角それからバリカンの御厄介になつて、御覽の通りの次第さ。ハハハ、、。』
皆川はつるりとその散切の頭を撫でた。惠吉は皆川の後頭部が妙に平になつて、所謂「絶壁」をなしてゐるのに氣がついた。
『これはね君、幼い時、枕と喧嘩をして、板の間だらうが、疊の上だらうがこのまゝごろごろと寢たもんでね、こんなになつて了つたのさ。』
皆川は言ひ譯らしく附けたした。
『散切は西洋では罪人だけだつて云ふぢやありませんか。監獄へ入ると皆頭を刈られちまふつて云ひますが。』
『さうかしら。そりや益々悪い。』
皆川は、そのリュウとした服装にも關らず、まるで天日に晒された海月の如く、悄氣て了つたのであつた。惠吉は少し氣の毒になつた。
『何、すぐ伸びますよ。』
『さうかしら？』
皆川は心配さうに、つるりともう一遍頭を撫でて見た。

惠吉と皆川はズアレッ街のとある料理店へ入つて行つた。それはユダヤ人の營つてゐる店で、勿論來る客も大概同族の人々であつた。料理が美味いと云ふので、惠吉は一遍友人に連れて行つて貰つた事があつた。
その日も開いてゐた。兩人が戸口を潜らうとした時、そこに一人の身長の高い男が、まるで關所の番卒のやうな眼付でギロリとこちらを睨んでゐた。兩人はギョッとして立止まつた。
その男の胸には大きな札が懸つてゐた。
〔此處に、我々の理解ある運動を裏切る一人の背德漢あり。〕
と太々と書いてあつた。兩人はちよつと氣が負けたが、お腹の空いてゐる皆川はどしどし入つて行つて了つた。惠吉も仕方なく從いて行つ

た。

脇の料理店が閉店つてゐるので此の家は一ぱいの客であつた。兩人はやつと隅の所に空席を見出して坐つた。

こゝで彼等は面白い一場の喜劇を見たのである。

彼等兩人と向ひ合せの食卓に、一人の驚くばかりの美人が坐つてゐた。豐艶な肉體を漆黑の天鵞絨の服に包んで、斷髮の縮れ毛がふんはりと、彼女の小さい頭を取卷いてゐた。黑い大きな眼には涼しげな睫毛が、さう、一吋もあらうかと思はれる。すつきり通つた鼻筋の兩側にほんのり赤くなつた豐頰。小ぢんまりとした唇に、絶えず微笑を浮べてゐた。それは妖艶と清楚との不思議な調和を持つた女であつた。これならポッツダムのお城位わけもなく傾けさうな、とに角、大した美人であつた。

女はしきりと隣席の若い男に話しかけてゐた。その男は、多分戀人であらう、これは又しきりと彼女の御機嫌を取つてゐるらしかつた。彼は他の伴侶に對して、それを誇らしげに示してゐるのである。

『ありやなんでせう？』

惠吉がそつと私語いた。

『君、日本語だから遠慮は要らないよ。……』

と笑つて皆川が云つた。

『ありやクイチだね。』

（ユダヤ）とか（ヂュウ）とか云ふ言葉に對してとても敏感な彼等の前で、日本人は（クイチ）と云ふ便利な言葉を使ふのである。九と一とを加へるとヂュウになるからである。火炙りになつた八百屋おしと、それを悲しんで入水した吉三が、冥途で會つて抱き合つて、ヂュウッと云つたと云ふ落語の下げと同斷である。

『クイチはクイチらしいが、僕はあれは大淫賣だと思ひますがね。』

『いや違ふ。ありや君、金色夜叉の滿枝だ。』

皆川は凝つた事を云つた。

その時である。女はやをら給仕を呼んで、紙を持つて來て貰つて、自分の皿に食べ殘したウヰーナーシュニッツェルの一片を、それに包みかけたのである。隣席のさつきの若者は、狼狽てまい事か、眞赤な顏をしてもぢもぢやつてゐる。女は委細構はずにさつさと包んで立上つた。

憐れなる戀人はもう今にも泣き出しさうな顏をして、それでも立上つた。そして小鞄の中から厚さ五寸位の馬克紙幣を取り出して、勘定を濟ませると、前に坐つてまだ食べてゐる伴侶の連中に向つて、言ひ譯がましく云つたものである。

『その、あれです。實はその、實に大きなるもんでしてね。その……』

惠吉と皆川は思はず顏を見合せて微笑んだ。皆川は又餘計な話の殖えた事を内心喜んだ。彼はポケットから小さな乳鉢をとり出して二三種類の粉末を摺り合せてゐた。

『御手製ですか？』

『えゝ。藥の調合だつて僕、これで中々藝術ですよ。藝術は何も眼と耳の占有す可きものではない。胃の腑の感觸だつて鑑賞して惡いつて云ふ法はありませんからね。僕は下手な音樂を聞く位なら、ビオフェルミンやパンクターゼを飲んでた方がはるかに良いですよ。』

皆川は出來上つた藥を丁寧にオブラートに包んで、コーヒーの殘りでグッと飲み下した。

間奏曲

海濱情話

一週間經つた。

三伏の餘りの暑氣に堪へかねて、恵吉はたうとう海へ向かつた。

停車場には、蜜に集る蟻のやうに、蠢々と人が動いてゐた。毎日からやつて後から後からと、ところてんのやうに押し出されては、皆んな海岸へと運ばれて行く。まるでこの廣い伯林が空虚になりはしないかと思はれる位であつた。

恵吉はやつぱりバルチック海へ行く事にした。古都リユウベックから程遠からぬシャルボイツと云ふ小さな海水浴場を彼は選んだ。宿屋の返辭を受取つて彼は家を出た。

彼の部屋は海に向つた二階の露臺付の中の間であつた。眼の前の道路を隔ててすぐ海岸になつてゐた。入江になつたこのあたりは白波一つ見えない。

海は――藍染の縮緬の海。

道路に植わつた、並木のかげに赤屋根の別莊やホテルが點々と連つてゐる。

海水浴は大概午前にやつて、午後からは皆んな晝寝をしたり、森の方へ散歩に行つて、樹蔭のカフェでお菓子を喰べたりするのであつた。

夕食後は又皆んな食堂に集まつて、歌を唄つたり舞踊をやつたりする。恵吉は隅の方でトランプの獨り占をやる。

丸い月が海の上に懸つてゐた。恵吉は露臺に出てぼんやりと、この夢のやうな夏の夜の景色を眺めてゐた。何處からかベートーベンの「月光曲」が聞えて來た。それが困つた事には、どう聞いても「日光曲」なのである。が、とに角夏の夜は良い。

(下手なピアノを疵にしても、五百兩の値は十分ある。)

『ヘール・イマムラ!』

彼は振返つた。そしてそこに鉢植の椰子の葉かげに月光を正面に浴びて大理石の像のやうに立つてゐる、宿の愛くるしい娘を見た。

『御手紙よ。』

恵吉は部屋に入つて燈火を點けた。

『あゝ、ちよつと、ちよつと。』

『何か御用?』

『チョコレート。』

『ダンケ。』

手紙は山田京輔と皆川からとであつた。山田の手紙には――櫻井との話もやつと付いた。その枝さんは今自家へ引きとつた。これから兩人の生活は始まる。その枝も自分も幸福だ。卯女子がひとりで淋しがつてゐる。が、時々寝言に君の名を呼ぶのには閉口する。とに角暑いからね。――と書いてあつた。

恵吉はもう一通の封を切つた。

「御書翰正に拜受仕り候。『ホフマンの夕』とやらにて、『藤大納言忠家言ふ女放屁の事』一席講じられし由、甚だ我が意を得たる事と喜び申し上げ候。日本文學にも昔はユーモアと申すものありし事を毛唐共に知らせられたる貴下の功績、正にノーベル賞にも該當す可きと存じ上げ候。尾籠の話には候へども、右放屁の事にて思ひ付き候ひしまゝ、最近、ものの本より讀み申せし事二三御報じ申し上げ候。

そもそも支那にて屁の本質を最初に發見致したるは、化學者蘇中と申す男にて之あり、彼は最初密閉せる小部屋に籠り、一個の天眼鏡を手に致し克明に屁の在所を探し廻りし者に候。約六十日を費し、その間空しく放りし屁、實に三百餘發。

二度迄卒倒致させし由に候。この試みに失敗したる後は、次に弟子なる湛西と申す美少年を室内に入れ、その肛門に一枚の木の葉をぴたりと貼りて、彼の放屁を待ち受け候程に、忽ち怪音と共に木の葉はさつと室中に舞ひ上り申し候。翌日長安の民は一齊に、この蘇中が發表せし偉大なる眞理の前に、感歎の聲を漏らせしと申す事に候。曰く「屁とは臭き風なり。而して奇聲を發するを原則となす。」と。

今一つ、こは日本の話に候。昔、兩國が江戸隨一の盛り場なりし頃、屁を放る事の日本一と申す男現れ、堂々大看板を掲げし小屋掛けの中にて、屁の曲放りと申す事を演じ申し候。曲放りと申すも、別に種も仕掛けもこれ無く、見物衆の前に正眞正銘、間違ひなき臀部をまくり、昔より云ひ傳へし梯子屁、珠數屁はいふもさらなり、ぶつきり屁、釣瓶落しのどんぶり屁、など申すものを初め、物凄き所にては獅子の遠吠え、虎の嘯き、優しき所にては鶯の谷渡り、さては松蟲鈴蟲の音色に至る迄、凡そ世にありとあらゆる動物の鳴き音をいとも見事に放り分けて、物好きな都人等をやんやとばかり騒がせしと申す事に候。兎に角三番叟道成寺さては端唄一中節の類まで、望み次第、一段づつ三絃淨瑠璃に合せ、花火の響は兩國を欺き、水車の音は淀川に擬すと申す、比類なき名人なりし由に候。

實に當代の猫八を鯱鉾立ちに行きしやうなる男にては候はずや。とは風來山人の「放屁論」となん申すいみじき書物に見ゆる所なりとこの文の筆者も斷り居り候なれば、憚り乍ら、お信じあつて然る可きかと存じ上げ候。

尤も不肖聞く所に由れば、かの風來山人事平賀源内と申す男は、(天地に雷あり、人に屁あり、陰陽相激するの聲にして、時に發し時に撤るこそ持ちまへなり。)と申し、又(狐、鼬の最後屁は、一生懸命の敵を防ぐ。人として放らずんば、獸だにも如かざるべけんや。)とも申し、中々の放屁論者なりし由に候。

その他大阪千種屋清右衛門といへる者、放屁藥發賣の事などいろいろ珍説も御座候へども、いづれ後日を期し、先づは右、甚だ尾籠乍ら暑中御見舞迄。

皆川梅十郎拜

今村惠吉樣

惠吉は思はず吹き出して了つた。大變な暑中見舞もあつたものだ。あの人もまるで屁みたいな人だ。捉へ所がないではないか。

月が青く海の上に溶けてゐた。

開けられた窓から香しい夏の夜の吐息が、そこはかとなく漂うて來た。丸い月が青白く卯女子の姿を照してゐた。彼女はさうやつて窓邊に立ちつくしてぢいつと夜の空を凝視めてゐた。

(あの月はやはり今頃、遠い海邊の宿屋を照してゐるのだわ。あの方は今、何を考へていらつしやるかしら？)

流れ星がしきりと亂れ飛んだ。

「K・K・K……」

(あつ、もう消えちやつた。)

卯女子は何だか、幸福を取り逃がしたやうな氣持がした。

「もう寢ない？ 風邪ひくといけないわ。」

その枝はさつきからそこに立つてゐたのだ。

彼女は卯女子の可憐しい姿をぢいつと見てゐたのであつた。彼女の瞳には青い月影がそのまゝ宿つてゐた。

『あら、嫂さんそこにゐたの？』

『えゝ。……K・K・Kつて何のお咒ひ。クー、クラックス、クランの事？』

『いゝえ。』

『ぢや、なあに？』

『何でもないのよ。』

卯女子はその枝の瞳を見た。

『嫂さんどうかしたの？』

『いゝえ。』

『だつて……』

『あんまり月が良いからよ。』

同じ月の影はその青白い光を投げかけて、二人の戀人の安らけき夢路を見守つては、靜かに夜の空を滑つて行つた。

アカチエン街と、シャルボイツの海邊の宿と。――兩人は夢の中で語り合つた。

『兄さんて、随分な人ね。』

卯女子がいきなり部屋の中に入つて來て呶鳴つた。

『どうしてだい？』

京輔はその恐ろしい見幕に辟易して、椅子から立上つた。

『知らないわよ。』

その枝もびつくりして立上つた。

『困るなあ、さう藪から棒にそんな、怒り出しちや。え？　どうしたのさ？』

『私、私いつ寢言なんか言つて？』

卯女子の聲は急に悲しくなつた。

『寢言？』

『私がいつ、今村さんの……』

『あゝさうか、ハハゝゝゝ。そいつは、お前、此の間の晩、云つたのだよ。ねえ、その枝、云つたね？』

『さあ？　どうですか。』

その枝は迷惑さうに首を傾げた。

『いゝえ、云ひません。私生れてから一遍だつて寢言なんか言つた覺えは無いわ。』

『馬鹿だなあ。自分で自分の寢言を覺えてゐる奴があるもんか。』

『知らなくつてよ。……』

卯女子はいきなり泣きじやくつた。

『どうせ、どうせ私の寢言は汚いんだわ。御氣の毒さまね。』

そして卯女子は顏を兩手に埋めて、いきなり次の間に駈けて行つて了つた。京輔は呆氣にとられて立つてゐた。

『まるで赤ちやんだ。今村君も今村君だ。詰らない事を手紙に書くもんだな。ラブレターなんて實際第三者が見たら退屈なもんだらうね。』

隣りの部屋から卯女子の歔欷が聞えて來た。

『京さん。あなた、人を戀する處女の涙を、そんな風に輕蔑するもんぢやなくつてよ。』

『おやおや挾み打ちだ。』

『早く行つて謝つてらつしやい。』

『ハイハイ。』

京輔は剽輕に頭を下げて、さて急に嚴肅な顏をして、ゆつくりと次の間へ入つて行つた。

その枝はその時ふとK・K・Kの意味を思ひ出してそつと微笑んだ。

伯林から眞北に汽車を走らせる事約五時間、汽車はそのまゝ汽船に乘つてリュウゲンの島に渡る。そこから小麥畑と林の間を又一時間ばかり、前に海を控へ、背後に松林の續いた小さな漁村がある。

海岸の方は、それでも夏場は、避暑地氣分で華美な都の風が吹くのであつたが、そのゼーリンの小村外れに、一軒の漁師の家があつた。松林の中にたつた一軒、忘れられたやうに建てられた赤煉瓦と木造の粗末な家であつた。
すぐ前にひたひたと水の音がする。
湖のやうにくびれた内海の袋の底がその家のすぐ前に迫つてゐた。葦の茂みを切り開いて、棧を二三枚突き出した所に、頑丈な小舟が一隻繋いである。
後庭に干した網からは、夕の風に吹かれて鹽の香が、そこはかとなく漂うて來る。鷄の啼き聲も長閑に、如何にも田舍らしい牧歌的な響を傳へて來る。
その家の二階の一間を借りて、芳野文雄は此の夏を、一人靜かに暮してゐるのであつた。所も知らせてないので、誰から手紙を受取るでもなく、ひどく厭人的になつて了つた自分を淋しく思ひ乍ら、彼はたゞ本と書きものにうづまつて行つた。こゝへ來てから折に觸れ機に臨んで書き溜めた、日記とも感想ともつかないものが、もう大分机の上に溜つてゐた。

七月二十九日

あはれ、ゼーリンの松の木よ！ わがこの姿を何と見る。黑のソフトの上を丸く折返し、後に廻した手に横ざまにステッキを握つて、心持俯向き加減にとぼとぼと、松林の暗がり路を歩いて行くこの姿は、年若き多情多感の樂人シューベルトの散歩姿にも似て居ようか。惜むらくはかの「三人娘の家」のない事である。
松林の盡きるあたりから、急に崖になつてゐて、その下に遙かに海水浴場が見下される。華美な日傘や海水着の色彩があくどく海濱を埋めてゐる。遠くから見ると御嶽山の御花畠を見るやうな氣がする。
その崖の上に、背後に山毛欅の森影を控へ、一軒のさゝやかな茶屋がある。夕方になると散歩の歸りに寄る。人の良ささうなお婆さんが、獨り娘のテレザと、それからもう一人、ヒルデと云ふ、同じ年頃の女と、それだけでやつてゐるのだ。
夕涼みの散歩がてらに立寄る人か、又はその裏の森に、風を避けて作られた庭球場の歸途に、ちよつとビールを飲んで行く、さうした客が時々ある位で、大概の時は空いてゐる。戸外の山毛欅の樹蔭に置かれた卓子に腰を掛け、自分はよく書きものをする。お婆さんは俺の事をウェルテルさんと呼んでゐる。
娘のテレザは十九か二十位かしら！ 無邪氣な顏をいつでもにこつかせ、赤い頬つぺたをして、金色の捲毛をくるくるつと無造作に束ね上げ、それでも撫子の花などをちよこんと差してゐる。「思ひ出」のケチーを想はせる。時々何か鼻唄を唱つてゐる。
それでも、夕方など、綺麗に着飾つた都のお孃さんが、瀟洒たる背廣姿と打並び山毛欅の木の下闇に消えて行く後姿を、ぢいつと木に凭り掛つて、淋しさうに眺めてゐる彼女を見る事もあつた。
このテレザと宿の息子のアルツールとは戀仲なのである。アルツールが海岸の方にばかり遊びに行くと云ふので、此の二三日テレザは萎れてゐた。
松の皮を毟り乍らぼんやりと、海岸の方を見下してゐる彼女の眉が震へてゐるやうだ。

八月一日。

森を透かせて斜めにさしこむ朝日の光を、そのまゝ胸の中に吸ひこむやうに深い息をしてや

つた。心臓の底をほんのりと陽がさす。露臺とは名ばかりの朽ちかゝつた張出窓に卓子を持ち出し、伯林から持參のココアを入れさせ、パンとトマトを食べる。

青葉越しの光にあたり全體が綠色と云ふ感じを與へる。香しい空氣。牛の鳴聲。林を越して潮鳴りを聞く。大分今日は波が立つてゐるらしい。

町役場へ行つて、遊覽税を拂ひ、札を貰つて來る。

夕方風も凪いだので、小舟に帆を張り、對岸の小村に行つた。魚の燻製を拵へてゐる家に寄つて、鰻の燻製を一斤買ふ。土用の丑の日に食べてやらう。大黑屋の大串より大きい。

歸りにはボートをアルツールに賴んで水邊の小路を傳はつて、内海の周圍を歩いて歸つた。

丁度夕陽はだんだら丘の小麥畑の上に落ち、犂を引いた馬の背が、紅く映えてゐた。牛が二三匹、路傍の草原に、キョトンとしてこちらを見てゐる。

牧場に寄つて搾り立ての牛乳を飮ませて貰つた。主婦さんが木苺を一ぱい紙に包んでくれた。

八月四日。

海岸で「子供祭」があると云ふので、アルツールは大層めかして、青のネクタイを大きく結び、そゝくさと出掛けて行つた。母親が、小さい妹を連れて行けと云ふのを邪慳に斷つて、さつさと駈出して行つて了つた。

小さい女の子は門口に立つて悲しさうに、兄の後姿を見送つてゐた。可哀さうなので、自分が連れて行つてやる事にした。

海岸から續いた本通りの兩側に並んだ大きなホテルや別莊には明るく灯が點火され、往來に出張つたカフェの卓子には、華美に着飾つた都の人々が、多勢ビールやモッカを飮んでゐる。きちんとモーニングを着込んだ給仕さんがナプキンを腕に掛け、その間を燕のやうに縫ひ歩いて行く。

いろいろの土地土産や、海水着などをぶら下げた店が所々に見えた。何店も人で一ぱいである。音樂會のビラ、管絃樂の響。

自分は子供の手を引いて、やつとそこを通り拔けた。

海岸には赤い提灯が綺麗に吊るされてゐた。

黑い水がひた寄せて、白波の頭が時々薄闇の中に碎けてゐた。

薄靄が一面にかゝつてゐる。月がお湯殿の行燈のやうにぼんやりと光つてゐた。

砂濱の所に幕を張り、ジプシーの曲馬團がかゝつてゐる。メリーゴーラウンドの八釜しい樂隊が聞えて來る。

子供が乘せてくれと云ふので乘せてやつた。もうそこに友達を見付けて、きやつきやつと騷いでゐる。前の子供の帽子を取つたりして一人で燥いでゐる。

良い加減經つたら又戻つて來るから、それ迄遊んでおいでと云ひ殘し、ぶらぶらと一人出て來た。獅子の吼聲がする。

裏の所に、家のやうになつてゐる大きな車があつた。これが彼等ジプシーの住居なのだ。この中に寢泊りしては、かうやつて方々を廻つて行くのだ。

明日をいづくと定めなく、或ひは北歐の白樺の森かげを、又チトローネ實る伊太利の海邊傳ひに、大きな幌馬車の鞭の響も悲しげに、あはれ流浪ひ行くか、お前達よ！　西班牙の酒場の酒の杯に、仄かにうつるのは、いづこに會ひし誰の顏であらうか？

車の家の煙突からは、夕餉の煙が眞直に、夜の空氣に溶けて行つた。その入口の段の所に腰を下して、眞紅な布で肩を包んだジプシーの女が、腕組し乍ら、一人でぽかんと煙草を飲んでゐる。鳶色の縮れ毛をもしやくしやさせて、空を凝視めた黑い瞳に、遠く放たれた故鄕の山河を想つてゐるのだ。そこらあたりの空には、靄に包まれた一つ星が夢のやうに瞬いてゐた。

遠い遠い西班牙！　そこにはエブロの河邊にさらさらと、葉摺れの音も懷かしく　樹蔭多い栗木が茂つてゐるのだ。扁桃の花が紅く咲き零れて、葡萄の房に月の影を宿してゐると云ふ、あの懷かしい故鄕の山河が。

女の脇で頰つぺたに紅を塗つた道化師が、赤い丸を所々染め拔いた、おどけた服を着こんで、頻りとギターの調子を合せてゐた。仄かな月光の下に、白粉を塗つたその顏が痛ましくも青ざめてゐる。

悲しきピエロよ！

自分はそこを出て、ぶらぶらと渚の方に歩いて行つた。天幕を張つた易者の隣りに、廻轉獨樂の博奕がかゝつてゐた。多勢の男がわいわいと集つてゐる。

そこから海の中に、長く突出された棧橋がある。夕涼みの散歩に造られてゐるのであつた。見世物に氣を取られて、今宵は歩いてゐる人も少い。自分はぶらぶらと歩いて行つた。棧橋の下には流れ砂が青く光つてゐた。

一町餘りも續いたその棧橋も、もう終らうとする所で、自分はふと二人の影を見た。欄干に腰を掛けて、何かひそひそと囁き合つてゐる。朧月夜の事で、さだかにはわからなかつたが、海の方を向いてゐるその黑い姿は、そしてその話聲は、確かにアルツールとテレザに違ひなかつた。自分は又靜かに引返した。

その時、ふと兩人の聲がはつきりと聞えた。

「そんなもん、捨てておしまひよ。」

「えゝ、捨てゝ了ふわよ。」

そして兩人は默つて了つた。アルツールはぢいつと沖の方を見てゐるらしかつた。そこには妙に赤ちやけた大きな星が一つ、キラキラと水に碎けてゐた。アルツールは唾を吐いた。夜光蟲がその落ちたあたりに綺麗に光つた。

幼い女の子の手を引いて自分は又とぼとぼと、松林の路を家の方に歸つて行つた。

女の子は頻りと象が鼻で太鼓を打つた話を喋つてゐた。自分はたゞ默つて微笑んでゐた。

門口に母親が待つてゐた。女の子は遠くから可愛い兩手を擴げて駈けて行つた、そしていきなり飛びつくやうに抱きつき、母親の脣に接吻した。もう眼を擦つてゐる。

『ようく御禮をおつしやい。』

その子は裾をちよつと撮んで、足を曲げて微笑み乍らお辭儀をした。

八月七日。

久し振りで海岸に行つて見た。大きな日傘や日除け籠の中から黑い足と白い足がニヨキツと出てゐる。海へ入る人よりか、かうやつて日光浴をし乍ら砂濱にごろごろしてゐる觀海流の達人が多い。向うのカフェから聞えて來る樂隊の音に合せて舞踏をやつてゐる組もある。寫眞屋が變な呼び聲を掛けて、記念寫眞を撮らせて貰ひ乍ら濱邊傳ひに歩いて行く。

夜——海岸のホテルの音樂會に行つたが、詰らないので中途で出て了つた。夜の濱邊に出て砂の上に寢そべつて、ぢいつと消炭のやうな暗い海に見入つてゐたら何だか急に淋しくなつて來た。地の冷えが身に沁み渡る、遠い波の上に

漁火がチラチラとして、空一面の星月夜である。

　、

自分はぼんやりと北斗七星を見上げた。波の音が幽かに響いて來る。ハイネには、あの音を聞いても、海に溺れた小少女が、そのまゝ人魚になつて、人の世に對するその歎きの唄を囁いてゐるやうにも思はれたのであらう。

自分はふと一握の砂を摑んだ。

『啄木は今日は來ぬかと蟹は待ち。』か、こんな句を思ひ出し乍ら。

ふと跫音を聞いた。一人の男の黒い影が足早に駈けて來る。すると女の姿が續いて走つて來た。女は頻りと呼び掛けてゐる。

『よう。アルッール！　よう……』

男は立止まる。女は縋るやうに寄つて行く。すると男が邪慳に押し退けた。女はそのまゝそこへ倒れ伏して了つた。そしてしくしくと泣きじやくつた。

『よう。どうしたのよう。……どうして……そんなに……怒つたのよう。……』

『知らねえやい。』

『ね？　後生、お願だから敎へてよう。ね？……アルッールつてば。……』

『どうせ俺らあ田舎もんだよ。都の流行唄なんか知らねえやい。』

『あら、そんなこつて怒つてるの？　ぢやもう唄はないから堪忍して、ね？　あたし、もう一生唄はないわ。ね？　だから、だからもう堪忍して。……笑つておくれよう、ね？　アルッールつてば、アルッール……』

女は頻りと涙を拭きとつてゐるらしかつた。男は默つて居た。やがて尋いた。

『誰に敎はつた？』

女は默つてゐた。

『やーい、云へねえんだらう？　態あ見やがれ。あの白粉つけたへちやむくれだらう。いつでも違つた女とテニスをやつてるあいつだらう。おめえこなひだ、ぽかんと見とれてやがつたぢやねえか。やーい。額にまだ金網の痕がついてらあ。』

『アルッール！……アルッール！』

女ははげしく泣き上げた。男はさつさと以前の道を駈け上つて行つた。

女は長い間、冷え切つた砂の上に歔欷いてゐた。

八月九日

一日雨に閉ぢ籠められたので日暮し机に向つて、静かにディルタイの書いた「レッシング」の評傳を讀んでゐた。

讀み疲れた眼を上げた時、ふと雨の音が新たに耳に響いて來た。大分降つてゐるらしい。窓硝子にぴしやぴしやと音を立てて、細い銀色の雨の脚が、丁度椅の見える鈴掛樹の葉の上にかゝつてゐる。

遠雷が時々鳴つて、稲光のする度に松林がくつきりと浮び出る。内海全體が青く光る。

雨の音に紛れてさつきから叩いてゐるらしい臆病な叩音の音がしてゐた。

「お這入り！」

と云つてもまだ敲いてゐる。立上つて開けて見ると、そこにはいつでも家へパンを運んで來て呉れる二人の可愛らしい姉妹の、その妹娘が立つてゐた。林檎のやうな赤い頬をして、不思議に碧い瞳を持つてゐた。六つ位かしら？　裾を撮んで足をちよつと曲げる例の可憐なメヌエットのお辭儀をして、そして暫くもぢもぢしてゐたが、やがて後に廻してゐた手を前へさし出した。可愛い掌の上には、これは又直徑二寸とはない小さな可愛らしい林檎が乘つてゐた

『姉さんが……』
と云つて微笑んだ。自分は林檎を受取つて、頭を撫でてやり乍ら卓子の上のチョコレートを取つてやつた。女の兒は恥しさうに受取ると、又お辭儀をして、もう大急ぎに、それでも一段宛に梯子段を下りて行つて了つた。
何となく微笑まれる心持である。京都のさくらゐ屋で買つて來た綺麗な舞妓の木版の日本封筒を二三枚やつた、そのお禮心なのであらう。
林檎はディルタイの本の上に光つてゐる。

八月十二日。
夕方、又崖の上の茶屋に行つた。テレザもヒルデもゐなかつた。お婆さんが獨り、客もない卓子に腰を掛けて、ぢいつと下の海を見下してゐた。
夕陽が遙かの出鼻に沈んで、そこらあたりの入道雲を、茜色に染めてゐた。
岸からすぐの所に一隻のボートが浮いてゐる。二人の人影がその上に見えた。手を肩に廻し、寄り添ふやうにして何か話し合つてゐる。
海に淀つた入陽はそのまゝ朱を溶かして、波もボートも人影も一やうに赤く映えてゐた。お婆さんの瞳にも赤く光つてゐた。お婆さんは泣いてゐるやうであつた。
（娘はもう自分のものではない。）
やがてお婆さんは立上つた。そして海の方に向つて大きな聲で呼んだ。
「テレーザ！　もう御飯だーよ。」
ボートの上の人影はこつちを振返つた。そしてハンケチを振つた。
『今、行つてよー。』
お婆さんはにこにこして自分の方にやつて來た。やがて兩人の影は砂の崖道を驅け上つて來た。
「おつ母あ。昨日は大漁だつたよ。」
『それであたいのこと、忘れちまつたんだつてさ。……』
テレザは着物の砂を拂つてゐた。
『あすこの網の干してある所へ夕潮がぽちやぽちや寄せて來る迄、あたいちやんと待つてゐたんだよ。』
『うまく云つてらあ。』
アルツールはもう流行唄の事も、金網の痕の事もすつかり忘れてゐた。
振返つた森の中には、はや暗く夕闇が迫り、苔の蒸した幹が薄く寂然と並んでゐた。踏みくだく樹葉の音にも、夏の宵の寂寞があつた。

八月十七日。
夕方例によつて崖の茶屋に行く。今宵は、今度は大人のお祭があるといふので、海岸の方には提灯の灯が赤くゆらめいてゐた。賑やかな舞踏の樂の音と、時々花火が澄み切つた夏の宵空に向つて打ち上げられた。
テレザとヒルデが海岸を見下し乍ら並んで腰掛けたまゝ話し合つてゐる。訛言混りで、よくは解らなかつたが大概の意味は取れた。
「テレザ！　氣をつけないと駄目よ。アルツールが、ほらあすこの牧場の別莊ね、あすこのお孃さんとあぶないんだよ。昨夜もあの燈火の點いた窓から、ピアノの音が漏れて來るのに、うつとりと聞きとれ乍ら、病犬のやうにうろつき歩いてゐたよ。あたい、ちやんと見ちやつたんだもの。」
とヒルデが云つてゐる。
「ヒルデ！　ほんと？」
『あゝ。』
兩人は默つて了つた。
海岸の方では仕切りなしに花火が上つてゐ

た。ぱつと火の粉が散ると空が紅くなつたり青くなつたりした。そしてやがてポンと音がする。それは丁度澤山の流れ星のやうでもあつた。花火が消えた時、たつた一つ、夢のやうに闇の中に光つてゐる、遠くの燈臺の灯が瞳に殘る。

　ヒルデは何か皺苦茶になつた手紙のやうなものを胸から取出し、もう一遍眼を通して、そして獨り言のやうに何か云つてゐた。

『又南洋の方へ出掛けるから當分お別れだ、今度こそはうんと貯めて來るから、餘り浮氣をしずに待つてておくれ、身體を大事にしておくれ、だつてさ。……人馬鹿にしてゐるわ。ふんとに。』

『あの人？』

　テレザが尋く。

『あゝ。あんな一文無し、あたいは嫌ひ。航海で儲けたお金はきまつて皆んな博奕ではたいて了ふんだもの。あたい、亭主に持つならもつとからしまりのある男ぢやなくちや厭。テレザはどう思つて？』

『知らないわ、あたい。』

　暫く默つてゐたが又ヒルデが獨り言のやうに言つた。

『どうして男つてあゝ執拗いんだらうね？　まるでココアの汚點みたいだわ。』

（きつとヒルデは外出着の白地にココアを零して、中々脱れなかつた事があるのだらう。）

『まあ、綺麗！』

　テレザが叫んだ。中々消えない星のやうな光の玉が、時々色を變へ乍ら、風のない夏の空をゆるやかに流れて行つた。テレザはぢいつとその行方を見守つてゐた。彼女は涙ぐんでゐるらしかつた。あの光の中に言ひ知れぬ愁ひが籠つてゐるやうな氣がしたのかも知れない。彼女はそつと涙を拭いてゐる。

『どうかした？……』

　ヒルデが尋いた。

『泣いてるの？』

『さうぢやないわよ。』

『お互樣だよ。』

　ヒルデはさう云つて溜息をついたやうだ。そこにヒルデの涙があつた。

『あたいだつて、……』

　と云ひかけたが急に淋しく笑つて、

『止さう。』

　と云つた。一閃の曇がさつとヒルデの額を掠め去つたが、俯向いてゐるテレザには氣が付かないらしかつた。

　母親の聲がしたのでテレザは立つて行つた。

　自分は、酒の罎の位置をなほしたり、卓子を拭いたりし乍ら、何か考へ込んでゐるらしいヒルデの樣子を、それとなく見てゐた。

　ヒルデは今ナプキンの紙を疊んでゐる。氣の所爲か時々嘆息を漏らしてゐるやうであつた。彼女はやがて立上つて入口の傍の卓子の方へ歩いて行つた。そしてそこにあつた剝げかゝつた栗色のマンドリンで、調子外れの唄を彈き出した。自棄氣味な哀調が錆びた針金からぼつりぼつりと響いて來た。それもすぐ止んで了つて、彼女はぼんやり海岸の方を見始めた。

（泣いてゐるのかしら？）

　實際後向きでよく解らないが、前掛の端を時々、目に當ててゐるらしかつた。肩が時々搐れてゐるやうにも見えた。

　口ぢや執拗いとか云つては居たが、やつぱり別離となれば、その男の事を想ふのであらう。

　夜になると、孤獨の淋しさが沁々と襲える。何がなしに明るい燈火が戀しくなる。何と云ふ矛盾した考へではないか。自分は人を避けてこの淋しい田舍の一軒家に來てゐるのではない

か。
　とに角海濱のお祭に行つて見よう。花火が招んでゐる。
　海邊に張り出した天幕張りの料理店の内部。眞中の卓子や椅子は綺麗に脇へ寄せられて、踊り場が出來る。白の前掛の可憐な娘がいそいそと働いてゐる。ビールの音。歌。
　やがて喇叭隊が繰込む。村の若い者であらう。若者も娘もそれぞれの盛裝を凝してゐる。そのうちに崖の上の森の中の野外劇場で、村芝居が始まるから見に來いと云ふ報知である。
　木の幹に明るい電燈がともされて、やがて始まる。勿論俳優は村の素人で、小學校の校長さんが舞臺監督であるさうな。子供には見せない。筋はなんでも、田舍の百姓家の家庭の事で、そこの娘が所謂新しい女で、都へ出て女優になり度いと云ふと、兩親や親類が滅相な、と云つて反對する。そこに新舊思想のありふれた葛藤を表はして、トドその娘が男を拵へて家を飛び出して了ふのである。
　その娘を演つた女は中々可愛らしい顏をしてゐた。實際、都へ行つて女優になり度いと思つてゐるのであらう。
　もう一つあると云つたが失敬して、途中、汚い酒場に寄つた。立ち罩めた煙草の煙の中に、隅の方の卓子を圍んで、老人連が夢中でトランプをやつてゐる。芝居なんか何でえ、と云つた顏である。アルミニユームの錢をザラザラと卓子の上に積んでゐる。
　醉拂ひが一人管を捲いてゐる。獨逸の管は珍らしいから聞いてゐると、酒場のあるじを捕へて、頻りと喚鳴つてゐる。
『なんでえ、なんでえ、から見えたつて、憚り乍ら俺樣あフォンなんだ。そもそもその昔をたづぬれば、ホーヘンツォルレン家の流れを汲んでるんだ。獨逸が盛んになつたなあ、この俺樣の御先祖の御力だ。それを、俺をこんなに貧乏にしやがつて、え、ウーイ、……』
『誰だ、誰だ、べちやくちや云つてるな。獨逸をこんなに惡くしたのも亦お前達御子孫の御力だ。』
『ウワッハッハ。』
　多勢の笑ひ聲が起つた。
『何だ、貴樣は平民の癖しやがつて。おめえあ、シオルツだな。ヘン。郵便の局長さんだつてなんだつて、いくら大きな面しやがつたつて、駄目だ。よ。おめえの鼻は馬鈴薯鼻ぢやねえか。え？　おい、造物主の戲れ！』
　相手の男も苦笑して出て行つて了つた。醉拂ひは誰も相手にしてくれなくなつたと見えて今度は自分の所へやつて來た。
『やあ、日本のお方。』
　そして英語を使つた。
『日本は大變 distance だ。』
　形容詞と名詞と間違へてゐる。その癖、ロンドンで日本の何とかいふ博士と知り合ひになつたと云ふ。自分は冷かしてやつた。
『その英語ぢや、さぞ英國では御困りでしたらうな。』
『いゝや、ちつとも……』
　醉拂ひは澄ましてゐる。
『尤も英國人がわしの言葉が解らんで、大分困つたやうぢやが。ウワッハッハ。』
　舞踊が始まつた。一人の若者が卓子の上に腰掛けて手風琴を彈いてゐる。先刻の村芝居の娘はこの家の看板娘であつた。芝居の戀人と一緒に踊つてゐる。實際さうなのであらう。
　歸り路で先刻の手風琴の音がして、一人の若者を取り圍んだ二三人の娘が、唄を唱ひ乍ら步いて行つた。大方もうそろそろと、在方の自分の家へ戻つて行くのであらう。

唄は何とも云へない一脈の哀調をこの夜の靜けさの中に漂はせて、薄暗い路の外れの森影にかくれ行く後姿と共に、幽かに消えて行く。

八月二十二日。

つい、釣れる面白さで、もう夕闇がすつかりあたりを包んで了ふ迄、自分は家の前の葦の茂みの中に竿を下してゐた。魚籃の中には大きいのや小さいのを取り混ぜてもう十二三びき、校魚だの海老が跳ねてゐた。

その時、自分はふと、桟橋の所に繋いである小船の中に、人の氣配がするのに氣がついた。そこにはアルツールが獨り立つてゐた。

何をしてゐるのだらう？　とそつと自分は見てゐた。彼は何かぐづぐづと口の中で獨り言を云つてゐる。葦の茂みを通してその聲が聞えて來る。

『俺は一體どうすれば良いんだ？』

と彼は呟いてゐる。

『……閑古鳥に攫はれちまへ！』

とも云つてゐる。

やがて彼は跣足になつて淺い水に下りた。そして石を拾つてぽんと投げた。それが丁度自分の釣魚をしてゐる四五間前の水に落ちた。靜かな内海の黑い水の面はゆらゆらと搖れて、波紋が擴つて行くと釣竿の浮標がぐらぐらと動いた。

彼は又一つ投つた。そして何やら悲しさうな曲を口笛で吹いた。深い溜息が彼の口から漏れて來た。彼はたしかに泣いてゐるらしい。日はもうとつぷりと暮れてゐた。

向う岸の漁家の灯が夕靄の低く下りた湖の面にぢいつとうつつてゐた。

親愛なる村のロメオよ！

晩の食事の時、アルツールは獨り大方默つてゐた。

『テレザがまだ惡いんかい？』

母親が尋いた。

『うん、もう良いんだつて。』

アルツールが答へた。そして自分の皿と肉叉を持つて、臺所の方に出て行つて了つた。

彼はやがて洋燈を持つて私の部屋へ入つて行つた。私はそつと後から從いて行つた。

洋燈を机の上に置いてから、彼は寢臺の掩布を疊み、枕布をなほして、それからぼんやり、開け放した窓から戸外の夜を見てゐた。

私は默つて背後から彼の肩を敲いてやつた。彼はびつくりしたやうに振返つた。

『どうした？　え？　テレザがどこか惡いのか？』

『えゝ、ちよつと二三日、風邪を引いて寢てるんです。でも、もう良いんですつて。』

『そんなら良いぢやないか？　どうしてそんなに萎れてるんだい？……』

そして私は笑ひ乍ら附け加へた。

『もう、閑古鳥に攫はれなくつたつて良いんだらう？』

『あなた、さつき聞いてらつしやつたんですか？』

彼は極り惡さうにちよつと下を向いて、默つて了つた。

『え？　喧嘩でもしたのかい？』

『いゝえ。』

『ぢやどうしたのさ？』

彼はやつぱり默つてゐた。暫くして、

『詰らない事なんです。』

『でも良いよ、云つて御覽、ね？』

アルツールは暫く考へてゐたが、やがて田舍の人の素朴さを以て、すつかり話してくれた。

彼の心持をちよつと飾つて書いて見る。

その日アルツールはいつものやうに薔薇の花を持つて見舞に行つた。テレザはもう大分良いと云ふ事であつた。彼女は窓からずうつと海の見晴らせる、明るい部屋に寝かされてゐた。

彼が優しく彼女の熱い手を握つてやつた時、熱疲れのした彼女のとろんとした碧い二つの瞳が、懶げに動いた。

やがて彼女はすやすやと假睡みかけたやうであつた。アルツールはぼんやり氷嚢の結び目を見てゐた。その時、ふと、彼女の枕の下からちよつと半分ばかり顔を出してゐるものがアルツールの眼に入つた。――忽ち彼は凍えたやうな氣がした。

それは、いつだつたか、彼女が都の若い學生から貰つた櫛であつた。

裏の庭球場へ毎日庭球をやりに來る、一人の青年があつた。剃り立ての顔にいつでもタルカンの粉をつけ、眞白に洗ひ立てのシャツとズボンをして、白金に小さな金剛石入りの細身の指輪を、右の小指に嵌めてゐた。

毎日寄つてはビールを飲んで行くので、テレザも心易く思つてゐた。或る日その青年が海岸の贅澤小間物屋の店から、とてもハイカラな櫛を買つて來て、彼女にくれたのであつた。彼女は大喜びでそれを挿してゐた。

所がそれがアルツールには不愉快であつた。彼は露骨に厭な顔をした。そして終ひには、口にさへ出した。それ以來その櫛はビールの空箱と一緒に、臺所の隅に忘れられたまんま、この間アルツールはふとそれが蜘蛛の巣に絡まれてゐるのを見たのである。

それが、その櫛が、今彼女の枕の下にそつと祕されてゐたのであつた。

アルツールはそうつと彼女の家を出た。もう暗くなつた宵空には、先程迄危まれた雲も散つて、明るい位に星が輝いてゐた。彼はぢいつと暗い沖を見た。遠い漁火が消えたり點いたりしてゐた。それが波の爲であるのか、それとも自分の涙の爲であるのか、彼には解らなかつた。

霞んだ彼の瞳の中には、あすこの山毛欅の森影の暗い夜路を寄り添ふやうにして歩いて行くテレザと、それからあの都の若い青年の姿が映つてゐた。

アルツールは頭を抱へて石のやうに動かなかつた。

彼はやがて家へ歸つて來た。そしてそのまゝ裏庭を抜けて棧橋の小背に坐つた。眼の前の内海はまるで山中の湖のやうにひつそり靜まり眠つてゐた。眞黒い水は夜の冷氣の中に沈つたやうに動かうともしない。淺い岸の水底に沈んでゐる小石や貝の周圍には、夜光蟲が眞珠のやうに光つてゐた。

流れ星が何か惡い兆せのやうに、森の上のお城の塔を掠めて飛んだ。

その消えて行く光を追つて、アルツールの懶げな瞳が動いた時、そこには相變らず暗い消炭のやうな夜の海があつた。

海。――幼い時から海邊に育ち、心の底深く育まれた懐かしさが沁々と湧いて來るこの海。これだけは信じられるやうな氣がしてならなかつた。

やがてアルツールは立上つて譫言のやうに呟いた。

『俺は一體どうすれば良いんだ?』

それから岸つぷちの水の中にぢやぶぢやぶと入つて行つて夜光蟲を目當に小石を拾ひ遠くへ投げた。

『ドブーン。』

鈍い聲で海が答へた。憐むやうに、又嘲笑ふやうに。

流れ砂が輕く彼の足にあたつた。

自分にはあの二人の戀人が、お互に海岸の方の都の生活の強い魅力に惹きつけられつゝ、しかもお互が、相手がその恐ろしい魔法にかゝりはしないかと危惧し、心配し合つてゐる可憐しい姿が涙ぐましい迄に思はれるのである。

いつだつたか、あの「子供祭」の晩に、ふと海岸の棧橋の上で小耳に挾んだ彼等の會話の斷片を想ひ出す。

『そりや、たゞ櫛が珍らしいからなのだよ。何か君も一つ良いのを買つてやるが良い。』

そして自分はポケットから少しばかりの紙幣を出して渡してやつた。

八月二十六日。

愈々この靜かな村と別れなければならない。又一人孤影蕭然として所定めぬ旅に立つのだ。伯林には寄らぬ心算だ。識つたいろいろの人の顏を見る事は堪へられない。

馬車に乗つてポカポカと、麥畑の間の道を停車場に向つた。小さな石橋を渡つた時、そこの小川の流れに、二三羽の鵞鳥がしきりと水を飲んでゐた。

『獨逸では水の事を（鵞鳥の葡萄酒）つて云ふのよ。』

一緒に馬車に乗つて來た末の女の子が小賢しく敎へてくれた。母親は笑つてゐた。日本の（鐵管ビール）と思ひ合せて面白い氣がした。

停車場にはもうアルツールとテレザが送りに來てゐる。テレザは氣做しの所爲か心持痩せて、馬鹿に美しく見えた。彼女の髮には滑稽な位大きな、ハイカラな西班牙櫛がさゝつてゐた。アルツールはそれを時々横眼に入れ乍ら、ひとりでにこにこしてゐた。

汽笛が鳴つた時、末の女の子が頓狂に叫んだ。

『小父ちやん、又來年、ね？』

皆んな笑つた。動き出した時、それでもテレザはそつとハンケチで眼を拭いてゐた。

汽車があすこの松林の角を曲る迄、二人の戀人の影が、その白いハンケチが、汽車の殘した煙の中に幽かに搖れてゐた。

兩人の戀に幸あれ！

かくて私のこの長たらしい、島の夜話も、一先づ幕を閉ぢるのである。

今晩の汽車が眠られるやうに！

急速調（アレグロ）

秋

うすれ陽差した庭園の、色褪め果てた白薔薇の、その花片にも、夏の終焉の哀れさがあつた。

夕陽の丘に、葡の蔭に、葡萄酒倉の酒の香に、ちつと鳴き澄ましてゐる、あの蟋蟀の鳴き聲を聞いてゐると、心なき身にも、沁々とものあはれを覺えるではないか。

海に、山に、都會の暑氣を避けて、小鳥のやうに跳ね廻つてゐた人々も、そのいろいろの想ひ出の種を、土産の貝細工と一緒に、トランクの底に詰めこんで、又ぞろぞろと伯林をさして歸つて來た。

新しい戀を得た若人もあらう。荒波に一人息子を浚はれた、氣の毒な老夫婦もあらう。宿題を溜めこんで悄氣てゐる學生もあらう。

しかし、伯林はやはり以前の伯林であつた。

灰色に燻つた大きな建物の間に、煤けた煙の渦卷く中に、喧騒な目まぐるしい生活が續けら

れてゐるのだ。

八月も、もう二三日で終ると云ふ頃、今村惠吉はハンブルヒを廻つて、伯林へ歸つて來た。めつきりと涼しくなつた都の街上には、もう麥藁帽子の數も少なかつた。

勁き慣れた身體は、一日家に落着いてゐる事も辛かつた。自轉車の輪にラケットを結びつけて、運動姿の惠吉が、人道を横切つて車道に出ようとした時、その境の敷石の上を、舞踏の足取りで、細身の籐のステッキで拍子を取り乍ら、一人の若い男がやつて來た。きちんと身體に合つた、胴のくゝれた洋服を着て、眞白の絹ハンケチをちよつと胸かくしから覗かせて、緑がかつたソフトを心持斜めに冠つたその男が、惠吉を見ると丸い大きなロイド眼鏡の後で微笑んだ。

（あゝ、ハインツか。）

惠吉はやつと思ひ出せた。そして自轉車越しに手をさし伸した。

『やあ、暫く、どちらへ行つてました？』

ハインツが尋いた。

『ちよつとバルチック海へ……、君、家を飛び出したつて聞きましたが、……』

『ハハヽヽ。……』

ハインツは大聲に晴々と笑つた。

『えゝ實はちよつと一週間程。』

『どうしたんです？　意見の衝突？』

『まあ、そんなとこですな、ハハ。』

『何でも、俺は腕一本でやつて見せるつて大變な鼻息だつて云ふぢやありませんか。』

『えゝ、出る時はねえ、そりや。……』

ハインツは又笑つた。

『實際、あれから店の奴に頼んで、脇の會社の運轉手になつたんです。しかし、どうも朝が早くつてね。……』

『えつ？』

惠吉はまごついて尋き返した。ハインツはお構ひなしに喋り續ける。

『そりやまあ、我慢するとして、實は店の奴の所に泊つたんですが、その家が又堪らなく不潔な家でね、おまけに虱がゐるんです、虱が。家主さんに文句云つてやれつて云つたんですが、エヘヘつて笑つてるんでせう。僕は面倒臭いから、直接に家主に會つて大いに詰つてやりました。所が云ひ草が良いや。

（あれつぱかしの家賃で、家ぢうの虱を一疋一疋鎖に繋いで置いちや、こつちが應ひませんや。）

ですつてさ、ハハヽ。それに虱つて奴は、チブスと違つて一遍[illegible]されても免疫にならないんですから始末が悪いですな。ハハヽヽ。』

ハインツは陽氣に笑つて、そして云つた。

『庭球なんでせう？　ぢや失禮します。』

そして彼は今の雲のやうな長閑な顏をしてそのまゝ別れて行つた。ペタルに足を掛けて惠吉は思つた。

（大變な社會主義者もあつたものだ。）

カイザーアレーの並木道の葉蔭を、惠吉と卯女子の兩人の自轉車は、コースタの音を響かせ乍ら並んで走つて行つた。鏡のやうに拭き磨かれた車道の上を、もう時々枝を離れる黄ばんだ落葉が、かさこそと、自轉車の風に捲かれて轉つて行つた。

卯女子を送つて山田の家でいつでもお茶を飲んでは、そしてそれから夕飯迄の二三時間を、皆んなして話し合ふのであつた。

卯女子は着物を着更へて來て、そして兄のスェーターを惠吉の肩に掛けてやつた。

エンミーがやがて夕刊を持つて來た。

一番先に開けた山田が、一面にずらつと眼を滑らした時、彼の顏がふと曇つた。

「おや？　横濱全滅だつて。」

『え？』

『え？』

『え？』

三つの顏がいきなり寄つて行つた。

そこには「横濱全滅」と云ふ表題の下に約十行程の記事が載つてゐた。

九月一日正午、日本の一番大きい港、横濱に强烈な地震が起つて、全市殆ど全滅に歸した。電信が不通で詳細は未だ明かではないが、死傷五十萬に達する見込みである、と書いてあつた。

『五十萬はちと大袈裟ですな。おつりが來ますね。』

『きつと、こりや、あれだよ、全滅つて電報を受取つて早速百科辭典で人口を調べて、それに二三割掛けて、書いたんだね。』

『それにしても早いもんですね。まだ二日だつて云ふのに。』

『卯女子、前川さんどうしたらうね？』

『さうね。御子さんが生れたつて、ついこの間御手紙がありましたわ。』

卯女子は暗い顏をした。

『横濱がこれぢや、東京も少しはやられてますね。きつと。』

惠吉はすぐ築地の家を想つた。

『君は心配だね。そこへ行くと僕達みたいな一人ぼつちは暢氣なもんだ。』

笑ひかけた山田の顏は、ふとその枝の悲しげな瞳に合つて凝つて了つた。

（たとひ捨てられたとは云へ、親は親であつた。）

四人の顏にはいろいろの考へが渦を卷いて現滅した。いろいろな所の景色。いろいろな人の顏。

……。

翌日の伯林ぢうの新聞は殆ど全面を割いて、日本のこの慘害を報じた。伯林ぢうの話題は皆この一事に集まつた。人々は皆夕刊の出るのを待ち侘びた。そして人々は、馬克の相場よりも先に、先づその記事に獅嚙みついた。

或新聞は、「東京最後の日」と云ふ表題の下に、かのポンペイの滅亡に譬へた。又或新聞は「神に呪はれたる町」として、かのソドムの町の沒落に比した。メッシナの大地震を引用した新聞もあつた。

惠吉は電報を打ちに行つたけれど、不通と云ふ事であつた。往來の人々の眼も何か奇妙に自分の上に注がれてゐるのを彼は意識した。中にはまるで見ず知らずの人が心配さうに尋ねてくれるのもあつた。

大使館の待合室には心配さうな顏が澤山集まつてゐた。一々張出される報告の前に皆んなその瞳が集まつた。紙はもう壁にずうつと、一杯張つてあつた。

皆んなの頭にはたゞ火事と云ふ事が懸つてゐた。火元や、風向の事を心配してゐる人もあつた。水利の事を思つてゐる人もあつた。が、しかし、焼けたと云ふ東京の主要建物が餘り方々に散つてゐるので、皆んなの想像の縱は徒らにこんがらかつて了つた。

隅の椅子に腰かけて、ぼんやり考へ事をしてゐる相當年を取つた紳士もあつた。

たゞ妻と子供がね、と云つて淋しく笑つた人もあつた。

保險の額を手帳に探す男もあつた。

自分の家が大阪にあるので、何の關係もない中年の男が、一人で燥いでゐるのが妙に目に立つた。腹立たしいと云ふより、羨しい心持

であつた。

惠吉は全燒區域の中にキョウバシと云ふ字を見付けて、やつぱり自家も燒けたのかしらと思つた。しかしその事實は餘り彼を苦しめはしなかつた。

（それにしても店の男衆を混ぜて二十人を越える、あの家族の者はどうした事であらうか？）

とそれだけが心配であつた。

もう大分落葉の積つたティヤガルテンの大使館の道を、とぼとぼと惠吉は歩いて行つた。

惠吉は到る所で同情の言葉を聞いた。

初めの内はほんとに有難かつた。それがあんまり聞かされると、何だかその言葉の空虚が見え出して、内心はそんなでもないのだらうになどと想はれて來て、少し五月蠅い氣さへした。お終ひには、今度は、人に憐まれると云ふ事が何だか却つて腹が立つた。

新聞にも大分詳しい事が載り出した。大島が海底に沈んで了つたとか、富士やまの形が變つたとか、そんな事迄出るやうになつた。死傷の數も、初め三十萬が段々增して三百萬と書いた新聞もあつた。

大概の事件は初め大袈裟で、段々小さくなつて行くものですがね、と云つて大使館の人が首を傾けてゐた。ロンドンの圓貨が大分下つて來るらしい傾向を示した。

そして惠吉は、その月の十七日に、名古屋の親類から一通の電報を受取つた。

「ミナブジ、イエヤケタ」

と書いてあつた。

彼は何がなしに吻とした。彼の眼の前にはあの懷かしい築地の夕暮があつた。裏堀橋から拔けた大河端に、汽船の笛が淋しげな響を殘して、薄闇の中を川風に送られて來る。

新富の灯がチラチラと水に碎けてゐる夜の景色は、ほのかにも殘された江戸情調の匂ひがすると、よく彼の家へ遊びに來る友達の誰れ彼れが話し合ふのであつた。

佃島の五厘渡しから眞直の橋の袂の角に、高い黒板塀を圍らした、大きな住居を彼は想つた。淺野内匠頭の屋敷跡から程遠からず、師直の首洗ひの井戸のあつたと云ふ所へ建ててから、父で六代目、もう二百年もお江戸に住ふ彼の家には、昔からの浮世繪や、草雙紙、道具類と云つたものが澤山殘つてゐた。日影町の村幸がしきりと欲しがつてゐた北齋、春信、清長から、廣重の近江八景、江戸百景の初版物が、黒塗りの蒔繪の大箱の中に、昨日刷つたやうな鮮かな色を見せてゐた。それから父が懇意にしてゐた雅邦の軸が、澤山倉の中に入つてゐた。五人の兄弟に一本宛別けてやらうと、父がよく云つてゐたのであつた。あれもこれも皆んな燒けて了つたのであらう。

表通りに向いた二階の欄干から暮れて行く黄昏の街を見下してゐると、近頃上海亭に代つた向ひ合せの三階に灯が入つて、川に沿うた柳の枝を潛つて飛び交ふ蝙蝠があつた。佃島の方から、造船の仕事を終へた勞働者や女工が、二三人宛何か大聲に喋り乍ら、又は一人とぼとぼと歸つて行く。お湯屋の歸りか、二三人連れ立つた町内の娘達は、いつもこの二階からぼんやり下を見下してゐる、「布屋」の坊ちやんの噂でもしてゐるらしく、ちよつと見上げては何か私語き合つて行くのであつた。

鐵砲洲稻荷の寄進帳に、第一番に筆を染める「布屋」なのであつた。

もう、あの二階も、黒板塀も、三つ並んだ倉も、——お七が出した振袖の火事にも、びくともしなかつたあの倉も、何もかも……

さう思つて惠吉はぼんやりと電報を握つてゐ

た。皆の安否が解ると、今迄どうでも良いと思つてゐた家の燒けた事が、何かしら、取返しのつかない事のやうに思はれて來た。

偶然な事には、名古屋の親類から八月に出した小包が、丁度その電報と前後して屆いた。それは惠吉の無聊を慰めようとて、日本の小說を送つてくれたのであつた。惠吉は眼の中の熱くなるのを感じた。遠く離れてゐる自分の事を、そんなにも頭に入れてくれる人の心の溫かさが、わけてその日の惠吉を、若葉をぬらす春の小雨の樣にやはらかく包んでくれたのだ。惠吉はその記憶を長く心の中に疊みこんだ。

そのうちにこの異國の空には又淋しい秋が巡つて來た。十月に入るともう街の並木も目に見えて裸身になつて行つた。黃ばんだ落葉の上に淋しく時雨して、うすら寒い日がしきりと續いた。

露臺に絡んだ野葡萄の實を啄みに、どこからともなく鶫の啼き音が洩れて來た。

不安と焦慮の一ケ月の後で、惠吉はたうとう自家からの最初の手紙を受取つた。それは兄からであつた。彼はまざまざと眼の前にあの日の慘狀を見せつけられた。

地震は大した事はなかつた、火事さへなかつたら、と書いてあつた。何でも地震が稍弱くなつてから、父は屋根に乘つて、あすこの修繕が幾ら掛る、こゝも塗り變へなければいけないなどと胸勘定をしてゐたのださうである。と忽ち二百十日の大風に煽られた猛火はもう一面にあたりを包んでゐたのだ。箸一本持つではなく、男は皆大川の水の中にお鍋を冠つて一夜を明し、女子供は幸ひ出入りの船頭が舟に乘せて沖へ出してくれたのだ。明け方ほのぼのと白み掛つた太陽が灰色に濁つた空氣に鈍い光を閃かして、水の上に上つた時、そして探し合つた一同が一處に再會し、互に顏を見合せた時、口をきく者もなく、たゞ熱い淚にかき暮れた。かくて我家の家產は一夜にして煙と化し去つた。目下一家は離散の悲境にある。父も俺も洋服を賣つて步いてゐる。少額で我慢出來たら、それで勉强を續けてくれ。……と書いてあつた。

今度の事で、人心の離合と云つたものを、餘りはつきりと見せつけられた、淺間しい氣がする、とも書いてあつた。

讀み終つた惠吉の眼の中には、熱い淚が一ぱい溜つてゐた。

布屋十軒の總本店として、白足袋に黑紋付のきちんとした服裝をして、每月五日の店內の會に出掛けて行く、あの年老いた父親が、安洋服を着て行商して步いたのかと思ふと、たとひそれが、この空間の上に、夢の如く消え果てて行つて了ふ一瞬の幻影であるとしても、惠吉にはかうやつて、自分が牛肉など食べてゐるのが濟まないやうな氣がするのであつた。

氣の弱い兄の姿が浮ぶ。態々京都迄一緒にやつて來乍ら、汽車の出るのを見送るのは厭だと云つて、その最後の五分間を懷手して、とぼとぼとあの七條の驛のブリッヂを上つて行つた兄の後姿が想ひ出される。廣重の小豆色の古都の夕暮。

病身の末弟の姿、もう七十に近いおばあちやん――彼を初めとして二人の兄も世話を燒いて來たあの人の好い年取つたばあやの姿。

惠吉の熱い眼瞼の裏を、いろいろの人の姿が、皆一樣に寂しさと云ふ着物を着て、走馬燈のやうに通り過ぎて行つた。いくら叫んでも誰も返辭をしてはくれなかつた。それは悲しい夢のや

うに、たゞ冷やかに、默々と動いて行つた。
惠吉は幼い時よくさう云ふ夢を見た。夢の中では、親しい人が一番意地が惡く冷淡であつた。惠吉はそのたんびにたまらない淋しさを感じて、きまつておばあちやんの蒲團に潜りこんだ。
惠吉はぼんやりと戸外を見た。
家の前に大きな荷馬車が停つてゐた。馭車臺にさした長い鞭の先が、丁度惠吉の部屋の窓の下で戰いてゐた。厚い外套に包まつた馭者は、臺に腰掛けたまゝ、パイプの煙を吐いてゐた。家の門番の太つた細君が頻りとそれに話しかけてゐる。大方パンがいくらに上つたと話してゐるのであらう。馭者は暢氣な顏をして、相變らず、紫の煙をその髭だらけの口の中から吐いてゐた。彼等は一服の煙草、一杯のビールのある間、まだ天下は泰平なのであらう。
屈强な男が二人、大きな衣裳戸棚を擔いで家の中から出て來た。
（この寒いのに、よく移轉なんかする氣になれるもんだな。）
惠吉はそんな事を考へてゐた。
もう方々の家に石炭を運ぶ馬車がポカポカと蹄の音を立てて行つた。鞭の音が悲しく響く。
閉め切つた部屋の中、風もないのに、書机の上の薔薇の花片がはらはらと散つて行つた。
惠吉は帽子を取つた。
彼はたゞ人が戀しかつた。街が戀しかつた。
彼が戸外へ出た時、うすら寒い風が街の向うの方からサッと吹いて來た。悲しい冷やかな秋の思ひがそこにはあつた。惠吉は襟卷を口の上から捲きつけて、さて手袋を嵌めた。
風よ！
お前は何故そんなに淋しい音を立てて吹いて行くのか？
あの九月一日の大地震を境界として、惠吉の周圍の人世と云ふものが忽然としてダークチェンヂをして了つたのである。彼の人生觀も從つてでんぐりかへしをして了つたのだ。
（家なき子。）
彼はぢつとそんな事を考へてゐた。
（それはこれだけでやつて行けない事はない。が、しかし、その金は今の父にとつては、それこそ血を絞るやうな金なのだ。自分一人が安閑として、異國の空に暮してゐる。どうしても自分にはそんな氣持にはなれない。一刻も早く歸つて行つて、たとひ何の足しにもならない迄も、その力强い復興の事業に一石なりとも積み上げて見度い。
さう彼は考へた。もう小つぽけな見榮も何もないのだ。
惠吉は、歸るから三百圓送つてくれと電報を打つた。それ以上はどうしても彼には書けなかつた。
間もなく電報爲替で三百圓送つて來た。さう云つてやつただけきつかりしか送つて來ないと云ふ事が、彼の心を暗くした。その金では、三等で歸つてもまだ半分にも足らない金であつた。株を澤山買ひ込んだり、それに夏頃から始まつた急激な物價の騰貴に、惠吉の手許には殆ど餘つた金はなかつたのだ。親類に打つた電報は、それは梨の礫であつた。その家もきつとやられたのであらう。
惠吉は持つてゐるものを全部賣つて、まだ足らない分は大使館の先輩に賴んで見ようと決心した。
かうやつて彼の心の中にこんがらかつた色々の思想の變化の中で、一番彼自身に目に立つて、そしてそれだけ又淺間しくも思はれたのは、そ

れは「金」と云ふものに對する考へであつた。今迄富田佐一などと一緒に食べに行つたり、旅行したりする毎に、彼の金に對する餘りの几帳面さに、考へて見ては、一種の同情と憐みとを感じてゐ乍らも、實際見せつけられると、何となく不愉快な氣持を覺えるのであつたが、その富田の心持が、今はつきりと惠吉には解つたやうな氣がしたのである。

ちよつと齒磨粉を買ひに百貨店に入れば、きつと手袋だの、靴下だの、爪磨の道具だのと、さう云つた要りもしない二つ三つの紙包みをぶら下げて來た、あの頃の自分が何となく顧みられるのであつた。

雜誌一つでも今迄のやうに、さう矢鱈に買ふ氣にはなれなかつた。

惠吉はいつも行きつけの料理店へ何氣なしに入らうとしてちよつと立止まつた。

(こゝはいけない。)

と彼は思つた。

(こゝでは、あのいつもの給仕がにこにこと勘定書を持つてやつて來る。俺はその手から、釣錢を受取るわけには行かないのだ。)

惠吉は殘されたこのたつた一つの自尊心と云つたものを、出來るだけ可愛がつてやらなければいけないと思つた。先刻の決心が、もうこゝでそんな可愛らしい道樂を免してくれた事が、彼の心をちよつと明るくした。が、同時に、こんな場合にもさう云つた餘裕を作りたがる、自分自身の腑甲斐なさの惰性を悲しんだ。

彼は街角の小つぽけなビール店へ入つて行つた。勘定臺へお金を拂つて、お皿に盛つた、黑パンにチーズを挾んだサンドウヰッチを受取ると、汚らしい木の卓子に坐つた。

ガブッと飲み干した黑ビールの硝子の底に、濡れてくつついて來た厚紙のコップ敷がばたんと落ちた。拾ひ上げて、それに刷られた廣告の字を讀んだ。それには「隨所安住。刹那全力。」と云つた意味が丁度仁丹の格言と云つた工合に書かれてあつた。そしてその下に、「ボヘミヤビールを飲む人は、いつもにこにこ大元氣。」と書いてあつた。

ボロボロの黑パンの屑がよく拭いてないお皿の上に落ちて行く。惠吉は どうした機會か、たまらない屈辱を覺えた。勘定臺の後方の鏡に映つた彼の額は赤く上氣してゐた。

宵闇の街角に立つて惠吉はぢいつと電氣の廣告燈を見上げてゐた。ぱつと大きなコップとその上に傾けられたお酒の壜がうつる。壜からはお酒がタラタラとコップの中に落ちてくる。コップが一ぱいになると又ぱつと消えて了ふ。すると思ひ出したやうに、うすら寒い風が襟元から、しんしんと滲みて來る。

街のざわめきが不思議に今宵は弱音器をかけてゐた。自動車の頭燈が惠吉の影法師を二町も先方に引伸した。小さな旋風に捲き上げられた枯葉が、又ひらひらと散つて來て、惠吉の頰を冷たく掠めて行く。その小さい枯葉の小人共は、一人々々膝頭を抱いて、そこの敷石の上に、愁々と歔欷いた。

秋。——

惠吉は沁々として空を見上げた。

雨催ひの夜の霧が赤く街の灯を吸ひ込んだ。

「運命が戸を叩く音」

惠吉は伯林へ着いて間もなく、大枚三百圓——あの頃の獨逸の物價としては確かに大枚であつた。——その大金を投じて素晴らしい蓄音機を買ひ込んだ。

小さなピアノ位はある、横に大きい、机のや

うな形をしたものであつた。眞中の蓋を開けるとそこが機械になつてゐた。兩側の開戸にレコードが入るやうにしてあつた。フレミッシュ式の彫刻で、太い足にはぐるぐる卷いた彫がしてあつた。そしてそれは電氣で廻轉した。お終ひになると自然にスヰッチを切つて停まる仕掛になつてゐた。

惠吉はその蓄音機に、毎日大好きな第五交響樂をかけては目を瞑つて聞いてゐた。運命の嵐の中に揉まれつゝ、惱み悶え行く一つの人間の魂を、彼はその凡そ人間の創つた最も偉大なるものの一つである所の、名曲の中に見るのである。

『人は神のやうなモツァルトとは云へる。しかし神のやうなベートーベンとは云はない。人は人間らしいベートーベンと呼ぶのだ。――それ程彼は偉大であつた。』

さう云つた、ブゾニの言葉を惠吉はいつでも想ひ出すのであつた。

惠吉は、そして、歸國したら建てて貰ふ筈の自分の家の、西洋間の一隅にこの蓄音機を置いて、熱い紅茶を啜り乍ら、冬の夜の更けるのも忘れて聞き明す有樣を、もう頭の中に描いてゐたのであつた。その幻影は卯女子の話が定つてからは、一層はつきりと彼の心に、甘い空想の錦を織り出した。

――壁には埃及で買つたあの奇妙な壁掛を掛けよう。卯女子の好きな紫色で、カーテンもソファも揃へよう。そしてその部屋を「紫の間」と名付けるのだ……。）

などと彼の他愛ない空想の小舟は、いつもそんな風に漂うて行つた。

その蓄音機を、そしてその甘い空想を、彼は今賣らうと決心したのである。

新聞に出した廣告で見に來た二三人の人は、――中には商賣人もゐたが、それ等は皆莫迦にしたやうな値をつけて行つた。惠吉はやつぱり買つた店へ賣らうと思つた。

タウエンチン街の人通りの多い明るい街路を彼は二三度往き來した。いつも寄つては少なからざるレコードを買つて來る彼は、その店の者にはもうよく知り合つてゐた。あの愛嬌のある主婦さん、いつもにこにこしてゐるユダヤ人の主人。彼が入つて行けば、すぐ飛んで來て、揉手をし乍ら、

『さあ、どうぞ。』

と椅子を勸めて、新しいレコードの型錄を澤山持つて來て、今度誰が何を入れました、ドクトル・イマムラ！――と勝手に主人は彼をドクトルにしてゐるのだ。――これは如何です、ドクトル・イマムラ！　と、ぺちやぺちやと喋られるのだ。それを思ふと、二三度彼はその店の前を通り過ぎて了つたのであつたが、丁度覗いた店の中に客の影も見えない模樣なので、彼は思ひ切つて戸を押した。

果して主人が飛んで來た。そしてジャツクナイフのやうに身體を折りまげてお辭儀をした。

『さあ、どうぞ、ドクトル・イマムラ！』

惠吉は默つて、帽子も、外套も着たまんま立つてゐた。

『今日は、何？　交響樂が宜しいですか？　それとも何か……』

『いや、あの、……ちよつとね、……』

惠吉は困つて了つた。

『ちよつと、あの話し度い事があつて、……』

主人はそれでもにこにこと、それでは、と云つて奥の部屋へ連れて行つて椅子を指した。そこにはいろいろの型の蓄音機が澤山置いてあつた。

『實は、……』

（早い方が良い。）

と惠吉は思つた。それで坐るとすぐ彼は口を切つたのである。

『實は、あの僕の蓄音機ですね、あれを今度賣り度いと思ふんですが、引取つて貰へませんかしら？　お宅で。』

主人の顔は急に六ケ敷い顔になつた。たつた今迄彼の口邊に漂うてゐた微笑の影も忽ち消えて了つた。今迄のその愛嬌笑ひに利子をつけて返せ、さあ返せ、と云つた顔であつた。惠吉は自分の前に一人の猾さうなユダヤ人を見た。鼻の鉤形に曲つた、黒い薄髭を生やした、いつぞや見た、クラウスのシャイロックそのまゝの顔であつた。それが部厚な眼鏡の後に、鳩のやうな小さい丸い眼の玉を冷たさうに、クルクルと光らせて、打つて變つて横柄聲で云つた。

『一體いつでしかね？　あれをお賣りしたのは。』

『さう、…去年の…確か九月でしたかね。』

『さうすると、もう一年を越してますな。大分古くなつてますからね。…で、どの位でお放しになるんです？』

惠吉はそれが今の相場で五百何十圓だかなのを知つてゐた。

（まあ四百圓位ならば。）

と彼は思つた。

『さうですね。どの位で引取つて貰へます？』

惠吉は主人の顔を見た時、四百圓は高いかな、と思つた。

『さう、あなたにお賣りした時は、えゝと、…』

主人はちよつと計算してゐるらしかつた。

『三百何圓かでしたね。どうです？　その値で引取りやせう、三百圓外國の金で上げますよ。丁度こゝに三十磅の小切手が來てますから。…』

彼は一枚の小切手を出して見せた。

『だつて今は五百何十圓ぢやありませんか？』

『今は今、昔は昔、買ひ値で賣れゝば損はないでせう。』

『でも、…』

惠吉は弱味をつけこまれてゐるのが腹が立つた。

『それぢや、とに角考へて見ませう。』

『考へるつて、今日にもこの小切手は送つちやひますから、外國の金ぢやお拂ひ出來なくなりますよ。』

惠吉は戸外へ出て、それでも一町程行つた。

そして彼は立止まつた。

（獨逸の馬克で貰つても仕方がない。今日又賣り損つたら又いろいろと不愉快な日を繰返すのだらう。違つた所でせいぜい二三十圓の差違だ。）

そして彼は又とぼとぼと歩き返した。戸を開けた時、彼はかあつと赤くなつた自分の顔を意識した。夢中で彼は渡し狀に署名をして小切手を受取つた。明日取りに行きます、と云つてゐる主人の聲を背中に受けて、彼は狼狽ててその店を飛び出した。

自分の部屋に歸つて來た時、彼は今迄に感じた事のない强い執着を覺えた。飼ひ馴らした、犬に別れる人のやうな、又は昔の話によく出て來る、娘を賣りに行く父親の心持、さう云つたやうな氣がした。

惠吉はありつたけのレコードを掛けて見た。舞踊の曲も、歌劇の行進曲も、皆んな、皆んな、哀調を帶びて彼の耳に歔欷いた。彼は最後にあのベートーベンの第五交響樂をかけて、蒲團を頭から冠つて寢て了つた。

夢の中で惠吉は、運命が戸を叩く音を聞い

た。
　翌日惠吉は、蓄音機を持ち運ばれる所を見るのが厭さに、家の者に頼んで出て了つた。彼は一日方々を當もなく彷徨いた。そして、夕方の近づいたとある街角でぱつたりと、富田佐一に出遇つた。
（さうだ。ビールでも飲んで、この淋しい氣持から少しでも解放されなければ、とてもやり切れはしない。）
　さう思つて彼は富田を誘つて、ラインゴールドのカフェに入つた。金釦の門口の大男がグルグル廻る入口の硝子戸を押した。踊り場の見下される階上の突出しに座を占めて、兩人は獻立を見た。
「お家の方からはお便りがありました？」
「えゝ。」
『如何でした？』
「皆無事でした。家は燒けました。」
「ほゝ――。それは飛んだ事で、でもまあ皆さんがお無事なら、それが何よりでさあ。財産なんか又ひとりでに溜つて來ますよ。」
　惠吉はもう何度か聞かされた、この氣休めの言葉の空虚さをよく知つてゐた。後から空いたのが來ますよ、と云ひ殘して停めずに行つて了ふ電車の車掌の言葉のやうなものだ。
　流行のジンミーの曲が聞えて來る。カフェと云はず、海岸と云はず、街上の口笛と云はず、至る所で聞かされた「マダム・ポンパドゥール」も「電氣娘」も今日は妙に他事々々しく響くのであつた。
「えゝ。どうせ財産なんてもんは君、物質文明の勝手にでつちあげた偶像ですからね。」
　とは云つたものの惠吉の淋しさはやつぱり脱けはしなかつた。
（地震なんかなければ良かつたのだ。）
「あなたは？」
「私ですか？　私の所は大阪ですから大丈夫、妻子皆無事つて電報が來まして、私はもう滿足ですよ。だが如何です？　少しお酒でも飲つたら。ちよつとは憂さも晴れませう。」
（それもさうだ。）
　と惠吉は考へた。が、あの醉醒の底の知れないうら淋しさ、頼りなさを思つた時、彼はどうしても杯を手にする氣にはなれなかつた。
　踊り場の拭き磨かれた床の上には、明るくカンドリエが反射して、そこに黑と白とが默々と渦を卷いた。男は燕のやうに飛ぶ。女は人魚のやうにうねり光る。ハンケチが落ちる。‥‥
　ぼんやり考へこんでゐた惠吉はふと勘定を拂はうとしてゐる富田を見て吃驚した。
「いゝえ、僕が拂つて置きます。」
『そりやいけません、君。』
『いゝえ、いゝえ、今日は僕が誘惑したんですから。オイ、給仕、いくらだ？」
　さう云つて勘定書をひつたくるやうにして惠吉は金を拂つた。
　家が燒けたと云つた事が、若しや貰ふ下心のやうに取られやしまいか、と云つた他愛のない僻みが起つたのであつた。彼は何とも云へない屈辱を感じた。以前のやうにいつでも奢り返せると思つてゐたあの時分は、ぢやこの次にとか、又はこつちから、君ちよつと立替へて置いてくれ給へ、とあつさりと云へたものであつたが。
　富田と別れてノルレンドルフの廣場にやつて來た時、ルーテル教會の方から、アンゲラスの鐘の音が黄昏の空氣を震はせて響いて來た。彼はガードの下に花を賣つてゐるいつもの娘から一束の薔薇の花を買つて家路に着いた。過ぎ去つた日の空想への餞別、そんな氣持からであ

つた。

部屋の中に入つた時、惠吉はまるで無住の寺の本堂に入つたやうな氣がした。ガランとした部屋の隅の所には、蓄音機のなくなつた後の床の上に埃が薄く溜つてゐた。近頃心付の少い所爲か、一日膨れたやうな顏をして、何かからまるでゼラチンで作つた御菓子のやうに、妙にプリプリしてゐる女中のリザが拭いてもくれないのであつた。

この空虛な部屋はとりもなほさず惠吉の心なのであつた。賴りない、何かに縋りたいやうな、丁度暗い暗い洞穴の中に長い事迷つてゐた人のやうな彼の心は、その時ふと明るい輝かしい光明をすぐ眼の前に見出した。

「卯女子！」

彼は晴々とした聲でさう叫んだ。そしてぢいつとその光の點を凝視めるやうに、机の上の薔薇の花に見入つたのである。

すると、そのうちに、その光がゆらゆらと搖めいたと思つたら急に薄く暗くなつて行つて、終ひには今にも消えようとして見えるのであつた。彼ははつとした。

惠吉は、自分の心の中に、今迄つひぞ考へても見た事のない或一種の不愉快な感情が、疼いてゐるのに氣がついた。

（さうだ。自分のお都合主義な考へから、卯女子の幸福を破つてはいけない。この指輪を兩人を繋ぐ絲にする事は間違つてゐる。自分は何もかも卯女子に話して了はなければいけない。そして若し卯女子が。……）

彼は狂人のやうに頭を振つた。

（莫迦な、そんな事！）

と思ふ心の下からむらむらと湧いて來る不愉快な疑惑の黑雲。

（自分は何時の間にか僻み知る身となつたのか？）

さう思つた時、彼は底知れぬ谷底に突き落されたやうな氣がした。たつた一つの光はいつの間にか消えて了つたのだ。

たつた一つの美しい花を咲かせる爲に、彼は他のすべての花を蕾のうちから截り取つて來た。今その大事な一つの美しい花が散らうとしてゐる。

（自分の此の體軀はもうたゞ死んで了つた自分の魂の柩なのだ。）

惠吉はどこかで送葬曲を彈いてゐるやうな氣がした。

（莫迦！お前は何だつてそんなに悲しんでゐるのか？　人の心はそんなに醜いもんぢやない。）

チラッと又あの明るい輝かしい光が彼の心を横切つた。又消える。森の向うの灯火のやうに。

（こんなにくよくよ考へてゐるより、明日にでも、卯女子さんに會つて、眞實の事を尋いて見る事だ。）

「それが一番良い。」何處かで彼は力强い聲を聞いた。

惠吉は立上つた。そして机の所に近寄つた。ふとそこに厚い封筒が乘つてゐるのに氣が付いた。ひつくり返して見た時、彼はそこに例の字で、芳野文雄と書かれてゐるのを見た。彼は封を切つた。

「今村兄！

僕のこの素晴らしい御無沙汰を免してくれ給へ。眞實にひどい奴だと思つてゐられるかも知れないが、この頃の僕は自分でもどうしようもない程の厭人家になつて了つたのだ。それが又どうして君に

この手紙を書くのか、それは段々讀んで行くうちに解つてくれるだらうと思ふ。まあ譬へて見れば、あの印度の摩裕羅城にある濕婆の寺院の禮拜堂の廻廊の柱の下に、幾十年となく坐つたまんま、無音の行をやつてゐるあの奇怪な行者が、その苦行に入る前、三日も四日も、思つてゐる事を喋つて喋つて喋り拔くと云ふ、そんな氣持も混つてゐるのだらう。

自分の心の中にたつた一つの蟠りがあつて、自分はそれをどうしても人に、そして殊に君に聞いて貰はないと僕の苦行に入らうとする大勇邁心は鈍つて了ふのだ。

今村兄!

僕は一口に云つて了ふ。僕は淋しいのだよ。——と云つたら、何のこつた、又感傷氣分か、と君は云ふかも知れないが、僕は、自惚かも知れないが、決して僕の淋しさがそんな慣習的なものではないと思つてゐる。まあ、聞いてくれ給へ。癡人の寝言だと思つて。

今村兄!

僕は卯女子さんを戀してゐたのだ。心の底から戀してゐたのだ。いゝや、僕は、——率直に云はせてくれ給へ。——僕は今でも卯女子さんを戀してゐる。と同時にこの戀が一方的である事も知つてゐる。「月に向つて吼ゆる病犬」なのだ。

しかし、自分のこの戀こそ眞實に純眞なものだと思ふよ。何故ならば相手が自分を戀してくれる事を要求して、又はそれを考慮に入れて戀するやうな戀は、僕には如何にも、打算的、交換的なもののやうな氣がする。相手の心が離れゝば又自分も離れようとする。さう云ふ愛は、つまり、相手の愛を買ひ入れる一種の手段に過ぎないのだ。——話が大分理に落ちて了つて恐縮。

今村兄!

そんなわけで僕は心から卯女子さんを戀してゐる。が、しかし僕には又同時にこの自分の勝手な氣持から、自分の愛する人の幸福に暗い陰影を投げる、そんな事は惡い事だと云ふ事をよく知つてゐる。そして、二個の物體が同時に同一空間を占有し得ないと云ふ、あの自然の大法則を、僕は知つてゐる。

だからかうやつて一生懸命に厭人的な考への中に諦めの辛い苦行を始めたのだ。そのうちにその厭人的な考へに、丁度自分で作つた罠に陷つたやうに捉へられて了つたのだ。間もなく自分は卯女子と云ふ名前を、全く無關心な、小說的人物の名として聞く事が出來るかも知れないと思つてゐる。だから安心してくれ給へ。そして僕は心から兩人の幸福を祈つてゐる。これがこの俗形の僧のたつた一つの行の道なのだ。

今村兄!

かう云つたからと云つて、決して僕は皮肉や自暴言を云つてゐるのではないよ。誤解しないでくれ給へ。この手紙を見た時、君達兩人はどんな會話をするかしら!

(まるで新派悲劇の臺詞みたいだわね。)

(さう。プリュウパード初期の映畫にでも出て來さうだ。)

そして兩人は幸福さうに笑ふ。しかし僕は嚏を二つばかりして諦めるよ。

今村兄!

僕は巴里に暫く居た。しかしこの大都

會の賑やかさは僕にとつて餘りに淋しかつた。君はドストエフスキーの『白夜』と云ふ小説を讀んだ事があるだらう？あの主人公がペトログラードの町に對する感じが、丁度僕のこの巴里に對する感じだ。さうだ。人間と云ふものは、淋しい野中の一軒屋にゐるよりも、かうやつて人の蠢々としてゐる大都會の眞中に、誰にも取り合はれない自分の姿を見出した時程、眞實の淋しさを覺える事はないね。

自分のこの頭の中に渦卷いてゐるいろいろの思ひと云つたものには、全然無關心にこの世の中は動いて行く。笑ひざわめいて動いて行く。村の鎭守のお祭に獨りとり殘された孤兒が、納屋の蔭に、月の光に、そつと流した涙、そんな氣がするではないか。

で僕は霧深い一日、たうとうあのセイヌの流れに、サンミッシェルの石橋に、夕陽さすノートルダムの御塔に、別離の言葉を投げかけて、又所定めぬ放浪の旅に上つたのだ。

そして今このコンスタンツにやつて來た。此の町は良い所だよ。心の住家を失つたこの僕でも、此の町なら當分落着けさうな氣持がする。古い都の持つあの懷しい閑寂と落着とさびを包んでゐる。宗教改革のフッスが焚刑になつた所。町の外れはもうスキス領になつてゐる。

僕のホテルの窓は丁度ボーデンゼーの湖に向つて張出してある。季節外れでホテルはガランとしてゐた。黃昏の迫つた湖の面を涼しい夕風が吹いて行く。スキス領のアルプスの嶺には、久遠の雪がその姿を水にうつしてゐる。透き通るやうな湖水の水は、宿の所から古橋を潛つて川に流れ、これがやがてラインの流れになるのだ。ローレライその他いくつかの傳説をその懷に抱いて、あの「黑森」の大森林の中を流れて行く。ローヘングリンの白鳥が悠々と黃昏の湖を渡つて行く。かつて昔この湖を棹さしたエッケハールトの戀物語が夢のやうに浮ぶ。譬へば源平盛衰記の繪卷物を見るやうに獨逸中世紀の騎士の夢は懷しい。

隣りの部屋の露臺に外國人がゐる。いつも食堂で顏を合せるので一言二言喋り合つた。佛蘭西人の畫家で、何でもとの湖にうつる太陽の反射を描かうと思つて、かうやつて毎日水を見てゐた爲に、眼を痛めて了つたと云つてゐた。パイプの煙が暢氣さうに上つて行く。湖を見てゐなければ、ソファに寢そべつては、ヴァイオリンを手にして、日永夜永アイーダの拔萃曲を彈いてゐる。面白い人だ。

夕方湖水に沿つて丘の上を散歩する。夕陽の餘映があかあかと田舍家の窓硝子に光つてゐる。暫く歩いてゐたら小つぽけな漁村に出た。漁夫の家が四五軒と宿屋と稅關の小屋とがある。網を干した家の入口の石段に腰を下して、薄暗い黃昏の餘光をあつめ、本を讀んでゐる可愛い娘がゐる。宿屋に寄つて珈琲を飮む。潮の香と、夜の冷えが沁々と身に迫る。

カラン、コロン、……とサンタマリヤの鐘の音が、夕靄の湖水の面に響いて來る。宿に歸る。

入陽の影も段々褪せて行つた頃、雲を割つた十六夜あたりの月影が、雪で洗はれた淸い姿を現はした。

アルプスの雪の峯が銀色の影を、そのまゝ透き通つた湖の水に浮べてゐる。ラインの漣が鮎の腹のやうに輝き出した。

墓場のやうな靜寂の中に、悲しい夜が近付いて來る。戀の輓歌を聞くやうな氣持だ。

湖水の上にぽつんとその永劫の光を放つてゐる一つ星。

宵の明星。――このひとりぽつちの俺の運命の暗示だ。

「遣瀬ない、」とか『うら悲しい、』とか云ふ字を十位並べなければ追つつかない。心のどつかの隙間に云ひ知れぬ旅愁が忍びこむ。所定めぬ渡り鳥も嵐の日には塒が戀しくなるものだ。矢代さんの云つた綠色のショパン、そんな氣のする夜である。

夕食にはこの湖水でとれた何とか云ふ魚を食はせた。氣晴らしに家を出る。町立劇場の明るい燈火が眼に入つたのでそのまゝ入る。「トレドのユダヤ娘」をやつてゐた。一旦沈んだ心は、芝居を見ると餘計悲しくなるばかりである。途中で出て小さい町をどんどん外れ迄歩いた。そこにあつた小さなビーヤ店へ入る。それでも駄目。ビールのコップの並ぶ程、氣が滅入るばかりだ。こんな時は早く宿に歸つて床に入るのが一番だと悟る。表へ出た微醉の頰を冷たく夜風が滲み、見上げた空に、星が降つてゐた。

黑犬の子が追へども追へども去りがてに、自分を凝視めて動かない。淋しい眸をお前は持つてゐるね。

今村兄！

又僕はいつの間にか自分の感傷氣分の奴隷になり、長々とこんな愚にもつかない愚痴を書き並べてゐたね、自分は雄々しい修行者ではないか？ さはれ、どんな人だつて、異國の空に放浪ふ者で、この種のセンチメンタリズムの羈絆を脫し切る勇者は果してどの位あらうか。だが君はさぞ退屈した事であらう。

昔、谷間に咲く白百合のやうな清い少女が一人の騎士と戀をした。騎士は七年間の約束で武者修行に立つた。女は獨りで待つてゐた。七年は經つ。男は歸つて來ない。彼女は庭の綠の樹蔭に、日毎男の歸るのを待ち暮した。丁度七年經つたその日から三週間目、一人の立派な騎士が馬に乘つてやつて來た。そして彼女に云つた。

「お前の待つてゐる戀人は遠い町で他の女と結婚した。私はそれを見て來たのだよ。お前はその不實な男に何を望む氣なのかい？」

少女は深い溜息と共に云つた。

「私はあの方に樂しい日が、丁度あの白い海の砂のやうに限りなく續きますやう、神樣にお祈りを致しませう。」

場合は違ふ。が、僕は今この最後の言葉だけをそのまゝ刺女子さんに捧げて筆を擱く。この僕の心からなる祝福の杯を受けてくれ。こんな男もあつたと云ふ事を何かの話の序にでも話してくれ給へ。ぢや、さやうなら。

文雄」

憲吉はぼんやりとそのまゝ立つてゐた。

――一方的の戀、そんな事が考へられようか？ 太陽を愛するものは太陽に愛せられようとは考へ

ない。しかし未だ太陽を戀すると云ふ人を知らない。それは日光は無限であるからだ。それを獨占しようとする事はドン・キホーテも躊躇はう。所が人間は日光とは違ふ。戀と云ふ字は獨占と云ふ事ではないか。眞に自分の戀心を信じたならば、相手が自分以外の人と、より以上に幸福になれると云ふ事が、許容出來る事かしら？

それは自分達の戀だつて、決して交換的な、向うがこれ丈愛するから、こつちもこれ丈愛するのだとか、こつちがこれ丈愛してゐるのだから、向うにもそれ丈の愛を要求すると云つたやうな、そんな打算的なものではない。各々は自發的に、と云ふとちよつと變だがたゞ相手を愛してゐるのだ。そして眞の愛さへあればそれはきつとお互に通じ合はなければならない。

わからない！

わからない！

わからない！）

惠吉は頭の中をまるでミルクセイキか何かのやうに掻き廻された氣がした。

翌る日は珍らしく好い天氣であつた。皆川がいつものやうな顏付で、惠吉の部屋を訪れた。頭髪は少し伸びてゐた。彼はサムソンのやうに元氣であつた。

『やあ暫く。お宅の方は？』

『燒けました。』

『そりや烏の小便ですな。』

『え？』

『キにかゝるつて。ハハ。』

惠吉も仕方なく苦笑した。

『近頃何所へ行つても同情、どじやうつてやり切れませんな。この所柳川鍋に食傷したつて形です。ハハヽヽ。』

そして皆川は明るい戸外の光に目をやつた。

『どうです、一つ氣晴しに郊外にでも行きませんか？』

『えゝ。』

惠吉は早速贊成した。皆川はふと窓の下の屋根に、安全剃刀の古刃が錆びついてゐるのを見た。惠吉が捨てたものであらう。

『屋根の上に、錆びつきし、剃刀の刃よ！

俺もあんなものを使つた時があつたのか？

シャーロッテよ！

おゝ、おゝ！』

『何の眞似です？』

『詩さ。君。…』

皆川は振り上げた両手を下すと、ごはごはの粗ら鬚を撫で乍ら、澄して答へた。

『シャーロッテとは、人を失戀させたあらゆる女性の代名詞だ。だから貫一なら、お宮よ！つて云へば良いのさ。…剃刀で思ひ出した、君、ちよつと剃らせてくれませんか？　大分伸びた。』

『どうぞ。』

皆川はもう一遍つるりつと顋を撫でて、次の部屋へ入つて行つた。

『君、君。あのハイドンの「剃刀クアルテット」つて云ふ曲を知つてゐるかね？』

次の間から皆川の聲がした。

『いゝえ、知りません。そんなのがあるんですか？』

『大有りさ。何でもハイドンがやつぱり髭を剃つてゐたんだつて。そこへ出版屋の番頭が、何か四重奏の曲を出さしてくれ、是非くれと云つて、催促に來たのだね、所があやにく剃刀が馬鹿に切れなくて、先生むしやくしやしてたんだらう。で云つた。「何でも良い。良く切れる剃刀を持つて來た奴に、曲を書いてやる」つて所が又その番頭さん馬鹿に氣の利いた奴で、早速

用立てたんだね。ハイドンの先生仕方がないから、一曲作つて渡したつて話さ。でその曲の事を「剃刀クァルテット」つて云ふんだよ。』

やがて惠吉は、中々良い聲で皆川が何か歌を唄つてゐるのを聞いた。震音の良く利いた綺麗な次中音であつた。

『もう良いよう。』

子供が便所で呶鳴るあの聲色を使つて、皆川はやがて又、青く剃られた顋をによきつと突き出した。

『中々良い聲ぢやないですか。』

『ハハハ、實は君、あれはね、手で咽喉を震はすんですよ。ちよつと知らずに聞くとわからんでせう。…世の中には、兎角から云ふまやかしものがあるから、君、氣をつけないといかんよ。』

兩人はティールプラッツの地下鐵道の終點を出て、樫木の森の下路を歩いて行つた。通りすがりの郵便車の角笛の音も哀れに、落葉がヒラヒラと馭者の帽子に散つて行つた。

葉の落ち盡した梢には、小鳥の巣も露はに、青い空がその間に透かせて見えた。森羅萬象は寂として、あたりは皆、悲しい秋の思ひに沈んでゐるのだ。

落葉重なる木の下路を、兩人の跫音が重い旋律を響かせて行つた。兩人の口も重かつた。惠吉は八木節の文句ではないが、年寄爺さんが豆食ふやうに、ぽつりぽつりと卯女子との戀を話したのであつた。誰にでも良い、聞いて貰ひたかつたのだ。皆川は默つて聞いてゐた。

兩人はやがて落葉の上に足を投げ出した。蟋蟀が叢の中に喞々たる秋の小唄を歌つてゐる。兩人は默つてこの森の中の靜寂に心ゆく迄浸つてゐた。

『君のやうに生一本に戀する事の出來る人は羨ましいね。…』

皆川がやがてしんみりと口を切つた。

『しかし又それだけ危險なわけだ。』

『何故？』

『何故つて、君、さうだらう。撚つた綱なら一本位切れたつて平氣だがね、一本だとするとどうだい？　一旦それが切れた場合さ。…實際戀なんてものは蜥蜴の尻尾のやうに切れ易いもんだからね。』

惠吉は不愉快な氣がした。

『ぢや、二つも戀をしろつて言ふのですか？』

『二つ？　あゝ、二つも三つもさ…でなけりや零さ。』

『だつて君、戀の量には限りが有るもんですよ。』

『それぢや二人愛すれば二分されるつて云ふのかい？』

『さうです。』

『所が僕には、愛は太陽の光のやうな氣がするんだ。それを蟲眼鏡で一所に集めて、紙を焦して面白がつてゐる子供が有るんだね。そして餘り夢中になつて凝視めてゐたもんだから、今度脇を見ると眞暗で何にも見えやしないんだ。』

『しかし僕の意味するのは、その集まつた光の事だけを指すんですもの。我々が戀と云ふ字から受取る概念は、愛のそれよりもコンデンスされたものです。僕だつて美しい女を見れば誰でも愛らしくは見えます。しかしそれすら、卯女子の事を考へる時、僕は罪のやうな氣がします。』

惠吉はそこの枯枝にとまつてゐる冬鴉が、びつくりして首を傾げて聞き耳を立てる程、熱心に語つた。やがて彼は獨言のやうに言ひ足した。

『二つの焦點は作れないからな。』

『だつて君、蟲眼鏡を二つ使へば出來るわけだ

らう。フリードリッヒ街にでも行き給へ。いくらだつて賣つてゐるよ。』

『あなたは巫山戲てゐるんですか？……とに角僕にはそんな考へは持てなかつたのです。そして又持てません。……あなたは戀と愛とを一緒にしてゐる。』

『いや、そんな事はない。』

『ぢや、どう違ふとお思ひですか？』

『さうさね。鯉と鮎位違ふ。』

『え？　なんです？』

『魚類の名前さ。』

兩人は默つて了つた。皆川は草の上に落ちた團栗をビー玉のやうに彈いた。

『怒つたのかい？　そんな心算で云つたんぢやないんだよ。僕の友達にやつぱりさう云ふ生一本の戀をして、その結果綱が切れて、苦い杯を飮んだ擧句、たうとう身も魂も亡くなして了つた男を知つてゐるからね。それで僕も心配なのさ。

精神的に受けた大打擊がその男の身體を壞して了つたのだ。彼は鎌倉の病院で獨り淋しく死んで行つた。僕は偶然な事で、その男に附き添つてゐた看護婦の口から、彼が死ぬ前にした最後の告白と云ふものを聞いたがね。

（世の中には手を下さずにするより以上慘虐な人殺しがある。僕はその被害者の一人なのだよ。）

そしてその男は眼に一杯淚を湛へて、そして看護婦の顏をぢいつと見乍らいろいろと怖ろしい事を話してくれたのださうだ。

（あんないつもは默つていらつしやる溫なしいお方の口からとは思へない位でございました。）

と看護婦が云つてゐた。

何でも彼は、自分の娘を成る丈金持の所に嫁づけて、一軒でも金持の親類を持ちたいと云ふ、その女の母親の愚劣な虛榮心と、それから金持の所へ嫁くと云ふ事が、無條件に一番娘の幸福だと、さう自分の考へから推した誤れる幸福觀、その二つの犧牲になつたのだね。』

惠吉は何だか怖ろしい氣がし出した。

『その當の女つて人はどうしたんです？』

『それがさ、君、その男の死を聞いて淚一つ滾さないつて女なんだから。兎に角、金持と結婚して、お金だけはさつさと利用して置いて、それでゐて實家へ歸ると夫や先方の惡口を洗ひざらひ云ひ散らして行くつて女なんだからね。初めその男と戀をした時だつて、將してその男だけを愛してゐたのか、どうだか、疑問さ。そんな奴に限つて自分の美貌を鼻にして、世の中の男なんか、皆んな自分の前に跪くなんて思つてゐるんだ。

僕はその女が僕の友人、つまり今話した彼女の戀人だね、それにやつた最後の手紙を見せて貰つたけど、その時は實際他事乍ら憤慨したよ。出來る事なら俺の一生を棒に振つても良い、その女をこの社會から葬つてやらうとさへ考へた位だ。とに角君、妾にはいくらだつて結婚の申込み手があるんですからね、なんてまあ圖々しくも書いてあるんだ。そんな蓮つ葉な娼婦型の態度を他の男に對して採つたりした自分自身の恥を廣告してゐるやうなもんぢやないか。寧ろ氣の毒になるね。僕は癪に觸つたからあのシルレルの「手袋」の詩を譯して送つてやつた。君、知つてるだらう？』

『いゝえ。』

『ぢや話さう。昔ローマの演技場での一插話だ。貴族達は今し熱心に虎の爭鬪を見物してゐる。そのうちにふとその中の一人のお孃樣が手袋をアレナの中に落して了つたのさ。そこには飢ゑに飢ゑた數頭の虎が牙を鳴らして睨み合つてゐる。丁度その間にそれは落ちたんだね。女はふと傍にゐた或る年若い貴族を顧みてそ

して云つた。
（あなたの愛が眞實ならば、あの手袋を取つて來て下さい。）つてね。
　女はその靑年貴族がとうから自分に想ひを寄せてゐる事を知つてゐたんだね。男は默つてアレナの中に飛び下りた。人々は固唾を飲んで、あれよあれよと見てゐる。さすがの虎も男の凜とした威風に壓せられたのだらう、隅の方でただ眼を光らせてゐる丈なんだね。男は悠々と手袋を拾ひ上げると又悠々と見物席へ戻つて來た。そしていきなりその手袋を女の顏に叩きつけるとそのまゝさつさとその場を去つて了つた。と云ふ話さ。』
『ひどい奴ですね。』
『誰？　そのお姫樣かい？』
『いゝえ、そのあなたのお友達を失戀させた奴です。』
『そりや、ひどいよ。しかしだね。君の卯女子さんつて人は將して君だけを愛してゐるのだらうか？』
『當り前ですとも。』
『しかし、今云つた男だつてきつとさう思つてゐたんだぜ。』
『そんな女と卯女子とは違ひます。そりやあなたが卯女子を一度見て下されぱわかります。一人の女がさうであつたからと云つて、あらゆる女性がさうだと云ふ論據にはなりません。』
『さうかい？』
　兩人の間には又沈默が來た。
（あゝ強くは云ひ切つたものの、自分は將して、この自分の信念の上に、泰然と構へてゐられるか？　將して卯女子は……）
　惠吉は自分の頭の中の積木細工を、いきなり誰かに崩されたやうな氣がした。芳野の顏がぼんやり浮ぶ。彼の心は、曲りくねつた隧道の中のやうに暗くじめじめと濕けた。
　クワツク、クワツク、
　クワツク。
　朽葉の沈んだ池の水に灰色の雲が浮んでゐた。蟋蟀の鳴き音に誘はれて、氣紛れな秋の通り雨が、パラパラと落葉の上に降つて來た。しよんぼり立つた榛の木の、ひよろ長い影が、池の面に冰つてゐた。
　夕方の街の上に、卯女子の家の窓から掛けて、宵の空にくつきりと、七色の虹がかゝつてゐた。惠吉は街角の枯木の影にいつ迄もいつ迄も立ちつくしてゐた。
　彼女の窓に灯が入つた。彼の瞳は熱かつた。

惡魔に賣つた魂

　から云ふあらゆる事情と感情を包含して、都の秋は、時雨する落葉の上に更けて行つた。眠りをしてゐた冬が又もうすぐに目を覺ます。
　そしてその皺だらけの手をこの大都會の空に擴げると、丁度暗渠を流れる水のやうに、あの冷酷な寒氣が、辻から辻へと滲みて行くのだ。この冬の石炭の買へない貧しい人々は、灰色の空を見上げて、深い吐息を漏らすのであつた。
　そこここの通りすがりに煉炭の値段が私語かれる。人々の頭には又毛皮の外套が浮ぶのだ。
　街角に立つて今村惠吉はもう一遍時計を見た。雨霽りのうすら寒さが防水布の上着の襟からしんしんと沁み渡る。行きかふ人々は一樣に外套の襟を深く立てて、忙しげに、大股に步み去る。
　車の着く度に、どやどやと地の中から吐き出されて來る一群の人々の中に、彼はしきりと卯女子の姿を探してゐるのであつた。電話で約束した、その待合せの時間はもう十分餘りも過ぎ

てゐる。今迄にはこんな事はなかつた、とやゝもすれば持上らうとする僻み心を淋しくも見守り乍ら、彼はもう一臺待たうと思つた。

　どやどやと又一群の人が上つて來た。子供を挾んだサンドウヰッチ夫婦もあつた。着物を着せた黑の小犬の紐を引いた、おめかしやの夫人もあつた。そして皆思ひ思ひの方角に散つて行つた。最後の女が、獨りでそこに立つてゐる乞食の帽子に、なにがしかの札を投りこんで足早やに角の街に走り去つた時、惠吉はやつぱり立去る氣にはなれなかつた。

（どうしたのかしら？）

『君の卯女子さんつて人は、將して君だけを愛してゐるのだらうか？』

（莫迦な、莫迦な、莫迦な。）

　惠吉は大きく首を振つた。やがて、そのうちに、惠吉は、身長の高い男の背後に隠れて、毛皮の外套にくるまつた卯女子の顏を認めた。惠吉の顏を見た時、彼女の顏にはあのいつもの明るい微笑があつた。

　階段を小走りに上つて來る。

『ほんとに遲くなつて了つて。お待ちになつて？　私、なんて狼狽者なんでせう。紙入を忘れて了つたのよ。地下鐵道の切符場へ來て、初めて氣がついたんですもの。』

卯女子は頻りと言ひ譯をした。

『まだ三十分も待ちやしません。』

　さう云つて惠吉もちよつと笑つたが、その笑ひの故意とらしさに自分乍ら氣がつくと、彼は狼狽てて止めて了つた。そして默つて歩き出した。

『あら、そんなにお待ちになつたの？　御免遊ばせね。』

　そして彼女は、ちらつと惠吉の横顏を盗み見た。彼女は今迄にも、何度も惠吉の淋しさうな顏付を見た事があつたが、今日のやうにこんな悲しげな面持は決して見た事がなかつた。彼女も釣りこまれて默つて歩いてゐた。その沈默が堪へられなくなつた時、卯女子は尋いた。

『あなた、何か怒つてらつしやるの？』

『いゝえ。どうして？』

『だつて、……』

　そして兩人は又默つて了つた。明るい飾窓をいくつか越えて兩人はやがて小暗い通りを曲つた。そこに彼が先よく行つた料理店があつた。來る人も老軍人とか、學者とか、定つた顏觸れで、落着いた氣持のいゝ家であつた。それに、部屋が一つ一つに別れてゐるのが何より都合が好かつた。

　兩人は丸い小さい卓子に向ひ合つた。あつさりした品を誂へて、給仕の影がカーテンの向うに隠れた時、卯女子は口を開いた。

『お話つて一體なあに？』

『えゝ、實はね……』

（何と云ひ出したものかしら？　下手に云つて、自分の僻み心を見せるのは厭な事だ。それよりも更に、自分の愛を誤解されるのはもつと厭だ。）

『實は、どうしても、君にお話して置かなければいけない事なのです。これを讀んで見て下さいませんか？』

　さう云つて惠吉は家からの手紙を彼女に渡した。卯女子は何だらう、と云つた顏をして受取つて、そしてやがて讀み出した。惠吉はゼルヴィエットの紙を肉叉の先端でピリピリに破いてゐた。

　卯女子はやがて靜かに手紙を置いた。そしてぢいつと惠吉の顏を見た。惠吉は眼を伏せたまま云つた。

『そんなわけですから……ね、君もよく考へて見て、そして遠慮のない、眞實の事を云つて下さいね。約束なんかに捉はれて、君の幸福を破

つてはいけない。……』
卯女子は默つてゐた。惠吉は自分の僻み心がぐんぐんと首を持上げて來るのを覺えた。

(To cut the Gordian knot.)

『路の眞中の邪魔石は、……』

『惠さん！……』

彼女はいきなり鋭い聲を開いた。

『あなたは、……』

卯女子の聲は震へてゐた。いろいろの感情が彼女の瞳の中にチラチラと踊つた。

『あなたは、……私が家や財産と結婚すると思つてらつしやつたの？……』

彼女の脣は幽かに戰いてゐた。惠吉はひやりとした。

『私、そんなに見えて？……』

一雫の涙がはらはらと彼女の頰を傳はつて流れ落ちて行つた。彼女はいきなり突つ伏して了つた。そして肩を震はせてしやくり上げた。

『あんまりだわ。』

惠吉は途方に暮れて了つた。何だか自分と云ふものが詰らない小つぽけなものに見えたのであつた。彼はおどおどと口を切つた。

『さう云ふ譯ぢやないけど、若し君が云ひ惡いと惡いと思つて……』

『いゝえ、いゝえ。』

卯女子は益々激しく泣きじやくつた。惠吉の心の中には不思議な明るさがさして來た。甘い遣瀨ない、春の夜の夢のやうな氣持がやはらかく彼を包んで行つた。彼はうつとりと醉つたやうに、その氣分に浸つてゐたかつた。

『卯女子さん。』

そして靜かに彼女の肩に手を掛けた。

『ね？ 御免なさい。僕が惡かつた。』

彼は不思議な力を身裡に感じた。

『僕は今初めて、裸一貫になつた身の幸福を知りました。』

そして、惠吉は歸國の決心を話してやつた。もう懷かしい築地も、銀座もない。自分達を待つてゐるのは、たゞ焦げ臭い焦土ばかりなのだ。だがそこには新生の力強い芽がふいてゐる。――そんな事を彼は語つた。

給仕が料理を運んで來た。卯女子は狼狽てて涙を拭いた。炙肉を切つて惠吉の皿に分け乍ら卯女子はもう晴々と微笑んでゐた。

『これから、眞實に私達兩人の生活が始まるのだわ。私、それを思ふと、何だかから胸が詰つて來るの。感謝し度いやうな、何と云つたら良いんでせうか、……日本へ着けば、私、編物や佛蘭西語を教へてなりとどうにでもやつて行けると思ふわ。あなたは好きなやうに勉強して下さいね。一時の自尊心や何かに捉はれて、折角芽ぐみ行く芽を摘んで了つてはいけませんもの。ね？ 私あなたが何なさらうとたとひそれが直接お金にならない事だらうと、私きつとあなたのお仕事に理解持てると思ふわ。そしてきつとお手傳ひ出來ると思ふわ。』

卯女子の言葉は朗かな行進曲となつて惠吉の胸の中に響いて行つた。霰に打ちのめされた何の初芽を見るやうに、あの暗い絶望の陰影は雲間漏る陽の光と共に消えて行つて了つたのであつた。

惠吉は默つて珈琲を飲んだ。

"Incipit vita nova."

(こゝに新しき生は起る。)

いみじき詩聖ダンテの「新生」、その第一頁に出て來る言葉が不思議な魔力を傳へて、彼の頭に甦つて來た。

裸身になつた並木の梢が樂音の舞踏を思はせる。氷つた鋪道が滑るではないか。自然は全く秋の外套を脱ぎ捨てた。

山田京輔は近頃、その枝の氣持が妙にこじれて行つたのに氣がつき出した。そしてその樣子を淋しい眼で見てゐた。妙に依怙地になつて行つた。例へば、寒い日に毛の上着を掛けないか、と云つても妙に意地張つて、態と着なかつたり、何か話しかけても素つ氣ない返辭をしたりした。

そんなちよつとした事が段々積つて行くにつれて、山田の心の中には何かしらん充たされない或るものを感じ出した。そして、殊に自分が親切な氣持から云つたり、したりした事を、まるで誤つてとられたりした時の、その淋しさは別であつた。例へて見ればさつきのやうに、上着を着たらどうか、と二三度云ふ。彼の氣持としてどう思はれても良い、風邪を引かれるよりは增しだ、そんな心算で二三度、自分でも執拗いかと思はれる位に云ふのであるが、そんな場合に、さも五月蠅いと云つた樣をして、

『そりや身體が違ふんですもの、そんなにあなたの思ふ通りには行きませんわ。』

などと云はれると、もう親切な考へも何もかも消えて了つて、それだけに、ぐつと腹が立つて了ふのである。

(どうして、こんなにひねくれて取るのかしら? まるで盆栽の松みたいだ。)

彼は荒々しく部屋を出て行つて了ふのであつた。女性を一番美しく見せるあの素直と云ふ所が、ちよつともないではないか。素直は決して屈從ではないのだ。

そして一番彼を苦しめたのは、彼女の物事に對する熱の無さであつた。芝居へ行かうと云つても、どうでも良いと云つた風が見えて、それが面白くなかつた。

いろいろのこんな苦痛が增して行くのに連れて、彼の頭には「戀の飽和」と云ふ事が考へられて來た。總ての戀の歡喜は、クライスラーのウヰンの對曲のやうに、必ずそれに伴ふ苦惱があるものだ。そして歡喜が大きくなればなる程その苦惱も大きくなり、それが餘りに大きくなつた時、戀と云ふものは飽和されて、それ以上は進まなくなるものだ。――そんな理窟であつた。

折角親切にして、そして報いられないばかりか、不愉快な氣持を增して行く。それ位ならいつそ表面に冷淡な薄紗を着てゐた方が、兩方にとつて良いのかしら? そんな氣持から山田は今迄の積極的な態度を全然捨てる事に決心した。

しかし、さうやつて表面を冷淡にすればする程、彼の心の中に燃える愛の心は、却つて苛立つばかりであつた。そしてその變な氣持がいつの間にかその枝に反射して、又自分の眼に見えるのである。

その枝は又その枝で、京輔のおこりつぽさが眼につき出した。今迄、自分の意志と云ふものが全然否定されて來た習慣で、何事に依らず、自分の決斷力が麻痺して了つた彼女が、物事に對して熱を持ち得ないのは當然な事であつた。それ位の事は察してくれても良さゝうなものだ。その枝にはこれも怨みの一つであつた。荒々しく山田の背後に扉の閉る音を聞く每に、その枝の心には暗く悲しさが忍びこむ。

(この頃の夫の無情さ、素つ氣なさは、丁度それが自分の態度と鼬ごつこではあるかも知れないが、どうしたわけなのかしら? 若しや、……)

前の夫に散々裏切られ盡して來た彼女の心には、疑惑の暗闇の中に丁度お湯殿の行燈のやうにほんのりと、嫉妬の焰が燃えるのである。

かうやつて兩人の間には奇妙にこじれた氣持が漂ひ始めたのであつた。そんな氣持に包まれ

て、今もその枝は、もう暗くなつた部屋のソファに慵い身體を横たへてゐた。先刻もちよつとした事で、夫と喧嘩をして了つた事が、夫を責める心の中にも、自分の心に後悔してゐたのである。

「それぢや、どうぞお勝手に。」

さう云つてピシャリと扉の音がして、出て行つた山田の跫音が、梯子段の下に消えて了ふ迄堪へてゐた涙が、故もなく頬を傳はるのであつた。

（何と云ふ薄倖の星を擔つた吾が身なのだらうか？）

その時表の戸が幽かに開く音がした。

（夫が歸つて來たのだ。）

そして彼女は目を瞑つて寢たふりをして了つた。口を利くのを恐れたのである。今度はこの部屋の戸を開く氣配がした。夫は暫く、自分の方を見乍ら立つてゐたやうであつた。

やがて彼女の肩に厚い毛布を掛けてくれる夫の手を感じた。優しく上を叩いてくれて、そして煖爐を探る音がした。

彼女の胸の中には云ひ知れぬ感情がわくわくと迫つて來た。彼女はそつと涙を拭いた。

（私が惡かつたのだわ。夫の愛はやつぱり、あの冷淡の假面の底に燃えてゐたのだ。）

彼女は起き上つて、夫の胸に縋つて心ゆく迄泣きたいやうな、そんな衝動に打たれた。彼女がぐるりと向きなほつた時、山田はもう部屋を出て行つて了つた。戸の閉る音が悲しく彼女の耳に殘つた。

山田の吸つた紫の煙草の煙が靜かな部屋の空氣の中で、いろいろの形に、まるでメヂュサの頭のやうに縺れてゐた。

十月の末と云へば、あの北國特有の鉛色の雪雲が、毎日々々、石造の建物の上に重く垂れかゝつてゐた。暗い氣持を、せめてすき燒でも食べて、日本の香りに和けよう、とさう思つて惠吉はしとしとと降る氷雨の中を、アウグスブルゲル街の方へ曲つて行つた。

赤い灯が濡れた鋪道にうつつてゐた。そこの水溜りに廣告燈が點滅した。果實屋の隣りの小さな家。「日本料理、東洋館」と日本字の看板が幽かに讀まれた。戸を開けて入ると、室内に籠つてゐた人いきれが煙草の煙と一緒にむうつと顔に當つて、そのまゝ戸外の寒氣の中に溶けこんだ。すき燒の醤油の匂ひが、異國に在る所爲か、ことにも強く鼻を打つた。

やつとあたりの明るさに慣れた眼の中に、惠吉は、一隅の卓子を取卷いて、四人の人を見た。一人は櫻井であつた。そしてそれと向ひ合せに頻りに肉をつゝ突いてゐるのは富田であつた。殘りの二人は丁度上げた笑ひ聲でわかつた。女である。

「やあ、これは暫く。……」

櫻井は妙な笑ひ顔をして聲を掛けた。

「いつぞやは、辯護士御苦勞でした。」

そしてもう一遍にやにやと笑つた。富田は振返つた。もうかなり赤い顔を、てかてかと光らせて、そして惠吉を見ると、さも恐縮したやうに挨拶した。芳野の友人であると云ふので、富田は妙に惠吉の事を丁度煙草を銜へて立小便をするやうに煙たがつてゐた。それにこんな女を連れてゐる所を見られたりして、ちよつと跋が惡かつた。この間ラインゴールドのカフェで一緒に話した時、「とに角夫婦皆無事で、私はもう滿足です。」なんて殊勝な事を云つた手前、又それだけ極まりが惡かつた。

「構ふもんか。」

すると彼の頭の中で酒がさう云つた。

「どうです、椅子をこゝへ、お寄せになつちや？」

今晩あたり一つお交際ひなさい。一遍位はお土産に良いでせう？』

惠吉は當惑したやうに笑つた。

『えゝ。ちよつと、今日は……』

そして彼は、丁度空いた隅の卓子に坐つて給仕の持つて來た獻立表を指さした。そして獨りで不味さうに食べ終ると、すぐ立つて行つた。

（何と云ふ詩のない人々だらうか。月を見て泥の塊だと觀るやうな人々は、少くとも俺の世界からは遠い人だ。人間の本來は裸體だから、裸體で往來を歩けと云ふのかしら？人間の醜さを道德で隱し、藝術で美化する事をさへ彼等は虛僞と叫ぶのかしら？人間の惡性を肯定する事は、何もこれを恣にのさばらせて構はないと云ふ事にはならない。）

惠吉は卯女子の家へ行かうと思つた。

ガチャンと硝子の割れる音がした。うす汚い人々の群が右に左に狹い道路の上を蠢いた。パン屋を襲つたモップの群である。金切聲が小雨に濡れた街を走る。と忽ち綠色のシェッポを乘せた貨物自動車が向うの街角を曲つて疾走して來る。鐘が鳴る。モップは蜘蛛の子を散らすやうにそこゝの小路の奧へ消えて行く。二三人の犧牲者は、血にまみれた瘦顏を泥濘の鋪道に叩きつける。卷ハンがすつとぶ。すると都合良く十字をつけた救護自動車がやつて來る。そして毎日の仕事のやうにその負傷者を積みこんで、又いづくともなく走り去る。……

街の上には何事も起らなかつたやうに、小雨がしとしとと降りしきつてゐる。卷ハンは勇氣なき貧乏人のお腹にをさまつた。

硝子屋が手押車を押して、鼻唄を唄ひ乍ら、家並の番號札を數へて行つた。

惠吉は暗然として空を見上げた。

『ヘン、いやにつんつんしてやがる。』

惠吉の後を見送つて吐き出すやうに櫻井が云つた。そしてウヰスキーのコップをぐつと呷つた。四人はまたビールの壜を並べて頻りと喋り合つた。

『今村は潔癖家のピューリタンだからね。とに角、ヴィナスを愛する事が、既に心の童貞を失ふ位に心得てゐるんだからね。……』

富田はビールの杯を一口に空けると呟くやうにさう云つた。

『それに、近頃はいやに淋しがつてゐる。』

『ハヽヽ、あんな連中の淋しさはほんのお道樂さ。自分で有りもしない淋しさなんか拵へて、芝居でも見る氣でゐるんだ。憂鬱の問屋みたいな顏をしてよ。昔、丹後普甲寺の詩人が、自ら拵へた悲しみに自ら歎きつゝ、初稚の法衣の袖を絞つたつて馬鹿話があるが、そんな類だ。センチメートル・オンリーワンつて奴さ。べら棒奴、秋と一軒家さへありや淋しいと心得てやがる。

それに奴さん、山田の卯女子さんと出來てるつてぢやないか。金と戀があつて、それで淋しかつたら、一體こちとらはどうしたら良いんだ。ちよつと誘つてやると、妙に修身の先生みたいな面あしやがつて、僕あ主義としてプロは買ひません、なんて新派もどきの聲色を出してよ、それでお孃さんとくつついてらあ世話あねえ。俺あ、あゝ云ふ僞善者は大嫌ひだ。そこへ行くと、わが善良なる惡人富田氏だね、偉いのは、ハヽヽ、まあ一杯。』

櫻井はもう震へる手先で富田のコップにビールを注いだ。

『おつとつとつと、もう澤山。』

『ヘン、何が淑女だ。プロと何處に違ひがあ

る。世の中のお孃さんなんてもんは九分九厘、藝妓と同じだ。たゞ客を變へないつてだけだ。金持から口がかゝりやいそいそと、對手の心も愛も絲瓜もありやしない、早速お嫁に行くぢやないか？ まるでお座敷へでも行く積りでよ。それで嘘つく段になりやプロとちよつとも變りやしない。たゞ惡い事には奴等お孃さんなんて連中には、つきつめた眞劍な戀が出來ないんだ。ちよつとお待ち遊ばせ、今計算致しますからつてな奴だ。この遊ばせが氣に食はねえや。ミュッセの憤慨するのも無理はない。そこへ行くと、まあ俺のロッテを見てくれ。ハハヽヽ。まあ安心しなさい、勘定は俺が持つよ。俺あ手離しは大嫌ひだ。……』

空の盃をどしんと卓子に置いて櫻井が喋り續ける。

『俺あ、あんな男が夢中になつて親鸞上人ぢやないが、「一筋な戀」なんてやつてゐる姿を見てゐると、丁度タランチュラに刺されて舞ひ狂つてゐる男でも見るやうな氣がしてはらはらするよ。タランチュラつてのは、君、伊太利に棲む毒蜘蛛で、そいつに刺されると夢中に踊り度くなつて、終ひに狂ひ死にに死んで了ふつて奴さ。奴等はいつかあんな浮はついたセンチメンタリズムに破綻が來る時があらう。うつかりお孃さんの甘つたれ口なんかを眞に受けてゐると、飛んだ道化師になり終るぞよ。か。ワッハッハ……』

櫻井は口の周圍に一杯ビールの泡をつけて、妙な聲で唄を唱ひ出した。

『橄欖の實がほろほろと
月の光に散つて行く。
Tarantula!
蜘蛛に咬まれた若者は
空を凝視めて舞ひ狂ふ。
あはれ悲しく舞ひ狂ふ。……

ワッハッハ。とに角あんなお坊ちやんには、から云ふ人生觀はわからないね。やれへーゲルだ、カントだなんとかだつて、まるで屁の子玉をフライにしたやうな事を、神妙な面して喋りくさつてさ。奴等の人生觀は小說や蠹蟲の人生觀だ。やぶ睨みの人生觀だ。』

櫻井はちよつと默つた。今度は富田が口を開いた。

『さう君のやうに頭からやつつけちや可哀さうだ。君はあの人達とは全然別箇の世界に住んでゐるんだ。言ひ換へて見れば、君はあの人ではないのだ。あの人達に君の人生觀がわからないやうに、君にも亦、今村君の心の中にある氣持や悲しみがわからないんぢやないか？「汝はわれに非ず、何ぞわれの彼の悲しみを知らざるを知らんや」ハハヽヽ、ヽ。こりや莊子の筆法だ。どうだ參つたか？』

『參つても良いが……』

富田はこの間ラインゴールドで話したあの時の今村の姿がぼんやりと頭に殘つてゐた。

『今村君も今度の地震で餘程ひどくやられたつて云つてゐたよ。』

『少しは人間らしい氣持になれたらう。少しは貧乏して、いろんな人の間で揉まれて來ると良いんだ。さうすりやいくらお坊ちやんだつて、甲州かじか澤から富士川に押し流される石塊ぢやないか、ちよつとは角も取れて來る。……おーい、給仕さん、マンハッタンを一杯拵へてくれ。』

櫻井はコップでとんとん卓子を叩いた。二人の女は、――それはアニタとオリーであつたが、彼女等は、妙な顏をして、この場馴した櫻井の口から吐き出される、彼女等にとつては不可解な言葉をぼんやりと聞いてゐた。

『櫻井さん。そんなにお酒飲んぢや毒よ。そ

れに神樣のばちが當るわよ。』

『何だ？　神樣だ。馬鹿々々しい。』

『あら、あなた神樣を信じないの？』

『そんなものがあるもんかい。第一神樣にお目にかゝつたつて人がゐるのかい？　俺あこの自分の眼ではつきり見た上ぢやなけりや、何だつて在るとは信じないんだ。』

『あなたの頭は空つぽなのね。あなたは腦味噌がないのだわ。』

『馬鹿云へ。腦味噌のない人間があるもんか。』

『だつて。あなたは自分の眼ではつきり、ご自分の腦味噌を見た事があつて？』

櫻井は默つて了つた。アニタは遠い昔、まだマーガレットに頭髪を結つてゐた子供の頃、父母に連れられて行つたあのリューベックのマリヤ教會の事を思つた。自分にこんなお說教をしてくれたあの年取つた牧師さんの姿を思つた。

——ふと父母が暗の中で彼女に呼びかけた。

富田に先へ歸れと云はれると、それを機會に二人の女は席を外して歸つて行つた。

二人の男は又暫く默つて酒を飲んでゐた。

『しかしだね。……』

やがて富田は、この息苦しい沈默に堪へかねて、ぽつりぽつりと口を切つた。

『さう君のやうに、一概に頭からお孃さんを攻擊しても可哀さうぢやないか。中には眞實の戀をするのだつて、そりやあるよ。』

『そりやあるかも知れない。俺が少し云ひ過ぎたかも知れない。が、しかし俺の云はうとしてゐる所は、奴等が頭から卑しい女と馬鹿にし切つてゐる女達の中にも、奴等よりも、もつともつと眞實の人間がゐるつて事を知らせてやりたいんだよ。……』

給仕の持つて來た杯をぐつと空けて、櫻井は不意に唄でも歌ふやうに妙な節をつけて呶鳴り出した。他にはもう一人も客はゐなかつた。

『酒だ。…酒だ。賢しらをすと酒飲まぬ奴の顏をよく見れば猿にかも似る、か、ワッハッハ……一句浮んだよ。(二人醉ひし盃におのおのの人うつし。)つてんだ。どうだ、井泉水跣足だらう。だが俺の影たるやだね、ロッテでもないんだ。その枝ぢやもとよりなし。ずらつと前、俺がまだ若い頃に、この俺を騙した一人のお孃さんの顏だ。ハハハヽヽ。

兩人は夢中で戀し合つたものだ。いや、ことによるとあの時、俺だけが夢中だつたのかも知れない。ピアノの黑い板の上にそつと落した彼女の涙は、ありや傾城の空涙だつたのかも知れない。眼の周圍にお茶殼が附いてゐたのを俺は氣が付かなかつたのかも知れない。ロート目藥だつたのかも知れない。

が、しかし俺はとに角命を懸けて戀したよ。若い血潮の燃えてゐた頃だ。あの時分は俺もまだ遠大な理想と抱負があつたものさ。所が……』

櫻井は何かを考へるやうにぢいつと目を光らせてゐたが、不意に語を繼いだ。

『所が、お孃さんの戀はやつぱりお孃さんの戀さ。いざと云ふ所へ來ると急に考へ出して、例のお待ち遊ばせつて奴さ。さうして雨の降る日にこの俺を見捨てて、田舍の地主のどら息子の所へお嫁入りして了つたんだ。雨の降る日だよ。あゝ。俺は雨の降る日が大嫌ひだ。

……それから御覽の通りの惡黨になつて了つたのさ。俺だつて、この俺だつて一通は善人の時もあつたんだ。だがこの世の中では善人はいつでも貧乏籤を引いてゐる。だから成り手が少ない。少ないから貴重がられる。金剛石や骨董と同じもんさ。あれがさらに轉つてゐて見たまへ、石ころと同じわけになる。ハハヽヽ。飛んだ論理になつて了つた。

それで俺も善人を廢業したのさ。(これも一

生、あれも一生。」俺は、あの雨の降る日から、錦琪松ぢやないが、宗旨をさらりと取替へたんだよ。……だが戀人になつて見た外で、やつぱりこの世の中は面白くないね。さう思つた時俺は云ひやうのない味氣無さに襲はれる。これが眞實の淋しさ。……此道や行く人なしに秋の暮か……おーい。給仕！ コップが空だ。頓馬な奴だな。……』

　櫻井のとろんとした瞳の中にも、何かしら一杯涙が溜つてゐた。こんなに悲しさうな櫻井を見る事は富田には初めてで、そして意外であつた。富田と目が合つた時、それでも櫻井は微笑んだ。涙が一滴頬を傳はつて杯の中に落ちて行つた。

『その女は駒路つて云ふんだよ。』

　そして櫻井は杯に目を落した。

　長い沈默が兩人の間に續いた。氷雨に濡れた伯林の夜はしんしんと更けて行つた。時計の音が妙に高く聞えて來た。

　櫻井のとろんとした瞳の中には、千曲沿ひのあの物憂い灰色の雪の野道があつた。身も魂も疲れ果てた櫻井を乗せて、一臺の馬橇は鈴の音を悲しげに、黄昏迫る谷合ひの道を走つて行つたのだ。

（千曲川が悠々と殘雪を浮べて、丁度俺を案内してくれるやうに、飯山へ飯山へと流れて行く。俺はあの冷たい水底深く齒を喰ひ縛つて、上杉勢の落武者が鎧の儘、髑骨となつて横たはつてゐるのかも知れないなどと考へて、歴史的の悲哀と云ふやうなものを、ふとあの時感じたつけ。）

　方々の卓子をもう整理け始めた給仕は、時々こそこそと兩人の方を見ては、耳語き合つてゐた。

『あのう、……』

　給仕の一人が揉手をし乍らやつて來た。

『わかつてる、わかつてる。』

　さう云つて櫻井は立上つた。そして一つ殘つてゐた生卵をどしんと卓子の上に壓して、

『コロンブスの卵だ。』

　と云つた。そしてきよとんとしてゐる富田の肩に摑まつて戸外へ出た。醉つた頬に冷たい夜の氣が當つた。櫻井は長い惡夢から覺めたやうに吻とした。彼は深い溜息を吐いた。それから富田の顔を見て幽かに微笑した。

　富田には何だか此の櫻井と云ふ男が、懐かしい氣がした。かう云ふ人こそ眞實可哀さうな人なのだ。富田はしんみりとさう思つた。

　櫻井の追憶を乗せて馬橇は猶にも走つて行く。月に光つた千曲の堤、雪に埋まつたあの飯山の軒低い村通り、裏街の小川に沿つた料理屋の灯影。生れて初めて話し合つた藝妓と云ふ者。雪國の女の眞白い肌。雪の夜道を流して行く按摩の笛の音。――いろいろの想ひ出がごつちやになつて石鹼玉の中で渦を卷いた。その石鹼玉は見る間に大きくなつて行つて、やがてぱちんと破れた。

（あの町で、あの富奴に會ふ迄は、俺もまだ、今村のやうな心を持つてゐたのだ。あの女と馴染むやうになつてから、俺は泥沼に落ちたやうに、ずるずると滑つて行つて了つたのだ。あの冬の一夜、俺は魂を惡魔に賣つたのだ。通り魔、通り魔、……）

　富奴の顔が石鹼玉の中で微笑んだ。やがてそれが又ぱちんと破れた。櫻井は俄に詰まつた息を、唾と一緒に吐き出した。そして泣き聲のやうな甲高いおろおろ聲で叫んだ。

『俺に、この俺に、第一の石を投げて見ろ。馬鹿！ その中の馬鹿者！……』

　富田は驚いて櫻井の顔を見た。

『ロッテの所へ行くんだ。ウーイ。』

　兩人はいつのまにか、K、D、Bの百貨店

の角に出てゐた。あやしげな街の女が、人通りの途絶えたこの夜の街を、まるで大井川でも渉るやうに、思ひ切り裾をまくつてすれ違つた。

『プス！　プス！』

流眄がくるくると闇の中で宙返りを打つた。

富田は丁度來かゝつた戻りタクシーに櫻井を助け乘せた。

薄い白絹の寢間着を着たロッテが、びつくりしたやうな顔をして戸を開けた。そして蹌け懸つた櫻井を抱きなりに部屋へ連れて行つた。檸檬を少しコップに入れて、サイフォンを注ぐと、それを櫻井の口へ持つて行つてやつた。

『ほんとに困つた人。』

さう云つたロッテの眼には優しい光が宿つてゐた。櫻井は目尻をちよつと八時二十分過ぎと云つた恰好に下げて、たゞへゝと笑つてゐた。

『ぢや頼みました。』

富田は帽子を握つた。

『あら、お歸り？　もう晩いから泊つてらつしやらない？』

『いゝえ、大丈夫です。車が待たしてありますから。』

富田は又同じタクシーに乘つた。冷たい風が塵除けの硝子の隙間から漏れて來た。醉醒めの彼の頭の中を、又いつものやうにアニタの姿と、國に殘した妻の姿が替る替るに通り過ぎた。その度に彼の心の中では、享樂と道義心が、ロメオとジュリエット兩家の家來同士のやうに、爪を噛み、劒を拔いて喧嘩するのであつた。

ルイーゼン街の出來事

今村惠吉は一日雨に降り籠められて、浮かぬ顔に紫の葉卷の煙を絡ませて、どうした拍子か、往航の船の中で、香港迄乘り合せたあの支那の美人の事を想つてゐた。

宛轉たる蛾眉とでも評しようか、あの女は甲板の腰掛に、象牙の扇を徐ろに搖り動かして「少年ウェルテルの煩惱」とやら云ふ美しい本を擴げてゐたつけ。美人は食堂に樂を奏づる伶人の群にも、卓上に冷えて行く紅茶の煙にも、全く無關心なるものの如く、淸く涼しげな眉のあたりに、憂愁の小皺を寄せて春の宵の如く惱ましげに見えた。あの女は今頃・・・

その時、惠吉は慌しい叩音の音を聞いて、びつくりして立上つた。そこには蒼白い顔をした富田作一が立つてゐた。異常の緊張と不安の陰影をその瞳に秘めて、彼はぶるぶると震へる手に、帽子の縁を固く握りしめてゐる。彼は指された椅子に投げるやうに身體を落すと、いきなり着たまゝの外套の懷からくしやくしやに握りしめた新聞紙を取出した。

「今村君。まあ讀んで見てくれ給へ。弱つた事になつて了つた。」

惠吉はまだ今日の新聞を讀んで居なかつた自分に氣がついた。彼は默つて新聞を擴げた。そこには太い文字の三段拔きのピラミッド型で、センセーショナルな標題が附いてゐた。

「ルイーゼン街の殺人事件。淪落女優の謎の死。――犯人は同宿の女か？」と書いてあつた。

惠吉は急に眼を輝かせて、そして急いで讀み始めた。

「二日夜。ルイーゼン街三十三番館三階に於て、奇怪なる殺人事件が行はれた。同夜十一時頃、附近の人々は、帛を裂くやうな鋭い女の悲鳴に寢入りばなを醒まされて、直ちに戸を蹴り開け、入つて見た所が、同家浴室に於て、血の池と化した湯槽の中に、オリー・ハイゼなる婦人の慘殺死體を發見

したのである。傍には同宿人のアニタ・ミュッラーと云ふ婦人が、精神喪失者の如く打ち伏してゐた。彼女は一同を見ると同時に卒倒して了つた。直ちに醫師の手當を受けた。

一方オリーの死體は檢視の結果亞砒酸を多量に飲まされたものの如く、しかも左乳下には鋭利な短刀を突き差してあつた。附近の者の言に依れば、初め絶え絶えに苦悶の聲を聞いたが、誰か病氣にでもなつたものと、別に氣にも懸けないでゐた。すると突然續いて二聲の異つた、けたゝましい叫び聲が起つたのであつた。その一つは明かにアニタの聲であつたさうである。

アニタは病院で直ちに蘇生したが、まだ恐怖の餘り精神に異常を呈してゐるやうで、何事かを口走りつゝ、打ち笑ひ居る有樣である。

一方アレキサンダー廣場から出張した探偵は、アニタを有力なる犯人と目して居るものの如く、初め毒を混じ、然る後これを裸體にして湯槽に入れ、且つ短刀を突きさして、自殺の如く見せかけたものであらうと云ひ、精神錯亂も或ひは狂言かも知れないと云つてゐる。いづれにもせよ、アニタの常態に復するを待つて事件は意外の發展を見るかも知れない。」

惠吉はもう一枚の新聞を擴げた。それは今しがた出たばかりの「正午新聞」であつた。やはり大きな標題の下に、略同樣な記事がその後を一層詳しく次のやうに出てゐた。

「……病院に入つたアニタは稍々常態に復したので、直ちにアレキサンダー廣場の警察に拘引された。彼女は極力殺人を否定し、自殺説を主張してゐたが、警察側の意嚮は彼女を眞犯人とする點に一致してゐる。

同家には二人切りで同居してゐたのに、アニタがオリーの苦悶を、もつと早く氣づかないと云ふ事もないし、門の開いた音を聞いた者もないのでアニタが歸りたてと見る事も出來ない。それに同日朝、臺所で兩人が何やら口論をしてゐた所を見たと云ふ人も出て來た。且つ、オリーの胸を刳つた短刀は、アニタの所持品なる事が判明した。

兩人は當から賣淫を業として居た者で、時折、夜分晩く一人の日本人の客を連れこんで來た所を見受けた人もあり、或はこれに絡まる嫉妬の結果なるやも知れない。

猶ほオリーの部屋には一包みの荷物が發見された。その中には背廣、ネクタイ、ワイシャツ等、男子用の持物が一通り揃へてあつた。或ひはその日本人と携へていづくかへ行からとしたのを、アニタが感づいてこの兇行に及んだのかも知れない。

とまれ同事件は益々迷宮に入るの感かある、猶ほ日本人某は證人として召喚される模樣である。……因にオリーは以前ハンブルヒの有名なる踊子であつたが、その後諸所を流浪し、終に淪落の女の群に入つたものである。云々。」

惠吉は眼を上げた。彼の讀み終るのを待ちかねて、富田が口を切つた。

「あんた。そんなわけで、今どうしようかと思つて大困りなんです。こんな事が公にされて國元や社の方にでも知れたらそれこそ、大變だ

し、嫌疑が懸るやうぢや猶更だし、どうにか手上く塗り潰す法はないでせうか？ あんたは法律家だから、誰かこつちの辯護士にでも御懇意があるかと、さう思つて、それで實は今日お相談に上つたんですが。……濟みませんがね、今村さん。……』

　富田は歎願するやうに、惠吉の顏を見上げた。

『ほらついこの間、東洋館で櫻井君の隣りに坐つてゐたでせう？ あの痩せぎすな、すらりとした女ね、あれがオリーなんです。もう一人、黑の天鵞絨の帽子を冠つてゐましたね、私の隣りにゐた女、あれがアニタです。……』

　富田は獨りで說明した。そして獨り言のやうに呟いた。

『身から出た銹とは云へ、今度と云ふ今度はつくづく目が覺めましたよ。』

　さう云つた富田の顏には困惑の蔭にかくれて、悔恨の情が氣の毒な程、はつきりと讀まれるのであつた。

　惠吉は時々、法律の本のわからない所などを敎へて貰ひに行つてゐた、ドクトル・バルマーと云ふ若い辯護士を知つてゐた。とにかくその人に相談して見る事にしようと云つてやつた。富田は、それでも安心したやうな面持で歸つて行つた。

　惠吉はぼんやりとした記憶の中から、富田の云つたオリーと云ふ女の顏を拾ひ出してゐた。櫻井と並んで妙な手付で日本の箸を撮んで、淋しさうに、それでも大仰に可笑しがつて笑つてゐたあの女の顏を。――深く冠つた帽子の下に、白粉と紅の化粧の蔭に、さう云へば死相があつたのだ。

　午後からハンスが訪ねて來た。いつものやうに、散々愚痴を滾してから、かう云つた。

　私は今迄、不當に取扱はれてゐるエンミーの爲に、あの母親の不公平な愛情や態度に楯を突いて來た。が、それは、考へて見ると、消極的の方法であつた。私は知らない間に母親のその傾向を募らせて行つたのだ。それでは益々エンミーが可哀さうなものになつて了ふ。親は、親であると云ふ偶然的事實の爲にのみ子供の人格を無視して迄も絕對的の服從を要求し得ると云ふ思想が、はたしていつ迄續くか私は知らない。が、子供が、その親らしからざる親に對してさへ、深い愛を感じ得ると云ふ事は、恐らくいつの世に迄も通ずる眞實であらう。私は思想を以て、云ひ代へれば智を以て、情を掩つてゐたのだ。私はこれから少し自分の考へを殺して、エンミーの眞實の心が母親に通ずるやうに努めてやらなければいけない。そしにエンミーに對する母親の愛情を、積極的に成長させて行かなければいけない。それにはエンミーに對して表面に冷淡を裝ふ事だ。そしてエンミーの自分に對する冷淡さを許してやる事だ。何故ならば兩人の仲の良いと云ふ事が母親の愛を遮つてゐるからだ。しかしエンミーは私のこの心の變化を正當に理解してくれるかしら？……

　そんな事をハンスは言つた。

　エンミーはまるで他人の爲にこの世に生れて來たやうなものだ。母親に對して良い子にならうと云ふ心が一杯で、母親の氣持にばかり拘泥して、そしてこの私の氣持は全く考へてくれる閑暇がないのだ。

　私は友達の妹と口を利くのさへ氣をつけてする。若しもどんな機會からして、他の女に變な心持でも懷かせるやうな事があつたら、それはエンミーに對して申し譯がない事だと思つてゐる。だから私は未婚の令孃達と話をする事は心苦しい。喩へて見れば皆んなしてふざけてゐる時に、手相を見るとする。そんな場合で

も私はエンミー以外の女の人の手は冗談にも握れないのだ。——それ程彼女を愛してゐる私なのだ。……

ハンスは、たつた今云つた殊勝な決心の下から、もう直ぐにこんな愚痴を滾してゐた。

エンミーが、私達兩人の仲よくする事を妙に避けるのは、姉のアンナに對する氣兼ねかと思つてゐた。それならばそれで良い。もう間もない事だからと思つてゐたのに、その氣兼ねは母親に對する氣兼ね、世の中に對する氣兼ねである事に氣がついた時、私の心は深い絶望に蝕まれる。エンミーにはいつ迄經つても「兩人つきり」と云ふ暢氣とした幸福は味はれないのかしら？　それが私の充たされざる或るものなのだ。……

ハンスは濕つた枯葉の焚火のやうに、縷々として語り續けた。

惠吉はエンミーの心持は東洋的の思想だ、日本人にはまださう云ふ多くの女性を見出す事を話してやつた。他人の爲に身を犧牲にする事は美しい事ではないか、とも云つた。

それは美しい事かも知れない。しかし他人の爲に何かする。他人に與へると云ふ前には、先づ自分と云ふものを立派にする事が大事ではないか。自分の出來てゐない者がいくら他人の爲を思つたつて、結局何一つ出來るものではない。電燈が光る前には充電が必要だ、佛陀だつてあの偉大な教を人に施す前には、數十年世と絶つて、「自己」の修行を積んだではないか。一體あなた方東洋の人達は、家族と云ふ事を餘りに重く見過ぎてゐる。そして個人とか社會とか云ふ事を無視してゐる。親兄弟の氣持ばかり氣にして自己の完成と云ふ事を犧牲にしてゐる。それは美しい事かも知れないが、そのうちに個人の修養は忘れられて、從つて社會の標準は下つて行く。私はエンミーが東洋的の消極的道德に捉はれてゐる事が悲しい。

ハンスは勝手に自分の頭に理想郷を描いて、それと合はない世の中を罵つてゐた。惠吉はハンスが頭から貶し去つた日本の家庭制度の、理窟の上に超然たる美しさをすつかり話してやりたいやうな氣もしたが、どうせそんな事は、下戸に酒の味を語るのと同じ事で、口で話したつてわかる譯でもない。するだけ徒勞な事だと、さう思つたので默つて笑つてゐた。

「それに、私、近頃非常に憤慨した事があるんです？」

ハンスが思ひ出したやうに憤慨した。

「どうしたんです？」

「あすこの家の人達が、私がエンミーぢやなくて他に誰かを望んでゐるんぢやないかつて、疑つてゐるんださうです。」

「ハハヽ、君。そんな事は疑ふ奴に勝手に疑はせて置けば良いぢやないか。人間つて者は自分の心で、他を推す。だからそんな事を疑ふ奴は、自分がそんな場合にはやつぱりさうだから、他人もさうだらうと疑ふので、知らない間に自分の醜さを廣告してゐるやうなもんぢやないか。自分から自分の人格を下げてゐるのだ。掏摸は誰でも他の人が掏摸に見えてしやうがないと云ふ事だ。とに角、君、自分さへ清ければそれで良い。」

「それでも、老人と違つて、これから大いに世の中に立つて活躍しようと云ふものには、名前が大事ですからね。それでなくても、けちを附けたがる世の中ですもの。……お金、お金つて誰實に不愉快です。まるでスチンネスかクルップにでもなつた積りでゐるんだ。」

「お金の他に自分の力のない男には金の大事なのも無理はないさ。何故つて、人が金に對する執着は、その人マイナス金イコール幾らつて云ふその答へに反比例するものだからね。これ

は君、限界效用說より餘つ程確かな公式だ。さう云ふ人にとつてお金のなくなると云ふ事は、自己のなくなる事だからね。自分に力を持つてゐる者は、結局自分の身體に貯金してゐるやうなものだもの。暢然できるぢやないか。お互にさう云ふ人間になる事だね。』

『實際、無禮な人達です。一體あゝ云ふ連中は禮儀と云ふ事を何と思つてゐるのでせう？　眼下の者がする諂ひとでも思つてゐるのでせうか？　私達が他人に向つてなるたけ丁寧にするのは自分が又それだけ丁寧にされたいからなのです。禮儀と云ふものは、この世の中のあらゆる人間と人間との間を如何に氣持よく、滑らかにするかと云ふ一種の磨擦よけです。所が、こつちが丁寧にすればする程、附け上つて横柄になつて行くのは無敎養者の常です。經濟的優越を利用して人の魂を買はうなんて事は、最も卑怯な卑しむ可き行爲です。實質なき所に尊敬を要求する、何と悲慘な喜劇、何と笑ふ可き偶像崇拜ではありませんか。……私も大いにやりますよ。あらゆる意味で彼女を幸福にしてやりますよ。えゝ、きつと。』

ハンスは獨りで昂奮して、そして喋れるだけ喋ると、氣も樂になつたのであらう、使命を投いて貰つた人のやうに、さつぱりとした顏をして歸つて行つた。

翌日早く富田から電話が掛つて來た。

「昨日はどうも失禮しました。實は家宅搜索の結果、アニタに宛てたオリーの遺書が發見されて、オリーの死は全く自殺であつた事がわかつたのです。アニタは今晩放免になる事になつてゐます。アレキサンダー廣場へ迎へに行く心算です。そんな譯でいろいろ御心配をお掛けしましたが、どうぞ惡しからず。いづれ御面會の上委しく申し上げます。どうぞこの事は誰にも言はないで置いて下さい。――とそんな事であつた。惠吉は何がなしに、なあんだと云つた氣がした。

惠吉は愈々決心して歸る事にした。丁度シベリヤを經由して歸る團體の募集があると云ふので、樣子を尋きに行かうかと思つてゐた。そこへひよつこり山田の兄妹が訪ねて來た。その晩は少し氣分が惡いと云つて、家にゐると云ふ事であつた。伊太利の方から友人がやつて來たから、一緒にフリードリッヒ街でも散歩して、晩飯を共にしようと云ふのである。

その友達が戶外に待つてゐると云ふので、惠吉は、直ぐ外套をひつ掛けて、三人は戶外へ出た。そこで彼は細谷と云ふ山田の友人に紹介された。瀟洒な服裝に、まだ薄い外套を着て、金持らしい餘裕を、その面長の顏に見せてゐた。美術の評論をやる人だと云ふ事であつた。

小雨の霽つたフリードリッヒ街の濡れた鋪道の上を、忙しさうに往き來する人々が、それでも自然右側通行の規則を守つて、默々と影法師のやうに續いて行く中を、惠吉は默りこくつて步いて行つた。

山田と卯女子とそれから細谷の三人が、二三步前を陽氣に笑ひ乍ら話し合つて行く後姿を凝視めて、彼は妙に頑固に押し默つてゐる自分を淋しくも意識し乍ら、それでも、どうしやうもなく、やつぱりそのまゝ引き摺られるやうに從いて行つた。

細谷はしきりと伊太利の旅行談をやつてゐるらしかつた。

「伊太利の魅力はもう過去の廢墟の中に眠つてゐるね。現今の伊太利に對しちや僕は全然幻滅

の悲哀を感ずる。伊太利の美には、實に追憶と聯想の中に生きてゐる。羅馬のコロセユム、フローレンスの美術館、ポンペイの廢墟、さう云つた昔の夢に耽する憧憬が良いのだね。今の伊太利人のどこを押したつて、ダンテやダヴィンチの血は流れてやしない。乞食と掏摸、それからファシスト、それが今の伊太利だ。埃だらけの路傍に干したマカロニを見たら、もう食べる氣も出なくなる。紅燈搖めく謝肉祭の夜を想はせるあのベニスのゴンドラ遊びも、泥臭い川の水を見たらがつかりする……』

こんな工合に細谷はしきりと今の伊太利を罵倒してゐるらしかつた。三四人の人が惠吉と三人達の間を遮つた。

「どうしたのね？』

卯女子が振返つて聞く。惠吉はちよつと笑つて少し足を速めるが卯女子が又前を向くと、そのまゝ彼の口邊からは丁度青空に上る煙のやうに、笑ひの影がすうつと跡かたもなく消えて行つて了ふのであつた。彼の心は何とも知れない考へに鎖されて、譬へば石を抱いて古沼に飛び込んだ人のやうに、藻搔けば藻搔く程益々重く沈んで行くばかりであつた。

薄暗の夜の家並には、ずうつと灯が入つてゐた。濡れた道がキラキラと光つてゐた。

この街の浮はついた賑やかさと、細谷の屈託のなささうな態度が、ふと彼の心に暗い陰影を投げたのである。あの銀座の夜の魅力を彼は今ぼんやりと想ひ浮べてゐた。

眞實ならば新歸朝者としてその華々しい姿を横濱の埠頭に現はす筈なのに、そこにはたゞ焦げ臭い焦土が彼を待つてゐる。街も家も皆變つて了つてゐる。たつた一つ變らないのは、それは卯女子の心だけである。そして彼の傷つける心は、そこに温かい避難所を見付けて、あらゆる悲哀を、――家を失つた事、一家離散の厄、物質上の不自由等を、その中に溶かしこんで、あきらめの辛い修行の助けとして來たのだ。少しの隙を見付けては頭を持上げようとする憂鬱心を、彼は卯女子の明るい微笑に押し隱してゐたのであつた。

所が、かうやつて今歩いて行くうちに、あたりの風物がどうした機會か、ふと彼の心に潛んでゐる悲しい想ひに觸れたのであつた。

『それでも伊太利の女には、君、これで中々氣持の良いのがゐるよ。……』

細谷の聲が又風の加減ではつきりと聞えて來た。惠吉は少し足を速めた。

――夏目さんの「彼岸過まで」だつたかね、あれに出て來るダヌンチオとハンケチの逸話なんて面白いな。君、橄欖の香高い南國の少女にも、秋霜の凜たる氣概が見えて嬉しい氣がするぢやないか？』

やがて細谷が自分の話で思ひ出したやうに、ハンケチを買ふと云ふので、皆んなはとある雜貨店に入つて行つた。

店頭には今方流行の、網編みのネクタイが、いろいろの新柄の好みを見せて、器用に飾られてあつた。その中の一つが、たまらなく惠吉のファンシーを捉へたのであつた。彼はそつと定價の紙をひつくり返して見た。そこには二十金貨馬克也、と書いてあつた。彼は默つてその札を落した。前の鏡に映つた自分の顏が、ぽうつと赤くなつたやうな氣がしたのである。

（あの銀座の街を、要りもしない買物の紙包みを三つも四つも抱へこんで、安藤七寶店の裏通りにあつた、獨逸人の出してゐるカフェ・オイローハで、牛の目玉、――あの菓子は美味かつたものだが、――を食べる自分であつた。自家の帳場の抽斗から十圓札を出して來て、「ネクタイ一つ。惠。」と出入帳に書きつけて置けば、それで良いのだ。それが、此頃の俺は雜誌一つ

にも首を捻るのだ。）

『一體いくつ頭があるのだ？』と時には親父に厭な顏をされ乍らも、フエルト、ソフト、麥藁、鳥打、中折、とやたらに田屋の店に入つて行つたあの昔の事を、――さうだ、眞實に昔の事だ。――想ひ浮べて惠吉は暗然とした。

（あの顏馴染の愛嬌の良い田屋の小僧はまだゐるかしら？）

明るい店内の燈火の下に、まるで十八日の床屋のやうに混み合つた多勢の客が、いろいろのレースやらリボンやら要りもしないものをさも重大な事か何かのやうに、夢中になつて選り合つてゐる樣を淋しく眺め乍ら、彼は牡蠣の如く默りこんで考へてゐた。

『これ、良いわね、惠さんはどう？』

と、レースを見せ乍ら卯女子が尋いた。男の彼にこんな話を相談しかける卯女子の心は、ようく彼にはわかつてゐた。山田の顏に暗い陰影がチラッと掠め去つたのも彼は見逃しはしなかつた。

（困るなあ、そんな陰氣な顏をして。細谷君に惡いぢやないか。）そんな顏付であつた。

『良いですね。粹で上品だ。僕の趣味のモットーですよ。ハハヽヽ。』

强ひて陽氣に笑つて惠吉はさう云つたが、その空虛な自分の聲が一層彼の心を淋しくした。

出しなに惠吉は、もう一遍ネクタイを觸つて見た。柔らかい、氣持の良い手觸りだ。

もう一軒の店の前を通つた時、冬帽子だの、純白の薄い絹の襟卷だの、氣が利いて飾られた飾窓に吸ひ付けられるやうに彼の足は緩まつたが、氣がついた時、皆はもう四五間も先に步いてゐた。彼は狼狽てて追ひついた。時々卯女子が振返つて笑顏を見せた。

（どうしてそんなに詰らなさうにしてらつしやるの？ もつと陽氣になさらない？）とその眼付が云つてゐる。惠吉は氣の毒な氣で一杯になるのだが、さてどうしやうもない自分に氣がついて、相變らず押し默つてゐる。

牛酪を買ひに皆んなは食料品屋に入つて行つた。チョコレートを買ひませう、さうさう、珈琲も、もうなかつたわ、などと後から後からいろいろの買物を思ひ出しては笑ひ合つてゐた。惠吉は硝子の棚の中に「牛の目玉」によく似た菓子があるのを見てゐた。いろいろの硝子壜のキャンデーの向うから卯女子がこつちを見てゐた。

その時急に電燈が消えた。

『停電か？ おいクーペ！ 蠟燭だ。』

そんな聲が薄暗の中で頓狂に響いた。

（いつの間にか暮れ果ててゐたのだ。）

惠吉は出口の所へ步いて行つて、ぼんやりと薄暮の街を眺めてゐた。乘合自動車の燈火の忙しい交錯の中を、黑い人影が默々と往來してゐた。さすが繁華の盛り街である。友引の翌日に火葬場へ行つたやうな雜沓である。

蝙蝠の低く飛ぶ築地の家から見える、あの異人館の夕方の景色がぼんやりと惠吉の頭には浮んでゐた。川端の柳の新芽に絡まる微風と立教の塔の上に沈んで行く眞紅な夕陽の名殘りと、．．．

電燈が點いて、皆んなは又通りへ出た。明るく照明された雜貨店の飾窓に、又綺麗なネクタイが小さな衣桁に掛けて飾られてゐた。彼は何の氣なしに立止まつた。卯女子も立止まつた。

『どれがお好き？』

『さうね、左から三番目が良いかな。』

『さう？』

『おい、早く行かう。腹が空いた。』

その時、しかし、山田が四五間先で促した。兩人は默つて後を追つた。卯女子も淋しさうに惠吉の顏を見上げた。

惠吉の陰氣さにひきこまれたのか、或ひは歩み疲れた所爲なのか、皆んなの間にはまづい沈默が續いた。卯女子の眼が時々惠吉に何事かを訴へてゐる。彼にはそれが良くわかる。それだけに惠吉は辛い氣がした。

（眞實に濟まない事だ。間に立つてあんなに氣骨を折らせて。それに又俺は何と云ふこせこせした事に拘泥つてゐるのだらうか？）

がしかし、どうにもならない彼の心であつた。

（道化師ではない。）

いつの間にか地下鐵道の停車場を通り越してゐた。絲や手藝品を賣つてゐる店の前で、ふと、卯女子が立止まつた。

『私、ちよつと買物があるのよ。』

さう云つて入つて行つた。

『僕も釦を買ふかな。』

細谷が、そして山田も亦入つて行つた。惠吉は獨りで表に立つたまゝ、ぼんやりと街の灯に見入つてゐた。そのうちにその一つ一つの灯が、丁度觀劇眼鏡のピントが段々外れて行くやうに、ぼうつと霞んで行つたかと思ふと、すぐ前を通る人の顔が浴室の鏡に映る影のやうにぼやけて見えた。

その時ふと、彼の耳には、店の中で番頭に話しかけてゐる卯女子の聲が夢のやうに聞えて來た。

『あのう、薄い紫が良くつてよ。ネクタイを編むんですから。……』

惠吉は振返つて店の中を見た。細谷は夢中で革の釦を選り分け乍ら、山田に相談しかけてゐる。大方毛皮の冬外套にでも着けるのだらう。お腹の空いた山田は氣のなささうに點頭いてゐる。卯女子は脇の方の番頭にそつと絹絲の箱を出させてゐた。

惠吉の眼の中は何故か急に熱くなつたかと思ふ間に、もう玉のやうな雫が、自分乍ら可笑しいと思ふ程、ぽたりぽたりと頬を傳つて流れ落ちた。しかし、それはたつた今迄彼の胸を一杯にしてゐたあの涙とはまるで違ふものであつた。

彼は涙で洗はれた明るい心になつて行く自分を顧みた。結ぼれの解けた彼の顔に、心地よい夜の風がやはらかく吹いて行つた。

雲を割つた星影が一つ、青く澄まつた夜の空に、淋しい永劫の光を放つてゐた。いつもなら蝗のやうに飛び出して來て、いきなり手を組んだり、ハロウ・アナター、などと日本語で呼びかけたりする街の女も、婦人の伴侶があるので、今日はたゞにやにやと笑つてゐる丈であつた。

（淫賣婦の眼は皆んな泣いてゐる。）

惠吉の頭にふとそんな警句じみた言葉が浮んだ。

片足の盲目の乞食が、胸に「まる盲目」と書いた札をぶら下げて、この人混みの街の軒邊にしよんぼりと立つてゐた。もう色の褪せ切つた緑色の軍服を着て、燐寸を賣つてゐた。その顔に刻まれた深い小皺の間にも、痲痺し切つた人の世の疲れがまざまざと讀まれるのであつた。

山田は燐寸を買つてやつた。

『僕は、なる丈あゝ云ふ男から買つてやる事にしてゐる。あゝやつて皆戰爭の結果なんだ。政府はあゝ云ふ者を救ふ力がないのだね。愛國心などと云ふものは、一旦燃え熾るときは、皆んなその焔の中にあらゆる他の感情を燒き盡して了ふけれど、その焔が一度消えたとなると、たゞ慘憺たる灰が殘るばかりなのだ。獨逸は今その灰の中に蹲つて塗炭の苦しみを嘗めてゐるんだね。僕達は少し考へる必要があるね。何か新しい燃えない愛國心。そんなものが欲しいやうな氣がする。』

『僕は伊太利で散々不愉快な乞食を見てゐるから、乞食に對しては全然同情はないよ。ポッカチオが乞食に化けて、犬を連れて、その首に、

「まる盲目」つて札を今の男みたいにぶら下げてゐたんださうだ。皆んなが錢を投ると、彼はさつさと拾ふ。皆んなが、お前眼が見えるぢやないか、と詰ると、ヘイ、實はこの犬が盲目なんですつて云ふ所があるだらう？　實際そんなのが居るんだよ。「私は唖で聾だ。」つて札を掛けた乞食に、お前いつから片輪になつた？　と尋いたら、ヘイ、生れた時から、つて答へた乞食があるつてぢやないか。

　話は違ふがこの間、モーアの小説を讀んだら、寒風に吹き曝された川端の路にしよんぼり立つてゐる盲目の乞食を見て、生中施しなんかして、あの男の慘めな生を續けさせるよりは、いつそ一思ひにあの川の中に突き落してやつた方がはるかに慈悲深い事かも知れないなんて考へた、或る男の氣持が書いてあつたが、僕なんかも時々そんな氣がする。』

　細谷がそんなことを云ひ出すと山田は少しむきになつて反對した。惠吉も口を出した。

『私は又乞食と云ふと定つてあのドストエフスキーの逸話を思ひ出すんですがね。何でも彼が巴里にゐた時の事、ひどい貧乏に苦しめられて、二日もパンを食べずに、火の氣のない暗い寒い部屋の中に燻つてゐたのださうです。そして夕方になると、餘りの淋しさに堪へかねて、あの人の癖で、あてもなく夜の街を彷徨いたのです。すると、とある街の小暗い軒蔭に一人の見窄らしい乞食がしよんぼり立つてゐて、しきりと通りすがりの人達に憐みを乞うてゐたものですね。ドストエフスキーはどうしても、そのまゝ默つて通り過ぎる事が出來なかつたのです。彼のぼろぼろのズボンのポケットの底は穴が開いてゐる位で、もとより一サンチームの金も入つてはゐなかつたのです。彼はづかづかと乞食の傍へ寄つて行きました。そして話しかけた。

（兄弟よ！　さあこゝに私の手がある。）

　さう云つて彼はその乞食の手を固く握つてやつたと云ふ事です。乞食の眼には熱い涙が光つてゐた。これがその男の一生の中で一番温かい施物であつたのでせう。僕はこの話を想ふ毎に彼の作物の到る所に現はれて來る、温かい人間味を感じないわけには行きません。』

　そして最後に山田がモーパッサンの短篇に出て來る、豚に食べられた乞食の話をすると、乞食に對する皆んなの知識と感情は一段落をつけたのであつた。

　四人は人の流れに連れてライプチーゲル街を右に折れた。やがてケンピンスキーの明るい部屋の中に入つて行つた。惠吉の氣持はもうすつかり晴れてゐた。雨上りのやうな清々しい氣持で彼は陽氣にライン酒のメートルを上げた。卯女子はそれでもにこにことして聞いてゐた。

　山田は「八時新聞」を開けて歌劇の出しものを探してゐた。

『ワグナーが良いよ。折角伯林へ來たんだから。』

　細谷がおいしさうに馬鈴薯を食べ乍ら云つてゐた。

　丁度その時刻、富田はアレキサンダー廣場の警察署の、重苦しい石造の建物の中に入つて行つた。薄暗い電燈の點火された、長い冷たい廊下を、彼は憑かれた人のやうに歩いて行つた。自分の陰影が長く壁に搖めくあたりに、異樣な寫眞のやうなものが、ずうつと貼られてあつた。彼は何氣なしに見た、それは身元の不明の變死人、行倒れ、溺死體、他殺體、さう云つた人々の寫眞であつた。

　青膨れに膨んだやうな顏、白眼をぼうつと開かせた女、中には男女ともつかぬのもあつた。富田の襟には、長い廊下の向ふ端から吹いて來る

寒い風が、氣徹しの所爲か腥く、ぞつと滲みこんで行つた。この大きな建物のどこかの部屋に、これらの死骸がごろごろと置かれてあるのかと思ふと、何とも云へない薄氣味惡さに襲はれるのであつた。

幌を深く下した辻馬車の中に、富田はアニタと並んで腰掛けてゐた。こんな晩に一人であの家へ歸るのは厭だから、今夜一晩泊めてくれ、と云ふので富田は自分の家に向はせた。

幌に射抜いたセルロイドの窓から街の燈火がチラチラと踊つた。アニタは吻とした樣に語り出した。

『あの日、妙にオリーが他事々々しく一人で何か包みを拵へたりして、どこかへ出掛けようとするのでせう。私も今迄あんなに、まるで姉妹のやうにして來たのを、餘りだと思つて、二言三言怨んで見たのです。そして兩人は別々に出掛けて了ひました。そして私はさう、十一時頃でしたらうね、一人で歸つて來ましたの。私は度々さうするやうに、裏梯子を上つて、勝手口から入つて行きました。家の中はしんとして眞暗でした。私は瓦斯燈を點け乍ら、まだオリーは歸つて來ないのかしら？ 一體何處へ行つたのかしら？ とそんな事を考へてゐました。

すると、どうしたわけか、蟲の知らせとでも云ふのでせうか、ぞうつとした寒氣と共に私の頭には何かしらん不吉な豫感が、濡れ紙に落ちたインキのやうに擴つて行つたのです。私は直ぐ蠟燭を持つてオリーの部屋に入つて行きました。机の上には朝方の風呂敷包みがそのまんま載つてゐました。

（それでは一遍歸つて來たのか？）

さう思つてオリーの部屋を出ようとした時、私はどこからともなく、から、人の呻くやうな聲を聞いたのです。それは細く、長く、切れ切れに、靜かな夜の中に聞えて來るのです。私は何だか、水のチャブチャブする音を聞きました。私ははつとして、立竦んで了ひました。

その瞬間、私の耳にはけたゝましい悲鳴が、あたりの靜寂を破つて、突然響いて來ました。

（オリーだ！）

私は直感的にさう思ひました。それは風呂場の方からでした。私は蠟燭の火が危く消えさうになる程飛んで行きました。私が風呂場に入つた時、私は何を見たのでせう。そこには脱ぎ捨てにされたオリーの着物や下着が、椅子の上から床にかけて、ばらばらに散らかつてゐました。そして、……

私はあの時の幻影を想ひ出すと今でもぞうつと、水でも浴せられたやうな氣がしますわ。さうだ。眞實に幻影だ。それが現實であると知つたのは、ずうつと後の事ですもの。

私の目の前の湯槽の中は、一面に赤い血で染つてゐました。そしてその中にオリーが、あの朝迄私と話をしてゐたオリーが、生白い痩せた身體を横たへてゐます。何とも形容の出來ない無氣味な色をした彼女の股が長く伸びてゐる。ナイフの先が少しばかり、まだ波紋のをさまらない血の水の上に震へてゐる。髪の毛が水藻のやうに浮いてゐる。

私はいきなりそこへ倒れ伏して了ひましたの。そして聲を上げて泣いたのです。そのうちに妙に、私の頭は落着いて來ました。すると、私の目の前には、美しい小川がチョロチョロと流れてゐます。その河畔には綺麗な色をした草花が爛漫として咲き亂れてゐます。透き通るやうな水の底に、私はオリーの姿を見ました。手を組合せて、そしてその蒼白い顏――と云つても決して氣味惡くはない、それは透き通るやうな、丁度月夜の庭にアラバスターの像でも見るやうなその顏に、穩やかな微笑が浮んでゐる。

と、そのうちにオリーの顔はいつの間にかあの「ハムレット」の芝居に出て來るオフェリヤの顏になつてゐるのです。……

それからどうしたか私も知りません。氣がついた時、私は白い寢臺の上に寢かされてゐました。私の周圍には白の診察着を着た御醫者さんとそして嚴めしい顔をした刑事が立つてゐましたの。……』

アニタは心の中にその恐ろしい幻影の後を追ふやうにぢいつと一所を凝視めてゐた。

『で、私は癒ると直ぐ、自動車に乘せられて、病院からあの警察に引つ張られて行きましたの。……』

やがて彼女は又語り續ける。

『あすこで、私はいろいろの事を訊かれましたわ。どうして殺したのか？　とか、眞實の事を言はないと、死刑になるかも知れない、などと脅かされもしました。そして私はあの暗い留置所の中に投りこまれて了つたのです。何と云ふ恐ろしい一夜を、私はそこで明した事でしたらう。今考へても身の毛がよだつやうな氣が致しますわ。

その部屋には、私と、もう一人の女が入れられてゐました。ウエルトハイムの百貨店で、銀の匙を萬引して、引つ張られたんですつて。兩人は差入れられた黑パンを噛つて、水を飲みました。私は半分も食べられませんでした。その女は私の殘りのパンをくれと云つてそれを食べると、間もなく、まるで自分の家か何かのやうに、ぐうぐう寢こんだやうでした。

燈火は勿論ありません。板張りの棚みたいの上に、薄い毛布をひつかけて、私も横になりました。夜の冷えがしんしんと身裡に迫つて來ました。番人の跫音が重く廊下の外れに消えて行きました。高い所に一つ開けられた、鐵格子の窓から、青白い月明りが流れこんで、それが丁度向うの棚に寢てゐる同室の女の顏に當つてゐるのです。女はすやすやと寢てゐます。輕い鼾が漏れて來ます。

その時、私は、はつきり水を掻き廻す音を聞いたのです。

（チャブ、チャブ、……チャブ、チャブ……）

アニタはもう一遍その音を聞いてでもゐるやうに、目を瞠つて耳を澄ましてゐる風に見えた。

『あゝ、厭々。トミタ。幽靈つて、眞實にあるものかしら？　あるのだわね。私、現にこの目で見たのですもの。

水の音は暫く聞えてゐました。私は夢中になつて耳を押へて、毛布を頭からすつぽり冠つて了つたのです。それでも駄目でした。

（チャブチャブ、チャブチャブ……）

それはどこからともなく聞えて來ました。私はもうとても我慢がし切れなくなつて、寢てゐる女を起さうと思つたのです。そして棚の上に起きなほつて、女の顏を見た時、私は思はず、キャッと叫んで了ひました。

月に照らし出されたその女の顏の色は、蒼白く、痩せ衰へたオリーの顏だつたのです。私は又いきなり毛布を冠つて了ひました。番人の重い靴の音が、廊下に冷たく響いて來ました。私は餘つ程、番人を呼ばうかと思つたのでしたが、又自分の氣の所爲でそんな事の爲に、餘計嫌疑を増してもいけないとさう思つたので、危く咽喉迄出かゝつた叫聲を、ぐつと飲みこんで了つたのです。すると又直ぐ口元に出て來る。飲み込む。かうやつて私は何度、叫聲を反芻した事でせう。夜の明ける迄の數時間が、私にとつては、それこそ百年のやうにも思へたのです。あの晩の恐ろしい經驗を、私は決して忘れはしませんわ。』

さう云つてアニタは口を噤んだ。馬車は今、ティヤガルテンの鬱蒼たる森の下道の、黑玉の

やうな闇を走つてゐた。馭者臺の脇に點いた薄暗いランプの光が、アニタの顔を横に照らしてゐた。僅か二三日の間に見違へる程憔悴したその顔の上には恐怖の陰影がまざまざと讀まれるのであつた。ぢいつと見てゐると其の顔が又、段々オリーの顔に見えさうになつて來た。富田はひやりとした。全身の毛穴がぞうつと開いたやうな氣がした。水のやうな寒氣が身體中に流れて行つた。

「私、どうしたら良いでせう？　こんな事がオットーの耳にでも入つたら、まあどんなにね、……」

「だつて、まだ三つか四つの子供ぢやないか。だが早く育兒院の人に手紙を書いてやると良いよ。絶對に默つててくれつて。」

兩人は默つた。各々の頭の中には別々の考へが渦卷いてゐた。アニタはドレスデンに殘してある可愛いオットーの事を考へてゐた。もうそろそろいたいけな口を利く事だらう。そしてアニタは自分の今迄の過去を見やつた。暗い霧に包まれた灰色の道を振返つた。そしてタイプライターの事を考へた。マクダレナの事を考へた。

富田は又彼で、何と云ふ事もなしに、國に殘して來た妻の事を考へてゐた。そして、今日は又その妻が、馬鹿にはつきりとしてゐるではないか？

（世の中はまるで床屋の中みたいだ。背後でこそこそやつてゐても皆んな見えて了ふのだ。）

富田はそんな事も考へて、怖ろしい氣がしてゐた。

二つの假面

惠吉と卯女子は愈々年内に伯林を立つて、シベリヤ經由で歸る事にした。日本人倶樂部へ團體加入の申込みをしてから、兩人はブショールブロイのビール店で晩飯をたべた。新聞賣の婆さんが、「八時夕刊！　八時夕刊！」と呼び乍ら卓子の間を歩いてゐた。惠吉は早速一枚買つた。オリーの事件が何か出てゐるに違ひないと云つた好奇心が、お腹の膨つた頭に働いてゐた。

そこには果して「事實の小說」と云ふ標題の下に、彼女の家で發見された、オリーの遺書が載せられてあつた。惠吉はそれに依つて初めて彼女の奇しくも悲しき薄命の一生を知つたのである。

話はこんな風に始まる。

オリーはハンブルヒ全盛の踊子であつた。彼女の樂屋はいつでも香り高い花環で滿たされてゐた。若い金持の青年達は、彼女に指輪と御馳走を捧ける事を唯一の光榮とも、或ひは又唯一の生存理由とも心得てゐた。彼女の豐艶な軀の上に、幾人の戀人の遣瀬ない吐息と共に、熱い接吻の注がれた事であつたらう。

彼女は或る年取つた金持の思ひ者になつてゐた。そして一夏をその別莊のある海岸の一漁村に暮したのであつた。華やかな都會生活に倦滿してゐた彼女は、そこでふとしたムラ氣から土地の若い漁夫と戀に落ちる。

或る麗らかな日和、兩人は海岸にそゝり立つた崖の上の岩蔭に、甘い戀の私語に陶醉してゐた。見下される鏡のやうな海の面には、白帆の影が繪のやうに動いてゐた。と、丁度都からやつて來たその金持の男が、女を探しに其の場へ來合せる。二人の男の間に格鬪が始まる。そして若者は終にその男を、高い崖の上から突落して了つた。

彼は捕へられて牢に入れられる。

それから數年は經つ。

彼女は、其の後、そんな事で人氣は落ちるし、段々生活に追はれて寄席へ出たりしてゐたが、そのうちに惡い男に誘拐されて、たうとう淪落の淵に陷つて了つたのであつた。

彼女のたつた一つの光明は、戀人の出獄する日であつた。初め戯れの戀は——年若い漁夫の心を、その許嫁である所の、可憐な村の娘の手から奪つてやる、そんな彼女の惡戯であつたのだが、その戯れの戀は、今はもうほんとの戀に變つてゐた。

十一月二日。——愈々その日が來たのだ。彼女はいそいそと男の持物を布に包んで、そして監獄の前に迎へに行つたのである。

重い鐵の扉が開く。輝く日光の中に、男は雙手をさし上げた。あの逞しい腕の中に、自分はどんなに戀の歡喜に震へた事であつたらう。彼女は、そして二三歩、歩み寄つた。

男は彼女の顏を見た。しかし彼は、昔の戀人とは氣がつかなかつたのであらう、そのまゝ見知らぬ路傍の人のやうに顏を背向けて、丁度そこへ息を切らせて飛んで來た可憐な田舍娘とひしとばかりに抱き合つて、そして、いそいそと家路を指して行つて了つたのである。

女は呼びかける力も盡き果てて、いつ迄も男の後姿を見守つてゐた。やがて力なくとぼとぼと、三階裏のわが家に歸つて來た。そして鏡を取出して、變り果てた自分の顏を映して見た。あの昔の豐艶な容姿は今いづくにあらうか？　頰骨の出張つた、その痩せた顏を傳はつて、止めどもなく流れ落つる涙であつた。

開け放たれた窓からは、暮れて行く都會の屋根が見下された。名も知れない夜の鳥が、不吉な啼き音を殘して薄暮の灰色の空に消えて行つた。

彼女の頭を、冷たい死の神の草鎌が、鈍い力を放つて掠めて行つた。

『ねえ、卯女さん。……』

やがて惠吉が思ひ出したやうに口を開いた。彼は珈琲をぐつと飲み干した。

『もう後一月半ばかりだから、明日あたりから僕の所へ來ない？　いろいろ旅の支度や相談もあるし、その方が便利だから。兄さんもそんな事云つてゐたし、……』

『えゝ、私もその方が良いと思つてましたの。でも、……それに嫂さんの事もあるんですもの。二人つきりになつたら兄さん達も、歸つてうまく行くと思ふわ。』

『兄さんも云つてゐた。卯女子もその枝もお互ひに氣兼ねしてゐて、可哀さうだつて。……その枝さんそんなに近頃變？』

『變つて事はないんですけど、妙に苛々して、陰氣で、それで兄さんも一つは、くさくさしてらつしやるのよ。』

『どつか身體の工合でも變なんぢやないかしら？』

卯女子はちよつと口を噤んだがやがて又云つた。

『さうなのよ。嫂さんこの間、話してくれたわ。誰にも云つちやいけないつて云つてたけど。』

『さう？　可笑しいな。そんな事、ちつとも恥しがつたり、隱したりする事ぢやないぢやないの？』

兩人は暫く默つてゐた。

『ぢや、兄さんに話して明日からでも移つてらつしやい。ね？　僕の家にもう一つ空く部屋があるんだから。』

『えゝ。さうするわ。』

惠吉は卯女子の家迄送つて行つた。

翌日山田と惠吉はいろいろと卯女子の荷物を

手傳つてやつた。タクシーに惠吉と卯女子は乘つた。表口の所迄、山田は下りて來た。

『ぢや賴むよ。まだ結婚はしないんだよ。』

そして笑つた。

卯女子は何かしら顔の火照りを覺えて、俯向いたまゝ、幽かに微笑んでゐた。

卯女子が居なくなると、山田の家の中は眼に見えて淋しいものになつて行つた。その枝の陰氣さが堪へられない程、山田の心を壓しつけた。ヒステリーだなと彼は思つた。それでも離れてゐて彼女の事を考へると、何だかから可哀さうになつて來て、まだまだ俺の愛が足りないのだ、とさう云つた氣持になるのであるが、さて彼女の暗い顔を見、そしてその妙に意地つ張りな言葉や態度を見聞きすると、彼はむらつと腹が立つて了ふのであつた。この二つの矛盾した心持が絶え間なく交互に、彼の心の中に繰返された。

それに一番我慢出來ない事は、その枝の音樂に對する無理解である。それは近頃殊に目につき出したのであつた。彼がピアノに向つて一生懸命に練習してゐる所へ、五月蠅く出入りして見たり、又は不意に遠慮もなく、御飯の知らせに來たりして、それで直ぐに行かないと、怒つたやうに先へ食べ始めたりするのであつた。

今日は朝から山田は氣を惡くしてゐた。大阪の友人の紹介狀を持つて、どこかの會社の重役とか云ふ人が訪ねて來たのであつた。伯林へ着きたてで、よく樣子がわからないから、少し案内をしてくれと云ふのである。

『へへ、その代りあんた、御馳走はたんとさし上げますさかい、えらう濟んまへんが。……』

そんな事を云つて下卑た笑ひ方をした。金の力なら何でも出來る、人間の價値は、いくらその人が儲けられるかと云ふ事で決るのだ。從つて金にもならない文學だの、音樂だの、學問だのと云ふものをやつて、涼しがつてゐる人間は、彼の眼からは一文の價値もない穀潰しだ、とさう云つた態度が厭に丁寧振つたその言葉の裏に、チラチラと見え透くのが、山田京輔にはたまらなく厭な氣持がした。

彼は好い加減の返事をしてゐた。こんな奴と一緒に詰らない名所廻りなんてする位なら、ピアノを一曲でも練習つた方が餘つ程ましだ。どうせ大きな百貨店とか、ビスマークの銅像とかが見たいのだらう。さう思つてゐた。

『あんた、ピアノちふもんは右と左とあつちやこつちやに彈くもんだつしやろか?』

その男がむき出しの大阪辯で、突拍子もないことを訊きだした。山田は仕方なく笑つてゐた。

『わてが立つちよつと前、何とか云ふヴァイオリン彈きが來たんやが、わてには皆目、ブーブー解れへんなんだけど、あらほんまにえゝのんか?』

『クライスラーでせう? さうですね、先づ今の所一番でせうかね。』

山田は面倒臭さうに答へた。

『何でも一晩何んぼやら取るとか云うてたが、藝人もあんだけになると、どえらいもんやな。ハハ、、……』

(馬鹿!)

山田は呶鳴りつけてやり度いやうな氣がした。

(何と云ふ卑しい笑ひ方だ。クライスラーの前に、貴樣の醜い姿、心を晒して見ろ! 見窄しいその姿を鏡に映して見ろ!)

もう口を利くのも厭な氣持であつた。

『あんた、今日日こゝで流行つとる、ほら面白い節の唄がありまつしやろが、……

重役の男が又口を切つた。葉卷の煙をゆつくらと吹かすと、不愉快な調子外れな聲で唄ひ出した。

『ヨゼフ！　アハ、　ヨゼフ！　ちゆ、あいつや、あんた、あれをちよつと彈いてくれまへんか。わてはあの節が大好きなんだんね。

　ヨヨヨヨヨゼフ！　アハ、　ヨヨヨヨヨゼフ！……』

山田は默つてゐた。

『なあ？　あんた、兩手を同じに彈いても宜しうますさかい。』

『ハハヽヽヽ。……』

山田は妙な聲で笑つた。そしてちよいと、びつくりしてゐるその男の額へ、いきなり投げつけてやつた。

『寄席にでも行つて聞いて來るが良い。山田京輔は幇間ぢやない。失敬します。』

彼はづかづかと部屋を出て行つて了つた。その男は、マギーの麵棒を食らつたチグスのやうに、暫くぽかんとして立つてゐた。今迄目下の者―　彼より金をより少く持つてゐる者は、皆彼の目下なのであつた。その所謂目下の者から、こんな待遇を受けた事は、嘗てない事であつた。皆、自分を利用しようとしてゐる人々の中にあつて、その利用されようとしてゐる自分の位置に對して、私に自惚れと誇りとを懐いてゐる彼なのであつた。

　彼は今初めて、お金といふものが幅をきかさない、或る奇妙なる人種をそこに見た。そしてそれが現にこの地球の上に、彼と同じ空氣を吸つて生きてゐるといふことを知つたのである。彼は毛皮の外套を着て、默つて家を出て行つた。

　山田は山田で嫌惡と卑しみのありつたけの心を、その男の消えて行く跫音に投げつけてやつた。そして又自分の部屋のピアノの上に懸つてゐる、樂聖バッハの尊い姿を見やつた。巴里の美人が、自分の美を引立たせるために、好んで醜婦の伴を連れて歩くといつた工合に、あの豚のやうな見窄らしい男の姿の前に、このヨハン・セバスチアン・バッハの姿の如何に尊く氣高きことよ！　であつた。

　そんな事があつて、今日は朝からむしやくしやしてゐた。山田はピアノの前に坐つた。やがて、「ワルドシュタイン・ソナタ」の調は流れるやうに響いて來た。彼の心は凡ゆる苦惱、不愉快から解放されて、莊嚴な藝術の殿堂の中に獨り淋しく彷徨うて行つた。彼は第一樂章、第二樂章と自分乍ら氣持良い程、すらすらと申分なく彈いて、第三樂章も終りのプレスティスモに入つた。その時、戸が心持荒々しく開いた。

「あなた。……」

　と妙に眞中にアクセントをつけた、その枝の聲である。京輔は又かと思つた。

『ちよつと、あなたつてば』

一層甲高い聲であつた。

（五月蠅い。）

京輔は又むつとした。指先が亂れて了つた。とに角切り迄彈いてやらう、とさう思つた。

そして振返つた。

『あゝよ。いゝわ。』

『何だ？』

殆ど同時に響いた京輔の鋭い聲に、その枝はちよつと、どきつとして默つて了つた。

『何か用なのか？』

『……』

『えつ？』

『少しは止めて下さらない？　私、私、朝から頭が痛くつて……』

もう泣き出しさうな聲であつた。

『馬鹿！』

たうとう呶鳴つた。京輔はいきなり立上ると、ピシャンと戸を閉めて、出て行つて了つた。

帽子を冠つて外套に片腕を突込み乍ら、梯子段をどんどん駈け下りて戸外に出て行つた。

（こんな不當な事があるものか。）

山田はガブガブとたて續けにビールを呷つた。が、どうしても醉へなかつた。微醉の赤い顔を夕方の街の燈火に照され乍ら、彼は憑かれた人のやうにあてもなくポッツダムの通りを下つて行つた。

活動寫眞の明るい光の所で、彼はふと向うから歩いて來る惠吉に出會つた。

『やあ、何所へ？』

向うから聲を掛けた。

『別に、……良かつたら一緒に彷徨から。』

兩人は又ポッツダム廣場の方へ歩き出した。

山田は默つてゐた。惠吉にはよくその譯が解つてゐた。彼は態つと覗いて見た。

『その枝さんはどうです、近頃？』

『あゝ、別に。……』

山田はちよつと默つたが、やがて獨言のやうに云つた。

『もう少し、この俺を理解してくれるとなあ、……とに角、近頃はどうかしてゐるよ。性質が餘つ程變だ。拗くれてゐる。』

先刻の憤懣がまだ彼の頭にひつかゝつてゐた。

『山田君！』

惠吉が靜かに遮つた。

『そんなに云つちや、その枝さんが可哀さうです。ちつとも拗くれてなんかゐやしない。……こつちから察してやらなくちや、……』

『察するつて？　何をだね？　僕だつて隨分我慢はして見たんだよ。』

『そんなこつちやないんです。……』

山田は不意に立止まつた。そしてぢいつと惠吉の顔を凝視めた。惠吉は目を落した。

『えゝ。僕は卯女子さんから聞きました。』

そして兩人は又歩き出した。山田は眼の中の熱くなるのを覺えた。

（その枝！　その枝！　お前は何故俺に一言云つてはくれなかつたのかい。）

涙がほろほろほろつと、黒の天鵞絨の外套の襟に落ちて行つた。街の外れの廣場の上に明るい光が交錯した。ホテル・カイザーホッフの眞青燈が、山田の涙に溶けこんだ。

十六夜あたりの月影が、丁度そこらあたりの中空に懸つてゐた。青い、透き通るやうな、微かな光をこの混み合つた人の世の上に投げ掛けてゐた。

人間長擾々。

天地何悠々。

山田はしんみりと、そんな言葉を想ひ浮べてゐた。

京輔が靜かに部屋に入つて行つた時、まだ燈火も點けない薄暗の中に、窓邊に凭つてしよんぼりと戸外を見下してゐる、その枝の後姿が目に入つた。肩の所が月の仄明りを背影にして、心持震へて見えた。

（可哀さうなその枝！　俺はあのその枝を、あゝも情なく叱つたのだ。）

京輔はそうつと近寄つて行つた。

その枝は夫の跫音を聞いた。きつとお酒を飲んで來たのに違ひない。そして又何か呶鳴られるのだ。さう思つて、丁度熱海の溫泉のやう

に、間歇的にこみ上げて來る熱い涙を、ぢいつと噛んだ脣に堰止めてゐた。彼女は不意に肩の所に夫の手を感じた。

『その枝！…………』

『…………』

『御免よ。』

彼女は意外な言葉を聞いた。そして、その中に籠つてゐる優しいまことの調子を感じた。彼女は「冷淡」の衣を脱ぎすてた夫の姿をそこに見た。彼女は默つて夫のその裸身の胸に縋りついた。堪へ切れない涙が、急にわくわくとこみ上げて來て、彼女は心ゆく迄しやくり上げた。

山田は優しく彼女の肩を撫でてやつた。

『今村に會つたら、卯女子から聞いたつて、何もかも話してくれた。……その枝！！』

そして、彼女の額に熱い接吻をした。ぢつと見上げて微笑んだその枝の瞳の底には、月の光を受けた涙の玉が、芒に宿る露のやうに光つてゐた。

京輔はぼんやりと、赤兒の名前を考へた。

女優のロッテは感冒を引いて、もう二週間も床に就きつぱなしであつた。白い寢臺の上に身を横たへて、窓から見下される街の動きを見てゐると、そして赤い夕陽が向うの家の窓硝子に映えて、屋根の甍が朱を溶かす頃、彼女は妙に悲しい氣がするのであつた。

あの華やかな巴里の都の、歡樂の渦卷から獨り離れ、淋しい病室に身を横たへてものを思ふ椿姫の氣持などに、勝手に自分を擬へて獨りで淋しがつてゐた。贔屓の客から贈つてくれたチョコレートの箱も、あらかた空になつて了つた。今朝屆けられた白薔薇の花束が、高い香りを放つてゐた。早くオッシーが、櫻井が歸つて來てくれないかしら、などと考へてゐるうちに、彼女はいつの間にかうとうとと眠つてゐた。

櫻井は暫く前からロッテの家に移つてゐた。今日彼は妙に重い心を懷いて歸つて來た。何かしらん云ひ知れぬ不吉な豫感が、彼の心のどこかにひつかゝつてゐた。

（畜生・　アンゴラの猫奴！

俺がイングリッシュ・カフェを出ようとした時、あすこの二階の「預り所」の狹い出口を、誰か客でも連れて來たのだらう、あのアンゴラの猫奴、而もお誂へ の黑猫だ、琥珀色の眼をジロリと見上げて、俺の前を、音もなく過り居つた。）

暗い顏をして、櫻井が部屋に入つて來た時、ロッテはすやすやと眠つてゐた。心持上氣した頰をほんのり赤くして、潤ひを含んだ桃色の脣が可愛らしく開いてゐた。

（出來るだけ、安靜に眠らせてやらう。）

さう思つて、自分の部屋へ行かうとした時、彼はふと枕頭の花束に目をやつた。それにはフォン・ガイベルと書いた名刺が附いてゐた。

櫻井はその男を知つてゐた。よく彼女の樂屋を訪れる、まだ二十代の若い男であつた。櫻井の頭の中には今迄に經驗した事のない或る感情がむづむづと動き出した。

どうせお客商賣の女優だから、花束などは始終來てゐるのだ。それだのに、妙に今日に限つて、櫻井は不愉快な氣がした。その男のちよつと好男子な顏が頻りと目の前にちらついた。その薔薇の花片のそこゝに、二つの脣の跡が重なり合つてゐるやうな氣がした。女の寢顏に時々浮ぶあの微笑も、あの男の夢に由るのではないか、と云つた氣がした。櫻井は默つて次の部屋へ入つて行つた。

（嫉妬？

莫迦な。この俺にそんな未練な感情が殘つてゐたらお慰みだ。）

さう笑ひ去る心の下からむづむづと盛り上つ

て來る苛立たしい氣持であつた。彼はぼんやりと考へ込んでゐた。

（妙な日だな。）

突然、隣りの部屋の尋常ならぬ氣配が忽ち櫻井の沈思の絲を絶つた。

『何をするッ!?』

明らかにそれはロッテの聲だ。櫻井は、はつとして立上つた。そしていきなり間の扉を開けた。

『アレー!!!』

開けた瞬間に急に大きく響いたロッテの悲鳴が、彼の耳へ錐の如く突きさゝつた。

一人の男がロッテの床の上にのしかゝるやうにしてゐるではないか。櫻井はいきなりその男の首に捲かれた紫色のハンケチを掴んで、力一杯に引戻した。その男は忌々しさうに、首の周圍を按り乍らこつちを見た。

『貴様、ワルターぢやないか? 何をするッ?』

櫻井はロッテを庇ふやうにしてきつと身構へた。ロッテは床の上に起き上つて、固く櫻井の身體に獅嚙みついた。

『エヘヽヽヽ、實は、ちよつとばかり、資本をお借りに來やしたんでね。』

ワルターは太々しくほくそ笑んだ。

『金借りるなら、借りるらしく、溫和しくしたらどうだ? 何だ、今の眞似は?』

櫻井は身も狂ふ憤怒の爲にぶるぶると身體を震はせた。

『中々この女は綺麗にや出しませんからな。』

『あ、、またあ何だ。出さなけりやどうするつてんだ。』

櫻井の頭の中の五郎は、十郎を突拂つて飛び出した。

『徒歩で歸つちや、このワルター樣のお顏にかかはるつて譯でさあ。はばつちん乍ら、かう見えたつて、遠くはミュンシエン、ビール作りの齒つ缺け爺から、近くは伯林フリードリッヒの遣手婆に至る迄、つて、ついたんかも切りたくなるこの俺樣だ。金が駄目なら……』

『駄目なら何だ?』

『色情で行くか。ハハヽヽヽ。』

『何?!』

もう自分乍らどうしやうもない彼であつた。櫻井はいきなり足で蹴上げた。ワルターは素速く身を交した。女のやうなその白い顏にさつと險しい八の字が寄つた。が、又すぐ以前の太々しい笑ひにかへつた。

『おつと、その手にやノルマンディーか。ハハ。』

『畜生!』

櫻井は今度は枕頭の置電燈を操つて、いきなり振上げなりに飛掛つた。

突然、轟然たる響きと共に、彼は胸の所に鋭い痛みを感じた。ぐらぐらぐらつと彼の目の前の物は、ロッテも、ワルターも、戸棚も、裝飾燈も、柱も、天井も、まるでサムソンに崩された殿堂のやうにゆらゆらと搖めいて、彼はそのまゝ、どつかと倒れて了つた。

『ロッテ!!!』

『ロッテ!!』

『ロッ……』

起き上らうとして力を入れた右の手が、こゝでがくりと來た。彼は横顏を平らに床に打ちつけて、そのまゝ動かなくなつて了つた。

鮮血が絨氈を離れると、蛇のやうにうねうねと、假込み細工の床を這つた。

獅嚙みつくロッテを蹴倒して、櫻井の懷中から紙入を抜きとると、悠々と周圍を見廻して、机の上の自分の帽子をひつたくつて、今度は脱兎の如く、ワルターは逃げ去つた。

銃聲に驚いた多勢がどやどやと入つて來た

時、血みどろになつた絨氈の上に、頭を押しあて、櫻井はもう冷たくなつてゐた。

シベリヤ通過の打合せに、惠吉は卯女子を連れて、日本人倶樂部の建物に入つて行つた。そこで彼は櫻井の死を聞いた。彼は幼い時から見つけて來た、舊劇に良く出て來る、その勸善懲惡覗機關と云つた因果律を、この實際の世の中の舞臺に眺めたやうな氣がした。

煙草の煙のたて罩めた部屋の、そこゝのソファに、或ひは球を撞く人々の口に、その話で持ち切つてゐた。

大かた博奕の遺恨だらう、いゝや、女の問題だとか、あんな破戸漢には適應しい最期だ、日本人の中にも大分騙られてゐる人があるからなとか、旅の身空で可哀さうだとか、とか、人々は皆勝手な事を云ひ合つてゐた。――が、あのロッテが女優の生活を退いて、ケーニヒベルヒの片田舍、森蔭の修道院の、黄昏せまる窓邊に凭つて、獨り佗しく都の空を眺め暮してゐると云ふ事は、誰一人として知る者はなかつたのである。

一行十七名、婦人は卯女子の他にもう一人行くと云ふ事に定つて、いろいろと旅の注意などがあつた。とに角零下三十度もする所を通つて行くので、防寒の用意が大變であつた。鐵に觸れば肉が凍えてくつついて了ふと云ふ位なのだ。いろいろと赤露のあぶなさを聞かされたが、兩人の決心は堅かつた。

ノルレンドルフ廣場へ出た兩人は、そのまゝクライスト街からタウエンチン街の方へ歩いて行つた。エタムの角店で惠吉は腿まである婦人用の靴下を買つた。シベリヤ鐵道には南京蟲が出ると云ふ事であつた。兩人は又サラマンダーの店で二重革の靴を買つた。その他毛皮の手袋や毛布を買ひこんだ。街の上でこそこそと取持へる不正の兩替屋に一磅の札を渡す度に、それが十四も零のつく馬克の札と變つて、それが又瞬く間になくなつて了ふのであつた。

卯女子に別れてから、惠吉は大使館へ行つた。そこの先輩に賴んで彼は三百圓ばかり貸して貰つた。先輩は快く貸してくれた。いつでも返せると思つて、今迄でも手許にないと、平氣で借金などしてゐた彼は、今度初めて心苦しい借金をしたのであつた。が、先輩のその溫かい態度がどんなに彼の心持を勞つてくれた事か。

『さあ。――』

と氣輕く云つて、小切手を渡し乍ら、

『いつでも良いぜ、どうせ遊んでる金だから。』

と云つた時、惠吉は不意に眼瞼の裏の熱くなるのを感じた。

惠吉はその足で、あのドイッチェ・バンクの重苦しい石造の建物の門を潛つたが、外國の金は中々渡してくれないので、そのまゝ戻つて來た。ホテル・アドロンを左手に見乍ら、彼はとぼとぼとウンテル・デン・リンデンを下つて行つた。目の前に巍然と聳えたブランデンブルグの大門の丸柱を透かして、もう裸身になつたティヤガルテンの枯木立が、蕭然と見通された。

（ハンブルヒの正金に行かなくてはなるまい。）

「火は擴がらず、ミニマックス家に在り。」

と云ふあの見馴れた消火器の廣告を見やり乍ら、地下鐵道の三等の板の腰掛に腰を下して、ぼかーんと惠吉は考へてゐた。

『どうかなすつて？』

隣りの寢室の扉の隙間から卯女子が覗いた。

惠吉は魘されてゐたのであつた。冷汗がぐつしよりと、寢間着の襟を濡らしてゐた。

（其男は綠色の襟卷を無造作に首の周圍に捲

きつけてゐた。斜めに冠つた鳥打帽の下に鋭い眼が光つてゐる。顴骨の上の創痕も生々しい。安煙草の臭がする。俺は近付いて行つた。そして、金をやるから此の人間を殺してくれと云ふ。男は自分の唾を靴で擦り乍ら應と答へた。俺は默つて紙の上へ、イマムラ・ケイキチと自分の名前と番地を書いて渡してやつた。金をやる。

荒寥とした露路を照す暗い瓦斯燈の下に、氣味の惡い笑ひ顏が光る。高い建物に兩側から挾められた夜の空が、頭の上を黑い帶のやうに續いてゐる。

人通りの途絕えた淋しい街の上を俺はとぼとぼと歩いて行く。寒い氷雨が蕭々と降つて來た。

俺は一旦家へ入つて、暫く經つてから、すつかり着物を着更へ、違ふ外套の襟に深く顏を包んで、又家を出た。俺は、背後を追けて來る一人の黑い人影に氣がついた。振返つた瞬間にぐさつと胸を突かれた。そこには短刀を逆手に持つた先刻の男が立つてゐた。そして其顏が、——いつぞや、どつかでちよつと櫻井に紹介された、あのワルターの顏であつた。）

惠吉は寢そびれた長夜をぢいつと考へた。

（あの男は俺が、紙に書かれたイマムラ・ケイキチと云ふ人間だと云ふ事は、どんな方法かで知つたのだ。が、さてその人が、先刻彼に金をやつて殺人を賴んだその同じ人だとは知らなかつたのだ。して見ると、彼に金をやつて殺人、——それは俺から見れば自殺なのだが、——をやらせようとしたこの俺は、殺人教唆の罪になるのかしら？　そして、僕に金を貰つて、今村惠吉なる人物、——それが賴んだ當人で、自殺をするのだと云ふ事を知らないで、——を殺さうとした彼は、單なる殺人罪となるのか、それとも自殺幫助の罪を着るのか？）

惠吉の頭の中で法律家が議論をし始めた。そのうちに彼も、從つてその法律家も、疲れて寢て了つた。

富田佐一も亦櫻井の死を聞いた。重ね重ねの變死事件に、彼は何だか薄氣味惡い氣がし出した。輪廻と云つたものを考へて見た。二度ある事は三度ある、そんな氣もした。ワルターの冷たい眼付が浮んで來る。自分の歩き去つた直ぐ後へ大きな石でも落ちて來たやうな氣がした。それは恐怖と安心とをごつちやにしたやうな氣持であつた。

彼は一體どつちかと云へば迷信家の方であつた、幼い時にふとした事で、彼の頭に燒きついたそんな氣持が、丁度青桐の若木に彫りつけた文字のやうに、幹が大きくなるに連れ、その字も大きく、段々はつきりとして來た。彼は迷信と云つたものを、頭から馬鹿にする氣にはなれなかつた。從つてオリーの死で好い加減考へてゐた彼が、又櫻井の死を聞いて、空恐しい氣がし出したのも無理はない。それと同時に今迄抑へられてゐた道義心と云つたものが、丁度雨降る夜の焚火のやうに、消えたと思つてゐた暗闇の中から又ぼうつと燃え出して來たのであつた。

一體富田は自分と云ふもののない男である。まあ譬へて見れば昆布のやうな男であつた。潮の流れに從つて、東へも西へも靡いた。が、幸ひな事には、まだ根だけは一所に附着いてゐた。

オリーの事件以來アニタの心が急に變つて來た。そして續いて櫻井の死となつて、富田は丁度絲の切れた操人形のやうに、ばたりと倒れて了つた。王社祭の所作ではないが、散々立廻りをやつてゐた惡玉は、たうとう投げつけられて、彼の心のどこかの隅に、膝を抱へてめそめそと泣き出したのである。

（なんぢ惡に勝るゝ事勿れ、善を以て惡に勝つべし。）

この當然の事に氣がついた。――ローマ章十三――が人間は當然の事をするのが偉いのである。

彼はやつと決心した。半年分の生活費だと云つて、約三百圓ばかりの金と、タイプライターを一臺と、それから冬着の支度を一揃へ買つてやつて、彼はアニタと手を切つた。

女は涙を流して喜んだ。オットーが大きくなつて、立派な息子になつたら、きつとあなたの事を話して、兩人で一生あなたと、あなたの奥樣の幸福を遥かに祈つてゐます。時々お友達として遊びに來て下さい。そのうちにタイプライターを一通り仕上げて、どこかの會社にでも勤められたら、オットーを引取る心算です、と云つた。

彼女のその輝かしい顔を見た時、富田は何かしらん、自分が偉い事でもしたやうな氣がした。が同時に、それは今迄の負債を拂つたやうな氣持でもあつた。

彼は國もとの妻に、久し振りで長い手紙を書いた。

十一月の暦も、もう半分程になつて行つた。あの長い北國の冬が灰色の空と共にやつて來た。霙混りの氷雨が、毎日のやうにしとしとと、裸身になつた菩提樹の並木を濡らして降つてゐた。今日も朝から、一日降り續めてゐた。濡れた石のやうな鉛色の雲が、低く重苦しく垂れてゐた。

卯女子はその枝がちよつと身體の工合が惡いと云ふので、お午頃から見舞ひに行つてゐた。憲吉は退屈紛れに散歩に出た。彼は街角の廣告柱にワルターの寫眞を見た。いろいろの人相書と罪狀が書かれてあつて、二百弗の懸賞が附いてゐた。

（ロンブロゾーの骨相學も當にはならない。）

そんな事を考へ乍ら、ふと彼が目を滑らせて行つた時、そこの大きな赤ビラに、「鏡」と云ふ題で活動の廣告が目を惹いた。

（淪落女優オリーの奇しくも惱ましき戀の悲劇を腳色せるもの、云々。）

と註が附いてゐた。

赤塗りの館の中は明るく照明されてゐた。綺麗に着飾つた男女の群が、それぞれの席へ、水のやうに流れこんで行つた。憲吉もその中に混つて座に就いた。入口で受取つたプログラムを擴げた時、彼は「鏡」の他に二卷ものの喜劇のあるのに氣がついた。そして彼はそこにジョンニー・クリモトの名前を見出した。

「鏡」は題材が丁度今伯林の話題に上つてゐた事だし、それに演じた女優が出色の出來榮であつたので、觀客の涙は翕然としてその女主人公レオノーレ――活動ではさうなつてゐた。――に集まつた。管絃樂の音が果敢なくも哀戀悲曲を奏でてゐた。憲吉の眼にはいつぞや一遍、それもチラッと帽子の下に盗み見た、オリーの顔が不思議とはつきり映つてゐた。

やがて喜劇が始まつた。それは新婚の若夫婦が方々でいろいろの失敗を演ずると云ふ、他愛もないものであつたが、御馳走の後でちよつと甘いものが摘み度いと云つた心理で、觀客はただ譯もなく笑ひ興じてゐた。人いきれで重苦しいこの明るい小屋内の空氣が、笑聲の爲に搖めくのが感ぜられる位であつた。新郎になつた栗本が池の中に落つこちて、絹帽を高くさし上げて顰めつ面をする。その顔の所だけが丸く殘る。やがてくるくるとその顔が絞り込みになつて消えると、「そこに」終と云ふ文字が大きく出た。憲吉の隣席の女は、指輪の石を光らせる爲

か、やたらと手を拍つた。

多勢の人に巻かれて、惠吉はやつと戸外へ吐出された。そこには冷たい冬の夕方があつた。小雨はいつの間にか霽つてゐた。鉛色の雲が低く垂れこめてゐた。西の方の空がそれでも不思議と明るかつた。雲の背後に丁度死つた魚の眼のやうに、そことわかる灰白い太陽の在所のあたりを横切つて、寒鴉が二羽、奇妙な啼き音を殘して飛去つた。

街の外れに見上げられる、石造のゴシック式の、ウイルヘルム皇帝記念教會の高い尖塔の先は、もうそこ迄垂れてゐる、雲の中に溶けこんだ。鐘の音が悲しくそこから響いて來た。銀色の小雨に濡れた翼を羽搏いて、暗い波路の上を飛んで行く鷗のやうに、その鐘の音は、靜かな黄昏の空氣の中を、輪を描いては、やがてこのクールフュルステンダムの街の向うの外れの方に迄漂うて行く。そして人々の心の中に不思議なうら悲しさを殘して行く。

(久し振りで栗本でも訪ねて見ようかしら?)

雲は段々千切れて行つて、深まつた宵の青空さへ覗かせるのであつた。

戸を叩くと、やがて靜かに門が外されて、その戸が靜かに開いた時、惠吉はそこに黒衣のサシャを見た。悩ましき春の宵、朧に霞んだ月影を見るやうに、憂愁の靄の中に、彼女の蒼白い顔が美しく浮んでゐた。腕に巻かれた黒紗のリボンを見た時、惠吉には何もかもわかつたやうな氣がした。それが不思議とぴつたりと彼の氣持に合つた。彼の心がもうちやんと用意してゐたかのやうに。

(可哀さうな栗本! 窓から漏れて來る、あの「絲繰の唄」を聞き乍ら、獨り淋しく異國の空に死んで行つたのか?)

『ほんとに、良く來て下さいましたのね。私、たつた今お宅へ電話をお掛けした所なの。眞實に不思議な暗合でございますわね。……ジョンニーは、ジョンニーは、……』

サシャはちよつと口を噤んだ。そしてそつと十字を切つた。

(ジョンニーの靈に、マリヤ様の祝福がございますやうに!)

『ジョンニーはあの天國に上つて了ひましたの。私を、サシャをたつた獨り殘して……』

彼女はそつと洟を啜つた。惠吉は默つてゐた。

(ありふれた慰めの言葉などは、却つて彼女の清い心を汚すのだらう。)

『あなたにだけは、一目お會ひし度いと何度か申して居りましたの。』

さう云つてサシャは寝室の扉をあけた。薄れ陽が幽かにカーテンを透してさしこんでゐた。いつものやうに窓邊に置かれた寝臺の上に、栗本の身體が横たはつてゐた。白いベールが上から懸つてゐた。

「さうでしたか?」

惠吉は、重い心を懐いて、寝臺の側へ近寄つた。

『一昨々日、どうしたものですか、ちよつと起上つて見ると云ひ出しまして、何でも聞かずに起上つてこの部屋の中をあちこちと歩いて居りました。机の上の紙片に、何か書きつけて見たりしてゐましたが、不意にひどい咳の發作にやられてそのまゝ寝臺の上に突伏して了ひましたの。その時少し喀血致しました。そして、それからずうつと三日、苦しみ通しに苦しんで、丁度今日のお午に、お醫者さんが歸る間もなく死なりましたの。』

薄れ陽に映えたサシャの顔には、三日三晩の看護の疲れがまざまざと刻まれてゐた。それが

又不思議と、彼女の美しい顔に、一種の氣高さを與へてゐた。

『さあ、どうぞお永別を。』

さう云つてサシャは、なるたけ自分は見ないやうにして、栗本の顔のベールを取り退けた。蠟細工の人形のやうに、綺麗に透き通つたその顔の上には平和な穩やかな色が漂うてゐた。氣做しの所爲か、その血の氣のない脣の邊に、幽かに微笑をさへ湛へてゐるかのやうにも見えた。

サシャは、——見ると、背向けた顔に惱ましげな憂愁の影を宿して、痙攣つたやうな顔の筋肉は、時々内心の感情を裏切つて打震ふのであつた。白魚のやうな指先に、首から下げた銀の十字架が、燈火を浮べてキラキラと光つてゐた。

惠吉はすぐ目を外らせた。そして傍の椅子に腰を下した。サシャは默つて卓子の上の紙片を取つて渡した。それは二三枚のレターペーパーであつた。その上に順序もなく、妙に曲つた字で書かれてゐた。惠吉はぢいつと目を落した。

燈ぼかしの夕陽の在所は、もう向ひ合せの屋根に隱れて、名殘りの薄れ陽も、いつしか消え果ててゐた。開かれた窓邊から、夕闇が猫の跫音のやうに、こつそりと忍びこんで來た。サシャの顔の在所がほんのりとその中に浮んでゐた。丁度高原の黄昏に咲く、月見草の花の一輪を想はせる。

死の如き沈默と靜寂の中を、うら若き少女の墓に投げられる、最後の土の一塊のやうに、悲しい夜の帳が靜かに靜かに下りて來た。サンタ・マリヤの鐘の音が、夜の空氣を震はせて、今宵はわけて悲しい響を傳へて來た。諸行無常の鐘の音は、あながち祇園精舍とは限らない、と惠吉は沁々さう思つた。

中庭には又いつもの手廻しオルガンのお爺さんが、又いつもの曲を奏でてゐた。向う側の窓に明るく灯が入つて、何かしらんに打興ずる、賑やかな笑ひ聲が漏れて來た。

人通りの多い明るい夜の街を、惠吉は、俯向き勝ちにとぼとぼと歩いて行つた。氷河の底を音もなく流れ行く暗流の、こよなく悲しい一脈の哀愁が、彼の胸の奥深く漂うてゐた。

目まぐるしく行き交ふ人々の顔には、皆明るい微笑と、陽氣な滿足さが浮んでゐた。皆この日一日の享樂に醉うてゐる。惠吉にはそんな氣がした。そして彼は沁々と考へてゐた。

「人間と云ふものは、どうしてかうも無情いものなのだらうか？ 何事も起らないかのやうな顔をして、世の中はそのいつもの歩みを續けて行くのだ。」

そして惠吉は、あの明るいマルモール館の朱塗りの劇場内に、栗本の喜劇を見て大笑ひに笑ひ興じてゐる、美しい着物を着た、一群の人々の事を想つた。

惠吉は何かしらん、人生の二つの假面と云つたものを見たやうな氣がした。

街の外れの枯木の梢に、氣味の惡い下弦の月が懸つてゐた。どんより赤く血のやうな、まるで人の死ぬのを待つてゐるやうなあの月影。さうだ、「サロメ」にでも出て來さうな月ではないか。

梯子段に響く靜かな跫音に、卯女子はもう惠吉の歸りを知つた。そして部屋を出て門を開けた。男の顔に浮んだ悲しい陰影は、直ぐに婦人の心には解つたのである。

『どうかなすつたの？』

『いゝや。』

惠吉は默つて、外套と帽子を脱いだ。兩人は又默つてソファに腰を下した。

（口を利いては下さるまい。）
そして編みかけのネクタイを取出すと、卯女子は强ひて元氣に話し出した。
「ねえ、今日とつても可笑しかつたのよ。どうもこの間つから、あなた お机の上の葉卷が、時々少くなるつて仰しやつてらつしたでせう。所が今日山田から歸つて來て、部屋に入ると丁度あの女中のリザね、あれが御掃除をしてゐたのよ。片一方の手にはたきを持つてましたが、左手でそつと葉卷を一本隱してゐるの。私も何だか、悪い事しちやつたやうな氣がしてね。あの女も顏を赤くして俯向いて、もうどうしたら良いつて恰好してるのでせう。私、叱るわけにも行かないから、欲しかつたら、さう云へばやるからつてさう云つてやつたの。でもあんな十六七の娘がそんなもの吸ふなんて可笑しいから又尋いて見たのよ。お前、葉卷なんか吸へるのつて。さうしたら、赤い顏してもぢもぢしてゐましたつけ。やがて、それこそ蚊の鳴くやうな聲でね、マックスにやるの——つて、そしてしくしく泣き出しちやつたの。
　いろいろ宥めてやつと尋いたら、マックスつてのはほらあすこのズアレッツ街の角に、八百屋があるでせう、あすこの若い衆なんですつて。日曜日毎に兩人して活動へ行つたり市立公園へ行つたりするんですつてさ。私、何だか可憐しくなつて了つて、葉卷を二三本やつて了ひましたわ。』
　卯女子はさも可笑しさうに笑ひこけた。惠吉も釣込まれて微笑んだ。しかしその微笑も直ぐに、丁度渚に殘る水泡のやうに消えて行つて了つた。編棒の手を上げて、そつと彼の悲しい瞳の潤ひを見た卯女子が、今度はあべこべに釣込まれて、知らず識らず悲しくなつて了つた。彼女は又目を落して、考へ乍ら、細い銀の編棒を動かし始めた。
（もう大分出來てゐるな。）
　惠吉は默つてそれを見てゐた。兩人の沈默の間に、時計の音がチク・タク、……と刻んで行つた。
『もうお就寢にならない？』
下を向いたまゝ卯女子が云つた。
「あゝ。」
　惠吉は靜かに立上つた。卯女子も編物を机の上に置いた。
　惠吉は暗い部屋の中に、仄かにさして來る月の光の冷たい影を見やり乍ら、眠られない苦惱を扱ひかねてゐた。寢靜まつた家の中には、時計の音に混つて、隣りの寢室から時々寢返りの音と、幽かな寢臺の軋音を聞いた。
　惠吉はこの同じ月のさしこんでゐるあの栗本の部屋の中の有樣を思ひ浮べてゐた。机の上の紙片に書きつけられた、彼の遺書の言葉が、一句一句はつきりと惠吉の心に甦つて來た。
　サシャ！　サシャ！　この言葉を聞くと、俺はどうしても死ねない。生命をくれ、生命を！」
「あの大地震で恐らくは死んで了つたであらう父母の面影が、十年ぶりで俺の心に浮ぶ。」
「俺の生命の蠟燭が今消えようとしてゐるのだ。（轉り行く石）は今古沼の底に沈まうとしてゐる。」
『シベリュスの圓舞曲が聞える。あの（悲しき圓舞曲）が。やがてその調は、戸口を叩

く叩音の音に掻き消されて、そしてその暗闇に、僕はあの厭らしい草刈を手にした（死）を見るのだ。黒のマントを着た骸骨を。』

『サシャ！ サシャ！ S、S、S、S、……』

靜かな夜の中に、恵吉の歔欷が漏れて行つた。

薄靄がいつの間にか剝がれて行つて、明るく浮び出した月光が水のやうにこの夜の都の上に溢れてゐた。薄いカーテンを透かして、家々の屋根が青白く光つてゐた。部屋の床の上には、窓の影がくつきりと四角に寫つてゐた。

間の扉が靜かに開く氣配がした。恵吉はそこに月光を浴びた卯女子の白い寢間着姿を見た。彼女は靜かに近寄つて來た。白い綺麗な手が、温かい温氣を、恵吉の額に、頰に傳へた。卯女子は寢臺の脇に跪いた。

『どうか遊ばしたの？』

彼女の聲は震へてゐた。恵吉は暫く默つてゐた。

『まだ起きてゐたの？』

やがて彼は優しく卯女子の手を取つた。月光を受けて後光のやうに、彼女の美しい顏を包んだ亂れ毛が、彼の頰に柔かくあたつた。

『どうか遊ばして？』

彼女はもう一遍尋いた。震へた聲は彼女の脣から、そのまゝ恵吉の脣に消えて行つた。

『今日、僕はね、眞實に美しいものを見て來たの。』

そして彼は靜かに栗本の話をしてやつた。

卯女子の瞳にはいつの間にか、月光を宿した涙の雫が、水甕に沈む眞珠のやうに輝いてゐた。それが溶けたかと思ふ間に、はらはらと兩人の頰を傳つて、恵吉の脣に流れ落ちた。彼は傳へ聞くクレオパトラのやうに、その溶けた眞珠を飲み干した。

四つの腕が組み合されて、四つの脣が固く固く結び寄つた。兩人の姿はそのまゝ月光の中に、ロダンの大理石像の如く動かなかつた。

丁度その同じ時刻の事であつた。丸い月は栗本の家の窓を通して、黒衣のサシャを照してゐた。かうやつてあの月は、この大都會の夜に向つて展かれた、いくつの窓から、いくつの臨終の痛ましき光景を見守つた事か？

サシャは膝の上に擴げられた聖書を靜かな聲で讀んでゐた。

『死よ、爾の刺は安に在や。陰府よ、爾の勝は安に在や。……』

サシャは顏を上げた。白い掩布がほんのりと浮んでゐた。青白い顏の上に、レースの唐草模樣が搖めいた。三日三晩の氣疲れと、今夜も一睡もしない彼女の身體は、やゝともすればその張切つた心を裏切つて、睡魔の誘惑に靡かうとする。重い眼瞼が鉛のやうに下つて來ると、彼女の首はがくりと落ちる。膝の上の聖書が、白魚のやうな指先を離れて、ばたりと床の上に滑り落ちる。彼女は、はつとして目を覺す。そして踞んで拾ひ上げる。首に下げた銀の十字架が青白く光る。彼女は又讀み始める。

『イスラエルの牧者よ。羊の群のごとく、ヨセフを導きたまふものよ。耳をかたぶけたまへ。ケルビムの上に坐したまふものよ、光をはなちたまへ。……』

サシャの頰を傳はる一條の涙のあとは、梅雨時の庭石のやうに、乾く間もなく、青白い月の光を宿してゐた。涙腺の堰堤が崩れると、長い黒い睫毛の上には、丁度芭の葉に光る露の玉のやうに、新しい一雫の涙が溜る。睫毛が又震

へる。露の雫は流れ落ちる。そして又新しい露の玉が、…

寂光に包まれたサシャの淋しい姿を、一時間ばかり見守つてから、月は青く深まつた夜の空を、音もなく滑つて行つた。

サシャは又とろ／＼と假睡んだ。

（月に照し出された雪の野原の眞中を、たゞ二條の軌道が冷たく光つてゐる。煙を長く後に殘して距り行く汽車の窓から、乗出すやうに身體を伸して、ぢいつとこつちを見てゐるのは栗本の姿である。その顔が暗がりと距離を無視して不思議にはつきりと見えた。

サシャには、その汽車の向ふ行く手の地平線の彼方に、死の國が待つてゐるのだと云ふ事が良うく解つてゐた。彼女は夢中になつて、雪の氷りついた冷たい軌道の道を追掛ける。が、しかし汽車は段々遠ざかつて行く。初め燐寸箱位だつたのが、骰子となり、もう豆粒程になつて了つた。それでも栗本の振るハンケチだけが白くはつきりと風に吹かれてゐる。）

『ジョンニー！ ジョンニー！ ジョンニー！…』

サシャの唇は仄光の中にわなわなと震へ。

サシャはばたりと云ふ音を聞いた。聖書が又彼女の膝の上を滑り落ちたのだ。やがて彼女は小さな聲で唄ひ出した。あの懐かしいボルガの河畔に、可憐な田舎娘がそつとつく吐息と共に唄ふと云ふ、彼女には袖振髪の幼心の昔から懐かしい、「赤いサラファン」と呼ふモスクバの民謡であつた。（サラファンとは布で作つた帽子の事。）

かゝさまよ！
赤い帽子も私は要らぬ。
あの方の、墓場の上に鳥が啼き、
四月の草が茂るもの。
思ふさま泣く日が欲しや。
かゝさまよ！
そんな話をしては厭。
ほんとの戀は土の中、
苔蒸す墓場に寝てゐるの。
春も逝き、夏も花吹き萎びて、
寒い霜降る冬日迄、
お婿さん呼んでは下さるな。
かゝさまよ！
お嫁に行けとはあんまりよ。
考へて、ね。
あの冷たい土のお部屋に、
私のたつた一人のあの方が、
眠つてゐるのよ。
かゝさまよ！
もう直ぐに
ほんとに直ぐに春も去り、
年も巡つて行くわ。ね？…

可憐しいサシャの聲につまされてか、閑古鳥が向うの屋根に、ほろほろと咽び泣いてゐた。

「漂泊人の夜の唄」

それから三日程經つた或る日の事、伯林の街もやうやく盡きようとするリヒターフェルドの町外れであつた。狭い露路の兩脇に、崩れかかつて薄汚い陋屋が並んでゐた。それも、もう所々庭とも畠ともつかない空地を置いて粗らになつて行つた。家の小さい所為か、路傍のポプラの木も妙に高く聳えて見えた。傾きかけた亜鉛板塀に、サーカスの廣告が破れなりに貼られてあつた。薄暗い露路の凸凹な鋪道の上には、降り溜つた雨水が、じめじめと濕けてゐた。

その道をとぼとぼと、一人の老人の手を引いて、まだいたいけな一人の少年が歩いて行つた。老人は盲目であつた。小脇に抱へたズックの袋の破れから、薄汚いヴァイオリンの首が突き出してゐた。

兩人は、ふと向うの辻を曲つてこつちへやつて來るお葬式に出會つた。黒い粗末な棺を乗せたガタガタ馬車の轍が、そこゝの水溜りの泥水を跳ねかへして行つた。その後から、もう一臺の辻馬車の幌を下して、黒衣の女と、一人の異國人が、俯向きなりに乗つてゐた。鞭の音が淋しく鳴るのであつた。お葬式は影のやうに默々と來て、又影のやうに默々と行き過ぎて行つた。

振向くやうに見送つてゐた少年は何と思つたのか、お爺さんの手を放すと、そのまゝどんどん駈け出した。泥濘の泥水が、破れた裸身の脛へ、びしやびしやと跳ねかゝるのも知らずに、彼はお葬式の後を追掛けたのであつた。

『フランツ！　フランツや！』

盲目の老人はちよつと驚いたやうに、聲をかけたが、答がないとそのまゝ、首を振つて立つてゐた。

少年は、はあはあと息を喘ませ乍ら、やつと追ひ着くと、彼は自分の胸にさしてゐた、もう萎れかゝつた一輪の白薔薇の花を抜き取つて、それを黒い柩の脇へ乗せた。――廢園に咲いたこの薔薇の花は、たつた一人の友達の隣りのマリー姉さんが、出がけしなに、この少年のせめてもの飾りにさしてくれたのであつた。

少年は手を組んで、小さい聲で神様にお祈りを捧げた。

「この人の靈が、どうぞ天國に參りますやうに！」

後の馬車の幌の中には、そつと漏らした吐息と共に、黒の薄紗の陰に、美しい女は人知れず、落つる涙を拭き取つたのである。

赤い煉瓦造りの教會の陰に、傾きかけた十字架が、そこゝに立つてゐた。霜柱の立つた赤土の上には、名もない雜草が黄色く枯れて這つてゐた。

二人の男がシャベルを握つて默々と土を掘つてゐた。やがて棺は入れられる。新しい土の上に、午下りの陽差しが鈍い光を放つてゐた。

人々は、――その黒衣の女も、異國人も、牧師も、皆んな默つて立つてゐた。棺の上には少しばかりの花が撒かれた。その時、異國人はふと進み出て、硝子の嵌つた額縁に入れられた、一枚の紙を打ち乗せた。その紙片には、ゲーテと云ふこの國の偉い詩人の詩が、「漂泊人の夜の唄」の一節が、綺麗な文字で書きつけてあつた。

Ach, ich bin des Treibens muede!
Was soll all der Schmerz und Lust?
Suesser Friede,
Komm, ach, komm in meiner Brust!

あはれ！人の世の果敢なきいとなみ！
憂苦も歡樂もわれに何かは？
和けき平和よ、
來れ、あはれわがこの胸に！

黒い土がかけられた。

サラリ、……サラリ、……と、悲しい調子を置いて土は盛られて行く。やがて土饅頭の上には、大理石の十字架が立てられる。牧師の口には靜かにお祈禱の言葉が上る。

『アーメン！』

皆んなの口から幽かな溜息と共に漏れて來た。

二人の男は、又默々とシャベルを擔いで歸

つて行く。

　今村惠吉の腕に倒れかゝるやうに顏を埋めて、ヤッとサシャが馬車に戻つて來た頃、遠く都の邊には煤煙に濁つた灰色の雲が、一面に冠さつてゐた。目まぐるしいいとなみを溶かしこんだ大都會の喧騷な交響樂が、そこらあたりから、微かに微かに感ぜられるのであつた。

　辻馬車は又幌を下して、場末の凸凹道を、ポカポコ、……と走つて行つた。油の切れた車輪の軋音も、兩人の耳には何と響いた事であらう？

　それにしても兩人は口を利く術を忘れたのでもあらうか？

　山田の家で心ばかりの送別の晩餐があつた。氣分の勝れないその枝を劳り乍ら、卯女子はいろいろの料理を拵へた。

　薔薇模樣のダマストの卓子掛が敷かれる。ローゼンタールのお皿が並べられる。ヘンケルの店で買つたゾーリンゲンの小人印のナイフが配られる。ハイデルベルヒのお城の浮彫のビールの瓶が置かれる。――すべて獨逸好みの接待であつた。

　お名殘だと云ふので「豚肢肉」だの「犢肝臟」だのが食卓に乘つた。

『獨逸の味がしますね。』

　などと惠吉は云つた。

『こんな美味しい馬鈴薯は、もう當分食べられないんですわね。』

『卯女さんは困るだらう？　女だから。』

『あらいやーだ。おひどいわ。』

　ラインの白葡萄酒が、切子硝子のコップの中で、黄金色の泡を立ててゐた。

　惠吉の頭には、いろいろの小説で想像した雪の露西亞があつた。氷の破れる音が、馬橇の鈴の音が、もう彼の耳の中に鳴つてゐた。

　卯女子はこれから歸つて行く懷かしい故鄕の山河を想つてゐた。

　山田夫婦の頭の中には、兩人に去られた後の、この伯林の冬があつた。又石炭騷動でも起らなければ良いが。そんな事もひつかゝつてゐた。

　そして口數少い會話の中に、四つの心がぴつたりと溶け合つて行つた。茶沸器がごとごと沸つた。

　山田がやがて立上つて一つの紙包みを持つて來た。

『これは君。毛皮の外套。餞別に取つてくれたまへ。それからこれは少しばかりだけど、卯女子の旅費にでも當ててくれたまへ。』

　惠吉は默つて受取つた。斷つたりする故意とらしさが厭であつた。

『もつと上げたいんだが、僕も要るし、それに出來るとね、……』

　山田は附け加へてさう云つた。

『いゝえ。どうも有難う。……日本へ着きやどうにでもなるんですから。……僕達にはもつと幸福な事があるんです。同情なんかする人があつたら、熨斗のまゝ謹んで返してやります。ねえ？』

　惠吉は卯女子の方を見た。彼女は默つて微笑んでゐた。兩人はやがて暇を告げて立上つた。

　窓の外の闇を透して、チラチラと白いものが降り出してゐた。その枝は眼に一杯涙を湛へて俯向いてゐた。山田が云つた。

『明日も若し降り續けたら、その枝は失敬するかも知れないよ。身體に觸るといけないから。』

『えゝ、それが良いわ。嫂さん！　お大事にね。……』

　さう云つて卯女子は優しく、その枝の背に手を掛けた。その枝はやつぱり默つて俯向いてゐた。

『坊やだか、女の兒だか、直ぐ教へて頂戴ね。』

出しなに卯女子がさう云つた時、その枝は幽かに聲を出して泣いてゐた。

『大分降つて來たねえ。』

戸外へ出た時、外套の襟を深く立て乍ら、惠吉は獨言のやうに呟いた。そして卯女子の毛皮の襟を固く首の周圍になほしてやつた。

『えゝ。……』

別の事を考へ乍ら卯女子が答へた。

『もう、冬だわね。』

降り立ての雪の道の滑りを、高い踵の靴に感じ乍ら、卯女子は固く惠吉の腕に凭れてゐた。彼女の頰は赤く上氣してゐた。

『辻馬車呼ばう？』

『いゝえ、良いのよ、あたし、かうやつて、いつ迄もいつ迄も、あなたとこの伯林の街を歩いてゐたいわ。』

ハウプト街の明るい街の灯の中に、チラチラと粉雪が踊つてゐた。五階建の家並の窓はもう大分燈火が消されてゐた。雪に更け行くこの大都會の夜、温かいスチームの通つた小部屋の中に、幾組の戀人が、紫煙る夢のまにまに搖られ行く事か。

『卯女子！　寒かない？』

机の上の暦には[illegible]と大きく書き出された。愈々出發の日が來たのだ。荷物を一足先へ出して、惠吉と卯女子は吻としたやうに、空ん洞になつた部屋の中に坐つてゐた。二重硝子の窓の外には、シャーロッテンブルヒの警察の大きな石造の建物の陰に、昨夜からの雪の續きが、霏々として降りしきつてゐた。菩提樹の梢が霞んで見える。雪を乘せた自動車が音もなく走つて行く。雪の道に黒い二條の痕を殘して。

惠吉は默つて琥珀のパイプに葉卷をさした。もう半分ばかりも色づいてゐるのを、卯女子はぼんやりと見てゐた。

幌を立てた辻馬車の中に並んだ兩人は、セルロイドの窓を透して夜の町の燈火を見てゐた。そしてその燈火の前を横切つて、チラチラと踊る無言の雪の舞踏を眺めてゐた。

たとひ二年とは云へ、住み慣れて見れば懷かしいこの伯林の町と別れ行くと云ふ事は、惠吉の心に云ひ知れぬ離別哀傷の念を起させるのであつた。兩人は默つて、膝の上に組合された、お互の指に見入つてゐた。

ウイルヘルム記念教會の尖塔が灰色に煙る雪空に、何ものかを象徴するやうに現はれ出た。惠吉はそれが何の象徴なのか、しきりと考へてゐた。

ウーランド街、ヨハヒムターラー街、クールフュルステンダム、……卯女子はしきりとそこらあたりの街の名前を頭に浮べてゐた。

馬車はやがて、ガードの下で止まつた。

ツォーの停車場の中へ入つて行つた時、汽車に持ちこむ小荷物の番をし乍ら、山田がそこに立つてゐた。

先刻から傍に突つ立つてゐた身長の高い、頑丈な赤帽が、太い腕を下して、その荷物をさも輕さうに持ち上げた。帽子につけた眞鍮の番號札がきらきらと光つた。

多勢の人が蠢々と犇き合つてゐる驛の中をわけるやうにして、皆んなは歩いて行つた。兩替所の前には、血眼になつた人々が長い列を作つて待つてゐた。皆んなの手には、磅、弗、法、クローネとあらゆる國の札が握られてゐた。不圖の兩替屋が何かもぐもぐ呟き乍ら、その間を

しきりと彷徨いては良い獲物を探してゐた。實際に餘計くれるのである。

拳銃を腰にした巡査のヘルメットが、明るい電燈の下に輝いた。

（もう金を替へるあの不愉快さもしないで濟むのだ。）

さうは思つたものの、それが又惠吉には、何となく名殘り惜しくも思はれるのであつた。

待合室の中に一杯詰つた人いきれが、むうつと惠吉の顏を打つた。そこにはもう十七人の一行が集まつてゐた。見送りの日本人も多勢見えた。

三人はビールを飮んだ。そのビールが、このチーズが、一つ一つ皆んな離別を惜しんでゐるやうにも思はれた。

大使館の先輩と、皆川と、それからハンスが送りに來てゐてくれた。

惠吉が、どうだ、と尋いた。

ハンスは圓滿だと、答へて涼しい顏をした。

エンミーの家の人が自分を疑つてゐると思つたのは自分の疑ひであつた。他人を責めた自分はいつの間にか自分を責めてゐたのであつた。とも云つた。

『さあ、今村君、これからだ。君達はまだ若いんだ。亡び行く舊時代の斷末魔の呻きなんかに、耳を傾けるやうなセンチメンタリズムを探して、くれ。十年の後に當然な正しい事になるその事の爲に戰つてくれ。』

皆川が不思議に眞面目な聲を出した。

電氣時計の針が、一分毎に、プリン……プリン……と動いて行つた。

區切られた車室の中に席を定めると、荷物をそれぞれの網棚や腰掛の下にをさめて、兩人は窓の硝子を下して、そして顏を出した。

プラットフォームの向うに見える教會の、ゴシック式の塔の大時計が丁度八時を指してゐた。ウーファの活動小屋の明るいアークライトの光の射線の中に、入り亂れて降りしきる、雪の亂舞を見やり乍ら、山田が云つた。

『この分ぢやモスクヷは大變だよ。きつと。』

丁度そこへ人波を掻きわけるやうにして、富田佐一が飛んで來た。

『遲くなつて失敬しました。フリードリッヒの方と間違へてね。』

そして紙に包んだ二つの小包を渡すと、はあはあ息を切らせ乍ら附け加へた。

『これは、詰らんものですが、汽車の中ででも召し上つて下さい。それからこれは、恐れ入りますが日本へお着きになつてから、郵便にでもしてお送り下さいまし。道中さぞお邪魔でございませうが、どうぞお願ひします。』

『あゝ、これはどうも。……壞れもんぢやないんですね。』

『いゝえ。子供の洋服と、それから女のものが少しばかり。』

惠吉はその小包の上に書かれた富田三千代殿と云ふ宛名を讀んでゐた。柄にもない粹な名前の奧さんを持つてゐるもんだと思つた。

けたたましい電鈴の音がプラットフォームの向う端から響いて來た。人々の間には忙しい動搖が起つた。狼狽て降りるもの、乘るもの、握手するもの、接吻するもの、——（この忙しいのに!!）——それから言葉、ハンケチ、涙、……

『嫂さんによろしく。お大事にってね。』

やつとさう云つた卯女子の聲は怪しく震つてゐた。

『あゝ。……』

帽子を取り乍ら山田が答へた。

『ぢや氣をつけてね。とても寒いつて云ふからね。』

『左様なら。飛んだ蜜月だね、……』

皆川は帽子を取り乍ら云つた。
『大分伸びたらう？』
そして頭をぽんと叩いた。
多勢の帽子が後方へ動き出した。スローイングキッスが幾組かの間にキャッチボールをした。無數の別離の言葉が混線した。
山田は二三歩步き出したやうであつたが、人に間へて了つたのであらう、そのまゝ止まつてハンケチを振つた。
『兄さん！』
卯女子の沾んだ瞳の中に、見知らぬ人の顏に混つて、兄の顏がはつきりと映つてゐた。それが段々と霞んで行くと、わくわくとした胸の底からこみ上げて來る淚が、ぽたぽたと車窓の枠に落ちて行つた。
車窓は閉めなければならない。
彼女の眼には、あの驛の人混みの中を、獨りしよんぼりと歸つて行く、孤影淋しき兄の後姿があつた。別離の情が不意に彼女の心に滾々と湧き上つた。
（たつた一人の兄さんだ！）
車窓の外には、黑い夜のベールに包まれた、伯林の町があつた。數萬の燈火が夢のやうに一つ一つ淚ぐんでゐた。去るものも、入り來るものも知らぬ顏に、たゞに暗き大都會の夜の空があつた。
人は變り、月日は流れても、終りのない人生はまるで幕の下りない芝居のやうに、この大都會の中に渦卷いて行くのだ。
（あすこらあたりがアカチエン街ぢやないかしら？）
振返つた卯女子は、そこに惠吉の輝しい瞳を見出した。
二人つきり。――そんな氣が沁々と、卯女子の心を打つた。彼女は寄添ふやうにして惠吉の瞳を見上げた。
惠吉は眼をつむつた。
彼の眼の裡を、ソフトフォーカスの人生が、肅々として過つて行つた。
汽車は搖れて行く。
ケーニヒベルヒを出た汽車は、もう一面に雪に埋もれた一條の夜の軌道の上を、黑玉のやうな闇の中を、二つの魂を乘せたまゝ、波蘭の國境を指して、ひた走りに走つて行つた。

アカチエン街の部屋の窓邊に凭つて、灰色に煙る夜の雪空を眺め乍ら、その枝はいつまでも立つてゐた。やがて深い溜息をつくと、そのままソファに腰を下して、せつせと編棒を動かし始めた。
段々と出來上つて行く可愛らしい毛絲の上着を見やり乍ら、その枝は時々お腹の中に、それと動きを感じる、新しい生命の事を考へてゐた。
彼女の頰には幽かな微笑があつた。
毛絲の玉が長く絲を引いて、コロコロと赤い絨氈の上を走つて行つた。
（もうお歸りになる時分だわね？）
彼女は自分に呟いて見た。編物を卓子の上に置くと、身體を伸して柱時計を見上げた。
山田は默つて雪の附いたオーバシューースを脫いだ。

終曲

二十九日の新聞には、今村惠吉の歸つた後の貸間の廣告が、欄の所に出てゐた。行倒れの

二三行の記事と一緒に。

裏街の辻にしょんぼりと、忘れられたやうにともされた、瓦斯燈の蒼白い光は、年を巡つた今もやはり、この更ける夜さの靜寂を見守つて、仄かな灯影を投げてゐる。その丸い光の輪の中を、チラチラと音もなく降り積つて行く粉雪の、かそけき舞踏も青白く悲しげに見える冬の夜の街であつた。

一時の鐘を聞けば街行く人も絶えて無く、靴跡の凹みもいつとはなしに降り積る雪の下に消えて行く。

ふと、煉瓦塀の角の暗闇から、黒い一つの人影が現はれた。俯向き加減に腰を曲げて、杖に身體をたよらせて、二歩行つては休み、三歩行つては立止まるのであつた。その目をつむつた無表情の顔のどこかに、永い年月の憂苦の陰影が苔蒸した岩の罅れのやうに刻まれてゐた。

老人は今、貧しい家に殘して來た、たつた一人の孫のフランツの事を考へてゐた。襤褸に包まつて火の氣のない小部屋の中に震へて居る、病めるあの幼兒の事を考へてゐた。

からやつて彼が、フリードリッヒ街の外れのガードの下に、あはれ悲しき胡弓の音色に、通りすがりの人々の憐愍を乞うて得た、わづかばかりのお金は皆んなあの兒の一杯のスープに變つて行くのだ。

老人は考へた。

(若しこの俺さへゐなかつたなら、あの兒はきつと育兒院へ引取られて、何不自由なくその日を暮して行けるのではないか。俺はあの兒の爲に物貰ひをしてやつてゐながら、それが却つてあの兒の不幸になつてゐるのだ。)

さう思つた時、老人の足は力なく止まつた。彼は急に自分の空腹に氣がついた。さう云へばこの三日間彼の咽喉を通つたものは、冷たい水ばかりであつたのだ。

『あの、よくフランツの名前を呼んでは、お金をくれた、アニタとか云ふ女の人の聲も、この頃はとんと聞えない。人は去つてもこの俺は、いつの日迄あのガードの下に立ちつくして、人の憐愍を乞ひつゝ、この悲慘な生活を續けて行かなければならないのか?』

盲目の彼は、その時ふと、心の中にぽつんと明るい光の在所を見た。するとそこにほんのりと一人の女の顔が浮び出た。十年前に盲目になつた彼を見捨てて行つたあの女の顔だ。あの女の若い娘時代の顔だ。顔が微笑んでゐた。

と、彼は急に胸の動悸を感じた。ドキン、ドキンと大きく打つて、それが急に止まると、今度は全身を流れて不氣味な戰慄を感じた。凍傷に感覺を失つた彼の足が、ぶくぶくと雪の深みに埋まつたと思ふ間に、彼の身體は枯木のやうにそこへ倒れて了つた。

帽子の破れにはみ出した亂れ毛の上に、氣味惡く瞪いた白眼の中に、溫氣の失せた蒼白い顔の上に、破れ靴に覗かせた生白い拇指の爪の上に、そして凍傷に腫み、胡弓の銀線に擦られて、黑血の滲んだ手の上に、――雪は音もなく、同じやうな悲しい舞踏を續けては、チラチラと降り積つて行く。

投り出されたズックの襤褸袋の破れから、ヴァイオリンの首が覗いてゐた。銀線が冷たく青白い街燈の灯影を宿して光つた。

伯林の夜はしんしんと更けて行く。

(一九二四・一〇・一五脫稿)

年譜

明治三十三年

十月十五日、京橋區船松町十五番地に生れた。

三十三年と云へば西暦一九〇〇年で、丁度十九世紀と二十世紀の境目の年である。船松町は築地の河岸にあつて、明石町の居留地と向ひ合つてゐる。私の好みの中には、だから、下町風とハイカラ好きが、奇妙な配合を持つてゐる。

明治四十年

九段の暁星小學に入る。この學校は、どうも私の性に合はなく、中學を一中へ受けると云つて、先生と喧嘩をした。それでも七八番の成績で卒業した。

大正二年

府立一中へ入る。この學校は、可なり几帳面であつたが、私は勝手にやつてゐた。文學に興味を感じ出したのは、四年の末からであつた。コナンドイルだの、ミュッセだの手當り次第亂讀した。それから、やゝ系統的にモウパッサンのあの食後叢書で、十二冊ばかりの短篇をあらまし讀んだ。

大正七年

一中を卒業して一高を受けようとしてゐるうちに、運惡く腸チブスにかかつて了ひ、一高の入學試驗のある日を、鎌倉の大佛の前の病院の中で暮してゐた。

大正八年

一高の獨法（これは後で文科乙類と變つた。）へ入學した。この三年間も、學校の方は至極つとめなかつた。暇があると外國の長篇に讀み耽つた。特に、ジョージ・モーアの長篇は不思議な程私を惹きつけた。

大正九年

二年の時、校友會雜誌に初めて、二三の小說を書いて見た。それから、「橄欖」と云ふ雜誌へ詩や短歌等を少し發表した。

大正十一年

一高を卒業して、帝大の英法を受けて入つた。六月、大學を一時休學と云ふ事にして獨逸に行つた。伯林に居を定めて、ウンテルデン・リンデンの伯林大學に入學して法科に籍を置いてゐたが、その實はフリードマンの音樂の講義を聞く位のもので、毎日芝居と音樂會にばかり入り浸つてゐた。ラインハルトの舞臺、モイッシイ、モスハイム、クラウス等の名優の演技、カルザビナの舞踊、バチスチニ、ボーネン、ドュックス、フルトベングラー等の音樂會を聞いた。ツワイクだのトマス・マンだの少し古い所でクライストあたりを讀んだ。

大正十二年

例の震災で私の家は全燒して了ひ、殆んど破産に近い打擊を受けたので、私はそんな暢氣な事をしてゐられず、早速借金して、あわててシベリヤ經由で歸つて來た。日本に歸ると住み慣れた家は跡方もなく、父母や兄弟は淀橋の小さな借家に移つてゐた。私も早速自活の道を講じなければいけなくなつた。

大正十三年

この暮に幸ひと、伯林の生活を描いた「望鄕」が「時事新報」に當選したので、伯林の借金も返せたし、それから後ずうつと、原稿で兎に角生活して行けるやうになつた。その時の選者は菊池、久米、里見の三氏であつた。

大正十四年

『[illegible]』(『時事新報』)に連載さる。(元日より)『望郷』「新潮社」より出版さる。

九月、村山知義、河原崎長十郎等と劇團「心座」を作り、築地小劇場に旗擧。「三月三十二日」を上演す。

「首」(新潮)「まいとん」(改造)『三月三十二日』(『婦人公論』)「白虹貫日」(演藝畫報)等を發表。

當時芝區南佐久間町に八疊の部屋を借りてゐた。

大正十五年(昭和元年)

『鰊』(『新潮』)『歸りを待つ人々』(『改造』)『シベリヤの燻漢』(改造)「獨り」(演劇新潮)「黄昏の稿」(都新聞)「おらんだ人形」(文藝春秋)「忠僕」(朝日新聞)「街に笑ふ」(新潮)等を發表。

この年の夏、片岡、石濱、川端、横光と逗子の濱で共同生活をやり、そのまま逗子に家を借りて住ふ事にした。

新劇協會で『三月三十二日』上演。

『一週間』(リベディンスキイ著)を改造社より出版す。

昭和二年

「歸つて來た聟」(文藝時代)「橋」(改造)「殺幻」(週間朝日)『底邊をひく』(サンデー毎日)等を發表。『歸つて來た聟』は新劇協會で放送。

この年の九月に秋田惠美子と結婚、目白文化村に移る。

創作集「橋・おらんだ人形」を改造社から出版す。

昭和三年

『競馬馬の如くに』(創作月刊)「緣」その他通俗ものを二三と隨筆風のものを書いたきりであつた。十二月に、東京大阪の兩「朝日新聞」の夕刊に、「有閑夫人」を連載した。大阪角座で岡田嘉子等が「歸つて來た聟」を上演。

昭和四年

『花はくれなゐ』を「婦人公論」に一ケ年、「郵便」を十五回ばかり「讀賣新聞」に、「轉る石」を「福岡日々」に連載。「七面鳥」(改造)「織母」(文藝春秋)「マクダレナ」(中央公論)等を發表す。

ハウプトマンの「鼠」(五幕)を「世界戯曲全集」に譯載す。新國劇十一月興業(演舞場)の爲めに「ツェッペリン插話集」を書き下す。「新進傑作小説全集」(平凡社)で「池谷信三郎集」を。「日本戯曲全集」(春陽堂)出版。

長男彬生る。牛込若宮町に引越す。

昭和五年

「ツェッペリン插話集」(夕刊大阪)「[illegible]」(サンデー毎日)「[illegible]」(中央公論)「[illegible]」(中央公論)長篇「遙かなる風」を「河北[illegible]」他[illegible]紙に百四十六回、「[illegible]ふ鋼」をサンデー毎日に連載す。

「戀の横顔」原作、「秋の小径」、「婦人世界」所載、東亜キネマで映畫化さる。

ズーデルマンの「憂愁夫人」を「世界文學全集」に譯載する。

中村正常、舟橋聖一、小野松二、今日出海等と劇團「蝙蝠座」を起し、第一回「ルル子」第二回に「積木」を上演す。

「蝙蝠座同人合作の「ルル子」を平凡社から、「新進池谷信三郎集」を改造社から、「有閑夫人」を新潮社から出版す。

東大久保十四に引越す。

昭和六年

『ミサ子夫人とアレキセイ』(文藝春秋)『スリッパ』(婦人公論)「賞心」(改造)等を發表。

『船』を「報知新聞」に連載。

『都會を縫ふ針』『遙かなる風』と東亜で、「新婚風景」「[illegible]作[illegible]」を映畫化す。

「遙かなる風」を新潮社から出版す。

肉體の暴風
氷る舞踏場
博齒になる馬車
二千六百八十二哩

中河與一

海の歌

中川學　一5

おせまつてたかまると思ふ大きな波はたちまち
岩にとゞろきしぶくき
ひき波のひきてゆるらく巻きかへしよすべ
き浜は砂はしづまる
保安林のなかの草道むしあつしとど
ろき聞ゆ土用の大波
山腹のーたよしたれ萩咲きみちて輝かしか
れをたつみきはすだ

肉體の暴風

一

夜が更けるに從つて、時計の針が午前零時の空つぽな袋を突きさして、賑やかな港の街も漸く生氣を失つて行つた。

寒い北風の中で、幾何學的な家並の列と、消えた廣告燈と、電車の軌道とが、默り込んだままその疲れきつた骨を、冷たくさらしてゐる。

時として白い光の帶を振る自動車が現はれると――濁水のやうな空氣の中に、醉つぱらつた異國の水夫達の足どりを、一瞬間孑孑にして見せたりした。然し、それも忽ちにして消えると、自動車は逆になつたかと思はれる程の速力で、赤いテールランプの光をひきながら、すぐ街の底へ落ちて行つた。華やかな夕ぐれの歡樂を、更けすぎた寢床に運ぶために違ひない。

と音を聞いた。タイヤのやうな鈍い響ではない。ギリ、ギリ、ギリ、ギリ……

暫くしんとしてゐた。

ビオレ化粧品店の主人、万太郎は、寢室への階段をのぼらうとして、ふと足をとめた。自分の足音ではないらしい。澄ましてゐる耳に、今度はひとしきり砂を吹きつける風の音が戶を慄はせた。

「ギリ、ギリ、ギリ、ギリ……」

彼は激しい動悸を感じた。然しうす暗い階段の途中で、ふとジャスミンの匂ひをかぎつけると、これはまた自働廣告人形のネヂがもどけてゐるのではあるまいか――と考へなほした。

「ギリ、ギリ、ギリ、ギリ……」

「ギリ、ギリ、ギリ、ギリ……」

「ギリ、ギリ、ギリ……」

今度は間をおいて、長い間つづいた。どうもネヂではないらしい。裏木戶の方である。そして最後にドンと何か戶にあたる音を聞いた。

彼はぬき足で、靜かに階段を下りて行つた。たしかに強盜に違ひない……。

「何か強い繩でもないかな」

沈着な彼はそんな事を考へた。

戶口のそばへ行くと、細い目鋸の先きが、黑く蛇の舌のやうに、時々ちらちらと、家の中へのぞいてゐた。雨戶を切り拔からうとしてゐるのに相違ない。

やがて鋸が半圓形を描くと、一瞬間、外から思ひきり烈しい壓力が、グッと注意深く加へられた。と同時に、その穴から忽ち白い、眞白い手がのぞいた。

白い手は主人の足の近くを暫く撫でてから、次第に錠前の方へのびていつた。

ちつと立つたまま、漸く冷靜に見すましてゐた主人は、かけがねに手が屆かうとした時、飛びかかつていつて、痺れる程きつく白い手を掴んだ、と手袋だけがズルズルッとぬけようとした。

彼は一層強く握りしめると、用意してゐた麻繩で、手のくるぶしを切れるほど激しくしばりあげた。

頑丈な――白い手は、手袋の中から主人の手を幾度となくひつかからうとした。

「こらッ、離しやがれ、承知しねえぞ」

外から鋭い笛のやうな哀願と威嚇の聲がした。然し主人は、麻繩が見えなくなるまで強く腕に喰ひ込んでゐるので安心して返事もしなかつた。そして荒々しく手をからみあげると、細

の雨端を、五寸釘の打つてある鎹に結へつけた。

「動いてみろ」

彼はさう思つた。

白い手袋は空の中を幾度となく眞劍に摑まうとしては、開いたり、すぼんだりしてゐた。が主人の強い力で縛られた手首は、だんだん血行がとまつていつて、次第に紐の中で紫色にかはりかけてゐた。

主人は大いそぎで、店員の寝てゐる部屋へ行くと、先づ彦と芳とをゆすつた。そして眠つてゐる店員を次ぎ次ぎに起した。

「おい、みんな起きてくれ。見張りをしてゐてくれないか。泥棒をつかまへたんだ。泥棒を」

若い店員達は、あわてて床の上に起きあがつたが、晝間の疲れで、暫く眠さうに、フラフラしてゐた。

「おい、手をしばりつけてあるんだから」

六人の店員は、寒さが身にこたへると、背中をかがめて、裏口の方へ走るやうにして出て行つた。多少の恐ろしさと好奇心で。

殊に小さい芳は、自分の想像力による恐怖心で、齒の根が合はぬほどガタガタしながら、彦の後について出て行つた。

くくられた手は誰かにダラリと手首から下へ向いて垂れさがつてゐた。が、それは垂れさがつてゐると云ふより、今は釣りあげられた魚のやうになつてゐた。

背の高い主人は、すぐ電話室へ駈け込むと、警察へ電話をかけた。

とても大きい奴がひつかかりましたよ」

それから彼は、勝利者らしい餘裕をもつて、マントをかぶると、外へ出た。見屆けようと思つてである。

店の戸を開けると、さすがに寒い二月の風が、鋭い月の夜を吹きつけた。

と何か異様な胸をうつ叫び聲が聞えた。彼は急いで裏へ廻つて行つた。と、其處には誰もゐない。くくつてある可き筈の犯人の影さへが見えないではないか。何物の影も……

彼はふとすると、自分が幻覺の中にでもゐたのではあるまいかと考へた。何故と云つて、彼は餘りに妻を疑ひすぎてゐたからである。今夜も彼は、妻の夜の動靜を氣遣ふために、一人階下の部室で、ストーヴを燃やしてゐたのである。

と、居るべき筈の犯人の姿が、見えない——

これにはさすがに放膽な彼も、一寸異様な寒けさを感じて、足がすくんだ。然し思ひかへすと彼は、平靜な氣持になつて、戸の近くへ行つてみた。と血が——おびただしい血が、腕の切り口からしたたり落ちてゐるではないか。

わづかな穴の口からもれる細い灯が、音をたてて、したたる血を、もつれた黒絲のやうに見せてゐた。血は戸をぬらしコンクリートの地面を次第に廣くよごし、遂には遠くへ逃げて行つてしまつた人間の匂ひを點線で示してゐた。

——何て男だ。自分と自分で、己れの腕を打ち切つて逃げるなんて——

「彦、芳、番をしてゐるのはいいが、犯人は腕だけだ」

二人は戸越しに主人のこの聲を聞くと、一層烈しい恐怖心に襲はれて、ぶるぶるツと肉體が慄へだした。今にもその腕が自分達の首にからまつてでもくるやうに。

芳は蒼ざめながら、彦の肩にしがみつくやうにした。

主人は無氣味な氣持に打たれると、もう一度電話室へ驅け込んだ。

二

「ね、おい、俺は腕まで切らす氣はなかつたん

だよ。けど思ひきつた奴だな。あそこまでやられると、こつちの方が惡い事をしたやうな氣がするよ」

「だつて、自分勝手に切つたんですもの、仕方がないわ」

細君が答へた。

「然し、あんなにして縛らなかつたら」

街の通りには、何事もなかつた翌日のやうに、人が雜沓しながら通りすぎてゐた。

「でも、仕方がないぢやありませんの。反對に這入られて、こつちがやられた日には、たまつたもんぢやありませんわ」

「お前は一寸も犯人に同情しないね」

「だつてあたりまへだわ、そんな惡い奴を惡く言ふのは」

「さうかね、けど少しお前は惡く云ひすぎるよ。お前は何か隱してゐやしないかい。本當は、あんまり惡く言ひたくないんぢやないのかい」

夫は妻の美しい顏の中にある形のいい唇を見つめながら云つた。

「まあ、また始まつた。よして頂戴よ。いくらなんだつて……」

細君はツンとして、怒つたふりをすると、店の方へ出て行つた。

店には狐の毛皮で詩を綴つたやうな意氣な外套をきた毛唐の女が、剃刀をあてて頰を青くした三人の男と、ひとかたまりに頭を集めてゐた。そして日本風の口紅を選擇しながら喋つてゐた。

「これ、どこか鳥居のやうな色をしてゐない、赤い」

大方汽船から上陸したばかりの客達にちがひない。

と、つづいて黄とエメラルドで染めわけた丸いベレーを冠つた青年が這入つて來た。彼は毛唐と並んで品物を選ぶ事に興味を感じたのに違ひない。

見てゐると、細君は其の青年の横顏が次第に氣に入つて來た。

夫はまた店へやつて來た。

「だがね、おい、矢野警部の話では、犯人の手は非常にキャシャな、いろんな女の思ひ出を持つてゐさうな手だつたといふんだ。それから指紋によると、確かに初犯だといふ話なんだが……」

「でも、そんな事、わたしとは何の關係もないぢやありませんの」

細君はうるささうに、さう答へながら、夫の方へ顏も向けないで、熱心に青年の横顏を見つめてゐた。

「ぢやね、お前は犯人を探しだす事には興味がないのかい」

「そりやあつてよ。だけど私をそんなに責めたつて仕方がないぢやありませんの、私を責めたら犯人がつかまるとでもいふのならいいけど……」

細君は少し不機嫌になつて云つた。

と主人は會話の方向をかへた。

「お前はさつきから何を見てゐるんだね、いつたい」

「店の方よ」

「店の方の何だね」

「若いお客よ」

細君はふざけるやうに答へて笑つた。すると萬太郎は何時ものやうに、細君の正直さが氣に入つて一寸嫉妬せずにはゐられなかつた。

「とにかくね、犯人と關係させて私を詰問するのはよして頂戴」

その時、主人は店にたつてゐる青年のそばへ行つて、襟があるか無いかを、一へん檢査してみようといふ衝動に襲はれた。

然し青年は、生憎兩手を立派に持つてゐ

た。そればかりか、よく見ると、ピアノでも彈けさうな青年の長い指の先きには、綺麗なレッテルのやうに化粧した爪がはつてあつた。

主人は踵をかへして細君と向き合ふと、急に自分の若い妻に限りもない魅力を感じだした。姙娠した彼女には一層不思議な美しさが露はになつてゐた。

「おい、來ないか、こつちへ」

彼は、次の間へ這入ると、妻の襟足にぐツと手を廻して、くるツと引き倒すやうに抱擁した。女の胸の甘い匂ひがした。

「可愛い奴、許してくれ、疑つたりして、けど、お前は本當に俺に嫉妬を起させるほど美しいんだ」

「よして頂戴よ。氣違ひのやうにおつしやるのは」

「……………」

「ほんとに、あれから毎日私をいぢめ通しなの御存じ」

そして彼女は彼の肩にあまえかかるやうにすがりついた。

妻の亞紀子は、万太郎にとつては若い後妻であつた。彼女は彼が經營してゐる香水工場の霧の中から連れて來られた。

この多情な貧しい女工は、然し万太郎に初めて見出された時、即座に喜んで彼の交渉に應じた。が多數の男工達と手を切つてくれ、といふ註文にだけは、容易に應じようとしなかつた。つまり、彼女は戀愛に對して、何か一つの信念のやうなものを持つてゐたからに違ひない。

「ぢや首をきるよ、彼奴等の」

「どうぞ、お勝手に。けどそんな事なすつたら、私も逃げだして行くかも知れなくつてよ、あの男達と一緒に。そりや、あの人達と來たら、とても若くてはちきれさうなんですから」

彼女は思はせぶりに、彼等の逞しい夜の力を追懐するやうに云つた。

万太郎は戰術を訂正しなければならなかつた。そして彼女を徐々に、馬でも慣らすやうな心持で、慣らしてみようと考へた。そして長い間かかつて、兎に角、死んだ先妻の子である万太を里子に出す事を餌にして、彼女を家庭へひきとつてしまつた。

「美しい亞紀子、いつたいお前は何が好きなんだね、好きなものを云つてくれ」

「……………」

「わしは、お前が一等好きだ。けど妙にお前の顏を見てゐると、わしは幸福と嫉妬とを感じだす」

沈着な主人は、妻の魅力に酔ひしれながら、彼女を兩手に抱きあげて、奥の部屋へ這入つて行つた。そこには雪の富士山が動くやうに作つた、白い天鵞絨の蒲團がボーテを匂はして横たはつてゐた。

三

一家の贅澤な生活の中に、手がかりのない、例の手のない男の幻が、時々不氣味に蘇つて來た。その爲めにか、万太郎は妻を征服してしまふと、狂氣のやうにその亂行を四方に發展させた。亞紀子は次第にブルヂョアの氣風に染んで、今では毎日、馬車に絶え間もない觀劇をあてがつてゐた。

その間に、彼等の娘は次第に成長し、うなゐ髪がおさげになり、皮膚が美しく滑らかな脂肪を浮かせだした。そして兩親の亂行に鋭い注意力を彼女が傾けだすと、又いつものやうに冬がやつて來た。

近くの海の色が次第に白けて、烈しい波を立てだし、測候所の氣象塔が、日ごとのやうに暴風を豫告する灰色の大きい籠をぶらさげた。すると、一つの曲藝團が何處からかやつて來

て、見るまに埋立地に大仕掛けの小屋を張りだした。

街の辻々に、あッと次の瞬間に片唾をのむやうな、際どい輕業のポスターがベタベタと揭げられた。サキソホンの音が、港に碇泊してゐる汽船の吐きだす煙にまじつて、時々流れて來る。

年増の伯爵夫人のやうに着飾つた亞紀子は、娘と今は番頭になつてゐる芳とを連れてテントの特別席に坐つてゐた。

一輪車に跨つた道化役者が、客の前へおどけた恰好をして現はれた。

海豹が長い鼻の上で地球儀を廻轉させた。

面をかぶつた男と女とが、そつと手つなぎをして綱渡りをした。

手のひらの白い黑ん坊が、見るまに太い鐵の棒をひんまげてしまつた。

ピストルが鳴つた。一匹の馬が興奮しながら火焰の輪を跳びくぐつては、幾匹ゐるとも知れぬ位、幾度となく輪の中から馬が跳び出して來た。

若い筋肉の立派な男が、大きい籠の內面をオートバイで廻りながら下らうとして、數十尺の高い籠の頂點にのぼつた。人間が小さく見えた。二人の助手が、オートバイを支へて、出發の合圖を待つてゐた。

「おッ、あぶない！」

突然に娘は母親の手を握つて叫んだ。オートバイは小銃を激しく擊つやうな音をたてて、籠の內面を煙だらけにし、螺旋狀に危險な位置を保ちながら、凄じい怪速力で走り下つてゐた。そして地面に近づかうとしてゐた。

と突然、見るから美しい青年が現はれて、オートバイの下じきにならうとした。が彼は見事にも花びらのやうに肉體をひるがへすと、次の瞬間にはオートバイの後部の座席にちやんと飛び乘つてゐた。それは明かに肉體の運動による技術の魅力であつた。

やがて籠の一部が開かれると、籠の內側からオートバイは觀客の方へ走つて來た。

あとから乘つた青年が、座席の上で、身體をかたむけ、さかだちし、そして觀客に機嫌のいいキスを投げて廻つた。

「まあ、ほんとにびつくりしたわ。私、しかれたかと思つたの」

「うまいのね、なかなか」

亞紀子は多情な口調で娘の驚きに答へた。然し、こんな會話は、恐らくこの灰色のテントの中の總ての女性が用意してゐたものに違ひない。

何かの噂がしたくなる程、彼の技術は敏捷であつた。そしてそれにもまして彼の容貌は魅力的であつた。

芳は暫くしてから親しい口調で云つた。

「お孃さん、僕がいつていふものに間違ひはないでせう」

「ほんたうだわ」

「こんな素敵な離れわざ、今まで見た事がなくつてね、お母さま」

「本當に私も久しぶりに來てすばらしいものを見ましたよ」

「芳さんはどうして知つてゐたの」

「だつて大變な評判ですよ」

亞紀子も娘も、芳に誘はれた事をよかつたと思つた。

芳は尊敬と思慕の氣持で、美しく着飾つた二人のうしろに、ことにお孃さんの近くに坐り込みながら、しきりに幸福を感じてゐた。

極度に緊張した不安の後で、氣持のいい青年のゆるやかな速度の旋回と音樂とが入り混つて、觀客の感情を次第に華やかなものにしてゐた。

「本當にうまい」
「素直だわね」
「感心しましたわ」
観客の視線はゆるやかに二人の青年に從いて廻つてゐた。
「いい男だわね」
「全く素敵な體格だわね」
「さすがにうまい」
「呼びものですわね、何といつたつて」
「ほんとにヒヤヒヤしたわ」
「二人ともいいのね」
「けどずつとあとから乘つた方がいいぢやない？ 顔も、身體も」
キスが幾度となく送られた。見物席ではいろんな會話が人々の口にのぼつてゐた。
亞紀子は横桁に舞臺の方を見てゐたが、突然立ちあがつた。舞臺裏を訪問しようと思つたからである。

四

「お嬢さま、お嬢さまは毎日どちらでございますの」
「どちらだつていいぢやないの」
「あてておみせしませうか、曲藝でございませう」
「え、さうよ、私、すつかり氣に入つたの」
「あの曲藝師でございますか」
「馬鹿ね、婆や、人が笑つてよ、そんな事いふと。私、あんな冒險的な事がとても好きなのよ」
「でもお嬢さま、あの男もなかなかよろしいぢやございませんか」
「さうね、一寸」
「やつぱし……」
「いやよ、お前、そんな事いつて」
娘は紫色の椅子に腰かけて、三面鏡に向つたまま、誇りかに喋りつづけてゐた。
娘をからかつてゐるのは、ピオレ商會の職工長の老婆であつた。彼女は時々工場主のうちへ手傳ひに來る事になつてゐた。
「ですから、一度逢つておやりなさいつて申しますのに」
「馬鹿、お前は何てことを云ふの、わたしにそんな事いつていいのかい」
「いや、毎日、わたしのうちへまゐりますもんですから」
「だから、どうしたといふのよ」
「ですから、およろしかつたら一度……」
「馬鹿、馬鹿いふもんぢやないわ。お前はほんとに馬鹿ね、年寄りの癖して」
「お嬢さま、ごめん下さい」
「ごめん下さいもあつたもんぢやないわ」
娘は痛快に老婆を叱りつけると、また一生懸命に鏡を見つめてゐた。鏡を見てゐると、誇らしい氣持が湧いて來た。
彼女はイブニング・ドレスに厚い毛の外套を着て出て行つた。如何にも十七歳の娘らしかつた。
見物席には何時ものやうに、觀客がむつとするほど一杯つまつてゐた。
時々海の方から潮風が來ては、テントの屋根を羽ばたかせてゐる。彼女は長柄の眼鏡を手に持つて、舞臺の方を見てゐた。
若い曲藝師は何時もきまつて特別席に坐つてゐる彼女に氣付いてゐるらしく、彼女の方へ向いて愛嬌のいい挨拶をした。
彼女はそしらぬ顔をして、人間が小さく見える高い竿の頂點を見つめてゐた。と時々二階にある衣裳部屋で、鋭くやせて神經のでた少女が、着物をきかへたり汗をふいたりしてゐるのが眼についた。餘計なものだと、彼女はきたならしく感じた。

外へ出ると、雪がチラチラしてゐた。彼女は歸り途、自分の心が非常に浮き浮きしてゐるのを何處かに感じてゐた。手を胸に持つてゆくと、どうやら心臟のあたりでもあるらしい。彼女は暫く歩いてみようと考へた。

「さう、寄つてみてやらうかしら、あいつのうちへ」

彼女は大膽にさう思ひつくと、雪の中に立つて、貝殼のやうなバニチイ・ミラーを一寸のぞいた。

そして厭な匂ひの漂つてゐる不潔な支那街を漲ぎつてから、手にさはるのもうすぎたない格子戸をあけた。

老婆がにこにこしながら出て來て、彼女を部屋の中へ案内した。

「いらつしやいまし。お孃樣」

娘は汚れた疊の上を、飛ぶやうにして爪先きで歩いた。疊が煮しめたやうな色になつて、ところどころに銅貨のやうな穴があいてゐた。

「あそこに坐つてゐるのがあの人です」

娘は障子の隙からのぞくやうにして見た。

と、若い曲[illegible]青年が緣側に坐つて、白く空間を刷りだしてゐる雪を眺めてゐた。

「聲をかけませうか」

すると、彼女は突然手を老婆の口の方へさしだした。

「さうね、よして頂戴、私、やつぱし歸ることにするわ」

そして娘は急に胸をドキドキしだすと、まつ青な顏になつて、玄關の方へ踵をかへさうとした。なんでもない積りで來たのに、自分ながら不思議な氣がしてたまらなかつた。

「せつかくおいでなさつたんですのに、ちやお二階へおあがりになりません？　お孃さま」

さう云はれると、彼女は理性を失つた人のやうに、言はれる通りに二階へ上つて行つた。音をたてないやうにそつと先爪きだちで……

雪の爲めに雨戸をしめたのか、二階は人の顏がぼんやりするほど薄暗くなつてゐた。

と誰かがあがつて來るけはひがした。彼女は又身體がふるへるのを感じた。すると彼女の身體は無言のままに、暗い部屋の中で、……………………………。つづいていきなり自分のからだの上に何かかぶさつて來る激しい重力に壓倒された。

五

彼女が青年に逢ふのは、いつも夜にきまつてゐた。月があつたり、星がなかつたりしたが、彼女にとつて、その夜がどんなに樂しかつたらう。

青年は優しい口調で云つた。

「お孃さん、私は貴方を、何時もあの明るい觀覽席で見つめます。けど、私はこの暗い部屋で貴方に逢ふのがどんなにうれしいでせう」

そして彼は、自分の近くへ來てゐる彼女の手をとつて自分の胸へ持つて行つた。

「うれしい」

彼女は夢でもみてゐるやうな氣持で云つた。

「暗いところでお逢ひする方がずつとうれしいわ」

彼女は、何か、そんな冒險といふやうなものが、男女の間にあるものと考へてゐた。といふよりは、寧ろ暗いところに、二人の人間を一つにする[illegible]いものが、隱れてゐるやうに思はれてならなかつた。すると男の呼吸があたたかく彼女の頰に感じられた。

「今度は、何處かのホテルでお逢ひしたいと思ひますが」

男の顏が、何か甘いものを含んだやうに闇の中に這入つて來た。

然し、彼女が一度、曲馬團[illegible]を離れた時、

青年は彼女に非常に冷淡にしてゐる。それどころか、一語の挨拶をさへ苦い顔をしてろくろく返しもしなかつた。
摩耶子は青年が感情をかくしてゐる事を思ふと、少しなさけない氣がして、ツンとして睨みかへした。
とその青年とすつかり同じやうに、これもまた素敵な壯年者が——青年の父親に違ひない、彼女の方へ近づいて來て云つた。
「お孃さんは、どちらからいらつしやいました」
「わたし、わたしはビオレ商店の雪本です」
「えツ、雪本さんですつて」
男は非常に驚いた顔をして、あとしざりした。彼女は身動かない片隅に變な注意をかたむけた。
「雪本さんのお孃さんですか。それぢや、お宅のお母さんは私を知つてゐられる筈ですよ」
娘は意外な言葉に、いゝ、どぎもを拔かれながら、呆然として尋ねた。
「どうしてなの」
「どうしてつて、お母さんにそつとお尋ねになつてみてごらんなさい」
男は笑ひながらさう云つた。

舞臺では盛んな拍手と歡聲とが、宛も彼女を嘲笑でもするやうにおこつてゐた。
それから間もなくのこと、彼女の母親——伯爵夫人のやうに着飾つた亞紀子は、デパートメント・ストアから出ようとして、鋪道の上で昔の友達に出あつた。
「おや、玄さんぢやないの」
「これはお見それしました、奥さん」
「どうしてまた、こんなところで」
「今どちらで」
「私は雪本つて……」
「それは知つてゐます。大變お盛んで」
そこで一寸言葉をきつてから、
「それはさうと、いいお孃さんがあるぢやありませんか」
「どうして知つてゐるの、そんな事まで」
「實は先日、舞臺裏へ見えられたもんで。わたしは今ここで打つてゐる曲藝團の仲間つてところなんですよ」
彼女は玄吉を連れて、ファウンテンのテラスへひき返した。
「お前さん、大變な景氣ぢやないの。わたしはそんな事とは知らずに、行つてみたけれど、大變なものね」
「そりや、どうもありがたうございます」
「それにあんたの一座は、とてもいい男ぞろひぢやないの」
「また、あれですか。昔に相かはらずで……」
「ほら、オートバイに飛び乘る男ね、いいぢやないの」
「ところが、あれなら私の娘なんですよ」
「娘さんだつて、娘さんがおありなの、あんたに。いや、でも私が今いつてゐるのは、あのオートバイに乘る方の男の事なのよ」
「いや、あれの事ですよ。あれがわつしの娘だつて云ふんです」
「なんだつて玄さん。冗談もいい加減があつたもんよ」
「冗談なんか。はつはつはつ……」
「だつて」
「だつて奥さん、本當なんですから、男裝させてゐるんですから、娘に」
「まあ、何て念入りの冗談を云ふんでせう、お前さんは」
「けど、困りましたな。實際なんですから」
「あんたは、また嫉妬いてるのかい。正直に言つたつていいぢやないの。あんたの嫉妬と來ち

や、全く工場以來ね」

「いや、奥さんには澤山うらみがあるんです」

さう強く云つてから、玄吉は更に續けた。

「それは兎に角として、あれは實際わつしの娘なんです。わつしはもう女が嫌ひになつて、あれにや、子供の時から男の教育をして來たんです。けど、ほんとは、あれは女なんです。あいつはわつしの一人つ子なんですよ」

不思議な事のあればあるものと聞きながら、亞紀子は十幾年か前、自分の捨てたこの男が可哀さうになつて來た。

「ぢや本當なのね。あのオートバイに飛び乘る男よ」

「さうですとも。わつしの本當の娘なんですよ」

「なるほど、さう云へば、仕草に何となく女らしいところがあるのね。だけど……」

亞紀子は暫く默つてゐてから云つた。

「それはさうと、お前さん。その手はどうしたんだね、動かないの」

「こ、これですか。これは義手ですよ。あれから後、紡績へ出て、マングルに食はれてね―」

彼はばつが惡さうに、義手を入れた腕を少しばかりあげて見せた。

「さう、そりや、でも大變だつたのね」

亞紀子は一寸心をかすめるものを感じた。

「わつしは未だに運動が止められんで、うだつがあがりませんよ」

「運動つて、社會主義かね」

玄吉は大きくうなづいた。

「奥さん、けどこんな所で奥さんに逢はうとは思ひがけませんでしたよ」

「ぢや、そのうちに又逢はない？　ゆつくり」

「ぢや、きつと」

亞紀子は昔の感情をとりもどしながら云つた。

「さやうなら、奥さん」

男は片方の手をポケットの中へぶらさげたま、肩を振りながら立ち去つた。

眉の長い、男らしい面影は昔のやうに變らないが、さう云へばお互ひに激しい變り方だと、亞紀子は思つた。若い自分の戀人であつた彼――然し自分に對して何となしに示すあの威たけだかが氣に入らなかつた。

彼女は自動車に乘つてからも、ゆすぶられながら、其の事が長い間氣にかかつてならなかつた。若しかしたら階級的感情とでも云ふ奴かしら。それとも未だに昔の事を忘れかねて恨んでゐるのかしら……彼女は自分の昔をしみじみと思ひ返しながらゆられてゐた。

六

亞紀子は家に歸ると、手袋をぬぎながら、ストーヴのある客間へ這入つて行つた。山梔で染めた赤いペルシヤ絨毯が見事に擴がつてゐた。

「足のとどかぬ椅子は衞生に惡いんですつてね。お父さん」

「そりや、さうだらう。足が地につかんといふ奴だからな。はつはつはつ―」

万太郎は娘と向きあつて氣樂さうに笑つてゐた。

「今日は珍らしい事を聞いて來ましたわ」

亞紀子が椅子にかけながら話し始めた。

「あの曲藝團の若い男ね。あれは女ですつて」

「なんだつて、女、あれが」

万太郎は久しぶりに生き生きした口調で娘に尋ねかへした。

「ええ、女ですつてよ。あの男が―」

「さうお、あの青年が、でも……」

娘はをかしさうに否定の口調でさう云つた。

「女だからですよ。人から聞いたんですが、子供の時から男装させてゐたんださうですの。さう云へば何だか、腰なんか女のやうでもあるぢやありませんか」

「なるほど、こりや稀らしい話だ。久しぶりにいい話を聞き込んだ」

万太郎は眼鏡を一寸いらつて、長い間の飽き飽きした戀愛のデザートの中に、まだ新らしい技巧の世界が、殘つてゐる事に氣付いた。彼はハイカラ風にしない事を、最もハイカラだと考へてゐる程、最も進んだ紳士であつた。

「けど、一寸不思議な話ね」

「いや、假装といふ事は、戀愛には昔からつきものの大きい技巧の一つだよ。例へばプーシュキンの「田舎娘」やモウパッサンの「寝室の中」や、セクスピヤの……」

「もう結構、そんな事私にはどうでもいい事ですわ」

「いや、一寸思ひ出したから聞かせたまでだよ。あまり退屈だから」

「お父さま、私に聞かして頂戴よ」

それにしてもと、娘は夜の中に埋れ這る男の姿を思ひ出して、肝がつぶれる位不思議でならなかつた。それでは闇の中で、男がすり變つてゐたのであらうか。

「いや、それだけの事だがね」

と父親は輕く受流した。と亞紀子が話頭を轉じるやうに次の質問を試みた。

「あの騒動はどうなりまして、工場の」

「あいつらは、まるで鶏のやうに馬鹿だ。あんな淺はかな手段で俺達がひつくり返せるものか」

六尺に餘る主人は、肉體の過剰を、どうにももてあましてゐるやうに云つた。

「お母さま、けど、今の鐵人の話ね、本當でせうか」

突然娘が熱心に尋ね返した。

「本當だとも、お母さんは聞いたんですから、確かな人から」

「ぢや、あの曲藝團の人から」

母親は一寸當惑した風をして、靜かに首を振つた。

「町全體の噂だよ。それでなほ大變な人氣になつてゐるのよ」

「でも、御覧になつたわけぢやないんでせう。そんなところを」

「そりや、さうだけれど」

「私、どうしてもそんなこと考へられませんわ、だつてあんなに[illegible]で、あんなに[illegible]くつて、それにあんな[illegible]い事を[illegible]してゐるんですもの、毎日」

「けどお前だつて見たわけぢやあるまい」

さう云はれると、娘はぐツと詰つたが、それでもハッキリと不安を拂ひのけて云つた。

「けど私、どうしたつて、女だとは思はれませんわ」

「いや、これはチヤンと見とどけるに限る。机上の空論では仕方がないよ」

万太郎は流石に權力のある實際家らしく、さう呟いて笑つた。

その日、娘はもう一度、曲藝團へ出かけて行つた。

彼女はオートバイに乘らうとして砂の上に立つてゐる男を、充血する程見つめてゐた。丸いといへば確かに彼の筋肉は、どうやら少し丸味をおんでゐる。そして腰が太い。それにしても自分の親しい忘れがたい人だと思ふと、今更ながら銀の刺繍を入れた彼の胸かざりのあるあたりが、なんとも美しく見えてならなかつた。

男はチラッと彼女の方へ向いて挨拶をするやうなふりをした、と小銃をうつ淋しい音をたて

て、オートバイが高い天井から渦を卷きながら下りだした。煙を吐き、もの凄い勢ひでつき進む、胸のふるへるやうな剛壯な演技である。一瞬間の後に、彼女の懷しい男は後の座席に飛び乘つてゐた。

「恐ろしい！」

思はず彼女は、手で眼を掩ひながら叫んだ。彼に對する愛情の故に。

あんな曲藝が到底女に出來るものではない。あんな激しく敏捷な動作が。それにあの老婆だつて、うちの工場で働いてゐて、そんな不貞な事を私にすすめられるものではない……

然し、彼女は混雜の中から外へ出ると、再びあの男の太い腰が氣になつた。そして何時か樂屋を訪ねた時、彼が自分に對して冷淡にしてゐた事などが不安に思ひ合せられた。

若しかしたら……

が、職工長のうちへよると、

「あれが男でなくてどうしませう。あんな立派な男つてありませんよ」

と老婆がしわがれた聲で說明した。

「けど、私、不思議な噂を聞いたんだけど」

「それではお孃さんは、さうお思ひになるのでございますか」

「そんなわけでもないけれど」

「まあ、まあ、お孃さんのやうな、まだそんな事さへ知らないでいらつしやるのですか、あんなにたびたび逢つておいて」

老婆はへんな笑ひ聲をしながら、あきれたといふ顏をして答へた。

「私なんぞよりは、お孃さんの方がよく知つていらつしやる筈ぢやございませんか」

彼女はやつと安心すると、心の中で呟いた。

「さうだとも。あれが女である筈がない。自分は何て馬鹿な事を疑つてゐたものだらう。誰が何と云つたつて、あの男については自分が一番よく知つてゐる筈だ。自分は彼の肉體のすみずみまで知つてゐるのだもの」

どこにどんなものがあつたかと、彼女は思ひ出してみて、思はず頰が熱くなつた。がそれだけに彼女は、彼こそ自分のものだと、心の中で強く彼を握りしめると、急に彼に逢つてみたい衝動に襲はれた。

七

人生には豪放な彼岸といふものがある。そこではどんな激しい惡德も、また美德に立返つて現はれたりする。そして唯其處では强く生きる事のみが美しく思はれる。然し強さを知らぬ者は、そのつつましさの故に、遂に亡びるより仕方がない。

男はこの家族の烈しい性格の中で、最も純粹に娘に愛情をかけてゐた。

彼は娘がおそくなると、何時も外へ出て、彼女の高い窓を見上げる。そして氣配のない暗い部屋に、異國の鮮い花模樣のカアテンが淋しくひかれてゐるのを眺める。

彼は其處に灯がともる事をどんなに望んでゐるだらう。

灯がともつてゐさへすれば、彼女は少なくとも自分から遠くにゐるのではない。彼はさう思つて安心する。然し少しでも彼女が何處か遠くにゐるといふ事は、——彼には堪へきれない事であつた。

而も男は、小さい小僧時代から番頭になつた今日まで、この家に於けるお孃さんとの間の長い親愛の情を思ふと、此頃になつて、にはかに冷淡にせられるのが、たまらなく淋しかつた。

その上、毎日のやうに曲馬團へ出かけてゆく彼女の後姿を見かけなければならないなんて。

彼は曲藝團の持つてゐるあらゆる缺點を心の中で數へる。そしてあんな浮薄なものに心を奪はれてゐるのは惡い事だ、と結論する。自分は親切な忠告者として默つてはゐられない。それにしても自分はどうしてあんな所へ初め彼女を連れて行つたらう。そして彼は自分がどんなに理想を心に描いて彼女を愛してゐるかを考へた。それを聞いたら彼女はきつと驚くに違ひない。

「さうだ。今日は是非云つてみよう。思つてる事をすつかり……何でもない事だ」

彼は長い間かかつて、何時もさう考へる。が娘の顏を見ると、十七歲の青年のやうに臆病になつてしまふ。

「お孃さん、どうして、そんなに見向きもしないで行くんです。あんなに前には親切だつたのに」

「けど、親切といふものは、一人だけにしなければならないものかしら。それに私は、昔は何も知らない子供だつたんだもの」

彼はそんな風に自問自答してみる。そしてさういふ風に答へられる場合を考へると、恐ろしさに胸がふさがつた。

「いや、それだけではない。お前はあんまり脊が低すぎる。私は本當は、お前を嫌ひになつたのよ」

彼は自分の脊の事を考へだすと、それが致命傷ででもあるやうに胸にこたへる。――さうだ。もつと別の事から彼女に話しかけなければならない。

「六圓七十錢」

一人の店員が來て、彼の方へ紙幣を突きだした。

「いくらだつて」

彼は無意識にレジスターをあけた。

「いくらだつて、

「六圓七十錢です」

彼は店員から紙幣を受取ると、釣錢を渡した。

――いや。そんな面倒な手數をしないで、俺はこの錢箱と一緒に、娘をかつさらつて出奔するわけにはゆかないだらうか……

彼は果物のやうに神聖な娘の肉體を心に描いた。彼女の身體を思ふ存分に鑑賞したい……

そして、時として狂暴な氣持に襲はれた。

然しこの空想は、彼の臆病な眞面目さによつて、すぐ萎れてしまつた。

彼は自分の眞面目さによつて、今日のあつた事を考へると、無暗な眞似も出來ないと反省する。そして僅か一オンスの薔薇油を取る爲めに、五萬個の薔薇の花と、幾千坪の土地を要するブルガリア・ローズの話を思ひ出した。

――さうだ。自分も辛抱強く、この文化の無駄費ひとも思はれる、とてつもない贅澤品のやうに、少しづつ娘の愛情を摘みためなければならない……そしてケチな小說家志望のやうに娘のカスばかりに就いて考へだした。

「それにしても、俺はいつたいどうすればいいんだらう」

其の時、娘は自動車をとめて、快活さうに店の方から歸つて來た。

店先には、女の客がゐて、スタンドの陰に鼻をつきだしながら、香水の瓶を嗅ぎ廻つてゐた。

「お孃樣、おかへりなさい」

彼女がレジスターの横を通つて、奥へ這入らうとした時、芳は腰をかけたまま、さう云つて挨拶した。

――よかつた――芳は心の中でしみじみさう思つた。

が、娘は返事もしないで、冷淡な身振りで奥へ這入つて行つてしまつた。絹の足がピンと張つて、彈力のある桃色の幻を殘した。

すると芳は、何時ものやうに少しばかりの喜びと失望とで、然し立ちあがると、彼女が閉め殘して行つた店と奥の間の戸を丁寧にしめてやつた。

何か匂ひのやうなものが殘つてゐるやうな氣がした。

「ロリガンの平瓶はない。あれの平つたい方がいいんだけど—

客が背後から店員に命じてゐた。

八

その夜ふけであつた。

娘が何かの用事で、物置へ這入ると、天井から異様なものが、彼女の髪の先きへぶらさがつて來た。白い足の裏が二つ、目の中にちらついた。

彼女はぞつとして、頭をのけぞると、烈しい恐怖心の爲めにころげるやうにして廊下へ逃げた。

「よ、よしだ。芳さんが物置で首をつつてゐる」

「みんな行つて頂戴。よ、よしさんが首を吊つてゐる。物置で—

店の者はみんなで狼狽てて走りつけた。と番頭は綱にかかつたままブラブラしてゐた。店員達はこの奇怪な事件に對して恐ろしさうに、手もふれないで、聲ばかりをかけた。

「番頭さん、どうしたんです」

「何をしてゐるんです。一たい」

「何て馬鹿な眞似をするんです。番頭さん」

一人がやつと梁に梯子をかけてあがらうとすると、俄かに番頭が、頭の上から氣味の惡い顔をしてゲラゲラと笑つた。

「おう、どうしたんだ」

その男はあわてて梯子からすべり落ちた。と同時に、皆が一度に逃げ出さうとした。すると今度は齒ぎれのいい聲で番頭が叫んだ。

「なんでもないんだよ、みんな。なんでもないんだよ」

そして芳は手につけてある紐をつたつて床の上へ飛び下りようとした。

そこで皆は急に正氣にかへると、群り寄りながら番頭を詰りだした。

「あんまりふざけちやいけませんぜ、番頭さん、こんなに寒いのに」

すると芳は涙ぐんで云つた。

「騒がせてすまなかつた。ぼ、ぼくは、死なうとしてゐたんぢやないんだよ—

「ぢや、どうしたんです、いつたい」

「主人に聞かれるとをかしいから、あつちへ行つてくれ、頼むから—

然し皆は動かうともしなかつた。そこで芳は生恥をかきながら、天井から金具の付いた綱を取りはづさうとした。

「なんです、そいつあ」

「いや、何でもないんだ」

そしてそれをふところの中へ捩込まうとした。

「そんなもの捨ててしまつたら、どうです、番頭さん—

芳は冷靜に皆から離れようとした。そしてもう一度皆に行つてくれと歎願した。

「何です、いつたい、それは」

「いいぢやないか、何だつて」

芳は自分の事は自分に任しておいて貰ひたいと思つた。

「だが、そんな事なすつちや—

そして立ち去るどころか、一人の男は芳の肩をつかまへた。

「いいんだよ。あつちへ行つてくれ。これはただの機械なんだよ。何でもありやしないんだ—

芳はひた隱しに隱さうとした。すると一人の脊の低い男が叫んだ。

「わかつた。身長器だ。脊を高くする機械だ」
芳は恥かしい思ひをして默つたまま皆を殘して立ち去つた。
皆の心には氣の毒なやうな、何か變な笑ひがこみあげて來てならなかつた。
「チェッ、身長器にさはつてゐたのか、おどかしやがるな」
然し脊が高くなつて、あの冷淡になつたお孃さんの心をひきもどさうとする芳の切ない心情が、首つりにもまして、またなく哀切なものであつた事には、誰も氣付かなかつた。
「けどあんなに氣になるものかな、低いのが」
「何だ、馬鹿にしてゐやがる」
「全くおどろかされちやつた。天井から笑はれた時にはヒヤッとしたよ」
「脊ぐらゐ低かつたつて、いいぢやないか、いけないのかな」
「いけない事があるんだらうよ」
「はつはつはつはゝはゝははは―」
「わつはつはつははははは―」
「でも首つりでなくつてよかつたよ」
「全くだ」
それから幾日かして、娘は例の老婆の二[illegible]で、[illegible]のやうに冷たい手――義手の男に自分の肉體が夜ごと荒々しく食ひ貪られてゐたのに氣付いた。
「おお、あの[illegible]のやうな手―」
彼女は恐ろしさのあまり、頭が痺れるほどおびえながら、やつとの事で家へ歸つて來た。長い間用心深く匿されてゐた秘密を、突然示されたのに氣付いた。彼女は歩きながら幾度となく道の上で倒れようとした。
――それにしても、あの不潔な勞働者の一家ほど恐ろしいものはない。總てはあの老婆の罠にかかつたのだ――
鋭い恐怖の爲めに、彼女の若い身體は、何時までも慄へるのが止まなかつた。そして赤いペランの手袋を、ぬぐ氣力さへ無くなつてゐた。

九

義手の男が娘を翫弄してゐる時、父親の万太郎は男裝した曲藝師を、まんまと馬車の中に誘惑して得意さうに煙草を吹かしてゐた。
「ちや、これだけ、これだけ僕の爲めに積まう。僕は若い者のやうに、今更らしく廻りくどい戀愛の言葉は囁けない―」
万太郎は更に煙草に火を點じて、いらいらする衝動を隱しながら曲藝師の顔をみつめてゐた。
「なに、金ですつて、金でどうするといふんです。裸になつてみつて、馬車の中で裸になつてどうすると云ふんです。貴方のやうな人が、何時も私達を苦しめるんです。いや、裸にもなりますか―」
そして曲藝師は、万太郎の醜い手の下から自分の女らしい手をぬきとると、マントをぬいだ。そして豐かな乳房が跳り出すかも知れぬ[illegible]着のボタンを、一つづつ、ゆつくりとはづしだした。
馬車は窓をしめて、赤い天鵞絨のクッションをゆりながら、暗い海岸通りを走つてゐた。
今か今かと、やつきになつてゐる万太郎は、うちつける波浪の響きさへ耳にも這入らなかつた。
と、その時、曲藝師が腰のあたりをひねつて、ちらッと女を、かいま見せた刹那、この何處にも伏兵のゐよう筈のない自分の馬車の中で、何處からか現はれた固い拳で万太郎は後頭部を強くつきあげられた。
「畜生奴、腹のあたりがちらつくだらう、いい

女の。俺は貴樣達に復讐する爲めに、この町へやつて來たんだ」

　そして一人の怪漢と一緒になると、曲藝師は毒々しく叫んで姿を消してしまつた。

　馭者が寢ぼけた聲で尋ねた。

「旦那、どうしたんですか。誰かころがり落ちましたかな」

「馬鹿、何を云つてゐるんだね。禮儀知らずめ、お客樣は疾に飛びおりて、お歸りになつたよ」

　万太郎は頭をかかへたまま、やつとのことで起きあがりながら、唸るやうに云つた。

「さやうでございましたか。今夜は餘り御馳走になりましたので」

「馬鹿！」

「はい、失禮いたしました」

　港の中には赤い碇泊燈をともした汽船が幾艘となく浮んでゐた。

「もう歸るんだ。歸るんだ。うちへ。まつ直ぐに」

　万太郎はプリプリしながら大きな聲で呶鳴つた。が、それでも頭の隅では、今見たばかしのものを忘れかねてゐた。矢張り女だつたな――

　万太郎はやるせない思ひを怒りの中に漂はしてゐた。

　うちと云ふのは勿論、彼にとつては待合であつた。其處には彼が作つた深々とした大きい寢臺が待つてゐた。彼は亜紀子との間がお互ひに退屈しだして以來、自分のうちで夜を過す事は稀になつてゐた。

　そのうちにビオレ商店の店員は、續々この一家の家風に染んでしまつた。店員といふ店員は、皆、露骨に女に對する愼みを破つてしまつた。そして肉體的な情癡の暴風に次第に卷き込まれた。

　女中といふ女中は幾人おかれてもすぐ變つてゆく。變つてゆくうちに、彼女達は次第に彼等に都合よく淘汰せられてゆく。

　彼等はよく同じ時間に忍び込んでは、まの惡い苦笑ひをしながら、つまらぬ雜談をしては歸つて來た。

「此頃、番頭は毎日藥を飲んでゐるね。土瓶で煎じて」

「いや、あれをあんまり匿すもんだから、こつそり見ると、全く驚いたよ。何が這入つてゐたと思ふ。君」

「黒燒か」

「そんなものならいいが一寸驚いたね」

「何だ」

「何だつて骨が入つてゐるぢやないか。人間の骨が」

「まさか。けど人間のぢやあるまいよ」

「なに本當だよ。今度見てみろよ。ちやんと人間の骨が這入つてゐるからさ」

「番頭さんは、ほんとにお孃さんにほれてゐるんだね、可哀想に」

「一人思ひつて奴だね」

「さうだ」

「けど、あんな眞劍なのは見た事がない」

「それにしても骨の煎じ藥は何のまじなひになるのかい」

「お前のやうな奴は、そんな事、知らなくつたつていいよ」

　彼等はこの一家の爛熟した不思議な生活形態の中で、勝手な空想を投げあつてゐた。

「けど、今日のお客、すばらしい買物をして行つたね、化粧品を百八十圓、あの古ぼけた[illegible]香水の壜を三百圓、オモチャを買ふやうにして買つて行つたよ」

「十年前からあつたと云ふ奴だらう」

　然し、其の亜紀子だけは、曲藝師が立ち去ると同時に、何か彼等との間に約束でもしたかの

やうに、次第にその性格に厳格なきびしさを示しだした。

そして何かしら、自分の今までの美貌を中心とした淫蕩な生活に對する反省のやうな氣持で、金錢に對する激しい執着を示しだした。

それでもあの玄さんや、多くの男工達と交つてゐた少女時代の、みじめな、然し向うみずの元氣のよかつた生活や、結婚當時、万太郎から受けた、むせぶやうな熱烈な愛情は時々思ひ出した。

「けど、私は生れかはつた。今までの夢のやうな生活は、ありや生活ではなかつた。もつと實際的にならなくちや」

そして主人万太郎の放蕩には一顧も與へないで、彼女はそんな事を呟いては、紙幣を熱心に數へだした。

十

工場の卓上電話が異様なけたたましさで鳴つた。

「店の方が火事です。火の原因はわかりません。もう全體にひろがらうとしてゐます」

万太郎は受話器を投げだすと、殘業の職工達に命じた。

「おい、店の方の火事だ。仕事を中止して皆かけつけてくれ」

工場の中は激しい混亂に陷入つた。ベルトがはづされた。廻轉してゐたエッヂランナーがクリームの中で止まつた。赤いシフターが煙を吐くのをやめた。クリッピングが、チューブを銜へたままで止まつた。職工達は出口に向つて一齊に殺到した。

万太郎は工場の監視を善良な數人に命ずると、自分は自動車に飛び乘つた。

街を折れると、遙かに火焔が雲のやうに高くのぼつてゐた。彼は首をだして、始終、焔の方へ眼をやつてゐた。

「おッ、危い！」

彼は一臺の自動車とすれ違ふ時に、急激な空氣の流れを感じて首をひつ込めた。

「早くやつてくれ、早く。規定なんて、かまはないから」

ものの燒ける、むせるやうな煙がきつく彼の鼻を襲つて來た。彼は自動車を飛びおりると、人波を押しわけ、興奮した消防自動車の間をくぐつて、海のやうにぬれた道を走つた。

額に熱い火が吹きつけられた。家は盛んな火焔の中で、幾度となく大きい音をたててはくづれ落ちてゐる。そしてくづれ落ちる度に猛火の舌が、烈風にあふられて恐ろしい響を立ててゐる。

「旦那、旦那、お孃さんが見えないんです。お孃さんが」

額をまつ黑にした消防夫が、一人の店員と連れだつて來て、彼に告げた。

「なに、娘がゐない、何處か外出してゐたんぢやないのかい」

「いや、今晚は早くから御部屋でやすんでゐられたといふんです」

「どうしたといふ事だ。それで寢室へ誰か這入つていつて探したのかい」

「もう這入れるどころぢやありません」

そのうちに、しどけないなりをした亜紀子や女中達が走つてくるのに逢つた。

「貴方、どうしたらいいんでせう。貴方、なんてひどい事になつたんでせう」

「火の原因は何だ」

女中達は身體をふるはせながら、うろうろしてゐた。

「いや、娘はきつと何處かにゐるよ、お前達が出られたのに、あれだけが出られない筈がないぢやないか」

職工達が三々五々、息を切つて到着した。ものの燒けてはじける音が、ホースから迸る水の音と一緒になつて響いた。
「店の者は皆何してゐる」
「消防の手傳ひをしてゐます」
　ポンプの水が交錯する噴水のやうに赤い夜空を切つて白くあがつてゐた。火勢は水の爲めに消え衰へようとしては、反つて風にあふられてまた燃えだした。
　が火焔は次第に靜かになつてゆくらしく、火の柱が少しづつ低くなつた。そして白い煙がその邊をこめだした。
　あたりが徐々に暗くなつてくると、消防夫の持つ提灯と懷中電燈の光が白く煙を照しだした。
　それでも消防夫は、なほもホースをもつて、燒け落ちてしまつた家の中へ、隈なく水を注ぎ込んでゐた。
　見物の人だかりが段々少なくなつていつた。もう明け方が近かつた。
「旦那、來て下さい。誰かゐます。誰か」
　万太郎は昂奮してそつちへ走つて行つた。と後から皆がついて走つて來た。
　づぶ濡れになつた灰はまだ火のやうに熱かつた。と彼が向けた懷中電燈の光の中に、芳に抱きつかれた娘が、黑くなつたまま、燒けた寢臺の網の上にゐた。摩耶子を抱いてゐる芳の腕には必死の愛情が流れてゐた。
　亞紀子は急に聲をあげて泣きだした。
「今の今まで何處かにゐてくれるかと賴みにしてゐたのに」
「わかつた。さあ、あつちへ行つてくれ。みんな」
　万太郎は不機嫌な聲でさう叫んだ。
「なんて事だ、芳の奴。何て馬鹿だ」
　消防夫は熱心に煙の中へ水を注いで廻つてゐた。
「這入らうとしたんですけれど、火の廻りが早くつて、とても」
　一人の女中が泣きながら呟いてゐた。
「亞紀子、お前は金の事ばかりに氣をとられて、あれの事を忘れてゐたんだらう。お前はあれの敵だつたのだ」
　亞紀子は返事をしないで、唯泣きつづけてばかりゐた。
「馬鹿、なんて馬鹿だ、馬鹿野郎奴が」
　万太郎は誰に云ふとなく、怒りつづけてゐたが、朝が明けて、火焔が全く收まつてしまふと、激怒の中に、急に一種の淋しさがこみあげて來るのを感じた。彼は事業家として一つの大きい痛手に就いて熱心に考へ始めてゐた。
　然し、彼はやがて平生の感情を取りもどすと云つた。
「けど、燃えてゐる時には、案外元氣なもんだね、人間は。自分の家でも」
　彼はそんな冗談を呟いてから、熱くなつてゐる金庫を外から叩いてみた。

十一

　火事の原因に就いて、あらゆる探索が行はれた。
　芳だらうといふ推定が行はれた。恨みを抱いてゐる職工の復讐だらうといふ臆測が行はれた。亞紀子の態度が疑はれた。そして最も辛辣な空想として万太郎の頭に祕かに浮んだものは——馬車の中で自分を打つた男かも知れないと云ふ事であつた。
　然し其等の疑嫌は悉く水泡に歸してしまつた。そして彼の眼の中には、死んだ娘の亡靈が、何時までも悲しい思ひ出となつてちらついた。
　が、豪放な万太郎は、悲劇に面すれば面する

ほど、彼の事業熱を湧きあがらせる遊蕩の方法に就いて考へだしてゐた。

——指が二十本あつても足りない花指輪の購入。スペインから取りよせたい緑色リボンを付けた世界的名犬。モンテカルロのゴルフ倶樂部から招待したい外國の選手・・・・

夏、あらゆる空想を逞しく湧きあがらせる夏が漸く近づかうとしてゐた。

城のやうな外國船が、白い石鹸水の泡をたてながら靜かに入港しようとしてゐる。

遠くの空には大きい雲の峯が、險しく輝きだし、活潑な氣象旗が「西南の快晴」をヒラヒラと豫告してゐた。

万太郎は一過した情癡の暴風を思ひ返しながら、更に新らしい事業と享樂とを、悲しみの涙で練り合せながら——ギラギラする晝近い海を茫然と眺めてゐた。

氷る舞踏場

眼に見える限り其處は白い雪の化粧に包まれてゐた。そして大地といひ家といひ草木といひ、皆いち様にその冷たい裝飾の下でふるへてゐた。

北國の晴れ渡つた月夜――この寒冷の中に唯た一つ、外景とは何のかかはりも無いやうな豪奢を極めた舞踏室の中で、來客を待つてゐるランプが煌々と燃えてゐた。

遙かに鈴が鳴つて次第に近づくと、やがて橇の中からは高貴な毛皮につつまれた人が白い息を吐いて下りて來た。赤肥りのした男爵、あでやかな心の戀人同士、年老いて仲のいゝ夫婦者――幾度となく橇が着いた――漁色生活に心をゆだねた貴婦人、心つつましい老嬢、身體を彈丸のやうに心得た快活な青年、雇はれた踊り子……。

然しこの集りは、初めから二三の富豪達に計畫せられたすばらしく淫蕩な試みであつた。

客が着くたびに給仕は出て行つて、客人達の帽子やステッキや外套をうやうやしくお受けしてゐる。扉は客を吸ひ込むために華やかな室の一部を現はすと、その度にすぐ勢よく後を閉めてゐる。室の中には香水と煙草の匂ひが迷つてゐた。

「いやはや、なかなか面白い人が見える」

「駄目だなあ、かう沈んでゐちや」

「あの御婦人はどなたでせうか」

「さやう」

一人の混血兒は大仰にモノクルをはめると、白孔雀の樣に振舞つてゐる女の方へ注意を拂つた。

低音合奏が始まつた。先づ踊りの相手がカードによつて定められた。

やがて晴れやかなトロットが高々と中央にある奏樂のボックスから起つた。人々の心がにはかに生々して來た。坐つてゐた者は立ちあがり、立つてゐた者は歩きだし、煙草を吸つてゐた者はその煙を灰の中に埋めた。

輝く大ホームの板の上を踵が辷つた。爪先きと爪先きとがうなづきあつた。未熟な踊り手はスカートを男のズボンにからまして二人で倒れさうになつた。

腋の下から手が覗いて相手の筋肉の中へ割り込んでゐる。輝く白い肩と肩とが摩れさうになつては巧みに離れて行く。

足が出る、みんなが廻る。微笑に汗ばんだ花。渦卷の連續だ。ダ、ダ、ダ、ダ、ダ、ダ。

白い男の襟飾に頰があたつた。伴奏が彼等の心と身體を輕快にした。相手の顔を盜んで秋波が四方八方に送られた。

途中で音樂は特徴のあるハバネラの急速調に變つた。これはこの享樂者達の心の準備に適當な變りかたであつた。彼等は入り交つて自分の愛する相手を、喜ばしい興奮で探しあつた。男と女との匂ひにみちた亂雜な潮流――囁きが始まつた。或る者は列を離れ、列に加はつた。

奏樂が一層盛んに大きい音をたてた。

動作に統一がついた。身體を傾け、のし、うつむき、胸と胸とが觸れ合ひ、抱かれ、踊り、足が足を追つた。ランプが人の息吹でかすかに曇つて來た。

やがて[illegible]と踊りの[illegible]が、次第に[illegible]と椅子の靜かな衣ずれの音に變つて行つた。

この北國の一隅に此處だけは春のやうに暖か

く、人間の心がゆるんでゐた。やがて薄い夜會服の人達はぐるりの椅子に腰をおろすと、夫々の椅子で各々の談戯に耽りだした。
「あちらへ行きませんか」
男が云つた。手と手とが握りあはされてゐた。
男は興奮して相手を尊敬するやうな身振りをすると、更に手を女の腰の方へ廻して誘惑した。
「誰か見てゐやしなくつて」
「見たらきつと羨むでせう」
二人の姿はすぐ消えてしまつた。
「僕の友達にね、怪談の好きな男があつてね」
「はは、その癖こはがり屋だといふんぢやないんですか」
「全くその通りで、怪談をしてはその翌日風邪をひいてゐるんです」
「風邪を、なるほど。はつはつはつはつ」
「はつはつはつはつはつはつ」
「最近またお目にかかりたいんですけれど、いい日がおありでせうか」
「電話にしませう」
男はさう答へると、細君に氣をかねて、そそくさと連れだつて行つた。
「まあ何て男は臆病なんだらう」
若々しい未亡人は心でさう呟きながら、熱情的な視線をすぐ近くに立つてゐる青年の上に注いで微笑した。美しい石榴のやうな歯がちらりと多情な挨拶をした。
「何てわたしは、男好きで、のぼせ性で、まあ心が複雑でいきいきしてゐるのだらう」
大きい葉をひろげた棕櫚の蔭へゆくと、男は娘の胸に自分の胸からとつた薔薇の花をさしてやつた。
「わたしの天使」
その時薔薇の花は男の氣まぐれを思ひだして苦い笑ひ顔をした。――この青年はまた何と親切な、そして何と澤山の娘達に花をわけてやるのだらう――
女はうつむいてぢつとしてゐた。また音樂が始まつた。

リラ
メラ
メラ
リラ
リラ

「僕のうちですか、すぐわかりますよ。道を左に曲つて右に折れて、裏門のやうな表門のあるうちです」
「どうぞ貴方の手を握らして下さい」
「いや」
「では貴方の着物の端にでも」
「いけませんね。私の着物は喪服ですから」
「では貴方の靴のひもにでも」
「どうぞ、そんな下らない事はおつしやらないで下さい。貴方は有名なお方です」
「おや、貴方は怒つたのですか」
「いいえ、でも貴方はほんたうに立派なお方なんですもの」
「貴方は皮肉をおつしやる積りですか」
「いいえ、貴方を愛してゐるからこそ、私は唯貴方から逃げたいだけなんですわ」
「僕はね、センチメンタルなところが無いせゐか、女と云へば何時も二番煎じでね、初戀らしい娘さんなんかには一度も交渉のあつた例がない」

「僕はまた、偶々出會ふ相手が、何時も歳上の女と來てゐてね」

「ところであの男は何時でも若い娘の氣をひくが、きまつて捨てられる――あれはどう云ふわけかね」

「僕は誰であらうと、婦人に對しては常々敬意を拂つてゐる。これだけは斷言出來るね」

「名も姓もあかさずに別れあつた女――古い詩だね」

「僕は家庭を讃美する。家庭ほど疲れた者をほんたうにいたはつてくれる所はないからな」

「私のことなんか、どうでもいいと思つていらつしやるんでせう」

「どうしてさ」

「どうしてですつて、いまさき向きあつてゐた方はどうしたんですの」

「話をしてゐただけぢやないか」

その男の細君に違ひない――歳上の女は不機嫌な顔つきをしながら、夫の方へ身體をつよく摩りつけると、夫の手の甲に咬みついた。

「だつて其の胸の花は、その胸の花は、誰方におもらひになつて」

「何でもない人からさ」

「わたしがこんなに愛してゐる事を、貴方はちつともわかつては下さらないのね」

細君は夫の胸から薔薇の一莖をぬきとると、刺繍の入つた舞踏靴で見事に踏みにじつた。

「外國の或る詩人が唄つてゐる、有名な章句を敎へてあげませう。

――戀人よ、三角形の内角の和は
　　二直角ですよ――」

「こんなところにゐると、私、よけい心が縮かんで來ますの」

娘は震へ聲になつて云つた。

「僕もそんな氣がします」

「まあよく似てゐますのね、二人は」

「今日は金曜日でしたね」

「ええ、あしたが土曜日よ」

「僕は今日來たくなかつたんだけれど」

「わたしも」

「貴方の手は隨分綺麗ですね」

娘は話してゐると、ひとりでに眼に涙がたまつて來た。

男の方も戀愛を感じてゐながら、それを打ちあける勇氣がないらしい。

二人は膝と膝の間にちやんと行儀よく幾らかの間隔をおいて坐りあつてゐた。

そして時々もれるお互ひの溜息の中には、永遠の家庭が幻影となつて約束せられてゐた。

「感激の無いのに愛情を裝つてゐるのは罪惡だからな」

「さうよ、退屈したら別れる方がいいんですわ」

「嘘を云ひ合つてゐるなんて、たまらないからな」

「よくそんな人があるのね」

「僕は旅行に出ようと思つてゐるんだ」

「どうぞ御遠慮なく――」

「いや、有難う――」

「どうせわたし達の仲もおしまひだわね」

「それも君がおしまひにしたんぢやないかね。」

「それより旅行に一緒にいらつしやる方は、おところ　こんどの男は……」

「いや、とにかく女は圖々しいもんだよ」

美しいんですつてね

「チェッ、そんな事が云へるほど、男つてものは勝手に出來てゐるのよ」

女は男の顔を瞠るやうにして立ちさると、いまさつきから始まつてゐる踊りの中へまぎれ込

んで行つた。

レ

レ

レ

レ

「ショーはね、かう云つてゐる、初戀といふものは、僅かばかりの愚かさと好奇心とを、より多く要するばかりだつて。僕も全くその通りだつたと此頃になつてつくづく思ひだした」
「そして私が嫌ひになつたとおつしやるんでせう」
「さうぢやないよ。案外馬鹿らしいものだと思ひだしたと云ふのさ」
「貴方はもう私を愛してはいらつしやらないのね」
「さう單純に云ふものではないよ。けれど僞つてる氣持は厭だからな」
「けどそんな事に初戀をしてゐる人達の言へる言葉だとは思はれませんわ。貴方は私と初めてだとおつしやつておきながら」
「なるほど、それはさうだ。初めて――と然し貴方の中にいろいろな女を見たからな」
「ぢや私の中の別の女と次の戀を初めて下さらないこと?」

或る劇場の花形が上氣してぐつたりソファに埋まつてゐた。傍にゐた附き蟲の老紳士が化粧室の方へ立つてゆくと、或る若い男が急いで彼女の方へ接近して來た
彼はしきりに微笑を送りながら女優に言つた。
「貴方のダンスはきはだつて立派でしたよ」
「そお」
「疲れてゐるんですか」
「ええ」
「馬鹿にそつけないんですね、どうかなすつたんですか」
「今夜は瘤つきなのよ」
「なるほど、こりやお邪魔しました。どれと、ぢや牡蠣でも食べて來るかな、牡蠣でも」
彼は落ちつきながら氣どつて又別の方へ歩いて行つた。
「不潔え、また顏を顰めやがつた!」
女は男の胸へすがり甘えたやうな舌をつくつて暫くぢつとしてゐた。それから靜かに娼婦らしい――それ以外の何物でもないやうな瞳を上へ向けた。が相手の男はとりあはなかつた。女は薄目に媚をつくると、云つた。
「ねえ、何處かへ連れてつて頂戴な」
「ああ」
「いやな」
「行つてもいいんだよ」
五回目の踊りが始まつた時には、二人の姿はもう何處にも見えなくなつてゐた。
「嗚呼、ほんとにこんなにしてダンス場へ來てゐても淋しい。此處へ來てゐる若々しい人々も五十年の後には、まあ幾人生き殘つてゐることかしら、何年かの後には何の墓になつて默り込んでしまふんだわ」
その時、鬧くなつた人波の中から亂れた拍手喝采と歡聲とが聞えて來た。一人の踊り子が着物をとつて奔放な、舞をすました後であるらしい。
「ああ、お乳が張つて來た」
「昨日ね、扉で頭をうつて、全くみじめに頭をうつて」

「何ですつて、貴方は何時でもそんな話から
お始めになるのね、久し振りで逢つた戀人同士
が、まあそんな話を一番にしなければならない
なんて」
「けど、全く痛かつたからね」
「いやあね」
「まだフラフラする位だからね」
「なんて變な人」
女は男の氣持をひきたてようとして、男の肩
にぶらさがると身體をくねらした。
「さあ、行つて、踊りに加はりませう」
「僕はやくざな男です。でも貴方を一生懸命
に愛し、崇拜してゐるんです」
「私が貴方の事を何とも思つてなくつても？」
「何とおつしやつても、僕は貴方のそばが好き
なんです」
「私が貴方を抱きながら、他の人の事を考へた
りしてゐても？」
「さはつてもらへさへすれば、たとひ貴方の
蹠になりと」
「これはすばらしい男！」
「私だつて主人と結婚する時には退屈などはし
ないつもりだつたのです」
「ところが僕にしたつて、家庭生活には退屈し
てゐるんだからな」
「けど貴方と私とだけは、何時までも離れませ
んわね」
「それはさうです」
「で私時々思ふんですの、結婚の事を……」
「もう御主人の事は……せめて僕とゐる間だけ
でも、御主人の事は忘れてゐて下さい」
「いや、私の云ふのは貴方と私との結婚の事な
んですわ」
「なるほど、その事ですか。その事ならお互ひ
に言はずに置かうぢやないですか。それは貴方
と僕との間にある幻影をうちこはすものです
よ。結婚とは――ただ手數のかかるだけのもの
だからな」
「では私達は永久に同じ家には住めないとい
ふんですのね」
「同じ家に住むなんて、最も野蠻な事です。日
本の家族制度や蠻人の群居生活を想像してみら
れるがいい」
「けど群居出來る種族ほど強いんですつて
ね？」
「強い――強かつたつて仕方がないぢやないで
すか」
「男つてほんとに馬鹿なものだと思ふわ」
「私もさう思ひますわ、いろいろな意味でね」
彼女達の前では、踊りの稍か輕快なリズムを
つくつてゐた。腰をかがめ立ち、手をつなぎ離
し、一寸とまり足をふみ、又動いた。

ファ　ミ

ファ　ミ

ファ　ミ

ファ　ミ

「男はあれだよ。遊びが好きなんだよ、で、ご
ぞごそしても、細君は目に角たてたりしちや駄
目だぜ、何も細君を捨てる氣なんかは無いんだ
からな。
細君は細君で置いておいて、一寸[illegible]んだか
らな、男は女から遠く持つてくると嬉しくなる
のさ、見え坊だからな。それでその御[illegible]に、ほ
んの一寸操手してやるだけなのだからな。だか

ら別れるのなんのつて、男に未練があるなら默つてこらへてゐるのが一番いいんだよ。別に細君を捨てるなんて氣は毛頭ないんだからな——

それを聞いてゐた女は憤慨しながら、この說敎者に尊敬を拂つてゐた。

「ふざけるない」

「なアに——こんなところへ呼びだしておいて、あのざま何だつていふんだ」

頰に紅をぬつた道化師が、痙攣のやうに身體をふるはし乍ら二人の前へ轉がつて來た。

花をふり撒く人のやうに、二人は華やかな微笑をこぼしながら知人に挨拶をして廻つてゐた。

「素敵だぞ」

そんな聲が耳に入ると、彼女達は一層有頂天になつた。みんなに見られてゐるといふ、その意識が一層彼女達を誇りかにし、美しくしてゐた。

「あの人からね、手紙が來たのよ。また病氣で當分逢へなくなつたつて。でもね、一寸の間も私の事は忘れないつて」

「さうお、わたしの人はね、私と二三日旅行をする約束をしてくれてよ」

二人は夫々の愛人に就いて話しあつてゐた。然し二人の愛人といふ男が同じ一人の男だといふ事には、二人共氣付いてはゐなかつた。その無心さが一層彼女達を樂天的で美しくしてゐた。

「あの男の鼻は大體低いのです。平生さう見えないにしても、但、まあ、あの男が興奮した時を見たまへ。大息をついて、あの鼻の穴が丸くなつて、そして終ひには次第にあの鼻が野蠻人のやうに低くなつてゆくんです——」

「飽きもしないで男から男へ……ああ厭になつちまつた」

「そんな事をおつしやつてゐる癖に、また蟲が起るんぢやなくつて」

「いや、もう私は男にも飽きあきした。私の魂は腐りかけてゐるんです。早く尼寺へでも行きたくなつた」

「氣まぐれ、氣まぐれ」

「ここの有樣を見てゐると、何か氣の毒な哀れな最後が豫感せられてならない」

機嫌のいい方の女は片足で跳び跳びしながら身體を廻すと、にぎやかな人達の方へ倒れかかつて行つた。ラ、ラ、ラ、ラ、ラ。

人々は歡樂に醉つて床の上にまで横になつた。

煙草の煙りと人の熱蒸で暖房裝置の完全すぎる室の中は益々暖かく、むせるやうな空氣にみたされた。

そしてローマ人のやうに舞踏の神聖を穢した男女は、次第に氣が遠くなつて無神經になつて行つた。

樂手達は幾度となく人々に活氣をつけようとして樂器をとりあげたが、これもだるさうにすぐ手から落して床の上へ置いた。

室の空氣が次第に重くるしくなつて行つた。

或る女は呼吸困難を訴へて愛人の腕の中へ倒れ込み、また或る女は冷淡な相手にもたれかかつて、そのまま床の上にしどけなく打ち倒れた。

人々はこの醜態を歡樂に醉つた爲めと解釋した。疲れすぎたのだ、もう今に醒の日が吾々を活氣づけてくれるに違ひない。何といふすばらしい舞踏であつたらう。喜びに疲れ

果てるほど幸福な事がまたとあるであらうか？
みんなの頭が重くフラフラしさうになつた。
「がどうも變ですね」
「愉快だ！　愉快だ…」
「この天井はどうです、水蒸氣と煙とで―」
外ではつないである馬が寒さに嘶き、絶えず蹄で土間を蹴つてゐた。そして御者達は腹一杯の御馳走にありつくと、退屈さうにして皆かたい椅子の上でうとうとと眠つてゐた。時々犬の吠えるのが聞えて來る。
ホールの中にはやはり狂氣のやうな出來事がつぎつぎに起つてゐた。或る女は暑さの爲めに胸衣をさいて乳房をひきだし、床板の上にすりつけた。これを見た一人の男は叫んだ。
「何といふ美しい光景だ。暑ければ勝手な事をするがいい」
豐滿な遊蕩に醉つた人々は、かくて室の外へすら逃げだしてゆく氣力を失つてゐた。
「どうも、から、苦しいやうないい氣持ですな」
「どうもね」
その時、一人の青年士官は思ひついたやうに窓枠の方へ接近してゆくと、この籠つた室の中へ一陣の外氣を入れようと試みた。
北國の晴れ渡つた空には飛沫のやうな星がチカチカと冴えてゐた。
彼は力をこめて窓をひきあけようとした。が幾度こころみても開かない。多分寒さの爲めに戸が凍りついてゐるのであらう。
そのうちに人々は眠るやうにバタバタと力なく油をひいた床板の上に倒れて行つた。
士官は少しイライラすると、窓ガラスを打ち破るより仕方があるまいと考へた。
そして拳をふりあげざま力をこめて一撃した。寒夜の星をゆるがし窓ガラスは碎けて四方に飛び散つた。すると士官の額をめがけて寒い外氣が嵐となつて室の中に殺到して來た。士官は吹き倒された。
と、やがて室の水蒸氣は極度の寒氣の爲めに冷されて、露となつて高い天井の飾りを曇らした。
思ひがけず、白い雪片がヒラヒラと天井から舞ひおりて來た。急激な温度の變化の爲めに人々のいきれと水蒸氣とが室内の上層で凍つたのに違ひない。
白く輝きながらランプの前を時ならぬ牡丹雪が、この歡樂の大ホールの中だけで美しく降りだした。サラサラと柱にあたり壁を摩り、かすかな空氣の流れをつくつて、まぎれながら舞ひおりた。外は晴れた月夜である。
逃げ出さうとする者、助けに這入つて來る者、雪の底のはげしい渦卷。やがてランプの火屋は冷えてくると、いちいち鋭い音をたてて碎裂け飛んだ。そして明るい灯はひとつひとつ消えて行き、ホールの中には雪の降りつむ音のみがかすかにこもつて暫くの間續いた。
かくて夜の饗宴は、冷酷な刑罰のやうな寒さの爲めにまたたく間に氷らされ、月光は暗黒の部屋に流されて、時の移りに從つて、靜かにその照明の場所を變へて行つた。
其處には斷末魔を豫想した狂人が、最も醜惡でそして美しい姿となつて雪につつまれてゐた。わけてもものの淋しく、女の顏にぬつた綠色の白粉がほのかに雪を染めて、誇りにみちてゐたその顏の存在を、わづかに示してゐた。

博齒になる馬車

――この一篇をいとしき女稚子に捧ぐ――

青塗りの馬車が、我々の荷物を駅者臺に積んで待つてゐた。馬が退屈さうに鼻息を吹いては、道の上を蹄で叩いてゐる。馬は走りだしたいのに違ひない。

「旦那、お早うございます」

キタナイ身裝をした駅者が、帽を両手でゆがめ乍ら私に挨拶した。

「お早う」

私は黄色いヘルメットを頭から取つて答へた。秋近い朝の冷氣と馬糞の匂ひが健康に私の心を訪れた。鶏が車輪や馬の脚の間をうろうろして餌をあさつてゐる。

「じいぶん、お待ちしたですよ」

「そりやすまなかつたね。發つとなると、なかなかもんでね」

「さあ、さあ。そいぢや奥さんからずつと奥に」

さう云つて駅者は後の戸を開けた。妻に續いて、今年四つになる私達の子供が、そして最後に私が這入つた。

駅者が駅者臺にあがつた。するとこの毀れやすい玩具のやうな馬車は、グラグラッと、毀れにくい柔軟性を示した。蠅が二三匹パッと飛び立つた。

馬車が靜かに動きだした。

よくない發條が唐突な彈動を座席に時々はねあげる。窓の外から涼しい風がしつきりなしに吹き込んで來る。

間もなく道は海に沿つて走りだした。白い輝く雲が緑色の島の上にかかつてゐる。私はこの海岸の呑ん氣なボート遊びや、夜の散歩や、釣りや、五百燭光の明るい夜の巾着や、海水浴場の賑ひや、漁師達の凱旋や――さまざまな快樂の記憶を心に描いた。すると急にこの村を立ち去りがたい氣持が起つて來た。

「もつとゐてもよかつたね、おい」

すると何となくふさぎ込んだやうに默つてゐた妻が同時に答へた。

「さうね、これから[illegible]があるわね、潮が[illegible]になつて。私もそんな事を考へてゐたんですの」

然し私達の子供は、風のやうに吹き飛ぶ窓外の景色にうれしさうに顔をはつてゐた。馬車が暗いトンネルに這入つて出た。光が一層まぶしく照つた。やがて山裾を廻る海の上の道に出た。と子供が青い海を覗いて、

「コハイ、コハイ」

と云つて私にしがみついた。小さい娘らしい動作が私に愛情を起さした。私は大きい腕の中に娘を抱いてやつた。馬車の窓に白い波の飛沫が絶えず吹きかかつて來た。

「旦那」

駅者が小さい窓から私に呼びかけた。

「馬車がね、轉くつてしやうがねえですが、どうでせう、拾はしてくれねえかね」

私はこの馬車を借り切りにしてゐたのだが、今となつては、寧ろ村の空氣をうんとこの中へつめ込んでみたかつた。そこで私は快活に叫んだ。

「ああいいとも、いくら拾つたつていいんだよ」

「そいぢや二三人だけ」

馭者は馬に鞭をあてると、鼻歌を唄ひだした。馬車は海沿ひの傾斜をガタガタと、おどけた搖れ方でのぼつてゆく。ガラスのない窓枠がそのたびに歪む。特殊なリズムが吾々を氣持よくゆすりつづけてゐる。と白い布島の菱形の大きい岩穴の中へ、波が時間をおいては崩れかかつてゐるのが見えだした。馭者が指さして猥褻な說明を加へた。

と突然馬をとめて、馭者は一人の娘を拾つた。娘は村特有の海の匂ひを持つて這入つて來た。重すぎるやうな長い房々した髮、胸と腰が張つて、その顏は健康さうにやけてゐた。がそのハッキリした濃すぎる眉は、南國の强い美しさを示してゐた。齒が白かつた。娘は一言も云はなかつた。

と十分ほど走つて又馬車は一人の白髮の男を拾つた。さすがに馭者は遠慮して吾々だけを日蔭の方の座席に坐らした。

私はつぎつぎに現はれる村の登場者を、好意を持つた眼つきで見つめてゐた。

銅色にやけた顏の中で頰と眼がひどく落ちてゐた。顎から胸の方へかけて短劍のやうな白い毛が一杯に生えてゐる。彼は私の怪奇な好みを刺戟するに十分な風貌を持つてゐた。彼は臆病さうに背をまげて這入つて來ると、

「ごめんねえ」

と云つて目をパチパチさせた。

と同時に馬車が走りだした。彼は娘の上へ、身體を壓しつぶすほど激しく倒れかかつた。然し娘は默つてゐた。

「おつと姉さん、かんしておくんな」

娘は一寸微笑して答へた。

「いいんね」

やがて白髮は私の方へ向くと尋ねた。

「どつちまでお歸りですか」

「沼津へ出ます。それから東京へ歸るつもりです」

「そりや、そりや、大變ですね。お子さん連では」

「をぢさんはお幾つですか」

妻が尋ねかけた。

「幾つ位に見えますかね。そんなでもねえですけんど、この通りの白髮でさ。」

彼はパサパサと扇をつかつた。そして白い胸毛を平手で押さへつけた。

「幾つだね」

馭者が馭者臺から大聲で訊いた。

「四十八だに」

白髮が答へた。私はその意外の若さに驚いて其の顏を見つめた。

「九十八え」

馭者が仰山に聞きかへした。

「なんでえ」

「九十八かつて訊きかへしてるんですよ」

私が傳へてやつた。すると男はまた眼をパチパチさせた。そして笑ひながら呟いた。

「馬鹿云ふなえ。まだ四十八だえ。若えずら、ハッハッハッハッ……」

「ハイー、シッ、シッ、シッ……」

陽氣な馭者は勢よく鞭を振つた。白く長い鞭の紐が時々稲妻になつて空を切つた。丸い馬の臀が絶えず躍りあがつてゐる。車輪がガッと石を噛んだ。乾いた道の埃が煙のやうに舞ひあがつた。

家と家との間から白く海が限られてみえた。と、夾竹桃が眞紅に村家を塗りつぶした。

人家がきれると、遠く三保の松原が霞の奥に見え出した。

すがすがしい風が窓の幕をはためかしてゐる。晴れやかな樂しい感情が吾々の心に湧き

だした。

「ハイー、ドウ、ドウ、ドウ、ドウ…」

「僕は不思議に思ふんだがね、をぢさん。この村の人達は、ひと漁に何萬何千といふ金を取るのに、どうしてあんな風な暮しをしてゐるんだらう」

すると馭者が代つて大きい聲で答へた。

「けんど漁つてものは、何時でもあるもんぢやありませんからな。旦那。夏場はいいが、これで冬にでもなると、一月も二月も無え事があるですからね、まあ平生は機嫌よく釣でもして遊んどるよなものでさ」

風が外を見てゐる子供のオカッパを絶えず吹きあげてゐた。六人の乘客は靜かに肩を摩り合はしてゐた。と白髮の男が突然話しだした。何か樂しい記憶でもゆり動かされたとでも云ふ風に。

「平生は遊んでるんですよ。だから自然に遊びがはやるですね。わしらあ、茶碗と飲むのにかけちや、もう眼が無かつたによ」

それを云つた時の彼の聲は本當にうれしさうだつた。そしてしきりに眼をパチパチさせた。

茶碗——私は何だらうと思つた。

「女あ、どうでえ、をぢさん」

馭者が笑ひ聲で尋ねかけた。馭者は鞭を脇にはさんで煙草をくゆらしてゐる。煙がパッパッと後へ走つてゐる。

「女なんてえ、茶碗にかけちや話になんねえ」

そこで私は茶碗が女でない事だけはわかつたと思つた。

「そりや一體なんですかね、茶碗つて奴は」

私が尋ねかけた。すると白髮は得意さうに一氣に答へた。

「袁元道でさ、賭博でね。そりや天下の流金を左右するだもん、これほど面白いものは先づねえですよ」

「味を覺えたら忘れられんといふ奴だね」

馭者が口を挾んだ。

「さうつてさ。忘れもしねえが、十八の歳の盆の十四日だつたつけ。わしが晩方、濱で綱をこしらへとると、三津の彌平がやつて來て、沖の舟を指えて、あの舟へいて涼まねえかと云ふです。俺や子供の時から勝負事ときた日にや、目がなかつたもんね、彌平なんて玄人は、ちやんと見込んでたらしい。事によつたら、やつてるかも知れねえ。支度していくべえ。で俺等あ財布を褌で頭へくつつけて、沖の船へ泳えでいきましたよ。泳ぎついてみるとさあ大變。中では眞最中と來てやがる。僕の茶碗といふ奴をやつとるです。ふせる、あける。皆が聲を出す。舌打をする。どうのかうのつて、その盛んな事。あびつくりしましたよ。が俺のやうな子供が這入るにや少し場が大きすぎると思つたに。で横で見てゐたがね。見てゐるとむずむずしてきてね。ねが好きだもんな。その時や[illegible]でした。『やつちやどうでえ』彌平が云つてくれましたよ」

「で、やつたあけえ」

馭者が又口を挾んだ。

「やんべつてさ」

「俺あいきなり『丁』と云つたあよ。丁とな、滿身に力をこめて。と丁度丁が出たぢやねえか。俺あ勝ち金に指も觸れずに、その全部を又丁といつただ。と又おめえ、丁が出た。三度目にも丁といた。ところがだ、今度あ半が出た。俺あ頭がグラグラするやうな氣がしたによ。俺の前から紙幣がゾロゾロとさらはれてゆくだものな。が四度目にも丁。それからずつと俺あ丁でいきました。ところが出るわ、出るわ、その後は丁ばつかり。三時間位の間に三百九十

雨といふ儲けをしましただ。これがそもそもの病みつきでがんさ。その夜すつかりのぼせたやうになつて、舟ん中へ立ちあがつた時、波がどんなにきれいに見えたか、十四夜の月が海の上にのぼつてる。俺あ大金を頭にくくりつけて、銀色の水ん中へ飛び込んだでさ。がこのまま死にやしねえかと思えましたよ。感極まると人間はよく死ぬ事を考へるもんでね。それに俺あ敗けた連中に水ん中で押さへられやしねえかと、内心おつかなくなつてね。へえ、もう、そんだ子供の癖に、なまいきだなんて云はれてゐたあからね。それからでがんさ、やるわ、やるわ、毎晩毎晩。墓場、森ん中、舟ん中。けど丁のおかげと思つて、一生丁で通しましたよ。一生な」

すると馭者が上から叫んだ。

「わしや、をぢさん半だで」

「さうけえ、そりやええ相棒だに」

老人は今にも賭場をひらきたいやうな返事をした。

「シッ、トッ、トッ、トッ、トッ……」

馭者は屋根の上で鞭の音を鳴らした。とそのままクルクルクルと鞭を手の中で廻しだした。

やがて左手で帽子を取ると彼は汗をふいた。

黄金色の果實と同時に白い花を持つてゐる柑橘類の林の中へ道が這入つた。新鮮な香料の霧が吾々の顔や胸をつつんだ。

「シッ、トッ、トッ、トッ、コリヤ、コリヤ」

牛伏の山がはるかに一枚の緑葉座のやうに見えた。その麓で家が二つ、投げられた骰子のやうにぢつとしてゐた。

馭者が云つた。

「わしもな、十八九の頃にや賭博をやつたが、女房の兄貴が玄人で、懇々とさとされて二年しかやらなんだ—」

妻が尋ねた。

「そんなにしてゐたら見つかりはしないんですの—」

「そりや、あんた。幾度もありましたよ。一遍は連れていかれるとこだつたが、三百兩はつとつた金を捨てて其儘逃げました。巡査も大儲けでがんさ。みんな場銭をあげるんですからね。俺等にしても其方がまあまあ赤え着物を着るよりや、ましですからね」

それから白髪の男は更に彼の賭場の一生涯に就いて話しつづけた。

「俺かどんなに熱くなつて賭博に這入つていたか、俺あ毎晩かかさずに出てゆきましたよ。そして大概勝つて歸りました。

「あいつあ、今にのぼして、大え失敗をするに違ひねえ—

みんなはさう云つてました。けど俺あ毎晩毎晩丁で通したです。ツラッハリつて奴でさあ。俺あ二年目に到頭胴元になりましたよ。大成功でさね。近所近在の漁師が集まつてくるわ、くるわ、きつう繁昌しました。ところが、あんた、或る晩、一人の若え女がやつて來ましたに。度胸の太え奴でした。初めつから大金を張りました。第一回が二百五十兩。ほかの奴子は手が出えんでがんさ。で、わつしが女とさしでやりましたよ。女はね、挑みかかるやうな眼付で俺を時々見ました。膝をくずす、裾を出す、あぐらをかく、足を投げだす、これが手ですね。俺あ自分の幸運を信じてゐましたが、この手にやかなはねえ。全く幾度かフゥフゥフーしましたよ。女は坐つてゐて何か寝てるやうな氣持を起こしました。

「半」と女が云ひました。そこで

「丁」と

俺がいきました。がやられましたよ。またやられちやつた。續けて。俺の手からはもう七百兩餘りの金が消えてゐました。

「そいぢや八百兩でゆかう」

俺あ有金の全部をかけたあです。

『よし!』

女が答へました。

博齒を投げ込んだ。と手早くふせる。みんながもうガヤガヤ騒ぎたてる。俺あ半にしてみようかとよつぽど迷つたが、女が丁にしても、半と來たぢやねえか。仕方なしに『丁』と思ひ切つて俺あ云ひました。『丁』とな、やつぱり。

と、どうです、五一の丁と出たでさ」

「なるほど」馭者は向うを見ながら一人悦に入つてゐるらしい。

「それからあ、ガラ勝ちでがんさ。運が順になつたですね。四六に一一、四一とヌケたが、三一に五五四二と云ふ調子。到頭女あ、まるつきり元金を無くしてしまつて、泣きんづらして歸りましたよ。女あその上膊をだしたり膝をだしたり、それだけのおまけもんをして行つたえわけでさ。俺あ愉快でした。おのれの幸運がどうやらゆるがんやうな氣がしましてな。女が歸ると御シキ連中が口々に云ひましたよ。

『凄かつたね、もう彼奴も來つかあねえや。あんだけ敗けちや』」

ギイギイと車體がきしんだ。曲り道をしたのである。向うから一臺の馬車がやつて來た。

「やあ、小鳥う買うて來たけえ、小鳥う」

すると向うの馭者がカナリヤの這入つた鳥籠をさしあげて見せた。カーキ服のボタンが金貨になつて光つた。

「ふん、あいつ儲けようと思つて、あせつてゐるらあ」

こちらの馭者は悟つてゐるやうにそんな事を言つた。

「ところが、翌晩もその女がやつて來たでさ。驚いたずら。あんまり案外でね―

―そりや、お嬢さん。おめえにだいぶ、まゐつてゐたずら」

「そんな事、あるもんけえ。がそりや兎に角として、女が自信のある強い張り方をしましたよ。慣れた手つきでね。

その頃あ本式で、茶碗のかはりに壺皿を使つてました。[illegible]只に三回の[illegible]でしたな。何しろ大え勝負でした。女あ、それからそれへ追つかけて張りましただ。

勝負が熱してくると、女は突然舌打をしました。

『チェッ、緣起が惡いえ』

盆茣蓙をはねのけました。女[illegible]になつて、[illegible]な女といふもんは、とかく大え[illegible]わたしに一番振らしてもらひますべい』女がさう云ひました。俺あ心の中で思えましたよ、イカサマをする積りかな、イカサマをするにや持つてこいの手つきだ。ふとつて肉がブタブタして。と御シキ連中が別の茣蓙をはふり込みました。

『まあやつてみるがいい』

が到頭何も手だしがならなかつたらしい。白い腕をまくつて、到頭女あ金をはたいてしまひました。わつしの前には、合計八百五十兩といふ金の山が出來ました。[illegible]相手に見せびらかすんでがんす。からして取つた金を相手に見せびらかすのが賭場の[illegible]な風習でがんして。

女は[illegible]しさうに張りのある眼を、ジロジロと俺の身體の上に注えてました[illegible]

りと汗にぬれてました。その時ばつかあ、可哀想でしたよ」

「うん、なるほど。お爺さんはなかなか面白い」

馭者は馬に鞭をあてながら一人喜んでゐる。

私達はすつかり話につり込まれてゐた。

『ゆかう、千兩で。わたしはからだを賭ける』

女が歯ぎしりをかみながら、さう云つたです。手をわなわなと慄はしながら。此處まで來たら、誰でもやめられねえとみえる。

『ようし！』

わつしあ身體を前へのりだしました。わつし達は二人共眼に血が這入つてゐましたよ。

振つた。あけた。俺が勝ちました。一一と出たもん。と女がゲラゲラと笑ひ出してね、あんた」

「コリヤ、コリヤ、シツ、トツ、トツ、トツ、トツ……」

馬は尻尾をパサパサと風の中で動かした。それが壺皿をふる壺振りの手ぎはのいい動作の様に見えた。

快朗な蹄の音がリズムを作つて晴れた空に響いた。みんなの身體が氣持よささうに搖れてゐた。と、さつきから老人の白い胸毛を、不思議さうに見てゐた私の子供が、眠さうにしきりにお辭儀をしだした。で妻が手をのばして膝の上へ抱きとつてやつた。

と馬車は停まつて又一人の男を拾つた。白地の着物を着て、金歯を澤山入れてゐた。

「いや、不景氣ですと賭博がはやりますよ。それから賭博のやうな小鳥相場や出販がね」

彼は町役場員らしい。然しこの近村の男らしく賭博の経験だけはちやんと持つてゐるらしかつた。

「けど貧乏人が一躍金を取るにや、これに限りまさあね」

「それでどうなつたんですね」

今度は私が老人に尋ねかけた。妻が私の顔を見て笑つた。

「わつし達は逃げましたよ。その村からな。いい女でした。勿論亭主持でがんした。ふんだから匿れるのに苦心しましたよ。追手が來やしねえかと思つてね。女あ、金と一緒に身體ぐるみで俺んところへ來たあだだから。

まあ女としちや文句なしの取引でさね。それにわつしにしても、其時や若かつたし金も持つてるときてる。幸福でしたよ。

なんでもその女の亭主といふなあ、女に食はしてもらつてたと云ふから、氣の毒と云や氣の毒でした。

わつし等あ手を取つて東京へ出ました。東京でも方々の賭場へ出ました。女は俺の見込み通りイカサマが上手でしてね。こりや東京ぢやあんまり出來ねえかつたです。が、東京ぢや下谷、日本橋、本所、淺草、と二三年苦勞しましたよ。これといふ手に職がねえし、賭博も幾ら運のいい丁でも、うまくばかりもいかねえ。そこで物價の高え東京からこつそりだが、それも自分の村から四里許り離れた村へけえつて、漁もしたり、賭博もしたりでいきましたよ。

なんでもその村へ歸つてから、さうだ、十五六度もやりましたかな。そのイカサマを。村の八幡さんの拜殿と奥の院の間へ夜[illegible]をつけて。

わつしの使つたなあ骨引といふイカサマ博奕でした。五三一の目から黒い骨が出るやうな仕掛けでね。つまり骨の出かたで丁か半かがわかる仕掛けでさ。からやりましてた。[illegible]眼をひつ

ばると、茣蓙の上へ黒い粉の小星が一つ——こりや半です。二つ出ると丁目の丁。一つも出ねえと半目の半。こいぢや随分まうけました。けんど相手に見破られると、血の雨を降らすといふ奴でさ。なんしろ生の金をかけた勝負ですからな。
それで話は、今の拝殿にけえりますが。蠟燭のうす明りを圍んで五人、其時あ女房はゐなかつたです。そつとやつてました。そつとやつてるのがまたこつちの强味でさね。わつしがフキカへようとしてゐた時です。スーッと拝殿の境にある四つ目の戸が、ひとりでに開くぢやねえか。びつくりしたのなんのつて。よく見ると其處にぢつと親父が立つてゐるぢやありませんか、わつしのね。ぢつとこちらあ見つめて、實際幽靈かと思ひましたよ。わつしもこん時位不氣味だつた事あありませんでした。
『止しやがれ！』
わつしやギヨッとしました。どうして居所も知らねえ筈の親父が、ヒヨックリこの村へ現はれたのか、それもこんな夜中の賭場へ。うかうかしてると粉引博奕をみんなの前へ叩きつけられたかも知んねえ。わつしあ、いきなり博奕を懐中に押し込むと、急えで立ちあがりました。
悪事を責められてるやうな氣がしましてね。
父に仔細を訊くと、何でも商用とかでこの村へ來てわつしの事を聞きつけ、いづれこんな事だらう位に思つて來たといふ事だつたです。親父ですか、親父は始終賭博だけはよせつて、止めてました。俺あ、おやぢに睨まれたあの時の目が未だに忘れられませんや。親父の死んだ當座だけは本當にやめうと思つてましたよ。キッパリとな。が二月と辛抱が出來ねえかつたです。
運かれ、運はいい一方でさ。丁でな。何しろ九半十二丁の强味で勝ち味ばつかあでさ」
風が青田から吹いて來た。
香貫山が右手に。我入道の黒い松の向うに、千本松原の松が一抹の薄い紫色に見えた。
自動車が追ひ越した。番號が丁だつた。馭者は臺の上から乘つてゐる婦人をひやかした。馬の尻に鞭をあてた。馬が後足をあげて勢よく走りだした。
「ハイー、ハイー、ドウ、ドウ……」
馭者は長い革の手綱をひいて又鞭をあげた。鞭が縮んだり、伸びたりしながら、白い幻の象眼を青い空の中へ入れた。
「カツ、カツ、カツ、カツ、カツ……」
「勿論ある男はわつしの爲めに財産全部を無くしたあよ。わつしを恨んでわつしを殺さうとするほどね。もつともな話でさ。けんど敗けたもんに冷淡なあ、わつし等仲間のあたり前でさ。そりや敗けたもんの不運だからね。それほど男氣がねえなら、なまじつか、しねえきやいいです。
それにつけてもわつしの幸運——本當にあの賭博嫌ひの親父に禮を云ひたいほどの幸運に遭つた事がありましたよ。矢つ張りその村にゐた時の事ですが、賭博最中に女房が眞つ青な顔して走り込んで來たあです。とりみだしてね。
「ちやあつと來ねえ。お父たんが死にさうだつて、電報が來たあから」
わつしはいそいで歸りました。がまるつきりそんな事あ狂言だつたです。
『どういふわけで、呼びに來ただあね』
『わしの腹で場をはづさせたあだ。わしは始終かげで勝負う見てゐたあもん。
其の時あ千兩近くの錢を、勝ち逃げする事が

出來ましたよ。勝つたらどうかして場をはづすのが見切り上手といふんだが、人間は勝ちだすと決してやめられるもんぢやねえ。行くところまで行くといふのが本當でさ。それに小便にでもついて來るといふのが、賭場の習慣だもんな。よくよく歸りたきあ、張つた錢う捨てにして歸るより仕方がねえ。まあ、さうすりや歸らしますがね。

いや、其の時の女房の氣轉にや、そして親父といふもんを、本當にありがたく思ひましたよ。その頃わつし等あ、大名のやうな暮しをしてゐましたよ」

老人の眼は異樣にギラギラと輝いた。それは激しい賭場の狂熱の中で輝く喜びの眼のやうだつた。

「いや、賭博位面白いもんはありませんや。賭博う見ると、全く腰がたたねえからねえ」

彼は又目をパチパチさせた。そして白い胸毛を平手でひととほり倒した。

「そいぢや、お爺さん。おめえ、でえぶ錢を殘してゐるらなあ」

村役場が云つた。すると白髮の男は情なささうに云つた。

「四十八だで、おめえ。爺さんたあ可哀想だやねえけえ」

「えへ、さうけえ。道理で話しつぷりの元氣がいいと思つたに」

「まだ若えずら」

「けんど、殘えてゐるらなあ錢う、おぢい——」

と又つい云ひかけて彼はをかしくなつたらしく下を向いた。そして「をぢさん」と云ひなほした。

沖の暗いのにヨー
白帆が見える。ヨイショ、ヨイショ。

馭者は氣樂さうに又歌を始めた。煙草の煙がパッパッと空の盆茣蓙にあやしい粉引だ。馬車は道の上をころがる博齒だ。愛鷹山の上に聳えてゐる富士は、ふせられた壺皿だ。

鞍の上の金具が悲近いきつい陽の光を受けて燃えるやうに白く光つた。

「ガタ、ガタ、ガタ、ガタ、ガタ、ガタ……」

「まあ、わつしの運のいい話を聞いてくんねえ、終えまでな。

わつしの幸運を聞いて一人の男がやつて來たあね。運を鬪はしたい云うて。どつちの運がいいか——

わつしは喜んで迎へたあよ。色の青い男で眼と眉の間のせまい男でしたあよ。笛のやうな聲をだす奴で。脊の高え、何時も下あ向いてる奴でした。時々口ん中の言あ、まるつきり出して笑ひましたよ。

蒸し暑い晩だつた。

「今日あるけえ」

男は戸口に這入ると、手を振つてみせました。

『さあ、あがんなせえ』

わつしは座にあげました。

もうそろそろ連中の集まる頃でした。

もともとわつし達夫婦は、世を忍ぶ身柄だつたもん、表を向いて胴元といふやうな事あしてゐなかつた。

がその夜は都合六人で開帳しましたよ。わつしあ其頃何時でも壺振りをしてゐました。こりや寺錢だけとつてゆくだから、惡くなかつたです。

中盆が、

「壺！」

と呶鳴る。俺が手ぎはよく博齒を壺に投げ込む。サッとふせる。みんながめいめいに叫ぶ。

『丁だ!』
『半だ!』
『丁!』
『半といから!』
左右の額が平均すると、中盆が又どなります。
『勝負!』
　わつしが壺をあける。するとどうです。あけるたびに、青い男は敗けた事がなかつたです。火のやうに燃える錢や紙幣が、ザラザラと、そのたびに青い男の方へ流れて行つたのです。やつとその何十分の一かの寺錢が、わつしの前へ集まつてきました。
　兎に角その晩は、妙に青い男の方へ錢が流れて行つたです。十時頃がくると、財布の空になつた男がかなりに出來ました。わつしあ煙管をはたきながら云ひましたよ。
『追つかけると出ねえど』
　わつしは熱してゐる男になんべんも注意してやりました。と、
『五六は半のゆきどまりと』
冷靜に見てゐた一人の男がさう呟いて、
『丁!』
　と云つたです。この時ばつかあ、わつしも占めたと思えました。
『こんだあ、どうでえ』
　が蓋をあけると、矢張り勝ちは青い男の方だつたあです。
『馬鹿らしいや。面白くでもねえ』
　連中達は次ぎ次ぎになめられると、そろそろ立ちあがりかけました。
　青い男の前には、もう紙幣の山が出來てゐました。わつしあ眺め乍ら、こいつ運のいい男だなと思ひましたよ。何か青い顔が逞しく見えて來だしましてね。するとわつしあ壺振りだけでは我慢が出來なくなつたあです、憎つたらしくて。
『さあ、そいぢや、さしでやるべえ』
　わつしは向きなほつて青い男に云ひました。で交り番に壺を振る事にしました。
　先づわつしが振つた。
『丁だ!』男が云ひました。
　わつしは仕方なし『半』と張つた。勝ちました。今度は男が振りました。
『丁だ』
　わつしは賭博を打ちだして以來の丁でうつたです。とあけると、さすがに俺の運はまだ續くとみえて勝ちましたよ。
　男が振りました。が又わつしが勝つたあです。
　男が振りました。敗けでしたね、わつしが。
　それ以來俺の丁はどういふわけだか、すつかり死んでしめえました。一度に澤山の金をとられました。
　その翌夜も翌夜も、わつしとその男は向きあつてゐましたよ。
　或る夜、わつしが金を懷中に入れて出ようとすると、女房がわつしの肩にすがつてふるへながら云ひましただ。
『どうか今夜だきや、止めておくんねえ。こんな氣味のわるい空模樣だもん、どうもあんたあ正氣ぢやねえやうだあし』
　わつし達は其時はもう潰る一方だつた財産も家屋敷も無くして、たつた一艘の漁師船を二日ほど前から俺等の住家にしてゐました。
　わつし等の上には眞暗な空がかぶさりかかつてゐました。ユラユラするワタシを渡つて、其の夜わつしがどんな氣持で出かけたか――
『今夜だけやつてくよう。今夜こさ敵う取つてくるだに』
　わつしは興奮して云ひました。
『心配しねえで待つてくよう。俺の最後の運だめしだ』

わつしは女房を一寸抱いてやつてから、ユラユラするワタシを渡りました。泣きさうな氣持でな。

ところが其の夜の勝負も又わつしの敗けだつたあです。なんぼ張つてもわつしは、はづれるばつかあだつたあです。

『ようし、そいぢや船をかけた』

わつしは今度こさと思ふと、腕をまくつて叫びました。やめときあよかつたに。

青い男が七百兩の金を眼の前へ並べました。

わつしが振る番でした。と『半』が出たあです。わつしは、わつしは船まで取られてしめえました。わしは己れのせゐだからいいが、女房の事を思ふと可哀想でな。と氣がつくと、外はもの凄い暴風雨になつてるぢやねえか。船あ、もう人のもんだからどうでもいいが、女房の事が心配になりました。

雨ん中をびしよぬれになつて、一目散に海へ出ました。白い山のやうな波が猛獸のやうに吼えたててゐたあです。暗い海ん中にひきあげそこねた船と船が、摩れあつてギイギイもの凄え音をたててゐます。とプツリ！　何か綱がきれたやうな音がしましただ。とわつしの眼の前を矢のやうに流れ去つた黑いものがあつたあです。女の叫び聲をのせて。

わつしはザブザブと水ん中へ這入りました。

『おい、おい、おかね、どうした』

わつしあ闇ん中を氣狂えのやうに呼びました。

『おかね、どうしたあだ』

とあつしは、波にうちのめされてしめえましたよ。わつしの女房は、船のまま黑い海の中へ流されてしまつたです。

なんてえ不幸な男だらう、わつしや。わつしが頼んでも村の人は誰一人助けてくれる者も無かつたです。平生からわつしの稼業が、氣に入らねえかつたからでがんしよ。わつし達はそれつきり生き別れでさ」

もう馭者もかけ聲をしなかつた。馬車はゴトリゴトリと淋しさうな音をたてて沼津の近くに來た。場末の感じのする埃つぽい街に氷屋が何軒も旗をだしてゐる。何處かで十二時の笛が鳴つた。

橋にかかつた。ひとしきり車輪の音が高くガラガラと鳴つた。橋の下の濃い水の中に赤く塗つた小蒸汽が二つとまつてゐた。

私は老人に尋ねかけた。

「今でも賭博はしたいですか」

「いや、もうやめてつから八年になりまさあ。女房を流しましてな、それ以來やめてまさあ」

「ぢや酒の方は」

「飲む方も駄目になつてしめえました。心臟脚氣で今日も沼津の病院へ行くところでさ」

眠つてゐた子供が眼を醒ました。そして久し振りに見る都會に對して嬉しさうな瞳を放つた。鐵の橋骨が目まぐるしく現はれてはサラサラと後へ走つた。馭者が喇叭を鳴らしだした。

「ステキ、ステキ」

子供は手をうつて喜んだ

「わつしもな、若え時にや賭博の樂しみを隨分しました―

老人は何かあらたまつたやうに斯う云つた。

「惡い事もあつたが、面白かつた事あ忘れられん。ふんだから倅にも云ふです、したきやしろ、とな。賭博の出來ねえやうなケチな人間にやしやうがねえ。けんど女房をもつたらやめろつてな、しよつちう云ふです。わつしゃ今

く賭博の爲めに女房を流したあからに」
「賭博で取つて賭博で流したといふ奴だな—
—さうでがんす。金も女もな。金を自在にして、こんだ金にやられたんでがんす—」
「倅さんて、そんな人があつたんですか」
馬がたてがみを振つていなないた。
「ええ、そいつですかい。そりや女房にや子供は無かつたですが、ええその、外で出來た子供がありましてね。そいつをひきとつてまさあ—」
馬車が長い橋を渡りきつた。
「わつしもな。今日まで誰にも讃められた事ありません。けんどたつた一遍、あの震災の時に殺された何とか云ふ社會主義者が村に來た時、わつしの一生を火のやうな云うて、讃めてくれましたよ。その人はつまらねえやうな顏をしとりました」
「けど、賭博を惡く云ふが、人間のする事萬事が賭博ぢやないですか。世の中の出來事と云ふ出來事も、考へやうによつちや、みな用心深くフル博齒の目のやうなもんだからね」
私はそれほどの運命論者ではなかつたが、慰めるやうにさう云つて合槌を打つた。
「いや、どんな幸運でも幸運だと思ひすぎちやいけねえです」
「下りるど」
老人は吠鳴るやうに馭者の方へ向いて云つた。
馬車がとまつた。
と反動で今度は娘が老人の方へ傾きかかつた。娘は大抵の娘がこんな場合にでもよくするやうに一寸笑つてから、
「すんません」と云つた。
「さやうなら」
老人は一禮をすると馬車をおりた。そして道を曲つて行つた。左の腰によごれた手拭をはさんでゐる。が歩きつきからしてどうも足に缺陷があるらしく思はれた。歳に似あはず腰が曲りかけてゐた。
私はあとから病院へつけて行つて、其處でもつと話をしてみたい氣が起つた。
町役場や娘達も、それぞれ賃銀を拂つて車をおりた。
馭者が馬の鼻づらにドンゴロスで作つた飼葉の袋をつりさげた。馬車の中が急に蒸し暑く思はれた。
「どうも御退屈さま。遠い道で—」
やがて袋をしまふと、馭者は靜かに又鞭を鳴しながら、吾々を停車場まで運んで行くと云つた。私は話を離れようとして、最も激しい話を、感ずる事が出來たのを面白く思つた。私も娘も暫く默つてゐた。
鞍の下には馬の背中にいつぱい白い汗が石鹸水のやうにたつてゐた。
私はこの一篇を殆ど書きあげようとしてゐる時、この中にほんの時々顏をだす私の小さい娘に死なれた。賭博の話を馬車の中で眠りながら聞いたこの小さい私の子供は——それから幾ケ月かの後に、下手な人生の賭博師である私の爲めに、みすみす五つを最期にしてこの世から去つてしまつた。
私はかうして私の賭博が初めから不運であつた爲めに、賭博を厲しい人生としてより他に、一つの興味として見る事から、完全に資格を失つてしまつた。賭博を人生として、人生以外として見る事が出來なくなつてしまつた。

二千六百八十二哩

一

街にはネブラスカ大學の遠征軍が來てゐた。

久里は大陸を横斷して、西部海岸に出る爲めに、バスを利用しようとしてゐた。

腕の内側を見つめてゐた。時計の面から、ふと動脈の方へ眼が移ると、彼は生きてゐる事を強く感じた。

カレッヂ・タウンである此の街の兩側には、ネブラスカ大學の白と赤、キャンサス大學の青と朱の旗が交互に屹立して、一日後の華々しい試合を豫告してゐた。

肩を摩り合はせて歩く學生と、學生を乘せた自動車と、それらが搔きたてる笑ひ聲のやうな雜音が、休暇前の暑さの中で空に立ちながら響いてゐた。

「もう幾分位ありませうか。貴方」

白いステージ・ディポーの中で、何處か此の邊の遠くの田舍から出て來たらしい娘が、久里の方へ向いて突然尋ねた。

彼女の服裝は手觸りの荒い麻で、鶸色をしてゐた。顏付は表情の少ない無愛想さを示してゐた。胸に結んでゐるネクタイだけが都會風であつたが、模樣には爭へぬ家畜の繪が這入つてゐた。

「あと十五分です。それでどちらまでいらつしやるんです」

「ハリウッド。自動車で四晝夜半ださうですね」

「ああ、ぢや僕と一緒です」

久里はさう答へてから、更に丹念にこの娘を眺めた。すると心の中で其の風俗とハリウッドとが最も適切に結びついた。なぜならば、ハリウッドには側役としての傴僂や、絨氈をなめる男や、一本足や、マッチのやうにすぐ怒れる男や、彼女のやうな田舍まるだしを何よりも要求してゐるから。

「女優志願ですか」

「ええ、まあ、さうなんですの」

彼女はおどけたやうな細い、然し勇敢な聲をだした。トーキイをもねらつてゐるのに違ひない。

と、十八の窓を持つた黄色く塗られた大型の乘合自動車が、埃をかぶつて突進して來た。

そこには二十九人の乘客が、動搖しながら坐つてゐた。彼等は窓から首を突きだして、兩側の旗を見ると、眠い好奇心を動かした。

藍色のシャツを着た黑ん坊のポーターが、新らしい客の荷物を屋根の上へかついであがつた。荷物の上へひろげるキャンバスの音が、天井から雨のやうに聞えて來た。

シャツ一枚の運轉手は、クラッチを放すと、アクセレーターを勢よく噴出させた。すると自動車は徐々に動きだして、速力をセカンドからトップに高潮した。

街の旗が一本のダンダラ模樣になつて兩側を流れた。

街を出ると、一人のインディヤン大學の學生が後の窓から遠ざかる街にお辭儀をした。

「グッド・バイ、ローレンス」

そして彼は眼たたきしながら、學生生活に最後の帽子を振るらしかつた。

ローレンスは一瞬にして遠く小さい街になつて消えた。

と、限りない緩斜面の大草原が現はれた。自動車は益々スピードをあげながら、人々を無限の低地に向つて運びだした。

何時、どつちを見ても、同じ草原の地平線である。ただこの草原は傾いた一枚の線である。そして漠々としたこの草原の中の一直線、アスファルトを敷いた漆黒の州道第八十號は、光りながら遠く地の底に沒してゐた。

無限の斜面、それはこの道を遂に深い海底に辿り込ますやうな錯覺を起させる。乘客は身體の狀態を傾けながら、執拗なこの長い間の錯覺に耐へてゐる。兩側の草がつぎつぎに強く吹き倒されては起きあがる。

と車が上へ向いた。水平に返つたのである。頭の中を洗ふ快活な疾走が始まつた。

「ラヂオを入れないか。コカコラ會社の。面白さうだぜ」

一人の男がラヂオ・ニュースをひろげながら云つた。すると一番前に坐つてゐる青年になりかけの少年が、すぐスキッチをひねつた。

「わがアメリカに於ける戀愛が、如何なる思想によつて支配せられてゐるか。男は益々社會生活に於て、強く暴力的にならなければ生きてゆけない狀態になつてゐます。ところが婦人の如き修養を積むためには、彼等は最もいやしい女達と接近しなければならない。青年が純粹な戀愛をするといふ事は、彼を弱くするばかりである。彼は純情の爲めに實に感じやすく、弱々しくなる。然しいやしいいい女を對照とする戀愛は、それがいやしければいいやしいほど、彼は次第に強くなり、人を物體のやうに取扱ふ修練を積むのであります。これは一つには生存に對する經濟關係にもよるものでありますが、わがアメリカに於ける青年の風儀が、かかる暴力的な戀愛への方向によつて毒されつつある事を吾々は憂ふるものであります……」

「つまらないな。もう止めろよ」

少年が正直にスキッチを廻した。然し彼は暫くスキッチを弄んでゐた。とスキッチが再びもとに這入ると、今度は新らしい飲料水コカコラに就いての廣告の放送に變つてゐた。

彼は苦笑ひをしながらラヂオに觸れるのを中止した。

自動車は依然として際限のない草原の中を走りつづけてゐる。それはアメリカ以外では見られない途方のない際限なさである。

と、この扁平な大地の上に、突如として、灰色の猫のやうな巨大な鐵の山が現はれた。十個、二十個、この寂寞とした地平の中にそれは暴力的な意慾を含みながら大きく接近して來た。博奕のやうなトロッコか、小さい蟲のやうな焰を吹きあげながら静かに動いてゐる。

「あれ、何でせうか。恐ろしいやうな」

女優志願が眼を大きく見張りながら隣席の男に尋ねた。

「タンクです。重油の」

六時間の疾走の後に、窓外の風色は漸く闇の匂ひをつけだしてゐた。

二

遠くの方が次第に明るくなつてくると、自動車は陸しい光、新興油田都市タルサの中に抱擁せられた。

タルサは辛辣な資本家と幸運な成金の一夜つくりの都會である。

川は油のためにをどみ、林の根は黒く、流れるやうな土で湧きあがつて、街は發狂した活氣で動いてゐた。

自動車が止まつた。乘客は一寸反動を感じてから次ぎ次ぎに立ちあがつた。別のバスに乘

りかへなければならないからである。

久里は夕方の雑沓に巻き込まれると、食事を取る爲めにカフェーに這入つた。ニューヨークから引き抜いて來た此處のカフェーには、タキシードのバンドが南方の猥雑な歌を首をふりながらわめき散らしてゐた。そしてタンバリンを持つた踊子がスハニッシュ・ダンスを淫らに踊りながら、客席の方へ廻つて來た。

すると、一人の迷ひ込んでゐた勞働者は、腹が減つてゐる癖に、料理の食べ方がわからないで、マゴツキながら、そのまま外へ出てしまつた。そしてカールス・バードのサナトリウムへ行く筈のブルジョアが、一夜の放蕩息子のやうに貪りながら鶏の足を握つてゐた。

久里も勿論、空腹を補つてゐた。然し女が接近してくると、フォークに突きさした蟹を、彼女の口の近くへ差しだしてやつた。するとこの小さい口は、それを巧みに食べてしまつた。

「貴方、支那のお方」

「ノウ」

「では朝鮮」

「ノウ」

「さあ、どこかしら」

女が口を綺麗に動かしながら云つた。久里は口に氣をとられさうになりながら答へた。

「何處つて。君達は日本つて國を忘れてゐるんだね」

「おお日本。わたしの好きな國だわ。櫻のお國。まあ櫻のお國を忘れるなんて」

「どうかしてゐるね、君は。カルフォルニヤでは排日で騒いでゐるぢやないか」

久里はふと何か思ひ出すと、不快になりながら鼻であしらふやうに云つた。

「まあ、排日なんて。けどあれは政治家だけの事だわ」

久里は外へ出た。成りあがり石油都市の明るいナンセンスと、出まかせのお愛想が彼を不快にした。

彼は今、世界の市場權をねらつて、アフリカとイギリスとが、石油の販路に就いて、もの凄い戰ひをしてゐる事を知つてゐる。それは、如何にマクドナルドの髯が、ラピタン山莊でフーバーの豐頬を撫でてみたところで、又いくらいい英米海軍協定を結んでみたところで、この實質的衝突に就いてはどうする事も出來ない。そこで吾々の排日は、當然これ等の間に微妙に離反を計劃しなければならない……

彼は歩きながら發着所の方へ行つた。すると彼と出あひ頭に大陸を横斷する乘合自動車が、新らしく這入つて來た。

——ニューヨークからロスアンゼルスへ

この自動車だなと久里は考へた。

乘客共がガヤガヤと食事に下りだした。

「馬鹿に暑いね。此處でまた一時間か。やりきれやしない」

猛烈な顔をした大男がスナップに足をおろさうとしてゐた。彼は腕の上へ上衣をひつかけ、ネクタイをはづしてゐた。顔が油じみて口の中が黑く、ごろつきのやうに思はれた。

つづいて二人の若々しい姉妹がおりて來た。それが生き生きした同種類の二つの花のやうに久里の眼に寫つた。

子供を連れた母親がおりて來た。老人がおりて來た。

久里は新らしい同行者に就いて、物珍らしさうな解釋をくだしながら、誰もゐない自動車に一人で乘り込んでゐた。

油さしが潤滑油裝置をはづして、潤滑油を車軸に、それからエンジンの[illegible]承に[illegible]トン環に、氣筒の内壁に、丹念に注入してゐる。

渇きさうになつてゐた[illegible]急に[illegible]した[illegible]から、千噸分の[illegible]リメー[illegible]の[illegible]を[illegible]

滑な油膜を張りだしてゐた。すると車は今にも滑りだしたい欲望に濡れて、新らしい出發を衝動してゐた。

同乘者は次第に歸つて來た。

自動車は新らしい客を加へると、すぐ街を出た。

闇の中へ這入つた。暗、疾走が始まつた。眞夜中にオクラハマ市に着いて、暫く灯の中を走つたが、又闇の中へ這入つた　兩側の電柱燈が大きく近づいて來ては消えた。

乘客はガラス窓をおろして、皆深い眠りに落ちてゐる。彼等の夢の中をオクラハマ州の白い境界標が走りすぎた　疲れが彼等を氣持よくゆすつてゐた。そして眠りころげながら、ひとかたまりになつて、何處かへ運ばれてゐる人間の姿が、今は可憐な存在に變つてゐた。

人は明るくなつてしまはなければ眼を醒さない。久里が二日目の眼を醒した時、自動車は一望千里のテキサス州の北部を走つてゐた。土地は赤く焼けて、何も植つてゐなかつた。

恐らく綿の栽培が週期的に今年は別の地割に移動してゐるのに違ひない。綿花は長く同一の地面で成長出來ないからである。

久里は運轉手の後へ行くと、氣持のいい朝の動搖に堪へながらポンプを押した。水が沸騰しながらもりあがつて來た。彼はいそいでアメリカ風に左手をポケットに入れたまま、右手で顔を洗つた。

と彼の肩に柔らかい手が觸つた。

「グッド・モーニング」

「お早う。いいお天氣ですのね、今日も」

昨夜乘つた二つの花のやうに思はれた姉妹達が其處に立つてゐた。

彼は自分の座席に歸ると、キャッキャッ騒ぎながら彼女達が顔を洗つてゐるのを樂しく眺めてゐた。水が白く顔に叩きつけられてゐた。彼女達は海岸にゐる女達のやうに簡單な服をつけてゐた。そして乳の下へすぐ赤いバンドをしめてゐた。それが遠い旅行をしてゐる此の女達によく似あつてゐた。

「グッド・モーニング。氣をつけ給へ」

隣りの男が突然、背中を叩いて忠告した。「氣をつけ給へ」に重點があつた。昨日の猛烈な顔をした大男である。

「ああいふ女は危險だよ」

やがて二人の女は座席へ歸ると、陰險な月給取りのやうな顔をした細い男に急いで接吻した。

陰險な男は女達にダッディ、ダッディと呼ばれてゐる。然し彼が彼女達の父親でない事は誰が見たつてわかる。彼等はせいぜい五六歳しか違つてゐなかつた。

「見てゐたまへ、あの男は今にひどい目に逢ふから」

寶石商である例の大男が、又さう云つた。彼は嫉妬けてゐるのかも知れない。彼の齒は喫煙の爲めに黄黒によどれてゐた。

ラヂオが這入つてゐた。ジャズの名手、ポール・ホワイトマン氏の指揮する「滿月の下で」であつた。姉妹達が時々指を鳴らしながら上體を動かした。彼女達は今にも立ちあがつて、彼女達のダッディと踊りだしたいやうな氣配を示してゐた。そして時々ムシャブリ付くやうに男の首に交る交る兩方から手を卷きつけた。

自動車の動搖までが、次第にジャズの上へ乘つて來た。ダッディと呼ばれてゐる男は何かのスパイのやうにも思はれた。久里は警戒が何よりも大切だと考へた。

自動車のタイヤは、吸ひつくやうに焼けたアスファルトの上を、相變らず滑らかに辷りつづ

けてゐる。

三

開け放された窓から顔を燒くやうな風が吹き込んで來た。

久里は頭をひつ込めると、ゴムを嚙みながら、自然に娘達の方を見てゐた。

「何しろアメリカ第一の州ですからね、テキサスは。この州だけでも日本より廣いといふんですから―」

後の男が耳のそばで云つてくれた。

「なるほど。だが暑いですね。全く」

「さうですとも。だが暑くて雨が少ないのが、反つていいんでさ。此頃になつてやつと開けたんですが、その爲めに遂に綿花の産出では世界第一にのぼりましたよ。それにこの綿がアメリカの輸出品の中で一等多額にのぼるんですからね」

この邊の男に違ひない。久里は說明を聞きながら怪物のやうなアメリカを感じてゐた。今アスファルトの道は、この怪物の中を熱心に突きつてゐる。そしてそれは人間の征服欲を無限に延長して、世界の問題である太平洋を目がけてゐる。

姉の方が突然、ダッディの膝に手を置いた。細い爪の先きが綺麗に鋭くしてあつた。彼女は男を尻の下に敷くかと思ひの外、反つて男の方が急いで彼女の手を握ると、自分の腰の下へしいた。女は痛さうにして我慢してゐた。

女優志願が見ぬふりをして此れをつぶさに觀察し、だが他の者は誰も振り返らうともしなかつた。

久里は喉が乾いて時々、ポンプを押しに行つた。すると妹の方がきまつてついでにコップをさしだした。

「よう。水がかり、しつかりたのむぞ」誰かがひやかした。

自動車は時々アクセレーターを吹かしながら、相變らず元氣である。家は無くなると、一軒も無くなつて、それが一日も續いた。長い長い路を走りつづけて、自動車は州境に近く汽車と平行線になつた。

アンムレラ飛行場から一臺の飛行機が後を追つかけて飛んで來た。飛行機はまだ飛ぶために飛んでゐる。だから彼の行動は時々不可解な神祕に見えてくる。爆音が頭の上へ近づいた。

と、ローレンスに於ける兩大學の野球の放送が始まつた。アナウンサーの聲がせはしく走者の位置と球の位置とを交錯させた。喚聲があがつた。白い球が彼等の乘りあはしたバスの天井を飛び廻つた。

黑人の大學生がしきりにスコア・ブックに記入してゐる。

空を裂く朗らかな打擊の音が聞えた。飛んだと思つた。と自動車は一寸停車してガソリンを補給した。

風景が少しづつ平原から高原へのぼりだしてゐた。自動車は崖下をくぐつたり、谷の中途を廻つたりしながら、次第に高くへ出た。そして平坦な風景に出ると、綠蘭の花が眞赤な注目を引いた。

「いい景色ですのね―」

「まだ、まだ、これからです」

そして姉妹達の父視に對する情擬の風景も、次第に迅しく進行してゐた。彼等の側は陽があたるので、暗くブラインドがおろされてゐた。その上ペスコ河を越えようとして、次第に彼等の周圍は、夕暮が濃い色をつけだしてゐた。

「おい、電燈をつけないか―」

誰かが皮肉に氣をきかして叫んだ。

四

三日目の朝、ロスウェルに着いた。

吾々は又運轉手と自動車とを變へた。

口紅を惡どく塗つた田舍じみた一人のモダン・ガールが乘つて來た。彼女は車内を見廻すと、しよんぼりしてゐる女優志願の傍らへ行つて坐つた。二人の對照が奇矯な諷刺畫を作つた。彼女はタイピストらしく指が頑丈に發達してゐた。而も二人は一日で親しくなれる豫感を感じあつてゐた。

ダッディが妹の方と一緒に何時の間にか下車してゐなくなつてゐた。

然し妹は一人になつても、平然として騷ぎ廻つてゐた。彼女は何時の間にか白い象牙の扇をだすと、それを胸にあてるやうにして使つてゐた。

そこで久里は新らしく座席を取る時に、今度は彼女の傍らへ行つて坐つた。彼女は右の頰に小さい點のやうな黶があつた。

「どちらへいらつしやいますの」

「日本へ歸るんです」

「まあ、そんなに遠いところへお歸りになるの」

「だが、いいところですよ」

「一緒に行つてみたいわ」

すると、大きい寶石商が思ひがけず叫んだ。

「おい、こつちへ來ないか、君。チョコレート進呈するから」

そこで久里は女達との會話を、彼の爲めに中斷された事をブツブツ云ひながら、彼の傍らへ行つて坐つた。チョコレートが柔らかくなつてゐた。

「君はわからないのかい。乘つた時から注意してゐるぢやないか」

「うん、よくわかつてるよ」

「どうだか」

だが久里は、厄介げにチョコレートを食べてしまふと、又妹の側へ行つて坐つた。

「貴方方のお父さんはどうしてお下りになつたんですか」

「彼は軍人です。この邊へ視察に來たんです。私達はただ遊ぶ爲めに……」

「おい」

又、男が叫んだ。彼はプンプン怒るやうに、黑い齒をむいて云つた。

「おい、ハンカチをかしてくれないか」

今度はさう云つて、久里を彼のそばへ呼びつけようとした。そして久里が女達と接近する事を極端に邪魔しようとした。この男は新婚早々かも知れない。久里はさう考へた。それにしても不思議な心理だと思つた。

久里は彼のオセッカイに幾分ほど不快を感じながら、彼の心理は肯定するのに價値があると考へた。彼は中腰になりながら彼に接近すると、

「親切全くありがたう。ハンカチは君に返却するよ」

そして胸のポケットから一枚のハンカチを取つた。

「ま、かけ給へ。君は僕のそばにゐるのが嫌なやうだね」

「でも、ないがね」

「チョコレートならまだあるよ」

「ありがたう。だが一寸話しかけてゐるんでね」

そして立たうとした。と大きい男は、いきなり彼の手を握つた。親切の積りか、嫉妬いてゐるのか、全く見當がつかない。ただ、兎に角、人種的な隔りを少しも感ぜしめない彼の國際的態度が彼に親しい友達の感情を起さしかけてゐた。

「貴方、いらつしやらない。こつちの窓へ。そ

つちの窓は陽があたつて暑いでせう。それにヤツカの花がとても綺麗に見えてよ」
今度は女の方から云つた。決して性質の惡い女とは思はれなかつた。ただの無邪氣な娘に違ひない。
「こら！ どうしてさう動きたがるんだ。少しぢつとしてゐろよ」
猛烈な顏をした國際主義者が唸つた。
然し久里が立ちあがると彼は泣く前のやうな強い顏をした。
「日本人なんて、しやうがないな」
暫くすると、彼が又叫びだした。
「ハンカチ返すよ。君。君のやうな男からもらつたもんは返却するよ」
女優志願とタイピストとが彼等の方を見て笑つた。久里はしぶしぶ立ちあがると、女の手を離して、怒つてゐる彼の傍らへ歸つて、今度は少し長い間、心抱して坐つてやつた。
「君。どうしてあんな女と話するんだい」
「話すのがどうしていけないんだい」
「話すのがいけないんだよ。僕がさつきから云つてゐるのが、まだ君にはわかつてないんだね」
久里は少しうるさくなると怒つた。
「おせつかいだね、君は。僕が何をしようと勝手ぢやないか。あまり馬鹿にしないでくれ給へ」
「君はあの連中の事を知らないからさ」
「君だつて知つてるわけぢやあるまい」
久里は急に不機嫌になると、怒つたまゝ妹の方へ歩いて行つて坐つた。寶石商の嫉妬は、彼の餘りに現實的な肉體の過剩から反撥して來るものに違ひない。さう考へさせるほど彼の肉體は座席にあふれてゐた。
「あつちの窓は實際暑いんでね」
向うから同じやうに客を乘せた長いバスが走つて來た。運轉手がなつかしげに南方から太いクラリソンを鳴らして挨拶した。乘客が白いハンカチを振りあつた。たしか胸にさしてゐる小さい赤い花が久里の眼にとまつて走りすぎた。人は瞬間に不思議なものを見るものである。
「いいもんですね。かういふ山の中で逢ふのは」
自動車は次第に南下して古風なエルパソの都をねらつてゐた。
L・S自動車會社の宣傳放送が始まつた。
「アメリカに於ける乘合自動車の發達は、漸く汽車と電車とに明らかな對立を示しだして來ました。自動車は贅澤品どころか、汽車の實用を遙かに凌駕してゐます。わがアメリカに於ける乘合自動車は約九萬七千臺に及びますが、内四萬五千臺が市中を走り、あとが市間、州間を連絡し、わが會社の自動車數はこれらの中の約五割を占めてゐます。今日までに全國的に發展して行つたバス經濟に費された金額は約十二億に及びます。
且つ何故に自動車が進歩的であるか、皆さんも經驗してゐられるやうに、既に賃金にしましても、アメリカ中部から西部に出る爲めに、鐵道では約百二十五ドルを要します。然るにわが乘合自動車に於ては五十五ドルで事足りるのであります。現代の抱負ある事業家が、各國とも漸く乘合自動車の問題に注目しだした事は當然と云はなければなりません」
自動車は爽快に乘客をゆすつてゐた。風が清麗な嵐氣を吹き込んで來て乘客をねむ〳〵くした。
「ああ眠むたくなつて來た。いい時に放送しやがる。こんないい景色のところで」
商人風の男はさう呟くと、然しいい景色を

眺めようともしないで、深い眠りに陷ちてしまつた。久里は後部の展望臺に出ると淋しい煙草を吹かしだした。薄い埃が煙の尾になつて、巻きあがりながらついて來た。

寶石商は、怒つたまま、あれ以來、彼に見向きもしなくなつてゐた。

五

四日目が明けた。

久里は彼女の傍らで眠つてゐた。ふと眼をあけると、寶石商は彼の方をぢつと見据ゑてゐた。だが久里が彼の方を見ると、彼はいそいでむづかしい顔をしながら向うを向いた。然し暫くして女が彼の肩に手をかけようとすると、たうとう我慢が出來なくなつたらしく彼の方から口をきいた。

「おい、よく眠れたかい」

まだ苦い顔をしてゐた。

「うん、君はどうだつた」

久里は急に明るくなつて久しぶりで答へた。千年の知己が歸つて來たやうな氣がした。

「又こつちへ遊びに來ないか。涼しいよ」

そこで久里は素直に立ちあがつた。今度は餘りひどい事は言はないだらうと思つた。

「怒つてゐるのかい」

「うんにや、ただ君と一日口をきかなかつただけさ。はつは」

「はつはつはゝはつ……」

彼も亦うれしげに笑ひだした。然し表情にはまだ變なものがひつかかつてゐた。笑ひが妙に止まらなかつた。親しい感情がこみあげて來た。

と、自動車がエルパソに到着した。其處は沙漠のためにアメリカの文化から完全に遮られてゐた。スペイン風の教會が方々に立つてゐる。そしてフレームの無いアドーベ家屋が遠い昔を夢みてゐた。人の氣風が纖細で、静かな情緒が流れてゐた。スカートの長い女達が、優しげに道の上を木靴を鳴らしながらカラカラと通つてゐる。

女優志願がタイピストと一緒に下りて行つた。久里は仲なほりした親友、寶石商と一緒におりて、朝の食事をしようとした。

と脊の高いアメリカの巡査が來て、久里を呼びとめた。

「君、君は何處から來たんですか。一寸しらべさしてもらひたいんだが」

「僕、ローレンスから乘つて來ました。目的は旅行です」

「旅券を見せてくれ給へ。日本人だらうね」

久里は不愉快さうにトランクを開つて一枚の紙を示した。巡査は暫く眺めてから、

「此處にはメキシコの方から這入つてくる密入國者がよくあるんでね」

そして橋の向うのメキシコの町ファレスの方を指さした。國境の川には湯のやうに濁れる水の中に鱒が泳いでゐた。

「特に日本人を警戒せられるのはどういふのですか」

久里は紳士らしい態度で云つた。

「お氣の毒ですが、カルフォルニヤに於ける排日思想は吾々にも嚴重さを要求してゐるのです」

猛烈な顔をした寶石商が後から言葉をかけた。

「彼は僕の友達でしてね。ローレンスから乘つて來ました。日本の小説にあるさうですが、まるで彌次喜多のやうな旅行者でしてね。特に彼はアメリカ人に對しては親切な男です。とりわけアメリカの婦人に對しては」

彼は公平な國際主義者らしく云つた。

「ぢや、よろしい。行き給へ」

巡査は擧手の禮をすると、ウサン臭さうにこの古風な街を通りすぎた。

彼等はおかげで、食事の時間を失つた。二人はブリブリしながら、サンドウヰッチを買ふと、あわてゝ自動車に驅けつけた。

アスファルトの道は白い沙漠の中へ這入つた。

廣い砂地の中には時々、草がパッパッと現はれては消えた。野兎が驚いて自動車の前を無數に横ぎつた。水仙のやうなヤッカの花が異樣な情緒を荒れた砂地の中に咲かせてゐる。道が次第に險惡になつて、自動車の動搖がはげしくなつてゐた。土埃が吹きつけられて、乘客の顏を次第に黑く塗りだしてゐた。

久里は寶石商の隣席に坐つて、ガタガタ男同士の身體を無趣味にうちつけながら、排日の事を憂鬱に考へてゐた。それに樂しい旅行に突如として割り込んで來る陰鬱な強迫だと思つた。

「怒るために丁度いい道だ」

自動車の動搖は久里を益々不機嫌にした。

「ミスター・クリ、遊びにいらつしやらない。私はする事が無いのよ」女の方から叫んだ。

「自動車が馬鹿に搖れるわね。

「何を氣取つてゐるの」

するとその事が寶石商の氣に入つたらしく、彼はすぐ久里に低い聲で囁いた。

「偉い。行くんぢやないよ。もうあんな奴のそばへは」

自動車は最も顯著な資本家的横暴の歷史を有する南太平洋鐵道に沿つて走りつづけてゐた。そして其等の資本家の一人、スタンフォドを攻擊しながら有名になつて、而も何時の間にか、排日の指揮者に變つてゐたハイラム・ジョンソンの事を久里は思ひ浮べてゐた。

資本家も、又横暴だつた資本家を攻擊する男も、それ以上に國際的であるべき勞働組合I・W・Wまでが、等しく西部アメリカに於ては排日によつてのみ自己の立場を強固にしようとしてゐる。

彼はカルフォルニヤに於ける日本人の耕作面積が、最高の四十三萬エーカーから、排日土地法によつて今は次第に僅か二萬エーカーにしか過ぎなくなつてゐる事實を知つてゐた。日本人の形をした藁人形が首に綱をつけられて引きずり廻られた事を知つてゐた。

マクラッチイ。ショートリッヂ。フヰンラン。インマン。ウエッブ。そして排日を刺戟し、日本人に漫罵をあびせるウイリアム・ランドルフ・ハーストの系統に屬する新聞の緻密な散布を知つてゐた。

「久里、外を見ないか。風景が變つたよ。とてもすばらしく」

「僕はさつきから女達の方を見てゐたのさ。彼女達は眠りだしたよ」

「駄目だな、君は。どうしてあんなものばかり見るんだらう」

「眠つてゐる女位かはいいものはないよ」

「馬鹿な」

女の手から、たたみかけの扇が落ちさうになつてゐた。

その時、南太平洋鐵道會社の汽車が、轟然たる響をたてながら傍らを通りすぎた。

響が通りすぎると、ローレンスに於ける野球の決勝戰の日の放送が再びつながつた。

「今回の戰ひが、烈しい人氣を呼び起して、例へば、西瓜の好きなロメ孃とか、切手の裏に書かれた秘密の手紙とか、あらゆる不思議な合言葉をこの都市に流行させたのはさすがはカレッヂ・タウンらしく愉快にたへません。吾々は勝敗の如何に拘はらず、勇[illegible]

世界を包むといふ合言葉を何時までも忘れたくないものです」

ローレンスの市長か何かの、誠にもつて可愛い閉會の辭が這入つて來た。

六

デミングに着いた。

沙漠の中の明るい近代的都會である。

三十分の停車時間があつた。寶石商が白い散髪屋へ這入つて行つた。

久里は彼がゐなくなると、何となく氣樂さを感じた。だが彼が遲くなりだすと、敵を見失つたやうにその事が心配になつて來た。

「君の相棒はどうしたかね」

一人の男が尋ねた。と彼は其處へ實にサッパりした男になつて歸つて來た。

發車時間が來た。すると忘れてゐた女優志願と、けばけばしいタイピストが、未だに歸つてゐないのに氣付いた。

「困るな。グヅグヅしちや」

無遠慮な今度の運轉手は、帽子を幾度もかぶりなほしながら不平を云つた。

「ぢや、俺が見に行つてやらう」

おせつかいの寶石商がユモラスな恰好をしながら下りて行つた。

と、二人は洗面所の鏡の中で懸命に化粧をしてゐた。そして二人共見違へるほど綺麗になつてゐた。

「君、君達、自動車が出るんだよ」

然し二人はなかなか鏡の中から眼を離さなかつた。

「チョッ！　ゐたよ。沙漠の中でおめかしをしてどうすると云ふんだろ、盛んに塗つてゐるのさ」

寶石商が大きい聲で皆に報告した。

「はつはつはつはつはつ……」

「はつはつはつはつ……」

怒つてゐた運轉手が突然笑ひだしながらハンドルを動かした。二人が狼狽しながら飛び乘つた。

二人は座席に落ちつくと、更に紅棒を出して化粧をつづけだした。タイピストの短く刈りすぎた斷髪と、發達した指とが、どうにも久里に特殊な感覺を呼び起さした。

それにしても、あの田舍まるだしの女優志願が、何時の間にか友達から化粧法を見ならつて、次第に美しくなりだしてゐるのが面白く思はれた。

アリゾナに這入つた。

向うの隅で親しい一團の連中が、ポーカーを始めだした。時々大聲なコミットがつけられてゐる。どうやら其處では和やかな愛情の風が、カルタを裏がへしながら、吹き初めてゐるらしかつた。

と、火成岩のそぎたてたやうな崖が、おり重なりながら頭の上に聳えだした。岩が赤く燒けて、何か地獄の底のやうな怪偉さを示してゐる。光がところどころにあたつて、それが反射しながら、此の世の外のやうな奇妙な景觀をひろげてゐる。

形の不思議な岩臺がある。平頂山がある。一望の中に擴がるこれらの雄大な眺望が、自動車の速力を兒戯のやうに輕蔑した。

身慄ひするやうな大峽谷の上に自動車が出た。と遙かに谷を跨いでゐる天然橋が眼についた。而もこれらの壯大な風景は、遲々としてしか窓の外を動かなかつた。自動車は全く自然の剛壯さに壓倒され、蟻のやうになつて這ひながら動いた。

と、遙か谷の下の方に白い烏帽子のやうに立つたインディヤンのテントが三つ並んで見えた。テントの傍らに小さい無蓋自動車が置いて

ある。インディヤンが使用してゐる自動車に違ひない。槍のやうな長いものがテントの横を廻りながら動いた。

又時によると、高い岩臺の上に、彼等が住んでゐる「天上の街」が現はれたりする。彼等は岩石の頂上に住みながら、綱梯子によつて下界におりて來るらしい。それは白い孤城になつて聳えながら、高く太陽の強い照明の中で靜まつてゐた。

自動車が輝く湖水の上のコンクリートに辷りでた。止まつた。湖水の反對側を見おろすと、石を積みあげて彎曲した壁が、眼がくらみさうに深く沈んでゐた。

「クーリッヂ・ダムです」

久里は人工の驚異に恐れながら、見物する爲めに皆と一緒におりた。腰が痛くなつてゐた。

妹だけはどうしたのかおりて來なかつた。彼はトランクの中には、ガラクタ許りが這入つてゐる事を知つてゐる。勿論祕密に屬するものなどは、何も這入つてゐなかつた。

「アイスクリームを買つて來てくださらない」

「オーライ」

久里はステイチ・ディポーで四つだけ買ふと、車內に歸つて行つた。

すると賣石商が早速不機嫌に云つた。

「買つてやつたりしちやいけないぢやないか」

「君は金をもらつたのかい」

「金はもらつた」

「そんならいいが、決してただで買つてやつたりしちやいけないぜ」

久里は彼の親切が相變らずうるさいのにあきらめを感じだしてゐた。

自動車が動きだした。湖水の岸を暫く走りつづけた。波のしぶきが時に自動車の腹をぬらした。

空氣が次第に乾燥して何か沙漠でもありさうな豫感がした。

七

銅と石炭の產地であるグローブに止まつた。夕方が深いこの谷底の街に落ちて、街は暗い色をしてゐた。

「やすい店に這入らうぢやないか。キタナイ女のゐる」

賣石商が云つた。

二人はレストランを一軒一軒、物色しながら廻つた。本當に二人が世界を股にかける野次喜多のやうに思はれて來た。

一軒のみすぼらしい家に這入つた。すると朝鮮人の工夫がゐて、懷しげに久里の方を見てゐた。

「君は此處で働いてゐるのか」

「さうだよ」

「一人ぎりかい」

「澤山來たんだがね、皆死んだよ。銅の毒にあてられてね」

彼は獸類のやうな風をして毛の着いた豚の足を嚙つてゐた。暗い電燈の下でそれが暗い運命のやうに見えた。

「さやうなら、丈夫でゐたまへ」

「ありがたう」

朝鮮人の工夫は、もの憂さうに頭をさげた。

又夜の疾走が始まつた。黑い山のやうな製銅所が明るい月の下で方々に靜まつてゐた。

と、道は白いヒラの沙漠に這入つた。周圍は夢の中のやうな銀色の世界に變つた。白くなつた。眼が總ての判斷力を失つて、恐ろしい幻覺を起しさうになつた。久里は冷たい興奮を感じながら、何時までも眠れないでゐた。

五日目の朝。眼がさめると、智慧の輪のやうに組みあつたサボテンが乘客を再び驚かした。風景は常に極端から極端に往復した。赤茫

い花が切り口のやうに裂けて枝の間に開いてゐた。
　沙漠の中の朝ほど朝らしいものはない。沙漠には影がない。だから影が最も鮮かに映る。白い砂の波の中を、自動車の長い影が通り魔のやうに走りつづけた。
「僕はどうしても、あの女と一晩すごしたいと思ふんだが――」
　どうしたのか、久里の口調は沙漠のやうに影を失つてゐた。狂氣じみた正直さがむきだしになつてゐた。
「しつこいね。ロスアンゼルスに下りたら、僕が案内してやるよ。とても素晴らしい所があるんだぜ。下手にまごつくと卷きあげられるからね」
「いよいよ、あしただからね」
「だが、君は馴れてゐるんだらう。女にかけては」
「ちつとも。だが、もうそんな事は云つてゐられないからな」
　彼の興奮には昨夜の不眠と沙漠の氣壓が原因してゐた。
「ぢや、あの女をねらふなんて間違ひぢやないか。獨逸の兵學の大家ラセウィッツ將軍は云つてゐるさうだよ。攻勢軍は常に防禦軍より五十パーセントの優勢が必要だつて――」
　沙漠の藪[?]が黒い樹のやうな條をつくつて流れすぎた。
「えらい事を知つてゐるね、君は。だが、あの女が果して防禦軍か、どうかはわからないからな」
　女がこちらを見て笑つた。すると久里は急に平靜さを取りもどさうとして、今度は極端に、色情ぬきの返事をした。
「君は日本とアメリカの海軍の比率みたいな事を云ふね――」
「いや、米日戰爭の講演會で聞いたんだがね――變な應用をするね――」
「だが僕は公平な世界主義者だよ。人種的偏見は大嫌ひでね」
「なるほど――」
　だが、久里は幸福な時のやうな警戒を感じた。そして自分の心の狀態を危いと思つた。そこで唐突に窓の外を見た。山の間に一臺の遠乘りらしいロードスターが止まつてゐた。一人の女が傍らに立つて髮をといてゐた。恐らく彼等は今、谷蔭で眼をやつと醒ましたのに違ひない。

ユマに着いた。一時間の停車時間があつた。此處からカレフォルニャ州である。
　乘客は用意のために風呂に行つた、散髮屋に出かけて行つた。タイピストが女優志願と哀切な別れを惜んだ。
　自動車も丹念に水をかけられて、黄色い肌を鮮明に光らした。ガッソリンポンプの影が短く赤い手毬のやうに寫り、窓ガラスが磨かれてキラキラしだしてゐた。
　タイヤの中の石がピンセットで取りだされた。キューブレーターの埃が針金で搔き出された。潤滑油が注入せられて、車は久振らしい活氣を感じだしてゐた。
　運轉手も白いシャツにぬぎかへて、長靴の埃を拭ひとつた。
　ラヂオだけがひとり車內で鳴つてゐた。ロスアンゼルスからの放送であるらしい。
――ナンシー・キャロル孃に新らしい情人が出來たといふ噂です。彼女の靴は二百七十足で、彼女の足に關する女中が……
　わがアメリカに輸入せられる蠶絲は、日本の製造高六十萬俵の六割でありますが、從來一個十七ドルでありました。ところがロシアは製造

高十五萬個（昨年より八萬個增加）を日本よりも二ドル方下値で輸入しようとしてゐます。そこで日本も漸く値さげを斷行しようとしてゐますが、わがアメリカを市場とするロシアのダンピングは注目するに價します。ロシアは各國に對してかういふダンピングを試みてゐますが、これは反つてロシアの輸出入を困難にし、勿論日本その他の國の不機嫌を激成するものと考へられます……。

一昨年秋、わが國に於ける株式恐慌は、世界的不況となつて影響しましたが、秋季に入るに際して株式市場漸く好況を呈し、鐵道株見直し、金融は休日用通貨需要を示して居ります。經濟生活も又新らしいリズムを發見して、音樂的に進行してゆかなければなりません……」

放送が終らないうちに自動車が動きだした。この州道には兩側に白い柵が續いてゐた。そしてアスファルトの道の中央に、左右をわける白い線が一本長く引かれてゐた。

田舍じみた女優志願は、今はたつた四日間の旅行の間に、素敵もない美人になつてしまつてゐた。彼女の熱心は、遂にタイピストの化粧法を完全に會得したのに違ひない。

久里は赤いバンドをしめた妹の方と、女優志願とに交る交る眼をやりながら、今度は一人になつて淋しげな女優志願の傍らへ行つて坐つてみようと考へてゐた。

彼女は最早や喜劇俳優ではなくて、ドロレス・デル・リオのやうな一人の立派なスターになつてゐた。彼は女といふものの驚くべき變化に感心しながら云つた。

「貴方は隨分美しくなりましたね。僕と一緒に乘つたんですよ、ローレンスから。あれから一度も話さないでゐて、今になつて話すなんて、僕達も隨分辛抱強い方ですね」

「まあ、恐れ入るわ。貴方には」

「もう今晩はいよいよお別れですね。もう一日位乘つてゐてもいいとは思はないですか」

「だけど、私はお友達が待つてゐるかも知れませんの」

すると、寶石商が又叫んだ。

「おい、早く來たまへ。水が見えだしたよ」

「厭な男だね、君は。僕はもう君の云ふ事なんか聞かないよ。今後」

久里は女と身體を接したままでゐた。

と、暑い風が吹いて來た。右側の窓を見ると、其處には青い海が遠く輝きながらひろがつてゐた。

「太平洋かしら、だが右側に見えるなんて」

彼は不思議さうに、低い聲で女に尋ねた。

「いいえ、湖水なのよ。たしかカルトン・シーと思ふわ」

黒い漆で塗つたヨットが、風をよぎりながら現はれた。この氣取つたヨットはきはやかな光線の中を古典的な優雅さで暫く自動車と一緒に帆走し續けた。

「乘りたいな」

「だつて自動車に乘つてゐるぢやないの」

「だが舟を見ると、つい僕は乘りたくなつてしまふんです」

然し今の彼はすつかり冷靜になつてゐた。

「勝手な事を云ふのね、貴方は。まるで赤ん坊みたい」

「僕は貴方を好きになつてゐるのかも知れない」

すると、彼女は久里の足を痛いほど踏みつけた。どうやら彼女は姉妹達のしてゐた愛の技術までも飲み込んでしまつてゐるらしい。

「貴方はきつとすばらしいスターになりますよ。素敵もない」

「お上手ね」

――僕はそれを信じてゐます――

久里は彼女の大きい手を見つめてゐた。

「水が欲しいわ」突然彼女が云つた。

そこで彼は立つて行つて彼女の爲めに水を押してやつた。水が白く湧きながら紙のコップの中へ溢れあがつて來た。

――まあ、ごらんなさい。メロンが一杯だわ！――

彼女が飛びあがりながら彼の耳の近くで叫んだ。其處には日本人が開拓した筈の農園が黄色くメロンの玉をみのらしてゐた。自動車は匂ひのいい果樹園の間を走りつづけながら、人を蘇生さす甘い香料の風を窓から吹き入れた。

妹の方がしきりに小さいパニチー・ミラーを覗きながらパフを動かしてゐた。

と、ロスアンゼルス市廳の建物が、バビロンの塔のやうに白い大きい城になつて現はれた。

百二十萬人の都會は、四晝夜半の絶えざる疾走の後に、最も文明的な輝きを以て、自動車を包んだ。大きい乘合自動車が今は田舍者に見えた。夕方近い街は光を入れながら、さつき眼を醒ましたばかりのやうに生き生きと廻轉してゐた。

と、自動車が止まつた。

「おゝ私の夫よ」

鷄の鳴くやうな聲がした。と、わが猛烈な顏をした國際主義者は、一人のギリシャ人種らしい女優のやうな女と抱きあつてゐた。それは接吻でも、抱擁でもなかつた。もつと烈しい爭鬪の一種であつた。それを見てゐると、自動車の中でした彼の嫉妬心が、今となつては、久里に理解出來るやうに思はれた。

久里はあつけにとられながら、わが親友の行ひをぢつと眺めてゐた。と、どうかしてものにしようと考へてゐた妹が何時の間にかゐなくなつてゐた。それどころか、彼が狼狽しながら振りかへると、女優志願も又反對の方へそそくさといそぎ去つてゐた。

久里はアメリカ女の旅行中だけの實利主義に喫驚しながらボンヤリ立つたまま旅の終りを感じてゐた。然し今、彼にとつて最も愉快な事は、彼が總ての女に懸念しながら、實は忍耐強いカムフラーヂによつて、今ローレンスの街を脱出して日本への新らしい報告を齎すべき半ばの成功を收めたといふ事であつた。

彼は三ケ月前、パナマ運河の近くにゐた。パナマには各國の大膽で周到な國事探偵が一杯してゐた。勿論、彼も其の一人であつた。然し彼はパナマを出て、各地を漫遊しながら、今は純然たる漫遊客に變裝してゐた。

彼はホテルに着くと、更に新らしい服裝に着かへて、西海岸鐵道とＮＹＫラインの時間表をいそがしさうに繰りだした。彼の指の間からは、燒いたラッキー・ストライキの煙が亂れながら、不安さうにのぼつてゐた。

年譜

明治三十年
二月二十八日、與吉郎の長男として香川縣坂出町に生る。父は坂出病院を經營す。與一は父の幼名を襲ひしものなり。

明治三十二年
母の里、岡山縣赤磐郡瀨村大内に行き小學校を終るまで此の山村にて過す。日露戰爭當時、宇垣一成氏の凱旋を迎へし事を記憶す。

明治四十三年
香川縣立丸龜中學校に入學す。

大正四年
同校を卒業す。

大正五年
京都七條大宮にて弟と共に生活す。短歌の製作に專念し、終日歌をよみ暮す。遙かに北原白秋氏の「ザンボア」に投ず。近所に漢數學館と稱する夜學校あり、數學を擔任す。この年の終り頃より潔癖甚だしく遂に狂者に近く坂出町に歸る。爾來いよいよ烈しく數年に及ぶ。

大正八年
三月、早稻田大學豫科文學部に入學す。

大正九年
四月二日、林幹子と結婚。

大正十年
三月、文學部を卒業し、四月、早稻田大學英文科に入學。

大正十一年
四月、歌集「光る波」を上田屋より出版。七月、「早稻田文學」に小說「斷り」を發表、好評を受く。十一月、潔癖と甚だしき幻覺の爲めに早稻田大學を中途退學す。

大正十二年
菊地寬氏編輯の「文藝春秋」五月號に至つて初めて創作欄を設く、卽ち視書を受けて「或る新婚者」を發表す。横光、川端、佐々木、石濱等と共なり。九月、震災に逢ひて麹町區山元町の家を燒き出さる。四谷見附の學習院に避難し、千駄ケ谷に轉じ、東中野に移る。十一月、「文藝春秋」に「海に開く窓」を發表す。

大正十三年
「新思潮」三月號に「觸ひ」、「新潮」三月號に「木枯の日」、「文章俱樂部」三月號に「靈」、「文藝春秋」五月號に「ビスケット裁判」、「新潮」六月號に「じゆんでんごふ」、「新小說」七月號に「淸めの値と希望」。十一月より同志十八人と共に雜誌「文藝時代」を金星堂より發行す。千葉龜雄氏、吾々の運動を名つけて新感覺派運動となす。十一月號に「刺繡せられたる野菜」を發表。「演劇新潮」同月號に「蔦鳥か家鴨か」を發表、兄弟座によつて日本橋劇場に上演さる。

大正十四年

一月、「新潮」に「彼の憂鬱」。三月、「女性」に「午前の殺人」、「文藝時代」に「赤い城門」。五月、「新潮」に「氷る舞踏場」。六月、「新進作家叢書」として小說集「午前の殺人」を出す。九月、「中央公論」に「地獄」、「文藝春秋」に「黒い影」。十一月、「新小說」に「厄日」を發表す。

大正十五年（昭和元年）

一月、「中央公論」に「肉親の賦」、「太陽」に「道化者の記」、「週刊朝日」に「首をちぎつた話」。二月、「キング」に「乳」、「文藝時代」に「心の影」、「サンデー毎日」に「海濱插話」。四月、「女性」に「見知らぬ海景」、「新潮」に「恐ろしき私」。六月、金星堂より小說集「氷る舞踏場」を出版す。

八月、支那に遊び、上海、蘇州、杭州、南京を廻る。

昭和二年

二月、「中央公論」に「天の門」、「文藝春秋」に「戀がたき」。四月、「新潮」に「秋風の宿」。五月、「文藝時代」に「孫逸仙の女」。

五月二十五日、長女、女禮を失ふ。

六月、改造社より小說集「恐ろしき私」を出す。八月、「改造」に「博齒になる馬車」。十二月、「女性」に「海路歷程」、「新潮」に「夢と或る夫婦」を發表。

昭和三年

一月、「現代」に「白樺をたいて」。二月、「文藝春秋」に「苦力の賦」。七月、「文藝春秋」に「女禮」を發表。心傷つきて仕事出來ず。

昭和四年

一月、「文藝春秋」に「印度王宮圖」。五月、「若草」に「バルト海の滑走場」。六月、「中央公論」に「肉體の暴風」。八月、「サンデー毎日」に「戀とザンゲ」を書き發禁。十二月、「文學時代」に「マルセイユの太陽」。

昭和五年

一月、「形式主義藝術論」を新潮社より發行。

同月、「週刊朝日」に「男爵の未亡人」。四月、「文藝春秋」に「アルゼンチンの女」、「文學時代」に「ブルカマル」。五月、「R汽船の壯圖」「フォルマリズム藝術論」上・下二冊を出版。八月、「新潮」に「舞踏教師と花」。九月、「科學畫報」に「數式の這入つた戀愛詩」。十一月、「改造」に「二千六百八十二哩」、「新潮」に「ピオレ商會に現はれる人物」。

十二月三十一日、南洋方面への旅行に出發す。

放浪時代

アパアトの女たちと僕と

龍膽寺雄

文學よりはまづ生活だ。
私は答へる。これはつまり人間
であるよりはまづ作家であると
云ふ意味だ。
龍膽寺雄用箋

放浪時代

第一篇

一

ギルフィラン　ラヂオ商會の飾窓を飾り終へて、――金を受取つて、いつもの様に曾我たちと、彼等の仕事場で落合ふために、上野行の電車へ僕が飛乗つたのは、かれこれ九時を廻つた時分だつた。暮れがた暫く振りで快い夕立が東京の半天を襲うて、それがわづかの間だつたが、銀座の甃路をも掠めたので、夜に入つてから、そこらはすつかり不透明な晝間の蒸暑さを消散させてしまつた。停留所で電車を待合はせて居る間、ちよいと氣にして空を仰いでみると、亂雲がものものしくまだ頭の上にどよめいて、時々未練がましい電光が隅の方から神經的な光を走らせて居た。それが、――もしかするともう一雨ぐらゐは沫かせない限りもないと、さう威嚇して居るかの様でもあつた。

わづかな雲きれが空に浮游して居ても、時にはそれが、――曾我たちの口調を借りれば、――心あつてするかの様に、しつこく仕事の邪魔をして、眼立つた影響をば彼等の收入にも與へる。さう云ふ云はばお天氣商賣なので、もしかすると仕事を斷念して、一足先に駒形へ歸つて居るかも知れない。さう僕は、窓の外を流れる眼まぐるしい光の渦へ焦點のない眼を投げたまゝ考へて、うッかり乘換も貰はないで鷹揚に切符へ鋏を入れさせてしまつた自分の輕はずみを悔いた。――ちよいとした今日の仕事の首尾が、知らず識らず僕を輕率にして居たのだ。

しかし、ひどい雜鬧と一緒に電車から吐出されて、廣小路の停留所のあわたゞしい光の錯綜の眞ん中に立つた時、僕は東京の空ではめつたに仰げない様な十五夜過ぎの月が、明るい清淨な鏡面を雲のきれ目から現しかけて居るのを見た。

地面はまだ濡れて居た。絶間なく十字街を縫ふ自動車のヘッドライトや、あわたゞしく人波に切られて搖らいで居る店の灯、高いところで忙がしく明滅する廣告燈、さう云つたものが眼まぐるしい光の交錯を、濡れた甃路へ燦然と落として居た。夕立と一緒に一時はそこらが白くなるくらゐ地面へ敷いたと云ふ雹が、そこらの溫度を吸つたのだらう。僕は素肌へぢかに着けたよごれたポオラの服地を透して、皮膚の引締まる様な冷氣を一時に覺えた。

曾我はカフェK・の前のいつもの暗い三角地帶へ望遠鏡を据ゑて、ぽつぽつぐるりへ人を集めかけて居た。「宇宙の謎月世界の觀望五分間十錢」と筆太に墨をにじました晒の旗を、肩から背へたらして、電柱の根へ踏ン張らした三脚の一本へ手をかけて、猫脊をやゝこゞめ加減にぢッと空を仰いで居た。――白いパナマを薄闇に眼立たせた會社員風の男が、熱心に望遠鏡を覗きながら、彼の説明をきいて居た。

雲は最早彌縫の餘地なく大きく裂けて、白くきはどく月光に縁取られて、晴れた空を湖の様に黒く大きく抱いて居た。指ほどの小さな雲きれが月面へかゝつて、輕く光を吸つて消えようとして居た。――さうして靜かな眼立たない存在が、きらびやかな眼まぐるしい下界の姿と、恐ろしい奇妙な一種の對照をなして居た。

熱心に月面の説明を續けて居る曾我と、人の

肩越しに輕い眼挨拶を交はして、僕はまばらな人垣から數歩それて、――そこの暗がりに、トロリイの支柱にもたれて、斜に空から落ちる街燈の光の下へ頁を擴げて、落ちつかないあたりの氣配には無關心に、何やら書物に讀みふけつて居る、魔子のそばへ寄つて行つた。彼女は白い水兵服につばの狹い白い麥稈と云つた、眞夏の夜だが寒々しいみなりをして居た。

「今？」

彼女は跫音に顏をあげると、最初に輕く微笑んでみせて、それから、持つて居た小さな桃色表紙の本――それは英語のリーダアだつた。――を斜に胸へ抱いた。さうして、鐵の柱から身を離して、

「降られなかつて？」

と、寄つて來た。

「はじめたばかりだな、こツちも。」

「えゝ。」

彼女は膨らんだ上衣の隱しから、小さな赤い乾葡萄の紙箱を出して、僕の手のひらを仰につかまへたまゝ二三度ぶツつけて、中のものを黑く濕ツぽくそこへあけた。さうして、

「儲けちやつた、かみなりさまで。」

と、僕の横顏を盜み見て、いたづらいたづらしくさゝやいた。

「なぜ？」

「み、や、こ、座。」

と、彼女は眼元へ小皺を寄せて笑つた。さうして、落ちたかたかたの靴下を引上げて、僕の手のひらの乾葡萄をちよいとつまんだ。――夕立を機會に活動寫眞でもおごられたのだらう。

「どうだい。何かおごらうか、僕も。」

さう云ひかけて、ふと、

「寒かアないのか？」

と、彼女の肩やからだのあたりなどに觸つてみた。糊のこはい白い服地の下が冷いやりして居る。――指の先まで魚の樣に冷たい。

僕は彼女に教科書を袋へしまはして、あとについて來る樣にと注意をして、濡れた舖路を横切つてとツつきのカフェＫ・の瀟洒なすだれの彈條扉を押した。さうして、棕梠竹の鉢のわきへ突ツ立つて、存外客のたてこんで居る客間をひとわたり物色してみた。

「どうぞこちらへ。」

と、給仕女が僕の前へ輕く腰をかゞめた時、ピヨンピヨンとぬかるみを跳んでついて來た彼女が、僕のわきに立つて、

「空いてるわよ、あそこが。」

と、勝手な席を見つけてそツちへ僕の手を引ツ張つた。――僕たちは首振り旋風器が時折金色に灯りを映して居るとある壁ぎはの、小さな大理石の卓子を挾んで、斜に籐の腕椅子へかけた。

「何がいゝ？」

彼女のとつてくれた献立表にぼんやり眼をさらしながら訊くと、彼女は帽子を脫いでひツくり返しに卓子のはしへ載せて、額の邊でもつれたおかツぱを邪魔げに擡いて、ひよいとかたかたの脚を僕の椅子のはしへ載せた。――靴下の編目が一箇所のびて孔になつて、そこから男の子の樣な肌の荒い膝が覗いて居た。

「何でもいゝわ。」

彼女は無造作にぽんのくぼで云つて、音を立てて靴下の上から膝を搔いた。

「お腹にたまらないもんがいゝかい？」

さう云つて僕は献立表を置きかけると、

「ね、

と、彼女は髮を搖すぶつて顏をあげて、

「お魚のフライを喰べない？」

と提議をして、それから脚をおろした。

僕たちは蝦のフライを註文して、それから果物のサラダと弱い洋酒を二杯とつた。お腹を空

かして居たと見える魔子は、蝦を尻ッ尾まで喰べて、さうして、湖の様にソオスを湛へたお皿の眞ん中へ、レモンの皮をちよッぴりと輪形に殘した。――ナプキンペエパアで口のぐるりから顔まで拭きかけたので、僕はポケットから皺んだ手巾を出して、卓子の上へ投げてやつた。

「兄さんの景氣はどうかな。」

外の鋪路へ出てからさう僕がひりごとを云ふと、

「いゝわ、きつと。」

と、彼女はだしぬけに大きな聲を立てて、まるめた手巾を僕のポケットへ突ッ込んだ。

曾我の姿は幾重にもとりまいた人の輪の底に埋まつて居た。はげしい街路の騒音を縫つて、時折彼の熱心な演説口調が外まで洩れて來た。――月はさつきとはよほど位置を移して、頭の眞上へ近付いて居た。夕立の通つたあとの空には一片の雲影もなく、いつの間にはびこつたのか厚い朧な蒸發氣の奥へ一つ二つ星を鏤めて、赤く不確かによどんで居た。大きな赤い仁丹の廣告燈が、その濁つた立體の奥で正確な間を置いて明滅して、その反映をこッち側の鋪路まで投げて居た。人の輪の肩越しに覗くと、中央の赤くぼやけた月面へ向けられた望遠鏡の眞鍮の筒にも、その明滅する赤い光がキラキラと濡れた様に映つて居た。望遠鏡を覗いて居るのは、ごく若い十六七の學生風の男だつた。

「左様、……最高峯はアルプスは四千五百ミータアと云はれて居ますね。總體して月面の山岳は非常に高くて、急峻です。これは重力の關係からですが。……アルプスなんぞはむしろ低い部類です。それから、そのちよいと肩のところに、黒いまるい斑點が見えますね。あれも火山でプラトオ山と呼ばれて居るのですが、御覧の様に火口が非常に暗いので、月面觀測の上では一つの謎になつて居るのです。……」

時折何かの工合で聲が高まると、さう云つた彼の説明口調がはツきりこゝまで聞えて來た。

「盛んだぜ。」

「えゝ。」

鐵柱の下に立つて、曾我をとりまいた一團を批評的に見ながら、僕たちはそんなことを云ひ合つた。

「五分で十錢、一時間で一圓、三時間でざッと、……」

さう云ひかけると、彼女はこゞんで脚を掻きながら、

「だめよ。」

と、輕く否定した。

「あたしせんだつて時計でよく時間をはかつてみたのよ。そしたら、平均一人が十分と一寸よ。そんならさうと初めから看板へ書いといた方がいゝわね。識らないと五分で十錢は高いッて云ふわ。」

さう云つて、袋の中からまたさつきの本を出して、灯りの下で頁を擴げながら、

「弱ッちやつた。have been の使ひかたがわからなくつて。……誰か教へてくんないかなア。」

と、柱傳ひに濡れた地面へしやがんだ。

二

十徳をつけた俳句の宗匠風の年寄が、望遠鏡を覗いたのが最後で、――曾我が器械を畳んだのは、かれこれ十一時に近い頃だつた。その間に僕は晦澁なバルザックの短篇小説を十頁ほど讀み、魔子はこぼして居た和文英譯の宿題をどうやら片付けたらしかつた。

「お待ちどほ。」

帽子を脱いで科學者らしい幅の廣い冴えた額を、よごれた手巾で拭きながら、曾我は機械をかつぎ上げた。

「どうだい。」

「ふん。」

曾我は靜かに笑つて、

「景氣は滿月のせゐだ。……夕立で宵の口にちよいと邪魔されたんでね。」

さうして、

「薄ツ腹が空つた。……魔子は？」

と、妹を顧みた。

「どうだい。熱い珈琲でも一杯飮んでからうか。」

「よからう。

曾我はすぐに同意した。

「どこにしよう。」

「風月は？」

「いゝだらう。」

線路を橫切る時、自動車に遮られて魔子だけが一人向うへ取殘された。電車と自動車とが次々に僕たちの間を遮つた。

「早くおいで！」

魔子はきよろきよろ左右を見廻してから、ピョンピョンと細い脚で、線路を跳んで來て、僕たちの間へ挾まつた。

「さア、僕は蒸菓子にしようかな。」

深い綠色のクッションに腰を落ちつけてから、僕は瀨戶の灰皿を引寄せた。

「蒸菓子に珈琲か。變だな少し。……俺はビ！フサンドキッチか何ぞ貰はう。魔子は？」

「あたし？」

彼女はまたさつきの樣に帽子を裏返しに椅子の上へ置いて、それからそばに立つて居る給仕を振仰いだ。さうして、自分は菓子も珈琲もいらないから、クリームソオダがいゝと云つて、

「赤いのよ。」

と、附加へた。──給仕は笑つて卓子のそばを去つた。

氣前よく電車をおごつて、僕たちが駒形へ戾つたのは、それから小一時間してだつた。大家のK・タクシーは、まだ煌々と店を電燈で輝かして、車庫には二臺とも自動車が出拂つて居た。帳場の成瀨さんが禁煙と貼札をした亞鉛の壁の前に、のんきにパイプをくゆらして居たので、

「御勉强ですね。」

と聲をかけると、成瀨さんは厚い近眼鏡をキラリと光らせて、いつもの癖の妙に不徹底な笑ひかたをして、

「いや。」

と、四角い頭を撫でた。

懷中電燈で鍵孔をさぐつて、建てつけ惡く銹びた鐵の扉を開けると、眞ツ先に鞄をかゝへた魔子がコンクリートの階段を登つて行つた。古い溝板が一枚踏み折られて水に浸かつて居るので、僕たちは懷中電燈で地面を照らし照らし、痛んだのをのけて別なのをあとへ寄せて、ざツとそこを繕つた。と、仄かな灯りが階段の上から射して來た。

表のタクシーがもと、と云つてもつい二三年前のことだが、油店だつた時分に、油倉だつたと云ふこの陰氣なコンクリートの建物は、今でも、──中に居て暫くして慣れるとさうでもないが、──外から歸つて來たてなどには、ぷンと古風な燈油の匂が鼻に觸れる。僕たちが借りて居る二階は、疊敷きにすると二十疊ぐらゐの廣さだが、震災の折の痛みをそのまゝぶこつに繕つた古びたコンクリートの壁をむき出しにして、床には古い油のしみが黑く輪を描いて居り、天井の漆喰は剝げて、埃をかぶつた蜘蛛の巣が隅々へ簾を張つて居た。それでも壁ぎはへ据ゑた雜魚寢用の大きな寢臺だの、二三のがらくた家具などと云ふ樣なものが、殺風景ながら人の住まひにはまがひのない一種の雰圍氣をつくつて居た。

南向きの厚い、狹い窓の下には、不細工な大きな卓子が一つ、それをとりまいて古びた椅子が

三脚、それが僕たちの勉强机でもあれば食卓でもある。椅子は古道具屋で順々に集めたので、それぞれ形が違つて居た。――炊事場は東の窓ぎはで、金網を張つた四角い蠅帳が一つと、眞鍮の新らしい石油焜爐と、その他鍋釜の類や刃物などが、手製の流し臺のきはに雜然と置かれて居る。――水は下の露路口の、大家と共同に使つて居る水道の龍頭から、一々バケツで汲上げて來るのだ。

寢臺は箱自動車の燒けた鐵骨を利用したので、古い自動車のクッションを三つ並べて、その上を大きな五布蒲團で覆うた。僕たちは四角い大きなその寢臺へ、三人でいつも雜魚寢をした。――

――續けさま三つ四つくしやみをした魔子が、登校服を脱いでつけ紐のある古びたメリンスの單衣に着換へて居る間に、僕は繪具箱をおろして散らばつた畫架の邊をちよいと整理した。さうして、隱しから胡蝶を出して一本銜へて火をつけて、ふとそこへ立つたまゝ、――描きかけてはふつてある畫架のパステルへ暫く眼をつけた。繪はつまらない雜誌の口繪の模寫で、飾窓の背景畫に頼まれたものなのだ。

――怪我が機械をゴツンゴツンと階段へぶツつけながら上がつて來て、ヨオロッパの詩人の樣な姿を戸口に見せたのは、それから暫くしてだつた。彼は大股に部屋を突ッ切つて卓子のそばまで來ると、ゴトンとそれを卓子の上へ載せて、

「やれやれ。」

と、肩のあたりを撫でた。さうして、手を延ばして僕の隱しから莨を出して、一本拔いて指の間で揉みながら、

「どうだつたい、今日は。」

と、椅子を動かした。――二つ三つ仕事の話を仕合つてから、彼は椅子へ落付いて正しく卓子へ向かつて、さうして、懷ろから自慢の蟇蒲革の財布を出して、白銅を一握みほどザクザクと卓子の上へ積んだ。――僕のと合はせて勘定をすると、十九圓と八十二錢あつた。

「剛氣だな！」

さう、僕たちは一つことを一緒に云つた。と、――だまつて口を動かして居た魔子が、袂から銀紙にくるんだチョコレエトボンボンを一つ出して、財布のわきへもつともらしい顏をして置いた。

「隱しといたな。」

「ううん。」

と彼女は頭を振つて、――もつれた髮を掻いて、

「識らない。這入つてたんだ。……」

と、簡單に辯駁した。――怪我が半分喰ッかいて中味をすゝつたあとを、僕はつまんで口へ入れた。

「十日こいつが續いたらブルジョワだなア。」

「どうして……三日でもだ。……」

「これだけだつてブルジョワだわ。」

彼女が白銅を愛撫しながら、まじめに詠歎的な口吻を洩らしたので、一緒に二人は噴飯した。

――僕たちはそのうち十五圓を、豫算簿の中へ入れ、殘りを三分して三人で同額ほどづゝ分けた。これは僕たちの小遣ひだ。

「多謝。」

と、魔子は分前の、……彼女にとつては一週間分の小遣ひである一圓五十錢を、ヂャラヂャラと白木綿の軍隊手袋の中へ落とし込むと、丁寧に口をくゝりながら云つた。風變りな彼女の財布は、かうして[illegible]とまつた樣に、寢臺の頭の壁のところへ釘にかゝつて居るのだ。

夜更けとともに幾分づゝ風が高まつたが、それでもいつもとはずつと涼しかつたので、僕たちは寢冷えを恐れて毛布を一枚よけいに寢床

へ持込んだ。
「靴下のまゝかい?」
不作法に伸ばして來た彼女の脚をつかまへてみると、靴下をつけたまゝなので、僕は膝のところで靴下止の金具をはづして、先へこかしてとつてやつた。と、彼女はくるりと寢返つて、こゞんでもうかたかたを自分でとつた。さうして、僕の頸のところへむしやくしやに髮をたわめたまゝ、すぐに無心な寢息を洩らしはじめた。

三

美術材料商の審美堂と僕たちとの間に、以前からもくろまれて居た僕の作品の個人展覽會は、店の主人の石原さんとの間に交渉がまとまつて、いよいよ實現する運びになつた。一口に云へば今まで行き惱んで居た店仕切りの問題について、やつと僕たちの間に妥協が成立したのだ。會場として店を提供することは、僕たちの友情を假りに措いても、美術商の立場として十分に贊成だ。たゞ、それはそれとしてこちらでも商賣を持つて居る以上は、會期中とてまるで店を閉めて置くと云ふわけにも行かない。會場の一部でなりと商賣が出來る程度でなくては。——さう云ふ尤もな石原さんの意見で、結局店を適當に二分して一時的な店仕切りをすること、それらに關する一切の費用は僕たちが負ふこと、さう云ふ條件のもとに、當分店を僕たちに開放することになつたのだ。
「賣れたら割前の多少は戴けますかな。」
そんなことを、金錢に淡泊なこの友人は云つたりした。
「無論です。」
賣上げの二三割は彼に贈る腹で居た僕は、さう冗談の樣に應じた。
翌る日、僕は店仕切りの設計について最後の決定を與へるために神保町へ出かけた。さうして、商賣の暇な石原さんと店の土間に立つて、僕の作つた設計と引合はせて、色々細部の相談をした。それによると、大工の手間を半日ほどと材料の十五六圓もかければ、それで十分な豫定だつたのだ。
ざッとその問題が決定すると、僕は彼に便箋と店の名を刷り込んだ封筒とを貰つて、その場で三通ほど大阪へ手紙を書いた。幾分自信のある作品は主として大阪に殘して來てあるので、いよいよ展覽會を開くとなると、それらを取寄せなければならないのだ。中には話にもならない樣な金額に換へられて、ひとの客間に豪奢な額縁にをさまつて居るなどもあるが、大部分は船場の、菱形ッすゝ「松」本舗の主人の中島氏の許にあづけて來てあつた。僕が大阪に放浪時代に描いたもので、大部分は彼の保護のもとに、云はば金錢に屈託のない身分でこだはりなく自分をぶッつけた、——きまじめな作品だつたのだ。大阪で展覽會を開いてくれる筈だつたのが、ある事情から實現を見ないでしまつたのだつた。
しかし、——この問題については、僕自身にも多少の疑惧がないわけではなかつた。こゝ一二年の間に、幾らかは伸びたつもりである僕の眼が、果してそれらの古い作品によつて、過去に滿足させられた樣に現在も滿足させられるかどうか。——ことによるとそれは、折角計畫した展覽會に、致命的な結果を與へない限りもないのだ。
「しかし、」
と、手紙を書き終へて、封の糊を膝のところでピタピタと貼りつけながら、僕はひとりごとを言つた。
「……僕にはまた僕の苦勞があるのでしてね。……
「お互ひにね。」
と、石原さんはあッさりと合槌を打つた。

「ところで、……一體いつ頃になる豫定です？」
「さア。……」
「繪は殘らず向うから來るんですか？」
「いゝえ。……こッちにも四五枚はあります。」
「それで、〆めて？」
「左樣。……二十枚は出まいと思ひますけれどね。」
　さう云つて、もう一遍僕は店のぐるりを見廻してみた。
「多過ぎませうかね。」
「繪にもよるが、」
と、石原さんも僕のまねをして、假りの店仕切りを想像して居るらしい眼をしてつぶやいて、
「まア、並べられるだけ並べるんですね。もしかしたら卽賣をやつて、そのあとへ埋めてもいいでせうな。」
「さうですね。……へえ、あすこの時計塔の硝子が、こんな方へ反射するんですね。」
　――陽覆の下緣を掠める淡い陽が、商品臺の脚の一部を明るく蔭から描いて居た。
　パステルの背景畫を一枚仕上げて、昨日のギルフィラン商會へ持つて行くつもりなので、石原さんに別れるとその足で僕は午飯の代りにハンとバタとを買つて、眞ッすぐ駒形へ戻つた。

　仕事のまちまちな僕たちは、從つて生活も思ひ思ひで、早い話が三度の食事をすら一緒にとるなどと云ふことは、月のうちに數へるほどもない。――大抵、朝一番早く起出して家を出て行くのは魔子だ。電車にまるまる一時間も乘らなければならないところに學校のある魔子は、感心に朝は誰にも起こされずに一人で起きて、そこらをゴトゴト云はして、紅茶を沸かしてパンぐらゐは嚙つて行く。
　その次は大體に於いて僕だが、これはいつもさうとは限つて居ない。仕事が仕合はせと（僕自身には不幸にも）重なつて居ると、べらぼうな時刻にでも家を飛出して行かなければならない代りには、仕事でも暇だと時間に制限なく寢床にゴロゴロして居ると云ふ風だ。
　曾我に到つては度はづれな夜更かしをする男なので、朝はいつも思ひ切つた寢坊をして居るが、これは極めて規則的な生活だ。その規則が云はば世の常のものと、大分ずれがあると云ふだけの話で、いはゆる「四半晝夜のずれ」と彼が公言して居るところのものなのだ。
　一體彼は、その科學者的な風貌と詩人風の多血的な性格とが暗示して居る樣に、極めて多面な趣味と才能とを持つた男で、これと云つて彼に不得意なものは殆どない。詩を作らせれば詩を作るし、繪を描かせれば繪を描く。自分では運動家をもつて任じて居るが、それで居て興に乘ずればカルメンのひとくさりぐらゐは滑らかに喉を顫はせる。自然科學は彼がみづから「系統的に學んだ唯一の」と稱するところのもので、この傾向の趣味は彼の近眼をば天空にまで向けさせたのだつた。
　彼の語學はとりわけしッかりしたものだつた。五箇國ぐらゐの原書は難澁なく讀んだ。（貧乏で讀む書物は生憎となかつたが。）從つて飜譯は彼の定收の一だつた。
「人間にとつて職業がパンぢやない！」
　さう云ふ解釋を生活にくだして居る彼は、そのあらゆる多面な性格を多面のまゝ生かさうといつも試みて居た。その一つでもが彼の實生活から缺けたら、彼は手や脚を一二本落つことしたぐらゐには不足を感ずるのだ。彼の口調を借りれば、つまり「廣く海ッぺら」に世を渡らうと云ふのだ。――生活はいつも窮迫して居たが、それによつて彼は彼の主張にとりたてて矛盾も感じないらしかつた。
　要するに彼の放浪[illegible]性に[illegible]をかけて徹底し

て居たのだ。――彼はこの二年ほどを天文の研究に沒頭した。さうして、渦狀星雲の正體はどうのキンネツケの軌道と木星との關係はどうのと云つた問題で、再々食卓を賑はした。

彼は最初二十圓ほどの望遠鏡を臍繰で買つて、さうして一年ほどの間に六百何圓と云ふ精巧なのに擴大してしまつた。あたかも天體をそれによつて擴大する樣に。

「宇宙の塵に住む細菌どもよ！」

などと、彼は土曜の夜の盛餐(僕たちは土曜の晩には經濟の許す範圍で、食卓に贅をこらす習慣だつたのだ。)の折に、安ウヰスキーの乾盃で上機嫌になつて、卓子のはしを叩いたりなどした。

實生活についてそんな寛容な解釋を持つて居る彼は、また妹の魔子に對してもその主張をそのまゝ適用して居た。年頃に近付いた娘をつかまへて、彼は猥談に近い性論をやつたり、――一口に云へば、恐ろしいがさつな兄として彼女に臨んで居たのだ。

「魔子！」

ある時彼は今述べた樣な機嫌で、社會問題から婦人問題に論及してひとしきりしやべつたあとで、妹をつかまへて云つた。

「……お前は幾つだつけな。」

「十七よ。」

と、彼女は素直に答へた。

「十七？」

のんきな兄は赤い眼をしばたゝいて、彼女の淺黑い顏を見た。

「はて、……俺は君の年を一つ間違へて居たわい。すると生まれたのは？」

「千九百十一年よ。」

と、彼女はキユラソオのグラスへレモン汁を絞り込みながら顏をあげた。彼女は皮膚のやゝ荒い肉の締まつた素脚を長々と二本、寛衣の下へむき出して居た。

「君はもう十分に婦人だ。」

と云ひかけて、あツはツは！と彼は獨りで笑つた。

「何と大變な脚を出した婦人だな。……」

彼女はまじめに身をねぢつて自分の脚を眺めた。さうして、

「なぜ？」

と、彼を見た。――そのきまじめさがもう一度彼を笑はせた。

「兄さんはさう思つてるんだぜ。」

と、彼はグラスをあげて居猛高になつて云つた。

「早く君の戀愛を祝福したいものだとね！え？」

彼女はグラスを鼻の上へ立てて、恐ろしい酸ツかい顏をしてコクリと喉を鳴らして、中の氷をカラカランと鳴らして、それを卓子のはしへ置いた。さうして顏をあげて、

「だから早く戀愛をしたげるわ。」

と、頸の後ろへ髮を搖さぶつた。

僕がコンクリートの階段をコツコツ登つて行くと、この戀愛の讃美論者は今起きたところと見えて、卓子に向かつて今日の新聞の上へ燒いたパンをふぐしかけて居た。這入つて行つた僕の顏を見ると、新聞紙の面へ散らばつたパンの屑をひとところへ掃つて、「張作霖青天白日旗を揭ぐ」と云ふ初號活字のみだしを指して、

「どうだい。」

と、さもさも嬉しげに云つた。

「……糞まじめで支那を相手にする奴の面が見てえ。」

と、彼は口をモクモク動かしながら、舌を乾燥させて續けた。

「え？……と云つて、もいゝに茶化す奴アなほ莫迦だが。」

さうして、
「あの鉢は君、水がからからだぜ。」
と、不精髯ののびた頤で窓縁のゼラニュウムを指した。

四

「出かけるかい、今夜も。」
ほど繪の仕上げをすましてから、窓ぎはで機械の掃除をして居る竹我にさう訊くと、
「うん。」
と答へて置いて、やゝ暫くして彼は、
「行くよ。」
と、顔をあげた。
「魔ア公のあいつは昨日ですんだんだつけかな。」
「さア。……もう一ン日ぐらゐありアしなかつたかなア。」
――彼女はこの三四日銀座のS・化粧品店で新らしく賣出して居る、輸入香水の廣告配りを頼まれて、半日九十錢のわりでそこで働いて居たのだ。仕事と云ふのは香水を浸ました廣告のカアドを、店の前に立つて通る人に配るだけで、彼女は毎日放課後店へ寄つては、暮れがた香水くさくなつて歸つて來るのだつた。

「面白いかい商賣は。」
さう訊くと、
「面白い。」
と、大して面白くもなげな顔で彼女は答へた。
さうして、お友だちを見つけるとみんなつかまへて、香水紙を押付けてめいめいに配らしてやるんだなどと、おしの強いことを云つた。しかし、――學校から學校へとしじう轉々して、よしたりまた這入つたり、十七にもなつてまだ二年で居る彼女に、さう親しい友だちなんぞがある筈もないのだ。それに、譬ひさうでないまでも、『良家のお嬢さん』とこの放浪性の娘とが、肌の合つたお友だちづきあひなどは出來さうもないのだつた。
「上野で今夜も待合はせる都合かい？」
「さア、別に約束もしてないが。」
と、友人は研磨剤をコトンと卓子の上に載せて、
「どうかね。やつて來るかも知れない。」
と、曖昧な口調を洩らした。
「さて、」
と、僕は繪を大きな紙挾みへ挾んで、簡單に外出の支度をして、
「僕は出かけるぜ。廻れたら上野へ廻るよ。飾窓がとれたら遅くなるほかないが。……」
と、彼は恐ろしいまじめな眼で、――指へ挾んだレンズ越しに僕を見た。
――尾張町で電車をおりて昨日のギャフィラン商會へ行つて、一寸飾窓の出來榮えを眺めてから、挨拶をして店へ這入つた。背景畫の約束が一枚あるのだ。――一週間ほどしたら中の背景畫を一度取換へる。飾窓の裝飾は二十日に一遍換へればいゝ。――さう云ふのが僕たちの懐ろ都合から編み出した主張なのだ。
「いゝ繪だ。」
と、若い主人の林さんが首を傾げて褒めてくれた。
「もう一枚、月じまひまでに描いて來て下さるわけですね。」
「よろしかつたら、」
と、僕は荷箱の上の擴聲器の埃をちよいちよい指で撫でながら云つた。
「繪は要するに何んでもかまはないのですけれどね……僕のでよかつたら易い御用です。」
さう云つて、
「この受信器はこれで幾らぐらゐするんです」
と、青銅色に着色した木箱を指した。

「それですか？」
と、主人は暫くして繪から眼を離して、
「安ものです、そりア。……しかしよく這入りますよ。どうです、一つお買ひになりませんか。まだお持ちではないんですね。」
「われわれの腑繰ぢやア少々ねえ。……」
主人ははツはツと笑つて、御冗談でせうと云つた。さうして、もう一遍繪を見て、
「ところで、お幾ら差上げたらいゝでせう。」
「さうですね。……五圓ぐらゐ彈んで戴けますか。」
二圓のつもりで描いたのだが、繪は見手と値段とで價値がきまると云ふことを、僕たちは經驗から教へられて居るのだ。——主人の顏を見ると、
「さうですか。」
と、存外氣輕に立つて行つて、帳場へ上がつてよごれた五圓紙幣をピラリとざるの上へ載せてくれた。
「どうも御苦勞さま。……ぢやア、あとのもお願ひします。」
「承知しました。」
と、僕は汚いその紙幣をそのまゝズボンのポケットへ突ツ込んで、
「どうぞまた。……近所へ少し吹聽しておいて下さい。」
と、笑つて店を出た。
（儲けたぞ！）
店を出ると僕はピョンと鋪路の上で踊つてみた。さうして、しきりなし往き交うて居る自動車の間を敏捷こく拔けて、向う側の鋪路へヒラリと跳び乘つた時、
（や、忘れた！）
と、危く聲を立てて立止まつた。もう一枚別の繪を挾んだ紙挾みを店へ置いて來たのだ
——商賣はいづれにしても同しことだが、飾窓の註文にしろ背景畫の賣込みにしろ、それぞれそのみちのこつがあるので、上手な釣師が巧みに魚のつぼを探る樣に、やはり僕たちも慣れるにつれて自然にその呼吸を會得する。第一に、——店頭の裝飾に幾分でも注意を拂つて居る店とさうでない店とは、飾窓の板硝子をちよいと見ただけでも大體わかる。いくら念入りに磨き立てた硝子でも、人並みな僕たちの面構へを抓つたり歪めたり、さんざん虐待して映す樣だつたらもうおしまひだ。勞銀の經濟的運用に拔目のなげな主人公と、氣の毒な小僧君たちとに敬意を表しただけで、さつさとそこを素通りすべきだ。
その代りに多少でも脈のある家へは、一度や二度斷られたところで根氣よく通ふ。尤も、氣のきいた店頭裝飾でもやつて居ようと云ふ店には、時には恐ろしい先輩がそれを主宰して居て、とんだ小僧扱ひか何ぞで追ツ拂はれない限りもないが。——
「今日は。」
さう云つて軒をくゞると、大抵最初はお客さまと感違ひをされて、恐ろしい丁寧な扱ひを受ける。——主客が自然と顛倒されるまでは何ともてれること夥しい。
「新らしい飾窓の裝飾をしてみたいんですけれどね。」
そんな調子で口を切る。
「窓飾がやくざでは、何にしても仕樣がありませんけれど、うちのぐらゐですと十分骨折り甲斐もありますから。……」
おだてるんぢやない。これはまじめな口上だ。
「近所を一つあツと云はせる樣な、人眼を惹くから藝術的な奴をやつてみますが、いかゞですか。近所の廣告にもなりますから、僕の方でも一肌脫ぎませう。なに、費用はせいぜい五六圓

から十二三圓どまりです。それに材料は永久に使用出來ますから。……」

さうして、見本の模型圖でも見せるか、幸ひ近所に僕の手でやつたのでもあると、

「向うのX商店、御存知ですね。あれは僕がやつたんです。ちよいとこゝから御覽下さい。……あすこの主人も店頭裝飾などにはなかなか頭の進んだかたでしてね。」

さう云つた調子で段々と說き落として行く。相手が髮でも綺麗に分けて青々と頤を剃り立てた、肉付のいい若主人でもあると、これでコロリと落とされる。おかみさんと年寄とは絕對にだめだ。

店をくゞつて古ぼけた柱時計などが、カタリカタリと頭の上で錘を曳摺つて居る樣だつたら、そこらの品物でも物色して、またどうぞとかお生憎さまとか頭を下げさせて、飛出して來る。――時計はしばしば單に「時」を支配して居るばかりではないのだ。

最近僕が手をかけた飾窓の數は、全市を通じて目抜のところに二十一二箇所あつた。飾窓を飾り終へると大抵簡單な口約束ぐらゐはして置くので、背景畫はそのうちのどれかへ持つて行けば、大抵は難なく引取つてくれる。小半日も潰して一枚仕上げると確實にそれはいけるので、曾我の一枚八十錢の飜譯同樣、僕には定收と云つてもいゝのだ。

――別の一枚の背景畫を豫定のK・食料品の店へ片付けてから、十軒ばかり新たに飾窓を物色してみたが、思はしくないので、ひとまづ切上げた。新宿まで遠乘りをすれば、二軒は確かなところがあるのだが、昨日の今日だ。懷ろ都合で萬事の豫定を組むのが、僕たちの生活の方針なのだ！

S・化粧品店の前を通つたが魔子の姿は見えなかつた。學校がまだ退けないのだらう。蔦色の陽覆へかゝッと午後の陽脚がとまつて、蠟石の青い柱が濡れた樣に光つて居た。人々はみな蔭つた方を步いて居た。陽向を步く人々は帽子を傾げて陽を避けるか、さもなければ步きながら忙がしく扇を使つて居た。その眩しい白い反映が網膜の裏側へ變なえがらッぽい殘象をとゞめた。

暮れがた僕は汗だくになつて駒形へ戾つた。さうして、仕事に出かけようと支度をしかけた曾我と夕食を喰つて、久し振りで寢臺の下からギタアを出して、調子を合はせてみた。

「そろそろ出かけるかな。」

「往つて來たまへ。」

僕はギタアを抱いたまゝ手を延ばして、卓子の上のすぐりをつまんだ。

「僕は今夜は出ない。」

「さうか。」

曾我は三脚臺のサックを肩へかけて、ズックの角靴をさげて、窓から顏を出して空を仰いだ。

「雲はねえな。よし。……」

――コッコッと小さな足音が階段を登つて來て、亂暴に扉が外から蹴開いた。さうして、鞄と帽子とを一つに抱いた魔子が、少し伸びたおかッぱをうるさげに搖さぶりながら、

「只今。」

と、這入つて來た。

「くたびれちやつた。……」

と、彼女は持つて來た鞄をドサリと卓子のはしへ落とすと、いきなり皿を引寄せて中のすぐりの房を取上げた。――安舶來香水の臭じみた匂が彼女の全身から激しく發散した。

「おでかけ？」

「うん。」

曾我は扉の隙間へ靴の頭を入れて、

「おい。何かうめえものでもこさへて置け。」

と云つて、それから、妹に送られて階段をおりて行つた

「上げようか。」

彼女は扉を閉めて戻つて來ると、ポケットから一束香水紙を出して、ボサリと卓子のはしへはふつた。さうして、別のポケットから新らしい一圓紙幣を二三枚大事さうに出して、卓子の上へ果物皿を錘にして置いて、

「魔子ちゃんの儲けだよ。」

と自慢をして、吊るしたすぐりの房へパクリと喰ひついた。

五

一人の兄のほかに兩親もきやうだいもその他肉親らしい肉親を持たない魔子は、さう云ふ境涯にごく小さな時分からはふり出されて育つただけに、かうした生活に浸つて居ても、とりたてて不滿も淋しさも感じないらしかつた。要するに彼女は、――兄同樣身について廻つたあらゆる運命を、至極自然に見て來たのだ。

幼年時代を兄と伯父の家や叔母の家や、一度などはどう云ふ關係からか、以前に彼等の兩親に雇はれて居たと云ふ女中の家などと云ふ風に、轉々と宿り先を換へて他人の厄介になつて歩いて、最後にそこが落ちつき場所だと思ひ込んで居た母の實家の、深川のとある廻米問屋が株の失敗で潰滅してからと云ふもの、曾我の口調を借りれば永久の放浪的運命が、彼等の前に開けたのだつた。たゞ何よりも心强かつたのは、曾我が曲りなりにも自活の自信が出來るだけ大きくなつて居たことだつた。彼は駿河臺にアパアトメントの一室を手に入れると、そこへ十一の妹と小さな世帶を持つた。さうして、片手間に飜譯をやりながらF・書房の編輯部へ這入つてS・博士の監修する家庭百科辭典の編輯の手傳ひをした。彼等はその頃月三十圓の定收とその他不定な飜譯の原稿料十五六圓とで、その小さな世帶を維持して居た。

僕が、――僕にとつてたつた一人の肉親である母親の再婚から(それだけが直接の原因ではなかつたが、)家を飛出して、學校をよして、中途はんぱな繪かきのまゝ、危ッかしい世渡りをはじめたのは、丁度その時分だつた。ある手蔓から同じ百科辭典の插繪かきを頼まれて、色んな打合はせや何かの都合から、S・博士のところで折々落合つたのが、僕たちの間に今日の樣な友情が開ける動機になつたわけなのだ。

その編輯の方の仕事が、片付くか片付かないかに、僕は東京の生活が苦しくなつて、(物質的にもさうだつたが、精神的にも僕は云はば半生の懊惱時代にぶッつかつて居た!)そのまゝこゝを飛出して、大阪で暫く自由生活をした。飾窓の裝飾などを思ひついたのはそこでなのだが、大分その間に、僕は商賣的な世渡りのすべを心得た。

ところが、――そこで僕はまた曾我たち兄妹と、偶然めぐり合つたのだつた。それは曾我たちが僕と同じ樣な動機から「あつかましい仕事」をしに大阪へやつて來たからで、僕たちはだしぬけに路傍で會つたのだが、幸ひその時には、僕の方の生活が比較的安定して居たので、彼等にもさうひどい生活の脅威は與へないですんだ。

その頃僕は箕面に近い櫻ヶ丘の文化住宅地に、一軒家を持つて居た。偶然な機會からある保護者に引ッ立てられて、飛びきりな條件のもとに彼の保護を受けることになつて居たのだ。――それが「菱形ソオス」本舗の主人の中島氏だつた。

僕たちが大阪を引上げたのはそれからまる一年ほどしてで、ふとした事情から彼の保護を離

したのだが、存外にこの行動は成功した。――建設者の役割の一つとして、震災後の東京はやいくざな美術家の一人にも、寛大な抱擁の手を延ばして居たのだ。

――麗子はいゝいゝすぐりを殘らず征伐すると、流し臺のそばへ寄つて行つて、そこらをコトコト云はして、洋皿へコオンビーフだの生のキャベツなどを盛つて來て、マヨネエズソオスをかけて、フォークでぐるぐる掻廻した。――自分の夕御飯の支度だ。

「まだそのソオスは何ともないかい？」

「何ともないわ。」

と、彼女はもつともらしい顏をして、フォークの先をしやぶつて、

「『哀みの極み』を彈いてよ。」

と、窓の僕にねだつた。

彼女は御大葬の折にラヂオで聽いたと云ふ『哀みの極み』を、僕がギタアを抱きさへすれば、一度はせがんで彈かせることにして居た。最初のうちは耳へとまつたきれぎれな斷片を、口笛で吹いたりなどして居たが、それ以來それが氣になつて仕方がないとしじうこぼして居た。僕も最初の抑揚の淺いあの折返しの部分しか覺えて居ないので、彼女にねだられてもそこだけしか彈けないのだが、それでも彼女は滿足で、でたらめな即興的な章末のだらだらとついた『哀みの極み』を、いつも耳を澄ましては聽入るのだつた。――

「働いてそれから御飯はおいしいだらう。」

「おいしい。」

と答へて、彼女は頤へくツつけた御飯粒を注意されてフォークの先で取つた。

「パンもあるぜ、今日買つたのが。」

「さうお？」

と、彼女は氣のない眼をして、

「いゝわ。」

とつぶやいて、小さな梅干の種子をピョイとお皿のはしへ吐出した。

――すぐ頭のところへ聳えた福助足袋の大きな廣告塔が、眼まぐるしく變轉するイルミネションの反映を地面まで投げるので、僕のからだの半分は絶えずそれに彩られた。深川本所一帶の工場地を包む夕の騒音が、時折隅田川を上下する發動機船のポンポン云ふ音を混ぜて、低く窓へ迫つて來た。――電燈のまはりを廻つて居る灰色の蛾が、彼女の頸や華奢な肩の邊を時折チラと黑く切り、また、非常に大きなぼやけた影を壁へ投げた。

「U・ちやん。」

と、彼女は一人で食事をすまして椅子から立つと、皿をかたしながら僕を顧みた。

「海へはいつ出かけるのよ。」

「いつでも。」

僕はギタアに氣をとられて迂濶な返事をした。――豫算箱の金が百圓になつたら、天幕を持つて沼津へ行かうと云ふ、僕たちの避暑計畫なのだ。天幕だのその他の附屬品は、もう半歳も前から心掛けてぼつぼつ準備をとゝのへて居たのだつた。

「あと幾らぐらゐ？」

「さうだね。……」

彼女はお皿の下から紙幣を取ると、

「これも入れていゝ？」

と瞳をあげた。――僕はギタアを膝へ抱へて、たれた髮を掻いた。

「幾ら貰つたんだい？」

「三圓とね、……」

と、彼女は隱しから五十錢銀貨を一枚と十錢の白銅を一枚と出して、卓子の上へ並べて、

「六十錢よ。」

「ぢやア紙幣だけ入れてお置き。僕のこの五圓も一緒に。」

「これは?」
「半端はとつてお置き、お小遣ひに。兄さんには内緒にしといて上げるから。……まアこゝへおいで。」
「なアに?」
彼女は窓ぎはへ寄つて、欄に凭かかつて窓縁へ昇りついた時、赤い大きな月が河の向うの重なつた甍の上に、光輝のない圓板を半分見せかけて居た。廣告塔の灯りは今度は彼女のむき出した素脚へ、その赤と白とに變る光の反映を投げた。

第二篇

一

大阪から手紙の返事が來たのは、中四日置いた日の暮れかただつた。十圓の大形飾窓を一つ仕上げて、他に二つ新らしい註文をとつて、――こんな景氣は近頃にはないことだが、――景氣のついでにみんなに一圓五十錢の浴衣地を一反づつおごつて、腹を空らして歸つて來ると、猿殿一つの素肌へ、自分で縫つた裾の短い寛衣をまとつた魔子が、
「お手紙。」
と、無表情な顏で中島氏からの手紙を僕に渡した。――窓の下では石油焜爐がブリブゥ音を立てて焔を吐いて、シチュゥ鍋が盛んに白い泡を吹いて居た。
「はい。」
と、續いて熱湯で絞つたタヲヱルを、ねぢパンの樣に目笊へ入れて持つて來てくれたので、僕は讀みかけた手紙を置いて、べたべたと肌へくツつく汗じんだシャツをとつて、窓から來る川風に吹かれながら、頸から腋から胸から臍まで丹念に拭いた。
「卓子掛みたいな模樣だな。」
さう、彼女の寛衣のがらをいゝと批評すると、彼女はおぼつかない手で洋皿の上へ卷甘藍を鍋から挾み上げながら、
「もともとさうなんですもの。」
と、すまして答へた。彼女の説明によると、ヤアル幅一尺十三錢の卓子掛を利用したので、もつと自慢なのは、――型が全然彼女の創案になると云ふのだ。さう云はれてみるとなるほど風變りだ。
「一寸短か過ぎるね。……こごむと猿殿が見えるよ。」
と云ふと、
「えゝ。あれちよいと見せなかつた。……」
と、相變らずすまして答へた。
中島氏の手紙にはいつもの樣に、ロオズ何とか云ふフランスの香水が、ふんだんに浸ましてあつた。頁がパラパラと手の中で頁をめくると、あまひがする樣な强い匂ひがむツと鼻を衝いた。しやれた唐紙の便箋には、せんだツて打合はせた用件のほかには、何も書いてなかつた。
繪は殘らず送る手配をしたこと。どう云ふ風にして送つたらいゝのか勝手がわからないので、S・(大阪で僕たちが行きつけた美術材料商だ。)へ行つて相談をしたこと。全部で十四點あるが、そのうち次の六點の中には自分の欲しいのやこツちで賣れる豫定があるのやなどがあるから、非賣の貼札をして置いて欲しいこと。尤も特別に希望者があつたら、ざツと價格の標準を知らして置いて貰ひたい。などと云ふ意味のことを書いて、人物畫を一點と風景畫を五點と名指してあつた。
十四點のうち五點ほどは二科へ出してしくじつた奴で、いゝいきむくに努力を傾けた、出來不出來はともかく、自分の技倆の範圍では滿足さるべき作品だつた。中島氏が自分で欲しいと名指

してよこした人物畫は、魔子のだつた。彼女が白い毛布の上にマンドリンを抱いて裸で轉がつて居る、表現派風の構圖のものだつた。——中島氏は魔子に以前から特殊なある好意を寄せて居るのだ。

「二科だの帝展だのなンて！」

などと、てんで頭からけなしてかゝる魔子は、僕が僕自身の資格に自信を持ちたい野心から、その通過をなかば眼あてに骨を折つて居るのを見たりなどすると、さも莫迦らしげに侮り侮りした。藝術家が譬ひ相手が誰にしろ、他人の批評で自分の腕をきめる。——そんな莫迦げた言語道斷な話はないと主張するのだ。尤も、夜店に飾つてある一枚八十錢ぐらゐのペンキ繪の額に感心したり、大道の名札書きの達筆に驚を奪はれたりして居る彼女のことだから、彼女自身がどんな眼で繪を見て居るのだかはわからない。

「[illegible]覧會はいつ開くんだよ。」

額へキラキラと汗の粒を浮かした彼女が、おかツぱをうるさげに擾いて腕でそこをこすりながら、[illegible]げに訊いたので、僕は手紙を讀みかけて[illegible]あげた。

「[illegible]に[illegible]たぜ？」

「うん。」

と、彼女はうなづいて、

「その代り儲かつたら鑛物の標本を買つてくれるんだよ。」

と、附加へた。

——彼女が鑛物の標本を欲しがつて居るのは、もう久しい以前からなのだ。兄に似てどこか科學者肌の綿密な追求心を持つて居る彼女は、學校で博物をはじめて鑛物の教科書を買ふと、恐ろしくそれに興味を持つて、暇さへあればまだ教はりもしない先の方まで、頁を引ツ繰返して居たが、そのうちに小遣ひをためては鑛物の標本を買つたり、專門的なその方面の著書を買ひ集めたりなどして居た。小川町の停留所に近いある鑛物商の飾窓は、彼女を惹く點で衣裳屋や化粧品店をしのぐぐらゐだつたのだ。

「儲かつたら買つてやらう。」

僕へ火をつけながら答へると、

「箱のおや厭やだよ。ばらのを一組だよ。」

と、彼女はもつれたおかツぱの蔭で狡猾な眼をした。——

曾我は[illegible]早く圖書館へ出かけた。暮れかた前には戻つて來て、夕飯をすまして又た仕事に出かける豫定だと、僕は出ではに告げた。——近頃はてんでんが仕事に忙がしいので、めつたに三人が一緒に食卓につく折がなかつた。食卓には今日は魔子の心づくしで、ダリヤの盛花まで添へてあつた。

——もう二月僕は母に會はない。[illegible]つで父をなくした僕を十九まで育てるために、あらゆる苦勞と云ふ苦勞へ要するに貧乏苦勞だが。[illegible]をし盡くした彼女は、到頭貧乏暮しに行詰まつて、R・家の[illegible]い戸主として僕を殘して H・家へ嫁いだ。十九とは云へひと通り生活の苦勞を受けて、人並みには世間を識つて居た僕は、彼女の再度の結婚が單に彼女の口實の樣に、「止むを得ない生活の手段のためだけではない」と云ふことを、殆ど冷たく理解して居た。二言目には死んだ父さんがと云ひ云ひして、僕を[illegible]ます[illegible]にも彼女自身を慰める口實にもして來た彼女は、この二三年眼立つ樣な孤獨と寂寥との中に[illegible]つて來た。——僕は僕の年なみの解釋ではあつたが、H・と母との接近にもつと切實な理由のあるのを推察出來た。しかし、それは[illegible]と[illegible]との[illegible]係を、今日の樣に決裂させた直接の動機ではなかつた。何よりもいけなかつたのは、——[illegible]もか一度は[illegible]になると[illegible]も、[illegible]頃の[illegible]の年齢と、そうして、[illegible]くる

めたその運命に裸で直面しなかつたことだつた！

（お前の將來のために。）

（H・家のために。）

（つまりは父さんの遺志に添ふ様に。――）

さう云ふ、一寸見かけは美しい口實が、彼女を粧はせる代りに、醜いさもしい懷疑深いヴェイルで、その殉情をまで覆うてしまつたのだつた。彼女からの最初の送金を、あなたはH・の妻でH・の三人の子供たちの母である嫂だ云々と云ふ、冷たい叛逆的な言葉を添へて突ッ返してしまつて以來、僕たちの關係はまだもとへ恢復されては居なかつた。彼女の肉親の子として表向きひと通りのつき合ひはしながら、僕たちの氣持は變に昔喰違つたところから、遠くそれたまゝで居たのだ。――

再婚後あまり幸福ではないらしい彼女から、箕面の住まひへあてて、彼女の義理の子供たちの履き古した靴を直して送つてよこしたり、自分で洗濯屋へやつて綺麗にしてかぶる様にと、H・の古い夏帽子を送つてよこしたりしたのを、僕は説明の出來ない一種天邪鬼な氣持から、そのまゝ彼女に送り返してしまつた。かうして、僕はみづから望んでたつた一人の肉親から離反した。

「天邪鬼ツて奴ア御苦勞に自分で自分を背負つて歩いてる奴でね。」

さう、曾我は時折僕の苦もなげなのんきな調子で云ひ云ひした。――時とすると冷嘲的にさへ見えるさうした態度の底に、僕は彼の無口なうづく様な友情をいつも感じるのだつた。

「親子だなア。……」

彼女からの書信などが時折、郵便受の中へ折込まれて居たりするのを見ると、拔いてしみじみとそれを讀んだこともない僕を顧みて、彼はほがらかに微笑んだりした。

「こんなつむじ曲りの御機嫌取りを、誰がかう根氣よくするもんか。」

――丁度そこへ、ドンと亂暴に外から扉が開いて、當の曾我がひよツこり顏を出した。彼は床を歩きながらフンフン小鼻を鳴らして、臺所の方を見たが、

「うめえ匂がしアがるな。」

とひとりごとを云つて、長く伸ばした髮を額ぎはにもつらしたまゝ、帽子を器用に壁へ投げかけて、かゝへて來た古い大きな手製の紙挾みを、ドサリと卓子の上へ載せた。さうして、科學者風の透つた瞳で僕を見て、

「歸つた。」

と、くたびれた様な挨拶をした。

「何だいこリア。…」

「おみやげだ。」

僕は卓子の上の紙包を、赤い紙テエプを切つて披けながら、相變らず窓の下で晩御飯の支度に餘念もない廣子に聲をかけた。

「なアに？」

踏臺の上へ載つて、棚からナプキンペエパアをおろさうとして居た彼女は、高いところからちよいと振返つたが、卓子の上のものを見ると、だしぬけに床へ飛びおりた。

「あら、あたしのおみやげ？」

曾我は自分でガサガサと包を開けて、中の浴衣地を見ると、

「何だ。著物ぢやア喰へねえな。」

と不興げにつぶやいて、シュッ！ と卓子の面で燐寸を擦つた。

二

審美堂の店仕切りははじめてみると存外手間どつて、曾我にも手傳はせて骨組だけにざツと一日潰した。――間口二間半奥行三間と云ふ

店土間を縦に眞ッ二つに仕切るのだが、境界は天井と床とへ最初にぬきを渡して、その間へ幕を張らうと云ふのだ。かたかたの半分へ商品棚を並べたり額縁を吊るしたりなどすると、みかけが急にせゝこましくなつて、からだを斜にしないと通れない樣なところさへ出來た。

「こりア窮屈かな、少し。…」

さう云ふと、石原さんは、

「こゝに坐つてからして往來を見てると、隧道から外を覗いてる樣ですよ。」

と、笑つた。

そのわりに、しかし片側は感じのいゝちんまりした小部屋になつた。鐵色の壁とクリーム色の境幕とが向き合つて、やゝ不調和な間に合はせらしい感じを出したが、それとて繪をかけると存外眼立たなくなるかもわからない。それよりも不都合なのは、とツつきが壁でもあつて、そこへ大きな繪の一つもかけられるといいのだが、生憎二階の階段口がそこへせり出して居るので、どうにもほかに手のつけやうがない。――それが見かけの上の何よりの缺點だつた。

「殘らずかけられるかなア。」

昨夜畫いた繪を一枚々々褒めてくれた曾我が、金槌をぶらさげたまゝそこらを見廻して云つた。

「さア。…」

僕もあやふやな眼で

「どうかなア、殘らずは。…まアいゝさ、少しは殘つたつて。」

繪は大體して僕の期待をさう裏切りはしなかつたが、ごく初期のものには多少筆觸の生硬なのや何かがないでもなかつた。しかし、をかしなことにはそれがみんな、中島氏の特に指定してよこしたものばかりなのだ。尤も、――それらは初期の作品だけに、一層まじめでもあり生で情熱的ではあつたが。

「ぢや明日の晩飾りますよ。」

さう歸りに僕は石原さんに云つた。

「あとは宣傳を一つ拔目なくやるんですな。何なら少しお手傳ひをしますよ。」

と、石原さんが「隧道」の中から出て來て、葬場の樣ななま明るい部屋の樣子を見ながら云つた。

「さう。もしかしたらお願ひします。今夜はこれから歸つて、少し宣傳の方法でも研究しませう。」

「繪よりかそツちの方が上手かも知れませんよ、この男は。」

と、曾我があとから笑つた。

カフェT・で簡單な夜食をとりながら、僕たちは暫く宣傳の手段や順序について、まじめに相談をし合つた。さうして、とり敢へずポスタアを澤山描いて、目拔きの通の美術商や洋食店や、各大學、專門學校の掲示場と云ふ樣なところへ貼つて、更に廣告のちらしを二三萬刷らせて、自分たち三人と、もしかしたら店の若衆にも手傳はせて、會期中街で配ること、ざツとさう云ふ具體案を立てた。

――ポスタアは大きなのは畫用紙の全紙へクレヨンか水繪で描くこと、小さなのはハステル用紙へカット風に入れて、多少の空地を殘して、もしかしたらそれぞれ店の希望で、――例へば洋食屋なら季節の獻立だとか、化粧品店なら新發賣の化粧品だとか、さう云つたものを書添へられる樣にすること、明日は一日麗子にも學校を休ませてポスタア描きを手傳はせ、明後日は彼女は午後から僕たちは朝から、ポスタア貼りとちらし配りとをする、ポスタアは出來上がり次第漸次中心地から貼けることにして、それには曾我と僕とがかゝること、麗子は學校の歸りに當分會場へ廻らせて、店番を兼ねて表へ

、、、ちらしを配らせる。——
「ポスタアの材料もついでに買つとかうぢやないか。……二十枚か三十枚のツて、一ン日にア[illegible]たぞ。」
「さうだな。」
「ハ……[illegible]彼が眉をつけた。……あゝポスタアぢやアなんてんでも仕様がねえからなア。」
と云ひかけて、曾我は拍子もない大きなくしやみをして、そこらぢうの人々の注意を集めてしまつた。
「贅沢てえやつアからやらなきア。……」
と、彼は厚かましく嘯いて、カラカラ笑聲を立てて笑つた。やゝ醉が廻つて居たらしい。
紙だの絵具などを一荷物買込んで宿へ歸ると、[illegible]子はもう寝て居た。暑いので寝臺の上を轉がり廻つて、片脚で蚊帳を突ッ張つて居たので、血を吸つて膨らんだ蚊がブンブンそこらに群れて居た。
「莫迦々々。……」
と、曾我は彼女のからだをかんてんでも動かす様にグニャグニャと、寝臺の眞ん中へ轉がして、脚を毛布でくるんでやつた。
「十二時だな。」
と、彼は蚊帳から出ると卓子の上の硝子の置時計を見て云つた。
「どうだい。……構圖だけでも大分とッとかうぢやないか。」
「さうだな。」
「この卓子はかうして、こゝへ茣蓙を擴げるんだ。」
「うん。」
「大量生産てえやつは、」
と、彼は[illegible]の上の[illegible]から、埃を叩いて茣蓙をおろしながら云つた。
「……機會を短縮しなきアいけねえ。」
さうして、それを部屋へかつぎ込んで來て、卓子をずらして廣く床へ敷いた。茣蓙は以前この部屋の一部に敷いてあつたのを、僕たちが部屋を今の様に改める前に捲いて寝臺へ載せて置いたので、時折必要に應じてはおろして使ひ使ひして居たのだ。
僕たちはその上へ低く電燈を吊るした。
「どうだい、このくらゐぢやア。……」
彼は紙を四つに疊んで僕を顧みた。
「少し狭いかな。三つ折りにしちやアどうだらう。」
「かうか。……」
「大き過ぎるかな？」
「……[illegible]でもねえ。」
「おい。一寸この脚をどかした。……コップがあるぜ、そこに。」
「オウライ！」
僕は[illegible]を擴げると、[illegible]いて[illegible]の上へしやがんで、眞ッ白い邊てこに視線を迸はせ[illegible]の眞ん中へ眼をつけた。——[illegible]勢で、三つに疊んで切つたパステル用紙へ、むッと思案深げな眼を据ゑてだまつた。
「蚊遣はもうなかつたッけかなア。」
「さア。……」
「さアぢやアねえ。そこの箱は空かい？……いや、そツちの椅子の下だ。」
夜が更けるにつれて、[illegible]猛烈になつた。——それが半裸體で働いて居る僕たちのぐるりで、ワンワンうるさく羽音を立てた。
曾我は何をやらしても人並みにはやる男で、風景はなかつたが綺麗な器用な絵を描いた。しかも、これはアカデミックだの、これは印象派だの、これは表現派だのと、一枚々々に構圖や文字や紙形まで變へて、僕がやつと素描を終へて水絵具を溶かしはじめた頃には、もう五枚から仕上げて居た。
「君のはみんな一つ構圖でいゝんだらう？」

と、彼は立つて來て、畫用紙の面を縱横に走つた荒ッぽい鉛筆の線に見入りながら、つぶやいた。

「さう。いゝだらうと思ふけれど。」

「いゝともいゝとも!」

と、彼は煽動的な口調で、

「こゝへU・R・賞八展覽會と、から縱に太くゴチックに入れるんだな。」

「面白い。」

「ふふふ。」

と、魔子が蚊帳の中で妙な力のない空虚な笑ひかたをしたので、僕たちはぎよッとして繪筆を置いてそッちを顧みた。蚊帳の中は、――寢臺の眞ん中に綺に黑く彼女のからだが轉がつて居るだけで、ひッそりして居た。

「どうだい、あの寢ざうは。……」

と、曾我は[illegible]かけて[illegible]くつぶやいた。

僕たちが仕事を切上げて、裸になつて寢床へ這入つたのは、二時過ぎだつた。枕をはづして轉がつて居る魔子を眞ん中へ押しやつて、そのあとのむかむかと淀んだところへからだを横たへると、すぐにまたこッちへ彼女は寢返つて、[illegible]けた[illegible]な腿を汗ばッたく僕の脚へからませた。

「仕樣がねえ婦人だな。」

「仕樣がねえ婦人はいゝが、」

と、曾我は近眼を敷布へ近付けて、

「……こいつめ、キャラメルをしやぶりながら寢たんだよ。」

と云つて、べとべとに溶けた飴の塊りを、指でつまんで引ッ張つて敷布から剝がした。

三

翌日一日僕たちは二階へ籠もつて、むだ口一つ叩く暇をも惜しんで、ポスタアの製作に沒頭した。曾我は約束の小形なパステルを引受け、僕と魔子とは一日畫用紙の上を匍廻つた。さうして、暮れがた灯ともし頃までに、やッと大形のを十枚と小形のを四十枚ほど仕上げた。

朝起きぬけに、筋向ひの印刷屋を驚かして頼んだ廣告のちらしは、五千枚だけ刷り上がつて來た。曾我が「どうだい俺の名文は」と威張つた彼等詩人の宣傳文は、五號活字でインクの匂高く、紙面に躍つて居た。――

夕飯には炊事に勞力をさくのをいとつて、隣りの洋食屋から十五錢のハヤシライスを三人前とつた。さうして、食後直ちに繪を貼り付けに、僕たちは家を空にして神田へ向かつた。

もしかすると商店の近所でちらしを配らせるかもわからないと云ふので、僕たちは出來上がつたポスタアとちらしの一部とを用意して、魔子にはよそ着を着けさせることにした。

「着物でいゝ?」

彼女はトランクを開けてみて、中から友禪の單衣を見付け出すと、紅のきらびやかな模様に眼を惹かれたと云ふ風に、僕たちを顧みた。

「君[illegible]いゝさ。」

「これよ。」

と、彼女は細く微笑んだ、――去年曾我一のよそゆきにして着たその友禪を出して、僕たちに見せた。

「そいつを着るんなら着る樣に、その黑い面もやアまづいな。」

と、曾我が云つた。廣告配りは[illegible]ほどきいゝかいゝと云ふのが、[illegible]主張なのだ。

彼女が卓子の上へ鏡臺を立てて、手のひらでクリームなどを溶いて居る間に、僕たちはざッと畫の整理をした。――[illegible]くものがいれば[illegible]ので、どこか[illegible]來て、それへ[illegible]んで運んで行かうと[illegible]た。

「お待ち魔子。」
その相談がきまらないうちに、突然曾我に大股に窓の下へ歩いて行つた。さうして、髮が少し伸びたから鋏んでやらうと云ひ出した。
「さうしよう。」
と、僕が決定的に云ふと、
「さう、」
と、曾我はちよいと思案顔をしたが、「なアに？」と魔子が恐ろしい眞ッ白けな額を振向けたので、突然僕たちは噴飯してしまつた。
「ぢやア一つ交渉をして來るぜ。」
「さうか。……どこにある？」
「そこらにあるだらう。」
魔子の後ろへ廻つた曾我が、チヤキチヤキと勿體らしく鋏を鳴らしはじめたのをあとに、僕は階段を驅けおりた。さうして、自動車庫の成瀬さんと相談をして、二三軒近所を訊き合はせることにした。
存外容易に交渉がまとまつて、――引ッ張つて來た車を露路口へつけて部屋へ上がつて行くと、曾我はまだチヤキチヤキと魔子の頸のまはりで鋏を鳴らして居た。
「だめだよ。おい、動いちやア。……」
「ちよいと待つて。……」

「どうしたんだよ。」
「暑くッて。……」
彼女は著物の裾から手を突ッ込んで、懷の邊を掻きながら、
「見てないで、Ｕ・ちやん、蚊でもあふぎな。」
と、あざやかな口紅を二つに割つた。
一足先に荷を積んで自轉車を乘出した僕が、石原さんや店の若衆たちに迎へられて、荷をふぐして、みんなに手傳つて貰つて、二つ三つ繪をかけはじめた時、曾我が盛裝の魔子と連立つてやつて來た。曾我の指圖と見える十分に濃い目なお化粧と、大人びたおかッぱと、紅のきらびやかな友禪とが、彼女を人形の樣に綺麗に眼立たせた。
「どこのお孃さんかと思ひましたよ。」
と、肥えた石原さんが眼を細めて笑つて、彼女を迎へると、彼女は遠慮もなく彼の兩手をつかんで、
「こんな魔子だつてあるのよ！」
と、カポカポ木履を鳴らしてみせた。
「ぢやア、こいつを持つて行つて配るんだ。百貨店の前がいゝだらう。」
「みんな？」
「みんなッて、配れたらみんなでも配るさ。」

さう云つて、曾我は[illegible]な[illegible]の束を彼女に渡した。
「君たちも誰か一人行つて手傳つて上げたまへ。」
さう、石原さんが若い店員たちを見廻すと、誰もちよいと氣臆れがしたと云ふ風に、若い眼の前でためらつた。――一番美男のＹ・さんはぽうと瞼の邊を赧らめて、眩しげに彼の視線から眼をそらした。
「いゝわよ、一人で。」
と、氣輕に魔子が立つて行かうとすると、
「まアお待ちなさい。」
と、石原さんは後ろから呼止めた。
「お孃さんて、夜一人歩きなんぞするもんぢやありませんよ。Ｙ・お前行つて手傳つてお上げ。」
さう云つて、眞ッ赤になつた若衆を魔子につけて送り出して、何かしら面白げに聲を立てて彼は笑つた。――
繪は二點を殘しただけで、比較的たツぷりと餘裕をとつて飾れた。大形のポスタア三枚は、石原さんが自分で糊と刷毛とを持つて行つて、店の前の立看板とどこか近所へと貼つて來た。
「引ッ立つたぜ。」

と、曾我は最後のをかけ終へると、反身になつて壁面を見廻してつぶやいた。
「値段表は額縁へ貼るかな。」
「下へ、壁へとめられないかい？」
「さう。……正札付ツてえ風でもなア。」
石原さんが安全ピンを持つて來てくれたので、幕の方はそれでとめた。
「安すぎますねこりア。」
と、値段表をひと通り見廻したあとで、石原さんが無責任な批評をした。
「……みんな賣れますぜ。」
「さうありたいもんですがね。」
と、曾我がわきで笑つた。
「へえ、非賣ツてのがありますな。おや魔子ちやんのだな。こいつアわかつてるが、U・ちやんこッちの三點はどうしたんです。……賣却ずみですかね。」
「失禮なことをおつしやい！」
僕はまるめた紙屑を彼の方へはふつて云つた。
「へえ、先約ですか。」
「大阪の方にね。」
「それはそれは！……」
と、石原さんは仰山な表情をしてみせた。

すつかり飾り付けがすんで、石原さんと手金の問題や何かについて二三打合はせをすましてから、ポスタアの位置の検分かたがた、魔子たちを迎へに表へ出てみた。ポスタアは店先の立看板に一枚と、もう二枚は交叉點に近いとある繪端書屋と筋向ひの臺灣料理屋の店とへ貼られて、氣はづかしいほど夜眼にも眼立つて居た。
——魔子たちは百貨店の明るい飾窓の前で、盛んに活動して居た。夜更けで女氣の乏しくなつた折でもあり、彼女のきらびやかな娘姿は大びらに周圍の視線を集めて居た。
「あとこれだけよ。」
と、彼女は三分の一ほどになつたちらしの殘りを、遠くから振つてみせた。——お化粧と身なりとに過剩な自信を持つて居るらしい今夜の彼女は、多くの視線の中にさうして働いて居るのが、ひどく愉快げだつた。
——骨折り賃に歸りにアイスクリームをおごつて、一旦店へ戻つてから、僕は曾我たちと別れて再びリヤカアを乘出した。駒形へ戻つたのはかれこれ十二時過ぎだつた。ウヰスキーを一杯づつ呑んではポスタアを貼つて歩いたと云ふ曾我は、大分いゝ景氣に醉つて魔子に世話を燒かせて居た。

「豫定通り行つたな！」
「然り！」
などと、彼はよろよろしながら、帽子を天井へぶッつけては踊つた。
寢床へ這入つてからも、僕たちは莫迦々々しく景氣のいゝ話をし合つては、はしやいだ。魔子は宵のお化粧のまゝ猿股一つの素肌になつて、嬉しげにあちこち轉げ廻つた。僕が彼女の腋へ手を廻して脣の間へ尖つた輪をつくつてみせると、彼女は下へ敷いたおかツぱをむしやくしやにもつらしたまゝ顏を寄せて來て、紅の大きくはみ出たまだ子供らしい堅い脣を、グイと亂暴に押付けた。——彼女からすると、これは意味のない習慣なのだ。

四

翌朝未明に起きて殘りのポスタアを仕上げると、僕たちは魔子が學校へ出たあとで地圖を擴げて、掲示の場所と都合のいゝ道順とを注意深く研究して、それからめいめい手分けをして、それをかゝへて家を出た。
僕が引受けた大形のポスタアは、幾分を市内の主だつた美術商へ配る豫定で、それは石原さんに交渉を賴むことになつて居るので、僕は

眞ッ直ぐ神田の會場へ向かつた。
　曾我は市内や郊外の目拔きな通を十八箇所ほど選んで、そこの美術商やカフェや樂器屋や書店などへ直接行動をとることにして、一束ポスタアをかゝへるとまづ手近からだと笑ひながら、宇路口からすぐに淺草の方へ向かつた。
　會場はすつかりもう整理が屆いて居た。石原さんの手になる『U・R・氏洋畫作品個人展覽會　入場無料』と筆太に記された立看板が、氣はづかしいほど遠目にも目立つて、店の兩側に立てかけられて居た。陳列室の氣分は夜と大差はなかつた。慾を云へばもう少し光線が欲しかつたが、それも入場者が莫迦々々しくこまない限りは、さう障りにもならなさうだつた。
「今遣つたでせう、素敵な美人に。」
　と、石原さんは艶々と脂肪光りのする大きな顏を撫でながら笑つた。——初客が女でその上に素敵な美人だと云ふのだ。
「……幸先がようござんすぜ。」
　——一日脚を棒の樣にして歩き廻つて、四時一寸過ぎに豫定の枚數を豫定の場所へ貼り終へて、店へ戻つて來ると、會場は身動きも出來ない人ごみを呑んで、外まで雜閙を溢らして居た。
「大變な騷ぎだなこりア。……ないには、曾我はまだ見えませんか。」
　云ひ樣のない複雜な感情に胸を壓されながら、窮屈な商品臺の間を拔けてK・さんに訊くと、彼は愉快げに笑ひながら
「まだお見えになりません。」
　と答へて、石原さんが自分で陳列室に控へて居るから、行つて御覽なさいと敎へてくれた。
「厭やだよ。……奴等ア色んな批評をしてやがるだらう。」
　と、僕は幕の向うの落ちつきのない、ざわめかしい氣配を氣にしながら、變に顏を赧らめた。
　僕は今度の催しの結果については、もともと二樣の豫想を持つて居た。一つは、——總體して世間の人々が思つたよりも閑散で、裕福で、なかなかみんな美術の愛好家で、しじう餓ゑた樣な眼をして街に何かをあさつて居る。そんな連中は大抵傳統だの歷史などと云ふ樣なものには無關心で、要するにいゝものになら純粹に氣持を傾ける。厭やなものだと二度と最早振向きもしない代りには、惚れたとなると、繪のよしあしよりは結局惚れるか惚れないかが問題ないで、そこでは魅力があらゆる藝術價値を決定するのだが、）大膽にそれを人にも共鳴させずには承知をしない。つまり批評と云ふものをいつの場合にも彼等自身に卽して、無遠慮にづけづけとやつてのける。——そんな手合ひが押すな押すなで立て込みはしまいか？
　それとも、——存外世間の人々が、英國人の樣に保守的で、頑つて居て、店の立看板をちよいと見ただけで、U・R・ふん、聞かない名だな、ぐらゐのことで、臆病にステッキを鳴らして、そこを通り過ぎてしまふ。——彼等は新らしいものに對しては恐ろし、健忘症だが、覺えて居ることだけは百萬遍でも飽きずに繰返す。帝展や二科などのごくごく通俗な繪かきの名を一ダアスほど覺えて居て、季節には展覽會場を百歩で拔けて、山氣のたツぷりな彼等の大作品にでも出ツ遭すと、なるほど！　てな顏をきいた風に傾げてみせる。
　要するに世間の眞ん中へ立てば、ぐるりの濤が殘らず障りなく見られる樣な、閑散な雰氣をば結果に於いて現出するのだ！
　僕の豫想はこの二つの間を、びくびくもので往復して居た。今日あちこちとなじみのない學校をめぐり歩いて、好奇深い學生たちの視線の中で、臆面もない大きなポスタアを貼りながら

も、度々この不安な落ちつかない氣持は、毛蟲が匐ふ様にムヅムヅと僕のからだを匐廻つたのだつた。

「今頃急にこんなにこみはじめたんですか?」

「いゝえ。」

と、K・さんは明るく笑つて、

「午頃からずツとからです。……豫約の方も有望ださうですよ。」

「どうだか。……」

「いや本當。」

さう云ひかけて、

「いらつしやいまし。」

と、K・さんは立上がつた。振返ると、客と思つたのは案外、幾月か振りで會ふ信濃町の母だつた。——彼女もこゝで僕をいきなり見出したのは意外だと云ふ顔をして、K・さんの方へ會釋を返すと僕のそばへ寄つて來た。

「お前居たのかい。……どうかと思つてねおッ母さんは」

さう云つて、見る見る彼女は睫毛の蔭に涙を光らせて微笑んだ。

「どうしてこゝに居るツてのがわかりました。」

「曾我さんがお端書を下すつてね。」

と、彼女は大事に持つて來たらしい薄よごれた端書を、懐ろから出してみせた。——端書には彼の筆蹟で、U・君の繪の展覽會が幾日からこれこれのところで開かれるから、會期中に是非一度見に來てやつてくれる様にとしたゝめて、店の位置の略圖まで入念に書添へてあつた。

「御深切さまにわざわざ。……」

と、彼女は端書を戻されると、大事さうにまたそれを懐ろへしまつて、

「曾我さんはいらつしやらないの?」

と、濡れた瞼をしばたゝいた。

「居ません。」

「さう。……有難うございます。どうぞお構ひ下さらないで。」

と、彼女はK・さんに椅子をすゝめられると、辭退をして壁ぎはへ身を寄せて、

「繪は向うに飾つてあるの?」

「えゝ、さうです。」

「一寸見せて戴かうかね。おッ母さんにはわからないけれど。……」

さう云つて、はじめて彼女は袂から手巾を出して、涙を拭き洟をかんだ。

「でもまアよかつた。駒形へ行かうかこゝへ來ようかと、さんざ迷つてね。……今日はお前、お父さんの御命日だよ。これも何かの因緣かもわからないけれど。」

と云ひかけて、

「こゝへかけて、お店のお邪魔になりはしないかしら。」

とひとりごとを云ひながら、遠慮深く腰をおろして、——僕にもかける様にとすゝめて、

「おッ母さんはね。……曾我さんからお端書がなくても、今日はお前のところを訪ねて、お位牌は飾らないまでも、心持だけでもお前とお祀りをしようと思つてね。……本來ならお前がお佛壇ぐらゐはちやんと持つて、こんな時には品川の叔父さん御夫婦に、本所の伯母さんぐらゐはお呼びをするのが當然なのだけれどね。……今年はお前お父さんの二十一年忌だよ。」

「さうですか。」

「さうですかツてお前、……のんきな子だね。」

と、母は涙のまゝ淋しく微笑んで、

「よその家へ行つたおッ母さんにお位牌を預けたまんま、御命日も忘れてうツちやらかして置くなんて。……」

さうして、手を延ばしてとれたボタンのところを弄つて、

「それでね。……おッ母さんは今日は曾我さんもいらつしやるし、御迷惑をかけるのも何だか

ら、お前とどこかその邊へ出て、お父さんのお寫眞でも見ながら一緒に御飯でも喰はうと思つてね。」
さう云つて、
「これは恐れ入ります。……どうぞお構ひ下さらないで。」
と、奥からK・さんの運んで來たお茶を、腰を低めて受けた。
「僕は今日は忙がしいんです。……曾我にも、こゝの石原さんにも、色々手傳つて働いて貰つて居るんですから。……」
「そりア、……」
と云ひかけて、突然激しく彼女は睫毛から涙を降らして、
「そんな、そんな返事をお前、たまたま會つたおッ母さんに。……」
「とにかく、一寸その邊まで出ませう。こゝでは店の邪魔にもなるしするから。」
彼女の様子に當惑して、晴れ晴れしい今しがたの氣持もすつかり腐らせて、不機嫌に僕は椅子から立つた。さうして、忙がしく涙を拭いて居る彼女を殆ど性急に促し立てて、店を出た。なぜかこんなところを、曾我や石原さんや店の者たちなどに見られたくはなかつたのだ。――

「御飯どきには少しまだ早いけれど、」
外へ出ると少し彼女に横顔を直して、古びた傘の蔭へ僕を入れて云つた。
「今日はおッ母さんもそのつもりで來たんだから、……ぢや、かうしない？　何かお前喰べたいものでもないかい？　この邊で手近に。」
僕は不愉快な眼で彼女を見た。さうして汚い亞麻色の髪を乏しくひッ詰めに結つた低い彼女の頭を見おろして、哀れみと云ふよりか、何か肩身の狭い様なみすぼらしさをさへ感じた。
「何でも僕はいゝんです。おッ母さんの好きなものになさい。」
「お前は洋食がいゝんだらう？」
僕はだまつて、彼女のかざした傘の蔭からはみ出す、自分の擦れた赤革の靴を見つめた。さうして、ふと名狀しがたい空虚なわびしさの中へ落込んでしまつた。――僕はいつぞや、魔子が玩具箱に使つて居る壊れた小さな竹行李をひツくり返した時、セルロイドの潰れた人形だの古びたクリスマスカアドだの、クレヨンのかけらなどと一緒に、手垢のついた古い妙な恰好をした木塊が二つ轉げ出したことがあるのを思ひ出した。彼女はその時それを僕に示して、
「パパとママのお位牌よ。」
と、淡泊に説明した。――そんな記憶が、わびしい空虚な影を曳いて、僕の頭を掠めた。
「こゝはどう？」
だしぬけにさう云はれた時、僕はふッと自分をさまして、さうして彼女を見た。と、傘の蔭になつた窶れた貧相な彼女の顔が、水底でも透かす様にぼやけて溶けて、殆ど見わけもつかなくなつて居るのに僕は氣付いて、自分で氣はづかしくなつてそこからさッと眼をそらした。――

五

曾我と魔子と三人連立つて會場から歸路についたのは、かれこれ十一時を過ぎた時分だつた。口開け匆々三點の賣約ずみがあつて、十七圓の手付が這入つた。石原さんから金を受取つて、だまつて店を出て、だまつて小半町歩いてから、僕たちは期せずして立止まつて、あッはツは！　と聲を揃へて笑つた。
「おい。ありアみんな賣れるぜ。」
と、曾我は濡れた様にキラキラ灯りを映した電車の軌道の眞ん中を歩きながら、悪ろしいつい抜けの大きな聲を立てた。
「惜しかない？　みんな賣れちやつて。」

「さツぱりすらア。……」
さう、僕は曾我にも負けない附景氣で云つた。
しかし、――僕は今夜はひどく變に空虚だつた。むしやくしやにたゞ淋しかつた。母に會つたせゐとも思へなかつたが、無論魔子の云ふ樣な意味でもなかつた。人生の創始から終末を通じて、その底を貫くあの『虚無』が、どう云ふ氣まぐれかでひよツこり生活の表面へ、その片影を見せた。――さう云つた樣なものだつた。
「どうだい。そこらで一杯祝盃をあげようぢやないか！」
と、須田町の交叉點まで來た時、突然立止まつて曾我が提議をした。
「よし！」
と、僕はすぐに賛成した。魔子は二三歩先で立止まつて、僕たちを顧みた。
「うさぎはどうだい。」
と、曾我が續いてまた云つた。
「魔子ちやんは？」
「いゝわ。」
彼女は甘えた眼をして僕を見た。
僕たちは連立つて、萬世橋驛に面した小さなうさぎ料理屋の、表の簣の扉を押した。
けばけばしく化粧つた女たちがごちやごちや居たが、こツちが女作れの客だつたので、凉しく敬遠してくれた。――魔子は學校の戻りに店へ寄つたまゝなのだが、著物も改めて居たし、お化粧にもやゝ念を入れて、いつもの子供臭さをなくして居たので、女たちは、この年稚な同性に對して、さう無關心ではあり得ないらしかつた。
「鍋にでもしようか、それとも、……」
と、僕が、獻立表をひツくり返して居る間に、曾我は何はともあれ、――と云ふ調子で、生麥酒を三つ註文した。
「あたしはいゝわ。」
と、彼女が不遠慮に註文をとり消すと、
「祝盃だ！」
と、彼は押ッ被せて、
「鍋で結構。そのほかうまさうなものがあつたら二三品、何でもいゝや。……」
彼が獻立表をひツたくつて、女給の一人と何やら交渉をし合つて居る間、僕は魔子と新聞を覗いた。
「あら、兩國の花火だつたのね、今夜。」
彼女は膝頭で僕をこづいた。
「つまンないわ！」
「見られるもんか、人出で。」
「だつて橋からよ。」
「兩國のかい？」
「いゝえ、裏の。……」
「すみません。……」
と、窮屈げに椅子の後ろから割込んで來た女給が、白く泡のたれたコップを三つめいめいの前へ並べたので、僕たちはそれぞれそれを手にした。――可なりいけるわりにすぐに額へ出る僕は、魔子が平氣な顏で黄金色の液體を底まで飲み干すまでに、もうこめかみの邊に血管の壓迫を感じかけた。
料理が二三品運ばれてやがて鍋が煮え立つて來ると、醉つてそろそろ愉快になつた曾我が、例によつて盛んにまくし立てはじめた。
「毎歳これから一度か二度づつ展覽會を開くんだなR。三月の暮しはそれで出ちまア。……さうやつて、幾らかでも生活の負擔を輕くしといて、のんきにこつこつやるんだ。本當の仕事はやツぱり生活と切離さなきアなア。……繪だつて天文だつておんなじこツた。お月さまにあばいた面を俗人どもに覗かせてやつてたところで、生涯うだつのあがりツこはねえからなア。……なア魔子。」
「さう？」

と、彼女は鍋の中へやつと葱の白味を追詰めて、おかツぱをあげた。
「さうツて、こいつ。……」
と、曾我は調子を抜かれて、あツはツは！　と天井へ反響する樣な聲を立てて笑つて、
「おうい！」
と、女給を顧みて、コップの尻で卓子を叩いた。
――やつとつかまへた青電車が、人の散つたあとのからりとした廣小路へかゝつた時、曾我は瞼へ僅く血をのぼせて睡げな風で居る魔子をわきへ置いて、熱ぼツたい口を僕の耳へ寄せた。祝盃のあげ不足な彼は、彼女を中途から家へ歸して、この機嫌で『晦日のお祓め』に出かけようと云ふのだ。月々の經費をなるべく魔子に切詰めさせて、餘裕をつくつて、それを僕たちしか識らない使ひみちに融通して、一晩をあるところで過ごして來るのを、いつか僕たちの通り言葉でさう云はれる樣になつて居た。晦日まではまだ一週間からあつたが、晦日は晦日だ。――さう云ふのが曾我の意見だつた。
「賛成！」
僕は今にも涙にぶツ裂けさうな妙な空虚な上機嫌で、彼の意見に賛成した。今日母と父の忌日の御馳走だと云ふ時刻でもない御飯を喫べた時、彼女は財布の中にたつた一枚たけ挾んであつた、壓しをした樣に折目だつたよごれた五圓紙幣を、卓子の蔭から「お小遣ひ」と云つて差出した。――それが僕の上衣のポケットにくちやくちやに押し揉まれたまゝ這入つて居た。僕はそこへ手をやつてみて、その濕ツぽい石鹸の樣な不氣味な感觸をもつた紙片をまさぐりながら、ふと皮膚の荒んだ不快なある三十女の顏を思ひ浮かべて、脂ツぽいおくびを胃の奥に感じた。――
電車が雷門前でとまつた時、
「魔子。」
と、曾我は彼の肩へ頬を凭らしてくたびれきつて寝入つて居る魔子を、搖すぶり起こした。さうして、「あら。」と充血した眼を開けて、やゝうろたへ氣味にズックの鞄を抱いて立ちかけた彼女を、
「ちよいとお待ち。」
と、呼止めた。
「兄さんたちはこれから一寸廻るところがあるからね。お前先に歸つて寝ておいで。……よく戸締りをしてな。」
彼女はぐツたりと萎えたからだで扉口に凭れたまゝ、素直にうなづいた。さうして、少し窮屈になつたと云ふ靴でびッこを引きながら、電車をおりて行つた。
彼女の白い麥稈帽がちよいちよい窓の下を通つて、自動車のヘッドライトに切られて、――ためらつて、車道を横ぎらうとした時、窓から首を出した曾我が、追ひかける樣にまた聲をかけた。
「おい！……あけがた寒くなるから、毛布を入れて寝な。風邪を引くから。……」
電車がゴッンと動き出した時、僕は彼女の灰白い姿が、電車の最早途絶えた、人氣のない廣い薄暗い通を、びッこを引き引き駒形の方へ歩いて行くのを見た。

第三篇

一

僕が行詰まつた生活の打開に（と云つて、とりたてて確かな生活の方針があつたわけでもないのだが、）これから先ほどのなじみもない未知の大阪へ、だしぬけに飛込んで行つたのは、千九百二十三年の二月の中旬たつた。とうに學

籍はなくしてしまつてもまだ着て居た、古びた美術學校の制服に、新らしい冬のオウヴァと云ふなりで、繪具箱と三脚椅子とを肩に、ごちやごちやと上下の客の雜鬧して居る煤けた梅田驛へおりて、――言葉通り西も東もわからないこの未知の大都市の玄關口に立つて、（さて、）と、僕は思案をしたものだつた。

財布には十圓紙幣が一枚と銅貨が三枚とだけ、一口に云へば、十圓と四錢あつただけだつた。銅貨が三枚で四錢と云ふのは、その中の一枚が大きな二錢銅貨だつたからだ。

宿は、――勞働者の多い、さうして、比較的都市施設のとゝのつた土地だから、市營か何ぞの存外氣のきいた簡易宿泊所が幾つもある。――そんなことを多少きゝ込んで居たので、それをあてにこツそり旅費の見積りをしたくらゐで、細々と煙を立てるぶんには十圓なにがしの金額で、二十日は身過しが出來ようと云ふ僕の腹だつた。

たゞ、未知なこの大都市へ一足踏込んで、何よりも心强かつたのは、東京の生活を底の底まで經驗した僕にとつて、總體して都市そのものからは何等の威壓をも感じない。言葉を換へれば、可なり見くびつた態度で居られたと云ふことだつた。無智であることはしばしば大膽である重要な要素だが、とにかくこの未知な土地は僕の眼には甚だくみし易く映つたのだつた。

繪を描いて喰はうか、何か似た樣な仕事をしようか。それとも思ひきつて、當分方面を變へて、純粹な都市的勞働、手先の熟練とか經驗とかを要しない人夫か職工でも志望してみようか。そんなことをぼんやり考へながら、僕は鶴町の勞働宿泊所へ身を寄せて數日ゴロゴロして居た。市內から不便なそんなところへ宿をとつた理由は、はじめて大阪の土を踏んだその夜、眼あての勞働宿泊所をそこゝと探し歩いて、どこも滿員を喰つて斷られたからで、市內の宿のさうした混雜に引換へて、こゝはまた淋しいほどひツそりして居たのだつた。

僕は每日食堂で、一食十錢なにがしの丼飯を喰つては、薄よごれた縞の蒲團へくるまつて寒さをしのぎしのぎ、當面の問題である自分の生活について、色々と畫策してみた。――風がなくて、少し陽射しの暖かい日などには、裏手の、戰爭の時分からそこへ繫がれたまゝうツちやらかされてあるらしい大小さまざまの廢船が、錆びた巨大な腹を傾げて何かの死骸の樣に浮いて居る繫留所ぎはの、枯れた草生の中へ寢轉んで、さてどうしたものかと思案をしたりした。

東京の、――僕とは最早姓の變つてしまつた母には、僕の方から親不孝な文言を並べた絕緣狀を投げつけたきり、半年このかた音信もしなければ顏も合はせないと云ふ風で、無論こツちへやつて來るについても、一言の打開け話もなかつた。最近一番親しくつき合つて居た畫家たち兄妹にも、大阪へ行けばとてつもない幸運でも轉がつて居ると云ふ樣な吹聽をして來たあとなので、彼等は僕が每日仕事のあてもなく、眼立つて先の詰まつて行く財政を氣にしながら、勞働宿泊所の十五人室の隅つこで、よごれた煎餠蒲團にくるまつて寒さに顫へながら、ぼんやり窓から煙の出の不景氣な煙突の群れを眺めたり、廢船繫留所の草原で午飯のかはりに[illegible]の大福を噛りながら、そこにひツそり傾いでかかつて居る、腐れた貨物船の群れを眺めたりなどして暮らして居ようとは夢にも思はなかつたのだ。

二月下旬の、――空が[illegible]の頃の[illegible]に遮つた、ひどく風の冷たい日だつた。豐後水道の演習の歸りだと云ふ第一艦隊と第二艦隊が、その陰氣な灰色の姿を築港の沖へ並べたことがあつた。

ものずきに五十錢のはしけ賃をおごつて軍艦の見物をして、莫迦々々しい寒い日にあつて戻つて來る途中、（實際僕は丁度午飯どきで、山盛りにした眞ツ黒い麥飯を牛肉の菜か何ぞでうまげに喰つたり、天井の低い恐ろしく蒸し蒸しとスチームのきいた船室の變なもの蔭や何ぞに、白晝氣樂げにハンモックに寐入つたりなどして居る水兵たちを見て、すつかりその生活が羨ましくなつてしまつたものだつた！）ふと、何のきつかけにだつたかに、——ことによると、ひよいと靴の先でそこらに轉がつて居る石ころかブリキの罐でも蹴つたはずみに、だしぬけに頭に浮かんだのだらう。——店の飾窓の裝飾を受負つてみたら？　と、さう思ひついたのだ。

僕はその夜宿へ歸ると、早速古い畫板の繪具をナイフで削つて、そこへ一つ思ひきり眼新らし、形式の飾窓の圖案をつくつてみた。なるべく眼立つた、奇抜な、さうして經費も手間もかゝらないと云ふ樣な、蟲のいゝ條件を並べて。

その夜財布の中を調べてみると、築港へ來てまだ十四日目だと云ふのに、もう金の殘りは一圓なにがしになつて居た。豫算よりも大分贅澤をしたわけになるのだ。贅澤と云つたところで、たかだか、一杯十錢幾らの丼飯の代りに、外の繩のれんでどじやう汁を一杯よけいにすゝつたとか、魔子へ時折出す手紙の封筒に、ちよいとしやれた二重封筒を使つたとか云ふぐらゐの、範圍に過ぎないのだが。——

翌朝僕は市内へ出て、水繪の材料を五十錢ほど買つて、一日宿で飾窓の圖案に頭をひねつた。さうして、夕方までにこれならと思へるやつを六七枚仕上げて、さて今度は、それを見本にどんな風に註文を取らうかとか、どのくらゐの經費と材料とで引受けたものだらうかなどと云つた問題を考へた。——とにかく無一文ではじめる仕事なのだ。材料を買ふにしたところが、向うからまづ五圓なり十圓なりの材料費を出させなければならない。まア、見得だけでも繪具箱を背負つて、繪かきの觸込みで店へ飛込むのが、順だ。

一飾り材料が五圓乃至十圓に手間が五圓、——まアこんなところが見當だらう。手間は樂に行つて半日、ざツと一日には見積らなければなるまい。一日五圓に行けば註文さへあれば割に合はない仕事ではない。それに裝飾の種類によつては、背景畫の必要もあるのだ。こツちでまたいくらか浮かす方法もなくはない。

さて、これだけ方針がきまつてみると、あとはいよいよ繪具箱を背負つて、模範圖案を持つて、これと云ふ飾窓のある店へ飛込んで、ぢかに當たつてみればいゝのだが、何よりも苦になるのは、はにかみやの僕が、あつかましいその外交からまづかゝらなければならないと云ふことだ。

貧乏暮しは小さい時分から慣れッこで、每日干物でお茶漬けを搔ッ込まうと、十日や半月不服は云はないつもりだが、何と云つても母の蔭にあつて、世間を識らないで來た、云はば王侯の挨拶一つ滿足には云へないたちなのだ。

そんなわけで、——すつかり準備は出來ても、まだぐづぐづと僕はためらつて居た。所詮人間と云ふ奴は、一文でも餘裕があるからは、贅澤な選り好みをするものらしい。いよいよ餓死をする前には、王侯と云へど、ためらはずに乞食袋をさげるだらう。

魔子からひよッこり手紙が來たのは、丁度そんな折だつた。彼女の手紙には彼等の生活については、一言も云ひ添へてはなかつたが、その代りこんなことがその一節に記されてあつた。

U・ちやんにいゝことを教へて上げませうか。お靴の底革がいつかちうの樣に剝

がれた時にはね。一番いゝのは錐で底から幾つも孔をあけてね。うすべりなんぞとめるあのブリキの頭のついた釘があるでせう。あれを底から通して中で曲げるのよ。十日ぐらゐためしてみてもまだ剝がれないのだから、丈夫よ。少しはそれは水は這入るけれど。――

僕はだまつて手紙を疊んでまた封筒へ入れると、よしよしとうなづいて、三十七錢の殘金の中から二十錢なにがしの宿泊料を拂ひに、覺悟をきめて會計へ出かけて行つたのだつた。

二

この計畫はしかし、いよいよかゝつてみると、存外單純に成功した。最初に僕がおづおづと扉を押したのは日本橋通のとある束髮止專門の問屋で、工場を自分で持つて、特許をとつたちよいと風變りな束髮止を賣出して、相當手廣く商賣をして居る店だつた。S・プリムラ商會と云つて、店には若い、いかにも大阪の商人風に滑らかに洗練された主人と、同い年ぐらゐの店員たちが五六人も居た。

僕のたどたどしい初心な外交が存外效を奏して、――とにかく簡單に交渉がまとまつて、僕は卽座に十圓の材料費を出させて、ヴェイル用の色絹だの、綠色の羅紗紙や留針、色テエプ、糊などと云ふ樣なものを近所の店々から買集めた。

一間と三尺のが一つ、三尺と三尺のが一つ、都合二つで手間が八圓と云ふ約束だつた。設計は最初に、淡紅色のヴェイル絹で圓柱を造り、一つ一つ電燈を入れて、羅紗紙を切拔いた蔦の葉をそれにからませる。それから、正面へ楕圓形に刳拔いた綠色の羅紗紙を張つて、その窓の縁を桃色の絹で、小さく絞り絞り縁取つて、中心にあたる空間へ背景畫を一枚斜に引ッ懸ける。――

仕事は正午一寸前にはじまつて、暮れがた灯ともし頃までに出來上がつた。午には店の主人が親子丼をとつて、御馳走をしてくれた。漬物皿をちよいと蓋の緣尻へ載つけた丼を、店のあがりがまちへ置いて、丈の高い湯呑と番茶の土瓶とを添へて、

「おあがり。」

と彼に云はれた時、僕はいはれのない一種の屈辱を感じた。――一つは抑揚のないこの邊の習慣的な語調にもよつたのだが、そんな風にして他人に御馳走されると云ふ、その事實にもよつて居たらしい。要するに、母の祕藏ッ子で育つた僕のうちには、多分にさう云つたものがまだ殘つて居たのだ。

出來榮えが設計よりも見事だつたので、主人は甚だ好機嫌だつた。たゞ、淡紅色のヴェイル絹の圓柱が、飾窓の正面にキラキラと氷柱の樣に電燈に輝いて並んで居るのを見ると、僕自身もひそかにさう考へた樣に、

「大分夏向きだすな。」

と、彼は批評をした。しかし、――それとて少しも非難の意味ではないので、もつと自然に輕るく出た感想だつた。八圓の金を、――五圓紙幣を一枚と五十錢銀貨を六枚とで貰つた時、僕は、

「一月や一月半は、このまゝ置いても差支へありません。」

と、自信ありげな口調で云つて、背景畫を中途で一遍換へたいが、いゝのが出來たら持つて來てお眼にかけるからと、簡單な約束をした。

さうして、

「またどうぞ。」

と、子供らしいお辭儀をして、すつかり最早暗くなつて電車が蒼い火花を散らして行き交う

て居る其へ潜出して、突然何の意味やら跳ね上がつて、首をすくめて、舌を出したものだつた。

さうして、

「うめえぞ！」

と、赤く濁つた其の空を仰いで、ありツたけの大きな聲を、喉から絞つたのだつた。

小ブルジョワはその夜、心斎橋通のとある安洋食屋へ跳び込んで、自動ピアノがコロンコロンと壁に反響して居る賑やかな客間で、久し振りでナイフとフォークとを安洋皿の上に軋ませたのだつた。

かうした幸運に惠まれて、行詰まつた經濟に新生面が開けて、——實際飾窓の仕事は段々手を擴げてみると、僕にとつては殆ど確實に安定な收入になつたのだつた。——さうして、物質上に大した屈託のない身分になると、ひどくそれとは不釣合な内生活が自然と眼立つて來た。一口に云へば、僕は自分の生活の一面に、一種云ひ難い空虚と索寞さとを感じはじめたのだ。

仕事は續けて毎日あつたが、そんな風で働くのは晝間だけなので、夜はあてもなく街をうろついたり、——映畫を見たり、芝居小屋へ這入つたり、ものを喰べたりなどして時間を消して、それから宿へ歸つて（宿は戎橋のちよいとした裏手に、一泊一圓五十錢の比較的感じのいゝ旅館を見つけて、そこに滯在して居た。）さうして、敷布の新らしいさツぱりした寢床へもぐり込んで、一人で寢る。さうした生活がいつとなく規則の樣に固定してしまつて居た。

かうした安易な生活は、しかし、みかけほど明るく樂しいものではなかつた。どうして！　むしろ反對に頗る無刺戟な乾いた索寞たるものだつた！　僕は時々思ひ出しては東京の魔子のところへ、五圓紙幣を手紙へ封じ込んでやつたり、新刊の童話の本を買つて送つてやつたりなどした。僕は僕の送つてやつたそれらの本を、曾我が促し立てて早く彼女に讀ませては、早速それを神田の古本屋へ持つて行つて叩き賣つて居たなどと云ふ、彼等の生活のその頃の困窮を、想像だにしなかつたのだ。

そのうち思ひがけない關係から、僕は一種の美術家氣質と云つたものに風變りな好意と同情とを持つて居る、若いある富豪の商人と知合ひになつた。その動機はこれも日本橋通のとある貴金屬交換所——指輪だの時計だの眼鏡だのと云ふ樣な、裝身具類の交換を素人間に媒ちする商賣だ。——へ飾窓の外交に行つて、その恐ろしくもの識り振りをひけらかす店の主人に、裸體畫の複寫を依賴されたのだ。古い外國雜誌の口繪で、それを適當に彩色して複寫してくれと云ふ注文なのだ。——僕の友人に春畫を專門に畫折帖を描いたりしてなかなか贅澤な生活をして居る男が一人居るが、さすがに貴金屬商の趣味ある主人は、多少不足らしい氣配は見せないでもなかつたが、ともかく原畫通りの裸女の半身像で滿足した。僕は三十圓のカンヴァスへ畫料六十圓の約束で久し振りで繪筆をとることにした。——

僕が其の呼びきりな好條件を持つた若い保護者にめぐり合つたのは、その商賣が嫌ちになつてだつた。僕はこの貴金屬商の趣味ある主人の紹介で、船場に御殿の樣な邸を構へた「菱形ソオス」本舗の主人と識り合つて、彼の保護のもとに當分生活の屈託なしに、繪筆をとることになつたのだ。

僕が箕面に近い櫻が丘の文化住宅地に、手頃な一軒、——それは彼の持ち別莊で、その時分別に住み手もなく門を閉ざされたまゝで居たのだ。——を彼にあてがはれて、僕にも畫にも縁のない豪奢な一戸建の主人になつたのは、それから間もなくだつた。僕は「菱形ソオス」の新らしいレッテルの意匠を出したり、道頓堀の芝居

小屋へ贈ると云ふ緞帳の圖案を頼まれたり、あらゆる新聞や雜誌へ出す店の廣告文やカットを一手に引受けたりなどして、月に約百圓ほどの生活費を支給されながら、浴陽室だの濡縁だの涼臺などのついた贅澤な住まひで、自炊をはじめた。

僕は二階の浴陽室をアトリエにしてそこへ三つも書架を立てて、色んな高價な骨董類を船場の家から借りて來ては、靜物の寫生をやつたり、さもなければ、いよいよ春たけなはになつたこの景勝地を、繪具箱を肩に飽くことなく歩き廻つたりなどした。

――櫻が丘の遊園地では、そこらに群れて居る子供たちがモデルになつた。寶塚へ出て居る劇作家の坪内氏の邸も、後ろの松林を通してその青瓦が畫布へ移された。N・子夫人の妹だと云ふ、可愛い色の黒い女の子がモデル臺の雛の様に神妙に僕の書架の前に立つたのもその頃だつた。

時々僕は大阪へ出ては中島氏、――『菱形ソオス』本舗の主人公だ。――を訪ねて、新らしい店の仕事の註文を受けたり、彼に連れられて、貧乏暮しの過去には經驗もなかつた、狹斜の巷へ出入したりした。夜は夜で隔日ぐらゐに入浴がてら電車で寶塚まで出かけたり、大阪の道頓堀や心齋橋あたりの夜の雜鬧を泳ぎ廻つたり、落成したばかりのS・座の特等席へブルジョワ然と納まつたりなどした。

出來上がつた繪は、一つ一つ中島氏の許へ持つて行つて、船場の邸の二階の客間へ並べてかけた。一つ出來ると中島氏は樂しげに自分で額縁屋へ出かけて行つて、好みの額縁をそのために求めて來ては、客間の繪の一つ一つ增えるのを樂しげに待つた。

箕面には輝かしい初夏が訪れて居た。小松林などに點綴された山の明るい斜面には、處々と花畑や果樹園が續いて、漸く夏ばんだ陽射しの下でキラキラとかげろふを燃やして居た。林では春蟬が一日啞れた聲を立てて のどかに霞を誘ひ、夜は河鹿がコロコロと溪流のさゝやきに聲を和した。

天王寺公園に化學工業博覽會が開かれて、「菱形ソオス」の本舗でも陳列窓を一つ出品すると云ふので、中島氏から依頼されてその設計にかゝつたのは、丁度その頃だつた。裝飾會社で三百圓ほどで引受けると云ふのを、同じ費用の範圍で僕に受負はせようといふのが、中島氏の好意ある腹だつた。僕は繪具箱に蓋をしたまゝ、朝夕大阪へ通つては、會場のきまつた區劃で大工の指圖をしたり、電氣屋と相談をしたり經師屋の手傳ひをしたりなどして働いた。

さうして、そんな仕事に沒頭して何もかも忘れきつて居る時、だしぬけに僕は、僕と同じ目的をもつて下阪して來た曾我と、街頭でめぐり合つたのだつた。

三

會期も最早二三日に迫つたある日のことだつた。裝飾材料を求めに會場を出て、戻りに公園の入口に近いとある氷店へ寄つてミルクシエークをつくらせて居ると、だし拔けに僕の耳元で、

「素氷!」

と、東京風に呶鳴つた者があるので、何かしらはツとして振向くと、まともに僕は彼と顏を合はせて、「おう!」と、思はず聲をかけ合つたのだつた。

――曾我は四月前に別れた時からは、恐ろしく眼立つて窶れて居た。血色も悪く、頬もこけて、どこか放浪者らしく險相に眼を光らせて居た。僕は彼のところどころ汗じんだ脂光りのする例のルパシュカ姿を見た瞬間、一見して

彼のその時の窮境を見て取つた。（彼の言葉によると、彼はその意味で全く反對の感じを、その瞬間に僕から受取つたさうだ。）

「びッくりさせるぜ。……何だい。いつやつて來たんだい。」

僕は彼のためにもミルクシエークを一つ註文すると、改めて彼と相對してさう訊いた。さうして、彼の凄じい放浪振りを、もう一度頭のてッぺんから足の先まで見た。

「なアに。出て來たのはもう暫く前なんだがね。」

と、彼はさもしい眼をしてコップを傾けて居る僕の口元を見ながら、コクリと唾を呑込んで云つた。

「魔子ちやんは？」

「あいつアはじめは、あッちへ置いて來たんだつたがね。」

「何だい。ぢやア來てるのか。」

僕は一層びッくりして彼の顏を見た。――さう云はれて氣が付くと、なるほど僕は半月の上も、彼等と音信を缺かして居るのだ。

「やもう、さんざんしけを喰つちやつてねえ。」

と、彼はミルクシエークのコップを受取ると、ほッとしたと云ふ風に、舌を鳴らしてそれをすゝりながら、やつと少しづつくつろいで云つた。

彼の語るところによると、彼等のその後の消息と云ふのは、ざつとこんな風だつたのだ。――月のはじめに彼等は駿河臺の世帶を疊んで、魔子は芝のとある娘たちばかりの自炊下宿へ「はふり込んで」、彼は單身飄然と大阪へやつて來た。さうして、色々と職業を探し廻つたあげく、純粹な勞働者に身をおとして、安治川の堤防工事の土方になつてトロ押しをやつたが、とても激しい勞働に堪へられない。たつた二日でよして、さんざんくたびれて、暫く木賃宿泊りをしてからだを休めて、それから勸業債券の立看板くばりだの、ケエプルの埋設工事だの、しまひにはサンドヰッチマンまでやつた。それらは木賃宿のすぐ近所にある、市營の職業紹介所に厄介をかけたのだが、生憎梅雨どきで雨勝ちなものだから、仕事はあぶれ通し、宿料は同宿の見識らぬ誰彼に融通して貰つたりなどして、ともかくその日その日をしのいで居た。つい最近、――この二三日は、ミシンの外交員募集に應じてそれを志願して、ともかく三度の飯だけはそこで喰べて、そこらを歩き廻つて居たが、何しろこいつは、今までの仕事よりも一層始末が惡い。識つた人でもあつて、そこから傳でも求めて行けばともかく、どこへ行つてもまるッきり相手にはならない。給料は固定給なしの歩合で、うまく賣れ口がありさへすれば割はいゝ筈なのだが、何しろ話にもなんにもならない。今日はまた仕事換へをして、一つ氷室の人夫にでもならうと、一寸そんな募集があつたのをこの近所で以前に見た覺えがあるので、今朝は外交員の方はやめて、朝宿を出るとその足でこッちへやつて來て、この邊をさつきからうろついて居るのだと云つた。

さう語り終へてから彼は、からのコップをそこへ置いて、よごれた袖で額を拭いて、

「おい。もう一杯おごらねえか。」

と、僕の脣を見た。

僕は女にもう一つ代りを註文して、

「それで魔子ちやんはどうしたんだ。」

と、彼に訊いてみた。

「一昨日、……一昨々日か。あいつ斷りなしに一人で東京を飛出して來やがつてな。さんざんそこらをうろつき廻つたあげくやッと俺を見つけてな。……こッちがそんな始末で送金も出來ないで居たもんだから、宿にも居にくくなつたんだな。どうして旅費なんぞ都合をしたのか、

ひよツこりやつて來やがつてね。」
「無責任な話だな。」
「何しろ今云つた樣な始末だらう。……どうにもあいつが足手まとひでな。女の子だしうツちやらかして置くわけにも行かず、と云つて、一人口が殖えると正直な話俺にア打撃だな。俺一人でも毎晩三十錢づつ宿料が嵩むところへ持つて來て、あいつに轉がり込まれると二人前だ。……六圓ばかり宿料が重なつちやつてな。そこで態のいゝあいつア人質さ。……外へも出されねえで宿にゴロゴロして居る。」
　さう云つて、空虚な笑ひかたをして、
「あいつのこツたから、平氣にア平氣だが。……尤も、俺のことを見ッけた時にア、野郎さすがに泣きアがつたつけ。……何しっひどい木賃宿で、變てこな男どもが二三十人も、ゴロゴロしてる中へ置いとかれるもんだから不安も不安でな。莫迦ないたづらをしやがる奴が居るんで、夜なんざおれが抱いて寢てやつてる始末だ。」
「そんなところへうツちやらかしてあるんか。」
「うツちやらかしてあるつてえわけでもねえが、まアさう云つたわけさ。」
　と、彼は口をつけたコップを下へ置いて、
「他に仕樣もねえからな。」
　と、乾いた眼をしてつぶやいて、
「大分しかし、君の方は景氣がよささうぢやねえか。」
　と、彼らしい率直な眼で僕を見た。
「うん。……僕の方はどうやら都合よく運んぢやア居る。君たちの一人二人轉げ込んで來るなア歡迎なくらゐだ。しかし、……何とか一言ぐらゐ云つてよこしたらいゝぢやないか。僕の居どころがわからなかつたわけでもあるまいし。」
「うん。」
　と、曾我はのんきな笑ひかたをして、
「いよいよ喰へなくなつたら、轉げ込んで行くつもりぢやア居たんだがね。なアに、うろうろしてたら、そこらでぶッつからねえ限りもあるめえと、さうたかアくゝつて居たせゐもあるのさ。……今日みたいな工合にな。」
「のんきな奴だな。」
　と、僕は呆れ果てて笑つた。
「とにかく、ぢやアかうしよう。……僕は今この中の博覽會の會場で働いて居るんだ。……一寸買物に今出かけたんだが、君はひとまづ宿へ戻つて、魔子ちゃんを連れて來給へ。……幾らだつて？　宿の借は。」
「六圓と一寸だ。」
「ぢやア僕の財布で十分間に合ふ。……足りなきア幾らでも都合はつけるがね。……さうして、とにかくまたこゝへやつて來給へ。この中の博覽會の會場で、「菱形ソオス」の陳列所だと云へばすぐにわかる。僕は、今日一時頃までに仕事をしまふから、それから一緒に箕面へ行かう。……僕のブルジョワジイの生活を見せてやるよ。」
　さう云つて、彼に十圓紙幣を一枚渡した。
「剛氣なものを持つてアがるな。……」
　と、曾我は新らしい紙幣を、危險なものでも持つ樣に指で吊るして云つた。
「欲しかアもつとあるぜ。……尤も、こいつア僕の金ぢやアないが。」
　さうして、
「それで十分だね。」
「十分だ。」
　と、曾我は勇み立つて云つた。
「なアに。正直を云ふと、あいつも僕も今朝は飯抜きなんさ。僕は歸りの電車賃だけ握つてやつて來たんだが、たまらなく喉が乾きアがつてね。……それに、一つは木賃の人夫を奮發してみようつて氣もあつたもんだから。……奇遇だつたな、しかし。」

一寸選どころぢやアねえ。可哀さうに、……人質だつて胃袋はあるんだぜ。」

「一言なしだ。」

と、曾我は緣臺から立上がつて、苦笑した。

彼等と別れたあとで、僕は會場の方へ引ッ返しながら、なぜか晴れ晴れしい氣持で何遍も陽を仰いだ。僕の生活の最近を襲つて居た色んな不滿、――空虚さ、索寞さ、淋しさ、さう云ふ樣なものが、彼等との邂逅ですつかり癒された樣な氣がしたからだ。彼等を箕面の家へ引取つて三人で世帶を持たう。曾我には何か獨立した仕事を見つけてやり、廣子はもしかしたらこッちへ轉校させて、女學校もこッちでやらせよう。――中島氏も僕たちの計畫には、恐らく好意を持つてくれるに違ひない。

（一つ箕面のブルジョワジイの生活でも見せて、あいつらを驚かせてやるかな。）

僕は一人で心を浮き立たせながら、摩天閣の下を拔けて、仕事場へ戻つて來た。――羅紗紙の卷束だの、錻モオルだの、セルロイドの色板などを一荷物かゝへて。――

四

僕は尤も、今度の仕事にだけは散々に手を燒いてしまつて居た。その理由は、振割られた位置が、階段の鍵形に曲つた腹に抱かれて居るので、天井からも側面からも見られると云ふ、極めて不利な條件を持たされたことに閉口した。ほゞ外郭を造り上げてみると、正面や側面からの體裁はともかく、階段の昇り降りに眞下へ見おろされる工合が、まるで香具師の張店か何ぞの樣で、どうにもいゝ圖ではない。

會期は非常に切迫して居るので、今更模樣變へをして造り直すなどと云ふゆとりは無論ない。どうしても原設計のまゝ仕事を進めて、一方にその不體裁を覆ふ適當な手段を講じるほかはない。

僕は自分の職人たちに仕事の指圖をしたり、自分で色々と手を下したりなどしながら、暇さへあれば階段へ上がつて、四角い中繼段の手摺のきはから見おろしては、天井の裝飾について思案を凝らした。材料費は最初の豫算の百八十圓のうち、大部分をもう使ひきつて居た。あと多少でもそれを嵩ませる以上、それは手間の方へ影響するので、僕としては自腹を切るも同然なのだ。大工や經師屋などへの手間を拂つた殘りの五十圓を僕は自分の收入に見積もつて居たので、まるまる七日間の勞銀を多少でも材料費に喰込まれるのは、僕には苦痛だつたのだ。

（弱つたな！）

僕は中段の手摺のきはへ暇さへあれば立つて、すつかりしよげて、さうつぶやいたものだつた。今は手間や何かの問題ではなかつた。五十圓の殘金でこの不始末を覆へるかどうかが、何よりも問題だつた。

かうして、思案に思案を重ねたあげく、やつと思ひついたのは、天井をも思ひきつて廣告の一部に使はうと云ふ計畫だつた。さんざんに頭を惱ました部分だから、それだけの效果はどうにでも擧げなければ――さう云ふ思想が、[illegible]れて僕の頭に鬱積して來た。――僕は錺屋に頼んで大體骨組を造らせて、張子で大きな菱形ソオスの黑帽子の[illegible]をこしらへて、屋根へ載つけようと計畫した。――あとは天井の全面へ水色絹を襞打たせて波を現はし、瓶の腹を中心に放射狀に銀モオルを張つて、大體の構圖を[illegible]する。――

僕はこれだけの自分の計畫のために、自分の手間賃の五十圓を全部さくことにした。さうして、新たに錺屋と經師屋とに仕事の交涉をした。

そんなわけで、結局七日間の僕の仕事は、全く無報酬で終ることになつたのだつたが、何しろ一方ならず頭を惱まして居た問題が解けたので、どうやら胃袋のとゞこほりがふぐれたと云ふ風で、久し振りで身も心も輕々として居たのだつた。

曾我と街頭でめぐり合つたのは、あたかもさう云ふ時だつたのだ。

僕は曾我と別れて會場へ戻ると、その足で内庭の仕事場へ行つて、籠屋の仕事の進行の模樣を見た。瓶はあらかた出來かけて居た。肩から上のところがまだ殘つて居たが、大丈夫夜までには間に合はせると、いゝくつわ蟲の樣な顔をした年寄の籠屋が受合つた。

曾我たちがやつて來たのは二時頃だつた。古い壞れたあけびのバスケツトと、蝙蝠傘を一本さげたルバシユカ姿の曾我と、薄よごれて皺苦茶になつた水兵服をつけた魔子とが、驅落者とでもいつたなりで、仕事場へやつて來た。僕は小さな虹形の下へもぐり込んでモオルを縫ひつけて居たのをよして、外へ彼等を出迎へた。

「これかい。」

と、曾我はバスケツトを地面へおろすと、頭から垂れる汗を袖で拭きながら、僕の仕事を見て云つた。

「どうした、魔子ちやん。」

と、僕がなつッこく彼女の前に立つと、一寸彼女ははにかんで、——笑つて、

「よく兄さんと會へたわね。」

と、云つた。

「全くだよ。……何だか、まだ僕には信じられないくらゐだ。」

「存外けちな、ちつぽけなもんぢやアないか。」

と、曾我は僕たちの氣持には一切無關心に、僕の仕事に大ざッぱな批評をくだした。

「あたり前さ。……七日働いて手間なしつてえ仕事なんだ。」

「何?」

と、彼は不思議さうな顔をして僕を見た。

「そんな話はまアいゝや。……ところで、君たちは飯はすまして來たんだな。」

「うん。……久し振りで大盤振舞をしてやつた。近來ひもじい思ひをさせ續けだつたからなア。こいつも一ン日二食のところへもつて來て、一食は十錢の大福で間に合はせてるつてえ始末だ。……や、どうも。このところ兄貴顔色なしさ。」

さう云つて、彼は魔子と顔を合はせて、から笑つた。

「呆れた奴等だな。」

僕は妙な、——一種うづく樣な愛情を彼等に感じながら、——一緒に聲高く笑つた。さうして一寸胸算用をしてみてから、

「ぢやかうしよう。……どうせ、僕は今夜と明日の晩とは、仕事で徹夜をしなきアならないんだ。今一寸籠屋に仕事をさせて居るんだかね。そいつが出來上がるまでは、夕方までずつと暇だ。どうだい。箕面の僕の家へひとまづ落ちつかうぢやないか。」

さう云つて、魔子を見た。

「まだそんなにかゝるのかい?」

「ちよいと模樣換へをすることになつたもんだからね。……いや、すつかり、この仕事ちやア手こずつちやつてね。」

「どうだい。俺たちも手傳はうぢやないか。」

と、彼は僕の言葉をろくろく耳へも入れずに、勝手なことを云ひ出した。

「無報酬な仕事をかい?」

「無報酬だつて何だつて、……」

と云ひかけて、彼はまたさつきの樣な顔をして僕を見て、口をつぐんだ。

「まアいゝや。そッちの話はまた改めてだ。

……とにかく一應箕面へ行かう。萬事それからの相談だ。たア魔子ちやん。」
「箕面ツて遠いの？」
と、彼女は西洋の乞食の様ななりで、あどけなく僕を仰いだ。
「そんなでもない。……」
さう云ひかけて、一寸考へて、
「君はともかく、魔子ちやんはこのなりぢやア仕様がない。どこかそこいらで、いくらもしやしないや、そんな水兵服なんぞ。出來合ひを一つ買つて、着換へさして行かうぢやないか。よごれたのはまるめて、ついでにそこらの洗濯屋へでもあづけて置きアいゝ。……そのくらゐの持合はせは、こゝにあるから。」
――梅田まで行く途中、とある洋物店へ僕たちは寄つて、彼女のために安ものの夏服を物色した。さうして、八圓なにがしで帽子から靴下までとゝのへて、そこですぐに彼女にそれを着換へさせて、よごれた方のをその店から、懇意だと云ふ近所の洗濯屋へ廻させることにした。
「家へ歸つて一休みしたら、すぐに寶塚へ行つて溫泉に浸かつて、木賃宿の垢アよ洗ひ落として來るんだ。……魔子ちやん。歌劇も見られるぜ。」
「豪奢なこと云やアがるな。」
と、曾我がわきからひやかした。
「どうして！……まア來て見給へ。赤瓦だぜ、……涼亭もありア濡縁もある。二階の僕の仕事場は硝子張りの浴陽室で、下には瀬戸の西洋風呂もある。行つたらみんなで、灌水浴でもやるんだ。……」
さう云つて、彼等を停留所へ導いた。
石橋の停留所からは丁度時刻で、大分女學校の生徒たちが乘込んだ。それらが明るく華やかに、座席の一部を占領した。
「變な言葉ね。」
と、魔子はいづれも身なりは自分よりも派手な、それらの娘たちを盜み見しながら、小さく蔭口を叩いた。
「魔子ちやん、どうだ。こつちで來年は女學校へ這入らないか。……こゝの女學校だつていゝだらう？」
彼女は娘たちの方から眼を戻して、一寸はにかましく微笑んで、なぜか忙がしく首を振つた。

五

櫻が丘の僕の住まひは、腹で樂しくさう想像した様に、すつかり曾我たち兄妹を驚かしてしまつた。門口までだまつて彼等を引ッ張つて來て、蔓薔薇のからんだ白い格子垣のところから、だしぬけに、
「こゝだ。」
と、硝子屋根のテラスを正面へ向けた漆喰の壁を示すと、びツくりして足をとめた魔子の後ろから、曾我が、
「へえ！」
と、奇聲を發した。
「がらにもねえとこへ住まつてアがるな。」
僕は彼等を廣間をはじめ、居間、書齋、寢室、食堂、臺所、浴室、浴陽室と云ふ風に、一々階段の上下へ引ッ張り廻して案内をしてから、濡縁を拔けて、睡蓮の鉢を幾つも並べた前の芝生へおりて、最後にそこの眺望の自慢をした。
「獨りでこゝにいらしつたの？」
と、魔子は居間とも書齋ともつかず僕が住み荒した、一番裝飾のこんだ廣間へまた引ッ返して、一應椅子に落着いてから、――彈條の工合の快い腕椅子へ、もの珍らしげにからだを埋めて云つた。
「うん。……まだ奧さんを貰はないからね。」
僕は中島氏がせんだつて置いて行つたスパア

クレットサイフォンから、三つのコップへ順々にソオダ水を注ぎながら、愉快に笑つた。
「尤も、影法師を加へりア今でも二人さ。」
「ふむ。……」
幾らかづつ素直に感心をはじめた曾我が、木に竹をついだ樣な調子で、何やら獨り合點をして、
「難はねえな、このくれえなら。」
と、僕の主張に贊成をした。
僕たちは三人がかりで、まづ寢室の整理からはじめた。寢臺は兩側の壁に折疊み式のが二つ備へてあるきりのでな、それを二つ窓のきはへくッつけて、壇の手摺を片側づつはづして、間の四角をなくす樣に毛布を二枚重ね、その上を敷布で覆うた。さうして、そこへ三人で適宜に轉がることにした。(現在まで續いて居る僕たちの雜魚寢は、その頃からはじまつたものなのだ。)
炊事の道具はひととほり臺所に揃つて居た。それだけで、僕たちの生活には十分に足りるのだ。
——それがすむと僕たちはめいめい持部屋を一つづつ分け合ふことにして、僕が二階の浴陽室と、それに[illegible]つた何だか使ひみちのわからない天井の低い小部屋とをとり、下の書齋を曾我に、居間を魔子に と、それぞれ振りあてた。さうして、涼臺のついた廣間は娯樂室と名付けて、ふだんはみんなでそこにごろごろして居ることにした。
それだけきまると、僕たちは簡單に身支度をして、——曾我には僕の浴衣を着せて、すぐに電車で入浴に寶塚へ出かけた。さうして、蒸風呂の中へ三人で裸の膝小僧を並べたり、大理石の家族浴室で代る代る背中の流しッこをしたりなどして、それから、開演中の歌劇を二幕ほど見て、水の乏しい河原に臨んだ食堂で夕御飯を喰べて、夜になつて[illegible]へ戻つた。
歸りに、——電車の中ではじめて僕は、今度の仕事の失策について、曾我に打開けた。天井の工合の不手際がどうにも始末がつかなくなつて、さんざんに頭を惱ましたこと、位置が甚しく不利だつたので、設計に手落があつたわけではないこと、張子の瓦を屋根に載せることにやつとけりがついて、今日ちうにその骨組が出來るので、今夜は經師屋の指圖をしてそいつへ黒繻子を模した壁紙を貼る豫定であること、かうした模樣換への結果すつかり經費倒れになつて、自分にとつては全く手間なしの仕事になつてしまつたこと、などを。
だまつてきいて居た曾我は、停留所から家へ戻る途中、不意に坂の中途へ立停まつて、
「どうしても經師屋の手へかけなきア、出來ないのか?」
と、口を挾んだ。
「そんなこともないけれども、會期も迫つて居るし、手ッ取り早くあいつらにまかせてしまつた方が、肩が輕いや。」
と、僕は自棄的に云つた。——僕に一文も手間が殘らなかつたことがわかれば、中島氏もまるではふつては置かないだらう。——そんな腹も、もともと僕にはあつた。
「どうだい。……ちやア一つおいらの手でそいつをやつちまはうぢやないか。その壁紙貼りをさ。」
「そりアね。……」
と、僕はまだ曖昧な態度で云つた。
「……やつてやれないこたアない。……十圓ぐらゐはさうすりア救助出來るがね。」
そんなわけで、——結局曾我の主張が通つて、僕たちは家へ戻ると早速手筈をきめて、その支度をした。さうして、今夜は三人で徹宵作業をするつもりで、ちやんと戸閉りをして、連れだつて家を出て、それから大阪へ引ッ返して、

天王寺の會場へ驅けつけた。
會場はとうに出來上がつて、僕たちの仕事場に區劃してあつた。會期に迫つて居るので、深夜にもかゝはらず會場には煌々と電燈がともつて、そこにもこゝにも忙がしく人が動いて居た。
僕たちは會場で膠を煮たり、紙を切つたり、染料を溶いたりなどして、すつかり準備をとゝのへてから、[illegible]を新聞紙の上へ轉がして置いて、はしから紙を貼つて行つた。さうして、三時間ほど殆ど息もつかずに働いて、たちまち丈の二間もある大きな張子の[illegible]オスの瓶を、貼上げてしまつた。仕事の最中に經師屋のおやぢが忙がしげに刷毛をさげて、糊だらけになつてやつて來たが、呆れた顔で僕たちの仕事を眺めて、さうして、さつさとまた行つてしまつた。
深夜の境を越してあけ方ちかくなると、さすがに廣い會場にも、そこに一人こゝに二人と云ふ風に、人影がまばらになつて、僅かにそこらは薄ら寒くからりとしてしまつた。——すれ合ふ者はみんな見識らないながらになつツこく挨拶をし合つた。僕たちは糊だらけになつた床のコンクリートへ新聞紙を敷き散らして、そこへ腰をおろして車座になつて、夜食のかはりに餡パンを齧つて、缺けたたつた一つの茶碗で、フウフウ吹きながら白湯を呑んだ。
「どうして！　なかなかな手際だ。」
と、曾我は離れたところから瓶を眺めて、批評したりした。あとは一間四方ほどのレッテルを描いてそれへ貼つて、屋根へ載せて、モォルを四方へ釣ればそれでいゝのだ。——
さて、こんな工合で夜が明けた。
——博覽會は豫定の樣に、その翌々日に蓋を開けた。僕たちは開場式に招かれて、御臨席になる筈だつたが、中島氏から別に慰勞費として五十圓ほど貰つたので、そッちは失敬して、三人で有馬の溫泉へ出かけて、三日ほどのんきに遊んで來た。
數日して、——僕は曾我たち兄妹を大阪へ伴なつて、中島氏に引合はせて、曾我を工場の會計で働かして貰ふことにした。曾我は不思議な男で、時間の束縛に對しては不平を云はないので、月六十圓ほどの給料で會計部の簿記係に甘んじた。僕は僕で、前の樣に浴陽室へ畫架を据ゑて繪筆をとつたり、廣告の圖案を考へたりなどしながら、かたはら中島氏の紹介で、ぼつぼつ大阪の名士たちの莊重な（！）肖像畫をかいたりなどした。魔子が僕の畫室のモデル臺に立つて、裸にされたりなどしたのも、その頃からだつた。
八月の末に僕たちの間には、中島氏の主唱で、魔子を[illegible]の小學校へ轉校させようと云ふもくろみが[illegible]された。魔子はひどく中島氏に好意を持たれて、特別な寵愛を受けて居た。どうやら彼女は三人分の幸福を一人で背負つたと云ふ風に見えた。
僕たちの[illegible]での生活の[illegible]時代には、しかしこの時分を中心にほゞ一年續いたのだつた。——いゝ生活の地盤が出來て、永久的にそこへ根を張れると思つて居た僕たちの豫想は、存外なところから罅が入つて、この生活を一時僕たちは打切るの餘儀なきに立到つたのだ。それは、中島氏の一身上にちよいと僕たちに容易ならぬ出來事が起きたからで、僕たちはこの寛容な保護者を、再び運命の手で奪はれなければならなくなつたのだつた。
僕たちが貧窮の生活を打切つて、曾我の[illegible]で、震災直後の騷然たる東京へ、再び引ッ返さうと計畫したのは、翌年の五月だつた。中島氏は、——愛すべきこの『船場のぼんち』は、その時病身の妻子を棄てて、戀仲だつた南地のある名妓と姿をくらまして、世間には自殺說を傳へ

られて居たのだつた。
僕たちの『駒形の生活』は、實にかうした過去によつて孕まれたものなのだ！

第四篇

一

僕たちの展覽會は、附景氣をして騷いだほどには、華々しい結果も收めなかつたが、とにかく、最初の經驗としては成功したと云へた。――十七點出品のうち六點、價格にして二百十一圓にだゞ賣れたのが、僕たちの懐ろへの直接の影響だつたが、この展覽會が動機で、僕の存在が淺らかでも畫壇の一隅に認められかけたのは、爭はれない事實だつた。とりわけ、僕が眼を通しただけでも、三四の新聞の美術欄に、相當權威ある美術批評家の筆で、存外溫かい批評を寄せられたのなどは、僕にはむしろ思ひがけない儲けものだつた。

――僕たちが展覽會を鎖ざして、殘りの繪の始末をして、店をもとの樣に片付けたのは、八月の中旬だつた。審美堂と石原さんへは、五十圓ほどの謝禮を申し出たのだが、受けないので、繪を一枚贈つて、一晩を曾我と彼自身の案内で神樂坂へ招待した。

かうして、展覽會の始末が一區切りつくと、僕たちは前々からもくろんで居た避暑旅行の準備のために、二三日駒形のコンクリートの二階へ閉籠もつた。計畫と云ふのは、九月の中旬まで天幕を背負つて、どこか涼しい海邊へでも出かけようと云ふので、その基點として、大體沼津が選ばれて居たのだつた。これは箱根を越えないと旅へ出た樣な氣がしないと云ふ、曾我の主張に基づいたものなのだ。

天幕は軍隊天幕用の布地を買つて來て、曾我の設計のもとに手製にしたもので、五月頃からぼつぼつ支度にかゝつて、魔子が丹念に針をとつて居た。いよいよ出來上がつてみると、曾我の設計の手落ちか、魔子の縫ひ間違か、お互ひが責任のなすり合ひをして居るところをみると、どうやらその兩方らしいが、少し形が小さ過ぎて、三人ではどうみても窮屈げだつたが、また解いたりなどするのも厄介なので、それでともかく今年は間に合はせることにした。そのほか心掛けて準備をしたのは、大形なリュックサックを二つと、別に小さなのを一つ、十六燭光のしやれた[illegible]ランプ、そのまま火の中へ突ツ込んで湯を沸かせると云ふ獨逸製の軍隊用水筒、それから、曾我が自分で組立てた恐ろしい大がかりな雙眼鏡。

あとは、いよいよ出發を前に新調したもので、登山用のニュウムの組食器を三人分に炊事道具、浮袋を兼用させたゴムの空氣枕、防寒具として毛布を一枚、（これはすでにある二枚と合はせて、めいめいが一枚づつ持つことにしたのだ。）その他罐詰、菓子等。

衣類はふだんのものを一二着づつ持つて行くことにして、水着だけを新調した。旅裝は云ふまでもなく、三人とも洋服にきめた。

豫算は一人一日一圓以内で、二十日間の旅費その他の諸雜費を加へて百圓と云ふのが、曾我の手で計出された。

「やつて行けるなア、魔子。」

さう曾我が云ふと、彼女はちよいと豫算表を覗いただけで、

「一日一圓なら贅澤出來てよ。」

と、受合つた。――實際、贅澤どころか、僕たちはリュックサックの隅へ、小さなアイスクリームの製造器まで忍ばせたくらゐだつたのだ。

旅程はすでに述べた樣に、沼津が基點だつたが、移動の經路は三通りほど案を立てて、その

どれかを適宜に選ぶことにした。つまり、——一つは、沼津を中心に左右に海岸線に沿うて動くこと。一つは、富士の俗物へは決して登りたがらないと云ふことを堅く魔子と約束の上、裾野の湖水廻りに出ること。もう一つは、三島から箱根へ出て、蘆の湖を中心に箱根の山地を漂浪すること。——

それから、參謀本部の二十萬分の一の地圖で、旅程にざツと赤線と日數とを記入した。

荷は殘らず三つのリュックサックへ詰めて、三人でそれらの處理、——運搬は勿論、品物の出入れから中味の整理まで、めいめいが分擔し合つた。僕たちはまた、仕事の係りをも同じ様に分野をきめてめいめいに振り割つた。つまり、曾我は主として會計——豫算や決算や、その他旅程の調査や、さう云つたものを引受けること。魔子は天幕の整理に大體かゝること。僕は買ひものやその他、一般の人事交渉にあたること。

ところが、——いよいよ出かけると云ふ前の日から、魔子のところへ「赤いお客さま」が來てしまつた。いつも習慣的に、最初の一二日を不機嫌に暮らす彼女は、自分のぶんの小さなリュックサックを、厄介げに眺めただけで、

「困つたなア。」

と、哀訴をし出した。——ゴムの帶を脚の間へ嵌めさせられると、その間だけは學校へ通ふのも厭やがると云ふ風なので、この故障に彼女には強ひられないたちのものだつた。到頭それで、僕たちは旅程を先へ繰延べて、三四日出發を延期することにした。僕たちは蒸し蒸しするコンクリートの中で、すつかりその間退屈をしてしまつた。油を切つた石油焜爐へ、また石油を注ぎ直すと云ふ有様だつた。

「魔子。まだかい？」

と、曾我に催促されると、彼女は惱つた様な眼をして、

「先に行つたつてもいゝわよ。」

などとすねくれた。さうして、つまんないつまんないと繰返し僕たちの前でこぼして、やがて變にヒステリックに自分で機嫌をそこねてしまつた。彼女の言葉を借りると、——男に生まれた方がどんなによかつたかわからないので、生まれなかつたらもつとどんなによかつたかわからないと云ふのだ。

「一首途の血祭ッてえ奴だて。」

などと、曾我はくさくさした口振りで云つたりした。

五日目に、——詰まるところ四日延ばして、僕たちはすつかりまた元氣を恢復して、東京をたつた。

沼津には、千本濱附近のとある[illegible]屋の息子で、美術學校時代の友人が一人居るので、位置の選定や表向の交渉や何かは一切その友人を煩はす豫定だつたのだが、生憎其の親戚に凶事があつて、家をあけて居ると云ふので、殘らずそれが僕たちの方へかぶさつて來た。幸ひ、同じ目的のもとにすでに二組ほど、天幕生活の連中が土地へ來て居たので、簡單に交渉はすんで、僕たちは千本濱公園からやゝ左寄りの海濱へ、——そこの老松の疎林の中に、恰好な位置を與へられた。

先着の連中のだと云ふ天幕は、——二張だと聞いて來たのに三張、すでに樹間に閑雅な姿を見せて居た。

「秀逸！」

と、曾我は砂地へ荷をおろして、閑雅な周圍を見廻すと、ひとりごとを云つた。海は堤の様な細長い砂丘を越すとすぐそこなのだが、存外ぐるりは靜かで、かへつて波の音は、ずつと遠い左手の邊で不規則に騒いで居た。——暗礁か何ぞでもあるのだらう。

「何はともあれ、水へ浸からうぢやないか！」
さう、僕が額の粒汗をタウェルで拭きながら提議をすると、魔子は魔子で、
「お腹が空いちやつた！」
と、午御飯の方を先に主張した。
「ぢやアからしよう。」
と、豫定係りの曾我は、砂地へ置いた荷物をまた引ッ立てて、杖を引摺つて、
「とにかくそこらへ荷をおろして、裸にならうぢやないか。さうして、午飯の支度を擴げといて、腹が空つた奴ア、先にパンでも何でも噛る。海へ跳び込みたい奴ア海へ跳び込むと、めいめい勝手にやらかさうぢやないか。」
砂の堆積による小丘は丈の低い密な草叢にむら覆はれて、河原撫子が一面に輝かしい桃色を擴げて居た。
「……ぢやア兄さんは？」
と、魔子が一歩丘へのぼりかけて、からかひ顏に曾我を振向くと、
「俺か？」
と、曾我はリュックサックを砂地に引摺りながら、のんきな調子で反問して、——よいしよ！とそれを肩へかたげて、
「俺はおみやげをそこらへしいて來る。」
と云つて、ポケットから塵紙をつかみ出した。

二

海岸線は比較的單調だつた。傾斜した砂地の上に松原を長くつらねて、海は淺くまるくそれに抱かれて居る。左手には深く彎入した靜浦灣を距てて、伊豆の山々が正面近くまで、黄ばんだ藍色の山肌を見せて、腕をのばして居た。
ずつと右手の、——千本濱公園のとツつきにあたる邊には、よしず張りの小屋が幾つも組まれて、砂地か見えないほどに浴客が群らがつて居た。それが段々こツちへ來るにつれてまばらになつて、僕たちの前の邊はたゞ砂濱がからりと清潔に擴がつて、波に洗はれて居るだけだつた。明るい海を撫でて來る風が、潮の香を含んで爽快に丘へ吹き上げて草叢をそよがし、僕たちのからだをなぶつた。——季節から云ふと、そろそろ最早海岸の盛りどきも過ぎかけて居る時分だつたが、明るい陽射しの下に展開されたそこらの樣子には、微塵もそんな氣配は見えなかつた。
「涼しいなア！」
と、魔子は荷を河原撫子の花の中へおろすと、帽子をとつて、おかッぱをサラサラと後ろへなびかせながら、輝かしい歡聲をあげた。
僕たちはそこの草叢の一點へ、天幕布の床敷を一枚擴げて、その上でめいめいの荷を解いた。さうして、曾我が爽やかな顏をして荷をさげて、小松林の中から出て來るまでに、パンだのバタだのジャムだの、牛肉の罐詰などを、白いリンネルの食卓布の上へ擴げて、手早く食事の支度をした。
「どうだい。もう少しこいつを蔭へ引ッ張つちやア。……」
さういふ曾我の意見で、僕たちは色んなものを並べた布の食卓を、床敷ごとズルズルと松の蔭まで引摺つて行つた。さうして、めいめい海水著一枚になつて、冷いやりした砂地にあぐらをかいて、食卓布をかこんだ。僕たちはパンのきれへナイフでバタをなすつたり、罐詰の牛肉をフォークの先へ刺したり、薄くそいだハムのきれを風になぶらせたりしながら、莫迦話をして晴れ晴れしい高聲を立てたり、輝かしく海を抱いた明るい砂地を見おろしたり、そこらに點々と動いて居る浴客たちの樣子を、[illegible]た目振りで批評し合つたりなどした。と、——魔子のあぐらのかきかたは[illegible]たといふ意見が[illegible]からとたく出た。彼女は砂の上へ組んだ、自分の[illegible]

「へえ。……」
と、曾我がいさゝか氣を呑まれた形でつぶやいた。
「ありア變態だな。」
「さうだらうな。」
「なによ?」
「前の山がさ。」
ポンポンポンポンと發動機船が一艘、變な風に兩岸に反響を曳きながら、川をくだつて僕たちの前を過ぎた。
歸りには僕たちは、松原の中の冷え冷えした砂地をぬけた。さうして、濡れた水著のまゝ丘から荷をおろして、暫く松林の中を物色したあげく、他の三張の天幕の近みの、丘の傾斜の腹に位置を選んで、天幕を張る準備をした。
巨大な松の老樹が二株、地を匍ふ樣にして斜に梢をからませて居る。それへガッしりと綱をからげて、天井の一方を釣つた。砂地へ蟠屈した樹根がところどころに頭をもたげて居るので、いゝ工合に天幕の裾もそこへ張られた。さうして、愛らしいちんまりした天幕が忽ちに出來上がつた。
雨の折に水の流れ込むのを防ぐために、傾斜の上には溝を掘つた。曾我は天幕の中へもぐり込んで、彼の自慢の設計になる、これも雨の折に使ふ煙突の支柱を立てて居た。
僕は魔子と傾斜の腹の一點を卜して、汀から石塊を運びあげて、丹念に竈を築いた。他の天幕の人々の樣子を見に、丘傳ひにさりげなく近付いてみると、三張の中の二張は留守ででもあるのか、ひッそりと表が鎖ざされて、一張では學生風の若い男が二人、やはり僕たちの樣に傾斜へ石で築いた竈を挾んで、何やら笑ひ興じながら蒼い煙を松の梢へからませて居た。
「ユー・ちやアん!」
と、甲高い聲で丘の上から魔子が呼んだので、
「おうい!」
と返事をすると、二人ともびツくりした樣に顏をあげて、こツちを見た。さうして、どちらからとなく自然に、僕たちは會釋をし合つた。
「御免下さい。」
「やア。……」
と、二人は一緒に應じた。と、魔子が大きな石ころをヤッとこさと抱いて、こツちへおりて來て、ヨロヨロしてドサリとそれを地べたへ落つことしたので、みんなで一齊に噴飯した。
「天幕生活ですか、あなたがたも。」
一人が立上がつて、松の幹の間を透かしながら、なつッこく訊いたので、
「え、さうです。」
と、僕は微笑んで、
「ついそこへ今日來ました。どうぞよろしく。」
と、帽子を脱いだ。
――僕たちは飲料水の問題について一寸話をし合つて、それから、地面へ轉げた石塊を魔子と二人でひッ立てた。水は松林の中に散在する別莊には、どこにも吹抜きがあつて、絶えず冷たい清水を湧かして居るから、どこへ[illegible]して貰つてもいゝ。さう、こッちへ來る前に知人から注意されて居たのだが、その清水を彼等は、一寸こッちのはしのM。と云ふ[illegible]さんの別莊から毎日貰つて居ると云つた。
「御不自由なものでもおありでしたら、さうおつしやつて下さい。多少お役に立つかも知れませんから。……」
挨拶をして歸りがけに、さう男たちが後ろから厚意に充ちた注意をしてくれたので、それには魔子が、
「え、有難う。」
と、なつッこい微笑みで應へた。
「どうだい、この恰好は。」

天幕の中から出て来て、煙突の工合を眺めて居た曾我が、僕たちの顔を見ると、横ッ腹や背中から砂を落としながら云つた。――煙突の出来た天幕は、楓糖汁の空罐か何ぞの様にちんまりと可愛い。

「傑作！」

「ところで……」

と、曾我は続けた。

「床へ、莚を四五枚敷きたいんだがな。ぢかに床敷（僕たちは粗末な天幕布の床敷をさう呼んで居た。）を拡げる前に。……」

さう云ひかけて、

「へえ。竈かい。」

と、僕たちの共同の仕事を眺めながら笑つた。

僕は魔子の抱いて来た石塊を、ドーリと砂地へ転がして、簡単に隣りの天幕の人々と交歓を結んで来た旨を彼に告げた。

「不足のものはみんな書きとめといてくれ給へ。莚でも何でも。……さうさう。バケツが一ついるぜ、水を汲んで来る。」

「オウライ！」

また天幕の中へもぐり込んだ曾我が、中から応へた。

――僕たちの仕事は三時間ほどで大体すんだ。あとは莚を買つて来て床敷を拡げるだけで、ともかく簡単にめいめいの持ち荷の整理をすることにした。天幕は三人には少し窮屈げなのが難なだけで、存外工合よく落ちつけさうだつた。

三

暮れがた前に、僕は曾我から必要品の覚え書を受取つて、町へ買物に出た。さうして、莚を背負つたり箒をかついだり、中味の一杯な大バケツをさげたり、――何のことはない雑貨の行商人然とした恰好で、汗だくになつて戻つて来た。天幕の外では曾我と魔子とが、同じぐらゐの大きさのお尻を並べて、竈へ松の枯枝を燻べて居た。

「やれやれ。」

と、僕は大荷物をおろすと、すぐに裸になつて、松の太根へ腰をおろして、買物の整理にかかつた。莚、箒、バケツ、亜鉛の洗ひ桶、マッチ、たわし、――それから小麦粉、コンデンスミルク、ソオス、はな鰹、味の素、胡椒、等、等、等。――

頭の上では絶間なく松風が響いて、夕陽が薄[illegible]く松の梢を染めて居た。思ひがけないことだつたが、こゝでは海が南なのだ。

「どうだい、燃え工合は。」

「傑作！」

と、魔子は手のひらの砂を払ひながら、立上がつて云つた。

「ぬかりはねえな、買ひものは。」

「ない。」

「バケツは[illegible]つでいゝかな……一寸その莚を」

と、彼は手を延ばして莚をとつて、それを引摺つてまた天幕の中へもぐり込んだ。

「ぢやア、僕は水の交渉をして来るからな。」

「頼む。」

「あしも行かうか。」

と、魔子も立上がつたので、僕たちは買ひ立てのバケツをぶらさげて、松林の下の冷いやりした砂地を、はだしで歩いた。地面には一杯に松葉がこぼれて居るので、時々それが足の裏へ刺さつて痛い。――

M・の別荘と云ふのは松林の東縁に近く、可なり宏壮な一郭を占めて居るので、竹垣のはしから通用門のきはまででも、可なりの距離があつた。――巨大な松が空へうねつて居る大

分廣げな庭の奧から、ぶらんこの金具のギイ、ギイと間を置いて軋むのが、とりわけのどかに外まで聞えて來た。

「いゝ水ねえ！」

別莊番の年寄との間に、簡單に交渉がまとまつて、バケツに一杯清水を充たして、兩側から引ッ張り合つて松の間を戻つて來る途中、魔子は最大級の詠歎詞を使つた。富士の雪が融けてこッちへ湊み出るんだからと、いつぞや友人が自慢をした吹拔きの水は、實際魔子の詠歎通り恐ろしいまでに冷たく透つて、買ひ立てのバケツを覗くと、夕闇もこゝだけは暮れ殘つたと云ふ風だつた。

「さて、夕飯の支度だが。」

と、曾我が天幕から出て來たところで、僕たちは蒼くまだ煙の立騰つて居る石の竈をかこんで、砂地にあぐらをかいで、めいめい獻立について評議をし合つた。さうして、正式に御飯をたいて、お汁も煮て、二つ三つ御馳走も添へて、今夜は一つ天幕開きの祝盃を上げようぢやないかと云ふ意見に一致した。

陽は水蒸氣の多い海の向うへ落ちて、暮れ惱んだたそがれの明るみが、松の間に漾つて居た。いつの間にか風は歇んで、そこらはひッそりして、輕い波の音だけが砂地の先から、地を傳つて響いて來た。

「水の浪費は禁物だぜ。」

「うん。」

魔子は松の根かたへ板を渡したにはかごしらへの俎の上で、眼を痛がりながらたまねぎを刻んだり、じやがいもの皮を剝いたり、キャベツの葉を剝がしたりした。曾我はシチュー鍋をゆすいで、竈の下へ火を吹ッたけた。

「どうだい、焚木は。」

「どうやら間に合ふだらうて。」

――焚木集めは假りに僕が引受けたのだが、これはあらかじめ注意をされたこともあり、いづれ町から取るなり、他に適當な手段を講ずるなりするつもりなのだ。

「……かうして居る間に、一寸水でからだを拭いて、著物を着ちまはうぢやないか。大饗應だぜ、素ッ裸も何だらう。」

ざッと支度をし終へて、あとは竈の上のものが煮えさへすればと云ふところまで漕ぎつけたところで、曾我が提議をしたので、僕たちは殘りの水を洗面器へとつて、めいめい裸になつて、からだの潮氣をおとした。

「そこらへ潮をくッつけとくと、いんきんになるぜ、おい。」

と、曾我が股の間をこすりながら呶鳴ると、

「なによ、いんきんて。」

と、素つ裸の魔子が訊いた。

「ほい、そッちの話ぢやねえ。……いんきんた、カラカラ王の浴場から出た病氣だ。」

――僕たちは糊のこはい、さッぱりした浴衣に着換へて、天幕の前へリンネルを擴げた。さうして、ニュウムの組食器を三人分キラキラしく並べて、食卓の支度をはじめた。僕たちは曾我のいはゆる「一皿御馳走」なるものを標榜して、御飯もお菜も、一枚の洋皿へ殘らず盛り立てて、あとは何もよごすまいと云ふ簡單な、――と云ふよりか横着な食卓規のもとに生活して來たので、こんな賑やかな食卓をこゝに見出したと云ふことはそれだけでも十分に異常だつた。おまけに、――今夜は柄つきのしやれた洋酒のグラスまでめいめいの前に並べ立てられて居ると云ふ、豪奢振りだ！

御飯と、果物をあしらつたハムサラダと、いかの刺身と野菜の湯とが出來上がつたあとで、オムレツをつくつた。さうして、すつかり支度が出來てから、僕たちはめいめいリンネルのぐるりへ席をとつた。

我の主張なのだ。僕たちは天幕にざツと戸閉りをして、松林を拔けて丘へ登つた。

——夥しい星の群れが僕たちの頭の上にあつた。陸も海もたゞ暗くて、汀に崩れる波だけが燐光を映して仄かにその存在を示して居た。

「素晴らしい空だな！」

と、天文學者の曾我は丘のてツぺんに立つて、空を仰いで歎息した。

右手の遠い、——公園のとツつきにあたる邊には、明るく灯がともつて、白い浴衣姿の避暑客の群れが、ちらちら[illegible]つて見えた。

灯りはまた左の防波堤のところにもあつた。沖の船に對する標識らしい強烈な投射光線が、防波堤の突端からずツと白く照らして、沖まで長くその光芒を曳いて居た。

僕たちは波のうねりのゆるい眞ツ黑な海の表へ浮いて、暫く三人でキヤツキヤツと泳ぎ興じた。夜光蟲が光る。なるほどからだのぐるり[illegible]、闇の中でもめいめいの位置がはつきり見わけられた。

「綺麗ね！」

とう云つて魔子が寄つて來ると、透明な青い[illegible]の中へ、彼女のからだが影繪の様に黑く浮いて、活潑な脚の運動がくツきりとそこへ描かれた。

外へ出ると寒かつた。僕たちは小石のない乾いた砂地のところを選んで、相撲をとつた。多少腕自慢の曾我は、どこでいつ覺えたのやら、多少本格に相撲の手を心得て居るので、場所と機會とさへあれば、僕たちはよく、彼から敎授を受け受けした。——誰にかゝつて行つても負ける魔子は、それでも鞭の様にしなふ手脚でしつこくからみついて、いゝむきに僕たちと勝負を爭つた。股の間へ手などかけられると、素ツ裸なので擽つたがつて、

「厭や厭や、この手は厭や！」

などと、鋭い悲鳴を立てて、腋の下を[illegible]やと云ふほど[illegible]つて逃げたりした。

淡水でからだを拭いてから、僕たちは寢間著に着換へて、天幕の中へもぐり込んだ。一間と五尺ほどの廣さの中へ、可なり嵩のある荷物を整理したので、寢るところと云つては幾らもない。色々と工夫をしたあげく、めいめいのリユツクサツクを平らに均らして、それを枕に交互に横たはることにした。つまり僕と曾我とがお互枕に[illegible]つて、その間へ[illegible]枕に挾まる。さう云つた工合に。——

「厭やだぜ、頭なんぞ蹴つちやア。」

「寢てゐる間のことはわかんないわよ。」

と、魔子は不遠慮に僕たちの間へ脚を延ばして、云つた。

「こんなに窮屈にさせたのが悪いんだから。」

「何だな。魔子のこたア脚を縛りつけて寢かすんだな。」

「うんうん。みんなで脚を縛つて寢ようか。」

と、魔子が起上がつて、いゝむきに賛成をしたので、みんなで噴飯してしまつた。

「莫迦ア云へ。魔子ちやアあるめえし。」

「そんなこと云つて、魔子ちやんのことを蹴飛ばしちや厭やよ。」

——僕たちはめいめい自分の寢場へからだを横たへて、それからランプを消した。

「まだみんな寢ちやいけないよ。」

と、闇の中で魔子が云つた。

「何だい。」

「今ね。……あたしがお話をしたげるから。」

「へえ。何の？」

「あのね、」

と云ひかけて、[illegible]を何やらゴソゴソさせて居たが、

「ある實行家の話[illegible]。」

と云つた。
「止せやい。……何だい魔子。ゴソゴソやつてるのは。……」
「ねゝ」
と彼女はなかば起きかけて、闇の中で僕のからだをさぐつて、だしぬけに僕の口の中へ板チョコのかけらを突ッ込んだ。――僕は彼女の冷いやりした髪を、サラサラと頬の邊に感じた。
と、突然、
「野郎！」
と、曾我が含み聲を立てた。
「いけねえこりアR・、魔子の枕を換へなきア。……はゝア！ 菓子袋の管理を自分で引受けたのは、いゝやつ目算があつたんだな。」
「ね。」
と、魔子は落ちつき拂つた調子で、向うから云つた。
「社會意識つて、つまり平等の盗心よ。」
――曾我がいつもこきおろす社會論の警句だ。
「果して平等だつたかね。」
僕が暗がりでやり返すと、
「そりア、……」
と、魔子はずるさうに笑つて、
「手数料てものもあるわよ。」
「否！」
「厭や厭や！ 脚なんぞ引ッ張つちや。……誰？ 婦人の脚なんぞ弄るのは！」
ガッシャン！ とランプが引ッ繰返つたので、到頭みんなは起きてしまつた。燐寸をすつてランプをともして、それを中心に僕たちは車座にあぐらをかいた。さうして、魔子は僕たちからからだの検閲を強制されて、神妙に袂からチョコレエトを二つ差出した。
「食足りて禮節を識るだ。」
と曾我は笑つて、魔子が枕にして居た彼女のリュックサックから、ブリキの菓子箱を二つ三つ出して、灯りの下へそれを擴げた。菓子ぐらゐはせめて不足なく喰べようと云ふ意見で、僕たちは大枚二十圓の臨時費を殘らずそれに割いて、罐だの箱だのへ一杯詰めて、それは魔子のリュックサックへ入れて彼女の管理にしたのだ。
「魔子のやつゝめ晝間から覘つてやがつたんだな。」
「噓よ。」
と、彼女は栗まんの餡この中から、栗を掘つて喰べながら、
「ね、買つた時から。……」
と云つて、プッと噴飯した。
――向うの天幕でもまだ寐ないと見えて、時々松風や波の音にまじつて、話し聲がこつちまで聞えて來た。
「富士たア俗だな。」
と、ふと思ひ出した樣に曾我が云つた。
「……一二泊ぐらゐの旅程で、僕たちもやらうぢやないか。富士ぢやアないよ。天幕の移動先の視察を兼ねてだ。」
「贊成だ。」
「天幕はどうするの？」
「だから、一緒にア出來ないだらう。一人か二人づつさ。一人づつがいゝな。天幕の留守は一人ぢや困るから。……」
「いゝわ！」
「そのうちやらうかな。」
「やらう。少し退屈をしかけたら。」
さう云つて、曾我は壁へ吊るした懷中時計を見て、
「十一時だな。……一人一泊で自由行動だ。旅費は大體五圓見當だな。」
「そしたら魔子ちやんはどこへ行く。」
「あたし？」

彼女はあぐらをかいた腿を男の樣に搖すぶりながら、
「さうね。……箱根へ行かうかしら。」
「最も俗だ。……」
「ぢやどこ？……目的は地質研究よ。」
「大いこと出アがつたな。……どうだい、伊豆は、曾我。」
「惡かアねえな。」
それから僕たちは暫くそんなことや、また似た樣な話をし合つて、今度はおとなしく寐ることにして、めいめい横になつて、ランプを消した。話が途絶えると梢の松風が絶えず淋しく耳へ通つた。

五

あけがた、――頭も尻ッ尾もない變てこな夢を見て、腿の邊が變に重たく痺れてふと眼をさますと、魔子が夜なかに毛布を脚の方へたくためてしまつて、薄ら寒くなつて、僕の毛布へはしからもぐり込んで來て、蝦の樣にからだをこごめて寐て居た。――彼女の頭の下敷になつた腿が、もつれた髪でむづ痒く刺されるので、
「おい。おい！」
と、僕は彼女を起こした。天幕は外光を透かして、十分にもう明るかつた。柔らかく凹ました彼女のリュックサックへは、曾我がづうづうしく兩脚を載つけて居た。
彼女は眼をさまして自分の寢ざらに氣付くと、何かしら自分で笑ひ出した。さうして、
「とてもいゝ工合だわよ、この枕。」
と、髪のうねつた痕の赤くついた僕の内腿を、擽つたく撫でた。僕がのびをしながら彼女の方へ兩手を延ばすと、彼女は特殊な眼の表情をしてなかばからだを起こして、グニャリと僕に抱かさつて、まだ睡むげな眼で僕の肩へ頰を凭らせた。
曾我が起きて天幕から出て來た時、僕たちは水を汲んだり焚木を集めたりなどして、もう朝御飯の支度をはじめて居た。御飯はお午に二度分だけ炊いて、朝はパンにしようと云ふ計畫だつたが、今朝は昨夜の御飯の餘りがたつぷりあるので、炒飯を作ることにして、彼女はフライパンに油を煮立たせた。丁度起きぬけに深呼吸をしに海へおりた時、小さな牡蠣を四つほど汀で見つけたので、僕たちは更にそれで牡蠣汁を作らうと相談をした。
人ッ子獨りまだ見えないあけがた前の海邊で、僕たちはこんな會話をし合つた。
「お便所はどうしよう。」
「どこだつていゝさ。……何ならこゝへおし。僕が番をしてあげるから。」
「莫迦！」
「そこらへ二人でこさへようか。……その小松林の中へ。」
「こさへようか。」
「圍ひなんざ無論ないんだぜ。」
「いゝわ。」
「自然生活だからね。」
「うん。」
「ぢやアこさへよう。おいで。……」
それから僕たちは、外からは見えない傾斜の内側の密な小松林へ這入つて、とある巨大な松の蟠屈した根かたを掘つて、石塊で低い圍ひをした。丁度瘤根がからみ合つて窪みをつくつて、そこへ濕氣をとめて居るので、それを僕たちは手洗ひに利用することにした。――使ふたんびに少しづつ埋めて行つて、一杯になつたらまた別のところを掘らうと、僕たちは相談をし合つた。
「こゝなら誰にも見えない。」
「少し遠いわね。」
「魔子ちゃん、して御覽。」

と云つて、

「で、その鰹どうしたの？」

と、いゝゝ、けろりとした顔で兄を仰いだ。

第五篇

一

翌る日、――僕たちは曾我の提議に従つて、連立つて町へ出かけて、ひととほり、三人分の釣竿を揃へてとゝのへた。さうして、釣道具屋の店に偶然居合はした未知のある仲間、――釣師たちもまた労働者と同じ様に、世界ぢうの釣仲間を兄弟と心得て居るものなのだが、――から、即席に黒鯛釣りの要領なるものを授けられた。口端へ一葉の様に泡を吹いてしやべる癖のある律儀なわれわれの仲間は、鈎の先へ自分の雪駄を引ッかけて、往来へ竿をしよひかせたり、指示でものものしくそれをしやくつたりして、その[illegible]を披瀝してきかせた。

天幕へ戻ると、僕たちは午飯どきまでのちよいとの時間を利用して、松原の東縁を迂廻するうたゝいい崖で、竿[illegible]をしやくつた。言葉通り、――[illegible]

「どうだい。少し遅くはなるが、午飯のお菜に大い鯛を一匹釣つて来ようぢやないか。」

鑵詰の空鑵に小蝦が十ほどたまると、早速、曾我が勢のいゝ相談を持ちかけた。

「うん、それがいゝ。……三匹釣つて、みんなで一匹づつ分けようよ。」

と、魔子は魔子で、もつと蟲のいゝ提議をした。で、結局よし来た！と云ふわけで、僕たちはいさゝか空腹をかゝへて、新調の釣道具を持つて、汀傳ひに狩野川の防波堤まで出かけた。

風が強いせゐか、波のうねりは昨日よりも高かつた。空は鋭く蒼く透つて、向き合つた伊豆の岬の[illegible]から、頭の真上へかけて、刷毛ではいた様な[illegible]雲がさッとかゝつて、存外な速力で東へ動いて居た。

防波堤は段々と先へ行くほど低くなつて、先端はたゞごろた石の堆積として海へなだれて居る。そこへ狩野川の[illegible]が沖で荒れて居る三角波のとばッちりがぶッつかるので、絶間なく白い沫きに洗はれて居た。海は上潮どきと見えて、今朝来た鉋の甲の様に黒く現れて居た三角洲の辺は、一様にたゞ緑色に呑まれて居た。

僕たちはごつごつした灰色の石垣に腰を据ゑて、五六人群らがつた土地者らしい他の釣師たちの間へ、適宜に割込んだ。さうして、教はつた様に蝦の白味をむき出して鈎にさして、滑かにうねつて居る河面へ、幸運な豫感を錘にしておろした。

富士は今日も美しく晴れて居た。藍色の山肌へくッきり描かれた雪の頂へ、ひとすぢ雲がかかつて、華やかしい尾を虚空へ曳いて居た。僕たちは海を縁取つた長い松原と、その上へぬきんでた富士とを背に、小一時間根気よく鈎をたれて居た。時々クウクククウと水を切つて居る縁が、[illegible]な魚信[illegible]のあるものに[illegible]！と引ッ張られるので、あわてて上げてみると、餌がなくなつて居た。

突然、

「よ！」

とかけ声をして、曾我が[illegible]のはな、竿[illegible]かつたので、[illegible]向くと、華奢な竿の先が折れさうにしなつて、――絲が張つて、それが水の中で[illegible]しく輪をかいた。

「かゝッたな？」

「畜生！……何でえこりア。」

周囲の見物が一斉にそこへ[illegible]、がヤ[illegible]

ソリ！と[illegible]

つて、ぱツと鋭く水を打つた。と、お隣りの、古びた經木帽を頤へ紐で結はへた恐ろしい顏の長い老人が、

「さうやつて張つて居なせえ。ようがすか。」

と云つて、自分の掬網をとつて、逃げ廻つて居る魚に覘ひをつけてザブリと巧みにそれを掬つてくれた。

「有難う有難う。へえ黑鯛だな？」

と、曾我は顏の長い年寄に禮を云つて、早速覺えたばかりの知識を振廻した。

「U・ちやんU・ちやん。兄さアん！」

と、そこへ魔子が恐ろしいはしやいだ叫び聲を立てて、沖から石の上を跳ねて來た。振返ると彼女は、指も廻りかねるぐらゐ太い鳶色の鰻の、まるくどくろをまいたのを鈎へつけて、さげて、後ろへズルズルと竿を引摺つて居た。――彼女はさつきから餌ばかりとられて居るので、曾我の注意で黑鯛釣りはあきらめて、小さな子供たちの仲間入りをして、積石の隙をクツクツと探つて居る潮の間へ絲をたらして、『何だかわからないもの』を釣つて居たのだ。

鈎を呑んだ鰻は、ぐるぐると幾重にもどくろを巻いて、くびれるほど自分で絲をしめて藻掻いて居るので、僕たちはもてあましてしまつて、これも顏の長いお隣りの年寄に、鈎だけを犧牲にしてやつとはづして貰つた。

「怖いわ。……」

と、自分で釣つたものに怖くて手も觸れないで居た魔子は、それがやつと魚籠の中へ收められると、はじめて曾我の釣つた七八寸もある黑鯛を認めて、まはりの人々がびつくりする樣な高聲を立てた。

「おッ大いなア！　兄さんが釣つたの？　さう？　大い大い。三十錢の上もするわよ、こんなの。」

ところが、――三十錢の上もするこの黑鯛がまだパクパクやつて居るうちに、また曾我が竿を弓なりにして立上がつて、續いて、僕も恐ろしくあわてて岩のはなから立つた。さうして、曾我の方は絲を切られて、僕が曾我のより一廻りほど小さい黑鯛を、獨力で釣上げた。

「ついでだ。三匹釣らうぢやないか。」

蟲のいゝ魔子の提議が、どうやらものになりさうだつたので、圖に乘つて僕たちは、たつた一本きりの竿で、また暫くもとの場所へしやがんで、背中を陽に干して居た。――ちよいとの間、形勢を傍觀して居た魔子が、やがて飽いて、石垣傳ひにまた沖の方へ出かけて行つたかと思ふと、暫くしてせかせかと息を切つて戻つて來た。さうして、海風に髮をもつらせながら、

「また兄さん！　そら。……」

と叫んで、おなかのところへたくためたワンピースの裾をそろそろとまくつて見せると、中から菱形の甲羅をした大きな蟹が一匹、ゴツゴツと脚を突ッ張つて、匐出して來た。

僕たちが到頭三本とも鈎をなくして、重たい魚籠をさげて、意氣揚々と天幕へ引上げたのは、それから間もなくだつた。

「神經の痲痺症どころの騷ぎぢやねえぜ、こりア。」

黑鯛は大きなのをあらひに小さなのはバタ蒸しに、鰻は開いて蒲燒にして、蟹は――魔子が生かして置きたいと云ふのを、曾我が押ッ覆せて鹽ゆでにすると云ふことにして、僕たちはそれぞれ料理にかゝつた。僕たちの簡潔きはまる避暑旅行の旅行規は、『純粋な消費生活』なる冒頭ではじまつて居たのだつたが、どうやらそこへ、素晴らしい異例が挾まつたわけなのだ！

「魔子。燃料が不足の樣だな、こりア。……」

「さう？……蟹の番をしてゝね。逃げられない樣に！」

「どこだい。」

「石の下よ、そこの。」
見ると砂地の窪みへ大きな石を錘にされて、蟹はブクブクと不平らしく泡を吹いて居た。
「午飯前は釣と、から日課をきめようぢやないか。」
「賛成だな。……こりア、おい。皮を剝くんだらうな。」
「無論さ。……尻ッ尾の方からメリメリと、さう。」
「見さアん！　松露があるわ。」
「そらア松露ぢやアねえ。」
「松露よ！」
「莫迦云へ。割つてみろ、中ア眞ッ黑だらう。……俺もだまされたんだ。」
「おいおい。鰻がのたくり出したぜ。」
「忙がしいなア。こいつも石でも背負はしとけ！」
僕たちが神經のまだピクピク痙攣つて居る黑鯛のあらひを、冷たい吹拔きの水から上げて、更に、手のひらほどもある鰻の蒲燒を一切れづつ分けて、炊立ての御飯で舌を燒いて居る時、富士へ行つたと云ふ連中でも戻つて來たのか、向うの天幕のあたりが急に賑やかに、騷がしくなつた。

二

暮れがた、僕たちはわざわざ招かれて、お隣りの天幕の人々の茶話會に出席した。想像した樣に天幕は、富士から戻つて來た連中で人數も殖えて、ひどく賑やかだつた。僕たちは近づきのしるしにサイダアを半ダアスほどと菓子折を一つと持つて、彼等の天幕を訪ねた。
彼等は天幕に三方から圍まれた眞ん中の廣場へ、アセチレンのランプを二つともして、賑やかに砂地へ車座を組んで居た。富士へ行つたと云ふ連中は、四人だつたときいて居たのに、見たところ人數は八人ほどに殖えて居る。――新らしい加入者のあつたことがあとでわかつた。
話は旅の失策談からはじまつて、みんなで無邪氣な素ッ破拔きッこをしたりした。一座の宰領と見えるふぐの樣な顏をして磊落な男が、一番逸話を澤山持つて居るらしかつた。まじりけのない彼の熊本辯が、とりわけ愉快に座談をくつろげた。
――二合目だつたか三合目だつたかの邊で、木曾からやつて來たと云ふ二人連れの登山客と道伴れになつた。軍人上りの頑固げな男で、それがその邊の坂路にあへいで居る女連れの登山客を顧みて、笑つて、――俺の國ぢやこのぐらゐの處は、まだ下り坂の部類だと云つて威張つたなどと云ふ話をして、みんなを笑はせた。
彼等は「冷藏庫」から氷を出して、こまかく碎いてコップへ入れて、それをめいめいに配つて、僕たちの持參したサイダアを拔いた。『冷藏庫』と云ふのは、蔭つた砂地の一部を幾らか深く掘つたと云ふだけで、そこへ毛布にくるんで氷を入れて置くと、一貫目の塊りがたつぷり二晝夜は持つと、彼等は主張した。
「……早速僕たちもやるかな。」
さう云つて、曾我は僕たちを顧みた。
「あんたは學校は？」
さつきからずつとだまつて居た、眼鏡をかけた貴公子風の美少年が、華奢な、しかし白からぬ手で煙草の灰を松の根株へ崩しながら、麼子に聲をかけた。――彼女は男の子の樣に崩した脚へはすに凭れて、拇指のところを擁きながら、
「M・高女。」
と、すまして答へた。
「何年ですか？」
對角線的な位置に、松の幹へ凭れて居た拳骨

の出た運動家風の男が、M・高女なら自分の話題の圏内だと云ふ調子で、厚い唇を動かした。

「あたし？」

と、魔子は淡泊に眼を移して、

「三年。」

と答へて、襟の端へたかつた蚊を、ピシャリと手のひらで叩いた。さうして、すまして一年丈ごまかして置いて、何か意味のあるずるげな眼をひよいと僕に投げた。

暮れかけたから、風が出て、波の響と頭の松風とがしばしば高まつては、人々を沈黙させた。――いゝ家庭の育ちらしい彼等は、僕たちの三分の一ほども話題の持合はせはなかつたが、いかにもそれらしいおツとりした態度で、いつも聴き手に立つた――ちよいとした身の上話の折に、審美堂の展覧會の話が出ると、二人ほど確かにあの展覽會は見たと云ひ出して、僕を好奇深い視線の眞ん中へ引出してしまつた。魔子の隣りに坐つた例の美少年は、熱心に魔子の話し相手になつた。映畫の小型なカメラを持つて來て居ると云ふ彼は、近いうちにカメラへ這入つてくれないかと、巧みに彼女に誘ひかけたりして居た。

歸りには暗い中を、わざわざ二三人が懷中電燈で道を照らして、僕たちを天幕まで送つて來てくれた。

「どうも寝床の工合がよくねえなア。」

彼等が歸つてから、寝支度をしながら、曾我が云つた。

「……何とかもつと落ちつく工夫はねえものかな。」

「いゝ、あしが一番はしになつたら？」

と、魔子は考へ深さうに云つた。

「莫迦云へ。」

と、曾我は一口に否定して、

「朝になると、天幕の外へおしりまで出してる氣なんだらう。」

結局、ほかに仕方がないので、今までの樣に魔子を間に互ひ違ひに寝ることにして、たゞリユックサックの位置や何かを多少改めた。

――夜更けに、どこから忍び込んだのか蚊が二三匹、うるさく顏のまはりへまつはるので、そツと起きて、僕は灯をつけた。さうして、蚤取粉をこよりによつて、蚊遣の支度をした。灯りに瞼を刺されたか、薄らに曾我は眼を開けたが、

「何だ、……蚊か。」

と、ねぼけ聲につぶやいただけで、くるりと向きを變へて、また寝入つてしまつた。

魔子も死んだ樣におツとして居た。顏を眞ツ直ぐにのばして揃へて、仰向になつて、毛布の端をお腹の上へたくし上げて居た。血を吸つてぐいみの樣に膨れた蚊を膝のところへくツつけて居るので、ピシャリと潰してやると、彼女はピクリと脚を攣らして、それから顏ぢうを覆うたおかツぱの中から眼を擡出して、眩しげに睫毛をしばたゝいた。

「痒いだらう。」

と、血のはねた彼女の膝のところを、指で掻いてやると、

「眠や……」

と云つて、毛布で頭をくるんでしまつた。

――心もからだも深く疲れて居るのに、なぜか僕は快い熟睡へ這入れなかつた。この頃の僕を襲ふ漠然とした一種の空虚と淋しさ、――何にもとづくのか、どうすればいゝのか、自分にもわからないさうした氣持が、とりわけその夜は僕の心の底に、つのりつゝあつた。

（結局、僕たちの生活はこれでいゝのか？）

生活の不安にしじう脅かされて居た時代には、經驗もしなかつた樣な氣持が、その底からうづき上げて來た。明日の糧をどうするか？

せいぜいその範圍の問題が、嘗ては僕たちの頭を充たした惱みのすべてだつた。さうして、いつもそれはそれだけの惱みとして、雲翳の樣に心のうはべを掠め去るに過ぎなかつた。しかし、――

僕はかうした氣持に似たものを、嘗て大阪時代に經驗した。さうして、それはすでに說いた樣に、曾我たちと共同生活をはじめる樣になつて、いつとなく影をひそめてしまつた。今にしてみれば、それは孤獨な生活、――沈默と無爲とが胸廓の內側へ沈澱させた、鄕愁に過ぎなかつたのだ！

「曾我。金が欲しいなア。」

時折僕は、しみじみとそんなことを曾我に云つたりした。貧乏なその日暮しの時分には、口にもしなかつたそんな言葉を。僕は自分の心の隅に巢喰ふさうした不吉な空虛を、とりたててほかに假託のしやうがなかつたのだ！

「うん。……」

そんな時には曾我も、曖昧な合槌を打つた。

しかし彼の意味は、もつと具體的な、さうして、それらたかだか、もつと本でも讀みたいとか、機械でも買ひたいとか、更に無邪氣に、うまいものでも喰べたいとか云ふぐらゐの、至極單純な野心に過ぎなかつた。

（仕事をしたい！　本當の仕事をしたい！　少なくとも喰ふためではない仕事を！　パンと魂とを兩秤へかける樣な生活はもう澤山だ。――これぢやまるで、人生に居候に生まれたも同じぢやアないか。）

そんな風に腹でつぶやいてみることもあつたが、それとて、自分の氣持をしつくりと現したところのものでなかつた。

僕は時として、曾我たち兄妹の本質的な放浪性と自分とを比較して、そこに橫たはる根柢的な相違を、過去、――あらゆる今日の母胎だと云ふ過去に結びつけて、考へてみた。――少なくも僕は、青年時代のごく初期までを、溫かい家庭の子として育つた。運命は惠まれなかつたが、それによつて自分をそこなはれるほど僕は、僕で世間へ立たされた覺えはなかつた。云はば、血の味を識つた獸の樣に、僕は、家庭の魅力を味つて居るのだ！

しかし、――彼等に到つては、閱歷が示す通り、草を逐うて轉々する放牧の民の樣に食を求めて轉々した。彼等の放浪性は、僕の樣な附燒刃ではないのだ。松風と浪の音とが耳元で交錯しようと、彼等の睡りは毫もそれによつてさまたげられはしない。駒形の油くさいコンクリートの中でも、海邊の尺の足りない天幕の中でも、彼等の睡りを盛るにはありあまるほどなのだ

（これが本當なのかなア？）

僕の心裏に巢喰つては絕間なく太まる、云はれのない空虛と淋しさ、殆ど焦躁と不安とにすら高まるかうした氣持の中から、しばしば明瞭な形をして現れるのは、それだつた。

「おッ母さんはほかに望とては別にないけれど。……」

さう云つて、何かしら輝かしいものを遙く數へ見る樣な眼差で僕を見い見いした母の面影が、そんな時にしつこく僕の眼にこびりつくのだ。生活の勝利とはとりも直さず自己の滿足だ。――さう云ふ意味のことを、面倒くさげに碎いて說いた時、彼女は一人の息子を狂人をでも見る樣な哀れッぽい眼で見つめた。――

僕はぼんやり、狹苦しい天幕の中に窮屈げに脚をまじへて寢て居る、曾我たち兄妹の寢姿を、灯りの中で見まもりながら、

（これでいゝのかなア。）

と、自分で自分に呼びかけてみた。ニュウムの食器だの炊事道具だの、澄子の化粧箱だの、

古びた樂器だの、さう云つた色んながらくた類が、狭苦しい中に押詰まつた樣にめいめいの存在を主張して、それが灯りの範圍に異樣にむさくろしいわびしい雰圍氣をつくつて居た。

(向うの天幕にしたところで。)

さう、僕は腹でつぶやくのだ。

(――これより優つて居ると思へるものはなんにもないが。)

(しかし、――彼等の背後には何かしら充ち足りた、輝くものを感じられる。仕事と未來とがか、彼等を待つ樂しい家庭がか、かうした間にも、彼等の安否を氣遣つて居るに違ひない、肉親たちがか、それとも戀人がか。――)

(僕たちの背後には？ おゝ、僕たちはこゝにあるだけが僕たちのすべてぢやないか！ 家庭？石油焜爐が一つ轉がつて居る、あの埃ツぽいコンクリートがか？)

空虚な底からうづき上げる何か鋭い感情が、いつとなく瞼の裏を熱くしかけた時、くるりと寢返つた魔子が、焼けた蓮葉な聲でうんと僕の枕を突ツ張つて、キリキリと奥歯を軋ませた。

三

僕たちはしかし、とにかく、大體して愉快な日を送つた。朝の涼しいうちは砂地へ寢轉んで讀書をしたり、ものを書いたり、(曾我は昨今興に乗つて、「天界の驚異」と題する、通俗な天文學の著書に筆をつけて居たし、僕は僕で、「海と女・十題」と云ふ水繪をもくろんで、魔子をモデルにそのスケッチにかゝつて居た。)さうして、午御飯の前になるとみんなで釣竿を持つて、防波堤へ釣に出かける。――午後は大抵海で泳いだり、松の蔭へ轉がつて午睡をしたりなどして、ゴロゴロと屈託なく時を過した。隣りの連中ともしじう親しく往き來をした。僕たちは時々彼等から拳闘の稽古を受けたり、相撲の相手をしたり、時には野外劇の主人公になつて、映畫のカメラへ收まつたりなどした。

「どうだい。いつかの旅行を實行しようぢやないか。」

さう云ふ提議が曾我たちから持出されて、いつぞやの話が具體的に、僕たちの間に協議される樣になつたのは、それから數日してだつた。

「コオスは自由だが、一人まア一泊だな。」

と、曾我はせんだつての説を主張した。

「……天幕の留守番は殘りの二人がするんだ。」

「あたしが一番先に出かけるのよ、その代り。」

「その代り？」

「いゝとも、おいで。……その代り金が曾我だ。僕は一錢おしまひにならア。」

「よし。」

曾我は豫算簿を出して、鉛筆を舐めながら、

「ざつと旅程を立つたら、その旨を申し出ろ。豫算を組んでやるから。……一人六圓までだぞ。」

それから僕たちは地圖を擴げて、めいめい勝手なコオスを立ててみた。旅費六圓の一泊だから、勢ひ範圍は制限されて居た。

「あしはね。」

と、魔子が最初に口を切つた。

「……汽車で御殿場まで行つてね。それから乙女峠を越えて箱根へ出て、そこへ泊つて、翌る日三島まで歩いて、さうして電車で歸つて來るわ。」

「そんなら魔子ちやん、かうしろ。」

と、僕がわきから智慧を貸した。

「乙女峠を越したらあれから大涌谷へ出てな。そして湖尻を通つて、湖尻から蘆の湖を縦斷して箱根へ出て、箱根へその晩は泊るんだ。いゝかい。そして、箱根から三島まで下り四里……はねえかな、とにかく箱根八里の半分ぺらを歩る日歩いて歸る。くたびれたつてあすこの街道な

ら自動車も通つてるし。……」

「大涌谷？」

と、魔子は輝かしい好奇的な眼をして僕を見た。

「君は？」

と、曾我は僕を顧みた。

「さうだな。……今の道順を逆にそのまゝやつてもいゝがね。それより僕は十國峠を一遍越えてみたいからかうしよう。箱根まで一日で歩いて、翌る日十國峠を越えて熱海へおりると。そして、小田原、國府津、御殿場を廻つて、汽車で戻つて來よう。……どうだい。」

「よし。豫算の範圍で行きさへすりア。……そこで俺だ。」

と、彼は云つた。

「どこだ。」

「まア三島まで行くのは、君と同じだがね。……ところで、その先は曰く云ひ難しで、とにかく翌る日は三島から戻つて來る、……はどうだい。」

「よせやい。」

と、僕は笑つた。――『晦日のお祓め』は、こないだやつたばかりぢやないか！

「仕方がねえ、」

と、彼は頭を搔いた。

「おれはぢやア船で伊豆へ出かけるよ。どの邊まで行けるか、そいつア旅費と相談だが、一晩純潔に泊つて戻つて、きッかり豫算額になる邊まで行つてみよう。」

「純潔に泊るッて何のことよ。」

と、魔子が口を挾んだ。

「……純潔に泊るつてお前、讀んで字の如しさ。……同じ泊るにしたつて、色んな泊りやうがあらアな。……兄さんは心臟が弱いから、そいつを勞るッてえ意味さ。」

「さうお？」

と、彼女はわかつた樣なわからない樣な顏をして、

「それでいつのことなのよ、それは。」

「早速やらうぢやないか。」

「明日からか？」

「いゝわ！」

「ぢやア君が一番先だな。旅行案内を出してくれ給へ。」

さう云つたわけで、――忽ち話がまとまつてしまつた。曾我はさすがに兄らしい綿密さで、汽車の時間の都合やら何やらをこまかく調べてやつて、それから彼女の財布（例の白い軍隊手袋だ。）へ五圓紙幣を一枚と五十錢銀貨を二つと入れてやつた。

暗くなつてからは歩かないこと、學生を除いて一人ッきりの男とは伴れにならないこと、それだけの注意を曾我からきいて、餘計なお世話だと云ふ樣な顏をして、簡單に自分で彼女は旅支度をした。獨り旅はお互ひに慣れッこな仲なのだ。――

「おい。おみやげは忘れめえぜ。」

翌る朝、停車場まで送つて行つて、別れぎはに云ふと、

「えゝ。」

と、彼女はしをらしく微笑んだ。――彼女は手製のサンドキッチや、防水布などを入れた小さなリュックサックと、僕が切つて綺麗に削つてやつた櫻のステッキとを持つて、例の鐵の水筒を勇ましく肩から斜にかけて居た。

――彼女が去つたあとの曾我と二人きりの天幕は、變に空虚で淋しかつた。僕たちは飯の時にもたゞゴロゴロして居る間にも、働いて居る折にも、しじう鼻をつき合はせながら、ろくろく口もきかなかつた。これが飽和した僕たちの友情の本當の姿なのだか、獨りぼッちの人間が減つたことが、かう僕たちの團欒に影響しよ

うとは、一寸思ひよらなかつた。

「今頃はやつ、峠へかゝつてるだらう。」

とか、

「宿へついたかな。」

とか、

「……疲れた樣に今頃は寢てやがるだらう。」

などと、僕たちは時折思ひ出しては、想像を遠く馳せるのだつた。夕食後學生たちが三四人遊びにやつて來たが、彼女の姿が見えないので、あまり話もはずまないで歸つて行つた。——彼等は二三日のうちに二班に別れて、一班は伊豆の天城の麓へ、一班は更に二三日こゝに滯在して、それから東京へ引上げるのだなどと、名殘り惜しげに語つた。

夜更けて珍らしく、雷雨がこの海岸地を襲つた。僕たちは天幕の中で灯りをともして、雨漏りに應ずる手配をして警戒したが、可なり激しい降りだつたにもかゝはらず、頭を覆うた松の梢がいゝ工合に沫きをかばつてくれたせゐもあるのか、わづかに布地の裏側へ斑なしみを作つただけですんだ。たゞ、床の周圍へ濕氣が透つて來て、恐ろしくそこらの空氣を冷やしてしまつたので、僕たちは荷物をなるべく中心へ移して、そこへくッつき合つて寢た。

雷光と雷鳴とが激しく交錯して居る最中に、隣りの天幕から學生たちが二人、わざわざ安否をたづねて、懷中電燈を照らしながらやつて來てくれた。彼等は猿股一つで、背中から雫をたらしながら、僕たちの天幕へもぐり込んで、二時間ものんきに話して行つた。——雷雨が鎭まつて、彼等が歸つたのは、かれこれ二時過ぎだつた。

四

夕立が變にこじれて、翌る日はすつかり空へ雲がはびこつてしまつた。時折晴れるかと思はれる樣に空は明るくなつたが、忽ちそこからサアッと雨を落とした。——僕たちは朝のうちに天幕のぐるりの、昨夜の豪雨に埋まつた溝を掘り、もう一度座席や荷物の位置を整理した。

「魔子のやつ弱つてるだらう。」

朝飯をはじめて、ひとしきり激しく雨脚が松の梢を打つのを聞きながら、僕は思ひ出した樣に云つた。氣温がさがつて、とてもいつもの樣に水着一枚では居られないので、僕たちはめいめいその上へ浴衣をまとつた。——雨で天幕の中の炊事は、これで幾回目かだつたが、やはりどうも煙のはけがよくない。外から見ると、僕共のいはゆる自慢の煙突からは、可成りよく煙が抜けて居るのだが、それで居て、天幕の中は依然としてひどい煙だ。天幕の中の炊事はすべて焚火を使用する豫定だつたのだが、ついなくても間に合ふので、今だに僕たちはその用意をしなかつたのだつた。

餘談に亙るが、——僕たちは思ひもよらない方面から、ある方法で潤澤に日々の燃料を得て居た。と云ふのは、どう云ふ理由からか、防波堤の先の、狩野川に沿つた汀の一箇所に、夥しく奇妙な小さな木片の打上がる場所があるのだ。木片と云ふのはたゞの白木の位牌で、何のために、いつ、どこから流されるのか、ともかく潮流の關係か何ぞで、夥しく一箇所へこごつて、その邊一帶砂地も見えないくらゐに打上げられて居るのだ。それを僕たちは暇にまかせてこまかく割つては、割箸ぐらゐの太さに揃へて、束ねて、天幕のわきへ保存して置いた。これが大體に於いて炊事の燃料を充たした。尤も、——それ以來、その邊の砂地は追ひ追ひからりと、清潔になりつゝはあつたが。

僕たちは時折、天幕の口を大きく擴げては、新聞紙を疊んだ扇で、眼を眞ッ赤にして、煙を外へ追出した。

「こりア山はひどいだらう。」

「どうかね。」

僕たちは氣がかりげに、時折空を仰いだ。

「……夕立の崩れなんだから、局部的なものぢやアないかね。」

「いや、さうぢやないね。」

曾我は雨の音に耳を傾けながら否定した。

「幾分この天候は荒れ模樣だよ。……颱風か何ぞが近付いてるんだ。」

ところが、——午御飯がすむかすまないかに、ひよツこり魔子が例のいでたちで、大して濡れもしないで戻つて來た。

「どうだつた。」

天幕の中が急に賑やかに甦へつた樣な、何かしら勇み立つた氣持で僕たちは彼女を迎へた。さうして、彼女の旅裝を解く手傳ひをしてやつた。

「降られちやつた！」

と、彼女は言葉少なに答へた。さうして、上衣をとつて、（彼女は大分歩き廻つたと見えて、しツとりと上衣まで汗ばまして居た。）さうして素肌になると、がつかりしたと云ふ風に、毛布のはしへ裸の膝を崩した。

「面白かつたかい。」

「その中開けて。……おみやげがあるわ。」

彼女は問には答へないで、さう云つた。曾我がリュックサックの縛り紐を解くと、最初に黑毛繻子の風呂敷へ包んだ、恐ろしい重たい石ころ（どこかで採集した鑛物の標本か何ぞなのだらう。）が出て、あとから、羊羹だの、梅びしほだの、ゆで卵だの、小さな寄木細工の玩具箱などが出て來た。

「何だい魔子ちやん、この卵は。」

「それ？」

と、彼女はまめでも出來たらしい左の脚の小指を撫でながら、

「大涌谷で昨日ゆでた卵よ。」

と、答へた。さうして、曾我が笑ふと、硫氣孔の中でゆでたんだから、あたりまへのとは違ふんだと主張して、惡くならないうちに早く喰べろと云つた。彼女に云はせると、大地の熱氣はおツ母さんの愛情ぐらゐには溫かいと云ふのだが、どうやら昨日ゆでた卵は繼おツ母さんの懷ろぐらゐに最早冷えて居るのだつた。僕たちは澀色の粉のついた卵を、それでも一つづつ分けて割つた。

「歸りにはどうした。降られたらう。」

「ううん。自動車に乘せて貰つちやつた！」

「誰に。」

「西洋人に。」

さう淡泊に彼女は答へて、——峠の茶屋を過ぎて暫くして、水を飲みに下の谷へおりると、山百合が一面に咲いて居たので、それを一束折つてまた道へ上がつて行くと、雨の中を西洋人の乘つた自動車が一臺やつて來た。——西洋人と云ふのは三人連れの若い男たちで、彼女のところへ自動車を止めると、いきなり彼女に、お孃さん、その花綺麗ですね、一本下さいナと、日本語で云ひかけたと云ふのだ。

「あたしね。」

と、魔子は云つた。

「[illegible]ッて[illegible]ね。その百合を殘らずやつたらね。おゝ有難う！ ッて云つて、今度は、お孃さんどこまで行きますッてきくの。さうして丁度雨がひどくなつたもんだから、これへお乘りなさいッて乘せてくれたの、三島まで。……みんなは三島から汽車で、御殿場へ歸るんですッて。」

「ぢやアゐはだな。」

と、曾我が口を挾んだ。

「え、、」

と、彼女は氣付いた樣に身を起こして、驚い

だ上衣をたぐり寄せて、ポケットからパラフィン紙の袋を出して、ゴソリとそれを三人の眞ん中へ置いた。

「これ貰つちやつた！」

袋の中にはスキス製の薄い上等な板チョコが、十七八枚も重なつて這入つて、プンプン香水の匂を漾はせて居た。

乙女峠では福島縣の女學校の生徒たち二十人ほどと連れになつて、大涌谷まで一緒に來た。それからまた一人になつて、湖尻まで來る途中、姥子の温泉へ寄つて變なぬるまツこいお湯に這入つた。――湖尻まで來ると、最後の定期はもう出てしまつたあとで、貸切のほかには明日でなくては船は出せないと云ふ。日は暮れかゝるし、山の中で困つて居ると、五人連れの兵隊さんがやつて來て、貸切を一艘出させると云ふので、それへ乘せて貰へることになつた。さうして、ビールの御馳走になつたりして、暗くなつて箱根へついて、――兵隊さんたちはそれから夜道を蘆の湯へおりると云ふので、そこで別れて、彼女は箱根へ泊つた。――

「何だい。絹もぢやアろにかい。」

と、曾我はチョコレエトを嚙りながら、莫迦しげにつぶやいた。彼女はだまつてうなづいた。

「宿はいくらだ。」

「二圓。」

と、彼女は簡單に答へた。

雨は本降りになつたらしく、一樣に暗くなつた空から、こまかい、灰色の沫きをしとしとと降らして、天幕の布地を斑に濡らした。

夜、隣りの天幕の學生たちが、代る代る遊びに來たが、魔子の旅ばなしで大分賑はつた。魔子はしまひに、三島へおりる途中何とか云ふ小さな村へお茶を飲みに寄つた時、西洋人の一人に自動車から、雨の中を抱ツこしておろして貰つたなどと云ふ危いのろけ話までした。

五

かりそめと思つた雨は、曾我の豫言の樣に、幸ひにして颱風にはならなかつたがまるまる四日ほどじめじめと續いた。さうして五日目に、やつと空の一角から、思ひがけない秋じんだ蒼空を覗かせた。學生たちはいよいよ豫定の行動を開始して、二班に別れることになつて、その翌日は早朝から、天幕の解體にかゝつた。朝飯を兼ねた賑やかな送別會が催されて、――めいめいは東京での再會を約して、やがて一班は伊豆の海へ向かつた。

同じ日に、僕たちの方でも豫定通り、曾我が伊豆のどこかの港と云ふだけで、のんきな目的をもつて、船旅にのぼつた。さうして、天幕へは僕と魔子だけが二人で留守に殘つた。

海はもうそろそろ避暑客も去つて、淋しくなりかけて居た。砂丘に立つて汀を遠く見渡すと、變に秋じみて冴えた空の下に、からりと明るく砂地が擴がつて、ところどころに淋しい黑く浴客のこごつて居るのが、何かしら畫にしみる樣だつた。陽の色が變に白けて、影と云ふ影はくツきりと濃くくまどられた。さうして、どこか水の色にも冷たい紺色が沈んで、あのなつツこい表情から、人踈ましげな顰め面に變りつつあつた。

久し振りで午前に僕たちは釣竿を繕つて、防波堤へ午のお菜を釣りに行つた。防波堤の先の積石は、連日の雨で綺麗に洗はれて、かいかいと乾いて、それが秋じんだ陽の下で眩しく蒼く光つて居た。――波がドサリと先で崩れると、それが寒々しく白く光つて、石を濡らし濡らしした。防波堤には根元に近い一箇所に、常連の釣師が二三人とゞつて、ひツそりと川の方へ竿をのべて居るだけで、變にそこらは白けて、からりと

して居た。

僕たちは自分の持場にいつもきめて居た、二段目の鼻のところへ並んで腰をおろして、綸卷をふぐした。海は丁度干潮どきで、河口に現れた大きな三角洲が、河流をそこで二つに割つて居た。沖から一線になつて寄せて來る波は、そこで白々と崩れて、平坦な砂地へ扇がたに擴がつて、そこらを眩しいほど輝かしては、また消えて居た。

釣は不首尾だつた。例によつて穴釣に目的を變へた魔子が、中ぼその鰻を一匹釣上げただけで、僕たちは二人ともやがて退屈してしまつた。陽射しが常になく熾烈で、暑いと云ふよりは殆ど痛いので、水著一枚の僕たちは堪へられなくなつて、匆々にして防波堤を引上げた。途中でいつもの様に一寸潮に浸かつてみたが、思ひがけない水の冷たさに、五分と辛抱出來ないで、顫へ上がつて飛出した。――暫く海が陽を見なかつたせゐなのだらう。

僕たちは脣を白くして、水著からたれる雫を冷たく脚にまつはらしながら、變にうはつらだけ激しく燒けた斜面の砂地を踏んで、急いで天幕へ引上げた。

「蒲燒にして二人で分けない？」

と、からだの水氣をとつて、釣道具をかたしてから、魔子が云つた。

僕たちがちんまりした食事を、リンネルを挾んではじめた時、友人たちを驛まで見送つて行つた隣りの學生たちが、これも變に淋しげに、ぼさぼさと戻つて來た。

「淋しくなりましたね。」

さう聲をかけると、彼等は砂でも落とす樣な口振りで、しかも苦もなげに笑つて、

「恐ろしい今日はまた、急に秋じんでしまつたぢやアありませんか。」

などと云つた。

「兄さんの船はもうどの邊まで行つたかしら。」

食後、思ひ出した樣に彼女は云つた。――僕たちは今朝、狩野川沖にかゝつて搖らいで居る半島廻りの船が、嗄れ嗄れな汽笛を吹いて錨をあげるのを、いつもとは違ふ意味の眼で見送つた。――船には曾我が乘つて居る筈だつたから。

「兄さんは一體どこへ行くつもりなのよ。」

「どこかねえ。」

「面白いところがどツかにあるの？」

「さア。あるのかも知れないね。」

そんな會話を、僕たちはうすべりの上へ轉がつたまゝ、ぼんやり交はした。

暮れがた僕たちは天幕に念入りな戸閉りをして、町へ活動寫眞を見に出かけた。午後から空には薄曇りがかゝつて、恐ろしく氣温が高まつたので、すつかり季節感がまたもとへ戻つてしまつた。町はさすがにもう避暑客も減つて、淋しかつたが、あらゆる冷たい飲みもの店と云ふ飲みもの店は、客で雜閙して居た。僕たちは映畫館の中の人いきれで、すつかり汗じんでしまつたので、天幕へ戻るとすぐに、浴衣を松の梢へかけて、一浴び浴びることにして、素つ裸のまゝ手をつなぎ合つて、星明りすらない眞ツ黒い汀へおりた。――僕たちは秋じんだ冷たい潮へ十分とつからないで、ガタガタ顫へて外へ跳び出した。

「冷たいなア。……」

と、魔子は纖いからだをこごめて、聲を顫はした。さうして、かたかたの耳へ、潮を入れたので、首を傾げてトントンと片足跳びをして居る僕の後ろから、やツとかけ聲をして組みついて來た。

「待て待て！」

と、僕は彼女に組まして置いて[illegible]の[illegible]を取らうと、突然敏捷に脚を拂はれて、彼女にからまれ

たまゝ、一跨に砂地へ轉がつて、ザブリと頭から潮をかぶつた。夜光蟲のこまかい蒼い光が、サラサラと僕の腕に沿つて暗い砂地を流れた。――闇と見境がつかないくらゐに燒けた彼女のからだに、水着の痕だけが無氣味な白い縞を描いて眼についた。

「う、う、う！」

と、彼女は僕の腕の下でからだをそらしてもがいた。

「痛いなア、そこへ裁つちやア。……」

「一寸辛抱をおし。……水を出しちやふから。」

うつかり下から擽られて、脚をゆるめた隙に、彼女は素捷こく起上がつて、叫び聲を立てて、闇の中へ逃げた。妙な彈力のある冷たい觸感だけが、僕の両腕に殘つた。

淡水でからだを拭いて、寢間着――僕は乾着た水着に、彼女は例の底なし袋の様な寛衣にい換へてから、僕たちは天幕の中の寢床をざッと整理した。三人の折とは違つて、設計違ひをしたこの天幕は、二人住まひには恰好な大きさだつた。

「汚ねえ泥棒だな。」

灯りを消す前に、ふと僕は笑つた。

「だつて、……」

と、彼女は脚をこゞめて寛衣の裾を膝の上へ引ッ張つたが、裾が短くて隠しきれないので、もう一度僕にひやかされて、

「ぢやア、……」

と、今度は脚の方へこかして、遠眼鏡の様な恰好にしてとつてしまつた。――僕が腋へ手を入れると、彼女はくるりとこッちへ寢返つて、僕の頭のあたりへ擽つたく髪をたくためて、その中へ顔を埋めた。

翌朝、――空はまた秋の様に蒼く深く透つて、空氣は昨夜の蒸し暑さなどは名殘りもなく、冷え冷えと冴えて居た。波の響も明らかに最早秋を象徴して、寒々と地へ沈んで傳はつた。

朝飯後、隣りの天幕の學生たちと、例の窪地で四人車座になつて、トランプを弄んで居ると、突然僕は菓子屋の女人のところから使を受けて、今しがた届いたと云ふ、母親からの電報を手渡された。僕たちは郵便物の届け先を、便宜上そこにして置いたので。――

電文は、たゞ至急に會ひたいと云ふ簡單なもので、大した凶事もそれからは豫想出來なかつたが、さうかと云つて、性質上いつもの様になげやりにして置くわけにも行かないので、僕は魔子と額を寄せて相談をした。

「いゝわよ、行つても。……兄さんももう歸るでせう？」

さう、彼女は事もなげに云つた。

「用件を電報で問合はせてみようか。」

「さうね。」

「行つてらつしやい。」

と、學生たちは氣輕に云つた。

「天幕のお留守番なら、僕等が引受けますよ。今すぐにお出かけになると、二時の上りには間に合ひます。さうすると、夕方までには東京へ着くでせう……」

「さうですな。」

と、菓子屋の使も、已むなく一座へ引ッ込まれたと云ふ風に、口を挾んだ。

「とにかく、電報でさう云つてよこされるだけの理由は、おありなんでせう。」

僕は今の場合、僕にとつてこの上なしの凶事を豫想してみたが、大した切實な刺戟もそれからは受けなかつた。しかし、とにかくうッちやつても置けないので、僕は彼等のすゝめに從つて、東京へ立つことにして、簡單に身支度をした。さうして、留守の間の天幕を學生たちに託して、あわたゞしく上りの汽車で[illegible]をたつた。――一種歪んだ不滿をば、何にともなく感

じながら。

＊　＊　＊　＊

母との會見の顚末は、一口に云へば、——亡つた父と同鄕の友人である洋畫家の淸島氏（彼は極めて最近にイタリイから歸つたばかりなのだ。）が、偶然僕の展覽會に對する畫壇の批評から刺戟されて、尤も、——そこには彼だけの純粹な氣持のほかに、幾らか母やH・などの蔭からの運動もあつたらしいのだが、——とにかく、進んで僕の保護を引受けようと、母まで申し出たと云ふのだ。

淸島氏はイタリイで一家をなして、どちらかと云ふと日本の畫壇でよりは、ヨオロッパで盛名を走せて居ると云ふ風だつたが、とにかく日本の畫壇にも一中心勢力を持つて居て、僕たちにしても比較的全的な尊敬を捧げる、先輩の一人だつた。つまり、——彼のこの申し出は、僕にとつては、云はば出世の階段に決定的な基礎を與へられたも同然だと云へた！

母の言葉によると、淸島氏は父との古い交友關係などについても、なまなましい記憶を持つて居るので、自分たち母子の現在の境遇にも少なからぬ同情を寄せて、例へば母自身に對しても、H・との關係が面白くない様なら、こんな機會にむしろきッぱりとかたをつけて舊籍へ戻つたらどうか。そんな風にまで云つてくれる。つまり、彼の好意で母子が一緒に救はれると云ふものだ。——淸島氏の引つ立てで、僕が一人前の繪かきになつてくれさへすれば、その上に母の望むものは何もない。いつ死んでも、思ひを殘すことなどはない。——そんな意味のことを、繰返し繰返し彼女はかきくどいた。

淸島氏がロオマにある富裕な貴族の夫人を保護者に持つて、そこへ宏壯なアトリエを構へて、云はばそこで彼の畫境に於ける世界的な地位をつくつた。それは有名な插話の一つとして日本へも傳へられて居た。彼の意嚮は、つまり、——そこへ僕を伴なひたいらしいのだ。

（しかし、）

さう、僕のうちには强く頭をもたげる問題があつた。

（それなら、僕たち兄妹はどうする？　あの天涯の放浪者たちをうッちやつてか？）

（偉くない人間ほど偉いわ！）

まじめにそんなことを主張する魔子の言葉が、僕の頭に甦つたりした。彼女は僕が、二科や帝展の通過を目的に骨を折るのを見てさへ、何故かしら大人ぶつた態度で冷笑するのだ！

僕はかうしただしぬけな提案に對しては、ともかくはつきりした返事を避けて、複雜な未解決な氣持を抱いたまゝ、母と別れた。昨夜品川驛に近いとあるみすぼらしい宿屋の一室に、幾年か振りで母と枕を並べて、彼女の隙[illegible]ない心づかひに勞られつゝも、殆ど僕が睡りをさまたげられたのは、この問題についてだつた。——

家庭。安定な生活。まじめな仕事。地位！

さう云ふ樣なものが、誘惑深く僕の背後にあつて、僕を招いて居た。——どうかすると僕の氣持は、率直にそれに向かつて、兩手を延ばさうとして居るかの樣にすら見えた。

しかし、——僕の眼には、それとは別なものが映つて居た。松の幹へ繩をからげたみすぼらしい天幕が、そこにあつた。兩親の顏も知らずに育つた娘と、そのきやうだいとがそこに居た。さうして、灰色の寂寞がその背後に迫つて居た。

（曾我。——あの男は一體、僕たちに[illegible]るべき人間なのだらうか？）

驛へおりて、——冷いやりした構内の中を拔けて、住みなれた天幕の前まで足を運んだ時、落日は壯大な水蒸氣の[illegible]の中から、眞紅に

を彩つて居た。砂地の斜面には、曾我と魔子とが向き合つて地面へ坐つて、新調の赤い七輪の前で、ハサパサとこれも新らしい澁團扇を動かして居た。

「何だい、電報なんぞで呼びつけられて。…」

と、曾我はフライパンの中を、箸で掻廻して居たのをよして、放膽な調子で呼びかけた。

「U・ちやん！」

と、魔子は急に浮き浮きした調子で、僕を見上げた。

「兄さんのおみやげだよ。炭だつてあるんだぜ！」

僕はぼんやり砂地へ立つたまゝ、彼女の示す赤い新らしい七輪を見おろした。さうして、ふと微笑みかけて、あわててそこから眼をそらした。と、いつの間に取拂はれたのか、學生たちの天幕のあつたあとが、今はからりと遠く松原を透かして、人氣のない闇がそろそろとそこらからにじみかけて居るのが眼に入つて、――續いてそれも、硝子が融ける様に眼の中で溶けてしまつた。

アパアトの女たちと僕と

一

「おい。……」

さう云つて、だしぬけに後ろから二つ三つ拳で肩を叩かれて、われに返つた時、僕はとある佛具商の飾窓の、支那出來らしい紫檀の佛龕に見入りながら、ふと鼻の頭の冷たい觸感に氣をとられて、――いゝ氣になつてあちこちと、厚ぼツたい硝子の面に額を滑らして居た。

振向くと友人の加治と植村とが、極端に輪郭の違ふ顏を二つ並べて、僕を見て莫迦々々しげに笑つて居た。

「熱心に何を見てるんだい。」

瀟洒な白い顏に幾らか皮肉な微笑みを浮かべて、植村は艶やかな洋竹を甃路へおろした。

夥しい雜鬧が夜店の前にうごめいて居るので、彼等は絶間なくからだを人波に洗はれてゐた。

「佛壇でも買はうと思つてね。」

僕は皺んだ手巾で鼻の頭を拭きながら自嘲的に笑つて、飾窓のそばを離れた。――注意の焦點からいつとなく自分を失して、偏執狂の樣に頭の片側へ空虚をこしらへて、ふと氣付いて自分で莫迦々々しく笑つたりするのが、僕のこの頃の習慣だつた。電車のクッションへ腰をかけて、前に立つて居る識らない女の帶止なんぞを無心に指でいぢつて、ひどくはづかしい思ひをしたりなんぞするのは再々なのだ。僕は友人たち二人のやゝ揶揄的な視線の中で、失した自分をまた拾ひ出して、變に瞼の邊を赧らめた。

夜店の前の雜鬧を泳いでこゞツたり離れたりしながら、暫く僕たちは話のいとぐちを見つける餘裕もなく歩いた。

「どうした。さツぱり學校へ見えんぢやないか。」

加治がちよいと立停まつて、鼻の先で圍つた手の中を燐寸で明るくして、それから肩先のまるみを僕に押しつけた。

「やらうか？」

「持つてる。」

僕は彼等のぶこつな手のひらの上の、ペットの箱をちよいと見ただけで、不愛想に答へた。――拘束のない環境から侮蔑的な視線を自分の學生生活へ送つて、社會主義者らしい口調をしばしば、さうして公然と洩らしながら、そのくせ驚くばかり實直に學生生活を送つてゐるこの友人に、僕はいつも不快な、幾らか侮蔑的な氣持を持つて居た。それがなぜか今夜は、妙に僕の心理と相映ずるところのものを持つて、柔らかく喰入つたのだつた。

僕は自分の睫毛の裏に妙な涙の芽を感じた。

「どうだい。少し出て來ないか。」

「うん。……」

「Ｒ・！」

だしぬけに人を掻分けて、植村が後ろから肩をつかんだので、僕は加治との會話を切つて足をとめた。と、植村の口が僕の耳へすれずれに寄つて來た。

「あすこに立つてる女、な。」

「……？」

「そら、あすこに鞄を見てるだらう？　眼鏡をかけて。……」

「うん。」

「あいつを僕識つてるよ。」

僕は無興味な眼を女から戻して、――ぼんやり彼を仰いだ。と、熱心に彼の視線をたどつて、女を物色して居た加治が、むきだしな眼をそッちへ据ゑて、
「美人ぢやないか。」
と、話を奪つた。
「美人だ？」
「何者だい。」
「なあアに。僕ンとこの近所の珈琲屋の娘さ。行きつけのね。」
「カフェか？」
「ぢやアない、珈琲屋だよ。」
僕は玩具屋の前に立つて、彼等の會話を無興味に耳へとめながら、硝子の小さな眼玉を光らせて居る大きな灰色のにりこの熊だの、耳を立ててチョコンと坐つた縫ひぐるみの狆などを眺めて居た。さうして、彼等と歩調を合はせると、
「十五圓はたかいね。」
と、加治を振返つた。
「何がよ。」
加治は莫迦にした様な眼つきを、僕から飾窓へそらした。
「熊がさ。」

僕は舌の根に變にねばねばする塊りを感じて、續けさま足もとへ唾を吐いた。
僕は今夜も感情的なある不快な記憶を殘して家を出た。兄と學校の出席點檢の通知について一寸した口爭ひをして、幾らか端的に感情をぶッつけて、さうして、――さうした決裂のまゝ家を飛出して來たのだ。さばけない、無口な、氣鬱性で通つて居る僕は、めッたに人の中で、とりわけなじみの薄い家族たちの間などで、自分の感情をむき出したりする樣なことはないのだつたが、ふとしたきッかけから今夜はそこへメスを入れられて、――なまなましい血沫きをそこらへはねかして來たのだ。
僕の心理に常住に巣喰つて居るある憂鬱な虚無が、をかしなことにはそんな時に限つて、そのまゝ受賣りの近代思想の鎧を着て、猛然と彼等――と云ふよりは、もつと正しく云へば自分自身の搦みへ、逆襲して行く。それを受けとめられるのは、たゞ一つ虚無の楯しかなかつた。當然、僕はいかめしい鎧の重壓と一緒に、底知れない自分の虚無の中へ、落込んで行かなければならないのだ。
僕は墓場を訪ねる樣な氣持で、今夜も明るい街の雜閙へ索寞と足を入れたのだつた。

「どうだい。……そこらで一杯冷たいものでもやらうぢやないか。」
白い洋竹を[illegible]へかゝへ[illegible]植村が、僕たちを[illegible]いたのは、自動車の途切れを縫つて車道を横切つて、向う側の歩道の幾らか暗い舗道へ一足を載せて、數歩してだつた。僕は自分の氣持を中斷されて、ぼんやり友人の顏を仰いた。
「今夜は僕金を持つてないぜ。」
「いゝとも。」
植村は鷹揚にうなづいて、先に立つた。
カフェM.の光の渦を[illegible]らした入口へ足を入れかけて、ふと僕は店の向うの化粧壁の一部を刳つたベビイショップの、つゝましやかな[illegible]な小さな飾窓を見やつた。店の前には黒ッぽいフランネル風の衣裳をつけた[illegible]か、幾らかまばらな人通りの眞ん中に、小鳥の樣に[illegible]に眼を動かして居た。
「何だい。」
「一寸……」
僕は友人たちをそこへうッちやつたまゝ、三歩四歩、舗道の灯影を切つた。
おかッぱがくるりと跫音に廻つて、灰白い小[illegible]な顏と梟の樣な黒い大きな眼とが、こッちへ向いた。

「T・ちやん？」

「姉さんは？」

彼女ははつきりと頭を振つた。さうして、額にかぶせた髪の毛の中から、華奢な指で大きな黒い瞳を摘出して、

「あたし一人よ。」

と、甘えた口のきゝかたをした。——サイクラメンの匂が手にした花束からむツと僕の鼻を襲うた。

「どうだい、景氣は。……」

彼女は答の代りにからだをねぢつて、腰のつかひをすりつけて、その一箇所へ僕の手を引ツ張つて行つた。と、ポプリンの上衣の下に、——そこのポケットの邊に、ザクリと白銅の軋む重たい感觸をさぐつた。

「大分いゝぢやないか！」

「いゝわ。」

さう云ひかけて、彼女はいきなり僕の足の爪先を踵で踏みつけて、舗路の上を跳んで、タクシーの踏床からヒラリと跳びおりた若い二人づれの男の一人へ、飛びついて行つた。——白い指が敏捷に男の窄ツこい胸の邊で動いて、花籠のくるまツたマアガレットが一輪、白くそこへとまつた。

「歸りに寄つて、ね！」

白い華奢な手のひらの上へ、男の手からキラリと光るものが落とされた時、彼女はくるりとこツちへ小柄な顔を向けて、扉口へ引ツ返さうとした僕に、そツけない聲を投げた。

二

花電氣の下では蟲を透かした斑石の鏡を背に、女人たちが好奇深いはしばみの樣な眼を二對並べて、僕を待つて居た。——僕が席につくと社會主義者は、砂糖壺から眞ツ白い立方形を一つつまみ出して口へ入れながら、早速口を切つた。

「へえ。あいつ君の女友だちかい。」

僕は彼女の花束から背負つて來たサイクラメンの匂を、どこかに感じながら、ポケットにいつも這入つては居るが買つたことはない、ある年嵩の女友だちのところから奪略して來るスプレンデエトの紙箱を出して、一本殘つて居た細い金口を銜へた。

「大分と了解のとゞいた仲ぢやないか。」

植村が品のある口振りを、冷淡に僕へ向けた。

——朝緒たち姉妹のベビイショップが新聞などで騷がれて、幾らか銀座の通人たちの間に識られかけたのはつい昨今のことだが、僕は彼女たちをずッと以前から、——彼女たちが單なる女賣子として、新宿の盛場へ出て居た時分から識つて居た。今云つた年嵩の女友だち、（S・と云ふ筆名で相當に識られた民謡詩人なのだ。）が、友人の木村と風變りな生活をして居る、淀橋のある小さなアパアトメントに、彼女たちも一緒に居たので、そんな機會から近しく往き來をする樣になつたのだつた。向島に姉が一人居て、あるもぐりの外科醫の妾をして居ると云ふのだつたが、二三の事情から彼女たちは、たつた一人のその肉親を避けて、姉妹でそこに自由生活をして居たのだ。

アパアトメントでは繁々と僕が彼女たちのところを、——と云つても、おほかたは二階の民謡詩人を訪ねるついでに、ちよいと寄りみちをすると云ふぐらゐに過ぎないのだが、——訪れるので、僕が姉妹の保護者なんだらうなどと云ふ噂が、一時高まつたりなどした。僕自身から云へば、保護者どころか反對に、彼女たちの乏しい財政から再々小遣ひをねだつたりして居る、甲斐性のない友人に過ぎなかつたのだ！

彼女たちがベビイショップの計畫を思ひつい

たのは、S・さんが英字新聞で見たある寫眞人りの記事から暗示されたのだが、具體的な點では色々と僕が骨を折つたのだつた。銀座のカフェM・の主人と識合ひなのを手づるに、到頭M・のコンクリートの化粧壁の一部へ、二尺角の窓を開けさせて、三百圓たらずの資本まで主人に出させてしまつた。尤もそれには、單純な僕の奔走以外に、彼女たちと彼との間に、ある種の妥協が成立したせゐでもあるのだが。
　美貌な女給たちを集めることの上手な、好色家の主人は、どうやら自分で打つた網に自分で引ツかゝつたと云ふ風だつた。いつしか娘たちは大びらで、彼に著物をねだつたりする様になつたのだ。
　彼女たちは、そこへジャスモンドの香水や、フランスやドイツのさまざまな媚藥や、雜多な贋ものの會員券などを色々と並べて、M・を根城に、かたはら花と『壺』とを賣つて居たのだ
「妹の方が美人だね。」
　櫻ンぼうの沈んだカクテルのグラスを配られると、いち早くそれへ唇をつけた植村が云つた。
「さうかね。」
　と、加治は反噬的な口振りで、
「俺はむしろ姉の方へ好意を持つな。」
「處女ぢやないだらうけれどもね、どツちも。……」
　上品な植村が、輕くこだはつた眼を僕につけて、珍らしく露骨な口調を弄した。
「女賣子が十六七にもなつて、處女だつたら奇蹟だ！」
　と、社會主義者が駁した。
「女賣子にア限らねえ、あらゆる近代の女性がだ。」
「しかし、」
　と、植村は幾らか冗談らしく、
「少なくも僕の妹は處女のつもりだけれどね。」
「あの面ぢやアね！」
　と、加治が無遠慮にやツつけた。
「……せめて僕に似りアね！」
「へ！　そこまで徹底すりア、むしろ同情するがね。」
　と加治は嘯いて、
「おい、一本くんないか。」
　と、僕の方へ手を出した。
「お生憎さま。空だ。……」
　僕が華奢なスプレンデェトの紙箱を指で彈いて、卓子の面に滑らせると、彼はそれでもそれを手にして、一應中味を調べながら、まるでそれとは無頓着な口振りで、
「R・に一つ紹介して貰つたらどうだい。」
　と、植村の顔を見た。
「……ついでに、俺にもツてなわけなんぢやないのか。」
「冗談ぢやねえ、こン畜生！……察しのいゝこと云ひアがる。」
　と云つて、うわッはッはッは！　と、加治は天井へ笑ひ上げた。
　外へ出ると、――思ひがけない雨だつた。こまかい霧雨が幅の廣いヴェイルを空からたらして、街の灯りを包んで、甃路を濡らして居た。右へ左へと行き交ふ自動車のヘッドライトがそれを映して、恐ろしい長い光芒を顫はして居た。
「誰かしら傘を持つてアがるから癪だ！」
　雨の中へ立つと、だしぬけに加治が高聲を立てた。
「君の筆法で行けば、……小市民的利己主義だと來るんだらう。」
「ふん。」

社會主義者は歯牙にもかけないと云ふ風で、くるりと視線を轉じて、

「お嬢さんたち雨で逃げたな。」

ベビイショップは四角い窓枠へ黒く鎧扉をおろして、そこらには鞆繪の姿も妹の奈々子の姿も見えなかつた。

「さて、……一寸俺は芝浦へ用事があるから、失敬するぜ。」

尾張町の角まで引ツ返すと、突如、加治は云ひ出した。さうして挨拶もなくそのまゝ縄跳びでもする様に濡れた線路をまたいで、向う側の歩道の雜沓の中へ、姿を消してしまつた。

「どうした。元氣がないぢやないか。」

霧雨の中を肩を並べて歩きながら、ふと植村は僕を顧みた。彼の厚い近眼鏡が沫きに溺れて、キラキラと灯りを溶かして居るのが僕の眼についた。——僕はだまつてたゞ憂鬱に微笑んだだけだつた。

新橋驛で手のひらの様にすれ違つた向きの違ふ電車へ、別れ別れに乘つたのは、それから數分してだつた。

三

「どうしたの？」

僕をアパアトの蔦のからんだ粗末なポオチへ迎へると、鞆繪は僕のからだへ手を觸れてみて、いきなり叫んだ。僕は彼女の色の褪せた古びた白ツぽいネルの寝間著から、ふと牛乳の匂をかいだ。

「こんな雨の中を今時分。……」

僕は帽子を床へ振つて雫を切つて、だまつて先に立つて扉を開けた。

——部屋にはもう夏のよそほひがしてあつた。八疊と二疊と續きの古びた日本間で、その八疊の半分へ彼女たちは床敷を擴げて、——籐の低い卓子だの腕椅子などを据ゑて、部屋を二色に使ひ分けて居た。殘らずで十ぐらゐしか部屋のない小さなこのアパアトメントは、つい露路のとツつきのF・と云ふ雜貨商が經營して居るので、F・莊と呼ばれて居たが、淀橋のアパアトで一般には通つて居た。別にさう云ふ規定があつたわけでもないのだが、なぜか若い女たちの世帶が多いので、煤けた低い赤煉瓦の垣をめぐらして、蔦に覆はれたこの漆喰の建物は、どこかに妙なある艶かしさを藏して居た。

錆びた細い鐵棒のアアチに卵の殻の様に、外燈のこはれた表門をくゞると、正面にポオチが三つ並んでむやみに蔦をかぶつて居た。その右のはしのが鞆繪たちやS・さんの部屋ので、ホオルの左側に鞆繪たちの部屋の扉があり、ペンキ塗りの階段を眞ツすぐ昇ると、二階のS・さんの洋間へ出る様になつて居た。

各部屋々々は完全に厚い壁で仕切られて居て、窓の向きも大體考慮されて居た。たゞ、天井の高い狹い廊が建物の北側を貫いて、どの部屋もそこへ戸口を持つて居たので、そこを開け拂つて置くと、建物全體に包藏された共通な雰圍氣、——もの音や、匂や、何かしら人の多く住むところにつきまとふ落ちつかないものの氣配などが、侵入して來た。

ガスや水道などの配置された共同の臺所と、——風呂と便所とが、その廊の中ほどからT字形に北へのびた別の廊に接してあるので、そこでだけはこの建物に住む全家族たちが、朝夕顏を合はせた。

鞆繪たちは蔦のトンネルの下の薄暗い二疊へ、一杯に蒲團を擴げて、そこを寢室に使つて居た。僕はよく彼女たちの留守にそのちんまりした寢間へもぐり込んでは、白粉くさい女達の體臭にくるまつて、づうづうしく午睡を貪つたりなどしたものだつた。時には女たちの間へ挾まつて、雜魚寢をしたりする様なこともあつた。

「莫迦ね。雫がたれるわよ。」

彼女は鼻から、不愉快に頸へねばりつく濡れたセルを外すと、その代りに幾らか汗くさい、彼女のメリンスの半纏を壁からとつて来て、無雑作にポツた手つきで肩から羽織らせた。

「病気になつたらどうするの？」

「うちへ帰れなくなるからね。」

さう冗談にふざけて、それから僕は濡い絞りのいいしごきを締めた、

「姉さんは今夜は帰らないのかい？」

彼女は曖昧に椅子を動かして来て、だまつておかッぱをあげて、——頭を振つた。

「二階の人たちは？」

「みんな居る。」

彼女は曖昧に僕とボツつけて、椅子へ深くかけて、けだるげに答へた。さうして、肘突へ肘を載せたまゝ、滑らかに手首を動かして、卓子の上の錫のシガアセットを僕の方へ動かして、——恐ろしいすました顔をヒョイとあげた。

子供らしい小柄な顔には白粉がむらに剥げて、血色の冴えない窶れた顔や、睫毛をかこんだ荒んだ不健康ないゝなどが現れて居た。幾らかおでこな額から、子供らしく反れたほッすらした鼻すぢ、蓬の緻密な皮膚が、おかッぱの蔭で牙の様に冷たく光つた。——

「お茸。」

「へえ。……」

僕は憂鬱な眼を表へ、おどけた表情をつくつて見せた。さうして、彼女のまねをして肘突の上でこの様に手首を廻して、錫の箱からエアシップを一本つまんだ。と、——敏捷に彼女の手の中で燐寸が小さな焔をあげて、華奢な彼女の指を赤く透かせた。

「一M・で一緒だつたあの男の人たち、お友だち？」

「うん。」

僕は蠟の吸口を歯で潰した——彼女は血の色を透かせて薄く乾いた唇を、子供の様にまるく尖らかして、ぢッと光る眼を僕の口元へつけた。妙に潤ぐんだ黒に光る眼を。

「君は女優になるといゝよ、映画の女優にね。……」

「なアぜ？」

「君の[illegible]だからさ。」

「なかなか美人だから？」

彼女はからだを椅子の背へぶッつけて、仰に頭を凭らして、——おかッぱの中へ指を突ッ込んで、ムシヤムシヤと髪を掻いた。

「あたしこなひだ姉さんに叱られちやつた。……」

「なぜ？」

「吉原へ行つてお女郎にならうかしらッて云つたのよ。」

「お女郎だつて結構ぢやないか！」

「さうよ。」

と彼女は脚を組んで、

「…姉さんなんぞとてもだめよ、若くて。——」

さう無[illegible]に云ひかけて、不意に僕の[illegible]、窮屈に立つた。

「一寸待つてね。……あたし、コ、アをいれたげるから。パンか何ぞ喰べる？ 喰べかけでよけりア鮭の鑵詰もあるわよ。」

「さう。……何か喰べさしてくれるかい？ 本当を云へば僕今日は夕御飯もまだなんだ。」

「ぢやM・で喰べたらよかつたぢやないの？」

「お金がなくちや喰べられないぢやないか！」

「哀れなやつね。」

僕は一寸不快な、——と云ふほどでもない、何かある憂鬱な眼で彼女を仰いだ、と、だしぬけに彼女はからだをこゞめて、華奢な手を僕の首へからめて、モシャモシャと髪を僕の額へかぶせた。

「Ｕ・ちやん慍つた？」

僕は冷たい手で、幾らか邪慳に彼女の髮を掻きのけた。――彼女たちから淨折小遣ひを惠んで貰つては、それでカフェ廻りなどをして居る僕は、なぜかこんな場合にかうした意識をもつて、冷たく自分に反抗しなければならない、變なこだはりを持つて居たのだ。

「うるさいな、放しておくれ。…」

「厭や、厭や、厭や、慍つてるんだから。」

彼女は鼻を押しつけて頭を振つた。

「慍つてなんぞ居アしないよ。」

「慍つてるわよ慍つてるわよ！」

彼女は僕の顏の上でまた頭を振つた。さうして、僕の指にどこかからだを擽られて、――突然華やかな笑ひ聲を立ててそこから跳び退いた。

四

數分の後、僕たちは人氣のないひつそりした臺所に、ガス焜爐を前にして、椅子を向き合はせて居た。

――若い焔にあぶられて、ニュウムの湯沸しが針でつく樣な音を立てはじめた時、扉の把柄がコトリと遠慮深く廻つて、ひよッこり幹ちやんが[illegible]僕たちの[illegible]であた。お[illegible]を出した。

彼は夜更けのがらんとした臺所に、僕と兩綿の姿を見出すと、一寸意外だと云ふ樣な眼をして、それでもなつッこくそばへ寄つて來た。

「誰かと思つた。今時分灯りなんぞついて。…」

さう云つて、彼は流し臺の上から瀬戸引きの湯呑をおろした。

「なに？」

「水を呑みに來たんです。」

と、幹ちやんは板壁へ並んだ龍頭の、錆びたニッケルの柄を手にして、僕たちを振向いた。

――彼は男ものには幾らか紅の勝つた毛深いネルの寢間著を、長めに脚へからませて、幾らか醉つて居るらしい美しい顏に、眼をギラギラ光らせて居た。――S・さんに踊などを習はされて居るこの美少年は、手足やからだまで變にしなしなやはらかで、女の子か何ぞの樣だつた。

「S・さんは？」

「寢ちやつた。…」

と、彼は剝げた瀬戸引きの湯呑を脣のところへ傾けて、華奢な喉をコクコクコクとせはしく動かして、さう云つて、またそれを龍頭の下へあてがつた。

「コヽアを沸かしてるから、飲んでかない？」

低い丸椅子の上でくるりとからだを廻はして、兩綿が僕を仰いだ。

S・さんの口を借りると、以前に乞食をして居たと云ふ、――さうして、彼自身もごく小さな時分の記憶に騷がしい橋の下か何ぞで、手拭の袋から母親に[illegible]を出して貰つて居た憶えがあると云つて居るこの少年を、彼女は妙な病的な、ある偏執したしかたで可愛がつて居た。十四の年まで養育院に居て、そこから引取られたのは、市役所に給仕の勤を周旋されたからだと云ふのだつたが、彼はたつた四日間名刺受を持つて市役所の廊下を[illegible]つただけで、不意にそこから失踪してしまつた、給仕仲間から、ニッケルの懷中時計を一つと萬年筆を一本と盜んで。

仲間の使嗾によつたのだつたが、期待したほど彼等に歡迎されなかつたので、彼はすぐに彼等から離れて、それから、淺草界隈の不良少年の仲間入りをして、――主として年齡の[illegible]たちと一緒に行動をして居たのだつたが、そんな職業がどこか彼の氣に染まないので、遂に彼等の群れを脱出して、自由勞働者の仲間入をして、暫く[illegible]川に居た。S・[illegible]

そこでなので、その時分にS・さんが關係して居たあるプロレタリ・藝術雜誌の讀者として、彼女に會ひ會ひしたのが、そもそも彼等が今の樣な關係を結ぶに到つた動機だと云ふのだつた。

その後S・さんは間もなく、思想生活の變轉から、その雜誌の一派と關係を斷つてしまつたが、相變らず彼等は親しく往き來をして居た。F・莊の二階へ一緒に世帶を持つ樣になつたのは、彼が十六の年で、まるで弟の樣な氣持で彼女を慕つただけだと云ふのが、彼女に對する彼の氣持の告白だつた。

S・さんのところでもしかし、彼はよそ眼ほど幸福ではないらしかつた。感情家の彼女は莫迦々々しく溺愛し、彼にからみついたかと思ふと、突然感情を歪まして、變に冷たい憎惡をもつて彼に對したりした。さうして、そのたんびに鞆繪たち、親身な同情にかばはれて居ると云ふ風だつた。――どうかすると、乞食あがりのこの美貌の少年は、保護者に十日もうッちやりぼうけを喰はされて、その間ぢう階下の女たちに三度の食事から小遣ひまで惠まれて、云はばみすぼらしい食客生活をしたりなどして居たのだつた。最近そんなことから、幾らか思想的な覺醒期へでも來たか、しきりに社會主義の書物などを讀みあさつたり、時折彼自身の生活態度について、非難的な口調を洩らしたり、似た樣な議論を吐いて鞆繪たちを共鳴させたりなどして居た。

「R・さん。あなただつて、そして鞆繪ちやんたちだつて、もう眼醒めてもいゝと思ふんです。どんな不合理な生活をしてるか。……」

そんな口調を、面と向つて吐いたりすることもあつた。――彼がアパアトを飛出して、無産運動の渦へ投じるのは、今では時の問題だと云ふ風に鞆繪たちにはとられて居た。僕は半分莫迦にして居たが。

「ぢやア少し遊んでおいで。かまアないんだらう？」

「えゝ。……」

彼は赤く濡れた熱ぽッたい唇を、ネルの袖で拭いて、煮え切らない風でつぶやいた。

「僕、しかし君たちの邪魔をしてるんぢやないんですか。」

「莫迦ね！　あんたは。」

鞆繪は、眼下の者にでも對する樣な口振りで、柔らかく相手を叱つた。

「あんたを邪魔にする樣なことなんか、あたしたちしてやしないわよ。」

「さうですか。……」

「おかけさない。」

彼女は立つて椅子をあけて、命令的に云つた。

「煮立つたね。」

「えゝ。」

彼女は卓子の前に立つて、甲斐々々しくコンデスミルクをたらしたり、砂糖をしやくッたり、茶碗の支度をしたりなどした。彼女の古びた白ッぽいネルが、仕立ておろしの[illegible]な艶らしい、紅の艶いた幹ちやんの寢間著と、眩しい室燈素電球の下で、變なそぐはない對象をなした。

「鞆繪ちやんの著物なんですか。」

幹ちやんは剝げた大きな瀬戸引きの湯沸へ、八分目ほど甘味の濃い泡だつたコゝアをついで貰ふと、いゝ舌なのでフウフウ忙がしく息をかけながら、まじめな眼で僕を見た。鞆繪の派手なメリンスの借著が、變に僕に映つたのだらう。

「S・さんの御機嫌はどうだい君、この頃。」

「惡いわよ。」

鞆繪は厚ぼッたい白い、柄付きの茶碗を口ばたへ持つて行きながら、少しからだを沈ませて

僕のかたかたの膝へかけて、話を奪つた。

「詩人なんて、機嫌を惡くしてなきアいけないものと、あの人思つてるのよ。」

幹ちやんは、それだけが彼の容貌の創である、幾らか金魚の樣に膨らんだ桃色の臉を、湯氣の向うへ消して、それから、おツかなびつくり湯呑の緣へ口をつけた。羅紗の眞ツ赤なスリッパの上へ爪立てた彼の蒼白い華奢なかたかたの脚が、變にこまかく神經的に顫へて居るのが、何かなし僕の眼を惹いた。

「あんたとその邊はちよいと似てるわよ。」

鞆繪は茶碗を空間の一點へ置いたまゝ、僕を顧みた。痛いほど眞近く眼の焦點を置いて。――

「さうかね。……僕は詩なんぞ書かないけれどね。」

「だつて、何か書きたがつてるぢやないの？　お醫者さまなんぞになるのは厭やだつて、もうせんから云つてるぢやないの？」

彼女の膝頭が白くすべすべと現れたので、僕はだまつてそこへネルをかぶせてやつた。さうして、彼女の方はうツちやつて、そのまゝ幹ちやんに向かつた。

「君の詩はこの頃どう？」

「だめなんです、鞆繪ちやんがあとからあとからとけなしちまふんだから。……」

「鞆繪ちやんの批評なんぞ、あてにすることたアないぢやないか。」

「なかないわよ！」

また彼女の膝頭がすべツとむき出たので、僕は指の先でそこを直してやつた。

「ぢやア、君の主張をきかうぢやないか。」

「この人は藝術をたゞの手段に使はうツてのよ。自分のブルジョワ意識を、詩でもつて攻擊しようツてのよ。」

「頗る結構ぢやないか。」

「鞆繪ちやんの議論は、S・さんの受賣りなんですからね。」

と、幹ちやんがわきからひやかした。

「違ふわよ。」

「へえ。どこが？」

「あたしは、自分は少なくもプロレタリヤの味方よ。その點ではS・さんにも姉さんにもあたし反對だわ。でも、藝術をたゞの手段だとは思はないわ。手段だつたところで、それを借りなきアならないだけ、何かしら意義があると思ふわ。S・さんの主張にあたし贊成だわ。」

「偉い！」

「ちツとも偉くなんぞないわよ。たゞ、あたしの方が本當なのよ。U・ちやんだつても間違つてるわよ。あたしは繪にかいた林檎よりかなまいののをいつも欲しいんだから、プロレタリヤだけれど。……U・ちやんなんぞ、お兄さんにお金を貰つて、それで足りなくツて、またあちこちとお小遣ひをねだつて、のんきに大學なんぞへ行つてるのよ。そして口ぢやさもさも學校なんぞ輕蔑して居る樣な振りをしながら、腹ぢや反對にあたしたちを輕蔑してるのよ。……だからブルジョワだわよ。」

「へえ。……ブルジョワはまアいゝけれど、僕が君たちを輕蔑してるかね。」

「輕蔑してるわよ！」

「いつ？」

「こなひだだつて、」

と云ひかけて、熱ツぽく續けて、ひよいと彼女は僕を振返つたが、もつれたおかツぱの蔭で、妙に自嘲的に脣を歪めて笑つて、

「……ブルジョワたちの御機嫌を買つて、お樂みのお裾分けをして貰つて、それが立派な藝術の口實になるんなら、世の中に藝術でないものはないなンて。……お便所へ長く這入つてたもんだから、お便所の臭ひがわからなくなつたんだなンて。……また色んなことを云つたわよ、色

で顯れたので合點が行つたが、今度は肝腎な自分の氣持が、どこかへ迷兒になつてしまつて居た。

「そんな恰好をして、風俗壞亂よ。」

「ぢや脱ぎませう。」

ふと氣持が變つて、——家へ歸りたくなつたので、いゝ、いさこさなしに僕は椅子から立つた。

「帽子掛へかゝつてた濡れた著物あんたの？」

「さうです。」

「何だつてまた、溝へでも落ツこつた樣な濡れかたをしたの？」

「もう雨は歇みましたか？」

「歇んだわよ、とうに。……」

扉口から出ようと鞆繪の前を通ると、彼女はどこかもの憐ましい情慾的な眼を仰向けて、だまつて僕を見た。——美ちやんはこツちへ關心のある眼をちよいちよい送りながら、手巾を鼻頭で濡らして、著物の下前の邊をちよいちよいこすつた。

「歸るの？」

鞆繪の睫毛に涙が光つた。

「歸るよ。」

僕は[illegible]に默つて云つた。

「追出されちやつたから。……」

寢間の戸口には緋更紗がおりて居た。僕は卓子の上へ白粉くさい鞆繪のメリンスを脱いで、——肌の縮む樣な薄ら寒さを覺えながら、まだ存分に濕つて居る自分のセルを肩へ引ツかけた。

彼女たちと僕との關係の、最初のいとぐちを切つたのが奈々子なだけに、——さうして、現在でも彼女と僕との關係は、再々單なる友情の範圍を越えて居るといふ風だつただけに、お互ひの氣持は何等の修飾もなく、素朴に互ひに交流した。むしろそんな點ではよそ眼には僕たちは、極めて冷淡な仲の樣に見えたかもわからなかつた。

永の樣に無味な透明な彼女に、僕なんぞが幾らかでも興味を持つたといふ樣なことは、むしろ極めて矛盾した話だつた。實際僕たちの關係が、單なる氣まぐれから出發したものでなかつたとしたら、むしろ彼女と僕とは赤の他人といふ以上に、——男と女との間に普通するほんの僅かな魅力も、互ひに持合はなかつたに違ひない。

かうした氣持の關係は、現在に於いてもさう變りはしなかつた。いはゞ、慣れたカフェの席でもくつろぐ樣に、[illegible]の點から[illegible]々と彼女のうちへ這入り込める。——そんな一種の習慣が、僕たちの間に保たれて居るに過ぎなかつた。僕たちの關係が氣持の點でもその他の點でも、莫迦々々しく淡々として居たわけは、要するにそんな理由からだつたのだ。

「あんたは姉さんが好きなの？」

鞆繪は時折不思議さうに僕に、そんなことを訊いたりした。しかし、——僕たちの不思議に淡い無味な關係を、言葉で說明をつけることなどは、僕自身にも出來なかつたのだ。

僕が著物を着替へて、いゝ、きのこの樣な濕ツぽい帽子を手にすると、ふと卓子の上の眼ざましを見た鞆繪が、

「電車なんぞもうないわよ。」

と、奈々子を振向いた。

「歩いて行くからいゝよ。」

——電車賃には一二錢不足だつた樣な氣のする財布の中味を、懷ろの中でまさぐりながら、僕は云つた。奈々子は一寸濡れツぽい眼で、濡しをれた僕を見た。さうして不意に、

「およしなさい、歸るの。」

と、命令的に云つた。

「……そこの長椅子へ、どうかして二人で寢られないこともないわよ。」

彼女は冷淡に壁ぎはの長椅子を頤でさした。――彼女のところへ誰かが訪れて、寢臺を占領すると、(それが大體して彼女の職業の領域だつたが、)鞆繪は扉の外へ閉め出されて、そこの長椅子へ毛布にくるまつて一人で寢た。僕はよく朝早めに彼女たちを訪ねた折などに、そこの部屋の隅ッこの長椅子へ、猫の仔か何ぞの樣に小さくなつて寐て居る彼女を、見い見いしたものだつた。

彼女にさう云はれると、鞆繪は非常に敏捷な眼をちよいと僕へ投げて、すぐにその視線を彼女へ戻した。

僕はだまつてぼんやり笑つた。

「鞆繪ちやんと寢るかな。……蹴飛ばされちまふからなア。」

僕は肩をすくめて扉口へ向かつた。――風邪でも引きさうな寒けを、ぞくぞくと全身に感じながら。

外では幾らか風が猛つて居た。頭の上で蔦の葉が濕ッぽくざわめいて、雫を地面へ降らして居た。僕はステッキの象牙を冷たく指に感じながら、何かしらまだ解けない、ある不快な憂鬱なものを自分の足の向きに感じながら、帽子の前つばを深く額へおろした。

――ポオチの石床を切つて、濡れたコンクリートの階段へかゝつた時、だしぬけに後ろで扉が開いて、灯影を黑い人影が切つて、――蝗の樣に鞆繪が僕に飛びついた。

「なに?」

彼女は答の代りに、重みのある黑い濕ッぽいものを僕の手のひらへ載せて、指をかゞませて、どこか淚を感じさせる黑い大きな眼で、ちよいとおかッぱの蔭から僕を仰いだが、

「さよなら!」

と、すゝり泣く樣に叫ぶと、だしぬけに頸へ手を捲いて、脊のびをして、冷たい柔らかな唇を下から押しつけた。さうして、次の瞬間にはもう、敏捷な脚を階段に飜へして居た。――

僕が手の中のものを財布だと確かめて、――それは鞆繪の銀貨入れだつた。――さうして何氣なく中味の、彼女の肌の温氣をとゞめた重いザクザクした觸感を、指でまさぐつた時、庭の灯りを遮つて扉が閉まつて、錆びた把柄の廻る音が闇へ徹つた。

六

――家庭での自分の地位を、僕は膿みきつた腫物か何ぞの樣に感じて居た。いつそれは薄皮を喪つて外へ流れ出すかわりに、なか[illegible]した生活、不安に對する[illegible]、學生生活の[illegible]力な僕から奪ひつゝあつた[illegible]は當然だつた。父の[illegible]兄として中學[illegible]田舍の[illegible]で送つた僕は、父の[illegible]へ復歸し[illegible]、家風の者たちにさう自然になじめる筈はなかつた。上の兄弟たちがそれぞれ[illegible]に仕[illegible]、父の病院を受繼いで居たので、自然[illegible]もに[illegible]きめられたともなく醫者、學校へは入れられたが、醫者としての自分の將來と、さうして何よりも目下の學生生活とに、全く最早僕は希望をなくして居た。――極端な兄の專制にもとづく家庭生活の不愉快が、大[illegible]してその理由をかたちづくつては居たのだ[illegible]

家庭での僕の存在は一箇の影に過ぎなかつた。義母も義姉たちも異分子として僕を[illegible]るほどの關心すら、僕には持たなかつた。田舍の養家の乏しい生活などとはくらぶべくもない、社會的地位を持つた豪奢な環境にひたりながら、僕は破れた肌着を一枚さへ、田舍の養母にねだつては換へて貰ふといふ風だつた。

主人と召使とほどに待遇の違ふ兄たちと食卓を共にするのが厭やなので、出來るだけ食事どきを避けようとて、空腹をかゝへて宿なし犬

の様に食事どきの街をうろつき廻つたり、豆餅なんぞを買つて暗がりの通を歩きながらこツそり喰べて、お腹を膨らがしたり、時折思ひたつた様に氣まぐれに誰かから惠んで貰ふ小遣ひを、大事になくさない様に少しづつ使つたり、さうした人にも打開けられない様な不滿は、それだけまた僕のうちに歪んだ内訌のしかたをするのだつた。

(思ひ切つて。——)

さう、時折僕は突詰めてある決心をしてみたりすることがあつた。さうして、家庭を離れてさてどうして喰つて行くかと云ふ様な問題について、まじめに頭を悩ましたりすることもあつた。僕は僕の天分に頼れるほどの自信もなかつたし、鞆絵たちの様に自分の肉體を資本にするわけにも無論行かなかつた。もしかすれば勞働だが、僕のからだがにはかにそれに堪へられるかどうか、それにも僕は自信がなかつた。

僕がしみじみと僕自身と死んだ兩親たちとを結んで考へたりするのは、そんな時だつた。どんな意志を彼等から受繼いで、この世へ僕は生まれたのだらう。そんなことを僕は考へた。

僕にとつて人生は暗かつた。僕は僕の生涯に〔神樣〕の惡意を認めた。——僕が兩親から受繼いだのは、たゞ彼等の罪惡の影法師に過ぎない。——そんな氣がした。

「そんな人生の觀かたをして、どうして君が君自身の存在を肯定して居るのか、僕には解せないよ。」

さう云ふ加治の言葉を僕は思ひ出すのだ。僕はその時云つた。

「あたりまへだ。僕にさへ解せないんだから。」

しかし、一匹の蛆蟲の存在にも、誰か〔自然〕の意志を否定出來よう!

「何が一番自殺のしかたでは樂なんですか?」

ある時、僕はなるべく道化た風で、藥局のK・さんに訊いたことがあつた。なるべく道化た風を粧はなければならない様な氣がしたので。——

S・さんや幹ちやんや鞆絵たちが、大きく友情の手を擴げて僕を待つて居るアパアトは、僕の生活からは云はば綠天地も等しかつたのだ!

七

翌る朝、僕はいつもより一時間の上もぐづぐづと寢床で時を過ごして、さうして學校へ出かけた。義母や兄や義姉たちと食卓で額を合はすのが厭やだつたから。——僕は鞆絵の財布の六十五錢(それだけきり這入つて居なかつたので。)に大きに自信を持つて、空腹をかゝへて家を出た。

高い明るい空からは昨夜の様に霧雨が降つて居た。濡れた花崗石の階段を昇つて行くと、空を透かした蛇の目の明るい紺青が、チラチラと脚のぐるりに動いた。僕は圖書館の高いゴシックの煉瓦建の下に立つて、暫く雨に煙つた品川灣を遠く家竝の果てに見おろした。

「昨夜は失敬。」

化學室の附屬變電室で白晝ともつたパイロットランプの下にスヰッチを弄つて居た植村が、便所から戻つて來た僕に云ひかけた。

「珍らしく君なんぞが來るから雨だよ。」

「雨は昨夜からだよ。」

「大きに、それアさうだがね。」

大體して級友たちに親しみを持てない僕は、交友の範圍なども極めて狭くて、植村や加治を除いたら、片手の指をかゞめるくらゐに過ぎなかつた。こゝでも僕の存在は單なる影に過ぎない様な氣がした。それはものを云はなければ顧みられもしなかつた。——無論、邪魔にされ

る筈もなかつたが。

「君は不可解な人物だッてえ一般の評判だよ。」

一番腹蔵なく腹を打開け合つて居る藤井が、そんな風に僕を評して云つたことがあつた。しかし、そんな評判も級全體から抽出されたものなぞでは無論ないので、むしろその意味で云へば加治が僕を評した様に、

「君は級ぢや空白だよ。」

と云ふ方が正しかつた。

物理の講義が天井へ反響して降つて來るのを聞きながら、僕は植村と階段教室の一番高い列の机に席を並べて、――その蔭へ寢轉んで、彼がポケットから出したウヰスキーボンボンをつまみながら、雑談をした。

「昨夜はなにへしけ込んだかい？」

「……？」

「ベビイショップの娘さんとこへさ。」

「ふん。……」

僕はパラフィン紙をゴソゴソ云はして、ぼんやり無意味につぶやいた。

滑らかな教授の講義や、ノオトの上を走る忙がしいペンの軋りや、せき拂ひや、ヒソヒソ話や、さう云つたものが妙に落ちつかない雰囲氣をかもして、それがとりわけ僕たちの存在を淋しく遊離する様な氣がした。

「くだらねえことをしやべつてアがるな。」

と、植村は貴族的な上品な口付きをして、殊更亂暴な語調をもらした。さうして、ちよいと頸をねぢつて頭をもたげて、机の上緣から低い教壇を見おろした。

「一體醫者になるのにボイルシャアルの屁理窟なんぞが必要なんかね。」

「必要ぢやないから教へるんだらう。」

植村は妙な眼をして僕を見た。

「何の意味だい、そりア。」

「僕にもわからない。……」

こゝで僕たちはニヤニヤ笑つた。

「變なとこで會合なんぞしてちやいけないぜ。」

二時間續きの授業の中間休憩の時間に、――教授が扉を開けて助手と一緒に教室から姿を消して、騒然たるざわめきが部屋全體から跳ね起きると、下の席から階段を上がつて來た藤井が、僕の背を叩いた。

「やア。……」

僕は半分身を起こして、

「こなひだの電話は失敬。留守だつたもんだからね。……何用？」

「なアに、郷里から[illegible]が届いだもんだから、遊びがてら持つてつてやらうと思つたのさ。」

「そいつア殘念したな。」

「おいR。」

と、加治が後ろから聲を割込ました。

「……こいつをまた少し頼む。」

僕は彼から黄色のアドリナリンの空瓶を受取ると、だまつてポケットへ突ッ込んだ。――社會主義者は肥厚性鼻炎でコカインの中毒を起こして、しじうそれを兄の病院の薬局から僕に盗み出させて居たのだ。

「分量は些とでもいゝから、十プロぐらゐにしてくれないか。濃すぎりアこツちで割るから。……アドもやつぱり這入つた方が效くなア。」

「何だい、またコカインか。」

藤井は好人物らしく柔らかく笑つて彼を見た。さうして、机に腰をかけて茶色のセルロイドのパイプを銜へたが、鐘が響いて來たのでポケットから出しかけたバットの箱をそのまゝ引ッ込めた。

「今日はしまひまで居るかい？」

「居るつもりだけれどね。」

「つもりか。」

と彼は柔らかく苦笑した。扉の間から教授が姿を見せたので、そのまゝ彼は僕の隣りへ席をとつた。――いつの間にずべつたのか姿を消してしまつた植村の席へ。

八

帰りに四谷見付まで藤井と同行して、そこで僕は彼と別れて新宿へ向つた。暮れがたまでS・さんのところで過ごさうと思つたのだ。雨は歇んだが空はひとッきりよりも暗くなつて、ひどくせはしなくたそがれが来さうな気がした。

F・荘へ曲る角の薬局のところで幹ちやんを見かけたので、僕は声をかけた。

「アスピリンを買ひに来たんです。」

美少年は井の字の大がらな紺飛白を匂はせて僕を振向いた。さうして、畳んだ手巾を懐ろから出して、洟をかんだ。

鬱陶しく蔦をかぶつたポオチからホオルへ上がると、階段の下に、――そこのコンクリートの床に、素焼の鉢が一つこなごなに砕けて、グロキシニヤのあざやかな紅の花冠が、一塊の湿り土と一緒に無慙にも圧しひしがれて居た。

「どうしたんだい？」

幹ちやんは、――彼も一寸あッけに取られたと云ふ風にそこらを眺めて、それから、何かしら当惑した渦巻いた視線を僕に戻した。

（またかい？）

さう云ふ眼を瞬間彼に投げただけで、しかし僕はそのまゝ先に立つて、ずんずん埃ッぽい階段を上がつて行つた。――幹ちやんを顫へ上がらせるS・さんのヒステリイも、僕にはいつもお茶の子なのだ。

扉を開けると、S・さんは男の着ける様なピジャマを羽織つて、窓のきはに、――卓子へ腰をかけて、大きなキラキラしい鋏を手に、腕椅子の天鵞絨の肘突へ載せた素足から、爪をとつて居た。部屋へ足を入れると、彼女は煙の様にモシャモシャと縮らした断髪をもたげて、ずるげな視線を僕につけて、

「ノックもしないで女の部屋へ這入るなんてないわよ。」

と、非難をした。さうして、ヂョキリ！と大きく一度鋏を鳴らして、太い蒼白い腿をピジャマの金色の裾へくるんで、――床へ脚をおろした。

「僕ノックをしなかつたかしら。」

「したつもりなの？」

僕は彼女と眼を見合はしたまゝ幾らか苦く笑つた。かう云ふささいな失策をこの頃しじう僕はしつけて居るので、多少でも自信をもつて相手を反駁することは出来なかつたのだ。――幹ちやんはどッかへ引ッかゝつたと見えて、まだ扉口には見えなかつた。

三つある窓にはどれにも厚ぼッたく窓掛が引かれて、卓子のきはのが一つ隙ほど片側から絞られて居るきりなので、部屋の空気はあけがたの様にものうく暗かつた。まだ昼の身仕舞ひもろくろくしてないらしい白粉のむらな彼女の顔だけが、その中で眼立つて居た。

僕は立つたまゝ卓子の上の莨入れから、スプレンデエトを一本つまんで、銜へて、――燐寸を擦つた。

「下のあの鉢はどうしたんです。」

彼女はゆつくりと窓掛の籐の腕椅子へ腰を落として、冴えないあくびをして、こめかみの辺を指で掻いた。

「あたくしにも一本頂戴。」

「何です。起きたばかりなんですか。」

彼女は答へる代りに折曲げた指で口元をこすつた。さうして、擦つてやつた燐寸へ、有難うとも云はないで、莨の先をこゞめた。――彼女が

好んでつける絲杉の匂が、煙にもつれてふと僕の鼻へ觸れた。僕はだまつて立つて窓掛を大きく片側へ絞つた。

たそがれの樣に外は暗かつた。鬱陶しく沈んだ淡い蒸發氣の向うに三越の高層建築が、そこひの樣に不快な白さを眼立たせて居た。

——嘗てプロレタリヤ運動の急先鋒として知られたR・N・黨と接觸して、徹底した主張を散文詩の形式などで發表して居た彼女は、輕業の樣なあざやかな轉廻をやつて、突然以前とは對蹠的な地位に立つてしまつた。彼女の口調を借りると、これもマルクスの辯證法に從つてプロレタリヤ意識の中にブルジョワ思想の萌芽を感じたからで、要するに時代的な公式を先行して示したに過ぎないと云ふのだつたが、それはどうやら半分は眞實な彼女の告白であるらしかつた。マルクスによる唯物主觀的な人生觀に不滿を感じはじめたのが、彼女の思想に轉期を與へた動機となつたらしいので、彼女はそれをみづから『自己中毒』と名付けて居た。

「マルクスによる唯物的社會觀は、それ自身の辯證法によつて自己崩壞をする。」

さう云ふのが彼女の豫言だつた。

彼女はまた仲間だつたプロレタリヤ藝術家たちの生活をよく非難した。プロレタリヤ藝術の主張は正しい。だが彼等は大概して非プロレタリヤか、さもなければ非藝術家だ。つまりそこから生まれるものは、ブルジョワ藝術の一形式か、さもなければ階級感情の單なる「記錄」だ、と云ふ風に。

「記錄は藝術ではないんですか。」

嘗てさう僕は彼女に訊いたことがあつた。その時彼女は斷じてさうではないと云つて、如何なる藝術的感激も記錄でこれを傳へる時には、それは科學の領域を出ない。藝術の決定的條件は感激の再經驗だ。彼等は科學と藝術とをとン間違へて居ると嘲笑した。

「今のプロレタリヤ藝術はマルクスによる社會科學の藝術的解説に過ぎないんぢやないんですか。」

さう僕が論駁をすると、彼女はフンと嘲笑つて、プレハアノフの藝術論でも讀んで、それからプロレタリヤ藝術を批判しろと云つた。しかし、——プレハアノフと云へど幾多の誤謬を持つて居る。何よりも許し難いのは、彼がブルジョワ藝術の『角』を矯めようとして、藝術の『牛』を殺してしまつたことだ。そんなことを彼女は云つた。

社會主義藝術にもとづく「美」は封建主義乃至資本主義藝術の「美」よりも低く偏在する。空氣の樣に無價値に見えるが空氣の樣に重要だ。そこに意義ある社會性を含んで居る。——さう彼女は說いた。

彼女の藝術家としての情熱は過剩ながらそれ以上の美を見てしまつたから」だと云ふのだつた。——

「階下の人たちみんな居て？」

彼女は二三度曖昧に煙を吐くと、もう一度小さなあくびをして、——腹が空つた樣な口のききかたをした。さうして、立つて一つ一つ窓掛を絞つて歩いた。

「それよりも鉢のことを訊いてるんぢやありませんか。」

彼女は絞つた窓掛の一つを紐でくゝりながら、振向きもしないで答へた。

「あたくしが落としたのよ。」

「わざと？」

「さうよ。」

彼女は淡泊にうなづいた。——小さな跫音が階段を登つて來て、コツコツと遠慮深く扉が鳴つた。

「幹ちやん？」

「えゝ。」

扉の隙から幹ちやんはおづおづと顏を見せた。——S・さんは頸の長いベルモットの瓶を、手にしたグラスの縁へ傾けながら、くるりと頭だけ振向けた。さうして、變に落ちついた冷たい眼で、綠色の絨氈へぢかに載つた白い華奢な彼の素足から、頭の上まで見上げて、そこへぢツと暫し視線をとめた。

「藥局まで幾里あるの？」

——幹ちやんは耳の邊まで眞ツ赤になつて、彼女の視線を避けて俯向いて、せうことなげに懷ろから白い紙箱と桃色の小さな購買票とを出して、だまつて卓子のはしへ置いた。

階段の下から耳馴れた鞆繪の口笛が、陽氣にティティナアを吹きはじめたので、僕はくさくさした一座の雰圍氣を透して、そツちへぼんやり耳を貸した。

「飲むンならさツさとお飲みなさい！」

S・さんの聲がとげとげしくグラスの上から響いた。

いたづらいたづらしい跫音が一つ一つ間を置いて、忍ぶ樣に階段を登つて來た。指ほど開いた扉の隙にひよいと黑くおかツぱが見えて、續いて鞆繪の白い小粒な顏が象牙の樣に黑く大きく眼を光らせて覗いて、——その眼がおいでおいでをした。

「……？」

脣のところへ白い華奢な指が一本動いたので、僕はだまつて一座を背に絨氈を横切つた。

外の中繼段のところで僕を迎へると、鞆繪はいきなり頭へ手を捲いて、僕の顏をこゞめて、冷たいおでこを僕の口へぶツつけた。さうして、ぐんぐん亂暴に僕の手を引ツ張つて、階段をおりて行つた。

「こゝンとこに今鉢が壞れてたでせう？…S・さん上からあれをはふつたのよ。」

「いつ？」

「さツき。…幹ちやんがお使に行きかけて、あたしたちンとこへ引ツかゝつてたのよ。あたしたち丁度いゝおやつの時だつたもんだから。そして、幹ちやんが出て行つたと思つたら、ガッシャン！　とあれをはふつたの。」

さう云つて扉を閉めて、

「あの花昨夜新宿でS・さんに買つて貰つて、とても幹ちやん自慢をしてたのよ。」

「自分で買つてやつて自分で壞しアそれでいゝぢやないか。」

さう云つて、僕は彼女と向き合つて長椅子へかけた。

「姉さんは？」

「お風呂。」

鞆繪は昨夜僕が着けたメリンスを着けて居た。かたかたの袂がとれさうに大きく綻びて、腋や腕のつけねが白く覗いて居た。——白粉氣がないので顏色が暗く冴えなかつた。白いたむしがむらについた幾らか透明な皮膚や、病的な眼のくまや、埃ッぽい細い頸すぢなどが、變に彼女を年には荒ませて見せた。

「昨夜の議論はどうだい。」

彼女は幾らかてれた樣な眼をして僕を見つめた。さうして、

「あたしの財布を返して頂戴な。」

と、華奢な手のひらを出した。

僕はポケットから獸の膽の樣に財布を吊るし出して、彼女の手のひらへ載せた。

「這入つてるわよ、まだ。」

「うん。」

「いらないの？」

「だつて返せつて云ふからさ。」

彼女は淋しい情感的な眼をして瞬間僕を見た。

「あたし、お金を返せなんて云はないわ。」

さう云つて彼女は財布の口を開けて倒さまにして、チャラヂャラと中味を卓子の上へ落とした。さうして、それを手のひらで僕の方へ邪慳に動かした。
「いらないのかい？」
「いらないわ。」
「だつて、また姉さんに叱られるんぢやないかい？」
「……。」
彼女の瞳が妙に暗く奥へ拡がつたと思ふと、見る見るそこへ涙が一杯に浮かんだ。
「ぢや半分わけにしよう。な？」
辟易して僕は主張を変へた。
「十二銭づつ。……丁度だ。」
涙の粒が大きく下瞼のところへ零れかけた時、突然彼女は恐ろしい派手やかな口付きをして笑つた。
「英迦ね、あんたは。……」
「なぜ？」
「もう叱られちやつたからいゝわよ。たつた十二銭ぽッち。……」
さう云つてポロポロと頬から頤へ涙を零しながら、神経的な笑ひ声を立てた。……どうやら今日はこの建物はヒステリイで一杯の様だ。このぶんだと奈々子だつてどうだかわからない！
さう僕は腹でくさくさと考へた。
それでも僕は彼女をなだめるつもりで彼女の手を取つた。
「……？」
彼女は男の子の様に別の指で眼をこすつて、わざとらしい晴れ晴れしい表情をしてみせた。さうして、腰をもたげて棒ぎれでも倒す様に僕にからだをぶッつけて、長椅子へ移つて、窮屈に僕と並んだ。大人びた女の匂が幾らか不潔な汗ッぽい臭と一緒に、僕の鼻を襲つた――僕はかたかたへ廻した彼女の指先を擽つたく腋に感じながら、捲毛の消えかけた彼女のおかッぱへ斜に頤を載せた。
「下島さんは今朝まで居た？」
「いゝえ。」
鞆繪は頸を振つた。
僕はふと、いつぞや銀座のM・の主人が酔つたまぎれについ洩らした、英迦々々しいある打開け話を思ひ出した。――はじめて鞆繪を新宿のあるホテルへ連込んだ時、相手は半分子供だし、どう切出したものかと大いに懊悩しながら二階へ彼女を誘ふと、暗い階段の中途で、
「赤ちやんを生ましちや厭やよ。」
と、淡泊にこちらから切出したと云ふ調子を、
「さア。……帰らうかな。」
さう、何気なく僕が身じろぎをすると、
「厭や！」
と彼女は抱いた手に力を入れて、両手と頭を振つて、メリンスの中でからだをくねらした。
僕は彼女の破けた袂のところから手を突ッ込んで、――熱ッぽい彼女の体温を指に感じながら、腋の下のゴムの様な皮膚を擽つた。彼女はぢッとして居た。
「よし。」
僕はもうかたかたの手を窮屈に二人の間へ挟んで、こッち側の腋の下を著物の上から一緒に擽つた。彼女は僕の鎖骨の窪へ、深く伏せた鼻から、ほんの一寸ばかり笑ひを洩らしただけだつた。
「驚いた無神経な奴だなァ」
彼女のからだを無理に剥がして椅子から立たうとして、僕はびツくりして彼女の顔へ眼を据ゑた。――彼女が髪の根まで燃える様に真ッ赤になつて僕を仰いだからだ。――

九

「緑朗さんよ。」

誰かが二つ三つステッキか何ぞで扉を叩いて、——傍若無人な跫音を立てて階段を上がつて行つた時、彼女は一寸眩しい眼をして僕を見て云つた。さうして、氣付いた樣に立つて行つて、帽子掛の蔭から羽根ばたきと立箒とを持つて來て、卓子の上などをかたしはじめた。

「姉さんに叱られちやふとこだつた！」

「掃除かい？」

「えゝ。……一寸ごみになるわよ。」

幹ちやんがニッケルのお盆へ紅茶のセットを載せて、カチカチ云はせて扉の間から顔を覗かせた。

「御免なさい。……鞆繪ちやんとこに紅茶ある？」

「お紅茶？」

彼女は長椅子の背へ羽根ばたきの手をやめないで、顔をあげた。

「粉ばツかになつちやつたもんだから、……一寸分けてくんない？」

「そこの棚にあるわよ。四角いブリキのがんがんよ。」

「誰？　お客さまは。」

「緑朗さんです。」

幹ちやんは戸棚からリプトンの箱を出して僕を見た。

「僕今紅茶をいれて、それから晩御飯の支度をするんですけれど、R・さん臺所へ來ません？御馳走をしますから。」

「さう。ぢや僕もお手傳ひをしたげよう。」

僕が幹ちやんのあとから廊へ出ようとすると、不意に鞆繪が「ちよいと！」と呼び止めた。さうして、ピョンピョンと身輕に床を跳んで來て、羽根ばたきをぶらさげたまゝどこにもからだへ觸らないで、ヒョイと振向いた僕の顔へ唇を押付けた。

「莫迦。……」

彼女は踵を床へおろすと扉を内から叩きつけて、キャッキャッはしやいで逃げて行つた。

「S・さんの御機嫌はなほつたかね？」

夕御飯の支度でぼつぼつ人のこみはじめた臺所で、片隅のガス焜爐を挾んで椅子にかけてから、僕は幹ちやんに云つた。——彼は憂鬱な眼でだまつて頭を振つてみせた。

以前にS・さんと純粹に夫婦關係を結んで同棲して居たことのある緑朗氏は、生活派の中堅歌人で、プロレタリヤ文藝の先覺者の一人だつたが、今でもどうかするとアパアトへ彼女を訪ねては、三四日ぐらゐづつ泊り込んで行つた。徹底した家族制度の否定論者で、男と女とは必要な時に相手を求め合へばいゝので、必要がなかつたら喰ッちまつても一向さしつかへがない。子供は街頭へおッぽり出して育てるべきで、家庭の雰氣なんぞを吸はせるのは毒ガスよりも害になる。さう云つた意見を持つて居た。噂によると子供が二人あると云ふのだが、どこにどうして居るのか本人も識らないらしかつた。支那ぢやないが兄弟が南と北とで戰爭なんぞする様だつたら、頗る華々しいぢやないか。——そんなことをよく口にしいしいして居た。

古い頃の高商出でがらにもない肩書を持つて居たが、マルクス主義藝術の移植を日本へ企てたのは、嚴密には自分が皮切りだと云つて威張つて居た。とにかく彼の私有財産否定論や家族制度破壞論などは、僕たちがぞくぞくした氣持で共鳴せずには居られない、徹底して愉快な議論だつた。僕はそんな思想に關する書物などは讀んだことがないから、彼の議論が如何なる受賣りだかどうだかは識らなかつたが、何しろ僕が僕の家庭で一種不滿に思つて居るところを、グイグイとメスを突ッ込んで斬つてくれるので、たまらなく愉快になつてしまふくらゐだ

つた。

一度などはつい彼の議論に有頂天になつてしまつて、彼の懐ろから紐をたぐつて財布を引摺り出して、

「つまりこんなものだつて僕たちの共有なんですね！」

とやつて、大きに叱られちまつたことがあつたつけ。――

幹ちやんにはひどく肩を入れて居て、自分が幹ちやんだけの閲歴を持つて居たら、もう少しいゝえらくなれたんだつたがなどとよく云つて居た。要するに常識は彼の敵だつた。――

「お客さまに出しがらをやるのかい？」

幹ちやんから、お茶を受取つて僕はからかつた。

「だつて、どうせあの人には味なんぞわかりアしないんですよ。」

「あすこいらがプロ派の藝術家なんだね。」

「それよかこツちの方がいゝですよ。」

と、彼はレモンの切り身をナイフで動かして、

「……あの人に云はせると、僕のプロレタリヤ詩なんぞはまだまだ貴族のあくびに過ぎないつて云ふんです。君は堕落した堕落したつてね。もう一度觀音さまの土臺の下へむぐり込まなきア君は救はれないつて云ふんです。……とても猛烈ですよ。」

「ぢやあの人はプロレタリヤであることを誇つてるんぢやないか。」

「無論ですよ。」

「僕はプロレタリヤ運動つて云ふのは、プロレタリヤの不滿から出發したので、その解放を叫んで居るんだと思つてたんだけれどね。僕なんぞも現在の家族制度などには大いに反抗心を持つてるんだけれど、これなんざ明らかに不滿からだね。もしかすると悲鳴かも知れない。」

「あの人たちは悲鳴なんぞ立てやしませんよ。虐げられる者の反抗をするのは、正義感があるからぢやありませんか。……第一あの人たちはブルジョワなんぞ人間と思つてアしませんよ。」

「平家に非ずんば人に非ずツて奴だね。……恐ろしいそいつアまた特權主義ぢやないか。餘色的貴族主義ツて奴だぜ、そりア。」

幹ちやんは茶碗や砂糖壺なぞを載つけたニッケルの盆を持上げながら、

「二階で一つ議論をしませんか。」

と、幾らか反抗的に、――と云ふほどでもないが、さう云つた口振りで挑んだ。

「しようかね。」

と、僕は冗談らしく應じた。さうして、茶碗の中を匙で掻廻して、

「……僕は腹が空つてるからまアこいつにしとかうよ。プロレタリヤ藝術の議論なんざ偉い人にまかせといて。」

と、これは自分では頗る皮肉に云つたつもりだつたのだが、幹ちやんは案外無神經な笑ひかたをしただけで、

「ぢやちよいと行つて來ます。」

と、扉の間から姿を消した。

田舍の豪家がS・さんの郷里と同じ町内にあつて、親戚同樣につき合つて居たと云ふ樣な關係から彼女と識つて以來、このアパアトには僕はもう二年このかたのなじみなのだが、彼女や幹ちやんや朝綱たち姉妹のほかにはとりたてて入懇の者とてもなかつたので、かうして忙がしさうに働いて居る人々の間に取殘されてみると、變に一人ぼツちで手持ち無沙汰で、てれてしまつた。釜から湯氣を吹かして居る細君、パンをトオストして居る娘、野菜などをおぼつかなげに刻んで居る子供、さう云つた大勢の若い女たちが、ガス焜爐や流しの前に立つたりかけたりして餘念なく働いて居た。とりとめもない

話題がその間に交はされて居たが、それらはいづれもあたりさはりのない家庭の打開け話や、ほんの當座の話題、――どこそこの魚は新らしくて安いの、野菜はどこで買ふの、やれ袂を引摺るの、お尻が焦げるのと云ふ様な、他愛のないおしやべりばかりだつた。

一軒の家も構へないで間借りなどをして居る人たちだから、生活にさう惠まれた人々でないのは確かだつた。恐らくこゝに今からして居る人たちも、晝間は紫色の事務服か何ぞを着けて、どこかの大きなコンクリートの建物へでも出入りをして居るのだらう。家族がみんなで働いて居る。――さう云つた社會の人々なのだ。

僕は自動車で見舞ひの人々の繁々と出入りをする、お金持の病人ばかりを收容した贅澤な兄の病院や、新築した私宅の離れで陽射しに餓ゑた様な蒼白い顔をして、退屈げに時折ピアノを鳴らしたりして居る義姉や、――人生に興味をなくしたと云つた干からびた姿で、一日水盤へ砂などを撒いて居る義母たちの生活、さう云ふ社會のもう一極に存在する事實について、考へずには居られなかつた。

この驚くべき對比の底には見えない階級の渦が動いて居た。加治等の様に階級々々と聲を嗄らすまでもなく、一人々々が知らず識らず崩壊か建設かの役割の分子をつとめて居るのだ。富、倨傲、浮華、安逸、さう云つたものが華々しい夕陽を浴びて夜の闇へ落込んで行く一方には、窮迫と、反抗と、質實と、勤勞とが、薔薇色の黎明から浮かんで來る。――いつの世にも繰返された事實なのだ！

（しかし、）

さう、僕の頭に閃くものがあるのだ。

（加治や綠朗氏等の叫ぶあの社會運動が、果して薔薇色の曙を永遠に人生にもたらすところのものなのか？　あれもやがては崩壊して行く社會の階梯の一つに過ぎないのぢやないのか？）

さう云ふ聞えざる聲を僕は虚空に感じるのだ。

（いつの時代にそれなら人生は薔薇色に輝いた？――自然の威力に怯えて暮らした始原の昔にか？　專横な帝力の下であらゆる藝術が黄金色に光つたと云ふ中世紀にか？　昨日の落日を浴びて居る資本主義の時代にか？）

（否！）

（それなら、加治等が聲を嗄らして居る來るべき新社會にか？）

（否！）

さう云ふ聞えざる聲を僕は虚空に感じるのだ。

人生の創始に種播かれた矛盾、『充たされざるもの』は、いつにあつても生命の後ろへ黒い影を曳いて居る。社會はその影を追つて後ずさりをして居るのではあるまいか？　それが畢竟人生にかけられた『自然』のわななのぢやないのか？

劍を抜いて先頭に影を拂つて居る『眼醒めた』人々も、そのあとへ一塊りに騒然と續く『愚な』大衆も、――まばらな追隨者も、やはり同じく暗い長い影を足元に曳いて居るのではあるまいか？

僕は蒼茫と暮れかけた梅雨晴れの都會の空に、煤けた巨大な煙突を仰いで、社會の渦の聞えざる響を耳にしながら、ふと心内に巣喰つて居るあの不吉な暗黒の虚無へ落込まうとして、その瞬間に瞑想を破られた。後ろから忍び寄つた鞆繪がだしぬけに僕の頬へしなやかな腕を捲いて、亂暴に僕を搖すぶつたのだ。僕はこなごなに碎けた幻想の隙から、鞆繪の[illegible]ッぽい爛れた様な脣を見た。

天井には電燈がともつて、人々は眩しく肩を聳かしてその下に蹲いて居た。

十

「……あたし今おでんをこさへて御馳走をしたげるから、待つてよ。ね？」

彼女は袂から大きな錆びた鍵を二つガチャガチャと出して、流し臺の下へこゞみかけて云つた。

「姉さんのとこへ行つてらつしやいよ。ぢき御飯にするから。……さもなきアお手傳ひをしてくれる？」

「失敬しちまつた。……」

と、幹ちやんが扉を開けて這入つて來た。彼はよそ行きのセルを着けてきちんと兵兒を結んで、毛深いハンチングを手にして居た。

「綠朗さんが新宿で何かおごるツてもんですから、これから出かけることになつちまつたんです。」

「行つて來たまへ。」

「今夜はゆつくりしてらつしやるんですか？」

「さア。そんなにゆつくりもして居られないけれど。なぜ？」

「なぜツてこともないんですけれど。……ぢや行つて來ます。」

鞆繪は小さな擂鉢の中へ一塊り味噌をしやくつて落として、グイと擂こ木で押付けて、

「あたしお味噌を擂るから、U・ちやんこんにやく切つてくれる？」

と云ひかけて、

「譃よ。いゝわよ。あたし切るわよ。」

と、氣の毒げな眼をして自分で打消した。

幾らか人のすきかけた臺所で、僕は二十分ほど鞆繪の仕事を手傳つた。――丸椅子へかけて膝の間へ擂鉢を挾んで、その間僕はぐるぐると擂こ木を廻した。鞆繪は俎の上でブツブツとこんにやくを刻んで、小さな瀬戸引き鍋へ入れてガス焜爐へかけた。

「工夫がいゝわ。」

彼女は輕く擂鉢の縁を抑へながら云つた。さうして、ちよいと指を突ッ込んで頭へ味噌をくつつけて、ペロリと舐めた。

「上出來よ。」

「一寸から過ぎやしないかい？」

「だつて御飯のお菜なんですもの。このくらゐがいゝわよ。」

「こんにやく焦げやしないかい？」

「大丈夫よ。あれよく煮た方がおいしいのよ、コリコリして。……脚くたびれない？」

「こリア女のする商賣だね。」

さう云つて僕は膝を動かした。――女の職には處女擁護術なるものがあつて、そして、とふざけた話をきかせた病院のW・博士の言葉を思ひ出したのだ。鞆繪は微笑に僕の言葉をとつて、

「そりアきまつてるわよ。」

と云つて、膝の上から擂鉢を取上げた。

僕たちが三人で夕飯の食卓を圍んだのは、それから間もなくだつた。窓の外には存分にもう闇がはびこつて居た。蚊が少し出たので卓子の下には蚊遣を立てた。味噌は擂鉢のまんま卓子へ載せて、小皿とフォークとをめいめいに配つた。

「あんたは本當にお天氣屋さんね。」

奈々子が靜脈の透いた纎い手で、御飯ふかしから僕の茶碗へ御飯をよそりながら、靜かに云つた。

「昨夜の不機嫌なんてなかつたわよ。」

――彼女は湯上りなので珍らしいいゝ血色をしてゐた。腺病質らしい華奢な頸すぢの邊でも、それが濃いめな白粉を桃色に透かして居た。ふたところ切つたるゐれきの痕が、そこへ醜く

引ッ吊れて眼についた。
「兄さんとまた喧嘩でせう？」
「兄貴との喧嘩は毎々さ。鞆絵ちやんも喰べたらどうだい。うまいぜ。」
　彼女は戸棚の蔭へ洗つた拭巾を幾つも吊るしながら、ふとくしやみをした。
「おでんおでんてこなひだッから騒ぎなのよ。……どッさり召上がれ。」
「きうり姉さんまだなまぢやなくて？」
「さうね。これお午に入れたの？」
　突然コツコツと表の扉を誰かがノツクした。帯を締め直して卓子のそばへ寄つて、自分の椅子を動かしかけた鞆絵は、立つて行つてそッと内側から把柄を引いてみた。と、だしぬけにM・の主人がぜんまいのふぐれる様な笑ひ聲と一緒に、脂肥りのした大きなからだで扉を押退けて這入つて來た。
「あら、いらつしやまし。」
「さしつかへありませんか。はツは。……よう、これはR・さん。御飯ですかい。こりアどうもお邪魔をしましたな。さア、かまひませんからどうぞどうぞ。」
　鞆絵が扉を閉めて戻つて來る前に、奈々子は鞆絵の椅子（椅子は三つきりないのだ。）を静かに彼の前へ動かした。
「よくいらつしやいました。……御飯をはじめたところなんですの。」
「どうですM・さん、おでんは。」
「や、どうも。……」
　と、M・さんは綺麗に剃刀をあてた、むくむくした桃色の大きな顋を、柔らかさうな手のひらで撫でて、眼鏡をはづして酒飲みらしい縁の赤い眼を、興もなげに卓子の上へ落とした。眼鏡は素通しなので、彼自身の告白によれば伊達にかけて居るのだ。
「珍らしいものがありますな。は、は。……いや、歩き廻るとなかなか蒸します。」
　と、彼は手巾を出して脂鼻の邊をぐるぐるとこすつて、ふと床敷のはしへ妙な思案顔をしていしよんぼり立つて居る鞆絵を振向いて、不意に年寄じみて柔らかく笑つた。
「こりア、鞆絵ちやんの椅子をわしが占領しちまつちやア。……さう、わしはあの長椅子へ御免かうむらう。」
「長椅子をこッちへ動かして來て、みんなで卓子を圍まうぢやないか。……」
　さう僕が立ちかけると、
「いや、いや、」
　と、M・さんは、太い短い手で抑へて、
「構はんでそちらはやつて下さい。……わしはあちらで一服やりますから。」
　と云ひかけて、なぜか彼は金鎖をたぐつて時計を出してみた。
「よろしかつたらM・さん、こんなものでも御飯を御一緒にいかゞでございまして？　まだおすみではいらつしやらないのでせう？」
「いや、さうしても居られん。」
　さう云つて彼はちよいと鞆絵を見て、その視線を幾らか氣兼ねさうに卓子の方へ向けた。
「いや今日はね、少し天氣がくさくさするから息抜きをしようと思つてね。鎌倉へでも一晩行つて來ようと思ひ立つてやつて來たんだがね。……さしつかへがなかつたら鞆絵ちやんにでもお伴を願はうと思つてな。どうだな鞆絵ちやん。」
　彼女は白粉氣のちつともない蒼い沈んだ皮膚へ、妙な蠱惑的な眼をしてちよいとばかり微笑んだ。さうして、ためらふ樣な眼眸を奈々子へと僕へと、さうしてまたM・さんへと移して、こめかみの邊をかぶせた斷髮のおかッぱを子供の樣に撫で掻いた。
「別にさしつかへ、なんぞないでせう？」

さう奈々子は明るく淡泊に云つて、

「ね？」

と、妹を仰いだ。

「どうだね鞆繪ちやん。鎌倉で御馳走をするぜ。」

「そいつアおでんよりアよささうだね。」

と、碌な感動を感じなから僕は氣にもないことを云ひ添へた。——

「おや、すぐに支度をなさい。それとも、……も少しゆつくりなすつていらつしやる？」

「いや、すぐに出かけよう。そのつもりで來たんぢやから、……お化粧なんぞいゝよ鞆繪ちやん。向うで出來るから。著物だけちよいと換へて貰ひア。」

さう云つて、袂の綻び口から脇の覗いたしどけない彼女の居間著姿を、好色らしい眼でぢッと見た。

「ぢやさッさとなさい。……セルがいゝわよ。」

「えゝ。」

氣の乘らない風で彼女はつぶやいて、——僕を見ないでくるりと踵をそむけて、床を横切つた。綸更紗を分けて、寝間へ這入つて行く彼女の子供々々した後姿が、妙な淋しい印象を僕に與へた。

M・さんは鎌倉に一寸した別莊を持つて居た。夏になると代る代る女給をやつては黒々と海燒けをさせたりして、一人で喜んで居た。以前に一度僕はそこへ彼を訪ねて三四日滯在を强ひられて、女給の合宿か何ぞの樣に女ばかりゴロゴロして居る中へ置かれて、變にてれてしまつてへこたれた覺えがある。——

「おや今晩はあちらへお泊り？」

奈々子が意味ありげに彼を仰ぐと、M・さんはてれた樣に銅色にてらてらした大頭をさうツと撫でて、僕を見て、

「まさか、これから歸つても來れんぢやないか。」

と柔らかく笑つて、

「御遠慮なく召上つて下さい、R・さん。……わしはこゝで待つとるから。さつき植村さんが店へ見えとりましたよ。今夜あたりあんたが見えんかななどと云つとりましたつけ。」

鞆繪が齡には澁い新調のセルを着けて、帶を締め締め綸更紗の間から出て來ると、奈々子は立つて行つて、グイ、グイとはしからそれを締めつけてやつた。もともと華奢なからだがくびれるほどそれで纖くなつた。

「まア一口おでんをパクついておいで。折角こしらへたんだから。」

「鞆繪、」そばへ寄つて來た彼女を仰いで云ふと、彼女は遠き[illegible]樣な淡い灰色の瞳を、もつれたおかッぱの下へ曇らせたまゝ、だまつて頭を振つた。僕は彼女のふくんだ大きな黒瞳から、瞬間何かしら責める樣な表情を讀[illegible]つた。

「では、出かけませうかな。」

M・さんに柔らかく促されると、彼女は細い冷たい指を僕の手から拔いて、さうして、父親に伴なはれる娘の樣な子供々々しいあどけない風で、くるりと踵を返して彼の後ろにスリッパを飜した。

奈々子が見送りに扉口まで立つて行つたあと、僕は何か空虚なある淋しい眼で、縁の缺けたまだ汚れめのない小さな鞆繪の皿を見た。さうして、暗い閉ざされた氣持で何かなし鍋のこんにやくをフォークの先に轉がした。——ぞんざいに不揃ひに切られた、いかにも鞆繪の仕事らしい鍋のこんにやくを。

年譜

明治三十四年四月二十七日父の任地である千葉縣佐倉町で生れた（原籍地――茨城縣霞ケ浦湖畔）。生後數箇月で一家茨城縣下妻町に移轉、こゝで幸福な少年時代を過した。父橋詰孝一郎は落合直文の門下で國文學者として教育界に識られ、霞ケ浦湖畔に千數百年の家系を持つ香取神社の社司の裔。橋詰は一族で部落をつくつて居た土豪。當時茨城縣立下妻中學校に教職を勤めた。母りくは越後南蒲原郡の土豪の出。樋口一葉などとともに同じく落合直文の門下であつた。當時にはめづらしい戀愛自由結婚をなした仲である。

兒女五人。うち男女二人缺けた。雄は三男。

明治四十一年下妻町尋常小學校に入學。

大正二年縣立下妻中學校に入學。

小學の六年間專任教師を擔當した渡邊孝三郎氏からあらゆる寵愛を受け、終世忘れ得ない懷しい記憶を殘した。

當時から、「土」の作者でありアララギ派の歌人である長塚節、筑波根詩人横瀨夜雨と家庭的親交が深かつた。長塚節の短篇小說「教師」は父を主人公とせる寫生的文學であり、當時の好箇な家庭的記錄の觀がある。同本篇中母の手に抱かれて萬遍ない愛嬌を振りまく幼兒としてモデル的に活躍して居る。

大正七年中學卒業。父死。

中學在學中より自然科學――物理化學に最も興味を持ち、電氣と機械工學とに熱中した。高周波電流の生理的效果を追求し、物理療法に對する興味から醫學修業を希望するに到つた。文學に對してはまだ全く興味をよびさまさない。趣味は詩、音樂、繪畫。オウケストラの大作曲を思ひ立つて、これに熱中したことがあつた。主題は『誕生』、受胎、姙娠、出產等の生理的現象を科學的に象徵しようとしたもの。約二年にわたる病氣、上級學校の受驗準備等のために遂に完成を見なかつた。

大正十一年慶應義塾醫學部に入學。

間に關東大震災を挾み、昭和二年に中途學業を廢した。原因は震災の翌年に海軍軍醫であつた次兄を失ひ、更に長兄と意見合はず、直接的に肉親の擁護をなくしたためと、學生生活の單純な時間の拘束に堪へられなかつたため。研究室、工場、アトリヱを兼ねた書齋で顯微鏡を覗き、機械製圖を引き、ハンマアを握り、繪筆をとつた。

これよりさき文學に興味を感じ出し、長篇小說の執筆にかゝつた。題名『シャア・イスメッド・ミルゼ』、インド、支那、日本等東洋の國々の民族性や國際關係とヨオロッパ諸國からの政治的侵略等を背景とした一王族の歷史的悲劇を扱つた前後篇千六百枚ほどのものを完成した。およそ莫迦々々しく雄大なスケエルと複雜な近代社會相を內容に盛つたもの。プロレタリヤ文學乃至モダアニズム文學の先驅となるべき幾多の要素を含んで居る。最近某新聞關係から發表の懇請があつたが、表現技術に幼稚な點があり多く加筆を要するのでその餘暇なく、そのまゝに放棄してある。

この長篇完成とともに更に第二の長篇「眉宇莊」の執筆にかゝつた。

これは純粹な戀愛小說であり、モダアニズム文學作品である。八百枚で完成。やゝ表現技術の上に自信を持つに到つた。

この頃天文學に興味を持ち、地球史、地質學、火山の研究をし、一時的に建築設計をはじめ、五千人の觀客席を擁する總大理石の豪華な大劇場の建築設計に着手して、滿一年これに沒頭した。誇大妄想狂の類である。このお蔭で、建築様式、室内裝飾、家具調度、衣裳等に關する豐富な知識を得た。安塚千春氏の寵遇を得て居た。

昭和三年四月たまたま「改造」十周年記念號の懸賞創作募集に應じ、中篇小說『放浪時代』の前篇二章を應募提出して一等に入選した。プロレタリヤ文學が壓倒的勢力を得て居た時代で、囂々の世論を起したが、結果は毀譽なかばした。

これを機として佐藤春夫の知遇を得た。

昭和三年十一月「改造」に短篇小說『アパアトの女たちと僕と』を寄せた。これは『放浪時代』よりも世評が喧しかつた。この作品に對してははじめてモダアニズム文學の名稱が與へられた。名付親千葉龜雄。この作品は谷崎潤一郎の稱讚を得た。懸賞當選作『放浪時代』とこれとが作者に作家として一つの決定的地位を與へたと一般に云はれて居る。

昭和四年四月久野豐彦と識る。肝膽相照す。

同年秋十三人倶樂部の一員に加盟、マルクシズムを排するプロレタリヤ文學圏外の作家的立場を明確に標榜する。

昭和五年一月久野豐彦を愛知縣知多半島の寓居に問ひ、プロレタリヤ派文學運動に對する正式抗爭を計畫協議し、その具體案を練る。久野豐彦は經濟學說の立場からマルクシズム社會運動を否定するに對し、文學的立場からマルクシズム文學運動に抗議する立場をとる。

同年二月「近代生活」同人となり、久野豐彦とともにその編輯プランに力をそそぎ、純然たる反プロレタリヤ文學運動を表白挑戰した。新興藝術派の名稱を創造し、中村武羅夫氏を說いて「新潮」をこの派の文學運動の根據とし、同志を糾合、理論に、作品に、座談會に、講演に、プロレタリヤ派に對し陣頭に立つて白熱的抗爭をした。

同年四月にメンバア四十數名を擁する新興藝術派倶樂部を結成して、文學運動の一城寨にした。

新興藝術派の運動は昭和四年の上半期で大體所期の仕事を完成した。この間に約二千枚の創作、理論、その他を發表した。當局の思想的彈壓によつて萎微沈滯したプロレタリヤ實踐運動の影響と共に文學的世界の[illegible]新興藝術派運動の結成と相俟つて、プロレタリヤ文學運動は、日本の文壇と近代文學とに徹底的改革をはかつた當初の企圖を放棄せざるを得なくなつた。

新興藝術派の新人作家、理論家が新鮮な風格を示して續々文壇に登場し、プロレタリヤ派の戰線退去とともに乘出して來た舊藝術派の作家理論家と三ツ巴の對立を示すに到つた。

ジャアナリズムにモダアニズム文學が氾濫し出し、これが新興藝術派の主潮たるの觀を示すに到つた。

『放浪時代』によつて文壇に登場以來本集出版まで滿三年間のこれがめまぐるしい文壇史である。

著書（小說その他の著作集）

『アパアトの女たちと僕と』　改造社
『街のナンセンス』　新潮社
『放浪時代』　改造社
『かげろふの建築師』　新潮社
『十九の夏』　改造社
『街のエロテシズム』　赤爐閣
『燃えない蠟燭』（近刊）　改造社

昭和六年四月十一日印刷
昭和六年四月十五日發行

現代日本文學全集 第六十一篇

編纂者 山本三生

發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二

發兌 東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43) 二一二一番 二一二二番 二一二三番 二一二四番

株式會社秀英舍印刷